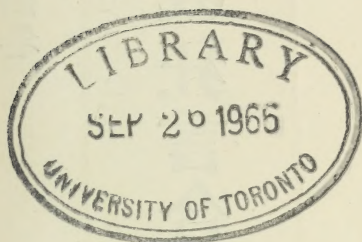
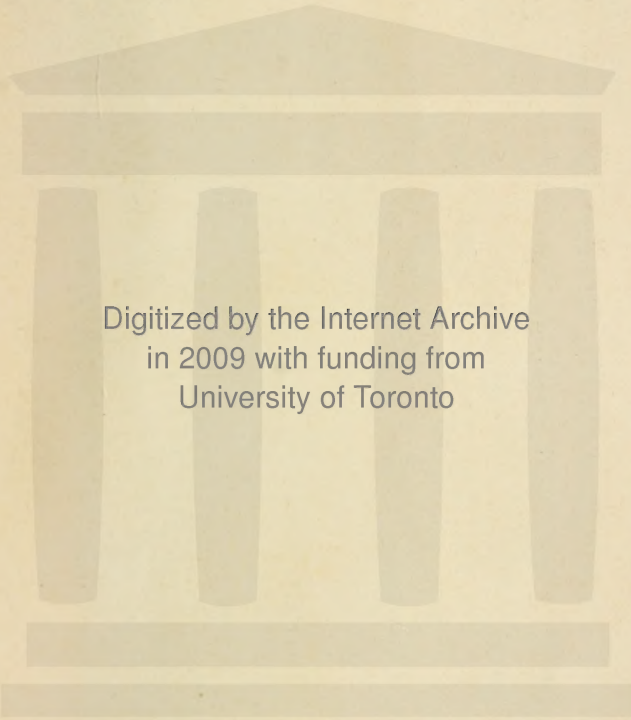
日本戲曲全集
第十四卷

曾我狂言合併集

東京
春陽堂版

これは本巻收錄の「戀便假名書曾我」に現はれる、五代目市川團十郎の工藤祐經であります。
筆者は勝川春好。細錦繪です。

日本戲曲全集 第十四卷 目次

曾我狂言篇

祐經孝經讀書始

子曰孝は萬善ノ源 祐成時宗が職也十八年の天津風今吹返す葛の葉の昔尋て信田妻の對面忠ハ不失然後鬼王月小夜十六夜を諫て曰衛無辱所生夫は朝の古文の四章め是は本町二丁目の糸屋町と屋舗を會我に組帶小糸佐七が馴そめにおしゆん傳兵衛か二日酔の髪梳大磯ならで深川へ通ふ寢覺の衛鬪半時九郎兵衛が獻役の名を狩場の切手惠方參りの小袖乞紋は比翼と菊蝶に扇蝶よく誂て出番の山洒落巳午の間萬よし

的正寅年榮

念力箭立椙

任吉例
春興四番續

曾我狂言百姿

「吉例曾我寶入船」より

（上）頼朝息女大姫、三浦の片貝
（下）工藤左衛門祐經

念力箭立椙

三建目

箱根權現の場
矢立杉の場

役名――蒲冠者範頼。梶原三平景時。梶原源太景季。梶原平次景高。愛甲三郎。竹の下孫八。和田平太胤長。工藤犬坊丸祐友。久須美彌太夫。曾我の禪司坊。大藤内成景。和田の舞鶴。淺利與市義遠。二宮妻水草。箱根の別當行實。曾我の團三郎。腰元、軒端。小娃、初花。三浦息女、片貝。梛の葉狐。曾我十郎祐成。

三建目役觸れ入ると、直ぐに勢子太鼓になり、向うにて、アリヤ〳〵の聲、割り竹の音する。と縫ひぐるみの狐一疋走出て來る。後より、勢子大勢、柿の袖なし、羽織、股引の形にて、陣笠をかむり、てんでに割り竹を持つて、これを追はへ出て來り、幕の内へ入る。

本舞臺、三間の間、向う一面に高き石垣、その上に朱の玉垣。左右の柱、紅白の梅。すべて、箱根權現の體。爰に、梶原景時、半刺貫き、弓、小手、騎射でたちの形にて、弓矢を持つて居る。こなたに、平太胤長、上下の形にて、景時が弓の裏筈を扣へ、忠太、ぶッ裂き羽織、黑股引の形。景高、柿の素袍梶原。愛甲三郎、竹の下孫八、素袍烏帽子の形にて左右に引ッ張り、この見得よろしく、カケリにて、幕明く。

景時　こりやア和田の平太胤長。

皆々　何ゆゑ妨げおしやるのだ。

平太　仔細は知らねど當山は、彥火々出見の鎭座この方、獵するを禁ずるは、神の恐れを思ふがゆゑ。それ御存じか知らねども、山に響く勢子の聲、合點ゆかずと來て見れば、景時どのゝ其いでたち、笑止に存じてお止め申す。先づ〳〵お扣へなされいサ。

景時　イヽヤ、こりやア景時遊獵でない。君への御奉公。

平太　とはどうして。

景高　この程御次男實朝公、御疱瘡につき
三郎　尾先の黒き狐の生血、用ゆる時は極めて輕しと
孫八　それゆゑ九月狩倉の、手慣らしがてら今日の仕儀。
忠太　御存じなくば胤長さま。
皆々　すッ込んでお居やれサ。
平太　イヤ、すッ込んで罷り居るまい。生ける物を殺すと
云ひ、殊にはいぶせき狐の生血、名に負ふ武將の公達へ、
差上げられうや。馬鹿な事を。
景時　ヤア、仰せとあるになんの恐れ。邪魔だてせずと、
そこ退き召されい。
平太　イヽヤ、ならぬワ。
ト立廻つて、しやんとまる。と又奥にてアリヤ／＼の
聲、割り竹の音して、下座より、以前の狐走り出る。
皆々これを見て、思ひ入れ。景時、手早く弓矢を番ふ。
皆々平太を留めて居る。狐は花道の角へ來る。この時、
揚げ幕にて、エイと矢聲して、矢一筋狐に立つ。これ
にて、其まゝ倒れる。皆々思ひ入れ。
景時　いま景時が只一矢と、固めし拳の先駈けせし
皆々　その矢の主は。
犬坊　若年ながら工藤犬坊、粗忽はお免し下されい。

ト通り神樂になり、向うより、犬坊丸、前髮、馬乘り
袴の形にて、後へ鞭を差し、弓矢を持つて出て來る。
後より、久須美彌太夫、親仁の拵らへ、ぶッ裂き羽織
野袴の形にて、犬坊丸が菅笠を持ち出て來り、直ぐに
舞臺へ來る。
皆々　すりや、今の一矢は犬坊どの。
犬坊　今日これにて景時どの、狐狩りと承り、見物がて
ら來かゝるところ、それと見屆けし狐ゆゑ、景時どのへ
慮外も忘れ、若輩者の手弱き手のうち、眞平御免下され
い。
景時　これは／＼、そのお詞で痛み入る。何れの手よりも
差上ぐれば、忠義は一つと申すもの。
平太　すりや、犬坊どのにも實朝公へ。
犬坊　爰らいでなんと致さう。何れの道にも武士は、君へ
の忠が第一とやら。
平太　それゆゑ貴殿も景時どのも。
兩人　左樣。
平太　ハテ、何か底意が。
兩人　何がなんと。
平太　由なき殺生止めんと、思ふに甲斐なき邪慳の矢先。

ア、無益の隙入り。拙者は此まゝ。
景時　勝手におしやれ。
平太　ドリヤ、權現へ參詣いたさうか。
ト大拍子になり、平太、思ひ入れあつて、下座へ入る。
皆々　犬坊どの。
犬坊　何れも。何か平太胤長が、不審を立てたあの樣子、苦しうはござるまいか。
景時　なにサ〱、實朝公の名を僞はり、狐を狩つたあらましを、言上すれば景時が、家重代の舌先で、おッ殺してしまひまするワ。
皆々　イカサマ。
彌太　最前から差扣へ居りましたが、小藤太成家、兼ねての儀に付き、參上いたす筈のところ、主用ゆゑ拙者を名代。大藤內へも妾へ來るやうにと申し遣はし、來かゝる道にて若殿の、お目にかゝつて直さまお供。
犬坊　すりや、大藤內もこれへとな。
彌太　如何にも左樣、賴み置きたる調伏の、彼の一品も持參の筈。
景時　流石は、老功久須美彌太夫、拔け目のない致し方。
忠太　お旦那、この忠太にも、相當な御用の筋を。
犬坊　犬坊が申しつけん。久須美とも〱この狐を、權現堂の後の繁み、人目にかゝらぬ所にて、器へ血潮を湛えてよからう。
彌太　畏まつてござりまする。
忠太　そんなら、これを範頼公へ。
景時　これサ。
ト向うにて
大藤　けづり廻しめ。一緒にうせう。
禪司　御免なされて下さりませ。
ト犬坊、景時。彌太夫、忠太へ行けと云ふ思ひ入れ。通り神樂になり、兩人心得、狐を持つて下座へ入る。と向うより、大藤內、麻上下、木綿袴にて、禪司坊が襟髮を持つて出て來る。禪司坊、坊主鬘、麻衣、脚絆の形にて、風呂敷包みを脊負ひ、引立てられて出て來る。直ぐに、舞臺へ來り
大藤　何れも樣、お早いお出でござりまするな。
犬坊　見れば見馴れぬ旅僧を、手籠めにしてお來やつたが
皆々　そりやアマア、何奴でござる。
大藤　お聞きなされい。この坊主め、大門に繫ぎござる、犬坊どのゝ乘馬に向ひ、恨めし氣なその樣子。合點が參

らぬゆゑ、これまで引立て參つてござる。
景時　エヽ、坊主め、して、其方は何れの者だ。
禪司　ハイ、私しは越後の國から、この鎌倉の檀林へ、學問修行に參る沙門。國に見馴れぬ美々しい乘馬、庵の内に木瓜の、御紋は正しく祐經さまの、お召しと存じ、ツイ見惚れて。
犬坊　すりや、父祐經の乘馬と思ひ
禪司　そんなら、あなたが犬坊……さま。
ト思ひ入れ。
景時　ドレ、面を上げろ。
ト大藤内、無理に禪司坊が顏を上げる。景時、つくづく見て
祐友どのは若年ゆゑ、御存じはあるまいが、河津の三郎最期の後、曾我兄弟が弟たる、おんぼう丸と云ふ子悴、伊東九郎へ遣はせしが、祐清討死なして後、今は越後の久上にて、禪司坊と申す由。彼奴が所も越後と云ひ、面ざし恰好、何れもお見やれ。
ト此うち、禪司坊、思ひ入れ。
景高　イカサマ、お父さんの云ふ通り
三郎　見れば見る程祐成や
孫八　箱王丸に生寫し。
大藤　それで庵に木瓜の、乘馬を眺めて恨めし氣な、心が初めて知れましたわえ。
禪司　どうして愚僧が左樣な者で。
犬坊　吐かすな坊主め。あらがつてももう叶はぬ。敵の末は根を絶つて、平家の侍ひ祐清が、養子となつた禪司坊。こりや手短かに鎌倉御前へ、引立てるが好うござらう。
禪司　そりや又あんまり。
大藤　面倒な。ドレ、成景が引立て次手に。
ト禪司坊を捉へて
皆々　坊主め、キリ／＼うしやアがれ。
舞鶴　待つた。
皆々　待てとは。
舞鶴　和田が三男小林の、朝比奈が妹舞鶴、めでたくかしくでござんすわいなア。
トあばれ丹前になり、花道より、舞鶴、振り袖着流し、鶴の丸の紋ついたる凧を二枚、素袍の袖のやうに持ち出て來る。後より、景季、梶原にて、釘貫の付きし奴の形にて、糸卷を擔ぎ出て來り、引立てる皆々を直ぐに舞臺へ押し戻し來り、舞鶴、禪司坊を圍つて、しや

んと見得。
景時　待て〳〵。いま禪司坊を引立てるその所へ
犬坊　待てと聲かけ出かけた舞鶴。
大藤　何ゆゑ邪魔を
皆々　するのだエヽ。
舞鶴　ソレ…ホヽ、ト舞鶴、思ひ入れあつて敬つて申す。
皆々　おきやアがれ。
禪司　モシ、舞鶴さまとやら、私しがこの場の難儀を。
舞鶴　合點ぢやわいな。今日このお山で箱主さまが、出家なさるゝとの事ゆゑ、兄さんがござんす筈ぢやけれど、昨日からの二日醉ひ。わしが替りを賴まれて、來かゝり見ればこの場の樣子。奉ひお宮のこの凧を、素袍にしたも朝比奈代り。わたしと思はず何れも樣、免して上げて下さんしたら、忝け中村七三ぢやわいなア。
大藤　イヽヤ、ならない。この坊主は正しく平家へ由緣のある、河津が末子禪司坊。
景季　これサ〳〵、大藤内、禪司であらうが、築地であらうが、初春早々野暮を云はずと、舞鶴に讓つてしまやれ。
犬坊　誰れかと思へば景季どの。

景高　ほんに兄貴ぢやアござらぬか。
皆々　その形は、なんでござる。
景季　聞いて下さい。どこの國にか平假名の、源太なら勘當もする筈だが、春狂言の景季を、勘當すると云ふやうな、むごい親仁があるものか。それゆゑ今ぢやアせう事なしに、朝比奈が内の居候ふ。コレ、お父さん、もう堪忍しておくんなんしな。
景時　默らう。親に似ぬ子の汝ゆゑ、勘當はなしたれど、梶原とは仲の悪い、朝比奈が内の掛り人。そんな態で爰へうせ、この親にまで恥をかゝす不孝者、七生までの勘當ぢやぞ。
景季　そんなら六升上塗りをしたか。コレ、犬坊どの、みんなも共々、あやまつて下さい〳〵。
犬坊　お賴みなくとも朋友のよしみ、何しに餘所に致さうぞ。景時どの、御立腹の儀もござらうが、我れ〳〵ども に免ぜられ
三郎　どうぞこの座で勘當を
孫八　赦免して遣はされい。
大藤　大藤内も偏へにこの儀を
皆々　お賴み申す〳〵。

景時　イヤ／＼、折角何れものお詫びではござれども、この儀は決して相成り申さぬ。それよりこちらの禪司坊。
大藤　イカサマ、坊主の詮議が手延びになる。蕎麥だと容へは出されぬところだ。サア、禪司坊、うしやアがれ。
ト引立てにかゝる。舞鶴、入れ替つて
舞鶴　イエ、そりやならぬ。曾我贔屓の朝比奈が、妹のわたしが留めて出た。禪司坊さんを渡しはせぬ。アイ、やる事はならぬわいな。
皆々　ならぬと云へば我れ／＼が。
舞鶴　そんなら、わたしも兄さんを、ツイ一走り。
ト行かうとする。
大藤　アヽ、これサ／＼、朝比奈を呼んで堪るものか。
舞鶴　そんならわたしに下さんすかえ。
皆々　サア、そりやア。
舞鶴　ちい／＼に嚙ますぞえ。
皆々　サア／＼／＼。
舞鶴　なんとでござんす。
犬坊　梶原どの、こりや思案ものでござらう。あの朝比奈がこれへ來て、もし我れ／＼が一大事を。
大藤　それ／＼、毛を吹いて疵とやら。

皆々　こりや、やるがようござらう。
景時　成る程、そこも一つは大事。そんなら舞鶴、禪司坊は其方へくれてやつたワ。
舞鶴　ちつとさうもござんすまい。
景季　態を見ろ。
ト景時、睨みつける。景季、ちやつと引ッ込む。
舞鶴　モシ、あなたは早う、どこへなと……申し合點かえ。
ト思ひ入れ。
禪司　それゆゑわざ／＼當山へ、參詣いたすも一つには。
舞鶴　アヽモシ、物數云はずと、ちつとも早う。
大藤　とは云へ彼奴を。
ト來るを隔てる。
禪司　ドリヤ、參詣いたさうか。
ト通り神樂になり、禪司坊、菅笠を持つて、ツイと下座へ入る。
景時　イザ、この上は我れ／＼も、別當方にて何かの熟談。
犬坊　小藤太が所存もとつくり。
景時　然らば舞鶴。
舞鶴　何れも樣。
景季　モシ、親仁樣。

景時　ト寄るを犬坊隔てる。不所存者めが。

景季　ハア、。

ト泣き落す。大拍子になり、皆々下座へ入る。景季、後を見て

おきやアがれ。はッつけ親仁め。

舞鶴　コレイナ、親御様の事を、そんな事云うて、お前、罰が當るぞえ。

景季　なぜ〱。罰が當りやア惡いか。

舞鶴　惡うなうてわいな。

景季　エ、、畜生め。さうおれが事を思つて、その優しい心意氣に惚くなつて、居候ふに居るを幸ひ、口説いても口説いても、得心しないは、つれないぞよ〱。

トしなだれかゝる。

舞鶴　エ、、嫌らしい。モシ、景季さま、お前、その形に氣が付かぬかえ。

景季　これがどうした。

舞鶴　勘當の其うちは、わたしが家の奴げぢ助。家來の身として主の娘と、お前、不義はなるまいぞえ。

ト景季、我が形を見て

景季　ほんに、さうだつけ。

舞鶴　それにマア、なんぢやら、アタ不遠慮な。アタ不躾な。お前、あやまらしやんせぬと、兄さんへさう云うて、追ひ出して上げるぞえ。

景季　ア、、これサ〱、いま追ひ出されて堪るものか。

舞鶴　そんなら、あやまらしやんしたかえ。

景季　あやまらないでどうするものだ。

舞鶴　矢ッ張り奴のげぢ助ぢやぞえ。

景季　げぢ助とも〱。

舞鶴　そんならげぢ助。

景季　ネイ。

舞鶴　供をしや。

景季　ヘエイ……なんの事だ。

ト通り神樂になり、舞鶴先へ、景季、凧糸巻を持つて下座へ入る。と雨車の音、鼓の合ひ方になる。と向うより、範頼、白無垢、丸絎け帶の形、小さ刀にて簑を引ッかけ、菅笠をかざし、庭下駄を穿いて出て來る。後より、淺利與市、上下股立ちにて、範頼が刀を持ち付き添ひ出て來る。この後より、二の宮の妻水草、屋敷模樣の形にて傘をさし、花手桶へ樒を入れ、持つて

出て來り、直ぐに舞臺へ來り、水草は下に窺ふ。範頼空を眺めて

範頼　時雨する稻荷の山の紅葉ばは、青かりしより思ひ染めてき。

與市　それは都の稻荷山、あをと云ふもの借りつる折、和泉式部の詠歌のさま。

範頼　爰は所も箱根山、春雨いとふ菅簑に、降り來る雨は範頼が、身にかゝらねど降りかゝり、任せぬ人の便なさに、明け行く鷄と諸ともに、館を拔けてこの靈場、歩むも死出の旅心。

與市　忍びの御社參、お供を願うて付き添ふ淺利の與市。今の仰せは何とやら。すりや、最早お館へは。

範頼　再び歸らぬ火宅の門出。

與市　なんとな。

範頼　この寺にて生害なさば、我が誠を兄の少しは思ひ、三つのうち一つを叶へ給ふなら、先祖へ對し範頼が、少しの云ひ譯。與市義遠、この世の緣はこれ限り……堅固に暮らせ。

ト云ひ捨て奧へ行かうとする。與市、引留め

與市　待つた我が君。

ト留めるを振り切り行かうとする。此うち、水草、思ひ入れあつて、この時、ツカ／＼と出て、範頼が向うへ廻り

水草　範頼公、先づ／＼お待ち遊ばしませい。

範頼　其方や二の宮が妻の水草、何ゆゑこれへ。

與市　我が君樣には當山にて、御生害との思し召し。

水草　サア、樣子は殘らず承り、お留め申すこの水草。任せぬ人の便なさゆゑとは、兼ねて心かけられし、義村どのゝ息女たる、片貝どのでござりまするか。

範頼　ヤア、思ひ寄らざる其方が詞。尤も範頼木石ならねば、いつぞや三浦の片貝を、一目見しより戀風に、襲はれしゆゑ玉章を送りしところ、先達て其方が弟、祐成と云ひ號けの緣ある由。主ある女に懸想せし恥かしさよと、その後はフッツリ思ひも出さぬが。それに便なきその人を、片貝なぞとは事おかしや。

水草　して又、武將の御連枝たる、御身の上に便なき心とは。

與市　樣子をとつくり我れ／＼へ

兩人　お聞かせなされて下さりませ。

範頼　仔細は義經奧州にて、落命と僞はつて、蝦夷に渡り

儼然たる事、聞きつるゆゑに兄弟何卒、和睦を結ばんと計れど、承引なきのみならず、三位維盛の若六代、駿河の千本松原にて、首討たんとある無得心。池の禪尼の情にて、助命なしたる今若の、恩を思はゞ命乞ひ、聞き濟みもあるべき筈。その上今年五月に至り、富士の狩倉あらん結構。そも淺間の御山とて、昔が今に至るまで、殺生止めし靈地にて、遊獵を催ほす事、この三ケ條範頼が達て諫めを取上げなきは、讒者の舌の强きがゆゑ。その身に報い淺ましや、平家の代とならん事、見るも悲しく我れと我が、命を縮めて生害なす身。兩人ともに止めまいぞ。

水草　承つて有り難い、範頼公の御仁心。併し、それ程思し詰め遊ばせし事ならば、水草が献上いたす品、お取上げ下されませい。

範頼　なんと。

ト合ひ方になり、水草、思ひ入れあつて、持つて出し花手桶の椺を取捨て、手桶を範頼が前へ直す。

與市　お心あり氣な水草どの。

範頼　この花手桶を範頼へ。

水草　イヱ、こりや花手桶ぢやござりませぬ。丸き形は水の月。

範頼　ヤ。

水草　空行く月は折々に、雲の障りに曇るもあれど、丸き器のこの月は、何國へなりと覆へして、置けばいつでも曇らぬ月。人の身でもその如く、浮世を遁ひ住む時は、心に曇り障りなう、めでたきお身の範頼公。刀の露と消え給ふ、そのお心を止まりあつて、せめて御出家遊ばしませい。

範頼　いやとよ、水草、我れを長らへ置かんとの、志しは過分なれども、三つに一つも範頼が、詞立たいで笑はれて、なに面目に長らへん。

兩人　すりや、どうあつても。

範頼　彌陀の利劍に安養淨土。兩人さらば。

ト行かうとするを留める。振り切る。唄になり、範頼下座へ入る。

與市　斯くまで申し上ぐれども、お聞入れなき範頼公。

水草　さは云へどうぞ御生害、お止まりなきまでも。

與市　お後を慕ひ今一度……ソレ。

ト大拍子になり、與市、下座へ入る。

水草　あの御氣色では、とても承引……ハテ、なんとした

ものであらう。ほんに、この團三郎は、マア、どうした事ぢやしらぬ。

ト通り神樂になり、向うより、行實、緋の衣の裾を端折り、輪袈裟を鉢卷にして、六尺棒を持つて出て來る。後より、同宿二人、これも尻を絡げ、鉢卷をして、てんでに鉦太鼓を持つて出て來る。後より、團三郎、前髪兄なし、庵に木瓜の紋付いたる布子を着て、雜股引を穿き、尻を絡げ、袱紗包みを持つて出て來る。

團三　アヽ、モシ〳〵、別當樣。そりやほんでござりまするか〳〵。

行實　ハテ、やかましい。マア、ござれいの。

ト此やうなる捨ぜりふ云ひながら、直ぐに舞臺へ來る。團三郎、水草を見付けて

團三　モシ、水草さま、一大事でござりまする〳〵。

行實　これは二の宮どのゝ御内室でござるか。

水草　これは〳〵、行實さま、明けましては結構な。

團三　モシ〳〵、そんなどこぢやアござりませぬ。箱王さまが昨夜、下山をなされましたぞいの〳〵。

水草　ヤア、そりやモシ行實さま、ほんの事でござりますかいなア〳〵。

團三　サア〳〵、早く仰しやりませ〳〵。

行實　ハテ、忙しない。マア〳〵、靜かにして、あの大鼓や鉦を見さつしやれ。

水草　ほんに、迷子の鉦太鼓。そんなら誠に。

同一　イヤモウ、昨夜から一山は亂騒ぎ。

同二　モシ、鼻の高いお方にでも、連れられはせぬかと

同一　夜のうちから此やうに。

同二　鉦太鼓で探しても、さつぱりと

兩人　知れませぬて。

水團　エヽ。

ト驚ろく。

行實　コリヤ〳〵、同宿ども。其方達は先へ行て、洗足の湯を沸かしてくれ。

兩人　畏まりました。

行實　エヽ、行け〳〵。

ト同宿は下座へ入る。水草、團三郎、行實を捉へ

水草　モシ、行實さま、そんならアノ箱王は。

團三　箱王さまは。

トこの時、行實、あたりを見て

行實　氣遣ひせまい。箱王丸は、この行實が合點で。

兩人　とは又どうして。

行實　十一歳より滿江どの、父の菩提を弔はせんと、山へ登せてこの年月、卽ち今日は授戒させ、出家になさんと思ひしところ、箱王が昨夜の樣子、法師にならぬ所存と見たゆゑ、密かに招き、寶藏の友切丸を取出し、これにて首尾よう敵を討てば、父の菩提はこの上なし、少しも早う下山せよと、落した後にて一山の、聞えもあれば迷子の眞似事。

團三　して、曾我中村へもお歸りなきは。

水草　滿江さまのお腹立ちと、思うてつきり時政さまを

團三　烏帽子親ともお賴みあらん。

水草　もしも母御の勘當あらば

行實　祐成どのを始めとして、二の宮どの、鬼王團三、詫び言してやつて下され。

水團　そりや、お氣遣ひなされまするな。

ト此うち、始終通り神樂、好い程より、後へ禪師坊出で來り、この時

禪司　そんならあなたが姉上樣か。

水草　ヤ。

ト禪司坊、懷中より袱紗包みを出して

禪司　これ御覽じて下さりませ。

ト水草、これを開き見て

水草　こりや伊東に傳はりし、鶏の雌雄の目貫。この不思議には、血汐をあやせば、鶏の音を發すと云ふ。

禪司　そのお鍔の番ひの目貫を添へて、伯父たる祐淸さまへ、養子となりしおんぼう丸。

團三　今のお名は禪司坊さま。

水草　そんなら其方が。

禪司　姉上樣、團三郞……お懷かしうござりました。

ト三人、思ひ入れ。

水草　よう息災で居やつたなう。

行實　オヽ、めでたい〳〵。

團三　こんなめでたい事はござりませぬ。箱王さまが御下山でも、友切丸の盜賊だの、人殺しの疑ひのと、そんな事は、ちつともなく珍らしい春でござりまする。兵庫鎖りの太刀、祐成さまが質物に、お入れなされたばかりが瑕。併し、祐成さまなれば、この位な事はあり勝ち。これがなけりやア鬼王夫婦や、十六夜どのは何にも役にないと云ふもの、ハテ、よくしたものかえ。

ト手を打つて思ひ入れ。此せりふのうちに、後へ大藤

内、彌太夫、舞臺にある袱紗包みの目貫をソッと盜み大藤内、奥へ行けと云ふこなし。彌太夫、呑み込み下座へ入る。

禪司　そんならお目にかゝらんと、折角爰へ來りしに、兄箱王さま下山あるは、父の敵の祐經どのを。

團三　モシ。

禪司　出家でなくば兄弟三人、並んで打たうもの。あるに甲斐なきこの身ぢやなア。

トこの時、奥にて

皆々　大藤内は何れに居る。

三人　あの聲は。

團三　モシ、ござりませ。

ト四人、下座へ入る。大藤内、小蔭より出て

大藤　當時出頭第一の、祐經どのを敵と狙ふ曾我の奴等。大坊どのへこの事を。

ト通り神樂になり、下座より、景高、三郎、孫八、景時出て來り、大藤内、下の方より出る。皆々見て

皆々　大藤内。

大藤　何れも様、最前のあの坊主め、禪司坊に違ひござらぬ。たつた今爰で二の宮の姉、禪司坊、團三郎と三人が證據の品と二の宮の、姉へ見せたる鷄の目貫、血汐をあやせば鷄の、聲を發すると承り、なんぞの役にと久須美彌太夫、ひん盜んで犬坊さまへ。そりやアよけれど、狩家に用ゆるこの人形、團三郎めが目にかゝり、すんでの事に危ない所。こいつも先刻犬坊さまへ、渡して置けばようござりました。

景高　それに付き狩場の繪圖面、祐經密かに工風なし、出來次第檢分を乞ひ請け

三郎　夜神樂の神事を行ひ、直ぐに狩場へ繩張りの出立。

孫八　その節密かに埋める人形、また御料の狩屋の鬼門へ當て、逆柱を用ふる事。

景時　とくと手段の致し置いたか。どうだ〱。

大藤　それも手段は致しござれど、難儀は切手ござらねば狩場へ人夫を入れまするに。

ト下座にて

忠太　その品これにござりまする。

ト忠太、景季を連れて出て來る。

景時　こりや、勘當の伜を召連れ

大藤　その品がこれにとは。

景季　何れも、これをお見やれ。

ト懐中より、狩場の切手を二枚出す。

皆々　ほんに、こりやア狩場の切手。

景季　三老の印判据り、員數極まりし切手ゆゑ、もし紛失する時は、義盛ならで朝比奈でも、拔さしならぬ大事の切手。禍ひも三年と、居候ふに置いたばつかり、ちよつと二枚書き上げたが、なんと何れも、きつからうがな。

景高　成る程、こりやアお兄いさん、日頃に似合はぬ働らきでござる。

三郎　我れ〳〵も感心いたした。

景季　なにサお前。

景時　誠に、こりや出かした。そんならわれも敵役の性根が、少しは付いたと見える。

忠太　他人の御飯が藥と見え、ちつとの間の勘當に、運上なされたと見えました。

景季　向後心を改めて、敵役になりませう。モシ、親仁樣。

景時　その詞に違ひがなくば、切手を盗んだ功に依つて、親の方から勘當赦した。

景季　そんならアノ勘當を……エ、、忝ない〳〵。

ト喜ぶ。

景時　然らば切手は大藤内、汝に渡し置く間、狩屋へ忍んで事を計らへ。ソレ、成景。

景季　イザ、切手。

大藤　しつかりと受取りました。

景時　番場の忠太。して、狐の生血は。

忠太　人の心の付かぬ所へ、こつそり忍ばせ置きました。

景時　よし〳〵、今日計らずも範頼公、爰へお入りありしこそ幸ひ、後刻平三景時が……ナ、いづれも。

皆々　そんなら狐の生血を。

景時　コレ。

ト皆々思ひ入れあり

ござりませう。

ト大拍子になり、皆々入る。大藤内、殘り、懐中より人形を出し

大藤　彌太夫どのより賴まれた、調伏のこの一品。これも先刻犬坊さまへ、渡して置けばよかつた。ちつとも早くソレ。

ト懐中して行きにかゝる。團三郎、窺ひ出て、ツカ〳〵と寄つて

團三　それを。

ト取る。大藤内、見て

大藤　わりやア團三郎。また來たな。何をするのだ。
團三　何をするとは古風な奴。われが所持なすその人形。
　ちよつと團三が。
　ト手を差込む。
大藤　見るには及ばぬ。
　ト振り切る。これより早目の大拍子になり、ちよつと立廻りあつて、兩人、ドツコイと見得、チヨン／＼とこの道具をぶん廻す。
　本舞臺、三間の間、向う一面、客殿の體。正面、銀張りつき花鳥の模樣、前通り一面の綟子障子。左右の襖、杉戸。矢張り柱は紅白梅、よき所に石の手水鉢。この道具に納まる。
　ト向うにて
軒端　モシ、祐成さん、どうなされて下さりまする。
祐成　エヽ、やかましい。知らぬわいの。
　ト通り神樂になり、花道より、祐成、千鳥の下ばかりの形、掛け烏帽子、小さ刀の形にて、中啓を持ち、出て來る。後より、軒端、詰め袖、奥女中の形、黒塗り蒔繪の文箱を持ち、初花、振り袖の小姓にて、一緒に出て來る。
軒端　モシ、祐成さま、それでは濟まぬわいな／＼。
　ト云ひながら舞臺から來る。
祐成　これはしたり、濟まぬ／＼と、今年は鬼王夫婦や十六夜が、ようしてくれたゆゑ、年明けて鶯は聽いたが、まだ掛乞ひの聲を聞かぬに、外聞の惡い、濟まぬ／＼と、なんの事ぢや／＼。
軒端　なんの事とは祐成さま、お云ひ號けの片貝さま、早う女夫になりたいと、明暮れあなたの事ばつかり、どうぞめでたうお輿入れを、お急ぎなされて下されませと、この間より度々のお使ひ。否やの返事もなされぬゆゑ、今日は是非々々お返事を、聞いてくれいと仰しやりまするゆゑ、あなたへ參る道すがら、お目にかゝるは好い辻占、どうぞお文を御覽遊ばし。
初花　好いお返事を私しどもへ
兩人　お願ひ申しますわいなア。
祐成　すりや又、今日も片貝が使ひとな。この間より返事をせぬも、明らさまに云ふ時は、あまり愛想のないが氣の毒。それにしつから又の使ひ、相手になる暇がない。コレ、有やうを云うて聞かさう。この祐成は女嫌ひぢや

兩人　エヽ。
　ト思ひ入れ。
祐成　ちつと贅が潰れるであらうが、生れ付いて嫌らしい自墮落な事がきつい嫌ひ。容形ばつかりは、十郎の先例を外さぬ本の云ひ譯。この通りを立歸つて、片貝どのへ云うてくりやれ。
軒端　イエ〳〵、あなた、そりや嘘でござりませう。女子嫌ひの祐成さまが、どこの國にござりませうぞいな。
祐成　イヤ〳〵、祐成嘘は云はぬ。朝暮天照大神の御託宣を心にかけ、聊か人を僞はらざる某が性質。
　ト此うち、奥より、平太胤長、神酒德利の三方を持ち出かゝり居て
平太　イヤ、その詞、平太胤長、誠とは存ぜられぬ。
　ト祐成、平太を見て
祐成　其許樣は和田の平太胤長どの。何ゆゑこの祐成が詞僞はりと御意なさるゝか。
平太　さればでござる。さほど女子に心を移さぬ、曾我の十郎祐成が、何ゆゑ遊君大磯の虎御前へは通ひ召さるゝ。
祐成　イカサマ、こりや御不審御尤も。虎へ馴染を重ねましたは、全く祐成本心でござらぬ。誠に當春、十郎と名目付けたる名の名聞、なか〳〵以て補伏せに、相成る程には亂れませぬて。
平太　然らば拙者が一族たる、三浦の別當義澄が、娘片貝事も、十郎の名へ定まつた云ひ號け。
軒端　サア、祐成さま、これではよもやお輿入れ、聞入れぬとは申されますまい。
平太　但し、御返事なされて
軒端　御違變ござるかな。
兩人　下さりませ。
祐成　胤長どのを始めとして、左樣に御意の上からは、祐成が胸の中、一通り……何をか包まん某は、幼なき時より天に誓ひ、神佛をかけまして、身に大切の願ひがござる。何時とは云はず、望みさへ達する時は、その座を去らず命を捨つる覺悟の祐成。それゆゑ定まる二世の妻、女夫の結びは致されぬ。
平太　すりや、どうあつても
兩人　片貝さまと
祐成　婚姻せぬはつれなきに似たれど、いつか祐成が義心知れなば、これゆゑとその時思ひ合せ、哀れをばかけぬ心の知るゝまで、必らず恨みと思はぬやう、片貝どのへ

傳へてくりやれ。

ト唄になり、祐成、思ひ入れあつて、奥へ入る。

平太　それを云はねど祐成の、今の詞は父の敵、討つてこの世に殘らぬ身ゆゑ、妻子へ嘆きをかけまじと、それゆゑ妻は迎へぬ心底。これも尤も。

軒端　とは云へ一圖なお心に、思ひ焦れお出で遊ばす、片貝さまのお心根、おいとしい事でもあり

初花　どうぞちよつとお逢はせ申す

兩人　好い御思案はございませぬかえ。

ト平太、思ひ入れ。

平太　ハテ、如何いたしたものであらう。

ト思案して居る。通り神樂になり、下座より、團三郎出て來り

團三　扇長さまではございませぬか。

鬼菊　ほんに、好い所へ團三さん。

團三　オツと、祐成さまの樣子は聞いた。

平太　コリヤ〳〵、なんと其方の働らきで、片貝どのを一夜たりとも、逢はせる思案はあるまいか。

團三　サア、私しもあの祐成さまには、手古摺つて居りまする。十郎と申す者は、女の腐つたやうな者で、そこへ出ると敵役に、ぶたれたり叩かれたり、とんだ目にばつかり遭ふものと、存して居つたが大違ひ。先づ第一女に惚くなく、その上に力があつて、やゝともすると切刃を廻し、人にあやまる事がお嫌ひ。これでは下山なされました、箱王さまがどんなだか、それをお案じ申しまして

軒端　マア、こなさんの案じより、祐成さまが片貝さまにどうしたらお逢ひなされう。これを案じて下さんせいな。

團三　ハテ、こいつはむづか柏餅でございまする。

平太　どうぞ思案を、頼む〳〵。

團三　それ程までに仰しやる事。マア、一つ考へて見ませう。

ト手を組んで思案の思ひ入れ。

軒端　どうぢやえ。思案が出たかいな。

團三　エヽ、忙しい。さう直に出るものかな。

トまた思案する。

平太　どうぢや〳〵。

ト團三郎、手を叩いて

團三　出ました〳〵。

兩人　出たかえ〳〵。

平太　して、その思案は。

團三　斯うでござりまする。とてもあの氣な祐成さま、輿入れの婚禮のと、そんな事ぢやア參りませぬ。なんでもこりやア片貝さまを、今夜にでも駈落ちさせ、十郎さまと差向ひに、女夫になつて下さりませねば、直ぐに自害いたしまするとぶッつからせるがいつち近道。そこであの祐成さまも、見す〳〵人を殺す事ゆゑ、據ろなく得心なさる。そこをみんなが寄つてたかつて……なんと團三がこの思案は……團三々々。
平太　武家の家にて駈落ち致す事は、ちと不行跡な事なれども、さうもせずば承知あるまい。
軒端　そんなら直ぐに私しどもは、お屋敷へ歸りまして、片貝さまへお駈落ちを
兩人　お勸め申すでござりませう。
團三　コレ、自害の事を忘れまいぞ。
兩人　合點ぢやわいなア。
平太　某も祐頼公へ、今一度お目にかゝつて。
兩人　そんな、此まゝ。
平太　團三、後程。
軒端　サア、ござんせ。
　ト通り神樂になり、軒端、初花は向う、平太は奥へ入る。團三郎、殘つて溜息を吐く。と下座にて
舞鶴　エ、そうるさい、放さんせいな。
　トこれにて、團三郎、片脇へ寄る。と下座より、舞鶴、以前の凧と糸卷を持ち、逃げて出る。景季、以前の形にて、これを追はへ出て來り
景季　ドッコイ、逃がして詰まるものか。
舞鶴　コレイナア、折角お土産に箱王さまへ、持つて來た凧のぼりも、箱王さまが下山ゆゑ、お庭で上げようと思ふ所へ、又しても家來の身として。
景季　イヤ、おらは親仁に勘當も赦りて、元の梶原源太景季、主從でないからは、否でも應でも抱いて寢る氣。先度うちから嗜なみの、四日屋の帆柱丸。幸ひ爰に持つて居れば、日頃の思ひをおくびの出る程、晴らさにやアならないぞ。
　ト懷中より、帆柱丸の包みを出す。此うち、團三郎、舞鶴へ囁く。舞鶴、呑み込み
舞鶴　サア、それ程に思うて下さんすは、嬉しい事ぢやけれど、アノナ、わたしや弱いお方がきつい嫌ひ。わたしと力比べをして、勝つお方があるならば、殿御に持ちたい願ひぢやわいなア。

景季　コレ〳〵、舞鶴、なんと云ふ。そんならお主と力比べて、勝つた者の女房になるとか。
舞鶴　さうぢやわいな。
景季　そんなら景季その昔、金平や辨慶と、腕押しにも負けぬ大力。やはかお主に負くべきや。サア、腕押しの勝負々々。
舞鶴　マア、待たしやんせ。そんなら小楯を斯う取つて。
ト眞中へ衝立を直し、この蔭へ團三郎を置き
サア、ござんせ。
ト景季、思ひ入れ。團三郎、衝立の後より、舞鶴が袖へ手を通し、景季と腕押しをして、景季負ける。
ソレ、見やしやんせ。
景季　腕押しには負けるとも、脛押しに負けやうか。サア來い舞鶴。
ト脛を出す。また團三郎、衝立の蔭より、舞鶴が裾へ足を出し、脛押しをする。また景季、負けて急き込み
もうこの上は、角力だ〳〵。
ト舞鶴、困る思ひ入れ。團三また囁く。
舞鶴　どうも角力は恥かしうて。
景季　取られずば、抱かれて寢るか。

舞鶴　サア……そんなら斯うして下さんせ。顔見合せては恥かしいゆゑ、オヽ、幸ひこの三方を、お前かむつて下さんせ。
ト有り合ふ神酒の三方を出す。
景季　そりやアどうとも。
トこの時、下座より
禪司　團三郎々々々。
ト呼びながら出る。
舞鶴　オヽ、好い所へ禪司坊さま。お前、どうぞ行司をして下さんせ。
禪司　そりやア角力の行司かえ。
景季　オヽサ、角力だ。行司が定まれば、この三方を。
トすつぽりかむる。
禪司　そんならこの糸卷を軍配替りに。こなた、げぢが淵。片や、舞鶴々々。
ト有り合せたる糸卷を取つて、思ひ入れ。
景季　イザ。
舞鶴　イザ、
兩人　イザ。
トこれより、白囃子になり、團三郎、景季、いろ〳〵

なかし味の角力ある。禪司坊、行司の思ひ入れ。舞鶴こなたに袖を覆ひ、笑つて居る。ト〻兩人ベツタリ下に居て、息の切れたる思ひ入れ。舞鶴、團三郎へ手水鉢の水を呑ませる。此うち、景季三方を取つて、團三郎を見て

景季　道理こそ團三郎だな…ア、、切ない。おれにもコレ、水を〳〵。

ト禪司坊、いま立廻りに景季が落したる帆柱丸の包を取上げ、見物へ見せ、柄杓の水へ入れて、捨ぜりふにて呑ませる。

ア、、好い心持ちだ。

舞鶴　梶原さま、勝負をお付けなさんせいな。

景季　斯うなつては團三郎でも構ひはない。

ト云ひながら兩手をしやきばらせ、すつくと大の字に立ち上がる。皆々恟りする、

ハテ、合點がゆかないわえ。今の水を呑むや否、體がこんなにしやきばつた。

禪司　帆柱丸の功能は、なんと嚴しいものか、

景季　エ、、忌々しい。もうこの上は、舞鶴、うぬを。

トしやきばつた形にて捉へようとする。舞鶴、逃げ迫はへる所を、團三郎糸卷の糸を罠にして、景季が首へ引ッかける。

團三　禪司さまには少しも早く、北條さまの屋敷へござつて、箱王さまに。

禪司　さは思へども大切な、あのお筐の目貫の鷄、どこへやら失うて。

舞鶴　すりや、お筐の目貫の鷄。

團三　それは團三が後にて詮議。

禪司　でも、知らぬ道筋。

團三　此奴を案内に。

ト糸卷を渡す。

禪司　そんなら、團三、舞鶴さま。

團三　ちつとも早う。

禪司　合點ぢや。

ト曲撥になり、禪司坊、糸卷を持ち、景季を引摺り、景季、奴凧の思ひ入れにて、ブン〳〵と云ひながら向うへ入る。

兩人　ハ、、、、。

ト笑ふ。通り神樂になり、團三郎、思ひ入れあつて

團三　誠に氏より育ちとやら、胤は名に負ふ宇佐美久須美、

川津の三郎祐安さまの、御末子にてありながら、父御の死後に御誕生、藁の上から貰はれて、今は久上に捨て坊主。浅ましきあのお姿。

舞鶴　曾我のお方も所領に離れ、僅かに殘る武門の跡。

團三　これも何ゆゑ、左衛門どの。

ト向うをキッと見て、思ひ入れ。この時、下座にて

犬坊　その左衛門に成り替り、犬坊丸が逢つてくれう。

トこれにて、團三郎、思ひ入れ。通り神樂になり、犬坊丸、先に景高、三郎、孫八、彌太夫、出て來る。舞鶴、これを見て、團三郎を圍ふ。

今あれにて聞いたるところ、曾我の身分も艱難も、禪司坊が出家になつたも、父祐經がさすやうな、恨みッぽい詞の端。どう云ふ筋か親子は一體、この祐友が聞いて取らさう。

景高　コレヤイ團三、胸に思つたあくたもくた、犬坊どのの前で吐かせ。

三郎　尤もらしい筋もあらば、我れ／＼も聞いた不肖に

孫八　鎌倉どのへ言上して、明るい暗いを立てゝやらう。

彌太　サア、團三、溝ッ端の物貰ひを見るやうに、俯向いてばかり居ずと、物を吐かせ／＼。

ト此うち、團三郎、俯向き、ヂッとして居る。

舞鶴　ア、コレなんの、今のやうに云うたは、ありや團三どのではないわいな。この舞鶴でござんす。お耳に障らば犬坊さま、どうなりとなされませいな。

犬坊　イヤ、女子を捉へ、なんの爭論……ア、、こりや何か、團三、若年ゆゑと、そこでなんにも申さぬのか。よいワ。そんなら工藤の屋敷へ伴ひ、左衛門と應對なせ。ソレ、久須美、召連い。

彌太　心得ました。

ト支へる舞鶴を引退けて、團三郎を引出しにかゝる。團三郎、彌太夫を見事に投げ退ける。景高、かゝるを突き廻して尻居に据ゑる。三郎、孫八、兩方よりかゝるを、身をかはして手を捻ぢ上げ、キッと見得。彌太夫、起き上がつて來るを、舞鶴、支へる。この時、水草、奥より、出て來り、中を隔てゝ團三郎を扇にて打つ。

團三　こりやア、水草さま、何ゆゑに。

水草　慮外な奴の。犬坊さまを前に置き、何れも樣へ今の振舞ひ。粗忽であらうぞ。

ト思ひ入れ。團三郎、思ひ入れ。

團三　あやまり入つてござりまする。
水草　犬坊さま、何れも樣、團三が失禮、私しへ御免じなされて、幾重にもお免しなされて下さりませ。
犬坊　屋敷へ引く團三ながら、水草どのゝ御挨拶、如何にも免して進上いたさう。
景高　犬坊どのが宥免あらば
三人　我れ〳〵も免して進ぜる。
水草　そりや、有り難うござりまする。
舞鶴　久須美どのはお年の上、ないらとやら起らぬかいなう。
彌太　ナニ、馬ぢやアあるまいし。
犬坊　時に水草どの、團三が慮外を免した代り、其許へ無心があるが、聞濟みあらうか。
水草　そりや何がさて、身に取りまして。
犬坊　然らば今日御連枝たる、蒲の冠者範頼公、任せぬ事をお恨みあつて、この日沒に生害ある筈。臣等の身として嘆かはしく、お止め申せど聞入れない。その又任せぬ事と云ふは、三浦の別當義村が娘、片貝に御執心。片貝ことは祐成と、早先達て云ひ號けと、お聞きあつたが死神の、魅入つたところと思はるゝ。無心と云ふは爰の事と弟十郎祐成に成り替つて、片貝と云ひ號けの、緣が切つてもらひたい。
水草　成る程、一旦お心を移させられしが、今日御生害遊ばすは、左樣な事ではないやうに、水草は存じられまする。
皆々　して又、外に任せぬ事は。
水草　賴朝公へ三ケ條、お諫めあつたを一つとして、お用ひなさゆゑ御生害。
ト皆々思ひ入れ。
犬坊　例へさうであらうとも、片貝さへ差上げなば、色に引かれて御生害
皆々　お止まりあるは知れた事。
水草　イヤ、云ひ號けの緣切つたりと、お聞き遊ばし範賴公、仁義とやらをお立てあれば、お寢間の伽はなんとして。
犬坊　すりや、事に准へて片貝と、祐成が緣切らぬ所存な。
水草　忠臣は二君に仕へず、貞女は二人の夫に見えず。一旦定めし緣結びを、變替へなして片貝へ、女の操を破らしては、武士の本意が立ちませぬ。
ト犬坊丸、思ひ入れ。

景高　何れも、今のを聞かしつたか。手の窪程な御扶持を取り
三郎　張替へ傘や觀世縒りで、やう／＼その日を過す
孫八　消炭で鼻をあぶる、しみつたれな暮らしで居ても
彌太　矢ッ張り武士か。
皆々　侍ひかえ。
ト此うち、團三郎、思ひ入れ。舞鶴、制して居る。
水草　そりや、仰しやらいでも知れた事。例へ御恩は小祿でも、帶刀いたせば武士は一つ。
犬坊　面白い。その武士の妻女たる、水草どのとは相應な若年者の犬坊丸。詞の非太刀を請けうより、この場に於て眞劍で、手合せが致して見たい。
舞鶴　ア、モシ、犬坊さま、そりや御無理と申すもの。どうして女子の水草さまが。
犬坊　イヤ、さうでない。神宮皇后を始めとして、靜、巴は賢女。すりや武士の妻ならば、心得ぬとは云はれまい。但しは曾我で育つたゆゑ、貧苦に追つてその事は、學ばずに置かしつたか。
水草　サア、それは。
犬坊　知つて居るなら今爰で。

水草　サア。
皆々　サア／＼／＼。
犬坊　水草どの、どうだ。
ト思ひ入れ。此うち、團三郎、ヂリ／＼して居る。この時、堪えず舞鶴を引退け、水草と入れ替つて
團三　イヤ、憚りながら犬坊さま、御前髮のあなたゆゑ、女の相手相應とは、他聞の聞えも何とやら。幸ひ團三も前髮立ち、年も相生お相手に太刀筋、水草が名代と思し召されて、お手の內をお見せなされて下さらば、ヘイヘイ、有り難う存じ奉ります。
犬坊　すりやアノわれが犬坊と。
團三　如何にも左樣。
犬坊　よいワ。それ程に云ふ事なら、この祐友が太刀筋を。
ト云ひながら抜きかける。團三郎、しつかり留めて
團三　イヤ、滅多にさうは。
ト犬坊丸、腰を落して抜きにかゝる。團三郎、突き廻し、双方抜いて左右へ別れ、白刃を構へキッと見得。
皆々團三郎が竹光を見て
皆々　ヤア、團三郎が刀は竹光。
トこれにて、團三郎、心附き、ちやつと鞘に納めて赤

面する。犬坊丸、其まゝ團三郎が足を搔いて背打ちに打ち据ゑる。この時、下座より、祐成出て來り、犬坊が振り上げし白刃の手をしやんと留める。水草、舞鶴見て

水草　其方は祐成。

舞鶴　好い所へ。

祐成　姉者人、舞鶴どの　こりや如何の譯で團三郎は。

水草　サア、これは。

ト云ふに云はれぬ思ひ入れ。

犬坊　その仔細は團三郎、某と眞劍の試合を望み、打負けしゆゑこの背打ち。

祐成　すりやアノ試合に團三郎が……エヽ、腑甲斐なき惰弱者。人もあらうに犬坊どのに、打負けしはまだしも仕合せ。恥ぢて以來は武藝を勵め。常々云ふは爰の所ぢや。

ト急いて云ふ。

イヤナニ、祐友どの、某も未熟ながら、嗜なみまする武術の試み。祐成と只一度、お立合ひなされて下されぬか。

犬坊　イヤ、某はまだ前振りある身。大人を相手に立合ひは。

ト思ひ入れ。

祐成　然らば今一度團三郎と、お立合ひなされまいか。

犬坊　ムウ、成る程、團三郎なら前髮同士、幾度なりと立合ひませう。

祐成　左樣ござらば祐成は、これにて貴殿の太刀筋を。

水草　ア、コレ、あの團三郎はの。

祐成　ドヽどう致しました。

舞鶴　サア、アノ、それは。

祐成　なんの事やら譯が知れぬ。サヽ、團三郎、祐成が見る前で、サヽ、今一度立合へ〳〵。

ト急き立てる。水草、舞鶴、云ふに云はれぬ思ひ入れ。

景高　こりやよからう。祐成が見物おしやらば猶の事。

三郎　サヽ、拜見いたしたい。

彌太　モシ、若旦那、今度は手酷くおやりなさい。

ト犬坊丸、團三郎か側へ來て

犬坊　サア、團三郎、主の祐成どのが懇望ゆゑ、今一度眞劍勝負。サア、腰に帶した見事な刀で、われが方から拔いて來い……サア、どうだ〳〵。

祐成　コリヤヤイ團三、今の勝負で臆したのか。サア、立合はぬか〳〵。

犬坊　祐成どの、こりや某が手の内に、懲り〳〵したと見

えまする。

祐成　イヤ、左樣でもござるまい。サア、立合へ……どうぢや。

ト團三郎が額を眺めて思ひ入れ。團三郎、始終赤面して、額い上がらぬ思ひ入れ。祐成、思ひ入れあつて

フム。すりやそれ程に犬坊どのが、チエ、、見下げ果てたる大腰拔け。

トむつと腹を立ち、無念の思ひ入れ。

犬坊　いつその事に犬坊が、臆病者の極印を。

ト團三郎が襟髮を取つて額を上げ、鍔にてハツシと眉間を割る。と血汐流れる。薄ドロ〳〵にて、鷄鳴く。犬坊丸、ちやつと懷中を押へ思ひ入れ。皆々思ひ入れ。

水草　血汐と共に鷄の聲は

舞鶴　川津さまの筐の目貫。

祐成　ヤ、なんと。

團三　禪司坊さまの失はれしと、お話しありし

水草　在所は正しく

祐成　犬坊祐友。

トつか〳〵と寄るを彌太夫支へる。片手にて投げ退ける。起きる所を團三郎押へる。景高、三郎、孫八、を水草、舞鶴、隔てる。此うち、祐成、犬坊丸を手籠めにして懷中より袱紗包みの鷄の目貫を取出し

誠にこりやコレ噂に聞きし、川津さまの筐の目貫。

犬坊　それを。

ト來るをしやんと留め

祐成　弟禪司へ父の筐、何ゆゑ所持は召されしぞ。

犬坊　サア、その品を懷中したは。

舞鶴　懷中なされしその譯は。

ト犬坊丸、思ひ入れあつて

犬坊　詮議の爲だ。この目貫が祐安の、筐の品なら所持した僧は、平家の侍ひたる伊東九郎へ、養子の禪司坊。

景高　平家へ由緣の殘黨なら

三郎　繩打つて引立てうと

孫八　詮議の爲に取り得し目貫。

彌太　いよ〳〵それに極まれば、禪司坊が

四人　身の上だぞ。

祐成　事新らしき何れも方、側へ平家の侍ひに、緣あるとても今にては、出家なしたる禪司坊。何お咎めのあるべきや。さう御意あれば主人の名代、御老人を祐成が、糺明いたして。

彌太　ア、、これサ〱、それおやア彌太夫一人迷惑。モシ、こんな所においでより、サア〱、奥へお越しなされい。
皆々　イカサマ、それがようござらう。
祐成　然らば禪司坊が身の上は。
皆々　なんのお構ひ申さうぞ。
祐成　然らば目貫御所持の儀も、たつて申さず此方も
皆々　これにて互ひに
犬坊　祐成どの。
祐成　犬坊どの。
犬坊　何れも、お來やれ。
ト團三郎、ツカ〱と犬坊丸へ寄らうとするを、祐成、引き廻して思ひ入れ。水草、舞鶴、留める。大拍子になり、犬坊丸先に、景高、三郎、孫八、彌太夫、奥へ入る。祐成、目貫を取つて、押戴き
祐成　エ、、有り難い〱。不思議に父のお筐が、早速この祐成へ戻りしも、鷄の音を發せし不思議。
團三　あなたのお手より何卒して。
祐成　默れ團三。臆病者の身を以て、何面目に祐成へ。
水草　ア、、コレナウ祐成、これには段々譯のある事。

舞鶴　團三どのがなんのマア、試合に負けたと云ふではなし。
祐成　それに何して刀の背打ち。今一度勝負と望みし時、何ゆゑに立合はさりしぞ。
ト團三郎、思ひ入れあつて
團三　祐成さま、團三郎が手を拱き、打たれて居つたも立合はぬも、犬坊如きに恐れはなけれど、何を申すもこの品ゆゑ。
ト竹光を拔いて見せる。
祐成　ムウ、竹刀と眞劍と、立合ひはならぬも尤も。して又何ゆゑ左樣な品を。
團三　帶して居るも身貧な曾我ゆゑ。
祐成　なんと。
團三　少しの物も朝夕の、煙りの代と賣り代なし、疾から本の腰ふさげも、犬坊丸が惡口雜言、その上無理に二の宮の、お姉御樣へ試合の勝負、見るに忍びず竹光も、打忘れたる口惜しさに、拔き合せての面目なさ、顏も得上げぬ弱味へ付け入り、無體に打つた額のこの疵。まだも恥辱が却つて忠義、お役に立つて目貫の鷄、在所知れしも天道のお憐れみ。粗忽の段は幾重にも、御免なされて

下さりませ。
ト これにて祐成、思ひ入れ。この時、入相の鐘鳴る。
祐成　最早黄昏。
水草　範頼公の御生害、急ぐ心かあの鐘の音。
團三　祐成さまにはこの目貫、禪司坊さまお案じあれば、
少しも早う。團三郎は水草さまの、お供いたすでござり
ませう。
ト 袱紗包みを祐成へ渡す。
舞鶴　そんならわたしはこれより直ぐに、水草さまにはお
後から。
水草　最早黄昏夕告げの
舞鶴　鶏の目貫のお筐は
祐成　祐成確かに受取つた。
團三　この場は此まゝ。
祐成　團三郎。
團三　お越し遊ばされませう。
ト 三重、寺鐘になり、舞鶴、先に祐成、向うへ入る。
障子の内にて
範頼　業鏡高懸三十七年、一槌打砕大道坦然。
團三　あの聲は範頼公。

水草　コレ……おぢや。
ト 音樂になり、水草、團三郎、下座へ入る。と正面の
障子開く。爰に範頼、以前の形にて、二疊臺の上に白
の褥を敷き、この上に座し、經文を讀んで居る。經机
に經文載せてあり、下座より、景高、三郎、孫八、平
太、與市、彌太夫、行實に同宿付き添ひ出て來る。
皆々　我が君様。
範頼　範頼不肖なりと雖も、淸和の末に産れ、武將の枝に
連なりながら、重盛の後を蹈ひ、わざと命を縮むる今際、
又も來つて止むるとも、なんぞ思ひを返さんや。諫めの
詞は無益おやぞよ。
平太　その仰せさる事ながら、君は仁者と呼ばれ給ひ、時
めく御身を刃に拋ち、黄泉の客とならせらるゝは、殊に
取つて嘆はしく、それゆゑ又も臣等の面々。
與市　殊に斯く云ふ淺利の與市、振分け髮の頃よりも、惠
みは高き三代相恩、明日より誰れを御主君と、給仕なさ
んも本意にあらず。
景高　殊に兄頼朝公、御德風に四海を靡かせゝ
三郎　草木も搖がぬ鎌倉の、その繁昌を打捨て、
孫八　先も知れない極樂へ、お急ぎなさるお心意氣。

彌太　死出の旅路の御不自由、その時生きて居た方がと、思し召してもお腹を召した、後では歸らぬ御悔み。

行實　この行實も生死の道、いづれとあらば諦めでたく、お館への御歸館が

皆々　願はしう存じまする。

範頼　いやとよ方々、國の興亡を見るは、政に如かずと、最前も云ふ如く、頼朝へ我が諫めし、義經どのゝ和睦、六代が命乞ひ、富士の牧狩、右の三つ、一つとしてお用ひ給はず、人民の歎きを思はぬは、これ天下の亂の初め。その憂き事を見ぬうちに、世を早うする覺悟の冠者。最早止めな。仇事であらう。

皆々　如何やうに申しても

範頼　行實これへ。

行實　ハッ。

　ト側へ寄る。

範頼　前世の業行、拙なき範頼、佛果の程が。

　ト思ひ入れ。

行實　既に佛の教へにも、五逆罪消滅自他平等、ましてや君は罪なき御身、彌陀の淨土へ到らん事、何か疑ひ候はん。只稱念の唱名こそ、專一にござりまする。

範頼　喜ばしい。

　ト白無垢の肌を脱ぎ、小さ刀を取つて、紙にて卷き、此うち始終掠めたる音樂。

主從三世……來世で待つぞよ。

　ト既に腹へ突き立てようとする。この時、下座にて

景時　待つた我が君。只一言申し上げたき儀がござる。

　ト景時、走り出て來り、範頼が前に平伏する。範頼見て

範頼　梶原景時、汝も我れへ。

景時　イヤ、一旦思し詰められし儀、梶原如き身を拋ち、百萬度申し立てたとて、何しにお止まり遊ばされんや。

範頼　して又何を只一言。

景時　お願ひの事ござつて。

範頼　いま生害なす範頼へ、なんの願ひ、なんの訴訟。

景時　三世の緣のこの世のお別れ、何卒君のお杯を。

範頼　なんと。

景時　源家へお味方申してより、旦夕伺ひ奉るに、聖賢の道を學び、下を惠むの御仁心、これぞ若君頼家公の、御世ともならば君御後見遊ばされ、政治を聞かせらるゝに於ては、堯舜の世と云ふともこれには過ぎじと存ずる

うち、思ひ依らずも今日の仕儀。力も腰も抜け果てゝ、せめて今一度御在世に、お杯でも頂戴して、直ぐに拙者も髻切り、君のお後が弔らひたき願ひ。何卒老の思ひ出に、聞済みあつてお杯、下し置かれませうずなら、有り難う存じまする。

ト愁ひの思ひ入れ。

範頼　イカサマ、行きて再び歸らぬ旅路、範頼も冥途の門出、老の心を慰む爲、如何にも杯いたしてくれう。

景時　すりや、お聞屆け下されて……エヽ、忝ない。

ト涙を押へて

誰ぞ銚子土器を持ちやれ。

ト下座にて

大藤　心得てござる。

トまた音樂になり、大藤内、三方へ土器、長柄の銚子を持つて出て來り

イザ。

ト範頼が前に置く。範頼、杯を取上げる。平太、與市顏見合せて思ひ入れ。

平太　アイヤ我が君、そのお杯、御無用でござりまする。

大藤　待つたしやい、亂長どの、大藤内が酌に立つた、範頼公のお杯。

皆々　なぜ御無用でござるな。

平太　最前より窺ふところ、合點參らぬ景時どのゝ詞と云ひ

與市　殊に佞辯を以て媚び諂ふ、大藤内が持參の酒。

兩人　それゆゑお止め申さにやならぬ。

景時　默れ兩人。廉直第一の景時が、君に杯願ふのは、來世を結ぶ三世の因み。何ゆゑ合點がゆかぬと申しやる。

平太　合點ゆかざる仔細は最前、犬坊丸が討ち留めし狐、實朝公へ奉ると、云つたは一物、正しくそれなる銚子は毒。

大藤　何がどうした。

彌太　犬坊丸と御意なされば、家來のこの久須美めも、聞き流しには相成りませぬぞ。

景時　それ程平三景時を、疑はしいと思ふなら、兩人してあの酒の、鬼役をして奉れ。

兩人　イヤサ、その儀は。

皆々　そんなら何ゆゑ疑ひかけた。

兩人　サア。

皆々　サア〳〵。

初演の絵番附

範頼　双方扣へい。

皆々　ハッ。

範頼　忠義餘つて兩人が、怪しみしも我れへの芳志。また景時も君臣の、道を辨まへある武夫。何しに仔細のあるべきや。人の心は破られぬ範頼。イザ。

ト土器を出す。大藤内、注ぐ。範頼、これをグッと呑む。平太、與市、これを見て

兩人　すりや、その御酒を。

ト思ひ入れ。薄ドロ／＼になる。と範頼、アッと苦しみ倒れる。平太、與市、これを見て

さてこそ君を弑する景時。

ト兩人、柄へ手をかけ立ちかゝろ。皆々よろしく立廻り。此うち、行實、同宿、範頼を介抱して

行實　我が君樣／＼。

ト呼び活ける。こなたは立廻りしやんととまる。この時、範頼、むつくと起きろ。皆々思ひ入れ。我が君樣と左右より同宿寄るところを、筋斗打たせて襟髪を取り、兩方一度にグッと締めると、脚へ面にて、同宿死ぬ。皆々ヤア、と驚ろく。行實、思ひ入れ。

行實　只事ならぬ御有樣。

ト珠數を摺り立て、範頼を祈念の思ひ入れ。

範頼　ヤア、忌はしいけづり廻しめ。目に物見せん。

ト其まゝ見事に取つて投げ退け、グッと蹴殺す。平太、與市、範頼が前へ詰め寄り

平太　こりや我が君には景時が、企みに深く陷り給ひ

與市　狂氣ばし遊ばせしか。但しは物に襲はれ給ふか。

兩人　御生害の思し召しはな。

範頼　ヤア、穢らはしきその一言。なんの謂はれに生害せんや。

景時　して又君の

皆々　思し召しは。

範頼　我れも同じき義朝が悴。いつまで兄の養ひ受け、身を屈して暮らさんよりは、範頼に等しき同士の輩を語らひ、兄頼朝が武將の位、我れに讓らばその通り。否むに於ては容赦なく、推して天下を奪ふの所存。景時始め承知なしたか。

ト平太、與市、恟りする。

景時　何がさて君の御諚。

皆々　承知いたしてござりまする。

兩人　すりや、御謀叛の思し立ちとな。

範頼　問ふに及ばぬ、謀叛の根ざしだ。
ト平太、側へ寄る。
平太　チエヽ、忌はしき今の御一言。武将は兄たる頼朝公
その一天下羨やましく、御謀叛なぞとは思ひも寄らぬ。
是非ともこの儀は。
範頼　ヤア、大望の思ひ立つ、幸先挫く不吉な胤長。
ト中啓にて打ち据ゑ
達て申すと、命がないぞよ。
ト突き放す。
平太　命は君に捧げし物。どこまでも平太胤長。
トまた行くところを、與市、隔てゝ其まゝ刀を拔いて
我が腹へグッと突き立てる。皆々思ひ入れ。平太、驚
ろき
こりや與市義遠。
ト平太、寄らうとするを
與市　ヤア、平太どの、寄るまいぞ。捨つる命は只一つ。
最前君の仰せには、範頼が生害せば、我れゆゑ命を捨て
たりとて、諫めを用ひられんとのそのお詞を、今この身
に思ひ合せて、覺悟の切腹。これまで謀叛を起せし者、
子孫は殘らず天の憎しみ。それ御存じでお情ない、君ゆ
ゑ死ぬる義遠が、心を憐れみ範頼公、どうぞ大義の思し
召し、お止まり下さりませ。モシ、我が君様。
トきつと思ひ入れ、範頼、ヂロリと見て、手早く小さ
刀を拔き、其まゝ首をポンと打つ。
範頼　まだ乳臭き淺利の與市、諫言立てが面憎さ。この上
諫むる者あれば、斯くなりとこの通り。
ト平太が目先へ血刀を差出す。平太、思ひ入れ。景時
柄杓にて白刃へ水をかける。範頼、こちらへ出す。大
藤内、これを拭く。
平太胤長。
平太　ハッ。
範頼　近日工藤が館へ立越え、狩場の繪圖面檢分の折柄、
定めし今樣風流を盡し、この範頼をもてなさんは必定。
その今樣には、兼ねて我が心をかけし、義村が娘片貝こ
そは、氏と云ひ三浦之助の家なれば、狩座に丁度幸ひ、
獲物あるやう釣狐の、今樣を相勤め慰めよと、一族の義
村へ申し傳へい。相違に及ぶと身の上だぞ。
平太　ナニ、アノ三浦の片貝、釣狐の今樣御所望とな。
範頼　如何にも。今樣終れば閨の伽だワ。
平太　委細承知仕つてござりまする。

ト思ひ入れ。
景時　すりや範頼公には、いよ〳〵近日祐經が館へお入りあつて、五月下旬の狩場の繪圖面、御檢分遊ばされんとな。
大藤　その次手に御執心の、片貝を召し寄せられ、釣狐の今様が、濟むと其まゝお閨の伽。
三郎　これがほんの蒲燒の後で
孫八　泥鼈を喰ふやうなものでござる。
範頼　して、祐經は、狩場の工風いたして居るか。
彌太　ハツ、主人祐經工風を凝らし、繪圖面改め相濟めば、夜神樂の神事を行ひ、直ぐに狩場の陣屋を建つべき、地所へ見に參るとの儀。
範頼　猶もこの由、申し達せよ。
彌太　畏まつてござりまする。
ト景時、下座へ向ひ
景時　忠太參れ。
忠太　ハツ。
ト忠太、出て來る。
御用かな。
景時　コリヤ、其方は。

ト囁く。忠太、呑み込み
忠太　畏まつてござりまする。
景時　早く行け。
忠太　ハツ。
ト向うへ一散に走り入る。
景時　イザ、この上は、御歸館あつて萬事の手答を。
平太　拙者は三浦の義村へ、君の御諚を。
大藤　我れ〳〵も直さまこれより
皆々　お供いたすでござりませう。
範頼　皆參れ。早く。
ト下がり葉になり、範頼、先に景時、景高、三郎、孫八、彌太夫、大藤内、平太、向うへ入る。よき程に、團三郎、水草、下座より、出かけ、皆々の入るを見送り
水草　團三郎。
團三　範頼公祐經の館へ、繪圖面檢分の折柄、片貝さまを召さうとの事。
水草　敵の顏を兄弟が、見知るはこれぞ願ふに幸ひ
團三　片貝さまを祐成さまへ。
水草　ちつとも早う。

ト團三郎、行かうとする。此うち、奥より、犬坊丸、
出て

犬坊　範頼公のお心かくる、あの片貝を祐成へは。

　ト團三郎を引き戻す。水草、中を隔てゝ

千草　爰は水草に任せて早う。

團三　合點だ。

　ト早めの大拍子になり、團三郎、向うへ走り入る。犬坊丸、付いて行かうとするを、水草、引留める。

犬坊　邪魔な女め、そこ退け。

水草　イヽヤならぬ。

　トちよつと立廻つて、しやんと見得。これより、誂らへの鳴り物になり、犬坊丸、水草、面白きタテあつてトゞつこいと見得。時の鐘の送りにて、この道具をぶん廻す。

　本舞臺、三間の間、向う一面の黒幕。眞中に本皮にて葺きたる大きなる杉の古木。この洞誂らへあり、この前に矢立の椙と書いたる高札。その外所々にも本皮の杉の立ち木。日覆より覆を付けし杉の吊り枝この道具に納まる。

　ト矢張り掠めたる時の鐘。下座より、祐成、以前の形、長の下を括りし形にて、庵に木瓜の紋付けし小提灯を下げ、出て来り

祐成　成る程、春宵價千金とは爰の所であらう。朧にかけし花の霞、杉の葉色も靑々と、どうも云へたものではない。

　トいろ／＼思ひ入れ。バタ／＼になり、下座より、團三郎、走り出て來て、祐成に行き當る。祐成、思ひ入れ、ちやつと刀へ手をかける。團三郎、見て

團三　祐成さまではござりませぬか。

祐成　團三郎か。なんぢや／＼。

　ト團三郎、息の切れし思ひ入れ。

團三　モシ、お喜びなされませ／＼。

祐成　譯も云はずに喜べ／＼と、なんぢや／＼。

團三　モシ、敵左衛門祐經どのに、お逢ひなさるゝ好い手蔓が出來ました。

　ト矢張り息の切れる思ひ入れ。

祐成　ナニ、敵左衛門祐經に……そりやどう云ふ手蔓ぢやな。

團三　片貝さまでござりまする／＼。

祐成　あの片貝が祐經に、逢ふ手蔓とはどうした譯ぢや。
團三　サア、範頼公近々に、狩場の繪圖面檢分の爲、祐經が館へ御入來、その節三浦の片貝に、釣狐の今樣を勤めさせいとの事なれども、あの外見ずの片貝さま、なかなか合點はなされまい。そこをあなたがお頼みなされば、嫌でも御承知なされまする。そこであなたも箱王さまもその今樣の役人で、お出でなされば祐經に、お逢ひなさるゝ事がなります。
祐成　なんと申す。そんならアノ片貝を頼んで、釣狐の今樣を勤めさせ、二人もその役人になつて行けば、敵左衞門に逢はれると申すか。
團三　左樣でござりまする。
祐成　さう云ふ事なら片貝には、某が頼むであらう。
團三　サア／＼、そこでござりまする。日頃から片貝さまが、祝言の事を仰しやつても、あなたが御承知ござりませぬ。そこでこれをお頼みなさるは、先づ此方から御夫婦におなりなされて、そこでお頼み遊ばしたら、否應はなりますまい。
祐成　そりや、祐經に逢ふ事ぢやに依つて、夫婦の語らひするでもあらうが、左やういたせば、對面がなるぢやな。
團三　サア、御夫婦におなりなされて、お頼みあれば、何しに否やがござりませう。
祐成　さう云ふ事なら夫婦にならう。祝言承知ぢや。
團三　左樣ならば私しは、この事を箱王さまへ。
祐成　オヽ、早う聞かせて喜ばせてくれい。
團三　そんならあなたは。
祐成　これから直ぐに義村どのゝ屋敷へ行き、片貝と夫婦になつて、この事を申すであらう。
團三　隨分ともにお氣長に。
祐成　氣遣ひしやんな。短氣は出さぬ。
團三　首尾ようお頼みなされませ。
祐成　そりや、合點ぢや。
團三　祐成さま。
祐成　團三、急いで箱王へ。
團三　合點でござりまする。
ト早めの禪のツトメになり、團三郎、急いで向うへ入る。あと見送つて
祐成　忝ない／＼。これと云ふも信心なす、皆箱根權現の加護。エヽ、有り難い。所も爰は矢立の椙、六孫王の御時

に、九州の逆臣たる、阿蘇權之頭討手の爲、關東の兵ども、この杉に祈誓をかけ、名を後代に止めなば、一の矢を受け留め給へと、各々射けるに射損ぜず、筑紫に下り易々と、逆臣を征伐せしより、矢立の椙と云ひ傳ふ。門出めでたき杉なりと、それよりの上下の旅人の、矢を捧げぬ者もなし。我れ〱とても敵祐經、討ち取る門出をこの杉へ、矢は捧げずと、オヽ、それ〱。

ト誂らへの合ひ方になり、この杉へ祈誓をかける思ひ入れ。時の鐘、掠めて打つ。花道よりバタ〱にて、片貝、廣振り袖、襠裲衣裳の形にて、手拭をヒラリと頭へかけ、手遊びの小さき人形を抱へて走り出て來る後より、軒端、初花、以前の形にて、結構なる鏡臺鏡を持つて、同じく走り出て來り

軒端 申し〱片貝さま、ちつとお靜かにおひろひ遊ばしませい。

片貝 それでも駈落ちとやらぢやゆゑ、それでわしや駈けるのぢやわいなう。

初花 なんの、モウ其やうになされまして、おしんどうはござりませぬかえ。

片貝 さいなう。わしや祐成さまのお目にかゝる事ぢやと思へば、しんどい事も知らぬわいなう。

軒端 さうしてあなた、祐成さまにお逢ひなされて、仰しやる事。

初花 お忘れはなされませぬかえ。

片貝 そりやよう覺えて居るわいなう。女夫になつて下さりませねば、自らは自害を致しますると云ふのぢやないかや。

兩人 それをお忘れ遊ばしまするな。

片貝 どうして忘れてよいものかいなう。

兩人 左樣ならば、お靜かにおひろひ遊ばしませい。

ト矢張り誂らへの合ひ方、時の鐘にて、舞臺へ來る。此うち、祐成、こちらへ來かゝる。花道の角にて、互ひに行き合ひ

祐成 片貝どのぢやござらぬか。

片貝 エヽ。

ト顏見合せ、恥かしき思ひ入れ。

兩人 ほんに、好い所で祐成さま。

祐成 この祐成も好い所ぢや。コレ、片貝どの、夫婦になりたい〱。

トこちらへ連れて來る。女形、恟りして

軒端　そんなら、あなた、片貝さまと。
祐成　オヽサ、祝言が致したい。
兩人　そりやアノ誠でござりますかえ。
祐成　祐成は侍ひ。何僞はりを構ようぞ。
初花　モシ、片貝さま、あなたの方から御祝言を、なされうと仰しやりまする。
兩人　さぞお嬉しうござりませうな。
片貝　コレ軒端、それでも自害せうかいなう。
ト祐成、思ひ入れ。
兩人　もうそれには及びませぬ。
祐成　片貝どの、今から其方は祐成が宿の妻ぢやぞ。
軒端　それでもあなたこれまでは、何ゆゑお嫌ひなされました。
祐成　サア、今までは今まで。なんでも一旦云ひ號けの、片貝どの、はこれから女房ぢや。
片貝　そんならアノ、不束なこの片貝と。
祐成　女夫とも〳〵。二世の女夫ぢや。
ト手荒く片貝が手を取る。これにて、片貝、上氣した思ひ入れにて、俯向き、祐成が顔を見ながら嬉しき思ひ入れ。

軒端　片貝さま、御念が屆いて
兩人　おめでたう存じまする。
祐成　イヤ、ナニ、片貝どの、斯う女夫になつたからは、其方に祐成が、折入つて頼みたい事がある。
片貝　そりやモウなんなりと……仰しやつて下さりませ。
祐成　サア、その頼みたいと云ふ譯は、斯うぢや。近々左衛門祐經の館へ、範頼公狩場の繪圖面、御檢分にござる出。その折柄片貝へ、釣狐の今様を、仰せつけらるゝとの事。なんとこの事得心して、我れ〳〵も今様の役人へ差加へ、祐經に逢はせて下さるまいか。
ト此うち、片貝、思ひ入れ。
軒端　そんならその釣狐の、今様とやらを
片貝　アノ自らに。
祐成　勤めて下さるものならば、我れ〳〵が願ひも叶ふ。どうぞ聞き屆けて、
片貝　そりやモウ、あなたのお爲になる事なら。
祐成　頼まれて下さるか。
片貝　どうぞ稽古いたしてなりと。
祐成　エヽ、忝ない。
ト思ひ入れ。

初花　祐成さま、片貝さまは奥様で
両人　ござりまするぞえ。
祐成　ハテ、知れた事。中睦まじき宿の妻……ナウ片貝。
片貝　モシ、アノ、きつとでござりますぞえ。
祐成　まだ疑ふか。
ト抱きあげる。片貝、軒端初花を見て恥かしがる。両
人、こちらを向くを見て
片貝　オヽ、嬉し。
ト祐成に抱きつく。ト禪のツトメになり、花道より、
菖蒲革の侍ひ、三ッ引の紋付けたる箱提灯を持つて出
る。後より、平太、以前の形にて、股立ちを取り、急
いだる思ひ入れにて出る。後より菖蒲革の侍ひ、同じ
く提灯を持つて出る。その後より陸尺、鋲打ちの乗り
物を擔いで出る。その後に絹羽織の綺麗なる侍ひ両人
付き、中間二人、提灯持ち一人付き、この人數急いで
舞臺へ來る。これを付けて忠太來り、下の方に窺ふ。
平太、舞臺の人々を見て
平太　片貝どのか。
トこれにて驚ろき、平太を見て
片貝　ヤア、あなたは。

軒端　平太胤長さま。
祐成　ナニ、平太どのとな。
ト逃げうとする。
平太　アヽイヤ、祐成どの、逃ぐるに及ばぬ。平太が尋ね
て参つた譯は、今日梶原景時が計らひに依つて、範頼公
お心荒くならせ給ひ、近日狩場の繪圖面を、祐經どのゝ
館へ檢分。その砌り三浦の片貝に、今様を勤めさせ、役
目終らば閨の伽。この事一族たるゆゑに、胤長三浦の義
村へ、云傳へとのお使ひ。急ぐ道にてこれなる家來、
片貝どのゝ家に尋ね求むるとの事。こりや外でない、
戀ひ慕ふ貴殿の方へと存ずるゆゑ、共々尋ね爰にて逢ひ
先づは安堵いたしたが、安堵ならざる範頼公の御ン様。
片貝こそ祐成と、夫婦となりしと聞き給はゞ、互ひの身
の上安穩なるまじ。一先づ三浦へ片貝どの、戻つて後の
思案もあらう。サヽ、少しも早う乗り物にて
祐成　すりや、範頼公片貝へ御執心ゆゑ、此まゝあつては
平太　両家の爲に罷りならぬ。
片貝　それでもどうして此まゝに。
平太　ハテ、胤長が悪うはせぬ。
ト無理に引立てる。祐成、思ひ入れ。軒端、初花、留

める。
両人　サア、左様ではござりませうが。
平太　其方達までが同じやうに。
ト両人を突き退け、嫌がる片貝を無理に乗り物の内へ入れる。
片貝　そんならちよつと祐成さまに。
ト出ようとする所を、しやんと戸をさし
平太　祐成どの、重ねて……乗り物やれ
皆々　ハツ。
ト駕籠を先へ立て、軒端、初花を追ひ立てながら、平太、皆々バタ／＼と向うへ急いで入る。祐成、此うち、只ウロ／＼して居て、駕籠の後を見送り、思ひ入れあつて
祐成　あの片貝を取戻されては、敵左衛門祐経に、逢ふべき手蔓は絶え果てた。それでは筐の父上へも……ホイ。
ト最前の目貫の袱紗包みを持つて思ひ入れ。この時、忠太、窺ひ寄つて
忠太　祐成、観念。
ト抜打ちに切つてかゝる。祐成、ちやつと身を躱し、立廻り少しあつて、忠太を當てる。忠太、ウンと悶絶する。矢張り今の袱紗包みを持つて思案の思ひ入れ。
祐成　こりや時致とも談合して……さうぢや／＼。
ト下の方へ行かうとする。この時、杉の洞より片貝、ちよこ／＼と走り出て来り、祐成が行く先に立つ。祐成、これを見て
ヤア、片貝、其方はどうして。
片貝　祐成さま、あなたのお顔を今一度見たさ。あの乗り物をやう／＼抜けて。
祐成　忝ない。祐経にさへ逢ふ上は、我れ／＼が身はいとはぬ心……いよ／＼望みの今様を。
片貝　アイ。
ト思ひ入れ。
祐成　其方の心底、忘れは置かぬ。
ト思ひ入れ。此うち、忠太、心附き
忠太　片貝うせう。
ト片貝を引立てにかゝる。祐成、隔てる。此うち、見物へ見えるやうに袱紗のまゝ目貫を落す。忠太、切つて来る白刃を取つて、直ぐにポンと切り倒す。忠太、見事に宙返りをする。この時、血汐、袱紗にかゝりし心。薄ドロ／＼になり、鶏の聲する。片貝、悄りして

ヒラリと飛び退き、ちよつと狐の見得。テンと雷序の頭ばかり打つ。祐成、これを知らずに、落ちたる袱紗包みを取上げて不思議な思ひ入れ。双方この途端、拍子幕。シヤギリ。

四 建 目

梅澤女湯の場
椎の木番屋の場

役名 ── 鬼王新左衛門。同女房、月小夜。同妹、十六夜。大藤内成景。同中間、可助。彌太夫女房岩瀬。同下女、すゑ。宇佐美十内。坊主、瑞徳寺。肝煎り、忠八。女湯番頭、庄八。近江小藤太成家。同家來、段平。百足屋金兵衛。梅澤の小五郎兵衛。箱根の閉坊。

本舞臺、三間の間、正面に格子造り女湯の門口、女中湯と書いたる油障子、注連飾り、かまがりの松を立て、上の方、町内の木戸を斜に見せ、爰に、紙表具の地藏の畫像を掛け、莫蓙を敷き、折かけ燈籠の古きに灯を灯し、閉坊、麻衣、乞食坊主にて、古き菅笠、首にかけたる木札に啞聾箱根小地藏閉坊とあり、伏せ鉦を打つて居る。十内、誂らへの編笠、下駄がけ、讀賣りの拵らへにて、傘を横に脊負ひ、魚盡しの戻り駕を語つて居る。湯入り女三人、抱子を抱へたる女房、或ひは乳母の拵らへ、手拭、浴衣なぞ持ち、その外妙義詣りの仕出し大勢立ちかゝり、これを聽いて居る。忠八、股引、羽織、肝煎の形。瑞徳寺、長合羽、頭巾、ぱつち、田舍和尚の形にて格子を覗いて居る。すべて、梅澤の町、女湯の門口。通り神樂、四つ竹節にて、幕明く。

皆々 サア／＼、その後を聽きたい／＼。

十内 サア／＼、お急ぎでない方は、際へ寄つてお聽きなされませ。これはこの度の新作、節は即ち戻り駕の淨瑠璃、殘らず平假名にて、お子樣方が御覽じても、早速に解りまする。代錢は上下揃へまして十六銅。新らしいうちがお慰み。只今の後をお聽き下さりませう。

女皆 サア／＼、所望ぢや／＼。

十内 月待ち日待ち稟所、田螺にござる紡歸さんま、お鮪小鮒やぼらや鮫、よく相性の金魚と緋鯉、吸ひつく蛸のひだらさへ、鐵砲鰒の氣散じは、短かき夜半の釣の日に枕に餌は烏賊ばかり、魚同士のあだ水母、廻らば廻れお

鰻で、すゞき釣る日は茶碗酒。こは馬鹿の刺身ぢや生貝。
仕出　こいつは面白かつた。
同　ほんに、讀賣りを聽いて居て、湯を拔かれてはならぬ。早く入りやせう。
同　さうしやんせう〳〵。
ト捨ぜりふにて、女形は湯屋の內、仕出しは皆々閉坊が前へ錢を投げて、下座へ入る。閉坊、この度々に鉦を打つて居る。
忠八　どうだ和尙さん、この湯にも見えないわえ。
瑞德　左樣でござる。あのお小夜めは、どこぞで逢ひさうなものぢやが、ハテ、殘念な事でござるの。
十內　ソシ〳〵、お前方は、先刻からべら坊に、湯屋の格子を覗いて居るが、白痴が西河岸をひやかすやうに、と んだ所を覗き込んで、そこらで五人組を賴みなさんな。番頭が見たら水でもかけやう。此方へ退いて居なさい居なさい。
忠八　なにサ、わしらは女湯を覗いて、當をするやうな男ぢやアねえ。平塚の肝煎りでごんすが、さる所へ世話をして、取替へを取つた妾奉公人が、越さすを喰はしたから、その女を探すのサ。

瑞德　この和尙も本寺へ沙汰なしに、美しい大黑を抱へようと、世帶崩しの好い女房、年も二十七八は女の油の乘る最中。こつそり圍はうと支度金やつて、藥研堀へ店まで借りさせ、越さすを喰はせ居つたゆゑ、なんでも見付け出さうと、每日尋ねて步きまするて。
十內　ア丶、そんならお前方は、女奉公にあつて、越さすを喰つたのだね。
忠八　さうサ、なんでも、あの女めを見付けたら、丸裸にせねば先樣へ立ちませぬて。
瑞德　わしも出家の身で、女にかゝつて、金失うては本寺へ立ちませぬ。
十內　成る程、こりやア御尤もだ。幸ひ今夜は藤善寺の妙義の緣日、夜詣りが多いから、尋ねて見なさい。
瑞德　さうしませう〳〵。
十內　わしも上の辻へ行つて流さう。ア丶、天蓋がばれにやアいゝが。
忠八　サア、行きませう。
ト四つ竹節、通り神樂にて、三人捨ぜりふにて、下座へ入る。矢張りこの鳴り物にて、向うより、下女するが家中者の下女にて、木綿やつし、湯上げの包みを抱へ

誂らへの弓張りを灯し、岩瀬、御家中の老けたる御新造の拵らへにて、後帶、中拔きを穿き、洗湯入りの體。誂らへの紋付きの小袖を着て出て來る。東の口より、可助、中間にて、誂らへの弓張りを灯し、大藤內、麻上下、湯擢、大小にて出て來る。岩瀬が餘程後より、十六夜、草履下駄を穿き、前垂れへ何やら包み、これを抱へて出て來り、岩瀬へ思ひ入れあつて、閑坊が前へ賽錢を投げて畫像を拜みながら、岩瀬が方ばかり目を付けて居る。閑坊、十六夜へ目を付けて居る。岩瀬、大藤內、兩方より行き逢ひ、顏見合せ

大藤　これは岩瀬さまでござりまするか。

岩瀬　ほんにお前は大藤內さま。

兩人　ハテ、好い所でお目にかゝりました。

トこの時、閑坊、十六夜が袖を引いて、しなだれかゝる。湯屋の內、大勢の女の聲にて

大勢　オイ、熱いよ。うめて下さい〳〵。

ト羽目を叩く音する。十六夜、閑坊が手を振り切つて

十六　ドリヤ、洗湯へ入つて行かうか。

ト矢張り四つ竹節、通り神樂にて、女湯の內へ入る。四人殘る。

岩瀬　これはマア、大藤內さま、この程夫彌太夫が噂にて委細承りましてござりまする。狩座の御假家、地祭りの御用、さぞかし御辛勞にござりませう。

大藤　左樣でござりまする。身共この度、吉備津宮造營の儀、何かと小藤太さま、彌太夫さまのお執成し。今日も南郷の茶屋にて、小藤太さまより彌太夫さまへ、御狀が參りました。好い折から、あなたへお屆け申しませう。

ト懷中の狀を岩瀬に渡す。

岩瀬　これは〳〵、お世話の段、忝なうござりまする。夫彌太夫へ參つた御狀、何用か知らねども、案じられますれば私しが、拜見いたすでござりませう。

大藤　何れともなさるゝがよからう。

岩瀬　然らば內見いたしませう。

ト封を切りにかゝり、思ひ入れあつて

コリヤ、すゑ、其方は洗湯へ行て、待つて居や〳〵。

すゑ　アイ〳〵、畏まりました。

大藤　コリヤ〳〵可助、其方も暫らくが間、あの女中と連れ立ち、洗湯の店へ參り、身が呼ぶまで相待つてよからう。

可助　ネイ〳〵、畏まりました。

する、奴さん、サア、一緒にお出で。

ト兩人、湯屋の內へ入る。岩瀨、狀の封を切り

岩瀨　ナニ〳〵「先達て申し談じ候ふ富士野に於て夏狩の御狩、御領の假屋を鬼門の方に建てさせ、逆木を以て假殿を出來いたし置く儀、普請受取り、百足屋金兵衞と申す町人に申し付け、成就なす時は、惣奉行たる主人の越度、これを科に祐經どのを押籠め、犬坊丸を跡目の願ひ、まつた大藤內には兼ね〴〵申し合せし大願の密法、賴み置き候へば、供物料として黃金貳十枚、貴公の手より成景へ相渡し下さるやう、申し遣はし候ふ、月日、久須美彌太夫どのへ、近江の小藤太判」すりや、其許樣へ夫の手より、金子の御用、承知いたしました。夫に申してこの岩瀨が、お返事いたさすでござりませう。

大藤　何分賴み存ずる。

ト思ひ入れ。岩瀨、讀みし狀を袂へ入れる事あつて、懷中より一通を出し

岩瀨　ほんに、この御狀は、夫彌太夫より小藤太さまへ遣はす密書。用事の仔細は詳しく記してござんすが、大藤內さま、文言を內見なされませいなア。

大藤　心得ました。ドレ、讀み上げませうか。

トあたりを見廻し、閉坊へ思ひ入れあつて

アレ〳〵、あれに坊主めが聞いて居まするぞえ。

岩瀨　ハテ、大事ござんせぬ。ありや啞聾の修行者、閉坊と云ふ道心。氣遣ひはござんせぬわいなア。

大藤　エヽ、あの坊主は啞聾でござるか。さうとは知らず大きに心遣ひを仕つた。ハヽヽヽ。

ト狀を開き

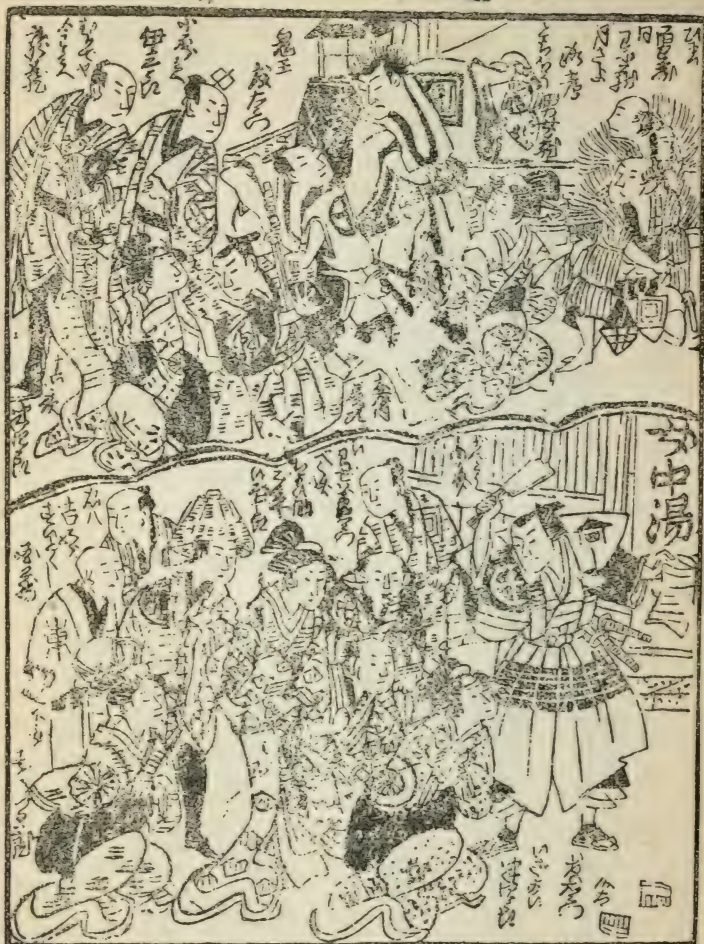
「兼ね〴〵內談極め候ふ一儀、この度夏狩までに成就いたすと存ぜ候へば、當時主人の子息と致し置かれる御實子、犬坊どの儀、祐經假家の越度これあるに於ては、早々跡目の願ひ申し立て、三箇の莊を領地いたさるゝの段、相違あるまじく候ふ、それに付き、過ぎし安元二年の頃、離緣いたされ候ふ犬坊どのゝ母御、當歲の娘を連れ、伊豆の下田に住居の由、聞き傳へ罷り在り候へば、この度早速彼の地を相尋ね候へども、年移り候うて、いづれに住ひ致され候ふや、在所分明ならず候ふ段、わざわざ申し遣はし候ふ、然れども又ぞろ手段を以て、詮議いたすべく候ふ由、申し越し候ふ、以上、月日、小藤太どのへ、久須美彌太夫」ア、この文言を見まするところ、犬坊さまは左衞門さまの胤ならず、小藤太さまの

岩瀬　ア、モシ、密かに〳〵。
　ト思ひ入れあつて
その密書、小藤太どのまで、密かに今宵、お屆けなされて下さりませ。
大藤　心得ました。
　ト紙入れの間へ入れて
今晩中に、又々小藤太にお目にかゝらねばなりませぬ。殊更この程狩場の切手も二枚、梶原さまより受取つて參りました。
　ト淺黄の袱紗に包みし切手を二枚出して見せろ。この時、すゑ、湯屋の內より走り出て來り
すゑ　モシ、御新造樣、風呂の加減がよいさうにござりまする。早うお入りなされませ。
岩瀬　ほんにさうしませう。左樣ならば大藤內さま、必らずともに今の狀を。
大藤　心得ました。岩瀬さま。
岩瀬　お別れ申しませう。
　ト通り神樂、四つ竹節にて、岩瀬、すゑ、湯屋の內へ入る。大藤內、殘つて
大藤　イヤ、それはさうと、まだ忘れた事があつた。ア、コレ、岩瀬さまに今一度逢ひたいものだが、エ、コレ、可助めは何をしてうせるやら。
　ト思ひ入れあつて
こりや、百足屋の金兵衞が方へ、何かの手番ひ知らせの爲、ちよつと一筆書いてやらう。それ〳〵。
　ト閉坊が行燈の方へ來て
コレ、灯を借りたぞ。
　ト大きな聲にて云ふ。閉坊、頷く。大藤內、紙入れより鼻紙を出し、懷中の切手を紙入れの上へ何心なく置き、行燈の側へ行き、腰の矢立にて、さら〳〵と書く事。此うち、捨ぜりふ。閉坊、そろ〳〵切手を取りにかゝり、袱紗を明けて二枚の切手を懷中し、吹替へを尋ねろ思ひ入れ。
エ、コレ、可助め、まだうせ居らぬか。可助々々。
　ト書き物を持ち、呼びながら湯屋の方へ行く。この時閉坊、首に掛けた簞の木札を二つに押割り、手早に袱紗へ包み、元のやうにして置く。大藤內、湯屋の見世より、可助が手を引ッ張つて連れて來り
コレ〳〵おのれ、女湯の見世に、向うをうつとりとしてけつかる。たわけ面め。

可助　なにサ、美しい髱が、べら坊に大勢、裸で居たゆゑ目に正月をさせやした。
大藤　たわけ面め。コレ、この手紙を、金兵衛方へ持つてうせろ。
可助　また使ひにやるのかえ。久しいものだ。
大藤　いぎたなきをせずと、持つてうせろ。
可助　ハテ、よく叱る屋敷だ。
大藤　まだ吐かすか。早く歩け。これはお坊、世話であつた……と云つたところが啞聾。ハヽヽヽ、大笑ひだ。
ト行かうとして
南無三大切の物を忘れた。
ト駈け戻り、紙入れ切手を取つて懐中し
キリ／＼うせ居らぬか。
ト通り神樂になり、可助、提灯を持ち、大藤内、向うへ入る。好き時分より、十六夜、湯屋の門より、包みを抱へ出かゝり居る。閉坊、これに心付かず、切手を出し、行燈の灯にて、よく／＼見て思ひ入れ。十六夜も正しく切手と心得、ちよつと立ちかゝり、よろしく湯屋の内にて
番頭　サア／＼、盗人があるぞ／＼。

トこの聲に兩人、思ひ入れあつて、閉坊は行燈の灯を吹き消す。唄になり、十六夜、ギックリ思ひ入れあつて、向うへ、閉坊は下座へ入る。湯屋の内、バタ／＼して、湯入りの女房、捨ぜりふにて出る。後より、岩瀬、おすゑ、丸裸にて、白き湯具ばかりにて出る。
仕出　オヤ／＼、女湯も油斷がならぬね。
同　左やうサ、わつちやアこの間、新らしい草履下駄を穿かれやした。
同　わたしも風呂の中で、釵を拔かれた。とんだ物騷だ。
すゑ　女湯に湯屋泥坊とは、太い女もあるものだ。御新造樣、私しは寒くて水洟が出ます。
岩瀬　わが身ばかりか、わしも齒の根が合はぬわいの。コレ、番頭、どうぢや、着る物は見えぬか。姫御前をいつまで裸で置くのぢやぞいやい／＼。
すゑ　番頭さん、早くしてくんなさい。ヤレ／＼、ア、嚏。
ト顫うて居る。番頭、前垂れに包みし物を抱へ、水汲みの男二人付いて、氣の毒さうに出て來り
番頭　これはハヤ、申し譯もない儀でござりまする。あなた樣の包みは見えませぬが、この包みが替りでござりま

す。これを召してお歸りなされて下さりませ。
ト包みを出す。
岩瀨　なんぢや、替りの包みはそれぢや。替りでもなんでも早う着ねば、女子の裸參りではあるまいし、此まゝ屋敷へ歸られやうか。サア〳〵、替りを出しや〳〵。
番頭　ハイ〳〵、これでござりまする。
ト包みを開く。內より、木綿田舍模樣の古き振り袖、布子と赤合羽出る。
ハイ〳〵、替りは木綿の振り袖に、赤合羽でござりまする。これを召して、お歸りなされて下さりませ。
ト出す。岩瀨、膽を潰し
岩瀨　なんぢや。替りは振り袖赤合羽ぢや。コリヤヤイ番頭、よう積つても見い。此やうな物を着て、どうしてお屋敷の御門が通られるものぢや。替りになりさうな物を出しや〳〵。アタ阿房らしい。
すゑ　左樣でござりまする。御新造樣も裸、一期奉公のわたしも、僅かな給金で正月早々裸になるとは、女の南瓜ぢやあるまいし、南瓜で奉公がなるものか。替りを出さんせ〳〵。
岩瀨　替りを出しや〳〵。エヽ、ほんに、あんまり呆れて水洟が出るわいなう。アヽ、嚔。
番頭　モシ〳〵、御尤もでござりまするが、湯屋泥坊に遇うた度每に、替りを出さうものなら、片見世で古着屋を法樂に致さねばなりませぬ。それが嫌さに失せ物存ぜずの書付けを、筆太に書いて貼つて置くぢやござりませぬか。
岩瀨　そんなら替りは出さぬか。アヽ、替り果てたる姿ぢやなア。
すゑ　モシ、御新造樣、替りが出ずば、なんでも取らぬは損でござりまする。それなりと召してお歸りなされませ私しも赤合羽でも着て參りませう。
岩瀨　成る程、法度書の通りなら、せう事がない。この振り袖でも着て行かうわいの。
番頭　サア〳〵、召しませ〳〵。
ト岩瀨、振り袖を着て、三尺帶にて結ぶ。すゑ、赤合羽を着て、弓張りを灯し持ち
すゑ　オヤ〳〵、御新造樣、大分お若くおなりなされましたなア。
岩瀨　ほんに、久し振りで振り袖を着たわいの。頭は年增形は振り袖、泣き聲桐島に似たり。

すゑ　何を仰しやります。
番頭　時に、此まゝでは置かれぬ。後日の爲ぢや。女盜人を詮議しようぢやあるまいか。
若衆　それがようござります。
番頭　なんでも見馴れぬ若い女めが來たが、彼奴が物臭いわいら一緒に尋ねてくれろ。
若衆　合點でござります。
岩瀨　わしは此まゝこの形で、屋敷へ歸らう。すゑ、提灯とぼしや。
すゑ　畏まりました。
番頭　左樣なら、お寒いに風召さぬうち、お靜かにおひろひなされませ。
岩瀨　アヽコレ、初春早々湯屋泥坊に逢うて、裸になつて歸るとは、アヽ、斯らもあらうか。
番頭　なんと〳〵。
岩瀨　初湯から女は裸百貫の、形に木綿の振り袖ぞ着る。
番頭　何を仰しやります。
岩瀨　提灯立てい。
　ト通り神樂になり、すゑ、先に赤合羽の形にて、弓張りを灯し、岩瀨、振り袖の形、番頭、男ども、ワヤワヤ云うて、向うへ入る。よき時分より、十內、出かゝり居て、あたりを窺ひ、小石を取つて左右へ礫を打つ時の鐘になり、兩方の小蔭より、捕り手二人、頰かむり菰を着て、窺ひ出て、三人こぞり寄り
捕一　宇佐美さま、啞聾のあの閉坊。
捕二　盜人に違ひごんせぬ。わしらが非人と態を替へ
捕二　付け廻して見極めて置きました。
十內　この十內も讀賣りと樣を替へ、頑張つて置いた。爰へ來たなら油斷するな。
兩人　合點でごんす。
　ト下座の方を見て呀く。時の鐘、通り神樂にて、閉坊ウソ〳〵出て來り、切手をちよつと出し、思ひ入れあつて行かうとする。捕り手兩人、兩方より、引ッ挾んで
兩人　閉坊、動くな。
　トかゝる。閉坊、ヂロリと見やり、行かうとする。
兩人　待ちやアがれ。
　トかゝる。物云はずに蹴り退ける。
十內　手向ひひろがば、ふん縛れ。
兩人　合點だ。盜人め。

初演の絵番附

ト かゝる。通り神樂になり、閉坊、物云はずに三人を蹴り退けつゝ、一散に下座へ驅けて入る。三人、後を追うて入る。矢張り通り神樂。向うより、番頭、包みを持ちたる十六夜を引摺つて出る。後より、湯汲み男ワヤ〳〵と付いて出て來り、直ぐに本舞臺へ來る。この時、下座より、瑞德寺、忠八、捨ぜりふにて出る。

番頭　コレ〳〵姐え、今も云ふ通りだ、こなさんの顏を知らぬから、詮議せねばならぬ。その包みの內を明けて見せさつせい〳〵。

十六　コレ、滅多な事云ひなさんすな。わしやそんな怪しい者ぢやござんせぬぞ。滅相な事云はしやんして、後で難儀しなさんすなえ。

番頭　サ、貴樣は怪しくはあるまいが、わしが怪しいと思ふから、詮議せにやアならぬ。誰れだと思ふ、丁子湯の番頭、目ばかり庄八だよ。氣の利かないおびんずるを見るやうに、高い所へ上がつて居るばかりが役ではないよ、近年は美しい顏で、板の間働らきがとんだ流行りよ。四も五も要らない。包みを見せろ〳〵。

十六　イエ〳〵、何も怪しい事はござんせぬ。こりやわたしが浴衣でござんすわいなア。

番頭　ハテ、浴衣なら返す分の事だワ。

忠八　待たつしやい〳〵。こりやア女の湯屋泥坊か。和尚さん、わしらが尋ねる越さずの女ぢやアねえかの。

瑞德　よく面を見るがいゝ。

ト 立ちかゝり見て

イヤ、ア、まだ年はゆかぬやうぢやが、さて美しい女ぢやワ。

忠八　なんだか近年は、美しい奴に油斷がならぬの。

番頭　コレサ、男ども、包みを詮議しろ〳〵。

若衆　合點だ〳〵。

ト 十六夜に立ちかゝつて、あちこち引ッ張る拍子に、懷中より、釵、提げ物、首に掛けたる守り袋の紐切れて落ちる。皆々見付け

皆々　ソリヤ、大分出たワ。

ト 云はれ、十六夜、落ちたる物の上へ坐り、見せぬ思ひ入れ。

番頭　さてこそ釵に提げ物まで、持つて居るは、なんでも怪しい女めだ。見せやアがれ。

ト 立ちかゝる。十六夜、縋つて

十六　イエ〳〵、こりやわたしが櫛や釵に違ひござんせぬ

必らず粗相云はしやんすな〳〵。
番頭　イヤ〳〵、なんでも怪しい女だ。これ程なんで持つて歩かう。こりやマアなんだ。
ト落ちたる守り袋を取つて明けにかゝる。十六夜、見せまいとする。番頭、男ども、十六夜を引きつける。番頭、その間に內を見て、書き物と紅葉に鹿の蒔繪のある、木櫛の片割れを出し
こりやアなんだ。紅葉に鹿の蒔繪のある、木櫛の折れも何にするとて盜んでうせた。
十六　ア、コレ、滅相な。そりやわたしが大切の品。
番頭　おきやアがれ。折れた木櫛がなんの大切。マア、その包みを。
ト取りにかゝる。十六夜、見せまいとする。
ソレ、引ツ剝げ。
瑞德　これサ、料簡さつしやい。
トこの中へ入り、十六夜を圍うて留める。番頭、これに構はす、十六夜が包みを見ようとする。見せまいとする。引き合うて、捨ぜりふの立廻り。通り神樂になる。向うより、合ひ印付けたる箱提灯二張り、中間持つて出る。これに打あげの臺輪駕籠を擔ぎ、段平、絹羽織、大小、股立ちの若黨。草履持ち、挾み箱持ち付いて出て來り、直ぐに本舞臺へ來る。舞臺の大勢、ごつちやになつて突り、番頭、思はずこけかゝり、提灯を一張り破る。男ども、十六夜を提へ居る。段平、番頭を引提へて
段平　慮外者め〳〵。
番頭　ハイ〳〵、御免なされませ〳〵。
段平　コリヤヤイ、御免なされで濟むと思ふか。御主人のお道具を微塵に致し、供先を割つて濟むと思ふか。野太い奴の。殊に見れば、若い女を手籠めの樣子。コリヤ、おのれらは惡てんがうを致すのか。但し盜人か。うぬら一人も、免さぬぞ〳〵。
番頭　ア、、モシ〳〵、左樣な者ぢやござりませぬ。私しはこの洗湯の番頭でござりまする。即ちこの女が盜人でござりまする。
十六　ア、コレ、滅相な。わたしや何も盜んだ覺えはござりませぬぞ。
番頭　盜まぬ者が、この櫛、釵は、どうして持つて居た持つて居た。
十六　サア、そりやわたしが買うて來たのぢやわいな。

番頭　嘘を吐く奴だ。盗んだであらう〳〵。
　トまくしかけて云ふ。
段平　ヤイ〳〵、おのれらが申す事ばかり吐かして、お道具を損じさせたる申し譯も仕らぬは、不屆きな奴の。コリヤヤイ、どなたぢやと思ふ。祐經さまの御家老、近江の小藤太成家さまのお提灯。踏み碎いて濟まうと思ふか。玆な素町人めが。
　トきつときめる。此うち、十六夜、思ひ入れあつて
十六　ア、モシ、お侍ひ様、なんと御意なされまする。このお乘り物の内は、工藤の御家中、小藤太さまでござりまするとな。
段平　如何にも、小藤太さまぢやが、それ聞いて女め、何にする。コリヤヤイ、町人の、おのれらも盗人と申すが、この女がいよ〳〵盗人か、どうぢや。
番頭　左樣でござりまする。湯屋へ參つて、小袖の包みを取替へ歸りましたゆゑ、追ひ駈けて捉まへました。即ち證據と申まするは、この女が懐から、夥しう櫛、釵が落ちました。ハイ〳〵、これが證據でござりまする。
　ト櫛、釵、木櫛の折れまで一つにして持つて行く。段平、取つて

段平　成る程、そんならこの女、小盗み致すに違ひない。さうなうては、これ程に持つても居るまい……ア、なんだ。コレ〳〵、折れた木櫛まであるな。
　ト提灯の灯にて、見る事あつて
なんだ。木櫛の折れたに、蒔繪の模樣。なんだ。ア、紅葉に鹿の木櫛の折れ。
　トうか〳〵と云ふ。この時、乘り物の戸をサッと明け小藤太、小紋麻裃にて、乘つて居て、模樣をフッと聞き咎め、顏を出して
小藤　段平、その木櫛、これへ持て。
段平　ハツ。
　ト差出す。小藤太、取上げる。中間、提灯を出す。十六夜、駕籠の内へ目を付ける。小藤太、思ひ入れあつて
小藤　この木櫛の片割れ、所持した奴は何者ぢや。
段平　ヘイ、即ちこの女でござりまする。
小藤　近う呼べ。
段平　ハツ、サア女、駕籠の側へ、近う參れ〳〵。
十六　すりや、私しに。
段平　爰へうせう。

十六　ハイ。
　ト思ひ入れ。合ひ方になり、十六夜、包みを取つたる儘、ツカ〳〵と駕籠の側へ寄つて、小藤太を恨めし氣に見詰める。小藤太も思ひ入れあつて
小藤　コリヤ女、この片割れの木櫛は、其方が所持の櫛か。但し折れし片しが外にあるか。片割ればかりを、どうして其方が持つて居る。
十六　ハイ、變つた事の只今のお尋ね。承りますれば、左衛門さまの御家老職と、このお方の今のお詞。いよ〳〵あなたが近江の小藤太、成家さまでござりまするか。
　ト顏を見詰める。小藤太もこなしあつて
小藤　ハテ、異な事に目に角立てる女が樣子。成る程、身共は近江の小藤太成家ぢやが、それがどうした。
十六　さてはあなたが聞き及びましたる、近江の小藤太成家さまでござりましたか。アノ、あなた樣が。
　ト思はず駕籠の側へツカ〳〵と摺り寄る。
小藤　樣子は何か知らねども、怒りを含む女が面體。木櫛の片割れ。
　ト思ひ入れあつて
ヤイ町人ども、わいら、この女に最早係り合ひはあるまいな。
番頭　アイヤ、係り合ひがござりまする。改めませうと云ふ包みを見せませぬ女、なんと私しどもへ、お渡しなされて下さりませ。
小藤　まだ詮議いたすか。ア、尤も。よいワ。女を連れ參るならば、それより前に身が合ひ印の提灯、踏み碎いた申し譯いたして參れ。
番頭　エ、。
小藤　憎くい奴等の。武士の道具を踏み碎き、其まゝに差措かうか。段平、奴等を縛れ。
段平　畏まりました。腕廻せ。うぬ。
　ト立ちかゝる。
番頭　ア、御免なされませ〳〵。
仕出　私しどもは仲裁人でござります。
皆々　エ、御免なされませ〳〵。
　ト捨ぜりふにて、逃げて入る。
小藤　ハテ、憎くい奴等の。
　ト思ひ入れある。
コリヤ女、其方は何者の娘で、名は何と申す。町人か、但し侍ひの娘か。

十六　ハイ、侍ひの娘と申すも、餘り烏滸がましうはござりまするが、成る程私しは浪人の娘、只今にては小祿をお取りなされまする、武家の屋敷に御奉公、賤しいお末の、ハイ、女子でござりまする。
小藤　すりや、浪人の娘にて、小祿の屋敷に奉公するとか、アノ小祿の屋敷に。
　ト思ひ入れあつて、落ちてある書き物を見付け
その書き物、これへ持て。
段平　ハツ。
　ト取らうとする。十六夜、手早く取つて
十六　アヽ、こりや私しが守の中の大切の書き物。御覽なさるゝには及びますまい。
小藤　見せぬはいよ／＼。
段平　怪しい女め。
　トきつと云ふ。
十六　アヽ、イヤ、お疑ひとござりますれば、別して包みませうやうにはござりませぬ。こりや私しが產れし月日。
小藤　ドレ、その書き物を。
十六　ハイ。
　ト渡す。小藤太、よく／＼見て、思ひ入れあり

小藤　安元二年三月末の八日、戌の日誕生の娘おいぬ。父は江州高宮の產……木櫛の片割れ
　ト十六夜へ目を付け
女、して其方が兩親は。
十六　ハイ、生別れ致しました。母親には死別れ、それもやう／＼當歲の。
　トほろりとする。
小藤　母が生國、在所はいづく。
十六　ハテ、詳しうお尋ねなされまする小藤太さま。あなた樣の立派な御樣子、お目見得いたしまする程、御主人方の御無念が、思ひやられて
小藤　ヤヽ、なんと申す、
十六　サ、只今お尋ねなされたる
小藤　われが素性を吐かさぬか。
十六　ハイ、お尋ねにあづかり、身元のあらまし、申し上げるも淚の種。母の病死も御主人の、最期も同じ安元二年。
小藤　なんと。
　ト合ひ方。
十六　サ、思ひぞ伊豆の下田の宿、裏家住居の微かな世渡

り。乳呑みのわたしを抱へ、針を元手の賃仕事。それも
離別の夫への、女の操と義理を立て、暮らせどそれに事
替り、悪に根強き父さんゆゑ、科もなき母へ暇の状。尤
もわたしは双兒の兄弟、父さんは男子を連れ、母さんは
わたしを連れ、傳手を求めて町家の住居。隣同士にこれ
も又、十歳あまりの娘御を、養育の御浪人、小柴兵部と
云ふお方、母さんの末期の際、くれ／＼もわたしをお頼
みなされ、悪人ながら實の親、この子が成人いたした時
名乘り逢ふべき印にと、折れし木櫛を引分けて、所持し
て居るが娘へ筐。夫の恥と家名も隠し、お果てなされし
その日より、小柴の家に育てられ、今のこの身は

小藤　何れの屋敷に奉公いたす。

十六　サ、そのお屋敷は。

小藤　云はれぬか。

十六　サ、申せばあなたと敵同士。

小藤　何がどうした。

十六　サ、堅きお家に御奉公、どうも主人のそのお名は。

小藤　云はれまい／＼。いま町人が申した詞、小盗みひろ
ぐ女が生立ち、正しく曾我の。

十六　アヽ、全く以て。

ト思ひ入れ。

小藤　年度の書き物、片割れ櫛、あつて益なき片割れも、
今は筐と。

ト思ひ入れあつて

丁度、似寄りのこの片し、繼ぎ合せたら

ト投げてやる。十六夜、合點ゆかず取上げる。片割れ
の木櫛二つあるゆゑ、合せて見て、悄りして

十六　木櫛の模様も紅葉に鹿、しつくり合ひし、片しを所
持せし小藤太さま。もしやあなたが

ト駕籠の側へ駈け寄る。

小藤　乘り物やれ。

ト戸をシャンとさす。唄になり、供廻り付いて、下座
へ入る。十六夜、木櫛を持つて、後を見送り、思ひ入
れ。合ひ方。

十六　思ひも依らぬ揃ひし木櫛。あの小藤太が、もしやは
實の。

トこなしあつて、ホイと思ひ入れ。唄になり、立ち身
の儘、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、正面、九尺に寄合ひ辻番、突棒、

剌叉、六尺棒を飾り、臺行燈、玉椿の垣、用水桶、大きなる椎の木茂り、うしろ忍び返し打つたる板塀すべて、小磯切通し椎の木小屋。爰に、鬼王、山形木瓜の紋付けたる花色木綿のやつし、一本差しにて、板衝立の蔭に瓦燈を灯し、草鞋を作り居る見得。彈き流しの唄にて、道具とまる。

ト直ぐに、向うより、小五郎兵衛、ぱつち、羽織、やつし町人の形にて、妙義のお札を頭へ押し、襟巻頭巾にて、出て來る。後より、月小夜、袖頭巾、垣に朝顔の伊達紋付いたる屋敷者の形にて、小提灯をともし出て來る。此うち、唄にかすめたる通り神樂。小五郎兵衛、腰提げを落したる思ひ入れにて、後へ取つて返し、月小夜と摺れ違うて、顔見合す。月小夜は舞臺の方へ行く。

小五　モシ〳〵、お女中さん、ちつと提灯の灯をお貸しなされませ。

月小　ハイ、お易い御用でござります。サア、お遣ひなされませ。

ト提灯を渡す。

小五　これは有り難うござります。いま爰へ腰提げを落しましたが、暗うて見えませぬ。

月小　それは御難儀。お靜かにお尋ねなされませ。

小五　ハイ〳〵、忝なうござります。

ト捨ぜりふにて、あちこち尋ねる思ひ入れあつて、花道好き所にて、腰提げを拾ひ

ヤレ〳〵、爰に居をつた。危ない事。すんでに小粒で二兩餘り、厄落しにしやうとした。これと云ふも、お前のお庇。ハイ、忝なうござります。

ト提灯を返しながら、月小夜が顔を見る。思ひ入れ。

月小　それはマア、早速御用に立つて、お嬉しう存じまするわいな。

小五　イヤモウ、私しこそお庇で、大きに助かりました。サ、御一緒に參じませう。

ト通り神樂にて本舞臺へ來り

時に見ますれば、この暗いのに、若い女中の一人歩き。モシ、物騒でござりまするぞえ。なぜマア御亭主でも、連れ立つてはござりませぬぞ。

月小　ハイ、私しも夜に入つて、暗がりを歩きまするも、怖う思ひまするが、何を申すも夫と云うてはなし、是非なう一人歩きまするわいな。

小五　エヽ、そんなら御亭主はござらぬか。してマア、どこへお出でなされました。藤善寺の妙義詣りかな。

月小　イヽエイナア、さう云ふ機嫌ぢやござりませぬ。夫は惡性者ゆゑ、夫婦別れ致しまして、一人身でも居られませぬゆゑ、平塚の肝煎りへ、奉公口尋ねに參りました歸りでござりまする。

小五　アヽ、そんならお前は一人身か。わしも梅澤で小五郎兵衞と云ふ町人、相應に暮らしては居ますれど、今以て一人身、小袖の綻び縫ひ仕事、仕手がなうてホッとします。どうぞ針仕事してくれる女中が欲しうて、この間から尋ねて居ましたが、ア、幸ひな事ぢやが、よもやわしらがやうな、輕い町家へは來ては下さるまいし、アヽ相應な事はないものでござりまするて。

月小　イエモシ、私しは町家でも、お屋敷でも、置いてさへ下さんすなら、それに違背はござんせぬが、何を云うても惡性な夫、此方から別るゝ事ぢやに依つて、わたしが奉公に出て、手切れの金の少しもやりさへすりや、そりやモウ、どこへでも參られまするわいな。

小五　そりやモウ、此方はどうなりと相談は出來まするが手切れ金と云うて、マア、如何程要るのぢやの。

月小　ハイ、金子の十兩もあれば、直に手切れになりますわいなア。

小五　アヽ、アノ十兩で、御亭主の手が切れまするか。そりや何より心易い事でごんす。十兩位は、わしが出しませう。

月小　エヽ、アノ、お前さんが抱へて下さんすかえ。

小五　ハテ、獨り身なわし、親兄弟とてもなし、お前の仕樣仕品で、ツイ轉び合ひの女房……サ、それも辛抱を見た上の事サ。

月小　そりやモウ、お嬉しうござんすわいな。

小五　なにサお前、幸ひ連れ立つて話しながら行きやせうか。

月小　左樣いたしませうわいなア。

　トこの時、雨車の音する。

小五　アヽ、雨がぽろついて來たわえ。雨具はなし、アヽどうぞ雨宿りを。

　ト辻番を見て

アヽ、辻番があるわえ。あそこを借りて、雨やみをして行きやせう。

　ト辻番へかゝり

モシ、番屋のお方、雨がやめて行きたうございます。ちつと爰をお貸しなされて下さりませ。
鬼王　ハイ、易い事ぢや。爰へ入つて、やめてござりませござりませ。
小五　それは有り難うございますが、まだ外に道連れがござりまするて。
鬼王　お連れがあれば二人ながら、サヽ、入つてやめさつしやりませ。
ト外へ出て、月小夜を見て、ヤアと思ひ入れ。月小夜咳拂ひして紛らす。鬼王、呑み込み、小五郎兵衞、氣付かず
小五　ハイ、でも狹うてお邪魔でござりませう。モシ、番のお方え。連れは女中でござりますが、帶でも締め直して行きたいと云ひまするが、其うちお前、モシ、酒屋があらば、一杯上がつてござりませぬか。
ト腰提げより二朱一つ出し、鬼王にやる。鬼王、こなしあつて
鬼王　これは忝うござります。酒屋はツイ近所にありまするが、わしはマア一遍廻つて來ねばなりませぬ。後を頼みまする。

小五　心得ました。留主はわしらがしまする程に、隨分ゆつくりと廻つてござりませ。
鬼王　ハイ、頼みましたぞ。この辻番に炭團がいけてあります。ゆつくりとあたらしやりませ。女中さん、ゆつくりおあたりなされませ。
ト月小夜の方へ少し氣の揉める思ひ入れあつて、箱ぶらを提げ、六尺棒を突き
火の廻り〳〵。
ト合ひ方になり、花道の方へ行く。好き所に立ちどまり居る。月小夜、小五郎兵衞、番屋の内へ入り、小五郎兵衞、辻番火鉢を抱へて
小五　さて今夜は冷える晩だね。サア〳〵、爰へ來て辻番にでも、あたりなさい〳〵。
月小　ハイ、なんぢやら、寒い事でござんすなァ。
ト寄り添ふ。小五郎兵衞、思ひ入れあつて
小五　時にお前、わしが所へ來て、奉公人やら何やらになつてくれる心なら、今お前の云はしつた、手切れの十兩……マア、奉公人なら取替へる心で、三兩も出さうが、取つて置きなさいな。
ト紙入れの金三兩握らせる。月小夜、こなしあつて

月小　こりや忝なうござりまする。差付けがましい事云う
て、お前樣につもらるゝところも。
小五　なにサ、大事ねえの。世渡りは樣々なものサ……サ
サ、此方へ寄つて、あたりねえな〳〵。
ト月小夜が手を取つて、横に寢かさうとする。
月小　ア、モシ、滅相な、惡い事なされまして、ホヽヽヽ
ト思ひ入れして紛らす。よき時分より、鬼王、立歸つ
て來り、外に立つて居る。
小五　ナニ、お前、萬更でもあるまいぞえ。
ト横に寢かさうとする。月小夜、捨ぜりふにて行儀に
居直る。鬼王、棒をひどく突いて
鬼王　ハイ、廻つて歸りました〳〵。
トこの聲に兩人思ひ入れ。小五郎兵衛、恟りして
小五　ア、、もう歸らしやつたか。
鬼王　ハイ、只今戻りました。サア、ちとそこをお頼み申
します。
小五　これはハヤ、餘りお早いお歸りでござるな。寒いに
もう廻る所はござらぬか。コレ、南一はずむ。蕎麥でも
誂らへて來なさい。
ト二朱一つ出す。

鬼王　そんなら、もう一遍廻つて來ませう。モシ、女中さ
ん、必らず油斷さつしやりますな。隨分帶を堅く締めて
身の用心……イヤ、火の用心〳〵。
トまた棒を突き、花道の方へ行き、立ちどまつて居る
小五　コレお前、手切れの事は、三兩では不足であらうの。
月小　なんのマア、不足な事はござんせねど、ならう事な
ら十兩の都合してな。
小五　よしサ。ソレ、もう三兩取つて置きねえ。
トまた三兩握らせ、直ぐにその手を取つて
主も野暮ぢやアあるめえの。
ト横に寢さそうとする。
十小　ア、モシ。
ト思ひ入れ。鬼王、戻り來り
鬼王　ハイ、歸りました。
ト小五郎兵衛が前へ棒を突き落す。恟りして
小五　もう歸らしやつたか。
鬼王　ハイ、廻つて來ました。
小五　コレ、もう一遍廻られまいか。
鬼王　この寒いのに、もう一遍か。
小五　ハイ、大儀ながら、もう一遍。ソレ、南鐐一片南鐐

一片。
　ト また二朱一つソツと渡す。
鬼王　こりや又南鐐一片か。
　ト思ひ入れあつて
火の廻り〳〵。
　ト花道の方へ行きかける。小五郎兵衛、急き込んで、
　無理に月小夜を寝かさうとする。
月小　ア、モシ、急な事ばつかり。
　ト思ひ入れ。小五郎兵衛、急き込んで抱きつかうとす
　る。鬼王、門にて、棒をガタ〳〵突き立て
鬼王　ハイ、戻りました。
小五　エ、また戻らしやつたか。
鬼王　もう一遍廻らうかな。
小五　もう一遍。ソレ、もう一片。
　トまた二朱出す。鬼王、取つて
鬼王　火の廻り〳〵。
　ト花道の方へ行く。この時、東の口より、長助、股引
　がけにて、蛇の目の傘と足袋を持ち、梅澤屋と書きた
　る弓張りの消えたを持ち、息せき切つて来り、辻番を
　見て

長助　ハイ、火を一つお貸しなされませ。提灯が消えまし
　た。
　ト小五郎兵衛、鬼王と思ひ
小五　又お歸りか。あんまりお早いの。もう一遍廻らつし
　やい。ソレ、もう一片〳〵。
　トまた二朱出して長助にやる。長助、膳を潰し
長助　あなたは旦那ではござりませぬか。モシ、よい所で
　お目にかゝりました。お迎ひに参りました。モシ、この
　南鐐は何を買ひまするな。
小五　もう一遍廻つてござれよ。
長助　どこを廻りまするな。
小五　どこでも。
長助　何を買ひまするな。
小五　廻つてござれよ。
　ト急き込んで居る。鬼王、戻りかゝり、これを見て
鬼王　ハイ、歸りました。
小五　また歸らしつたか。
長助　旦那、まだお歸りなされませぬか。
小五　誰れだ。てまへは長助ぢやないか。
長助　左様でござります。

小五　何しに來た。
長助　お迎ひに參りました。
小五　誰れが來いと云うた。
長助　ハイ、降りさうでござりますから。
小五　なぜ降りさうだ。
長助　なぜでござりまするか。
小五　何が降るよ。
長助　雨でござりませう。
小五　エヽ、何を馬鹿々々しい。よい年をして、迎ひに來
ると云ふ事があるものか。途方もない。
ト捨ぜりふの小言。月小夜へ當て云ふ。鬼王、棒を突
き立て
鬼王　もう一遍廻らうかな。もう一遍廻らうかな〳〵。
小五　イエ〳〵、もう廻つてもらはずともようござる。馬
鹿々々しい。なんだか夢を見たやうな目に遭うた。コレ
女中、今夜は邪魔があるゆゑ、此まゝでわしは歸るかな、
明日の晩は、こなたの所へ尋ねて行く。わしが腹の內も
打明けて、とつくりともう一遍
鬼王　廻つて來ようかな。
ト棒を突く。

小五　イヤモウ、廻るで懲り果てた。コレ女中、お前の內
はアノ高津の
月小　アイ、裏通り。
小五　して、お名は。
月小　小夜とお尋ねなされませ。
小五　小夜とな。承知しました。
鬼王　モシ、もう一遍廻らうかね。
小五　イヤモウ、寒いに大きに御苦勞。お役所を忝なうご
ざります。
鬼王　お入用なら、いつ何時でも廻りに出まする。
小五　その廻りで懲り果てました。
月小　左樣ならば、また明日の夜は必らず
小五　尋ねまするぞよ。
ト唄になり、長助、弓張りを灯し、先へ立ち、小五郎
兵衛、心殘して東の口へ入る。あと合ひ方。月小夜、
鬼王、顏見合せ、思ひ入れあつて
月小　こちの人、鬼王どの。
鬼王　女房月小夜、お主の爲と此やうに
月小　心に思はぬ仇つきも
鬼王　現在夫が見る前で

月小　男を蕩すいたづらを
鬼王　他人の目からは美人局
月小　悪性女と見やうが儘
鬼王　耳を揃へて百兩の
月小　金拵らへて質入れの
鬼王　兵庫鎖の一腰を
月小　首尾よう曾我へ請け戻す
鬼王　金たんぞくの其うちは
月小　往來の人へ大それた、科は船にも車にも
鬼王　呵責の鬼王身を責める。これを思へば世の中に
月小　四百四病の病より
鬼王　貧ほど辛い
ト顏見合せ、ホロリとして
兩人　物は無いなア。
ト思ひ入れ。向うバタ／＼と人音する。兩人、こなし
あつて
鬼王　ドリヤ、夜鍋の仕事にかゝらうか。
月小　往來のお方を待たうかいな。
ト通り神樂になり、月小夜、思ひ入れあつて、下座へ
入る。鬼王、番屋へ入り、草鞋を拵らへかける。向う
より、閉坊、一散に出て來る。後より、以前の三人、
追ひ駈け出て、花道にて、組みつくを見事に投げつけ
投げつけ、本舞臺へ來り、三人を相手に立廻り
十内　お尋ね者の盗人め、繩を打つ。動きやアがるな。
捕手　番人あらば、加勢を頼む／＼。
ト呼び立てる。これにて、鬼王、棒を取つて、窺ひ來
て
鬼王　口論か盗人か。何事ぢや／＼。
三人　盗人だ。加勢を頼む／＼。
トこれより、鬼王、棒にて閉坊に向ふ。閉坊、逃げん
とする。立廻り、見事にあつて、トヾ棒にて閉坊が足
を殴り、こけかゝるを手早に早繩に縛り上げる。
捕手　縛つたか／＼、さて／＼酷い坊主めだ。
十内　鎌倉を徘徊なす盗人閉坊、召捕つたるは拔群の手柄
繩付きを受取らう。
ト立ちかゝる。鬼王、隔てゝ
鬼王　イヤ、見たところが町人體の男。殘り二人は非人ど
も。わいらが召捕る役人か。
十内　不審は尤も。我れ／＼は非常を糺す隱し目付け、宇
佐美十内と云ふ者。繩付きは即ち祐經屋敷へ引立て行く

ワ。
鬼王　すりや、あなた方は忍び窺ふお役人樣方とな。それに相違もござるまいが、この番屋は太郎祐信、安西粕谷の固めの辻。しかと引取りの役人中、お立會ひなきうちは、此まゝには渡されませぬて。
十內　成る程、尤も。
捕一　左樣ござらば役所へ歸り
捕二　後方までに受取りに參らう。
十內　何れもお來やれ。
ト通り神樂になり、三人は向うへ一散に入る。鬼王、閑坊を引立て
鬼王　いらざる事に、とんだ者を預かつた。サア盜人め、片隅へうせろ。
ト閑坊、番屋の小隅へ入る。鬼王、捨ぜりふにて、繩を柱へ縛り付け居る。通り神樂にて、向うより、金兵衞、百足屋と云ふ小提灯を灯し、スタ〳〵と出て來る。思ひ入れあつて
金兵　小磯の切通し、椎の木番屋は……オヽ、あそこぢやあこぢや。
ト本舞臺へ來り、番屋を窺ひ

モシ、物が問ひたうござります。この辻番に、新左衞門どのが居られるかな。
鬼王　ハイ、新左衞門はわしぢやが、どなたでござるな。
ト顏を見て
ヤ、百足屋の金兵衞どのか。
金兵　オヽ、新左衞門どの、わざ〳〵尋ねて來ました。
鬼王　マア〳〵、爰へ入らつしやりませ。
金兵　許さつしやりませ。寒い晩ぢや。ズッと奧へ通りませうか。
ト奧の方へ行かうとする。
鬼王　アヽ、奧には盜人が居ます。
金兵　エヽ、奧には盜人が居る。ハテ、とんだ辻番だの。
鬼王　これはしたり、たつた今、盜人を縛つて預かりました。
金兵　ハテ、そんな事でござらう……時に鬼王どの、先達てから催促いたす、彼の兵庫鎖の一腰、百兩にわしが方へ預かつては置いたれど、月は切れても今日が日まで、廿兩の事はさて置き、利金壹歩も寄越さぬは、それを浮か浮かと待つては居られぬ。殊に質屋でもないわしが、顏づくで貸した金、ひよつと流されて損する時は、世間

の手前、慾心にかゝつたやうで外聞が悪い。そこで賣り先を尋ねたところ、梶原さまが千兩に買うてやらうとの事。それも明日の晝までと、相談極めて斷りに來ました。今夜中に沙汰がないと、賣つてしまひます。さう思はつしやりませ〳〵。

鬼王　これは〳〵、金兵衞どの、段々日限りまで延引のところ、御尤もでござるが、知らるゝ通り、曾我の太郎祐信さまの、家重代の太刀。この度諸大名の系圖、家の寶、お改めのこの時節、十郎さまが揚げ代に差支へ、貴殿方へ人知れず預け物。殊に滿江さまは義理ある仲ゆゑ、殊の外の御立腹。家の重寶持ち來らぬは不屆きとあつて、祐信さまは畠山のお屋敷へお預け。それゆゑ鬼王夫婦兄弟が、金の工面の眞最中。是非々々請けまする。キッと請けまする程に、どうぞ外へ賣る事は、金兵衞どの、もう二三日待つて。

金兵　コレ〳〵、鬼王どの、お詞の中だが、その二三日に懲り果てた。去年から二三日々々々と、地藏の顔も三年越し、待つてやつたで顔は立つ。モウ〳〵、今夜中に百兩持つて來ねば、賣つてしまふと云ふところを、明日の朝まで待つてやらう。間違へば、直ぐに梶原さまへ賣つてしまふ。鬼王どの、キッと斷わりましたぞよ。

鬼王　ハテ、さうではござらうが、どうぞ二三日。

金兵　イエ〳〵、明日の朝が晝までもなりませぬ。

鬼王　サ、尤もでござりまするが、そこをどうぞ聞分けさしつて。

金兵　なりませぬ〳〵、待たれませぬ。百兩持つて明日の朝。それが間違へば賣つてしまふ。新左衞門どの、キッと斷わりましたぞよ。

ト留める鬼王を振り切り〳〵、通り神樂になり、足早に向うへ入る。鬼王、捨ぜりふにて、いろ〳〵詫び言あつて、聞入れぬゆゑ、金兵衞が後を本意な氣に見やり居る。最前より、樣子を聞いたる閑坊、繩付きの儘そろ〳〵忍び出で、向うの方へ逃げようとする。鬼王、見付けて

鬼王　ドッコイ〳〵。おのれ逃がしてよいものか。かゝる百兩の難儀の上に、預かつた繩付き、取逃がしては難儀の上塗り。サア〳〵、此方へ來居れ〳〵。

ト繩を引ツ張る。閑坊は逃げようとする。逃がすまいとするはずみに、閑坊が首に掛けたる百兩入りの財布懐よりブラリと落ちかゝる。鬼王、フッと見付け

ヤ、こりや金ぢやないか。

閑坊　耳を揃へて小判で百兩。

鬼王　ヤ。

　ト悔りする。

閑坊　おれがくすねた百兩で、おれが命をお侍ひ、賣つて下さい。

鬼王　ヤ、なんと。

閑坊　明日の朝まで百兩の、金がなければ手詰めの難儀。何もかも聞いて居た。おれも此まゝ渡されては、どうで臺座の別れ引き。坊主の首を百兩に、おれが持つたることの金で、賣つてしまやれ。賣つてくりやれ。

　ト顎にて金を敎へ、逃がせ〳〵と思ひ入れ。鬼王、財布を握り、いろ〳〵こなしあつて、財布の紐を引ッ切り、金を手早く懷中する。閑坊、見て

閑坊　金請けたは、逃がす心か。

　ト思ひ入れ。鬼王、手早く繩を解き

鬼王　われが財布の百兩で、侍ひの明りが立てば、コレ、一生この身に恩を着る。

　ト手を合はす。

閑坊　恩に思はゞこの上必らず

鬼王　後引請けた。ちつとも早う。

閑坊　合點だ。

　ト四ッの鐘鳴り、花道へ一散に行く。向うより供に提灯を持たせ、大藤内、醉うたる體にて、出て來る。閑坊、片脇に隱れ、やり過して向うへ駈けて入る。大藤内、本舞臺へ來る。鬼王、安堵の思ひ入れ。

大藤　可助、どうでも雨にならうか。

可助　左樣でござりませう。

大藤　コレ〳〵、そんならわれは、先刻の手紙を、金兵衞に渡し、傘を借りて來ぬか。

可助　旦那は其うち、どうなされます。

大藤　身はこの辻番を借りて、やめて居らう。早く行つて參れ。

可助　畏まりました。ドリヤ、急いで參らうか。

　ト通り神樂になり、四ッの拍子木にて、提灯を持ち、向うへ駈けて入る。大藤内、思ひ入れあつて

大藤　アヽ、もう四ッだな。ハテ、大分隙どつた。ドレ、上下を脫いで參らう。

　ト番屋に向ひ

御無心ながら、これをお貸しなされませ。上下を脫ぎま

す、
鬼王　ハイ、お支度なされませ。
大藤　どうか降りさうになりましたな。
ト捨ぜりふにて上下を脱ぎ、ばつちの形になり、裾を
絡げるとて、懐中より切手を落す。鬼王、見て
鬼王　モシ、あなた、何か落ちましたぞえ。
大藤　ハイ〳〵、これは、なんでござる。切手でござる。
五月の富士野に於て、狩場の通路の切手でござる。しか
も三老の御判の据つた切手。御料の假家までも通用の出
來る切手でござる。
ト醉うたる思ひ入れ。鬼王、切手と聞き、目を付けて
思ひ入れ。
ア、、大分醉ひましたわえ。ハテ、もう可助は歸りさう
なものぢや。
トひよろ〳〵しながら、上下を疊み、大小を差す。鬼
王、ソツと切手を取つて、行燈の灯を吹き消す。大藤
内、恟りして
大藤　コレ〳〵、なぜ灯を消さしつた。ハテ、暗くしたの、
爰に大事の切手を置いた。
ト置いたる所を尋れる思ひ入れ。鬼王、そろ〳〵と逃
げようとする。大藤内、捨ぜりふにて、鬼王に探り當
り
コレ〳〵、こなたは爰に置いた切手を、知らぬか〳〵。
鬼王　イエ〳〵、存じませぬ〳〵。
ト行かうとする。大藤内、探り廻り、切手を持つて居
ろを探り當て
大藤　イヤア、切手を持つて居るな。コレサ、なぜ取つた
取つた。寄越さつしやい〳〵。
ト取らうとする。鬼王、逃げんとする、此うち、時の
鐘、かすめたる通り神樂。向うより、十六夜、以前の
包みを横に脊負ひ、出て來る。はるか後より、閑坊、
窺ひ〳〵付けて出る。下座より、月小夜、窺ひ出る。
大藤内、鬼王を引きつけ
コレ〳〵、貴様は返さぬか〳〵。ア、、こりやア盗人だ
な。アレ、狩場の切手の盗人だ〳〵。
ト喚く。この聲に閑坊、切手の盗人と聞き、懐中の切
手を出し、いろ〳〵隱す思ひ入れ。月小夜、十六夜、
切手と聞き、欲しき思ひ入れ。大藤内に武者振り付き
放さぬゆゑ、鬼王、思ひ入れあつて、是非なく、大藤
内を切り下げる。

切つた／＼。人殺し／＼。
ト喚く。これより。忍び三重になり、皆々思ひ入れ。大藤内、懐中より以前の状を落す事あつて、よろめきながら月小夜にこけかゝり、月小夜が左の袖を捉へ放さぬゆゑ、月小夜、逃げんとして袖切れ、大藤内、持つたる儘苦しみ袖を捨てる。月小夜、袖を切られ、よろよろと十六夜にこけかゝる。この時、十六夜、片割れ木櫛を落す。バッタリこける拍子に密書を拾ふ。閉坊、探り廻り、片袖を拾ふ。鬼王、似せ切手を懐中して大藤内が止めを刺す。この音に閉坊驚ろき、飛び退き窺ふ。月小夜は片割れ櫛を持ち、花道へ、十六夜は密書を持ち、東の歩みへかゝる。鬼王は切手、閉坊は片袖を持ち、大藤内が死骸を兩方より窺ひ寄つて、これを立廻りに遣ふ仕組みよろしくあつて、早めたる九ツの鐘。四人キッと思ひ入れ。この途端一度に拍子、幕
月小夜、十六夜、向うへ入る。知らせに付きシャギリ。

五建目

祐信屋敷の場
小動木繩手の場

役名 ―鬼王新左衛門、同女房、月小夜、同妹、十六夜。曾我の母、満江。彌太夫女房、岩瀬、百足屋金兵衛。宇佐美十内。瑞德寺和尚。肝煎り、忠八。梅澤の小五郎兵衛實ハ伊豆次郎祐兼。曾我の團三郎。箱根の閉坊。

本舞臺、三間の間、上の方、障子屋體、正面唐紙をたて切り、下の方出入りの襖、門口にかまがり松、輪飾りを掛け、出入りあり。寒竹の藪、上の方炬燵の炭櫃。下家より出入りあり、これに木綿蒲團を掛け、満江、老母の拵らへにて炬燵にもたれ、塗り桶にて綿を摘み居る、金兵衛前幕の形にて緞子の袋に入りし刀を持ち、團三郎、挨拶して居る。瑞德寺、忠八前幕の形にて、ワヤ／＼と云うて居る。すべて曾我の太郎祐信の屋敷。通り神樂、鳥追ひ唄にて幕明く。

瑞德　サア／＼、月小夜に逢はう／＼。
團三　これサ、兄嫁に何用か知らぬが、見馴れぬ衆ぢやが、

何も貴樣達に借錢はあるまいし、マア〳〵、靜かに云はつしやりませ。
金兵　これサ、其方の事は後へ廻し、この金兵衞ばかりは昨夜鬼王どのに斷わつて置いた。コレこの兵庫鎖の太刀。今日晝までに百兩渡さねば、梶原さまへ賣つてしまふ約束。モシ、御老母樣、あなたもさう思うてござりませえ。
滿江　これは金兵衞どの、お詞さら〳〵無理とは思ひませぬが、この間から申す通り、その太刀は曾我の重寶、この母は二度添ひと云ひ、義理のある祐信どのに、難儀をかける、惡いは祐成め、揚げ代の代り、お前の方へ百兩の預け物。この度諸大名の重器お改めあるにつき、差上げよと仰せ下さりしかど、今以て持參いたさぬは、底意の知れぬ曾我一家と、今度のお咎め。それゆゑにこそ祐信どのは、重忠さまへお預け。恩を仇たる十郎めも、母が手前云ひ譯なく、二の宮どのゝ屋敷にとの事。鬼王夫婦十六夜とも談合して、是非〳〵取戻さねばならぬその太刀。金兵衞どの、鬼王が戻るまで、マア〳〵待つて居て下さりませ。
團三　左樣でござる。いづれお上へ差上げねばならぬその劍。箱王さまは御老母樣のお氣に違ひ、北條さまのお館へ御忍び。祐成さまも劍の事にて、この間はお屋敷へもお歸りなく、滿江さまの積の種。苦勞いたすは兄貴やわしら。いづれに今日は御挨拶いたす氣でござりませう。
金兵　イヤ、モウ、御挨拶どころではござらぬ。晝までに百兩見ねば、梶原さまへ、賣つてしまひますよ。
忠八　これサ若い人、月小夜どのは、なぜ出て逢はないのだの。
瑞德　さうぢや〳〵。愚僧も一番逢ふ氣で來た。月小夜を出せ。
團三　これサ〳〵、この衆は、見れば御出家と町人體な男、姉御に何が其やうに、云ひ分があるのだ。
忠八　云ひ分がなうて、喚き込むものか。達て逢はずば、家搜しをして逢つて行かうわえ。
ト團三郎を掻き退け、奧へ行かうとする。團三郎、引退け、手を捻ぢ上げ
團三　この町人めは聞分けのない。爰をどこだと思ふ。小身なれども、曾我のお屋敷、臑切り込むと免さぬぞ。
ト取つて投げる。
忠八　オヽ、痛い〳〵。うぬ、おれをどうしやアがる。月小夜は騙りだわえ。

瑞徳　オヽ、物取りだ。騙りだ〳〵。

ト喚く。團三郎、立ちかゝる。これを金兵衛留める捨ぜりふ。この騷ぎを聞き、奥より月小夜、袖の切れし前幕の小袖の上へ浴衣を着て、前垂れを締め、油手を拭きながら、髮を結ひしまひし思ひ入れにて出て來り、この中へ入り、團三郎を留めて

月小　これはしたり團三どの、何をマア其やうに、立騷いで騷がしい。どうしたものぢやぞいの。

瑞徳　そりやこそ月小夜が、出たぞ〳〵。

月小　ヤア、お前方は。

瑞徳　逢ひたかつたわえ〳〵。

ト立騷ぐ。

月小　ハテ、マア、これには段々譯のある事、お靜かになされて下さんせ。

團三　コレ、姉御、何やら彼奴等が、お前に逢はうと云うて、先刻にから聲高に惡口するゆゑ、そこで取合つたものサ。譯があらば逢つてやらしやりませ。

月小　サヽこれには段々、譯のある事ぢやわいの。

滿江　イヤモウ、何か知らぬが、わが身に逢はうと云うて仰山な物の云ひやう。殊に金兵衛どのも來てござるし、コレ月小夜、見れば其方は掃除でもしやつたか。をかしい形をして居やるの。

金兵　ほんに正月早々、煤取りでもあるまいし、浴衣がけで忙がしさうにござんすの。

月小　ハイ、私しが此やうな形して居りまするは、アノ、なんでござりまする。只今まで髮を取上げて居りましたわいな。

滿江　成る程、そんな事であらうわいの。

金兵　コレ、月小夜さん、今日わしが來たは、相も變らぬ劍の返事。晝までに請けさんせぬと、コレこの太刀は、否やでも梶原さまへ賣りまするよ。コレ月小夜さん、マア、お前も聞えぬお人だ。此お屋敷への貢ぎは申すに及ばず、老母樣やこなさん達の、着類きそげに至るまで、仕送つてやるこの金兵衛。魚心あれば水心と、コレ、

ト袖を扣へ、思ひ入れあつて

さうつれなうしたものでもないによ。

トしなだれる。月小夜、皆々へ心遣ひあつて

月小　金兵衛さんとした事が、御老母樣もお聞きなさる前で、いつも〳〵おどけた事ばかり。ホヽヽヽ。

ト紛らす。

満江　成る程、金兵衛どのは、おどけた事ばかり。シタガ、初春早々笑ふ程、めでたい事はござらぬわいの。ホヽヽ。イヤ、それはさうと、團三は夜に入ると鳥目になると云やつたが、この間は、もうよいかや。
團三　ハイ、矢張り夜に入りますると、明き盲目でござりまする。
満江　ほんに、そりや困つたものぢやなう。この母も冬のうちは寒うて、炬燵狂ひばかりして居ましたが、暖かになつたに依つて、此やうに慰みながら、綿摘んで見ようと、今日から此やうに始めましたわいの。
月小　そりやよう御精が出ますするわいな。モシ、金兵衛さん、今日お前のござんした譯も、御尤もではござんすが、何を云ふも鬼王どのゝ留守と云ひ、主の歸らんすまで、お待ちなされて下さんせ。
金兵　そりやモウ、歸りを待つても、聞いて行かにやならぬ太刀の返事。コレ、主の返事も。
　ト月小夜の袖を引き、思ひ入れ。
團三　御老母様も最前から、何かとお心遣ひ。お寢間へお出でなされて、ちとお横におなりなされませぬかえ。
満江　さうしませう〳〵。金兵衛どのも、鬼王が戻るまで部屋へござつてゆつくりと。コレ月小夜、あの衆が事はよいかや。
月小　アイ、そりや私しが承知して居りますわいな。
金兵　然らば鬼王どのゝ歸りまで。
團三　奥へござつて金兵衛どの。
満江　マア、斯うござりませいの。
　ト唄になり、満江團三金兵衛、奥へ入る。この唄をかり、向うより小五郎兵衛、前幕の形にて、大丸の男、紋附きの風呂敷包みを擔ぎ、附いて出で來たり、直ぐに門口まで來て、窺ひ居る。
忠八　コレ、月小夜どの、こなたは〳〵、よくも〳〵この雀屋の忠八を騙して、大事の旦那をしくじらしたの。サア、取替への金を、いま寄越さつしやい〳〵。
瑞德　イヤ、愚僧も云はねばならぬぞ。コレ、こなたは、何と云うた。モシ瑞德寺さま、わたしやお前の所へ大黒に參りませう程に、どうぞ斯やう〳〵と支度金を取上げ、直ぐに越さずの瑞德寺。なんぼ出家でも、それぢや濟まぬぞ〳〵。
　ト兩方より喚く。月小夜、思ひ入れあつて
月小　モシイナア、其やうに聲高に仰しやつて下さります

るな。これには段々譯のある事。毛頭あなた方を、お騙し申すなぞと云ふやうな事ぢやござりませぬ。ちつと此方に取込んだ事がござんすゆゑ、それで隙取つたのでござんす。それにマア、わたしが心も知らぬかなんぞのやうに、聲高に物仰しやつて、コレイナア、其やうにもマアわたしが悪いかいな。

ト兩方の手を取つて、二人を引寄せ、手を握つて思ひ入れ。二人、うつとりとして

忠八　イカサマ、ハヤ、譯もありさうな事だ。

瑞德　さう云はれては、愚僧も何とも云ひやうもないが、そんなら必らず騙したのではないの。

月小　なんのマア、御出家様を騙して、よいものでござりまするか。未來の程が恐ろしうござりまするわいな。

瑞德　さうありさうなものだ。

忠八　そんならこの桂庵をも、騙したのではないの。

月小　なんのいな。モシ。

ト二人へ囁き

斯うぢやわいな。

瑞德　ハテ、それではあんまり憎くもない。

ト忠八、月小夜へ囁く。

忠八　いづれこの間の所へ行て、明日待つて居ませう。

月小　左様なされて下さんせ。

兩人　コレ、必らず待たせまいぞよ。

月小　合點ぢやわいな。

兩人　ハテ、可愛い奴だ。

ト通り神樂になり、兩人思ひ入れあつて向うへ入る。月小夜、捨ぜりふにて門口へ送つて出て、思はず小五郎兵衛と顏見合せ

月小　ヤ、お前は。

小五　昨夜小磯の辻番で、お目にかゝつた梅澤屋の小五郎兵衛。其方の御用が片付いたら、約束の通り相談しませう。

ト内へ入る。

月小　ハイ、ようお出でなされましたな。

小五　コレ、大丸の男衆、代物を置いて、こなたは先へ歸らつしやい。

大丸　畏まりました。左やうならお誂らへ物は、慥かにお渡し申しました。ドリヤ、お暇いたしませうか。

ト風呂敷包みを出し、向うへ急ぎ去る。

月小　昨夜早々にお目にかゝり、お尋ねなされて下さんせ

と申しては別れましたなれど、不束なわたし、よもやと思うて居りましたに、ようマアお出でなされて下さんした。

ト思ひ入れ。

小五 イヤモウ、暗紛れの俄雨、濡れかゝつたる番屋の内金遣りながらろく〳〵に、しみた話しもせぬうちに、月に叢雲本意無い別れ。慥かに爰らと思つた壺、尋ねて來たも、わしが所へ連れて行きたさ。近頃さしつけがましいが、不自由な事もある習ひと、仕立て卸しの身の廻り、いま大丸から持たせて來た。昨夜話した手切れの金も、コレ。

ト財布入りの金をちよつと見せて

得心ならば、遊びながら來ては下さるまいか。

ト大丸の風呂敷包みを出す。

月小 そりやお嬉しうござりまするが、何を申すも、まだ外に話さにやならぬ人もあれば。

ト思ひ入れ。

小五 それも大方御亭主から、暇の狀を取るのでごんせう。此方も懸りのある女、滅多に連れても行かれまい。ようごんす。その位な事は待つてやりませう。わしも云ひ懸つた昨夜の證裁、美人局に遇うたと云はれては、外聞も悪い。隙入りのあるうちは、いつまでも待つて居ませう。

月小 それさへ承知して下さんす事なら、いづれ御返事いたしませう程に、あの小座敷はわたしが居間。暫らくあそこで、お待ちなされて下さりませ。

小五 さうしませう。埒明き次第、いづれ同道する程に、必らず間違ひないやうに。

月小 心得ました。小五郎兵衞さま。

小五 月小夜どの、待つて居ますよ。

ト唄になり、包みを抱へ、下の方の襖を明けて入る。

合ひ方。月小夜、思ひ入れあつて

月小 よもやと思うた昨夜のお方、尋ねてござんした上からは、これも又よいやうに返事せずにも置かれまいし、ア、モウ、さま〳〵な苦の重なる

ト思ひ入れあつて懐中より片割れの木櫛を出し

昨夜小磯の暗紛れ、切つた突いたと騷ぎのうち、思はれ拾うた片割れ櫛。紅葉に鹿の蒔繪あるは、こりやコレ妹が守りの内に、入れ置いた木櫛の片し。どうして昨夜の騷ぎの場所に。

ト思ひ入れして

よもや妹が。／ハテナア。

トこなし。唄になり、月小夜、思案の體。向うより十六夜、前幕の包みを抱へ、後先へ心遣ひあつて出て來り、門を入つて

十六　姉さん、只今戻りましたわいな。

月小　其方は十六夜、昨日から出やつて、どこにマア何をして居やつたぞいの。

十六　ハイ、わたしが昨夜泊つて參りましたは、アノマア團三さんの眼病、夜に入ると鳥目とやらで、盲目同然の病。ア、、どうぞ癒して上げたいと、昨日晝から日向藥師さまの、御夢想の眼藥を戴きに參りまして、その歸りに二の宮さまへお寄り申したところ、お客人でお取込みよい所へ來やつた、手傳うてくれいとの事。お給仕するやら、お酌に出るやら、ツイ昨夜はあなたのお屋敷に、泊つて參りましたわいな。

月小　そりやモウ、よう心が附いて、お藥を貰うて來やつた。鬼王どのが聞かれたら、弟の事、さぞ喜んでゝあらうわいな。

ト詞のうち十六夜、月小夜が形を見て

十六　申し姉さん、お前は變つた形をして居なさんすが、お掃除でもなさんしたのかえ。

月小　サア、いま髮を結ひしまうたわいの。

十六　さうでござんせうが、正月ではあるし、人さんがござんして、何とか思はんせう。マア、上の浴衣を脱ぎなさんせいな。

月小　ナニ、構ふ事はないわいの。

十六　ハテ、さうぢやござんせぬ。見つともない。上の浴衣を脱ぎなさんせいな。

ト立ちかゝり、無理に取らうとする。

月小　ア、、コレ妹、待ちや／＼。わしも見憎い事と思うては居れど、これを脱げば、まだ見憎い事があるわいの。

十六　そりやなぜにえ。

月小　サア、聞きやいの。昨夜妙義さまへ、夜に入つてお參り申したところ、あの小磯の通しで、侍ひの生醉が云ふにはの、コレ女中、道連れにならう、一緒に行かうと、わしが側へ、引ツ附いて歩くゆゑ、わしやモウ怖うて／＼、どうぞして逃げようと思うたを、その生醉がわしが袖をキッと捉へて、わしが行く方へ來さんせ、連れて行かうと云ふゆゑ、やう／＼逃げようとして、ツイ此やうに、小袖の袖がちぎれたわいの。

ト浴衣を脱ぎかけて見せる。十六夜、思ひ入れあつて

十六　エヽ、そんなら生酔に出逢うて、其やうに袖をちぎられなさんしたかえ。そりやマア怖い目に、ハテ、遭ひなさんしたの。

ト思ひ入れあつて

シタガ、其やうな見苦しい形をして、いつまで居られませう、アヽコレ、なんなりと。

ト思ひ入れあり、持つて來たりし包みを出し

幸ひな事がござんすわいな。平塚の古手屋が、善い小袖の拂ひ物がある、買はんかと云ふゆゑ、御老母様の御平常召しにならうかと、預かつて戻つたこの小袖。これなと着て居なさんせいな。

ト前幕の岩瀬が小袖を出す。月小夜見て

月小　ほんに、こりやよう氣が附きやつたが、御老母様には、ちつと派手であらうわいの。

十六　サア、わたしもさう思うて居ります。マア〱、これを着さんせいな。

月小　アノ、これ着ても大事ないかや。

十六　ハテ、大事ござんせぬ。サヽ、着なさんせ〱。

ト十六夜手傳うて着せ替へ、袖の切れし小袖　衝立へ掛けて置く。月小夜、帶を〆めて

月小　ほんに、こりやよう似合うたわいの。

十六　とんと裄丈も、よう揃ひましたわいな。

月小　こりやモウ、きつとした正月小袖ぢや。斯う着替へては、頭の物も差し替へにやならぬわいの。

ト思ひ入れあつて

イヤ、ほんに妹、其方にちつと聞きたい事がある。わが身は何ぞ落しはせぬかや。考へて見や。

ト十六夜こなしあつて

十六　アイ、何もわたしや落した物はござんせぬが、それともお前、なんぞわたしが物を。

月小　イヤ〱、落した覺えが無くばよいわいの。別して拾うたと云ふでもないわいの。

十六　サア考へては見やんせうが、何も落した物はないやうぢやわいな。

月小　そんならそれでよいが、コレ妹、わが身はひもじうはないかや。

十六　イエ〱、二の宮さまで御馳走になつて參じました。ほんに、折角買うて來た眼藥、團三さんに進ぜて來ようわいな。

月小　さうしてたも。さぞ喜ぶであらうわいの。ちつとも早う十六夜。
十六　姉さん。ドレ、薬渡して來ようか。
　ト唄になり、思ひ入れあつて奥へ入る。月小夜殘つて
月小　昨夜から戻つて來やらぬ妹が、落した櫛と思へども何も落しはしませぬとの今の詞。殊にマア、持つて來やつたこの小袖。
　トいろ／＼見る事。よきはずみに袂へ手を入れ、狀のあるを取出し、宛名を見て
久須美彌太夫どのへ、近江の小藤太。
　トこれにて恟りして
ハテ、變つたこの宛名。何にもせよ、この文言。
　ト開き見る事。奥より金兵衛出て來り、色文を讀むと心得、氣の揉める思ひ入れ。
ナニ／＼一先達て申し談じ候ふ富士野に於て、夏狩の砌り、御料の假家を鬼門の方に建てさせ……」
　ト思ひ入れあつて
ハテ、恐ろしい企みの文言。どうしてこれが、小袖の袂に
　ト恟りする。金兵衛、これを知らず、後にて思ひ入れあつて
金兵　こりや堪えられぬ／＼。
　ト月小夜へ抱きつく。これにて密書を手早く懐中して
月小　アヽ、誰れさんぢや。滅相な。悪てんがうばつかり。
　ト金兵衛を振り切り、思ひ入れあつて
ヤ、お前は金兵衛さん、阿房らしい。何をしなさんすぞいな。
金兵　何をするとは月小夜さん、そりやお前聞えぬぞえ。疾からこなさんに氣があるから、祐成どのゝ頼んだ兵庫鎖の太刀、百兩貸すは高けれど、用立てたは足を附けようばつかりだわな。それから曾我へ米薪炭、そんな事おやない、着類きそげまで仕送つたよ。コレ／＼、爰に掛けてあるお前の小袖も、この間わしが買つて進ぜたが、今以てお拂ひなしだ。人にばつかり氣を揉ませ、いま後から見て居れば、面白さうな痴話文を讀み散らし、わしが來たので隱すのかえ。コレ、そりや、むごいぞえ／＼
　トしなだれかゝる。
月小　アヽ、コレ、滅多な事云ひなさんすな。なんでマアわたしが色文見たのなんのと、コレ、鬼王と云ふ主のある身でござんすわいなア。

金兵　ハヽヽ、こりやをかしいワ。主のあるその女房が、無性やたらに駈け歩き、手かけ姿の口をきいて、男を引摺り込んでもよいかえ。それでも家中の女房かな。
月小　コレ、滅相な事云ひなさんすな。
金兵　云はれるが否なら、ちよつと金兵衛に摘ますか。
月小　よい機嫌な。なんぢやぞいな。
金兵　そんなら今の痴話文を見せるか。
月小　サ、それはな。
金兵　見せぬはいよ／＼痴話文か。見にや置かぬ／＼。
　ト抱きつく。
月小　エヽ、放さんせいな。
金兵　イヽヤ、放さぬ／＼。
　ト捨ぜりふにて抱きつく。月小夜、振り放さうとするこの模様よろしく、通り神樂になり、向うより鬼王、山形木瓜の紋附いたる黒木綿の綿入れ羽織、大小にて足早に出て來り、ズッと入り、金兵衛を引退ける。金兵衛、捨ぜりふにて、月小夜と心得、鬼王に抱きつきにかゝり、恟りする。
鬼王　女房ども、いま戻つたわい。
月小　鬼王どの、早う戻らんしたの。
金兵　なんぢや／＼／＼、誰れも早う戻れと云ひもせぬに、いらざる所へ歸りだて。鬼王どの、こなたにはこの金兵衛、何も用は……イヤ、あつた／＼。大きにあつた。コレ、新左衛門どの、昨夜逢つて斷わつた通り、百兩出來ねば、預かつた太刀は晝までの約束、賣り拂つてしまひまするぞ。
月小　アレ、聞かしやんせ。あの通りぢやわいの。どうぞマア、請け戻す百兩が。
鬼王　氣遣ひしやんな。心當があるゆゑに、今まで手間取つて居た。劒を請け戻す百兩も、拵らへて持つて來た。まだ／＼外に、ちつと喜ばす事もあり、マア／＼、それは後へ廻して、コレ、月小夜、百兩の金、拵らへて來たわいの。
　ト懐より以前の百兩、財布のまゝ出して見せる。月小夜、喜ぶこなし。金兵衛、膽を潰して見て居る。
月小　そんなら何かえ。百兩の工面が出來たのかえ。そりやマア、めでたうござんす／＼。よう金拵らへて戻らんした。ハイ、金兵衛さん、百兩の金が出來たわいな。お前も喜びなさんせ。こんな嬉しい事はないわいな。
　ト喜ぶ。金兵衛、こなしあつて

金兵　なんだ、百兩の金が出來た。そりやマアとんだ事ぢやの。よもや曾我さまのお屋敷で、百兩はさて置き、錢百の工面もむづかしからうと思ひの外、ハテ、百兩出來て、おめでたい事だの。

鬼王　コレ、金兵衞どの、昨夜逢うて、明日までと詞番うた、兵庫鎖の太刀の質入れ、借り受けた百兩、サア、改めて受取らつしやりませ。

ト財布を渡す。このあたりに、奧より團三郎、出かゝり窺ひ居る。

金兵　イヤモウ、昨夜の約束ゆゑ、今日は是非ともと、此やうに劍も持つて來ました。金の數が揃うたら、この太刀は渡しませう。

ト小判を數へる。

團三　兄貴、委細はあれから聞きましたが、不思議にも百兩の調達、兵庫鎖の一腰が手に入れば、今の間に重忠さまのお館へ持参なし、お預けの祐信さま、お供して立歸れば、滿江さまのお喜び、この上はござりますまい。エエマア、よくも百兩出來ましたな。

ト浮き〳〵する。

鬼王　イヤモウ、やう〳〵の事で百兩の金、算段したわい。時に金兵衞どの、金受取つたら、早うその太刀渡しては下さるまいか。

金兵　ハイ〳〵、渡しませう〳〵。百兩は慥かに受取りました。預かつた兵庫鎖、ソレ、受取らつしやりませ。

ト渡す。鬼王取つて

鬼王　エヽ、忝ない。コレ、月小夜、首尾よう劍が戻つたわやい〳〵。

月小　ほんにモウ、此やうなめでたい事はござんせぬ。太刀がお屋敷へ戻るからは、明日から金兵衞さんの催促もござんすまいし、マア〳〵、此やうなめでたい事はござんせぬわいな。

ト喜ぶ。金兵衞、思ひ入れありて

金兵　なんぢや、月小夜さん、明日からこの金兵衞が催促に來ぬのが、嬉しいと云はしやるのか。エヽ、きつい愛想づかしぢやの。ようごんす。其やうにうるさがるお屋敷なら、何がさて參らう。ソウ〳〵、明日から貧乏屋敷へ、何の用があつて參りませう。お氣に入らぬ金兵衞なら、歸りませう〳〵。

ト門口へ出て

暮れぬうちに戻りませう。この間は何やら無性に物騷だ。

モシ、鬼王さま、お聞きなさい。アノ若い女で、小盗みをする奴があるの。イヤ、美しい年増が、手かけ妾の口をきいて、越さずを喰はせて美人局するのと、イヤ、きつい評判サ。その上に物騒な事と云ふのは、昨夜小磯の切通しで、大藤内と云ふ人を殺して、切手とやらを盗んだと云ふ噂がござるが、お前方は聞かずかえ。わしはよつく聞きました。その物騒なこの道筋、金を持つては氣味が悪い。ドリヤ、暮れぬうち歸りませうか。

ト月小夜へ當り眼に云ひ散らす。此うち鬼王月小夜、胸にこたえる思ひ入れ。金兵衞、衝立の小袖を見て

ほんに、この小袖は、わしが拵らへて寄越した月小夜さんの着る物。見れば脱ぎ替へて、そこらあたりへ引ちらして置くは、寒い時を忘れたのか。コレナ、其やうに麁末にするものぢやアないよ。殊に代物は御勘定なし、わしも明日からは今までのやうに、心安くも來られまいわいの。金は其方の物、代物は此方の物。お氣に入らずば持つて歸りませう／＼。

ト衝立に掛けたる片袖なき小袖を取つて、太刀を包みし風呂敷へひんまるめ、これを脊負つて歸らうとして

鬼王どの、何かとおやかましうごんした。老母樣へよく云うて下さい。コレ、月小夜さん、氣に入らぬ小袖、持つて行くよ／＼。エヽマア、情を知らねえ。

ト鬼王と顔見合せる。

鬼王　世話でごんした。

金兵　ドリヤ、お暇いたさうか。

ト通り神樂になり、心を殘し向うへ入る。

團三　コレ兄貴、劍が手に入る上からは、ちつとも早う、重忠さまのお屋敷へ、差上げようではあるまいか。

月小　成る程、お咎めがゆりて、祐信さまお歸りあれば、祐成さまもお屋敷へお戻りなさる。近日左衞門どの、館にて、狩場の道理を内見ある、厚きもてなしの今樣、その折を幸ひと、御兄弟に對面させます願ひもあれば、團三どのは、ちつとも早う御劍を。

ト團三郎へ渡し、思ひ入れありて

ほんにこなさんは、夜に入ると鳥眼の病。ア、それではどうも。

團三　イエ／＼大事ござりませぬ。夜に入らぬ其うちに、直に戻つて參ります。必らず氣遣ひさつしやりまするな。

鬼王　そんなら弟、大儀ながら一走り、早う持つて行てくれい。

團三　心得ました。一時三里、今の間に歸りまする。
　ト劍を持ち行かうとする。
鬼王　ア、コリヤ〳〵、そちや腰の物は。
團三　ハイ、團三郎が魂ひは、アノこの間、箱根に於て……
　……
　ト思ひ入れあり
ツイ一走り此まゝで。
鬼王　これはしたり、向うは大家の重忠さま、其まゝで行かれるものか。御主人方の御外聞。コレ
　ト刀を取つて突き出す。
月小　團三どのに差さすのかえ。
鬼王　兄が魂ひ、ソレ、差して行け。
團三　忝なうございます。
　ト鬼王が刀を月小夜の手より受取り、差して
夜に入れば鳥眼の團三、暮れませぬうち一走り
　トつか〳〵行きかけろ、と草履の鼻緒切れ、爪づいて中指を蹴返し、血の滴る思ひ入れ。
月小　團三どの、どうぞしやつたか。
團三　ハイ、草履の鼻緒が切れまして、爪を蹴放し、エ、コレ、血だらけに。

月小　ヤ、なんと。
團三　アイヤ、ツイ一走り。ドリヤ、行て參りませうか。
　ト唄になり、草履を脫ぎ捨て、一散に向うへ入る。
月小　ア、、慥かに怪我してゞあつたが、それもいとはず勇み進んで、ア、、若いと云ふものは元氣のよい。シタガ、歸りに又、鳥眼が發らねばよいが。
鬼王　ハテ、今のやうな元氣では、ツイ戻つて來るであらう。兵庫鎖の太刀、首尾よう手に入れた事を、月小夜、そちや御老母樣へお知らせ申さぬかい。
月小　ほんに、あなたへ早うお知らせ申して、お喜ばせ申しませうわいな。
鬼王　それがよい〳〵。そのお喜びの次手に、まだお喜ばせ申す事もあるが、マア〳〵、それは後へ廻して、女房ども、劍の戻つた樣子を早う。
月小　心得ました。そのお喜びは何やら知らねど、ちよつとマア神棚へ、御燈火を灯して、お神酒の支度、鬼王どの。
鬼王　月小夜。
月小　ドリヤ、御老母樣へお知らせ申しませうか。
　トてんつゝになり、月小夜、いそ〳〵として奧へ入る。

鬼王殘り、思ひ入れあつて、懷中より包みし切手を出し、あたりへ心遣ひあつて、袱紗を明けようとする。向うにて駕籠舁きの聲するゆゑ、ちやつと又懷へ入れる。てんつゝ、通り神樂になり、駕籠舁き、三枚にて四つ手駕籠を擔ぎ、スタ〳〵出て來り、直ぐに門より內へ舁き込む。鬼王うろたへ、駕籠を捕へて

鬼王　こりや何ぢや。小祿なれども曾我の屋敷へ、駕籠舁きこんで、おのれ等、法外とや云はん、憎くい奴等の。

ト立ちかゝる。駕籠舁き、駕籠を下ろして

駕籠　アヽ、モシ〳〵、私しどもは、左やう存じましたれど、乘つてござる旦那が、屋敷內へ直ぐに舁きこめとの事。それゆゑ舁いて入りました。

鬼王　ムウ、すりや雇ひし人が申しつけたとな。アヽ、聞えた。只今百兩出來た事を聞き出し、もうよい時分と心得ござつたのか。但し大磯から、あの虎どのを、揚げ玉とやらにしてござつたか。こりやてつきり、そんな事であらう。モシ、祐成さまか。サア、御老母樣のお目にかからぬうちに、早う出さつしやりませ。

ト垂れを上げる。內より閉坊、ずう〳〵と出て、駕籠舁きに歸れと、顋で敎へる。駕籠舁き、駕籠を擔ぎ、一散に向うへ入る。鬼王思ひ入れありて

鬼王　思ひがけない、駕籠の內から出た出家。アヽ、どうやら見たやうでもあり、してわれは。

閉坊　見た筈サ、昨夜小磯の辻番で、百兩出して、おれが命を、貴樣から買ひ請けた閉坊サ。

鬼王　アヽ、成る程、昨夜逃がしてやつた

閉坊　その時の御出家サ。命を元手の百兩も、今ではおれが身に附かず、祐信どのゝ命を助けた刀の質請け、今日からわしはかゝりに來たのだ。

鬼王　ヤ、なんと。

閉坊　昨夜逃げても詮議が嚴しく、平塚宿の住居もならず、當分曾我へ匿まはれに來たのだ。貴樣が昨夜云つたには、一生恩に着るとの事、よもや匿まはずにも置かれまい。それともに、ならぬと云へば百年目、これから直ぐに駈け込んで、おれが首代は曾我の屋敷、祐信は同類、鬼王貴樣は盜人の上前取り、なんとこれぢやア、よもや匿まはずには置かれまいが。

ト ぶッ坐る。

鬼王　すりや、匿まはぬその時は、曾我の屋敷を同類に。

閉坊　抱いて入るが此方の仕事。但し昨夜の金を返すか。

鬼王　サ、返したうてもその百兩は、たつた今
閉坊　刀を請けにやつたであらう。金がないなら百兩の代
物を、おれに下され。
鬼王　ナニ、百兩の代物とは。
閉坊　外でもないが月小夜が妹、あの十六夜を貰ひたい。
鬼王　すりや、十六夜を。
閉坊　賣りこかしても百兩の、金になるのは、妹の十六夜
貰つて行きたい。
鬼王　そりや何よりは易い事、貴樣に遣りたいものなれど、
譯のある女房が妹、おれが儘にも、その事ばかりは
閉坊　ならぬと云ふのか。
鬼王　そればつかりは。
閉坊　ならずば今日から匿まふか。
鬼王　サ、それは。
閉坊　金を返すか。
鬼王　サ、それは。
閉坊　部屋子に置くか。
鬼王　サア。
兩人　サア／＼／＼。
閉坊　よもや置かずばなるまいがな。

トきつと云ふ。鬼王、思ひ入れあつて
鬼王　匿まはう。
閉坊　アノ、おれをか。
鬼王　如何にも。手詰めになつた百兩の、恩を請けたる義
理あれば、不自由な曾我を合點ならば、刀に懸けて新左
衞門、匿まうて遣はさう。
閉坊　ありさうなものだ。ハヽヽヽ。まだ／＼、こなさん
がならねえと云へば、外にちつと極めを附けてもらひた
い品がある。鬼王どの、なんと見てはくれまいか。
鬼王　ハテ、變つた事を云ふが、恩を請けたこの鬼王、匿
まふと云つたからは二言はないが、コレ、そのわしに、
まだ見せたいと云ふ品は。
閉坊　イヤ、外でもないが。昨夜小磯の切通しで、大藤
内をバッサリ云はせ、切手を盜んだ人殺しがある。
ト鬼王、思ひ入れ。
そのドサクサの暗紛れ、行きかゝつたる閉坊が、手先に
觸るちぎれし片袖、味な物好き定紋は、垣にしがらむ朝
顏の、この伊達紋の女の片袖。
ト前幕の袖を出す。鬼王、ヂロリと見やり、覺えある
ゆゑ、ギョッとこなしありて

鬼王　その片袖は、アノ月小夜が。
閉坊　覺えがござるか。
鬼王　アイヤ、見馴れぬ片袖。
　ト こなし。閉坊も思ひ入れあつて
閉坊　よもや知つたと云はれまい。斯う云ふ伽があるからは、部屋子に居るにも氣が置かれぬ。こいつも仕事の種にならうワ。
　ト 懐へ捻ぢ込む。
鬼王　見馴れぬ品でも、ちぎれた片袖、仔細なくては叶ふまい。
　ト 思ひ入れあつて
閉坊　斯う云ふうちも人の目つまに、かゝつては互ひの身の上。して、埋んで置くしがく場所は。
鬼王　隱し所は
　ト 思ひ入れありて、炬燵を見附け、蒲團を取り、格子の附きし櫓を取り退け
　冷えはしやうが、ちつとの間。
　ト 炭櫃を上げる。
閉坊　イカサマ、尋ねらるゝ身を以て、のこ〳〵出ても居られまい。正月早々御出家が、無縁法界同然な、臥さる所は縁の下。
鬼王　心置きなうゆつくりと
閉坊　お辭儀いたさず入らうか。
鬼王　そんなら閉坊。
　ト 袖を取らうと寄るを、この手を拂つて
閉坊　ドリヤ、床下で初夢でも見べいか。
　ト 唄になり、づう〳〵と切り穴へ入る。鬼王、上より見やり、思ひ入れして居る。矢張り唄。奥にて
十六　ハイ〳〵、只今炭をつぎまするわいな。ちつとお待ちなされませ。
　ト この聲に驚ろき、鬼王あわてゝ穴の上へ格子の附きし櫓を乘せ、蒲團を掛けて居る。炭櫃は舞臺へ出て居る。十六夜、炭取を持ち、捨ぜりふにて出て來り
　鬼王さん、爰にござんしたかえ。いま御老母様が仰しやるには、炬燵へ炭をつげとあるゆゑ、切り炭を持つて參りましたわいな。ほんに、年が明けても冷える事でござりまするわいな。
　ト 炬燵へかゝる。鬼王、うろたへ、炬燵を押へて
鬼王　これはしたり〳〵、滅相な。十六夜、この炬燵を、どうしやるのぢや。

十六　ハイ、お炬燵へ炭をつぎますするわいな。
鬼王　ハテ、誰れが炭をつげと云ひつけた。炭をついでよけりや、わしが云ひつけるわいの。誰れも頼みもせぬ事を、アヽ、捨てゝ置きや〳〵。
十六　でも、御老母樣が、仰しやりつけでござりまする。
鬼王　ハテ、どなたが仰しやらうが、捨てゝ置いてもよい事を。コレ〳〵、其方にはさせる事がある。わしが云ひつける、用を足しや〳〵。
十六　ハイ、その御用は、なんでござんすえ。
鬼王　オヽ、其方にさせる用は、アヽ、なんであつたか。慥かその用は……オヽ、それ〳〵、おれが布子に、コレコレ、綻びが切れてある。これを一針縫うてくりやれ。
　ト立ちはだかつて裾の綻びを見せる。
十六　エヽ、その綻びを縫へと云ひなさんすのかえ。ホヽホヽヽ。仰山な。着る物の綻び縫ふに、なぜお炬燵へ炭はつがせまぬえ。
鬼王　サヽ、そりやなんぢやわいの……オヽ、それ〳〵、この布子を縫ふうちは、おれがコレ、此やうに。
　ト布子を脱ぎ、襦袢一つになり、炬燵蒲團へ入り
コレ此やうにして居ねばならぬ。炬燵へ炭つぐには及ばぬ。鬼王は一生炬燵や行火の側へは寄るまいと云ふ大願。火が起つては逆上せるゆゑに、炬燵へ斯う入つて居る。其うちに縫うてくりや〳〵。これに火があると、いつそモウ上氣するわいの。
　ト床の下へ思ひ入れあつて、蒲團を着て居る。
十六　ほんに、そりや尤もぢやわいの。と云ふやうなものの、根ッから譯が解らぬわいな。
鬼王　なんの解らぬ事があらう。サ、斯うして居るうちに、早う縫うてくりや〳〵。
十六　なんぢややら、合點がゆかぬわいな。
鬼王　ハテ、合點がゆかぬならゆかぬなりに、早う縫うてくりや〳〵。
十六　ハイ、縫うて上げまするわいな。
　ト合ひ方。片脇より針箱を出し、布子の綻びを縫ふ。
鬼箱　オヽ、寒々。さて〳〵春になつても冷える事ぢやないか。わが身も肌薄に見えるが、寒うはないか〳〵。
十六　アイ、寒うない事もござんせぬわいな。
鬼王　さうであらう〳〵、寒くばコレ、この蒲團の中へ、背中を持つて來や〳〵。
十六　ナニ、それにや及びませぬわいな。

鬼王　イヤ〳〵、さうでない〳〵。風でもひきや惡い。サアサア、遠慮なしに、爰へ來や〳〵。

ト鬼王、蒲團を着たまゝ、十六夜の側へ來て、蒲團の端を十六夜が背中へ半分着せて

コレ〳〵、斯うして居りや寒い事はあるまい。一體爰は西請けのせいか、寒いと云ふではない。その代り、夏は別して暑いわいの。ハヽヽヽヽヽヽ。

ト何心なう話して居る。この時、月小夜、銚子と盆に杯を載せ、これを持つて出かかり、この樣子を見て窺ひ居る。

時に十六夜や、アヽ、わが身は孝行な者ぢや。マア、元を糺せば姉の月小夜とは、誠の姉妹でもないが、誠にほんまの姉妹よりは深切な志し。どうぞ其方にも、よい夫を持たせたいものぢやわいの。

十六　なんのマア、そこ所ぢやござんせぬ。御苦勞なさんす曾我のお屋敷、わたしやいつまでも獨り身がようござんすわいな。

鬼王　エヽ、今はさういふ心でも、やがて男を持つて見や。アヽ又その時の氣分は、別なものぢやわいの。

十六　イエ〳〵、わたしやいつまでも、今の心に變る事ぢやござんせぬわいなア。

鬼王　イヤ〳〵、年とるに從つて、氣の變るものぢや〳〵。

十六　イエ〳〵、わたしばかりは變らぬわいな。

鬼王　イヤ〳〵、變らう〳〵。

十六　なんの變るものぢやぞいの。

鬼王　ハテ、其方は眞實な女子ぢやの。

ト何氣なき話しのうち、月小夜、色事と心得、ズツと寄つて蒲團をめくつて

月小　ハイ、眞實な女子ぢやわいの。

鬼王　ヤ、月小夜か。

十六　お前に姉さん。

月小　アイ、なんの變るものぢやぞいの……も厚かましいわいの。

鬼王　コレ、何が厚かましいのぢや。

月小　アイ、氣の變るものぢやに依つて……イヤ、變らう變らう。ほんに呆れるわいの。

十六　コレ、姉さん、お前、何やら腹立つたやうな物の云ひやう。なんで、マア其やうに

鬼王　コレ〳〵、其方は何を云ふぞいの。

月小　何を云ふも氣の強い。コレ、鬼王どの、お前の形は

なんぢやぞいな。見つともない。着る物着て、帯も締めさんせいな。

鬼王　ヤ。

　ト布子を着て帯を締める。

月小　妹も妹ぢや、現在姉の男を捕へて、蒲團一つを引合うて、アタ見ともない。ほんに呆れるわいの。

鬼王　コレ〱月小夜、てまへマア、味な事を云ふが、有やうは今宵で、十六夜に布子の綻びを縫うてもらはうとそこで襦袢一つになつて、餘り寒いから蒲團を着て居たを、味に氣を廻して。ハヽヽヽ、よい機嫌な事云やんないの。

月小　エヽ、お前、御機嫌か知らぬが、わしや腹が立ちやんす。苦勞する女房を、袖にするは人でなしぢや。また小さいから育てた十六夜、姉の男を寢取らうとは、わが身は間女ぢや〱。エヽ、畜生ぢやわいの。

十六　コレイナア姉さん、お前、味な事云ひなさんすが、なんでマア、いつわたしが、其やうな淫らな事しやんした。こりやモウ、誠に間違ひぢやわいな。

鬼王　さうぢや〱。可哀さうに、なんで十六夜が、其やうな事があらう。コレ、こりや誠に間違ひぢや。

月小　エヽ、措かんせ。もう妹の贔屓をしなさんすの。エエ、ほんに畜生の寄り合ひぢやわいの。

鬼王　なんだ、畜生の寄り合ひとは、コレ、おれが事を云ふのか。

月小　アイ、知れた事ぢやわいな。

鬼王　イヤ、此奴が、云はせて置けば。

　ト立ちかゝる。十六夜留めて

十六　ア、コレ、待ちなさんせ。わたしが事から起つての夫婦いさかひ。これと云ふも姉さんが、日頃氣が短かいから起つた事。マア、物を糺して疑はんしたがよいわいな。

月小　エヽ、なんぢや、物を糺せのなんのと、太々しい。姉に向つて、茲な畜生めが。

　ト十六夜ムッとして

十六　コレ姉さん、そりやお前あんまりぢやぞえ。

月小　何があんまりぢや。

十六　あんまりでなうてわいの。

鬼王　イヤ〱、そりや妹が尤もぢや〱。

月小　ソレ、また贔屓さんすわいの。

鬼王　贔屓したがどうした

月小　腹が立つわいな。
十六　わたしも腹が立つわいな。
月小　その腹はわしが立つわい。
鬼王　おれも腹が立つわいやい。
　ト三人ごつちやに、夫婦姉妹三人の喧嘩になる。この時小五郎兵衞出かゝり、聞いて居て、この中へ入り
小五　コレ〳〵、待たんせ〳〵。聞いたところが夫婦姉妹三人、ごつちやのこのいさかひ、他人のわしが預かつた。なんであらうと、預けさつしやい〳〵。
月小　ハテ、此方へ退いてござんせ。
十六　構うて下さんすな〳〵。
鬼王　打ッちやつて置かつしやい〳〵。
　ト捨ぜりふにて留める小五郎兵衞を、あちこちと引ッ張り、トゞ鬼王、小五郎兵衞を見て
ヤ、待たんせ。この挨拶に入らしやつたが、こなさんはマア、どこの人ぢや。イヤサ、なんで爰にござつたのぢや。
小五　サ、わしは。
　トつかへる。鬼王、よく〳〵見て
鬼王　どうやらこなさんは見たやうな……ほんに、慥か昨夜切通しで。
小五　アイ、雨宿りの辻番屋、連れの女はこなたのお内儀、知らぬ事とて大きな粗相。わしは梅澤屋の小五郎兵衞と云ふ町人。鬼王さま、昨夜はお世話になりました。
十六　そんならあなたは姉さんと、お近附きでござんすかえ。
月小　アイ、近附きも近附き。據なう御無心申し、貢の金まで。
十六　エ。
　ト思ひ入れ。この時、滿江、障子屋體より窺ひ居る。
月小　サ、見ず知らずのお方ぢやない。殊に依つたら主のお世話に、ならうとまでも約束した、あなたは大事のお方ぢやわいの。
十六　エヽ、すりや鬼王さんと云ふ夫のある身で、このお方のお前はお世話に
　ト思ひ入れあり
コレ、姉さん、さうさしやんしたら、お前、女子の
月小　アイ、道の立たぬは合點で
小五　この小五郎兵衞が世話になる、内儀が心になるからは。

鬼王　未練は殘らぬ。勝手にうせろ。
月小　エヽうせいでわいな。新左衛門どの、わしやこなさんに愛想が盡きたわいな。
鬼王　エヽ愛想の盡きたもすさまじい。据ツ張り女め。
月小　エヽ茲な助平男め。
鬼王　エヽおのれは。
月小　こなさんは。
ト立ちかゝる。小五郎兵衞、捨ぜりふにて留める。十六夜、鬼王をなだめる。鬼王、捨ぜりふにて立ちかゝる。この時、懷より前幕の血の附いたる袱紗包みの似せ切手を落す。月小夜、これも捨ぜりふにて、十六夜が遣ひし針箱を取つて投げる。内より紙入れ提げ物、櫛簪彩しく出る。皆々これに目を附ける。
十六　血汐の附いたるこの袱紗、形は昨日梅澤で、それと察せし正しく切手。
鬼王　ヤ
ト思ひ入れ。鬼王、手早く取つて懷中する。
月小　これなる妹が針箱から、落ちた紙入れ櫛簪、提げ物までも夥しう。
ト目を附ける。十六夜心附き、ア、と駈け寄り、隱さうとする。月小夜、見ようとする。立廻り。この中へ滿江ズッと入り、有り合ふ塗り桶を取つて、落ちたる品々の上へちよつと置いてこれを隱す。皆々見て
十六　ヤ、御老母樣。
月小　すりや、この樣子を
滿江　聞きました。
月十　エ。
滿江　去年にも覺えぬ月小夜十六夜、夫婦姉妹いつにない一夜明けてのいさかひも、根を考へて見る時は、貧しき暮らしの曾我どのから、起りし事と推量して、サ、それゆゑ入らぬ年寄りの、差出た母が取捌き。
鬼王　すりや、この譯を御老母樣が。
滿江　サ、一間で聞いたこの縺れ、母が事なう納めたく、詞添ゆるも兄弟が、行く末頼む老の身の、殊に妹十六夜が、この針箱の櫛簪、女子に似合はぬ提げ物まで。
十六　サ、これは。
滿江　しがを隱せしこの摘み桶、姉月小夜はあの方の、お世話にならうと云ふ望み。
月小　それをあなたが
滿江　聞いたに依つて母が仲人。

月小　ア、モシ、常に變つて滿江さまが。
滿江　仲人するも水入らず、コレ月小夜、鬼王と云ふ男を見限り、そんならいよ〳〵まだ外に。
十六　男を持つは不義同然、女の道にない事と、常々意見の姉さんが、外に男を持たうとは。
滿江　サ、そりやこの母を見習うて、二人の夫を持つ事を、どうもわしは。
月小　エ、なんとえ。
　ト合ひ方になり、滿江、思ひ入れあつて
滿江　ア、昔思へば恥かしき、女子の道に背きたる、夫を重ねし滿江が、武士は二君に仕へぬ事、女は二人の夫をば持つこそ不義も同然と、姉二の宮へも教訓のなしたる者が恥かしや。祐安さまの最期の後、子に引かされて曾我どのへ、恥を重ねし二度の嫁入り、これと云ふのも恨めしき、敵左衞門祐經どの。
小五　ヤ、なんと。
滿江　サ、堅くるしい月小夜も、外の男を持つ事を、意見のならぬこの滿江。それゆゑ母が仲人しませう。
小五　すりや小五郎兵衞へ、月小夜どのを、仲人なさるゝ御老母樣。

鬼王　さすれば拙者は獨り身の、一本立ちのこの鬼王。
滿江　イヤ、月小夜を離別せば、後目は直ぐに妹の十六夜。
十六　アノ、私しを鬼王さんへ。
滿江　サ、月は一つ、影は二つの月小夜十六夜。
月小　姉が代りに妹を。
滿江　今日花嫁の手道具も、明けて云はれぬ淺ましさ。
　ト盜みし品々へ思ひ入れ。殘り四人もさてはとこなし。滿江、一つに取つて火鉢へ入れる。パツと煙立つ。
皆々　これは。
滿江　煙となしてこの座ぎり。
十六　エ、、有り難うございます。
滿江　灰になるまで女夫仲よう。
小五　仲人なされて
鬼王　めでたく祝言。
月小　壽祝ふ
小五　その島臺は
滿江　卽ち母が手馴れし塗り桶、形は富士の三國一。
月小　頭は雪の御老母樣。
小五　女夫一對揃うたる
滿江　ひなの住居の曾我殿ばら、肌溫たむる綿の雪。

月小　解けぬ心も打解けて
十六　解ける時節は皐月待つ。
小五　狩屋へ出入りの切手。
鬼王　アノ、月小夜が緣切つて
月小　切手欲しさの暗紛れ。
十六　正しく血汐の色直し。
小五　殺めし科を
鬼王　身に引請ける
滿江　月小夜十六夜。
月小　わたしやお前へ
十六　アレマアあんな。
鬼王　ハテ、今日からわれは
小五　姉と替へ〳〵。
滿江　差合ひなしの姉妹夫婦。
月小　席を隔てゝ
十六　夫婦の杯。
鬼王　離緣の杯。
小五　緣を切手は
ト鬼王へかゝる。月小夜隔てる。十六夜、鬼王を圍ふ。この立廻りよろしくあつて、滿江、中へ入り

滿江　マア、奧へ。
ト唄になり、上の障子屋體へ滿江鬼王十六夜、下の一間へ小五郞兵衞月小夜、めい〳〵思ひ入れありて入る。矢張りこの唄をかり、向うより岩瀨、前幕の振り袖にて出て來る。後より金兵衞、小袖を包みし風呂敷一抱へ、スタ〳〵出て來り。花道にて兩人顏見合せ
金兵　モシ、あなたは岩瀨さまぢやござりませぬか。その形はマア、なんの眞似でござりまする。
岩瀨　其方は金兵衞どの、コレ、聞いて下さんせ。昨日梅澤の女湯で、湯屋泥棒に遭うたわいの。代りに取つたこの振り袖、こんな形では屋敷へは歸られず、殊にコレコレ小藤太どのから、夫彌太夫どのへ來た大事の密書、つい袂へ入れて失うたわいの。
金兵　サア〳〵、そりやアとんだ事をなされたの。私しも曾我の屋敷から、預かつて置いた兵庫鎖、今日百兩受取つて、太刀は鬼王に渡して、歸つてよく〳〵改め見れば、一兩も殘らず皆銅脈。その出入りに行きまするが、お前もマア詰まらぬ形だね。
岩瀨　サア、さうは思へど、わしも怪しいは曾我の屋敷の奴等と聞いたに依つて、詮議ながら來たのぢやが、コレ、

どうぞ形の仕様はあるまいか。
金兵　イカサマ、どうぞお前に……オヽ、あるぞ〳〵。いま取返した來た女小袖がある。これでも着なさい。あまり見つともない。
ト捨ぜりふにて風呂敷の内の片袖なき小袖を着せる。
岩瀨　コレ〳〵、こりや片袖ないぞや。
金兵　ほんに、とんだ疵物にしをつた。アヽ、それを着たところが、矢ツ張り見ともないが……アヽ、斯うしやせう。この羽織で袖を隱しなさるがよい。
ト羽織を脫いで着せる事あつて
岩瀨　これでちつとは形が出來た。
金兵　ドレ、出入りにかゝるべいか。
ト金兵衞先に立ち、岩瀨、窺ひながら、門口へ來る。
鬼王は居るか〳〵。似せ金遣ひの鬼王に、逢はう〳〵。
ト内へ喚き込む。岩瀨、外に窺ひ居る。この聲に鬼王障子屋體より出で來り
鬼王　これは金兵衞どの、聲高に何を云はしやるのだ。
金兵　コレ〳〵鬼王どの、イヤサ、新左衞門、貴樣はイケ圖太い者ぢやアないか。先刻渡した百兩を、內へ歸つてよく〳〵見れば、コレ、みな銅脈。貴樣は似せ金を遣ふか。これぢやア濟まない〳〵。刀を返すとも、誠の金を渡すとも、早くしろ〳〵。
ト急いて云ふ。鬼王、思ひ入れありて
鬼王　すりや、なんと云はつしやる。先刻渡した百兩が、みな銅脈ぢやと云はつしやるか。
金兵　それ見ろ。誠の金は一兩もない。
ト打ちつける。
鬼王　アヽ、これで讀めた。表は情と見せかけて、似せ金貸したアノ下家の
ト炭櫃の方へ思ひ入れして、ツカ〳〵と行く。金兵衞留めて
金兵　ドッコイ、逃がす事ぢやアない。似せ金遣ひの新左衞門、でんどへそびいて吟味を請ける。サア、來やれ。
ト引立てにかゝる。月小夜、こなたの一間より駈け出て、これを留めて
月小　待つた金兵衞どの、鬼王どのを、こりやどうさんすのぢや。
ト縋るを鬼王、突き退け
鬼王　コリヤ月小夜、わりや鬼王が手を切つて、外に男を持つ氣ぢやないか。それに入らざる支へだて。ひよつと

一間の小五郎兵衛が聞いては、却つて其方の爲に……ナ、
サ、必らず構ふな。見ぬ顏せい。
トきつと云ふ。

月小　ハテ、さうであらうが、現在お前の
ト寄るを金兵衛引退け

金兵　コレサ月小夜、似せ金遣ひを庇ふのは、夫婦寄つての目論見か。

月小　ヤ、ナニ、似せ金を遣ふとは、心得ぬこなたの詞。鬼王どの、して、その金の出所は。

鬼王　サ、この金の出所は。

月小　どこから借りてござんした。

鬼王　この出所は。どうも云はれぬ。
ト思ひ入れ。此うち岩瀨、外にていろ／＼思ひ入れありて、內へ入り

岩瀨　コレ女中、その小袖を、どうして着て居やしやんす。

月小　エ。見馴れぬお方。こりやわたしが妹が手から
ト云はうとして思ひ入れあり、
アイ、わたしが小袖でござんすぞえ。

岩瀨　なんぢや、わたしが小袖ぢや。コレ、玆な女盜人めが。

月小　なんでわたしが盜人ぢやえ。

岩瀨　盜人ぢや／＼。昨夜梅澤の洗湯で、身ぐるみ取られたその小袖、唐草菱に花桐の定紋、裾はつかけ紅絹の隱し、袖の寸法壹尺壹寸、丈が四尺に裄七寸、袖口身巾の寸法でも、わしが方からさす程に、サア、こなさんの小袖なら、一々云うて見やしやんせ。

月小　サア、それはな。

岩瀨　覺えがなくばわしが小袖、湯屋で其方が、盜みやつたか。

月小　イ、エ、どうして其やうな。

岩瀨　そんならどうして着て居やる。

月小　サア、それはな。

岩瀨　云ひ譯はあるまいが。工藤の家中久須美が女房、云ひ譯立ちさうな女子ぢやない。エ、、玆な盜人めが。
ト月小夜を引廻して引据ゑる。鬼王、立ちかゝるを金兵衛引きつけ

金兵　ドッコイ、爰は動かさぬ。正眞の金を渡すか。

鬼王　サ、その金は

岩瀨　小袖の出所吐かさにや盜人、裸になるか。

月小　サ、それは。

金岩　サア。
四人　サア／＼／＼。
金岩　どうぢや。
　トきつとなる。時の太鼓になり、向うより宇佐美十内野袴大小、柿の鉢卷、十手を持ち、捕り手四人、黑羽織大小の形にて、一散に出て來り、門口にて
十内　ソリヤ。
　ト下知する。四人、バラ／＼と鬼王を取卷き。
四人　動くな。
鬼王　こりやお役人方、鬼王めに何科ござつて。
十内　ヤア、何科とは橫道者。見忘れたるか鬼王。夜前小磯の切通し、召捕つたる盜人閉坊、預け置きしを其まゝに、取逃して捨て置くは、底意の知れぬ新左衞門、殊更番屋のほとりにて、大藤內が橫死、切手の紛失。彼れこれ以て疑ひかゝつた。繩打つて引く。腕
四人　廻せ。
鬼王　御尤もなるお尋ね。繩附きの閉坊、取逃がせしは拙者が誤まり、さりながら、疑ひ請けて新左衞門、繩かゝる覺えござらぬ。
十内　ヤア、その云ひ譯暗い／＼。さほど明白なる其方が何ゆゑあつて閉坊を匿まひ置いた。
月小　ナニ、閉坊と云ふお尋ね者、なんのよしみで鬼王どの、よもやこなさん、匿まひ置かう緣はござらぬ。
十内　イヽヤ、あらがうても、もう叶はぬ。この屋敷へ匿まひしと、駕籠の者が訴へ。閉坊匿まひ置くからは、曾我の一家は盜人の同類だワ。ソレ、者ども踏ん込め。
四人　捕つた。
　ト十内先に踏ん込まんとする。鬼王、立つてこれをキッと留め
鬼王　ヤア、尾籠なり、お役人。小祿なれども曾我の屋敷。踏み込まんとは法式知らぬ我まゝ氣儘、達てとあれば身不肖ながら、新左衞門お相手になりませうか。
十内　サア、それは。
鬼王　但しこの家に匿まひしと、慥かな證據ござるかな。
十内　サ、その證據は。
鬼王　よもや證據はござるまい。
　トこの時、切り穴より
閉坊　その證人は爰に居る。
　トずつと出る。皆々見て
十内　さてこそ閉坊、匿まひ置くは、鬼王とても同類だな。

月小　そんならお前はお尋ね者の、あの閉坊と云ふ人を、なんのよしみで匿まはしやんした。コレ、鬼王どの、云ひ譯はござんせぬか。コレ、申し譯はござんせぬかいな。

　トいろ〳〵思ひ入れ。鬼王、差俯向き居る。

閉坊　ナニ云ひ譯があるものか。盗人夜盗の閉坊が、百兩と云ふ大金を、見兼ねて貸した曾我の屋敷。當がなくつて貸すものか。十内さま、首代を出すからは、よもや命は助かりませうな。

　トこれにて鬼王、思ひ入れあつて

鬼王　コレ閉坊、成る程昨夜の暗紛れ、手詰めになつた百兩の、道ならぬとは知りながら、借りたる金はコレ。

　ト財布を摑み、キッとなつて

皆似せ金、おのれはよくも鬼王に、この銅脈を握らせたな。

　ト思ひ入れ。

閉坊　コレエ、、鬼王、なんと云ふ。おれが貸した百兩が似せ金だとわりやア云ふか。コレエ、、さて〳〵われは盗人の上を行く、恐ろしい者だぞよ。おれが貸した百兩を、返すまいと思うて、誠の金は中でくすね、銅脈を先へ渡し、それをおれにぬすくりつけるか。よし又似せ金を貸したにもせよ、なぜその時に改めては借りなんだ。イヤサ、似せ金と知つてなら、なぜ昨夜わりやア借りたよ。今さら身拔けにかゝつても、所詮同類、首代だワ。盗人の上を越す、新左衞門の大盗人め。

　ト突きのめす。月小夜、無念のこなしあつて

月小　コレ、鬼王どの、お前マア、どう云ふ譯で盗人の金を借りなさんした。如何に金が欲しいと云うて、お前ばかりか、曾我一家のお名の出る事。そこに心が附かしやんせぬか。なぜにマア恐ろしい、さもしい金を借りなさんしたぞいなア。

　ト閉坊へ心遣ひあつて云ふ。

閉坊　ハヽヽ。さもしい金でも借りたが不肖。同類になるが否なら、金を返して身拔けをしろ。新左衞門、イヤサ鬼王。エヽ、誠の金を返さないか。盗人の金を借り、銅脈でこじつけるのか。うぬがやうな上前取りは、閉坊さまが以後の見せしめ、斯うしてくれべい。

金兵　似せ金遣ひの鬼王は、斯うするワ。

　ト兩人して鬼王を、散々に打つ。月小夜、この中へ入り

月小　こりや又あんまり。

鬼王　ハテ、いらざる女の小差出た。この鬼王が此やうに打ち叩かれても手出しもせず、チッとして打たるゝも、深い様子のナ。明かして云はゞ御兄弟、お二人様にめでたう御本望……サ、それゆゑいとはぬこの辛抱。必らず構ふな。扣へて居ろ。

ト　これにて月小夜、ウムと思ひ入れ。

閉坊　ハヽヽヽ、何を世迷ひ言を吐かしやアがる。上前取りめ。コレエヽ、十内さまのお指圖で、昨夜小磯の切通し、われが番屋へ預けられ、曾我の奴等の身元を糺せと仰せを請けて仕込んだ仕事。百兩巻上げ似せ金を、先へ渡してその科は、この閉坊に塗らうとは、丈の知れない鬼王め。勝手の違つた役廻りで、これからうぬを苛なむワ。誠の金を出さないか。出しやアがれ〳〵。

金兵　おれが百兩は、どうしやアがる〳〵。

ト　兩人して又打つ。この時、鬼王が懐より似せ切手落ちる。閉坊取つて

閉坊　さてこそ袱紗に血の附きあるからは、もしやは狩場の。

鬼王　それを。

ト　寄るを引きつけ、閉坊、切手を金兵衛が方へ投げる金兵衛取つて

金兵　なんだ。啞聾閉坊と書いてある。木札の折れ。なんの事だ。

ト　投げ出す。鬼王、取上げ

鬼王　ヤヽヽヽ、すりや切手にあらぬ似せ物であつたか。さうとは知らず、命に替へて……ホイ。

ト　當惑する。

閉坊　アヽ、これで讀めた。昨夜小磯で人を殺し、切手を取つたは鬼王だな。

金兵　太刀の質請け百兩は、どうしやアがる。

ト　打つてかゝる。鬼王、思ひ入れあつて、金兵衛を見事に投げつける。閉坊かかるを突き廻し、一腰を拔きかける。この時、月小夜寄つてこれを留めて

月小　コレ、待たしやんせ、こちの人。思ひがけないこなさんの懐中から、血汐の附いたその袱紗包み。中にありしは木札の折れ。もしやお前が。

ト　思ひ入れ。鬼王、月小夜をよろしく引き廻し

鬼王　コレサ、小祿取りの陪臣ゆゑ、辻切り強盗を働らくかと、世上の噂に云はゞ云へ、人を殺して切手とやら、盗み取つても何の益。たま〳〵昨夜百兩の、情の金は天

道より、忠義の二字を感應あり、我が急難を救はせしと
喜ぶ甲斐も情なや、乞食非人の閉坊が。

閉坊　ヤ。

鬼王　計略に落入つたるは何の科。する事なす事鵙の嘴。如何に身貧な曾我どのに、奉公しても武士の端、心の内の潔白も、誰れが一人それぞとも、どうして知らう、鬼王を、二股者と後指、さすも尤も、こりやその筈。先君川津の祐安さま、最期の後は附け渡り、二君に仕へる大腰抜け、役に立たずの私しでも、いづれも様のお取立て御贔屓厚き惠みにて、身にも應ぜぬ大役は、有り難いやら嬉しいやら、これぞ誠に鬼王が、目に持つ涙に引替へて、似せ金遣ひの惡名は、末代までの惡名に、ならうと思へば、コレ月小夜、それが口惜しい、口惜しいわえ。

月小　尤もでござんす。その辛抱もお主のお爲。

鬼王　主と病と云ふうちも

月小　貧の病で此やうに

鬼王　手詰めとなつても佛神の

月小　應護もないか、鬼王どの。

鬼王　エヽ、口惜しい。

十內　ヤアヽ、最前よりためらひ見るに、合點のゆかぬこの屋敷。奥へ踏ん込み、老母を詮議。

ト下の屋體へ駈け入らんとする。この時、障子の内より小五郎兵衞、衣裳上下に改め、十內が手先を捕へ、ツカ〳〵と出て、キッとなる。

月小　ヤア、お前は先刻の小五郎兵衞さん。

鬼王　衣裳上下改めて、立派な形のその出立ち。

小五　コレサ御亭主、その女房の月小夜も、相對づくで貰ひ受け、花聟なりの小五郎兵衞が、持たせて來たる上下小袖。コレ月小夜、お主はおれが女房ぢやないか。

ト思ひ入れにて云ふ。

十內　聟入り詮索聞きには來ぬ。曾我の屋敷を家搜しと、踏み込む座敷に怪しい奴。上下着ながら兩腰も、脇挾まぬは胡亂者。者ども、ソリヤ。

四人　捕つた。

トかゝるを見事に投げ退ける。一人の組子、立廻りのうち、一腰を落し、立廻りよろしく、四人一散に逃げて向うへ入る。

十內　手向ひひろがば。

ト立廻り。小五郎兵衞、十內が大小を立廻りのうちに取上げ、帯刀して、十手にてかゝる十內を見事に當て

ろ。ウンと倒れる。閉坊見兼ねて、ツカ／＼と寄つて
　小五郎兵衛にかゝるを、キッと留めて
小五　コリヤ盗人め、何とする。
閉坊　イヽヤ、盗人でない。氣絶なされた十内さまが、お
指圖で曾我の屋敷を、吟味に附け込むこの閉坊。して、
こなた様は、あなたの大小脇挾んで、なんの眞似だ。
小五　上より仰せを蒙むりて、非常を糺す、詮議の役目。
閉坊　して、こなさんは。
小五　工藤左衛門祐經が弟、伊豆の次郎祐兼なるワ。
閉坊　エ。
金兵　アノ、こなたが。
鬼王　左衛門さまの御舍弟にて、噂に聞きし伊豆の次郎、
祐兼さまであつたよな。
月小　知らぬ事とて、昨夜の體裁。こちの人。
　ト兩人思ひ入れ。
鬼王　月小夜。ハテナア。
小五　詮議の爲に町人と、姿を變へて何もかも、とくと様
子を
　ト三人、顔見合せ、思ひ入れあり
ハテ、夫婦艱難いたすなア。

　ト思ひ入れ。
岩瀬　現在主人の弟君、祐兼さまと云ふ事を、存ぜぬわた
しが不調法。アイヤ、モシ、祐兼さま、曾我の奴等は、
ハイ、盗人でござりまする。
月小　アコレ、滅多な事を。
岩瀬　云うてもよい。わしが小袖を盗んだ月小夜。それで
も曾我の鬼王が、連れ添ふ女房か。モシ、祐兼さま、怖
い奴等ぢやござりませぬか。
小五　して月小夜は、あの者が小袖を、いよ／＼盗み取つ
たか。
月小　イヽエ、全く持ちまして、どうしてわたしが其やう
な。
岩瀬　そんならその小袖を、お前どうして着てゐるえ。
月小　そればつかりは、どうも申し上げられませぬ。
岩瀬　どうして云はれう盗み物。裸にした上仕樣がある。
　ト月小夜へかゝる。立廻りの時、月小夜、最前手に入
りし密書、懷より落ちる。この時思ひ入れあつて
月小　アイヤ、お女中様、すりや、どうござりましても、
この小袖は、あなたの品と仰しやりまするか。
岩瀬　オヽ、くどい。わしが小袖に違ひない。

初演の繪番附

月小　して、あなた様は、工藤の御家中。
岩瀬　久須美彌太夫が妻の岩瀬。
月小　アノ、お前様が。
岩瀬　オイナウ。してこの小袖、盗まぬものなら、どうしてわが身は着て居やる。
月小　求めました。
岩瀬　ナニ、買つた。こりや面白い。買ひ取つたと云ふ證據があるか。
月小　ござりまする。古手求めて肌に附け、寒さを凌ぐ脊我の屋敷、キッと致した賣上げがござりまする。
岩瀬　ナニ、賣上げが添うてあるとか。それ見よう。
月小　その賣上げは即ち妾に
　ト密書を出し
久須美彌太夫どのへ、近江の小藤太。
　トこれにて岩瀬、金兵衛、恟りして
金兵　ヤ、その密書は。
　ト寄るを突き退け
月小　古手の小袖に添うた賣上げ、宛名はあなたのお連合ひ。御料の假家を鬼門に建て、逆木を以て普請の手配り、金兵衛さまの名宛もあり、切られさんした大藤内、これも同じく荷擔人の、密事を書いた文言は、なんとマア、よい賣上げでござんせう。
　トこれにて岩瀬、金兵衛、思ひ入れあつて
岩瀬　成る程、これはよい賣上げ。
金兵　文言と云ひ、おいらが名宛、書き込んであるからは
その賣上げを反古にせず
岩瀬　濟ます仕様はこの小袖、そりやわしがのぢやないわいなう。
月小　そんならあなたのお小袖では、いよ／＼ないに極まりましたか。
岩瀬　わしが小袖と云うたは粗相。
月小　謂りの立つたこの賣上げ、こりやさうありさうなものぢやの。
小五　この結納が持參なし、館に於て密書の詮議。その張これへ。
　ト月小夜、小五郎兵衛へ渡す。
岩瀬　こりや味に纏れて來たわいなう。
　ト閉坊と顏見合せ、思ひ入れ。
閉坊　ハテ、何か出やうが氣遣ひなさるな。これからそれそれ人殺しの詮議。この伊達紋は垣に朝顏、この片袖に

對した小袖、着て居る奴は正しく月小夜。われが小袖で
あらうがな。
月小　サ、それは。
閉坊　人殺しだと早く名乗れ。
金兵　それ〳〵、この金兵衛が仕送つた、小袖の片袖、も
う叶はぬゾ。ほざいてしまへ。
月小　サ、その儀は。
岩瀨　その實上げでは問まうが、あの片袖では、何として
何として、遁れぬ所。白狀しや。云はぬと岩瀨が手を下
ろし、輔兼さまへの奉公始め。密書の垢を拔かねばなら
ぬ。サア〳〵〳〵月小夜、キリ〳〵白狀しや。
ト羽織を脫ぎ捨て、月小夜へ立ちかゝる。小五郎兵衛
これに目を附ける。閉坊も持つたる袖と岩瀨が着て居
る片袖揃ひしゆゑ悄りする。岩瀨これに心付かず、月
小夜へ立ちかゝる。閉坊、シイ〳〵と留める。小五郎
兵衛、思ひ入れありて
小五　コリヤ〳〵岩瀨、もうよい加減に精を揉め。ソレ、
袖の切れは其方が着物。人殺しぢやと白狀せい。
岩瀨　エ、、、。
ト悄りして我が姿を見て
コレ〳〵金兵衛、こりや、わが身が先刻着せやつた小袖
覺えがあらう。どうぢや。
金兵　サア、元にあれなる月小夜から、取返したその小袖。
どう廻つても月小夜が。
小五　默れ町人、何へ、出所は何れたりとも、差當つてあれ
なる岩瀨が、片袖ないは不審の一つ。その云ひ譯はある
まいがな。
岩瀨　ア、コレ、なんの云ひ譯ない事が。この小袖は金兵
衛が、いんまの先刻あの道で。
小五　然らば町人、其方が、人殺しの荷擔人か。
金兵　ア、コレ、どうしてマア私しが。
小五　いづれ解らぬ小袖の疑ひ。その疑ひは岩瀨にかゝる。
家來十内、彼れに繩打て。
十内　心得ました。
ト上着を脫ぎ捨て、奴の形になり、ツカ〳〵と寄つて
岩瀨にかゝる。逃げんとするを取つて引敷き
捕つた。
ト早繩たぐつて、縛り上げる。皆々見て思ひ入れ。
金岩　ヤ、こりやどうぢや。
十内　閉坊を探らん爲、似せ役人と樣を替へ、坊主が手先

へ廻つたも、祐兼さまのお指圖ゆゑ。誠はあなたのお草履摑み、十内と云ふ奴らさ。手盛を喰つた岩瀨どの。お旦那、首尾よく參つたではござりませぬか。

ト落ちてある一腰を差す。

岩瀨　ヤア、そんなら氣絶の十内どのは、矢ツ張りあなたの御家來か。さはさりながらわたしには、何の科にてこの繩目。

小五　科は即ち密書の宛名、近江の小藤太成家が、惡事に組みする其方が夫。金兵衞とてもかゝり合ひ。詮議濟むまでその繩附き、町人、其方に預けたぞ。

金兵　アノ、この女中を私しに。

小五　密書に其方が名前あれば、詮議濟むまでかゝり合ひキツと番當いたしてよからう。

金兵　イヤ、これは迷惑千萬な。

閑坊　あの讀賣りと云ひ合せ、仕事にかゝつた小磯の番屋。却つて此方が仕事の裏を、一杯掻いた祐兼さま。シタガおれは首代で。

小五　イヽヤ、其方には詮議がある。

閑坊　なんの詮議を。

鬼王　誠の切手を奪ひし詮議。

閑坊　コレェ、鬼王、わりや又この閑坊に、難題を云ひかけるか。われが懷からたつた今、血の附く袱紗に似せ切手。さすればわれが

鬼王　盜まぬ證據。

閑坊　何がどうした。

鬼王　サ、木札の折れに書いたる文字は、啞聾。

閑坊　ヤ。

鬼王　誠の切手は正しくわれが。

ト かゝるを小五郎兵衞留めて

小五　コリヤ……この似せ物を鬼王が、例へ所持して居らうとまゝ、木札の文字は啞聾、閑坊と記しある。それになんぞや言舌も鮮やかに、似せ物の修行者。こりや一詮議せずばなるまい。

閑坊　サ、それは。

小五　どうぢや。

閑坊　イヤ、片輪と見せて往來の、情を請けるが、物貰ひの附け目サ。

鬼王　イヤ、怪しいはわれが懷中。

ト また閑坊へかゝらうとするを、小五郎兵衞留めて

小五　すりや、いよ／＼其方は、切手の在所知らぬと申す

か。
閉坊　如何にも左樣。
小五　ア、こりや今荒立てゝはナ。
　ト思ひ入れあり
サ、この所にて詮議立て致しなば、曾我の屋敷のかゝり
合ひ。何事も身共に任せて……コリヤ閉坊、すりやどう
あつても切手の在所、其方は知らぬか。
閉坊　どうしてわしが。
小五　ハテ、其方ばかりは存じ居らうと思ひしに、ハテ、
存ぜいで殘り多い……疑ひかゝりし鬼王は、閉坊、其方
に預けたぞ。
閉坊　ナニ、鬼王を閉坊に
小五　預けるからはこの家を、一時片時も出られまい。
鬼王　すりや、どうあつても疑ひが。
小五　かゝりや繫がる新左衞門、切手の疑ひこの閉坊、鬼
王しかと預けたぞ。
鬼王　ナニ、閉坊を私しに
閉坊　お預けなされし祐兼さま、切手の詮議、似せ物の、
明りを立てさすお心と。
小五　流石は月小夜、察しの如く、互ひに預け預かるは、

心あつての曾我への寸志。正しく切手は
　ト閉坊に思ひ入れあつて
キッと詮議を致せよ兩人。
閉坊　心得ました。
月小　鬼王どのはこなさんが
閉坊　預かるからは曾我の屋敷、貧乏搖ぎもせぬのが役目。
月小　そのこなさんを鬼王どのに
鬼王　預かり者とあるからは、敷居の溝も越えさせぬ。
月小　鬼王。
閉坊　閉坊。
小五　兩人しかと
閉坊　預かりました。
鬼王　正しく切手は。
閉坊　ドリヤ、火にあたらうか。
金兵　サ、それで其方は濟まうとも、濟まぬのはこの金兵
衞。刀の百兩受取らうか。
　ト鬼王にかゝる。
鬼王　サア、その金は。
　トつかへる。
金兵　なくばいよ〳〵うぬらは騙り。似せ金遣ひめ。

ト鬼王を引きつけようとする。小五郎兵衛引退け、金兵衛を見事に投げ退け、起き上がつて來るを、百兩包みを打ちつける。金兵衛の額へ當り、ワッと云うて額を抱へ、百兩取つて

これは。

小五　劍の代金、身共が立替へ。

金兵　アノ、このお金を。

ト戴く。

月小　すりや、百兩の劍の代金、祐兼さまが。

鬼王　御芳志あつては後日の邪魔。敵の手から情を受けなば。

小五　イヽヤ曾我へは用立てぬ。貯へ置いた百兩は、最前持つたあの女房、心に叶はぬ女ゆゑ、いま又彼れに暇をくれた。

月小　そんならわたしに。

小五　今日縁付いた女房を、その日に直ぐに暇をくれた。手切れの百兩、女へくれた。曾我へは決して用立てぬ。

鬼王　この場の難儀を祐兼さま。

月小　わたしへ賜はる縁切りの、手切れの百兩。

鬼王　とは云へ現在敵たる。

ト思ひ入れあり

サ、騙り或ひは似せ金の、その疑ひよりこの手詰め、用立てもらふ百兩も、情は情仇は仇、やがて恨みの

トきつと小五郎兵衛を見詰めて思ひ入れ。

小五　ハテ、鬼王が今の詞。疵持つ足にあらねども、何とやら兄左衛門を、曾我殿ばらは敵と狙ふと聞きつるが、それぞ誠に心得違ひ。祐經何の恨みにて、祐安を……とサ今さら云うても卑怯と云はん。敵と思はゞ附け狙へ。討たるゝものなら新左衛門、見事祐經二人に討たせよ。弟祐兼あるうちは、指でもさゝす事ではない。ハヽヽヽいらぬ腕立て、及ばぬ事を。

金兵　百兩濟めば云ひ分ない。シタガ氣障なはこの女中。

岩瀬　小袖の疑ひ思はぬ纏目、悉皆質屋の代物同然。

十内　無駄事云はずと立たつしやい。

小五　祐兼も此まゝ歸宅せん。滿江どのへもよしなに傳言。

鬼王　然らば重ねて。

小五　鬼王月小夜。

月小　祐兼さま。

小五　おさらば。

ト唄になり、岩瀬が纏を金兵衛扣へながら、小五郎兵

衛、十内草履を摑み、向うへ入る。閑坊、上の方へ入る。月小夜、後を見送り、思ひ入れあつて

月小　敵ながらも情ある、祐兼さまの今の詞。兵庫鎖の代金を、わたしが事に取交ぜて、用立つてござんした、あの百兩も敵の手より

ト兩人思ひ入れあり。

ア、儘ならぬ事ではあるぞ。

閑坊　工藤一家の人々の、恩を受けては我れ〳〵が、草葉の蔭の祐安さま。

月小　さは思へども渡さねば、ならぬ手詰めの金ゆゑに

閑坊　道ならぬとは知りながら

月小　ソシ。

ト兩人、思ひ入れあつて

閑坊　金が敵の

兩人　浮世ぢやなア。

ト手を組んで屈托の體。合ひ方になり、上の障子を明け、十六夜出て來り、月小夜方へ差寄り

十六　姉さん、先刻からのも〳〵、あの一間で聞いて居やんしたが、お二人ながら重なる御難儀、わたしも推量して居るわいな。

月小　妹、其方も樣子聞きやつた上は、何も云ふには及ばねど、なせる罪とは云ひながら、何事もお主のお爲と、諦らめて居るわいの。

ト面目なき思ひ入れ。十六夜、摺り寄つて

十六　申し姉さん、何やかや苦勞しなさんす、その中へ、心ないやうぢやけれど、ちつとわたしや願ひがあるわいな。

月小　コレ十六夜、改まつた願ひとは、そりやマアどのやうな事ぢやぞいの。

十六　アイ、別の事でもござんせぬが、この年月御恩になつた、姉さんの手前と云ひ、殊さら御難儀なその中へ、搗て丶加へて云ひ惜い事ながら……ヱシ、姉さん、今からわたしと、姉妹の緣切つて下さんせ。

月小　ヤ、なんと云やる。

十六　勘當して下さんせいな。

トこれにて月小夜、思ひ入れあつて

月小　コレ妹、わが身そりやマア、氣でも狂ひはせぬかいの。壁に馬を乘りかけたと云はうか。女子の身で勘當受けたいとは、そりやモウ、よく〳〵な譯もある事ぢやあらうけれど、他人ではなし、この姉に一通り。

十六　アイ、譯を云へなら申しませう。如何に貧苦に迫ればとて、あまりと云へば大それた、お前方のなされ方。身元も知れぬ者からして、大枚の金借りなさんして、その上にヤレ似せ金使ひぢやのなんのと、ぶち打擲にあはんして、殊には姉さんも多くの人を、騙し込んで物取り同然。其やうなマア恐ろしいお前方を、兄弟に持つて居ては、末の程が思はれまする。アイ、それぢやに依つて向後わたしをフッツリと、緣切つて下さんせ。姉さん、斷わりました。今から他人でござんす。これからこの屋敷を出て行く程に、さう思うて下さんせ。アイ、斷わりましたぞえ。

　トずんと立つて行かうとするを、月小夜留めて

月小　ア、コレ、妹待ちや。成る程、尤もなわが身の詞。わしら夫婦がこの始末、恐ろしい事ぢやと思やるは、尤もぢやが、コレ、姉が力に思ふは、十六夜其方一人、その妹が今さらさう云ふ心になりやつては、力なう思ひまする。コレマア、とつくりと譯を聞いたその上で。

十六　イエ〳〵、否でござんす。見聞きするも恐ろしい、道に背いた事だらけ。

月小　イ、ヤ、道に背いた事と云やれば、コレ妹、わが身も道に背いた事せぬでもないぞや。

十六　エ。

月小　コレ、先刻にもわが身の針箱の內から、多くの提げ物櫛簪、殊にわしが着て居るコレこの小袖、この出所も道に背いた……サ、云へば互ひに血で血を洗ふ、姉妹の顏のすたる事ゆゑに、この姉は口外せぬぞや。サ、これも矢ッ張りお主のお爲と思ふゆゑ、わしが力になつてもらひたさ。緣切らうと思やる心を取り直して。

十六　イエ〳〵、否でござんす。なんのお前、隱して下さんすには及ばぬ事。わたしや恥かしいが、アイ、盜みをしやんす。それもこの身につける事か、身貧な御主人、殊に百兩といふ劍の質請け、その日限りも今日が切端。ちつとも足しにと思ふから、心にもない盜み事。ハテ、人さんの物盜まないで、どうしてマア金が出來やうぞいな。畢竟それが否さにナ、緣が切つてもらひたいのでござんすわいな。

月小　成る程、さう云やればそれもわが身が、尤もぢやと思うては見るものゝ、ひよんな所で拾うた片しのこの木櫛、こりや其方のであらうがの。

　ト前幕の片割れの櫛を出す。十六夜見て、ハッと思ひ

ながら、素知らぬこなしにて

十六　イヽエ、そりやわたしが櫛ぢやござんせぬ。

月小　紅葉に鹿のこの蒔繪、覺えあるを、其方のでないとは。

十六　アイ、わたしが櫛の片しは、爰に持つて居やんす。そりやわたしが櫛ぢやござんせぬ。

ト片割れ櫛を出して見せる。月小夜、合點のゆかぬこなしにて、取つて合せ見て思ひ入れ。

月小　片割れ櫛の模様も、しつくり合ふと云ひ、それが昨夜の暗紛れ、

ト思ひ入れあつて

ムウ、これで讀めたわいの。コレ妹、其方、生別れせし父親に、こりやてつきり逢やつたであらうがの。

十六　エ。サ、それは。

ト思ひ入れ

月小　サ、逢うたに違ひあるまいがの。

十六　成る程、逢ひました。片割れ櫛の揃ひし上は、隱すに及ばぬ。姉さん、お前の推量の通り、生別れせし父さんに、逢ひましたわいな。

月小　アヽ、さうであらう〳〵。生別れせし父親に逢ひしと云ひ、急に緣切つて欲しいとは、わが身、誠の親を、今さら便つて行く心に、なつたのであらうがの。

十六　アイ、成る程さうでござんす。常からモウ〳〵、愛想の盡きたこのお屋敷。どうぞこの身の拔けやうも、あらうかと思うて居る矢先、藁の上から別れたる、その父さんに逢ひしゆゑ、一緒に居て、わたしが過さにやなりませぬ。それゆゑに先刻から、緣切つて下さんせと云ふぢやござんせぬか。姉さん、サ、早う勘當して下さんせいなア。

トこれにて月小夜、腹の立つ思ひ入れあつて

月小　コレ妹、其方はマア、ようそんな事が云はるゝなう。如何に實の親に逢うたと云うて、コレ、義理のあるのが浮世ぢやぞや。手足を伸して育てたは、誰れが庇ぢやと思やるぞいの。常々も云ふ通り、伊豆の下田の裏家住居。隣同士の女浪人、末期の際に乳吞みのわが身を、わしが父さんへ涙を流して、賴まんすゆゑ不便な事と、貧しい中へ引取つて、この月小夜が妹にして、十八年の今日まで、育てた恩を思はぬかいの。身貧な曾我に愛想が盡き、心の變るは若い者の、尤もな事ぢやと思ふが、親に逢やつたに依つて勘當され、實の親へ便りたいとは、そりや

義理知らず道知らず、人でなしと云ふものぢやわいの。

十六　アイ、人でなし合點でござんす。若い身空でウカウカと、爰に居る程出世の妨げ。なんぼわたしがやうな醜い生れでも、女に生れた有り難さは、身を切賣りの商賣しても、見事暮らして見せやんせう。義理立てばかり思うては、いつまでも限りがない。ハテ、合せ物は離れ物、姉さん、早う勘當して下さんせい。

月小　勘當せいでか。心の腐つた妹を、なんで爰の屋敷に置かう。願ひの通り、サア／＼、出て行きや／＼。早う出て行きやいなう。

ト門口の方へ突きやる。この時、奥より滿江出かゝり窺ひ居る。

鬼王　ア、コレ月小夜、成る程、妹が今の詞、腹も立たうが、逢うて居ても其方は姉妹、この鬼王には義理もある。コレ十六夜、父親の所へ行きたくば、やりはやらうが、して、その親御の家名は。

十六　イ、エ、その名も所も云はれませぬ。ハテ、なんぞと云ふと人に無心合力は、曾我さまのお定まり、わたしが父さんが出世の上、十八年がその間、わしを育てた事を云ひ並べ、恩があるのなんのかと、それから便つて來られては、わたしが迷惑するわいな。それぢやに依つて父さんの名も行く先も、滅多には云はれぬわいな。

月小　アレ、あのやうな道に背いた

ト立ちかゝるを滿江留めて

滿江　ア、コレ月小夜、委細はあれから聞きました。腹立てやるも尤もながら、いま十六夜が誠の親を、過しに行くと云やるからは、只一筋に道に違うた事とも云はれぬ。コレ／＼十六夜、其方も實の父親と一緒に、暮らしたい願ひは無理ではないが、其やうに縁まで切つて行きやらずとも、これまでの通り縁を繋いで、父親へ出入りしやつてもよいぢやないかや。

十六　イエ／＼、それでは親が得心いたしませぬ。ハテ、身貧な曾我さま、わたしが足にして、無心合力云はれでは、聞いて居るわたしも立たず、且は何かとうるさうござんす。十八年の恩は恩、合せた物は離れ物。曾我と聞くさへ、オ、恐ろしや／＼。身の毛もよだつて怖うござんす。サ、早う縁切つて下さんせぬかいな。

滿江　この母が詞も用ひず、そんならどうでも。

十六　ハテ、退いて居なさんせいな。

ト滿江を手荒く引退け、行かうとする。この時、藪の

內より閉坊、切手を啣へ窺ひ出る。向うより金兵衛、一本差し。岩瀨、懷劍を持つて出で來り、三人行き合ひ囁く。兩人は藪の內へ忍ぶ。閉坊、花道に窺ひ居る。月小夜、十六夜が胸づくしを取つて

月小　エ、マア、大それた妹。御老母樣を手荒うして、おのれは天魔に魅入られたかいの。

十六　アイ、天魔の魅入りか外道の業か。早うわたしは勘當が、してもらひたうございます。サア、勘當はどうしなさんすえ。

月小　オヽ、勘當しませう。望みの通り妹が勘當。今から姉でも妹でもない。赤の他人ぢや。早う出て行きや。

十六　嬉しうございます。行かいでわいの。ドリヤ、結構なお屋敷を、緣切られて參りませうか。

ト門口へズッと出る。

月小　アレ、あのやうな。

ト急いでかゝるを、鬼王留めて

鬼王　これサ、急かずととつくり……コレ十六夜、すりや今日から姉と、愛想づかしをしやつても

十六　このお屋敷に居ぬのが勝手サ。

月小　まだ憎て口。

ト立ちかゝるを十六夜、外より戶をシャンと立てきり

十六　今まで何かと姉さんの御丹精。

ト　ほろりとする。

月小　サ、その丹精せし義理もなく

滿江　姉を捨てゝも實の親。

鬼王　便つて行くもこれも孝。

十六　孝と不孝と二道に、迷ふわたしが云ひ譯は

月小　ナニ、云ひ譯とは。

十六　この文言を。

ト密書に櫛を卷き、外より投げ込み

免して下さんせ。

ト時の鐘になり、ツカ〳〵と行きかゝる。花道に窺ふ閉坊、ズッと寄つて十六夜を見事に引ッ擔ぎ、向うへ一散に入る。內の三人、書き物に目を附け

鬼王　ヤ、外から投げ込むその書き物。

滿江　添へてあるのは慥かに木櫛。

月小　愛想づかしのあの十六夜、もしや妹が書置か。

ト取り上げる。

鬼王　ドレ。

ト開き

「兼ね／＼內談極め候ふ……」
月小　モシ、書置でござんすかいな／＼。
鬼王「兼ね／＼內談極め候ふ……」ハテ、變つた書置。
月小　エヽ、此方へ見せなさんせ／＼。
ト密書を開き。
「兼ね／＼內談極め候ふ一儀、この度夏狩までに成就いたすと存ぜられ候へば、當時主人の子息と致し置かれ候ふ御實子犬坊どの儀」
ト讀みさし
こりや書置ぢやないわいなア。
鬼王　書置ならねど怪しき文言。
滿江　マヽ、その後は。
ト月小夜、讀まうとする。金兵衛岩瀨、窺ひ寄つて
岩瀨　それ讀まれては。
金兵　その狀渡せ。
トかゝるを鬼王月小夜、二人を相手に立廻りあつて、キツと引敷き
月小「祐經假屋の越度これあるに於ては、早々跡目の願ひ申し立て、三箇の庄を領地いたさるゝの段、相違あるまじく候ふ」

滿江　ハテ恐ろしき企みの密書。
金岩　南無三、それを。
トかゝる。立廻りあつて鬼王、二人を引敷き、密書の後の方を引ッ張り見て
鬼王「それにつき、過ぎし安元二年の頃、離別いたされ候ふ犬坊どのゝ母御、當歲の娘を連れ、伊豆の下田に住居の由」
ト讀みさす。月小夜、思ひ入れあつて
月小　エヽ、なんと讀みなさんした。伊豆の下田に住居とは。心當りのその文言。ドレ／＼、見せて下さんせ。
ト密書を取らうとする。
金兵　その狀渡せ、
トかゝる。鬼王當てる。金兵衛ウムと倒るゝ。岩瀨かかるを鬼王引きつける。滿江取つて
滿江「伊豆の下田に住居のよし、聞き傳へ罷り在り候へば、この度早速彼の地を相尋ね候へども、年移り候うて、いづれに住居いたされ候ふや、在所分明ならず候ふ段、わざ／＼申し遣はし候ふ……ヤヽヽ。こりや違はぬ十六夜が、親の素性の知るゝ文言。
岩瀨　ドレ、その後は、わしが代つて。

トかゝるを月小夜、キッと留めて居る。鬼王、密書を
取つて
鬼王「然れども又ぞろ手段を以て、詮議いたすべく候ふよし申し越し候ふ、以上、月日、小藤太どのへ、久須見彌太夫ーヤ、、、さてはあれなる十六夜は。
月小　敵の片割れ小藤太が、娘であつたか、鬼王どの、知らぬ事とて十八年。
滿江　敵の種を養育の
鬼王　我が身の素性恥かしく
滿江　心にもない憎て口、愛想づかしの十六夜が
月小　書置ならぬこの密書、これを渡して妹は、もしや死にには行くまいか。鬼王どの、こりやマアどうせう／＼ぞいの。
鬼王　現在敵の種と知り、もしやは曾我の人々に
滿江　討たれん爲の惡口か。鬼王、其方は後追うて。
鬼王　心得ました。
月小　例へ敵の小藤太が、娘なりとも十八年、手しほにかけたあの十六夜。
鬼王　行くへを尋ねん、さりながら、切手を隱すは正しく閉坊。

岩瀨　その閉坊は裏道から
金兵　とつくに逃げてしまつたワ。
鬼王　ヤ、、、。すりや手に入りし閉坊を
月小　取逃がせしか。こちの人。
鬼王　それも妹を尋ねる次手。
滿江　心懸りは相模川、四の宮河原を、ちつとも早う。
鬼王　心得ました。
ト狀を持つてツカ／＼出ようとする。
岩金　その狀渡せ。
トかゝるを見事に投げる。立廻り。四人、廻し道具の上へ乘り、岩瀨、懷劍にて滿江へ突いてかゝる。金兵衞、拔いて鬼王へかゝるを、月小夜立廻つて、金兵衞が刀を奪ひ取り、一太刀浴せる。滿江、裾を搔いて岩瀨を引敷き
滿江　敵の片割れ、母が手の內。
鬼王　お出かしなされた。
月小　妹が後を。
鬼王　合點だ。
トごん／＼にて鬼王、密書を持ち、一散に向うへ入る屋體はこの見得にて、この道具をぶん廻す。

本舞臺、正面、黑幕、向う高土手に松並木、所々に稲村、よき所に大きなる石の榜示、これに道了權現道江戸吉原講中と朱にて記し、千部開帳札澤山に掛け、舞臺前浪板、流れ灌頂。上の方、土橋、すべて高津の棒鼻、小動木のあたり。時の鐘、波の音にて道具とまる。

ト向うより閑坊、十六夜を引ッ擔ぎ、一散に出て來り、本舞臺へ來て、捨ぜりふにて、十六夜を下ろし、抱きつきにかゝる。顔をくらはす。

閑坊　オヽ、痛い〱。コレエヽ、何もそれ程打つ事はない。憎くはあるまいが。マア、ちよつと口々を〱。

ト寄るを突き退け

十六　エヽ、なんだや、アタ憎てらしい。わしや心の急く事があるわいの。殊に其方は唖聾の、眞似をして居るあの閑坊、出家の癖に女子を捕へて阿呆らしい。そんな出家があるものかいの。

閑坊　アイ、あるのサ、隨分あるの。あるに依つて、おれがやうなのがあるワ、坊主だと云つて、女を抱いて寢ないものか。コレ、てまへ、釋迦の昔を知らないか。

十六　エヽ、知らぬわいな。

ト逃げんとするを引きつけ、裾へ大石をドンと置いて

閑坊　ドツコイ、逃がすものか。コレ、てまへ知らずば愚僧がお說法を始めるから聽聞しねえ。

十六　エヽ、放しやいなう。

ト行かうとするをキツと留めて卒塔婆を取つて

閑坊　さて、坊主が女を抱いて寢ても、罪にならぬと云ふその理解を說く程に、聽聞いたされい。エヘン、誠に天竺にては釋迦牟尼佛、四十四年の說法にも、振り袖と留めと形は變れども、裸にすればこれ同じ姿ぞとお說きなされた。釋尊もやすたら女と契りを籠め、らごらと云へる一子を儲け給ふ。一子出家すれば、久八癲癇を病む〱佛の數へは有り難い。南無阿彌陀佛々々々々々。

ト卒塔婆にて石の上を叩き、談義の思ひ入れ。

十六　なんの事おやぞいな。コレ、そこ退いて、どうぞ通して下さんせ。

閑坊　なんだ、通してくれろ。コレエヽ、われをばナ、鬼王から貰つて來たわエヽ。

十六　ナニ、鬼王さんが、どうしたと云やる。

閑坊　コレエヽ、彼奴に貸した百兩を、銅脈と摺り替へや

アかつた。そこで百兩の代りに、われを引ッ擔いだワ。これから思ひ入れ抱いた後で、百兩に賣らにやァならぬ。サ、その前に、ちよつと〳〵。

ト抱きつく。

十六　エヽ、薄穢ない。爰放しやいの。

ト突き退け、逃げようとする。

閑坊　ドッコイ、逃がしはしないぞ〳〵。

ト舞臺をあちこち追ひかけ廻して居る。禪のツトメになり、向うより團三郎出て來り、この體を見て、ツカツカと來て、閑坊を引き退け、十六夜を圍ふ。

十六　ヤヽ、團三郎さんか。

團三　十六夜どの、心得ぬ。このマア坊主は何者だ。

十六　サア、先刻にからわたしを捕へて、無體な事ばつかり云うておやわいの。

團三　氣遣ひさつしやるな。いゝ所へ來合せた。サ、坊主め、うぬ、爰をなくなりやアがらないか。

閑坊　おきやアがれ、湯島の年明けめ、その女めを抱いて寢ぬうちは、滅多になくなるものか。うぬ、退きやアがれ。

ト立ちかゝる團三郎、取つて引寄せ

團三　エヽ、うぬ、身の程知らねえ乞食坊主めが。うぬがやうな奴は、かウ〳〵〳〵。

ト打ちのめす。

閑坊　オヽ、痛い〳〵〳〵。どうしやアがる。殺しやアがるかえ〳〵。

團三　うぬ、これでも無法しやアがるか。

ト捻ぢあげる。

閑坊　ヤヽ、痛い〳〵、誤まつた〳〵。もう惡い事はしねえ。放してくれろ〳〵。

團三　手出しをひろがずば、ソレ、助けてやるワ。

ト花道へ投げやる。閑坊、しく〳〵泣いて

閑坊　むごい丁稚どの。坊主が女を口說からが、惡い事をしやうと寢やうと、いらぬお構ひ。コレ、こなたの意見もいらぬ。エヽ、胴慾な。姉さん、覺えてござれ。

團三　まだうせ居らぬか。

トくらはす。

閑坊　アイ〳〵、坂は照る〳〵鈴鹿は曇る、間の土山雨が降る。

ト暮れ六ツの鐘。閑坊、向うへ行きかゝつて思ひ入れ、團三郎、鐘を數へる事あつて思ひ入れ。

十六　コレ、團三さん、ありやもう暮れ六ツぢやないかえ
　サ、暮れ六ツ打てば例の鳥眼、發らぬうちに。
團三　ア、、、どうやらモウコレ、見えなくなつて來ま
　したわえ。
　ト俄に鳥眼の思ひ入れ。閉坊、これを聞き、戻つて來
　る。團三郎、捨ぜりふにて行かうとする。閉坊、ツカ
　ツカと寄つて刀を引ッたくる。
團三　ア、コレ、何者ぢや。團三が刀を。
　ト寄るを一太刀浴せ、立ちかゝつて團三郎を踏みつけ
　る。
十六　ヤア、團三どのを。
　ト寄る十六夜を引ッ抱へ、刀を振り上げる。忍び三重。
　一つ鉦の念佛。
團三　ヤア、騙し討とは卑怯な閉坊。
閉坊　やかましいワ。サア、十六夜、否と吐かせば、この
　盲目めを嬲り切り。抱かれて寢にやアわれも次手に、相
　伴させうか。
十六　サア。
閉坊　抱かれて寢るか。
十六　サア。
閉坊　但しは否か。
十六　サア。
閉坊　ぶッた切らうか。
十六　サア。
兩人　サア〳〵〳〵。
閉坊　十六夜返事は、どうしてくれる。
十六　エ、、否ぢや〳〵。否ぢやわやい。
閉坊　否と吐かせば、この餓鬼めを。
　ト切らうとする。
十六　ア、コレ。
團三　イヤ〳〵、氣遣ひさつしやるな。例へ薄手を負うた
　りとも、この團三があるうちは。
閉坊　べら坊め、うぬはそこに明日の朝までも、とこぼえ
　てうしやアがれ。
　ト蹴倒す。團三郎、足に縋つて
團三　エ、口惜しい。兩眼明らかならざるゆゑ、手籠めに
　遭ふか。殘念な。
閉坊　エ、、この餓鬼めは、イケしつこい。まだくたばら
　ねえか。いつそ息の根をぶッとめて。
　ト切つて行く。立廻りにてこの刀を團三郎取つて、探

初　演　の　繪　番　附

り切りにする。閉坊、この手を取つて、捨ぜりふにて立廻りにて、思はず十六夜を一刀切る。倒るゝ。

イヤア……サア〳〵、とんだ事をしやアがつたな。大切の十六夜をやらかしたな。うぬは女房の敵だ。くたばつてしまへ。

ト切りける。閻三郎、この手に縋つて

閻三　すりや、どうあつても閻三郎を

ト無念の思ひ入れあつて

エヽ、口惜しい。死ぬる命ほ惜しまねど、盗賊の為に一命果すは佛の罰、佛の報いに淺ましい。曾我を守りの佛神も、見捨て給ふか、殘念な。

閉坊　エヽ、執念深いどう盲目め。閉坊さまの引導で、うぬは往生かんまみ陀佛。くたばつたその後から、抱かれて寢ねば十六夜も、おツつけやるワ。氣遣ひなしに冥土へ行き、三途の川の川端に、輕石積んで待つてけつかれ。

閻三　おのれ恨みの。

トかゝるを蹴飛ばす、大石を取つて

閉坊　なまいだ〳〵〳〵。

ト閻三郎を打ち殺す

サア〳〵、餓鬼めはたうとう往生した。サア、これからは十六夜。斯うして置いて、ちよつとわれを。

ト乘りかゝる。十六夜、刀を取つて閉坊に浴せる。

オヽ、痛い〳〵。わりやひどい事をしたな。併し、てまへへの心中と思へば有り難いの。

ト刀をもぎ取り、十六夜が上へ乘りかゝるはずみに、懷の切手を落す。十六夜取つて

十六　こりやコレ切手。

トこれにて閉坊、思ひ切つたる思ひ入れにて

閉坊　エヽ、くたばつてしまへ。

ト白刃を振り上げる。禪のツトメになり、向うより鬼王、一散に出て來り、この體を見て、閉坊を突き退け十六夜を圍ひ、兩人顏見合せ

鬼王　閉坊か。

閉坊　ヤア、鬼王か。

鬼王　ハテ、よい所で

閉坊　惡い所で

兩人　逢つたなア。

閉坊　覺悟ひろげ。

ト切りつける。立廻りあつて刀を奪ひ取り、一太刀切る。閉坊倒るゝ。鬼王、十六夜を介抱して

鬼王　ヤ、わりや十六夜。思はぬ深手。コレ、心を慥かに
コレ十六夜。
ト呼び生ける。十六夜、思ひ入れ。これより草笛入り
の合ひ方。
十六　鬼王さん、遅かつた〳〵わいなう。鳥眼の病に團三
さんも、刀をもぎ取り、むごたらしう。
鬼王　ヤ、、、。すりや弟めも
ト死骸を見附け
不便な最期も閉坊ゆゑ。コレ十六夜、其方が殘したこの
一通、こりや小藤太が惡事の密書、揃ひし木幡の模様と
云ひ、其方が誠の父親は。
十六　モシ、推量して下さりませ。
鬼王　サ、云はずと素性は敵同士。
十六　十八年の大恩も、只一時に姉妹の
鬼王　例へ敵の胤なりとも、年月手汐にかけたる妹。コレ
ト捨てありし刀を取つて思ひ入れあり
この鬼王が刀にて、命を捨てるか。
十六　エ。すりやその刀は鬼王さんの
鬼王　團三に渡せし我が魂ひ。
十六　エ、、嬉しや本望。

鬼王　ヤ、なんと。
十六　サ、敵の血筋十六夜を、鬼王さんの刀にて、廻り廻
つて當の敵を。
鬼王　誠や過去の宿業にて、不便ながらも其方が身を。
十六　切り刻まるゝも業因の、モシ、どうぞこれにて父さ
んの、命を助けて。
ト手を合す。
鬼王　その孝心の十六夜を、かゝる犬死。
十六　サ、犬死ならぬ犬坊さまと双子の兄弟。
鬼王　實にこの文言にて見れば、犬の年月双子の兄弟。
十六　血汐の詮議に玄蕃さま、御存じあつて姉さんへ、用
立つ百兩。
鬼王　ヤ、、、すりやあの金も十六夜が
十六　命を賣つて血汐の御用。
鬼王　さすれば敵に恩もなく
十六　お前の武士は立ちませう。
鬼王　出かした十六夜。
十六　サ、この首討つて。
鬼王　エ。せめて今際に
十六　月小夜さまに

鬼王　一日なりとも
十六　モシ、わたしが形見
ト切手を投げやる。鬼王取つて
鬼王　ヤ、狩場の切手。
閑坊　切手を渡せ。
トむしやぶりつく。立廻つて見事に切ろ。十六夜、手
を合す。兩方一度に倒るゝ。拍子木の頭。鬼王、回向
の思ひ入れよく、キツカケにて
拍子幕

大詰

祐經館對面の場

役名――蒲冠者範頼。梶原平三景時。梶原源太景
季。梶原平次景高。竹の下孫八。番場忠太。小林
の朝比奈。近江小藤太成家。八幡三郎行氏。工藤
犬坊丸祐友。腰元、軒端。三浦の片貝實ハ梛の葉狐。
曾我十郎祐成。曾我五郎時致。工藤左衞門祐經。
本舞臺、三間の間、御簾御殿、欄間竹ぶし、高欄臘
色、鍍金、金物誂らへの通りに結構に仕立て、金襖
に庵に木瓜の紋散らし、同じく橋がかり、高足の御
簾御殿、幕の内より、景時、白髪、矢筈の紋の付い
たる素袍の形。景季、景高、いづれも矢筈の紋の付
いたる柿の素袍の形。荒四郎、孫八、忠太、烏帽子
素袍の形。いづれも雪洞を携へ、立つて居る。時の
太鼓にて、幕明く。
ト花道より、朝比奈、着流しの上へ隅切り角に銀杏の
紋付いたる麻上下を着て、吊り臺へ毛氈を敷き、五升
樽を枕にふんぞり返つて寢て居る。足輕、鴫立澤西行
庵と書いたる小田原提灯を棒の先へ付け、四人、この
吊り臺を擔ぎ出て來て、直ぐに舞臺へ來る。
景時　待て〳〵。何者なれば、祐經どのゝ庭先へ、吊り臺
を擔ぎ込んだのだ。只今これへ範頼公お入りなさる。源
太景季、その吊り臺を叩き歸せ。
ト景季、立ちかゝり、思ひ入れあつて
景季　進物ものか、嫁入りの道具かと思つたら、いづれも
お見やれ、五升樽を枕にずう〳〵と、よくどぶさつて……
……オヤ〳〵、誰れだと思つたら、小林の朝比奈野郎でご
ざるわいの。
景高　ドレ〳〵。成る程、ほんに此奴は朝比奈だが、とん

だ奴ぢやアござらぬか。
孫八　ヤイ〳〵、その野郎を吊り臺で送り込んだら、ねいらが爲にもならぬ程に、たつた今、擔ぎ返せ〳〵。
足輕　左樣ではござりませうが、ひよつとお目が覺めました時には、この朝比奈さまに、どのやうな目に遭ひませうも知れませぬ程に、どうぞ此まゝお屋敷へ、お通しなされ下されませう。
皆々　ハイ〳〵、お賴み申します〳〵。
景高　おきやアがれ。いづれも、ソレ、その野郎を吊り臺から、引摺り出さつせい〳〵。
皆々　心得てござる。
荒四　サア、朝比奈、目を覺まして爰へ出やアがれ。
孫八　喰ひ醉つたら醉醒めに、若水を喰はしてやるべいか
忠太　此奴は野郎の荷物ださうだ。コレエ、、しみつたれ野郎め、目を覺ましやアがれ。
荒四　これでも目が覺めざア、そびき出してくれべいか。
皆々　出やアがれ〳〵。
ト三人立ちかゝり、朝比奈を吊り臺より引摺り出す。と朝比奈、目の覺めたる思ひ入れにて、三人を上下へ拋り出し、思ひ入れあつて
朝比　和田が三男小林の朝比奈、年頭の御祝儀、めでたくかしくだア。
皆々　おきやアがれ。
ト朝比奈、あたりを見廻して
朝比　オヤ〳〵、たつた今、鶴の丸の素袍で、花道から出たと思つたが、そんなら夢であつたか。
ト呆れたる思ひ入れ。
景時　氣が狂つたさうだ。コレエ、小林、今日この祐經どのゝ館へは、賴朝公の御名代として、範賴公のお入り。殊に狩場の繪圖面の事に付き、御相談もあれば、わいらがやうな部屋住みの出る幕ぢやアねえ。あの吊り臺の片棒でも擔いで、早く下がれ〳〵。
朝比　こいつは大笑ひだ。その範賴公がお入りに付き、御饗應の爲に、三浦の片貝が信田妻の今樣を勸めるに付いて、祐經どのから、樂屋の世話を燒いてくれろとあつて、去年の顏見世から、住吉町の松本の裏に炬燵と首ッ引をして居たこの髭を、賴みに來たに依つて、こいつは有り難い、いづれも樣にもお目見得がなると思つて、得たり賢しと、淨瑠璃の稽古のうちも、鴫立澤の西行庵で、年を取つたる役者氣取りで、範賴公の御前に出て、高うは

ござりますれど御免を蒙むりましてと、やりかける心で折角のたくり出たものを、可哀さうに下がれ〳〵とは、達引のねえ道樂者ぢやアねえか。

景季　コレ〳〵、朝比奈、盆の上のせりふは、流行に遲れて居るぞえ。その野暮ぢやア、淨瑠璃の口上は覺束ねえ。

景高　大場へ出て恥を掻かうより、お下の頭を賴んだがましでござらう。

忠太　イヤ〳〵、さう云はつしやんな。こんな厚かましい野郎は、素人狂言で出かすものでござる。

朝比　エヽ、口惜しいわい〳〵。梶原親子が其やうに、口口にこの髭を、惡く吐かしやアがるに依つて、爰は一番新貝の荒四郞、なんと達引に、この朝比奈が口上を褒め手になつちやアくれめえか。

荒四　成る程、お主が祖父樣から、知つて居るこの荒四郞。褒め手になつてやるめえものでもねえが、定めてなんぞ規模があるであらうな。

孫八　規模さへあれば我れ〳〵も、口上の褒め手になつてやらう程に、現金で心あるべし。

忠太　併しながら、サアと云つたら場うてがして、ブルブルもので、褒めた我れ〳〵にまで、天井を見せるであらう。

朝比　コレ〳〵、それは氣遣ひしてくりやるな。雜煮も飯も食はねえで、コレ〳〵、今も此やうに懷へ入れて、吊り臺に乘つても讀んで居たれば、ちつとも絕句の氣遣ひはない。

ト朝比奈、懷中より、淨瑠璃の名題觸れを出して見せる。

皆々　面白い〳〵。

朝比　一番やんやと云はしてお目にかけう。

皆々　さう巧くいけばいゝが。

足輕　モシ〳〵、朝比奈さま、今日は吊り臺のお乘り物、定めて御祝儀が出ますでござりませうな。

朝比　和田が三文の才覺も出來ねえ。

足輕　左樣ならこの吊り臺も、種なしにならぬうち、擔いで歸りませう。

皆々　早く步きやれ〳〵。

ト足輕、吊り臺を擔ぎ、花道へ入る。と向う幕の內にて

呼び　範賴公お入り。

ト呼ぶ。直ぐに三味線入りの亂れのやうなる誂らへの

鳴り物になると、景時皆々橋がゝりの角へ出迎ふ。朝比奈は橋がゝりに扣へて居る。と花道より、範頼、廣袖、壺折の形、小さ刀を差し、路次下駄を穿き出て來る。軒端、着流し、抱へ帯の形りにて、練りの帽子を着て、範頼が刀に紫の袱紗を巻き持ち添へて出て來る。續いて奥女中、大勢、いづれも着流し、抱へ帯、練りの帽子を着、扇を持ち出て來る。と一犬坊丸さまのお入り一と呼ぶ。と犬坊丸、長上下に刀を差し、花道より出て來る。後より、小藤太、庵に木瓜の紋付いたる熨斗目麻上下の形、紫の袱紗にて、犬坊丸が刀を持ち出て來る。八幡、小藤太と對の形。兩人とも中股立ちにて出て來る。範頼は直ぐに上の二疊臺へ押し直る。景時、景季、景高、荒四郎、孫八、忠太、正面の中床几にかゝる。女形は下の方に居並ぶ。犬坊丸、小藤太、八幡は花道の中に扣へ居る。

景時　範頼公へ申し上げます。あれに扣へ居りまするは、犬坊丸祐友、近江の小藤太成家、八幡の三郎行氏、兩家老を召連れ、御案内の爲、お出迎ひ申してござれば、お詞を下し置かれませう。

範頼　いま登鷹の勢ひを得たる蒲の冠者範頼、兄頼朝に成り替り、今年五月下旬、富士の裾野に於て夏狩の催ほし狩場々々の繪圖面に、工風を凝らす左衞門祐經、今日某内見に及ばんと申し入れたるところに、何事に依らず範頼に任せんとあるを幸ひ、梨花一枝雨を帯びたる粧ひある、三浦の別當義村が娘、片貝姫が容色にほだされ、悪逆無道と云はゞ云へ、今様風流を申し付け、興に乗じて閨の伽。ムウ……この上もなき祐經が饗應。犬坊丸、父祐經へも滿足の由。申し聞かせよ。

犬坊　こは有り難き範頼公の御上意。

小藤　我れ〳〵兩人までも。

八幡　家の面目世の聞え。

三人　有り難う存じ奉りまする。

景季　取分け犬坊丸どのは、お喜びでござらう。實の親子でありながら、兎角祐經どのが其許を、他人あしらひに召されたさうにござれど、範頼公の高飛車では、いよいよ家督相續に相違はござるまい。

景高　成る程、そりやア兄貴の云はつしやる通り、和田北條畠山、三老職でさへ、範頼公には齒が立ちませぬ。まして一臈職の祐經どの、何事に依らず、範頼公の上意に背き召さるれば、狩場の御用も上がつたり大明神でござ

る。
孫八　論より證據は、三浦の義村が娘片貝姫を、範頼公へ差上げにやア、今日この所へお連れなされた、片貝姫の腰元ども、生埋めに仰せつけらるゝでござらう。
三人　なんと恐ろしい事ぢやアねえか。
軒端　あの梶原様御兄弟の仰しやる事わいの。片貝姫さまが、範頼公のお心にお隨ひなされんとあつて、召仕ひの者までも、命をお取りなさるゝ事なら、お側勤め致します者に、お小姓衆までも命を惜しみまする者は、憚りながらござりませぬなう。
女一　假初めながら、三浦の別當さまのお家は、三浦之助さまからの弓矢のお家ぢやに依つて、奈須野の原のお手柄を、今様風流の謠ひ物にもあるではござりませぬか。
女二　其やうな事も御存じはござりませぬゆゑ、承りますれば、梶原さま御兄弟ながら、あの大磯の廓へ遊びにお出でなされても、振り袖新造にまでお振られなさるゝぢやござりませぬか。
女三　その癖祐成さま時致さまと、鞘當とやらも、ほんにお氣が強いわいな。そしてげぢ／＼様とは、どなたの事でやらござりましたなア。

女四　そりや知れた事、げぢ／＼様とは、梶原さまの御俳名ぢやわいなア。
女五　片貝姫の召仕ひに、お主様を大切に思はぬ者は、部屋方の者までもござりませぬわいな。
三人　うぬらは、どうしてくれべいぞ。
朝比　東西々々。
　ト朝比奈、舞臺の眞中へ罷り出て手を突き
高うはござりますれど、御免を蒙むりまして、これよりズイと申し上げます。
三人　イヨ／＼口上。
朝比　今晩範頼公御饗應の爲、相勤めまする今様風流の名題、役人替名をお耳へ觸れまするやうにござりまする。
三人　イヨ／＼口上。
　ト朝比奈、以前の書付けを出して開き讀む。
朝比　東西々々。秋野の狩衣に思ひぞ伊豆の梛の葉狐が、越し方忍ぶ今様の對面「我栖里春の曾我菊」淨瑠璃太夫、富本連中相勤めまする。役人、信田の森の梛の葉狐、三浦の片貝。
三人　イヨ／＼口上。
朝比　狩人……狩人……ア、こりやアなんとやら云ふ字

であつた。コレ〳〵、新貝の荒四郎、ちよつと讀んでくりやれ。

荒四　オヤ〳〵、朝比奈が定紋の、鶴と云ふ字が讀めねえか。

朝比　おらア假名の付かぬ字を讀んだ事がねえ。

三人　イヨ〳〵口上。

ト朝比奈、汗の流るゝ思ひ入れあつて

朝比　狩人鶴作、若松伊織、同じく狩人龜作、若松左門……慥か若松左門であつた。

三人　イヨ〳〵口上。

朝比　右の役人殘らず罷り出で相勤めまする。ヤレ、これぢやア疱瘡病みに笹湯をかけた思ひだ。

荒四　おきやアがれ。褒め手になつたおいらにまで、よく天井を拜見させたな。

孫八　あの口上を聞いては、規模どころではねえ。ほんにきぼが潰れて、蛸が食ひたくなつた。

忠太　どうなる事かと思つて、悔りしてしやつくりがとまつた。その代りに樂屋で、福山の蕎麥の札を、誰れぞに貰つてやるべい。

皆々　おきやアがれ。

範頼　今に始めぬ朝比奈の滑稽、一興々々。狩場の繪圖面を改むるは、我が武の勳し。片貝が今樣風流見物するは、德の餘り、殊に依つたら杯盤狼藉に及ぶまいものでもない。姫を我が手に入るゝまで、諫めを入るれば一刀に切つて捨てん。犬坊、皆の者へも申し付けい。

犬坊　畏まり奉りましてござります。某事は君のお見出しにあづかり、父左衞門祐經、今宵夜神樂終れば、富士の裾野へ直ぐに出立、先達てより家督の儀、拙者へ仰せつけられてござれば、この上もなき犬坊丸が大慶。惡は高きに從ふ習ひ。お心任せに御酒宴に、興を添へまするでござりませう。

範頼　新玉の年の三歳を待ち侘びて、只今宵こそ新枕すれ。犬坊丸、案内。

犬坊　ハア。

範頼　皆も參れ。

皆々　先づ入らせられませう。

ト管絃になり、範頼、思ひ入れあつて、先に立ち、これに續いて犬坊丸、景時、女形殘らず御殿の內へ入る。これより、小藤太、八幡、刀を提げて、花道より、靜々と舞臺へ來り、てんでに煙草盆を提げて來て、小藤

太は上の方、八幡は下の方に住ふ。

八幡 小藤太どの、なんと長閑な春ではござらぬか。

小藤 左やう／＼、最早當年は杉田の梅も、滿開でござらう。

八幡 サア、斯く申す行氏も、一度は妙感寺へも參りたうござる。

小藤 お互ひに仕官の身は、何事も心に任せぬものでござる。

八幡 それに付きましても、御主人祐經公、範頼公のお心猛々しくならせられ、既にこの間は頼朝公をも、なんとやら蔑になさるゝは、國家の煩らひ、大亂の基と、祐經公にも御心勞に思し召さるゝさうにござる。

小藤 その儀は先達てより、小藤太も承知いたして罷り居る。今年五月下旬には、在鎌倉の大小名方、大半は供奉の役目を仰せつけられ、御狩場御逗留中、凶事も出來いたさば容易ならぬ御大事と、我れ／＼に至るまで、薄氷を踏む思ひでござる。

八幡 左やう／＼。それに付きまして、祐經公仰せには、範頼公の御行跡、全く尾先の黒き斑なる妖狐の毒を酒に和し、人知れず差上げし由、殘る方なく御存じにて、妖狐の毒酒を消さんには、戌の年に生れし男女の生血を、酒に加味して差上ぐるに於いては、範頼公の御心、立ちどころに精神調ひ、自然と御平生の通りにならせらるゝは必定と、今宵の御饗應も、狩場の繪圖面に事寄せ、その戌の年の男女の生血を、酒に加味して差上げらるゝ思し召しでござるが、なんと深い御賢慮ではござらぬか。

ト小藤太、思案して

小藤 今に始めぬ祐經公の思し召し、なか／＼我れ／＼が及ぶ儀ではござらぬ。その戌の年の男女の生血が、殿のお手に入つてござるか。

八幡 ござればこそ、この晩に限つての御饗應。その生血と申すは、安元二年戌の年に御誕生なされし、若殿犬坊さまは、しかも殿の御實子にて、十八年がその間、お側で御成長なされし若殿なれども、國家の爲ゆゑ、今宵御一命を、範頼公の御爲に、差上げらるゝとの儀でござる。

ト小藤太、ギヨッとしたる思ひ入れにて、立ち上がらうとして面を和らげ。

小藤 すりや、犬坊さまのお身の上は、今宵限りとなつたるか。

八幡 小藤太どのには、定めて御殘念にござらうの。

小藤　ハヽヽ、なんの……流石は日本の聖人と呼ばれ給ひし、重盛公に仕へられし、祐經公の御仁政。天にも地にも掛け替へもなき、若殿犬坊丸さまのお命を、範頼公のお爲に……範頼公のお爲に……この上もなき御計らひ。よう思ひ切られてござるな。

八幡　左様ならば小藤太どのにも、祐經公と御同意でござるか。

小藤　手汐にかけてお育て申せし、犬坊丸さままではござれども

八幡　國家の爲なれば

小藤　お諫め申してなりとも

八幡　若殿のお命を

小藤　今宵のうちに

八幡　とは申せども。

小藤　何を未練な。

ト兩人、思ひ入れ。この時「今様始まり」と呼ぶ。

八幡　最早今様始まりと申せば

小藤　行氏どのにも

八幡　小藤太どのにも

小藤　御前へ罷り

兩人　出でまするでござらう。

ト唄になり、小藤太、矢張り、犬坊丸が刀を持ち、三郎と顔見合せ、思ひ入れあつて、兩人下座へ入る。と又「今様始まり」と呼ぶ。と下がり葉になり、正面の御簾巻き上げる。此うち、二段に毛氈を敷き並べ、上の段に二疊を直し、この上に範頼、中啓を持ち扣へ居る。下の段に、祐經、烏帽子、大紋の形にて、扣へ居る。と下座より、景時、景季、景高、荒四郎、孫八、忠太、出て來て、中床几にかゝる。橋がゝりへ毛氈を敷き、軒端、外に奥女中大勢居並び、見物して居る。この途端に下の方の御簾を巻き上げる。此うちに富本太夫連中居並び、鳴り物打上げる。直ぐに淨瑠璃になる。三浦の片貝、祐成、時致、出て來り、正本の通り淨瑠璃あつて、感ぜぬものこそなかりけりと段切れ打上げる。

皆々　ヤンヤ〱。

軒端　片貝姫さま。

皆々　お出かしなされましたわいなア。

トこれより、時致、祐經に目を付け、立ちかゝり居る。これを祐成、片貝、左右より留めて居る。

範頼　ナニ、祐經、片貝姫が今宵の今様、絶妙の振り事、範頼も感心。ナニ犬坊丸。この上は身が酒宴の席へ同道いたせ。

祐經　お心に叶ひまして、祐經も有り難う存じ奉ります。

範頼　コリャ／＼近江八幡。ワキツレを勤めたる者は、何者ぢや。

八幡　ハッ、一人は若松伊織、今一人は若松左門と、御番附にもござりました。

小藤　當時鎌倉表にて、今様風流の謠ひ物を、指南仕つて居りまする者どもでござりまする。

祐經　なか／＼健やかなる若者どもぢや。祐經の館へも、折り／＼參つて、犬坊丸が伽でも致してよからう。

時致　おきやアがれ。なんの爲に四谷薦を見るやうな、犬坊丸がお伽をしてつまるものか。

祐成　これはしたり、其やうな無禮なるお請けがあるものか。祐經公の只今の仰せ、有り難う存じ奉ります。

片貝　それ／＼、左門さまも伊織さまの、今の御挨拶なされたやうに、温なしう何事も、お心で納めてナ。御合點でござりまするか。

時致　例へ我れ／＼が尾葉打枯らした浪人にもしろ、祐經どのゝ御厄介になり申すめえ。

祐經　面妖、貧苦に迫る者程、我慢なる事を申すものぢや。某が近き一族に、曾我を名乘る者どもがあれども、朝四暮三の貯へなければ、祐經が館へ捨扶持をも願はず、衣類なぞも見すぼらしさうなが、何ゆゑ參らぬ。

時致　何がどうした。

祐經　ハテサテ、下世話にも云ふ通り、立寄らば大樹の影、長い物には巻かれろだ……捨子泣く長者の面や年の暮……世に捨てられた者どもならば、ハテ、取上げくれうわサ。

時致　もう料簡がならねえ。サア兄貴、曾我の十郎祐成、同じく五郎時致と名乘つて、いけッ首を引ッこ拔いてくれべい。

片貝　モシ／＼／＼、必らず／＼、短氣な事は御無用になされませ。

祐成　アレ、あのやうに片貝姫も、心遣ひしてぢや程に、堪えて居や／＼。

小藤　範頼公の御前と申し、主人左衛門祐經公へ對し、慮外を働らけば、その分にしては差置かぬ。

八幡　兩人爰に扣へ居れば、どなた様でも何奴でも

小藤　近江の小藤太成家。
三郎　八幡の三郎行氏が
小藤　ドッコイ。
三郎　ソッコイ。
兩人　やりやアしよねえぞ。
ト小藤太、八幡、立ちかゝつて、反りを打つて切刃を廻す。範頼、思ひ入れあつて
範頼　それに扣へし犬坊丸、片貝姫を酒宴の席へ召連れい。
ト犬坊丸、立ちかゝり
犬坊　畏まりました。サア片貝姫、犬坊丸と奥へお來やれ。
ト犬坊丸、片貝が手を取らうとする。
片貝　エヽ、その名を聞くも、恐ろしい犬坊丸さま。
ト振り放して、時致が後へ立退く。
犬坊　逃げたとて逃がさうか。ドレ犬坊丸が。
ト犬坊丸、片貝にかゝる。時致、犬坊丸を毆り倒す。
時致　片貝姫を、うぬらに渡して詰まるものか。つがもねえ。
範頼　その片貝こそ閨の伽、妨げなすと手は見せぬぞ。
ト範頼、立ちかゝる。
祐經　イヤ〳〵、申さば餓鬼同然な者でござれば、打捨て置かれませい。
時致　そりやア誰れが事だ。
ト此うちも祐成留めて居る。
祐經　慮外者めが。下がらぬか……範頼公には、先づ〳〵奥へ入らせられませう。
ト管絃になり、範頼、思ひ入れあつて先に立ち、祐經、犬坊丸、景時始め皆々、小藤太、八幡、女形殘らず奥へ入る。時致、思ひ入れあつて
時致　目ざす敵の左衛門祐經、いづくまでも。
祐成　コリヤ〳〵〳〵、もし狼藉に及べば、我れ〳〵が身の上であらうぞや。
片貝　時致さま、惡い事は仰しやりませぬ程に、マア〳〵お待ちなされませ。
ト時致、祐成、時致を留めて居ると、奥より、小藤太出て來て、あたりを見廻し
小藤　時致さま、お急きなされまするな。
時致　うぬは近江の小藤太。よくうしやアがつたな。うぬも敵の片割れ。爰へうしやアがれ。
ト時致、小藤太が襟髮取つて矢庭に引寄せる。小藤太大小を投げ出し

小藤　小藤太、お手向ひは致さん〳〵。

時致　此奴は弱い音を出しやアがつた。うぬら主従は、親人河津の三郎祐安さまの敵。たつた今、どうするか見やアがれ。

祐成　存分にしてやりやれ〳〵。

小藤　お急きなさるゝな御兄弟、小藤太お味方仕りまする。

時致　何がどうしたと。

小藤　明日とも申さず今宵のうちに、合圖を定めて小藤太が、手引き致して祐經どのを、念なうお討たせ申しませう程に、必らず〳〵お急きなさるゝな。

祐成　合點のゆかぬ小藤太が一言。主人左衛門祐經を、何ゆゑあつて手引きして、兄弟に討たすのぢや。

時致　うぬがその手を喰ふものか。こりやア聞えた。返り討にする心か。いよ〳〵生けちやア置かれねえ。

片貝　モシ〳〵、時致さまお味方せうとあるからは、よもや僞はりでもござりますまい。

小藤　伊豆箱根の兩社をかけまして、お味方いたすに相違はござらぬ。御安堵なされて御兄弟、拙者が合圖をお待ちなされい。

祐成　詞のうちに誠顯はれ、今宵のうちに我れ〳〵を

時致　手引き致せば日頃の本望、成就するは目のあたり。

片貝　さぞお喜でござりませう。

祐成　とても事に祐安さまの

時致　赤澤山にて御落命ありし

片貝　その折柄の御最期の様子。

小藤　兼ねてお話し申さんと、存ぜしところ、幸ひ〳〵、

ト大小の合ひ方になる。

頃は久安元年平家繁昌の砌り、所領の論談ありしより、祐經どの河津の三郎祐安を、赤澤山へ立越えて、奥野の狩の歸りを待ち受け、討留めよとある主人の云ひ付け。畏まつて候ふと、一のまぶしは近江の小藤太、二のまぶしは八幡の三郎、矢頃を定めて待つたるところに、祐安どのこそござんなれど、六分の弓を鉾短かに握り、キリキリと引絞り、ずつぱと放つその矢先、鞍の山形射削つてむかばきの着け際より、前へずつぱと射たりしに、流石は名に負ふ河津さま、いで遠の矢とその時に、射給ふその矢は椎の木へ、羽ぶくら込めて忽ちに、八幡が二の矢の痛手にて、敢なく御最期遂げられました。

兩人　エヽ、口惜しいなア。

小藤　さぞ御殘念でござりませう。あつたらしき弓取りの

祐安さまのその矢の根は、赤澤山の椎の木に、卽ち殘る御形見。主人祐經物好みに依つて、杯に引かせしところ自然と杯中に澤瀉形の矢の根の影、顯はれまするが誠の不思議、河津杯と名を付けられ、今に所持して工藤家の重寶。なんと稀代な事もあるものではござりませぬか。

祐成　ヤ、、、すりや父河津の三郎祐安さまの、射返し給ふ遠の矢が、椎の木に立つたるゆゑ

時致　杯に引かせ、河津杯と名づけ、今に祐經所持せしとや。

祐成　時致。

時致　兄者人。

兩人　お懷かしや／＼。

トほろりとする。

小藤　主人ながらも祐經どの、敵討の勝負あるべきところ卑怯未練な心ゆゑ、返り討にせよとの小藤太への云ひつけ。不仁は君子の憎むところと、思ひ當りし小藤太が、今宵の手引き。武士に二言はござりませぬぞ。

祐成　賴もしき近江の小藤太。假初めならぬ夜討の大切

時致　生死は手引きの合圖にあり

小藤　夜半の篝り火窓に映らば

兩人　その時兄弟忍び入らん。

小藤　キッと詞を番ひましたぞ。

ト合ひ方になり、下座より、軒端、その外女形皆々、バタ／＼にて、出て來て

軒端　片貝さま、これにおいでなされましたか。範頼公がお待ち遊ばしまするわいなア。

皆々　サア／＼、お供いたしませう。

片貝　そんなら、わが身達と行かうわいなう……左樣ならばお二人樣。

祐成　念なうこの場へ立歸り、めでたく吉左右聞かせ申さん。

小藤　必らず合圖を。

時致　合點だ。

片貝　皆參れ。

皆々　ハア、。

時致　兄者人。

祐成　時致、續け。

ト唄にかぶせて、時の太鼓になり、片貝、軒端、その外女形皆々奧へ入り。祐成、時致、潔よく花道へ走り入る。小藤太、あと見送り

小藤　犬坊丸さまのお命を助くるには、厄病の神で敵討の
　手引き。巧ういたわいの。
　　ト小藤太一人ぞく／＼してゐる。バタ／＼にて、下座
　　より、犬坊丸、刀を提げて出て來て、あたりを見廻し
　　小藤太を見て、喜ぶ思ひ入れあつて
犬坊　近江の小藤太、助けてくれい／＼。
小藤　定めてそれは、戌の年の御誕生ゆゑ、犬坊丸さまを
　祐經公が、お手にかけらるゝのでござりませうがな。
犬坊　詳しい譯は知らねども、範頼公のお爲に命をくれい
　とは、情ない事でないか。どうぞ小藤太、助けてくれぬ
　かい。
小藤　お氣遣ひなされまするな。小藤太お側にあるうちは、
　側へ御主人祐經公の御意でござらうとも。
犬坊　それ聞いたれば、人心が付いたわいの。
小藤　とてもの事に落ちつかつしやるやうに、其許樣のお
　身の上を
　　トあたりを見廻し、雪洞の火を吹き消す。竹笛入りの
　　合ひ方になり、これより暗闇の思ひ入れにて
　犬坊丸さま、あなたは祐經さまの御實子ではござりませ
　ぬ。

　　ト犬坊丸、思ひ入れあつて
犬坊　小藤太々々々、この犬坊丸は、祐經さまの實子では
　ないとか。
小藤　コリヤヤイ、この小藤太が肉身分けた、眞實の悴ぢ
　やわやい。
　　ト犬坊丸、悄りする。ト此うちに、八幡、肩衣を片々
　　跳ね、雪洞を袖に隱して、奥より、ソロ／＼出て來て
　　橋がゝりに窺ひ居る。
　十八年以前、主人の實子は、奥方諸とも難産にて、死去
　の折柄、同月同日に産れし、其方は双兒の女夫子。好き
　幸ひと男子の其方を、襁褓の內にて入替へ置き、手汐に
　かけて育て上げ、いま若殿の犬坊さま。また娘をばおい
　ぬと名付け、漂らひのその砌り、母方へ引分け置きしも
　不便さの餘り。安元二年の戌の年に、この小藤太が儲け
　し悴は、犬坊丸、其方ぢやわいやい。
犬坊　エヽ……初めて聞きし我が身の上。思ひ當りし育て
　から。如何に主從なればとて、これ程にはあるまじきと
　身に堪えたる御寵愛。そんならこの犬坊丸は
小藤　この小藤太が血を分けた悴。
犬坊　親人樣でござりましたか。

小藤　如何にも我が子の犬坊丸。
犬坊　親人様。
　ト犬坊丸を引寄せ
小藤　如何にも。其方を工藤犬坊丸さまと尊敬させて、家督に立てんと、晝は終日、夜は夜もすがら、これまでに致したわやい。
犬坊　エヽ、有り難うござりまする。
　ト取りつき泣く。
小藤　でも、天命は恐ろしきもの。
　ト懐中より袱紗に包みし御教書を出し
　十八年以前に、この三箇の莊の御教書を、人知れず盗み取り、今日まで在所も知れざりしに、それと知つたる行氏が詩の端々。さればこそ範頼公の御爲に、犬坊丸が命はないのぢや。
　ト犬坊丸、驚ろき
犬坊　エヽ、そりや又何ゆゑ犬坊丸が、一命はござらぬぞ。
小藤　コリヤ。
　トあたりを見廻し、犬坊丸に囁く。と合ひ方、止む。
犬坊　ヤヽ、すりや今宵のうちに曾我兄弟を
小藤　この小藤太が手引きして。

犬坊　流石は親人。
　ト小藤太、思ひ入れあつて
小藤　何かに付けて八幡の三郎、生け置いては願ひの妨げ。
　ト思ひ入れにて、八幡を切れと云ふ仕方をする。
犬坊　犬坊承知いたしてござる。
小藤　ぬかるな。
犬坊　心得ました。
　ト管絃になり、小藤太、奥へ行かうとする。と八幡、ソロ〳〵出て來て、雪洞を差出す。これにて、小藤太犬坊丸、顔見合せ、直ぐに犬坊丸
行氏くたばれ。
　ト切りつける。この立廻りのうち、雪洞を切り落し、闇の思ひ入れにて、探り〳〵正面の御殿の内へ上がり、小藤太、八幡、犬坊丸、面白き立廻りにて、ドッコイとゝまる。本行の出端になり、この道具を上の方へ引いて取る。
　本舞臺、誂らへの高樓。勝手好き所へ登り高欄を付け、升組み揚げ障子よろしく、橋がゝり植込みになる。この道具に納まる。

卜管絃になり、下座より、景時、景季、景高、孫八、荒四郎、忠太、素袍の下ばかりの形にて、中啓を持ち出て來て、上の方に居並び、床几にかゝる。

景時　最早子の刻、祐經どの出立の

皆々　御用意あれば。

卜高欄の内にて

祐經　東海初めて遊ぶ多少の客、富山はあつて何れの山と云ふ事を知らず。鬱陶しい、障子を上げい。

卜管絃になり、高欄の障子を上げる。とこの内に祐經大紋の下ばかりの形にて、中啓を持ち、首桶を前に置き、脇息にかゝり居る。後は誂らへの通り、極彩色の冨士の裾野、紋盡しの幕を打つたる狩場の體よろしく

景時　時に祐經どの、百疋の狐を狩り出し、裾野の山神へ贄に供へるが、古例ではござらぬか。

景季　元より狩場の出立は出陣も同然。三獻三種の土器は元より

景高　夜神樂を興行あつて、軍神を祀られ

孫八　手斧始めには吉日良辰を選ばれ

荒四　假初めならぬ君の御旅館。

景害　要害堅固が第一でござれば

忠太　何事に依らず、この館のお役目

皆々　御心配でござらう。

祐經　左やう〳〵。いづれもの仰せ下さるゝ通り、假初めならぬ夏狩の御遊覽。歴史にも殘りますれば、大切なる役目でござる。

卜この時、下座にて「範頼公お入り」と呼ぶ、

範頼公お入りとござれば、左衞門祐經それへ參つて、いづれも御挨拶いたさうか。

卜又「範頼公お入り」と呼び、直ぐに下がり葉になり下座より、範頼、以前の形にて、中啓を持ち出て來て、上の方二疊臺の床几にかゝる。此うちに、祐經、首桶を抱へ、平舞臺へ下りて來て、舞臺の眞中に扣へる。

範頼公には、八幡の三郎が差上げましたる粗酒、召上がられましてござりまするか。

範頼　隴陵の美酒にも等しき行氏がもてなし、自ら精神を安んじ、我が行跡を誤まりしは毒酒の德。範頼本心に立返つたるぞ。祐經、喜べ〳〵。

卜皆々顏見合せ

皆々　ヤア、。

祐經　性は善なる範頼公、御本心におなりなさるれば、國

家の爲、恐悦至極に存じ奉りまする。

範頼　狩場の繪圖改めたる後は、祐經裾野へ出立してよからう。

祐經　畏まつてござりまする……近江の小藤太成家、祐經が出立を祝うて得させよ。

ト下座にて

小藤　ハア、。成家持參仕りませう。

ト管絃になり、小藤太、三方に束ねたる柴を恭々しく載せ持つて出て來て、下の方に兩手を突き扣へる。

祐經　小藤太が持參したるその品

小藤　祐經公の御發駕を祝したる、一束ねの薪でござりまする。

祐經　定めて謂れあらいでは叶はぬ。

小藤　日本武尊、東夷の爲に欺かれ給ひ、富士野の原にて狩し給ふ折柄、火を放つて尊を燒き殺さんとせしところに、天然不思議の劒の德にて、賊へ煙の靡きければ、尊の玉體恙なき、めでたき例しを御發駕に、祝しましたる小藤太が寸志。甚だ恐れ入りましてござります。

祐經　流石は近江の小藤太、古例を引いて祐經が、門出を祝うてくれたるは、過分々々。時に成家、お心猛々しくならせられたる良藥の爲に、伜犬坊丸が一命を差上げるが、定めて其方にも、祐經が爲とあらば、伜なぞの命は惜しむまいな。

小藤　事改まりました祐經公の御諚。そりや伜には限りませぬ。斯樣申す小藤太が一命なりとも、主人へ差上げまする事は、元よりの儀でござりまする。

祐經　イヤ、それと申すも、主從は三世の緣、親子ばかりは一世の緣。敢へなき最期のこの首級へ、小藤太、回向して取らせい。

ト祐經、首桶を小藤太へ渡す。

小藤　敢へなき最期の首級と仰せられまするは、さては若殿犬坊さま、御最期で

ト小藤太、心ならず首桶の蓋を取る。合ひ方になり、此うちより十六夜が首出ろ。小藤太、ギョッとして

ヤ、、、こやコレ娘おいぬが首。

祐經　伊豆の次郎が文通にも、この女子はおいぬと申す者にて、幼少の時より兩親に別れ、曾我が家臣鬼王新左衞門が女房、月小夜と申す者に育てられ、實の親へ義理を立てんと思へども、敵同士にて心に任せず、鬼王夫婦が爲に志しを盡し、我が身を恥ぢて遂に横死を遂げしとの

事。しかも年は悴犬坊丸と、同年十八とやらになるとの事。なんと人手にかゝりしとは、不便な事ではないか。

ト小藤太、此うち、涙を度々呑み込み、祐經に泣き顔を見せまいとする思ひ入れ。

小藤　近き頃梅澤に於て、巡り逢うたるその時に、日頃尋ねし娘の顏……成る程、夢の世の中でござりまする。

祐經　この娘が最期の樣子、承はつて、さぞ殘念に思ふであらうな。

小藤　殿樣の御意ではござりますれども、お家を御大切に存じまする武士の上では、男女に限りませず、悴なぞ先立てましても、なか／＼御奉公の妨げになりますやうな未練な心はござりませぬ。

祐經　イカサマ、小藤太が日頃の氣性では、さうありさうなものぢや。我が子を不便と思はいでも、手汐にかけて育て上げたる、祐經が悴犬坊丸は、不便であらうな。

小藤　御武運長久を願うて居ります。

祐經　その筈／＼……ナニ、八幡の三郎、申し付けたる器をこれへ。

八幡　畏まりました。

祐經　早う／＼。

ト合ひ方になり、下座より、八幡、以前の形にて、首桶を抱へ出て來て、下の方に扣へ

八幡　仰せつけられましたる器、行氏、持參仕りましてござりまする。

祐經　犬坊丸が最期の樣子、三郎、詳しう物語つてよからう。

八幡　畏まりましてござりまする。

トこれより、小藤太、また愕りして大きにうろたへ、八幡が側へ摺り寄り、急きに急いたる思ひ入れにて

小藤　八幡の三郎、すりや最前の話しの通り、いよ／＼犬坊丸さまには御最期お遂げ……御最期お遂げなされしか。

八幡　狐の毒を消す事、犬の生血に過ぎたるはなしと、據ろなく戌の年の若殿、犬坊丸さまの御首は、斯く申す八幡の三郎が申し請けてござる。貴殿にもさぞ御愁傷でござらうが、せめて御首級へお暇乞ひあれよ。

ト首桶を小藤太へ渡す。小藤太、ブル／＼して、首桶を引取り、直ぐに蓋を取る。此うちに犬坊丸が本首出て居る。小藤太、一目見て涙に咽び入り

小藤　ハテ、死なしたり殘念や。犬坊丸さまあればこそ

初演の絵番附

犬馬の苦も償ひしが、最早小藤太の望みは絶えたか。ホイ。

トこれより、小藤太、ガッカリとなつて、腰の拔けたる思ひ入れ。八幡、詰め寄せ、祐經、思ひ入れあつて

祐經　サア小藤太、十八年來の其方が企み、事成就せざるは天命の然らしむるところ。今日の只今まで隱し置いたる、三箇の莊の御書を、速かに渡すまじきや。

八幡　この上にも陳ずるものならば、八幡の三郎が手を下ろして、御前に於て白狀させうか。

ト小藤太、頭を振つて

小藤　存ぜぬ知らぬ。

祐經　知らぬと申せばこの一通。

ト懷中より四建目の手紙を出し

「急々內談極め候ふ一儀、この度夏狩までに成就仕り候ふと存ぜられ候へば、當時主人の子息と致し置かれ候ふ御賓子、犬坊どのゝ儀、祐經狩屋の越度これあるに於ては、早々の跡目の願ひ申し立て、三箇の莊を領地いたさるゝの儀、相違あるまじく候ふ、小藤太どのへ、久須美彌太夫。」かゝる慥かな證據あつても、御教書に覺えはないか。

小藤　サ、その御教書は。

八幡　行氏が白狀させうか。

小藤　サ、それは。

祐經　サア、尋常に渡せ。

小藤　サア、それは。

三人　サア〳〵〳〵。

小藤　これを門火に。

ト祐經、三郎、兩方より詰め寄る。小藤太、やう〳〵立ち上がつて、力足を踏み、有り合せたる柴を取つてポンと火鉢へ打込む。と燃え上がり、煙硝火パッと立つ。この煙に紛れ、十六夜が首桶を抱へ、頷いて一散に奧へ行かうとする。八幡、支へる。立廻りちよつとあつて、兩人、下座へ入る。直ぐにドン〳〵、アリヤアリヤの聲にて、夜討曾我の謠になる。

一聲〽寄せかけて打つ白浪の音高く、時を限つて騷ぎける。

ト鼓ツッカケになり、花道より、祐成、時致、いづれも本行の十番斬の形にて、松明をかゝげ出て來る。此うちに、祐經、高床几にかゝる。この時、下座より朝比奈、飛んで出て

皆々　ドッコイ。
ト鼓、コイヤイにてとまる。
祐成　曾我の十郎祐成。
時致　同じく五郎時致。
祐成　祐經どのへ
兩人　見參々々。
ト立ちかゝる。朝比奈、隔てゝ居る。
祐經　こは珍らしきその出立ち。殺伐の事あれば、範頼公の御前の畏れ。其方達が爲にならぬぞ。
朝比　コレ／＼、祐經どの、範頼公も一番目には、どうでこんな事もあらうと、思つてござるは知れた事。どうぞ兄弟に逢つてやつて下せい／＼。
祐經　曾我兄弟と聞きおぢして、對面いたさぬも、近頃卑怯。小林どのゝお頼みでござれば。
朝比　かッちけなうごんす。コレ／＼、兄弟の者ども、祐經どのが逢ふべいと云やはる程に、隨分と溫なしくして、疊觸りに氣を付けて、早く爰へ來い／＼／＼。
時致　合點だ。
トこれより岩戸神樂になり、アリヤ／＼の聲にて、祐成、時致、祐經が側へ來る。朝比奈、時致が腰へ取りつき、引留めて居る。
朝比　コレ／＼、祐經どの、曾我兄弟か爰までのたくり出ました程に、挨拶してやつて下せい／＼。
祐經　挨拶いたせばとても、年頭の祝儀ばかり。滿江御前の機嫌でも、承はるより外に、祐經に挨拶はござらぬ。
時致　外に挨拶がねえとは、なんの事だ。我れ／＼が父河津の三郎祐安公を、遠矢にかけて射殺したる左衞門祐經。覺えがあらばサア、名乘り合せて勝負をせぬか。
祐成　日頃の本懷を達せんと、一命を輕んじ、これまで參りし曾我兄弟。
兩人　サア、尋常に勝負々々。
祐經　コリヤ／＼兄弟、早まるな。斯く云ふ左衞門祐經は頼朝公の嚴命に依つて、富士の裾野へ發向なせば、假初めならぬ祐經が一命。もしや過ちあるに於ては、養父祐信の身の上にも、如何やうなるお咎めを蒙むるまいものでもない。義理ある親への恩義を思ひ、何事も時節の到るを待つて居れサ。
祐成　コリヤ／＼時致、事を分けたる祐經どのゝ今の仰せ。祐信さまへ御難儀をかけては、本意でもない程に、先づ先づ扣へて居りませうぞ。

時致　嫌だ〳〵。盲龜の浮木、優曇華の對面に、敵左衞門祐經が、烏帽子首引ッ提げて、母滿江へ土產にすべいと思つたに、寶の山に入りながら、空しく歸るか、殘念な。

朝比　尤もぢや〳〵。成る程時致、殘念な筈だ。なんと祐經どの、せめて相替らず兄弟の者へ、杯でもさしやつてちやア下さるめえか。

祐經　イカサマ、年頭と云ひ、殊に小林どのゝ御挨拶でござれば、成る程一獻酌みまするでござらう。

朝比　そりやア有り難い。コレ〳〵、兄弟の者、祐經どのが杯をささうとお云やる程に、温なしくしろ〳〵。

祐成　御酒を下さるゝとは、千萬有り難うござりまする。

祐經　誰れかある。杯を持て。

　ト下座にて

片貝　畏まりましてござります。

　ト三保の神樂になり、八幡、三方に誂ちへの河津杯を載せ出て來り、續いて片貝、長柄の銚子を持ち出る。直ぐに舞臺へ來て

三郞　仰せつけられましたる、御重寶の河津の杯。

片貝　長柄の銚子、これまで

兩人　持參いたしてござりまする。

祐經　片貝姬、長柄御持參とは忝ない。さらば始めて、祐成へさし申さうか。

祐成　頂戴仕るでござりませう。

片貝　まだ床馴れぬ鶯の、初音も今日の折にふれ、片貝がお酌いたしませうか。

祐經　そりや、一段の事。さらばこの杯を。

　ト祐經取上げる。片貝、酌をする。祐經、直ぐに三方へ杯を置く。祐成へさす。祐成、しとやかに杯を取上げ

祐成　片貝どの、慮外ながら。

片貝　なんのマア。

　ト片貝、祐成が持つたる杯へちよつと酒をつぐ。祐成呑み乾して、杯を三方に置き、祐經が前へ直して

祐成　憚りながら、御返杯仕りませう。

祐經　これは〳〵。

　ト祐經、直ぐに杯を取つて

それに扣へし時致。祐經が杯くれう。これへ參れ。

時致　花待ち得たる今日の對面、晝は終日、夜は夜もすがら、いつか〳〵と思ひしに、矢立の杉に誓ひたる、その甲斐あつて祐經どのゝお杯、頂きますべい〳〵。

ト時致、ヂリ／＼祐經が側へ寄る。朝比奈、時致を引留めて居る。此うち、アリヤ／＼の聲。ドッコイと納まる。

祐經　コリヤ／＼時致、この杯は斯く云ふ祐經が、物好きに依つて引かせしところの荒木の杯。河津杯と名けしは、赤澤山の椎の木に、射つけし河津が矢の根を惜しみ、せめて形見と祐經が重寶、今さら昔懷かしいわい。

トほろりとする。時致、三方のまゝ杯を引寄せ

時致　智者は惑はず、勇者は恐れずと云へども、痛手を負はれし親人樣、射返す力もあるまじきに、赤澤山の椎の木へ、羽ぶくら込めて射給ひし、萬夫不當の弓取りも、安元二年の初の冬、中の三日の御最期を、思へば／＼口惜しい。

ト時致、この杯を三方と共に微塵に摑み壞す。この時杯の中より矢の根出る。祐成、驚ろき、手ばしかく取上げ

祐成　ヤ、、、杯中より出でしは、父上のこりや矢の根。

時致　ナニ、この矢の根が……祐經觀念。

ト矢の根を直ぐに手裏劍に打つ。祐經、手ばしかく有り合せたる犬坊丸が首にて請けとめる。

皆々　ドッコイ。

ト祐經、受けたる首の額この矢の根立つ。と仕掛けにて、夥しく血汐出る。片貝、何心なく、フッと見て

片貝　犬坊さまが、あの血汐は

ト驚ろく。大ドロ／＼になり、流れし血汐に、焼酎火燃える。これにて、片貝、苦しむ思ひ入れあつて、引拔きになり、練張りの喰へ面にて飛び退く。と三味線入りの雷序になり、片貝、狐の思ひ入れあるべし。

祐經　犬坊丸が血汐流るゝと等しく、化したる姿を顯はせし、片貝姫が

皆々　この姿は。

ト皆々立ちかゝる。片貝、狐の思ひ入れあつて

片貝　恥かしや／＼。もと妾は伊豆の國、千本の森に年經たる、楡の葉狐でござりまする。

皆々　なんと。

片貝　範頼公へ參らする、血汐の爲に親狐を、犬坊丸に射留められ、口惜しいとは思へども、まだ世に殘る母狐、眷族狐もござりまする。富士の裾野の狩倉に、數多の狐の命ばかり、お助けなされて下さりませと、祐經さまへ願はん爲、片貝さまのお姿を、假りに勤めし今宵の今樣

祐成さまのお情にも、引かれて爰へ參りました。愚痴な畜生三界も、親ゆゑこの身を苦しむる、心の內をいづれも樣、お察しなされて下さりませ。

ト片貝、大泣き落し。祐經、思ひ入れあつて

祐經　女狐ながらも恩を知り、孝を立つるの志し、感ずるにも餘りあり。梛の葉狐が願ひを思へば、父を討たれし曾我兄弟

祐成　倶に天の戴かざる、敵へも正しく孝の道。

時致　五つや三つの頃よりも、十八年の天津風。

片貝　いま吹き返す恨みの葛の葉。

祐成　思へば昔を信田妻。

時致　今日今樣に和泉の國。

祐經　戀しく思ひし祐成時致。

兩人　祐經どの。

片貝　ハテ、珍らしい

四人　對面ぢやなア。

ト皆々思ひ入れ。

皆々　ドッコイ。

時致　祐經觀念。

ト小さ刀を持て、祐經にかゝらうとする。朝比奈、抱き留めて

朝比　ドッコイ／＼。まだ敵討のお膳が廻らぬ程に、おッ堪えて居ろ／＼。

範賴　ヤレ待て時致。聊爾すな。斯く云ふ範賴も、其方達兄弟が、志しも便なければ、せめて狩場の出立を幸ひに、狩家々々の繪圖面を、とくと見屆け思ひ出にせよ。

祐成　こは有り難き範賴公の御上意。

時致　只今我れ／＼兄弟に

兩人　狩場の體を。

範賴　熟覽せよ。

片貝　我が劫通にて今宵の篝火。願ひ叶うて嬉しやなア。

ト片貝、狐の思ひ入れ。夥しく狐火出て、方々へ散亂する。この時、正面の裾野の繪圖を押出す。

範賴　君の旅館を藍澤と定め

祐經　士卒の人數は十二萬八千五百八十三人。

八幡　和田北條畠山、その外梶原兒玉等、在鎌倉の分限に應じ

時致　狩家々々に幕引張り、中にも庵に木瓜の

祐經　その狩家こそ

兩人　ござんなれ。

祐經　ト兩人、詰め寄せる。祐經、思ひ入れあつて
五月雨の晴れ間待つ間の郭公、一聲おのが塒にぞ啼
く。
祐成　心あり氣な祐經どのゝ今の一首。五月雨の晴れ間待
つ間の郭公。
時致　一聲おのが塒にぞ啼く。
ト祐成、考へて
祐成　時致喜べ。皐月下旬の狩場に於て
時致　兄弟忍び入るならば
祐經　一聲おのが塒にぞ啼く。
兩人　エヽ、忝ない。
ト片貝、思ひ入れあつて
片貝　一聲おのが塒にて、啼く音は同じ姿が身の上。返す
返すも祐經さま。數多の狐の命ばかり、お助けなされて
下されませい。遁がれ難なき狩場の樣子、おのが在所も
その時に、よも隱れ家はござりますまい。エヽ、情ない
身の上ぢやなア。
祐成　必らず嘆く事なかれ。梛の葉狐の志し、不便に思へ
ば祐成が、肌身離さぬ父の形見。
ト懷中より狩衣を出して

この秋野の狩衣の、千草と云へる名にめでゝ、おことに
得さする秋野の狩衣。假の隱れ家。とく／＼持つて立歸
れ。
ト片貝へ渡す。片貝、取つて押頂き
片貝　情も深き祐成さまのこの賜物。犬坊丸もこの世に亡
きもの。望みたんぬる上からは、最早お別れ申しませう。
ト此うちに、小藤太、ソロ／＼後より出て來て
小藤　行氏觀念。
ト八幡へ切つてかゝる。ちよつと立廻り。片貝、思ひ
入れにて、小藤太を引寄せる。早雷序にて、小藤太、
片貝が劫通に引かれ、懷中より御教書を落し、直ぐに
祐經へ切つてかゝる。立廻りにて、祐經、小藤太が首
を切つて落す。
皆々　これは。
祐經　近江の小藤太親子の首級は、曾我兄弟へ祐經が年玉。
トつか／＼と寄つて、小藤太が首は祐成、犬坊丸が首
は時致、手ばしこく取上げ
兩人　忝ない。
ト此うち、八幡、袱紗包みより御教書を出して
八幡　これこそ三箇の莊の御教書。

片貝　祐經さまの、再びお手に入りましたか。

祐經　忝ない。

片貝　嬉しやなア。

兩人　祐經どの。

祐經　梛の葉いそふれ。

範頼　方々。

皆々　さらば。

ト早雷序になり、狐火數多出る。祐經、御教書を持つて、二疊の上に立ち身になる。八幡、上の方に扣へ、祐成、時致、首を持つて詰め寄せる。朝比奈これを隔てる。この途端に片貝、狩衣を持つて狐の思ひ入れにて、花道へ入る。

祐成　これより二番目始まり。

ト第一番目の大詰打込み。

念力箭立椙（終り）

初狂言凡例

兄の十郎祐成は
澤むらさきの江戸育
弟の五郎時致は
市川流れの吾嬬男
花待得對面榮

信田と工藤を繋馬の紋日
もの日の全盛くらべ淺間
嶽の名にしおふ茗荷屋の
奥州が鏡の裏の椰の葉は
おもひぞ伊豆の妻櫛に
笄の甚五郎が初元結の
鬢盥松の二葉もうつろい
て影はづかしき月小夜が
新枕の小袖乞滿江御前に
京の次郎朝比奈に三浦の
片貝めぐり〳〵て大磯の
虎少將が馴初の着衣始

春色中町曙

七種粧曾我

四番つゞき

曾我狂言百姿

「吉例曾我寶入船」より

（上）蒲冠者範頼。箱根の別當行實。

（下）曾我十郎祐成。大磯の虎御前。

七種粧曾我

藤ケ谷御殿の場

役名――頼朝息女、大姫。高坂甚内實ハ小山判官。狩野之介宗茂。石田三郎爲久。堀の藤太近家。宗茂奴、妻助。石田奴、幸平。局、若菜。宗茂姉、常磐木。非人、泥脛の八。腰元、伏屋實ハ義仲息女旭の前。秩父庄司重忠。

本舞臺、三間の間、東へ寄せて高さ六尺位なる高閣、塗り骨の緞張り障子。向う正面金襖、極彩色模樣、塗り高欄に鍍金の金物打つたる御殿作りの體。下の方に上がり段を横に取りつけ、上の方に石燈籠、手水鉢、袖垣を見て、橋掛りの方に枝折り戸、これに山吹咲きかゝり、西の上棧敷より東の上棧敷まで水引を一杯に藤棚見事に設らへて、大臣柱に松の立ち木。これより藤葛生ひかゝりあり、幕の内より妻助、奴の形にて片肌脱ぎかけ、土手平を引寄せ居る。土手平、奴の形にて誂らへの革文箱を引ッ抱へ、妻助が襟を引きつけて居る。早神樂にて幕明く。

ト直ぐに立廻りありて、どつこいとまる。

妻助　待て。誰れだと思つたれば、姫君樣のお側附きの、石田の三郎爲久どのゝ、草履摑み土手平だな。合點のゆかぬその狀箱、この妻助に渡すまいか。

土手　おやつかな。この土手平が云ひつかつて、首にも代へなすこの文箱、うぬらに渡していゝものか。サア、押ッ開いて通すまいか。

妻助　駿河の國に於て、阿野の法橋全成どの、義經どのが御最期を御無念に思され、御大望の企てある由、油斷ならざる鎌倉の取沙汰。及ばずながら妻助が、文箱の内を改めて、御主人狩野之介さまへ、詳しう申し上げにやならぬ。サア、キリ／＼と渡すまいか。

土手　人にこそ依れこの奴、土性骨を見拔かれて、石田の三郎爲久さまより、仰せつけられたる大切なるこの文、うぬに渡してなるものか。達て見ようと吐かしやがると、打ッ放してかッ走るぞ。

妻助　サア、キリ〳〵と渡すまいか。
土手　そこ退け。
妻助　渡せ。
土手　そこ退け。
兩人　どつこい。

ト早神樂になり、この文箱を枷に甲斐々々しき立廻りあつて、トゞ、妻助、土手平を當て、文箱を持つて東の歩みへ行くと、「石田の三郎出仕」と呼ぶと、太鼓謠ひになり、東棧敷の下より石田の三郎爲久、上下衣裳の形にて、三方に袈裟衣、剃刀、七寶の珠數を載せて持つて出て、妻助を舞臺へ押し戻す。此うち、土手平、心附き立ち上がり、妻助が持つたる文箱を引ツたくる。妻助、それと寄ると、爲久、これを隔てゝ、土手平に行けと顏にて教へる。土手平、呑み込み、一散に向うへ駈けて行く。花道にて「狩野之介宗茂出仕」と呼ぶ。また太鼓。謠ひになると、宗茂、上下衣裳の形にて、三方に錫の神酒德利を二つ載せ持つて來て、土手平をヂリ〳〵と押し戻すと、妻助、土手平が持つたる文箱へ手を掛け、立廻り、どつこいと納まる。爲久、宗茂、東西ともに中程にとまる。

爲久　土手平退され。
宗茂　妻助扣へい。
土手　お旦那の御意ではござれども合點のゆかぬこの文箱、妻助は詮議仕りまする。
妻助　指でもつけると、手は見せぬぞ。
爲久　コリヤ〳〵、相手にこそ依れ、狩野之介どのゝ御家來、粗忽な事を申すまいぞ。
土手　ネイ。
宗茂　コリヤ〳〵妻助、石田どのゝ御家來へ對し、粗忽な事を申すまいぞ。
妻助　でも。
宗茂　扣へ居らぬか。
妻助　ネイ。
宗茂　文箱を其まゝに差置き、下がれ。
妻助　でも。
宗茂　下がらぬか。
土妻　ネイ。

ト文箱を舞臺へ置き、妻助、土手平、橋掛りへ扣へる。

爲久　それにお居やるは、狩野之介宗茂どの。
宗茂　左樣仰せらるゝは、石田の三郎爲久どの。

爲久　思ひも寄らぬ只今の參會。
宗茂　御挨拶いたすも爰は往來。
爲久　先づ〱あれへ、お越しなされい。
宗茂　然らば左樣仕らう。爲久どの。
爲久　狩野之介どの、イザ。
宗茂　イザ。
兩人　御同道いたさうか。
ト管絃になり、爲久、宗茂、舞臺へ來る。
爲久　狩野之介どの、一別以來、先づ〱御別條無うて、めでたう存じまする。
宗茂　石田どのにも御健勝にて、めでたう存じまする。
爲久　早速ながら問ひたきは、貴殿の御持參召されしその神酒は、如何なる神へ供へ召さるゝ。
宗茂　持參仕りたるこの神酒は、先達て政子御前さまより、仰せつけられましたる、駿河の國に名高き阿部野村女狐を、當所鎌倉の淨妙寺の奥山へ移し、稻荷明神と勸請なし、賴家公の御武運長久を祈り、鎌倉に於ては、八幡宮へ供へましたる神酒、大姫君さまにも御頂戴なさるるやうにと、政子御前さまよりの御諚。狩野之介が今日の役目、御前よろしう御披露賴み存じまする。

爲久　先達て承はつたる、狩野之介どのゝお役目。曾我十郎祐成を同道召され、念なう千歳の女狐を、淨妙寺の奥山へ移され、稻荷明神と勸請召されしとは、いよ〱賴家公の御武運長久に、供へられたるその神酒、姫君樣へお取次仕るでござらう。
宗茂　早速の御承知、忝ない。時に承はりたいは石田どの、貴殿の御持參なされたるその品は、いづれへお上げなされまするぞ。
爲久　拙者が持參いたしたは、御剃髮の調度でござる。
宗茂　思ひも寄らぬ袈裟衣、七寶の珠數までも、お供へなされて、何方へ御持參召さるゝぞ。
爲久　この藤ケ谷の御殿にお入りなさるは、賴家公の御姉君大姫君さま、兼ね〴〵木曾どのゝ公達、清水の冠者義高どのゝと、御緣を組まれしところに、朝敵に等しき義仲が行跡ゆゑ、その公達たる清水の冠者、禁庭の聞えを恐れ、先つ頃入間川原に於て、堀の藤太近家太刀取りとして、義高の御首を賜はり、過ぎ去り給へば、大姫君は下世話に申す谷者同然。依つて御剃髮を勸め奉れと、北條どのよりの御内意に依つて、斯く申す石田の三郎、御剃髮の調度を持參仕つてござる。

宗茂　さすれば清永の冠者義高公と、御縁組みなれし大姫君さま、朝敵の末とて堀の藤太、冠者の御首を賜はれば、姫君様には御剃髪あられよとの、時政どのよりの御内意でござるとな。

爲久　朝敵なれども木曾どのは源家の一族、大姫君を尼君になし奉るも、御尤もなる御内意ではござらぬか。

宗茂　左様でござる。併しながら石田の三郎どのには、粟津ケ原にて、義仲公を遠矢にかけられ、木曾どのゝ公達たる、清水の冠者義高公まで、堀の藤太が手にかけられ、義仲公の御血筋を絶たれ、さぞかし御本望でござらうの。

爲久　治國太平を心がくる武士の役目。清水の冠者を押ッ殺しても、まだ〳〵義仲の血筋には、旭の前と申す奴がござるて。斯く申す石田の三郎を、義仲の仇と附け狙ひまするとの風聞。なんと小積な奴ぢやござらぬか。

宗茂　左やう〳〵、女子童の身を以て、石田どのを狙はれまするとは、しをらしいと申さうか、及ばぬ事と申さうか。御挨拶にも及ばれませぬ。

爲久　旭の前の在所さへ知れてござらば、返り討に打ッ放して、朝敵の末は根を絶つて葉を枯らさうと存ずる。

妻助　狩野之介さまへ申し上げまする。ソレその文箱こそ怪しき器、御詮議なされ、御尤もに存じまする。

土手　默れ妻助、この土手平が持参なしたる、その文箱がなんとした。

妻助　なんとしたとは騒々しい。察するところあの中は、阿野の全成公へ、鎌倉の樣子を內通の密書と見た。この妻助が御前に於て、ドレ改めて、お目にかけうか。

土手　ドッコイ、この土手平が見せる事はならないワ。

妻助　詮議しかゝつたるこの文箱、中改めずに置かうか。

土手　小積な奴の。

ト兩人立ちかゝる。宗茂、土手平を突き退けて、文箱を取上げる。亭の內より狩野之介姉常磐木、衣裳裲襠にて出かゝり、この體を窺ひ居る。

宗茂　合點のゆかぬこの文箱、狩野之介が改め見ん、ソレ。

爲久　待て。

宗茂　待てとは。

爲久　その文箱の中こそ、範賴公の御病氣御全快の爲、御服藥に用ゆるところの一品。改め見るに及ばぬぞ。

宗茂　何がなんと。

爲久　先達て工藤左衞門祐經方より、辰の年月日時に生れ

し、女子の血汐を調へ差上ぐる。その血汐と調合なし、御良薬に用ひられんと、仰せつけられたる某。詮議立てして後悔ひろぐな。

宗茂　さすれば範頼公、御服用なさるゝ、がんぜん草でござるとな。

爲久　如何にも、御難病を治する薬草サ。

宗茂　然らば拙者とても後學の爲、ちよつと拜見いたしませう。

爲久　御大切なる範頼公の良薬、内見は叶はぬ事。狩野之介、さらば。

宗茂　爲久どの、望みかゝつたその一品。是非拜見が致したい。

爲久　すりや、狩野之介には、推して改め見る心か。

宗茂　おんでもない事。

爲久　慮外な奴の。

茂宗　何がなんと。

爲久　許さぬぞ。

ト詰め寄る。常磐木、ツカ〳〵と下りて來て、この中に入り

常磐　待つた〳〵。狩野之介扣へぬか。

宗茂　左様仰しやるは姉者人。

常磐　なんぢやあらうと控へて居や。あなたは石田の三郎爲久どの。マア〳〵お待ち下さりませう。

爲久　誰れかと思へば狩野之介の姉御、常磐木どの、何ゆゑ、留め召されたのだ。

常磐　先刻にからの様子、あれにて見受けましたるところ、申し譯のないは狩野之介宗茂。手前の役目でもござりませぬ事を、彼れこれと申し募りまして、さぞかしあなた様にも、お腹が立ちまするでござりませう。その所は私しに御免じなされ、幾重にも御堪忍なされて下さりませい。狩野之介、其方の役目と云ふは、政子御前さまより仰せつけられたる、稲荷の宮居を勸請なし、頼家公の御武運を祈るが其方の役目。かけも構はぬ文箱の詮議。如何に年若なればとて、ちと嗜なんだがよいわいの。

宗茂　左様ではござれども、心得ぬ文箱の中。この所にて拙者詮議仕らん。

常磐　アレ、まだかいの。姉に任せて、扣へて居や。

爲久　狩野之助宗茂、この文箱の中を見ないのか。なかなかお身達の器量で、改めて見る事はなるまい〳〵。さればこそ今年頼朝公、富士の裾野の放ち狩、在鎌倉の大小

名、我れも〳〵と召さるれども、狩野之介ばかり、お供叶はず、政子御前の御用を承はり、女童も同然な御奉公、口惜しいとも思はずして、おめ〳〵と生恥晒し、それでも武士か侍ひか。腰の拔けた狩野之介、石田の三郎に刃が立つものか。

トこれにて宗茂、無念なるこなし。

常磐　左樣でござりまする。さりながら、御狩場のお供の事は、政子御前さまのお執成しにて、この度の御用、首尾よくしおほせましてもござりませうならば、御狩の御供を仰せつけられまするとの、賴朝公のお墨付、大姫君さまより御頂戴いたします筈でござりまする程に、三郎さまにも憚りながら、お喜び下されい。

爲久　さすれば狩野之介も、狩場のお供を仰せつけらるゝとの、賴朝公のお墨付を、大姫君より頂戴おしやるのか。

常磐　左樣でござりまする。お墨付さへ頂戴いたしますれば、狩野のお供はなりまするわいな。

爲久　イカサマ、いゝ男にやア生れたいものだ。大姫君さまのお目にとまつた狩野之介、味な所から附け込んで、お墨付を頂戴。その段切りが思ひやられる。近頃笑止千萬な。

宗茂　粟津ヶ原の松原にて、義仲公を討取りしは、石田どのゝ流れ矢の高名、その高名を鼻にかけ、狩野之介宗茂を、餘り嘲弄召さるゝと、その分には致さぬぞ。

常磐　コレ〳〵、假初めの憤りにその身を忘れ、短氣なる心を出さずとも、大姫君さまより恙なう、お墨付を頂戴して、狩場のお供を勤めずば、其方の武士は立つまいぞや。

宗茂　サ、それは。

常磐　姉と一緒に御殿へおぢや。

宗茂　ム。

ト詰め寄せる。常磐木隔てゝ

常磐　コレ。

宗茂　妻助、供せい。

妻助　ネイ。

常磐　爲久どの、後程お目にかかりませう。

ト唄になり、常磐木、宗茂、妻助、奥へ入る。土手平、あたりを見て

土手　お旦那へ申し上げまする。先達て仰せつけられましたる南蠻流の毒藥、はんきらうけんが密法の妙藥、まんま

と持參仕つてござりまするが、この毒藥は何者を、ヤツつけるのでござりまする。

爲久　外でもない、この毒藥は狩野之介めに。

土手　アノ狩野之介。

爲久　やかましい。斯く云ふ石田の三郎を始め、阿野の全成どのに一味なし、富士の御狩の留守を幸ひ、大望成就なさんと企てたる事を、それと知つたる狩野之介、助け置いちやア事の破れ、密法の毒藥を喰はせて、彼奴から先へ片附けるつもり。それから後は北條を始め、秩父の重忠に至るまで、氣ぶつさいな奴等は皆殺し。隨分と合點か。

土手　お氣遣ひなされますな。毒藥を盛るもくが割れりヤア、お旦那に御苦勞はかけませぬ。

爲久　出かした。

土手　して、狩野之介にこの毒藥の、喰はせやうがござりまするか。

爲久　それは如才があるものか。見たか。幸ひのこの神酒德利、この毒をこの中へ仕込んで、神酒頂戴が毒の試みあたりへ氣を附けろ。

土手　心得ました。

爲久　ソレ。

ト管絃になり、爲久、文箱の内より毒藥を出して、德利の中へ入れる。

土手　思ひも寄らぬこの毒藥、よもやこれぢやア。

土手　成程、神酒だと思つて、喰ひさうなものだとは存じまするが、もし感づいて喰はぬ時にやア。

爲久　それにぬかりがあるのか。

ト袂より呼子を出して吹くと、袖垣の内より地もぐり忍びの形にて出て來て平伏する。

地潜りか。

地潜　呼子を合圖に參つたが、なんの御用でござりまする、

爲久　兼ねて云ひつけ置いたる通り、湯殿の下へ忍び込んで、上より流れる水を合圖に。

地潜　アノ、流れる水を合圖に。

爲久　狩野之介めを突き殺せ。

地潜　合點だ。

爲久　忍べ。

地潜　ソレ。

ト拔き身を提げ、袖垣の内へ忍ぶ。向うより「大姫君さまお入り」と呼び。爲久、土手平と囁き、トヽ、酒

の德利を持つて下座へ入る。これにて又「大姬君さまのお入り」と呼び、誂らへの鳴り物になり、下座より常磐木、以前の形。德竹、上下衣裳の形にて出て來て出迎ふ。花道より大姬君、廣振り袖、裲襠、衣裳の形にて扇子を持ち出て來る。後より若菜、裲襠衣裳、しらの鬘、局の形にて附き出る。後より腰元一人、裲襠衣裳にて出る。後より女中一、着流し、衣裳にて狆を抱へ出る。後より女中二、着流しにて蒔繪の硯箱を持ち出る。女中三、着流しにて定家文庫を持ち出る。後より、伏屋、振り袖着流しの形にて銀の莨盆を持ち出る。後より堀の藤太、上下衣裳にて紅麻の汗手拭を頭に卷き、藤の枝を擔ぎ出て來る。江間の小四郎義時、衣裳上下にて茶瓶に塗り樽を結びつけ擔ぎ出て來る。いづれも花道の中に立ちとまり

常磐　大姬君さまには、今日は藤見の御趣向とて、この藤ケ谷の御殿へのお入り、お出迎ひの爲、常磐木を始め

德竹　お厩の德竹。

三人　これまで參りましてござりまする。

若菜　これは〳〵、ようお心の附かれしお出迎へ。名にしおふ藤ケ谷の藤の盛り、ほんに見事でござんすな。

腰元　ソレイナ、爰やかしこの若草に、摘草摘んで家土產の、賤が手業も一入の、お慰みではござりませぬかいな。

女一　姬君樣にも、いつ〳〵より御機嫌ようて、お嬉しう存じまするわいな。

女二　それ〳〵、外珍らしいお庭の内。日の暮るゝのが惜しいわいなア。

女三　ならう事なら、毎日々々、此やうな所へ、お供がしたいものぢやな。

伏屋　綠の空も青々と、夕紫の花盛り、よい眺めでは

皆々　ござりませぬかいな。

大姬　「我が宿の藤の色濃き黃昏に、尋ねやは來ん春の名殘を」藤の裏葉の卷までも、思ひ出さるゝ花の眺め。これにつけても見まほしきは我が戀人。暫しのうちも忘れぬ花と、散りもせば思ひはあらじ、心に任せぬ浮世ぢやなア。

藤太　シタリ、女中方と云ふものは、藤の花を見ても、氣の浮かぬせりふ廻し。今日は賴朝公まで、上聞に達したる、姬君樣の藤見の御趣向。斯樣に申す堀の藤太までも大津繪を見るやうに、枝を擔いでお供の役目。なんと、お酒になされて然るべう存じまする。

義時　上下で茶瓶持ちとは、時代と世話の江間の小四郎、見ましたるあの花の下へ、イザ〱、入らせられませう。
若菜　それ〱、今日一日は慮外はお許し。隨分姫君樣の御機嫌のよいやうに、騷いだがよいわいの。
皆々　畏まりましてござりまする。
大姫　皆の者、こなたへおぢや。
皆々　先づ、お入りなされませう。
トまた誂らへの合方になり、皆々本舞臺へ來て、床几にかゝる。これより義時、燗鍋に樽の酒を移し、茶瓶を煽いで燗をする。藤太、提げ重より杯臺を出して床几の上へ直す。
藤太　サア〱、お始め遊ばされませう。
若菜　モシ〱、あの花を御覽じて、お心を。オヤ〱、オヤ〱、どうせうの。
腰元　此やうに、散りも始めぬ藤の盛り。姫君樣にも、常々戀しい床しいと、思し召してお出でなされまするお人と一緒に、この所を御覽なされたら、さぞお嬉しうござりませうな。
大姫　サイナ。花見は愚か自らは、戀しと思ふその人に、添はるゝ事もあるならば、賤ケ伏家に洩る月を、夜もすがら眺むる心ぢやわいな。
腰一　其やうに、明暮れ思うてお出でなされまするとのお人は、どなた樣でござりまするぞ。
若菜　ハテ、そりや知れた事いな。兼ね〲御緣をお組みなされた、淸水の冠者義高さまであらうわいの。
伏屋　若菜さまの云うてぢや通り、義高さまでござりませう。これに違ひはござりますまい。
大姫　なんのいな。義高さまの事は、心に染まぬあの緣組み。自らがこれ程に思うて居るは、アノ、可愛らしい狩野之介ぢやわいの。
若菜　モシ〱、アノ狩野之介が爲には、あの常磐木どのは、眞實の姉でござりまする。滅多な事仰しやりまするな。
大姫　そんならアノ常磐木と、狩野之介とは兄弟かえ。
皆々　左樣でござりまする。
大姫　オヽ、恥かし。コレイノ、常磐木、其方は狩野之介と、眞實の兄弟かや。
常磐　左樣でござりまする。はしをり鏡の一人の弟。その弟に成り代りまして、姫君樣へお願ひがござりまする。

大姬　成り代ると云やるからは、其方の願ひは狩野之介が願ひ。どのやうな事なりとも、自らが聞かう程に、サア〳〵、早う聞かせてたもいの。

常磐　ハア。そのお願ひと申しまするは、先達て政子御前さまへ申し上げましたる、富士の裾野の御狩場へ、狩野之介をも何卒お連れなされんとあるお墨付を、御頂戴いたしませうならば、有り難う存じまするわいな。

大姬　コレ〳〵、その事ならば自らへ、お渡しなされし父上のお墨付。願ひと云ふはこの事かいの。

ト懐中より、錦の袱紗に包みしお墨付を出して見せる。常磐木、喜んで

常磐　そんならそのお墨付を。

大姬　自らが手より、狩野之介が手へ、直に渡さうと思うて、肌身離さず此やうに、持つてゐるのぢやわいの。

常磐　そのお墨付さへ、頂戴いたしませうならば、狩野之介事は狩場の御供。エヽ、有り難い。

大姬　コレ常磐木、狩野之介が願ひ叶うたら、其方は嬉しいかや。

常磐　ハイ〳〵、嬉しうなうて、なんと致しませう。

大姬　さうであらう。誰れしも願ひが叶うたら嬉しいもの。自らも人傳手に、云ふ由もなき願ひ事。どうぞ叶へて欲しいわいの。

常磐　そりやモウ、姬君樣のお願ひ、どのやうな事なりとも、叶へませいで、なんと致しませう。

大姬　そんなら常磐木、其方は叶へてたもるかや。

常磐　身に叶ひましたる儀でござりませうならば、如何やうとも致しませう。マア、仰しやつて御覽じませい。

大姬　サア、それは。

常磐　サア、仰しやつて御覽じませい。

大姬　ツントモウ、恥かしうて。

常磐　なんのマアお心弱い。マア、仰しやつて御覽じませい。

大姬　そんなら云うても、大事ないかや。

常磐　なんの大事ござりませうぞ。

大姬　そんなら云ふぞや。

常姬　早う仰しやりませい。

大姬　取持つてたも。

ト顔を隠す。

常磐　エ、そりや何人をお取持ち致しまする。

大姬　サイノ、其方の弟狩野之介、あのやうな可愛らし

い男もあるものかと、心に思ふは穂に出で初め、物や思ふといつしかに、人も知つたる自らが戀人。どうぞ取持つてたもいの。

常磐　なんの事かと存じましたれば、狩野之介が事。ツイ仰しやつてもよい事を。お氣遣ひなされまするな。お取持ち申しませうわいな。

大姫　そんなら取持つてたもるかや。

常磐　お取持ち致しませいでは。姫君様のお取次にて、富士の御狩のお供を、仰せつけられまする狩野之介が事。如何やうともお心任せに、お取持ち致しませう。

大姫　そりやほんの事かいな。此やうな嬉しい事があらうかいの。そんなら常磐木、藤に寄せたる自らが戀歌、短册に書いて遂らう程に、あの狩野之介に、屆けてはたもるまいか。

常磐　流石は姫君様、藤に寄せたる戀歌とは、けうといものでござりまする。善は急げと申しますれば、ちやつと短册へお認め遊ばしませい。

大姫　そんなら屆けてたもるかや。

常磐　早う認め遊ばしませい。

ト蒔繪の硯箱に短册を載せて、大姫が前に置く。大姫、嬉しさうに短册を取上げ、筆を取つて書かうとして、恥かしき思ひ入れあつて

大姫　書かうと思うても、よう物書かぬ自らが水莖、狩野之介が思やるところもあれば、イヤ／＼、自らは書くまいわいの。コレ／＼、わが身書いてたも。

腰元　お姫様の御意ではござりまするが、どうしてマアあなたのお代筆がなりませう。私しは御免なされて下りませい。

大姫　そんなら誰れに書いてもらはうぞいの。

若菜　モシ／＼、幸ひな事かござりまする。この間御奉公に上がりました、お腰元のあの伏屋、物書く事は御祐筆もそこのけ。なんと伏屋にお書かせなされませぬか。

大姫　ほんに、それ／＼、あの伏屋は手をよう書くとの事。コレ／＼、爰へ來てたもいの。

伏屋　ハイ／＼、御用でござりまするか。

大姫　ちやつと爰へおぢやいの。コレ伏屋。

伏屋　ハイ／＼。

大姫　この短册へ自らが、藤に寄せたる戀歌の腰折れ。ちやつと一筆書いてたもいの。

伏屋　これは又、思ひがけもない姫君様の御意。私し事は

ろく〳〵物書く事は。
若菜　コレ〳〵、お姫樣の御意ぢや。どのやうでも、早う書いたがよいわいの。
伏屋　これは又、恥かしい事ではある。左樣なら認めまするでござりませう。
ト短册を取上げ、筆を持つて書きにかゝる。
大姫　そんなら、ちやつと書いてたも。
伏屋　憚りながら、お歌を御意遊ばしませ。
大姫　藤に寄する戀と云ふ題を書いてたも。
ト恥かしきこなし。伏屋、短册を書く。
紫の絲より落つる藤の花、思ひ餘りて綻びにけり。と書いてたもいの。
伏屋　紫の絲より落つる藤の花、思ひ餘りて綻びにけり。斯やうに認めましてござりまする。御覽遊ばして下さりませい。
ト大姫に渡す。大姫、よく〳〵見て
大姫　でもマア、見事なこの手蹟。伏屋、其方の身の上が、自らは床しいわいの。
伏屋　お恥かしうござりまする。
大姫　サア〳〵、この短册を、早う狩野之介へ屆けてたも。

常磐　ハイ〳〵、お氣遣ひ遊ばされまするな。追ツつけよい御返事を、お聞かせ申し上げませう。
ト短册を戴いて箱へ入れる。
義時　お待ちなされい常磐木どの。假初めならぬ賴朝公の姫君、狩野之介へ御執心などと、噂あつては天下の大事。そのお短册取次召さる事は、御無用でござるぞ。
常磐　そんならこの短册は。
義時　お取次、御無用でござる。
藤太　江間の小四郎、扣へ召されい。姫君樣の御事は、一旦淸水の冠者義高どのと、御緣はお組みなされたれども、朝敵に等しき義仲の公達ゆゑ、外でもない、斯く申す堀の藤太が、入間川原にて御首を賜はり、後にお殘りなされたる大姫君さまは、彼の下世話に申す若後家、尼君におなりなされうとも、好いた男を思ひなされうとも、お心任せとの事。お目にとまつた狩野之介は福德の三年目。いらざる事に口を出さずと、すツ込んでお居やれ。
義時　默り召されい。姫君樣は御緣組まれし、淸水の冠者の御菩提の爲、御剃髮を勸め申せとの事。それに不義を勸め召さるは、堀の藤太の心の內、なんとも合點參らぬて。

藤太　サア、そりやア。

義時　返答仰しやれ。なゝなんと。

藤太　エ、、忌々しい。

ト　これにて義時、以前の袈裟衣を持つて、大姫が前へ置き

義時　姫君樣へ申し上げまする。義高どのゝ御菩提の爲、御剃髪あつて然るべう存じまする。

大姫　默れ。朝敵の末の淸水の冠者に操を立て、尼になれとは、心に染まぬ義時の勸め、見るもなか／＼汚らはしき剃髪のこの調度。自らの心はこの珠數。先づ此やうに引斷つて、出家得道思ひも寄らぬ事。重ねて勸むる事勿れ。そこ立つて行け。

ト　珠數を引斷つて義時に打ちつける。

皆々　これは。

大姫　常磐木、自らと奥へおぢや。

皆々　先づ、お入りなされませう。

ト　管絃になり、大姫、常磐木が手を取り、奥へ入る。これを皆々附いて奥へ入る。直ぐにてんつゝになり、花道より、侍ひ四人、棒を突き、下がれ／＼と云ひながら出て來る。非人泥脛の八、乞食の形にて、小さき岡持を持ち出て來て、花道の中にて

侍ひ　下がれ／＼。

八　お侍ひ樣方、何も其やうに、下がれ／＼と仰しやる事はござりませぬ。大勢ぢやアござりませぬ。乞食ならたつた一人、堀の藤太さまに用があつて、來た者でござりまする。打ッちやつて置いて下さりませう。

侍ひ　ヤイ／＼、堀の藤太さまに用があると吐かして、其やうにッカ／＼とうしやアがるが、見れば小さい岡持を提げて居るが、此奴は陸釣りにでもうせたのか。そしてマア、爰はどこだと思ふ。下がれ／＼。

八　ハテサテ、爰は知れた事、賴朝さまの姫君樣の、藤ケ谷の御殿。堀の藤太さまに、お目にかゝりさへすればなんでも分る。乞食でござりやす程に、サア／＼、構はずと、やつて下さいまし／＼。

藤太　コリヤ／＼、騒々しい。何事ぢや／＼。

八　モシ／＼、さう仰しやるは、旦那どのぢやござりませぬか。

藤太　其方は小袋坂の非人、泥脛の八ぢやないか。

八　泥脛でござりまする。あなたをお尋ね申して參りました。

藤太　此方でも最前から待つて居つた。コリヤ〳〵侍ひ中、この人にちと內々にて用事あれば、この所に差置き、方方引き召されい。

侍ひ　ハア。

ト皆々向うへ入る。

藤太　泥鰌、近う參れ〳〵。時に、この間より賴み置いたる雌雄の井守、其方が手に入つたか。どうぢや〳〵。

八　お喜びなされませ。方々と尋ねましたるところに、やう〳〵と手に入りましたゆゑ、この岡持へ入れて持つて參りました。

ト岡持を取つて、井守を見せる。

藤太　出かした〳〵。

八　時に、この井守を取つて、なんになされまする。

藤太　雌雄のこの井守を酒に浸して、男女して呑む時は、どのやうな色事でも、忽ち出來るが井守の不思議。それゆゑ、其方を賴んで取寄せたのだ。

八　して、その井守を、誰れに呑ませるのでござりまする。

藤太　外でもない。これなる御殿の姫君と、斯く云ふ壻の藤太、この酒を呑んで、ちん〳〵鴨の色鳥になる心。嫌な奴ぢやアないか。

八　そんなら、その井守の酒を、お姫樣とお前樣が、お上がりなされますか。

藤太　やかましい。幸ひ〳〵。有り合せたるこの神酒德利、人目にかゝらぬうちに、井守の酒に拵らへべいか。あたりへ氣を附けろ。

八　合點でごんす。

ト此うち藤太、井守を取つて德利の口へ入れ、振り廻して元の通りに口をして置き

藤太　これでよい〳〵。其方には邸に於て褒美をくれう。待つて居れ。

八　有り難うござりまする。さらばお暇申しませうか。

藤太　コリヤ〳〵、其方はどれへ參る。

八　お聞きなされませ。私しどもの仲間に、女非人がござりまするが、この間からふけりまして、行くへが知れませぬに依つて、尋ね出さにやア、仲間の法が破れまするから、尋ね出して小家へそびいて參りませうと存じまして、その非人めを爰から直ぐに、尋ねに參りまする。

藤太　ハテナア。さりながら、只今其方を歸しては、人目も如何。先づ〳〵袖垣の傍らに、暫し差扣へてよからう。

八　左樣ならば、暫らくこれに居りませう。

藤太　外に用事もあれば、某に續いて此方へ參れ。

八　畏まりましてござりまする。

ト管絃になり、藤太、德利と三方を持つて奥へ入る。泥脛の八、續いて入る。ト奥にて「お姬樣のお入り」と呼ぶ。直ぐに管絃にて、亭の障子を上げると、大姬、爲久、以前の形にて並び居る。

爲久　大姬さまへ申し上げまする。最前申し上げたる御剃髮の事を、お聞入れござりませねば、お側に附き添ひ罷り在りまする石田の三郞、賴朝公へ申し譯が相立ちませぬ。依つて御出家得道あつて、然るべう存じ奉ります。

大姬　又しても石田の三郞が剃髮の勸め、どのやうに云やつても、自らは尼になる心はないわいな。

爲久　左樣ならば姬君樣には、御出家なさるゝお心はござりませぬか。

大姬　思ひ染めたる狩野之介と、女夫になりたい自らが願ひ。例へ父上樣や時政のお勸めぢやと云うて、尼にどうしてなられうぞいの。

爲久　お情ない姬君樣。斯く申す石田の三郞は、賴朝公よりのお附き人。御承引なければとて、その分に差置きませうか。お聞入れなければ、恐れながらその黑髮、一思ひに拙者が剃り落して上げませう。

大姬　コレ〳〵、石田の三郞、なんとしてマア自らが、千筋と撫でし黑髮を剃り落さうとは、コリヤ、胴慾ぢや。なんの狩野之介と假初めにも、枕交さぬ其うちに、自らはなんぼでも、出家する事は嫌ぢヤわいの。

ト行かうとする大姬を引寄せて

爲久　如何やうに仰せられても、石田の三郞が御出家に仕らねば、賴朝公へ申し譯がござりませぬ。これまでの事と諦められ、サア、速やかに御剃髮。

トあたりを見廻して

と申すは僞はり。狩野之介とお添ひなされませい。

大姬　なんと云やる、石田の三郞。出家になれと云ふは僞はり。アノ狩野之介と自らに、こなたは添へと云やるのか。

爲久　申しませいで、なんと致しませう。蕾の花の姬君樣と、男盛りの狩野之介と、夫婦におなりなされませ。

大姬　そんなら其方も得心して、自らと狩野之介と、アノ女夫にしてたもるかいの。

爲久　結ぶの神は石田の三郎。お氣遣ひなくお添ひなされませ。
大姫　さう云やるのか定ならば、なんにも云はぬ石田の三郎。コレ、手を合せて拜むわいの。
爲久　なんの〳〵。併しながら狩野之介は、御母公政子さまのお附き人。如何ほどに思し召しても、よもや御縁を組まれまする事は、賴朝公にも御得心はござりますまい。
大姫　そんなら、どうしたらよからうぞいの。
爲久　まこと狩野之介どのと、夫婦におなりなさるゝお心ならば、なんと狩野之介を、阿野の全成公へお味方にお付けなされまするお心はござりませぬか。
大姫　サイナ、狩野之介と女夫にさへならるゝなら、どうなりともせうわいの。
爲久　左樣ならば、狩野之介を全成公に、お味方にお附けなされまする、御心ござりまするか。
大姫　サア、どうなりと、其方の心任せになるわいの。
爲久　その御心なら姬君樣、御父賴朝公の御所持なされし軍勢催促のお袖判、人知れず盜み出し、拙者にお渡しなされませ。それを一つの功となし、狩野之介を阿野の全成公の、お味方に附けますこの爲久が心底、この儀は如何でござりまする。
大姫　そんならあの狩野之介を、全成公のお味方に附けるには、父上賴朝公の、軍勢催促のお袖判を、自らが奪ひ取つて、其方へ渡せば、アノ、狩野之介は全成さまの、ツイ御家來になるゝかいの。
爲久　左やう〳〵、全成公の御家來にして、狩野之介と夫婦におなりなされませ。
大姫　さうぢや。夫婦にさへならるゝならば
爲久　賴朝公の
大姫　アノ、お袖判を。
爲久　コレ。
ト思ひ入れする。向うにて「上使」と呼ぶ。
さては、姬君樣を御剃髮となし奉り、松ケ岡の御庵室へお移し申さんと、お迎への爲、上使と云ひしは秩父の重忠。差當つたる某が當惑。ハテ、なんとしたものであらうな。
大姫　そんならいよ〳〵自らを、剃髮させて松ケ岡の、アノ庵室へ移さんと、父上樣の上使として、秩父の重忠參りしとや。ホヽ、ホイ。
ト當惑する。また向うにて「上使」と呼ぶ。直ぐに太

皷謠になると、下座より義時、侍ひ二人、刀を提げて出迎ふ。花道より重忠上下衣裳、大小の形にて出て來る。これに羽織袴の侍ひ大勢附き出る。花道中程にて

重忠　因幡守秩父の重忠、鎌倉よりの上使、役目でござれば上座仕る。許さつしやれて下されい。

皆々　先づ〳〵お通りあられませう。

トまた太皷謠になり、重忠、上へ通る。此うち大姫、爲久、亭の内より下りる。

義時　これは〳〵秩父の重忠どの、今日の御上使、御苦勞千萬に存じまする。

爲久　御上使の趣き、石田三郎爲久へ、仰せ聞けられ下されませう。

重忠　兼ね〴〵清水の冠者義高どのと、御縁組まれたる頼朝公の姫君、御剃髪をお勸め申し、松ケ岡の御庵室へお移し參らせよと、上意を蒙むり、出迎への爲參上仕りたる某。上使の趣き、斯くの通りでござる。

爲久　御上使の趣き、逐一承知仕つてござる。併しながら、御縁組まれし清水の冠者は、木曾義仲の公達。その義仲は何人。叛逆謀反の朝敵同然。その血筋たる清水の冠者、入間川原に引出し、堀の藤太が太刀取りにて、御首を刎ねられしも、禁庭を恐れ給ひたる、頼朝公の御計らひ。朝敵の末の義高どのゝ菩提の爲、姫君へ御剃髪を勸めなさるゝは、憚りながらあるまじき事。お側に附き添ひ罷りある、石田の三郎が、早速のこのお請けは、容赦にあづかりたい。

義時　コレ〳〵石田どの、味な事を云ひ召さるゝ。姫君へ剃髪の儀をお勸め申されいで、茶々を入れ召さるゝは、何か胸中に一物ありさうに見えますわえ。

爲久　默り召されい。武功第一の某に向つての慮外の段、免さぬぞ。

義時　何を推參な。

爲久　なんと。

ト兩人詰め寄る。

重忠　コレ〳〵御兩所、その儀に就いて罷り越したる秩父の重忠、まだ某さへ詞を出さぬに、粗忽千萬。先づ先づ扣へ召されい。ハア、それにお渡りなさるゝは、大姫君さまでござりまするが、秩父の重忠お迎への爲、上使を蒙むり、これまで罷り越しましてござりまする。

大姫　秩父の重忠、久しうて逢ひまするの。

重忠　ハア。

大姫　自ら事は、淸水の冠者義高どのと緣組みして、添はるゝ事でもある事か、義仲さまは朝敵とて、義高さままで敢へない御最期。後に殘りし我が身の上。剃髮せよとの父上の仰せ、その尼法師にならうより、露の命を此まゝに、いつそ消えたい〳〵わいの。

爲久　蕾の花の姬君樣、お果てなされてよいものか。斯く申す石田の三郞が、附き添ひ罷り在りますれば、いづれへなりともあなた樣の、お心の儘に御緣組みはなりまする。お氣遣ひなされまするな。

重忠　貞女兩夫に見えず、忠臣二君に仕へずと申すが、石田どのには一度義經公に仕へ、義仲公追討の戰場に向はれ、如何なる事にや、又々賴朝公に仕へるは、取りも直さず忠臣の二君。類を以て友を集むると、姬君樣へ御再緣を勸めらるゝは、貞女兩夫に見え給へとの、石田どのの計らひ。秩父の重忠、甚だ感心仕つてござる。さりながら、御剃髮は兎もあれ、いよ〳〵今年五月下旬には賴朝公富士の裾野の御狩。鎌倉の館には、御臺所政子御前、お扣へには三河守範賴公、御座なさるゝにつき、姬君樣にも、先づ〳〵御歸館あられませう。

大姫　重忠が勸めさる事なから、云ふに云はれぬ願ひがあつて、館へ去なれぬ自らが身の上。是非にとあれば兼ねての覺悟。例へ此まゝ死ぬるとも、館へとては歸らぬ心。父上樣や母上樣へ、よしなに云うてたもいなう。身のいたづらに自らは、浮世に迷うて居るわいの。

重忠　如何やうに仰せられても、お迎ひの爲罷り越したる秩父の重忠。御得心ござらぬうちは、今日が明日、今年が來年までも、この所に座しまして、退散いたす拙者ではござらぬ。

爲久　成る程、貴殿の仰せらるゝも尤もながら、一旦姬君にも、斯く仰せらるゝからは、この所に居るとも御返事もなりますまい。この上は斯く申す石田の三郞、折入つてお勸め申し、御歸館あらるゝやうに致し、重忠どのへお渡し申さう。暫らくこれにお扣へ下されい。

重忠　御同道いたせば拙者も大慶。御挨拶のござるまで、これに扣へて居るでござらう。

爲久　姬君樣には、最前石田めが申せし狩野之介は、彼の身の上。お忘れなくば御歸館あられ、折を窺ひお袖判を。

ト思ひ入れして

サア、そでない事を申し上ぐるも、石田の三郞が忠心。一先づ奧へ入らせられ、とくと御思案あられませう。

大姫　何事も自らが身の上は、其方に任する。石田の三郎、よいやうに計らうてたも。

爲久　畏まり奉りました。

義時　然らば秩父の重忠どの。

重忠　御兩所。

三人　後刻御意得ませう。

ト唄になり、大姫先に爲久、義時、皆々奥へ入る。

重忠　お生れつき固ましき姫君樣に、附き添ひ居るは石田の三郎。阿野の全成公に荷擔なし、事を窺ふか彼れが企み。この所にて樣子を窺ひ、いづれの道にも姫君の、お供いたして罷り歸らん。何にもせよ、心ならざる、お館の有樣ぢやなア。

ト手を組んで思案して居ると、管絃になり、下座より宗茂、莨盆を持つて

宗茂　それにお扣へなされたるは、秩父の重忠どのでござりまするか。

重忠　左樣仰せらるゝは、狩野之介どのではござらぬか。

宗茂　近頃御苦勞に存じまする。

重忠　これは〳〵、サア〳〵、近うお來やれ〳〵。

宗茂　拙者儀も其許をお待ち遠存じて、お伽の爲に、わざわざ出でましてござりまする。サア〳〵、お煙草召上がれませい。

ト莨盆を出す。

重忠　これは〳〵、忝ない。時に狩野之介どのには、富士の裾野のお供でござるかな。

宗茂　サア、拙者も夏狩のお供仕るは武士の面目、何卒若殿原と同樣にお供仕らんと、政子御前へお願ひ申し、お墨附頂戴いたしたく、それのみ心掛け罷り在りまする。

重忠　御狩のお供の面々は、お墨附なくては叶はぬ。狩野之介どの儀、拙者も共々お取持ち仕らう。

宗茂　これは忝なう存じまする。其許樣にも、御狩のお供にお立ちなされまするか。

重忠　イヤ〳〵、拙者は當鎌倉に殘り、政事を司ります役目を、仰せつけられてござる。いづれ君命を蒙むる者は、生得頑なでは參るまいと存じ、拙者はこの程は、少少物事に浮かれまするが、定めて狩野之介どのには、御遊藝など御鍛練でござらうな。

宗茂　イヤ〳〵、遊藝と申しては、一向その道へもたづさはりませぬ不調法者。お尋ねにあづかり、面目次第もござりませぬ。

重忠　左樣仰せらるゝは僞はりでござらう。然らば遊里などへは、お通ひでござりませうな。

宗茂　鄭聲は淫なり。三味線などさへ、屋敷の內は禁じまする。

重忠　さりながら、御酒などは少しお用ひでござるかな。

宗茂　酒は百藥の長たりとは申せども、俗に申す氣狂ひ水、杯は手に取るばかりでござる。

重忠　これはならぬ、貴殿に引替へ、斯く申す重忠儀は、斯やうに見えましても、色事はきつい好物。少し左も上がりまする。傾城ござれ、町藝者ござれ、女子にかゝりましては、侍ひにあるまい身持ち放埒者。堅い貴殿へ對して、面目次第もござらぬ。

宗茂　拙者も斯やうでは相濟みますまいと存じ、色事を稽古仕らんと存じますれども、生れつきまして武骨ゆゑ、女子に面談いたしては、毎度譫言仕りまする。

重忠　左樣ござらば、拙者、其許へ少し御指南申さうか。

茂宗　これは〳〵、御指南とは忝ない。

重忠　先づ色事に手と申す事がござる。貴殿には、その手と申す事、御承知でござるかな。

宗茂　なんと仰せらるゝ。色事には手と申す事がござるとな。

重忠　左やう〳〵。

宗茂　その手は、如何なる手でござるかは存ぜねども、拙者にも斯やうな手がござつて、槍は志津流、弓は那須流を稽古仕りました。殊に劍術などは數ヶ年修行いたしました。

重忠　左樣ならば、色事の手と申す事を、柔術で御傳授申さうか。

宗茂　忝ない。

重忠　柔術は男第一の嗜なみ。狩野之介どの、先づ〳〵稽古の爲でござれば、拙者が胸づくしを取つて御覽じろ。

宗茂　其許樣の胸づくしを取りますれば、色事の手が取られまするかな。

重忠　左やう〳〵。

宗茂　然らば稽古でござれば御免下されい。其許樣の胸づくしを、ちよつと斯やうに取りませう。イヤッ。

ト柔術のやうに重忠の胸づくしを取る。

重忠　コレ〳〵、町人の喧嘩ではあるまいし、兩手で胸づくしを取ると云ふ事が、色事にあるものでござるか。片手でお來やれ〳〵。

宗茂　左樣なら片手で、斯やうに取りまするか。
重忠　サア、そこが色事の手になる所。男の方から女の胸づくしを取るか、女の方から男の胸づくしを取るか、色事も胸づくしを取る段になつては、有り難いでごんす。その胸づくしを、さうひどく取られては、咽喉が詰まつてなるものではない。女觸りは隨分と柔らかいのがようござる。
宗茂　その柔らかに參る事に、難澁仕つて罷り在る。
重忠　なか〳〵筋がようござれば、色事は物になりませう、とても事に、女子を相手にして、稽古いたして進ぜたいものでござる。マア〳〵、茛でも參りませ。
ト重忠、宗茂、これより茛のんで居ると、合ひ方になり、下座より伏屋、茶臺に茶碗を載せて出て、直ぐに重忠が前へ來て、茶を出して
伏屋　重忠さまには、さぞ御退屈でござりませう。サア、お茶一つお上がり遊ばしませい。
重忠　これは〳〵、お心の附かれた事でござる。ドレ〳〵一服下されうか。
ト重忠、伏屋の手を取つて引寄せる。
伏屋　モシ〳〵、何をなされまするぞいな。
重忠　何をするとは、どうでごんす。見れば見る程可愛らしいこの手元。お茶の風味もさぞかしでごんせう。どうだ畜生め、氣はないか〳〵。
伏屋　ア、モシ〳〵、てんがうなされまするな。お茶が零れまするわいな。
重忠　零れるとは其方の愛嬌、まだ振り袖の戀の口切り、男の肌は初昔し、山吹やうじのほいろの匂ふ時、なんと花を散らして進上いたさうか。
伏屋　モシ〳〵、爰を放しなされませい。秩父の重忠さま、御身分が損ねまするわいな。
重忠　なんと只今この所にて、色事の稽古がござるが、相手になつてはおくりやるまいか。
伏屋　淫らなる事仰せられまするな。假初めならぬ姫君樣のこの御殿、不義放埓がござりまするると、曲事たるべきとの、仰せ渡されでござりまするぞ。
重忠　曲事たるべきとは堅いやつの。如何やうなる堅い御誓文なりとも、稽古ばかりは大事はあるまいかい。
伏屋　私し事は、この程御奉公に上がりましたる者。何もお勝手を存じませぬゆゑ、左樣な事は存じませぬわいな。
重忠　サア、お館の御作法は知らずとも、色事は定めて知

つてござんせうがや。

伏屋　男女七歳にして席を同じうせずとの譬へ。殿達へ對しましては、物さへ云うた事がござりませぬ。

重忠　今の浮世に、狩野之介どのより堅い者はあるまいと思ひの外、そもじのやうな堅い女もあればあるものぢや。その堅いところを、我れら結綿のやうにして、進上いたさうか。

ト手を取らうとする。

伏屋　滅多に側へ寄らしやんすな。女子と思ひ、あなづりなさるゝと、小さい時から手練の薙刀。この場でお目にかけませうか。

ト詰め寄る。重忠、後へ寄り

重忠　なか／＼甘にはゆかぬわいの。此やうなむづかしい色事から、狩野之介どのには稽古召されい。

宗茂　成る程、斯やうな堅い女中から、一問答仕りませう。

重忠　直渡りに渡つてお見やれ。

伏屋　御用がござりまするなら、お召しなされて下さりませい。

ト行かうとする。

宗茂　コレ／＼、新參の女中、これへお來やれ／＼。

伏屋　ハイ／＼、御用でござりまするか。

宗茂　拙者、其許へ御内々にて、御意得たい儀がござる。

伏屋　如何やうな儀でござりまするか。先づ仰せられて下さりませい。

ト手を突いて云ふ。

宗茂　その用事と申すは、拙者其許へ甚だ執心でござる。なんと御承引ござらば、御挨拶にあづかりませう。

ト手を突く。

伏屋　座興にも左樣な事は、御無用でござりまする。モシ、不知火の筑紫潟、濡れ衣のなき名が立ちましては、御奉公に障りまするゆゑ、幾重にも御辭退申しまするわいな。

ト後へ下がる。

宗茂　左樣なら承引はござらぬか。

伏屋　一向左樣なる事は、存じませぬわいな。

宗茂　進退茲に谷まりしか。ホイ。

ト手を組んで思ひ入れ。伏屋、立たうとする。

重忠　立ち振舞ひと云ひ、物腰の武骨。察するところ信濃なる、木曾の山家で育ちし女子か。

伏屋　サア、それは。

宗茂　古への野中の淸水ぬるけれど
重忠　心の底は汲む人ぞ知る。
伏屋　ぬるうなつたら、酌み更へて參りませう。
ト伏屋、茶臺を持つて立つ。重忠、扇にて茶碗をパッタリと打ち落す。宗茂、伏屋へエイと手裏劍を打つ。茶臺にて受け止める。この途端に飛び退く。重忠、刀を杖にキッと思ひ入れ。宗茂、立ちかゝり
宗茂　思ひも寄らぬ、あの手の內には。
重忠　コレ。
ト思ひ入れして、
ひやうし幕

本舞臺、三間の間、上手に誂らへの亭座敷、向う庭の遠見、下手よき所に枝折り戶よろしく幕明く。
ト一度は榮え、一度は衰ふと云ふ謠になり、花道より高坂甚內、深編笠、馬乘り袴の形、鞭を腰に差して出て來る。花道の中に立ちとまり
甚內　天高しと雖も脊を縮め、地厚しと雖も、拔き足して世の中を忍ぶ小山の判官。薩島兵庫と心を合せ、あはや信田左衞門を沒落させ、一卷は某が奪ひ取り、讓り葉の鏡は薩島兵庫へ渡し、本國を立退きしが、事露顯なし家の仇と狙ふ奴等。某が在所を尋ぬれば、阿野の全成公の大望成就なすまでは、本名を包んで高坂甚內。それにつけてもこの如く、持參なしたる白鞘の刀。石田の三郞が推擧に依つて、賴家どのへ差上げんと約諾ゆゑ、これまでは來たなれども、人も知つたる某がしやッ面。迂濶に笠も脫がれまい。先づ〳〵、とある木蔭へ佇んで、館の樣子を窺はうか。ソレ。
トまた謠になり、甚內舞臺に來て、枝折り戶の側へ立寄つて、內を窺ひ
案內知れぬ館の內。傳手を求めて石田の三郞に、何卒逢ひたいものだなア。
ト門口に佇んで居ると管絃になり、亭の內より常磐木、宗茂出て來て
常磐　狩野之介、わしや其方に逢ひたかつたわいの。
宗茂　そりや、御用でもござりましてか。
常磐　サイナ。其方の願うて居やる、富士の御狩のお供に召さるゝ、賴朝公のお墨附を、頂戴するやうになつたわいの。
宗茂　如何いたしてお墨附を、頂戴仕りまするやうには

なりましたぞ。
常磐　聞いてたも。政子御前さまのお情にて、有り難いお墨附を、狩野之介へ得させよとて、あの姫君樣がお持ちなされて、お入りなさるゝわいの。
宗茂　エヽ、有り難うござりまする姉者人。サア、そのお墨附を頂戴いたしたい〳〵。早うお願ひなされて下さりませ。
常磐　成る程〳〵。早う頂戴したいは尤もの。その心なら狩野之介、コレ、このお短册を、ちやつと拜見しやいの。
ト短册箱より以前の短册を出して、宗茂へ渡す。後に此うち亭屋體の障子を明け、大姫、姫の形にて出て、この樣子を見て居る。宗茂、取上げて
宗茂　樣子あり氣なこの短册。ドレ〳〵。
ト思ひ入れして
藤に寄する戀。紫の絲より落つる藤の花、思ひ餘りて綻びにけり。姉者人、この短册は。
常磐　その歌こそ、姫君樣よりのその戀歌。取次は其方の姉。有り難う思うて御返事申しやいの。
宗茂　姉者人のお詞ではござれども、このお返事は、どうもなりませぬ。
常磐　コレイノ、其やうな事があるものか。それでは願ひは叶はぬわいの。
宗茂　サア、其やうに仰しやつても、不義はお館の御法度。もしもの事がござりましては、狩場のお供が叶ひませぬわいの。
常磐　そんなら姫君樣のお心に背き、お墨附を頂戴せいでも大事ないか。
宗茂　サア、それは。
常磐　とう思案して見たがよいわいの。
宗茂　姫君樣のお心に從へば、御法度を背き、從はねばお供も叶はず。ハテ、なんとしたらよからうな。
常磐　このお歌の返事は、どうぢやいの。
宗茂　紫の糸より落つる藤の花。
大姫　思ひ餘りて綻びにけり。
宗茂　エヽ、あなた樣は。
常磐　姫君樣か。
大姫　狩野之介、月花につけ其方の事を、よく〳〵に思へばこそ、あるにもあられずその詠み歌。色よい返事をしてたもいの。
宗茂　サア、それは。

大姫　愼しみ深い自らが、焦れ〳〵し心の內、不便と思うてたもいなう。

ト泣く。

宗茂　姫君樣の心ざし、有り難うはござりますれども、この戀ばかりは。

大姫　叶はぬかや。

宗茂　サ、それは。

ト大姫、以前のお墨附を出して

大姫　これこそはお墨附。御狩のお供に召されんとの、父上さまのお直筆。欲しいと思やる心なら、自らが心に從うて、一夜の枕を交してたも。寢間拵らへて待つて居るぞや。

ト唄になり、障子をシャンと閉める。

常磐　あれ程に思し召す、お心に從うて大切のお墨附、早う頂戴しやいの。

宗茂　お墨附がなければお供は叶はず、お供が叶はねば武士の一分も立ち難し。とは云へ不義の惡名、受けるは生涯の殘念。

常磐　それ程までに云やる事、取持つ姉が心の內。あらぬ事とは思へども、其方を武士の數に入れ、御狩のお供に立てたいゆゑ。

宗茂　それ程までに思し召す、兄弟思ひの姉者人の、お心に愛でまして。

常磐　姫君樣へお歌の返事。

宗茂　認めまするはあの一間。

常磐　狩野之介。

宗茂　姉者人。

常磐　こなたへおぢや。

ト唄になり、常磐木、宗茂、奧へ入ると、石田の三郎下座より以前の神酒德利を持つて出て來て、あたりを見て

爲久　我れ〳〵が大望の妨げになるべき秩父の重忠、狩野之介、此奴等を片附けるには、屈竟なる毒藥。この神酒德利へ仕込んで置いたれば、神酒頂戴に事寄せて、彼奴等へやらかしやア此方のもの。どこぞ氣の附かぬ所へ、直して置きたいものだ。

トあたりを見廻して居る。枝折り戶の外にて

甚內　石田の三郎爲久どの。

爲久　合點のゆかぬ。某を呼ぶは誰れだ。

甚內　高坂甚內でござる。御意得ませう。

爲久　ト笠を取る。貴殿は高坂甚内どの。
甚内　ヤレ、久しうて逢ひました。
爲久　先づ〳〵これへ。
甚内　世間を忍ぶ拙者が身の上。それへ參つても大事ござらぬか。
爲久　苦うござらぬ。これへ〳〵。
甚内　許し召されい。
　ト甚内通る。
爲久　早速ながら甚内どの、この所へは何用あつてお來やつた。
甚内　信田左衞門が所領を横領なさんと、薩島兵庫と心を合せ、念なう信田を沒落させ、常陸下總兩國を、我が物にせんと思ひの外、事顯はれて今のこの態。浪々の活計に迫り、昨日を今日と暮らしかね、身の佇みのなきまゝに、石田の三郎どの、貴殿を尋ねて罷り越した。
爲久　その艱難も暫しのうち。全成公の大望、今にも成就するならば、斯く云ふ石田の三郎を始め、貴殿の今の艱難を、酒宴の席の昔語り。その樂しみを物種と思ひ、隨分ともに忍び召されい。

甚内　時節を待つて罷り在るも武士の習ひ。さりながら、差當つたる當惑は、なんと石田どの、金子三百兩、用立つては下さるまいか。
爲久　なんとお云やる。金子三百兩用立つてくれいとか。
甚内　サア、浪々いたして合力を賴みまするは、誰が身の上にもある事ゆゑ、恥を恥と思はず、持參なしたる新身の刀。なんとこの一腰が、三百兩になりますまいか。
　ト腰より白鞘の刀を出して、爲久が前に置く。
爲久　寶は身の差合せと、一腰を出して、金子三百兩の賴み。ドレ、新身の刀を檢分いたさう。
　ト爲久、拔き放して、いろ〳〵改める。
甚内　烏滸がましくはござれども、伯耆の國の住人、大原眞守が打つたるその業物。なんと三百兩にはなりますまいか。
爲久　ヤ、この一腰が、大原の眞守が打つたる刀でござれば、賴家公へ差上ぐれば、三百兩にはなりさうな物。幸ひ〳〵、この度、富士の御狩につき、お尋ねなさる新身の刀。斯く云ふ石田の三郎、お世話申すでござらう。
甚内　早速の御承知、忝ない〳〵。
爲久　一腰は石田が慥かに預かり申した。

甚内　何事もよろしう頼み存ずる。
ト奥にて
伏屋　狩野之介さま〳〵。
ト呼ぶ。爲久、甚内、囁いて甚内は小隱れする。
狩野之介さまは、どれにお出でなされまするぞ。お姫様が、いつそ、お召しなされまするわいな。
ト尋ねながら出て來る。
爲久　コリヤ〳〵、其方は、ついに見馴れぬ女子ぢやが、いづれよりこの所へ參つたのぢや。
伏屋　ハイ、私しはこの間、常磐木どのゝお世話にて、御奉公に上がりました。新參者の伏屋と申しまする者でござりまする。
爲久　成る程〳〵、新參者の伏屋。聞き及んだ。幸ひ〳〵、其方へ申しつける用事がある。これへ〳〵。
伏屋　ハイ〳〵。その御用は、なんでござりまするえ。
爲久　コレ〳〵、この神酒こそは、この度政子御前さま、淨妙寺の奥山へ御勸請なされたる、稻荷明神の神酒。其方へ申しつくる程に、狩野之介へも戴かせ、其方も頂戴して、謹んで粗末の無いやうに、合點か。
伏屋　ハイ〳〵、有り難いお神酒、狩野之介さまへお上げ申しませう。
爲久　早う〳〵。
伏屋　して、あなた様は、どなたでござりまするえ。
爲久　身共が事は、石田の三郎爲久なるワ。
伏屋　エヽ、そんならあなたが、石田の三郎さまか。
ト寄らうとする。爲久、石燈籠の火を吹き消し、奥へ入る。伏屋、方々尋ねて居るうち、亭の內より堀の藤太、以前の神酒德利を持ち、そろ〳〵探りながら出で來て、伏屋に行き當り、直ぐに伏屋が振り袖に取りつく。
誰れぢや〳〵。
藤太　こりや振り袖。姫君様でござりまするか、よい所でお目にかゝりました。先づ〳〵お下にござりませう。
ト德利を下に置き、伏屋を引留める。伏屋、恟りして
伏屋　コレ〳〵、なんのわたしがお姫様でござりませうわいな。サア、爰離して下さりませい。
藤太　ドッコイ〳〵、滅多にその手を食ふものか。サア、お姫様、色よい返事を、ちよこ〳〵と暗闇を幸ひに、拜みます〳〵。
ト探りながら、伏屋が持つて居る神酒德利に探り當て

て、惘りして
ヤ、こりや、大事の稲荷の神酒。どうしてあなたは持つてお出でなされまする。姫君さま〳〵。
伏屋　コレイナ、わたしは新参者の、伏屋でござりまするわいな。
藤太　成る程、さう云ふ聲は伏屋。われにこの神酒徳利を渡して堪るものか。此方へ寄越しやがれ。
ト引ツ奪つて戴いて、藤太、そろ〳〵下座へ入る。伏屋、方々尋ねて
伏屋　コレイナ、その神酒徳利は大切なるお神酒。お返しなされて下されませい。モシ〳〵。
ト尋ねて居るうちに、奥より宗茂、雪洞を持つて出て來る。この灯にて伏屋、藤太が置いたる徳利を見附ける。
これ〳〵。嬉しや〳〵、お神酒は爰にあつたわいの。
宗茂　コレ〳〵、其方は新参の伏屋どのではないか。
伏屋　ハイ、伏屋でござりまする。
宗茂　伏屋どの、其方は爰に、何をしてござつた。
伏屋　ハイ、私しは石田の三郎さまの、御用を承はつて居りました。
宗茂　斯やうな所にお居やつては、其許のお爲になりますまい。早う御前へお上がり召されい。
伏屋　畏まりました。
宗茂　狩野之介儀も、其許と差向ひで居つては、人の思惑も如何。さらば御前へ參らうか。
伏屋　狩野之介さま、お待ちなされませい。政子御前さまより、仰せられましたる御用がござりまするぞ。
宗茂　思ひも寄らぬ政子御前さまの御用。そりや如何なる儀でござる。早う仰せ聞けられい。
伏屋　政子御前さまより、仰せ越されましたる御用と申しまするは、コレこの神酒、姫君樣御頂戴遊ばしましてござりますれば、狩野之介を始め、附き〳〵のお方へ戴かせいとの儀。石田の三郎さまより仰しやりつけでござりまする。
宗茂　成る程〳〵、その神酒は、姫君樣御頂戴濟んだる上は、我れ〳〵を始め、いづれへも、戴かせまするやうにと仰せ出され。然らば狩野之介も、この所にて、頂戴仕るでござらう。
伏屋　イザ〳〵、御頂戴あられませう。
ト三方に土器を載せて、狩野之介が前に置き、伏屋、

徳利を持つて酌をする。

宗茂　コレ〳〵伏屋どの、必らず側へ寄るまいぞ。例へ頂戴の神酒たりとも、其許の酌にあづかれば、人の思惑も如何。矢張り斯く申す狩野之介が、手酌に致しませう。席を隔てゝ扣へてお居やれ。

伏屋　御尤もなるお指圖。左樣ならこれに扣へて居りませう。

ト伏屋、下の方へ扣へて居る。宗茂、此うちに土器へ酒を注いで、戴いでズッと呑み干し、土器を下に置き

宗茂　有り難い稲荷明神の神酒頂戴。サア、狩野之介戴さましてござれば、伏屋どのにも、イザ〳〵、頂戴あつて然るべう存ずる。

ト三方を伏屋が側へ置き、徳利を持つて注がうとする。

伏屋　コレ〳〵、申し狩野之介さま。お若いお方のお酌をなされて下されましては、人目も如何。あなたには矢張りそれにお扣へなされませい。手酌に致しまするわいな。

宗茂　御尤もなる遠慮。心得てござる。

ト宗茂、上の方に扣へて居る。伏屋、土器へ徳利の酒を受けて、戴いてズッと干して、直ぐに土器を戴いて

伏屋　有り難い神酒頂戴。然らば私しが納めまするでござりませう。

宗茂　御前よろしう仰せられて下されい。

伏屋　畏まりました。

宗茂　伏屋どの。

伏屋　狩野之介どの。

兩人　後程、お目にかゝりませう。

ト宗茂、伏屋、ヂッと顔を見合せる。誂らへのめりやすになる、此うち伏屋、宗茂、井守の酒にて互ひに惚れる心意氣ありて、伏屋は東の歩み、宗茂は花道へ行かうとして、中程に立ちどまる。宗茂が舞臺へ歸れば、伏屋も又舞臺へ歸る。伏屋、向うへ行かうとする。宗茂も向うへ行かうとして、互ひに心の引かるゝ思ひ入れありて　トゞ、このめりやす切れるまでに、宗茂は舞臺へ來る。伏屋も舞臺へ來て、互ひに脊中合せになるまでに、めりやす一くさり切れる。

伏屋　なんぞ御用はござりませぬか。

宗茂　見れば見る程可愛らしい、情盛りの伏屋どのに、云ひたい事は胸に山々。聞いて下さる心なら、此方はたんと云ふ心。

伏屋　お前さへその心なら、わたしも思はれたいわいな。

宗茂　思はれたいとは有り難い。そんなら我れら思ひのたけを。

ト思ひ入れして

イヤ／＼、不義はお館の御法度。今までさへ愼みしこの狩野之介。假初めの色事に迷ひ、滅多に浮名は立てられまい。

ト伏屋、側へ寄らうとする。宗茂、衝立を出して中へ立てる。

伏屋　この衝立は。

宗茂　互ひに迷ひを隔ての關。滅多に側へ寄るまいぞ。

トこれにてめりやす。このめりやすのうち、宗茂、伏屋、莨盆を出して莨をのみ、いろ／＼あつてめりやす切れる、

イカサマ、聞き傳へたる話しにも、雌と雄との非守を取つて、山を隔てゝ燒く時は、例へ所を隔てゝも、妹脊の煙は逢ふと聞く。まして人の身の上、逢ひたう思うたら逢はれぬと云ふ事もあるまいかいの。

伏屋　ほんに思へば三年以前、見初めし殿御。所は荏柄の天神さま、然かもその日が御緣日。在鎌倉の若殿方、袖を列ねしその中に、一際目立つよい殿御振り、袴姿に編笠の、內も床しいそのお姿。

宗茂　未だ如月の夕べ方、政子御前の仰せにて、天滿神へ御代參。往來も多きその中に、分けて目に立つ振り袖の香も懷かしき梅の花。折にこそ寄れ緣の端。

伏屋　緣の橋と立寄りて、及ばぬ戀にあの一枝、お手折りなされて下さりませと、何がなしをに鶯の

宗宗　月日も忘れぬ戀の首尾。つい道連れのわざくれに

伏屋　あなたならでは假初めの、殿御に枕は交しませぬと誓ひを立てゝ云うた時

宗茂　まだ宵暗の暗紛れ、顏も覺えずもう三年。

伏屋　お腹さへ立たぬなら、千年も萬年も、お側は離れぬ私しが心。

宗茂　ならう事なら打解けて、眞實側に居たいわいの。

伏屋　わたしも抱かれたいわいなア。

宗茂　叱り手さへ無いならば、眞に抱きつきたいわいの。

伏屋　心のたけが聞きたいわいなア。

宗茂　心のたけが云ひたいわいの。

伏屋　聞かうわいなア。

宗茂　云はうかいの。

伏屋　聞かうか。

宗茂　云はうか。
伏屋　心盡しに見初めた殿御。
宗茂　廿五日の暗紛れ。
伏屋　お名も聞かずにそこ〳〵に、お別れ申して
宗茂　つい三年
伏屋　過ぎ越し方の懷かしく
宗茂　思ひ思うた心から
伏屋　この鎌倉の其うちを
宗茂　尋ね求めし
伏屋　そのお方は
宗茂　恥かしながら
伏屋　狩野之介さま。
宗茂　伏屋どの。
伏屋　御存じなら、荏柄の天神さまで
宗茂　互ひの固めのこの袱紗。
ト袱紗を出す。
伏屋　取交したるこの袱紗。
ト宗茂、思ひ入れして、以前の大姫の短册を見て
伏屋　合點のゆかぬこの手蹟。
宗茂　それもわたしが。

宗茂　書いたのか。
伏屋　及ばぬ筆の袱紗の詠歌。
宗茂　そんならその時云ひ交したは
伏屋　お前であつたか。
宗茂　其方であつたか。
伏屋　オヽ、嬉し。
ト衝立で抱きつく。めりやす切れる。管絃になり、大姫、常磐木、紙燭を持つて出て來て
常磐　サア〳〵、お出で遊ばしませい。
大姫　常磐木、其方の志し、忘れは置かぬ。嬉しいぞや。
常磐　なんのマア、勿體ない事仰しやりまする、あなた樣のお志しを、段々申しましてござりますれば、狩野之介とても岩木ならず、それ程に仰しやて下さる事ならば、人知れずお目にかゝつて、お禮を申し上げたいとて、先刻にからあなた樣を、待つて居りますわいなア。
大姫　そりやマア、ほんの事かいなア。
常磐　なんの僞はりを申しませう。灯を消してお待ち申して居りまするわいなア。
大姫　そりやマア、嬉しい事ぢやわいの。ほんにそれ〳〵、新玉の年の一夜を待ち詫びて、たゞ今宵こそ新枕すれ。

早う狩野之介に逢はせてたもいの。
常磐　サア〳〵、御案内申しませう。常磐木と一緒に、早うお越しなされませい。
大姫　今更どうやら恥かしうなつたわいの。
常磐　なんのマア、お心弱い。サア〳〵、お越し遊ばしませい。
ト常磐木、亭の内へ大姫を連れて行かうとして衝立を明ける。宗茂、伏屋、驚ろいて帶ひろ解けにて顔を見合せる。大姫、この躰を見て悄りして
大姫　ヤア、其方は狩野之介ではないか。
宗茂　お姫樣でござりまするか。
伏屋　ホイ。
ト當惑する。大姫、これより急いたる思ひ入れを隠して居る。
常磐　狩野之介、其方は〳〵、どういふ事であられもないこの體は。姫君樣へ、なんとこの常磐木が、申し上げやうがないわいの。狩野之介ばかりぢやない、伏屋どの、こなさんは〳〵、どういふ事で人にも云はれぬ二人が形ふり。云ふにも叱らうにも、呆れて物が云はれぬわいの。情ない事ぢやなア。

トこれにて伏屋、宗茂、差俯向いて居る。大姫、褥の上へ乘り、手燭を側へ置き
大姫　常磐木、莨盆を持つておぢや。
ト常磐木、怖々して居る。
キリ〳〵持つて來い。
常磐　ヘイ。
大姫　早う持つておぢや。
常磐　ハイ。
大姫　キリ〳〵持つてうせをらぬか。
常磐　ハイ。
ト怖々大姫が前へ莨盆を持つて行く。
大姫　コレ常磐木、其方は最前なんと云やつた。女子の恥かしい事を云はせ、弟の狩野之介を取持たうと云うて、短册をお示しなされいと云うて、よう取持つてたもつたの。女子の身で嘘を吐いても、恥かしいとは思はぬか。其方の爲に自らはなんぢや。その自らに嘘を吐いても大事ないか。そこな畜生め。
トこれにて常磐木、差俯向いて居る。
おのれには、大分禮を云はにやアならぬ。差扣へて居をらう。立てやい。

常磐　ハイ。
大姫　下がれやい。
常磐　アイ。
大姫　下がり居らぬか。
　ト常磐木、後の方へ下がり、俯向いて居る。
伏屋、ちよつとおぢや。
常磐　ハイ。
大姫　早うおぢや。
常磐　ハイ。
大姫　キリ〳〵、うせ居らぬか。
　トこれにて伏屋、怖々大姫の前へ來て、俯向いて居る。
顏を上げやい。
常磐　ハイ。
大姫　キリ〳〵上げいやい。
伏屋　ハイ。
大姫　面を上げ居らぬか。ても美しいその顏で、自らがいつぞ惚れて居る狩野之介を、よう寢取りやつたの。さぞ嬉しからう。其方の嬉しいのと、自らが口惜しいのと比べて見れば、これ程に違ふものか。
　ト泣きながら、伏屋を引据ゑて

ようも〳〵、おのれら寄つて、自らを騙し居つたな。それとも知らず母上樣へ願ひ上げ、狩野之介が狩場のお供に立ちますやうにと、お墨附を申し請け、これ程までにも。
　ト懷中より墨附を出す。
常磐　それを。
　ト取らうとする。立廻り。大姫、眞中になり、伏屋を膝の下へ敷きて、常磐木を引据ゑ
大姫　ようも〳〵、自らを騙し居つたな。これも誰れゆゑ伏屋、おのれゆゑ。
　ト伏屋を抓る事あり
思へば〳〵、主の自らを、三人寄つて騙したがよいか。寄りも寄り合うた、慈な人外め。
　ト曲碌を持つて、伏屋、常磐木を散々に打擲して、宗茂を打たうとして打たぬ思ひ入れ。この心意氣三度ほどあつて
この上はこのお墨附、寸々に引裂いて、たつた今、渡してやらう。
　ト手をかけて引裂かうとする。重忠、後より出て、この墨附を引ッ奪くつて伏屋を退け、大姫を引寄せて、

この墨附にて打ち据ゑる。大姫、重忠に縋りつき
秩父の重忠、其方は、ナ、なんで自らを打擲したのぢや。茲な慮外者めが。
重忠　拙者、御打擲は仕らぬ。コレこのお墨附の頼朝公が、姫君の邪しまを御折檻の今の打擲。なんと骨身に堪えましたか。お情ない姫君様、假初めならぬ頼朝公の御直筆を、あなたのお手にかけられ、引裂かれんとは何事。御身の淫らに辨まへなく、お破りなされば父上には御不孝。それのみならず、あなたのお身の上に、お咎めをお請けなさるゝが、それでもお破りなさるか。そこを存じて打擲いたしたは、重忠が誤まりかな。餘り無理ぢやアござあるまいかと存じまする。
大姫　重忠にまで妨げられ、この場で無念を晴らさぬが、エ、、口惜しいなア。
重忠　その頭ましいお心ゆゑ、御出家を勸め給ひし、頼朝公の御賢慮、感ずるにも餘りあり。ナニ、いづれも、姫君様の御歸館の用意召されい。
皆々　ハア。
ト向うより陸尺、乗り物を持つて出て來る。重忠、直ぐに大姫を乗り物へ入れる。奥より爲久、藤太、泥脛の八、腰元大勢出る。
八　わりやア、小袋坂の新米ぢやないか。
伏屋　エ、、其方は。
ト驚ろく。八、直ぐに、伏屋を引寄せ
八　ドツコイ〳〵、逃げたと云つて逃がすものか。コレヤイ、小屋仲間の法で、乞食に駈落ち者がありやア、穴の穴まで詮議して、仲間の法に行ふのが、お頭からの云ひつけ。どう云ふ事でこんな所へうしやアがつて、そして見ればヤレ、結構な褞袍を引ツ張つてけつかるが、なんでもこれからそびいて歸らにやアならねえ。マア、このべんべらを引剝いで、元の乞食にして連れて行くべえ。脱ぎやアかれ〳〵。
ト無理に伏屋を引剝がうとする。妻助、走り出て八を投げ退ける。八、起き上がつて
あの新米の乞食女めを、そびいて行くべえと思つた所へ、後からどう云ふ事で投げたのだ。これぢやア歸られねえ。歸られねえ。
ト無性に怒鳴る。
妻助　歸るまいと吐かしやア、引ツ括つて詮議せにやアならない。勿體なくも、大姫さまのお館へうしやがつて、

お側仕への伏屋どのを、手籠めにしての今の慮外。サア、何者に頼まれて爰へうしやァがつた。有體に吐かすまいか。

八　コレエ、、吐かせと云はないでも、吐かさずに居られるものか。あの女めは、小袋坂の新米乞食。後の月の月末に、行くへの知れないのを、やう〳〵尋ね當つたから、連れて行くのが仲間の作法。あんまり無理ぢやァごんすまいがな。

妻助　詮議のある奴なれども、仲間の法とあれば、その分にしてくれる。キリ〳〵御門外へ出て失せろ。

八　ちつとさうもござるまい。これからは又、新米の乞食の狩野之介も、親方の小屋にそびいて行きますべえ。

　ト立ちかゝる。妻助、留めて

妻助　待て。おらが旦那狩野之介さまを、新米乞食とは、なんの痴言。今一言吐かすと、舌の根切つて切り下げるぞ。

八　糊を嘗めた雀ぢやァあるまいし。狩野之介を新米乞食と云つても大事ない。狩野之介、おいらが小屋へ失しやァがれ〳〵。

宗茂　コレ〳〵非人、滅多な事を云ふまいぞ。

八　滅多な事を云ふやうな、泥脛の八ぢやァごんせぬ。女の乞食を抱いて寢た狩野之介を、乞食の仲間にせにやァならない。サア、失しやァがれ〳〵。

常磐　待つた。どのやうな事があればとて、この狩野之介を非人の仲間へ遣られうか。滅多に遣る事はならぬ。ならぬ。

八　退きやァがれ。サア、これからはそびいて行く。失しやァがれ。

　ト宗茂が手を取つて引ッ奪る。

重忠　コリヤ〳〵非人、これへ參れ。

八　ハイ〳〵、御用でござりまするか。

重忠　これへ參れ。

八　ハイ〳〵。お側へ參りましたが、なんの御用でござりまする。

重忠　只今これにて承はれば、狩野之介事を、なんとやら申したな。

八　あの狩野之介は、わしらが仲間の女乞食を、抱いて寢た人でごんすから、乞食の作法に行ひ、わしらが仲間へするのでごんす。

重忠　成る程、理を破る法はあれど、法を破る理はない。

狩野之介を、わいらが仲間に入れんと申すは、わいらが仲間の作法。是非に及ばぬ、狩野之介を連れて參れ。

八　サア、狩野之介を連れて行かなゝで、どうするものだ。サア、狩野之介、來い。

重忠　待て。

八　まだお留めさつしやるは。

重忠　狩野之介を同道するはわいらが作法。姫君樣の御殿へ、不淨なる非人乞食を通さぬのが武士の作法。サア、何者に許されて、この所へは參つたぞ。

八　サア、それは。

重忠　わいらが作法を糺せば、參るまじき所へ入込みしは、武士の法度を破りしおのれは科人。サア、何者に許されて、この所へ參つた。有やうに吐かすまいか。

八　サア、そりや。

重忠　サア〳〵〳〵、なんと。

八　エヽ、忌々しい。

重忠　申し譯がないと免さぬぞ。

八　その云ひ譯のない所へ、來るやうな乞食ぢやアごんせぬ。わしを爰へ呼び寄せたは。

藤太　コレ〳〵、滅多な事を吐かすな。何事もおれが爰にある、滅多な事を云ふまいぞ〳〵。

八　云ふなとあれば云ひますまいが、只口を割らうとはあんまりでごんす〳〵。

藤太　コレ〳〵、諸事萬事おれが爰にあるワ。コレ〳〵、仕込んで置いたこの藥も、まだ手もつけにやア、穴の狢。なんにも言はず、歸つてくれろ〳〵。ア、モシ、重忠どの、あの非人めがこれへ參つたは、ナニサ、姫君樣が御剃髮をなさるゝにつき、施行をお出しなされうと存じ、それでこの所へ呼びましたワ。オヽ、それ〳〵、慥か堀の藤太とやらが呼び寄せましたさうにござる。御用もござらずば歸しませう。

重忠　ハテナア。して、その呼び寄せましたる堀の藤太と申す者は、何者でござる。

藤太　サア、その堀の藤太と云ふ者は、誰れやらが來てござつた。オヽ、それ〳〵、堀の藤太と申すは、吉原の舟宿でござつた。

重忠　ハヽヽヽ。それ程にお云やる事。左樣なら非人どもを歸して遣はされい。

藤太　これは〳〵、忝ない。コレ〳〵、早く歸つてくれろ。

歸つてくれる。

八　忌々しい。虻も取らず蜂も知らず、百貫の抵當に德利一つ。せめてこれでも持つて歸るべえ。寄越さつしやい。

藤太　コレ〳〵、大事のその德利。どうする〳〵。

八　わしが持つて歸つて、寢酒にでもしますべえ。サア、新米も失しやアがれ。

ト伏屋を引立て行く張合ひに、伏屋、懷より兜の鍬形を落す。重忠、これを拾ひ取り懷中する。

伏屋　コレイナ、其やうにむごたらしうせずとも、まちつと置いて下さんせいな。

八　やかましい。うぬにやア大分詮議がある。おれと一緒に失しやがれ。

ト無理矢理に伏屋を引立て、泥脛の八、德利を腰に附け、花道へ入る。と宗茂、刀を袖に卷いて

宗茂　姉者人、おさらば。

常磐　待つた〳〵、其方は何ゆゑ切腹するのぢやぞいの。

ト取りつき留める。

宗茂　何ゆゑとは姉者人、富士の御狩のお供は叶はず、剩さへ身の徒らに、武士にあるまい非人乞食の惡名取つたる狩野之介、切腹いたすはせめての云ひ譯。お留めなされて下されまするな。

ト常磐木を突き放して、また腹を切らうとする。

重忠　死ぬるに及ばぬ狩野之介。早まるまい。マア〳〵待つた。

宗茂　何がなんと。

重忠　非人乞食の惡名取つたる狩野之介、切腹なせば云ひ譯が立つか。死ぬる命を長らへて、恩澤を蒙むりし鎌倉どのゝ、お役に立つべき時節を待たざるや。短氣に早つて腹切るばかりを、武士の役とは云はぬはやい。タ、、白痴者めが。

宗茂　ハイ。

藤太　コレ〳〵、重忠どの、非人乞食同然な狩野之介・武士の風上にも置かれぬ奴。なんで助けて置かつしやるのだ。

重忠　方々。盥に水をお持ちやれ。

義時　心得てござる。

ト管絃になり、義時、盥に水を入れて持つて出て、重忠の前に置く。

重忠どのゝ仰せられたる盥の水、この所へ置いてござるが、この水は、如何やうなる事にお使ひなさるゝぞ。

重忠　非人を取上げるを、下世話には足を洗ふと申すゆゑ、非人乞食の惡名請けたる狩野之介に、足を洗はせまして、元の人間に取上げて遣はさうと存じて、それゆゑ水を請ひましたのでござる。

義時　イカサマ、非人を取立てまするを、足を洗ふと申すさうにござる。あつたらしき狩野之介どの、何卒恥辱を雪がれ、御狩のお供に立たるやうにと、この義時も外ならず存じまする。

重忠　滄浪の水清めば以て纓を洗ふべし。濁らば以て足を洗ふべし。

ト此うち亭屋體の内より、甚内、編笠を着たる形にて出て下を窺うて居る。重忠、直ぐにその盥を伏屋が前に置き

狩野之介、足を洗つて武士の恥辱を雪ぎ召されい。

狩野　重忠どの、お志し、忘れは置かぬ、忝ない。

重忠　イザ。

ト盥の内に映りたる甚内が形を見て驚ろき

ヤヽヽ、盥に映る影を見れば、疑ふ所もなき小山の判官。

ト云ふうち、石田の三郎、ツカ／＼と寄つて盥の水を明ける。亭屋體の障子を閉める。

石田の三郎、盥の水をなんと召さるゝ。

爲久　根性の腐つた狩野之介、足を洗はせる事、罷りならぬ。

重忠　何がなんと。

ト詰め寄る。この途端に、舞臺先より白刃を突き出す。重忠キッと見て

緣の下から出た怪しい白刃、秩父の重忠が詮議いたしてお目にかけう。

ト殿立ちを取り、最前持つて來たる槍を持つて、緣の下へ突きかける。これにて忍び、下より出て重忠に切つてかゝり、立廻りにて忍びを取つて押へ、見得になる。

義時、詮議おしやれ。

義時　心得てござる。

ト立廻りにて取つて押へ

動くな。いづれもお見やつたか。眞黑出立ちの濡鼠め、床の下へしやッ屈んで、身にも及ばぬ刃物三昧、サア、何者に頼まれた。有やうに吐かすまいか。

忍び　矢柄鐵砲ぶり／＼攻め、牛裂きになつても白狀せまい、と云ふやうな野暮な忍び者ぢやアない。この御殿へ

入込ませた、その頼み手は。

　ト これにて爲久、後へ廻り、拔打ちに忍びの首を落す。

義時　合點のゆかぬ。何ゆゑあつて大切なる科人を、手にかけ召された。

爲久　手にかけても大事ない。

義時　大事ないとは。

爲久　此やうなる曲者を、助け置いてはお家の大事、どのやうな事を白狀しやうも知れぬ。それだに依つて手にかけたが、三郎が誤まりぢやアあるまいがな。

義時　大切なる曲者を、手にかけたる石田の三郎。詮議ものだ。動くな。

爲久　何を小癪な。

　ト 直ぐに新身を拔いて宗茂へ切りかける。重忠隔てゝ

重忠　石田の三郎、なんとおしやる。

爲久　なんとも仕らぬ。この新身は頼家公へ差上げんが爲、某が手に入つたる、大原眞守が打つたる所のこの刀。幸ひかな狩野之介は不義者、不義はお家の御法度。さるに依つて狩野之介めを、試して見ようと思つて、斯くの仕合せでござる。そこお退きやれ。

重忠　成る程、先達てよりお尋ねなされしこの刀。試して見るは兎も角も。マア、某が拜見いたさう。

　ト 刀をいろ／＼見て

イヤ、石田どの、この刀には折紙でもござるかな。

爲久　サア、それは。

重忠　折紙はござるまい。如何なる所から出ました刀か存じませぬが、この一腰は、頼家公には上げられますまい。

爲久　なぜ／＼。

重忠　こりや、正眞とは見えませぬ。不束なる物を御前に上げられ、後にお咎めあつた時には、石田どのゝお身の上、こりや御無用になされい。

爲久　そんならこの刀を、似せ物だとお云やるか。例へ似せ物にもせよ、所詮不義の科ある狩野之介、某が手にかける。觀念。

　ト 切りかける。重忠ちよつと留めて

重忠　イヤ、成敗が違ひました。

爲久　何が違つたな。

重忠　不義放埒の掟を破りし狩野之介、死罪に極まる科ではござらぬ。この重忠が成敗の致し方、石田どの、見物おしやれ。

　ト 爲久を突き退ける。

爲久　然らば見物仕らう。

ト重忠、狩野之介を引寄せて

重忠　狩野之介、不義放埒はお家の御法度。掟を破りし其方が科、免し置かれぬ。重忠が成敗は、先ッこの通り。

ト以前の墨附を出して、狩野之介に手錠をかける。宗茂見て驚ろく

爲久　この手錠は。

常磐　頼朝公のお墨附。

重忠　それこそは秩父の重忠が、工風を結ぶ紙手錠。科極まりし狩野之介は、姉の常磐木、其方へ預けてくれう。

兩人　忝ない。

重忠　コリヤヤイ、一禮には及ばぬ。ナニ、妻助とやら、この科人を引ッ立てい。

妻助　畏まりましてござります。

重忠　方々、姫のお乘り物立てい。

皆々　ハア。

ト花道へ駕籠を擔いで行く。駕籠の內にて

大姫　方々待つてたも。

ト駕籠の戶を明け

思へばく、怨めしい狩野之介、報いあらば、つれなき人も思ひ知れ、憂きには後の世こそ待たるれ。

トこれにて義時、乘り物の戶を立て

義時　お嘆きはさる事ながら、所詮叶はぬ狩野之介。戀路は思し召し切られませう。

トこれをキッカケに爲久、重忠へ切りかける。重忠これを隔てゝ受けて見得になり

重忠　乘り物やれ。

ひやうし幕

七種粧曾我（終り）

遇曾我中村（さいはひそがなかむら）

四番續

曾我狂言百姿

「吉例曾我寶入船」より

（上）近江小藤太成家。八幡三郎行氏

（下）小林の朝比奈

遇曾我中村

序幕

新清水花見の場

役名——千葉之助清春。同奴、浪平。荏柄平太胤長。同奴、灘平。稚兒、妙嬉丸。同、妙雅丸。同、妙壽丸。奴、浪平。同、龜平。大藤内成景。北條息女櫻姫。同腰元、山路。新清水清玄法師。

本舞臺、正面高く清水の舞臺のかゝり、下、崖造りにして、上の大柱の方に石坂、人の登り下り、下座の前に音羽の瀧、上に玉垣、瀧、社あり、舞臺の上に、繪馬いろ／＼掛けある。この中に、紅葉笠の繪馬掛けてあり、上下の大柱、枝垂れ櫻。破風の前へ吊り下ろしの枝垂れ櫻、見事に澤山にして、舞臺先、上下とも櫻四五本、花道より中の間の歩み、東の歩みも残らず枝垂れ櫻見事に、惣體花盛りの體、幕の内より、しやてん／＼の鳴り物にて、賑やかに幕明く。

ト東の歩みより、荏柄胤長、編笠、羽織袴、大小にて、出る。灘平、奴の形にて、茶辨當に毛氈を付けて、擔いで出る。兩人、櫻を見ながら、本舞臺へ來り、灘平、下の方の長床几へ毛氈を敷く。胤長、これに腰かける。花道より。腰元一、振り袖形、銀の籠莨盆を持つて出る。腰元二、同じ形にて、定家文庫を持つて出る。櫻姫、廣振り袖、姫の拵らへにて、銀の扇を持つて出る。山路、あげ綿、帶付、腰元の形。腰元三四五、いづれもあげ綿にて出る。龜平、奴の形、塗り樽を擔いで出る。礒平、奴の拵らへ、茶辨當に毛氈を結はへ付けて、擔いで出て、この人數皆々、中の間の歩みより、東の花道へかゝり

山路　お姫樣、なんとマア、見事に咲きましたぢやござりませぬか。名にし負うたる地主の櫻、音羽の瀧の白糸まで、都を其まゝお移しなされた新清水。好い景色でござりまするな。

櫻姫　只たのめしめぢが原のさしもぐさ、我れ世の中にあらん限りは。枯れたる木にも花咲くとの、觀音樣の御誓ひ。千手の御手の千本の櫻、盛りの色を見るにつけても、

大慈大悲の御利益が仰がるゝわいなア。
腰一　姫君樣の仰せの通り、咲き亂れたる糸櫻は、觀音樣の御手の糸、思ひ思うてお出で遊ばす、彼のお方をも引寄せ遊ばさるゝとの、辻占でござりませう。
腰二　お乘り物を麓に殘し、徒歩路をおひろひ遊ばすゆゑ、盛りの花も色增す風情。この上に思惑樣が入らしつたら、お嬉しい事であらうわいなア。
腰三　今朝お館を出る時に、花曇りであつたゆゑ、皆が雨性ぢやと笑はれたが、さつぱり晴れてこの麗らか。お姫樣の御信心が顯はれましたわいなア。
腰四　お庭の櫻も見事ぢやけれど、外珍らしい御寺の花。晴れ／＼とした景色、今日のお供はわたしらまで、有り難いわいなア。
總平　これから奧山の方へお出でなされて、芥子之介が豆と德利、鳩になつたり／＼を御覽なされませ。
磯平　ほんに鳩と云へば、今日この新清水にて、賴朝さまの放生會があると云ふ噂。去年から千本櫻は植ゑる。追ツつけ一の權現のお開帳もあると云ふ事。なんでも賑やかな事でござりまする。
山路　どれをどれとも色よう咲いた千本櫻。この枝振りの振り分けたところと云ふものは、亂れ髮とも申さうでござりまする。
腰五　あれ見さんせ。瀧の元のあの櫻へ、水の餘つて流れる景色、よいぢやないかいなア。
櫻姫　岩はしる瀧なくもがな櫻花、手折りて行かん見ぬ人の爲と詠んだ、歌の心に叶ふわいの。
磯平　あの舞臺の下へ毛氈を敷いて、ちつとお休み遊ばしたがようござりませう。
腰一　ほんに、あそこがよからうわいな。
　ト舞臺の方を見て、胤長を見付け
腰二　モシ／＼、向うにお出でなさるゝは、彼の樣ぢやないかいなア。
皆々　ほんに、さうであらうわいな。
　ト手を叩いたり、いろ／＼こなし。
山路　イエ／＼、違うたやうなぞえ。
腰一　側へ行て、とつくりと見るがよいわいな。
磯平　さらば、あそこへ毛氈を敷きませうか。
　トこれより、皆々本舞臺へ來り、磯平、眞中の床几へ毛氈を敷き、女形皆々、胤長を見て、さうでない違うたと云ふ思ひ入れ。花道より、千葉之助淸春、深編笠、

羽織袴、大小にて出る。侍ひ一人、白木の刀箱を持つて出る。舞臺の皆々、これを見て、あれちや〳〵と云ふこなし。浪平、奴の形にて、茶辨當に毛氈を付けて、擔ぎ出る。

侍ひ　お旦那、千本櫻の盛りと申し、貴賤群集のこの新淸水、賑やかな事でござりまする。直ぐに宿坊へお出でなされますか。

浪平　御太刀御奉納の刻限までは、まだ餘程のお間もござりませう。瀧の元で暫らく花を御覽なされたがようござりまする。

淸春　參れ。

兩人　ネイ。

ト本舞臺へ來り、浪平、上の床几へ毛氈を敷く、淸春、これへ腰をかける。山路、淸春を見て、櫻姬に囁く。櫻姬、嬉しきこなし。山路、櫻姬を淸春が方へ突きやる。櫻姬、恥かしきこなしにて、立歸る。山路、硯箱、短册を出す。櫻姬、これに歌を書いて、舞臺先の櫻へ付ける。灘平、そろ〳〵寄つて、この短册を覗かうとする。淸春、立つて東の方へ行かうとして、この短册を見て、思ひ入れ。山路、淸春が袖を引く。胤長、こなし。淸春、侍ひが持つて居る刀箱を見て、氣を替へ、振り切つて、下座へ入る。侍ひ、付いて入る。浪平も付いて行かうとする。山路、また浪平が袖を引く。これもこなしあつて、下座へ入る。女形殘らず、磯平もこれに付いて下座へ入る。胤長、灘平、これを見て、腹の立つ思ひ入れ。始終、しやでん〳〵の鳴り物にて、この仕組みよろしくあるべし。灘平、胤長、殘る。

灘平　お旦那、今のを御覽じましたか。

胤長　慥かに不義と睨んだ。その短册をこれへ。

灘平　ハツ。

ト今の短册を取つて、胤長へ渡す。

胤長　「朝日かげ淸水に映る山櫻、我れ白浪の浮名たつとも」ハテ、好い物が手に入つたなア。

ト向う揚げ幕にて

大藤　奴參れ。

中間　ハツ。

ト花道より、大藤内、ぶツ裂き羽織、着流し、奴付いて來る。

灘平　大藤内成景さま、只今御參詣でござりまするか。

大藤　荏柄の平太胤長さまの御家來、灘平でないか。

胤長　大藤内成景、最前より相待ち居つた。
大藤　これは〳〵胤長さま、今日は當所新清水觀世音へ、賴朝公四十二の御厄除けとあつて、薄緑の御太刀御奉納。右の役目を請けたるは千葉之助清春、猶また厄難消滅の爲、今日當院に於て放生會を修行に付き、神職たるこの大藤内、右検分の役目を蒙むり、只今罷り越してござりまする。
胤長　成る程、某も右の様子を承り及んだ。それに付き其許へ、密々に申し談じたき儀がござるが、御家來を遠ざけられてはおくりやるまいか。
大藤　心得てござる。ナニ可内、其方は宿坊へ參つて休息いたせ。
中間　畏まつてござりまする。
大藤　早う〳〵。
中間　ハツ。
ト下座へ入る。
大藤　して、密事の御用とはな。
胤長　別の儀でもおりない。其許も御存じの通り、北條家の娘櫻姫、兼ねてこの平太胤長が婦妻にせんと、貰ひかけたところ、あのゝものゝと埒の明かぬこそ理り、櫻姫には千葉之助清春と云ふ虫がくッ付いて居る。その證據はこの短册。
灘平　今も今とて、側で見て居てさへおかッたるい穿鑿。あんまりしみ舌たるい奴等でござりまする。
大藤　今日當寺へ薄緑の御太刀を、持參いたしたこそ幸ひ、清春めが越度を拵らへ、彼奴さへ亡き者にしたら、胤長さまへ糾の落ちさうな儀でござりまする。
胤長　如何にも。密かに話したいとはその事。祈念に間近く入込まるゝ其許、折を窺ひ薄緑の御太刀を、奪ひ取つてはおくりやるまいか。
大藤　そりやア何より心安い儀。祈念の間は櫻ケ谷の休息所、櫻姫が清春を付けつ廻はしつして逢ひ、互ひに有頂天、その間を見合せ、薄緑の名劔を巻上げるは、なんの手間隙も入りませぬ。そつともお氣遣ひなされますな。
灘平　この灘平も、彼奴等が素振りに心を付けて、なんぞかかぞでぶッちめてくれますぞえ。
胤長　薄緑の名劔さへ巻上げておくりやれば、清春めは瞬くうちに。
大藤　櫻姫は四の五のなしに、胤長さまの手入れの花。
胤長　しかと頼んだ大藤内。

大藤　お氣遣ひなされますな。
灘平　何かの事は宿坊で
大藤　胤長さま。
胤長　大藤内。
大藤　ござりませう。
胤長　灘平參れ。
灘平　ネイ。
ト音楽になり、三人下座へ入る。奥より、櫻姫、山路、出て
櫻姫　サア〳〵、山路、どうしてたもるぞいの〳〵。
山路　どうと申して、どう致しませうぞいの。
櫻姫　淸春さまに人知れずお目にかゝり、心の丈をお話し申したいわいなア。
山路　ハテ、お前樣のお心のたけは、淸春さまもよう御存じでござりまする。お心の丈を仰しやらいでも、もう戀は叶うて居りまするわいなア。
櫻姫　サア、願ひは叶うてあるけれど、叶へたと云ふお文ばかりで、心が濟まぬわいなア。
山路　肝心の戀がお叶ひなされたらござりまするか。
櫻姫　濡れぬ先こそ露をもいとへ、淸春さまのお顏を見たら
山路　どうもなりませぬかえ。
櫻姫　オ、恥かし。
山路　併し、淸春さまは、大切な御劍を御奉納のお役目。相役はお前樣に、たんと惚れて居る、あの憎面な荏柄の平太。まだその上に意地惡の、大藤内が付き添つて、客殿へ來て居りまする。それにお前樣と淸春さまと、猥らな事を見付けられては、千葉北條ともに兩家の大事。どうぞ今日は御堪忍遊ばしませ。
櫻姫　それでもどうぞ、ちよつとなりと、逢はせてたも。拜むわいの〳〵。
山路　オヽ、忙しない。アレ〳〵、あれをお聞きなされまし、あのお勤めは賴朝さまの、厄難消滅の祈りの最中。淸春さまには大抵の事では、お目にかゝられませぬわいなア。
櫻姫　ぢやと云うて、今日も暮れるに間もあるまいわいなう。
山路　修行の終りは酉の上刻。
櫻姫　それまでには館へ去なねばならぬわいなう。こりやマア、どうせうぞいの〳〵。
山路　好い事がござりまする。どうぞ奥の首尾を見合せて、

清春さまへお文を、ちよつと進ぜられたがようござりますわいなア。
櫻姫　そりやマア、なんと認めたがよからうぞいのふ。
山路　エヽ、辛氣な。御劍奉納のお役目の暇あらば、御寺内のそんぢよそこまで、お忍びなされませいと、ちよつとお文をお書きなされませい。サア〱、早う〱。
ト以前の硯箱に紙を添へて出す。
櫻姫　それでも、このお寺の案内が知れぬわいなう。
山路　ほんにさうでござりました。エヽ、此やうな時、いつもお屋敷へ見える、坊さん達がござんせいでなア。
ト音樂になり、花道より、妙壽丸、香盆に香爐を載せ持ち出る。妙嬉丸、紫の袱紗をかけたる、結構なるしきん箱を持ち出る。妙雅丸、鳩の入りし鳥籠を持ち出る。三人、對の稚兒の形、綺麗に仕立て、後より、清玄、袈裟衣、好みのやうに仕立て、香爐を持ち出て、これに同宿三人付き出て來り、花道に見得好く並ぶ。
妙壽　コレ〱女中、日頃は格別、今日は大切の御祈禱の庭、女たる者は叶ひませぬぞ。
妙嬉　活けるを放つ放生會。女人は叶はぬと、お師匠樣の云ひ付けぢやぞ。
妙雅　用事もあらば、對面所で待つてござれ。
三人　下がらつしやれ〱。
ト櫻姫、山路、心遣ひ。櫻姫、袖にて顏を隱し、思ひ入れ。
山路　ハイ〱、イヤモウ、これに居りましても苦しうない、女子どもでござりまする。
三人　女の身として苦しうないとは。
山路　イヤ、これは北條時政が息女櫻姫。今日御劍奉納の御儀式を拜みに、參詣いたしましたのでござりまする。どうぞ御供養を拜みたうござりまする。
妙壽　イヤ〱、例へどなたの御息女でも、女たる身は
三人　禁制々々。
清玄　コリヤ〱、稚兒達、苦しうない。矢張り其まゝ其まゝ。北條どのゝ息女とあれば、それへ參つて聞えませうか。
ト矢張り、音樂にて、本舞臺へ來る。
山路　これは〱、清玄さまには、久々お目通りを相勤めませぬが、先づは御機嫌よろしいお顏を拜しまして、有り難う存じまする。
清玄　これは腰元の山路どのでござるか。承れば時政ど

のゝ御息女、御同道なさると、只今稚兒どもが申しまするは、女人禁制と申し渡したゆゑの事。その譯は、賴朝公厄難消滅の爲、薄緣の名劍を當寺へ御奉納。猶また活けるを放つ大せ供養も、御武運長久を祈りの爲。それゆゑに今日は、女子は堅く禁制と、申し付けましたゆゑ、必らずお氣にさへられて下さりまするな。

山路　勿體ない。なんの左樣に存じませうぞ。早速ながら淸玄さまへ、お願ひがござりまする。何卒御劍奉納のお儀式を

淸玄　拜みたいと云はつしやるのか。拜ませませう。拜見いたさせませう。

山路　エヽ、有り難うござりまする。

淸玄　併しながら、御祈禱所は勿論、本堂の前後ともに、女子は堅く禁制と申し渡したゆゑ、外から拜ませませう。何方で……オヽ、あるぞ／＼。併し寺內の案內は、御存じもあるまい。拙僧が敎へませう。

山路　ハイ／＼、猶以て有り難うござりまする。モシ／＼、このお寺の御案內を、敎へてやらうと御意遊はしまするぞえ。今のお文へナ、御合點でござりまするか……エヽ、有り難うござりまする。

淸玄　イヤナニ稚兒達、役僧を連れ、祈念所へ參れ。

稚兒　そんなら、お先へ參じませう。

ト管絃になり、稚兒三人に同宿付いて下座へ入る。

山路　サア申し、淸玄さま、御寺內の御案內は如何でござりまするな。

淸玄　御案內申しませう。

山路　お姬樣、いま淸玄さまの御意遊ばす、御寺內の案內をお忘れなされぬやうに、今のお文へナ、いろ／＼お認めなされませいな。今のお文を、サア、踏み違へぬやうに、御合點でござりまするか。

ト櫻姬、これより、文を書く事、いろ／＼あり

淸玄　ハテ、叮嚀な。書留めいでもよい事を。

山路　サア、御案內なされて下さりませう。

淸玄　ソレ、本堂の後より、舞臺へ出る道がある。その道を左へ行くと、護摩堂がござるが御存じか。

山路　ハイ／＼、ソレ、本堂の後とは、幸ひの忍び道。ナ、忘れぬやうに。

ト櫻姬、呑み込み文を書く。

淸玄　イヤ、忍び道ではござらぬぞや。

山路　サア、忍んで居ずば、また先刻のやうに、稚兒達に

叱られませうわいなア。さうして、どうでござりますえ。
清玄　その護摩堂の脇から見ると、兩方の谷間に櫻ばかりの所、そこを櫻ケ谷と申す。その櫻ケ谷に庵がある。その所は自分が休息所で、少し谷は隔てたれど、御劍奉納の儀式のみは拜見もなりまする。女子が行ても咎める者はない程に、心措きなう拜見召されい。
山路　ソレ、櫻ばかりの谷蔭は、櫻ケ谷と申しまするぞ。人知れずしつぽりと、ようござりませうぞえ。
清玄　イヤモウ、ずんと靜かな所でござる。
ト奧より、大藤内の聲にて
大藤　山路どのはどこにござる。山路どの／＼。
山路　あの聲は大藤内。私しを呼びまするは、定めてあなたの御身の上の事。私しが參つて、よいやうに申しませう程に、その間に早うお文を。御合點でござりまするか。
トまた奧にて
大藤　山路どの、どこへ行かれた。山路どの／＼。
トけはしく呼ぶ。
山路　アイ／＼、只今參りまする。エヽ、なんぢややら、ツイ行て參りませう。
ト奧へ入る。この間に櫻姫、文をいろ／＼思案して書きしまひ
櫻姫　サア／＼、山路、これでよいかや。
トこの時、我れ知らず清玄と顏見合せる。清玄、こなしあつて、櫻姫をヂッと見る。櫻姫、氣味惡さうなこなし。
清玄　ハテナア。
ト又ヂッと櫻姫が顏形に見惚れる。
櫻姫　エヽ、ツットモウ、山路はどこへ行きやつた。山路や山路や。
ト櫻姫入る。
清玄　平砂るい根を濕すを知らず、心誰れをか恨みん。物云ふ花と譬へしも、理りかなむべなるかな。唐土の貴妃西放李婦、花陽の遠きは知らず、近くは志賀寺の上人を迷はせし、御息所の容貌たりとも、これにはよもや優るまじ。ハテ、あでやかなる女子ぢやなア。
トいろ／＼こなしあつて、キッと氣を替へ
あら恥かしや恐ろしや。かゝる惡念を生ぜしは。
ト口の中にて、經を唱へて居る。下座より、清春、出て
清春　これは上人でござりまするか。御太刀は護摩壇へ供

へ置きましてござる。一刻も早う御祈禱所へ、お越しなされて下さりませい。

清玄　清春どのには今日のお役目、御大儀千萬。

清春　これは〳〵御挨拶。

清玄　然らば拙僧は、佛間へ罷り越しませう。

清春　御苦勞ながら。

清玄　後刻お目にかゝりませう。

ト管絃になり、清玄、そろ〳〵下座へ入る。清春、あと見送つて

清春　誠に尊き上人の御有樣。かゝる智識の在します靈山とて、花に薰風たる四方の風情。山櫻咲きぬる時は常よりも、峯の白雲立ちまさりけり。どうも云はれぬ景色ぢやなア。

ト上の方の床几にかゝり、扇を使うて居る。下座より、浪平、出て來り

浪平　お旦那、これにおわたりなされまするか。

清春　浪平、其方を尋ねたに、どこに何をして居たぞ。

浪平　私しも最前から、あなたにお目にかゝりたうて、一遍お尋ね申しました。

清春　そりや又なんぞ、用事でもあつての儀か。

浪平　用の段ではござりませぬ。たま〳〵お見掛け申しましても、お側には邪魔がござりましたゆゑ、お目にかけまする事も差扣へて居りました。幸ひあたりに差合ひもなし、直々にお目にかけましたい物がござりまする。

ト浪平、文を出し兼ねて居る思ひ入れ。

清春　直々に見せたいと云やるは、そりや又何を。

浪平　サア、そのお目にかけたいと申しまするは、なにサ、ものサ、アレ〳〵、あの櫻、なんとマア、咲きましたではござりませぬか。

清春　何を云やるぞいの。

浪平　ハテサテ、この清水の舞臺より除けて、山々谷々の梢から、咲き亂れたる櫻花。ソレ、御覽じませ。それそれ、なんと好い花でござりませうがや。

ト文を持つて花を教へながら、清春の鼻先へ文を押しつける。

清春　浪平、何をするぞいの。

浪平　何も致しませぬが、直々お目にかけましたいと申しました花は、ネイ、これでござりまする。

ト清春、文を取上げ

清春　「主さま參る御存じより……」今日は大切の役目を蒙

むるこの淸春。殊に淸淨のこの場所へ、斯樣な品を持參いたして、猥りがましい、何事ぢや。早う持つて行け。

ト投げ返す。浪平、おづ〳〵取上げ

浪平　猥か干鱈かは存じませぬが、あなたへお手渡し致してくれと、頼まれましたゆゑ、何か樣子は一向存じませぬ。

淸春　して、その文は誰れが頼んだぞ。

浪平　サア、この文は誰れが頼みましたやら、奴めは一向存じませぬ。

淸春　其方が受取つて來ながら、誰れが頼んだか知らぬとか。其やうに頼み手も知れぬ文を、どうして爰へは持つておぢやつたぞ。

浪平　サ、その儀は……それ〳〵、ものでござりまする。頼へ手も知れず、文の主も知れず、あなたもお覺えのない文なら、いつそ爰へ捨てゝ置いて、誰れぞに拾はせるか、但しは行き所のない文ぢやから、いつそ引裂いてしまひませうか。

淸春　ア、コレ。

浪平　それともあなたのお心に、お覺えのない文なら、今爰で寸々に引裂いて。

淸春　ア、コレ〳〵、なんぼ此方に覺えないと云うて、引裂いてしまふとは、そりや又餘りぢやわいの、

浪平　成る程、仰しやればそんなもの。どこの何奴が書いた文かは存じませぬが、折角思ひ思つて書いた文を、むざむざと引裂いてもしまはれますまい。こりや斯う致しませう、爰へ捨て置きませう。捨て置いたらどこぞの人がナ、心に覺えのある、どこぞのお方樣が、拾つて見さつしやるでござりませう。それ〳〵、捨て置かう。捨てよう〳〵。

淸春　そりやハヤ、どうなりと。

浪平　斯う捨て置いて、これからズウッとあちらの遠い櫻の蔭で、この文を拾ひ手があつても、おれが目には見えない所へ行て、目を塞いで一寐入りやらかすべいかい。

ト文を淸春が前へ捨て、思ひ入れあつて、下の方の櫻の木立の蔭へ隱れる。下座より、櫻姬、出かゝり居て、窺つて居る。淸春、あたりを見廻し、その文を拾ふ。浪平、ソロ〳〵出て、下の方の床几に寢腹這ひ、これを見て居る。

淸春　疑ひもない櫻姬どのゝ文。これを爰へ捨てゝよいものかいなう。勿體ない〳〵。

ト押戴き、封を切つて

ナニ〳〵「御眺めも恥かしながら、又もや拙き筆にて示し參らせ候ふ、何卒お役目のお暇も御座候はゞ、櫻ヶ谷の庵室までお忍び下さるべく候ふ、谷蔭の櫻と共に、積る思ひを晴らしたく存じ參らせ候ふ、申し上げたき御事は、たんと御座候へども、文は落つる恐れを思ひ、惜しき水莖書き殘し參らせ候ふ、くれ〳〵もお忍び願ひ上げ參らせ候ふ、淸春さま參る。櫻姫より。」そんなら櫻ヶ谷の庵で、人知れず逢はんとか。エヽ、お志しの程、嬉しうござりまする。

ト此うち、櫻姫、思はず、淸春が側へ寄り、いろ〳〵恥かしきこなしあつて

櫻姫　申し、淸春さま。

淸春　お前は櫻姫どのか。

櫻姫　アイ、左樣でござりまする。

ト兩人、恥かしきこなし。此うち、浪平、以前の茶辨當より、酒肴を取出し、床几に腰をかけ、酒を吞んで樂しんで居る。舞臺より、淸玄、水手桶に樒を入れ、これを持つて石段をソロ〳〵降りながら、これも兩人の濡れを見て居る。よろしく仕組みあつて

申し淸春さま、なんぞ御覽じましたかえ。

淸春　ハイ、とくと拜見いたしました。

櫻姫　オヽ、恥かし。

淸春　快く見て居る所へ、思ひがけもなう、愕りしましたわいの。

櫻姫　そんなら常々下されし、お文の通りのお心かえ。

淸春　其方にさへ僞はりなくば、此方の心は苔蒸す巖。

櫻姫　千代の外まで神かけて

淸春　必らず女夫に

櫻姫　ならいでわいの。

淸春　未來永々。

櫻姫　オヽ、嬉し。

ト抱きつく。浪平、酒を引ッかけ〳〵、グッ〳〵と飮む。淸玄は手桶を提げ餘念なき體。下座より、同宿、手桶を提げ、出て來る。これにて、淸春、櫻姫、愕りして飛び退く。

同宿　ハア、この瀧の水は、愛惜の濁りに穢れた。併し、おいらが構はぬ事。ドリヤ、外の水を汲まうか。

ト下座へ入る。兩人、また側へ寄り添うて

櫻姫　申し淸春さま、その文の通り、あの櫻ヶ谷の

清春　庵へ忍びませうか。
櫻姫　嬉しいわいの。
　トまた抱きつく。浪平、酒をグッ／＼と飲み、醉の廻り思ひ入れ。清玄、慄へながら現になつて居る。と又下座より、同宿、手桶を持つて出て來り、瀧の水を汲まうとして、二人を見る。これにて、兩人、恟りして飛び退く。
同宿　うまいな／＼。綺麗なお若衆よ、美しい女中、瀧の水も濁る筈ぢや。インバラハラハリタヤウンオンアボギヤ。
　ト云ひながら、下座へ入る。
清春　又もや人目にかゝつては如何。あの音樂の終らぬうちに。
　ト櫻姫へ囁く。
櫻姫　そんなら斯うして。
　ト清春へ囁く。
清春　そんなら必らず。
櫻姫　オヽ恥かし。
　ト此うち、清玄、石段を降りて、瀧の水を汲み、兩人が濡れをヂッと見て居る。始終音樂あり、この時、清玄、持ちたる桶を取落す。桶割れて水流れる。浪平もこの時、杯と吸ひ筒を取落す。清春、櫻姫、恟りして
清春　ヤア、あなたは
櫻姫　清玄さま。
　ト清玄、割れし手桶を見て
清玄　兎に角に賴みし桶の箍切れて、水保たねば月も宿らず……これぞ誠に悟道の觀念。エヽ、有り難や忝なや。種々重罪五逆消滅自他白道。南無阿彌陀佛々々々々々々。
　ト云ひながら下座へ入る。
櫻姫　浪平、そこに何をして居やつたぞいなう。
浪平　肩癖と脚氣と一緒に發つたかして、身内がしやつき張つて、根ッから動かれませぬ。
清春　そこに居やらうとは知らず
櫻姫　恟りしたわいなう。
浪平　わたしも恟り致しました。モシ、お旦那も櫻姫さまも、奴めが醉つたに依つて云ふぢやござりませぬが、大事の／＼祈りの場所で、猥ら千萬な。文でさへ手に取らぬ清めの庭で、びら／＼と、こりやどう致したものでござりまするぞ。
清春　浪平、あやまつた／＼。あやまつたわいなう。

浪平　イヤ〳〵、その詫び言は聞かない〳〵。一刻も早う御歸館なされませい。
櫻姬　そんなら淸春さまを連れまして、歸ると云やるのか。
浪平　お供いたさにやなりませぬ。ハテ、こんな猥らな事が、外の者の目にかゝつて御覽じませ。千葉北條ともに兩家の障り。そこを思へば無理無體に、お連れ申さにやなりませぬ。サア〳〵、お出でなされませ。
淸春　まだ御太刀奉納の儀式も終らぬうちに、無理やりに、どこへ連れて行くぢやぞいの。
浪平　無理無體に引立てゝ、お供いたしまするその所は
兩人　どこぢやぞいの。
浪平　アノ、櫻ケ谷の離れ庵へ。
櫻姬　アヽ、嬉しいわいなう。
淸春　浪平、行ても大事ないかや。
浪平　諸事は奴が、呑み込み〳〵。
兩人　そんなら一緒に。
浪平　サア、お出でなされませい。
ト音樂になり、淸春、櫻姬、浪平付いて下座へ入る。灘平、石段より、この體を見て居て、本舞臺へ降りて、淸春が落したる文を拾ひ

灘平　「淸春さま參る櫻姬より」ハテ、いゝ物が手に入つた。亂長さまへお手渡し。さうぢや。
ト下座へ行かうとする。奧より、磯平、出かゝり居て、程好く向うへズッと出て
磯平　灘平、わりやアどこへ行く。
灘平　磯平か。
磯平　成る程、磯平だが、奧を見かけて駈け出すが、わりやアどこへ行くよ。
灘平　おらア急にお旦那に用があつて、宿坊へ行く。そこを退いて通せ。
磯平　望みなら退いて通してやらうから、今われが拾つた物を、おれに渡したその上は、宿坊へでも天竺へでも、勝手次第にかッ走れ。その品を渡さぬうちは、爰一寸もやる事はならないぞ。
灘平　ハテ、變つた事を云ふな。おらア何も拾つた覺えはない。
磯平　隱さば隱せ、おれも又受取らないうちは、貧乏搖ぎもさせやアしないぞ。灘平、キリ〳〵出して、おれに渡せ。
灘平　インニヤ、覺えない。

磯平　ハテ、しちくどい。達て隱せば、おれが斯うして受取るワ。

ト灘平の懷中へ手を突ッ込み、文を引出す。灘平、その手を押へて

灘平　こりやアなんとするのだ。

磯平　この艶書をうぬに拾はれては、姫君のお身の上。北條家の障りになる。輕からぬ大事の書き物。おれが貰つた。おれにくれろ。

灘平　インニヤ、淸春と櫻姫が、不義の證據になるべき艶書。お旦那へお目にかける。そこ放せ。

磯平　おれにくれろ。

灘平　そこ放せ。

磯平　貰つた。

灘平　ならぬ。

兩人　ドッコイ。

ト禪のツトメになり、烈しき立廻りあつて、ト〻灘平、この文を持つて、向うへ走り入る。

磯平　それをやつては。

ト同じく鳴り物早めて、磯平、追ひ駈けて揚げ幕へ入る。時の捨て鐘鳴る。と石壇の上より、大藤內、以前の太刀を袋の儘持つて來る。下座より、胤長、窺ひながら出て、兩人、行き當り

大藤　胤長さま。

胤長　大藤內。

大藤　まんまと首尾よく薄緣の名劍を。

胤長　シイ……それさへ手に入れば、奉納の役目を蒙むつた淸春めは、否でも應でも切腹。

大藤　淸春さへ片付いてしまへば、櫻姫はあなたの物。

胤長　面白い〳〵。

大藤　命がけの働らき仕負ふせた上は

胤長　範賴公へ申し上げ、一かどの出世。

大藤　忝ない。

同音　平太さま〳〵。胤長さま〳〵。

トけはしく呼ぶ。兩人、うろたへ、いろ〳〵あつて、胤長、灘平が忘れた床几の上の脇差を取つて來り、目釘を拔き、また太刀の目釘を拔き、兩方、中心を入れ替へ

胤長　大藤內、この似せ物を護摩壇へ。

大藤　心得ました。

胤長　早う〳〵。

大藤　ハツ。
ト以前の石壇へ上がると胤長、浪平が脇差を押戴き
胤長　これさへ手に入れば、大願成就、忝ない。
ト下座より、浪平、ウツ／＼と、脇差を探しながら出て來り、胤長が持つて居る脇差を見付け
浪平　オヽ爰にあつた。平太さま、よく拾うて下さりました。
トずつと取つて差す。胤長、その手に縋つて
胤長　アヽコレ／＼、その脇差は。
浪平　エヽわしが脇差でござりまする。爰放さつしやりませ。
胤長　それでもどうも。
トかゝるを振り切つて
浪平　エヽとんだ事を。放さつしやれよ。
ト胤長を突きのめして、浪平、差して、下座へ入る。胤長、呆れたこなしにて
胤長　斯うしては置かれまい。平太が奴ども、參れ。
奴皆　ハツ。
ト奴四人、襷の看板にて、出て來る。
兼ねて仰せつけられし通り、忍びの役目。火急のお召しは如何でござりまするな。
胤長　斯う云ふ事もあらうと、同勢に紛れ込ませしは爰の事。近う／＼。
ト一人へ囁く。その奴、皆々へ囁く。
四人　そんならあの浪平めを。
胤長　一腰を奪ひ取れ。
四人　心得ました。
胤長　早く／＼。
四人　ソレ。
ト四人、下座へ入る。
胤長　先づこれで一方は片付いたやうなものだが、アヽコレ、大藤内に逢つて、この事を話したいものだが。
ト下座より、大藤内、清春と榎姫を引立て來る。これに山路付いて出て來る。後より、同宿付いて出る。
大藤　大切な御祈願所を穢した、兩人は不義者だ。密通ひろいだ。胤長さま、なんと太い奴等ぢやアござりませぬか。
胤長　女たる者は云ふに及ばず、穢れ不淨を糺す、頼朝公厄難消滅の、御祈念の場を穢したからには、二人ともに縛り首だぞ。

大藤　アヽ、コレ〳〵、その縛り首は淸春ばかり。ナ、これはどうでござりまする。

胤長　成る程、さうであつたな。あんまり腹が立つて〳〵、云ふ事もどきまぎするわエヽ。

大藤　御劍奉納の役目を蒙むりながら、祈りの場所を不淨に穢すは、鎌倉どのを調伏するも同じ事だぞ。

胤長　兩人ともに覺悟しろ。

淸春　斯く露顯に及ぶからは、申し譯は恥の恥。櫻姬に科はない。科人はこの淸春。サア、御存分になされませい。

櫻姬　イエ〳〵、淸春さまの御存じの事ではござりませぬ。科人はこの櫻姬。自らをどうなりとして、淸春さまをお助け申して下さんせいなア。

胤長　エヽ、聞けば聞く程腹が立つわい。非常を守る警固の役はこの平太胤長、科極まつた櫻姬は某が預かる。コレ〳〵成景、櫻姬は身共に預け召されい。

大藤　成る程〳〵、櫻姬は貴殿へお預け申す。淸春には繩ぶつて鎌倉へ引く。覺悟しやアがれ。

胤長　さうだ〳〵。淸春めに早く繩をかけさつしやい。

大藤　淸春動くな。

トかゝる。山路、隔てゝ

山路　淸春さまに繩かけさす事はなりませぬぞ。

胤長　大切な科人に繩打つを、女めわりやア

兩人　なぜ支へる。

山路　憚りながらお二人様、御詮議が暗いに依つて、淸春さまに繩かけさす事はなりませぬと、お止め申したのでござりまする。

胤長　我れ〳〵の詮議が

兩人　暗いとは。

山路　どこまでも淸春さまに、不義の科はござりませぬ。誠不義ぢやと云ふには又、なんぞ慥かな證據がござりまするかな。

大藤　證據と云ふは、櫻ヶ谷の庵室で、二人ともに乳繰つて居たを、見付けたはこの大藤內。なんと慥かな證據であらうがや。

山路　イヽヤ、見屆けたとばかり仰しやつては、そりや詞爭ひと申すもの。それが證據にやなりませぬぞ。

大藤　それでもおれが、生々しい所を見たものを。

山路　どのやうに仰しやつても詞爭ひ。そりや證據と申す物ではござりませぬ。但し外に、なんぞ又、慥かな證據がござりますか。

大藤　サア、その證據と云ふは。
山路　なんでござりまする。
大藤　サア、それは。
山路　どこにござりまするな。
大藤　サア、それは。
山路　サア〳〵、なんと。
　ト向う揚げ幕の内にて
灘平　不義の證據は爰にあるわい。
磯平　その文を渡せ。
　ト磯平、灘平、文を爭ひながら、出て來り、本舞臺へ來て
それを渡せ。
灘平　そこを放せ。
　ト立廻りのうち、胤長、磯平の額へ手裏劍を打つ。磯平、ウンと倒れる。
不義の證據のその艶書、
　ト胤長へ渡す。
胤長　出かした〳〵。磯平が息を引取るまでは、行け〳〵。
灘平　ネイ〳〵。
　ト灘平、下座へ走つて入る。胤長、文を拔き見て

胤長　なんだ「清春さまへ參る櫻姫より」エヽ、いま〳〵しい。成景、讀んでおくりやれ。
大藤　ナニ〳〵「櫻ケ谷の離れ庵にて、人知れずしつぽりと。」コレ、エ、〳〵、清春さまへ參る櫻姫。これでも不義でないか。これでも證據にならないか。
山路　サア、それは。
大藤　サア〳〵、なんと。
清春　櫻姫どの。
櫻姫　清春さま。
兩人　ホイ。
　ト泣き落す。此うち、清玄、後に出かゝり居る。山路、思案して
山路　成る程、罪極まつた櫻姫は不義者なれど、忍び男が違ひました。
兩人　何がなんと。
山路　櫻姫さまの不義の相手は、外にあるわいなア。
胤長　アノ櫻姫の不義の相手は、清春を退けて外にあるとは。
大藤　そりや又誰れだ。何者だ。
山路　どの道遁がれぬ姫君のお命。清春さまを退けて、外

に忍び男があつたなら、清春さまに不義の科はござりま
すまいがや。
兩人　その櫻姫が忍び男と云ふは、何者だよ。
山路　その不義の相手を、只今お目にかけませう。
ト山路、ズンと立つて、清玄を伴ひ、眞中へ出る。清
玄、合點のゆかぬ思ひ入れ。
山路　清玄さま、もう叶ひませぬ程に、お覺悟なされませ
い。
清玄　愚僧に覺悟とは、何を覺悟するのぢや。
山路　イヽエイナア。もうあらがうても叶はぬところ。櫻
姫さまとあなた樣と、不義をなされてござりませうがや。
清玄　エヽヽ。
清春　コレ待て山路。そりや何を云ふぞ。勿體なくも御出
家堅固の清玄さまに
櫻姫　どうして其やうな事があらうぞいの。わしや勿體な
いわいの〳〵。
山路　ハテ、大事ござりませぬ。櫻姫さまの忍び男、不義
の相手は、新清水の清玄さま。サア、お姫樣、ナ、清玄
さまでござりませうがや。
櫻姫　只さへ罪深き女子と聞くものを、勿體ない恐ろしい
假にも其やうな事云うてたもるな。勿體ないわいの〳〵。
山路　ハテ、大事ござりませぬ。忍び男はどこまでも清玄
さま。モシ、御出家樣にもお似合ひなされぬ。櫻姫が忍
び男は、あなた樣でござりもせうがな。
清玄　餘りの事に物も云はれぬ……この女子は、狂氣ばし
致したか。
胤長　成る程、此奴は氣が狂つたも知れない。但し清玄ど
のが櫻姫の忍び男と云ふには、これにも證據のある事か。
山路　證據と云ふは今の艶書。
ト胤長、披いて
胤長　こりやアコレ、清春さま參る櫻姫より。
山路　イヽヤ、その讀み聲が違ひましたわいなア。
胤長　ナニ、讀聲が違つたとは。
山路　讀みと聲とのその違ひ。清春ではない、清玄さま參
る櫻姫より。なんと慥かな證據でござりませうがや。
清玄　ヤア。
山路　なんとお姫樣。清玄さまはお前の忍び男でござりま
せうがや。モシ、心を鬼になつて、清玄さまと密通ぢや
と仰しやらぬと、清春さまのお命がござりませぬぞ。ぢ
やに依つて、心を鬼に持つて、忍び男は清玄さまぢやと、

仰しやつて下されませい。
櫻姫　そんなら勿體ない事ながら、自らが忍び男と云ふは清玄さま。サア、その文もあなたへ送つたのぢやわいなう。
山路　オヽ、よう仰しやつた。お出かしなされました。
清春　イヤ、斯く露顯するからは、科人はこの清春。
櫻姫　ハテ、コレ、御出家の御難儀を、救はうと思し召しても叶ひませぬわいなア。
清春　それでも。
山路　マア、とつくりと詮議の仕上げを御覽じませ。
ト此うち、清玄、いろ〳〵こなし。
櫻姫　勿體ない。お免されて下さりませう。
ト山路、こなしあつて、清玄に詰めかけ
山路　モシ、清玄さま、衆生を濟度なさるゝ佛の敎へ。わが身を捨て、人を助けるが、菩薩の行とやら申しまする。ナ、清玄さま、讀み違へて清春さまを、殺さうとなされましたぞえ。それが出家の身持ちであらうかいなア。
ト清玄を拜み
清春さまを殺しまするると、此方の姫も、サア、殺さにやならぬ不義の科。あなたを一人助くるか、わが身を捨てて……人を惡む御出家のお前。この不義の相手になつて、さつぱりとお名乘りなされて下さりませい。
ト清玄、こなしあつて
清玄　一切衆生草木國土、虫けら類に至るまで、悉く皆成佛の果を與へ、いづれも淨土に至らしめんとある佛の誓ひ。その身は惡龍の餌食となり、四句の文を得給ふと聞く。我が身を捨てゝ人を助くる善根なれば。
山路　どうぞ。
トこなし。
清玄　如何にも、櫻姫が忍び男と申すは、愚僧でござる。
山路　あなたでござりませうが。
皆々　ヤア。
大藤　清玄、御僧か。
清玄　左樣でござる。
胤長　すりや、清玄、われが櫻姫が忍び男に違ひはないか。
清玄　忍び男に違ひはござらぬ。
山路　サア申し、これで清春さまの不義の科はござりますまいがな。
大藤　ハテ、よく云ひ廻したものだな。
清玄　身は濡衣の名は立つとも、佛意に叶ふがこの身の滿

足。南無大慈大悲の觀世音菩薩。
嵐長　面白い。忍び男に逢ひなくば、櫻姬と馴れ初めの話しが聞きたい。
清玄　ヤア。
大藤　戀話しの仕樣が惡いと、坊主め、から竹割りだぞ。
清玄　サア、その戀とやら色とやらの話しは。
山路　コレ申し、清玄さま、もう斯うなるからは、恥かしい事はない。早う戀話しを。
清玄　八萬餘卷の經々にも、戀話しと云ふ事は。
山路　コレ申し、お姬樣、お前の方から馴初め話しを早う。
櫻姬　それでも、其やうな恥かしい事は。
山路　エヽ、ずんと辛氣な。それ〳〵、いつぞや瀧詣での其の折から、互ひの心が通じてや、坂を登るが辛どからうと、姬君の手をお引きなされたであらうがな。
ト無理に櫻姬が手を取り、清玄に突きつける。櫻姬、清玄が手を握る。
清玄　女の手より物を受くれば、五百生がその間、手なき者に生るゝとやら。免し給へ〳〵。
山路　それ〳〵、頃は薄暮時。茂りし木影へお供して
櫻姬　わたしとお前と、袖から袖へ、斯う手を入れて
ト袂より手を入れ、ヂッと締める。顏を顰め、こなしあつて
清玄　骨肉は風に破れ、一日に胡麻一粒を供御に召され、木樵り水汲む釋尊の、難行苦行も、この苦しみには。
ト齒を食ひしばり、こなしあつて、慄へる。
嵐長　清玄、わりやアなんで慄へる。
清玄　ヤア……サア、櫻姬の志しが、あんまり嬉しさに嬉し淚が。
嵐長　それに又、面を顰めて身を背けるは、女の不淨を嫌ふのか。
清玄　イヤ、女は清玄、きつい好きでござるわいの。
嵐長　女好きの坊主なら、定めて魚肉も喰ふであらうな。
清玄　オヽ、食べるとも〳〵。
嵐長　面白い。
ト以前の鳥籠の鳩を一羽引出し、これを引裂き、茶碗へこの血を絞る。此うち、清春、山路、櫻姬、心遣ひ。嵐長、茶碗を清玄に突きつける。清玄、ギョッと思ひ入れ。
清玄　こりやアなんでござる。
嵐長　鳩の生血だ。

清玄　ヤア。
胤長　女を犯し、魚肉を喰ふからは、定めてこの血も呑むであらう。サア、櫻姫が忍び男に違ひなくば、これを喰へ。
清玄　サア。
大藤　喰はずば、誠の忍び男を云へ。
胤長　サア、呑め。
大藤　喰へ。
胤長　どうだ。
清玄　ハア。
　ト俯向く。
胤長　喰はにやア斯うして喰はせる。白状せにや、斯うして云はせる。カウ〳〵〳〵。
　ト兩人して、清玄を散々に打擲する。清玄、衣も衣裳も引裂ける。
清春　もう是非に及ばぬ。
櫻姫　自らも一緒に。
　ト死なうとする。
山路　コレ申し、清玄さま、お二人がお果てなされまするわいなア。

　トいろ〳〵心遣ひのこなし。清玄、ウロ〳〵して、キッと氣を替へ
清玄　オヽ、さうぢや。衆生に代る殺生戒。九十恒砂の大菩薩。分身多寶八萬億の大菩薩、諸天善神天人阿修羅、無量の諸佛も、免し給へ〳〵。
　ト茶碗を取つて呑まうとする。磯平、起き上がり、この茶碗を取つて打ちつけ、微塵に打ち割る。大藤内かかるを、ちよつと支へて見得。
大藤　こりやア下郎め、何ゆゑ妨げをひろぐエヽ。
磯平　イヤ、妨げはしない。不義の相手を詮議するのだ。
胤長　何がよんと。
磯平　所詮穢れた祈禱の庭、穢れ次手にお姫樣始め、どいつも此奴も眞ッ二つにせにやアならない。お旦那方にもマア、さう思し召して下さりませ。
胤長　エヽ、この命知らずめが。下郎の態をして、詮議なぞとは、身の程を知らぬ奴め、すッ込んでうしやアがれ。
大藤　飛びしさつて居ればその通り。妨げひろぐと命がないぞ。
磯平　飛びしさつて居りますまい。分明ならぬ不義の詮議。清春さまに不義の惡名をくッ付けたいづれも。奴めが料

簡しない。堪忍なりましない。

亂長　イヤ、此奴は慮外な奴の。

磯平　慮外も絲瓜もいらない。淸玄と云ふ不義の相手が出たからは、お供をした姫君に、疵が付いちやアお館へ歸つて、奴めが申し譯がない。科極まつたお姫樣、淸玄諸とも眞ッ二つにして、この磯平めも直ぐに切腹。奴めがくたばるからは、どいつも此奴も地獄の道連れ。サア、お姫樣、お覺悟なされませう。

山路　お姫樣は、疾から覺悟を極めてお出でなさる程に、必らず地獄の道連れを忘れまいぞえ。

磯平　なんにも云ふ事はござりませぬ。この座に連らなつた奴等は、一人も生けちやア置きましない。

櫻姫　サア、磯平、早う自らを殺してたもいなう。

ト手を合せ、思ひ入れ。亂長、大藤内、キヨロ／＼する。磯平こなしあつて

磯平　お覺悟はようござりすか。

ト脇差を拔かうとする。大藤内、櫻姫が覆ひになり

大藤　コリヤ／＼、磯平、滅多に姫を殺しちやアならぬぞ。

亂長　オヽ、さうだ／＼。大藤内、滅多に姫を殺させるな。

磯平　イヽヤ、退かつしやい。不義の惡名が付いちやア、お館へ申し譯がないに依つて、お姫樣でもなんでも殺さにやアならない。

山路　この山路も自害して、死出も三途もお供いたしまする程に、お姫樣、お心强う思し召して、サア、お覺悟はようござりまするか。

亂長　コレ／＼、櫻姫どの、この荏柄が居ては、そもじは殺さぬ。怖い事も何もない程に、彼奴等に構はずと、おれにくツ付いて居ろ／＼。

ト櫻姫を引寄せて圍ふ。

淸春　この淸春こそ不義の科、申し譯の切腹。南無阿彌陀佛。

ト死なうとする。磯平、留めて

磯平　コレ申し淸春さま、お待ちなされませ。お前樣より先に、殺さにやアならぬ科人めらが、そこらあたりに、れい／＼とござりまする。マア／＼、お急きなされまするな。

亂長　外に科人があるとは。

磯平　荏柄の平太亂長さま、潔く腹を切らつしやりませ。

亂長　なんだ此奴は、さま／＼な事を吐かす。この亂長になんの科があつて、切腹しろと云ふのだ。

磯平　知れた事だ。大切な祈念の庭で、この磯平に手疵を負はせ、奴がしやッ額は、月の障りとならせられた。まだその上に頼朝公、厄難消滅の爲、放生會のあの鳩を殺して、源家の守り八幡宮の御愛鳥を殺したは、正しく鎌倉どのを調伏の下心だワ。
胤長　ヤア。
磯平　遁がれぬ所だ、胤長さま、尋常に切腹さつしやい。
胤長　サア、そりやア。
磯平　但し奴めが御介錯いたしませうか。
　　ト思ひ入れ。
胤長　これサ〳〵、磯平、急くな〳〵。全く以て法會の庭を、穢さうと思つてはしないワ。ありやアつい時のはずみよ。
山路　サア、お姫樣、お覺悟はようござりまするか。
櫻姫　早う殺してたもいなう。
大藤　イヽヤ、姫を殺す事はならぬぞ。
磯平　サア、胤長さま、汁會の庭を穢さぬと云ふ云ひ譯は。
胤長　サア、そりやア。
山路　お姫樣、お覺悟。
櫻姫　南無阿彌陀佛。
大藤　ドッコイ、姫は殺さぬ〳〵。
清春　清春も冥途の道連れ。
胤長　コレ待つた。貴殿が死んでは、この胤長が身にも難儀がある。急くまい〳〵。
磯平　時刻が移る。御介錯いたさう。
胤長　サア、そりやア。
山路　サア、お覺悟。
櫻姫　南無阿彌陀佛。
大藤　イヽヤ殺さぬ。
清春　南無阿彌陀佛。
胤長　コレ待つた。
磯平　介錯せうか。
胤長　サア、そりやア。
磯平　サア。
胤長　サア。
皆々　サア〳〵〳〵。
磯平　どうだ。
　　ト思ひ入れ。
大藤　こりやアマアなんのこつた。此方から云ふ理窟の裏を掻かれて

胤長　とんだ工面が違つたわえ。
磯平　ナニ、工面が違つたとは。
胤長　エ、、せう事がない。不義の相手は淸玄に違ひない。
磯平　して、法會の庭を穢した事は。
大藤　これで互ひに、科は五分々々。
胤長　この場の事は、沙汰なし〳〵。
磯平　そんなら、證據のその艶書も
胤長　お目通りで、この通り〳〵。
　ト寸々に裂く。
磯平　そんならもう、料簡してやるべいか。
山路　この場が丸う納まつたりや、もう好い加減に料簡し
　てやつたがよいわいなア。
磯平　そんなら互ひに
三人　料簡仕つた。
大藤　段々いかいお世話でござりました。
磯平　これはお禮で痛み入ります。
胤長　何にもせよ、淸玄櫻姫密通と事顯はれたからは、櫻
　姫は一生疵もの。
大藤　外へ緣組みもならず、あつたらものを後家にしたは
　笑止千萬な。

櫻姫　エ、、そんなら自らは、一生殿御を
大藤　持つ事はならないワ。
　ト櫻姫、淸春と顏見合せ
櫻姫　ハア、。
　ト泣く。胤長、淸玄を引立て、衣を剝ぐ。
淸玄　これは。
胤長　ヤイ、淸玄、出家の身として櫻姫と密通の科。事顯
　はれたから脫衣追放、寺法には叶はぬ、傘一本で出てう
　せろ。
　ト突き倒す。淸春、櫻姫、駈け寄つて
淸櫻　こりやマアあんまり。
　ト思ひ入れ。
大藤　借家貸して母家取られると。え丶態だなア。
淸玄　ホウ、さうぢや。元よりこれは覺悟の前。如何にも
　寺を開きませう。
淸春　大道德ある淸玄どの、か丶る難儀をかくると云ふは、
　思へば〳〵勿體ない。
山路　お免しなされて下さりませい。
磯平　淸玄さまは假初めにも、サア、姫君樣の大事の繫人。
　命に替へてもお世話申しまする。必らずお氣遣ひなされ

まするな。
磯平　姫君にも淸春さまにも、斯樣な所に長居は御無用。
山路　宿坊へお出でなされて、お歸りの御用意なされませい。
淸春　この淸春は、御太刀奉納の刻限、然らば直さま佛前へ。
胤長　この胤長も一緒に參らう。大藤內もお來やれ。
大藤　稚兒達、御案內。
皆々　斯うお出でなされませい。
淸春　とは云ふものの、思へば〱。
　ト淸玄へ思ひ入れ。
磯平　コレ、先づお入りなされませい。
　ト音樂になり、こなしあつて、稚兒皆々先へ立つ。胤長、大藤內、淸春、山路、磯平は淸玄へ心を殘して何れも入る。淸玄、一人殘る。時の鐘鳴る。櫻大分散る。
　淸玄、こなしあつて
淸玄　無常の風は時を嫌はず、盛りの花も嵐に散るは、泰山府君の力にも叶はず。人皆生を樂しみ死を恐れ、五六慾長へに、無明轉動の浪に漂ふ。我れ偶々受け難き佛體を得、遭ひ難き御法を請け、何卒火宅の苦界を遁がれ、淸淨の生を願ふ身の、恥も恥辱もいとはねど、これまで書せし法燈も、忽ちに消えて底下の闇に迷ふ事、偏へに櫻姫が艶色に、暫しも魂ひ蕩けしゆゑ。身に降りかかるこの難儀は、佛罰正に疑ひなし。あら勿體なや恐ろしや。南無大慈大悲の觀世音菩薩。
　トこなしあつて、花道の方へソロ〱と行く。バタバタにて、臺の上へ櫻姫出て、こなしあつて
櫻姫　戀しなばかゝる嘆きはなからまじ、櫻と共に散りかかる身を。いつそ焦れて死んだらば、この憂き目は見まいもの。戀が叶ふと其まゝに、死なねばならぬ我が身の上。申し淸春さま、お前の命が助けたいばつかりに、淸玄さまと不義の惡名。自らと夫婦におなりなされては、千葉のお家の恥辱。所詮女夫になられぬ身の上。何樂しみに長らへん。未來でなりと添うてたべ。思へば悲しい儚ない緣でござんすわいなア。
　トこなし。下より、淸玄、これを見て
淸玄　さう云ふ聲は櫻姫どのではないか。
櫻姫　ヤ、淸玄さま。オヽ恥かし。
淸玄　イヤ〱、恥かしい事はない。淸春どのに添はれぬと思ひ詰め、死ぬるとはそりや何事。死んで花實は咲か

ぬぞや。必らず短氣を出しますまいぞ。
櫻姫　清玄さま、お免しなされて下さりませ。お前と不義の悪名は、削つても削られず、因果な身になる自らは、所詮千葉家へ嫁入りもならず、生きて詮ない命ぢやと、諦らめて死にまするわいなア。
清玄　イヤ〱、そりや一筋の悪い料簡。女子の小さい心からは、思ひ詰めたも無理ならねど、どう云ふ事で清春どのと、夫婦になられまいものでもないぞや。
櫻姫　イヽエ、不義者の悪名請け、なに面目に長らへませう。生きて居る程この身ばかりか、清春さままで恥に恥。叶はぬ事と諦らめて、覺悟極めて居りまするわいなア。
清玄　サア、その叶はぬ事を神に祈り、佛の利生で目前に、叶ふるもまゝある習ひ。一心にかけて祈つたならば、などか納受のなかるべき。
櫻姫　ほんにさうぢや。生き甲斐もない自ら、死ぬると覺悟極まつたからは、この舞臺から身を投げて……覺え聞く、都清水寺の觀世音へ、大願あらんその時は、一心に身を固め、舞臺より飛び降りても、願望叶へば恙なく降りると云ふ。妾もその名は新清水、誓ひは同じ觀音力。さうぢや。

ト繪馬にかけてある、紅葉笠を廣げ、高欄へ片足踏みかけてキッと見得。

清玄　イヤ〱、それは大きな僻事。世話の諺、危ない危ない。
櫻姫　イヽヤ、觀音薩埵の念力にて、などか納受のなからんや。南無清水觀世音、所詮叶はぬ縁ならば、いつそ殺して下さりませ。未來の縁を結んでたべ。
清玄　イヤ、死んで未來の縁は愚か、煩惱輪廻の霞に支へられ、顔見る事もいつかな叶はぬ。
櫻姫　盡未來五百生、夫婦にならいで置かうか。
清玄　冥途の苦患は石の火の、消ゆる間も暇はない。
櫻姫　暇があらうがあるまいが、戀し床しい清春さま。六道四生を付き纏ひても、放れぬ〱。
清玄　奈落に落ちなば
櫻姫　續いて落ち
清玄　無限に沈まば
櫻姫　夫と共に。
清玄　一百三拾六地獄も
櫻姫　いつかな放れぬ我が念力。南無大慈大悲の觀世音。我が願ひ叶へてたび給へ。歸命頂禮。

ト大太鼓の風の音にて、傘を擔いで、櫻姫、舞臺より飛び降り、ウンと悶絶する。清玄、うろたへ、いろ／＼介抱し、瀧の水を手に掬つて來て、口移しに呑ませようとしてまた氣を咎へる事、いろ／＼思ひ入れあつて、トヾ口から口へ水を呑ませ

清玄　櫻姫どのいなう／＼。

ト櫻姫、氣の付いたるこなしにて

櫻姫　清玄さまか。

清玄　どうぢや。氣が付いたか／＼。

櫻姫　そんなら、今の介抱は。

清玄　愚僧が居らずば、ツイあの儘、危ない事でござつたなう。

櫻姫　すりや、死ぬるにも死なれぬ命か。エヽ、淺ましい身の上ぢやなア。

ト又ウンと反る。

清玄　コレ／＼、氣を慥かに／＼。

ト櫻姫を抱きしめ、こなしあつて

男女の愛執は、共に髑髏を抱くと云ふが、これ程までに夫を焦るゝ志し。ハテ、頼もしい、羨やましい。

トこなし。

櫻姫　申し、清玄さま。

清玄　ヤア。

櫻姫　自らは氣を失ひましたかえ。

清玄　イヤモウ、とんと正氣は付かなんだわいの。

櫻姫　エヽ、見捨てゝ殺して下さんしたらよいものを。わしや死にたい、死にたうござりまするわいなア。

清玄　ハレ、勿體もない。死んで未來で夫婦になられるのとは、ありや皆僞はり。生きてこの世で樂しんだがよいわいの。

櫻姫　それでもこの世で、所詮清春さまに添ふ事はならぬわいなア。ア、／＼。

ト癪の差込む思ひ入れ。

清玄　コレ／＼、氣を慥かに持たつしやい。ドレ／＼。

ト抱きしめ、懷へ手を入れ

ホウ、この脇の下へ突ッ張つたが、癪とやら云ふものであらう。

櫻姫　サア、その癪が取詰めて、死んでしまへばよいものを。エヽ、死にたい／＼／＼わいなア。

清玄　ハテ、又しても死ぬる／＼と。ヂッとして居さつしやれ／＼。

ト いろ〳〵こなしあつて

ハテ、麗はしい肌ぢやなア。思へば最前僞はつて、この清玄が不義の相手となりしが、その僞はりを誠にして、かかる美人に思はれたらば、破戒墮落も何か思はん。一切經は皆僞はり。未來淨土に到らんより、この世の榮華、芙蓉の露を含める粧ひ、見れば見る程、ても麗はしい。最早清玄が心は亂れ、魂ひも蕩けたわえ。こりやどうもならぬ〳〵。

ト 櫻姫をヂッと抱きしめる。

櫻姫　ア、、其やうになされますと、息が詰まりますわいなア。

清玄　コレ〳〵、癪めが鳩尾先へ出たさうなぞや。

櫻姫　イエ〳〵、それは乳でござりまするわいなア。

清玄　ハ、ア、これが乳と云ふものか。母の乳房を放れしより、直ぐに釋門に入つたこの清玄。女子の肌を初めて探つた。すりや、人間の育つはこの乳ぢやよの。ハテ、やわ〳〵とした物ぢやな。

櫻姫　もちつと下の方を押して下さんせ。

清玄　もつと下を。斯うか〳〵。

ト 押へて

もつと下か。斯うか〳〵。

ト ぐつと押す。櫻姫、悄りするを抱きしめて

一切三寶諸佛薩埵、免させ給へ。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

ト こなし。櫻姫、振り放し、飛び退き

櫻姫　清玄さま、こりや何をなされまするぞいの。

清玄　ア、、どうもならぬ。

ト 慄へて

櫻姫どの、惚れた。

櫻姫　エ、。

清玄　惚れた〳〵惚れ込んだ。

櫻姫　エ、。

ト 思ひ入れ。

清玄　智德兼備佛法流布の大行者も、菩提樹よりも生れ給はず、只有り難き妹脊の道。男女の情も辨まへず、忌はしき佛法に歸依したが、今では口惜しい。櫻姫どの、この清玄も木竹にあらず、其方ゆゑに脫衣追放、當山を追ひ拂はれたは、可愛い事ぢやと思つて、思ひを晴らさせて下されい。情ぢや慈悲ぢや、櫻姫どの、抱いて寐かして下されいなう。

トこなし。櫻姫、怖き思ひ入れあつて

櫻姫　エヽ、淺ましい清玄さま。自らゆゑにお前を墮落さ
せまするは、未來の程が恐ろしい。思ひ切つて下さんせ。
モシ、免して下さりませいなア。

清玄　イヽや、思ひ切られぬ。

櫻姫　そんならどうでも。

清玄　破戒した。

櫻姫　エヽ。

清玄　其方ゆゑなら、破戒墮落もなんのその、大俗となつ
たその證據は、コレ。

ト鳥籠の鳩を引出し、これを喰ひ裂く。口の端、紅だ
らけになる。

櫻姫　エヽ。

ト飛び退き、大きに慄ふ。

清玄　サア、櫻姫、抱かれて寐るか。

櫻姫　サア。

清玄　否か。

櫻姫　サア。

清玄　應か。

櫻姫　サア。

清玄　サア〱〱〱。

ト付け廻す。櫻姫、恐ろしき思ひ入れにて、逃げて廻
る。

清玄　返事はどうぢや。

櫻姫　アヽ、コレ清玄さま、免して下さんせ。堪忍して下
さりませい。

ト奥へ逃げうとする。清玄、飛びかゝつて帶際を捉へ
引寄せ

清玄　否でも應でも斯うなつたら、抱いて寐にやアならぬ。

ト櫻姫を無理におしこかし、乘りかゝらうとする。內
より、清春、出て、これを見て、清玄を引退け、櫻姫
を圍うて

清春　こりや清玄、櫻姫をなんとする。

清玄　ヤア、戀の敵の清春、よく來たなア。

櫻姫　コレ申し清春さま、清玄どのは破戒の僧、近寄つて
怪我して下さんすなえ。

清春　すりや、清玄には。

清玄　櫻姫ゆゑ破戒した。墮落した。

清春　ヤア。

清玄　戀の敵は千葉之助清春。覺悟せい。

清春　情は情、仇は仇。さう聞いては是非に及ばぬ。觀念。
ト切つてかゝる。立廻り。
櫻姬　危ないわいなア／＼。
ト立廻りにて、清玄、清春が肩を足にて踏まへ、櫻姬を引寄せる。山路、磯平、出て
磯平　こりや、お二人をなんとする。
清玄　戀の敵の清春め、生けちやア置かぬ。
磯平　それぢやア清玄どのはお姬樣に
清玄　惚れて惚れて惚れ拔いた。
山路　そんなら先刻の僞はりが、誠となつて
清玄　櫻姬ゆゑ墮落した。どうぞ情に抱かれて寐さして下されい。
山路　勿體ない、御出家に惡名付けたは、わたしが科。それから起つたこの體裁。出家を墮した大惡人はこの山路、破戒墮落も無理ではない。腹癒せにこの山路を、存分にしてなりと、姬君樣の事は、どうぞ思ひ切つて下さりませい。清玄さま。
清玄　イヤ、この世は愚か天は通り、地は奈落の底までも、思ひ切る事、ならぬ／＼。
山路　そんならどうでも。

清玄　妨げなすと爲にならぬ。櫻姬は連れて行つて、否でも應でも抱いて寐る。邪魔するな。退け。
ト山路と清春を引退け、櫻姬を引立てにかゝる。磯平、支へて
磯平　もう是非に及ばぬ。
ト脇差を拔いて、清玄を背打ちにする。清玄、打たれたるをもいとはずに櫻姬が帶を取つて引ッ張る。山路、心遣ひの思ひ入れ。磯平、清玄を散々に打つ。清玄、櫻姬の帶を摑みながら立つて居て目を廻す。
磯平　エヽ、淺ましい根性だな。お二人樣、御構はずとお出でなされませ。
清春　とは云ふものゝ清玄どの。
櫻姬　思へば不便な。
山路　お心弱い。氣の付かぬうち
磯平　ちつとも早う。
ト行かうとする。櫻姬が帶を引ッ張る。
清春　ヤア、この帶を。
ト磯平、帶の眞中を切る。清玄、これにて舞臺へ倒れる。櫻姬は花道の方へ爪づく。
櫻姬　山路。

山路　磯平どの。
磯平　ござりませう。
ト捨て鐘、三重にて、清春、櫻姫、山路、磯平、付いて向うへ入る。下座より、妙喜丸、妙壽丸、出て來り、清玄が側へ寄つて
兩人　お師匠樣〳〵。
トいろ〳〵介抱すれども氣の付かぬゆゑ、妙壽丸、上の方の瀧の水を柄杓に汲んで來る。此うち、妙喜丸、清玄を介抱して抱き起す。妙壽丸、柄杓のまゝ水を呑ませる。これにて、清玄、氣の付いたる思ひ入れにて
清玄　さては櫻姫は、早逃げうせたか。例へいづくへ逃げるとも、戀し床しい櫻姫。思ひを晴らさで置かうか……
櫻姫やアい〳〵。
ト捨て鐘にて、清玄、帶の端を抱へ、ヒヨロ〳〵して
櫻姫やアい〳〵。
ト云ひながら向うへかゝる。妙喜丸、妙壽丸、窺ひながら後に付いて、向う揚げ幕へ入る。浪平、出て來り
浪平　お旦那にやアもうお歸りだと、宿坊で知らせたから、來て見りやア、こりやアもういつか行かしやつたさうだ。大方櫻姫さまと一緒であんべい。お供に遲れちやアならぬ。さうだ〳〵。
ト花道へ行かうとする。奴四人、バラ〳〵と取卷く。
四人　浪平、動くな。
浪平　こりやアわいらア、なんとする。
奴一　なんとするとは、お旦那平太局長さまの仰せつけ。うぬを搦めて御前へ引く。尋常に腕
四人　廻せ。
浪平　合點がゆかない。この浪平に何科あつて、荏柄さまへ引出されう。そりやア兎も角も、この浪平一人を大勢して、動くなやらぬと唸り出すが、惡く騷ぐと、うぬらが里の月に叢雲、花に嵐の音羽山、落花微塵に切りまくるが、うざい餓鬼めら、立去るまいか。
四人　面倒な。捕つた。
皆々　ドッコイ。
ト大太鼓入りの祇園囃子の鳴り物をかりて、浪平、奴四人を相手に華々しきタテあつて、トゞ奴四人逃げて下座へ入る。浪平、追ひかけて行かうとする。灘平、出て
灘平　浪平待て。
浪平　灘平か。

灘平　先刻お旦那胤長さまが、お望みのわれが一腰、貰ひに來た。灘平にくれろ。

浪平　ハテナア、何が見込みか知らないが、この奴が魂ひが欲しさに、さてはうぬら、荷擔人してうせたな。

灘平　知れた事だ。渡せ。

浪平　さう聞いちやア何か知らぬが、金輪奈落渡さねえが、わりやアどうする。

灘平　邪でも非でも受取るワ。

浪平　どうして。

灘平　斯うして。

浪平　小癪な。

トこれより、また灘平を相手に立廻り。よい程に鳴り物を入れ、兩人、よろしくあつて、よき見得をキッカケに、以前の奴四人、バラ／＼と出て

四人　浪平、動くな。

皆々　ドッコイ。

ト見得よく、片シヤギリにて、

幕

中幕　雪の下桂庵宿の場

役名――梅澤の小五郎兵衛實ハ奴浪平。奴、灘平實ハ虎松。大藤内成景。石塚團兵衛。女中、お種。按摩、多門。北條息女、櫻姫。千葉之助淸常。小五郎兵衛女房、山路。因幡三郎。雀屋惣兵衛。奴、磯平。

本舞臺、三間の間、二重舞臺。鼠壁、眞中に暖簾口、その側に押入れ、下戸棚明け立て。上の方へ寄つて出格子、羅漢の前に一間の板羽目の火の番小家。これも戸口明け立て、人の出入りあり、花道の方に据ゑ物の門口、これに奉公人口入れ所雀屋惣兵衛と云ふ看板掛けてあり、爰に惣兵衛、木綿やつし親仁の拵らへ、煙草のみ居る。山路、やつし女房の拵らへ、頭へ手拭を卷きかけ、硯を引寄せ、帳面つけて居る。下の方に葛籠を上に手水盥を載せあり、爰にお種、木綿やつしの奉公人にて居る。團兵衛、木綿羽織やつし二本差し、武家奉公人にて居る。多門、撫でつ

け後髷の醫者の拵らへ、木綿やつし短かき脇差を差
して居る。通り神樂、在鄕唄にて幕明く。
惣兵　コレ、奉公人衆、このあたりに桂庵もたんとあるが、
名の通つた雀屋の惣兵衞、どんな奉公人でも、賣れ餘る
と云ふ事はない程に、面々の望み好みを仰しやるがよい。
先づお侍ひは、どんな所がようごんす。
園兵　ハイ、拙者は別に望みもござりませぬが、去年まで
は鎌倉前の、三筋町のお組に勤めましてござるが、どう
ぞならうなら、素一萬石でも、お大名方へ有りつきたう
ござりまするぞ。
惣兵　イカサマ、犬になるとも大所の犬になれとやら、お
厩別當か門部屋の口なら、二三軒約束もあるが、こなさ
まは、定めて手も書かつしやらうな。
園兵　イエ、書くと申す云ひ立てにはなりませぬが、いの
字からすの字までは覺えて居りまするて。なりませうな
ら存分に、晝寢のなりさうな所へ賴みまする。
惣兵　存分に晝寢のなる口とは、ちとむづかしいわえ。
園兵　相應な所はござりますまいかな。
惣兵　オツと、あるぞ。無常門の鍵役へ嵌めてやらう。
園兵　どうぞお賴み申しまする。

山路　そちらな女中さん、こなさんは、なんぞ云ひ立てが
あるかえ。
たれ　アイ、わたしが云ひ立てにする事は、紗綾縮緬の裁
ち縫ひは云ふに及ばず、張り返し物一通り、お髮上げで
も小笠原でも、その外琴三味線胡弓尺八、將棊碁双六茶
の湯俳諧、大槪の事には、なんにも出來ませぬわいな。
山路　そして、何がなるえ。
たれ　おまんまをたんと喰べると、父なし子を産む事なら、
滅多に人には負けぬわいな。
山路　ホヽヽヽ、そんな云ひ立てで、抱へる人もあらう
かいな。
惣兵　それもある／＼。
たれ　さう云ふ口さへあれば、少々は給金なしでも、勤め
たうござりまする。
惣兵　寄合ひ辻番の炊出しにやりませう。
たれ　どうぞ聞いて下さりませい。
惣兵　こなさんは見た所が、按摩取りと見えるが、その頭
で奉公する氣かえ。
多門　左やうでござりまする。按摩は下手でござりまする
が、どうぞ女の肌を、たんと擦る所へやつて下さりませ

い。

惣兵　オツと、呑み込んだ。藪下の藥湯か、中條流の玄關番にやりませう。

皆々　どうぞよろしく、お賴み申しまする〳〵。

山路　ほんに、どれも〳〵むづかしい好みではあるわいなう。

ト通り神樂になり、花道より、因幡三郎、羽織袴大小にて、奴連れて出で來り、直ぐに本舞臺門口へ來り、三郎、奴に囁く。

奴　賴みませう。雀屋惣兵衛どのは、これでござりまするか。

惣兵　ハイ〳〵、雀屋惣兵衛は、此方でござりまする。

三郎　然らば許し召されい。

ト内へ入る。

惣兵　これはお侍ひ樣、どれからお出でなされまして、なんの御用でござりまする。

三郎　某は鎌倉腰越邊の屋敷より、望みの奉公人あつて、口入れを賴みに罷り越し申した。

惣兵　これは〳〵、ようこそお出でなされました。マアマア、あれへお出でなされませい。

三郎　ナニ、家來、まだ餘程手間もとれやう。其方は立歸つて、後程迎ひに參れ。

奴　畏まりましてござりまする。

三郎　早う參れ。

奴　ネイ。

ト奴、向うへ入る。三郎、舞臺の上へ通る。

惣兵　コレ娘、お茶を酌みやいの。

山路　ハイ〳〵。

ト茶を持つて來て

ようお出でなされました。お茶をおあがりなされませ。

三郎　イヤ〳〵、構はつしやるな〳〵。

惣兵　何か奉公人がお望みとござりまするが、御注文は、どのやうな事でござりまするぞ。

三郎　其方がこの家の亭主、雀屋惣兵衛か。

惣兵　左やうでござりまする。

三郎　口入れも數多あれども、聞き及んだ惣兵衛、其方が方より外には、存じ當りのない奉公人。召抱へたさに、わざ〳〵參つたが、あの者どもは。

惣兵　ハイ、あれは皆奉公人どもでござりまする。

三郎　此方に望む奉公人は、ちと仔細のあれば、あの者ど

もは遠ざけておくりやれ。
惣兵　畏まりましてござりまする……コレ、あなたに御内内の御用がある程に、こなた衆は皆、奥へ行つてござりませ。
團兵　そんなら、どうぞ御注文次第で、なんならわしをお頼み申しまする。
たれ　御内々の御注文なら、どうかわたしが心當りでござりませうぞえ。
多門　御亭主、よいやうお頼み申しまする。
惣兵　マア、奥へ行つて待つてござれ。
三人　サア／＼、皆ござりませ／＼。
ト團兵衞、お種、多門、暖簾口より奥へ入る。
惣兵　これに居りまするは、私しが娘、誰れに御遠慮はござりませぬに依つて、お手かけかお圍ひ者が、隨分御注文に合ふやうなを、お口入れ申しまするでござりませう、
山路　してマア、お望みの奉公人は、幾つ位な所がようござりまするえ。
三郎　年頃は十八九。
惣兵　器量のよいのが、お望みでござりませう。
三郎　如何にも、器量勝れて美しく、大名育ちの前髪立ち。
惣兵　ヘイ、そんならあなたのお好みは
山路　女中さんではござりませぬかえ。
三郎　イヽヤ、女ぢやない。詳しき望みはこの繪姿。
ト懐中より人相書を出し
これに引合ふ奉公人が抱へたい。
ト渡す。惣兵衞、山路、繪姿を見て
山路　ヤア、こりや千葉之助清春さまのお姿。
惣兵　これに合せた奉公人とわえ。
三郎　その注文に違ひない、奉公人がこの家にあるであらう程に、身が抱へて歸りたい。惣兵衞とやら、なんと、世話いたしてはくれまいか。
ト惣兵衞、思ひ入れあつて
惣兵　どうやら様子のありさうなお好み。此方にさへござりまするならば、成る程お世話申しませうが、此やうな奉公人は、ナウ娘。
山路　ソレイナア、心當りがござりませぬわいなア。
三郎　成る程、一通りでは口入れせぬも尤もさりながら、この家の聟小五郎兵衞と云ふは、初めは千葉家の下郎と聞く。その縁に引かれて、この家の內に、その奉公人が居るであらうが。

山路　してマア、この奉公人は、なんの爲にお抱へなされまするえ。
三郎　すりや、その樣子聞いた上で、奉公人を出す氣か。
惣兵　イエ〳〵、モシ、左やうぢやござりませぬ。例へ樣子を仰しやつてからが、其やうな奉公人に、心當りはござりませぬが、マア、あなた樣のお屋敷は、いづ方のどなた樣でござりまする。
三郎　その奉公人さへ差出せば、此方の屋敷も委細の樣子も、自然と知れ、その奉公人のお身の爲……サア、身の爲に惡いやうには取計らはぬ程に、安堵いたして奉公人の行くへ、サア、某に抱へさせておくりやれ。
山路　さう仰しやつても、どうもこの場で
三郎　奉公人は出されぬか。
惣兵　心當りがござりませねば
三郎　すりや、どうあつても、ないと云ふか。
惣兵　左やうでござりまする。
三郎　見聞を憚ればこそ、密かに抱へに參つた某。達て奉公人がないと云へば、奧へ踏ん込み、家探ししようか。
山路　モシ、それは。
三郎　但し、奉公人にして口入れするか。
惣兵　サア、それは。
三郎　サア〳〵〳〵。
ト惣兵衞、山路、思ひ入れ。
三郎　奧へ踏ん込み、一詮議。
ト行かうとする。山路、留めて
山路　待つたお侍ひ樣。
三郎　留めるは世話して奉公させるか。
山路　サア、心當りはなけれども、夫小五郎兵衞どのも留守と云ひ、お前に家探しさせましては。
惣兵　オヽ、さうぢや〳〵。なんぼわしが家でも、聟どのの留守に、家探しさせまする事はなりませぬぞ。
三郎　然らば小五郎兵衞が歸つた上。
惣兵　何事も相談づくで
三郎　奉公人も渡すとも
山路　家探しをさせまするとも
三郎　小五郎兵衞が戻るまで
惣兵　お待ちなされて下さりませい。
三郎　然らば奧の一間を塞げて
惣山　お侍ひ樣。
三郎　待つて居るぞよ。

ト唄になり、三郎、こなしあつて奥へ入る。この唄をかりて、花道より灘平、乞食の拵らへ、つゞれを着て菰を纏ひ、頬被りで出て來る。山路、惣兵衞、顔見合せ思ひ入れ。灘平、門口へ來て

灘平　下アりませう〱。

山路　父さん、爰へ乞食が來たわいなア。

惣兵　なんだ、乞食か。

ト見て

出たのがない。通れ〱。

灘平　ハイ、さう仰しやらずと、お剰りでもあるなら下さりませう。

山路　おまんま時ぢやなし、お剰りもない。通りや〱。

灘平　お剰りがなくば、一錢戴きたうござりまする。

惣兵　ハテ、しつこい乞食ぢや。氣の揉める事がある程に、早く通れ〱。

灘平　お前方は氣が揉めるかしらぬが、此方は腹が揉めて、ひだるくつてなりませぬ。どうぞさう云はずと、戴かせて下さりませう。

惣兵　アタしつこい。通れと云ふに通らぬか。

ト大きく云ふ。

灘平　オヽ、大きな聲だ。穴ばたへ片足踏ん込んで居ながら、慳貪な父さまだぞ。貰つて喰はにやアならぬ乞食だ。叱らずと、錢でも米でもお剰りでも、たつた一人でござりますワ。下アりませう。

惣兵　面倒な。通れ〱。

灘平　下アりませう〱。

トしつこく云ふ。山路、立つて

山路　ほんに聞分けのない乞食ではあるぞ。

ト掛け硯より小錢出して門口へ來て

ソレ、お錢を遣る程に、早う行きや〱。

ト出す。灘平、山路が手をチッと捉へる。山路、悧りして

オヽ怖。わしが手を握つたわいなア。コレ、放しやいの放しやいの。

ト嫌がる。灘平、山路が手を握りながら、門口の內へ入る。惣兵衞、悧りして灘平が手を挘ぎ放し

惣兵　ヤイ、このどう乞食めが。料簡して居りや附け上がりのした。コリヤ、何をひろぐのぢや。とつとゝ行き居らぬか。

山路　ほんに汚ない形してから、わしが手をチッと握つて

アタ嫌らしい。

ト手を拭き

早う行きや／＼。

灘平　なんぼそんなに行け／＼と云つても、わしやアどうも妾の内に居たうござりまする。どうも歸り憎うござります。

惣兵　此奴が、樣々な事を吐かし居る。なぜ妾の内が歸り憎いのぢや。

ト灘平、頰被りを取つて

灘平　親仁樣、お健でござりますか。

惣兵　ヤア、われは。

ト恟りして門口を閉める。

灘平　妹、大きくなつたなア。

山路　ほんにお前は。

ト驚ろく。

灘平　其方の兄の虎松ぢやわいの。

山路　ほんに、小さい時別れた兄さん。

灘平　久し振りで親の家、故郷へ歸るつゞれの錦。面目ない對面を致しまする。

ト惣兵衞、灘平が腕倉を取つて引寄せ

惣兵　エヽ、おのれはなア。心までは產みつけぬと、婆が死んだ時、おのれは十五、この妹はまだ十一。二人の子供を育てるうち、產れついておのれが惡黨、懲らしめの爲に勘當して追ひ出したら、それから皆暮れ行くへも知れず、この年になるまで、死んだ生きたの便りさへせぬ罰あなり。さう云ふ惡黨なおのれでも、追ひ出したその日より、どこにどうして居る事だと、親の心はこの年月、どれ程の案じぢやと思ひ居る。エヽ、おのれはなアおのれはなア。

トこなし。

山路　だん／＼父さんのお年は寄る、わたしが女子の手一つで、御介抱申して暮らすうちにも、お前の事は片時へんしも、お忘れなさる事はないぞえ。例へどのやうな形であらうと、血を分けた親の家、よく戻つて下さんしたなう。

虎松　イヤモウ、さう云つてくれるは嬉しい。親仁樣のお腹立ちも皆お道理。この身になつて、しみ／＼と親の恩と云ふ事を思ひ知つた。それまでの不孝を免して、せめて飯炊き同然になりと思うて、親の家に置いて下さるやうに、妹、親仁樣へよいやうに、詫び言してくれ。賴む

わいの〳〵。

ト泣く。

山路　お前がさう云はんせいでも、詫び言せいでわいなア。申し父さん、兄さんも親の恩を思ひ知らしやんしたであらう程に、モウ〳〵、堪忍して、内に置いて進ぜて下さんせいなア。

惣兵　イヤ〳〵、滅多に勘當は赦さぬぞ。

山路　久し振りで戻つてござんした兄さん、なぜ勘當が赦されぬとわえ。

惣兵　ハテ、おれぢやと云うて、眞實の悴、憎い事はなけれども、今に悪黨が直らねばこそ、コレ此やうなむさい様をし居つて、ねだり物同然に親の家へうせる奴。どうもおれは呑み込めぬ。聟の小五郎兵衛でも戻つた上で、相談してからの事。マア、勘當は赦さぬ〳〵。

山路　サア、小五郎兵衛どのには、わたしがよいやうに云ふわいなア。

惣兵　イヤ〳〵、聟の小五郎兵衛と談合せにやならぬ。

山路　ハテ、お前の子の虎松さんを、お前が勘當赦さんすに、小五郎兵衛どのぢやてゝ、なんと云はれませうぞいな。

灘平　妹、先刻から聟どのゝ、イヤ小五郎兵衛どのゝ云ふからは、そんなら其方は。

山路　アイ、男を持つたわいなア。

灘平　フウ、そんなら爰の内へ、入り聟が入つたか。

山路　小五郎兵衛どのと云うて、頼もしいお人ぢやわいなア。

ト灘平、こなしあつて、山路を引退け、惣兵衛が胸倉を取つて、ムツとこなし。山路、思ひ入れして

コレ、兄さん、何事ぢやぞいなア〳〵。

灘平　退いて居ろ……退いてうしやアがれ……コレ親仁どの。エ、親仁エヽ。

惣兵　ヤア。

ト思ひ入れ。

灘平　よく聞きやれよ。なんぼ勘當受けて追ひ出されても、こなたに男の子と云ふは、おればかりだワ。惣領の男の子を措いて、なぜ妹に聟を入れた。この家の後式は、釜の下の灰は愚か、膳棚の油虫まで、こりやみんなおれがもんだワ。そのおれに相談もせずに、誰れが指圖で妹に聟を入れたのだ。四も五も云はない。入り聟を叩き出して、おれを跡取りにしろ。サア、詞の甘いうちに、早

く聟を追ひ出してしまふか。親仁、返事をしやれな〳〵。
惣兵　イヤ、此奴が。おのれ、まだ根性が直らぬな。
灘平　知れた事だ。根性が直る位なら、こんな態ぢやァ居ないわえ。
惣兵　おのれがやうな無法者に、譯を云うて聞かしたとて、さつぱりとゆかぬ事ぢや。爰をマア放し居れ。
ト胸倉の手を振り放し
親子の差別もなんにも知らぬ、人にあらぬ非人乞食。犬の分けを喰ふ奴に、物云ふ事も何もない。サア娘、奥へ來い。
山路　マア、それでも。
惣兵　ハテ、構ふ事はない。奥へ來やれ。
山路　アイ。
ト行かうとする。灘平、引き留めて
灘平　待て。今の返事を聞かぬうちは、貧乏揺ぎもさせる事はならぬぞ。
惣兵　コリヤ、おのれは親をなんとする。
灘平　親もすさまじいわえ。おれが頼んで生れやアしまひし、うぬらが好きで産ませて置きやアがつて、何も恩に着せる事はない。後式を貰はぬうちは、親とも杭とも思はないワ。ガミ〳〵と頤骨を鳴らすと、殴りまげるぞ。
山路　コレイナ、お前も親に手向ひさしやんすと云ふ事があらうか。勿體ないと云ふ事を知らしやんせぬかいなア。
灘平　やかましい。すッ込んでうしやアがれ。サア、親仁、返事をしろ。
ト側にある下駄を振り上げて
サア、聟を追ひ出して、おれに後式を讓りやアがるか。返事の仕やうが惡いと、下駄の齒がお見舞ひ申すぞ。
惣兵　エヽ、おのれはなア〳〵。
ト思ひ入れ。
灘平　なんだ〳〵。サア、聟を追ひ出すか。しやツ額をぶち壞さうか。
山路　コレ、滅多な事をさしやんすな。
灘平　後式を渡すか。
惣兵　サア、それは。
灘平　藥罐頭を微塵にしようか。
山路　サア。
灘平　サア〳〵〳〵。エヽ、面倒な。
ト下駄でぶつてかゝる。山路、支へる。立廻り。通り

神樂になり、花道より浪平、木綿やつし羽織、一本差し、木綿のぱつち、雪駄にて出て來り、門口よりこの體を見て內へ入り、灘平が首筋を捉へ、見事に投げつける。山路、惣兵衞、これを見て

惣兵　オヽ、聟どの、よい所へ。

山路　小五郎兵衞どの、よう戾つて下さんしたなア。

灘平　オヽ、痛い〳〵。おれを爰へ投げ出したな。

ト浪平を見て

ヤア。

ト思ひ入れ。

浪平　どう乞食め。こりやア舅どのを、なんで手籠めにやアひろぐのだ。

灘平　おれを投げたは、うぬだな。

浪平　オヽ、おれだ。この家の入り聟小五郎兵衞だ。うぬはなんだ。

灘平　オヽ、おりやア、この家の惣領、虎松といふ御子息樣だ。

浪平　ナニ、爰の息子だ。

山路　アイ、わたしが眞實の兄さん。

惣兵　不所存ゆゑ勘當した、わしが悴でごんすわいの。

浪平　惣領どのゝ近づきにならうか。

灘平　妹聟の面を見覺えやうか。

ト兩人こなしあつて、顏見合せ、愕りして

浪平　ヤア、われは、

灘平　ヤア、わりやア。

浪平　在所の下郎灘平。

灘平　千葉の奴浪平。

浪平　そんならこの家の惣領と云ふは。

灘平　妹聟の小五郎兵衞と云ふは。

浪平　灘平。

灘平　浪平。

浪平　不思議な緣で

灘平　聟。

浪平　小舅。

兩人　味な出合ひであつたなア。

トこなし。

惣兵　フウ。そんなら二人は。

灘浪　近附きも近づき。下馬先仲間。

惣兵　ハテナア。

ト思ひ入れ。

灘平　何は兎もあれ、おらアこの家の惣領だ。聟どの、爰の内を出てもらはう。

浪平　昔は昔今は今、この家の花菜小五郎兵衛、勘當うけて乞食をひろぐ惣領どの、親が許さにや赤の他人。長居をすると爲にならぬ。足元の明るいうちに、早くこの家を出て行け。

灘平　イ、ヤ、出て行くまい。おれが歸つたからは、われを追ひ出して、この後式はおれが取る。われから早く出て行け。行きやうが遲いと、うぬが五體の骨々を、一本づゝ引き拔くぞよ。

浪平　首も手足も、胴に其まゝ附けて歸すは、緣者だけだ。片輪者にならないうちに、出てうしやアがれ。

灘平　イ、ヤ、われ出て行け。

浪平　ウヌ／＼すると摘み出すぞよ。

灘平　見事われが摘み出すか。

浪平　出して見せうワ。

灘平　イ、ヤ、われを。

兩人　なにを。

ト兩方思ひ入れ。惣兵衛、山路、心遣ひの思ひ入れ。通り神樂になり、花道より磯平、序幕の奴の形。葛籠を脊負ひて出る。この葛籠より櫻姫が振り袖出かゝり居る。舞臺には、浪平、灘平立廻り。磯平、本舞臺門口より内へ入り、この立廻りの中へ入る。浪平灘平、立廻りよろしく、磯平を眞中にして、浪平灘平兩方より磯平が胸倉を取り、三人顏見合せ、こなしあつて

浪平　ヤア、われは磯平か。

磯平　灘平浪平、何を爭ふのだ。

山路　マア、思ひがけもない。

浪平　おのしは爰へ何しに來た。

磯平　マア、おらアなんで來やうとも、おのし達二人も、なぜ爰へ來て爭ふのだ。

浪平　おらアこの家の入り聟だ。

灘平　おらアこの家の惣領だ。

磯平　アノ、おのし達が。

浪平　後式を貰ふ、遣るまいと云ふこの爭ひ。

灘平　緣も由緣もない磯平、何しに爰へ來たのだ。

磯平　おらア奉公稼ぎに。

兩人　なんと。

磯平　雀屋惣兵衛と云ふ、肝煎りを聞き及んで來た奉公人。相應な口があるなら、世話をして嵌めてくりやれ。

両人　そんならわれも北條家を。
磯平　お暇の出た奴の引越し。身代限り引ッ背負つて、奉公先を頼みに來た。
惣兵　マア、その葛籠をそこへ下ろして
山路　ゆるりと話したがよいわいなア。
磯平　ドレ、マア、重荷を下ろさうか。
ト葛籠を下ろす。正面の押入れより、清春、顔を出して様子を聞いて居る。灘平、葛籠から出て居る袖を見附け
灘平　この振り袖は。
ト磯平、悸りして袖の上へちやつと坐つて
磯平　イヤサ、袖振り合すも他生の縁。
ト浪平、思ひ入れあつて
浪平　口のあるまで、その葛籠も。
灘平　そんならこの家に。
ト見廻し、思はず清春と顔を見る。清春、押入れをパツタリ閉める。磯平、袖を葛籠へ押し込む。
さてこそ。
ト行かうとする。浪平、灘平を押へつけて
浪平　身動きすると為にするぞ。

灘平　こりやアそりや、逃げるが勝だ。
ト門口へ行かうとする。磯平立つて、門口を閉め
磯平　イヽヤ、おのしをやる事はならぬ。
灘平　ハテ、勘當のこの虎松、追ひ出すから出て行くのだ。
磯平　その勘當の詫び言は、おれがするワ。
灘平　それでも爰には。
浪平　敷居一寸でも踏み出すと、脳天から爪先まで、空竹割りだぞ。
灘平　でも、おれを追ひ出すぢやアないか。
惣兵　勘當赦した。
灘平　ヤア。
惣兵　伜虎松、勘當赦して元の親子。
山路　それ／＼、在所が家來の兄さんに、今のを見せては
サア、いま父さんに見放されては、矢ッ張り非人物貰ひ。勘當赦すと云はしやんすからは、マアどつこへも行かずと、内に居たがよいわいなア。
灘平　ハテ、味な事だな。
惣兵　マア、奥へ行て親子の杯。久し振りでしませうか。
灘平　ハテ、味な事だた。
山路　わたしも久し振りで、兄さんの杯を貰かうかいな

ア。

灘平　ハテ、味な事だな。

磯平　大事の息子だ。逃がさぬやうに。

浪平　親子三人、馳走さつしやれ。

灘平　ハテ、味な事だな。

惣兵　そんなら悴。

灘平　親仁どの。

山路　兄さん。

灘平　妹。

惣兵　奥へ来やれ。

ト唄になり、惣兵衛、山路、灘平を無理に引連れて暖簾口へ入る。あと合ひ方。

磯平　マア、思ひがけのない今の出合ひ。この家の内に、おのしやあの灘平と縁があるとは、夢にも知らなんだが、おのしも知つて居る通り、新清水の騒動から、お館へも歸られず……サア、この磯平、奉公の口を聞き出すまで、幸ひの身寄り……サア、身を寄せて居る心で来て見れば、聟の小五郎兵衛と云ふもおのしなら、かみさんとても退かない仲。當分一つに置いて、サア一つ家に居て、世話にならずばなりますまい。さう思うてもらひませう。

浪平　そりやアハヤ、兄弟同然にした奴の磯平。世話をしてもやらうが、おれも入り聟、盗人の暇はあれど、守り手の暇はないと、たつた一つの荷物でも、破れかゝつた葛籠の袖……サア、そでない所に身を寄せるは、危ないものであらうぞよ。

磯平　この身一つはどこをどう、さ迷つて歩かうが、天地の間に差支へはないが、身幅の狭い一張羅、破れ葛籠の目に洩れちやア、彼の盗人の暇が嫌だ。今チラと見たあの戸棚の、おのしが晴れ着と一つに置いたら、互ひに心も帯紐解いて、ゆつくり夜が寝られやう。ハテ、二人心を合せたら、盗人どもの手には乗るまいぞえ。

浪平　なんぼ二人が氣を附けても、小糠三合根が他人。二合半でも家の子に、見返られたらおのしより、この浪平が晴れ小袖に、袖になつちやア身の綻び。

磯平　そこを縫ふのは内儀の役。身に引ッかゝつた大事の小袖、綻びるのを見ても居まい。

浪平　とは思へどもそこが女、とつくり心を見ぬが程は。

磯平　辻褄合せる針手が利くか。

浪平　但し身頭へ針目が曲るか。

磯平　試しに縣け針撚り絲ながら

浪平　心を引くも一仕事。
磯平　先づそれまでは
浪平　葛籠の小袖も
磯平　戸棚の晴れ着も
浪平　兎角人目に隱し紅絹
磯平　裏表にも氣を付けて
浪平　心の合ひ紙。
磯平　胸に疊んで
浪平　しつかり押しを
兩人　落ちつかさうか。

ト唄になり、磯平、浪平、こなしあつて、暖簾口へ入る。あと合ひ方。奥より、山路、出てあたりを窺ひ、磯平が持つて出たる葛籠を明ける。内より、櫻姬、姬の形にて出て

櫻姬　ヤア、其方は山路。
山路　モシ。

ト思ひ入れあつて、また正面の戸棚を明けると、内より、清春、出て

清春　櫻姬どの。
櫻姬　清春さま、お懷かしうござりました。

ト取縋る。

清春　思ひがけない櫻姬どの、奉納の薄緣の太刀紛失より、日影の身となるこの清春。また逢ふ事のあるまいと思うたに、よう爰まで慕うて下されたなう。
櫻姬　不義の科ある自らゆゑ、館へとても歸られず、磯平が情にて、人目を忍ぶ葛籠の內。思ひがけなう爰へ來て、お目にかゝるも盡きせぬ緣と、お嬉しう存じますわいなア。
山路　お導きでござりまする。新清水の戻りより、荏柄の平太胤長が、姬君樣を奪ひ取らうと、大勢の追手を切り拔け、磯平どのがお供してより、わたし等までも散り／＼ばら／＼。夫浪平清春さまを、この家に匿まひ申すより、せめてま一度お二方に、積る話しもさせましたく、明暮れお行くへ探しましたに、今日思はずも磯平どの、爰へお連れ申したは、誠に御緣の盡きぬ時。浪平磯平二人して、お二人を匿まふからは、もうお氣遣ひはござりませぬわいな。
清春　世に便りなき我れ／＼に、斯くまで力になつてたもるは、忘れは置かぬ、嬉しいわいの。
櫻姬　例へ日影の身は愚か、針の莚に臥すとても、お前と

二人居たいが願ひ。お側にどうぞ居らるゝやうにしてたもいなら。

山路　思ひ思うたお二人様、御一緒に置きませいで、なんと致しませう。さりながら、清春さまは日影の御身。お姫様をば荏柄めが、付け廻して居りますれば、少しの間も人目を恐れて、どうぞ……オヽ、さうぢや、お二人ながら、あの戸棚の内へ。

櫻姫　わしが居ても大事ないかや。

山路　人の見ぬ間に少しも早う、積る思ひを、お話しなされませい。

ト櫻姫、清春、今さら恥かしきこなし。山路、二人を戸棚へ入れる。暖簾口より、團兵衛、出て

團兵　お内儀様。

山路　エヽ、恟りしたわいの。

團兵　お前は爰に、何をしてござりまする。

山路　サア、わしやあんまり酒に醉うたゆゑ、風に吹かれて居るわいの、

團兵　フム、お輕もどきをやんなさるか……ソシ、いま奧で親仁様が尋ねてござりまする。早く奧へござりませ。

山路　アノ、父さんがわたしを

團兵　呼んでござる程に、早うござりませ。

山路　サア、わしや爰にちつと。

團兵　ハテ、早うござりませう。

山路　エヽ、ほんに。

トこなしあつて、山路、下座へ入る。團兵衛、こなしあつて、戸棚を明けて、清春、櫻姫を引出す。

清櫻　ヤア、こりや、なんとする。

團兵　やかましい。聲立てるな。

ト兩手を押へ、手ばしこく繩をかけ、手拭にて猿轡を嵌め

うぬら二人が身の隱れ家、てつきりこの家と推量して、荏柄さまから云ひつけで、奉公人となつて入込んだこの團兵衛。清春は御太刀紛失の科人ゆゑ、表向きで捕へては二人ながら殺さにやアならぬ。櫻姫まで殺しちやア、胤長さま荏柄さまの戀が叶はぬ。コツソリと繩かけて、胤長さまへ渡し申すワ。二人ともに、うしやアがれ。

ト引立てようとする。奧にて、惣兵衛の聲する。これにて團兵衛、うろたへ、以前の葛籠へ櫻姫を隱し、幕明きからある葛籠を明けて、清春を入れる。惣兵衛出て

惣兵　ヤア、こなたは。
團兵　エヽ、こりやァ惣兵衞どのでござるか。
惣兵　爰に何をしてござるぞえ。
團兵　サア、わしは爰に……ナニサ、あんまり暑いに依つ
　て、風を入れて居ます。
惣兵　何を云はつしやるぞえ。この薄寒いに、奧へござれ。
團兵　サア、それでもちつと。
惣兵　ハテ、ござれいの。
團兵　アイ、行きまするわい。
　ト團兵衞、奧へ入る。惣兵衞、二つの葛籠を明けて、
　清春、櫻姫を出し、繩を解き、介抱する。
清春　其方は惣兵衞。
惣兵　娘や聟が大事の御主人、もう爰には置かれませぬ。
　私しがお供いたして、密かな所へお忍ばせ申しまする。
兩人　すりや、我れ〳〵を。
惣兵　サア、お出でなされませ。
　ト兩人を連れて花道の方へ行かうとする。揚げ幕にて
大藤　皆參れ。
捕手　ハツ。
　ト聲する。これにて惣兵衞こなしあつて、表の番小屋
　の錠を明けて、兩人を連れて、戸を締める。向うより
　大藤內、ぶッ裂き羽織、野袴、大小にて出る。捕り手
　大勢出る。これを見て、惣兵衞、內へ入る。大藤內、
　本舞臺門口へ來て
大藤　踏ん込め。
　ト皆々バラ〳〵と內へ入つて
　動くな。
　ト惣兵衞を取卷く。
惣兵　アヽ、申し〳〵、どなたかは存じませぬが、こりや
　マア、なんの事でござりまする。
　ト大藤內、內へ入つて呼子を吹く。下座より、團兵衞、
　出る。
團兵　合圖の呼子は成景さま。
大藤　石塚團兵衞、この家へ入込み、樣子を見たか、
團兵　この家の入り聟小五郎兵衞こそ、千葉之助清春が家
　來、浪平に相違ござりませぬ。
惣兵　ヤア、そんなら疾より。
　ト思ひ入れ。
大藤　イヤ惣兵衞、驚ろく事ぢやない。其方が聟小五郎兵
　衞に、用事あつて罷り越した。小五郎兵衞を早くこれへ

呼べ。
惣兵　ヘイ。
大藤　早う呼べ。
惣兵　畏まりました。聟どの〳〵、小五郎兵衞どの〳〵。
浪平　オイ〳〵、なんの用だな。
　ト奥より、浪平出る。これに山路付いて出る。この場の樣子を見て
山路　ヤア、これは。
　ト思ひ入れ。
浪平　この小五郎兵衞に御用とは、あなた方でござりまするか。
大藤　小五郎兵衞とは其方が事か。荏柄の平太胤長どのより、其方へ下し置かるゝ一品。家來ども、申しつけた品これへ。
皆々　ハッ。
　ト衣服上下大小、黃金千枚、白木の臺へ載せ、浪平が前へ並べる。
浪平　これは。
　ト思ひ入れ。惣兵衞、山路、不思議さうなこなし。
大藤　荏柄どの、其方を御懇望にて、下し置るゝその音物。
浪平　アノ、これをわたしに。
大藤　この家の入り聟小五郎兵衞こそ、千葉之助が下郎奴浪平と云ふ事、虛實を糺した上、召抱へくれよと、この大藤内成景へお賴み。さるに依つて石塚團兵衞を、奉公人と拵らへ入込ませ、其方が身分の詮議。
團兵　千葉家の下部、浪平に極まつたれば、即ち成景どののお出でを待ち、申し渡せしその音物。
大藤　その身の出世小五郎兵衞、早く頂戴いたせ。
浪平　有り難うござります、と申したいが、どうも合點がゆきませぬ。
山路　コレこちの人、荏柄さまから下されたその音物。滅多には戴かれまいぞえ。
惣兵　但し、それを貰ふ氣か。よもや貰ひはさつしやるまいの。
團兵　受納いたすか。
浪平　どうも直ぐには。
大藤　不得心か。
浪平　不得心ではござりませぬか。
大藤　不得心なら、ソリャ。
皆々　動くな。

ト皆々思ひ入れ。

浪平　コリヤ、聊爾なされまするな。如何にも音物、受けませう。

大藤　なんと。

浪平　千葉の家來のこの浪平、荏柄さまから遺恨こそありそうな所を、抱へようとの音物は、いづれ仔細がなけりやア叶はぬ。マア、その御用は、なんでござりまする。

大藤　奉公始めに、申しつける用事がある。

浪平　その御用は。

大藤　千葉之助淸春、北條の息女櫻姫、兩人とも當所へ入込みある由。其方に右兩人の詮議を申しつくる間、繩打つて胤長どのへ相渡せ。

浪平　すりや、この小五郎兵衞に、その詮議を。

大藤　了承の上は違背あるまい。當所の出口々々は人數を以て取圍んだれば、蟻の這ひ出る所もない。

團兵　荏柄さまへ奉公始め、兩人に繩打つて渡した上、手柄次第で立身出世。二心なく奉公いたせ。

浪平　イカサマ、この小五郎兵衞を、千葉の家來浪平と知て、千葉之助を搦めて出せとは、爰が思案の極め所。

トこなし。暖簾口より、磯平、出かゝり聞いて居る。

譜代相恩の家來と云ふでもなし、二合半の渡り奉公は、爰が氣散じ。成る程、淸春櫻姫、兩人ともに、引ッ括つてお渡し申しませう。

惣兵　ヤア、そんならアノ御兩所を。

浪平　詮議して繩かける。

山路　そりやアノ眞實。

浪平　牛に馬を乘り替へる、出世の蔓に取付いたぞ。

大藤　浪平出かした。

浪平　これから浪平が出世の小口、舅どのにやア撞木杖、女房どもにやア裲襠を着せるぞ。

山路　こりやモウ、云はにやアならぬわいの。

惣兵　これサ娘、默つて居や。如才のある聟どのぢやない、細工はりう／＼仕上げがあらうわいの。

ト山路を留める。山路もさうかと云ふ思ひ入れある。

大藤　して、淸春櫻姫が行くへは。

浪平　詮議するまでもない。この家の內に匿まつてござりまする。

大藤　さてこそ。

惣兵　ヤヽヽ。

ト恟りして、浪平が胸倉を取り

コレ聟どの、その筈ぢやアあるまいがな。
浪平　故主のよしみ今までは、この浪平が匿まひました。
惣兵　コレこなた、氣が狂うたか。それ云うてよいものかいなう。
浪平　やかましい。默つてござれ。
惣兵　イヤ、默つて居ますまい。
山路　コレ父さん、氣を揉ましやんすな。深い思案があらうわいなア。
浪平　深い思案も何にもいらない。たつた今、引摺り出して。
　ト立つ。山路、留めて
山路　コレ待つた。
浪平　エ、面倒な。退け。
　ト突き退けて
マア、清春をお渡し申さう。
　ト戸棚を明けて
ヤア、この内にやア居ないワ。
惣兵　さうありさうなものだ。
浪平　なんならこいつから。
　ト葛籠を明けようとする。磯平、出て
磯平　この中を見せる事はならない。
浪平　磯平、邪魔するな。退け
磯平　イヽヤ、見せる事はならない。
浪平　エ、面倒な。
　ト葛籠を引ッたくる。磯平、やるまいと立廻り。磯平、葛籠を舞臺へ抛り出し
ソレ、その内を。
磯平　ヤア、それを。
　ト寄るを、磯平隔てる。
團兵　この内を。
　トかゝる。山路、支へるを皆々押へる、この葛籠を明けて
皆々　ヤア、この内にも居ないぞよ。
惣兵　さうありさうなものだ。
　ト磯平、山路、安堵の思ひ入れ。
浪平　ハテ、合點がゆかぬわえ。そんなら又外に……さうだ。
　ト表へ駈け出す。
惣兵　コリヤ、聟どの、どこへ行く。
浪平　どこへ行くものだ。表の番小屋を詮議するワ。

惣兵　ヤア。
ト悧りして、浪平を支へ、番小屋の前へ立ち塞がつて
イヤ〳〵、この內には誰れも居ぬ。
浪平　居ぬでも猫でも見にやア置かぬワ。
惣兵　イヤ〳〵、これまでは默つて居たが、笄どの、こなたは慾に目がくれたな。
浪平　知れた事だ。退かつしやい。
ト引退ける。
惣兵　見せる事はならぬ。
ト爭ふ。浪平、番小屋の戶へ手をかけて明けろと、內より、淸春、櫻姬、顏を出す。
浪平　さてこそ爰に。
ト引出さうとする。磯平、駈け寄つて番家の戶を締め、戶口に立ち塞がつて見得。
磯平　また邪魔をするか。
山路　磯平どの、滅多に明けさせて下さりますな。
大藤　エ、素奴め。邪魔立てすると、うぬが身の上。
團兵　キリ〳〵そこを
皆々　退くまいか。
磯平　イ、ヤ、退かない。もう斯うなつちやア骨が舍利、五體が土になるまでも、この內を明けさせる事はならない。水よく船を浮めて、水また船を覆すと、浪平が逆らつても、この磯平が居るからは、指でもつけると容赦はない。片ッ端から毆り殺すぞ。
大藤　邪魔な奴め、其奴をやるな。
皆々　やらぬワ。
トかゝる。磯平、番小屋を小楯に取つて、捕り手を皆皆投げる。立廻りにて、しやとん留める。浪平、番小屋の錠を見付けて、戶口へ卸ろす。
磯平　これは。
浪平　斯うして置けば籠の鳥。
皆々　なんと。
浪平　いつ何時でも手に入れる囚人、荒立つちやア怪我の元。みんなデタパタ騷ぐな〳〵。
磯惣　エ、うぬ。
大藤　出かした浪平。天晴れの働らき。
團兵　して、兩人を受取る時刻は。
浪平　八聲の鷄を合圖にして、一先づ爰はお引きなされい。
大藤　すりや、鷄の啼くを合圖に、キッと兩人を相渡すな。
浪平　如何にも左樣。

團兵　でも、此まゝにして置いては。
　ト浪平、こなしあつて、手ばしこく惣兵衛と山路を縛る。
惣兵　こりや、我れ〳〵を、
山路　なんとしやんす。
磯平　親と女房を當座の人質。
山路　エ、。
　ト恨めしき思ひ入れ。
大藤　疑ひ晴れた。この上は石塚團兵衛は、手の者引具し、立歸つて合圖を待て。
團兵　して、成景さまは。
大藤　まだ浪平に尋ぬる仔細あれば、今宵は爰に一宿なす。早くお行きやれ。
團兵　心得てござる。皆參れ。
皆々　ハツ。
　ト團兵衛、捕り手連れ、皆々揚げ幕へ走り入る。
浪平　成景さまは人質を引立て、奥へござつて御酒一獻。
大藤　如何にも。浪平參れ。
山路　エ、思へば〳〵。
惣兵　人非人の浪平め。

浪平　やかましい。立てエ、。
　ト唄になり、大藤内、奥へ入る。浪平、惣兵衛、山路を引立て下座へ入る。磯平、殘り思案して
磯平　浪平めが今の様子、なんとも以て合點がゆかぬ。八聲の鷄まで詮議延べたは、心があつての事なるか。但しは誠に裏返つたか。何にもせよ、お二人をあの儘置いちやア事むづかしい。あの錠前を捻ぢ切つて。それ〳〵。
　トこなしあつて、下の番小屋の錠を捻ぢ切る思ひ入れ。ゴン〳〵になり、奥より、お種、行燈を灯して出る。灯影のさす思ひ入れにて、磯平、錠を捻ぢ切つて、番家の蔭へ身を隱す。暖簾口より、多門、出て
多門　お種どの〳〵。
たね　ヤア、お前は多門さん。
多門　わしや其方に、ちつと無心があるが、聞いては下さるまいか。
たね　ナニ、わたしに無心があるとかえ。
多門　サイノ、聞いて下さるか。
たね　マア、何なりと云はしやんせ。
多門　サア、その無心は。
たね　その無心は。

多門　どうも云ひ憎いわいの。

たれ　なんの云ひ憎い事があらう。二人が爰の家へ今日來合せたも深い緣。わたしが身に叶うた事なら、なんなりと聞いて上げませうわいなア。

多門　オヽ、嬉しいその志し、忘れは置きませぬ。

たれ　わたしもいつそ嬉しうて、身内がぞく／＼するわいなア。氣を揉ませずとその無心を、早う云うて聞かしやんせいなア。

多門　そんなら、思ひ切つて云ひませう。幸ひあたりに人もなし。

たれ　蒲團や枕はなくとも儘。

多門　もつと此方へ寄つて下されい。

たれ　斯うでござんすかえ。

ト嬉しさうに寄り添ふ。

多門　さうぢやわいなう。

たれ　さうして無心とはえ、

多門　サア、マア、この帶を解いて下されい。

たれ　わたしも斯うかえ。

多門　こなさんは解かいでも大事ないわいの。

たれ　さうして、どうぢやえ。

多門　どうも云ひ憎いが、背中の灸を掻いて下さい。

たれ　マア、阿房らしい。なんの事ぢやぞいの。

多門　そして、なんの無心ぢやと思はしやつた。

たれ　わしや又、抱かれて寐るのかと思うたわいの。

多門　そんなら抱かれて寐ようと云うたら

たれ　承知ぢやわいの。

多門　アノほんに。

たれ　オ、くど。

多門　そんなら爰は人目もあり

たれ　幸ひ表のあの番小家。

多門　帶紐解いてゆつくりと。

たれ　多門さん。

多門　お種どの。

たれ　サア、ござんせ。

ト手を引いて、門口へ來て、番小家の戸を明ける。と内より、淸春、櫻姫、駈けて出る。多門、お種、悄りして

多門　ヤア、あれは。

ト思ひ入れ。

たれ　いづくも戀の世ぢやなア。

ト番小家の戸を締める。清春、櫻姫、内へ入つて

清春　櫻姫どの、この清春こそ薄縁の太刀紛失の科人。所詮今宵中には縄目の恥。其方は磯平に誘はれて、何國へなりとも落ちのびて下されいなア。

櫻姫　イエ〳〵、自らこそ不義の惡名。面恥かしい身の上なれば、お前と一緒にどのやうな、縄目の恥もいとひはせぬ。なんぼうでもお側を放れはせぬわいなア。

ト思ひ入れ。後へ大藤内、出て

大藤　清春櫻姫、そこ動くな。

清春　ヤア、大藤内か。

大藤　虜となしたあの番小家、落ち失せようとは不屆きな奴。大藤内がふん縛る。動くな。

トかゝる。立廻り。兩人、危ふくなる。暖簾口より、浪平、出て、大藤内を一太刀切る。大藤内、倒れる。

清櫻　ヤア、浪平か。

大藤　この大藤内を騙し討か。

浪平　やかましい。默つてくたばれ。

ト引廻して抉る。ドロ〳〵にて、鷄の聲する。花道にても聲する。門口へ磯平出る。

磯平　ハテ、心得ぬ。いま大藤内を手にかけしに、怪しからぬ鷄の夜啼き。

清春　一鷄啼けば萬鷄謳ふと、啼き連れたるこの場の有樣。

彦平　ナニサマ、仔細のあるべき事。ハテ、合點がゆかぬわえ。

清春　オヽ、さうぢや。いつぞや紛失の薄縁の太刀、彼の劍の不思議には、刀劍に血汐を注げば、鷄の聲あつて鬨をつくると聞く。

磯平　いま浪平の一腰が、大藤内が血汐に染みれば、鷄の聲を發せしからは

清春　正しくそれこそ薄縁の太刀。

浪平　ナニ、この一腰が。

ト思ひ入れ。清春、その一腰を改め見て

清春　誠にこれこそ紛ふ方なき

磯平　薄縁の太刀でござりまするか。

ト内に入る。

浪平　すりや、これが御太刀でござりまするか。

清春　この太刀を盗み取り、千葉の家を滅亡させしは、さては浪平、汝の仕業か。

浪平　エヽ。

磯平　主人の難儀を餘所に見て、今まで包み隱したか。

清春　家の敵、この身の仇。
兩人　浪平覺悟。
浪平　コレ待つた。必らず聊爾なされまするな。
兩人　イヤ、卑怯な事を。
浪平　イヤ、卑怯でない、申し譯仕る。
兩人　何がなんと。
浪平　これで仔細が解りました。磯平も一通り、申し譯を聞いてくりやれ。いつぞや鎌倉新清水で、一杯過した酒機嫌、取忘れた奴が差し料。ウソ／＼尋ねる櫻影、荏柄の平太この脇差を、この浪平に無理所望。四の五の云はず引ツたくつて戻りしが、今思へば胤長めが、この御太刀を盜み取り、隱し所のない儘に、忘れて置いた奴が脇差、中入れ替へたに極まつたが、神ならぬ身の悲しさは、今日の今まで二分三百の、がた／＼丸と思つて居たは、この身の愚鈍。疾にもさうと氣が付いたら、お家の沒落見て居りませうか。最前胤長に抱へられ、裏返つたやうに見せたは、それを功に荏柄が方へ入込んで、御太刀の詮議いたさん計略。あつちの思案もこの太刀が、欲しさに思へば先刻の進物。いま大藤内が血汐にて、鷄の聲と共に、名劍の奇瑞顯はれ、悧り明かすこの身の上。全く以てそれとは知らぬ、申し譯は斯くの通り。この上にも御不審あらば、浪平めが命一つ、お旦那の御存分に、お手にかけられ下さりませう。
清春　段々の樣子を聞けば、疑ひは晴れたれども
磯平　本心見るまで、合點がゆかぬ。

ト奧より

三郎　薄緣の太刀の在所知れたれば、清春さまは、お家へお供いたしませう。

ト出る。

清春　ヤア、其方は因幡三郎。いつより爰へは。
三郎　ハツ。この家にお忍びあらんと存じ、餘所ながらお行くへ詮議。御安全の體を拜し、大慶至極に存じまする。
浪平　この名劍を差上げますれば、清春さまには裏道傳ひ、一刻も早く鎌倉へ。
三郎　拙者めがお供いたすでござらう。
櫻姬　すりや又、これからお別れ申すのかいなう。
磯平　暫しがうちは人目の恐れ。
清春　やがてめでたう迎ひの輿。
櫻姬　ちやと云うてマア。

ト悲しき思ひ入れ。向うより、團兵衞、捕り手引連れ、出て來り、本舞臺、門口へ來て

團兵　鷄の聲を合圖、囚人を受取らう。

トこれにて、皆々恟りして、浪平、行燈の灯を吹き消す。磯平、櫻姫を慌てゝ葛籠へ入れ、三郎は大藤内が死骸を今一つの葛籠へ入れる。浪平、門口の方へ來る。

浪平　團兵衞さまか。

團兵　小五郎兵衞、約束の兩人は。

浪平　その番小家にしつかりと。

皆々　合點だ。

ト番小家の戸を蹴放す。内より、多門、お種、出る。

團兵　動くな。

ト頭を探つて見て頷き、兩人とも縛る。兩人、聲立てようとする。團兵衞、猿轡を嵌めて

小五郎兵衞、出かした。囚人慥かに受取つた……引立てい。

皆々　ハツ。

ト多門、お種を引立て、向う揚げ幕へ入る。此うち、囁き合つて舞臺の皆々奥へ入る。浪平、表の足音に心を付けて、こなしあつて、下座へ入る。捨て鐘になり、

奥より、灘平、探つて出て、櫻姫を入れたる葛籠を脊負つて、門口の方へ行く。山路、これを付けて居る。磯平、暖簾口より、探りながら出て、大藤内が死骸を入れたる葛籠を間違ひにて脊負ふ。これを惣兵衞付いて出て、兩方同じやうに引留める。立廻りよろしく、灘平、山路をちよつと當て、葛籠を脊負つて向うへ入る。磯平、門口へ出ようとする。山路、心付き、立ち塞がる。磯平、後へ出る。惣兵衞、捉へる。立廻りすべてよろしく、磯平、眞中に立ち、山路、惣兵衞、兩方より磯平引留める。向うより、團兵衞、捕り手、弓張り提灯灯し、駈けて出て

團兵　衞へ玉を摑んだ腹癒せ。家内殘らずふん縛れ。

捕手　合點だ。捕つた〳〵。

ト内へ駈け込む。この提灯にて、三人顏見合せ

惣平　磯平どのか。

皆々　動くな。

山路　姫君様は。

磯平　氣遣ひない。この葛籠に。

團兵　ナニ、その葛籠が櫻姫。

皆々　やらぬ。

トかゝる。立廻りにて、葛籠を引き下ろす。磯平、それはと寄る。捕り手支へる。團兵衛、葛籠を明けて

團兵　ヤア、こりや大藤内が死骸。

磯平　なんと。

團兵　すりや、成景どのを手にかけたな。

ト思ひ入れ。浪平、飛んで出て、團兵衛を捉へて投げる。

磯平　浪平か。

捕手　浪平、捕つた。

ト浪平を取卷く。

浪平　すりや、姫君は。

山路　たつた今、兄さんがその葛籠を。

磯平　南無三。

ト追ひかけて行かうとする。

團兵　やらぬワ。

トかゝる。磯平、團兵衛を摑んで内へ抛る。山路、惣兵衛、この上を押へる。

皆々　動くな。

ト皆々取卷く。

浪平　合點だ。

ト磯平、門口にて、尻を端折る。浪平は刀を擔いで見得。よろしく　ひやうし幕

大詰

金澤葭原の場
六浦庵室の場

役名――奴、磯平。雀屋惣兵衛。稚兒、妙喜丸。同、妙壽丸。奴、灘平。北條息女、櫻姫。清玄法師。

本舞臺、三間の間、一面に葭原の道具。向う黒幕、下の方に榜示杭。右金澤道左六浦道と書いてあり、爰に灘平、中幕の葛籠を背負つて立つて居る。磯平、中幕の形にて、葛籠に手をかけて引留め居る。捕り手大勢、後に取卷いて居る。禪のツトメ、時の鐘、蛙の聲にて幕明く。

皆々　動くな。

磯平　動けと云つても動きやアしない。この磯平が身にも替へない大事の葛籠。暗がり紛れに持つて駈け出す灘平

を、韋駄天走りに追つて來たは、その葛籠を尋常に、磯平に渡せ。

灘平　エ、、磯平め。われが大事にかけるこの葛籠は、荏柄の平太胤長さまが御懇望。この灘平が荏柄さまへ差上げるワ。葛籠が欲しくば中身をば、胤長さまへ上げた上で、葛籠ばかりは返してくれべい。マアそれまでこの葛籠は、おれに預けてかッ走れ。

磯平　どいつどなたのお望みでも、やる事はならぬ。葛籠を渡せ。

灘平　ならぬワ。退け。

磯平　渡せ。

灘平　面倒な。ソレ。

皆々　やらぬワ。

磯平　合點だ。

ト禪のツトメにて、皆々を相手に立廻り。灘平、葛籠を擔いで、この間に逃げうとする。磯平、引き戻す。捕り手支へる。立廻り烈しく、灘平擔いで居る葛籠を引きおろし、磯平、切り立てる。灘平、木隱れする。此うち向うより惣兵衛、中幕の形、肌を脱ぎ、鉢卷して、六尺棒を持つて、駈けて出て來る。磯平、皆々を下座へ追ひ込む。灘平、取つて返し、この葛籠をまた脊負はうとする。惣兵衛、これを見て

惣兵　虎松めぢやな。

灘平　親仁どのか。

惣兵　その葛籠はやらぬぞ。

灘平　エ、、イケ邪魔な。

ト惣兵衛を突き倒し、葛籠を脊負はうとする。磯平、駈けて出て、灘平を摑んで投げる。惣兵衛、磯平を見て

惣兵　磯平どのか。

灘平　觀念。

ト磯平に切つてかゝるを立廻り。

惣兵　マア、この葛籠を。

ト惣兵衛、葛籠を脊負ふ。灘平、磯平に切りかゝる。この手を捻ぢ上げ

爰構はずとその葛籠、六浦の方へ、早く〳〵。

磯平　合點だ。

ト惣兵衛、葛籠を脊負ひ行かうとする。下座より捕り手取つて返し、惣兵衛を支へる。磯平、捕り手を切りまくる。灘平、惣兵衛へかゝる。磯平、引き留めて

磯平　早く〳〵。

惣兵　合點ぢや〳〵。

ト惣兵衛、葛籠を脊負うて、揚げ幕へ駈けて入る。あと立廻り。捕り手皆々花道へ逃げ込む。磯平、追ひかける。後より灘平、切りかける。磯平、立廻りにて、灘平、榜示杭の方へ寄る。磯平、灘平をポンと切る。仕掛けにて灘平が首、榜示杭の上に乘る。磯平、これを見て脇差の血を拭く。拍子幕。
幕の内禪のツトメにて、直ぐに引返す。

本舞臺、三間の間、眞中に九尺の庵室。皮附きの栗丸太にて仕立て、大和葺きの軒を見せ、正面は伊豫簾。左右は萩と葭にて仕立てたる鐵砲垣。これに山吹大分咲き亂れて居る。この垣の内に木燈籠を遠く見せ、奥深く一面に皮附きの矢竹の植込み。庵の後は黒幕。上の柱、枝垂れ柳、花道の付け際に枝折り戸。東の上へ寄せて、布張りの池。人の入る事あり岸に寄せて地籠を伏せ、これにも山吹咲いて居る。すべて綺麗に仕立てたる庵室。詳しく誂らへあり、爰に妙喜丸、妙壽丸、序幕の稚子の形。妙壽丸、中啓にて差し金の鶯を追うて居る。妙喜丸、中啓にてこれを制して居る。蛙の聲折り〳〵、琴唄にて幕明く。

妙喜　コレ〳〵妙壽丸、なぜ殺生をしやるぞいなう。

妙壽　和尙樣のお目が覺めやうと思ふゆゑ、鶯を追うてやるわいなう。

妙喜　其やうた惡さをせずと、和尙樣へお藥を上げやいなう。

妙壽　それでも鶯が憎いわいなう。
ト簾の内にて

淸玄　子供ども、何を爭ふのおやや。
ト唄になり、簾上がる。淸玄、病中の拵らへにて、蒲團をぐる〳〵と卷き、これに寄りかゝり、寢茣蓙を敷いて居る。後に反古張りの紙帳三方吊つてある。妙壽丸、妙喜丸庵の内へ入り、七輪の藥鍋より銀の茶碗へ藥を注ぐ。妙壽丸、臺へ乘せ、淸玄の側へ出して

妙壽　お藥を上がりませ。

淸玄　イヤ〳〵、藥も服むまいッ欲しうない。

妙嬉　日にましお顏のやつれを見るにつけ、悲しうござりまするわいなう。

清玄　成る程。
　ト服んで
　これでよいか。
兩人　嬉しうござりまするわいなう。
清玄　山もとの霞がくれに鶯の、啼く音はいつも變らねど、新清水にありし時は、身には九條の袈裟を纒ひ、手には珠玉を放さず、朝に閼伽の水を浴み、夕に眞如の明月も、今は軒漏る片廂。六浦の奥の草の庵。數多の稚兒もある中に、かゝる山家の果までも、この清玄に給仕なすは、阿羅々伽羅々の兩仙に仕へし、悉達太子の昔に似たる二人の者。また頑是なき子供まで、かゝる情は知るものを、情を知らぬ人心。忘れんとすれど忘られず、戀しい床しい逢ひたいが、積り積りてこの病。こなたゆゑに清玄は、明日をも知らぬわくらはの、焦るゝ身には引替へて、雨に色ます櫻姫。せめて息あるうちに、顏などに見せて下されいなう。
妙嬉　申し和尚樣、櫻姫が事を、どうぞ思ひ切つて下されませいなう。
兩人　下されませいなう。
清玄　かゝる山家の奥までも、この清玄に付き添ひて、よく介抱してくれる、其方達が賴み。外の事なら何なりと詞は悖くまいが、櫻姫が事ばかりは、思ひ切られぬと云ふは、これを見てたも。
　ト序幕の片袖を懷中より出す。
兩人　その袖は。
清玄　今日が日までも其方衆に隱し、肌身離さぬこの片袖は、いつぞや新清水にて、我が手に殘りしこの片袖。つれなき人の形見とも、これを見る度いやまさる、思ひの炎は胸を焦す。今は仇なれこれなくばと、幾度も思ひ返せども、捨てもやられぬ因果の道理。戀しい床しい櫻姫に、逢ふ心にて、肌身に添へて寐るわいなう。
妙嬉　そんならどのやうに云うても
妙壽　思ひ切る事はなりませぬか。
　ト清玄、かぶり振る。
妙嬉　妙壽丸、兼ねて云ひ合せて置いた通り
妙壽　妙喜丸、早う／＼。
　ト兩人、池の緣へ駈けより合掌して
兩人　和尚樣、西方淨土で待つて居りますぞ。南無阿彌陀佛。
　ト兩人、池へ身を投げる。清玄、驚ろき、庵室の内よりよろぼひながら、池の緣へ這ひ寄り

清玄　二人とも、早まつた事してくれたなア。云うて返らぬ事ながら、この清玄も七つの年、兩親にさらぬ別れの菩提の爲、出家堅固の清僧も、日頃の功も空しく消えて墮落の罪。今また二人が非業の死は、罪に罪を重ねし清玄。五逆の罪もこれには過ぎじ。かゝる重罪の我れを人と思ひ、出家させて下されませい、知識になされて下されませいと、頼まれし親達に向ひ、墮落の罪を意見せしが、二人が諫めを用ひぬゆゑ、先づ斯く〳〵の非業の死と、これがあらはにどう云はれう。どう云ひ譯がならうぞいなう。

ト袖を取つて

それも誰れゆゑ、こなたゆゑ。二人の子供が非業の死も、この清玄が大病も、こなたの心一つから。露ほどの情もあつたなら、子供は死にはせませぬわいなう……わしも大病の上に、かゝるみじめを見ては、モウ〳〵生きては居られぬ。死にます〳〵。一人ならず二人三人、死にますわいなう〳〵。

ト袖を抱きしめて泣き落す。向う揚げ幕の内にて、バタ〳〵の音する。惣兵衛、中幕の形、葛籠を脊負うて、竹の子笠を提げて、走つて出て來り、門口の外にて

惣兵　お頼み申しまする〳〵。

トこれにて清玄、袖を懷へ納め、やう〳〵起き上がる。

ト惣兵衛、內へ入り

お頼み申しまする〳〵。

ト清玄をよく〳〵見て

見れば、病みほうけたる御出家樣。ムウ、この庵室はお前の宿りでござりまするな。

ト清玄、合點々々する。

ヤレ〳〵、おいとしや。所は六浦の山中の庵室。ちよつと見てさへ大病と思はるゝに、誰れ一人側にあつて、看護の仕手もないと云ふ。如何に御出家ぢやとていとしい事。來合はせたこそ幸ひ。

ト葛籠を下ろし、清玄が脊中を擦り、手足を探つて

アヽ、きつい熱だ。こりや大方熱に浮かされて、水でも飮みに出たのであらうて。わしが肩にかゝつて、あの蒲團の上へござりませ。危なうござりまするぞ。危ない〳〵。靜かに〳〵。

ト清玄を介抱して、庵室の蒲團の上に乘せ、七輪を持ち出し、藥鍋を取つて見て

藥も冷たい筈。火の氣が一つもない……モシ、火打ち箱

はどこにごんすぞ。
ト默つて居る。あたりを見廻し
オツと、あるぞ／＼。
ト火を打ちつけ、萩垣をむしつて來て、七輪へくべる
燃える仕掛け。
オヽコレ、炭が二つ三つ欲しいが
トあたりを見て
オヽ、あるぞ／＼。
ト藤蔓の炭取を見附け、七輪へ炭をくべて、澁團扇で
煽ぎながら
なんぼ御出家ぢやと云うて、これ程の大病に、兄弟か伯父か伯母か從兄弟はとこ。店請けが一人か半分は、側に付いて居さうなものだに。サア／＼、藥が溫たまつた。
ト茶碗へ明け、清玄が手へ持たせ
サア／＼、藥でごんす。否でも服ましやれ／＼。
ト清玄、服むまいと云ふ思ひ入れ。惣兵衛、自分の手で無理に服ませる。手拭にて襟の廻りを拭きながら
サヽ、勿體ない／＼。時に御出家樣、あの葛籠をちつとの間、妾に置いて下さりませい。何にも案じるものではない。追ツつけおれが取りに來るか、奴どのが取りに來るかしませう。アヽ、妾も氣の毒、先も氣遣ひ。ならうならわしが引返して來て、腰でも擦つて進ぜませう。そんなら賴みましたぞ。
ト葛籠を緣側へ乘せて
ドレ、一走り行つて來うか。
ト門口へ來て、最前持つて來た竹の子笠を門口へ掛けて
この笠を目印に。これでよい／＼。
ト向うへ走つて入る。時の捨て鐘、始終蛙の聲、見合せあるべし。
清玄　葛籠一つ賴みたいとて、心ある人は、懇ろにしてくれるにつけても、思ひ出すは櫻姬。
ト袖を出し、葛籠へ引ッかけて
コレ櫻姬、よう物を辨まへて下されい。出家堅固の清玄に、不義の相手となつてくれいと、餘儀ない賴み。否と云はゞ其方の身の上。命を助け進ぜたいゆゑ、得心したが煩惱の初め。殊更母の乳房を放れてより、女子の肌と云ふものは、これ程も手に觸つた事もない我れに、ありとあられぬ物の云ひやう。名僧智識と呼ばれたる、清玄ぢやとて木竹でもないものを、惚れまいものか、惚れた

が無理ではござるまいわいなう。コレ、櫻姫どの、物を云うて下されい〳〵。餘所目に見なば、狂氣とも思はんが、反魂香を焚き給ひし、漢の武帝の例しもあれば、戀しい床しいと思ひ詰めたる、清玄が心が屆いたら、なぜ物云うては下されぬぞ……そんならこれ程までに焦れやつれて、戀しいと思ひ詰めたるこの心が、思ふ一夜は屆かぬが、戀の慣ひでござるかいなう。物云ふ事がならずば、せめて夢にでも現にでも、顏でも見せて下されいなう……これ程に戀ひ慕ふとは露知らず、今頃は清春と祝言して、連理の床に添ひ寢して、千代もと契つて居るであらうなア。アヽ、清春は羨やましい。如何なれば清玄は、斯くまで思ひ煩らうても、ま一度顏見る事さへならぬと云ふは、此まゝ死ぬとの佛の敎へか。戀に朽ちなん名こそ惜しけれ。櫻姫どの、ならう事なら清玄が、息あるうちに今一度、どうぞ顏見せて下されいなう。

ト大泣き。葛籠動く。清玄、愕りして飛び退く。葛籠いよ〳〵動く。こなしあつて

ハテ心得ぬ。この葛籠の頻りに動くは、さては戀しい床しい懷かしいと、思ひ込んだる我が魂ひ、片袖に止まりて、迷ひに引かれて動搖するか。但しは又、病みほうけたる我が心を奪はん爲に、狐狸妖怪のなす業か。愚かや例へ墮落に陷るとも、多年積德空しからず、狐狼野干の如きに誑かされんや。何にもせい、怪しき葛籠の動搖ぢやよなア。

トこの葛籠を見詰め思ひ入れ。內にて櫻姫、ハッと叫ぶ。葛籠は緣より下へこけ落ちる。

葛籠の內にて今、叫びしは女子の聲。心の迷ひか知らねども、忘れもやらぬ櫻姫が物ごしと、身に沁み渡つて聞えしは、何にもせよこの葛籠。

ト緣の上へ寄り、葛籠の紐を解く。櫻姫、出る。

櫻姫　清玄さま、マア、爰放して下さりませ。お放しなされて下さりませ〳〵。

清玄　イヽヤ、放さぬ〳〵。其方ゆゑに清玄は、コレ、この形になりましたわいの。新清水で思はずも、氣を失なうたこなたの介抱。始めて女の肌に觸つて、その床しさ美はしさ、どうも思ひ忘られず、焦れ暮らした辛い月日。果敢ない命のあればこそ、不思議に逢うたも佛の導き。深うは云はぬ、たつた一度、抱いて寐て下されい。コレ情をかけて下されいなう。

櫻姫　サア〳〵、それ程思うて下さりまする、お志しは

嬉しけれども、そのお返事は
清玄　なりませぬか。
櫻姫　お免しなされて下さりませ〳〵。
清玄　そりや胴慾な櫻姫。情の下に人は住む。叶へて下さ
れ只一度。抱いて寐てくれたとて罪にもなるまい。報い
もあるまい。三恒河沙の諸佛には見放されても、其方の
情で清玄は浮むわいなう。櫻姫、浮まして下されい下さ
れい。
櫻姫　サア〳〵、そのお詞を聞分けぬではなけれども、清
春さまと二世までも、云ひ交したこの身の上。とてもこ
の世でお心に從ふ事はなりませぬ。慈悲ぢや情ぢや、清
玄さま。思ひ切つて下さりませ。拜みます〳〵。
清玄　アヽ、勿體ない。コレ、拜むわいの〳〵。
櫻姫　エヽ、この磯平は來やらぬか。何をして居やるやら
早う來てたもらいで。磯平なう〳〵。
清玄　イヽヤ、邪魔の入らぬうち、サア、この辻堂へ。
櫻姫　エヽ、。
清玄　たつた一度、拜みます〳〵。
櫻姫　アレエ〳〵。
ト櫻姫を付け廻す。いろ〳〵ある所へ、向うより磯平
走つて出て本舞臺へ來り、門口の竹笠を見て
磯平　目印のこの竹笠。
ト内へ入り、この體を見て、清玄を引き退け、櫻姫を
圍ふ。
櫻姫　清玄さまの住家ぢやわいなう。
磯平　それとも知らずこの葛籠を。ホイ。
櫻姫　コレ磯平、清玄さまの眞實に、思ひ切つて下されま
するやうに、お詫び申してたもいなう〳〵。
ト磯平、清玄を引きつけ
磯平　ヤア、見下げ果てた心だなう。大俗凡夫に劣つた魂
ひ。新清水の住持職、智識と云はれたこれが形か。恥も
恥辱も辨まへぬ、その根性へ理解を解いても、かつたい
に棒打ち、坊主と思つて容赦する。思ひ切らつしやい思
ひ切らつしやい。詞やさしいうち思ひ切らにやア、和尚
樣とは云はしませぬぞよ。
ト反りを打つ。
櫻姫　アヽ、コレ、滅多な事してたもんなや。
ト留める。
清玄　殺さば殺せ、命を捨てゝも思ひ切らぬ。
磯平　なんと。

清玄　假にも姫の戀人と、人の難儀を身に引請け、この身になつたが今は嬉しい。愛執の煙り目に入つて、戀路に迷ふ胸の火を、助けてくれ磯平、救うてくれ磯平、姫の得心のするやうに、どうぞ仲立ちしてくれやい。

磯平　エ、、ほてくろしい世迷ひ言。道ならぬ横戀慕、姫何程云つても叶はぬ〳〵。

清玄　道ならぬとは理に當らぬ。横戀慕とは、云はさぬ云はさぬ。

磯平　ヤア、破戒墮落の身を以て、横戀慕ではあるまいか。

清玄　サ、その破戒は誰れが業。墮落したは何ゆゑぢや。清玄を櫻姫が、戀の相手と云うたではないか。

磯平　ヤア。

清玄　サ、その一言が惡緣の、絆に引かるゝ戀慕の闇。聞分けぬこそ胴慾とも、道ならぬとも云ふべきぞ。思ひ切るにも切られぬ迷ひ。不便と思うてくれいやい。

ト大泣き。磯平、思案して

磯平　ア、、イカサマ、思ひ切れとは云ふもの、、清玄さま、尤もだ。お道理だ。いつぞや新清水での御難儀を、お救ひなされた義理と云ひ、お禮申さにやならぬ仕儀。それさへあるに新清水を、退院させ申したには、みな此方の身の誤まり。せめてはそれ程慕はるゝ、思ひをどうぞ晴らさせて

ト清玄、嬉しき思ひ入れ。

進ぜたいものながら、櫻姫さまのお身の上。包み隱す大事なれど、斯うなるからは是非に及ばぬ。清春さまより余の方へ、身を任されぬと云ふ云ひ譯。姫君樣、その一品、清玄さまにお見せなされませい。

ト櫻姫、こなしあつて

櫻姫　成る程さうぢや。磯平、よう氣が附いた。義理に義理ある清玄さま。お心に從はぬ無得心。胴慾とお恨みなさるが悲しさに、そんならこれを。

ト掛けて居る守り袋を磯平に渡し

磯平、お目にかけて云ひ譯してたもいなう。

ト磯平、守り袋より書付けを出し、清玄が前へ廣げる。清玄はこれにも構はず、ウツトリと櫻姫が方を見詰めて居る。

磯平　これこそ鎌倉の大政所、政子御前の御直筆。誠 櫻姫さまは、北條の娘ならず、賴朝公の御落胤。

清玄　ヤ、。なんと。

ト思ひ入れ。

磯平　御譜代外樣の武士は愚か、何方へ御緣あつても、生さぬ仲の義理あれば、政子御前の操立たず、千葉之助淸春さまこそ、御連枝たる九郎判官義經公のお血筋。聟君にして不足なし。幸ひ姬のお內と御緣もあれば、行く行くは千葉家へ嫁入りさせ申せと、伊豆の國にてお化粧料三百丁の地を添へて、下し賜はるその墨付。さればこそ姬君の、お身を穢させ申しては、政子御前さままでのお恥辱。淸春さまより外に、身を任されぬはこの譯ゆゑ。爰の道理を聞分けて、所詮叶はぬ戀と諦らめ、思ひ切つて下されませい。

櫻姬　つれなう云ふもその譯ゆゑ。この身でこの身の儘ならぬ、道理を汲み分け、必らずお恨みなされて下さりまするな。

磯平　サア、この墨付を見た上は、今の思ひを飜へして

櫻姬　誠の智識になつてたべ。

磯平　本心になつて下さりませ。

兩人　淸玄さま。

ト淸玄、この書き物を取上げ、默つて見詰めて思ひ入れ。

磯平　返答なきは、聞分けて下さるか……思ひ切つてしまはつしやりませ。

淸玄　すりや、櫻姬どのは、賴朝公のお胤ゆゑ。

櫻姬　外へ肌身は穢されぬわいなア。

ト淸玄、溜息をつき

淸玄　この墨付を見る上は、所詮叶はぬ我が戀路。櫻姬どのゝ事さつぱりと

磯平　思ひ切つて下さりまするか。

淸玄　思ひ切らんとは思へども、惡趣に引かるゝ輪廻の絆。どうも思ひ切られぬわいなう。

トこなし。思はずこの墨付を引裂く。

櫻姬　ヤ、、大切な墨付を。

磯平　引裂いてしまうたか。

ト驚ろく。淸玄、氣が附き、三人こなしあつて

三人　オ、、、。

ト思ひ入れ。磯平、氣色を變へて

磯平　あの墨付を失うては、姬君樣のお身の上。

櫻姬　淸春さまに添ふ事も叶はぬかいの。ハア、、。

ト大泣き。

淸玄　淸春との緣が切れたら、淸玄が願ひを叶へて下されい。

磯平　ト櫻姫に取りつく。磯平、引き退けろ。また取りつく。
もう、是非に及ばぬ。
ト引拔いて清玄を一太刀切る。櫻姫、驚ろき顫ふ。清玄、苦しみながら、櫻姫に取りつくゆゑ、磯平、また切る。清玄、苦しみ、舞臺を轉げる。櫻姫、上の方へ逃げる。清玄、よろぼひながら櫻姫を捉へようとする。磯平、滅多に切りつける。ゴン／＼になる。これにて清玄、上の柳の木を廻る。この時、吹替へにて出る。磯平、吹替へを引据ゑて、刺し殺す。
心からとは云ひながら。

櫻姫　情ない事をしたわいなう。
ト磯平、脇差を拭いて

磯平　イザ、姫君樣には、この所を少しも早う。イザ／＼。
ト櫻姫、先に花道へかゝる。ドロ／＼にて、眞中より清玄、幽靈の拵らへ、四天にて上がる。

清玄　恨めしい櫻姫、共に奈落へ連れて行く。來れ。

磯平　愚かや清玄、妨げなすか。怨靈退散々々。
ト切り拂ふ。清玄、消える。煙硝火立つ。
サア／＼、この道へお出でなされませ。
ト下座の方へ行く。また煙硝火立つ。

左樣ならこの道を。
ト東へかゝる。また煙硝火立つ。始終ドロ／＼、寢鳥。磯平、櫻姫を介抱して本舞臺へ來る。ドン／＼にて花道より、鱗の捕り手十人、子持ち筋の弓張り提灯持ち、バラ／＼と出て、磯平を取卷き

皆々　櫻姫を渡せ。

磯平　小癪な。

皆々　動くな。

磯平　爰構はずと姫君樣は、その道を早う。

皆々　やらぬ。
ト磯平、捕り手を支へる。櫻姫、東へかゝると、大ドロ／＼にて、柳の枝へ清玄を振り出す。後に燒酎火出る。

磯平　又もや清玄、顯はれたな。面倒な愚人輩。死人の山だ。觀念なせ。

皆々　やらぬワ。
ト早笛、大ドロ／＼にて、皆々磯平を取卷く。櫻姫は連理引きにて引きつけられる。清玄、こなし。皆々見得よく
ドッコイ。

先づ今日はこれぎり。打出し。

遇曾我中村（終り）

元暦元年正月廿一日
いにしへかたきうちのずゐ一に
名高き工藤左衛門のよみを
せはことばのこゑになほせば
工藤左衛門とよぶも
建久四年五月廿八日

あわつがはらのかつせんにうちかぶとのかきおき

稲光田毎月

大手柄
十ばん切

ふじのまきがりにかうみやうのかんじや

曾我狂言百姿

「吉例曾我寳入船」より

（上）曾我五郎時宗。化粧坂の少將。
（下）梶原平三景時。吉備津大藤内成景。

稻光田毎月

口明

鶴ヶ岡の場
鎌倉御所の場

役名――源頼朝公。政子御前。工藤左衛門祐經。工藤犬坊丸祐友。梶原平三景時。愛敬三郎。瀧口六郎。海野小太郎。新谷荒治郎。御所黒彌五。秦野次郎。原小次郎。江間小四郎義時。近江小藤太。八幡三郎。竹の下孫八。猪股小平六。忍び、井上惣治。化粧坂の少將。傾城、龜菊。同、手越。同、喜瀬川。同、絹琴。神主、左京。京の小次郎。曾我太郎祐信。曾我十郎祐成。曾我五郎時宗。小林の朝比奈。鬼王新左衛門。

造り物、淺黄幕稻村、板松大分あり、幕の内より頼家、鷹狩の形。、愛敬三郎、瀧口六郎、海野小太郎、新谷荒治郎、御所黒彌五、秦野次郎、原小次郎、いづれも鷹狩の形。その外、勢子大勢、据ゑ鷹を持ち、並よく並び居る。一聲にて幕明く。

頼家　皆の者、今日は大儀。
皆々　ハア、。
三郎　忝なくも、我が君頼家公の御仁政、四海に滿ち、御恩澤は春の如し。
小太　御威勢は虎の如く、驚ろかぬ鎌倉山に
荒治　隨つて今日頼家公の御鷹狩は、近々富士の御狩の足固め。
彌五　追鳥狩のお催にし、殊さら天氣も快晴にて
小太　我が君の御機嫌も麗はしく
三郎　身不肖の我れ〳〵に至るまで
小太　恐悦至極に
皆々　存じ奉りまする。
頼家　諸大名の面々、今日の鷹狩に、この頼家を警衛、大儀にこそあれ。
皆々　ハア、。
頼家　今日は母上樣も、鶴ヶ岡へ御社參と聞いたか。
三郎　御上意の通り頼朝公、富士の御狩の魑魅魍魎を避け

られ、御武運長久御祈念の爲、鶴ヶ岡の神前へ、源氏重代の白旗、並びに友切丸の御太刀を奉納あらんとの嚴命。

六郎　即ち奉納の役目は、和田義盛と、貧乏人の太郎祐信。

小太　當時はつこうの工藤どのにも、今日は政子の方さま御供とござりまする。

荒治　兎や角と申すうち、鶴ヶ岡へお先觸れの、いづれも御用意。

皆々　ハア、。

小太　イザ、頼家公には

皆々　お立ちあられませう。

頼家　皆の者。

皆々　先づお出であられませう。

トとひよになる。臆病口へ入ると、向うより鶴一羽本舞臺へ飛び來る。と兩方の通ひ路より、犬坊丸、前髪。曾我の太郎祐信、親仁にて、見得よくとまり、鶴に狙ひを附け、兩方一度に切つて放す。犬坊丸の矢逸れ、祐信の矢は舞臺へ來て、鶴を取上げ、ちよつと立廻りあると

犬坊　祐信どの。

祐信　犬坊丸どの、拙者が射留めしこの鶴へ、お手かけられて、なんとなさるゝ。

犬坊　サア、これは。

祐信　なんとでござる。

犬坊　御披露申さうと存じて

祐信　ア、其許は。

犬坊　イヤモウ、天晴れのお手柄。矢から其まゝ、親祐經へ披露いたし、頼家公の御上覽に供へようと存じまして。

祐信　それは近頃以て忝なう存しまする。當時出頭第一我が君のお覺えめでたい御親子の、お執成しを以て。

犬坊　承知いたした。イヤ、お手柄でござる〳〵。

祐信　これは〳〵、御挨拶でござります。年罷り寄つたる祐信が、其許と獲物を爭ひまするは、大人氣ないやうにも思し召さうが、先祖より射藝の家筋。さるに依つて、お鷹狩にも、矢の口を祀れとある頼朝公の嚴命。なりやコレ、射藝は未熟にては、祐信が家の瑕瑾。犬坊どの、必らずお心にさへられて下さるなや。

犬坊　なんの〳〵、一家中の事なれば、其許の譽れは驚ろき入りましてござりまする。お手柄でござる〳〵。ハ、ハ、。

ト空笑ひする。祐信、こなしあつて

祐信　斯やうに申さば、附け上がりのした親仁ぢやとも思し召さうが、犬坊どのに折入つてお願ひがござる。
犬坊　ハア、拙者にお願ひとはな。
祐信　餘の儀でもござりませぬ。近日富士の裾野に於て、巻狩の御催し。何卒假家萬事惣支配の儀を、先達て祐經どのへ願ひ入れ置きましてござるが、なんの沙汰もござりませぬ。もしこの鶴の御褒美下さりませうならば、御狩惣奉行の儀を。
犬坊　云ひ出してくれいと仰せらるゝのか。
祐信　何卒貴殿のお執成しを以て。
犬坊　勤めさせて進ぜませう。イヤモウ、何事かと存じたれば、易い儀ぢや。當時出頭第一、鎌倉山へ朝日の昇るが如き勢ひの某親子。お願ひあらば何事に依らず、御遠慮なう仰せられい。それが一家のよしみでござる。
祐信　それは近頃有り難う存じまする。
犬坊　何かと云ふうち餘程の隙入り。
祐信　賴家公にも鶴ヶ岡にて、お晝休みでござりませう。
犬坊　然らば直さま鶴ヶ岡にて、御披露申さう。
祐信　拙者も勢子を纏めて、後よりお供。
犬坊　祐信どの。
祐信　犬坊どの。
犬坊　後刻
祐信　御意得ませう。
ト一聲になり、祐信、向うへ入る。犬坊丸、見送り、いろ／＼工風のこなしあつて
犬坊　さうぢや。
ト鶴を引ッ提げ、向うへ走り入る。返し。

造り物、一面の藤の棚、二重舞臺、棚に牡丹のおしらひ。皐月山。西の方、綺麗に御簾屋體。舞臺一面に毛氈敷き、出囃子賑やかなる鳴り物打ちかけると花道より龜菊、絹琴、喜瀬川、手越、いづれも風折り烏帽子、水干、金の御幣を持ち、一對の男舞ひの形にて出て來り、所作一くさりあつて納まると、橋がゝりより
呼び　政子御前さまのお入り。
ト太鼓の鳴り物にて、橋がゝりより、政子の方、衣裳補襠。工藤祐經、江間小四郎、梶原平三、烏帽子大紋。後より、八幡の三郎、麻裃、その外裃侍ひ大勢供して出る。よき所にて神主左京、禰宜大勢を連れて出

て

左京　これは〳〵、我が君の代參として、政子の方さまお入りの樣子承り、卽ち當社の神職由井左京、お出迎ひ申しましてござりまする。

祐經　神主左京、大儀々々。

政子　時節も移れば變る世の中。人の心は花染めの、袖と詠ぜしも理り。春は櫻の花に興じ、夏は皐月の盛りに愛で、今日我が夫の御代參に、鶴ケ岡へ社參の自ら。警衞として工藤祐經。

祐經　ハアッ。

政子　江間の小四郎、梶原平三。

小平　ハア、。

政子　大儀にこそあれ。

祐經　我が君源二位賴朝公、御武運長久御祈願の爲、御代參として政子の方、御社參の警衞。身不肖なれども斯く申す工藤左衞門祐經。

小四　江間の小四郎義時、お供仕る上は、御賢慮安く思し召され、御神拜あつて然るべう存じ奉りまする。

平三　憚りながら言上。今日政子の御方さま、當社鶴ケ岡へ御社參。御饗應の爲、梶原平三景時、お供に伺候仕つてござりまする。

政子　兼ねて祐經の噂に聞いたる今日の催ほし。平三、過分にござるぞや。

平三　ハア、。君の長久を祈るは臣下の道。御意にあづかり、却つて痛み入る仕合せでござりまする。

祐經　今日の饗應は、景時どの丶采配。政子の御方には、イザ先づ、あれへお移り下さりませう。

政子　方々も自らと一緒に。

皆々　先づ〳〵お出であられませう。

ト皆々、並よく並ぶ。

女皆　梶さま、今ござんしたかいなア。

平三　大磯化粧坂の君達。ようこそ〳〵。今日は大切なる政子御前さまのおもてなし。隨分と粗忽のないやうに、合點か。

喜瀨　氣遣ひさしやんすな。そりや合點ぢやわいなア。嫌しいわたしらが、勿體ない政子さまの御前へ出る事ぢやもの。

綱琴　お目にとまる程の事はあるまいけれど

皆々　舞はいでかいなア。

三郎　こりや、さうありさうなもの。取分け龜菊は、身共

が相方の事なれば、猶以て精出して舞うてくれるであらうなア。
亀菊　知らぬわいなア。又しても相方々々と、わしやお前の相方になる事は、嫌ぢやわいなア。
三郎　イヤ、此奴が。
　ト立ちかゝらうとする。
小四　コリヤ〳〵、尾籠千萬な。政子さまの御前ぢや。
祐經　イヤ〳〵、苦しうない。女儀のお供先。無禮は御免なさるゝぞ。
三郎　これは有り難い主人のお許し。サア、これからは天井抜けぢや。嫌でも應でも、この八幡は、そもじの相方の大盡様ぢや。ナウ君達。
喜瀬　なんぼうお前が、大盡顏さしやんしても、亀菊さんは、とんと好かんと云うてぢやわいなア。
絹琴　嫌がらしやんすも尤もかいな。見るからどうやら意地の悪さうな顏つき。女子の好かぬ風俗ぢやわいなア。
手越　あのマヂ〳〵とした顏を見やしやんせ。
皆々　オヽ好かん。
三郎　ヤイ〳〵、此奴等が、政子さまの御前をも憚らず、この八幡を、さゝほうさに吐かすがな。エヽコレ、御前でなければ仕様のある奴等なれども、何を云うても御前ゆゑ、免して置くぞよ。
亀菊　また怖い顏さんすかいなア。
皆々　ほんに土氣が取れぬぞえ。
小藤　然らばこの近江の小藤太が、許しを受けて、この君を無禮講に。
　ト絹琴に抱きつく。
絹琴　オヽ好かん。アタ嫌らしい。措かしやんせいなア
三郎　そんなら替つて、この喜瀬川に無禮講。
喜瀬　オヽなめ。何するのぢやぞいなア。
三郎　無禮講ぢや。
女皆　嫌ぢやわいなア。
小藤　嫌でも應でも抱いて寢る。二人ともに來い。
　ト兩人、喜瀬川、絹琴を引立てる。向う戸屋より
朝比　待ちやアがれやい。
　トさる程に小林の朝比奈はと云ふ人寄せの唄になり、花道より朝比奈、素袍、掛け烏帽子、白旗の箱を持ち出る。小藤太、三郎、花道へかゝるを、朝比奈、この人寄せにて本舞臺へ押し戻す見得。立廻りにてとまる。
小藤　ヤア、いらざる所へ小林朝比奈。そこ押ッ開いて通

し召されい。
三郎　お許しを受けての色事なれば、上意も同然。
小藤　どう支へこさへなされても、この戀叶へて
三郎　お目にかけう。
朝比　默りやがれ、はりつけめ。鎌倉の三老職、和田の
別當義盛がほん曹子、義秀に向つて慮外な奴の。
平三　義秀、あまり其やうに腹を立ちやるな。これも御前
をお諫めの爲。
小藤　そこで無禮講ぢやてなア。義秀さまであらうが、義
盛さまでござらうが、上下を分けぬ今日のお慰み。即ち
主人の
三郎　お指圖でござる。
朝比　すりや、無禮講は工藤どのゝお指圖か。
三郎　如何にも。
小藤　餘り叱つてもらひますまい。
朝比　そんなら、うぬらを斷らするわい。
ト握り拳で頭を叩く。二人、一度に宙返りして
小藤　この小藤太を、なんでぶたつしやれた。
朝比　ぶつても大事ない。
三郎　ぶつても大事ないとは。

朝比　無禮講ぢや。
兩人　ヤア。
朝比　上下貴賤の分ちなく、權格を辨まへぬとある云ひつ
けぢやないか。すりや、工藤どのゝ御家來であらうが、
御家老でござらうが、ぶちのめすが無禮講の始まり。な
んと皆、さうぢやないか。
小四　ハヽヽヽ。これは義秀が尤も〳〵。御前にもお待ち
兼ね。サヽ、これへ〳〵。
朝比　ハアヽヽ。コリヤ、女郎ども。もう、おらが來る
からは氣遣ひない。股倉でもおつぱたけて風でも入れろ。
祐經　ハヽヽヽ。朝比奈どの、最前から見ますれば、何か
家來めが不調法。工藤め、あやまり入りましてござりま
する。
朝比　アイヤ、何も貴殿にあやまらさうと申して
祐經　イヤ〳〵、あやまりましてござる。家來の粗忽は身
共が不調法。朝比奈どの、あやまりまする。近來のあや
まり。工藤め、あやまり入りましてござる。
小四　これは又、工藤の若い人を困らすやうなお詞。エヽ、
戯れでござらう。朝比奈どの、お心にかけられぬがよい。
して、奉納の白旗、持參なされたか、どうでござる。

朝比　即ちこれに持參いたしましてござりまする。
小四　この御旗と申すは、先年八牧の判官兼隆を夜討の節、眞先に押し立て、勝利を得給ふ。これと云ふも、偏へに正八幡の御加護。
平三　まつた友切丸の御太刀と申すは、我が君未だ十三年の御時、御父義朝公、待賢門の軍に打負け、御親子引別れ、當國へ落ち給ふ道にて、野武士ども落ち武者なりと押取巻きしを、君友切丸の太刀を以て切り拔け給ひ、危ふき難を遁がれ、再び源氏の御代となつたるも、この劍の威德。猶も武運長久と、神前にこれを納め給ふ。
小四　然るに數度の戰ひに、如何なりしや友切丸の目貫、兩方ともに紛失。さるに依つて曾我の祐信、代々傳はるところの、天下安全番ひの鷄の目貫あり、聞きも及ばれん凶事ある時は、おのれと聲を發する神變不思議、友切丸に加へ、即ち白旗諸とも、義秀祐信を以て、鶴ケ岡へ納めなば、猶も源氏繁昌の御代とならんと、賴朝公の御上意。
小藤　イヤ〱、義時どの、なんぞと申すと、祐信々々と、生殺しの蛇親仁。既に以て彼れが女房は、河津が後家。先年由井ケ濱にて討ち首に極まりしを、和田秩父の命乞ひにて、助かりし子供を連れて、祐信への嫁入り。
三郎　その上、兄弟の子供成長して、主人祐經を狙ふとの風聞。
平三　左樣な奴を生けて置いては、婆娑塞げと云ふもの。由井ケ濱へ呼び出し、縛り首討たれたがよい。
三郎　左樣でござりまする。
　ト云ふうち、朝比奈。三郎、小藤太が裾を摑んで振り廻す。
アイタ、、、。コリヤ、我れ〱を、なんとさつしやる。どうするのぢや。
朝比　どうする。どうするとは、陪臣の身を以て、兄弟の子供が、祐經どのを敵と云うて狙ふとは、何奴に聞いてしやべりあがる。
小三　サア、それは。
朝比　それはとは、縛り首と吐かしあがるか。縛り首と云ふものは、痛いものぢやぞよ。可哀さうに、科もない者を縛り首、討つがよいか。これがよいか〱。
　ト兩人を振り廻す。兩人痛がる。
小藤　アヽ、桑原々々。いつそねぶか首、引ッこ拔いてこます。

ト兩人、首を引ッ込める。

小四　待つた朝比奈、聊爾召されな。政子の方の御意なるぞ。

朝比　ちやと云うて。

小四　殊に白旗奉納の役目を蒙むる身を以て、血をあやしては社内の穢れ。短氣にござる。マア／＼、鎭まり召されい。

朝比　エ、、忌々しい。

ト小藤太、三郎を殴りこかす。と向うより

呼び　頼家公のお入り。

小四　工藤どの、お聞きなされたか。我が君のお入りとござる。

政子　お鷹狩の御休息と相見えまする。

小四　いづれも、お出迎ひなされい。

皆々　ハア、。

ト一聲になる。向うより頼家、犬坊丸、愛敬三郎、瀧口六郎、海野小太郎、新谷荒治郎、御所黒彌五、秦野次郎、原小次郎、曾我太郎祐信、勢子大勢連れ出る。但し勢子のうちに鶴を竹に附け持ちゐる。

政子　頼家公には鷹狩の休息、政子も最前より待ち受けて居りましたわいの。

頼家　母上様、お早うござりました。

トこれにて本舞臺へ並よく並ぶ。

祐經　頼家公にも御機嫌麗しくお見えなさるゝ。今日はお鷹狩、天氣も快晴にて、諸士の面々、獲物々々を致されたであらうな。

犬坊　親人の仰せの通り、銘々いづれも獲物を致されてござりまする。

朝比　犬坊どのにも、定めて天晴れのお手柄があつたでござらう。如何やうな獲物をなされてござるな。

犬坊　この犬坊が今日の大手柄。イヤ、親人、お聞きなされ。當時工藤親子が威勢には、空飛ぶ鳥も羽を縮め、拙者が矢を番うて狙ひをつけますると、ばつた／＼と鳥どもが、のたれ落ちまする。彼の先年鐵槌にて打ち碎きましたる、殺生石の格でござる。ハ、、、、。

三人　イヤ、天晴れのお手柄でござる。

犬坊　イヤ、まだそんな事ぢやない。勢子の者ども、丹頂の鶴、これへ持て。

勢子　ハア、。

ト以前の鶴、矢の立つたるなりに竹に結へ持ち出て、

眞中へ直す。

朝比　すりや、これが其許の
犬坊　獲物でござる。
朝比　ハテナア。
祐經　忰、出かした。
祐信　犬坊どの、よろしく御披露頼み存じまする。

ト犬坊丸、構はず

犬坊　親人、御覧なされい。この丹頂の鶴めが、雲井遥かへ舞はうところ、なんの苦もなく、たつた一矢にて射落しました。イヤモウ、これから見ては、那須の與市宗高が扇の的は、なんでもない事でござる。
祐信　犬坊どの／＼、よろしく御披露下されませう。
犬坊　爰を思へば、唐土の揚由などゝ、仰山には申せども、拙者より見ては、遥か劣つたものでござる。鎌倉の權五郎ぢやの源三位頼政ぢやの、イヤ、鎭西八郎ぢやのと云へど、今まで生きて居られたら、この犬坊に干鱈の十枚も持つて、弓の稽古に參るでござらう。ハヽヽヽ。
祐信　イヤ／＼、犬坊どの、最前拙者が射留めました、丹頂の鶴の儀を
犬坊　丹頂の鶴が、なんと致した。
祐信　イヤサ、先程射留めました
犬坊　射留めたとは、何を射留めさつしやれた。
祐信　先刻射留めましたる、丹頂の鶴の儀を。
犬坊　默らつしやれ。
祐信　エヽ、こりや、お忘れなされましたかな。
犬坊　默らつしやれ。
祐信　でも、こなた樣が、御前へ披露すると云うて、御褒美あらば惣奉行の儀を。
犬坊　ヤア、默れ祐信。云はして置けば、ずばら／＼と、何がなんとしたと云ふ……エヽ、聞えた。この犬坊が手柄話しから、羨やましさに出來心か。人の獲物を我が物にせんとは、祐信どの、卑怯にござるぞ。
祐信　イヤ、この祐信は卑怯は申さぬ。最早この鶴を射留めしは、こなた樣、よく御存じでござるわサ。
犬坊　イヽヤ、知りませぬ。存じませぬぞ。
祐信　そりやこなた、未練にござるぞ。
犬坊　默れ祐信、犬坊に向つて未練などゝは、過言であらうぞ。
祐經　忰、扣へい。分明ならざる獲物の爭ひ。老人の祐信どの、若輩者の其方が手柄を、よもや奪ひ取りもおしや

るまい。また其方も祐信が獲物を、我が射留めしとは申すまい。ナウ、義時どの。

小田　左様でござる。イヤ、ナニ、犬坊どの、祐信どの、御両人ともに今の爭ひは、即ち射藝の砌りに、いづれをいづれとも義時めも、判斷は致し憎い。これは双方斯うなされい。犬坊どのにも曾我どのにも、慥かに射留めしと云ふ、證據をお出しなされたがよくござらう。

犬坊　サア、その證據は。

ト行き詰まり、祐信が顏を見る。

祐信　この祐信が射留めし證據は、卽ち射捨てのその矢。代々射藝の曾我の祐信。矢の根の流儀、平鏑、定紋は庵に木瓜、彫りつけあるが慥かな證據。

政子　ソレ義秀、改めて見や。

ト犬坊丸、この間いろ／＼ある。

朝比　畏まつてござりまする。

ト鶴に立つてある矢を引き拔き

誠に矢の根は平鏑、庵に木瓜の定紋。こりや祐信どのが申さるゝに相違ない。犬坊どの、お手柄が斑になつた。犬坊どの、噓の皮の化け犬どの。こりや、どう致した事でござる。但し又、この鶴を其許が射留められたと云ふか、これに增した證據がござるか。

犬坊　サア、それはな。

朝比　サアそれはとは、證據はないか。

犬坊　サア、その證據は。

朝比　サア／＼／＼、なんとでござる。

祐經　イヤ、その矢の根は證據にはなるまい。

祐信　何がなんと。

祐經　平鏑に木瓜を彫りつけたる矢の根を用ふるは、曾我祐信ばかりと思ふか。庵に木瓜は三老職たる祐經が定紋。

犬坊　如何にも左様でござる。此方の家の紋も庵に木瓜、平鏑をとんと忘れて置いた。ハヽヽヽ。祐信どの、これでも貴殿の矢の根でござるか。イヤサ、コレ……若輩者、ナア、コレ。

トいろ／＼拜み

若輩者の某を相手に、手柄を爭はつしやるは大人氣ない程に、この手柄は拙者に下されい……下されい。イヤサ、下されいと云はつしやれても、そりやなりませぬ。その代りに惣奉行の儀は……サア、さう／＼こなたが云はつしやつても、もう叶ひませぬ。今のは叶へまする。

トこちらへ掛けて云ふ。祐信、いろ／＼こなしあり

イヤサ、叶はぬ所ぢや。なんと犬坊が矢に相違はござるまいがの。
祐信　如何にも、犬坊どのゝ矢に相違はござりませぬ。
　ト思ひ入れあつて云ふ。
小四　アイヤ〳〵、祐信どの、あの矢が貴殿の矢でなくては。
祐信　祐信の心得違ひでござりまする。
小四　なんと。
祐信　手前の矢先と思ひの外、犬坊どのゝ平鏑と、心得違ひは老人の性急ゆゑ。犬坊どの、眞平御免下されませう。
犬坊　さうなくては叶ひませぬ。すりや、貴殿の手柄ぢやないぞや。身共が功名だぞや。云ひ分はござらぬか。云ひ分ないか。なんのあらう、ない筈ぢや。そればかりぢやない。お咎めの河津が忰、女房ともに引取つて、後家狂ひする豎張り親仁。その河津の餓鬼めらが、親人を敵などゝ、附け狙ふとの噂。
小藤　左樣でござる。俗に云ふ彼の腕なしの深軍配。
三郎　當時はつこうの工藤どのを、敵などゝ強請りかけて、物にするもがりでござりまする。

祐經　ヤイ〳〵、八幡扣へい。祐信どの、御邊が養育召さるゝ兄弟の忰どもは、この祐經を親の敵と附け狙ふと申すが、甚だ氣の毒に存ずる。しかと左樣でござるかな。
祐信　御意でござりまするが、全く兄弟の子供に限つて。
朝比　さうでござる。祐經どの、なんの兄弟の奴等が、こなた樣を。
犬坊　イヤ〳〵、附け狙ふげにござる。但し又、附け狙はぬと云ふには、なんぞ慥かな。
祐信　證據と申すも即ちその矢。
犬坊　ナニ、この矢を證據とは。
祐信　伊東は工藤が所領の仇、河津を討たれたにもせよ、それを討てば又敵、天下一統の御法度。それを知らぬ兄弟でもござりませぬ。
犬坊　それに又、附け狙ふとの風聞は。
祐信　その疑ひを晴らさん爲、兄弟の子供に誓言を添へ、社内に待たせ置きましてござります。
朝比　そりやアよい手番ひ。兼ね〳〵兄弟が祐經どのに、逢ひたい〳〵と云つて居つたが、ハテ、よい折からの出合ひでござる。
　ト花道の際へ行き

コリヤヤイ、鳥居の外面に差扣へし、曾我兄弟の子供めら、頼家公の御前と云ひ、祐經どのもこれにござる。怖い事も恐ろしい事もない程に、おめず臆せず恥らはず、急いで爰へのたくり出ろやい。

祐時　畏まつてござります。

ト對面三重になり、向うより曾我十郎祐成、曾我五郎時宗、長袴、三方に銘々矢の根を載せ持ち出て、祐經を見て、見得よく花道に並ぶ。

政子　珍らしや曾我兄弟、頼家公もこれに居やる。サヽ、苦しうない。近う／＼。

兩人　ハツ。

トまた對面三重にて、本舞臺へ來る。此うち祐成、時致、こなしにて、祐經に目を附け、ツカ／＼と來る。朝比奈、引き廻して見得よくとまる。

朝比　コリヤサ、兄弟、頼家公の御前、祐經どのに逢ふと云ふは、盲龜の浮木、優曇華の、花待ち得たる今日只今。騒ぐ心を鎭め、工藤どのを狙はぬと云ふ、云ひ譯あらば云へ。聞かう。どうぢや。

祐成　それ天地の混沌は

時宗　澄めるは上つて天となり、濁るは下つて土となる。

祐成　其うちにすむ秋津虫。

時宗　虫の中にも我が父は、河津三郎祐安と

祐成　人にもその名白露の

時宗　泡と消え行くその後は

祐成　祐信どのゝ養育にて

時宗　人となつたる兄弟が

祐成　今日對面の印とて

時宗　持つて參りし二つの矢の根。

祐成　發矢と立てし定紋は

時宗　これも庵に木瓜の

祐成　サア、印は即ち和順の印。

時宗　祐經どのにこの後も

祐成　二心ないと云ふ、證據の鏑矢。

時宗　イザ、お受取り

兩人　下さりませう。

朝比　出かした／＼。祐經どの、兄弟が心底の程、お聞きなされてござるかな。

祐經　なか／＼辯舌、承り事でござる。

朝比　お心に叶ひましたか。兼ねて貴殿へお目見得を願うて居りまする。なんと、逢うてやつて下さるまいか。

祐經　何がさて、河津死後より思はぬ疎遠。頼家公御親子の御免を蒙むつて、對面の致してくれう。
朝比　そりやア忝ない。兄弟の者ども、ズッと出い〳〵。
ト兩人、ツカ〳〵と寄るを祐信、朝比奈、立廻りにて隔てる。
祐經　祐信どの、これが彼の其許の養子にせられた、河津三郎祐安が忰どもかな。
祐信　御意の通り、赤澤山の露霜と消えし、河津が二人の忰。
朝比　兄の一万成長して
祐成　曾我十郎祐成
小四　弟は箱王人となつて。
時宗　曾我の五郎時宗。
祐經　兄弟の者。
宗時　祐經どの。
祐經　ハテ
宗時　珍らしい
兩人　對面ぢやよな。
時宗　うぬ、祐經。
ト寄らうとするを、朝比奈、祐信、留める。

犬坊　ヤア、緩怠な。御兩所の御前とも憚らず
小藤　主人に向つて尾籠の振舞ひ
三郎　座席を知らぬ慮外な奴め。
時宗　うぬ、その頬桁を
祐信　コリヤ、扣へい。
祐時　おやと申して。
祐信　例へ工藤どのが、河津を討たれたにもせよ、敵討は叶はぬがや。
祐時　サア、その儀は。
祐信　急く所ではないわい。
祐時　エヽ。
ト無念がり、ヂッとなる。
祐經　忰扣へい。
犬坊　おやと申して
祐經　頼家公御親子の御前、立騒いで見苦しい。兩人とも鎮まり居らう。
三郎　ハッ。
ト三人、ヂッとなる。
祐經　ヤイ、兄弟、實父河津を討たれて、口惜しいか、無念なか。ハレ、不便や。よいワ、一家の因み、また某

親子が出頭にあやかり、行く末めでたいやうに、杯をくれう。

祐時　ナニ、我れ〳〵に杯を。

トきつとなる。

朝比　コリヤ。

ト目顔にて留める。

祐信　一家の頭領たる祐經どの、殊に三老職のお杯、有り難い事ぢやと思うて、心を鎮めて、ナ、ソレ、早うお頂き申せ。

祐時　畏まつてござりまする。

祐經　神主左京。

左京　ハツ。

祐經　銚子土器。

左京　ハア。

トこれより祝詞になり、左京、銚子土器を三方に載せ、祐經が側へ持ち行く。祐經、土器を取上げて呑んで

祐經　祐成へ。

左京　ハア。

ト祐成が前へ持ち行く。祐成、呑んで

祐成　御返杯。

トまた祐經へ持つて行く。

祐經　その兄弟が持參せし、二つの矢の根、これへ持て。

祐小　ハア。

ト兩人、持參せし矢の根を三方ながら祐經が前へ直す

祐經また土器取上げ呑んで

祐經　時宗やい。

時宗　なんでござる。

祐經　杯くれう。

時宗　戴きませう。

トつか〳〵と立つ。朝比奈、留めて

朝比　コリヤ〳〵五郎、大事の所ぢや。何かの實否解るまで、早まらすともお頂戴申せサ。

ト時宗、心意氣あつて、よき所へ直る。左京、三方土器持ち來る。土器取上げ呑む。

祐經　時宗待て。肴くれう。

時宗　ナニ、お肴とはな。

ト祐經、二つの矢の根を取上げ

祐經　その肴はこの矢の根。異心なきわれ達が證跡。この祐經に返せしかど、河津が血汐の沁み込む矢の根、某が方に置いても穢らはしい。われ達はまた親の箆。兩人

に改めてくれう。
ト時宗、祐經が側へツカ〳〵と行き、矢の根を持ち添へて兩人、キッと見得。
朝比　出かした。流石は工藤どの程あつて、天晴れ見事。ソレ兄弟、大切にその矢の根、お頂戴申せ。
ト時宗、矢の根を取り、元の所へ戻し
時宗　慥かに頂戴仕つてござりまする。
祐經　ハレ、よく似たなア。
時宗　誰れに似ました。
祐經　われが父河津に。
時宗　その似た河津を
祐經　工藤が討つた。
祐時　エヽ。
トきつとなる。朝比奈、留める。これより三保神樂になる。
祐經　この祐經が河津を討ちしその仔細、語つて聞かせん、よつく聞け……元來斯く云ふ祐經、汝等兄弟が先祖は、久須美入道圓心。その子伊藤太郎祐高、同しく次郎祐親、兄太郎祐高は 某が父、弟治郎祐親は其方達が爲には大伯父。然るに我が父太郎祐高、十死一生の大病。臨終の折から、弟祐親を枕元近く招き、我れ相果てゝ後、忰幼少なれば、其方後見して所領を預かり、金石十五歳にならば、宇佐美久須見河津三ヶ所を、讓りくれよと遺言して空しくなり、その節身共は小松どのに仕へ、伯父祐親に、彼の預かりの所領、讓り返しくれよと、再三再四催促すれども、甥子と侮り讓り與へねば、思へば憎くき仕方、所領の仇と、奧野の狩の歸るさを、家來近江八幡に申しつけ、祐親が歸るを、今や〳〵と相待つところに、なんとかしけん伊藤入道、引違へ立歸り、思ひがけなき河津三郎、いつに勝れて華やかに出立つたり。秋の野を摺りつくしたる直垂に、斑の紫裾たをやかに、萠黄裏打ちたる竹笠、木枯しに吹きさらさせ、栴檀籐の弓の眞中摺り、五尺三毛ある所に、我が身輕げにゆらりと乘り、絕所惡所の嫌ひなく、さしくれてぞ歩ませける。待ち設けたる近江八幡、祐親は歸らずとも、親子は一體彼奴とても、遁がれぬ敵と大尖り矢打ちつがひ、椎の木三本小楯に取り、よつ引いて兵と放つ矢過たず、河津が乘つたる馬の鞍の、前方を射削つて、むかはぎの前にすつぱと立つ。
ト時宗、祐成、無念のこなしいろ〳〵あり

河津もさる者なれば、當の矢を射返さんとは思へども、
急所の痛手に堪りかね、馬より撞と落つ。

時宗　エヽ。

　ト時宗、思はず三方を握り碎く。

祐經　無念にあらう、口惜しからう。ハヽヽヽ。なんぼうわれ達が口惜しがつても、この祐經は討たれぬ。先づよく物を思うて見よ。工藤は三老職、その上年の寄つたれば、上野沼田の庄、三萬七千町を隱居料として下され、悴犬坊も都嵯峨の、山城を拜領して、親子ともに出頭第一。それがどうして討たるゝもの。及ばぬ事。蟷螂が斧。富士山をせゝる土龍。叶はぬ事〳〵。

　ト兩人、いろ〳〵無念のこなし。

各々御覽じ。あのマヂ〳〵とした面つき。なんといづれも。馬鹿なしやツ面ぢやござらぬか。ハヽヽヽ。

　ト祐成、時宗、キッとなる。朝比奈、立廻りにて留める。

皆々　御意の通りでござる。

小四　最早御神事の刻限、延引でござるぞ。

祐經　イカサマ。御兩所には最前より御退屈。

政子　朝比奈の三郎義秀。

朝比　ハッ。

政子　曾我太郎祐信。

祐信　ハア。

政子　兩人ともに奉納の役目、用意はよいか。

朝比　正八幡の白旗。

祐信　友切丸の御太刀。

朝祐　持參仕つてござりまする。

祐經　即ち饗應の役目は、梶原平三景時。

平三　畏まつてござりまする。

祐經　悴、其方が手柄の丹頂の鶴、矢の根諸とも、我が君へ御披露申せ。

犬坊　畏まつてござりまする。

小四　傾城どもも一緒に、神主方にて今夜の一さし。

女皆　合點でござんす。

政子　曾我兄弟へ政子が寸志。

　ト扇を投げやる。祐成、取つて披き見て

祐成　皐月闇裾野の里の松風に

時宗　ある夜千鳥の鳴き渡るらん。

政子　合點がいたか。

時祐　ハア。

政子　サア、頼家。
頼家　皆の者。
皆々　先づお入りあられませう。
ト唄になり、この一件皆々入る。あと合ひ方。犬坊丸、祐信殘り、いろ〳〵思ひ入れあつて、犬坊丸、祐信が手を取り
犬坊　祐信どの、なんとお禮を申さうやら。犬坊めが一生懸命を遁がれました。エ、。
ト手を合せ泣く。祐信、こなしあつて
祐信　これは〳〵、犬坊どの、そのお禮は却つて痛み入りまする。
犬坊　イヤそウ、ひよつと口拍子にかゝつて、出放題の手柄話し。貴殿があゝ云うて下されぬと、犬坊め、親人の手討ちに合ひまする。命の親と申さうか、産神八幡宮と申さうか、こなたの手柄を掠ぎ取つた、犬坊めが一生の不覺。なんとお禮の申しやうがない。祐信どの、エ、忝なう存じまする。
祐信　なんの〳〵、この祐信は齢傾く老人の、譽れを望んでなんの益。こなた樣には生先き長う、行く末祝ふ鶴のお手柄、犬坊どの、しかと貴殿に讓りました。

犬坊　ハア。
祐信　がその代りには。先程も申す通り、何卒御狩奉行の儀を。
犬坊　犬坊め、命に替へても、その一件は承知いたした。
祐信　とてものことに御誓言を。
犬坊　正八幡、刀にかけて。
祐信　エ、忝ない。兎角その儀を。
犬坊　心得ましたが、この事はお沙汰なし。
祐信　そりや、お互ひに。
犬坊　左樣ならば、お先へ參りまする。
ト唄になり奥へ入る、後に祐信、こなしあり
祐信　鶴の手柄も徒らに、犬坊の利得とせしも、何卒義理ある兄弟が、實父の敵を討たさん爲。御狩奉行を願ひ、引入れて祐經を。
ト云ひ〳〵あたりを見廻し
とは思へども祐經が、河津を討ちしは所領の仇。復讐は武士一統の御制禁。ハテ、なんとしたものであらうな。
ト思案する。橋がゝりより京の小次郎、落ちぶれたる體にて出て
小次　親人樣、御息災で、おめでたう存じまする。

ト祐信、小次郎を見て、奥へ行かうとする。小次郎、
縋りつき
アイヤ〳〵、親人樣、たつた一言。
祐信　ヤア、親とは誰れが事。不所存な忰は持たぬ。手討ちに遭はぬが血筋の寸志。そこ立つて失せう。
小次　母者人が來ぬ先は、一人息子の甘やかし、博奕は打ち酒は吞み、內の腰元と云ふ腰元は、殘らず孕ます。廓通ひに詰まつては、小盜み矢尻切り。間男は人一番。曾我の家の貧乏ぢやと云はするも、この小次郎が半分手傳ひました。そのおどもりで御勘當受けた時は、日本晴れがしたやうにあつたが、行く先々が的が立つたやうになつて、一門一家は寄せつけず、丸三年のうち鹽を踏んで、今と云ふ今とつくりと、合點が行かれました。コレ、親仁樣、誤まりました程に、どうぞ御勘當を。
祐信　ならぬ事ぢや。百萬だら云うても相叶はぬ。うぬが皆心柄ぢや。詞交すも身の穢れ。人非人め、とつとゝ失せう。
小次　そんなら、どのやうに申しましても。
祐信　くどい。
小次　措かんせや。措けよ。措きやアがれ。爰な死ぞこなひめが。親ぢやと思うて奉れば、附け上がりのしたどうびん親仁め。なんぼうわり樣が其やうに云うても、曾我の血筋と云うては、この小次郎より外にはない。わり樣が若い時、毎日よい事をして作り、樣が惡さに母者人の腹の內から、此やうな根性惡う生れた者が、今更なんで直るもので。よい加減に勘當赦せ。赦さぬとわれ、仕やうがあるぞよ。
祐信　ハヽヽ。仕やうがあるとて、わりや親をなんとする。
小次　イヽヤ、勘當赦さにや、親でも杭でもないわい。
祐信　親でなくば、なんとする。
小次　親でなくば、われを斬う。
ト祐信が刀を騙し拔いて切つてかゝる。引ッたくり、
背討ちにする。
祐信　親に刃向ふ天罰、思ひ知つたか……エヽ、コレ、心柄とは云ひながら……ドリヤ、神主方へ參らうか。
ト唄になり、祐信、臆病口へ入る。小次郎、こなしあ
つて起き上がり
小次　ヤイ、茶瓶親仁め、勘當も赦さぬ癖に、ようむごい目に遭はしたなア。實の子はほかして、他人の子を可愛

がりくさる、あの恩知らずめが。
　ト云ふうち小藤太、三郎、出かけ聞いて居る。
小三　小次郎、覺悟。
　ト切りかゝるを立廻りにて留め
小次　待つた。コリヤ、おれをなんとさつしやる。
三郎　主人に仇する曾我の餘類、工藤の家の子八幡の三郎。
小藤　近江の小藤太、遁がれぬ所ぢや。
小三　覺悟せい。
　トまた切りかけるを留め
小次　待つた、聊爾せまい。三年先に勘當うけて、今では曾我に喰ひやいのない京の小次郎。それでもおれを殺らすのか。
三郎　イヽヤ、一大事が頼みたい。
小次　ナニ、一大事とは。
小藤　いま兩人が切りかけたは、心底を見よう爲。なんと、其方が立身出世になる事ぢやが、頼まれてはくれまいか。
小次　如何にも、立身とあれば面白い。命に替へて頼まれませう。して、そのお頼みの樣子は。
三郎　其方が實の親、祐信が預かり居る、友切丸の太刀が盗んでもらひたい。
小次　盗む事一通りならば、なんでもござれ〳〵ぢやが、して、友切丸を仕負ふせたら、御褒美を。
小藤　そりや、我れ〳〵が請合ひぢや。
小次　イヽヤ、肝心の頼み手、工藤に直に逢はねば、滅多に相對はならぬ。
　ト祐經出かけ、懐中より書き物を出し
祐經　小次郎。
小次　祐經さま。
祐經　褒美の印。
　ト書き物を抛る。小次郎、披き見て
小次　「この度曾我太郎祐信を討つて、友切丸を我れに得させし功に依つて、約を變ぜず久須美の庄を宛て行ふものなり」。
祐經　丸腰で見苦しい。心覺えの一腰。
　ト脇差をやる。
小次　ハア。
　ト受取り頂く。
祐經　必らず約を變ずるな。
小次　ハア。

祐經　行け。
ト唄になり、小次郎、橋がゝりへ入る。祐經、小藤太、三郎、こなしあつて奥へ入る。と平三、奥より出て、あたりを見廻し、懷中より呼子を出し吹くと、井戸より井上惣治、出て
惣治　梶原さま。
平三　忍びの名人井上惣治。
惣治　お頼みの通り、この空井戸より神前まで。
ト囁く。
平三　出かした／＼。白旗さへ奪ひ取れば、約束の通り褒美は、工藤どのより望み次第ぢや。必らずぬかるな。
惣治　ハア。
平三　忍べ。
ト唄になり、平三、奥へ忍ぶと、惣治、井戸へ入る。なまめいたる鳴り物にて、少將、着流し抱へ帶にて、後より禿三人。十八、幇間にて傘持ち出る。
禿　申し／＼太夫樣、其やうに忙しう歩かずとも、もそつと靜かに行かしやんせいなア。
少將　サイナウ、なんぼう靜かに歩かうと思うても、獨り足が早うなつて、どうもならぬわいなう。

十八　そりや、その筈ぢや。この頃戀ひ焦れてござつた時宗さまに逢はさうと、朝比奈さまが仰しやつたゆゑ、それで心が急くのでござりませう。
少將　サイナウ、それで此やうに姿を替へて、この鶴ケ岡へ息せき來た事ぢやに依つて、ほんにお前方のしんどいのも構はずに、十八さま、勘忍して下さんせ。
十八　なんのマア、勘忍どころか、コレ、太夫樣、御覽じませ。どうやら空が曇つて來たに依つて、傘の用意もして參りました。イヤ、斯うして居やうより、禿衆連れて朝さまを見て參りませう。
少將　そんならお前方は、さうして下さんせ。
十八　左樣なら少將さま、行て參りませう。
ト唄になり、禿連れ入る。後に少將、しか／＼あり、臆病口より三郎、出て、少將に抱きつく。
三郎　コリヤ、爰な命取りめ。
少將　オヽ、とつとモウ、誰れぢやぞいなア。
ト振り放す。
三郎　誰れとは愚か、わしぢや／＼。突出しのその夜から、惚れ込んだ心中男、爰で逢はうとは結ぶの神の引合せ。神職方へ引摺つて行て、抱いて寢る。サア、來い。

少將　エヽ、つッとモウ、惡い事さしやんすと、大きな聲して、朝さんに告げるぞえ。
ト此うち朝比奈、出かけ見て居る。
三郎　なんぢや、告げるとは胴慾ぢや。つげる合邦外ヶ濱、例へ野の末山の奥、鬼住む島の苦勞でも、お前ゆゑなら、これな〳〵いとやせぬ。
ト抱きつく。
少將　エヽ、厚かましい。知らぬわいなア。
ト突き飛ばす。
三郎　知らぬとは胴慾ぢや。知らぬ合邦外ヶ濱・例へ野の末山の奥。
ト抱きつくを、朝比奈、取つて投げる。
アイタヽヽ。ヤイ、少將、うぬ、こりや、酷い目に遭はしたな。さては兵法を見知らずな。シタガ、よく投げた。恐らく某を此やうに取つて抛る者、天地の間にわればかりであらう。力の強い者さへ見れば、朝比奈ぢやの朝比奈ぢやと云ふが、その朝比奈でも身共には。
ト云ひ〳〵立ち上がり、朝比奈と顔見合せ
ヤア、朝比奈……さんか。
朝比　八幡牛蒡め、コリヤ、少將を捉へて何ひろぐ。

三郎　サア、これは。ツイ、ちよつと。
トもぢ〳〵する。
朝比　この朝比奈でも、うぬ、なんぢや。その後を吐かせ。吐かさぬか。なんぞと云ふと土龍を日向へ出したやうな面をさらして、少將と色事とは太い奴め。
三郎　イヽエ、細うござりまする。
朝比　まだ吐かす。頬桁を叩くと、腕も臑もごんぼ拔きにせうか。
三郎　イエ〳〵、それには及びませぬ。
朝比　キリ〳〵と奥へ失せう。
三郎　エヽ、忌々しい。あつたら所へ。ヤイ少將、覺えて居よ。
少將　知らぬわいなア。
三郎　思へば〳〵。
朝比　とつとゝ失せう。
三郎　失せる。
ト逃げて入る。
朝比　大たくらめ。
少將　ほんに、よい所へ朝比奈さま、よう來て下さんしたなア。

朝比　イヤ、おれよりは、彼のが來て居るぞよ。
少將　五郎さまは來て居やしやんすかえ。
朝比　來て居る〳〵。
少導　早う逢はして下さんせいなア。
朝比　逢はしてやらう〳〵。……アレ〳〵、人ごと云はゞ
五郎が、あそこへ來るワ〳〵。
少將　オヽ、五郎さまぢや。さうぢやわいな〳〵。
朝比　オッと、急くまい〳〵。これからが大事ぢや。必ら
ず此方から、急いた顏せまい〳〵。
少將　合點でござんすわいなア。
ト雨車になり
オヽ、笑止、雨が降つて來たわいなア。
朝比　こりや堪らぬ〳〵。オヽ、幸ひ〳〵、爰に傘がある。
ト雨人、以前の傘をさすと、狐火の唄になり、前の澤
邊にて蛙鳴く。時宗、橋がゝりよりソロ〳〵出て、蛙
の聲に聞き入り、しよんぼりとして居る。
時宗　野邊に蛙の鳴く聲聞けば、ありし昔が思はれて、如
何なればこの時宗、幼少にして父に離れ、箱根の山にて
人となり、いま曾我の家に養育に預かれど、倶に天の戴
かぬ父の敵、現在側に置きながら、討つ事も叶はぬのみ
か、人に賤しめ恥かしめられ、一日安堵の思ひなく、養
父への不孝、實父への不孝、思ひ廻せば廻す程、淺まし
い身の上ぢやなア。
ト此うち朝比奈、少將に傘をさしかけいと云ふこなし。
少將、恥かしきこなし、いろ〳〵あつて、トゞ傘さし
かける。時宗、我が形を見て
ハテ、面妖な。雨は降るに、どうしてこの身は、
ト少將と顏見合して
すりや、最前から、こなたが傘を。
少將　アイ、お前を濡らすまいと思うて。
時宗　これはしたり、この身は濡れねど、こなた樣の小袖
は、いから濡れましたぞや。
少將　アイ、わたしは濡れる覺悟。濡れぬ先こそ露をもい
とへぢやわいなア。
ト傘を捨て、時宗に抱きつくを振り放し
時宗　ア、コレ、惡い事せまいぞ。
ト橋がゝりへ行かうとする。
朝比　どこへ。
ト踏んばたがり留める。
時宗　ヤア、朝比奈どの。

朝比　兄よ、この色事は朝比奈が取持つたから、一番おらが顔立てゝ、附き合つてくれべいやい。
時宗　エヽ、こなたまでが同じやうに。
　ト臆病口へ行かうとする。少將、立ち塞がり
少將　イヽエ、通す事はなりませぬ。達て爰が通りたくばわしに抱きついてから通らしやんせ。
時宗　こりや、若輩者ぢやと思うて、嬲らしやるのか。
少將　イヽエ、嬲るのぢやないけれどな。
　ト朝比奈と顏見合せて、いろ〳〵あり
朝比　オヽサ、兄よ、その女郎に抱きつかにや、爰を通す事は、びやくらいならないわい。
時宗　なんで又、通す事がならぬぞいなう。
少將　サア、それはな。
時宗　それは。
　ト朝比奈、少將に、わしぢやと云へと云ふこなし
少將　アイ、結ぶの神樣の云ひつけで、抱きつかしやんせにや、通すなてゝなア。
朝比　さうだ〳〵。
少將　また抱きつかずに通られるなら、通つて見やしやんせ。

朝比　オヽ、通すな〳〵、朝比奈が尻持つた。ぐつとつけろ。
少將　抱きつくが嫌ぢやてゝ、通りかゝつて道を通らずに去なしやんしたら、卑怯であらうぞえ。
　ト時宗ムッとして
時宗　朝比奈が腰押して、留めかゝつた道、通らぬが卑怯なら、通つて見せう。
　ト少將を引退け通る。朝比奈、帶を摑み留めるうち、少將、目を廻す。
朝比　兄よ待て。おらが留めた、待てろ〳〵。ヤア、こりや目が舞うた。えらい事ぢや〳〵……少將、ヤイ〳〵。こりや一向氣が附かぬ。兄よ、こりや、どえらい事をしたな。
時宗　どうせうぞいの〳〵。
　トあわてる。
朝比　どうと云うてどうすべい。マア、水なりと呑ませろ呑ませろ。
　ト時宗、池の水をば掬ひ、口移しに呑ます。
少將　オヽ、嬉し。
　ト下より抱き締める。

初演の

稲番附

時宗　ヤア、そんなら目が舞うたのは。
朝比　祝言の杯さゝうと、云ひ合せた手練だ。なんと、
　えらい智慧であらうがな。褒めてくれろ〱。
少將　嫌ぢやと云はんすと、わしや死ぬるぞえ。
朝比　サア、兄よ、返事はどうだ。
少將　サア〱〱〱。
朝比　コリヤ、返事のないのは得心だ。委細構はず、抱き
　つけろ〱。
少將　オヽ、嬉し。
　ト抱きつく。時宗、迷惑がる。
朝比　めでたい〱。コリヤ、少將、このきほひ口に、兄
　をどこぞへ引ッ張つて行て、寝かせろ〱。
少將　サア、ござんせいなア。
　ト手を取る。時宗、睨む。
　アレ、朝さま、睨んでぢやわいなア。
朝比　ヘテ、兄よ、斟酌せずと早く行けろ。少將、何をう
　づついて居る。
少將　それでも、根ッからぢや。アレ、キッと立つてぢや
　わいなア。
朝比　サア、其やうにしやつきりと立つた所が、よいでな
　いか。
少將　何を云はしやんすやら。
時宗　そんなら朝比奈どの。
朝比　早く行け。
少將　サア、ござんせいなア。
　ト唄になり、少將、時宗を無理に連れ、橋がゝりへ入
　る。
朝比　アヽ、ても要らぬ色事の世話、しつけぬ事ゆゑ、は
　つとり草臥れた。さうして、どうやら斯うやらおれ一人
　にあがつた。
　ト呟くうち、祐信出て
祐信　これは〱、朝比奈どの、最早政子の御方にも、御
　歸館とござりまする。
朝比　イカサマ、左樣でござらう。貴殿にも御用意なされ
　い。
　ト行かうとする。
祐信　アイヤ〱、朝比奈どの、憚りながら義盛どのへ、
　仰せられ下されうは、兼ね〱望み居りました、御狩惣
　奉行の儀、犬坊どのゝお執成しを以て、大方は相勤めま
　するやうに、罷りなりましてござりまする。日頃からお

心にかけられ下さりまするゆゑ、ちよつと御傳言仕りますると、憚りながら仰せ上げられ下さりませう。

ト右せりふのうち、朝比奈、合點のゆかぬこなしあつて

朝比　祐信どの、待たつしやれ。御中言でござるが、この義秀、得心いたさぬは、先程神職方にて巻狩のお噂、義時どの達て貴殿に、狩場奉行職の儀を執成し云ひ召されども、祐經親子梶原などが支へこさへ、若輩者の犬坊が射留めし鶴を、我が獲物にせんと云ふ、後暗い曾我の祐信、殊に老人の勤むる役でないと、御狩奉行は犬坊丸に勤めさせんと、工藤が我まゝ。その座におらも胸悪く、この所へ參つたが、その後にて貴殿になりしや。その段分明なりませぬ。

ト此せりふのうち、祐信、くひ違うたるこなし、いろいろあり

祐信　朝比奈どの、義秀どの、ナ、なんと仰しやる。すりや、御狩惣奉行の儀は、犬坊どのへ。アノ犬坊……ハ、ハ、、朝比奈どのには、御酒參つたか。但しは御座興か。老人に悔りさせて、お笑ひか。日頃戯れ深い朝比奈どの、御座興でござらう〳〵。ハ、、、。

朝比　イヤ〳〵〳〵、祐信どの、朝比奈、御酒たべませぬ。座興も申さぬ。大眞實でござる。

祐信　すりや、御眞實か。

朝比　如何にも。

ト祐信、臆病口の方をキッと見て

祐信　鶴の手柄を犬坊に讓りしも、御狩奉行を乞ひ受けて、兄弟の敵祐經を。

ト朝比奈と顔見合せ、ヂッとなる。

呼び　頼家公の還御。

同　政子さまの御歸館。

ト祐信、キッとなり、胸にこたへたる思ひ入れあつて

祐信　朝比奈どの、お先へ參る。

ト向うへ走り入る。朝比奈、思ひ入れあつて

朝比　鶴の手柄を讓りしも、御狩奉行を乞ひ受けて、兄弟の敵祐經を。ハテナア。

ト眞の神樂になり、前の井戸より草履を拋り出す。朝比奈、キッと見て木隱れする。と井戸より又、草履を拋り、いろ〳〵試す事あつて、小次郎、頬かむり、太刀を持ち、井戸より上がり、太刀を戴き、向うへ行かうとする。朝比奈、ツカ〳〵と行て、小次郎を取つて

抛り
曲者、待ち居らう。
ト小次郎、物を云はずに顔隠し、行かうとする。朝比奈、捉へる。立廻りのうち、社杯の侍ひ、白丁を纏ひ窺ひ出て
侍ひ　やらぬぞ。
ト朝比奈に取りつく。この途端に小次郎、向うへ走り入る。侍ひと立廻りあつて、皆々を踏み倒し、向うを見て
朝比　何にもせよ、
ト走り入る。返し。
造り物、向う一面の御殿、本御簾かゝり、總附きの大襖。戸屋の口、橋がゝり、切り幕も皆々御簾になり、靜かなる太鼓入りの鳴り物にて、大名小名、社杯形にて、いろ〳〵あつて双方へ入る。と向うより
呼び　工藤犬坊丸祐友出仕。
ト橋がゝりより
呼び　梶原平三景時出仕。

ト橋がゝりの御簾巻き上げ、平三、烏帽子大紋にて出る。と向うより犬坊丸、愛敬三郎、瀧口六郎、海野小太郎、新谷荒治郎、御所黒彌五、秦野次郎、原小次郎、いづれも烏帽子大紋。小藤太、三郎、麻社杯熨斗目。後より祐信、長社杯にて附いて出る。
祐信　犬坊どの、先達てより段々お頼み申し置いたる、拙者が願ひ。
三郎　アヽ、やかましい。扣へさつしやれ。
祐信　祐經さまとも御内談あつて、只幾重にもお執成しの儀を。
小藤　ハテ、やかましい。扣へさつしやれと云ふに。
平三　これは工藤祐友どの。
犬坊　梶原景時どの。
平三　來月上旬、富士の御狩の惣奉行を、お勤めなさるるとござる。御若年には大切のお役目、御苦勞に存じまする。
犬坊　これは〳〵、御挨拶でござりまする。イヤモウ、疾にも登城仕らうと存ずるところ、何が彼の諸大名より、御狩奉行の役目を、某が勤めると聞いて、ヤレめでたいわいとあつて、種々樣々の心附け、イヤモウ、返禮に困

り入りましてござる。
平三　左様ござらう。イヤハヤ、拙者とてもお羨ましう存しまする。それと云ふも、祐經どのゝ羽振りがよいから。ナウ、いづれも、左様ぢやござらぬか。
六郎　成る程、イヤモウ、この瀧口めも、お羨ましう存じまする。
小太　拙者が假家萬端の儀、よろしくお指圖頼み上げまする。
荒彌　我れ／＼が假家も、お頼み申し上げまする。
犬坊　氣遣ひなされな。日頃の御懇意は、斯やうな所でござる。武具馬具兵粮鹽噌の萬端に、手前の入魂の衆中は、自由な所を場所に取りまする。また性の合はぬ衆達は、萬事遠い所に取らせまするに依つて、何か不勝手不都合にござる。それゆゑ大將の思し召しなども、とらめんぼうふる事でござる。ム、、ハ、、、、。
大名　兎角よろしく、お指圖を頼み上げまする。
犬坊　お氣遣ひなされな。承知でござる／＼。
　　ト此うち祐信、いろ／＼あつて
祐信　イヤ／＼、犬坊どのへ、祐信めがちとお願ひがござりまする。

犬坊　ハア、最前より何か斯う、身共が後で、ぼい／＼と非人が物を乞ふやうに聞えましたは、祐信どのこなたであつたか。何か願ひがあるとは、何を願はつしやる。犬坊め、聞き屆けてくれませう。願ひとはなんでござる。
祐信　イヤモウ、願ひと申しまして、餘の儀でもござりませぬ。先刻鶴ヶ岡にてお約束申した、彼の奉行の儀、何卒老人に仰せつけられ下されうならば。
犬坊　コレ／＼、祐信どの、そりや何を云はつしやる。何も犬坊、こなたと約束いたした事はないぞ。
祐信　ハテ、サテ、鶴爭ひの儀を。
犬坊　鶴爭ひが、なんと致した。エ、、そりや、拙者に云ひかけをして、外々の大名で見さつしやれ、眞ッ二つになる事でござる。そこを助け置くは、一家のよしみと申すものでござる。すりや、命の親ぢやわサ。
祐信　サア、そのお手柄を、貴殿に讓りしも、何卒惣奉行を。
犬坊　惣奉行が、なんと致した。平たうこの役目が欲しいと云はつしやるのか。そりや成りませぬ、私しの用事とは違ひまする。こりや、私用ぢやござらぬ。公用と申すものでござる。拙者は貴殿に讓りたい。ずんと讓りたう

ござるが、役目が開きませぬ。貴殿へやるにしてからが、役目が逃げて歸りまする。情ないもの。拙者は遣りたいが、君命が重うござる。コレサ、曾我どの、マア、よく身の程を辨まへさつしやれ。小身者と云ひ、人に勝れた貧乏人。秩父北條千葉佐々木、歴々の大身の勤まり兼ねる惣奉行を、中村一鄕の代官同然の薄い身上で、勤まらうと思うて居らるゝか。ハヽヽヽ、よしにさつしやれさつしやれ。

ト祐信、無念のこなしあつて、また氣を替へて

祐信　これは〳〵、御深切な犬坊どのゝ御挨拶。成る程、只今仰せの通り、身にも應ぜぬ惣奉行のお願ひ、をかしうも思し召さうが、弓矢を的とする狩場の采配、軍配と申し、家の規模にも相成る儀でござれば、何卒この願ひを。

平三　ハテ、サテ、しつこい。大切なる惣奉行の役目、犬坊どのゝ儘にもならぬ。この願ひは止しにさつしやれさつしやれ。

愛徴　祐信どの、先刻の鶴と申し、又ぞろ人の役目を勝ち落さうとは、何とやら法外にござるぞ。

六郎　最前より同じ事を、くど〳〵と聞き辛うござるぞ。祐信どの。

小太　老ぼれの勤まる役ぢやござらぬ。小身者の出過ぎた見苦しい。扣へさつしやれ〳〵。

荒治　狩場惣奉行は、犬坊どのに極まつてござる。及ばぬ事ぢや。ちよしなつて居さつしやれ。

彌五　この願ひは思ひ切つて、狩場の沓拾ひでもなされたがよい。それがこなたに相應なお役目ぢや。なんといづれも、左樣ぢやござらぬか。

皆々　左樣でござる。ハヽヽヽ。

祐信　すりや、どうあつても御推擧の儀は。

平三　成りませぬ。成らぬ事でござる。

祐信　如何やうに申しても。

犬坊　ヤア、成らぬ事を七くどい。役目の妨げ。ソレ、兩人、引ッ立てい。

小三　祐信、お立ちやれ。

ト兩人を引立てる。祐經、聞き出て

祐經　兩人待て。忰、最前よりこれに見聞き居るに、先輩を捉へ無禮の挨拶、法外であらうぞ。

トよき所に坐る。

犬坊　親人樣、何も拙者、無禮法外に

トぐづ〳〵云ふ。

祐經　ハヽヽ、さう云ふが無禮法外ぢやわい。何か樣子は知らねども、年寄りと云ひ、近しい一家の祐信どのに向ひ、出放題なる雜言過言。如何に若いとて、嗜なめ〳〵。祐信どの、忰が無禮、御容赦にあづかりませう。

祐信　これは〳〵、痛み入つたる祐經どのゝお詞、年罷り寄つたる拙者が、お願ひ申す事も後先に、くど〳〵しきは老人の常と思し召し、何卒拙者がお願ひの儀を。

祐經　イヤ、先達て承知いたし居ります。聞き屆けて罷りある。

祐信　すりや、拙者が願ひの儀を。

祐經　喜ばつしやれ。はや我が君の御上聞に、達し置きましてござる。

祐信　エヽ、有り難う存じまする。

犬坊　イヤ〳〵、親人、そりや何仰しやる。惣奉行の役目は拙者へ。

祐經　ハテ、サテ、小賢しい、扣へて居れ。

犬坊　でも祐信へ。

祐經　イヤサ、扣へて居らうぞ。

トきつと云ふ。

犬坊　へイ。

ト不承々々に扣へる。

祐經　サア〳〵、祐信どの、近うござれ〳〵。

祐經　ハア〳〵。

平三　祐信どの、常時出頭第一の工藤どのゝ御意ぢや。つつと出さつしやれ。

三郎　主人の仰せは、賴朝公の嚴命も同然。

小藤　キヨロ〳〵せずと、そこへ出さつしやれ。

祐經　ヤイ〳〵、兩人、老人を捉へて聲高に、そりや何事扣へて居らう。イヤナニ、祐信、貴殿の願ひは叶ひました。只今祐經め、直ぐに諸大名へも申し達しまする。

祐信　ハア〳〵、有り難う存じまする。

祐經　いづれも、ちと祐經、各々方に、無心がござりまする。

皆々　ハア、なんでがなござるな。

祐經　イヤ、餘の儀でもござらぬ。即ちこの祐信どのゝ儀でござる。小祿と云ひ、身貧にござれば、再三某をせぶられまする。一家の端でござれば、殊の外氣の毒に存じまする。何卒多少に寄らず、合力をして遣はされ下さるまいか。

愛敬　イヤモウ、當時出頭の貴殿の仰せ、何しに背きませう。
六郎　合力承知いたしてござる。
平三　これが彼の、今下々で持て囃す、頼母子と云ふのでござるかな。
小太　祐信どのには、結構な御一家をお持ちなされて、お仕合せでござる。
彌五　十兩づゝ寄つても、餘程の儀でござる。
平三　喜ぼつしやれ。祐信どの、一身上に有りついたと云ふものぢや。イヤ、おめでたい事でござる。
　ト此うち、祐信、いろ〳〵無念の思ひ入れあつて
祐信　イヤ祐經、小身にはござれども、曾我太郎祐信、頼朝公の御家人でござる。各々を頼み、合力は請けませぬぞ。
祐經　すりや、某へ毎度の願ひは、合力の儀ではなくて
祐信　御假屋惣奉行の儀を
祐經　アノ、その件が
祐信　何卒お執成しを以て。
祐經　如何にも申しつけて進ぜませう、と云ひたいが、成らぬ。
祐信　なんと。
祐經　申しつけぬがこなたの爲でござる。所詮申しつけてからが、小身で勤まる役ぢやござらぬ。こなたよりまだ外に、いろ〳〵様々の音物持つて、岡部の一族よりも、惣奉行の役目を願へども、所詮あちこちへ申しつけては、依怙の沙汰に落ちると存じ、若輩ながら悴犬坊に、惣奉行は最前申しつけてござる。例へ又、在鎌倉の大小名が、我まゝなりと嫉んでも、そりや叶はぬ。何を云うても我が君の、お覺えがめでたい。祐信どの、左様思し召し下されい。
犬坊　アレ、あの通りぢや。諸大名への合力の願ひなら、拙者も共々執成しを致しくれうが、惣奉行の儀は叶はぬ事。
平三　及ばぬ事ぢや。祐信どの、とつとゝ次へお立ちなされい。
皆々　お立ちなされ。
　ト祐信、無念のこなしいろ〳〵あつて、覺えず泣く。
犬坊　ハア、祐信が泣かれまする。親人、御覽なされい。不仁體な。涙流して泣かれます。ハヽヽヽ。
三郎　ブル〳〵と顫はつしやるワ。エヽ、寒うござるか。

肌薄なら、折々手前の屋敷へお見舞ひなされい。
小藤　お臺所にへちまうて居ると、滓酒にでもありつくわサ。
犬坊　イカサマ、こりや近江八幡が云ふ通り、立ち寄らば大木の蔭、長い物には卷かれいぢや。折々はこの犬坊が、お髭の塵の掃除さつしやれ。ハテ、垢ついた小袖でもくれるわサ。なんと親人、貧乏たれた形ぢやござらぬか。ハヽヽヽ。
平三　何かと云ふうち餘程の隙入り。我が君の御機嫌伺ひませう。
祐經　イカサマ、無益の事にホッと退屈。奥の間で御酒一獻。サア、いづれも。
皆々　工藤どの。
祐經　悴、參れ。
犬坊　先づ、ござりませう。
ト唄になり、この一件入ろと、あと合ひ方になり、祐信、いろ／＼無念のこなしあつて、これより胴を据ゑたる思ひ入れにて、短刀に寢刃を合せ、思ひ入れあつて奥へ行かうとする。朝比奈、最前より出かゝり見て居て、よき所にて
朝比　祐信どの。
祐信　義秀どの。
朝比　どうも料簡がなりませぬ。
祐信　料簡がならぬとは。
朝比　鶴ヶ岡の歸るさに、工藤親子が樣々の惡口。堪忍袋のほどけ口。うぬ、祐經を。
ト奥へ込ん込まうとする。祐信、いろ／＼留めて
祐信　待つた／＼、朝比奈どの。短氣にござるぞ。お待ちなされい。
朝比　ヤア、祐信どの、滿座の中で恥かゝされ、某ばかりか親義盛まで恥辱。留めさつしやるは、この朝比奈を腰拔け武士に召さるのか。こなたは。
祐信　イヽヤ、留めまするは貴殿のお爲サ。なぜと仰しやれ。當時工藤が我まゝは、諸大名も知るところ。その惡口に大切な、命果たさうとは、若い／＼。いま奥へ踏ん込んでは、頼朝公の御前間近く、狼藉者となつて、こなたのお身ばかりか、義盛どの御夫婦のお身にもかゝらば、親への不孝。お馬の先にて捨てべき命、私しの意趣に捨つるは恐れあり。一旦の憤りに、忠孝全きその身を果すと云ひ、後類を絶やさるゝと云ふ所へ、お心が附かぬ

か、朝比奈どの。
朝比　ヤア、なんと。
祐信　サヽ、とくと御賢慮あられませう。
朝比　尤もだ。親にも勝る貴殿の御意見。横紙破りの三郎、會得いたした。得心いたした。
祐信　すりや、數ならぬ老人が御意見の用ひられ、御得心下されうや。
朝比　朝比奈が身に徹して、エヽ、忝ないが祐信どの、さほど忠孝を辨まへながら、短刀に寢刃を合して、奥を目掛けて駈け入る有様は。
祐信　ヤア、なんと。
朝比　今の意見の鸚鵡返し、べん〳〵だらりと朝比奈が長いせりふは大禁物。不忠不孝の辨まへながら、後類の絶やされぬやう、兄弟の念願を達する、工風を召され祐信どの。
祐信　ヤア。
朝比　とくと御賢慮あられよサ。
ト唄になり、朝比奈、思ひ入れあつて入ると、祐信、忝ないと云ふ心にて、後を伏し拜むと、バタ〳〵にて、向うより竹の下孫八、裃にて走り出て、臆病口へ駈け込まうとする。
祐信　竹の下孫八どのぢやござらぬか。あわたゞしい、何事でござる。
孫八　祐信どの、これにござりまするか。今日鶴ケ岡へ奉納の白旗、神前にて紛失いたしましてござります。それゆゑの注進。御免下され。
ト走り入る。
祐信　ナニ、白旗が紛失とな。
トばた〳〵にて、小平太、走り出て
小平　御注進々々。
祐信　猪股の小平太どの、注進とは。
小平　鶴ケ岡へ奉納の御太刀、何者とも知れず、奪ひ取つて立退きましてござりまする。
祐信　ヤア〳〵、すりや友切丸も盜賊に。
小平　その場に落ち散るその小柄、我が君へ御注進。御免下されい。
ト走り入る。
祐信　すりや、二品ともに紛失。ホイ。
ト内より
呼び　頼家公の御出座。

ト また内にて
侍ひ　二品の紛失、御詮議がござる。いづれも奥殿へお詰めなされい。
ト また内にて大勢
大勢　ハア、。
ト天王立ち打ちかゝる。祐信、當惑の思ひ入れあつて奥を見やつてキッとなり、窺ひ／＼奥へ入る。返し。
造り物、打抜きの千疊敷、隨分見事にあるべし。祐信、出て、向うをキッと見て、小隱れすると、向うより大名段々に出る。祐信、一人々々に心を附け、こなしあり、大名皆々臆病口へ入ると、橋がゝりの御簾巻き上がる、秦野次郎、原小次郎、犬坊丸、御所黒彌五、新谷荒治郎、並よく出る。祐信、ツカツカと走り寄り
祐信　祐友、覺悟せい。
ト犬坊丸に切りかゝる。いろ／＼追ひ廻るうち、肩先を切る。犬坊丸、短刀の鞘にてあしらひ切り結ぶ。これにて入る。大名大勢、東西へ馳せ違ふ。
皆々　切りましてござるか。
ト愛敬三郎に尋ねる。
愛敬　その通りでござる。
ト云ひ捨て入る。
皆々　突きましてござるか。
ト瀧口六郎に尋ねる。
六郎　その通りでござる。
トいろ／＼騒ぐ。また大名一群れ逃げ出る。祐信、追ひかけ出る。平三、後より抱く。祐信、後さまに突く。平三、膝を突かれ、抱きながらバッタリと倒れる。返し。
造り物、一面の筋塀。早太鼓にて、アリヤ／＼の聲いろ／＼あつて、内より塀の敷石を抜き、大石を抱へて、祐信、大童にて、眉間に疵を受け出る。よき所に用水桶直しある。この水など呑む事あると、よきキッカケにて大勢、長柄にて取巻き、いろ／＼立廻りにて、追ひ込み。見得よくとまると、早太鼓静かになると、凄き合ひ方。祐信、いろ／＼思ひ入れあつて、身繕ろひして腹へ突ッ込むと、向うより、祐成、時宗、鬼王新左衛門、走り出て

祐時　ヤア、父上様。
新左　御主人様。
祐成　最早お腹を。
祐信　兄弟の者、鬼王。
三人　ハア、。
新左　ハア〱。
祐信　よくも馳け來りしな。今日賴家公、鷹狩のお供に、鶴を射留めしを、犬坊が我まゝ。まつた御狩奉行の願ひも叶はず、剰さへ工藤親子が雜言過言。是非に及ばすこの刃傷。
新左　エ、情ない。日頃のお氣質に引替へて、祐經が惡口に、早まつたこの御生害。
祐成　あなた樣がお果てなされ
時宗　何を便りに兄弟が。
祐信　イ、ヤ、今日の刃傷は、待ち設うけたる祐信が大慶。
新左　なんと仰しやる。只今の御生害を、お身の大慶。兄弟の子供が爲。
祐時　我れ〱が爲とはな。
祐信　實父三郎祐安が、修羅の妄執晴らさせんと、當歳の頃よりも、十八年のその間、養育をなしたるも、親の敵を討たさん爲。敵は知れても情なや、伊藤工藤が所領の仇、河津が仇を討つならば、復敵の掟を破り、大罪となるわいやい。
時宗　すりや父の仇なる祐經を
祐成　討つ事は叶はぬか。
祐信　サ、それゆゑにこそ殿中にての狼藉、犬坊に手を負はせ、斯く切腹なす祐信が、敵を討つて塚に手向けよ。
祐時　ヤア、なんと。
祐信　復敵こそ四海の掟、後の親なる祐信が、敵も左衞門祐經なるぞ。
新左　國の掟を背かねば、誰れに憚かる事もない。
祐信　時節を待つて河津が仇、この祐信が敵を討て。ア、心地よや。今こそ繼父の道を立て、地水火風を歸すワ。返す〱も敵を討てよ。云ひ置く事はこれ限り。大小名の目にかゝらぬうち、冥途へ罷る。
ト引廻すと、兩人兩方へ縋りて
祐成　十八年來今日まで、御養育にあづかりし
時宗　御恩も送らぬ不孝の大罪。
兩人　お免しなされて下さりませ。
ト取りつき泣く。祐信思ひ入れあつて

祐信　誠この通り祐安が、赤澤山の落命に、五つや三つの
汝等を、左右の膝にかき抱き、敵を討つて手向けよや。
修羅の妄執晴らさせよと、くれ〲も云ひ殘し、急所の
矢柄に手をかけて。
ト刀に手をにかけ、よろぼひながら立つ。
新左　アヽコレ、申し。
ト祐信を抱へ、思ひ入れ。
祐宗　敵を討てよ。
祐成　仰せにや及ぶべき、實父の仇、養父の敵。
時宗　祐經に出ツくはさば
祐成　一の太刀は十郎祐成。
時宗　二の太刀は五郎時宗、歩みの板までまツこの通り。
ト傍へにある石を拔討ちに切り割る。
祐信　出かした。
ト祐信、嬉しげにこなしあつて、刀を拔き、バツタリ
とこけて死ぬる。三人、こなしあつて
三人　ハア、。
ト大泣き。よろしく

幕

二段目　墓所の場

役名　工藤奥方、桂御前。祐信妻、萬戸。石田
治郎爲久。近江ト內。八幡三郎。榮長和尙。二の
宮の片貝。朝比奈三郎義秀。和田妻、巴御前。曾
我五郎時宗。

造り物、二重舞臺、臆病口折り廻り障子。眞中瓦燈
口、緞帳かけ、金襖、橋かゝり卵塔、石垣結ひ、垣
松のあしらひなど。此うちに小さき石塔に曾我大明
神と云ふ幟を立て、幕の內より大勢、參詣の體。双
盤の音にて幕明く。

仕出　なんと作兵衞、夥しい參詣ぢやないかいの。
同　ソレイノ、天氣もよし、ほろ溫いので、とつと遊山
の願ひ日ぢや。
同　時に由良太、先度から妙な寺へ、此やうに參詣があ
るが、こりやなんぢやの。
同　嗜なめ、これを知らぬか。コレ、この墓は曾我の祐
信と云ふ大善人が、今はつこうの古狸、工藤祐經が小狸
を、この間殿中でシユツと云はして、腹を切られて、そ

初演の

絵番附

同　こで曾我の大明神と、祝ひ込んで詣るのぢやわいの。
同　エヽ、とても事にその善人どのが、子狸より親狸を殺せばよいに。
同　どうでも運の強い親狸め、憎まれ子は世に憚りものぢやが、憎まれ親仁の古狸、どこまで憚らうも知れまいぞ。
同　イヤモウ、それについては、兎角いとしいは善人様。
同　南無世を直し給へ。
皆々　曾我大明神さま〵。
ト向うより
呼び　石田さまのお出で。
ト橋がゝりより
呼び　工藤さまのお出で。
仕出　ソリヤこそ、工藤の狸親仁。
同　参詣を見附けられ、咎められぬその先に。
同　サア、ござれ〵。
ト双盤にて、ワヤ〵云ひ〵入ると、唄になり、石田の治郎、衣裳𧘕𧘔、兜の箱を持たせ出る。向うより桂御前、裲襠、八幡の三郎、近江の卜内を連れ、橋がかりより出る。

桂御　これは〵、石田治郎爲久さま。
治郎　工藤の奥方桂御前どの、何用あつてこの所へ。
桂御　今日は夫工藤の父君、青向院殿の御命日。先日の騒動ゆゑ館の混亂、それゆゑ、夫の名代として、参詣いたしますでござりまする。
治郎　イカサマ、先日の騒動、某折悪しく所勞に犯され、その場所へかけ合はず近頃殘念。して、犬坊どの、梶原どのゝ手疵は、如何ござるな。
桂御　イヤモウ、僅かな擦りで、日を追つて全快でござりまする。
治郎　それは重疊。石田めも大悦いたす。
三郎　お喜び下されい。主人犬坊、お命全う。
卜内　梶原さまとてもその通り。イヤモウ、御前體は益々上首尾。來月上旬、裾野狩場惣奉行の儀は、犬坊どの御養生のうち、大殿祐經さま、御名代にお勤めなさるゝゆゑ、イヤモウ、館は一向混雜でござります。
桂御　して、石田さまには、今日何用あつて、御入院なされましたな。
治郎　某この所へ参りしは、聞きも及ばれん、先年粟津の合戰の砌り、敵の大將朝日將軍義仲を、討取つたる高

名手柄の印と、下し賜はるこの兜。義仲が最後まで、着したる龍頭。この度當寺祖師五百年の開帳ある由、寶物に出して、この石田が譽れを、普ねく人に知らせんその爲、持參いたして罷りある。

ト云ふうち奥より、和尚、伴僧を連れて出迎ひ

和尚　これは〳〵、工藤の奥方桂御前、石田治郎爲久さま。イザ先づあれへ、お通りなされませう。

治郎　一別以來、疎遠にござる。

桂御　今日は青向院殿の御命日。夫祐經、入山いたす筈なれども、お聞きの通りの騷動。それゆゑ自ら代參として、參上いたしましてござりまする。

和尚　その儀も先達て、承り居りまする。して、犬坊さまの手疵は、如何でござりまする。

ト内　イヤモウ、祐信がうろたへ眼で、切りつけた僅かの擦り手。日を追つて平癒でござる。

三郎　して、墓所の掃除は、なされてござるか。

和尚　お墓掃除も致させ置きましてござる。イザ、お詣り。

ト橋がゝりの方の石塔へ、花を挿し、樣々あるうち、治郎、上座に直り

治郎　イヤ、ナニ和尚、今日石田入山せしは、近日當寺の祖師、五百年忌の開帳ある由。この兜は先年、某が討取りし、木曾義仲の龍頭の兜。當寺の寶物となすならば、某が喜び。お寺の仕合せ。龍頭の兜、貴僧へしかと預け申す。

和尚　ハア、それは近頃御深切、忝なうござれども、木曾義仲は武將の枝葉、叛逆の名はあれど、寶物として汚名を殘すも如何しい。この儀は御容赦下さりませう。

治郎　すりや、この兜は。

和尚　武將の恐れ、只管御容赦を願ひまする。

ト此うちト内、三郎、墓へ手向けして

ト内　お住持へ申しまする。何分お墓のあたりが見苦しうござる。三方はさして構ひにもなりませぬが、あの西手の石塔が、殊の外邪魔になりまする。外方へ取退けさつしやつて下されい。

和尚　イヤ〳〵、一旦場所を選み、相立てましたる石塔でござれば、外方へ引き直しまする儀は、寺の法でござれば、どうもなりませぬ。その上あの石碑は、其許の御主人とも御一家の、曾我の太郎どのゝ石碑でござれば、猶以て引替へまする儀は、なり憎うござります。

三郎　何者の石塔かと存ずれば、曾我の祐信が石塔でござ

るか。然らば苦しうござらぬ。友切丸を紛失させた科人の祐信、主人が先祖の石塔と、並べ置きまするは、提灯に釣り鐘。釣り合はぬ事でござる。曾我が石塔でござるなら、猶以て引き直さつしやつたがよくござる。

治郎　こりや三郎が申す如く、科人の石塔と、工藤どの〻石塔と並べて置くは、なんとやら氣の毒。苦しうござるまい。引き退けてしまはつしやれ。

桂御　コリヤ兩人、お住持の事を分けてお頼み。殊に寺法とあるに法外な挨拶。扣へて居やうぞ。

三ト　ヘエイ。

ト内より伴僧、梅松櫻の造り花を生けし石臺にあるを三つ持ち出て前に直し

伴僧　ハア、今日は曾我祐信、二七日供養の爲、梅松櫻の造り花、佛前へ供へ下されよと、畠山どのより半澤六郎どのを使者として、この石臺を持たせ、ござられましてござります。

ト和尚、氣の毒のこなし。

和尚　桂御前さま、如何計らひませう。

桂御　これは〳〵、自らへの御遠慮ならば、苦しうござりませぬ。殊に佛前の捧げ物、おしをらしい造り花の梅松櫻、隨分お供へ遊ばされませう。

和尚　有り難うござります。ソレ、先づ曾我どの〻墓へ手向けい。

伴僧　畏まつてござります。

トよき所へ直す。

治郎　ナニ和尚、しかとこの兜は、什物には遣はぬぢやな。ハレ氣の毒千萬。先達て鎌倉中の諸大名へも、當寺に於て開帳の儀は、觸れ流し置いたれば、さうお云やると、身が虛言者になる、と云うておてまへ得心せねば、ムウ。

ト思ひ入れあつて刀を拔き

和尚、お命貰ひましたぞ。

ト振り上げる。桂御前、留めて

桂御　こりや、御短氣な。如何なされまするな。

和尚　こりや、愚僧をなんとなされまするな。

治郎　一旦義仲の兜、靈前に出すと吹聽して、今更この兜が止まりましたと、石田の治郎、諸大名へなんと申し譯がならう。それゆゑづく入の首を打ち落し、虛言でないと云ふ證據に致す。そこお退きなされい。

ト立廻りのうち、向うよりバタ〳〵にて、坊主一人走り出て

坊主　申し／＼方丈様、和田の奥方巴御前、木曾どのゝ兜を、當寺の開帳に出すと云ふ事を聞いた、住持に逢はうと云うて、大長刀をひらめかし、門前は亂騒ぎでございまする。
皆々　ヤア、。
　ト驚ろく。治郎、ギックリする。
桂御　して、巴御前は、これへお出でなさるゝか。
坊主　大方これへお出でゝございませう。
三郎　ヤア／＼。申し石田さま、兜の尻でございませう。
桂御　石田さま、こりや、どうせうと思し召しまする。
治郎　どうと云うたら、拙者とてどう致さう。この云ひ譯は和尚、こなたが召され。
和尚　それは迷惑でござりまする。
ト内　イヤ／＼、お住持、石田さまのお名が出ましては、事がむづかしい。
三郎　こりや矢張りこなた様の誤まりに、なさるゝがようござりませう。
和尚　ハテ、迷惑千萬な。
坊主　アレ／＼、もう爰へ見えまする。ヤレ、恐ろしや恐ろしや、
　ト逃げて入る。
坊主　お待ちなされい／＼。
　ト一聲にて、巴御前、衣裳襠裲、半白の垂れ、大長刀持ち、坊主大勢、長刀の柄に縋るを引き摺つて出る。
巴御　お許しなされい／＼。
　ト千鳥にかけて本舞臺へ出る。
桂御　これは／＼、和田の奥方巴御前さま、見ますれば何かこれは、御機嫌のよろしからぬ體でございまするが、如何なされました。
巴御　どなたぢやと存じますれば、工藤の奥方桂さま。マア、お聞きなされて下さりませ。この度當寺に於きまして、祖師の五百年の開帳に、木曾どのゝ兜が、寶物に出ると、諸大名の取沙汰。自らが先の夫と云ふ事は、よく極めの上、この巴に恥辱を取らし、鎌倉中の物笑ひになれよとの、思し召しでござりまするか。サア、住持はどれにござる。義盛が妻巴、お目にかゝりに參りましたぞ。
桂御　ア、、イヤ／＼、成る程、巴御前さま、一通りは聞えましたが、尤も義仲さまは、あなたの先のお連合ひなれども、今では朝比奈さまと云ふお子もある、和田さまと云ふ夫もあれば、今さら過ぎ去つた義仲さまの事、仰

つしやるのも、チウ二人の衆。
卜内　成る程、左様、頼朝公へ聞えましても、なんとやら異な物。三郎どの。
三郎　左やう〳〵。こりや、強い御詮議は止しになされたがよくござらう。
巴御　イヤ、お構ひ下されますな。是非とも住持にお目にかゝらねばなりませぬ。住持はどれにござる。これへ出さつしやれ。
和尚　イヤ、愚僧これに居りまする。最前よりお断わり申し上げようとは存じましたれども、餘りお腹をお立てなさるゝゆゑ、差扣へ居りまする。この儀は私しが存じましたる事でもござりませぬ。あれにござる石田さまが
治郎　ア、、コレ〳〵、和尚、粗相云ふまい。この爲久に詫びせいか。如何にも詫びなら致しくれうが、コレサ、巴御前、段々御尤もでござるが、こりや、お住持の心得違ひでござる。もう料簡なされて遣はされたがよくござる。
巴御　お構ひ遊ばされて下さりまするな。和尚が御辭退なされたを、側から大事ないと勸めた大名がござりませう。サア、そのお大名樣の名を承はりませう。いづれでござるな。
和尚　サア、勸められましたは。
桂御　アイヤ〳〵、申し、巴さま、この兜は自らが、命に替へても飾らす事ぢやごりざませぬ。
巴御　左様ならば、お開帳にはなされませぬか。
治郎　イヤ〳〵、この石田めも命に替へて、恥曝す事ぢやござりませぬ。
巴御　これは〳〵、御廟所のお命にかけてのお詞、それで自らも、落ちつきましてござりまする。
治郎　巴御前、先達て鶴ヶ岡へ奉納召された白旗紛失。義盛の科、親子閉門仰せつけられたに、誰れが許してこれへござつたな。但し、頼朝公の御上意、輕しめても大事ないか。
ト此うち、朝比奈三郎、目せき編笠着て、大廣袖にて出かけ居て
朝比　大事ない。
治郎　大事ないとは……お身や、朝比奈、いつの間に。
三郎　閉門の身を以て、歩行しても大事ないとは。
朝比　大切な白旗紛失ゆゑ、親義盛、閉門仰せつけられしゆゑ、巴親子は猶出歩かにやならぬ。

治郎 そりや又何ゆゑに。
朝比 大切なるお旗、並びに友切丸紛失、盗賊の仕業、詮議して差上げねば、和田一家にかゝる越度。閉門を守つて居ては、二品の詮議がならず、さるに依つて義盛は、上意を守つて蟄居の身。巴親子は盗賊の詮議し出し、白旗を取返すが、大頭どのへ忠義。なんとこれにも批判があるか。
三人 サア、それは。
巴御 サア〳〵〳〵、どうでござるの。
治郎 イヤ、どう云ひ抜けても、閉門の身を私しに歩行するは、我が君の上意を輕しむる朝比奈が大罪。
朝比 アノ、この朝比奈が。
治郎 オヽ、サ、巴も同罪。
朝比 しかとさうか。
治郎 くどい〳〵。
朝比 御上使。
治郎 ナニ、御上使とは。
朝比 我が君よりのお墨附。
ト墨附を出して見せる。
皆々 ハア。

ト朝比奈、上座へ直り、ウロ〳〵見廻し、碁盤を前へ出して腰をかけ
朝比 白旗詮議に出歩いて居る最中を、賴朝公の急用ぢやと、呼びつけられて貰うて來た、墨附は工藤が詮議、取る物も取り敢へず、のぶすな形な御上使樣、上座御免なされい。
巴御 義秀、見れば君の御書を持つて、工藤どのゝ詮議とは。
朝比 先頃鶴ヶ岡へ白旗奉納の、役目は拙者。その後は盗人が入つて、大切な白旗をくすねた科、親仁樣にかゝつて九十三騎は閉門。こりやア詰まらぬ事だと思うて、いろいろ詮議の最中に、聞かつしやれい、上使の役目。即ち二品の盗賊、犬坊丸に相極まり、云ひ譯には切腹させよとの嚴命。
三郎 イヤ、朝比奈三郎さま、それにはなんぞ
朝比 證據と云ふはこの小柄。なんと動きは取れまいがな。
ト桂御前、いろ〳〵心遣ひのこなしあつて
桂御 問ふも憂し、問はぬも辛し武藏鐙、この年月憂き苦勞、賴みに賴む夫の心底、その血筋をば請け繼いだ、犬

坊丸が我まゝ非道。義理ある仲の意見もならず、なれども大切なる二品の盗賊、汚名を蒙むつた犬坊丸、腹切りやるをマヂ〳〵と、なんと見て居られませう。あの子の科を身に請けて、死ぬるがせめて女の操。巴さま、石田さま、御上使様へお執成し。

朝比　執成すまでもない。盗賊科極まつた工藤祐經、一家の奴等は片ッ端に皆殺し。エヽ、くたばつておしまやれ。

桂御　南無阿彌陀佛。

巴御　待つた。マア、お待ちなされませい。

朝比　母人、なぜ留めさつしやる。

巴御　犬坊丸を殺せとある、頼朝公の御上意なら、其方に上使仰せつけられう筈はないわいなう。

朝比　そりや又なぜに。

巴御　犬坊を殺すと云はゞ、子に引かさるゝ親心、祐經どのが二品の盗賊と、自身名乘つて出られうかと、其方の思案であらうがの。

朝比　如何にもさうだ。

巴御　その犬丸坊の代りに、桂御前を自害させなば、猶以て心を固め、叶はぬところと二品を破却してあらば、和田九十三騎は一生埋れ木。

朝比　すりや、おらが智恵では寶は知れぬか。

巴御　サイナァ、二品の寶を盗み取る程の祐經どのならば、奥方にも心ほだされて、盗賊の汚名を受け、ムザ〳〵と二品を其方に渡さうか。

朝奈　サア、それは。

巴御　マア、とつくりと思案をしやいなう。

朝比　エヽ、忌々しい。

治郎　最前より爲久が、始終の様子を承るに、巴どのゝ御詮議、尤も〳〵。とてもこの詮議、急に落着とも相見えませぬ。先づ奥へお出であつて、とくと御詮議お糺しなされい。拙者も共々御相談仕らう。

和尙　イカサマ、爰は端近。奥の間へお入りなされませう。

巴御　成る程、事解らぬこの場の詮議。石田さま、桂御前にも自らと一緒に。

桂御　左様ならば巴さま。

治郎　朝比奈どの。

朝比　石田どの。

三人　何れも奥へ。

卜三　御上使様には

皆々　先づお入りあられませう。

ト唄になり、この人數皆々奥へ入る、卜内、一人殘りあたりを見て

卜内　巴親子が旗の詮議、主人より預かり居るこの御旗を、身が所持するは危ないもの。

トあたりを見て、鉢植の中へ隱す。此うち桂御前、出かけ見て居る。

巧い〳〵。

トこなしあつて、卜内、入る。桂御前、右の旗を掘り出し

桂御　忝ない。この旗を巴御前に……イヤ〳〵、それでは夫の訴人、義理ある犬坊が爲にもならず、ハテ、なんとしたものであらうなア。

ト内より

坊主　桂御前さま〳〵、御上使樣がお召しなさるゝ。桂御前さま〳〵。

ト呼ぶゆゑ、桂御前、奥へ行かうとして、旗を持つて居るゆゑ、急に隱し所に困りし心にて、松の石臺を掘り、手早く隱して思ひ入れあるうち、三郎、出かけてこの體を窺ひ見て居るを、また内より忙しく呼ぶ。桂御前、こなしあつて入る。三郎、右の旗を掘り出し、植の石臺へ隱すと、治郎、出かけ、これを見て居る。三郎、巧い〳〵と云ふこなしにて奥へ入る、治郎、右の旗を取り

治郎　日頃望みし源家の白旗。エヽ、忝ない。

ト懷中して

ドリヤ、奥へ參らうか。

ト唄になり入る。と後合ひ方にて、曾我の五郎時宗、着流し深編笠にて、向うより手桶に樒を携へ、石塔へ花を手向け、いろ〳〵あつて

時宗　口惜しや、諸大名の卵塔玉垣、高々たる其うちに、父の墓は野原の石。これが中村庄の主、曾我太郎祐信どのゝ石塔か。これと云ふも

ト氣味合ひあつて

口惜しや。エヽ、思へば

トこなし。

アヽ、思ふまい〳〵。取分け今日は二七日の逮夜、大方母人樣もお詣りなさるゝであらうが。アレ〳〵、あれは慥かに二の宮太郎どのへ、養子に行た妹片貝。見附けられては……さうぢや。

ト唄になり、木蔭へ忍ぶと、合ひ方にて、向うより駕

籠を吊らせ、片貝、花を持ち、びらり帽子、着流し振り袖、抱へ帶にて出る。

片貝　申し、母様、もうお寺でござりまする。駕籠の衆、駕籠を立ちや。

ト駕籠を下ろすと、萬戸、婆の形にて出て

萬戸　片貝、お寺へ案内申してたも。

片貝　イヤ、申し、母様、今日はお寺で、何やら御詮議があると云うて、門前にいかいこと侍ひ衆が居られました。私しも武家衆に逢ふは面伏せ。墓へばかり參つて、お歸りなされませいなア。

萬戸　そんなら、さうしませうわいの。

ト石塔の側へ寄り

オヽ、いつの間にやら、綺麗に掃除しやつたなう。

片貝　イヽエ、まだ掃除は致しませぬわいなア。

萬戸　ハテ、不思議な……さうして其方は、まだ花を立て替へはしやらぬかいなう。

片貝　アイ。

ト此うち時宗、出て、片貝と顔見合せ、片貝、今に悪いと云ふこなし。時宗、ちツと扣へる。

萬戸　この間から持たせて來た花は、其方が持つて居やるのに、この新らしい花の立てあるは……團三郎は使ひにやる。祐成と鬼王は、この母が留守を云ひつける。誰れが此やうな花を立て替へたぞ。

片貝　そりや、大方

ト時宗と顔見合せ

どこぞの人が、立て置かしやつたのでござりませうぞいなア。

萬戸　他人に大事の石塔へ、花立てゝもらふ覺えない。片貝、ちやつとその花立て替や。

片貝　アイ。

ト時宗を見て、心意氣立つて、立て替へようとする。時宗、替へなと云ふこなし。兩人、いろ／＼あつて

萬戸　ハテ、立て替やいなう。

片貝　アイ。

ト花を替へる。萬戸、石塔に向ひ

俗名曾我祐信どの、二七日追善佛果菩提、南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。浮世の盛衰と云ふものは計られんもの。先夫河津どのに別れしは、昨日や今日と思ひしが早十七年、杖柱とも思ひし祐信どのは、二七日以前にお果てなさるゝ。子と云うても禪師坊は、遠國に住む。京

の小次郎は悪黨者ゆゑ勘當する。其方は二の宮へ養子に遣る。今では子と云ふは祐成一人。アヽ、果敢ない浮世ぢやなア。

片貝　なぜ其やうに思し召します。小身にこそあれ、今の親二の宮太郎も居りまする。取分け五郎さまも

萬戸　コレ〱、片貝、五郎とはなんの事を。この母が子と云ふは、今では祐成より外にはない。

ト時宗、石塔の間より出て、萬戸が側へツカ〱と行き

時宗　コレ、母者人、子と云ふは十郎より外にないと、御意なされたが、この五郎めは子ではござらぬか。何の罪、何を我まゝを致し、五郎めは子でござらんな。

萬戸　親の詞を用ひぬ不孝者、子でないと云ふが母が誤まりか。

時宗　この時宗、お詞を背きしとは。

萬戸　出家したか。

時宗　エヽ。

萬戸　父河津どのゝ供養に、出家せよと箱根山へ登せしが、何ゆゑ歸つた。

五郎　そりや、母人が御無理でござりまする。この五郎には實父の敵、工藤左衛門を討たいでは、なんと坊主になられませうぞ。出家にならぬ事を越度とて、御勘當とは、あんまりお情ない事でござりまする。

片貝　母様のお詞、御尤もとは思へども、一圖に敵が討ちたいと思うてござるも、父への孝。杖の下からも廻る子で、何程難題仰しやつても、慕ふ心はお前へ孝行。すりや、心に科はござりませぬぞえ。一旦お詞背きしは、云ふに及ばぬ今の後悔。お腹立ちも御不興も、さらりと流して御勘當を、お赦しなされて下されませ。

ト泣く。

萬戸　成る程、云やればそこもある。父母に孝行盡す心に、科はない五郎ぢやもの、料簡せいでなんとせう。いま目の前で勘當も赦すぞ。

片貝　エヽ、それは誠か。

時宗　御眞實か。

兩人　エヽ、有り難い。

ト萬戸、時宗が大小を取り

萬戸　大小は武士の魂ひ、その魂ひを父母に、孝行なと云ふ詞に免じ、勘當赦して側に置く。また形はこの母が詞を背き、出家せぬ科に依つて、いつまでも勘當ぢや。

兩人　エヽ。
萬戸　出家せよと勸むるも、生れついての短氣者。事に逸るは血氣の勇とて、大望を抱へし者の戒める事。そりや忘れはせまいがな。勘當の上に大小を、取上げたも母の慈悲。早う立つて行き居らう。
時宗　そんならどうでも。
萬戸　ならぬと云ふに。
時宗　ハアヽ。
　トこれより一調の唄になり、時宗、向うへ入ろ。萬戸、片貝、あと見送り思ひ入れ、顏見合せ
萬戸　サア、片貝、下向せう。
片貝　アイ。
萬戸　おぢや。
　ト行かうとする。卜内、橋がゝりへ出て
卜内　老母、お待ちやれ。
　ト留めるゆゑ、萬戸、こなしあつて、ツカ／＼と臆病口へ行かうとする。三郎、出て
三郎　老母、お待ちやれ。
萬戸　こりや、なんとなされまする。
　ト治郎、朝比奈、出る。

治郎　曾我の老母に、お上よりお疑ひがかゝつた。
卜内　そこ一寸も
三郎　動き召さるな。
萬戸　ナニ、私しにお疑ひとは。
朝比　オヽ、婆樣か。この間は、さぞ力落しでござらう。
萬戸　御推量なされて下さりませ。
朝比　コレ、婆樣、そこは土間ぢや。マア、こちへ上からつしやれ／＼。ナニ、石田治郎、曾我の老母に詮議とは。
治郎　二品の落着、詮議いたさうと存じて。
朝比　ハヽヽヽ。奉納の役人は曾我の祐信。これとても死人に文言。可哀さうに婆を呼び留めたとて、何を彼れが知るもので。
治郎　ところを詮議いたしてお目にかけう。なんと老母、二品の寶の盜み手は、祐信であらうがの。
萬戸　イヤ、必らず粗相仰しやるな。二品の寶を、夫祐信が盜んだと云ふには、なんぞ慥かな
卜内　證據と云ふは最前の小柄、庵に木瓜は曾我の定紋。紛失の場に落ち散りありしが、盜賊と云ふ證據サ。
朝比　イヽヤ、二品の盜賊は、工藤左衞門祐經サ。
三郎　イヤ、申し、朝比奈さま。又しても主人祐經を盜賊

呼はり。
ト内　主人祐經を盗賊と云ふには、なんぞ慥かな
朝比　證據と云ふはこの小柄だ。庵に木瓜は工藤が定紋。
萬戸　すりや、その小柄が紛失の場所に
朝比　落ち散つたが慥かな證據。
治郎　イヽヤ、盗賊は祐信サ。
朝比　イヤ、盗賊は祐經に相違ない。
三人　なにを。
　ト三人キッとなる。此うち、巴御前、出かけゐて
巴御　双方とも待て。
三人　ぢやと申して。
巴御　ハテ、待てと云ふなら、マア、扣へて居よ。
　トよき所へ直り
　コリヤ、三郎、卜内、それにある梅櫻の二つの石臺、こ
れへ持て。
　ト兩人、悔りこなしめつて
兩人　アノ、この石臺を。
巴御　早う持て。
三人　ヘエイ。
　ト兩人こなしあつて、二つの石臺よき所に直し、元の
所に坐る。松の石臺と右二つとよろしく一緒にある。
巴御　爰へ、桂御前、出かけ心遣ひあり
　老母、盗賊の疑ひかヽつた。祐信は相果てられ、親
の罪は子にかヽるが四海の掟。この鉢植ゑの梅の木は、
先づ冬木より咲き初むる、窓の梅の北面、雪嵩じて寒き
にも、この木より咲き立てば、梅は諸木の兄十郎、石臺
をすつぱりと切り離し、盗賊でない云ひ譯。老母、早う
立つたがよいわいなう。
　ト三郎、大きにあわてる。
萬戸　成る程、梅は諸木の兄十郎、盗賊でないと云ふ、お
疑ひ晴らし。梅を切りやそむべき。
　ト脇差を抜きて振り上げる。三郎、あわて留めて
三郎　ア、コレサ〳〵、老母、心底見えた。盗賊は祐成
ぢやない〳〵。
治郎　ナニ、祐成でないとは。
三郎　祐成ではない。盗賊は外にある〳〵。
萬戸　すりや、盗賊は十郎ではござらぬの。
三郎　そりや、拙者が請合ひぢや。祐成ぢやない〳〵。
朝比　すりや、祐成は盗賊でないと云ふ、其方が請合ひか。
三郎　請合ひも〳〵、近年の大請合ひぢや。

朝比　とんと請合ひの西瓜面ぢや。
　トほりこかす。
巴御　櫻を見れば春ごとに、花少し遲ければ、殘る弟の五郎時宗。サア、もし又兄でなくば弟にと、これも疑ひかかるまいものでもない。
萬戸　弟は取分け、父なうて、心を盡し育てしに、今はこれ侘びて住むゆゑ、櫻切り燻べて
　トまた振り上げる。ト内、あわて留めて
ト内　アヽ、コレ　老母、氣の短かい。これを切つて堪るものか。
萬戸　でも身の誤まりを。
ト内　イヤサ〳〵、もう、立つた〳〵。身の明りは立ちましたぞ。
治郎　コリヤ〳〵ト内。イヤサ、苦しうない。その鉢植ゑを切りはらして、科を五郎に。
朝比　なんだ。
治郎　イヤサ、科人の五郎、何もかもわれが構ふ事はない。扣へて居れサ。
ト内　イヤ〳〵〳〵、ならぬ〳〵。この中は惡い〳〵。
　イヤサ、科もない五郎を切つては惡いサ。
治郎　ハテ、何が惡い。エヽ、切らせいサ。
ト内　エヽ、なんにも知りもせいでから。弟五郎に科はない。身共が請合ひだ〳〵。
朝比　すりや、曾我兄弟に盜賊の惡名はないか。
ト内　とんとない〳〵。
朝比　オヽ、よく吐かいた。
　ト蹴りこかす。
巴御　さて又松はさしも實に、枝を矯め葉を透かし、その甲斐今は嵐吹く、祐經どのゝ疑ひは、これとても子に、かゝりあると植ゑ直し、種は愛子の犬坊丸。ハテ、切り折つて薪とせう。
桂御　申し、この小松はどうぞ。
巴御　イヽヤ、助け置かれぬ盜賊の科。
萬戸　松は元より證にて、衞士の焚く火はお爲なり。
　ト切らうとする。桂御前、立廻りにて兩方ともにとまつて
桂御　コレ、申し、この松を切らしやんすと、祐經どのと自らが、夫婦の縁も切られるわいなア。
　ト泣く。
萬戸　そんなら寶の盜賊は。

桂御　この小松でござりますわいなア。
巴御　こりや、斯うありさうな事。
萬戸　朝比奈さま、お聞きなされましたか。
朝比　出かした。これでさつぱり工藤が科になつたぞ。サア、桂御前、して、白旗は。
桂御　その云ひ譯は斯う。
　ト巴御前が持つて居る懷劍を取り、自害する。ト內、三郎、寄らうとする。
イヽヤ、寄るまい／＼。科人はこの桂。コレ申し巴さま、惡黨でも犬坊は、義理ある子。なんとオメ／＼切腹がさせられう。自らが生害は、犬坊が身替りに先立つ桂。心底を思ひやつて、何事もこの場を無難に。
　ト拜み泣く。
巴御　お氣遣ひなされますな。この小松さへ手に入る上は、犬坊に科はない。
桂御　エヽ、忝ない。
朝比　イヤ、桂さま、犬坊丸に科がないとは。
萬戸　これ程知れてある詮議の筋。
朝比　桂御前が自身の白狀。
萬戸　小柄は工藤が家の紋。
朝比　これでも工藤に科はないとは。
　ト朝比奈、小柄を見る。巴御前、取つて
巴御　サア、その紋が祐經どのゝ紋ぢやに依つて、この詮議が解らぬ／＼。
朝比　何ゆゑ解りませぬぞ。
巴御　この紋所は庵に木瓜、鎌倉の諸武士のうち、この定紋は工藤と曾我どの。すりや、詮議が落着せぬぢやないかいなう。
治郎　巴御前の詮議尤も。三老職たる祐經どの、二品の寶、盜み替へさうやうがない。
三郎　いづれも喜ぼつしやれ。寶の詮議が解つたぞ。
桂御　エヽ、忝ない。巴さまのお指圖、お禮は未來で。この松をお忘れなう。おさらば。
　ト懷劍を拔き、死ぬる。
巴御　天晴れ貞女、いとしやなう。
朝比　母者人、して、盜賊は誰れでござる。
巴御　老母、祐信存生の砌り、家に傳はる鷄の目貫を差上げ、手柄を犬坊に與へしも、兄弟の者どもを、御狩のお供させうばかり。その工藤どのを科人にして、兄弟が年來のナ。但し、工藤どのを科人にしては。

ト萬戸、いろ／＼あり

萬戸　誠は祐經どのを科人にしては。

巴御　なんと老母、合點がいたか。

萬戸　すりや、科人は何者。

巴御　刀奉納の役人は、曾我太郎祐信、相果てし上は、悴十郎祐成に、刀の詮議仕出して差上げませい。

萬戸　すりや、小柄を證據に友切丸の詮議を。

巴御　紋は庵に木瓜なれど、工藤どのは科人でないぞ……ナ、合點か。

萬戸　成る程、詮議いたしてお目にかけませう。

巴御　富士の御狩は五月二十八日ぎり。それまでは刀の行くへが知れねば、兄弟の者が御狩のお供は叶ひませぬぞ。

萬戸　五月二十八日。

ト指を折り

朝比　刀の詮議も二十八日。

萬戸　行くへが知れたら、二人の子供を

巴御　問ふに及ばぬ。御狩のお供。

萬戸　エ、、忝ない。

ト三　後日の妨げ。

ト三郎、ト内、行かうとする。朝比奈、キッとなつて

朝比　コリヤ、何ひろぐ。

片貝　申し母様、ござんせいなう。

ト手を取る。

萬戸　左様ならば、お二人様。

朝比　片時も早う。

巴御　御老母。

皆々　おさらば。

ト唄になり、萬戸、巴御前、互ひに目禮をして橋がゝりへ入る。三郎、ト内、こなしあり、朝比奈、始終雨人に目をつける。三人ともよろしく思ひ入れ。

三郎　エヽ、殘り多い。

ト此うち治郎、兜を三方に載せ、持ち出る。

治郎　桂御前の自害にて、盗賊の様子もあらまし知れたれども、二品の詮議はこれまで。御上使の命、謀叛人の詮議召されぬか。

朝比　謀叛人の詮議とは。

ト治郎、右の兜を、朝比奈が前に直す。朝比奈、此うち大煙管にて煙草のみ居る。

治郎　義仲が最期まで着せし兜、當年當時の祖師、五百年

の開帳に、飾らせんと云うたは某が計略。果して最前巴御前、我が恥なりと憤り、この寺へ踏ん込まれたるは、幼な馴染の義仲を慕ひ、謀叛の企てあるまいとも云はれぬ。朝比奈どの、こなたとても義仲の胤、この兜を見ては無念にあらう。口惜しうござらぬか。なんと兩人、さうではないか。

三人　こりや、無念にありさうな事でござる。

巴御　エヽ。

　ト きしむ。朝比奈、ほくそづき、毛抜にて髭拔いて居る。

その兜を見るにつけ、思ひ出すも二昔。木曾どのゝ御最期は、朝比奈が未生以前。我が夫木曾義仲公、砥並倶利伽羅の軍に打勝ち、勢ひ朝日の昇るが如きとて、自ら朝日將軍と尊號し給ひしを、梶原景時が讒言にて、御謀叛なりと汚名を受け、頼朝公の代官として、範頼義經發向して、宇治の手の戰ひも、佐々木梶原が高名に討ち破られ、心細くも只一騎、粟津ヶ原のあなたなる、松原指して落ち給ふ。

治郎　成る程、某もその手の陣に加はり居れば、軍の始終は存じある。頃は正月下旬、春めきながら冴え返り、比叡の嵐の雲行きも、空も夕邊とくれは鳥。

巴御　怪しの雲の通ひ路や、末白雪の薄氷、深田に馬をかけ落し、引くとも上がらず。

治郎　打つとも行かぬ望月の、駒の頭も見えばこそ

巴御　身の果なんと詮方も、呆れ果てゝ居給ひしが

治郎　いづくより來りけん、今ぞ命は盡き弓の、矢一つ來つて、内兜にからりと射る。

巴御　痛手にてましませば、堪りも敢へず馬上より、おちこちの土となつたわいなう。

　ト 泣く

治郎　なんと無念にござらうかの。

　ト 治郎、こなし、けしかける。巴御前、愁ひのこなし。

朝比　アヽ、退屈やの〳〵。聞きたくもない木曾どのゝ負け戰。尤も實の親ながら、腹の内から義盛に養はれ、義仲とは他人も同然。後の親をほんとせいと、本文を聞きはづつた朝比奈。木曾どのが負けうが、紙子着て川へ嵌らうが、この朝比奈とは喰合ひはない。

三郎　すりや、御最期の樣子聞いても

三人　無念にはござらぬか。

治郎　ハテ、無念になくてなんとせう……サア、その詞が

誠なら

三藤　賴朝公を敵と狙はぬ潔白、義仲が着捨の兜、踏まるるならば踏んでお見やれ。

朝比　すりや、この兜さへ踏めば、賴朝どのを恨まぬと云ふ、朝比奈が潔白になるか。

治郎　踏まぬは義秀、二心か。

三藤　猶豫は謀叛の下心。

三人　サア／＼／＼。どうぢや。

ト兩方より詰め寄る。朝比奈、苦もなう踏みしやぐ。この時、朝比奈、懐中より連判狀落つる。治郎ソッと拾ふ。

三郎　ヤア、、その兜を。

朝比　踏んだがなんぢや。踏まねば朝比奈を謀叛人ぢやと、寄つてかゝつてせぶらかすゆゑ、云ひ譯の爲に踏み躙つたがなんとした。

治郎　イヤモゥ、忠義一圖の義秀どの、石田めも驚ろき入つてござる。

三郎　此やうに龍頭の兜が、がんつ錢にならうとは存ぜなんだ。

治郎　この由、我が君の御前へ披露いたさう。

朝比　兎角よろしく石田どの。

治郎　後刻御前へ御同道。

朝比　お支度よくば、お知らせなされい。

治郎　然らば左樣。

朝比　石田どの。

治郎　御兩所、後刻。

治郎　爲久さま。

三郎　兩人、來やれ。

ト唄になり、治郎、三郎、卜内、目配せして奥へ入る。巴御前、ツカ／＼と行き、件の兜にて、朝比奈を打ち据ゑる。

朝比　コリヤ、母樣、おらを何とさつしやる。

巴御　なんとするとは、爰な不孝者めが。

朝比　おらを不孝者とは。

巴御　赤肉は母の胤、白肉は父の胤、身體髮膚は父母の筐み。それ／＼、その眉尻に持つ黒子まで、義仲さまに生寫し。無實の罪にやみ／＼と、討たれ給ひし御無念を思ひ廻せば、エヽ、口惜しい。さしも勇猛の譽れ高き、木曾の血脈を受けながら、勿體なくもお着捨ての、桑形打つたる龍頭、八幡座には御先祖の系圖、由緒書を籠め

置かれしを、踏みたんだく天罰、目前母が打擲。五臓六腑へこたへうかな。
朝比　イヽヤ、こたへぬ〳〵。そりや、こなたが無理ぢや無理ぢやよ。
巴御　ナニ、この巴が無理とは。
朝比　また無理であるまいか。木曾どのに離れたは未生以前、この年月義盛に養はれ、人となりし大恩は、富士山を百層倍。この主の頼朝公に、敵たはつしやつた義仲どの、その義仲の子ぢやと云うて、何者を敵と。
巴御　オヽ、目指す敵は頼朝一人。
朝比　その頼朝は養父の主君。
巴御　一旦思ひ立つたる巴、義盛どの離縁せば、主でも杭でもない頼朝。木曾どのゝ弔ひ軍、其方を大將軍。千騎萬騎の士卒より、男勝りのこの巴、日本國を敵に受け、頼朝に泡吹かせんは、我が手の裏にあり。先づ手初めは石田治郎、木曾の爲には當の敵、奥へ行て石田めが、首引き抜いて義仲公への孝行始め。サア、義秀、早う〳〵。
朝比　イヽヤ、石田を殺すは味方討ち。この相談は不得心ぢや。
巴御　ヤア、片意地を云はずとも、行けと云ふに行かぬのか。
朝比　行かぬ〳〵。行かぬと云うたら金輪際、爰一寸も動かぬわいの。
巴御　動かぬとてこの母が、動かさずに置かうか。母が手並を忘れたか。行かずばおのれ、ひね〳〵せうか。
朝比　嫌ぢやい。
ト朝比奈、怖がることなし。
巴御　行かぬか。
朝比　行かぬ〳〵。
トどうばる。巴御前、手を引く。朝比奈、大石塔を抱へ、意地張る。巴御前、石塔ぐるみ引き返す。石塔かへる。
巴御　サア、意地張り者、云ふ事聞かぬか。
ト突き放す。朝比奈、石塔を下に置き
朝比　否ぢや〳〵〳〵。
ト石塔に腰かける。
巴御　是非に及ばぬ。義秀覺悟。
ト石塔を取り、立廻りにてよろしくとまる。巴御前石塔を差上げ、キッと見得。
朝比　コリヤ、母者人、どうさつしやる。

巴御　大腰拔けを手に持つたは、巴が誤まり。其方を手にかけ自らも、ともに冥途で木曾どのへ、云ひ譯する、觀念せい。

ト立廻りにてよろしくとまる。此うち三人、奥より出かけ居て

治郎　待つた巴御前、義秀どのを殺すに及ばぬ。

巴御　當の敵の石田の治郎。

ト石塔を打ちつけうとする。

治郎　ヤレ暫し、義仲公の首取りたるは某なれど、射とめしは國俊が流れ矢。亂軍の討死より、謀叛の思ひ立ち。巴御前、今日より石田め、お味方申す。

巴御　一人にても味方の欲しきこの時節。して、一味の印は。

ト治郎、兜を出し

治郎　その印はこの兜、最前義秀どのに踏ませしは、眞赤いな似せ物。それと知つて踏んだるは、仔細あらんと窺ふうち、懷中より落ちたる一卷。四國西國語らはれし、一味徒黨の連判狀。ホヽヽ、天晴れ／＼。

巴御　すりや、義秀も叛逆の

朝比　ホヽ、斯うなる上は、包まん用なき我が陰謀。道樂者となつたるは、父義盛を始めとし、鎌倉中の諸大名に、疎まれん我が計略。サア、石田、幕下に附くに治定せば、慥かな證據、見たい／＼。

ト治郎、懷中より白旗を出し

治郎　これこそ紛失の白旗。祐經が隱し置きしを、手段を以て奪ひ取りたるこの一品、謀叛の礎、お渡し申す。

ト治郎、渡す。朝比奈、とくと改め見て

朝比　如何にも。これこそ源家の白旗。石田治郎、心底見えた。

治郎　この上は心を合せ、事成就せば日本半國。

朝比　イヤ、この旗さへたくつたれば、もう汝に用はない。早くくたばつてしまひ居らう。

ト石塔を打ちつける。治郎、其まゝ死ぬる。

巴御　オヽ、出かした／＼。

朝比　母樣、云ひ合せた通り

巴御　白旗無事に取返せば

朝比　九十三騎の明りは立つた。

巴御　石田を討つたは當の敵。

朝比　着捨ての兜も手に入る上は、

巴御　再び廻り近江路の、栗津ケ原に一字を建て

朝比　この兜を籠め置いて
巴御　義仲寺とも巴寺とも。
朝比　來世に殘す朝比奈の、勇氣無双の石塔引き。
　トどんちやんにて張り子鬘の捕り手大勢出て、
捕手　主人の敵、やらぬぞ。
朝比　ヤア、物々しきうんざいめら。覺悟せい。
　ト早笛にて、皆々、朝比奈、巴御前を追ひ廻すと、アリヤ〳〵にて、三郎、ウヂ〳〵と出て、櫻の鉢植を目八分に構へ、向うへ走り入る。ト内、同じく梅の鉢植を持つて向うへ走り入ると、捕り手大勢逃げ出る。巴御前、松の大木、朝比奈は石塔にて、追ひ廻す。皆々、逃げ廻る。朝比奈、追つかけうとする。
巴御　ヤレ、朝比奈、長追ひ無用々々。
朝比　白旗さへ手に入れば、うんざいめらは頓着ない。
巴御　一時も早うその白旗を
朝比　頼朝公へお渡し申さう。
巴御　早う行きや。
朝比　合點ぢや。
　ト捕り手大勢出て
捕手　やらぬぞ。

　トかゝるを、朝比奈、あも重れに大勢を倒し、その上に上がり、小さい扇にて煽ぐ。
巴御　出かした〳〵。
皆々　世直し〳〵。
　トよろしく　　幕

三段目　曾我閑居の場

役名――江間小四郎義時。八幡三郎行氏。京の小次郎。米屋平右衛門。油屋彦三郎。炭屋善五郎。祐信妻、萬戸。鬼王新左衛門。同弟、團三郎。同妹、小糸。傾城、龜菊、同、玉琴。遣り手、すぎ。寶來屋才右衛門。曾我十郎祐成。曾我五郎時宗。

造り物、二重舞臺、向うに障子屋體、納戸口。臆病口、中二階、よき所に、首の出る仕掛けの手水鉢。押入れ。正面に、米櫃直しある。但し底は切拔きあり。橋がゝり、門口くだ戸、少々柴垣。橋がゝりの後、兜、幟、鎗、長刀、立てあり、幕の内より、鬼

王妹小糸、曾我の母萬戸、粽の粉を挽いて居る。掛乞ひ平右衛門、彦三郎、善五郎、ワヤ／＼云うて居る。幕明く。

三人　マア、去んでくれいでは濟まぬ。どうするのぢやいなう。どうぢやいの／＼。

萬戸　ニモウ、こなさん方の云はしやんすのは、重々尤もでござんす。先刻にからも云ふ通り、鬼王も團三郎も内に居ねば、あいらが戻つたら、どうなりとするであらう。マア、歸らしやつて下さりませ。

小糸　此やうな事は、夢にも御覧じた事はない母御様、あなたのお詞に免じて、どうぞマア歸らしやつて下さりませ。

平右　オヽ、借錢乞ひの事譯は、夢にも見やつた事はあるまい。知らぬと云うて事は濟まぬ。鼻の下を養うた米代ぢやぞや。

彦三　マア、爰な内に油火灯すが誤まり。油買はずと、なぜ古木でも拾ひ集めて焚きやらぬぞいの。否でも應でも油代貳百五十目、この節季に取らにやならぬのぢや。

善五　エ、お前方は米屋さん油屋さんか。お前方が塞がつたに依つて、そこで此方へ來たのぢやな。わしはこの上の町に居ります、炭屋善五郎と云うて、歩錢貸しでごんす。コレ婆様、よう聞かしやれや。爰な鬼王とやら鬼王とやらが來て、どうぞ味噌鹽を仕送つてくれと云ふに依つて、少々づゝ仕送つてやつたぞや。如何にも初手の間は、壹貫と貳貫とおこしたてや。段々尻殘りが、三百五十目と云ふ物たゞ待つて、その上に米が切れたワ味噌がないワ、醤油ぢやワ汁の浮かしがないワ、イヤから漬の香の物をくれいの、尻殘りがある上に、段々仕送つてやつたぞや。今日が日までも、百と固まつた錢はおこさぬが、舍利が甲になつても今日は取らにやならぬ。此方も意地ぢや。疊でもまくつて去ぬワ。サア婆さん、どうさしやるのぢや／＼。

平彦　サア、どうぢやいの／＼。

小糸　成る程、借りました物を上げませんのは、皆私しが方が無理でござりまする。私しらは何にも存じませぬ。鬼王どのや團三郎どのが歸られましたら、少ゝ宛でも上げまするでござりませう程に、マア、歸らしやつて下さりませ。

平右　ようべり／＼しやべる女子ではあるわいの。ならぬぞや。

小糸　サア、そのならぬ所を。
彦三　ハテ、アタしつこい。錢取らにや去ぬる事はならぬ。サア、婆樣、どうさしやるぢや。
善五　おいらにしやべらして、俯向いてばかり居ては濟まぬわいの。所詮埒は明くまい。無頼漢どもを待つて居やうより、ごくに立たずと、この家の根太も簀の子も打ち放して、持つて去なうぢやござるまいか。
平右　成る程、これはよい思案ぢやわいの。サア〳〵、面々に壞ちかけう。
ト皆々肌を脱いで奥へ行かうとする。小糸、留めて
小糸　そんならどうでも、御料簡はなりませぬかえ。
三人　打ち壞つて、借錢の内上げに取つてやるのぢや。
小糸　それでも、其やうにしられましては、母御樣を寐さしまする所がなし、どうぞ御料簡はござりませぬかいなア。
彦三　寐る所のないばかりぢやない、明日から喰ひ物がないぞ。理詰めで和御寮も惣嫁と出かけにやなるまい。
善五　婆樣役相應に、髮の落ちでも拾ひに歩かしやれい。サア皆の衆、マア、疊からまくりかけたがえい。サアサア、婆樣、退いた〳〵。

ト わや〳〵云ふうち、園三郎、大根、牛蒡、五六把提げて、最前より聞いて居て、懐中より財布を出し、大根牛蒡を中へ包み、重たさうにかたげて内へ入る。
園三　サア〳〵、お金が參りました。ヤレ〳〵、辛どやの辛どやの。
小糸　オヽ、園三郎さん、戻らしやんしたか。先刻にから御母樣を捉まへて、あの衆が大抵の事ではなかつたわいなア。
園三　アイヤ、えいてや。ハイ、只今歸りましてござりまする。
萬戸　オヽ、園三郎、戻りやつたか。なんぢや知らぬが皆の衆が、きつう腹を立てゝござりまする程に、そこへ事分け申しやいの。
園三　左樣でござりませう。お腹の立ちまするは、御尤もでござりまする。私しもツイ歸りまする筈でござりましたが、十郎さまの揚屋拂ひを持つて、大磯の郭屋へ參りましてござりまする。遲い段は御料簡なされて下りませい。
萬戸　何を云ふぞいやい。あの衆が何やらおこせと云うて、いから腹を立てゝ

團三　サア〳〵、お腹の立つは重々御尤も樣でござります
る。今日の御法事の包み銀三貫五百目、二拾宛あるやつ
ばつかり選つて居りましただけ、隙が入りましたやうに
ござりまする。
萬戶　なんの事ぢやぞいやい。
三人　サア、團三郞、この節季に事分けは聞かぬぞ。どう
するのぢや。
團三　上りさん達は爰に何して居る。
平右　米代八百六十目。
彥三　油代二百五十目、今日がきつしよぢや。受取らにや
去なぬぞ。
團三　ハヽヽヽ、鈍な和郞達ではあるわいの。早う行かし
やれいの。遲いと拂はぬぞや。早う行た〳〵。
三人　どこへ行くのぢやぞい。
團三　ハテ、中村の隱居へ行かしやいの。アヽ、こなた衆
は爰へ錢取りに來たのか。中村の隱居で拂うて居る事を
知らぬか。知らにやおいらに問うたがよいわいの。今日
は爰で大切な御法事があるに依つて、商人方へも觸れを
廻して、兄貴が拂ひして居らるゝ。皆中村の隱居へ行た
のに、こなた衆は、又爰へ、どうして來たのか。
三人　フウ、そんなら拂ひするか。
團三　ハテ、今日は五月の四日ぢやないかいの。
三人　如何にも。
團三　早う行て受取て來たがよいわいの。遲いと皆錢で拂
ふぞ。カウツ、米屋油屋仕送り、皆銀拂ひぢやわいの。
慥か包んであつたと思うたが、マア〳〵、遲うならぬう
ちに、早う行た〳〵。
小糸　コレ〳〵、兄さん、あの衆を中村へやりまして、拂
ふ當が
團三　ハテサテ、今が拂ひの最中ぢやわいやい。われが鼈
甲の櫛が欲しいと云うたに依つて、金十兩かけて置いた。
小糸　エヽ。
團三　どこの小間物屋で買うたものであらうぞ。
小糸　何をキヨロ〳〵云はしやんすぞいな。當もない事を
云うて、あなた方に腹を
團三　サア〳〵、拂ひをせうと思うて、兄貴が帳面を扣へ
て待つて居らるゝわい。
萬戶　コリヤ團三郞、又ひよんな事云うて、難儀すなよ。
アレ、おとましい事ぢや。
團三　申し〳〵、お前は御存じござりますまいが、十郞さ

まと五郎さまとへ、北條どのから御祝儀が參りました。先づ御兄弟へ黄金九十枚、文錢ばつかり選つて壹萬貫、米が五十駄、金が五百貫目、馬に付けて中村の隱居の門口を、エイヤ〳〵と持ちつける。お前へお慰みとあつて五色の氷砂糖が千斤參りました。そこでこいつを今日の法事の包み菓子にと。また包み金の事仰しやりましたゆゑ、藏へ入つてこま金を選りましたが、さて無いものでござりまする。やう〳〵貳貫目ばかりでござりますところを、北條どのから參りました五百貫目の銀のうちから、壹貫五百目選り出しましてござりまする……やう〳〵三貫目拵らへました。なんぼ金が澤山でも、輕い金と云ふものは無いものでござりまする。

ト萬戸、小糸、合點のゆかぬ思ひ入れ。掛乞ひ。キョロキョロする。

三人　そんなら團三さん、中村へ參りませう。

團三　ハテ、まだ行かぬかいの。キリ〳〵行たがよいわいの。遲うならうぞや。

三人　ハイ〳〵、イヤモウ、隱居で拂ひのある事、とんと存じませなんだ。

團三　サア〳〵、早う行た〳〵。

三人　ハイ〳〵、そんなら參りまするでござりませう。ヤレ嬉しやの。

ト わや〳〵云うて入る。團三郎、門口へ出て

團三　ソレ、兄貴が錢で遣らうと云はれうと、どうぞ金にして拂うてもらはしやれや。團三郎さんに頼んで置いたと云はしやれや……ハヽヽヽ、うまい奴等ではあるわいの。

小糸　コレイナア兄さん、今云はしやしたが、本まかいなア。

團三　あのやうに云うて見せんと、彼奴等が去に居らぬに依つてぢやわいやい。

萬戸　コリヤ〳〵團三郎、そんなら今云うたのは、皆嘘ぢやな。

團三　どの道嘘はつかんなりません。借錢の斷わりに、ほんの事云うて堪るものでござりまするかいの。

萬戸　ヤレ〳〵情なや。如何に貧乏をすればとて、侍ひの身で町人を僞はると云ふは。

團三　ハテ、埒の明かぬ事ばかり仰しやりまするわいの。今日は河津さまの十七回忌にお當りなされました、大切の御法事ぢやに依つて、そこで彼奴等に腹を立たさぬや

うに、マアちつとの間と喜ばしたものでござりまする。

小糸　そしてマア、お前の金ぢやと云はしやんした、この財布は何ぢやえ。

團三　金の正體、さらばお日にかけうか。

ト財布明けると、大根牛蒡出る。

お膳に遣はうと思うて、大根牛蒡三十五文が物を買うて來た。サア妹、奥へ持つて行て料理せい。そして粽の粉は挽いてしまうたかやい。

小糸　サア、先刻から挽かうと思うたけれど、今のやうに掛取りが來て、疊をまくつて去ぬるワ、道具を持つて去ぬるワと云ふに依つて、そこどころぢやなかつたわいなア。

團三　エヽ、埒の明かぬ、借錢乞ひをさう怖がつて、貧乏はなか〳〵えゝしとぎやせまい。えいワ、この臼はおれが挽くワ。マア、われは奥へ行て料理拵らへせい。

小糸　其やうに云うて騙したに依つて、借錢乞ひが來うぞえ。

團三　ハテ、來んやうに、おれがして置くわいやい。

萬戸　そんなら團三郎、もうやかましい事を聞かしてくれなよ。ほんに今朝からのもや〳〵で、大切の御命日、とんと忘れた程にの。ドレ、奥へ行て回向せう。サア、小糸も來い。南無阿彌陀佛々々々々々。

ト唄になり、萬戸、小糸、奥へ入る。團三郎、いろいろ思案して思ひ入れあつて、硯箱を出し、貸家札を書き、門口へ貼り、思ひ入れあつて内へ入り、戸を締めると、京の小次郎出る。

小次　なんぢや貸家。面妖な。宿替へせぬ筈ぢやが、貸家札を貼つて、内で臼挽く音がする。幟も立つてある。エエ聞えた。今日は節季ぢやに依つて、借錢乞ひの來ぬやうに、貸屋札を貼つて置き居つたな。

ト表をしやくる。

團三　誰れぢや〳〵。爰なは二三日跡に宿替へしてどこんした。爰は空家ぢや。借錢乞ひなら去んだ〳〵。

小次　さう云ふは團三ぢやないか。借錢乞ひぢやない。爰明けてくれい。

團三　借錢乞ひでなうて誰れぢやいの。

小次　おれぢや。マア、爰開けいやい。

團三　面妖な。此方の内へ外の者は來ぬ筈ぢやが。借錢乞ひか貧乏神より來ん筈ぢやが。

トぼやき〳〵表を開ける。

ソリヤ、こんな貧乏神ぢやと思うた事いの。
小次　貧乏神とは誰れが事ぢや。
團三　ハテ、貧乏神とは、お前の事ぢやわいの。
小次　何を頬桁の明いた任せに、阿房口たゝかすと、母者人呼んでうせう。
團三　阿母さんは留主。
小次　母者人が留守なら十郎に逢はう。
團三　留主。
小次　鬼王を呼んで來い。
團三　留主。
小次　アノ、皆内に居ぬか。
團三　今日は幾日ぢやと思はんすぞいの。五月の四日ぢやわいの。内に居ると酒ばやし程の火が降るわいの。そこで阿母さんも息子どんも兄弟も、借錢乞ひはおれに振向けて置いて、どこへやら出て行かれた。面妖、借錢乞ひの斷わり、葬禮にはおればかり云ひ付ける程にの。
小次　コリヤ〳〵、泣き言云ふな。無心に來たのぢやぞ。
團三　ハ、、、、お前、此方の内に無心にごんしたか。
小次　オ、、母者人か十郎に逢うて、グッと無心云はにやならぬ。

團三　世間は廣い事ぢや。曾我どのへ無心に來ると云ふはお前もきつい貧乏神ぢやの。
小次　此奴が〳〵、貧乏人を貧亡人と云や腹が立つがな。エ、小突くぞよ。
團三　ア、、叩かれたいなア。叩かれても三文にもならぬ
小次　もう料簡がならぬわいやい。
ト此うち、小糸、出て見て居て、小次郎を留めて
小糸　申し〳〵、なぜ其やうに腹をお立てなされまするぞいなア。
小次　オ、小糸か。あの阿房めが頬桁過ぎてならぬに依つて、ちつと戒めてこまそと思うて。
團三　コリヤ〳〵妹、甘う云ふな。無心に來たのぢやぞ。キリ〳〵まくし出せ。
小糸　コレイナア兄さん、滅相な事云はしやんすないなア。十郎さまや五郎さまの爲には兄御。兄親を追ひ出して堪るものかいなア。
團三　なんぼう兄御でも、此やうな無頼漢が、三千世界にあるものか。サア、飯にかへても色事が好きぢやワ。博奕は打つワ。喧嘩するワ。大酒を喰ふワ。
小次　ヤイ〳〵、博奕打たうが大酒吞まうが、曾我の家で

は奉らねばならぬ京の小次郎さまぢやぞよ。
團三　所を奉らんぢや。
小次　なぜ。
團三　ハテ、追ひ出されて居るぢやないか。祐信さまの生きてござる時に、ごくに立たずぢやと云うて、追ひ出して置いたこなたぢや。自體爰な内へ足踏みもする事ならぬ人ぢやわいの。
小次　そこが親子ぢや。指が汚ないとて切つて捨てられるものぢやないわい。自體に今の母者人は、河津の後家ぢやワ。此方へ嫁入りしてござつたは、おれが繼子ぢやワ。繼子のおれぢやに依つて、義理があるに依つて、少しの用無心は、マア母者人が聞かねばならぬわいやい。なんと理窟ではあらうがな。
團三　所をきかぬぢや。
小次　なぜ。
團三　無いぢや。
小次　何が無い。
團三　無心を聞かうと思ふ氣がない。金がなし、錢がなし米もなし、有る物は質の札、油虫、借錢乞ひ。
小次　錢金の無心ぢやない。母者人に貰ふ物があつて來た。おのれがやうな奴に、相手になつて居ると腹が立つ。小糸、母者人は留主ぢやと云ふが、ほんまか。
小糸　ハイ、母御樣は今
團三　留主ぢや／＼。えらい留主ぢや。
萬戸　小糸よ、早香爐持つて來い。
　ト内にて云ふ。
小次　ても、噓を吐く奴。ドリヤ、奥へ行て母者人に逢はうか。
團三　ハア、しまうた。せう事がない。奥へ行て阿母樣をいぢらしやれ。
小次　いぢらいぢや。いぢる術ぢやもの、いぢらいぢや。
小糸　サア、小次郎さん、御用があるなら、奥へお出でなされませいなア。
小次　行かいぢややい。阿房め、今日はどうで隙が入る程に、なんぞ旨い物を拵らへて置き居ろう。ドリヤ、行て婆樣いぢらうか。
　ト唄になり、小次郎、奥へ入る。
團三　あのやうな小面の憎い人間が、ようあつた事ぢやぞ。
小糸　それはさうと、この十郎さまは、どうしてお歸りなされませぬ事ぞいなア。

圓三　ほんに、この和郎もこの和郎ぢやわい。家來にばつかり苦勞をさして置いて、昨夜戻ると二日醉ひぢやの、イヤ頭痛がするわのと、ほんに碌な餓鬼らは一人もない程にの。マア、兄めは、あの通りの無頼漢ぢやい。十郎さまは大磯の虎に腰を拔いて居らるゝ。五郎さまは短氣者で、勘當を受けて居らるゝ。とんとすべり立つた男の子、三人ながら極道ぢや程にの。

小糸　コレ、其やうに誹らしやんすな。奧へ聞えるわいなア。

圓三　また小次郎どのが阿母樣に、どのやうな事を云ひ居らうも知れぬ。奧へ行て邪魔してこまそ。妹、來い。

ト圓三郎、小糸、入る。向うより、祐成、酒に醉ひたる體にて、龜菊、玉琴、すぎ、付いて出る。

すぎ　申し〳〵、危ない。もそつと靜かにお出でなされませいなア。

玉琴　ほんに、きつい醉ひやうぢや程にの。

龜菊　そして、お前のお屋敷は、どこぢやぞいなア。

祐成　どこの爰のと云ふ事はないわいやい。なんであらうと、門構への塀が、東へ一里ばかり、西の方の高塀が、二里ばかり。門の柱が金と銀と、鬼瓦が珊瑚珠の鬼瓦ぢや。

そんな屋敷があるなら、連れて行け〳〵。そこがおれが屋敷ぢや。

龜菊　先刻にから尋ねたれど、其やうな屋敷はござんせぬわいなア。

玉琴　よい〳〵、向うの幟の立てゝある所へ行て、十郎さんのお屋敷は、どこぢやと、問はうぢやあるまいかいなう。

すぎ　それ〳〵、それがようござんせう。サア、早うござんせいなア。

ト皆々本舞臺へ直り

申し、ちつと物が尋ねたうござんす。

ト内より圓三郎出て

圓三　誰れぢや〳〵。爰は空家ぢやわいの。借家札が目にかからぬかいなう。

ト云ひ〳〵表へ出る。

すぎ　申し、このあたりで、曾我の十郎さんのお屋敷は、どこでござりますえ。

圓三　なんぢや、曾我の十郎さんのお屋敷。曾我にお屋敷と云ふお屋敷は無い筈ぢやが。

すぎ　イヤ、エイナ、東の塀が一里ばかり、西の塀が二里ば

かりある、大きな屋敷ぢやわいなア。

團三　ア、曾我の十郎さまの屋敷がかえ。

玉琴　門の柱が、金と銀とぢやわいなア。

龜菊　鬼瓦に珊瑚珠のしてある、屋敷の事でござんすわいなア。

團三　面妖な。

祐成　サア〳〵、二人ともに歩かぬかいやい。何を云うて居るぞいやい。

すぎ　お前のお屋敷が知れませぬわいなア。

祐成　知れぬと云ふ事があるものかいやい。なんであらうとも大きな屋敷ぢや。

ト團三郎と顔見合せ

團三　なんぢや、大きな屋敷ぢや。コレ、十郎さま、今日は五月の四日ぢやぞや。此方の内は降るわいの〳〵。それになんぢや、面白さうに。

祐成　コリヤ〳〵、わりや誰れぢや。

團三　わりや誰れぢやア。

祐成　フウ、團三郎ぢやなつても大きうなり居つた程にの。

龜菊　お近付きでござんすかえ。

すぎ　此やうな汚ない家に、お近付きがござりますかいなア。

團三　コレ、十郎さま、おれにばつかり氣を揉まして、廓通ひどころぢやあるまいがな。ほんに此方の家は、借錢乞ひと悪者で交ぜ返すわいの。ちつと内に居て、借錢の斷わりを云ふがよいわいの。

三人　そんなら爰がお前の内かえ。

祐成　なんのいやい。此方の内が、此やうな汚ない内で堪るものか。爰は此方の門番めが所ぢや。なんと二人の者こんな所で一つ呑んだら、氣が替つて面白からうぞえ。

龜菊　ほんに、樂しきは侘しきにありぢや。一つ呑まう。

祐成　サア〳〵、おぢや〳〵。

ト内へ入る。

すぎ　ても、汚ない内ではあるわいの。そこら中が埃だらけぢや程にの。太夫さん方、滅多に坐るまいぞえ。

祐成　コリヤ〳〵、酒持て來い〳〵。

團三　なんぢや、酒。

祐成　サア〳〵、酒を持て來い。

團三　ナニ、酒を。

祐成　ハテ、機轉の利かぬ奴ぢや。早う持つて來いやい。

團三　暴れさらすワ。

ト銚子鍋に水を入れこなしあつて
ソレ酒。
すぎ　昨夜からの呑み續けで、重い物は上がらぬ程に、なんなりと、ちよつとして出さんせいなう。
祐成　酒ばかりは呑めぬ。なんぞ輕い肴をして來い。
園三　我が折れるワ。コレ、泣く子も目を明くと云ふわいの。
祐成　ハテ、キリ〳〵肴を拵らへ居れやい。
園三　アヽ、色は諸道の妨げぢやなア。
ト以前の大根をツカ〳〵と切り、爼板ごと持ち出て
ソレ、肴。
祐成　ドリヤ〳〵、どんな物を拵らへ居つたぞ。なんぢや大根か。これは出かし居つたわいやい。これはなんぞやらずばなるまい。
ト羽織を脱ぎて向うへ拋り
二日醉ひに大根の輪切りとは、きつい粹ぢや。ソヽ、褒美にくれる。有難いか。
ト園三郎、口の内にてぼやき〳〵、埃を叩き、疊んで置く。
龜菊　なんと、杯廻さしやんせぬかいなア。
玉琴　おすぎ、其方から杯を廻しやいなア。
すぎ　ほんに、さうせうわいなア。コレ、そこな汚ない人。爰へ來て酌さんせ。
園三　ても、なめたものぢや、
ト銚子鍋を持つて酌する。
すぎ　オツと一つあるぞ……こりやマア酒かいなア。とんと雨水を呑むやうな程にの。
園三　ハテ、小言を云はずと呑みやいの。錢取らずに只呑ますのぢや。ほんに今日程ごくに立たぬ、けないどが來る日はない程にの。
龜菊　祐さん、なんぢややら、あの人は、きつう腹を立つて居やしやんすぞえ。
玉琴　なんと面白うないぢやないかいなア。もう去なうぢやないかいなア。
すぎ　それ〳〵、此やうな汚ない所に居やうより、早う去んだがましでござんすわいなア。
龜菊　コレ祐さん、わたしらは、もう去ぬるぞえ。
玉琴　虎さんに言傳はないかえ。コレ、祐さん、わしらはもう去ぬるぞえ。
すぎ　昨夜からの大酒で、こけた所で他愛もなう寢やしや

んした。斯うして置いて去なうわいなア。コレ、そこな人さん、祐さんが目が覺めたら、お屋敷まで行て下さんせえ。わし達が事を問はしやんすなら、先へ去んだと云うて下されや。

團三　それ／＼、足元の明いうちに去んだがよかろ。長居したら棒喰さうも知れぬ。キリ／＼去んだ／＼。

すぎ　そんなら祐さんの事、頼むぞえ。

龜菊　先刻にから遣ひ立てましてござんす。なんと御馳走でござんしたえ。

すぎ　サア、道が遠い。早うござんせいなア。コレ、汚ない人、祐さんの事頼むぞや。

　ト三人、向うへ入る。團三郎、後を眺め、表を締め

團三　ても、ようしやべる女郎さいどもぢや。うせるから去ぬるまで、しやべり續けぢや。

　トいろ／＼ぼやく。祐成、起きて

祐成　コリヤ／＼團三郎、其やうに腹を立てないやい。

團三　立てないところぢやないわいな。お前もちつと嗜なんだがよいわいな。今日は節季ぢやぞえ。

祐成　サア、おれも節季は知つて居るて。そこで素面では去なれぬと思うて、何が彼の大きな物で、グッ／＼とやりかけたれば、とんと夢中になつた。所でとんと今日の節季を忘れた。そこでツカ／＼と此方の內まで連れて戻つて、後へも先へも行かなんだ。仕舞ひがつかぬに依つて、腫れた顏して居たれば、皆去に居つた。そしてマア、今日の拂ひはどうしたぞ。

團三　大方は拂うてしまうたが、マア、五六間殘つてある。

祐成　それは味をやつたわいなう。あの米屋めがやかましう云ひ居つたぢやあらう。

團三　なんの、やかましう云うて堪るものかいの。やかましう云はぬやうに、面を張つて置いたわいの。

祐成　出かした／＼。定めてさうあらうと思うて、それでおれがゆつくりとして戻つたのぢや。

　ト此うち、團三郎、硯を出し、帳を持ち出て

團三　カウツ、先づ米屋よしと。油屋よしと。仕送りの善兵衛よしと。

　ト帳を段々消す。

祐成　コリヤ／＼團三郎、帳を消すが、わりや拂ひしてしまうたかい。

團三　拂ふ錢がどこにあつていの。

祐成　拂ひもせずに帳を消すとは。

團三　ハテ、いつもの節季も〱、さう〱事譯は云はれぬぢや。所で思ひ付いて、爰へ來る借錢乞ひの向きを、中村の隱居へやつてのけたぢや。

祐成　出來た〱。これは日本一の智惠ぢやワ。シタガ、中村へ行き居つても、締めてあるに依つて、又爰へ來居らうぞよ。

團三　所を來んやうに、禁厭をして置いたぢや。

祐成　禁厭とは。

團三　サア、鬼どもを拂うて置いて、此方の家にはしやんと貸家札を貼つて置いた。なんときつい智惠か。借錢乞ひが戻つて來居るワ。空家ぢやワと云ふワ。理詰めで去なねばならぬ。ぢやに依つて當節季は、拂うたに依つて帳を消したものぢや。

ト此せりふのうち、以前の掛乞ひ、ワヤ〱云うて出る。

平右　憎い奴でござるわいの。おいらを遣ひたい程遣ひ居る。なんとしたものであらうぞ。

彥三　なんであらうと、屋財家財ぶち壞して、去んだがよござる。

善五　それ〱、腹癒せに腹存分に、踏みのめして置いて戻りませうぞや。

平右　なんぢや貸家。エ、聞えた。さてはこちらを中村へやつて、後でこそと夜拔けとやりをつた。えい〱、先刻にからまだ道具退ける間はない。屋財家財ぶち崩して持て去なう。サア入れ。

ト此うち、團三郎、祐成、いろ〱思案して、十郎が着物を團三郎に着せて囁き、團三郎、呑み込み、臼の下に敷いてある澁紙を取り、硯箱を持つて表へソツと垣を越して出る。よき所にて、掛乞ひドヤ〱と入り

彥三　氣遣ひさしやんな。道具はあるぞ。

ト　わや〱云うて奧へ行かうとする。祐成、留めて

祐成　ヤイ〱、うぬらは何奴ぢや。案內もなしに奧へ踏ん込み、尾籠な奴の。

平右　さう云ふ貴樣は誰れぢや。

祐成　誰れであらうぞ。この家の主ぢやわい。

彥三　なんぢや、主ぢや。主なら猶免さぬワ。貸した物は取らいでも大事ない。存分にせにやアならぬぞ。

祐成　ハヽヽ、われ達は何者で、其やうに騷がしう云ふぞ。

善五　知れた事、借錢乞ひぢやわいの。

祐成　何は兎もあれ、浪人なれども曾我の屋敷。理不盡に

踏ん込んだら、枝骨切つて切り折るぞ。
平右　こりや面白いわいの。負ふせた物はおこしもせず、その上おいらを殺しやつたら、お前の首がない。斯う云ふからは此方も覺悟の前ぢや。サア、ならば切れ。切らるゝものなら切つて見やいの。
ト祐成にかゝり、大勢寄つて祐成を打擲する。最前より、團三郎、澁紙を素袍にして、硯箱にて顏をいろいろに彩り、表に立てゝある長刀を腰に差し、思ひ入れあつて、ツカ〳〵と内へ入り、借錢乞ひを取つて投げ睨む。
三人　ヤア、わりやマア誰れぢやい。
團三　おらが一番留めかゝたらば、天地が引ツくり返つても、留めた〳〵留めた。
三人　してマアわりや、誰れぢや。
團三　天地に轟く雷電のお姿は見ずとも、定めて音にも聞きつらん。おのれら如きの惡魔外道を引ッさらへ、西の海へさらり、こつかこうと投げ散らす、和田の一門九十三騎のその中に、いつち力の強い、小林の朝比奈と云ふは、鷲が事ぢやわいやい。
三人　ヤア、。

祐成　ア、朝比奈どの、聊かの借錢に詰まつて、曾我の十郎祐成ともあらう者が、町人めらに斯く手籠めに遭ふと云ふは、弓矢神にも見捨てられたか。無念にござるわいなう。
團三　ヤア、さてはおのれら借錢乞ひよな。例へ曾我の家を分散して、油を締める締木にかけ、鐵銅を以て沸やしかけても、びたひたの才覺もならぬ。帳を消して立歸ればよし、嫌だと云ふと、首は九州薩摩潟、體は津輕蝦夷松前、唐と日本の國界、鹽辛い目を見せるが、返答はナナ、、なんとぢや。
平右　コレ、朝比奈どの、こなさんは力が強いと云うて、取る物も取らずに、帳を消してよいものかいの。
彦三　曾我を相手にせうよりは、朝比奈とあれば面白い。なんぼ力が強いと云うて、無理な事は云はぬものぢやわいの。
團三　無理も非道も事に依る。貸した物をやるまいと云ふは、達て取らうと云ふと、目に物見せるがどうぢや。
三人　イヤ、見せて見やいの。イヤ、見せてもらはうわいの。
ト　ぢり〳〵と付け廻す。祐成、留めて

祐成　待つた、朝比奈どの。町人を相手に大人氣ない。お扣へなされ。元の起りはこの十郎が、借錢より事起れば、潔ようこの場で切腹して。
團三　ヤレ早まるまい十郎。
祐成　イヤ、放した。エ、、無念やなア。借錢乞ひに詰められ、命を捨つるは、魂魄赤き貧乏神となつて、おのれら一々取殺す。南無阿彌陀佛。
團三　ヤレうろたへたか十郎。死ないでも大事ない。
祐成　でも、この借錢乞ひを見ては。
團三　腹切つて相果つれば、質の向きは流れるがや。
祐成　サア、それは。
團三　但し質を流さうか。
祐成　サア。
團三　サア／＼、なんと。
祐成　死ぬるにも死なれず、エ、、無念やなア。
團三　ヤイ、今聞くの通りの仔細。この朝比奈、此まゝにも捨て置かれぬ。えいワ、曾我一類の借錢乞ひども、この朝比奈がなしてくれう。
三人　エ、イ、そんならお金を下さりますか。
團三　この場がどうも見捨てられぬ。明日早々和田が屋敷へ取りに參れ。
祐成　それならこの十郎が借錢を
團三　朝比奈が拂うてやるわい。
祐成　段々のお芳志。エ、、忝なうござりますぞ。
團三　サア、掛取りども、明日早々受取を持つて身共が屋敷へ參れ。
平右　そんならお拂ひなされて下さりまするか。どうでも和田どのぢや。さつぱり埓が明いた。
彦三　最前よりの無禮の段、御免なされて下さりませうならば、有り難うござりまする。
善五　そんなら明日、お屋敷へ參りまする。
團三　無言云はずと早く歸れ。
三人　エ、、有り難う存じまする。
ト いろ／＼あつて、掛取りども皆々出ろ。祐成、團三郎、いろ／＼あつて表へ出て
團三　なんと、けうといものであらうが。
祐成　ハ、、、、イヤモウ、なんぼわれが其やうに顔作つても、根が團三郎ぢやに依つて、顯はれうかと思うて、大抵案じて居た時ではなかつたわい。
團三　幸ひ日は暮れかゝる。うそ暗いのに此やうに顔を作

つて、聲を變へて煽てかけてこましたに依つて、掛乞ひどもがうろたへ眼ぢや。なんであらうと、先の節季から斷わり云はずと、朝比奈とやりかけてこまさうわいやい。

ト向うを見て

ヒヤア、アレ、向うへ來たのは、化粧坂の才右衛門ぢやないか。

祐成　南無三、サア、揚げ錢を乞ひに來をつたわいやい。なんとしたものであらうな。

團三　よごんす。氣遣ひな事はない。また朝比奈でやつてこます。

祐成　朝比奈はよう見知つて居るわいやい。

團三　エヽ、それは鈍な事ぢやなア。

祐成　アレ／＼、もう來をるわいやい。

團三　來をると云うて、なんとせうぞいなア。

ト兩人いろ／＼うろたへ、祐成、キッと思案して

祐成　けうといのが出た。亡者ぢや／＼。

團三　亡者ぢやとは、どうするのぢやぞいの。

祐成　なんであらうと、おれがするやうになつて居い。

ト團三郎を襦袢一つにする。胡麻鹽を當て、糠味噌を出し、團三郎を無理やりに糠味噌桶へ打込み、團三郎が嫌がる思ひ入れ。祐成、表へ忌札を貼る。よき所にて、寶來屋才右衛門、男二三人付き出る。表を叩く。祐成、思ひ入れあつて

祐成　ハア、こなさんが死なしやんして、わしやなんとせうぞいなう。

ト泣く。

才右　なんぢや、忌札が貼つてある。死屋でもなんでも構ふ事はないワ。もし揚げ代をおこさずは、十郎めを面々が寄つて、棒縛りにして連れて去ね。合點か。

男皆　合點でござりまする。

才右　サア、十郎に逢はう。爰開けた／＼。

祐成　そこらどころぢやないわいの。死なしやつたわいの死なしやつたわいの。

才右　死人があらうがどうせうが、化粧坂から揚げ代取りに來たのぢや。男ども、表を叩き壞せ／＼。

男皆　合點でござりまする。

才右　ヤイ、爰な生盗人めが。三百兩と云ふ揚げ代、よう踏みたんだくにしやあがつたな。廓の法ぢや。桶伏せにせにやならぬ。立ちあがれ。

祐成　才右衛門々々々々。マア／＼待つてくれ。成る程、

腹の立つは尤もぢやが、その揚げ代の事を苦にして、母者人がたつた今、死なしやつたわいの〳〵。この證なれば、よう拂はんぢやあらう程に、向う三年弔らうてから取りに來て下され。アヽいとしや。母者人、金の事を苦に病んで死なしやつたわいの。

才右　なんぢや。向う三年弔らふまで待つてくれい。さう巧らはなるまいわいやい。なんであらうと、廓の法に行ふ。男ども、寄つてかゝつて棒縛りにせい。

　ト皆々よつて祐成を引立てうとする。團三郎、桶より出て、皆々を突き飛ばし

團三　うぬら、コリヤ、旦那をなんとしをる。

才右　ヤイ、おのしや死人ぢやないか。

團三　ほんになア。

才右　金の工面が出來ぬゆゑ、死人を拵らへ、揚げ代を踏むのぢやな。男ども、棒伏せにして連れて去ね。叩き殺しても大事ない。ぶちのめせ。合點か。

　トこれより、祐成、團三郎、兩人を皆々が追ひ廻す。團三郎、奥へ逃げて入る。祐成、向うへ逃ぐる。向うより、新左衞門、草履を提げて出る。祐成、新左衞門が後へ隱れる。

新左　マア〳〵、聊爾せまいぞ。どう云ふ譯で旦那を、此やうに手籠めにするのぢや。

才右　オヽ、揚げ代が濟まぬに依つて、廓へ連れて去んで桶伏せにするのぢや。サア、祐成を此方へ渡せ。

新左　マア〳〵、爰は門中ぢや。內へ入らんせ。

　ト內へ入る。

才右　ヤイ、大盜人め、逃げ廻る事はない。爰へ出をれ。出をらぬかい〳〵。

　トわや〳〵云ふ。祐成、新左衞門の後にすくんで居る

新左　ハテ、ザワ〳〵云ふ事はないてや。高で揚げ代が濟まぬに依つて、廓へ連れて去んで桶伏せにすると云ふのぢやないか。

才右　オヽ、廓中を引摺り廻して、面恥をかゝして、三十日が間桶伏せにするぢやわい。

新左　そりやハヤ、廓の法とあれば尤もでごんすが、なんと、桶伏せにせうよりは、金取つて去んだがよからうがや。

才右　ハテ、金さへ取れば云ひ分はないてや。

新左　揚げ代拂ひませうが、見やしやる通り、わしも今餘所から戻りかけぢや。なんであらうと明日の晩には、廓

へ金持つて行から程に、マア〳〵、さう思うたがよい。
おれが斯う云ふからは、違ふ事はない。

才右　ハヽヽ、ても口と云ふ物は調法な物ぢや。コリヤ、揚げ代と云ふは、小判で三百兩ぢやぞよ。爰な内を見る樣子が、三文の才覺もなりそむない。それになんぢや、おれが明日の晩持つて行から。五文三文のすべざかりの代で、揚げ代は拂はれぬ。そんな事で行くのぢやないわいやい。

新左　爰な和郎は、あなづつた物の云ひやうする和郎ぢやわいの。例へ内は廐のやうでも、金と云ふ物は湧き物ぢや。なんぢやあらうと、明日の晩までには、キッと才覺して持つて行く程に、マア、さう思うてもらひませう。待たれぬと云やれば此方も意地ぢや。浪人しても曾我の家來ぢや。柄糸はほづけてあつても、よう切れるぞや。サア、こないに云ふと、此方がどうやら惡者の云ふやうで惡い。なんぢやあらうと料簡して、明日の晩まで待つて居やしやれ。惡い事は云はぬわいの。

才右　そんならえいワ。待つは待つてやるが、その代りにマア、揚げ代の内上げをして、爰な屋財家財を引ッ湊へて去なうわい。

新左　ハテ、待つなら綺麗に待つたがよいわいの。

才右　侍ひを相手にする商賣が、刀を怖がつて揚げ代を待つと云はれては、廓の名折れ、商賣の邪魔になる。ぢやに依つて、内上げに屋財家財持つて去なうと云ふのぢやわいの。

新左　屋財家財渡しませう。ぶちこぼつて持つて去なしやれ。

祐成　コレ〳〵、鬼王、其やうにしても大事ないかや。

新左　ハテ、侍ひを怖がつては、商賣がならぬとの云ひ分、そこを押しつけて待たすと此方の無理ぢや。ハテ、屋財家財渡したがよいてや。

才右　そんならこぼつて去ぬが、云ひ分はないか。

新左　ハテ、斯う云ふからは、なんの云ひ分があらうぞいの。

才右　サア、男ども來い。

ト行かうとする。内より、小次郎、出て

小次　轡屋どの、揚げ代三百兩、持つて去なしやれ。

ト金を抛り出す。

才右　ヒヤア、小判ぢや。

祐成　小次郎どの、この金は。

小次　どうぞ勘當が赦してもらひたさ。
新左　こなた樣は不所存ゆゑ、祐信さま御存生のうちに、御勘當でござりました。祐信さまお果てなされましてより、段々と勘當の詫び言を、この鬼王が阿母樣へ申し上げまして、マア母御樣ばかりの御勘當は赦りました。お果てなされた祐信さまの御勘當は赦りませぬぞえ。それに祐成が傾城狂ひの金を遣はされまして、勘當が赦されたいとは。
小次　祐成は母の連れ子。この小次郎とは繼しい仲。その義理を思うて母者人が、勘當は赦されたこの小次郎も、なさぬ仲の十郎には義理がある。廓へやつて、なんと補伏せにしられうぞ。茅屋なれども親の讓りの道具諸式。揚げ代に取られては、この小次郎、冥途の親仁樣へどうも云ひ譯がない。ぢやに依つて、揚げ代の三百兩、鬼王、とんとおれは眞人間になつた。喜んでたも。
新左　何にも申しませぬ。そんならこの金借りませう。サア、揚げ代ぢや。持つて去なしやれ。
小次　マア、揚げ代を濟さぬ先に祐成、ちよつと逢はう。
　ト硯と紙を持つて出て
大儀ながら一筆書いてもらはう。
祐成　何を書くのでござりまする。
小次　この小次郎が勘當受けてから、曾我の家は十郎が物。今日只今勘當赦されるからは、總領のおれぢやに依つて、釜の下の燃え杭までも、小次郎どのに戻しませうと云ふ證文、書いてたもと云ふ事ぢやわいの。
祐成　何がさて、此やうな貧乏な家には、少しも涙はかけませぬ。證文書いて上げませう。
　ト證文書く。此うち新左衞門、チッと思案して居る。
これでようござりまするか。
小次　よし／＼。これを此方へ取つて置けば、おれが心がゆるりと云ふものぢや。其方の手からこの證文を貰ふからは、祐信さまに御勘當赦されたも同然ぢや。サア、才右衞門とやら、ソレ、金受取つて早う去なしやれ。
才右　ハイ／＼、そんならお金を申し受けませう。斯うすつぱりと拂ひが出來ませうとは、夢三寶存じませなんだ。祐さん、必らず夕方待つて居りまするぞえ。
祐成　エヽ、現金な奴ではあるわいの。
才右　ハテマア、斯う云ふが廓の法でござりまする。先刻のやうに申しましたは、お金が欲しさ。必らずお出を待
山鏡と、君の姿をうつしかけるワ。

祐成　エヽ、金を拂ふと面白い奴ぢやわい。
才右　もうお暇申ませう。鬼王さんとやら、いかいお世話でござりました。ちと夕方旦那に付いて、お出でなされませい。ヤレ〳〵、嬉しや〳〵。
ト才右衛門、男ども出る。小糸、出て
小糸　お二人ともに、母御様が仰しやつてゞござりまする。お弔らひの焼香をなされませと、仰しやつてゞござりまする。早う奥へお出でなされませいなア。
祐成　ほんに、とんと忘れて居た程にの。今日は實父河津の三郎さまの御命日。
小次　おれもとんと忘れて居た。鶴ヶ岡で殺された親仁様の一七日ぢや。十郎、サア、奥へ行かうぢやあるまいか。
祐成　とんと抹香臭いと云ふものは、面白うないものぢや。明日の晩は精進ぢや。大磯へ出かけうか。
小次　エヽ、懲りもせずに、好きな和郎ではあるわいの。
祐成　ハテ、これが嫌ひになると、死ぬるとが一時ぢやわいの。サア兄貴、奥へござりませい。
ト唄になり、祐成、小次郎、小糸、奥へ入る。新左衛門、後に殘り、いろ〳〵思案して
新左　なんの事ぢや。とんと合點がゆかぬ。親の目にさへ餘る惡者が、三百兩の金を抛り出して、生さぬ仲の十郎どのゝ難儀を救ふと云ひ、この間毎日々々この家へ入込むのは、どうでも心に一物があるわいの。
祐成　鬼王々々、どこに居るぞいの。早う來て焼香をせぬかいやい。
ト内にて云ふ。
新左　ハイ〳〵、もうそれへ參りまする。あの風體で三百兩と云ふ大枚の金を……ア、儘の皮よ。
ト唄になり、奥へ入る。向うより、時宗、虚無僧の形にて出て、後より、江間の小四郎、侍ひ大勢付いて出る。橋がゝりより、八幡の三郎、同じく侍ひ大勢連れ出て、兩方行き合ひ、時宗を中に取卷き、笠取り眞中へ坐る。
三郎　鶴ヶ岡にて祐信を殺し、天下の重寶友切丸を盗み取つたる科人、曾我の五郎時宗、天下の大罪人なれども、願ひに任せ、暫らく母に暇乞ひの間、猶豫してくれる。有り難いと思ひ居ろう。
小四　我れこそ友切丸の盗賊と、名乘つて出でたる時宗によもや逃げも走りもしよまい。五三日の暇乞ひもさせたけれども、相役工藤どのゝ手前もあれば、暫らくの猶豫。

この體を老母に見せ、必らず嘆きをかけぬよう。ナ、合點か。
時宗　養父祐信を殺し、友切丸を盗みましたは、この時宗。何卒願ひに任せ、兄十郎が科を赦し、頼朝公の御狩のお供に、召連れられ下されうならば、有り難う存じまする。
小四　その儀は先達て、父時政より頼朝公へ申し上げたれば、十郎が科を赦し、富士の御狩の御供の儀は、父時政が胸にある。
時宗　エヽ、有り難う存じまする。
三郎　便々と長談義をせずと、早く暇乞ひして參れ。家來どもやい。この屋敷を十重二十重に取巻け。必らず時宗を取逃がすな。四ツの鐘をゴンと打つと、繩かけに來るぞよ。侍ひども、ぬかるな。
侍ひ　ハア、。
三郎　サア、義時どの、お引きなされませう。
小四　然らば時宗、後刻。
ト唄になり、皆々橋がゝりへ入る。時宗、いろ／＼こなしあつて、笠を着、尺八を持ち、門口に立つて、尺八を吹く事ある。
祐成　アレ、修行者さうな。小糸はどこに居る。手の内を進ぜやいの。
小糸　修行者さん、手の内入れませう。
ト小糸、錢持つて出る。小糸が手を取り、小糸、恟りする。時宗、笠取り。
時宗　小糸、久しいなア。
小糸　エヽ、お前は時宗さま。
時宗　母者人は、いよ／＼御機嫌よいか。
小糸　アイ、大抵御機嫌がよい事ぢやござんせぬ。
時宗　それは重疊。して時宗が事、お問ひなされもせぬか。
小糸　イヽエ、お前の事は云ひ出しもせず、十郎さまばつかり可愛がつてゞござんすわいな。ほんにわたしは、腹が立つてならぬわいなア。
時宗　すりやそウ、時宗が事はお忘れなされてござるか。ハア。
小糸　お前の事を忘れぬ者は、わたしばかり。常住思ひ出して居ても、わたしが案じて居るばかりで、お前なんとも思やさしやんすまいがな。
時宗　イヤそウ、常々其方の芳志、嬉しう思うて居るわいの。
小糸　何を嘘ばつかり。嬉しう思うて居やしやんすものな

ら、なんでちよこ〳〵來て下さんせぬ。
時宗　サア、ちよこ〳〵來たいけれど、母様が怖いに依つて。
小糸　なんの怖い事があるぞいなア。ほんに母御様も母御様であるわいな。どう云ふ事で勘當したものぢや知らぬ。今日ござんしたこそ幸ひ、どつこへもやりやしませぬぞえ。必らず脇へ行て下さんすなえ。
時宗　御勘當赦りぬうちは、この敷居も越ゆる事はならぬわいなう。
小糸　大事ないわいなア。
時宗　それでも。
小糸　母御様は今、すや〳〵と御寢なつてぢや。この間にツイちよつと、エヽ。
時宗　なんぢやいの。
小糸　奥へ行て寢るわいなア。
時宗　何を滅相な。勘當も赦りぬに、奥へ行て寢て堪るものか。
小糸　大事ないわいなア。ござんせいなア。ツイちつとの間寢るわいなア。
時宗　誰れといなう。

小糸　わしといなア。
時宗　そんな事はならぬわいなう。
小糸　エヽ、辛氣な。わしやなるわいなア。
ト此うち、新左衛門、出て見て居て、よき所にて
新左　妹…小糸、妹小糸、ヤイ、コリヤ。
小糸　ニヽイ、兄さん、なんぢやいなア。
新左　何を表にウヂ〳〵して居るぞいやい。母御様が呼んでござる。早う行け。
小糸　エヽ、行くわいなア。行かうと思うて居るに阿房らしい。エヽ、わしや奥く行くわいなア。
ト ぴんしやんとして入る。
新左　五郎さまでござりまするか。
時宗　鬼王、また勘當の詫びに來たわいなう。どうぞ大儀ながら、ま一度詫びしてたもらんか。
新左　この間からもいろ〳〵と、お前の詫び云ふ。今日は又、河津さまの十七回忌、心ばかりのお弔らひ。その上で段々と、お前の詫び言をして見ても、あの五郎めが事は、云ひ出してもくれな、後生の障りになると仰しやつて、根ツから珠數ばかり繰つてゞござりまする。どうも詫びの仕様がござりませぬ。

時宗　勘當の詫び言を頼むは、其方より外にない。父親にも母親にも、其方たつた一人を力にして居るおれが事ぢや程に、コレ、五郎が手を合す。云ひ憎かろけれど、どうぞ勘當の赦りるやうに、コレ、拜む〳〵。

新左　ア、、道理ぢやなア。父御には東西分かぬ時にお別れなさる。身には大切なる親の敵……たつた一人の母御には勘當請け、力ないのは尤もぢや〳〵。どうぞ今日はどの道御勘當の詫び。と云うて和らでは行かぬわいなう。

　ト内にて

萬戸　ソレ小糸、十郎が寢たさうな。蒲團でも着せてやれ。ドリヤ、表に行て、ちと氣を晴らさう。

　ト内にて云ふ。新左衞門、時宗に囁く。時宗は表へ出て尺八を吹く。萬戸、出て

萬戸　オヽ鬼王か。とつと最前から、河津どのと祐信どのと、お二人へ弔らひ陀羅尼百遍づゝ。勿體ない事ぢやがほつとしましたわいの。

新左　この暑い時分に、其やうに氣を詰めてござつては、御持病でも發つたら惡うござりまする。マア、お茛でも上がりませい。

萬戸　何を云やるぞいの。病を恐るゝは、とつと若い折の事。この世を十年盜んで居るこの身、早う火宅を遁がれたうござるわいなう。

新左　成る程、そんな物かい。思へば世の中と云ふものは味なものでござりまするなア。關八州で鬼のやうに申しました、亡君河津さまは、奧野の狩の歸りに御最期、昨日今日のやうにござりましたが、もう十七年、ア、、月日の經つは夢ぢやなア。

萬戸　さればいの。鬼のやうに云うた河津どのはお果てなされ、弱々しいおれは後に殘つて、長生きすれば恥多しぢや。ア、、南無阿彌陀佛……先刻から耳に入らなんだ。きつう耳が遠うなつた。尺八さうなの。唱歌はなんぢや……想夫戀。夫を戀ふる想夫戀と云うて、專ら尼御前のもてあつかふ樂の唱歌。ても面白い竹の音ぢやなア……鬼王や、年寄つても味いなもので、夫を戀ふる樂を聞けば、河津どのゝ若盛りが思ひ出さるゝわいなう。ハハヽヽ。

新左　河津どのゝ若盛りの時、アゝ、好い男でござりましたなア。

萬戸　好い男の段かいの。この母が大抵の戀ひ男ぢやなかつたてや。何が戀ひ焦れた男の所へ、嫁入りした事ぢや

に依つて、悪性さしやれぬやうにと、朝も晩も引きつけて居て、大切にかけまいものかいの。その誠が届いたやら、河津どのもわしを可愛がつて下さる。ハヽヽ、南無阿彌陀佛々々々々々々々。

新左　ア、私しも幼少の時分でござりましたゆゑ、とつくりとお顔は覺えませぬが、なんと面ざしが弟御の五郎さまに、よう似たぢやござりませぬかいの。

萬戸　ヤアヽ。

新左　サア、面ざしが五郎さまに、よう似たぢやござりませぬかいの。

萬戸　ヤヽ、忘れて居るものを、また母が修羅の種を思ひ出した程にの。モウ〳〵、五郎の五の字も云ひ出してたもんな。ヤレ、穢らはしやの〳〵。

ト珠數にて耳を拂ふ。新左衞門、氣を替へ

新左　申し、そりやあんまりでござりまするぞえ。五郎さまには、なんの科で御勘當はなされました。坊主になれと云うて、箱根へ登されましたを、坊主を嫌うてお歸りなされたが、お氣に入らぬのでござりませう。申し、五郎さまには、討たねばならぬ親の敵がござりまするぞえ。親の敵を討たう〳〵と思うてござる者が、アタいまいましい坊主になつて、堪るものでござりまするかいの。親の敵を討つ者は、十人と一緒に日輪を拜む事はなりませぬぞえ。門を歩くにも影を隔つて歩きますわいの。まだその上に、お前の勘當を請けて、どこに佇み所がござりまするぞ。親を討たれて敵を討たうと云ふは、侍ひの習ひでござりまするわいの。それに坊主になれの、五郎が事は云ひ出してもたもるな、穢らはしいのと、父御によう似た五郎さまが、それ程憎うござりまするか。否でも應でもこの鬼王が、御勘當赦してもらはにやなりませぬ。ならぬ〳〵。オヽ、勘當赦してもらふぞ。

萬戸　ア、コレ鬼王、其やうに腹を立てずと、アレあの尺八を聽きやいの。

新左　エヽ、尺八嫌ひでござりまする。面白うござりませぬ。

萬戸　ハア、鶴の巣籠りさうな。イカサマ、鳥類畜類程、子を思ふ物はない。鶴は我が子の巣を立つまで眠らず、熊は獵人を恐れて、我が子と共に大石を負うて寢ると云ふ。それを思へば、人の子を可愛がるは、遙かに劣つたものぢやわいの。

新左　劣つた段ではござりませぬ。お前の心と鶴の親と比

べて見ると、阿彌陀如來と泥鼈屋程違うてござりますわいの。

萬戸　ヤイ鬼王、五郎を勘當したはナ、五郎が可愛いに依つての事ぢやわいやい。

新左　可愛いに依つて勘當したと仰しやる、お前の御思案は。

萬戸　友切丸の刀を詮議、今月二十八日までに尋ね出さねば、狩場の供も叶はぬと、北條どのゝ詞……コリヤ、よう聞けよ。なんの我が子ぢやもの、憎からうぞいやい。年來の望みが叶へてやりたうて、勘當したぞよ……鬼王、この母が心を、鬼のやうに思ふが、深いわしが心は、今月二十八日、八聲の鷄の啼くまでに、子を思ふか思はぬかは知れるであらう。それまでにどのやうな事があつても、五郎めと顔は合さぬ。アヽ、斯う云ふも修羅の種ぢや。ドリヤ、奧へ行て看經せうか。

ト時宗、ツカ〱と入つて裾を捉へ

時宗　申し、母人樣。

萬戸　母とは誰が事ぢや。

時宗　そりや、あんまりお胴慾でござりまする。

萬戸　達て詞を返すと、この世はさて置き、五生七生勘當に勘當の錠卸ろさうか。

時宗　エヽイ。

萬戸　鬼王、其方も奧へおぢや。

ト唄になり、萬戸、こなしあつて奧へ入る。新左衞門脇差を抜き、向うへ抛り出し

新左　サア、五郎さま、さつぱりと腹切らしやれ。

時宗　ヤア、。

新左　所詮勘當は赦るさぬ。今月二十八日までに勘當が赦りねば、年來の望み、狩場へ忍び入つて、兄弟一緒に敵を討つ事も叶はぬ。

時宗　そりや又何ゆゑ。

新左　富士の御狩は今月二十八日限り

時宗　ヤア、。

新左　刀の詮議も二十八日。何卒それまで友切丸を詮議仕出し、御兄弟に敵工藤左衞門を、一太刀なりとも討たさうと、思ふに甲斐もなう、お前は老母の御勘氣。所詮こなたには敵を討たさぬ心ぢや。サア、腹切つた。面當に腹切らしやれ。この鬼王が介錯する。

時宗　そんなら時宗に腹切れか。

新左　サア、腹切つた……鬼王が介錯するぞ。サア、いま

五郎さまが腹を切らつしやるぞ。鬼王が介錯するが。
 トいろ〳〵奥へ聞えるやうにこなしあり
時宗　コレ鬼王、この時宗は命を捨つる事はならぬ。外に命を捨てねばならぬ事があるわいの。
新左　ヤア、外に命を捨てねばならぬ事とは。
時宗　友切丸の盜賊は、この五郎時宗でござると、名乘つて出たわいの。
新左　イヤア。そりや又なぜに。
時宗　今日この家へ來たのは、母樣へ暇乞ひに來たのぢやわいなう。所詮御勘當は赦りず、刀の行くへは知れず、とつおいつ思案して、この五郎が科人になつて名乘つて出て、刀の盜賊が知れまするからは、兄十郎を何卒この度の御狩の御供に、召連れられ下されいと、この五郎が命を捨て、兄十郎どのに敵を討たさば、兄弟一緒に本望遂げたも同然ど、思案を極めてこの時宗は、暫らくの暇を請けて、母樣に暇乞ひに來たのぢやわいなう。
新左　ヤア、。
ト恟りする。中二階の障子の內にて、祐成、聞き居て、新左衞門と顏見合せ、障子ピッシャリ。
時宗　鬼王、其方は兄弟が死んでもあらうならば、母樣の介抱賴む。これがこの世の顏の見納め。團三郎にも未來で逢ふと云うてたも。さらば。
ト表へ出ようとする。新左衞門、留めて、うぢ〳〵する。中二階の內にて
祐成　母樣、おさらば。
萬戶　ヤイ、うろたへ者。なんで腹切るのぢや。
祐成　今のを聞いては、どうも生きては居られませぬ。
時宗　鬼王さらば。
ト時宗、表へ出ようとする。新左衞門、留めて、兩方へいろ〳〵心遣ひ。
萬戶　コリヤ、われが死ねば母も死ぬるぞ。
祐成　でも、弟を科人にしては。
萬戶　兄弟のうち何れにも、母が詞を背いて命を捨つると五生七生、盡未來までも勘當ぢやぞよ。
ト時宗、ウロ〳〵する。
祐成　サア、それは。
萬戶　サア〳〵、なんと。
ト四ッの鐘打つ。此うち兩方より八幡の三郎、江間の小四郎、侍ひ大勢出て、よき所にて
兩人　五郎時宗、これへ出て繩かゝれ。

時宗　五郎時宗、それへ參つて。
ト新左衞門、時宗が口を塞ぐ。
萬戸　命を捨てると勘當ぢやぞ。
小四　時刻が延びる。時宗、これへ參つて繩かゝれ。
萬戸　命を捨てたら勘當ぢやぞ。
小四　時宗、出ませい。
萬戸　未來まで勘當せうか。
皆々　踏ん込んで繩かけうか。
トこの間、三方にて、いろ／＼ある。新左衞門、時宗に落ちてある珠數にて手金を打ち、押入れへ押込み、以前の石臼を米櫃の内へ入れ、いろ／＼思ひ入れある
三郎　返答せぬは合點ゆかぬ。家來ども、踏ん込んで繩かけい。
ト侍ひ、バラ／＼と内へ入る。奥へ行かうとする。新左衞門、皆々を投げ
新左　時宗はこの家には居りませぬぞ。
三郎　ヤア、吐かすまい。先達てこの家へ參りし時宗、この家の廻りは十重二十重に取巻けば、蟻の這ひ出る所もない。必定隱しあるに極まつた。速かに渡せばよし、渡さぬに於ては、曾我の一類の身の上であらうぞ。

小四　假初めならぬ友切丸を盜み取りしは天下の科人。暫らくの猶豫は某が情。今更この家に居ぬとは、卑怯な奴の。異議に及ばず、時宗を渡せ。
三郎　但し、踏ん込んで家探しせうか。
小四　速やかに渡せ。
三郎　面倒な。家來ども、踏ん込んで時宗を引出せ。
新左　時宗どのは勘當の身の上。この家へござらう筈がない。某家なれども曾我の館、理不盡に家探し召さるゝと、役人とは云はさぬ。手は見せぬぞ。
三郎　邪魔ひろがば、踏み付けて繩かけい。
侍ひ　動くな。
小次　家探しさせませう。
ト小次郎、出る。
三郎　京の小次郎、この家に時宗忍んで居やうが。
小次　大分居さうなものでござりまする。鬼王、叶はぬ所ぢや、時宗を爰へ出せいやい。
新左　知りませぬ。
小次　ハテ、惡い合點ぢや。此やうに取圍んでござれば、なんぼわれが韋駄天程働らいても、叶はぬ事ぢや。尋常に家探しさして、五郎に繩かけさしたがよいわいやい。

新左　家探しはさて措き、こぶぎれ一つ検めさす事はならぬ。浪人と侮つて、狼藉召さると、どいつ此奴の容赦はないぞ。早く歸らつしやれい。

小次　イヤ、家探しさゝうわい。曾我殿原の貧乏人が、あなた方に敵たふは、蟷螂が斧、叶はぬ事ぢや。八幡どの、御存分に家探しなされませい。

三郎　家來ども、ソリヤ。

ト侍ひ、奥へ駈け込まうとする。新左衛門、皆々を投げる。小次郎、米櫃にかゝるを新左衛門、見事に投げ、

新左　コリヤ、小次郎どの、何するのぢや。

小次　なんにもせぬ。この半櫃を検めるのぢや。

新左　この半櫃へ指でもさすと、小豆粥を振舞ふぞ。

小次　妙な事を云ふわい。われは下人、この小次郎さまは旦那様ぢやぞよ。旦那様の仰しやる事を、わりや聞かぬかいやい。

新左　聞かいでも大事ない。

小次　大事ないとは。

新左　親旦那の勘當請けてござれは、主でも瓢簞でもない。

小次　コリヤ、釜の下の燃え杭までも、おれが物ぢやぞよ。慥かな證文があるわいやい。證文があるならは、どうせうと斯うせうと、この小次郎が心任せ。婆アめも十郎めもぼい出してしまはうと思うて、大枚の三百兩と云ふ金を、入れて置いたこの證文。いま天下の執權、工藤左衛門祐經さまを、敵と云うて附け狙ふ親子兄弟。其やうな奴等と縁を組んで、この小次郎は夜の目が合はぬ。ぢやに依つて小判で三百兩と云ふ物を出して、この證文を取つて置いたのは、親子の奴等を叩き出してこまそと、思うての事ぢやわいやい。おのれとも主從ぢやないぞ。この内の屋財家財は、皆おれが物ぢや。阿彌陀如來を打ち砕いて焚付けにせうと、紙子着て行水せうと、おれが心任せ。なんと云ひ分があるか。半櫃もおれが半櫃ぢや。そこ退いて詮議させい。

新左　こなたの物であらうが、誰れが物であらうが、この半櫃、見せる事はならぬ。

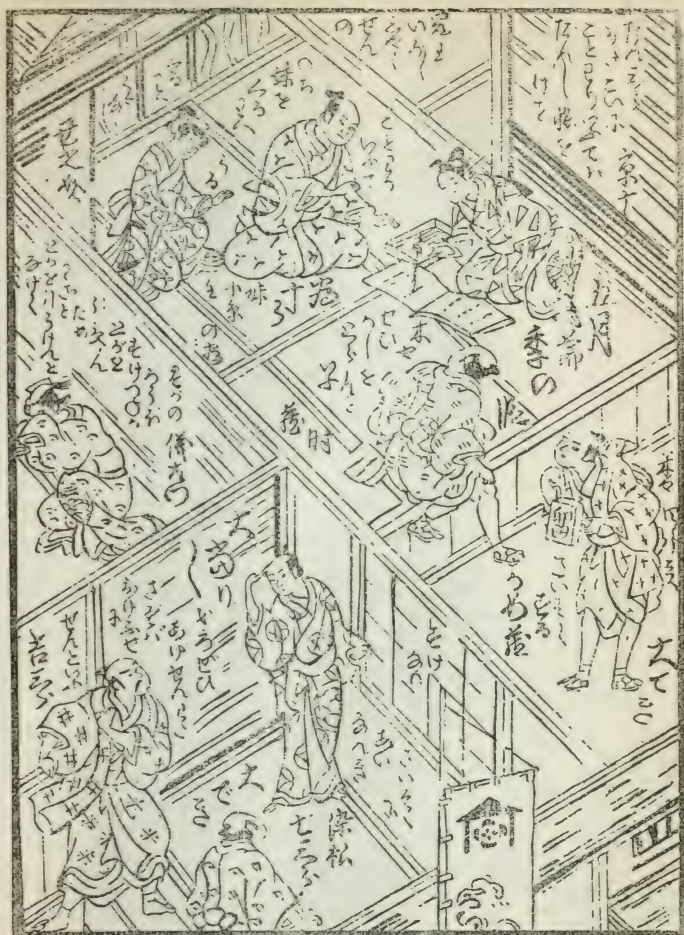
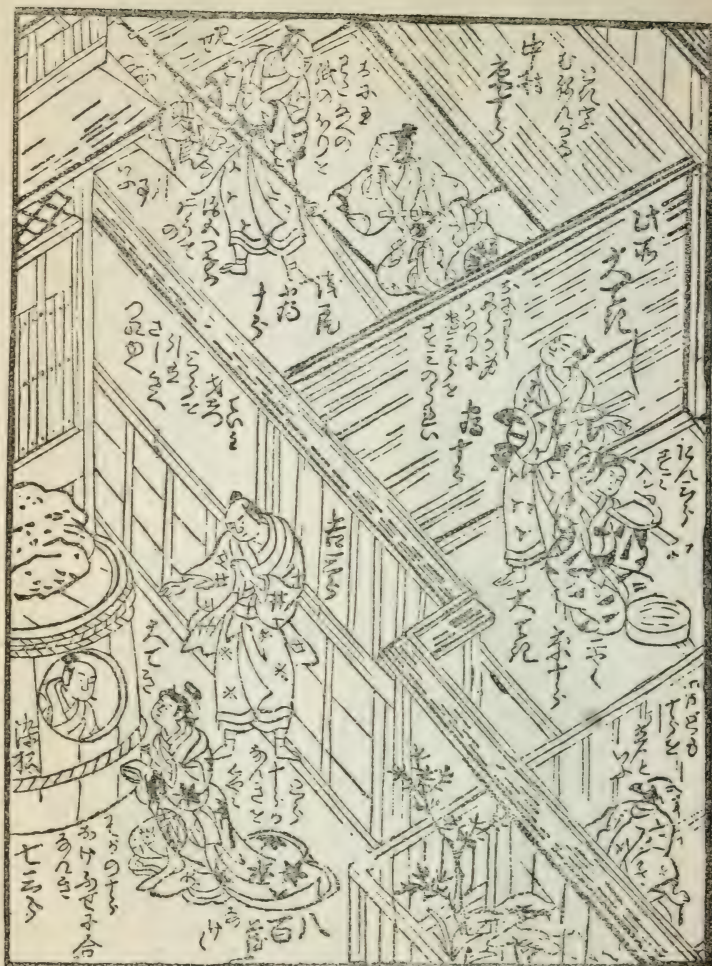
小次　ハイ、あの通りでござりまする。無理な奴でござりまする。邪魔ひろぐなら引ッ括つて家探しなされて下さりませい。

三郎　ヤイ下郎め、最前からその半櫃の内に、時宗が隠してあると云ふ事は睨んで置いた。速やかに渡さぬと、同罪ぢやがや。

新左　同罪合點。知れた事ぢや。古金買ひに見せても、この半櫃に隱してある事は知れてあるワ。現在主の繩かゝつて行くのを、きよろりと見て居さうな鬼王ぢやと思うてござるか。
三郎　ヤア、云はして置けば、出るまゝの過言。何にもせよ、この半櫃を。
ト小次郎、八幡、半櫃にかゝる。新左衞門、少し立廻りあつて、半櫃ひッくり返す、半櫃より、挽臼出る。
兩人　ヨウ。こりやどうぢや。
小次　さては時宗をふけらしたな。
三郎　家來ども、程は行くまい。ぼッかけい。
ト八幡、侍ひ、表へ出ようとする。萬戸、出て
萬戸　曾我の五郎時宗、八幡三郎、繩かけさつしやれい。
三郎　五郎めに繩かける幸ひの人質、老ぼれめ、うせい。
新左　すりや、五郎さまの代りに。
萬戸　鬼王、必らず二人に望みを
新左　お氣遣ひなされますな。
萬戸　今月二十八日までは。
新左　御本望を……サア、刀の詮議いたしてお目にかけませう。

ト押入れ、中二階、ばたつく。
萬戸　コリヤ出な。出る所ぢやないぞ。爰へ出たら、母は即座に自害。この世ばかりぢやない。未來までも勘當ぢやぞ……アレ鬼王、小糸や團三郎が、この母に代つて科人になつて行かうと思ふさうな。叶はぬぞよ。老先のある二人の者の望みも叶へず、なんと科人にして殺されうぞいやい。この母が役相應。サア、御兩所、繩かけて友切丸の盜賊とするとも、なんなりとも名を付けて、御制法に行なはれませう。
小四　天晴れの老母の心底。如何にも繩打つて立歸らう。併し、刀の盜賊は時宗と申し上げたれば、いつまでも科人は曾我の五郎、行くへの知れるまでの人質。
三郎　イヤならぬ。行くへの知れるまで、便々とはならぬ。今宵中に時宗が在所を詮議仕出し、討つてなりとも搦めてなりとも連れて來ればその通り。今宵中に五郎が在所が知れねば、大切の科人、取逃がせしこの老ぼれ、明六ッの鐘を合圖に、縛り首ぢやが合點か。
新左　申し、暫らくの間、科人になつてお出でなされて下さりませい。今宵中に五郎どのゝ在所を尋ね出し、時宗さまのお首を持つて、お迎ひに參りませう。

初　演　の

繪番附

萬戸　ヤア〳〵。
新左　サア〳〵、五郎どのゝ首を討つて、お迎ひに參りまする。
萬戸　アノ、眞寶五郎が首打つて。
新左　どの道時宗どのは殺さにやならぬ。それまでの人質に、お出でなされて下さりませう。
　ト　こなしあつて、呑み込みます。
萬戸　アノ、そんなら五郎を。ハア。
小次　イヤ〳〵、この小次郎が爲にも大切の母者人。人質にやる事はならぬ。なんであらうと、五郎めに縄ぶつて
　ト奥へ行かうとする。新左衛門、見事に取つて投げる。
小次　鬼王、主をなんとする。
萬戸　おのれ、母が勘當ぢや。
小次　面白い。勘當請けう。勘當請けるからは、貰うて置いた屋財家財、小次郎が持つて去ぬるわい。
　トまた奥へ行かうとする。新左衛門、立廻りあつて、懐中の證文を取つて破る。
ヤア、うなアその證文、なんで破つた。
新左　最前借つた三百兩の金戻さう。
小次　なんと。
新左　金戻すからは、この證文は要らぬわい。

小次　ドレ、金受取らう。
新左　妹小糸、これへ出い。
　ト小糸、出る。
小糸　兄さん、用がござんすかえ。
新左　コリヤ、われが大切に思ふ五郎さまの爲、化粧坂へ苦界十年、傾城奉公してくれいよ。
小糸　兄さん、嬉しうござんす。五郎さまの爲ならば、どのやうな勤めでもしますわいなア。
新左　出かした。ソレ、金の代りぢや。連れてござれ。
小次　面白い。三百兩が五百兩になるまいものでもない。連れて行て傾城に賣らうかい。
小郎　刻限が延びる。科人を引立てい。
萬戸　コリヤ鬼王、この母が箱根の權現へ上げうと思うた觀音經。兄弟へ筐に。
　ト懐中より守を出し、新左衛門に渡す。
新左　慥かにお屆け申しませう。
萬戸　必らず兄弟に過ちがあつては、母は生きては居ぬぞよ。
　ト新左衛門、門に出てある幟を取つて來て
新左　なんであらうと、五郎さまの首討つて、お迎ひに參

りませう。この幟の繪の心で、五郎さまの首を打ちます
る。
三郎　鬼王、明六ツまでに五郎が有無知れねば、老ぼれが
首がないぞ。義時どの、參りませうかい。家來ども、老
母に繩ぶつて引立てい。
侍ひ　立たう。
ト萬戸に繩かける。
小糸　兄さん、さらばでござんす。
萬戸　鬼王、二人が事を。
新左　そつともお氣遣ひなされまするな。
小次　ドリヤ、廓へ行て、代物を金にして來うか。サア、
小糸、來い。
三郎　科人を引立てい。
ト皆々表へ出る。新左衞門も表へ出て
新左　あの幟の繪の心を、とつくりと御思案なされまして、
この鬼王が參りまするまで、必らずお身の上に過ちのな
いやうに。
萬戸　如何にも、とつくりと思案しませう。この母が筐の
觀音經、其方が二人に讀んで聞かして、必らず過ちのな
いやうに。

新左　お前樣にも。
萬戸　鬼王、さらば。
ト唄になり、橋がゝりへ入る。新左衞門、表を締め、
以前の幟を見て、手を組み、いろ／＼あつて、押入れ
より五郎出て、バッタリとこけ、足摺りして泣く。
新左　道理ぢや／＼、悲しい筈。其やうに泣くと虫が出る。
氣遣ひせまい。今宵中に母御樣を迎ひに行て、連れて戻
るわいなう。アレ、兄御は兄御程あつて、十郎さまにも
恥ぢたがよい。大きな形して、泣くと云ふ事があるもの
か。
ト此うち、祐成、同じく戒名にて手金打たれ、中二階
より出て
祐成　鬼王、おれも悲しいわいなう。
時宗　これが泣かずに居られるものかいなう。
ト兩人、足摺りして子供のやうに泣く。新左衞門、二
人が手錠を取り、
新左　コレ、お前方に過ちさすまいと、十郎さまには戒名
の手金、五郎さまにはこの珠數。親御の詞を破らず、よ
う辛抱して爰へ出て下さらなんだ。
ト懷より以前の守を出し

母御よりお二人への筐。

兩人　ヤア、筐とは。

ト新左衞門、守の封を切り、狀を出し讀む。

新左　十郎へ書き殘す一筆。其方は母に付き添ひ、後の夫祐信どのゝ敵を討つて手向けらるべく候ふ。假初めならぬ二人の敵、隨分その身を全うして、二人の親へ御手向けなさるべく候ふ。同じく五郎時宗へ書き殘す一筆。科なき其方を勘當せしは、後の夫祐信どのへの云ひ譯。河津三郎が嫡子五郎時宗と名乘り、工藤左衞門祐經を討つて、實父に手向けらるべく候ふ。鬼王へ申し殘す一筆。其方、兄弟が力となつて、實父養父の敵を討たせ下さるべく候ふ。また紛失の友切丸の太刀、今月廿八日までに在所知れずば、自ら友切丸の盜賊と名乘つて出て、二人の子供を狩場へ立たせ、相果つる心にて御座候ふ。十郎には兼ね〴〵申し聞かせば、時宗は短氣者ゆゑ、もしそれまでにもしもの事もあらうかと、わざとつれなく致し申し候ふ。後にて恨み候はゞ、其方細々申し聞かせ下さるべく候ふ……すりや疾より友切丸の

ト書置讀むうち、兩人をさま〴〵叱る事あり

盜賊となつてお果てなさるゝ、御所存でござりましたなア。

ト祐成氣を替へ。

祐成　さうぢや。いづれの道にも實父養父の、敵を討たねばならぬ。時宗、其方こそ生き殘つて、二人の敵を討つて手向けてくれい。鬼王、時宗、さらば。

新左　コリヤ、十郎さま、どこへござる。

祐成　知れた事。母人に代つて。

新左　科人になつて死ぬる心か。

時宗　コレ、科人はこの時宗。

新左　二人のうち、一人でも凶事があると、五生七生盡未來までの御勘當を、忘れさつしやれたか。

兩人　なんと。

新左　くれ〴〵書き殘されし母御の心を無足にして、二人とも勘當が請けたいか。

兩人　でも、我が子の代りに現在親を。

新左　イヽヤ殺さぬ。この鬼王が、老母のお命は助けて見せう。

祐成　母の命を助けんとすれば、兄弟のうち是非一人。

新左　御兄弟には實父養父の、敵を討たさねばならぬ。

祐成　兄弟が命を助け

祐成　母様のお命を助けるとは。
新左　お二人とも、この幟の繪に、とつくり心を付けて御覽じませ。
祐成　この幟の繪は羅生門。
時宗　渡邊の綱が、鬼の片腕切つたる所。
新左　鬼の片腕と云ふ所に、とつくり御思案をなされませい。
祐成　鬼の片腕。
時宗　鬼の片腕。
新左　渡邊の源吾綱が、羅生門にて鬼神の片腕切り取つて主人の御感にあづかつた、鬼の片腕、鬼は鬼王。
祐成　片腕を切つて、親子三人が命を助ける。鬼は鬼王、片腕とは、すりや團三郎を、
新左　五郎さまの面體恰好の、似たを幸ひに。
兩人　すりや、團三郎が首討つて、
新左　シイ……必らずどのやうな事があらうとも、爰へ出やしやつて下さりますな。
祐成　段々の芳志、家來とは思はぬ。
時宗　兄弟が命の親。
新左　今宵は河津さまの十七年忌。奥へ行て念佛の一遍もその次手に弟めがのも。
祐成　可哀や、科もない者を
時宗　殺すと云ふ
新左　ハテ、役にも立たぬ事を。大切な望みを忘れまいぞ。早う奥へござりませい。
ト唄になり、祐成、時宗、奥へ入る。後にて新左衛門刀の寢刃を合し、いろ／＼思ひ入れあつて、團三郎、出る。
團三　兄貴、爰に何してぢや。
新左　オヽ、團三郎か。わりや先刻からの事を聞いて居たか。
團三　とつくり殘らず聞いて居ました。
新左　ヤア。
團三　聞いて居て、爰へ出ようと思うたけれど、餘りやらぬ過がきぬと云ふが怖さに、ヂッとすくんで居たが、それなりに寢入つて退けた。
新左　そりや、よう寢入つて居たなア。そんなら小糸が、餘所へ行た事も知るまい。
團三　妹はどこへ行たえ。
新左　遠い所へ使ひにやつたわいやい。

團三　可哀さうに、此やうに夜が更けてあるのに、使ひに行くなら、こなさんが行てやつたがよいわいなう。
新左　老母様が餘所へ行かしやつたが、知つて居るか。
團三　イヽエ。どこへ行かしやつたえ。
新左　母御様は、遠い所へお出でなされて、夜明けでなければお歸りなされぬわいやい。
團三　妹も留主。かみさんも留主なり、淋しい事ぢやなア。
新左　團三郎、われも今、遠い所へ使ひにやる程に、さう思うて居いよ。
團三　エヽイ、この夜の更けてあるのに。
新左　臆病な奴ではあるわいの。おのれ、侍ひの家來ぢやないか。侍ひの家來が其やうに、臆病で濟むものか。
團三　それでも、よう思うて見さんせ。鼠の子も一疋と居らぬ時分に、遠い所へ誰れが行くもんで。
　　ト ぶつ〳〵とぼやく。
　　そしてアノ、マア、遠い所とは、どこへ行くのぢやや。
新左　云うて聞かす事がある。そこへ出い。
　　ト以前の草履を出し
　　コリヤ團三郎。兒が云ふ事、よう聞けよ。われとおれとは兄弟ぢやぞよ。
團三　知れた事いの。
新左　サア、この草履も藁、また神前の注連縄になるも同じ藁ぢや。われとおれとがやうな物ぢや。兄弟ぢや。同じ兄弟の藁でも、神の前へ取つて注連縄になるがよいか、また此やうに草履に作られて、人の足にかゝるがよいか。どちらがよいぞ。
團三　アヽ、知れた事を云ふ人ではあるわいの。人に踏まれうよりは、神様の上に引ッ張られる事が、百貫ましでござる。
新左　如何にもさうぢや。そこへ直れ。そこへ直つて、首さしのべて合掌せい。
團三　なんの事ぢやぞいなう。
新左　其方が望みの通り、注連縄にもまさつた武士の鏡になる事ぢや。潔よう殺されてくれいよ。
團三　エ、イ。
　　ト慟りする。
新左　エ、とは卑怯な奴の。今宵中に五郎さまの首打たねば、老母のお命がない。友切丸の紛失の科人となつて、五郎さまの代りにお出でなされた、老母のお命助けるのぢや。潔よう其方が首をくれいよ。

團三　滅相な〳〵。人の首をくれいと云ふ事が、どこにある事ぢやぞいの。忠義も何にも、おりや嫌ぢや。首がなうてどうなるもので。えゝ加減な事云うたがよい。
新左　嫌でも殺す、應でも殺す。嫌と云うて逃げ廻ると、苦痛をするぞよ。
團三　エ、イ、それでもおりや、首切らるゝ事は嫌ぢやもの。
新左　三代相恩の事忘れたか。
團三　奉公するも長生きがしたいばつかり。おりや命が惜しうござるわいなう。
新左　所詮心ようは討たれまい。逃げ廻ると苦痛をするぞよ。
團三、兄弟のよしみに、どうぞ命を助けて下されいなう。
新左　否でも應でも殺す。
團三　ア、、死とむないわいなう。
新左　はしをり鏡の兄弟ぢやもの、なんのおれが殺したからぞやい。其方を殺さにや、主人のお命がない。死ね、死にをらう。
團三　どうぞ命を助けて下されいの。
新左　ならぬ。

團三　ヤア、。
トいろ〳〵あつて付け廻す。一太刀切つて
新左　未練な奴の。
團三　アレエ、十郎さま、わしを殺さつしやるわいの。ちやつと出て、取支へて下されいなう。
新左　泣いても喚いても、もう叶はぬ。
團三　ア、、五郎さまは居やしやれぬかいなう。
新左　南無阿彌陀佛。
ト念佛申す。奥にて鉦叩く。團三郎、方々へ逃げ廻る、新左衛門、むかう切る。よき所にて、髻を持ち、首掻かうとする。さま〳〵あるべし。
團三　コレ〳〵兄者人、ア、、いかう術ない。この刀が咽喉へ入ると、もう死ぬるのかや。ア、、死とむない。この春買うてもらうた、たつた一度穿いた革草履、糸縞の襦、溜めて置いた玉錢が……ア、、死とむないわいの。
新左　卑怯な奴の。なんにも吐かすな〳〵。くたばつてしまひ居らう。
ト此うち、祐成、後に見て居て、新左衛門、團三郎が首掻かうとすると、十郎、留めて
祐成　鬼王待て。

新左　祐成さまか。團三郎めが死ざま、お恥かしうござりまする。おのれが死ざまを、十郎さまのお目にかけて、この顔を得上げぬわいやい。お退きなされませい。あんな奴は半時でも、生けて置く程恥の上塗り。その手ならもう叶はぬ程に、念佛でも申し居らう。

祐成　可哀さうに、もうアレ、この世を去る團三郎。せめて得心さして、殺してやりやいなう。

新左　イエ／＼、なんの得心。この根性で。エヽ、おのれはなア。見るもなか／＼腹が立つわい。

ト段々逃げ廻るを叉切る。祐成、留める。此うち、團三郎、髪解けて、中より書置散る。祐成、書置を取り恟りして讀む。

祐成　書置の事。

新左　エヽイ。

ト恟り。

祐成「兄弟は他人の始まりなれども、人の羨やむ程兄弟仲好く、ついに一度も兄弟喧嘩いたさず暮らし候ふところ今日の阿母様や五郎さまの御難儀、命の上になり……コリヤ／＼團三郎、これは何と云ふ事ぢや。

ト團三郎、書置を見て頭振る。

どうなる事ぢやと案じ居り候ふ、先刻に幟の謎の事を障子の内より聞いて居り候ふ、其まゝ首切られて、五郎さまの代りに行かうと思うたけれど、日本國を尋ねても、兄一人弟一人、よう切りはさつしやるまいと思うて。

ト團三郎、苦しむ思ひ入れ。

道理ぢや／＼……わざと逃げ廻つて、こなたに腹を立てさせ、憎がられて殺される覺悟にて候ふ、思ひ置く事はなけれども、こなたは六つ、おりや五つ、子供の時より五郎さまや十郎さまが……コリヤ、これは何と云ふ事ぢや。

ト團三郎、頭振る。

工藤左衛門祐經を、親の敵と討たしやる供に行かうと思うたに、こればつかり殘り多い事に候ふ、十郎さまや五郎さまにも、卑怯者ぢやない、殺される氣であつたと、この書置を見せて、お笑ひなされぬやうに云うて下され、恐々謹言。鬼王どのへ、團三郎」……オヽ、出かした。笑やせぬぞよ。天晴れ、侍ひぢやぞ／＼。

ト團三郎、新左衛門に早う殺してくれいと云ふ思ひ入れ。いろ／＼、苦しき思ひ入れ。新左衛門、祐成、この書面の間さま／＼あり、

新左　どうで助らぬ命ぢや。鬼王、苦しみを見せぬうち、早う。
新左　ハイ……出かした。いま首切るぞ。
ト刀振り上げても、よう切らぬ思ひ入れ。
祐成　切れまい。この書置を見ては、どこへ刀が當てられうぞいやい。
團三　兄者人、十郎さま、サア、首々。苦しい。術ない。早う／＼。
祐成　オヽ／＼。サア、鬼王、早う苦しみを助けてやりやいなう。
ト新左衛門、顏を袖に當て、盲目打ちに切る。脊中へ切りつける。團三郎、反り返り苦しむ。
コリヤ／＼、祐成、血迷うたか。性根を据ゑて。
ト新左衛門、キッとなつて、首ぽんと切る。新左衛門首を抱へ、さま／＼あつて、祐成、新左衛門、大泣き
この間たんとあるべし。
祐成　高麗寺の七つの鐘。
新左　鎌倉までも餘程の道のり。
祐成　明六ツの鐘を合圖に母人の首。
新左　時が切れては團三郎も犬死。
祐成　早う。

新左　ハアヽ。
ト首持つて表へ出る。
祐成　コリヤ鬼王、マア待て、團三郎が死出の旅路の、迷ひを照らす門出。
ト以前の書置を門火に出し
兩人　南無阿彌陀佛々々々々々々。
ト最前より、小次郎、表へ來て聞き居て、門火の灯にて、三人顏見合せ、恟り。新左衛門、火を消す。祐成戸をピッシャリ。
祐成　鬼王、夜明けぢや。怪我せぬやうに。
小次　鬼王、その首見よう。
ト小次郎、新左衛門にかゝる。立廻りあつて、小次郎を内へ投げ込む。祐成、以前の糠味噌桶にて小次郎を押へる。
新左　十郎さま。
祐成　鬼王。
新左　留主ようなされませい。
ト向うへ入る。拍子木打込み、

幕

四段目

大磯邯鄲屋の場

役名――工藤左衛門祐經。近江の小藤太。八幡三郎。邯鄲屋傳三。同、お次。遣り手、お杉。大磯の虎。化粧坂少將。傾城、龜菊。同、絹琴。朝比奈三郎義秀。寶來屋才右衛門。京の小次郎。鬼王新左衛門。曾我十郎祐成。曾我五郎時宗。秩父庄司重忠。

造り物、二重舞臺、一面の長暖簾。臆病口、中二階。橋がゝり、大門番屋あり、舞臺先よき所に井戸、仕掛けあり、臆病口、竹五六本切ろやうにして、よき所に手水鉢あり、遣り手お杉、おんない千鳥。邯鄲屋お次、傾城龜菊、同じく絹琴。禿、大勢、浮き拍子にて、幕明く。

ト橋がゝりより、大名の乘り物、段々乘込み、邯鄲屋傳三、手燭持ち出迎ふ。朝比奈三郎、向うより駕籠に乘り、大太刀を上に付け出て來り

駕籠　邯鄲屋は、爰かな。

傳三　ハイ〱、これでござりまする。どなたでござりまするな。

駕籠　どなたかは知らぬが、重うてどうもならぬ。サアサア、旦那、爰が邯鄲屋でござりますぞ。出さつしやつて下さりませい。

朝比　最早爰が邯鄲屋か。

ト朝比奈、駕籠より出ろ。

傳三　ヤア、これは朝比奈さまぢやござりませぬか。

朝比　今日は父樣の名代ぢや。大事にせろ。大事にせろ。

傳三　くも駕籠に乘つての御來駕、面白うござりまする。

朝比　なんと趣向、面白からうが。

傳三　サア〱、駕籠の衆、勝手へ行て酒一つ。

朝比　コリヤ〱、彼奴等に酒呑ます事はない。駕籠舁きども、去に居らう。

駕籠　ハイ〱〱〱。

ト入る。

傳三　サア、お出でなされませい。朝さまのお出でぢやぞ。

トやかましう云うて内へ入る。

皆々　手の鳴る方へ〱。

ト奥より、龜菊、絹琴、お杉、お次、禿、皆々出る。

すぎ　捕まよ／＼。

ト浮き拍子にていろ／＼あり、よき所にて、お杉、朝比奈に抱きつく。

朝比　エヽ、臭いわいやい。

トお杉を投げる。お杉、悄りして

すぎ　オヽ、朝さま、ござんしたか。遅い亭主方ぢやぞえ。

絹琴　どこの太夫さん方と色事して居さしやんしたやら、きつう遅かつたなア。

亀菊　外の亭主方は、日のうちから詰めかけて居やしやんすに、どうしてお前は遅かつたぞいなア。

ト朝比奈が手を取るを振り放し

朝比　エヽ、アタ嫌らしい。怪體な事しくさんた。

亀菊　何が怪體なぞいなア。

朝比　さればいやい。今日爰へ來る客めが、怪體ぢやと云ふ事ぢやわいやい。

つぎ　なんぼ怪體でも、工藤さまをこの揚屋で、振舞ふのぢやないかいなア。

朝比　サア、その工藤めを振舞ふと思へば、げい／＼と虫唾が走つて胸が悪い。

つぎ　それでも亭主方が、大事の客を嫌がつては、どうもならぬわいなア。

朝比　なんであらうと、今日はいつもよりは酒を過して、暴れてこまさう。コリヤ、女郎ども、その酒持つてうせう。

つぎ　アイ／＼。

ト大きなる樽三つ四つ持ち出る。朝比奈、樽の鏡を抜きグッと呑み

朝比　なんであらうと、今日はグッと呑みかけて、工藤がいま／＼しい顔をするが否や、横ぞツ頬を粉にしてこまさう。

トまた呑む。

亀菊　ほんに、朝さんの酒が過ぎたら、堪るまいぞえ。

すぎ　さうして、お前の相方は、誰れにさしやんすぞいなア。

朝比　怪體な事吐かすないやい。

つぎ　ハア、誰れであらうぞ。幾瀬屋の高圓さんにしたものであらうか。

朝比　エヽ、怪體な事吐かすないやい。

絹琴　ソレイナア、朝さんの相方には、巴屋の大町さんがよからう。大柄でえいわいなア。

龜菊　イエ〳〵、大町さんよりは、朝さんのやうな大きな男は、振り袖がよいといな。雛鶴屋の金山さんにさしやんせいなア。

つぎ　金山さんはよからうわいなア。

朝比　嫌ぢや〳〵。女郎どもは、おれが側へは一人も寄せな。おらが相方は、いつものやうに按摩ども、百人ばかり呼んで來い。マア、その按摩が來るまで、女郎ども、そろ〳〵寄つて腰を揉め。

つぎ　また腰を揉むのかいな。

朝比　細言云はずと、腰を揉み居れ。

つぎ　それ〳〵、男の味を覺えた女子は嫌ひぢや。禿衆、大儀ながら皆寄つて、朝さんの腰を揉んでたもいなう。

朝比　小びつちよどもでは堪えぬ。いつものやうに腰を揉み居れ。

つぎ　それ〳〵、いつも朝さんの腰打つ物を、持つておぢやいなう。

すぎ　アイ〳〵。これでござんすかえ。

　ト大きなる杵を持つて來る。

つぎ　それぢや〳〵。そろ〳〵寄つて、腰打たねばならぬぞや。

すぎ　合點ぢや〳〵。

　トお杉、朝比奈が側へ坐り、臼取りする。絹琴、龜菊、お次、三人して杵持ち、餅搗くやうにする。傳三、出て

傳三　サア〳〵、堪らぬワ〳〵。お次〳〵、お次はどこへ行たぞいやい。

　トやかましう云ふ。

つぎ　兄さん、爰に居る。なんぢやぞいなア。

傳三　なんぢやどころぢやないわいやい。太夫方の所へ人をやつたか。まだやりはせまい。今日はマア、幾日ぢやと思うて居るぞいやい。

つぎ　知れた事。二十八日、和田さまの大寄せぢやわいなア。

傳三　それ程の大振舞ひに、太夫さん方が一人も見えぬ。どうした事ぢやぞいやい。

つぎ　太夫さん方の所へは、人に人が付いてあるわいな。

傳三　エ、、つんと、一人心がせわ〳〵する。コリヤ、絹琴さんや龜菊さんは、まだぢやあらうが、ほんにあの和郎達は、七度半の使ひでなければ來ぬやうにする程にの。

龜菊　わしらは疾から來て居るわいな。

傳三　エヽ、ほんに來てぢや。早い／＼。どうでもお前方ぢやわいなう。虎さんや少將さんはまだであらう。
つぎ　虎さんや少將さんは、大門口まで、重忠さまや祐經さまの迎ひに行かしやんしたわいなア。
傳三　なんぢや知らぬが、心がせわ／＼するわい。さうして爐の炭も、なぜついで置かんぞいやい。
つぎ　爐の炭もついで置いたわいなア。
傳三　掛け物は。
つぎ　掛け直して置いたわいなア。
傳三　そんなら。
つぎ　料理も云ひつけて置いたわいなア。
傳三　そんなら。
つぎ　まだなんぞ云ふ事があるかえ。
傳三　なんにも云ふ事はないわいやい。
つぎ　ほんに、やかましい兄さんではあるわいの。
傳三　それはさうと、暴れ者の朝比奈さまは。
龜菊　さう／＼、寄つて腰を揉んで、寢さして置いたわいなア。
傳三　出來た／＼。イヤモウ、彼方が起きて居やしやると、どこもかも堪るものぢやない。なんと太夫さん方、お客の揃ふまで、奥で一つ吞まうぢやござりませぬか。
絹琴　こりや、よからうわいなア。
　ト云ふうち、八幡三郎、近江小藤太、出て
兩人　傳三は内に居るか／＼。
傳三　ハイ／＼、どなたでござりまする。ようお出でなされました。
小藤　憎い奴等の。身共がこれへ參るに、なぜ出迎ひにうせをらん。
三郎　但し身共がこれへ參るが氣に喰はぬか。なぜ大門口まで迎ひにうせぬ。
傳三　アヽ、不調法でござりまする。お免され下されませう。
つぎ　さうして兄さん、あなた方はどなたぢやえ。
傳三　ハテ、どなたぢや、おれは知らんわい。
つぎ　マア、どなたぢや。お名を問うたがよいわいな。
傳三　あなた方は、どなた樣でござりまするな。
小藤　身共を知らぬか。
傳三　存じませぬ。
三郎　憎い奴の。
　ト反り打つ。

傳三　アヽ、お免されて下さりませ。
小藤　知らずば云うて聞かさう。今日の正客。
傳三　ハア、イ。
小藤　身共は近江の小藤太。なんと膽が潰れるか。鎌倉の大名小名も、怖ぢ恐るゝ祐經さまの御家來ぢやぞ。
三郎　今日主君祐經、この所へ遊興にお出でなさるゝ。それゆゑに見え隱れのお供に參つた。
傳三　ハテ、さうとは存じませいで、お迎ひにも參りませなんだ。その段は太夫さん方に免じて、御堪忍なされて下さりませう。
龜菊　申し、お二人さん、お前方のござんす事は、傳三さんの知らしやんした事ぢやない。堪忍して上げまして下さんせいなア。
つぎ　どうぞ御機嫌直して下さりませ。
傳三　ハイ、あの通りでござりまする。
三郎　なんと小藤太どの、お聞きなされたか。女と云ふものは、憎うないものでござるぞ。
小藤　左やう／＼。イヤモウ、このお傾城達にならば、少少踏み殺されても大事ないてや。
三郎　エヽ、好きな人ではござるぞ。コリヤ傳三、其方は仕合せ者。今日本國に於て、主人祐經に恐れぬ者はない。賴朝公さへ主人にお逢ひなさるゝと、猫に追はれた鼠のやうぢや。
小藤　それ／＼、その外の大名、和田北條を始めとして、主人の威光には叶はぬてや。
三郎　その祐經どのが、今日爰へお出でなさるゝと云ふは其方が揚屋冥加に叶つたと云ふものぢや。喜べ／＼。
傳三　エヽ、有り難うござりまする。
ト朝比奈三郎、目を覺まし聞いて居る。
三郎　して、亭主方の大名は、殘らず揃うて居るか。
傳三　殘らず大座敷にお出でなされてゞござりまする。また重忠さまは、祐經さまのお迎ひに、大門口までお出でなされました。
三郎　なんと聞かれたか、主人の威光と云ふものは、きついものではないか。
傳三　イヤモウ、空飛ぶ鳥も落ちると云ふものぢや。
三郎　その凄まじい工藤さまを、親の敵と云うて、曾我兄弟の貧乏人が狙ひますといの。
小藤　イヤモウ、そりや叶はぬ事。正眞の提灯で釣り鐘でござるサ。

三郎　聞けば和田が三男、朝比奈の三郎と云ふ奴が、彼の貧乏人が肩を持つて、敵を討たさうと云ふげにござる。
小藤　ハヽヽ、その朝比奈と云ふ奴は、下手な佛師の作つたむくりこくり見るやうな奴ではござらぬか。
三郎　成る程、ほんの身體倒し。力は蠅程もない。朝比奈を強い／＼と云ふに依つて、どれ程力があると思うて、いつぞや角力取つて見ましてござるに、この八幡に兩腕を捉へられて、その面がイヤモウ、こなたに見せたかつた。
小藤　拙者も朝比奈に出ツくはし、右の腕を捻ぢさして見ましたが、小藤太が小指の端へフラ／＼。とんと猿ぢやて。
三郎　その態をして、工藤どのゝ御内に、こなたや某があるとも知らず、曾我兄弟が肩を持つとは、イヤモウ、片腹痛い事でござるサ。
ト此うち、朝比奈、ソロ／＼立つて、八幡三郎が首筋引掴み、くる／＼と廻す。小藤太、朝比奈と顏見合せ悄りする。朝比奈、小藤太を、くる／＼と廻し、三人顏見合せ
小藤　ヤア、朝比奈さま。

三郎　先刻にからの事を
朝比　聞いて居た。
小藤　エヽイ。
ト慄ふ。
朝比　引裂いて喰つてしまはうか。
三郎　アヽお免されて下さりませい。
朝比　なんだ、むくりこくりぢや。猿ぢや。よう云うたなア。頭から呑まうか。ごた／＼にせうか。
ト二人を打ちつけ廻す。二人いろ／＼ある。
兩人　コリヤ傳三、賴むぞ／＼。
ト逃げ込む。朝比奈、追ひかけ入る。
傳三　なんと氣味のよい事ぢやないか。
つぎ　猫に追はれた鼠のやうに、こそ／＼と逃げて行たわいなア。
傳三　それはさうと、祐さまの迎ひに、大門口まで行かうぢやあるまいか。
つぎ　それ／＼、太夫さん方も連れて行かう。
龜菊　サア、皆おぢや。
皆々　アイ／＼。
トいろ／＼あつて皆々向うへ入る。と橋がゝりより、

兵内、高提灯にて拍子木打ち出る。向うより軍太兵衞、右の通りにて出て

兵内　軍太兵衞どのではござらぬか。

軍太　其許は兵内どの、斯様に我れ／＼が廓へ參つて、夜番を致さうとは存じませなんだが、斯様な所で番を嚴しう仕れとは、どうした事でござらう。

兵内　さればの事でござる。今晩爰で和田北條、工藤左衞門どのを招待なさるゝに付き、斯様に番を嚴しく仕れとの御意でござるサ。

軍太　してマア、この廓の番人めは、どれに居る。

兵内　我れ／＼が廻ればよい事のやうに、どぶさつて居るものでござらう。家來ども、番人をこれへ呼んで參れ。

ト侍ひ「ハアー」と橋がゝり番人の方へ行く。

侍ひ　番人め、お召しぢや。出ませい。

ト聲々に云ふ。番屋より、鬼王新左衞門、太鼓持つて出る。

新左　オヽ、オイ／＼、何時ぢや知らぬ。晝時分からたつた一寢入やつてこました。誰れぢやい／＼。なんぼ寢ても／＼眠たい程にの。

侍ひ　お召しぢや。あれへ參れ。

ト新左衞門、吻りする。

新左　ハイ／＼、これはどなたでござりまする。

軍太　おのれはこの廓の番人ぢやな。

新左　ハイ、左様でござりまする。

兵内　最早日も暮れたに、なぜ暮れ六ツの時は打たぬ。

軍太　今晩は工藤左衞門祐經さま、この廓へお出で。それゆゑ我れ／＼が斯様に御番を勤むる。何ゆゑ暮れ六ツの時は打たぬ。

新左　ハイ／＼、御意でござりまする。廓の儀は暮れ六ツは打ちませぬ。限りと申して、仕舞ひ太鼓ばかりでござりまする。夜が明けたやら、日が暮れたやら、知らぬやうにするが、爰の習ひでござりまする。

兵内　何は兎もあれ、喧嘩口論の中に、火の用心に念の入れ居らう。

軍太　今日はいつもと違ふ。廓へ入込む奴等、胡亂な者は咎め居らう。

兵内　折々は太鼓を打つて、火の用心も觸れ居らう。憎くい奴の。

軍太　兵内どの、お別れ申しませう。

兵内　後程お目にかゝりませう。

ト両方へ拍子木打ち出る。新左衞門、後を見て

新左　ても、むまい奴等ではあるぞ。仰山さうに二本三本差こらし、とんと神輿の先拂ひぢや。ドリヤ、我れらも叱られぬうち、火の用心觸れて來うか。

ト向うより、少將、走り出て行き當り

少將　ア、、どなたぢや。お免されませい。

新左　どいつぢや。人に行き當り廻つて。

少將　さう云はんすは、鬼王さんぢやないかいなア。

新左　鬼王さんとは、少將か。

少將　コレイナア、わしやお前に逢ひに來たのぢや。いま大門口で五郎さんが、奴を大勢相手にして、喧嘩をしてでござんすわいなア。

新左　なんぢや喧嘩ぢや。

少將　サイナア、留めてもどうしても、その奴どもがきかぬと云うて、五郎さんを踏んだり蹴たりして居るわいなア。

新左　なんぢや、五郎さまを踏んだり蹴たりして居るか。

少將　早う行て下さんせいなア。

新左　踏まれて居さつしやるなら大事ない。そんなら行くに及ばぬ。

少將　それでも早う行て下さんせいなア。

新左　ハテ、よいわいやい。人に踏まれたり、叩かれたりさつしやる向きは大事ない。叩いてさへござらねば大事ない。

ト此うち、向うより、若黨、奴大勢、曾我五郎が胸倉を取り引摺り出て

皆々　うせう〳〵。

ト口々にやかましう云ふ。

時宗　ほんの粗相でござりまする。企んでした事ぢやござりませぬ。御免なされて下さりませ。

若黨　ならぬわやい。おのれ、この提灯、どなたの御紋だと思うてけつかる。

時宗　どなたかは存じませぬ。なんの存じて致しませう。お免されて下さりませ。

若黨　イヤ、知つて居るであらう。工藤左衞門さまの御紋付きの提灯、なぜ蹴破つた。

時宗　なんの私しが存じませうぞ。

若黨　其奴、踏みのめせ。

ト時宗に奴かゝる。立廻りにて見事に投げる。

うぬ、投げたぞよ〳〵。

時宗　なんの私しが投げませうぞいなう。
若黨　イヤ、斯う投げた。
　ト投げにかゝる。少々立廻りあつて、皆々を投げる。新左衛門と顔見合せ悧りして、奴を皆々起し砂を拂ひいろ〳〵思ひ入れあり
時宗　これはマア粗相千萬な。おこけなされましてござりまするか。ハイ、砂を拂うて上げませう。どうぞ御料簡なされて下さりませ。
　ト砂を拂ふ。
若黨　如何にも料簡してくれう。そこへ直つて、三人に踏まれ居らう。
時宗　左様なら、お踏みなされましたら、御料簡なされて下さりまするか。
若黨　それへ直り、尋常に踏まれたらば、料簡してくれう。
時宗　それは有り難い。サア、お踏みなされませい。
若黨　よい覺悟ぢや。皆踏め〳〵。
　ト散々に踏む。ヂッと踏まれて居る。新左衛門、ツカツカと行つて三人を見事に投げる。
　横合から出やアがつて、なぜ投げた〳〵。
新左　裁人ぢや〳〵。

若黨　裁人なら投げても大事ないか。
新左　此やうな喧嘩口論もあらうかと、廓を守る夜番でござんす。この若い人を踏んだり蹴たりして、もしもの事があると、この夜番の不調法になる。料簡ならざ存分にしまする。マア、こなさん方の御主人に逢うて、相對して存分にさして進ぜませう。サア〳〵、ござりませい。
若黨　どれへ參るのぢや。
新左　こなた衆のお館へ相對に行くのぢや。
若黨　えいワ〳〵、料簡するわサ。
新左　そんなら云ひ分ごんせんか。
若黨　云ひ分はない。
新左　云ひ分なくば、とつとゝ行つたり〳〵。
若黨　命冥加な奴ではあるぞ。
　ト邯鄲屋の内へ入る。新左衛門、時宗が塵を打拂ひ
新左　五郎さま、さぞ御無念にござりませう。よう御堪忍なされました。
時宗　なんの無念な事があらうぞいなう。この五郎が替りになつて、團三郎が死んでくれたに依つて、暫しがうちも團三郎が事、忘れた事はない。コレ、この着て居る物見や。團三郎が最後まで着た着物。これを着れば團三郎

と、一緒に居ると思うて、どのやうな無念な事があつても、團三郎に免じて、おりや堪忍するわいの。
新左　モウ、お前を叱るおれでさへ、料簡がならなんだ。よう踏まれさつしやつた。出來ました〳〵。
時宗　鬼王、兄弟が年來の望み、今月今宵親の敵、工藤祐經を討たうと思へば、嬉しうて〳〵ならぬわいなう。祐經を討つまでは、大事の命。例へ人の股を潜り、今のやうな犬ころのやうに云はれ、踏まれても叩かれても、無念にもない。今宵祐經を討たうと思へば、嬉しうて嬉しうてならぬわいの。
新左　お氣遣ひなされるな。この鬼王が本望遂げさせます。
時宗　して、祐成どのは。
新左　ヤア、。
時宗　サア、今宵兄弟が本望遂ぐるに、この間から十郎どのゝ便りも聞かず、是非今宵は兄弟一緒に行かねばならぬ。コレ、狩裝束も持つて來た。早う祐成どのに逢はしてたもいなう。
少將　コレ、鬼王さん、祐さまに五郎さまが來てぢやと、知らせてござんせいなア。
新左　十郎どのには、どうも逢はされん。
時宗　そりや又何ゆゑに。
新左　揚げ錢の代りに、十日前から祐成さまは、この廓で法に行はれ、補伏せに遭うてぢやわいなう。
時宗　ヤア、、すりや祐成どのは。
　ト行かうとする。
少將　コリヤ、どこへ行かしやんす。
時宗　其方が知つた事ぢやない。
少將　待つた。
時宗　兄弟が心を盡すも、工藤が首見ようばかり。今宵討たねば又と逢はれぬ大事の敵、十郎どのと一緒に。
新左　敵討たせうと云ふ事か。
時宗　十郎どのを盗み出して。
新左　廓は多くの入込み。五郎時宗と人に知られては、いよいよ敵は討たれぬぞや。
時宗　なんと。
新左　祐經は今宵のうち、この廓へ入込む事は。
時宗　和田北條のもてなしにて、祐經を正客として、和田の一門九十三騎の大寄せ。今宵待たねば。
新左　コレ、急く所ぢやない。十郎さまもこの鬼王が盗み出し、御兄弟が年來の望み。

時宗　本望遂ぐる時節到來。

少將　エヽ忝ない。

新左　必らず急く所ぢやない、合點か。この鬼王が合圖するまで、幸ひのあの番家。少將、五郎さまを。

少將　アイ。

時宗　必らず合圖を待つて居るぞや。

新左　どのやうな事があらうと、爰へ出る事はならぬぞ。

時宗　合點ぢや。

新左　ドリヤ、親方が叱らぬうち、火の用心觸れて來うか。

時宗　そんなら後に。

少將　サア、ござんせ。

新左　火の廻り〳〵。

ト唄になり、時宗、少將、番屋へ入る。新左衞門、向うへ入る。と向うより侍ひ大勢、鎗襖を作つて出る。禿四人、螢籠を持ち、畠山重忠、竹の先に團扇を付け出て、龜菊、絹琴、虎、お杉、傳三、ザワ〳〵出る。工藤祐經、次に鎗襖作り、見得よく出る。この間始終めりやす。

禿皆　螢來い。火取らそ〳〵。

ト重忠、酒に醉ひたるこなしにて、螢取る模樣あり

つぎ　申し重さん、どこにも螢は居やせぬわいなア。何さしやんすぞいな。

絹琴　それ〳〵、右の方へ行かしやんすと、はまるぞえ。

龜菊　オヽ辛氣、張拔きの虎のやうなわいなア。

重忠　張拔きの虎とは面白い。我れらは張拔きの虎の如く、祐經どのは虎の威をかる狐どの。虎嘯かば風起る。虎御前の外八文字。伽羅の香りがパッとして、男たる者の小鼻がひこ〳〵。どこやらもしよき〳〵、堪らぬ〳〵。イヨ、虎さま〳〵。

虎　重さんのきつい醉ひやう。折々廓へござんす時は、根ッから酒も上がらず、澁い顏して居やしやんす。今日はきつう碎けかけて、堅い男の醉うたと云ふものは、どうやら可愛らしいものぢやわいな。

重忠　我れらが酒に醉うたが、お氣に入つたか。有り難い有り難い。祐どのも、どうやら酒が足らぬやら、いからお面が四角八面に見え申す。なんと、此やうに美しい物を並べかけたところは、どうも云へぬ。面白い〳〵。

祐經　ヤア〳〵、どうも云へぬ。狩場に於て熊狼を生捕りにして、並べたやうなものではない。麗はしいものでござる。

傳三　イヤ、申し旦那、こりや太夫さん方を引連れて揚屋入り。後先とにヒラ／＼拔き身の鎗、揚屋入りと引かれ者と一つにしたやうで、どうやら氣味が惡い。こりやマア、どう云ふ譯ぢや。とんと合點が參りませぬ。

虎　ほんに重さん、後と先とに鎗襖作つて、どうやら怖いやうなものでござんす。ありやマア、どう云ふ譯ぢやわいなア。

祐經　拙者も毎日々々、弓矢打ち物にホッと見飽いて居る。今日は其許を始め、和田の一門、この祐經をもてなさんとの催ほし。拙者も廓へ參つて、狩場の滯留の欝散と存じたところに、鎗を以て前後を圍うて、とんとハヤ心が浮かいで、面白うござらぬ。

重忠　そこが彼の只今申した、虎の威をかる狐どのぢや。

祐經　狐とは。

重忠　ハテ、狩場棟梁の間は、其許は賴朝公の御名代、富士の御狩の惣奉行。先づ今日までは賴朝公も同然。そこで貴殿が狐どの、虎の威をかる狐どのと申したが、我れらが誤まりでえすか。

祐經　それは聞えてあるが、後と先とに鎗襖は、どうでござる。

重忠　先づ廓は繁華の地、大切なこなたにお怪我もないやう、其許の御粗相で、膝頭摺剝かれても、この重忠が不調法。床柱で頭をお打ちなされても、重忠が不調法。用心には網を張れ、石に根繼ぎと申す謂れ因縁、あら／＼斯くの通りでござるてや。

傳三　アヽ、謂はれを聞けば氣味惡ぢや。サア、お二人ながら、お通りなされませい。

つぎ　それ／＼、マア、あれへお通りなされませい。

重忠　左樣ならば、御意に任するぢや。サア、君達、お出で。

ト皆々奥へ入り、見得よく並ぶ。

侍ひ　我れ／＼は如何仕りませうな。

重忠　われ達は東西の門々を固め、一番鷄が謳うたら、迎ひに參れ。それまでは一人も出入りは叶はぬぞ。

祐經　門を締めて出入りさゝんとは、どうでござる。

重忠　其許のお立ちは、八聲の鷄の告ぐるまで。門々を打たせましたは、これも其許が大切さ。

祐經　とは又なぜな。

重忠　曾我殿原の素浪人、貧乏人どもが、貴殿のお出での樣子を聞いて、入込むまいものでもない。そこで門々を

締めさせて、一番鷄の謳ふまでは、明けさせぬと申すは
其許が大切さ。
祐經　段々の御馳走。
重忠　家來ども、一番鷄の謳ふまでは番木嚴しく仕れ。
侍ひ　ハア。
ト侍ひ、兩方へ別れ、門を締め入る。虎、こなしあつ
て
虎　重さん、曾我殿原の素浪人、貧乏人とは、誰れが事
でござんすえ。
重忠　ハア、、誰れが事であらうな。
つぎ　ハテ、貧乏人と云はしやんすは、祐成さんの事であ
らうぞいな。
虎　其方に問やせぬ。アタなめた。すッ込んで居や、
重忠　ハ、、、貧乏人を貧乏人と申したが、太夫どのゝお
氣に障つたさうな。いづれも、虎どのへよろしくお詫び
頼むぞ。
つぎ　ほんに、祐さんの機嫌が惡い。サア、虎さん、機嫌
直して下さんせえ。
龜菊　コレイナア。虎さん、其やうに腹立てすと、よいわ
いなア。

虎　アイ、祐さんの事を惡う云ふ人があると、腹が立つ
わいな。
絹琴　サイナ、重さんの出損なひ、詫びしてくれと云はし
やんすわいなア。
傳三　ハテ、重さんの惡う仰しやつたと思うて、腹をお立
てなされますのぢやが、惡う仰しやつたのでもないわ
いなう。
重忠　それ〳〵、拙者曾我に意趣遺恨はなし、なんの身共
が惡う云うて堪るものかい。
虎　アイ、曾我の十郎さ、とこの虎は、鎌倉中に誰れ知
らん者はない、深い仲ぢやわいなア。
重忠　イヤ、其方と祐成が、深いと申す事は、鎌倉中に誰
れ知らぬ者はないて。
虎　わしが可愛いと思ふ祐さんを、お前はなんと云はし
やんした。
傳三　ハテ、ツイ貧乏人と仰しやつたのぢやて。
つぎ　コレ兄さん、默つて居やしやんせ。
虎　アイ、知れた貧乏人ぢやわいなア。わしらはなんに
も知らぬけれど、侍ひと云ふものは、詞を飾らず、人に
諂らはぬが侍ひでござんす。貧乏人でも曾我殿原は、侍

ひでござんす。お前方のやうな、諂ひ武士とは違うてあるわいなア。嘘を賣る傾城より、淺ましい追從云うて、たんと知行貰ふお方と、貧乏しても誠の侍ひと、穢ない侍ひとは、お月様とひらた雲程違うてあるわいなア。

重忠　御尤も。

虎　重さん、侍ひと書く文字は、裏から見ても表から見ても、同じ事ぢやといなア。

重忠　御尤も。

虎　直ぐな道を横に行くと云ふは、蟹侍ひと云ふといなア。

重忠　御尤も。

虎　追從云ふを犬侍ひとも。

重忠　御尤も。

虎　猫とも。

重忠　御尤も。

虎　鼬鼠狐狸むじな、獺々々々ぢやわいなア。

重忠　尤も／＼／＼ぢや。

虎　ア。嬉しや、ちつと積が鎮まつた程にの。

傳三　ア、その獸物を黑焼きにしたら、よい金儲けになア。

虎　ほんに、あんまりでをかしいわいなア。

傳三　ほんに、あんまりでひだるいわいなア。

つぎ　ソリヤ、虎さんの笑ひ顔が出た。

絹孝　虎さん、機嫌直つたかえ。

虎　云ふ事云うてしまうたら、どうやら恥かしいわいなア。

祐經　重忠どの、あの女は十郎が、寵者でござるかな。

重忠　左樣でござる。

祐經　ても、ようしやべる女ではあるぞ。

重忠　遊君と申す者は、どれどもが皆あのやうに、はしたなうござるて。

つぎ　はしたないと云はしやんしたら、また腹を立てさしやんせうぞえ。

重忠　オッと、云はぬぞ／＼。

傳三　どうやら面白うない。なんと大きな物でやりかけうかい。

重忠　よからう。其方よろしく、計らへ／＼。

傳三　コリヤおすぎ、うつかりとして居る事はない。お銚子お銚子。

すぎ　アイ／＼。

傳三　ト杯を持つて出る。
コレ太夫さん、面白うやりかけた〳〵。
ト唄になり、傳三、やかましう云ふ。橋がゝりより、祐成、紙子にて棒縛りにして、才右衛門、付き出る。町人二三人出る。

才右　コリヤ、キリ〳〵歩けやい。

町人　キリ〳〵行きをれ〳〵。

祐成　其やうにやかましう云ふな。ひだるいに依つて、ほかほかとは歩かれん。早う歩かしたくば、握り飯など喰はせい。

才右　傳三、内にか〳〵。

傳三　誰れぢや。お客なら去んだり〳〵。

才右　イヤ、才右衛門ぢや。

傳三　オヽ、才右衛門、何しに來たのぢや。

才右　イヤ、科人を連れて來たのぢや。

傳三　なんぢや、科人ぢや。

才右　コレ、皆の衆、その棒縛り、爰へ連れて入つて下されい。

町人　合點ぢや〳〵。

ト内へ引摺つて入る。傳三、顔見て恟りして

傳三　お前は祐さんぢやござりませぬか。

祐成　オヽ、傳三か、久しや〳〵。命あればぢやなア。

傳三　このお姿は、どうでござりまする。

ト祐經、重忠、祐成と顔見合せ、恟り、いろ〳〵思ひ入れあり。

つぎ　祐さん、この間は久しう逢はぬが、なんぢや、をかしい趣向ぢやさうなア。

祐成　サア、傾城買ひの成れの果は、通用がこんなものぢや。

傳三　才右、祐さんを棒縛りにしたは、どう云ふ事ぢやぞいの。

才右　貴樣知らぬか。十日前からこの廓中で、家並にこの十郎めを桶伏せにするわいの。

傳三　するとはどうぢやい。

才右　さればいの。この才右衛門に三百兩の揚げ代、催促されてすつぱりと、拂ひ居つたと思うたれば、聞いてたも、銅脈を掴まし居つた。憎さも憎しと思うて、方々尋ねて十日後に引ツ捉まへて、家並に一日づゝ桶伏せにして置く。今夜は爰の番ぢや。科人をしつかりと渡したぞや。

ト皆々入る。

傳三　これは又情ない。今夜に限つて、桶伏せとはどうぢやい。

祐經　ヤイ亭主。身が目通りに置くな。胸が惡い。重忠どの、彼奴は何者でござるな。

重忠　さあれば、見る樣子が、何ともその意を得ぬ姿でござる。手拭掛けとも見えず、奴凧のやうにもあり、コリヤ、工藤どのゝ御前ぢやぞ。傳三、早く次へ連れ立て。

　ト祐成、悔りして氣を替へ

祐成　ホウ、さう仰しやつたは、重忠どのぢやござりませぬか。

重忠　お身は曾我十郎祐成。味な形になり召されたなう。

祐成　さては堅藏めが廓通ひと出かけたな。こちらが大盡めは、ヤア、工藤どの。さては石部金吉寄り合うたワ。

祐經　なんだ、曾我の十郎。其許がお話しの貧乏人な。イカサマ、ハヤ、いつぞや鶴ヶ岡にて對面いたした。とんと見外れました。

祐成　左樣でござりませう。その後は久しくお目にかゝりませぬ。この廓へお出での樣子承はつたら、お連れになりまするに、重々氣が惡いぞや。工藤重忠打揃うての揚屋入りとはけうとい。こりや今夜はもてるわい。

重忠　お身やその態になつて、工藤どのや我れ〱に、對面するは無念にはないか。

祐成　エヽ、この形な……拙者がこの形は、揚げ錢が少々溜つて、拂ふ才覺がならぬぢや。そこでこれぢや。追ッつけ又、奇妙な所へ入つてお目にかけませう。据ゑ風呂桶に窓明けた物ぢや。その中へ我れらを入れるぢや。その上に大石を乘せるぢや。これを名付けて桶伏せと云ふぢや。彼の窓からヌッと首を出してはズッと入り、ヌッと出してはシュッと入る。後程お慰みに入つてお目にかけう、御覽じ。イヤモウ、どうも云へたものでない。

　ト虎と顏見合せ

わりや太夫か。

虎　アイ。

祐成　なんぢや。ムッとした顏ぢやなア。なんで物を云はんぞいやい。

虎　あんまりお前が、面白さうに話して居やしやんすに依つて、邪魔にならうかと思うて。

　ト祐成、ひぞりかけて

祐成　なんぢややら、くぜりかけるワ。この間は桶の内より外、どこへも行きはせぬが、元より口舌した覺えなし

と。なんぢややら、淺切りと物云はずに持たせぶりぢやな。

虎　アイ、物が云ひとむならござんす。氣に入らぬ事があるわいな。

祐成　我れらが參つたが、お氣に入らぬか。

虎　イヽエ。

祐成　イヤ〳〵、お氣に入りますまい。氣に入らぬ所に、長居しても面白うない。さらばお暇申さうか。

ト表へ出ようとする。棒つッぱる。

エヽ、去なうと思ふけれど、門口が狹いに依つて、去なれぬわい。

虎　わしや先刻にから、口惜しうて〳〵ならぬに依つて、それでお前に物を云はなんだ。堪忍して下さんせ……ほんに、わしや口惜しいやら悲しいやら、この胸が裂けるやうなわいな。

祐成　イヤ〳〵、お腹が立ちませう。拙者はお暇仕るぢや……カウッ、まともには出られぬ。ひらた蜘蛛の格で横になつて出てこまさう。

祐經　十郎待て。

祐成　イエ〳〵、お構ひなされて下さりますな。この形になりましたに依つて、秋風となつたな。さらばお暇申さうか。

祐經　十郎祐成待て。

祐成　イエ〳〵、お暇申しませう。

祐經　待てと云はゞ待ち居ろう。

ト祐成、ハアヽと下に居る。

重忠　工藤どのゝお召しぢや。これへ參れ。

ト祐成、ハアイと立つて、そろ〳〵行く。

祐經　爰へ來い。

祐成　ハアイ。

祐經　下に居ろう。

ト祐成、ちやつと下に居る。

われが親河津三郎、奧野の狩の歸るさに、ぶち放した工藤祐經。その左衞門が顏を見ても、無念には思はぬか。

祐成　なんともござりませぬ。

虎　すりや、現在親の敵の祐經が前へ、犬のやうにちよこなつても、なんともないか。

祐成　なんとも存じませぬ。お前は大名、我れらは唐までも聞えた貧乏人。ほんの燈心と釣り鐘。兎角長生きして、傾城買うて遊ぶが面白いぢや。

祐經　すりや、傾城にほだしを打つて、侍ひの性根は。
祐成　とんと忘れ果てましてござりまする。
重忠　内に思ひある時は、色外に顯はるゝ。心中に無念の兆ある時は、自然と眼中鋭く、眦りに血を濺ぐ。其方が面體を見るに、心中に憂ひなく、色慾に魂ひも蕩け、父の仇を打つ所存もないぢやまで。
祐成　兎角長生きがしたいぢや。
祐經　イヽヤ、無念にござらう。此奴を虫に譬へて見さつしやれ。
祐成　ハア、私しを何虫にな。
祐經　蟻に。
祐成　ハア、蟻とはな。
祐經　十郎、其方は恐ろしい者ぢや。韓信は四百年の基を開く。近くは源の賴朝公、無念の堪えて堪忍の二字を守り、いま日本の惣追捕使。彼の蟻と云ふ虫めは、その形諸虫に越えて小さく、僅か一分に足らぬ形なれども、義を金鐵の如くにして、集まる時は大地を穿つ。人は萬物の靈にして、利慾常にあり、憎い悲しい無念なと云ふ事を、鳥類だに辨まへるに、その念を面に顯はさぬと云ふは、祐成、其方は大丈夫な魂ひぢやなア。

祐成　ハヽヽ、お前を山伏にしたら、ねから見せ手はあるまいぞえ。きつい違ひやう。その目利きでは、なか／＼男女相性の占ひは心元ない。
重忠　ハヽヽヽ、工藤どの、彼奴誠の他愛なしでござる。此やうな奴を、貴殿や拙者が目にかけまするは、第一目の穢れ。稲子に劣つた……斯樣に申すも、なんの役に立たぬ事。いづれも、お待ち兼ねでござらう。コリヤ傳三ソレ、工藤どのゝお供申して、奥へ參れ／＼。
傳三　サア／＼、此やうな端近にござらうより、大座敷で大騷ぎ／＼。
つぎ　サア、祐さん、奥へござんせいなア。
祐成　どうもこの形では行かれまい。
つぎ　お前の事ぢやないわいな。祐經さん、奥へござんせいなア。
重忠　サア、工藤どの、奥へ參つてわつさりと、酒に致さうかい。
祐經　イヽヤ、參りますまい。
重忠　なぜ／＼。
祐經　拙者これが面白うござる。此やうな虫めを啼かせて、樂しむが面白うござるで。

重忠　ハテサテ、悪い物好き。侍ひたる者は、あのやうな卑怯者を見ますると、第一目が穢れまする。サア〱、お出で。
祐經　イヤ〱、参りますまい。矢張りこれが面白うござる。ヤイ十郎、なんと虫同然に暮らさうよりは、この工藤に奉公せぬか。
祐成　致しませうとも。どうぞお抱へなされて下されませい。
祐經　奉公するか。
祐成　奉公な致しませうが、何にもお役には立ちますまい。私しが藝と申しまするは、第一力がござりませぬ。その代りには大食でござりまする。酒は又、何程呑んでも醉うた例しがござりませぬ。醉はぬ代りに女子が好きでござりまする。マア、わたしが藝と云ふは、こんなものでござりまする。何奉公にお抱へなされまする。
祐經　犬奉公に。
祐成　エヽ。
祐經　祐經が屋敷の剩り物を喰はせて、犬奉公に抱へたい。
祐成　私しが女子が犬程好きぢやに依つて、そこで犬奉公。これは面白かろ。

祐經　奉公するか。
祐成　致しませうとも。
ト祐經、肴を庭へ捨てる。
祐經　奉公始めに、ソレ、それを喰へ。
祐成　ハイ。
祐經　サア、四つ這ひに這うてその肴喰へ。
祐成　エヽ、あつたら物を。
ト喰はうとする。虎、ツカ〱と行き
虎　お前、この肴を、犬の眞似して食はしやんすかえ。
祐成　ひだるい時の不味い物なし。わん〱。
ト犬の眞似して肴を食ふ。皆々思ひ入れ。最前より、時宗、少將、番屋より見て無念のこなし。時宗、堪えかね、内へ入らうとする。虎、悃り。少將、留める。皆々こなし。
虎　コレ〱、爰へ入られぬが。爰へ來る所ぢやないぞ。爰へ出て犬死がしたいか。
祐經　犬死とは誰れが事ぢや。
虎　サイナア、祐さんが犬の眞似して居さしやんすに依つて、外の犬が二疋連れで、この肴を取らうと思うて。必らず爰へ入るなよ。入つたら命がないぞ。

祐成　エヽ憎くい奴ぢやなア。おれが旨う喰つて居る物を取らうとは。ならん、わん〳〵。

重忠　ハテ、畜生と云ふものは愚なものぢやな。大切な工藤どのゝ飼犬が、これにあるとも知らず、牙を嚙み眼を怒らし、この內へ駈切り込むが否や、最前より見聞く通り、數多の人數、鎗襖を以て、犬の二疋や三疋は、たつた一突き。賴朝公同然の工藤どのを、念がける赤犬ども。面をこれへ出すが最後、同勢を以て叩き殺す。ほんの犬死がしたくば勝手次第。

ト この心のせりふ。時宗、少將、チツと逡らふ。

虎　コリヤ、犬よ。この虎が後までに首尾して、酒を進め、今宵のうちに本望。

重忠　なんと。

虎　サア、二疋の犬に肴をやつて、本望遂げさささうと云ふ事いな。

重忠　ハテ、仰山な事ぢやなア。

ト 祐經、庭へ下り、祐成が額へ疵付ける。時宗、入らうとする。虎、兩方へ氣を付ける事あり。

虎　サア〳〵〳〵、堪忍なるまい。爰へ出たからう。道理ぢや〳〵。そこを辛抱せねば、年を重ねて奉公はならぬ。そこを辛抱さしやんせと云ふ事いな。

ト 內と外へかけて云ふ事あり

祐經　工藤さん、なんで又十郞さんには、疵付けさんした。白犬は人に近しと下世話の譬へ。人に近い白犬、人に紛れぬやうに斑にするのぢや。

虎　そりや又あんまり。

祐經　何が。

虎　御念が入り過ぎるわいなア。

祐經　ヤイ犬め、工藤に下駄を以て、眉間を破られ、口惜しいとも思はぬか。面を割られても無念にないか。

祐成　一體わたしは面の皮が厚うございます。二枚や三枚めくつたとて、なんともござりませぬて。

祐經　取り所もない大腰拔けめぢや。

ト 踏み倒す。

重忠　なんと、拙者が目利きに違はず、天晴れの腰拔けでござらうがや。

祐經　イヤモウ、愛想の盡きた奴でござる。

重忠　あたら醉を、とんと醒ました。なんと奧へ參らうかい。

祐經　イカサマ、あれへ參つても大事あるまいかい。

重忠　この通りの腰抜けでござれば、よもや貴殿を……サア、參りませう。
祐經　蟻の穴から堤の崩れ。
ト祐成を引立てる。
重忠　座敷先で補伏せ。
祐經　御尤も、サア虎、若殿原への馳走に、今の扇の手、所望いたさう。
虎　ほんに、わしも祐さんの側が……サア、祐さんの側が離れとむないたア。
祐成　おりやひだるい。飯食はしてたも。
虎　必らずわしが合圖するまで
ト表を見て
合點か。
重忠　工藤との、お先へ。
祐經　犬め、うせう。
皆々　サア／＼、お出でなされませい。
ト唄になり、皆々入る。時宗、少將、そろ／＼内へ入る。以前の駒下駄を見て無念のこなし。奥へ行かうとする。少將、留める事いろ／＼あり
少將　奥へ踏ん込み狼藉したら、多勢に無勢、犬死を忘れさしやんしたか。
時宗　犬死も馬死も、この下駄に付いた血を見ては、どうも
ト少將を踏み飛ばし、奥へ行かうへする。此うち、新左衛門、向うより出かけ、内を覗き、恟りして
新左　コリヤ、なんぢや／＼。
時宗　鬼王か。どうも堪忍ならぬ事がある。
新左　堪忍のならぬと云ふ譯は。
時宗　祐經が來たわいなう。
新左　ヤア。
ト中二階より祐經覗いて居る、若黨に囁き呑み込ます
少將　十郎さんも爰へ來てぢやわいなア。
新左　ナニ、十郎さまもか。
時宗　今宵はこの家で補伏せ。工藤めが十郎どのを捉へて、さま／＼の惡口。もう飛びついて敵討たうか／＼と思うたれど、其方の詞が重さに、ヂッと堪えて居た。その上虫ぢやの犬ぢやのと、十郎どのを、コレこの下駄で。
ト下駄の血を見せ泣く。
新左　道理ぢや／＼。兄弟御一緒に揃はつしやると云ひ、工藤がこの家へ入込むからは、今宵のうちに敵討たしま

せう。必らず急く所ぢやないぞ。なんであらうとも、十郎さまを盗み出し、昔の如く曾我兄弟に出立つて、見事に御本望お遂げなされい。祐成さまを盗み出すまで、祐經に覺られぬやうに。

ト最前より祐經、中二階にて聞き居る。新左衛門と顏見合せ、障子ピッシャリ閉す。此うち、若黨、表へ侍ひ連れ出て聞いて居る。新左衛門、若黨を見て、ちやつと門口を閉す。

時宗　サア、マア、なんであらうと、十郎どのを盗み出す思案ぢや。

少將　わたしも思案せうわいな。

時宗　どうしたものであらう。いつそ奧へ踏ん込んで、桶伏せを踏み碎き、十郎どのを盗み出さうか。

少將　エ、滅相な。奧へ踏み込んだら、大勢寄つてどのやうな目に遭はさうも知れぬわいなア。いつそ虎さんに呑み込まして、十郎さんを盗んでもらはう。

時宗　それがよい分別ぢや。早う行て虎と相談して、二人して盗んで來い。

少將　待たしやんせ。盗まれぬわいなア。桶の上に大きな石があるわいなア。

時宗　その石おれが取つてやるわいやい。

少將　お前が奧へ行たら、祐經が只は置かぬぞえ。

時宗　ハテ、どうしたらよからうかなア。

少將　思案して下さんせ。

ト此うち、新左衛門、我が羽織を少將に着せ、少將、裲襠を時宗に着せ、少將に頰冠りさせ、太鼓持たせ、いろ／＼あり、時宗、少將、合點のゆかぬ顏して

時宗　鬼王、こりや何するのぢや。十郎どのを盗み出して敵を討たしてくれんかいなう。

少將　サア、鬼王さん、早う祐さんを盗み出して下さんせいなア。

ト新左衛門、少將に囁く。

新左　コレ、五郎さま、今夜はどうも敵は討たれぬ。

時宗　工藤がこの家に居ると云ひ、兄弟一緒に揃ふと云ふは、本望遂げる時節到來。

新左　イヤ／＼、討たれぬ。

時宗　そりや又何ゆゑ。

新左　和田北條のもてなしにて、東西の門を固め、數多の人數、スワと云はゞ……今宵敵討たするは、危ない／＼。

時宗　臆れたか鬼王。例へ百千の劍の中へも、飛び入つて

年來の望み。祐經が首取らいで置かうかやい。
新左　今宵八聲の鷄の啼くまでは、賴朝公も同然と、重忠どのゝ詞。その工藤に敵對ふは、玉子を以て大石に向ふよりは、危ない〳〵。この鬼王が惡い事は申さぬ。コレ五郎さま、この着物着て、人に見咎められぬやうに、一先づ曾我へ歸らつしやれ。
時宗　今宵討たねば、又と逢はれぬ大切の敵。
新左　サア〳〵、なんであらうと、今宵はどうも討たされぬ。
時宗　その討たれぬ所をば。
新左　ハテサテ、討つ事はさて置き、近寄る事もならぬがや。鬼王が惡い事は云はぬ程に、早う曾我へ去なつしやれ。
ト少將を突き出す。
コレ〳〵、もし人が咎めるならば、この廓の番人ぢやとナア、合點か。
ト少將、頷き、向うへ走り入る。若黨、侍ひに囁き、後より行くと、侍ひを追ひかけさせ入らする。若黨一人殘り居る。
時宗　すりや、今の侍ひは。
新左　工藤が家來。
時宗　少將を五郎にして。
新左　あつちの手段の裏を搔き、心ゆるさせ、十郎さまを盜んでござれ。ソレ、その形では、誰れが咎める者はない。合點か。
時宗　すりや、この形になつて
新左　早う行かつしやれ。
時宗　合點ぢや。
ト若黨、內へ走り入つて
若黨　樣子は聞いた。斯う云ふ事もあらうかと、表に忍んで居た。この通り祐經さまへ注進。
ト行かうとする。少し立廻りあつて、若黨を殺す。
新左　オツとよし〳〵。ても危ない事の。
時宗　して、この死骸は。
新左　人は來ぬか。見てござりませ。
時宗　首尾はよいぞ。
ト死骸を井戸へ嵌める。
新左　サア、ござりませ。
ト兩人行かうとする。重忠、出て
重忠　少將どの、どこへ行くのぢや。

時宗　重忠どの、年來の望みも今宵のうち。
重忠　コリヤ〳〵、少將、わりや少將ぢやぞ。
時宗　なんと。
重忠　其方は手の悪い者ぢやぞよ。大門口から外したな。拔けつ隱れつ忍び入つて、間夫を切らうと思うても、數多の禿遣り手、つばなの穗先を揃へて、容易うは間夫は切られまい。
新左　重忠さま、御契約の通り五月二十八日。
重忠　そちや何者ぢや。
新左　五月二十八日を、お忘れなされたか。
重忠　イヤサ、そちや何者ぢやと云ふ事サ。
新左　知れた事、曾我が家來、鬼王新左衞門。お見忘れなされたか。
重忠　今宵一夜は、賴朝公も同然の工藤祐經を、敵と狙ふ曾我の一類。この廓へ入込むか否や、重忠が其まゝには差措かれぬ。討取らねばならぬぞよ。
時宗　なんと。
重忠　八聲の鷄の啼くまでは、賴朝公も同然の工藤祐經、刃向はゞ、同勢を以て討取るぞよ。
時宗　すりや、我れ〳〵を。
新左　ハツ。
ト新左衞門、時宗、思案する。
重忠　其方は化粧坂の少將、其方は番人であらうがな。
新左　ハアイ。
重忠　番人か。
新左　ハアイ。
重忠　曾我殿原がこの廓へ入込まば、早速に此方へ知らせい。
新左　ハアイ。
時宗　ソレ。
ト表へ出ようとする。
新左　こりや、どこへ。
時宗　大門口に工藤が歸りを待つて居て。
新左　八聲の鷄の啼くまでは、東西の門は開けぬ。出入りはならぬが。
時宗　さうぢや。
ト奥へ行かうとする。
重忠　奥へ踏ん込み、祐成を盗み取り、兄弟一緒に祐經を討つ心か。
時宗　なんでもない事。

重忠　祐經に刃向はゞ、九十三騎の輩、其まゝでは差措かぬ。危ない〳〵。

時宗　重忠どの、今月二十八日には、兄弟が力となつて、敵を討たせてくれうと、老母に仰しやつたお詞は、僞りでござるか。

重忠　友切丸の在所は知れたか。

時宗　エ、。

重忠　一番鷄の謳ふまでに、友切丸の詮議仕出し、盜賊の惡名遁がれ、誠の侍ひとなつて、本望遂ぐる心はないか。

時宗　刀の行くへが知れぬに依つて、盜賊となつて相果てた五郎時宗。

重忠　その時宗に犬死させたいか。

時宗　エ、。

重忠　刀の盜賊、曾我の五郎を討取つたる上にて、其方が奥へ踏ん込み、工藤を始め數多の殿原に、その面を見知られたらば、不便や盜賊となつて忠義を立てし時宗は、犬死するがや。

時宗　でも今宵討たねば、又と逢はれぬ大事の敵。

重忠　さう云ふ短慮で、天下の執權工藤左衞門祐經と云ふ大讐を、手に入れうと思ふか。少將、とつくりと所譯手管の工風が大事。サア、合點か。

新左　段々御尤も。もし八聲の鷄の啼くまでに、刀の行くへの知れぬ時は。

重忠　祐信が最期の砌り、證據になりたる片袖の、紋は庵に木瓜。ナア、庵に木瓜の片袖。合點か。

新左　夏の夜は短かい。今宵も大方亥の刻前。一番鷄の謳ふまでは三時あまり。

重忠　韋駄天佛は萬國の、三世の諸佛におんじきを捧ぐ。南方のそくせい神は、瞬く間に三千世界を往來す。忠心の二字を以て詮議したら、矢張り知れぬと云ふ事はあるまい。

新左　詮議してお目にかけませう。盜賊の惡名拔いて、天晴れ武士の手本となり、敵討をさせてお目にかけませう。

重忠　時を知るは夜番の役目。必らず時の切れぬやう少將どの、こなたはまだ年若な傾城。この重忠が客になつて、夜と共にしつぽりと抱いて寢よう。手放し置けば若い者の、後先構はず浮名の立つも知らず、間夫に忍び逢ふまいものでもない。ナ、夜番、さうぢやないか。

新左　その少將さんを、お相方になされて下さりますれば、心にかゝる事もなう、一番鷄の謳ふまでに。

重忠　しつぽりと抱いて寢よう。

時宗　現在眼前の敵も、討つ事ならぬと云ふは。

重忠　ハテ、急く事はない。太夫どの、奥へござれ。夜番、後また逢はう。

ト唄になり、重忠、時宗を連れ入る。新左衛門、いろいろこなしあり、京の小次郎、出て來る。

小次　ちよと頼まう〳〵。

新左　どなたぢや。此方へ入らんせ。

小次　イヤ、そこへはちつと入り憎い者ぢや。爰へ工藤どのゝ家來、近江八幡と云ふ人が來て居る程に、ちよと逢はして下さんせ。

新左　近江八幡に逢ひたい……成る程、爰へ來てゞごんす。そして、お前はどなたぢや。

小次　イヤ、小次郎と云ふ者が、ちよと逢ふと云うて、呼び出してもらひませう。

新左　ナニ、小次郎。

ト思案の所へ、傳三、おつぎ、出て

傳三　コリヤ、百助、われを今尋ねにやつたわい。

新左　ハイ、なんでござりまする。

すぎ　こなたはきつい仕合せ者ぢや。

新左　何が仕合せでござりまするな。

傳三　コリヤ、最前の大盡工藤さまが、この廓の夜番めは、面白さうな奴ぢや。呼んで來て酒を呑ませと、な、仰しやるぞ。コリヤ、金銀の掴み取りぢや。嬉しいか〳〵。

新左　アノ、工藤さまがわたしを。

傳三　お氣にさへ入れば、小判に埋れる事ぢやわいやい。

新左　へ、へ、へ、お大名のお座敷へ、此やうな形で。

傳三　ハテ、大事ないわい。早う引摺つて來いと仰しやつてぢやわいやい。

新左　イエ〳〵、恥かしい。

傳三　ハテ、斟酌せずと來をれやい。

ト無理に新左衛門を引立て入る。小次郎、表にキヨロリとして。

小次　どうぢや。返事はどうぢやい。揚屋の内に、宵から表を締めて置くと云ふ事があるものかい。

ト内へ入り、ウソ〳〵見廻し

どいつも居らぬかい〳〵。

トやかましう云ふ。奥より、八幡三郎、近江の小藤太、出て

三郎　お身や小次郎ぢやないか。

小次　なんぢや小次郎か。

ト三郎小藤太、兩人が胸倉取つて振り廻す。

三郎　コリヤ、小次郎、わりや身共をなんとする。

小次　何ともせぬ。わいらはよう生面さげて顏見合すなア

ナア、思案して來たのぢや。ありさん達に逢はうと思う

て、晝から橋の局に待つて居たわいなう。

小藤　小次郎、なんで其やうに腹を立てるぞいなう。

小次　これが立たいでなんとせう。人に大枚の仕事をさし

て、褒美もくれず、いつまで此やうな曾我どのにして置

くのぢや。コレ、工藤どのには命を投げ出して、大事の

事を頼まれて置いたぞや。

小藤　その砌り御褒美として、金子三百兩、遣はされたで

はないか。

小次　人の命が千兩や百兩に、替へらるゝものかいなう。

三百や四百兩の目腐り金は要らぬ。コレ、金戻す。戻さ

うと思うて、半兩も遣ひはせぬ。金戻すからは、義理も

瓢簞もない。これから北條どのゝ御前へ行て、刀の事も

何もかも云うてしまふ……なんぢややら、この事仕負ふ

せたら、久須美の庄を宛て行ふの、イヤ、大名にしてや

るわのと、太平樂を云うて、この小次郎を一杯喰はした

な。なんであらうと、今の間に思ひ知らすぞ。

ト行かうとする。

三郎　小次郎待て。

小次　用があるか。

小藤　御褒美の金を戻すからは。

小次　ハテ、知れた事、友切丸を盜んでくれいと、工藤に

頼まれた事、何もかも注進するのぢや。

三郎　主人の科を注進すると、小次郎われも命がないぞよ。

小次　ハテ、頼まれるからは、疾に命は投げ出してあるわ

いなう。

三郎　すりや、是非主人の科を注進して。

小次　獄門ならば同じ板、磔刑ならば並んで突かるゝ覺悟

ぢや。

三郎　是非に及ばぬ。注進せい。

小次　注進せいぢや。ドリヤ、工藤どのと二人並んで、磔

刑にかゝらうか。

三郎　小藤太、ソリヤ。

トこれよりタテになり、しやんととまる。最前より、

祐經、出かけ聞きゐる。

祐經　近江八幡待て、早まるな。

兩人　生け置いてはお身の上に
祐經　禍ひは覺悟の前。
兩人　ぢやに依つて、禍ひの根を斷ちまする。
ト少しタテになる。
祐經　一大事を賴み、約束違へ、命を取つては、この工藤、
武士が立たぬ。
兩人　でも。
祐經　ハテ、扣へと云へば扣へい。
ト三人、三方へ別れ、重忠、中二階より見て居る。
小次　まだ侍ひらしい所がある。いつぞや鶴ヶ岡にて、現
在の親祐信が預かりの、友切丸を盜んでやつたぞや。そ
の時こなたは何と云うた。三箇の庄のうち、久須美の庄
を褒美に遣らうと云うたぢやないか。この間から待つて
も〱、なんの返事もない。こなたに逢うてと思うても、
裾野へは切手がなけりや行かれず、今宵廓へござる樣子
を聞いたに依つて、日の暮れぬうちから待つて居るのぢ
や。こりやマア、どうするのぢや。
祐經　八幡の三郎、料紙持て。
ト三郎、ハツと硯箱持ち出る。
祐經　この度曾我太郎祐信が預かりの友切丸を、我れに渡させ
し功に依つて、約を變ぜず、久須美の庄を宛て行ふもの
なり、近江小藤太、八幡三郎、承つて件の如し。京の小
次郎へ。
ト三郎、書きしまひ
三郎　なんと、この一札で、工藤さまへお恨みはあるまい
がな。
小次　イヤモウ、これさへ貰へば、云ひ分はござりませぬ。
祐經　工藤も滿足。
小次　有り難うござりまする。
祐經　小次郎、外に賴みたい仔細がある。それへ。
小次　お賴みなされたいとは。
ト祐經、小次郎を切らうとする。飛び退き
心をゆるさせ、騙し討にするのか。
祐經　よい推量。それへ直れ。
三郎　それへ直れ。
小次　是非に及ばぬ。御存分になされい。
ト身拵らへして向うへ坐る。祐經、切らうとする事度
度あつて
祐經　その性根を見るからは、命は助ける。
小次　エ、。

祐經　人知れず十郎めをぶち放せ。
小次　なんと。
祐經　この工藤が討ち殺すは易けれども、後日の人口。ナア、合點か。あの十郎祐成を、ナア、討ち殺して、工藤が禍ひの根を斷つてくれまいか。
小次　ぶち殺して上げませう。
祐經　出かした。首尾よう仕負ふせてもあらうならば、久須美の庄に河津の庄を添へて。
小次　エヽ。
祐經　必らず仕損じな。
小次　祐成は。
祐經　大座敷の緣先に桶伏せ、寢鳥を刺すよりいと易い。
小次　巧い〳〵。
祐經　兩人は最前の夜番、曾我が家來鬼王新左衞門に極まつた。時宗が生死を白狀させよ。これも人知れずバッサリ。
兩人　すりや、我れ〳〵は鬼王を。
祐經　只ならぬ面魂ひ。酒を以て性根を亂させ、五郎めが有無を糺し、その上で打ち殺せ。
兩人　畏まつてござります。

小次　この小次郎は祐成を。
兩人　我れ〳〵は鬼王めを。
祐經　三人ともに、ぬかるな。
三人　ハヽ。
祐經　行け。
ト唄になり、三方へ別れ入る。返し。
造り物、一面の緣張り障子。座中殘らず傾城にて酒盛りして居る。向うへ桶伏せセリ上げる。合ひ方になり、十郎、首出し
祐成　ハアヽ、彈き居るな〳〵。こりや、どうも云へたものではない。あの喜瀨川めが扇の手と云ふものは、どうも云へたものではない……こりやをかしい。朝比奈めが玉琴に莨つけてもらひ居つて、迷惑さうな顏して居る……アリヤ〳〵、嫌がる者を其やうにせぬがよいわい。あの三浦の與市と云ふ奴は、兎角女郎の足へ手を入れたがる程にの。ハアヽ、愚痴な奴の。この大寄せに碁を打つとはどうぢやの。
トいろ〳〵云ふうち、虎、膳を持ち出る。
虎　サア、祐さん、ひもじからう。飯食はしやんせ。

祐成　ひだるい段かい。晝時分に握り飯を三つ食つた儘ぢや。

虎　さうぢやあらう／＼。わしも先刻にから來うと思うて居たけれど、あの意地惡の茨めが、大抵いぢりくさつた事ぢやわいなア。

祐成　さうであらう。あの茨めは、わが身に大抵惚れて居る事ぢやない。おれはそんな事は知らなんだ。早う食はしてたも。

虎　サア／＼、さめぬうちに、早う／＼。エヽ、鈍な事ぢや。膳が入らぬわいなア。

祐成　滅相な。その膳が、この穴へどうして入るもので。

虎　エヽ、鈍な事ぢやな。どうしたものであらうぞいなア。

祐成　くゝめてたも。

虎　ほんにさうせうわいなア。

　トいろ／＼くゝめる。

祐成　汁々……フム、これは汁を出かしをつたワ。牡蠣貝に蕈菜。旨い／＼。それ／＼、飯ぢや／＼。

虎　オヽ、忙しない。桶が支へて、くゝめ憎いわいなア。

祐成　とんと食ひがつへがして、どうもならぬわい。平は何ぢや。

虎　何ぢや知らぬが、胡椒の匂ひがするわいなア。

祐成　そんなら、せんばとやり居つた。ホウ、鷺ぢや。今の牛蒡を斯う白髪に刻む奴は、餘ッぽど枯れた奴ぢや。飯々。

　ト咽喉につまる思ひ入れ。

虎　なんとさしやんしたえ……オヽ、咽喉につまつたかえ。エヽ、鈍な事ぢや。とんと脊中が撫でられぬわいなア。

　トいろ／＼あつて

待たしやんせえ。

　ト奥へ走り入る。最前より小次郎、出かけ見て居る。右の桶を突かうとする。虎、銚子杯持ち出る。

サア／＼、酒ぢや／＼。

　ト小次郎、惆りして忍ぶ。

サア、マア、酒を呑ましやんせいなア。

　ト銚子の口より祐成に呑ます。

祐成　アヽ、よいぞ／＼。ひだるいごしに、大口にしてやつたら、きつちりと咽喉につまつた。

虎　とんとわしや、どうせうと思うたわいな。

小次　虎どの〳〵。
虎　オ、怖。誰れぢやいなア。
小次　誰れでもない。おれぢや。
虎　おれとはえ。
小次　小次郎ぢや。
虎　エ、。
祐成　なんぢや、小次郎ぢや。こなたは、よう酷い目に遭はしやつたぞや。頼もしさうに三百兩、金出してくれたところはよいが、銅脈を掴まし、おれを此やうに桶伏せにしやつたなう。
小次　ハテ、兄弟のよしみぢや。銅脈でも惡金でも、その時の難を助けてやつたぢやないか。
祐成　それもさうかい。遲かれ早かれ、斯う云ふ身にならねばならぬ。
小次　オ、、そりやよい覺悟ぢや。
虎　小次郎さん、さうしてお前は、爰へ何しにござんしたえ。
小次　ヤア。
祐成　ほんに兄貴、こなた爰へ何しに來た。
小次　おれか……おれは。
虎　どうしてござんしたえ。
小次　ハテ、ツイどうやらして來たてえ。
虎　廓の門は締めてある。滅多に入られう筈はないが。
小次　おりや晝から來て居た。
虎　なんの用があつてえ。
小次　サア、おれはアノお前に用があつて
虎　わしに用とはえ。
小次　惚れたぢや。
虎　誰れにえ。
小次　お前に。
虎　なんの事ぢやぞいなア。
小次　來憎い所へ斯う來ると云ふは、よく〳〵切ない戀ぢやと思うたがよい。
祐成　コレ兄貴、こなたは酒にでも醉うて居るか。何を云ふのぢや。
小次　十郎、貰うたぞよ。
祐成　何を。
小次　ハテ知れた事。虎御前を貰うたと云ふ事サ。
祐成　ハア、洒落かゝるワ。
虎　又、わたしを貰うて、何にさしやんす。

小次　知れた事、奥樣に。
虎　ホヽヽ。
小次　コレ、笑ひ事ぢやない。ほんの事ぢやぞや。眞實おれが女房に持つ氣ぢやわいなう。
虎　お前も好い加減な事云うて、嬲つたがよいわいなア。
小次　十郞が女房同然のこなたに、惚れたと云ひ出すからは、よく〳〵の事ぢやと思うてもらはう。
虎　嘘かほんか知らぬけれど、十郞さんを側に置いて、滅相なお方ではあるわいなう。
小次　ハテ、兄弟は他人の始まり。元より十郞とは赤の他人。その他人の相方に、惚れる事は法度かな。
虎　マア、よう思うても見やしやんせ。
小次　身請けする。
虎　エヽ。
小次　さつぱりと身請けして、おれが女房にする。
虎　我折れ、あんまりでをかしいわいなア。
祐成　どうでも、ほんの氣ではないわいの、まだ若いが、痛ましや、氣狂ひになられたさうな。
虎　ほんに、正氣ではないわいなア。
　ト小次郞、金を出し

小次　形は汚うても、小判と云ふ物は、此やうにザク〳〵する程あるぢや。小判と云ふ物お目にかけう。
　トちやん〳〵鳴らす。
祐成　アヽ、その小判が欲しいなア。さつぱり揚げ代拂うて、桶伏せを助からうになア。
小次　サテ、虎どの、應と云うて下さるゝと、たつた今身請けして抱いて寢る。
　ト虎、こなしあり
虎　さうして、その小判はなんぼ程あるぞいな。
小次　マア二三百兩。
虎　エヽ、アノ、三百兩あるかえ。
小次　まだ内にもたんとある。
虎　アノ、ほんまに身請けして下さんすかえ。
小次　女房にさへなつて下さんすなら、たつた今身請けする。
虎　ほんに身請けして下さんすかえ。
小次　女房になつて下さんすりやよいけれど。
虎　なる氣ぢやわいな。
小次　ナア＝嘘。
虎　ほんまに。

小次　十郎が事は。
虎　嫌になつたわいな。わしや疾からお前に。
小次　でも、嘘をつく人ぢや。きつい現金な惚れやうぢや。
虎　心中見せう。
ト小次郎が脇差を拔き、指を切らうとする。十郎、恟りして見て居る。
小次　オツと、古し〳〵。
虎　そんなら髮を。
小次　古い〳〵。
虎　そんなら、どうせうえ。
祐成　ヤイ〳〵、あんまりぢやがな。側にきよろりと見せて置いて、出來過ぎるぞよ。
虎　イヤ、過ぎたわいなア。
祐成　何がいやい。
虎　お前が。
祐成　ヤア、。
虎　嫌で〳〵、うるさうてならぬわいな。どうぞ今宵の八聲の鷄の啼くまでに、その補伏せ……ナア、お前に本望が遂げさしたい。サア、八聲の鷄の啼くまでに、身請けしられて、本望が遂げたいアナ。小次郎さん。

小次　それが定なら、なんぞ新らしい心中が、見たい〳〵。
虎　なんぞよい心中がなうてなア。
小次　疑ひの晴れる心中と云ふは、斯うぢや。
ト虎が持つて居る脇差持ち添へ、祐成が首切らうとする。祐成、首引ツ込める。
虎　こりや、何をさしやんすぞいなア。
小次　十郎が首切つて見せるが、大きな心中ぢや。
虎　十郎さんに、わしが心が殘らうかと思うて。
小次　イヤ、十郎が首を持つて行て、出世して大名になつて、其方を女房に持つのぢや。
虎　十郎さんの首切つて、大名になると云ふ
小次　譯はこれぢや。
ト以前の一札を見せる。
虎　そりや、なんぢやえ。
小次　大事の物。
虎　見せさしやんせぬか。
小次　滅相な。十郎が首切つて、心中を見たら、如何にもこの一札を見せう。
虎　それ見た上で。
小次　滅法な。

虎　ト祐成、桶より手を出して一札を取る。
それ取られたら、生けては置かぬ。
ト桶を突かうとする。虎、立廻りあり
十郎さんは廓の囚人。滅多な事さしやんすと、大きな聲で朝比奈さんを呼ぶぞえ。
小次　ヨウ。
虎　アレ、小次郎さんが、祐成さんを殺さうと云はんすぞえ。ちやつとござんせいなア。
小次　シイ〳〵……よいワ、地獄落しのやうになつて居れば、何時殺さうと儘ぢや。サア、虎、奥へ來い。
虎　そんなら心中見せいでも。
小次　大事ない。われを爰に置くと邪魔になる。
虎　わたしもお前に付いて行て、身請けしてもらはにやならぬ。
小次　幸ひ座敷も床入りの最中。
虎　八聲の鷄の啼くまでに、抱いて寢てもらはねばならぬわいなア。
小次　なんであらうと奥へ行て、なるかならぬか。
虎　帶解いた上で知れる事。
小次　奥へ行て相談せう。

虎　マア、先へ行かしやんせ。
ト小次郎、思ひ入れにて、奥へ入る。懐中より懐劍出し、奥へ行かうとする。重忠、出る。虎、恟りする。
重忠　虎御前、どこへ行くのぢや。
虎　エヽ。
重忠　懐劍の寢刃を合はし、奥へ駈け込むは。
虎　サア、これはな。
重忠　京の小次郎を殺し、三百兩の金を取つて、祐成が桶伏せを助けうと思うてか。
虎　なんと。
重忠　工藤に一味の京の小次郎、其方が殺すか否や、年來の兄弟、心を盡した事も、千日に苅つた萱、一時に亡ぶぞや。
虎　御兄弟の年來の望みも、今宵一夜。祐成さまの桶伏せ、夜明けの八聲の鷄の啼くまでに、三百兩の金を揃へねば、十郎さまは一生敵を討たしやんす事はならぬわいな。
ト此うち、小次郎、ソツと松へ上がる。重忠、手水鉢へ小次郎が影法師映るを見て、松に目を付けこなしあり。

重忠　コレ虎御前、唐土の望夫石、我が朝のひれふる山、夫を思ふ女の常。なんと十郎ゆゑならば、どのやうな苦しみを請けても、辛抱する心であらうな。
虎　例へこの身は一百三十六地獄の、苦しみ請けても。
重忠　イヤ、それ程にもない。無限地獄の底に落ちるまでの事サ。
ト虎、こなしあつて
虎　ソレ。
ト向うへ行かうとする。
重忠　虎御前、いづくへ行くのぢや。
虎　ハテ、知れた事、小夜の中山へ。
重忠　金谷までは餘程の道程、女の足で彼の寺へ行く一心の籠め、無間の鐘を撞き、三百兩の金を調へ、立歸る其うちには、八聲の鷄も告げ渡り、夜も明け放れてしまふぞよ。
虎　そんなら、どうせうぞいなア。
ト泣く。
重忠　ハテ、夫を焦れ、石となつたる松浦小夜姫。幸ひのこの手水鉢。無間の鐘と傚らへ、一心の以て撞いたらば、小判が降りさうなものぢやぞよ。

虎　誠に。
ト重忠、刀を抛り出し
重忠　心覚えの一腰、その刀を無間の鐘の撞木と傚らへ、マア、この手水鉢を撞いて見たがよいわい。
虎　ハイ。
重忠　今宵も大方夜半前。
虎　八ツまではマア一時。
重忠　一心の定めてな。合點か。
ト唄になり、重忠、入る。
虎　サア／＼、無間の鐘撞かにやならぬぞ。なんであらうとこの刀で……十郎さん、わしや今、無間の鐘を撞くぞえ。コレ、寢てかいな……ほんに、無間の鐘とやら、撞いたらこの世は、朝夕烏が來て責めるげな。死ぬると無間地獄とやら、火ぼつかりの地獄へ落ちるげな。ア、熱いこつちやあらう。モウ、その苦しみもなんとも思やせぬけれど、お前と女夫になられまいかと思うて……イヤイヤ、くど／＼云うて居る所ぢやない。なんぢやあらうと、あの手水鉢を、無間の鐘と傚らへて。
トいろ／＼手水鉢にかゝり、思ひ入れあり。
夫の爲ぢや。今宵中に三百兩の金を拵らへて、夫の難儀

を救はいで置かうか。例へこの世は烏に責められ、無間堕獄の業を請けても、だんない〳〵大事ない。

ト　これより合ひ方になり、いろ〳〵思ひ入れ。刀振り上げ、手水鉢を見て飛び退き、こなしあり、小次郎が影映る思ひ入れ。

オヽ怖。いま手水鉢にうつる人影は、手水鉢を無間の鐘に倣らへ、この刀を撞木にして……この刀を撞木にしてすりや、今の人影は。

ト　上を見て

梢は高し皐月闇。

ト　延べ鏡を出し、燭臺を差上げ、鏡に又映し

アヽ、小次郎さんか。すりや、重忠さまの刀の謎……小次郎さん、最前から聞いて居やしやんす通り、お前の爲には弟御、十郎さんの一世一度の大事の所。最前の三百兩、どうぞ貸して下さんせ。

ト　小次郎、頭振る。

サア、ならぬ所を、どうぞ貸して下さんせ。こちらが急に要るわいな。どうぞ貸して下さんせ。

ト　小次郎、上にて頭振る。

ハテ、ならぬと云はしやんすと、この刀で無間の鐘を撞くぞえ。

ト　小次郎、恟りする。虎、向うの竹を切り、刀を括り付け、槍にして

サア、貸して下さんせにや、この鎗が。

ト　小次郎、小判を撒く。

こんな事ぢやないわいな。三百兩ぢや。ちやつと貸して下さんせ。但しこれで突かうかえ。

ト　小次郎、小判を撒く。

まだ足らぬわいな。

ト　小次郎、小判を皆拋る。虎、小判を拾ひ揃へて

忝ない。死んでも忘れませぬぞえ。

ト　向うへ行く。小次郎、刀を手裏劍に打つ。虎、こける。小次郎、松より飛び下り、虎にかゝる。虎、手裏劍の刀を取つて、小次郎に突きかゝる。見得よくとまり

刀まで忝ない。小次郎さん、この金わしが預かつた。

小次　その金渡せ。

ト　唄になり、虎、逃げうとする。小次郎、捉まへる。祐成、桶の穴より、小次郎が足を掴む。

虎　十郎さん、金は調うた。

祐成　早う行きや。
ト虎、走り入る。祐成、小次郎を投げ、桶をこかし出る。
小次　ヤア、、祐成、わりや強うなつたな。
トこれよりいろ／＼タテになり、祐成、小次郎を押へ以前の一札を出し讀む。
祐成「この度曾我の太郎祐信が預かりの友切丸を、我れに得させし功に依つて、約を變ぜず、久須美の莊を宛て行ふものなり。八幡の三郎、近江の小藤太承つて件の如し。」宛名は京の小次郎へ。嬉しや養父の敵は知れたぞ。
ト奥の障子の内にて、騒ぎ唄彈く。
小次　それ見られたら、生けては置かれぬ。
祐成　養父の敵、覺悟せい。
ト立廻りになり、内にて
傳三　サア／＼。喜瀬川さん、先刻の舞さし、所望々々。
皆々　所望々々。
ト内にて云ふ。タテとまる。祐成、小次郎を見事に投げ押へると、また障子の内にて
重忠　サア／＼、此方は話しに致さう。いづれも、皆床入りの最中。もう角力を取りかけた程にの。

祐經　若殿原は、角力一種が樂しみでござる。
重忠　イヤナニ工藤どの、角力で思ひ出しましたが、先年佐殿を慰め申したてや。
祐經　その砌りこの祐經は、伯父伊藤入道に押籠められ、罷りあつてござるが、定めて見物事でござらうなう。
重忠　イヤ、モウ目覺ましい儀でござりました。彼の關八州の大力に、大場が弟股野の五郎、新手の角力二十一番續けざまに勝ちましてござるて。
三郎　その大力の河津も、主人祐經には叶ひませぬ。奥野の狩の歸るさ、この八幡がたつた一矢に。イヤ、脆い奴でござりました。
ト祐成、この話しを聞き無念がる。小次郎が腕を引拔く。
重忠　ハテナア。あつたら勇士を、惜しい事なされたなア。
祐經　なんの惜しい事がござる。あのやうな祿盗人は、生けて置き難い。世界の爲になりませぬて。この工藤が領分、三箇の莊を盗み取つたるゆゑ、それなる八幡に云ひつけ、ぶち殺させましてござる。
ト祐成、また腕を拔く。
三郎　成る程、あのやうな祿盗人は、よく殺して、しまう

がようござりまする。ハヽヽ。

祐經　これを肴に、も一つたべう。八幡、酌せい。

三郎　ハア。

傳三　サア、喜瀬川さん、所望々々。

ト鳴り物入り、伊勢音頭になり、小次郎を締め殺し、桶の中へ入れて置く。それより懐中の矢の根を出し、竹を切り、矢の根を嵌め、手水鉢にて研ぐ。と朝比奈三郎、出かけ見て居る。祐成、いろ〳〵思ひ入れあるべし。祐成、奥へ行かうとする。

朝比　十郎待て

ト祐成、朝比奈を投げる。とこれよりめりやす鳴り物。草摺曳のやうな仕草あり。祐成、朝比奈、いろ〳〵草摺曳のやうなる事あつてよき所にてとまる。

十郎待て。關八州に力業には、三番と下らぬこの朝比奈手ひどく投げたな。この年月、臆病者腰抜けと、人に笑はれ後指さゝれ暮らしたわれが本心。兄弟が力となり、この朝比奈に我が本心を、なぜ隠した。好色者、馬鹿者となつて居つたは、なんの爲。又この朝比奈に、これまで本心明かさぬは、祐成、わりや胴慾だ。女童同然に、しやべりさうなものだと思ふか。おりや腹が立つて〳〵ならないわいやい。

ト泣く。

祐成　尤も。元來弟五郎と同腹同生の、父の氣性を請け繼いだれど、五郎は生得勇猛不敵の短氣者。その上この祐成に、勇力ありと工藤が知らば、人ゆるさず、人知れず兄弟を討取るは必定。それゆゑ好色者馬鹿者となつて暮らしたは、工藤に油斷させん爲。討たねばならぬ親の敵が、二人あるわいなう。

朝比　親の敵が二人あるとは。

祐成　その仔細はコレ。

ト以前の一札見せる。朝比奈、見て

朝比　すりや、養父の敵は京の小次郎ぢやな。

祐成　たつた今、養父の敵は討つて、本望遂げたわいなう
この上は工藤を討つて。

ト小次郎が死骸を見せる。

朝比　今宵一夜は頼朝公も同然。踏み込んだらば爲になるまい。

祐成　例へ百千の劍の中でも、今のを聞いては、どうも堪忍ならぬ。朝比奈放せ。

重忠　ソリヤ。

侍ひ　やらぬぞ。

　ト侍ひ、一度に出ろ。

重忠　重忠が珍客へ狼藉すると、幾度でもこの通り。

朝比　ハテ、急いては事を仕損ずるやい。

祐成　重忠どの、祐成が年來の僞はり馬鹿も、三千年に一度開く今宵の首尾。

重忠　河津が忘れ形見程あつて、天晴れの勇力、重忠も喜ばしい。

祐成　サア、そこ退いて敵工藤を。

重忠　イヤ、八聲の鷄の啼くまでに、祐經に鵜の毛で突いた程も疵つけさせる事はならぬ。

祐經　いま敵討たうと云ふと、鎗襖ぢやぞよ。

重忠　犬死して不覺者の名が取りたいか。

祐成　サア。

三人　サア〳〵〳〵。

重忠　なんと。

　トちよつと立廻りあつて、返し。

　造り物、元の道具へ戻る。

　ト唄になる。皆々、新左衞門を圍ひ出る。

傳三　サア〳〵、も一つ呑みや〳〵。

龜菊　嫌でも應でも呑まさにや置かぬ。

新左　もう、お免されませ〳〵。

傳三　ハテ、さう云はずとも、一つ呑みやいの〳〵。

龜菊　其やうに云うて呑みやらぬと、また工藤さんに云ふぞや。

新左　イエ〳〵、もう大盡樣のねきへは、お免されませ。

傳三　マア、なんぢやあらうと、我れら始めようかい。

新左　なんと旦那樣、わしが一つして見たい事があるか、それをさして下さんすなら、なんぼでも酒呑むぢや。

傳三　して見たいとは、大夫さん方の中をか。

新左　そんなものでござりまする。私しは一生の望みに、大盡になつて傾城買ひがして見たい。

つぎ　こりやよからう。工藤さまの云はしやんす事には、あの夜番は氣に入つた奴ぢや。隨分酒を呑ませと云はしやんした。酒さへ呑みやる事ならば、好いたやうにしや。

新左　わしや大盡事がして遊びたい。

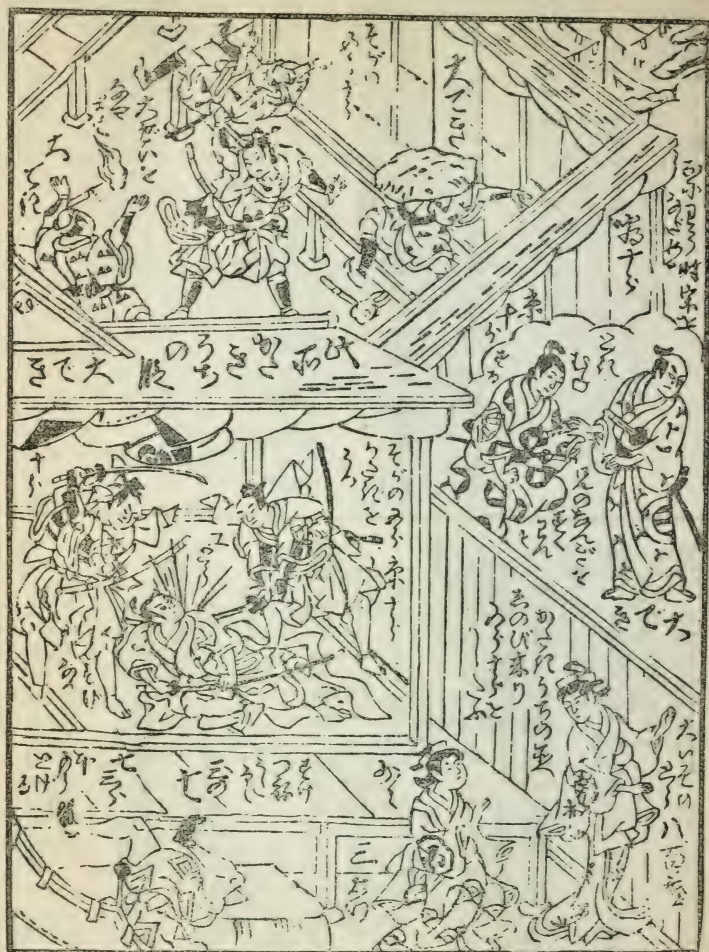
龜菊　そんなら其方の相方は、わしぢやぞや。

絹琴　其方のやうな大盡の、相方にわしやなりたい。

つぎ　なんであらうとこの杯を、氣に入つた方へさゝしや

んせいなア。
新左　そんならこの杯を、夜番大盡が、氣に入つた方へさ
さうかい。
絹琴　わしかや。
龜菊　わしであらうがの。
つぎ　サア、一つ請けたがよいわいなう。
新左　この杯は、われにさすワ。
傳三　なんぢや。この杯をおれにさす。そんならおれを抱
いて寢るか。
龜絹　わしらは嫌かや。
新左　二人ながら、おれが氣に入つたさかいで、亭主、よ
いやうに計らうて、二人のうち、おれが相方にせい。
傳三　ハヽヽ。大束に出をつた。ハアヽ、誰れであらうな
ア。マア、こんなものかい。
龜菊　押ようわいなア。
新左　お相いたさう……さらば女夫の杯。
絹琴　オツと違うたわいなア。
新左　南無三、また呑まにやならぬ。
ト　これより、新左衞門に無理に酒呑ます。新左衞門、
寢る。八幡、近江、出て

三郎　申しつけた通り、夜番めに酒をくれたか。
傳三　隨分酒を呑ませと仰しやつたゆゑ、大抵呑ました事
ぢやござりませぬ。
小藤　われ達に用はない。次へ立て。
傳三　サア、太夫さん方、奥へ參りませう。
ト　入る。
三郎　侍ひども、參れ。
侍ひ　ハアヽ。
ト　侍ひ大勢出る。
三郎　その夜番め、引起して繩かけい。
侍ひ　立たう。
ト　新左衞門を立てる。ぐんにやりとこける。
三郎　ヤイ、鬼王、目を覺ませ鬼王。
小藤　夜番め、時が切れたが。
三郎　番人、目を覺ませ。
侍ひ　番人、時が切れたが。
ト　新左衞門、起き
新左　もう何時でござりまする。奴さん方、祐經さまは、
もうお立ちなされたかな。
三郎　祐經さまは先達て、お歸りなされた。

初演の

繪番附

新左　ホイ。

ト行かうとする。

侍ひ　動くな。

三郎　鬼王、繩かゝれ。

侍ひ　腕廻せ。

新左　八幡の三郎。

三郎　見知つて居るか。

新左　この鬼王には、何科あつて繩かける。

三郎　時宗が似せ首討つて、頼朝公を誑かつた科。

小藤　サア、時宗はいづれへやつた。白狀せい。

新左　時宗が首を似せ者とは。

三郎　吐かすな。最前おのれが口走つたを聞いて居る。白狀せい。

新左　其やうな相手になつて居る隙はない。祐經を去なしては。

ト行かうとする。

侍ひ　動くな。

新左　すりや、どうあつても。

三郎　繩ぶつて五郎が在所白狀さする。

新左　惡く寄つたら撫切りぢやぞ。

兩人　ソリヤ、繩かけい。

トこれよりタテになり、皆を井戸へ切り込み、八幡近江、兩人を當てる。新左衞門、いろ〳〵あつて星を繰り

夜半にはまだならぬが、祐經が去なう筈はないが、何にもせよ。

ト奥へ行かうとする。障子の内より手裏劍、新左衞門に當る。新左衞門、こける。祐經、障子の内より出て

祐經　憎くい下郎め。時宗が似せ首を以て、よくも祐經に一杯喰はせたな。今が最期ぢや。觀念。

ト切らうとする。新左衞門、以前の手裏劍、打ち返し

新左　伊豆の奥野の歸るさに、主人河津の三郎を、先ッこの如く遠矢に射留め、こなたに討たれし河津が無念、曾我兄弟が骨髓に徹つて、付け狙ふ今月今宵。今ぶち返した手裏劍は、急所を外せし鬼王が助太刀。しつかりとお請け下さりませい。

祐經　うち蟲めが。敵の末は根を絕つて葉を枯らす。それへ直れ。ぶち放す。

新左　こなたは御兄弟に、討たさねばならぬ大切の敵。手

向ひ致さぬ證據の丸腰。
祐經　其方から相手にならぬ程、工藤が相手にする。
新左　出さつしやれ。
祐經　何を。
新左　友切丸の名劍を。
祐經　なんと。
新左　今宵八聲の鷄の啼くまでに、その刀を詮議仕出さねば、御兄弟の望みも叶はぬ。情を知るは武夫の常。どうぞ刀をお返しなされて下さりませう。
祐經　知らぬ。
新左　祐信が最期の砌り、庵に木瓜の片袖は、こなたの片袖、工藤を科人にしては、兄弟が望みが叶はぬ。親の敵が討たれぬに依つて、身に覺えなき盗賊の惡名。敵もえ討たず、敵に替つて盗賊となつたは、こなたを安穩で置からばかり。こなたの爲に盗賊となつた、曾我殿原が無念さは、どのやうにあらうと思はつしやるぞ。サア、情ぢや、刀を渡して潔よう、兄弟に討たれてやつて下されい。
祐經　ハテ、この工藤ゆゑに、兄弟の者は苦勞をするな。
新左　親の敵が討ちたいばつかりに。
祐經　不便や〳〵。
新左　御推量なされて下されい。
祐經　敵討たれてくれう。
新左　エヽ。
祐經　餘り切ない兄弟が心、討たれてやらぬも武士の本意でない。潔よう討たれてくれう。
新左　エヽ、有り難うござりまする。
ト祐經、新左衞門に切りつける。
新左　滅多に油斷は仕らぬ。サア、友切丸渡した。
祐經　不敵な奴の。天下の執權一﨟別當、工藤左衞門祐經を、敵と云うて付け狙ふさへあるに、身に覺えなき盗賊の惡名。時宗が似せ首討つたおのれ。嫌でも應でも生けては置かぬ。
新左　滅多に死ぬる事罷りならぬ。
祐經　所を殺す。
ト云ふうち、新左衞門、祐經が刀に目を付け、タテの間に刀引ッたくり透かし見る。
下郎に似合はぬ天晴れの働らき。この祐經は叶はぬ。
新左　切つても突いても血はたらぬ。御兄弟に首尾よう敵討たすまでは、ちぎれ〳〵になつても死ぬるこつちやご

ざらぬ。

祐經　イヤ、天晴れの侍ひ、惜しい奴だ。工藤も其方がやうな家來が欲しい。今の手の內と云ふものは、並々の武士が及ばぬ。ハテ、うい奴ぢや。

ト油斷させ、差添にて切らうとする。新左衞門、見得よくしやんととまり

新左　大方これが友切丸。

ト透かし見て

これも違うた。

ト抛り。

サア、友切丸、どこへやつた。

祐經　知らぬ。

新左　知つても出さす。知らいでも出さす。どこへやつた眞直ぐに白狀せい。

祐經　知らぬ。

新左　云はして見せう。

ト立廻りになり、祐經、新左衞門を當てる。新左衞門、こける。祐經、懷中より袋入りの小太刀を出し、乘かかり殺さうとする。新左衞門、見得よく起き、立廻りのうちに八幡三郎、起き、新左衞門にかゝる。右の太刀にて首切る。八幡が首、仕掛けにて井桁へ出る。祐經、新左衞門、刀持ち添へ見得にて井の內へ映す。仕掛けにて井戸より吹き水上る。井の內にて鷄啼く。

燒刄には自然と八幡の神號を顯はし、武將源の滿仲の頃、異僧渡つて打ちあげたる友切丸。

ト鷄の聲を聞き

伊東に傳はる鷄の目貫は、その妙さながら生けるが如く、いま井の內に映す刀の影に、この目貫より鷄の聲をあぐる。水に溺れその死骸知れざる時、鷄を入れるにその死骸あらん所にて時を作る。今この井の內へ切り込みし、死骸の陽氣を誘ひ時をつくる。水氣は血汐の穢れを拂ふ刀の德。思はずも鷄の宵啼きは、今月今宵御兄弟、年來の本望遂ぐる瑞相。嬉しやな。

祐經　エ、無念や。この太刀を盜み、兄弟の奴等に自滅さしてくれんと思うたに。よい〳〵、兄弟の先走り。この太刀の生贄。

トよろしくあつて、方々にて此うちに鷄啼く。雨降り、東西の門開く。合羽侍ひ大勢出る。

侍ひ　主人重忠、申しつけたる祐經さま、お迎ひの人數、八聲の鷄を合圖に門を開き、お迎ひに參りましてござり

まする。

ト重忠、出て

重忠　八聲の鷄でござる。工藤どの、狩場へお歸りなされい。

祐經　イヽヤ、今のは八聲の鷄ぢやござらぬ。ありや似せ鷄ぢや。

重忠　只今謳うたは八聲の鷄。似せ鷄とはな。

祐經　まだ夜半になるかならぬに、八聲の鷄とはな。

重忠　でも、鷄が啼いたは正明、但し、鷄にも僞はりがござるかな。

祐經　サア、あんまり早い八聲の鷄。

重忠　ハヽヽ、家來ども、工藤どのゝお立ちの用意。

侍ひ　ハアヽ。

重忠　鬼王、五月二十八日、八聲の鷄ぢやが、刀の行くへは。

新左　友切丸の名劍、只今行くへが相知れましてござりまする。

ト重忠に渡す。

重忠　して、この刀の盜賊は。

祐經　工藤でござる。

重忠　なんと。

祐經　曾我兄弟の奴等を亡き者にせんと、盜み取つたる友切丸。

祐成　イヽヤ、工藤どのは盜賊でないぞ。

ト祐成、侍ひの中より出る。

祐經　わりや、十郎祐成。

重忠　いま召抱へた新參の家來。工藤どのを見送りの役人。

祐成　鬼王、工藤どのを盜賊でないと云ふ證據。

ト以前の一札を出す。

新左　「友切丸を我れに得させし功に依つて、約を變ぜず、久須美の莊を宛て行ふものなり。近江の小藤太、八幡の三郎承つて件の如し。」すりや、刀の盜賊は……近江八幡に極まつたよな。

祐經　でも、ようしたものぢや。

重忠　最前より降りしきる五月雨、工藤どのへ長柄持て。

時宗　五月雨に、雲間の月の晴れ行くを、暫し待ちける時鳥かな。

ト侍ひ内より、長柄持ち出る。

祐經　ヤア、わりや時宗。

新左　コレ〳〵、御兄弟、狩場までは大切のお客。必らず

粗相のないやうに。

兩人　合點ぢや。

ト兩方より挾み詰める。

祐經　御狩家の惣構へまで、御家來借りませう。

重忠　お心措きなう。

祐經　惣構へよりは御領の假家、下郎は叶はぬ。

兩人　すりや、今爰で勝負を。

重忠　惣構へより御領の假家へ通るには、切手なければ叶はぬぞよ。

時宗　狩場の切手が。

ト此うち、近江の小藤太起きて「鬼王われを」と切りかける。新左衞門、見得よく小藤太を切り殺し、切手を出し

新左　近江八幡が二人前の切手。

時宗　これさへあれば。

ト切手を取る。

重忠　兩人、供先大事にかけい。

兩人　ハア。

祐經　段々御馳走、忝ない。

重忠　必らず吉左右、待つて居りまする。

兩人　祐經。

新左　コレ、殿のお立ち。

ト祐經、祐成、時宗、見得よくタテ。　幕

大切　裾野假屋の場

役名──工藤左衞門祐經。茨の左衞門。仁田四郎忠常。御所の五郎丸。大藤內。大磯の虎。化粧坂少將。曾我十郎祐成。曾我五郎時宗。秩父庄司重忠。

造り物、一面の黑幕。內より軍兵四五人、篝を焚き、きんこして居る見得にて幕明く。

軍一　待て〳〵、惡い題だわい。捨て〻行かうかい。イヤイヤ、さしの三だん捨てべからず。

ト札を取り引く。

ヤア、來たぞ〳〵。よし〳〵、うまい〳〵。なんとえらいか、五下げぢや。

皆々　しまうた。

軍一　ところでソリヤ、とんぼうぢや。
軍二　ハテ、サテ、取つてしまはいでな。
軍一　イヤ〳〵、爰で幽霊を引き上げて、もう一とんぼう行くべい。幽霊よ〳〵。イヤア、してやつたワ。幽霊めが罪が重かつたかして、鬼どのがお出やつた。ソリヤ、もう一山だ〳〵。
軍三　まだ行くかいやい。コリヤ、元の場だ。サア〳〵、早くしろ。
軍一　蟲か幽霊か。こりや〳〵、南無三寶大三つだ。エヽ、取つてしまうたらよかつたに。
軍二　おらが取つてしまへと云ふのに。さらば我れらが手並お目にかけうか。コリヤ、ひたりか〳〵。オツと來たぞ〳〵。
　ト札を抛り、錢を搔き込む。
軍三　とんと身上仕舞ひをさし居つた。こりやアよいワ。マア、錢を百貸せ。明日手柄をして、鹿でも鬼でも取つたらば、それで返す。
軍二　イヤ〳〵、今日もどうげんを摑ました。われが渡した鎗を功名にして、旦那のお目にかけたれば、こりやコレ、三十日も前に死んだのぢやと仰せられて、却つて大きに叱られたわい。
軍三　そりや、さう云ふ事もあらう。あれは谷合ひにごねて居つたのを、おらが見付けたに依つて、その所で借錢の代りに、われに渡した物だ。
軍二　よう一杯喰はしたなア。
軍三　明日はピチ〳〵する奴を取つて、われに渡すワ。サアサア撒け〳〵。
　ト皆々きんごして居る。と臆病口より重忠、提灯灯させ出る。橋がゝりより、仁田四郎忠常、提灯灯させ出る。
忠常　重忠どの、今宵は殊さら雨も降りさうにござるに、近頃御苦勞に存じ奉りまする。
重忠　忠常どの、夜廻りのお役目、其許にも御苦勞に存じまする。この度の御狩、諸大名が我れ劣らじと分捕り功名を致すうちにも、其許に續く者はない。君、鎌倉へお歸りなされたれば、定めて御加增でござらう。この重忠めも、あやかりたう存じまする。
忠常　これは〳〵、重忠どのゝ御褒美のお詞、痛み入りまする。一昨日差上げました、猪に出合ひましたる時は、忠常めも餘程汗を搔きましてござりまする。

重忠　左樣ござらうとも。イヤ〳〵、天晴れのお手柄でござりまする。
軍一　こりやア、えゝワ。そりやア無理だ。
軍二　身共が何を無理を云ふ。身共が取つたのだ。
軍三　イヤ、そりやア此方だ。
ト皆々、いろ〳〵云うてせり合ふ。
重忠　ヤイ〳〵、わいらは何をやかましく云ふ。
ト皆々恟りする。
忠常　其方だ、此方だ、其方だと、何事をせり合ふのだ。
軍一　イエ、これは今日の手柄を、銘々論じ合ひまするのでござりまする。
重忠　君のお立ちも追ッつけであらう。隨分と氣を附けて番など嚴しく、用心を致してよからう。
皆々　ハア、、畏まりましてござりまする。
忠常　イザ、重忠どの。
重忠　忠常どの。お別れ申しまする。
ト兩人、辭儀合ひあつて入る。
軍二　サア〳〵、一遍廻つて來うではないか。
軍三　廻つて來て、今の勝負を附けるぞ。

トいろ〳〵云うて、皆々、拍子木を打ち、別れて入る。と向うより、大磯の虎、掛け素袍、松明を持ち出る。少將、同じ形にて、松明を持ち出る。互ひに透かし見て
虎　五郎さんぢやないか。
少將　十郎さんではござんせぬか。
ト兩人、互ひに顏を見て、
ヤア、お前は虎さん、この姿はどうぢやいな。
虎　重忠さんの情で、兄弟のお方が、今宵この所へ入らしやんしたと聞いたゆゑ、もしも危ふい事があれば、お身替りに立たうと思うて、この姿。して又、お前のこの姿はえ。
少將　わたしもその心。五郎さんの身の上に、危ふい事があるならば、お身替りに立つ心で。して、御兄弟は、首尾よう祐經を、お討ちなされましたかいなア。
虎　最前より窺ひ見るに、假家々々もひつそりと靜まつて、未だ御本懷は、お遂げなされんと見えた。
少將　御兄弟は如何なされしぞ。ア、、心元ない事ぢやわいなア。
虎　も一度十郎さんのお顏を。

少將　わたしも五郎さんに
兩人　逢ひたいものぢやがなア。
侍ひ　何者だ〳〵。
ト云ふうち、侍ひ二人、拍子木を打ち出て、二人を見附ける。
少將　イエ〳〵、大事ない者でござんす。夜廻りの者ぢやわいなア。
侍ひ　夜廻りの衆だ。して、お名はなんと申す。誰れでござる。
虎　アイ、わたしが事は新谷荒四郎さんぢやわいなア。
少將　わしは海野太郎さんぢやわいなア。
侍ひ　なんだ。新谷どの、海野どの。
ト侍ひ、透かし見て、
此奴等が。その新谷どのは、我れ〳〵御主人。察するところ、御狩家へ忍び入つたる曲者に違ひない。兩人ともに引つ括ッて、御前へ引く。覺悟ひろげ。
ト侍ひ、兩人にかゝる。兩人、いろ〳〵立廻り。侍ひ二人を殺し、拍子木を取り
虎　少將さん、二人を尋ねる便りの拍子木。
少將　虎さん、ぬかるまいぞ。

虎　合點でござんす。
ト兩人、拍子木打ち、兩方へ入る。一聲になり、十郎祐成、五郎時宗、合羽をかむつて松明を持ち出て
祐成　重忠どのゝ情にて、これまでは忍び入り、假家の案内は先達て、繪圖を以て覺え居る。アレ、あの小山手の小高き假家こそ、敵工藤左衞門が假家。
時宗　今宵は如何なる吉日ぞや。兄弟が年來の、本望を遂げる今日只今。
祐成　首尾よう敵を討たねば、生き延はつて益ない命。
時宗　鎌倉の諸大名に、兄弟が刀の目釘の續かんだけ、切つて〳〵切り死に。
祐成　兄弟引別れ、所々の死を遂げまいものでもない。すりや、これが今生の顔の見納め。
ト氣味合ひあつて
時宗　十郎どのゝお顔を、母人のお顔と存じて、我が顔もとつくりと。
ト祐成、時宗、手を取り合ひ、少し心意氣あつて
兩人　曾我兄弟が年來の、本望を遂ぐるにこの形は。
時宗　差添もなく、陪臣同然の一腰。斯く落ちぶれしも皆工藤ゆゑ。兄者人。

祐成　弟。

ト心意氣にて憂ひある所へ、鬼王新左衞門、大小に狩裝束を持ち、兄弟を尋ねる見得にて出て、兩人を見附け

新左　ヤア、御兄弟ではないか。

ト兩人、見て

兩人　そちや、鬼王新左衞門。なんとしてこの所へ。

新左　大磯よりお二人をば、工藤めに附けておこしまするや否や、阿母樣のお目にかゝりまして、右の樣子を申しましたれば、殊ないお喜び。そこへ五郎が勘當赦すとのお詞。

時宗　ナニ、母人が勘當を赦すとな。ハア〱〱、有り難い。

新左　又この裝束に、まさかの時にもと、阿母樣が、兼ねて御用意なされた。この二腰は河津さまの重代。其方早く兄弟の者に追ひつき、これを渡せよと仰せつけられましたに依つて、中村から一またげ、この狩場へ來て、方方と尋ねましてござりまする。サア〱、これをお召しなされませ。

祐成　ナニ、母人のお志し。兄弟が死出の曠れ着。五郎。

ト兩人、合羽を脫ぎ、新左衞門、手傳つて素袍を着せ、脇差を兩人へ渡す。

これでこそ誠の武士。エヽ、嬉しや〱。

ト新左衞門、氣味合ひあつて

新左　昔の伊東河津ならば、狩場の曠れ着綾錦、綺羅に綺羅を磨きお供せんもの。あるに甲斐ない。

ト兩人が袖捉へ、氣味合ひ。

祐成　非人乞食と姿をやつし、敵を討ちし例もある。殊更母の手づから賜はりしこの裝束。兄弟が身に添ふるは、綾錦にも劣るべきか。

祐成　如何にも、サア弟、時が經つれば妨げ。來い。

新左　左樣でござりまする。一時も早う、御本意をお遂げなされませい。

ト先に立ち、行かうとする。

時宗　コリヤ〱、鬼王、其方はどれへ行くぞ。

新左　ハテ、知れた事。一の太刀は十郎さま、二の太刀は五郎さま、その後はこの鬼王新左衞門、年來の主君の敵。ずた〱に刻まにや置かん。サア〱、お出でなされませい。

時宗　イヤ〱、供は叶はぬ。

新左　そりや又、なぜな。
祐成　曾我兄弟の者が敵を討つに、助太刀を頼みしと云はれては先祖の恥。その上、我れ〳〵敵を討ちし上は、どうならうとも知れぬ命。萬一もしもの事があつた後で、大切な母人は誰れが育む。力に思ふは其方一人。今兄弟が供をせうよりは、後に殘り母人を、二人に成り替り、育みくれるが、十倍增して其方の忠心。コリヤ、この道理をとくと聞分けて、これより直ぐに中村へ歸つてくれい。鬼王頼むぞ。
新左　と云うて、この場を見捨てゝ。
時宗　達て供せうと云へば、主從の緣を切るぞよ。
新左　ハツ。
ト新左衞門、思ひ入れあり、祐成刀を拔き、髮を切る。
祐成　身體髮膚は父母に受く。コレ、この黑髮を母への筐。
ト時宗、同じく髮を切つて差出し
時宗　母人へよろしう。
ト新左衞門、兩方の髮を取り、心意氣さま〳〵あり
新左　西伯公が母へ送りし衣は、再び歸りし故鄕の錦。これは歸らぬこの黑髮。
ト氣味合ひあり、祐成、キッとなる。

祐成　弟。
時宗　兄者人。
祐成　來い。
ト兩人、ツカ〳〵と臆病口の方へ入る。
新左　ハア、。さうぢやなア。人は一代名は末代、御兄弟が年來の本望。お供に連れまいと仰しやるも、無理ではない。一時も早う歸つて、母御へお筐を。
ト行かうとして
最早御兄弟は、本意を遂げさつしやつたか。仕損じさつしやれねばよいが。イヤ、一時も早うお筐を母御の方へ
ト渡りのせりふ、いろ〳〵あつて、行かうとしたり戾つたり、心遣ひのことあるうちに、奧にて騷がしく鉦太鼓鳴ると、新左衞門、氣味合ひあつて
夜はまだ七ツ。勢子の者がよもや。
ト思案をして
こりや、どうも。
ト氣を替へ、ツカ〳〵と入る。返し。
造り物、黑幕を引くと、奧打拔き裾野の假家の體。
眞中に、祐經の假家あり、祐成、時宗、兩方へ別れ、

祐成　眞中に大藤内、寝て居る。五郎、思ひの外の敵の油斷。斯うして討つは死人も同然。

時宗　如何にも。名乘りかけてお討ちなされい。

祐成　先年奥野の狩の歸るさに、其方が討つたる河津の三郎が悴。曾我十郎祐成。

時宗　同じく弟、五郎時宗。

祐成　工藤左衞門祐經、立ち上がつて勝負々々。

ト大きな聲して云ふ。と大藤内、悔りして起きる。方方にて鉦太鼓鳴る。此うち、兩人、大藤内を殺す。

時宗　祐成どの。

祐成　さては敵の謀り事に會ひしなア。弟。

兩人　ハテ、無念やなア。

ト軍兵大勢出て、兩人を取卷き

軍兵　やらんぞ。

祐成　曾我兄弟が冥途の供。

トこれより、兩人、見得よくタテになり、追ひ込み、皆々入る。大磯の虎、以前の形にて走り出て

虎　十郎さんいなう、五郎さんいなう。

トさま〴〵あるうちに、忠常出て

忠常　狩場を騷がす曲者、曾我兄弟の者と見しは僻目か。仁田の四郎が向ひしぞ。叶はぬ所、尋常に勝負せい。

ト大磯の虎と切り合ひあつて

虎　珍らしや仁田の四郎どの。曾我の十郎、相手になり申さう。

トこれより立廻り少しあり、大磯の虎、受け太刀となり、忠常、仕合ひながら假家の後へ入る。と少將、出て

少將　御兄弟樣いなう……もう、お聲もせぬワ。最早討死なされたか。ハア。

ト泣く。この間に、御所五郎丸、後に窺ひ居て、後ろざまに、少將を抱きとめる。

何者ぢや。この所放さぬか。

ト少し立廻りあると、内にて

忠常　曾我の十郎祐成を、仁田の四郎が討ちましたぞ。

ト大きな聲に云ふ。少將、悔りする所を、五郎丸、少將をこかし、繩をかける。と侍ひ大勢出て來る。

五郎　鬼神と呼ばれたる、曾我の五郎時宗を、御所の五郎丸が生捕つた。假家々々も靜まられてよからう。

ト侍ひ、少將を引立て、御所五郎丸、入る。と遠攻め

止む。祐經、茨の左衞門、假家より出て、あたりを見て

左衞　工藤、首尾よう參つた。

祐經　兄弟の奴等が、斯う云ふ事もあらうと、兼ねての計略。討たれし上は、心にかゝる山の端もなし。

左衞　うまい〳〵。

ト云ふうち祐成、時宗、重忠、出かゝり聞いて居て、ツイと出て、兩人、祐經を取卷き

兩人　工藤左衞門、遁がれん所。尋常に勝負〳〵。

祐經　ヤア、おのれらは曾我の兄弟。こりやどうぢや。

左衞　兄弟、覺悟。

ト刀を拔いて切りかゝらうとする。重忠、左衞門を見事に切る。

重忠　見屆けの役はこの重忠。イザ、踏ん込んで勝負〳〵。

トこれより、祐經、祐成、時宗、少し立廻りあつて、祐經を殺し

兩人　曾我兄弟の者。工藤左衞門、覺えたか。

ト止めを刺す。新左衞門、走り出て

新左　御兄弟、首尾よう敵はお討ちなされしな。

兩人　鬼王喜べ。只今、本望遂げたぞ。

重忠　兄弟が身の上は御前の御沙汰。先づこの場は立ちませい。

ト打出し。

幕

稻光田毎月（終り）

歌舞伎年代記所載「戀便假名書曾我」の似顔畫

祐經 時致 對面赤木盞

蒔繪 則

大磯の衣紋坂において
前座 平家物語 講師
後座 義經記 關原甚內
附 鎌倉道女敵討

花に興ずる景清も昔戀しき七兵衛
隣津からの甚五郎は一盃きげんの
左利しかも細工を得しかの舞妓の

七枚起請

二世とかれたる
妹脊の榮

祐成 鬼王 恩愛小袖乞

模樣 則

相模川鳥越橋において
浮牡丹の香爐 劔術指南
朝日の彌陀 一體幸崎甚內
右二品ひろひ申候 御覺の御方
私宅まで取に御出で被下度候

初春の御壽き何方も同じに祝ひをさめ舞扇一指奏づる二の宮が着つゝなれたる名所の短册歌もて引ばこれも又通ひ廓の全盛に江戸紫の所縁ある杜若の替紋は三浦屋の八橋が間夫と呼るゝ男氣は其名も佐野の次郎左衛門が謎にかけたる一腰は籠瓶釣とも結綿のとぎれの小まんが女夫の合紋てうどあふたる色の中宿互に悋氣の疑ひもひらき初るや梅暦大經師のおさんに仇名立引は御ぞんじの荒五郎茂兵衛が隱れ家尋て鐵壁武兵衛に一筆殘す迷子札に義理をしがらむ情の環絹五月下旬の夏祭まで仰合され御入をねがひ上まゐらせ候

戀便假名書曾我

四番續に仕候

曾我狂言百姿

「吉例曾我寶入船」より

（上）和田左衛門義盛。曾我の母滿江。
（下）和田の舞鶴。鬼王新左衛門。

戀便假名書曾我

一番目四建目　曾我貧家の場

役名──曾我十郎祐成。曾我五郎時宗。大礒の虎。同禿、千鳥。同、波路。化粧坂の少將。同禿、小蝶。同、揚羽。醫者、夏目茯苓。質屋、但馬屋小左衞門。材木屋八兵衞。米屋權兵衞。百足屋六兵衞。千葉之介常胤。伊豆の次郎祐兼。久上の禪司坊。鬼王新左衞門。同女房、月小夜。同娘、お國。

本舞臺、三間の間、庇付きの屋體、一間の折り廻し障子屋體。正面暖簾口、赤壁、門口据ゑ物。東の見付け柱、梅の大樹、西の方手水鉢、柴垣植込み、この所にいろ〳〵の世帶道具積み重ね、古疊など取散らしてあり、すべて曾我の煤掃きのかゝり。爰に禪司坊、紙袋を冠り、上ッ張りをして居る。夏目茯苓、醫者の形、ぢん〳〵端折り。米屋權兵衞、薪屋八兵衞、質屋但馬屋小左衞門、いづれも掛取りの形にて、めでた〳〵の若松さまよと同音に唄ひながら、禪司坊を胴に上げて居る。鬼王女房月小夜、置き手拭、前垂れ、後帶にて、盆に食籠を載せ、片手に藥罐を提げて立ちかゝつて居る。この見得。幕の内よりワヤワヤ賑かにてんつゝ、通り神樂にて幕明く。

皆々　おめでたうござりまする。

月小　ほんに皆さん、御苦勞でござんしたな。サア〳〵、爰へござんして、茶々一つ上がつて下さんせいなア。

ト食籠を皆々の前へ出し、茶を酌んでめい〳〵に出す。

茯苓　月小夜どの、構はつしやりますな。わしらが酌んで呑みまする。サア〳〵、禪司坊どの、爰へござりませ。

禪司　アイ〳〵。

ト上の方へ坐り、重箱をあけて

こいつは恐ろしいわえ。わしは頭役に始めませう。

ト食籠の小豆餅を取つて、ムシヤ〳〵と一人抱へて食ふ。月小夜、皆の前へ氣の毒なる思ひ入れ。

月小　ほんに、禪司坊さまのその顏わいの。いつそ煤の埃だらけでござりますわいなア。早う、お湯を召しませい

なア。

ト食籠を離せと仕方する。

禪司　これがどう離されるものか。曾我の屋敷で、正月餅を食ふは今日が始めてだ。松餅が珍らしいとは、とんだ屋敷もあるものだ。ハヽヽヽヽ。

ト笑ひながら、矢張り食つて居る。

權兵　ほんに世間ぢやア、七草だの鳥追だのと騷ぐ中に、煤掃きとは珍らしい趣向ぢやござりませぬか。

八兵　それサ、わしどもゝ掛取りに來て、煤取りの手傳ひをするとは、とんだ事でござる。

小左　そりやわしどもばかりぢやアない。見りやアお寺樣にお醫者まで手傳つてござるが、ほんにとんだ煤掃きぢやアござらぬか。

禪司　イヤ、愚僧は越國の國、久上寺の所化でござるが、鎌倉の諸士方へ例年の通り、年始の使僧に參つてござるが、當年は祠堂金の取集めもござつて、手間取りまするゆゑ、内縁でもござれば、この屋敷に逗留いたしたところが、思ひ掛けない今日の煤掃き。定めし使ひ殺されるところであらうと思ひの外、掛取り衆が手傳つてくれられたゆゑ、つい片付いてしまひました。これを思へば借金のあるも、こんな時はよいものでござりまする。

茯苓　何を云はつしやりまする。ハヽヽヽヽ。わしも御老母滿江さまの、御眼病の療治に參つたところが、月小夜どのが一人働らいてござるゆゑ、餘り氣の毒さに手傳ひましたが、曾我どのゝお煤取りに、此やうに賑やかな事はござらぬ。コレ月小夜どの、今年からはまんも直つて、大方めでたい事ばかり重なるであらう。

月小　ほんに茯苓さまの、ようお祝しなされて下されましたな。大殿祐信さまには、三原那須野の御巡見、このお役目を、首尾ようお勤め遊ばしたら、御歸國次第、御吉事がござりませうわいなア。

權兵　どうぞそんな御吉事な事でもあつたら、おらがお拂ひも出やうかえ。

小左　それサ、松過ぎとある事ゆゑ今日來たが、鬼王さまは、まだお留守でござりまするかな。

月小　サア、鬼王どのも、その事を苦勞にしてなア。

ト云ひ譯をしようとする。

禪司　コレサ月小夜、何もさう云ひ譯をする事はないわな。いま聞けば鬼王が、松過ぎを掛合つて置いたと云ふぢやアないか。

三人　さればサ、暮れに松過ぎと云ふお約束ゆゑ、それで今日參りましたのサ。

禪司　そりやア、鬼王が思ひ入れとは、大きに料簡が違つて居るわえ。

三人　そりやア、なぜな。

禪司　ハテ、世間は松過ぎても、この曾我の屋敷ぢやア、やう／＼今日煤を取る位の事だから、未だ正月は來ませぬワ。先づ今日が師走の十三日の氣で居ませう。して見ればこれから。

ト指を折つて

もう五日も經たねば、觀音の市にもならず、それからソロソロ正月の支度にかゝるから、未だ／＼爰の屋敷の松過ぎには、餘ッぽど間のある事だ。それに今から掛取りに來ると云ふやうな、不調法な事があるものか。

三人　イヤア。

ト驚ろく。月小夜、氣の毒なる思ひ入れ。

禪司　今日煤掃きだから、十三日と思つて日數を繰つて、爰の松過ぎに來たがよい。

三人　そりやアとんだ事だわえ。

ト皆々呆れる。

禪司　ちつとさうもござるまい。

ト通り神樂になり、花道より麻上下の侍ひ三人、目錄臺に小判の包み金を載せて出て來る。

三人　頼みまする。

月小　ハイ／＼、どれからお出でなされましたえ。

ト門口を明ける。

侍一　イヤ、拙者は北條家の使者でござるが、當お館に、越後の國久上寺の御使僧、禪司坊どの御旅宿と承はつたが、御在宿でござるかな。

月小　左樣でござりまする。マア／＼、これへお通り下されませ。

三人　然らば御免下されい。

ト内へ入る、禪司坊うろたへ、急に衣を引ッかけ、紙袋を冠つたまゝにて、鹿爪らしく出迎ひ

禪司　これは／＼、いづれも御苦勞に存ずる。

ト三人の者、禪司坊を見て呆れてゐる。月小夜、氣の毒なる思ひ入れにて、禪司坊が袖を引き知らせる。禪司坊やう／＼心付き

これは疎々つかしい體をお目にかけました。

ト紙袋を取る。

侍一　すりや、貴僧が禪司坊どのとな。

禪司　小鬢ながら、禪司坊でござる。

侍一　拙者は北條家よりの使者。例年の通り祠堂金七拾兩、相送られまする。

侍二　拙者は秩父家よりの使者、祠堂金五拾兩。

侍三　拙者は和田家よりの使者、祠堂金五拾兩。

三人　お受取り下されい。

ト　めい／＼出す。禪司坊、改め

禪司　これは／＼、いづれも、御叮嚀なる儀でござりまする。早速書面を以て、師の坊へ申し遣はすでござりませう。

三人　然らば我れ／＼はお暇申さう。

禪司　これは又、餘り粗末な儀でござりまする。御時分ならばお茶漬でも。

三人　イヤ／＼、お暇申しまする。

禪司　ようお出でなされました。

ト　通り神樂にて三人向うへ入る。禪司坊、金を取集め

禪司　このマア煤掃きの中へ、とんだ物を受取つて、置き所に困るわえ。

ト　金を持つて方々見廻し、懐や袂へ入れ、ウロ／＼して居る。

月小　お前さん、胴巻があるぢやアござりませんかえ。

禪司　何にするとて胴巻なんぞを、心掛けて居るものか。

月小　それでも折々御懐中で。

禪司　解いたり結んだりするのは、これサ。

ト　細き紐を出して見せる

月小　そりや、なんの紐でござりますえ。

ト　皆々見て

皆々　そりやア、鍋屋の紐ぢやアござらぬか。

禪司　恥かしながら、あま身ださうサ。

月小　何を仰しやりまするぞ。

ト　月小夜、鉢米袋を見附け

コレ／＼、これによい物がござりまする。

ト　禪司坊、取つてこの中へ金を入れ、首に掛けて見て

禪司　こりやア、どうも云へぬわえ。

ト　首を振つて見て

これぢやア、首さへ落さにやア失くす事ぢやアない。

月小　エヽ、お前さんも首を落すのなんのと、今日は大事のお煤取りでござりますわいなア。

禪司　ほんにさうだつけの。サア／＼、お醫者さんも掛取

り衆も、このがらくたを、片付けて下さい〳〵。

三人　掛けも取らずに、とんだ目に遭ふ日だわえ。

ト呟き〳〵片付ける。順禮唄、てんつゝ、通り神樂にて、花道より鬼玉娘お國、振り袖、順禮の形、笈摺、胸札、手甲脚絆、草鞋菅笠、杖を突いて出て來り、直ぐに舞臺へ來て

くに　順禮に御報謝。

三人　忙がしい。通つた〳〵。

くに　ハイ、モシ、お邪魔さまながら、長谷の觀音さまへは、どう參りまするえ。

茯苓　ハテ、いろ〳〵な事を云ふ順禮だ。それを敎へて居る暇がない。通つた〳〵。

ト皆々構はずに片付けて居る。

くに　ハテ、困つたものぢやわいの。

トうろ〳〵花道へかゝる。

月小　コレイナア、なんぼ忙がしいとて、ちよつと長谷を敎へてやつたとて、どのやうにかけるぞいなア。

ト門口へ出て

コレ、順禮どの、長谷へはの

トお國を見て

ほんに、しをらしい順禮どのぢやが、こなさん、一人ぢやの。

くに　ハイ、一人順禮でござりまするわいなア。

茯苓　イヤ、可愛らしい聲だわえ。

權兵　ドレ〳〵、春の始めの順禮なんぞは、夢に見てさへ有り難いと申す。

ト云ひながらお國を見て、イヤアと驚ろく。お國も氣味惡き思ひ入れ、おづ〳〵して居る。

三人　美しい奴なら引摺り込んで、胴に上げてやるとよい。

月小　コレイナア、お前方が其やうな事を云うてぢやに依つて、怖がつてぢやわいなア。大事ない程に、內へ入つて休んだがよいわいなア。

くに　それは有り難うござりまする。左樣ならそれへ參りましても大事ござりませぬかえ。

禪司　大事ないとも〳〵、早く爰へ來なさりやせ。

くに　左樣なら、お許しなされませえ。

ト內へ入る。月小夜、茶を酌んで

月小　サア〳〵、遠慮なしに爰へ來て、休んだがよいわいなア。

くに　ハイ〳〵、有り難うござりまする。

ト茶碗を取つて戴いて呑む。此うち月小夜、お國をつくづくと見て

月小　ほんに、年端も行かぬ女子の身で、供も無う只一人、順禮に出やうと思ふは、大抵の事ぢやアあるまいの。定めし親御達は、大抵案じてゞはあるまいの。

ト　お國、ホロリとして

くに　いたいけに仰しやつて下されますが、そのお詞を聞くにつけても、思ひ出しまするは、わたしが母さん。

ト　涙を拭ひ

母さんの菩提の爲でござりまするわいなア。

月小　ムウ、そんなら母御に、別れての順禮ぢやなア。

くに　左樣でござりまするわいなア。

月小　して、父さんは、在所はどこぢやえ。

くに　わたしが在所は、伊豆の熱海の者でござりまするが、父さんはわたしがお腹に居るうちに、生別れ致しまして、この年月まで母さんの手一つ。その母さんの菩提の爲の順禮ながら、見もせぬ父の行くへを尋ねんと、鎌倉三界迷うて居りまするわいなア。

禪司　そりやア雪を掴むやうな尋ね者だ。見もせぬ親を尋ねるとは、どうかおれがしさうな事だ。シタガ、お主のやうな可愛らしい順禮が、ウソ〱歩いたなら、とんだ所へ引摺り込まれて、廻りちよぼ市にでも遭ふぞえ。

三人　それ〱、誰れも打ッちやつては置く事ぢやアござらない。

小左　廻りちよぼ市位は堪忍もせうが、惡い奴が目にかゝつたら、騙されて賣られうも知れないわえ。

月小　ほんに其やうな事を思ひ過すと、いとしい事ぢやわいの。

ト　案じるこなし。お國は氣味惡き思ひ入れにて

くに　左樣なら、私しはどうぞなりますかえ。

月小　爰に居るうちは氣遣ひな事はないが、必らず脇では、人が何と云はうと、騙されぬやうに氣を付けたがよいぞえ。

くに　ハイ〱、有り難うござりまする。

月小　ほんに、其やうな事思ひ過すと、いとしい事ぢやわいの。それにしても、その行くへを尋ねると云ふに、なんぞ慥かな證據でもあつての事か。

くに　サア、僅かな印が親子の證據。これを印に巡り合へと、母さんが今際に下さんした。

ト　守り袋より袱紗に包みし小柄を出し、月小夜に見せ

る。
月小　禪司坊さま、これを御覽じませ。
禪司　ドレ〱。
月小　垣に朝顔の高彫りしたるこの小柄。
禪司　銘は即ち後藤實元。
くに　それが證據でござりまする。
月小　ほんに、聞けば聞く程いとしい事ぢやわいの。コレ
イノ、必らず脇で人が何と云はうとも、騙されぬやうに
氣を付けたがよいぞえ。
くに　ハイ〱、有り難うござりまする。
禪司　コレ〱月小夜、おれがおつりきな事を思ひ出した
が、こりやアどうであらうな。
月小　そりやマア、どのやうな事でござりまするえ。
禪司　サア、斯うだて。この曾我の屋敷で、いくら奉公人を
尋ねても、現在團三郎でさへ、この困窮を見限つて、家
出をする位な事だものを、どんな奴を頼んだとても、懲
り懲りして引越さないワ。そこで思ひ付きは、この順禮
を、當分阿母の病氣のよくなるまで、給金遣らずに雇つ
て置く工面は、どうであらうな。
月小　滅相な。其やうな事が、どうマア先に得心がござり
ませうぞいなア。
茯苓　そりや禪司坊の云はれるのが、兩爲でござるわえ。
お娘も一人で、うそ〱歩かうよりは、この曾我のお屋
敷に居て、折り〱尋ねに出る方が、よささうなものだ。
給金を取らぬ代りに、判儀も要らず、桂庵賃も出さずに
しまふからは、こりや五分々々と云ふものでござる。
禪司　醫者サマ、左樣でござる。
皆々　ハヽヽヽヽ。
　ト笑ふ。最前よりお國、思ひ入れあつて
くに　左樣なら、曾我さまのお屋敷と申しますは、こなさ
までござりますかえ。
三人　オヽ、爰が名代の曾我さまよ。
　トお國、嬉しき思ひ入れにて、宗十郎が錦繪を出して、
　皆々の顏を比べて見る。
小左　なんだ、この順禮は。おつな繪を出して、みんなの
顏と無性に引比べるが、エヽ、聞えた、それがお主の尋ね
る親の繪姿か。
くに　イエ〱、さうではござりませぬ。この繪はナ。
　ト思ひ入れ。
昨日、矢立の杉とやら云ふ所で、拾うて參りました。此

やうな可愛らしいお方もあらうかと、大事に持つて居りますわいなア。

禪司　月小夜見や、よう兄貴に似て居るぢやないか。

月小　ほんに、よう若殿樣に、似申して居りまするわいなア。

トお國は思ひ入れ。

禪司　しかも、紋は鈲菊が附いて居るやつよ。

トお國、こなしあつて禪司坊が側へ寄り

くに　モシ、あなたが今仰つしやりまするには、このお屋敷に御奉公人が、要るやうに仰しやりましたが、私しがやうな不束な在所者でも、御奉公がなりませうかな。

禪司　ならなくてどうするものか。てまへさへ奉公する氣なら、此方はモウ直ぐに相談が出來るが、その代り給金はないによ。

くに　左樣なら、どうぞお前さん、よいやうに、お願ひなされて下さんせいなア。

禪司　そんなら、給金なしでもよいか。

くに　お願ひ申しまするわいなア。

月小　サイナア、わたしも段々の話しを聞いて、いとしい事ぢやと思うては居れどな、人の居り極めは、鬼王どのに相談せねば、わたくしにもならず。

禪司　そんなら、どうぞ鬼王に相談して

月小　どうなと致しませうが、折惡い若殿樣のお供に參りましたが、もうお歸りでありさうなものぢやわいなア。

禪司　それ〳〵、もう歸られさうなものだ。

ト向うを見て

イヤア、向うから、合點のゆかぬ者が、大勢來るわえ。

皆々　ドレ〳〵。

ト見て

彼奴等は只者ぢやアないわえ。

月小　慥かに先のは、虎さんぢやわいなア。

禪司　その虎と云ふは、兄貴のなめ者ぢやないかえ。

月小　コレイナア、お聲が高うござりますわいなア。御老母樣のお耳に入りましては、惡うござりますわいなア。

禪司　そんならおれは、この順禮の奉公人を、阿母へ引合せてやらう。

月小　さうなされて下されませ。サア〳〵、こなさんも、あなたと御一緒に奥へ行つて、知れぬ事があるなら、ようお聞き申したがよいぞえ。

くに　ハイ〳〵。畏まりました。

禪司　サア、茯苓さま。
茯苓　禪司坊どの。
禪司　お娘もおぢや。
ト唄になり、禪司、茯苓、お國を伴ひ、奥へ入る。小左衛門、八兵衛、權兵衛も一緒に奥へ入る。月小夜一人殘る。
月小　ヤレ〱、これでマア安堵したわいの。
ト向うを見て
ヤレ〱、なんぢやゝら、オゝ、摘草しながらござんすさうなわいの。この間に爰を片付けて。
ト月小夜そこらを片付ける。出の唄になり、向うより大磯の虎、襠裲衣裳、駒下駄にて出て來る。小蝶、波路、千鳥の模様の對の禿の形にて、摘草を持ち、付いて出る。後より化粧坂の少將、同じく襠裲衣裳、駒下駄にて出て來る。後より揚羽、千鳥、小蝶の模様對の形にて、摘草を持ち、付いて出る。遣り手、若い者、附いて出る。いづれも摘草をしながら花道にとまり
小蝶　浪路、見やいの。廓とは違うて、嫁菜やつばながたんとあつて、祐さんのお屋敷は、面白いぢやないかいなう。
波路　早う太夫さんに付いて來て、このお屋敷に居たいものぢやわいなう。
虎　ほんに、可愛らしい事、よう云うてたもつたの。この虎とても同じ事、いつか〱と徒らに、過ぐる月日を數ふれば、ほんに待ち久しう思ふわいの。
揚羽　小蝶、聞いたかい。もう祐さんのお屋敷ぢやさうなわいの。
千鳥　そんなら、箱王さんも、來て居やんすであらうな。
少將　コレイナウ、箱王さんの事云うては惡いと云うたのに、また云うてかいの。
虎　ソレイナア、わたしか祐さんに逢うて、樣子を聞くまでは、箱王さんの噂は、せぬがよいわいなア。
禿四　そりや、なぜにえ。
少將　アレ、又いの。虎さん、もしも箱王さんのお身の上が、人の噂に違ひがなくば、なんとせうぞいなア。
ト思ひ入れ。
虎　ハテマア、なんぢやあらうと、わたしに任せて、少將さん。
少將　そんなら虎さん。
兩人　子供、來や。

禿四　アイ〱。

ト虎、先に皆々舞臺へ來る。月小夜、方々片付けて居る。虎、門口より内を窺ひ

虎　月小夜さん。

ト月小夜、見て

月小　これはお珍らしい虎さん、少將さん、お揃ひなさんして、ようお出でなさんしたなア。

虎　祐さんは内にかえ。

月小　イエ〱、今日は御年始にお出で遊ばしたが、もうお歸りでござんせう。マア〱、此方へお入りなさんせいなア。

虎　誰れも遠慮はないかえ。

ト皆々内へ入る。

月小　ようお出でなさんしたな。

ト煙草盆を出さうとして、餘り汚きゆゑ氣の毒なることなし。

あちらのお煙草盆を。

ト行かうとするを

虎　それでも大事ないわいなア。

月小　それぢやと云うて、此やうな物を。

ト氣の毒さうに出す。

少將　必らず世話して下さんすなえ。

月小　アイ〱、何もかもお世話はせねど、まだ餘寒は強し、さぞ寒かつたでござんせう。せめての御馳走に、炬燵をして上げうわいなア。

ト土の缺け火鉢を出さうとして、若い者遣り手の前へ氣兼ねして

ほんに、今日は生憎御殿のお掃除で、若殿樣のお手道具も、何もかもみんな片付けて置いて、ある物に不自由せにやならぬわいなう。

ト獨り小言を云ひ〱、火消壺より消炭を取出し

今にお手あぶりを持つて來て上げる程に、マア〱、あたつてお出でなさんせえ。

虎　アイ〱、どうなと氣儘にする程に、必らず構うて下さんすな。

少將　お前も爰へござんして、一服上がれいなア。

ト月小夜へ吸ひつけて出す。

月小　どうなとお前方の氣儘にして、ゆるりと遊んでお出でなさんせえ……ほんに、こなさん方は、退屈でござんせう。お次へ行て、休息してござんせいなア。

若者　ハイ〳〵、左樣ならお次へ參つても、大事ござりませぬか。
月小　遠慮なしに、ゆるりと遊んでござんせ。
遣若　ハイ〳〵。
遣手　太夫さん、用があるならお呼びなさんせえ。
ト遣り手若い者、奥へ入る。月小夜、縛り絡げたる櫓を持つて來て
月小　先刻にから、炬燵をして上げたけれど、此やうな櫓ゆゑ、あの衆へ遠慮して、炬燵を見合せて居たわいなア。
ト蒲團を敷き
サア〳〵、お當りなさんせえ。
虎少　アイ〳〵、構うて下さんすな。
ト皆々炬燵の側へ寄る。此うち禿四人は下の方にて鞠を突いて居る。
月小　ほんにマア、お二人さんえ。舊年はようお心にお掛けなさんして、わたしらまでへ都度々々の御歳暮。春は春とて、お年玉やら何やかや、お心遣ひの事ばかり。此方からはろく〳〵に、お禮のお文さへ上げませぬ。さぞ義理知らずとも思うてお出でなさんせうが、大殿樣には那須野へ御出立。折惡う御老母樣の御眼病。何もかもわたしが手一つ。その中へ箱王さまのお身の上。
ト云はうとして少將へ思ひ入れ。
虎　サア、變つた噂を聞いたゆゑ、閻魔參りを托けて、少將さんと連れ立つて、わざ〳〵樣子を聞きに來たのぢやわいなア。
少將　月小夜さん、どう云ふ譯で箱王さんは、下山なさんしたか。お前は樣子を知つてゞござんせうな。
月小　サイナア。詳しい事は知らねども、下山をなされたその後に、人殺しがあつて箱王さまにも、そのお疑ひがかゝつたと云ふ事でござんすが、大切なお願ひのある箱王さま、よもや其やうな事はあるまいけれど、世間の噂が強いゆゑ、案じらるゝわいなア。
少將　そんなら箱王さんは下山なさんして、內方へ來てお出でなさんすかえ。
月小　イエ〳〵、箱王さまは、出家をお嫌ひ遊ばすゆゑ、御老母樣の御勘當。又その中に、下山の樣子お聞き遊ばしたら、猶更お氣もむすぼれて、お目の障りにならうかと、お隱し申して居りまするわいなア。
虎　ほんに又、御老母さんも、あんまりぢやわいなア。誰れが坊さんになる事を、好くものがあらうぞいなア。

それを勘當するとは、無理な親御さんではないかいなア。

少將　ソレイナア、なんぼ云ひよいものぢやてゝ、あんまりでござんす。あの突きつめた箱王さん、もしもの事がある時は、悔んだとて泣いたとて、後へは返らぬ事ぢやわいなア。

虎　それ〳〵、日頃短氣な箱王さん、もしもの事があつたら、月小夜さん。

虎少　どうせうぞいなア。

ト兩方より月小夜に取りつき思ひ入れ。

月小　其やうにお前方に云はれると、わたしも思ひ過しがしられて。

ト思ひ入れ。

三人　どうしたものであらうなア。

ト三人、屈托の思ひ入れ。通り神樂になり、向うより祐成、掛け烏帽子、素袍の下を括り、中啓を持ち出て來る。鬼王新左衞門、高股立ち、風呂敷包みに扇子箱を包み、提げて出て來る。後より百足屋六兵衞、羽織、町人の形にて付いて出て來る。

祐成　花の下に歸らん事を忘るゝは、美景に依つてなり。樽の前に駒を進むと、曾我の十郎祐成、屠蘇の機嫌のほろほろと、東風の追ひ風慕はしく、見渡す木々の春景色。鬼王、どうも云へぬではないか。

新左　イヤモウ、拙者めは、春景色やら、ぶつ景色やら、思ひがけない若殿樣のお供の役目。身にも應ぜぬ御奉公と、幾度辭退いたしても、お主の仰せ詮方なく、曾我の傳つき鬼王と、立派な名をば付けましたが、ほんの出來合ひ、新參新規の新左衞門、鬼ぢやござらぬ臆病者。何れも樣のお叱りと、おづ〳〵これまで出ましてござりまする。

六兵　これは鬼王さま、よい所でお目にかゝりました。只今お屋敷へ參るところでござりました。

新左　成る程、よい所でござつたが、手前事はこれからお屋敷へ歸つても、又いろ〳〵御用があつて、おてまへに談じて居らるればよいが。

ト六兵衞を歸したがる思ひ入れ。

祐成　コリヤ鬼王、あの者は折り〳〵屋敷などで見かける者ぢやが、ありや何者ぢや。

新左　ヘイ、あの者はお屋敷へ、御用金の口入れを致しまする、百足屋六兵衞と申す者でござりまする。

祐成　フウ、用金を口入れ致す者とな。

新左　左樣でござりまする。口入ればかりでもござらず、小道具などの世話を渡世に致しまするゆゑ、私し方へは心安う、毎日出入り仕りまする。

祐成　それは一段の事ぢや。この間北條どので見せられた井戸の茶碗、この祐成も、あのやうなを求めたいものぢやが…　マア〳〵、鬼王、屋敷へ召連れい〳〵。

新左　ハイ〳〵、畏まりました。

六兵　イヤ、北條さまと申しますれば、この間の掛け地は、どうでござりまするかな。

新左　成る程〳〵、その掛合ひも爰は途中。マア〳〵、お屋敷へ參るがいゝ。

六兵　左樣なら、直ぐにお供いたして參りませう。

祐成　それがよい〳〵。

ト祐成先へ立ち、舞臺へ來る。

新左　若殿樣のお歸り。

トこれにて皆々出迎ふ。祐成、何心なく內へ入る。

禿皆　祐さん、お歸りなさんしたかえ。

虎少　お前の歸りを待つて居たわいなア。

祐成　これは思ひもよらぬ虎少將。この祐成をお待ち請けとは有り難いぢや。

ト云ひながら上の方へ坐る。虎、少將、祐成が左右へ居並ぶ。禿四人、兩方へ分つて坐る。六兵衞、下の方、月小夜が側へ坐る。

新左　月小夜、虎どのや少將どのゝお出での事を、御老母は御存じか。

月小　なんのお知らせ申してよいものかいなア。

新左　それがよい〳〵。隨分知れぬやうに氣を付けるがよい。

祐成　シタガ、母者人は御眼病で、側に誰れが居つても、口さへきかねば極樂ぢやて。

虎少　そんなら、爰に居てもだんないかえ。

祐成　大事ないとも〳〵。マア〳〵、お主達も、ゆるりとして歸るがよい。

ト火鉢を引寄せ、祐成、氣の毒なる思ひ入れにて

これはどうぢや。此やうなむさくろしい物を、爰へ出すと云ふやうな事があるものか。月小夜、白銀の手あぶりを、持つておぢや〳〵。

月小　ハイ〳〵。

ト思ひ入れして

あのお手ぶりは、御老母樣のお側にござりますわいなア。

祐成　それは困つたものぢやわいの。これへ取寄せたら、この祐成の事を、お尋ねなさらうし……マア〳〵、これで料簡せう〳〵。

ト土の缺け火鉢を引寄せる。少將、鼻紙を出して火を起す。祐成は其うち虎と痴話をして居る。

六兵　イヤ、祐成さまへ申し上げまする。この間差上げました唐繪の掛け物、先方より度々催促いたしまするが、北條さまより、未だ御沙汰はござりませぬか。

新左　成る程、早速若殿樣へは申し上げて置きましたれど、この節御年始や何やかやと、きつうお取込みゆゑ、未だ北條さまへ御持參されぬて。

六兵　それでは難儀でござりますわえ。お前樣の仰しやりまするには、北條さまで兼ね〴〵唐繪のお掛け物を御詮議なさるとの事。此方の若殿樣、北條さまのお氣に入りの品ゆゑ、相應な物があるなら、お目に掛けたがよい。お氣にさへ入れば値段は構はぬと、急に埒の明く事のやうに仰しやりましたから、早速道具屋仲間を詮議いたして、やう〳〵中通りの鹿島屋から、ちよつと借りて參りましたところが、十日の餘にもなりまするに、其まゝこなたにござりましては、鹿島屋へ申し譯がござりませぬ。

新左　成る程、さうでござらう。この鬼王もこの間中から、祐成さまへ度々御催促申したれども、お歴々と云ふものは悠長なもので、とんとお心が長いぢや。今日は是非北條さまへ御持參なさるやうに、申し上げるであらう程に、もう四五日相待つがよい。

六兵　ヘイ、左樣ではござりまするが、大切な代物でござりますれば、先方へ申し譯に、とんと困りまするて。

新左　さうでござらう〳〵。此方でも隨分大切に、コレコレ。

ト掛け物を取つて來り

この通り大切に致して置く程に、先方へよいやうに云うて置いておくりやれ。

六兵　左樣なら、今日はどうぞ若殿樣へお願ひなされて、北條さまへ御持參なさるゝやうに、お願ひ申しまする。

新左　イヤモウ、今日は是非〳〵御持參なさるゝやうに、申し上ぐるでござらう。女房ども、この掛け地を大切にしまうて置きや。

月小　アイ〳〵。

祐成　ト掛け物の箱をしまはうとする。祐成、見て
月小　ハイ、これは北條さまへお約束遊ばした
　ト云はうとする。
新左　イヤ〳〵、これは、なんでござりまする。
　ト六兵衛の方へ心遣ひの思ひ入れあつて
先達て御前樣が仰せつけられました、唐繪の掛け物でご
ざりまする。今日は是非〳〵北條さまへ、御持參下され
まするやうに、お願ひ申し上げまする。
　ト祐成、合點のゆかぬ思ひ入れにて
祐成　鬼王、そりや何を申すのぢや。この祐成、とんと合
點のゆかぬ。何を北條さまへ持參いたすのぢや。
　ト新左衛門、これを六兵衛へ聞かせまいと、いろ〳〵
心遣ひの思ひ入れ。六兵衛は餘念なく月小夜に見惚れ
て居る。
新左　これはどう致したものでござりまする。北條さまよ
りお賴みぢやと御意遊ばして、私しへ仰せつけられたで
ござりませぬか。
　ト祐成へ、いろ〳〵呑み込ませる。
祐成　いつ其やうな事を云うたぞいの。この祐成、左樣な
覺えはとんとない程に、間違ひではないか。其方を調べ
て見るがよい〳〵。
新左　ハテ、悪いお覺えでござりまする。
　トいろ〳〵仕方で呑み込ませ
北條さまより、唐繪の掛け地を賴まれたと仰せつけられ
ましたゆゑ、早速あれなる六兵衛に申しつけて、ナ、ソ
レ、御前の御意でござりまするから、急に詮議いたされ
ました、極彩色の雛鶴、しかも趙子昂が筆でござります
るゆゑ、ナ、ソレ、御前が仰せつけられたではござりま
せぬか。
　ト呑み込ませる。祐成、矢張り心付かず
祐成　ハテ、この祐成、とんと覺えぬ事ぢやわいの。
　ト新左衛門は六兵衛に聞かせまいと焦れる思ひ入れ。
　月小夜、心遣ひの思ひ入れ。
少將　ほんに、祐さんの物忘れも、久しいものぢやわいな
ア。
虎　何に浮かれて其やうに、忘れさんすぞいな。
小蝶　祐さん、じやら〳〵せずと、その雛鶴とやらを
禿皆　早う見せさんせいなア。
祐成　ドレ〳〵、とんと覺えぬ事ながら。

ト祐成、箱を明け、掛け地を開き見る。此うち新左衞門、六兵衞へ聞かせまいとして、いろ／＼心遣ひあつて、度々六兵衞が方を見る。六兵衞は月小夜に見惚れて、そろ／＼月小夜の方へ寄つて思ひ入れするうちに、新左衞門と顔見合せ、恟りして飛び退き、知らぬ顔をして居る。この事度々あるべし。

ても、よう畫いた、鬼王、こりや正眞の趙子昂と見えるわえ。

六兵　北條さまへ御持參なされましたら、直ぐに氣に入りませうな。

祐成　フウ、北條どのでも、これを求めようと云はれるのか。

六兵　エ。

ト新左衞門が方を見て、合點のゆかぬ思ひ入れ。新左衞門こなしあつて咳を咳きながら

新左　コレ、月小夜、どう致したものぢや。虎どのや少將どのが、折角お出でなされたに、何も御馳走がない。珍らしくはなけれど春の初めぢや。お杯でも出さぬかい。

祐成　イカサマ、廓の酒盛りと違うて、角の取れぬ重箱肴、お定まりの數の子座禪豆で、虎少將を相手に盛りかけるも一興にあらうか。

ト此うち新左衞門、掛け物を取つてしまふ。

月小　ほんに今日は、お掃除で忙がしう、とんとお杯に氣が付かなんだわいの。

祐成　そこが下戸のよい所ぢや。

月小　ドレ／＼、奧へ行て、お吸物のお支度にかゝりませう。

六兵　イヤ、月小夜さまの御鹽梅なら、さぞ美味からう。私しもお手傳ひ申して、お相伴をせにやアならぬわえ。

少將　月小夜さま、必らず構うて下さんすな。

月小　アイ／＼、何も御馳走申す事ぢやござんせぬゆゑ、ゆるりとお遊びなさんせえ。

新左　早うお杯を出さぬかいの。

虎　ほんに、子供らに云ひ付けたがよいわいなア。

月小　それ／＼、わたしは忙がしい。ちつとのうち、子供衆を貸して下さんせえ。

六兵　ドリヤ、私しも御一緒に參つて、お手傳ひ申さう。鬼王さま、今日は是非々々、北條さまへ御持參なされるやうに、お頼み申しまする。

新左　氣遣ひおしやるな。月小夜、御失念のないやうに、

この掛け地を、若殿樣のお部屋へしまうて置きや。

月小　アイ〳〵。

ト取つて

そんならお二人さん、子供衆を貸して下さんせえ。

虎少　早う行きやいの。

禿皆　アイ〳〵〳〵。

ト長く返事をする。

祐成　ても、長い返事の。

月小　ドリヤ、お杯を取つて來ようか。

ト唄になり、月小夜、掛け物の箱を抱へ、奥へ入る。

これに續いて六兵衞、禿四人、奥へ入る。

虎　少將さん、見やしやんせ。月小夜さまは器量がよう
て愛くるしうて、どこに一つ云ひ分のない、頼もしさう
なお方ぢやないかいなア。

少將　どうやら女夫仲も、睦まじさうに見えるぢやないか
いなア。

祐成　イヤモウ、睦しい段か、あの月小夜めは、大抵亭主
思ひな奴ではないいて。

少將　さうでござんせう。ほんに鬼王さんは

虎　あやかり者ぢやわいなア。

新左　イヤモウ、睦ましいのなんと申すは、その當座の事。
只今では山の神に、倦じ果てゝ居りまする。ハヽヽヽ
ハヽ。

祐成　また嘘吐き居るな。あのやうに大事にする月小夜、
この祐成なぞは、どのやうな奴にでも、あれ程大事にさ
れると、大抵嬉しい事ぢやないてや。

虎　それぢやに依つて、滅多に油斷はならぬわいなア。

トつんとする。

少將　ほんにマア、一つ兄弟でありながら、祐さまは女子
にかけては手のあるお方。それに引換へ胴慾なは箱王さ
ま。此やうにも又、似ぬ御兄弟があるものかいなア。

祐成　そこが兄弟他人の始まりぢや。ハヽヽヽ。この杯
はきつう引締めるわえ。今日はモウ、和田どのや北條ど
ので、鹽の辛い雜煮を出されて、咽喉が乾いてならん。
とんと下戸の鹽梅と云ふものは、いけるものではない。

ト手を打つて

茶を持てよ。

ト奥にて

くに　ハイ〳〵、畏まりました。

ト合ひ方になり、お國、以前の娘の形にて、茶臺に茶

碗を載せて持つて出る。祐成、これを見て

祐成　ハテ、よいお茶ぢやなア。

ト茶碗を取つて一口呑む。お國は祐成が顏をヂツと見て居る。

イヤ、どうも云へぬよい加減ぢや。しかも初昔さうなわいの。

トお國、恥かしき思ひ入れ。

どうも云へぬ。も一つたも。

トお國また茶を汲んで來る。祐成、以前の通り茶を呑んで下に置く。これよりお國。幾度も／＼無性に茶を酌んで來る。此うち向うより、足輕一人出て來り

足輕　お頼み申しまする。鬼王さまにお目にかゝりましたうござりまする。

ト新左衛門、立つて

新左　何方よりのお使ひでござる。

足輕　扇ケ谷邊より、參りましてござりまする。

ト一通を出す。新左衛門見て

新左　成る程／＼。

ト受取つて思ひ入れ。

此方より御返事申すでござらう。

ト足輕は向うへ入る。新左衛門、下の方へ坐り、一通を開き見てキツと思ひ入れ。此うちお國、無性に幾度も／＼茶を酌んで來る。新左衛門、呆れてお國に眼を附けて居る。

祐成　又お茶か。ハテ、よく呑ませる奴の。

ト虎、ムツとして祐成が側へ寄る。これにて祐成、知らぬ顏して居る。

虎　なんぢやゝらソワ／＼と、祐さん、茶もよい加減にしたがよいわいなア。

祐成　サア、おれは大概にする氣ぢやが。

トもじ／＼して居る所へ、又お國、茶を酌んで來て

くに　ハイ、お茶上がりませ。

ト祐成、思はず取つて一口呑み、虎が方を見て

祐成　イヤ／＼、もう呑むまい。其方へ持つて行きや／＼。

ト呑みさしを下に置く。お國、この茶碗を取つて中を見て、嬉しさうに、いそ／＼下座へ持つて入る。

虎　ほんに今時の娘御さんには、油斷がならぬわいなア。

ト腹の立つ思ひ入れ。

祐成　さればサ、どうやら雨氣づいたが……ア、、降らねばよいが。

虎　ト手持ちなく空を眺めて居る。何を云はしやんすぞいなア。これ程日が當つて居るわいなア。

祐成　慥か今日は、王子のお嫁入りの筈だて。

虎　默らんせ。

祐成　オッと默つた。

ト お國、下座より出て、懷中より以前の錦繪を出し、祐成と見比べて、いろ〳〵嬉しき思ひ入れにて、側へ寄らうとして、虎が腹を立つて居るゆゑ、遠慮して後に見惚れて居る。新左衛門、始終お國に目を附けて居る。

少將　虎さん、もうよいわいなア。

虎　イエ〳〵、此やうな事を捨てゝ置くと、癖になるわいなア。

祐成　それ〳〵、隨分よく云ひ付けたがよい。摘み食ひと云ふものは癖になるて。

虎　知らぬわいなア。

祐成　ハテ、さう腹を立てる事はないわい。お主はなぜそんなに野暮だ。

虎　アイ、わたしやア野暮サ。野暮なわたしぢやに依つて、惡性なお前に心中立てゝ居るわいなア。

少將　ほんに祐さん、あんまりぢやぞえ。

祐成　あんまりなら、あやまらうわサ。

少將　アレ、虎さん、祐さんがあやまつたわいなア。

虎　イエ〳〵、もうあやまつてもらはずと、ようござんすわいなア。

祐成　ハテ、お主も大抵堪忍しないか。しこじれると仕憎いものだによ……アレ〳〵、笑ひたい所を笑はずに堪えて居るやつよ。

ト こちらへ向ける。

虎　エ、離さんせいなア。

ト 云ひながら祐成が方へ寄る。お國、思ひ入れ。

祐成　もうよいわいの。おれがあやまつた程に、こちら向きや。

虎　そんならお前、ほんまにあやまらさんしたか。

祐成　大誓文。

少將　虎さん、わしが證人ぢやわいなア。

虎　そんなら、もう外の女中さんに、じやら〳〵さんすと聞かぬぞえ。

祐成　もう、どんな女が來ても、振向いても見る事ぢやな

い。
ト手を取る。

虎　ほんに惡性な。憎らしい。
ト思ひ入れ。

祐成　エヽ、可愛らしい。
ト引寄せる。

虎　知らぬわいなア。
ト抱きつく。祐成、あちら向く。お國、ムッとして、
この中へ入り

くに　お茶上がりませぬかえ。

虎　エヽ、悸りしたわいなア。
トむつとする。祐成、モヂ/\して

祐成　こりやアモウ爰に居たら、どんな目に遭はうも知れない。萬歳樂々々々。
トうろ/\として居る。

少將　それ/\、祐さん、どうぞ仕樣はないかいなア。

祐成　いつそ奧の離れ座敷で、酒にせう/\。

少將　それがよいわいなア。

祐成　とは云ふものゝ、惜しいものでもあるし。
トお國へ心を殘し思ひ入れ。虎ムッとして

虎　祐さん、ござんせいなア。
ト無性に祐成を引ッ張る。

くに　そりや又、あんまり。
ト寄らうとする。祐成隔てる。唄になり、祐成虎に引ッ張られながら、お國に心を殘し下座へ入る。祐成もこれに續いて入る。お國、この後を追うて行かうとする。

新左　待て。

くに　ハイ、わたしかえ。
ト悸りする。

新左　如何にも。

くに　わたしやちよつと。
ト奧へ行かうとする。

新左　ハテ、用がある。待て。

くに　ハイ。
トうぢ/\として
なんの御用でござりますえ。

新左　其方は何者なれば、若殿樣へ馴れ/\しきお茶の給仕。合點のゆかぬ立振舞ひ。何方より參つた。

くに　ハイ、私しは今日このお屋敷へ、御奉公に參りまし

た、新參者でござりますわいなア。
新左　當お館へ御奉公に參りしとは、そりや猶以て合點が
ゆかぬわえ。
　ト思ひ入れ。後へ月小夜、出かゝり居て
月小　こちの人、合點がゆきますまい。その子は譯がある
ゆゑ、御老母樣へも申し上げて、マア、奉公人のやうに
置きましたわいなア。
新左　ヤア、して、その譯は。
月小　サア、聞かやしやんせ。世にも哀れなはこの子の身
の上。見やしやんせ。年端も行かいで鎌倉三界、見もせ
ぬ親御の行くへを尋ねるとの事、御老母樣にも不便がつ
て、お前に相談した上で、置いてやらうと仰しやつたれ
ば、もう御奉公する氣になつて、よう勸めてぢやわいな
ア。
新左　フウ。見もせぬ親の行くへを尋ねるとは、空な事ぢ
やが、して、其方はいづくの生れぢや、
くに　ハイ、伊豆の熱海でござりまする。
新左　ナニ、伊豆の熱海ぢや。
くに　左樣でござりますわいなア。
　ト新左衞門、合點のゆかぬ思ひ入れにて、指を折り

新左　其方は幾つぢや。
くに　ハイ、十六になりますわいなア。
新左　ナニ、十六ぢや。
　ト思ひ入れあつて
して、その親を尋ねるに、なんぞ名乘り合ふべき、慥か
な證據でもあるか。
月小　ある段かいな。コレ／＼、先刻わしに見せやつた、
小柄はそこに持つて居やるか。
くに　ハイ、爰に大事に持つて居りますわいなア。
　ト守り袋より、以前の小柄を出して見せる。
新左　ドレ／＼。
　ト取つて見て、新左衞門ギヨツとして
ヤ、、この小柄は。
　トお國をキッと見る。
月小　合點のゆかぬ鬼王さまのその血相。お前、その小柄
に、心覺えでもござんすか。
新左　如何にも、心覺えのこの小柄。コリヤヤイ、其方が
母親の名は、お波と云うたであらうがな。
くに　よう御存じでござりまするな。
新左　コリヤヤイ、其方が尋ぬる親は、おれぢやわやい。

くに　エヽ。
ト驚ろく。
新左　マア／＼、爰へ來い／＼。
ト嬉しき思ひ入れ。
くに　そんなら前さんが。
ト呆氣に取られ、新左衛門を見て居る。月小夜、合點のゆかぬ思ひ入れにて、兩人に目を附けてゐる。
新左　其方が親ぢやわやい。
くに　そんなら、わたしが尋ぬる父さんは、お前でござんすか。
新左　おれぢや／＼。
トお國を引寄せ、いろ／＼嬉しき思ひ入れ。
くに　父さん、お懷かしうございましたわいなア／＼。
ト取りつき思ひ入れ。
月小　思ひがけないこの場の樣子。そんならこの子は、眞實お前の子でござんすか。
新左　さればよ、其方と云ふ女房を持たぬ前の事、思へば若氣のわざくれに、熱海の湯女に馴れ染めて、御主人方のお目を忍んで通ふうち、縁でかな懷胎との物語り。末末は婦妻とも思うて暮らす其うちに、親旦那河津さまの御落命。その騷動の砌りゆゑ、懷胎のその女を離縁なし、安々產み落さばその子に渡せと、この小柄を遣はし置いたてな。
くに　さう仰しやれば、母さんの話しに聞いた通り。不思議にお目にかゝると云ふは、年月願ひし甲斐あつて
新左　この高彫りは朝顏の
くに　朝な夕なも忘れぬ父さん。
月小　戀ひ慕うたも十六年。
新左　親は無けれど子は育つ。
くに　お懷かしうござんした。思ひがけない父さんに巡り逢ひ、嬉しい中にも思ひ出すは、わたしが母さん。朝夕お前を苦勞にして、案じてばかり居やしやんした……オオ、それ／＼、わたしがこの臍の緒の書付けは、母さんの手蹟。せめての事に母さんに逢はしやんしたと思うてこれを見て下さんせいなア。
ト守り袋の書付けを出して見せる。
新左　如何にも覺えあるお波が手蹟。「治承元年三月五日、酉の年酉の月酉の日酉の刻に、誕生の娘國」して、母は何と致した。
くに　サア、久しう痰を患らうてな。

ト思ひ入れ。
新左　空しくなつたか。
くに　アイ。
　ト泣く。
新左　死にをつたか。
　ト愁ひを含みながら、月小夜に心を掛けて堪えるこなし。月小夜、こなしあつて
月小　鬼王さま、お前は嬉しうござんせうの。
新左　サア、餘り嬉しうて、嬉し涙をこぼしたわえ。ハヽヽヽヽ。
　ト笑ひに紛らし、涙を隱す。
月小　さうでござんせう。わたしも思ひがけない娘を儲けて、此やうな嬉しい事はござんせぬわいなア。
新左　そんなら其方も娘と思うて、世話燒いてくれる氣か。
月小　世話をせいでよいものかいな。身腹痛めず此やうなよい娘を持つと云ふは、わしや仕合せ者ぢやわいなア。コレ、お國や、今からわしを眞實の、母さんぢやと思うて、孝行してたもや。
くに　アイ〳〵、わたしをも、ほんのお前の子ぢやと思うて、可愛がつて下さんせえ。

月小　可愛がらいでわいの……ほんに、髮もよう美しう結うたの。
くに　イエモウ、其まゝのつくね髮、いつそ癖が付いてな。
月小　さうであらうわいの。明日はわしがお屋敷風に、結うてやりませう。
くに　そんならわたしやいつまでも、爰に置いてアノ……アヽ。
　ト奥へ思ひ入れして
　いつまでも爰へ置いて下さんすかえ。
　ト嬉しき思ひ入れ。
新左　氣遣ひ致すな。この鬼王が血を分けた一人の娘。もうどつこへもやる事ではない。隨分あの月小夜を、眞實の母と思うて孝行せいよ。
くに　アイ〳〵。
　ト云ふうち、新左衞門、書付けを取上げ
新左　誠に思へば十六年、治承元年三月五日、酉の年酉の月
　ト段々讀み終り、思はずフツと見て
　ハテ、思ひがけない誕生ぢやなア。
　トお國が顔を見詰めて思ひ入れ。月小夜これを見て

月小　お前もマア、この子の事を御老母様へも申し上げて、改めて皆様へも、お目見得させたがよいわいなア。そんならアノ、若殿様へも、又お目見得をするのかえ。

ト嬉しき思ひ入れ。新左衞門これを見てホロリとして

新左　十餘年以前に別れし娘。

ト書付けを見詰め

思ひがけないこの年月。

ト月小夜、合點のゆかぬ思ひ入れにて

月小　その書付けがどうしたえ。

ト寄らうとする。立廻りにて、ちやつと懷中して

新左　娘、來い。

ト唄になり。お國が手を引いて下座へ入る。

月小　ほんにマア、思ひがけない娘を持つて、嬉しい中にも合點のゆかぬは、鬼王どのが、いつにない今の樣子。

ト思ひ入れあつて

こりや聞えたわいの。先達て賴朝公より差上げよとある、逆澤瀉の鎧は、百五十兩の質物。その鎧を差上げねば、祐信さまのお身の上と、この頃中から心を痛めて居やしやしやんしたが、もしあの子を、

ト思ひ入れ。

それにしても、あの子の誕生を見やしやんして。

ト考へ

どうも合點がゆかぬわいの。

ト思ひ入れ。後へ六兵衞、出かゝり居て、いろ〳〵こなしあつて、トヾ月小夜に抱きつく。

エヽ、誰れぢやぞいなア。放さんせいなア。エヽ、しつこい。誰れぢや。

ト手を抓る。

六兵　オイタヽヽヽヽ。

ト手を放す。月小夜、ズッと立つて

月小　誰れぢやと思うたら六兵衞どのかいなう。アタ不作法な。何するのぢやぞいなア。

六兵　何もしはせぬのサ。月小夜さん、よく抓りなすつたな。

ト撫つて

痣になるやつサ。

月小　痣にならいでわいの。しつかうてんごうさんすと、其まゝにしては置かぬぞえ。

六兵　さう又生眞面目になつて、きめなさる位なら、頭か

らわしに、いろ〳〵な用を頼みなさらぬがようござりやすわい。

月小　何を頼んだぞいなア。

六兵　何をとは、餘所々々しい。コレ、今まで三文も出さずに、何が欲しい、かにが欲しいと、ざらにお頼みなさるからは承知の上と思つて、冗談もしたものサ。ソシ、月小夜さん、お前が爰のお腰元とか、お茶の間とか云ふ事なら、座興と云つてもしませうが、鬼王さまと云ふ、立派な御亭主さまのある事を、頭から斯う云ひ出すからは、四つになる合點サ。

月小　そんなら、こなさんは眞實に。

六兵　惚れました。

月小　ヤ。

　トむつとする。

六兵　惚れないで斯う、立入つて世話がなるものか。爰のお屋敷の事は、何もかもわしが方から仕送つて居るよ

　ト月小夜、思ひ入れ。

昨日も鬼王さまの云はつしやるには、明日は生きても死んでも百五十兩なけりやならぬ程に、どこぞで借り出してくれぬか。どのやうな事をしてもよい程に、頼むと涙をこぼして云はつしやる。こいつはよい所だと思つて、大磯の女衒、手倉屋源右衛門と云ふ者に、わしが金百五十兩預けて、お前を書き入れ、證文まで書いて、この御門前の茶屋に待せて置きました。今にも鬼王さまが手詰めになつて、金欲しいと云はつしやれば、直ぐに御門前まで呼びにやれば、何時でも來るやうにして置きました。その金さへ鬼王さまに、貸しつければ、もう此方の物だ。

月小　フウ、そんなら鬼王どのが、こなさんに金の世話を頼ましやんしたとな。

六兵　サア、お前を書入れさせて貸すつもりサ。お前の體さへ屋敷を引出せば、わしが圍つて、それからお前の自由だ。親御があるなら此方へ引取らうわサ。そしてマア、斯うしにたれた形はさせては置かないよ。先づちよつとしたところが、今日は屋根船で綾瀬から武藏屋、オッと合點だ。サア行きやれ。明日は碑文谷から大佛前、オッと合點だ。サア行きやれ。ほんに葺屋町へは宗十郎が出て、路考や半四郎を相手に、脇で眞似も出來ぬ濡れ事。何を措いても見に行きやれ。

　ト云はうとして

イヤ〳〵、宗十郎。こればかりは見せにやられぬわえ。その外の事は、なんでもお前の氣儘にさせるわな。

月小　そんなら、なんと云はしやんす。わしを書入れさせて、退引きならず鬼王どのと、わしが夫婦の仲を割くと云はしやんすか。

六兵　今日その手倉屋の源右衞門と云ふ奴に、金を預けて御門前の、茶屋に待たせて置きましたから、今にも鬼王さまが、金が無けりやならぬと云はつしやれば、直ぐに呼びにやりまするワ。なんとマア、色事の魂膽は、きついものでござりませうが。

月小　默りや。ほんにこなさんは怖い人ぢやわいの。其やうな人とは知らず、お出入りの町人衆のうちで、氣さくな人ぢやと思うて、心安う物も云うたれど、さう云ふ事を聞いては、モウ、お屋敷の出入りは、留めねばならぬわいの。

六兵　さう又お前が、わしに恥を搔かせて、出入りを留めると云はつしやれば、わしもこれから奥へ行つて、御老母樣を始め、こなさま達の引ツ張つてござる正月物も、わしが貸して置いたから、ふん剝いで赤ツ恥を搔かせにやアならない。

ト月小夜、ハツと思ひ入れ。

サア、斯う云へば物が無い。月小夜さん、わしがこのお屋敷へ、毎日々々、來るのは、お前の顔が見たいばつかり。先刻の掛け物も、小百兩が代物なれど、それを手放して預けて置くも、お前に足を付けたいばかりサ。これ程思つて居るものを、さうつれなくするは、あんまりだぞえ〳〵。

ト月小夜、思ひ直したる思ひ入れあつて

月小　ほんに、その頼もしいこなさんの志しは、なんの惡う思うて居やうぞいなア。主のない身なら、疾にわたしが方からどうなると云うて、仕やうもやうもあるけれど、何を云ふにも主のある身の上。ほんに儘にならぬが浮世ぢやとは、よう云うたものぢやわいなア。

六兵　イエ〳〵、儘になりやすの。お前がめりやすの文句を引出して、儘にならぬが浮世と云ひなさりやア、わしも又、義太夫の文句で云はにやアならない。勿體ない事だが、孕常盤にある通り、頼朝公の阿母樣が、女の操を破つて、淸盛どのゝ云ふ事を聞いたに依つて、今源氏の一流の御代となつたぢやござりませぬか。

小月　それはさうでもな。

ト うち/\する。

六兵　ハテ、常磐御前がよい手本サ。

ト方々見廻し、月小夜を押ッ轉ばす。

月小　滅相な。

ト振り放さうとするを、無理に手籠めにして乘りかゝる。後へ禪司坊出かゝり、これを見て六兵衛を引退ける。この振合ひに月小夜は逃げて下座へ入る。六兵衛あわて、禪司坊を月小夜と思ひ、上へ乘りかゝる。禪司坊、悔りして、懷中へ手をやり、しつかりと押へる。

禪司　ア、、泥坊だ/\。

ト聲を上げる。六兵衛、悔りして

六兵　おきやアがれ。

禪司　おらア又、金を盜まれると思つて、膽を潰したやつよ。

ト云ひながら、首に掛けたる以前の袋を出して見せる。

六兵　そりやアなんだ。

禪司　金だ。

六兵　よく嘘を吐く坊主だ。ほんの金がそれ程あつて堪るものか。

禪司　これがほんの金でなくて堪るものだ。

ト首より取つて袋を開け、金の色を六兵衛に見せる。

六兵　ほんに金だの。曾我の屋敷でぞく/\と、小判の顏を見ると云ふは、とんだ事だ。

禪司　とんだ事と云やア、おれは煤拂ひにかまけて、晝飯を忘れた。おれが食ふ事を忘れるとは、とんだ事だ。シタガ、奧は虎少將が來て、ごつたを返して居るから、節も今の事ぢやアあるまい。爰で一杯茶づるべい。

ト蓋明きの藥罐を探り見て

茶が少しぬる山だが。

ト下の方にある、飯櫃、膳椀、香の物の鉢を持つて來る。六兵衛は禪司坊の懷中へ目を付けて、方々見廻し、床の間に下ろしてある、神棚の延喜の小判を見附け、領いて思ひ入れ。禪司坊は茶漬を食ふとて、懷中の小判が邪魔になるゆゑ、懷中より出して脇へ置き、茶漬を掻ッ込む。

六兵　さう旨さうに、ざく/\と掻ッ込む所を見ては、羨やましくなつて來たわえ。

禪司　おれも一人ぢやア張合ひがない。アレ、あそこに膳も椀もあるから、取つて來たがよい/\。

六兵　ドレ、おれも一杯振舞つてもらひませう。

ト上の方へ行き、延喜小判をちやつと取る。

禪司　これサ、椀は此方だわな。

ト下の方を敎へる。六兵衞、何食はぬ顔にて、禪司が側へ膳を持つて並ぶ。

たま〳〵六兵衞どのに飯を振舞ふに、何もない……あある。あそこに相模寺から來た納豆があつた。

トうつかり金を忘れて、納豆箱を尋ねに下の方へ行く。此うち六兵衞、手ばしかく延喜小判と入れ替へる。禪司坊、納豆箱を持つて來る。ちやつと袋を元の所に置く。あわてゝ吹替へた金を膳の下へ入れる。禪司坊は袋を見付け、悯りして懷中する。六兵衞、何食はぬ顔にて

六兵　わしは納豆より、この香の物が旨さうだ。

ト一口食ひ

アヽ、いゝ味だ。月小夜さんが漬けなさつたさうで、旨い香の物だ。

ト此うち禪司坊、納豆箱の蓋を取り

禪司　こりやアいけない納豆だ。そして肝心な茄子が半分だ。どこへ出しても旦那に違ひはない。これから見れば、おらが寺の納豆は叮嚀だわえ。

トかさへ取り分け、六兵衞が方へ遣る。奧にて

茯苓　六兵衞どの〳〵。

ト呼ぶ。

六兵　オイ〳〵。

トあわて膳の下の金を取らうとする。禪司坊見て居るゆゑ、ソツと納豆箱の中へ入れる。又けはしく呼ぶゆゑ、オイ〳〵と云ひながら、詮方なく納豆箱を飯櫃の上へ載せ、禪司坊が氣付かぬやうに持ち立つ。

禪司　これサ、おらアまだ飯を食ふわな。今からお鉢を引かして堪るものか。その納豆箱も、爰へ置いてもらはう。

ト取りにかゝる。

六兵　滅相な。お寺様が納豆を食ふと云ふやうな、不埒な事があるものか。

禪司　ハテ、この男は氣が狂つたさうな。坊主が納豆を食はれないで詰まるものか。

トこれより兩人、飯櫃を爭ふ。又奧にて呼ぶゆゑ、詮方なく飯櫃を下の方の二重舞臺へ置き、捨ぜりふにて、その下へ納豆箱を隱し

六兵　エヽ、焦れつたい坊様だ。どうで爰には置かれない。わしと一緒に奧へござい。

禪司　ハテ、無理な男だ。おらアもつと食はにやアならないよ。

六兵　ハテ、おれと一緒に來いよ。

ト引立てる。

禪司　ハテ、迷惑な事ではあるぞ。

ト合ひ方にて六兵衞に引摺られ、不承々々に奥へ入る。下座より茯苓出て來り、兩人が取散らしたる膳椀を見付け

茯苓　エヽ、何奴が食ひ放しにして置き居つた。可哀さうに、月小夜どのゝ手一つであがかれるものを、ちつとは手助かりになつてやつたがよい。

ト膳を重ねて下の方へ持つて行く。そこらを片付ける拍子に、何心なく飯櫃を片付け、納豆箱を取上げ、重たきゆゑ合點のゆかぬこなしにて、蓋を明け、小判を見付け、惘りして

茯苓　ヒヤア、こりやアとんだ所に金が入れてあるねえ。誰れが爰へ置いたか。不用心な所へ入れて置いたものだ。こりやア鬼王へ知らせずには置かれまい。

ト思ひ入れ。

イヤ／＼、ひよつと月小夜どのが……よもや月小夜どののでもあるまい。何にもせよ、こりや巣を變へて樣子を見るがよい。

ト納豆箱の金を出し、その跡へ碁笥の碁石を入れ、重味を試みて元のやうにして、吹替への小判を懷中して、思ひ入れあつて、頭を振り／＼方々を見廻し、床の間の神棚へ延喜小判のやうに載せ、いろ／＼見て

これぢやア誰れが見ても、延喜小判だと思つて、氣を付ける者はあるまい。よし／＼。

トいろ／＼見て

よもやこれぢやア。

トいろ／＼見て居る。奥より鬼王出て來り

新左　モシ、茯苓さま。何をなされます。

茯苓　エ。

ト惘して鬼王を見て

鬼王どのか。よい所へござりました。早速おてまへへ聞かにやアならぬ事がござる。マア／＼、下にござりませ。モシ、鬼王どの、おてまへは何ぞ大切な物を、どこぞちよつとした所へ、置き忘れた覺えはござりませぬか。

ト鬼王、考へて

新左　イヤエ、何も左樣な覺えはございませぬ。
茯苓　ハテノ。
ト神棚の方を尻目に掛け
ほんに何も、忘れた覺えはござらぬか。
新左　ハテ、ございませぬよ。
ト考へる。
茯苓　それぢやア、月小夜どのに聞かにやァならぬわえ。
新左　そりやア、なんでございまする。
茯苓　サア、それは……先づちよつと行つて來ませう。
ト合ひ方にて茯苓、神棚の方を見廻し、奥へ入る。鬼王あと見送り
新左　京の次郎さまよりの、御内意の御書翰。
ト懐中より最前受取りし状箱を出し
新左　祐經どのゝ御病氣、陰痿性の難病にて、百日のうちに落命なすとの事……その百日も最早明日に相成り候へども、兼ねて話し置き候ふ酉の年月日時に符合なしたる女の生血、未だ取得ず候へば、家中の騒動大方ならず、醫師典藥膝を屈すと雖も力及ばず、祐經の命數、今明日に極まり候ふ。この旨お心得の爲、御内通申し入れ候ふ、以上。鬼王どのへ。京の次郎……いま茯苓どのゝ物語りに、符合なしたるこの御書翰。酉の年月日時といひ、思ひがけなく十六年ぶりにて、初めて逢うたる娘が誕生。折も折、時も時。御兄弟樣の御本意、お遂げなさるゝ御吉瑞。これと云ふも、この鬼王が忠臣を感應あつて、佛神のお引合せでがなあらう。エゝ、有り難い。
ト嬉しき思ひ入れあつて
とは云へ、不便なは娘が身の上。ハテ、是非もない事ぢやなア。
トほろりとする。向うにて尺八の音する。戀慕の合ひ方になり、向うより曾我五郎時宗、虚無僧の形にて出て來る。後より黒具の捕り手の侍ひ四人、つけて出る。花道の中にて時宗、振向く、捕り手片寄つて四人來る。時宗、舞臺へ來る。捕り手、附け廻し、後へ廻る。時宗、門口にて尺八を吹く。新左衛門、手を組んで居る。
新左　折も折とて、あの尺八は鶴の巣籠り。鳥類だに子を思ふに、それに引替へこの鬼王は、如何にお主の爲ぢやと云うて、初めて逢うた娘を。
ト思ひ入れして
せめては後生を助ける爲。
ト下の方の杯に米を載せ、門口に持つて來り

時宗　修行者の手の內へ入れませう。鬼王、今日も御訴訟に來たわいの。

ト天蓋を取る。

新左　ヤ、箱王さまでござりまするか。

時宗　まだ母人の御機嫌は直らぬかいの。

新左　內から手を變へ品を變へ、申し上げましたれど、未だお詞が和らぎませぬが、今日は河津さまの御命日でもござりますから、どうがな申し上げやうもござりませう。

ト內を見て

誰れも御遠慮はござりませぬ。マア〳〵、これへお出でなされませい。

ト新左衛門先に、時宗、內へ入る。鬼王、時宗は懷かしき思ひ入れにて、方々見廻し居る。鬼王、奥の方を窺ふ。向うより千葉之介常胤、伊豆の次郎祐兼、上下衣裳、大小にて出て來り

兩人　ソレ。

捕皆　捕つた。

ト捕り手四人、時宗へかゝる。見事に取つて投げ退け、しやんと極る。

兩人　手向ひか。

新左　イヤ〳〵、お手向ひは仕りませぬが、合點參らぬ御兩所樣。

時宗　何ゆゑとは某を、やるな逃がすなと仰せられるな。

常胤　何ゆゑとは横道者。さる頃箱根山に於て、御饗應の勅使、辨の宰相常房横死の砌り、御死骸の傍らに落ちてあつた、庵に木瓜の印ある鏑矢一筋。これ正に曾我の箱王、箱根を下山の折柄、勅使を討つて立退きしと巷の風聞。科はその身に覺えあらん。

祐兼　勅使をおッ殺した箱王の大罪人め。手向ひひろぎやアおのればかりぢやアない、祐信へどう祟りが來やうも知れない。サア、尋常に繩かゝるか。返答は

捕皆　どうだ。

ト新左衛門、ギヨッと思ひ入れ。

時宗　聊爾あるな何れも方。如何にもこの箱王、箱根は下山いたしたれども、人を殺めし覺えはない。卒爾な事をお云やるな。

祐兼　覺えないとはまざ〳〵しい。兄祐經、百日に限りある大切な病中なれども、庵に木瓜の印ある鏑矢一筋、申し譯立ち難く、祐經へも御不審がかゝつて居るワ。

常胤　いづれと未だ分明ならねど、祐經どのは病中、差當つて箱根を下山の箱王丸、搦め參れと鎌倉どのゝ上意を蒙むり、下向なしたる我れ〳〵。

祐兼　最早叶はぬ箱王丸、この祐兼が繩かける。腕廻せ、

トかゝる。新左衛門支へて

新左　イヤ、暫らくお待ち下されませう。拙者儀は曾我の家臣、鬼王新左衛門めでござりまする。御兩所樣仰せを承はりて、驚ろき入りましたる箱王丸が大膽不敵、さりながら、未だ幼若の箱王丸、勅使を殺害爲すべき謂れござらねども、折惡しき彼れが下山。申さば大切なる科人、一應も再應も吟味して、誠人殺しに極まらば、鬼王めが首討つてお渡し申しませう程に、箱王丸が身の上、暫らく拙者めにお預け下さらば、有り難う存じ奉りまする。

祐兼　そりやアならない。兄祐經へ御不審のかゝつて居る人殺し。この科人を聊爾に、わいらに預けらゝるものか。

時宗　すりや、この人殺し出ぬ時には、祐經どのゝお身の上とな。

祐兼　如何にも。殊に依りやア切腹。それゆゑこの祐兼が千葉どのに差添うて、人殺しの詮議をするのだワ。

時宗　ト時宗、思ひ入れあつて

勅使常房を殺害なしたる人殺しは、如何にも

ト云はうとする。新左衛門、仰天して

新左　モシ〳〵、箱王さま。滅多な事を御意なされまするな。あなたは大切なお願ひのござるお身の上ぢやござりませぬか。

ト時宗、思ひ入れ。

時宗　ぢやと云うて、祐經どのゝお身の上に、もしもの事があつては。

新左　左樣でござらうが、今あなたのお身の上に。

祐兼　ヤイ〳〵、そりや何を申すのだ。只今の箱王が口振り、何とも怪しい。引ッ括つて詮議する。

新左　イヤ〳〵、左樣ではござりませぬ。何意趣あつて箱王どの、勅使を恨み奉らん。毛頭左樣な……お覺えはござりますまいな。

祐兼　默れ鬼王。われがなんぼ庇つても、もう叶はない。庵に木瓜の鏑矢と云ひ、何ゆゑ箱王は箱根を駈落ちした。

新左　サア、そりやア。

祐兼　サア。

新左　サア。

兩人　サア／＼。

祐兼　どうだ。

新左　ハイ。

ト思ひ入れ。時宗、こなしあつて

時宗　祐兼どの、お待ち下されい。如何にも勅使を殺害なしたる人殺しは、この箱王丸でござる。

新左　エヽ。

ト驚ろく。

皆々　さてこそな。

ト思ひ入れ。

新左　モシ／＼、そりや何事でござりまする。御兩君のお目通りと申し、何ゆゑ人殺しとはお名乘りなされました。エヽ、お情ない箱王さま、お心が狂ひましたか。

時宗　母人の御勘當請けしこの箱王。所詮叶はぬ身の願ひ。人殺しと名乘つて出る上は、外へ御不審かゝる筋もなく、祐經どのさへ堅固ならば、例へこの身は刑罪に行はれても、後に殘りし兄者人。ナ。

ト思ひ入れ。

新左　おやと申しまして。

時宗　ハテ、人殺しの出ぬ時は、祐經どのゝお身の上。ナ、兄者人へもこの譯を、よう申し通じてくれい。鬼王。

ト兩人、思ひ入れあつて

イザ、箱王へ繩掛け召されい。

祐兼　ソレ。

捕皆　捕つた。

新左　イヤ、待ち下されませう。斯く人殺しと名乘りましたる箱王丸。外より爭ひませうやうはござりませぬが、この上のお願ひには、せめて老母へ餘所ながらの暇乞ひ、申さば親子今生の別れでもござれば、暫らくのうちの御宥免下さらば、この鬼王めが箱王丸が首討つて、御兩所へお渡し申すでござりませう。

祐兼　ならない／＼。そんなちやらくらで、この場を逐電しやうでな。その手を食ふやうな祐兼でないぞ。

常胤　イヤ、祐兼どのゝお詞ではござるが、速かに名乘りましたる箱王丸。よもや左樣の儀もござるまい。よし我れ我れを憚かりこの場を立退き、行くへ知れねば差詰め祐信の難儀。老母は人質。よもやその身を助からんとて、老母の難儀を辨まへぬ箱王でもござるまい。

祐兼　サ、そりやア。

常胤　暫らく猶豫いたして遣はしても、大事ござるまい。

祐兼　人を殺めてのめ〳〵と、これへうせる大膽者。もし
も逐電いたしたら。
常胤　その申し譯は常胤が、御前に於て。
ト思ひ入れ。
貴殿に御難儀はかけますまいわサ。
祐兼　そんなら兎も角も、常胤どのゝ心任せサ。
常胤　祐兼どのにも御承知の上は、今宵九ツの鐘鳴るまで
は、我れ〳〵が猶豫いたさん。申さば親子一生の別れ。
心靜かに暇乞ひおしやれ。
時宗　忝なき常胤どのゝお志し。母に對面いたした上
は、潔よう切腹いたし、箱王が首、貴殿へお渡し申すで
ござらう。
祐兼　九ツの鐘を合圖に、鬼王とやら、箱王丸が首、キツ
とぶつて渡せ。
新左　畏まつてござりまする。
兩人　しかと詞を番へたぞ。
新左　ハツ。
兩人　皆引け。
四人　ハツ。
ト時の太皷にて、常胤先に皆々向うへ入る。新左衛門、
後見送り、時宗が側へ寄つて
新左　箱王さま、なぜ人殺しとお名乘りなされました。さ
う云ふ腑甲斐ないお心と知らず、さぞお二人ともに、敵
を討つ思し召しであらう。どうぞ御本意お遂げなさるゝ
までは、祐經さまのお身の上に、恙ないやうに、勿體な
い事ながら、御老母樣の御眼病をば捨て置いて、敵の無
事を朝夕願つて居りまするも、あなた方お二人にめでた
う御本意を、遂げさせ申したいばつかりでござりまする
わいの。
時宗　その忠心な志しは、疾より知つては居れど、出家
を嫌うて下山なしたる箱王丸。いよ〳〵募る母人のお怒
り。所詮叶はぬこの身の願ひ。いま人殺しと名乘つて出
たも、兄者人に首尾よう敵が討たせたいばつかり。とは
云へ十八年來附け狙ひ、討つべき敵は討ちもせず、敵の
爲にこの身を捨て、後に殘りし兄者人は、さぞ便りなう
思されん。
ト思ひ入れあつて
オヽ、それ〳〵。
ト袴へ袋に入れ、腰に差したる友切丸を出し
これこそは、我れ〳〵が多年望みし友切丸。不思議に我

が手に入つたる上は、この一腰を箱王とも思し召し下されよと、兄者人へ屆けてたも。

ト新左衞門へ渡す。新左衞門、思ひ入れあつて

新左　すりや、どうござつても人殺しとなつて、お果てなさるゝお心でござりまするか。

時宗　所詮勘當請けしこの身の上。

新左　その御勘當の御訴訟も、拙者が胸にござりまする程に、先づ〱祐成さまの御部屋へ。

時宗　イヤ〱、人殺しと名乘つたるこの箱王。

新左　拙者が預かりましたる上からは、お氣遣ひはござりませぬ。

時宗　して、上使への返答は。

新左　叶はぬ時は、この鬼王が。

時宗　ヤ。

ト思ひ入れ。奧の方にて、手の鳴る方へ〱と、大勢の聲する。兩人思ひ入れ。唄になり、新左衞門、時宗、こなしあつて下座へ入る。奧より禿四人、駒鳥の合ひ方にて手を叩き出て來る。後より禪司坊、蓑明きの紙袋をすつぽりとかぶり、探り廻つて出て來る。

禿皆　手の鳴る方へ〱。

ト禪司坊、皆々を追ひ廻す。トゞ四人囁き、一緒へ寄つて溜つて居る。

禪子　サア〱、もつと囃さないか。さう默つて居ては、どこに居るか知れない。

ト舞臺へ坐り、頭を振つて、猫のやうなるをかしみあつて

これサ、もうちつと遊ばないか。よい物を遣らうがな…………エゝ、そこに寄つて隱れて居るな……爰に居るな。

ト考へて

捉まへると甘酒を嘗めさせるぞ……こちらか。サア、もつと囃さぬかいの。

ト眞中に坐つて焦れて出る。此うち四人囁き合つて、禪司坊が坐つて居るぐるりへ、煙草盆、火鉢、米かし桶、火消し壺、荒神棚のお宮、食積み臺、いろ〱な世帶道具をぐるりと並べ、よき所にて

禿皆　手の鳴る方へ〱。

トこれより禪司坊、皆々を追ひ駈けようとして、食積み臺を蹴返す。悄りする拍子に、荒神のお宮を食積みの米の中へ引ッくり返す。奧より祐成、虎出て來り

祐成　巧いつたであらうが。

虎　少將さんは、大抵嬉しい事ぢやござんすまい。
ト禪司坊、探り廻つて祐成を捉へる。祐成、愕りして逃げようとする。
禪司　サア／＼、捉まへた／＼。シタガ、おれが坊主でないと、仕樣もやうもあるけれど、何を云つても御宗旨違ひだ。
ト祐成が手を取り
いつその事に、大家へ預けてやらう。
ト祐成へ抱きつく。
祐成　禪司坊、何をおしやる。
ト禪司坊、袋を上げて祐成が顏を見て、愕りし、また袋をかぶり
禪司　にやアご。
ト猫の眞似をして、段々後の方へ入る。いろ／＼をかしみあつて、後退りに下座へ入る。
虎　ほんに禪司坊さんとやらは、をかしいお方ぢやわいなア。
祐成　悉皆子供のやうぢや。あのやうな出家に引導渡してもらうたら、どのやうな地獄へ落ちるであらうな。ハヽヽ。

虎　ほんにマア、きつい取散らしやうだ。片付けて置きやいの。
禿皆　今の坊さんが、此やうにしてぢやわいなア。
祐成　ほんに、片付きや／＼。
ト云ひながら、祐成、虎、奥へ入る。禿四人にて段々片付ける。波路、食積みの米を三方へ掬ひ込む。揚羽、荒神の宮を元の所へ直す。
波路　小蝶見や。祐さんの所の食積みに、觀音さんで買うて來るやうな、金も飾つてあるわいなう。
三人　ほんに、變つた食積みぢやわいなう。
ト云ひながら波路、茯苓の置いたる以前の小判を、見物に見えるやうに食積みへ載せ、元の所へ置くと、奥より虎、祐成が胸盡し取つて出て來る。少將、支へながら出る。
虎　祐さん、ござんせ／＼。
祐成　どうするのぢや／＼。
少將　虎さん、マア／＼、待たんせ／＼。
虎　祐さん、あの娘御さんは、お前のお側仕への女中さんであらうがな。
祐成　サア、それは。

少將　虎さん、こりやア、ようきめさんせにやアならぬわえ。

虎　サア、濟まぬわいな〳〵。

　ト虎、祐成が胸盡しを取らうとする。奥より遣り手、若い者、出て來り

遣手　サア〳〵太夫さん方、もうお歸りなさんせいなア。

虎　今に戻るわいな。

若者　今に戻るぢやござりませぬ。内ぢやア大抵案じてゝはござりますまい。

禿皆　サア太夫さん、戻らんせいなア。

虎　エ、なんぢやな。子供等まで同じやうに。いま戻るわいな。

少將　虎さん、そんなら戻るのかえ。

　ト思ひ入れ。

虎　サア、わたしもな。

　ト思ひ入れ。

祐成　コレ〳〵、後におれが連れ立つて行くから、マアマア、待ちや〳〵。

虎　そんなら後に、キッとござんすかえ。

祐成　行かないでどうするものぢや。

少將　祐さん、わたしが事をな。

祐成　オツとよしサ、おれが得心させて、一緒に連れて行くよ。

少將　そりや、はんの事かえ。

祐成　兄様の威光を、お目にかけるぢや。

虎少　祐さん。

禿皆　さらばえ。

　ト通り神樂にて、虎、先に少將、皆々向うへ入る。

祐成　外珍らしう禿どもが、そゝり立つて、行き居るワ行き居るワ。

　ト見送りて居る。合ひ方になり、奥よりお國出で來り、祐成を見て、嬉しき思ひ入れ、奥の方へ心遣ひして

くに　ハイ、お茶を上がりませぬかえ。

祐成　又お茶か。ハテ、茶を呑ませる事が好きと見えるわえ。

　トお國、恥かしきこなしにて、うぢ〳〵して居る。祐成こなしあつて

ほんに、鬼王が話しで承れば、其方は今まで出合に居つたさうなの。

くに　ハイ、伊豆の熱海に居りましたわいなア。

祐成　それでは、武家の行儀作法は知るまいな。
くに　機を織りまする事や、糸を取りまする事は、よう母さんに習うて、存じて居りまするけれどな。
祐成　其やうな事は、屋敷へ參つては、とんと要らぬ事ぢやが、其方も鬼王が娘なれば、武家に仕へるからは、なんぼ女子でも、ちつとは武藝の心掛けがなうては、奉公はなるまい。
くに　左様なら、その武藝とやらを存じませいでは、お屋敷の奉公はなりませぬかえ。
祐成　マア、ちつと口が遠いやうなものぢや。
くに　そりやマア、致しやうがござりませぬかえ。
ト困つたるこなし。祐成、思ひ入れあつて
祐成　それ程に思ふ事なら、この祐成が武藝一通り、指南いたして遣はさうわいの。
トお國、嬉しき思ひ入れにて
くに　エヽ、アノお前様が、御指南遊ばして下さりまするかえ。
祐成　執心ならば、隨分教へて遣はさうが、其方が辛抱して、この祐成が堪能する程習ふ所存か。
くに　イヤモウ、このお屋敷に居られまする事ならば、どのやうな辛抱なりと、致しまするわいなア。
祐成　そんなら先づ、神文に大誓文ぢや。
くに　ハイ。
ト恥かしき思ひ入れ。
祐成　嘘を吐くと、鬼王が頭へ、松が三本生えるぞよ。
くに　なんの〳〵、誓文お願ひ申しまするわいなア。
祐成　成る程〳〵、指南は致さうが、武術と云うても、弓馬劍術、槍薙刀、イヤ、先づ柔術を教へて遣はさう。
くに　ハイ、お願ひ申しまするわいなア。
祐成　氣遣ひしやるな〳〵。おれがよう仕込んで、通り者にして遣はさう。
くに　有り難うござりまする。左様ならば武藝の上手になりまする事を、通り者と申しまするかえ。
祐成　名人になる事を、通り者ぢやと云ふ。
くに　左様ならば、どうぞ通り者に早うなりまして、このお屋敷に、いつまでも居られますやうに、お願ひ申しまするわいなア。
祐成　そりや其方が氣根次第で、直ぐに通り者になられるが、先づ柔術を習ふ氣持は、魂ひを……爰へ落ちつけて、すは戰場へ向ひ、思ふ敵とむんづと組むが最期、例へ雷

が落ちやうが、その手を放さず、ヂッと抱きしめて居るのが、おれが流儀ぢや。マア〳〵、爰へおぢや〳〵。

くに　ハイ〳〵。

ト　おづ〳〵側へ寄り、嬉しきこなし。

左樣なら、武藝が通り者になりますと、いつまでもお屋敷に居られまするな。

祐成　居られるとも〳〵。隨分祐成が通になるやうに、仕込んでやるのぢや。

くに　その通とはえ。

祐成　サア、その通と云ふは、通り者の裏のよい所ぢや。

くに　左樣なら、早う通り者にでも、通にでもなりますやうに、お願ひ申しまする。

祐成　合點ぢや〳〵。最初立合ひが大事ぢや。隨分お敵に内兜を見拔かれぬやうに、斯う立合つた。

くに　ハイ〳〵。

ト　お國、祐成がする通りにする。

祐成　なんでも此奴をと、目指す敵があるならば、脇ひら見ずに、其奴を見るワ。よしか。

くに　ハイ。斯うかえ。

ト　不器用に祐成がする通りにする。

祐成　サア、さう見た上で、どうか怪しいと思ふなら、ちよつと肱で當てるワ。イヤモウ、大槪な奴は、お主か肱で仕掛けられると、直ぐにべた〳〵と降參するワ。

くに　左樣なら、斯う見て、肱で斯う致しまするな。

ト　不器用にする。

祐成　さうではない。よく見や。斯うサ。

ト　嫌らしきこなしをして見せる。斯うかえと祐成が通りにする。

マア〳〵、さうサ〳〵。そのべた〳〵と來た所を、斯う手を握るワ。

ト　お國が手を取る。お國、恥かしき思ひ入れ。

それ〳〵、味な心になつて來やうが。所を腰を入れて

ト　柔術の掛け聲をして

直ぐに手を引寄せるワ。

ト　お國を引きつける。

これからが許しだて。さうはずんだ所を、十分勝たうと思ふ時は、少しこの手を緩めて。

ト　手を放し、ツンとする。お國、うぢ〳〵思ひ入れ。

ハテ、稽古ぢやわいの〳〵。

くに　それぢやと云うて。

トうぢ〳〵する。

祐成　ハテ、肝心の所がぶせいぢやが、これはモウ、師匠の方から印可を讓りたくなつて來たわえ。

ト方々見廻し、上の方の炬燵を見付けて、思ひ入れあつて

アイタ〳〵〳〵。

ト足の痛む思ひ入れ。

くに　どうなされましたえ〳〵。

祐成　久し振りで、柔術を取つた所爲か、こむらがへりがして來た。お國、ちよつと撫つてたも〳〵。

くに　ハイ〳〵。

祐成　イヤ〳〵、爰では惡い。炬燵へ來てたも〳〵。

くに　ハイ〳〵。

ト祐成、上の方の炬燵に入り、寢轉ぶ。

祐成　早う撫つてたも〳〵。

くに　ハイ〳〵。

ト恥かしきこなし、うぢ〳〵して居る。祐成、こなしあつて

祐成　オイタ〳〵〳〵。撫つてたもいの。

くに　ハイ〳〵。

トこれよりやう〳〵側へ寄り、遠くより撫る。

祐成　それでは、裾から風が入つて寒いわいの。お主も炬燵へ入つて撫つてたも。

くに　ハイ。

ト恥かしき思ひ入れ。

祐成　ハテ、遠慮されては、結句風が入つて迷惑ぢや。グツと入つて、撫つてたも〳〵。

くに　ハイ、左樣ならお許し遊ばせ。

ト炬燵へ入る。

祐成　許さないでどうするものか。四五年と云ふもの、こんなお膳に坐らぬ祐成。二膳も三膳も堪能する程替へて食はにやアならぬ程に、グツと入りや〳〵。

くに　ハイ〳〵。

トお國、嬉しき思ひ入れにて、祐成が足を撫る。これより祐成、足を伸ばす心意氣。お國、恥かしき思ひ入れ。炬燵の仕組みよろしく、トヾお國へこなし。お國、アレと云ふ聲にて、奧より新左衞門、屈托の思ひ入れにて出て來る。これにて兩人恟りして

惡い事ばつかり。

トお國云ひ〳〵下の方へ坐り、もぢ〳〵して居る。新

左衞門、默つて眞中へ坐る。祐成、手持ちなく、ウロウロしながら

祐成　ハテ、野暮な奴ではある……ハテ、どこへ煙草を置き忘れたか……鬼王、ほんに月小夜は、よう煤を取つてくれたな。母者人は今日は大分お心よいの。箱王が事もお頼み申さずばなるまい。

ト何か解らぬ事を云ひ〳〵、下座へツイと入る。お國、思はず祐成が後をウツカリと見送つて居る。

新左　コレ……コレ娘。

くに　ハイ。

トうろ〳〵して、思はず奥へ行かうとする。

新左　コリヤヤイ、何を其やうに、うか〳〵致すのぢや。

くに　サア、わたしやナ、ちつと。

ト奥へ行きたき思ひ入れ。

新左　マア〳〵、これへ參れ。

くに　ハイ。

トせう事なしに、新左衞門が側に居る。

新左　コレ、其方を鬼王が娘と披露したからは、隨分氣を付けて、御奉公大切に致さにやならぬぞよ。

くに　ハイ。

新左　今まで邊鄙に育ちし其方ぢやに依つて、何も知るまいが、武士の娘になれば、常の心掛けが第一ぢやが、先づ忠と孝とは、どちらが重いと思ふぞ。

くに　そりやモウ、父さん母さんの御恩は、山に准へ海に譬へてあるけれど、お主の御恩は猶重く、その海山よりも大切ぢやと申すぢやござりませぬか。

新左　さうぢや〳〵。人は一代名は末代と、名を惜しむは武士の常。譬へて云はゞ、漬け物の押しになる石も石、茶臼に作る石も石、石と云ふ名は一つでも、用ひらるゝは雲泥の違ひ。人間とてもまッその如く、重い輕いは忠不忠。武家に仕へる身の上は、嗜なむべきの第一。今にもお主の大事と聞かば、その身を捨てゝ忠義を立て、末代人の鑑ともならうと、常に心掛けにやアならぬぞよ。

くに　そりやア、よう合點して居りますわいなア。父さん母さんと一緒にこのお屋敷に、御奉公さへなる事なら、どのやうな事なりとも

新左　すりや、このお屋敷に。

くに　いつまでも居りたうござりまするわいなア。

トいそ〳〵嬉しき思ひ入れ。

新左　すりや。

ト思ひ入れあつて

居りたい筈ぢや。結構なお屋敷ぢや。先づ第一が御老母樣がお情深うて、若殿樣はあの通りのお氣性なり。

くに　ソレイナア、あの若殿樣は御器量ようてな。

ト うち／＼思ひ入れあつて

わたしやナ、どうぞいつまでも、このお屋敷に御奉公が致したうござんすわいなア。

ト お國、いそ／＼嬉しき思ひ入れ。新左衞門、ホロリとして

新左　何にも知らずに。

ト思ひ入れ。

くに　エ。

ト 新左衞門、心付き

新左　そちや何にも、知るまいがな。

くに　何がえ。

新左　ハテ、諸禮をサ。

くに　ハイ、其やうな事は存じませぬわいなア。

新左　オヽ、存ぜぬ筈ぢや／＼。

ト思ひ入れ。お國、合點のゆかぬ思ひ入れ。

くに　父さん、どうぞなさんしたかえ。

ト 新左衞門、覺えられまいと思ふこなしにて

新左　そりやア、なぜ。

くに　どうやらお顏の色も惡し、わたしや氣にかゝるわいなア。

ト お國、苦勞の思ひ入れ。新左衞門、お國が顏を見詰めて

新左　顏の色も惡うなうて、なんとせうぞいやい。

くに　どうなさんしたぞいな／＼。

ト 奥より小左衞門、出で來り

小左　鬼王さま、これにお出でなされましたか。

新左　ホヽウ、小左衞門さま、ようお出でなされましたな。

ト 慇懃に云ふ。

小左　イヤモウ、今朝から參つて居りまして、お待ち申して居りました。

新左　私しも今日は、逆澤瀉の日限りでもござりまするから、金子を持參いたして參らうと存じました。

小左　エ……金子をお渡しなされまするか。

新左　イヤモウ、いつも／＼申し譯ばかり致しまして、氣の毒でござりまするから、この間中から心掛けましたて。

小左　それは有り難うござりまする。

新左　娘、奥へ參つて月小夜に、最前の掛け物を持つておぢやと、早う〳〵。

くに　アイ〳〵。

ト お國、奥へ入る。

小左　鬼王さま、只今仰しやりました金子を、お貰ひ申したうござりまする。

新左　承知いたしました。

ト 合ひ方になり、奥より月小夜、掛け物の箱を持つて出て來り

月小　こちの人、この掛け地を何にするのぢやえ。

新左　小左衞門どのにお目にかけて、金子を借用するのぢやや。

小左　お前もマア滅相な。この掛け地はアノ六兵衞が。

ト 云はうとする。

新怖　何をべちやくちや〳〵と、默つて居やうぞ。

ト 小左衞門に知らせまいと、思ひ入れにて叱り

イヤ、小左衞門さま、御存じの通りの屋敷の事でござりまするから、いろ〳〵才覺いたしましたけれど、とんと金子が調ひ兼ねまするが、今日までのお約束でござりまするから、不實になりまするも氣の毒でござりまするが

この間お見世でお話し申しました、趙子昂の極彩色の雛鶴。珍らしい出來でござりまするが、なんと御覽じまして、お目一ぱいお貸しなされては下さりますまいが。

小左　エヽ、左樣なら只今金子を、お渡しなさらうと仰しやりましたは、これでござりまするか。

ト 不承知の思ひ入れ。月小夜、心遣ひのこなし。

新左　左樣でござりまする。

小左　イヤモウ、道具質には懲り〳〵と致しました。それとも又、賣切りの御相談なら、兎も角も致しませう。

新左　いづれおてまへへ上げねばならぬ金子の儀。いづれとも御相談の出來まするが、ようござりまする。マアマア、御覽じて下さりませ。

ト 箱を明けて渡す。小左衞門、掛け物を見て

小左　成る程、これは見事な出來でござりまするな。

新左　如何程位になりませうな。

小左　隨分七八十兩が物はござりまするか、いま急にお拂ひなさらうと仰しやれは……五十兩位なら、わたしが方へお貰ひ申しませう。

新左　へイ、七八十兩にもなりまする代物を、五十兩とは……どうぞなりませう事なら、今少し

ト云はうとする。
小左　左様思し召すなら、外へお見せなされるがようござりまする。また値をよう買ひまする者もござりませう。
トこなしあつて
ヘイ、私しはもうお暇申しまする。
新左　して、あの鎧の儀は。
ト云はうとする。
小左　流してしまひまする。
新左　エ、。
ト驚ろく。
小左　ハテ、疾に月の切れた代物、これまで段々お待ち申し上げた上が、今日までのお約束でござりまするぞえ。今日はせめて、半金もお渡しなされにやア、濟まぬ所でござりまする。それに私しは一文も受取りは致しませぬぞえ。
ト思ひ入れ。
これから直ぐに望み手の方へ參つて……鬼王さま、お暇申しまする。
ト行かうとする。新左衞門、引留め
新左　モシ、五十兩でも、隨分よろしうござりまする。

小左　達てとは申しませぬ。
新左　イエ〳〵、お馴染の事なればこそ、五十兩とも仰しやつて下されまする。外で御覽じませ。二束三文でござりまする。
小左　左様なら、御承知でござりまするか。
新左　隨分承知でござりまする。御不肖ではござりませうが、左様なら百五十兩のうち、五十兩受取を認めなされて下さりませ。
小左　して、殘金はな。
新左　隨分出精いたして、明日中には持參いたすでござらう。
小左　間違ひませぬやうに、お願ひ申しまする。
新左　承知いたしてござる。女房ども、硯箱を持つておぢや。
月小　アイ〳〵。
ト硯箱を持つて來る。小左衞門、受取を書く。此うち月小夜、心遣ひの思ひ入れ。
小左　鬼王さま、これでよろしうござりまするか。
ト受取を新左衞門へ渡し、掛け物を改めしまふ。後へ六兵衞出かゝり見て居る。

小左　左様ならお暇申しまする。後金の儀をお頼み致しまする。
新左　明日中には、キッと皆濟いたしまする。
小左　月小夜さま、おやかましうござりましたらう。
月小　ようお出でなされました。
ト小左衛門、行かうとする。
六兵　待たしやい。その掛け物を、どこへ持つて行くのだ。
ト新左衛門、月小夜、ギヨッと思ひ入れ。行かうとする。新左衛門、引留め
新左　マア〳〵、お待ちなされて下されませ。樣子御存じござらねば、不埒者とも不屆きとも思し召しませうが、鬼王めが積しまは、明けて云はれぬ忠義の爲。殊にその逆澤瀉の鎧の儀は、當家の重寶。この度頼朝公御厄難を除かせられん爲、源氏八領の鎧を御形代となし、大覺禪師の御祈念あるとの儀。それゆゑ當家へも逆澤瀉の鎧を、暫らく差上げよとの仰せ渡され。無くて叶はぬあの鎧、人手に渡りますではどうも。
小左　コレ、それ程大切な代物なら、なぜ今まで利上げをせずに捨て置かしつた。
新左　サア、その心の付かぬ鬼王でもござりませぬが。
六兵　この掛け物を騙り損なつたと云ふ事か。百兩もする代物を、五十兩に賣らうとは、ほんに四文錢を三文に賣るよりは安いものだ。エヽ、大騙りめ。どうするか見やアがれ。
月小　成る程、尤もでござんす。六兵衞どの、お前に斷わりも云はずに、外へ賣り拂ふと思はしやんしたなら、腹が立たう、尤もぢや〳〵が、どちらへするも、金さへこなさんの方へ勘定すればよい事と、鬼王どのも思はれての事でござんすから、マア〳〵、靜かに云うて下さんせいなア。
六兵　成る程、こりやァお前の仰しやる通りだ。どちらへするも賣り物、金廻りの早い方が、此方の勝手だ。サア、金を受取りませう。
月小　サア、それはな。
小左　鬼王さま、鎧が欲しくば金を渡さつしやい。
新左　サア、それは。
六兵　月小夜さん、わしに百兩渡さずば、騙りの惡名が拔けまいが。
月小　サア、それは。
小左　金を渡すか。

新左　サア、それは、

六兵　騙りになるのか、

月小　サア、それは。

六兵　サア。

新月　サア。

四人　サア〳〵〳〵。

六兵　どうだ。

新月　ヘイ。

ト當惑する。後の障子を明け、禪司坊、新左衞門の前へ、最前の小袋を投げ出す。新左衞門、取上げ

新月　これは。

ト驚ろく。六兵衞、心付き、上の方の納豆箱をソツと取り、懷中して思ひ入れ

禪司　その金で、早く鎧を取戻すがよい。

新左　左樣ならこの金を、私しに下されまするか。

月小　それではあなたが。

禪司　ハテ、時の用には鼻を削げだ。

新月　エヽ、有り難うござりまする。

ト兩人、手を合せ拜む。禪司坊、シヤンと障子を締める。月小夜、嬉しき思ひ入れ。

月小　ほんにマア、思ひがけない禪司坊さまのお志し。早う鎧を請け戻すがよいわいなア。

ト新左衞門こなしあつて

新左　小左衞門、これへお來やれ。

小左　ハイ〳〵。

ト小左衞門、おづ〳〵這ひ出る。六兵衞、上の方にて、懷中より納豆箱をちよつと出して見ては、せゝら笑つて居る。

新左　サア、金子を改めて、逆澤瀉の鎧を持參いたせ。

小左　ハイ〳〵、畏まりました。

ト金を引寄せる。六兵衞、立ちかゝつて

六兵　その金は、おれが改めてやらう。

ト取つて

こりやアハヤ、流石は曾我さまだ。直ぐにお金が出來た。なんと云つてもお武家樣だ。小左衞門どの、有り難い事ぢやござんせぬか。

小左　イヤモウ、有り難い段ぢやアござりませぬ。ヘヽヽ、ヘヽヽ。

ト輕薄笑ひをする。

六兵　サア〳〵、いづれも、これへお寄りなされい。本の

金を戴くのだ。
ト出して、わざと膽を潰す。
こりやアなんだ〳〵。おれがこんな事であらうと思つた。コレ、見やアがれ。こりやア、土をおッ固めた延喜小判だ。

小左　イヤア。
ト驚ろく。新左衞門、月小夜、ギョッと思ひ入れ。

六兵　これが通用するものか。
ト新左衞門に打ちつける。月小夜取上げこなしあつて

月小　オヽ、最前禪司坊さまが、お受取りなされた時は、わたしもお側に居て、よう見て居たに、こりやどうも合點がゆかぬわいの。ちよつと禪司坊さまに。
ト行かうとする。後へ茯苓出かゝり居る。

六兵　そりやアならない。そんなちやらくらぼらで、爰を逃げうでな。こなたも騙りの同類。どつこへもやる事はならない。

月小　それぢやと云うて、最前お受取りなされしは誠の金。

茯苓　その金は、おれが爰へしまつて置いた。
ト荒神の宮を持つて出る。

六兵　イヤア。
ト六兵衞、懷中へ思ひ入れ。

月小　茯苓さん、金がござんしたかえ〳〵。

茯苓　無くつてどうするものか。
トお宮を見て、合點のゆかぬ思ひ入れ。
ハテ、面妖な。
トうろ〳〵する。

月小　どうしたぞいな〳〵。

六兵　金はあるか。

茯苓　サア、その金は。

六兵　大べら坊あ。
ト投り倒す。茯苓、膽を潰し、呟き〳〵奥へ入る。
ハヽヽヽ。あのべら坊どもに騙されるとは、あんまりあざとい奴等だ。ナニ、曾我の屋敷に、そんなに無くなる金があるものか。これも又なんぞの狂言か。もう、そんな手ぢやア行かない。サア、褞袍を引ッこ抜くとも、諸式の勘定をするとも、キリ〳〵方を付けないか。どうだどうだ。
ト足にてこづく。月小夜思ひ入れ。
さう側でムッとする程、おれがお心に觸るわえ。
ト月小夜に當てゝ

此奴は騙りだわえ。ぶつても叩いてもいゝ。騙りだわえ騙りだわえ。
ト大聲上げながら喰はせる。新左衛門、引拔きになり、月小夜思ひ入れ。新左衛門、ヂッと堪えて居る。
斯う云ふ日に遭うても、金を才覺する氣はないか。先刻云つたのが、門前に來てゐるがなア。
ト月小夜へ思ひ入れ。
小左　ほんに、見掛けに依らぬ太い男だ。三文の才覺も出來ぬ癖に、便々とおれを引摺つたがいゝか。これがいゝか。
ト喰はせる。月小夜、思ひ入れ。
腹が立つなら金を出すがいゝ。サア、受取らう。これ程に云つても金は出來ないのか。
六兵　コレサ、そんな事ぢやア、どせう骨に堪える事ぢやアない。斯う。
ト煙草盆にて喰はせる。月小夜、思ひ入れ。新左衛門を引きつける。新左衛門ヂッと思ひ入れ。
ハテ、張合ひのない奴でござるわえ。所詮騙りをひろぐ根性ぢやア、その筈の事だ。いゝ〳〵、以後の見せしめに、そのしやッ面へ、騙りの極印を、カウ。
ト煙草盆の角にて、六兵衛、新左衛門が額を喰はせる。疵つく。新左衛門、額を押へて思ひ入れ。
月小　ヤア、お前の額へ、疵が付いたわいなア。
トぢつと堪えて居る。月小夜、堪えかねて、エヽと六兵衛へ飛びつかうとする。新左衛門、引留める。立廻り、しつかと引据ゑ
新左　コリヤ、うつけ者めか。
月小　ぢやと云うて、疵がついては。
新左　ハテ、辛抱の出來る事を、辛抱とは云はぬわえ。辛抱の出來ぬ事を辛抱するでなけりやア、誠の辛抱とは云はれぬわえ。
ト思ひ入れ。月小夜もこれにてヂッとなる。
六兵　イヤ、ほんにきついものだ。見上げた。その辛抱でなけりやア騙りも出來ない。これからは又、おれが意地にかゝつて。斯うして。
ト甘酒を嘗めさせる、新左衛門、矢張りヂッと思ひ入れ。これより六兵衛、小左衛門、兩方より捨ぜりふにて酷く虐める。月小夜、思ひ入れ。新左衛門ヂッと堪えて居る。
これ程の目に遭うても、人を切る術も知らないか。こり

やア、伊達に差して居るか〳〵。
ト足にてこづく。新左衞門、堪え兼れて、六兵衞が足を取つて投げ退ける。六兵衞、見事に後返りに投げつけられる。新左衞門踏み込んで反りを打つて思ひ入れ。
月小夜しつかりと留めて
月小　コレ、鬼王さま、尤もでござんす。尤もぢやが、今なんと云はしやんした。辛抱のならぬところを辛抱するが、辛抱ぢやと云はしやんしたぢやござんせぬか。
ト無理に押しすくめる。新左衞門、拳を握り詰めて堪える思ひ入れ。この立廻りに新左衞門、懐中より、以前の一通を落す。
六兵　辛い貧苦をして居ても、アヽ、女房に可愛がられるとは、羨やましい身の上だ。シタガ、男の生面へ、疵をつけられたり、ぶたれたり踏まれたりして、手ざしをする事もならぬ腰抜けを、男ひでりはせまいし……先刻云つた門前に、百兩や二百兩はツイ埒の明く。アヽ、いゝ手切れだがなア。
ト月小夜、思ひ入れ。
小左　それサ、わしもさつぱり手切れの挨拶をして、鎧を流してしまはにやア暇が明かない。鬼王どの、わしやア歸りますよ。
月小　モシ、小左衞門さま、その金はわたしが才覺して上げます。サア、長うとも云やんすまい。今宵九ツまでには、わたしが才覺する程に、どうぞ九ツまで待つて下さんせ。
小左　アノ、御亭主の才覺出來ぬ金を、お内儀が才覺せうとは、こりやアちつと。
ト呑み込めぬ思ひ入れ。
六兵　イヤ、小左衞門どの、こりやア出來ませう。わしが請合ひました。月小夜どのゝ働らきぢやア、附いて來さうな事だ。
ト思ひ入れ。
小左　こなさままでが、さう慥かに云はしやる事なら、待ちは待ちませうが、月小夜どん、九ツを打つと流しますよ。
月小　そりやモウ、どうなりと。
六兵　其方の仕打ちが濟んだなら、騙りの譯は。
月小　その惡名も、九ツまでに。
六兵　アノ、月小夜どのが。
月小　預かりました。

小左　そんなら此方も九ツまでに。
六兵　騙りの譯も
月小　鎧の金も
小左　月小夜どの。
月小　胸にをさめて
小左　奥で返事を。
六兵　待つて居るぞよ。
ト獨吟になり、六兵衞、掛け物の箱を抱へ、小左衞門續いて奥へ入る。新左衞門、月小夜殘り、互ひに顏を見合せ、ヂツと思ひ入れ。これより兩人よろしくあつて、唄一くさり切るゝ。
月小　こちの人、なんぼお主のお爲ぢやと云うて、さぞお前は口惜しうござんせうな……さうでござんせう〳〵。現在女子のわたしでさへ、食ひついてまで思うたもの、よう辛抱して下さんしたなア。とは云へ、これが曾我の家老の形かいなア。
ト取りつき思ひ入れ。新左衞門、月小夜を引き廻し、ヂツと思ひ入れあつて
新左　四百四病の病より、貧ほど辛いものはないわいやい。
ト思ひ入れ。又めりやすになり、兩人よろしくあつて
この切れに四ツの鐘鳴る。
月小　ほんに、一時遁がれに九ツまでとは云ひ延したが、最早初夜過ぎ。こりやマア、どうしたものであらうな。
トいろ〳〵こなしあつて
この金の才覺は、ほんにお前の心一つで、どうなとなるけれどなア。
ト新左衞門が側へ寄り、ありこちと心遣ひの思ひ入れ。新左衞門は屈托の思ひ入れ。月小夜、フツと落ちてある一通を見付け、合點のゆかぬ思ひ入れにて、新左衞門に見えぬやうに披き見て、悄りして
さてはあの子を。
トぎよつとする。
新左　あの子とは。
左衞　サア、アノ。
ト思ひ入れあつて
あの子を賣らんせと云ふ事いなア。
新左　なんと。
ト思ひ入れ。
月小　サア、わたしが九ツまでと請合うたは、よう思うても見やしやんせ。何が當てがあるものかいなア。みんな

あのお國が當でござんすから、九ツ打たぬうちに、あの子を大磯まで、連れて行かにやアならぬわいなア。

ト新左衛門、ギョッとして

新左　なんと。

月小　ハテ、お主の爲にする事ぢやもの、例へ勤め奉公させても、恥かしい事はござんせぬ程に、あの子を賣つたがよいわいなア。

新左　サ、そりやア。

月小　賣られぬかえ。なぜに賣られぬぞいなア……エヽ、聞えた。こりやア先のお内儀さん、お波どのとやらに出來た子ぢやに依つて、賣られぬでござんせう。ようござんす。お前がさう先のお内儀さんに、心中立てさんす心なら、わたしも意地になつて、娘を賣つて金の才覺せにやアならぬわいなア。それ〳〵、九ツ打たぬうちに。さうぢや。

ト身拵らへして、向うへ行かうとする。

新左　待て。どこへ行くのだ。

月小　知れた事いなア。九ツ打たぬ其うちに、お國が身の上、ちよつと大磯まで行くのぢやわいなう。

ト行かうとする。引き戻して

新左　エヽ、うぬはなア。如何に生さぬ仲ぢやと云うて、たつた一人の娘を、傾城に賣らうとは、あんまりだわえ。

トいろ〳〵こなしあつて

コリヤヤイ、うぬがさうした根性とは知らず、娘はおのれを慕つてゐるわえ。それに、うぬア恐ろしい惡企み。エヽ、見下げ果てた根性だなア。例へどのやうな事があつても、可愛い娘は、賣らぬ〳〵。

ト月小夜こなしあつて

月小　そのこなさんが可愛いと云はしやんすより、わしが酷うつれなう云ふ方が……サア、わしが酷うつれなう云ふ方が、正眞ぢやわいなう。なんぼ上邊は可愛いと云うたとて、眞實血を分けた子と云ふではなし、賣つてしまふがよいわいなア。

新左　まだ吐かすか。その繼子を憎むさもしい根性、見下げ果てた。愛想が盡きた。女房でない。去つた。キリキリ出て失せう。

月小　其方より此方が盡きたわいなア。なんぢやの、人らしう物を云はしやんすが、お前のその形、そりやなんぢやえ。曾我の忠臣と、立派な事を云はしやんすが、卑しい町人に打ち打擲しられても、手ざしもならぬ騙りの

惡名。お前のやうな人に、長う添うて居たなら、どのやうな難儀に遭ふも知れぬわいなア。

新左　エヽ、まだ吐かすか。御主人方の切端になつて、免やせん斯くやと、この鬼王が心の苦しみ、胸は早鐘を撞くやうだわえ。

月小　そりや其方の勝手で、苦勞するのぢやわいなア。

新左　まだ吐かすか。キリ〳〵出て失せう。

ト門口へ突き出す。

月小　失せるわいなア。

ト奧よりお國出て來り

くに　母さん、待つて下さんせいなア。

ト門口へ出ようとする。月小夜こなしあつて、つかうどに門口を閉める。

モシ。

ト寄らうとする。新左衞門、お國を引き廻す。

月小　せめてま一度娘が顏。

ト寄らうとする。

新左　うしやアがれ。

ト月小夜、思ひ入れにて、向うへ逸散に入る。

くに　父さん、おさらばでござんす。

ト門口へ出ようとする。新左衞門、引き廻して

新左　其方はどこへ行く。

くに　お跡を尋ねに參りますわいなア。

新左　性根の腐つたあの月小夜、離縁なしたからは、もう母ではないぞ。

ト時の鐘になる。

くに　イエ〳〵、さうではござんせうが、脊丈の伸びたわたしを、小さい子かなんぞのやうに、可愛がつて下さんした母さん。お跡慕うて。

ト行かうとする。引き戻す立廻り。新左衞門、思ひ切つて、拔討ちにお國を一太刀切る。忍び三重になり

父さん、何ゆゑわたしを此やうに。

新左　尤もだ〳〵。堪忍してくれ〳〵。

ト附け廻し

最前云うた忠義は、爰ぢや〳〵。大切なお主のお爲ぢや程に、命をくれい。

くに　そりやモウ、お前の忠義になる事なら、なんの命を惜しみませう。惜しみはせねどナ、アノ〳〵。

ト兩人、思ひ入れ。

新左　さうであらう〳〵。尤もぢや〳〵。手鹽にかけぬこ

の親が、斯う思ひ詰めるは、よく〳〵ぢやと、料簡して
くれい〳〵。
トぢり〳〵つけ廻して居るうち、向うより月小夜、證
文を持つて走り出て來る。直ぐに舞臺へ來る。これに
て新左衞門心急き、また一太刀切りつける。
月小　爰明けて下さんせいなア〳〵。
ト叩く。これにてうろたへ、有り合せたる炬燵蒲團を
お國にかむせる。月小夜、門口たゝいたぶる。破れ戸に
て、月小夜、內へ轉げ込む。
こちの人。
新左　女房どもか。
トほつと思ひ入れあつて
たつた今去つたに、もう戻つたか。
月小　藥の血汐を、もう取らしやんしたか。
新左　ヤ。
トぎよつとする。
月小　息があるならたつた一目、娘に逢はして下さんせい
なア。
新左　どうして其方は、その樣子を
月小　知つて居る譯は、祐俊どのよりのこの一通。

ト最前拾うた一通を出す。
新左　ヤ、、、、。
ト驚ろく。此うち月小夜、お國を引き起し
月小　コレ〳〵娘、お國、心を慥かに持つてたも。
トいろ〳〵介抱して
エヽ、可愛い事をしたわいなア……最前拾うたこの一通。
祐俊さまより御內意にて、祐經どのゝ御病氣に、なくて
叶はぬ其方の生れ。如何に忠義の爲ぢやと云うて、義理
ある其方を殺すのを、どうマア側で見て居られう。それ
ばつかりで、心に思はぬ憎て口。ちよつとのうちも去ら
れたは、この悲しみを見まい爲。さうとは知らすこの母
を、はしたない者ぢやと思つて居やつたらう。可愛や可
愛や。
新左　定めし其方が心では、酷い親だと思はうが、腹の內
にて別れた娘。十六年目の今月今日、思ひがけなく巡り
合ひ、可愛さ不便さいぢらしさ、思ひ餘れど情ない、祐
經どのゝ御難病。その百日の命數も、今明日に迫つた命。
求め難い一藥も、雲を分けても詮議すると、一圖に凝り
し鬼王が忠心を、天道も感應まし〳〵て、今日と云ふ今
日、巡り合うたる娘が誕生。治承元年三月五日酉の年月、

符合なしたるこそ、廻る因果の親子の惡緣……同じ忠義に捨てるなら、御老母樣の御眼病、その良藥にもなる事か、可愛い娘の血を絞り、敵左衞門祐經どのへ差上げるとは、思へば／＼、可愛い事をしたわいやい。

月小　身腹痛めず不思議にも、名乘り合うたる親子の緣。手塩にかけて育てもせぬ、この月小夜を眞實產みの母親を、慕ふやうに留めてたもつた、志しがいぢらしい。生さぬ仲と思ふのは、世間へ立つる浮世の義理。わしや眞實の子と思うて、可愛いわいの、鬼王どの。藥の血汐を取つた上、助ける仕樣はないかいの。

新左　又そんな事云うて、おれを迷はせるかいの。思ひ迫つて切つたもの。なんの助ける仕樣があらうぞいの。

ト泣く。

くに　父さん。

新左　ヤ、、、、。

くに　母さん。

月小　爰に居る／＼。

くに　そんならわしが死ぬるのが、父さんの忠義の爲でござんすか。

新左　オ、、忠義とも／＼。其方の血汐がお役に立つて

月小　御兄弟樣は、めでたう御本意お遂げなされるわいのう。

くに　それ程の事ならば、なぜにわたしに得心させては下さんせぬ。さうした事とは露知らず、お二人さんの爭ひも、元の起りはわたしゆゑと、思へば辛いこの場の樣子。それにマア、祐成さまには、あの美しい虎さまとやら云ふお方もあれば、どうで叶はぬわたしが願ひ。死ぬる覺悟であつたのに、お役に立つとは、わたしや此やうな、嬉しい事はないわいなア。

月小　あれ聞かしやんしたか。死ぬる覺悟であつたといなア。

新左　さう云ふ健氣な心と知らず、先づ斯う／＼と明かしたら、邊鄙に育つた娘ゆゑ、もし逃げ隱れもしやうかと思ひ過したこの體裁。堪忍してくれ／＼。

くに　なんの勿體ない。父さんの忠義の爲に、死ぬる命は惜しまねど、たつた一つの迷ひと云ふは

ト懷中より錦繪を出し

アノ、祐成さま。

新左　祐成さまに、なんと致した。

月小　おいとしいと云ふ事か……花の蕾の身を以て、いと

しい殿御もなうてわいの。せめてこの世の思ひ出に。

くに　母さん、嬉しうござんす。

月小　オヽ、尤もぢや〳〵。道理ぢや〳〵。三千世界に此やうな、邪慳な者も又あらうか。尋ねても來ずば今さらに、斯うした嘆きもあるまいに、慕ふも因果、逢うたも因果。

新左　因果同志の結び合ひ。切めて願ひの叶ふやうに、お主でなくば取結び、思ひを晴らしてやつたなら、賽の河原に迷ひもせまい。

月小　子は親の爲孝行に、命を捨つる覺悟ぢやのに。

新左　親は憐れむ心もなく、殺すはなんたる浮世の義理。

月小　思へば〳〵世の中に。

ト奥より、祐成、禪司坊、出で來り

祐成　未來の緣を結んで遣はさう。

新左　すりや、娘が願ひ。

くに　お聞き屆け遊ばして

祐成　蓮の臺の床杯。

禪司　その仲人は禪司坊。

ト禪司坊下の方の手水鉢の水を、柄杓に汲んで來る。これより水杯よろしく、新左衞門、幕明きの笈摺を取る。誂らへの合ひ方。

新左　二世安樂の笈摺も、今は娘が一生の晴れ着。

ト月小夜、最前の小柄を出し

月小　思へば果敢ないこの小柄。花の盛りの朝顏も、露の契りを千代までと、蓬萊祝ふこの島臺。

ト有り合ふ食積みへ小柄を載せ、眞中へ置く。

祐成　めでたい〳〵。めでたく本意を遂げたる上、半座を分けて待つて居よ。

くに　エヽ、有り難うござりまする。

ト新左衞門こなしある。向うよりして最前の足輕走り出で

足輕　鬼王さま、最前の御返事は。

新左　それ〳〵、血汐の効能、息あるうち。

ト角盥を引き寄せ、お國を抱き上げ、目を塞いで、胸元の疵より血を絞る。お國、苦しき思ひ入れ。月小夜、取りつき思ひ入れあるべし。新左衞門、手早く生血を壺へ入れ、使ひへ渡す。足輕、壺を持ち、向うへ走り入る。

祐成　敵左衞門祐經が、その難病を癒すとて、たつた一人の娘を殺した鬼王は、家來とは思はぬ、我れ〳〵が爲に

は氏神も同然。
新左　エヽ、有り難き祐成さまのお詞。何卒御兄弟お二人樣へ、御本意めでたく遂げさせましたく、この鬼王が寸志を御感あつて、有り難きお詞。
月小　とは云へ娘がこの最期。
禪司　それも誰れゆゑ祐經ゆゑ。
新左　思へば不便な
皆々　最期であつたなア。
ト思ひ入れ。九ツの鐘鳴る。
月小　あの鐘は。
新左　最早九ツ。
ト新左衞門こなしあつて、お國が首をポンと打つ。月小夜、首に取りつき泣き落す。新左衞門、碁盤を持つて來り、その上へ首を載せ、剃刀を取つて切り首へ墨を入れる。此うち九ツ鐘を打つて居る。時宗、障子の内より出る。新左衞門、首と時宗を見合せ
新左　寸分違はぬ箱王さま。
皆々　ドレ。
時宗　不便な最期であつたなア。
新左　最早九ツ。

ト奥より六兵衞、小左衞門出で
六小　サア、鬼王どの。九ツは打つた。金はどうだ。
新左　サア、その金は。
小左　金がなけりやア、鎧を流しますよ。
ト表へ出ようとする。新左衞門、内へ投げ込み、小左衞門、見事にかへる。この拍子に金積み轉げる。金出る。
祐成　この蓬萊のこの金は。
禪司　そりや、最前の祠堂金。
六兵　エヽ、いま〱しい。
ト納豆箱を投げつける。
新左　ソレ、鎧の金。
小左　受取りました。
六兵　月小夜、來い。
ト月小夜へかゝる。新左衞門、六兵衞を投げる。時宗押へて
時宗　不義者め。
ト向う揚げ幕にて「上使」と呼ぶ。
皆々　ナニ、御上使とは。
ト祐成、時宗を引廻し向うをキッと見る。新左衞門、

新左　首を持つて

御上使、これへお通り下されませう。

トしつかりと住ふ。皆々よろしくあつて、チョン〳〵チョン〳〵〳〵。

ひやうし幕

一番目五建目　對面の場

役名——阿野法橋全乘。久須美太郎祐政。久須美六郎祐高。狩野之助宗茂。坂東八郎祐氏。宇佐美左衛門景光。狩野四郎行光。宇佐美六郎祐重。伊豆次郎祐兼。梶原源太景季。小林の朝日丸。近江小藤太行家。八幡三郎行氏實ハ京の次郎祐俊。大松屋清九郎。百足屋六兵衞。傾城、舞鶴。曾我十郎祐成。曾我五郎時宗。工藤左衛門祐經。

本舞臺、三間の間、結構なる二重舞臺。すべて祐經館のかゝり。一面、上げ障子にて幕明く。

ト向うにて「御一門方お入り」と呼ぶ。太鼓誂らへになり、宇佐美の左衛門景光、狩野の四郎行光、坂東八郎祐氏、狩野之介宗茂、久須美の六郎祐高、宇佐美の六郎祐重、久須美の太郎祐政、伊豆の次郎祐兼、この八人、薄梅に庵に木瓜の紋ついたる素袍、烏帽子、一對にして出で來り、並よく花道に並ぶ。

景光　花前に蝶舞ふ紛々たる雪。

行光　柳上に鶯飛ぶ片々たる聲。

祐氏　久方の天の香具山神をより

宗茂　霞そめてや春いそぐらん。

祐高　誠に春色を知ると

祐重　四方の景色も麗かに、冴え返りたる翠の色。

祐政　さるが中にも左衛門祐經どの、先頃より所勞につき御所の出仕もなきところ

祐兼　今朝立返る若水に、典藥のしるしありて、病氣平癒の嘉儀として、一門の殿原を、設けの爲の今日の參會。

景光　一門多きその中にも、宇佐美の左衛門景光は、祐經どのゝ射藝の弟子。

行光　狩野の四郎行光は武藝の勵み。四季の發句の添削やら、又は或る夜の附合ひにも、末と云はるゝ未熟者。

祐氏　物にかゝりの羨やましき、坂東八郎祐氏は、茶道に心奥床しく、歩みを運ぶ手前にも、角の取れたる手練の

功。
宗茂　功成り名遂げて身退く、その范蠡が後を追ひ、軍學兵書に凝り固まる、狩野之介宗茂も、祐經どのゝお取立て。
祐高　達て所望とある時は、射鳥かけ的嫌ひなく、久須美の六郎祐高が、流儀も矢張り工藤流。
祐重　宇佐美の三郎祐重も、烏滸がましくは候へども、四つの手綱に銀の鞍。元より武士の表にて、治世に亂を忘れぬ譬へ。
祐政　泰平治世は今この時。久須美の太郎祐政も、嗜なむべきは智仁勇、兼ね備はるこそ武の一德。
祐兼　一門一體一對の、紋は體を顯はすと、兄祐經が本腹を、祝し給はる若殿原。誠に頼みある中の、介添を致さん爲、伊豆の次郎祐兼も、これまで參上いたしてござる。
上四　祐兼どのを御案内に
下四　イカサマ、左樣仕らん。
祐兼　イザ先づ、お通り下されませう。
ト太鼓誂らへにて本舞臺へ來り、上の方へ左衞門景光、次郎祐兼、太郎祐政、六郎祐高、下の方に六郎祐重、四郎行光、狩野之介宗茂、八郎祐氏と並ぶ。
祐兼　兄左衞門祐經、先頃よりの所勞にて、御所の出仕も無きゆゑ、如何なるゆた事やらんと、各々胸を痛めしところ、典藥の奇特にて、早速の平癒。一門の喜びこれに過ぎず。
祐重　その本腹を祝さん爲、左衞門どのゝ招きに從ひ、申し合せし今日の參會。
景光　殊に今年賴朝公、四十一の前厄に當らせ給ふ、御厄難を退くる、神事の役目も左衞門どの。
行光　又二つには萬壽君、四十一の御胤ゆゑ、厄難消滅の式を行はんとあつて
祐政　範賴公を始め萬壽君にも、今宵當館へお入りあつて
宗茂　神道秘密の祕法を以て、これを行ふ。
祐氏　その刻限は、今宵九ツの頭を合圖。
祐高　彼れこれ以て折よき本腹。祐兼どのにはさぞ御滿足で
皆々　ござりませうなア。
祐兼　仰せにや及ぶべき。この上もなき兄が本腹。一入めでたき初春を、迎へましてござりまする。
ト向うにて「阿野の法橋全乘公お入り」と呼ぶ。

上四　思ひ依らざるこの席へ
下四　全乘公のお入りとや。
ト又呼ぶ。本神樂になり、全乘、鼠の着付け、鼠衣、少し異形の形にて、大きなる珠數を持ち出て來り、後より近江の小藤太行家、八幡の三郎行氏、近江八幡の紋ついたる對の上下、高股立ちにて、小藤太行家は誂らへの矢倉枕を持つ。三郎行氏は白鞘を持ち出で來り、花道にとまる。
上四　全乘公には
下四　只今お入り
八人　なされしとな。
全乘　人間の榮耀は因縁淺し。林下の幽閑は氣味凉しと、いま阿野の法橋全乘が、雲水の身の遠慮なく、祐經が館へ來るも、三界無宿の捨坊主に、手の內の志しもあらうかと、報謝を受けに來たのだワ。
小藤　畏れ多くも全乘公には、よくこそ祐經館へ御入來なされてござるな。今日は主人祐經、難病平癒いたせし嘉儀とござつて、諸士の歷々、家門の方々、各々御入來でござれば、御施行の儀はお心任せと存じ奉りまする。
三郎　イカサマ、御尤もなる思し立ち。それもこれも主人祐經に、御對顏あつての上の事。見苦しくはござれどもイザ先づあれへ
小三　お通り下されませう。
全乘　兩人、案內いたせ。
小三　全乘公のお入り。
ト管絃になり、本舞臺へ來り、全乘、上の方の二疊臺へ上がる。
祐兼　只今これにて、全乘公の上意を承はるに、如何にも尊き思し立ち
景光　當時賴朝公の御連枝、阿野の法橋全乘公。
祐政　鎌倉御所にお入りあらば
祐高　四季の活計、日毎の結構。
祐重　善盡し美を重ね
行光　日夜朝暮の御遊樂。
宗茂　それに引替へ、三界無宿のお身の上。
祐氏　手の內の御修行とは、恐れ入つたる思し召し、各々
皆々　承知いたしてござりまする。
全乘　出家沙門の身を以て、格別の榮華は未來の妨げ。幸ひ今日この館に、諸侯參會と聞いたゆゑ、一紙半錢の手の內を、申し請けに來たばかりサ。

三郎　御一門方の御意の如く、飽くまで尊き思し召し。御父頼朝公を始め、御連枝方の御菩提の爲、御出家堅固のお身の上。只雲水に任せられ、諸人の手の內を乞うて、後生菩提の知遇となし、衆生濟度のお志し、尊い哉佛道に誠ある事、恐れながら有り難う存じ奉りまする。

全乘　見れば若輩の身の奇特にも、よくも全乘を思ふものかな。して、其方は。

三郎　左衞門祐經が家臣、新參者の八幡の三郎、陪從のお目見得、眞平御高免下されませう。

小藤　誠に八幡は仕合せ者。全乘公のお目見得は、陪臣といひ、殊更新參者なぞは、存じも及ばぬ事サ。それは格別、全乘公には、兼ねて七堂伽藍御建立あらんと思し召し立てられしところ、未だその地面、いづれとも定まり兼ねしが、いよ／＼伽藍建立の地所は、お心當りござりまするかな。

全乘　この近國を行脚の幸ひ、伊豆の國山本山は、前は海、後は山、要害堅固の場所なれば、山本山こそ七堂伽藍を建立の地所には屈竟の場所。その段、鎌倉へ披露いたせ。

三郎　その山本山は、先年頼朝公お旗揚げの始め、和泉の判官兼高が籠りし城池。それに伽藍を建立あらんとは、口と心は手の裏返す御心中。さほどの大義を思し召しながら、一紙半紙の手の內の、助力がお受けなされたいとはな。

全乘　兄頼朝へ願ひなば、國の一ケ國や二ケ國は、齋料にもくれられうか、この全乘が望む手の內は、日本六十餘州の米を、報謝に入れてもらひたい。

三郎　山本山へ七堂伽藍を、建立の思し召しと云ひ、日本六十餘州の米を手の內に、お望みなさるゝ全乘公の御心中。ハテナア。

小藤　いま全乘公の上意を承はつて、額に皺を寄せて、お主は大分勞する體ぢやが、何も苦に病む事はない。なぜとお云やれ、義經どの御落命の後は、差詰めの御連枝、例へ只今まで、蟄してお出でなされたりやこそ、山本山へ七堂伽藍を、御建立遊ばさうが、大國を報謝にお望みなさらうが、お心の儘の事サ。新參者の存じた評定でおりない。引ッ込んでお居やれサ。

三郎　理非權法は臣下の守るところにして、理を以て非を戒むるに、なんぞ新古の差別がござらう。全乘公の上意の趣き、八幡の三郎行氏は、何とも得心仕らぬ。

小藤　默れ八幡。理非權法は聖人の敎へ。君子は罪の疑は

しきを刑せずと、例へ全乘公の上意の内に疑ひを含むとも、未だ御主人祐經さまの御賢慮も伺はぬその先に、上意をさみなす慮外者。今一度舌頭返さば、小藤太が引立てようか。

三郎　善を嘉し惡を憎むに、なんの憚るところあらん。手向ひ召さればこの八幡も。

小藤　重ね〴〵の無禮の雜言。この小藤太が手の内見せうか。

三郎　そりや又、どうして。

小藤　斯うして。

三郎　ナヽヽ、なにを。

ト障子の内にて

祐經　近江八幡、扣へい。

全成　あの聲は。

八人　左衞門祐經。

小三　なんと。

舞鶴　結ぶ手の、露さへ染まる黑髮も、

祐經　君が爲には惜しまざりけり……鬱陶しい。障子を上げい。

ト唄になり、障子上げる。左衞門祐經、廣袖、羽織衣裳にて、褥に曲彔に凭れ居る。傾城舞鶴、振り袖當褂衣裳にて、櫛を持ち立つてゐる。禿松野、竹野、香盆に香爐と香臺に香包みを載せ、持つて居る。上の方に鏡臺直しある。この見得にて障子上がる。小藤太、三郎、ほぐれて枕と白鞘を持ち

小藤　御主人祐經さまへ申し上げまする。御病氣御平癒の嘉儀として、御一門の方々仰せ合され、先刻より御參會。

三郎　殊さら鎌倉どのゝ御連枝、阿野の法橋全乘公のお入りとござるゆゑ、御門外までお迎ひ申し、即ちこれまでお供いたしてござりまする。御挨拶あつて然るべう

兩人　存じまする。

祐經　一門の殿原を設けの爲の用意は致せど、思ひよらざる全乘公のお入り。恐れ入つたる俄の敗亡。イヤ先づお移り下されませう。大磯の傾城舞鶴とやらも、身と一緒に。

ト合ひ方にて、左衞門祐經、舞鶴、亭より下りる。全乘、亭の内に床几にかゝり、祐經、本舞臺にて、二疊臺に住ふ。

祐兼　左衞門祐經どのには、先づ以て新春の慶賀は申すに及ばず、殊更御病氣平癒の嘉儀と申し

景光　一方ならぬこの初春。
行氏　長の病苦のお疲れも見えず
祐政　御壽命は萬々歳。
宗茂　一門の大慶。
祐高　一家の喜び。
祐氏　その會稽を述べん爲
祐金　さてこそ參會
皆々　致してござる。
祐經　伊藤工藤の若殿原、左衞門が病氣平癒の招きに從ひ、云ひ合されての今日の參會。如何ばかりか大慶々々。疾く罷り出で面談いたす筈なれども、長の病苦の寐亂れ髮を、取上ぐる間に遲滯に及ぶ。失禮の段、御容赦にあづかりたい。
小藤　御主人には見馴れませぬ女子を、お側近う召使はれまするが、彼れは何者でござりまするな。
三郎　イヤ〳〵、この女子は大磯の傾城、舞鶴と申す遊君。今日御一門方御參會の給仕の爲とて、和田どのよりこの八幡の三郎まで、お取持ちの爲に差越されてござる。今日の饗應の役人。サ、殿へは今朝御披露いたしてござる。子供まで大儀々々。

松野　竹野、見やつたかいの。いかな初會の座敷でも、遂に見なれぬ形かたち。
竹野　大黒舞を見るやうで、ほんにしみ〴〵。
松竹　オヽ、辛氣。
舞鶴　子供達の其やうに、思うて居るも、尤もぢやが、追ッつけ廓へ戻る程に、暫しがうちはその十種香。わしが相手にならう程に、爰へ持つておぢやいの。
松竹　アイ〳〵〳〵。
ト舞鶴、二人と十種香をして居る。小藤太、三郎、二品を祐經が前へ直して
小藤　只今お目通りに直しましたる二品は、全乘公當館へ不時のお入につき
三郎　お土產として御披露申せとの
小三　全乘公の上意にござりまする。
全乘　左衞門祐經には、先頃より陰痿性の病に閉ぢられ、御所の出仕も致さぬと、風の便りに聞いたゆゑ、坊主相應に、難病平癒の祈念を籠めしその枕、直さま持參と存じの外、行脚の身の儘ならず、やう〳〵今日當館へ來て見れば、最早病氣平癒との事。殘念々々。さりながら、病氣平癒の爲、祈念を籠めし枕ゆゑ、彼の周の穆王が、

慈童に與へし枕に習ひ、慈現慈衆生福壽海と聞え上げなば、壽命長久の枕と思ひ、寝所を放さず秘藏いたしてもらひたい。また一腰は、無銘なれど、新身の業物。その身を守る怨敵退散。二品ともに寸志の土產と、左衛門、受納してくれい。

祐經　見苦しき祐經が茅屋へ、御入輿下さるゝと申し、殊さら御丹精を籠められし御土產。如何ばかりか有り難う頂戴いたすでござりまする。猶も詳しき君命は、別間で拜受いたすでござりませう。差當つて全乘公へ、何をかな饗應いたしたいものぢやが、その役人とあつて和田どのより、差越されたる舞鶴は女子の儀。三衣を召されしお側へは、何とやら恐れもあり。ハテ、なんと

全乘　イヤ／＼、心遣ひ無用。雪ならば幾度袖を拂はまじと、志賀寺の上人も、御息所の返歌に依つて、忽ち煩惱の雲晴れて、却つて淨土の臺に至る。また世を捨て坊主の西行も、江口の里の君の下にて、讃佛乘の因を開く。なんぞ傾城遊女とて苦しからん。舞鶴とやら、近う／＼。

舞鶴　馴れし廓に居てさへも、笑うて苦しき日もあれば、泣いて嬉しき夜半もあり。ましてや見馴れぬこの館、三衣を召したる御側へ、わたしも遠慮と思ふゆゑ、この身を清める一炷きも、ツイ焚さしになりやんした。祐經さま、後をついで下さんせいなア。

祐經　正直廉直になるを香の德と云ふ。十界皆なるの君へは何よりの饗應。幸ひこの一炷きは、小松どのより申し受けたる胡蝶と名付けしこの名香。時の興には替へられぬ。舞鶴も嗜なみの一炷きあらん、見たい／＼。

舞鶴　嗜なみと仰しやつては、お恥かしうござんすが、父のこの世に在す時、院の御所より拜領の、千鳥と名付けしこの一炷き。これも形見と秘め置けど、祐經さまのお望みに任せ、この場で燻らす一炷きは、世になき父へ手向けの一炷き。

祐經　過ぎ去り給ふ小松どのゝ、後弔ひ奉るもこの一炷き。

舞鶴　お前の御所持の胡蝶の名香、御亭主方から。

祐經　然らば御容赦。

舞鶴　ドレ、お後を致しませうか。

ト兩人、立派なる香包みより出して、香を焚く。薄ドロドロになり、日覆より千鳥と胡蝶、綺麗に仕立てたるを大分吊り落す。小太鼓ばかりの樂になる。祐經キッと見て思ひ入れ。

皆々　これは。

祐經　香の薫りに引かれ來る。胡蝶は春を旨として、元より陽なり。千鳥は冬の景物にて、歌にて云ふもこれ陰なり。凡そ生ある物、陰陽の中に生きざるはなし。これ天地の道理なり。天道に背かざる、香の主たる小松どの、聖德四方に香ばしく、末世に至る今日までも、その名ぞ薫る春の空。ハテ、面白き風情ぢやなア。

舞鶴　祐經さまへ申し上げまする。陰陽二つの二品を、持參いたした二人の者、お次へ扣へさせましたが、今日の饗應に、これへ呼び出しましても、大事ござんすまいかえ。

祐經　陰陽二つの品とあらば、一入の一興ならん。急いでこれへ呼び出してよからう。

舞鶴　そんならこれへ呼び出しましても、大事ござんせぬな。

祐經　大事ないとも／＼。急いでこれへ。

舞鶴　エ、、有り難うござんす。祐經さまの御免を受けて歷々の御席へ、そんなら二人を呼び出しませうか。オ、、それ／＼。

ト花道へ來り

お次に扣へしお二人さん、祐經さんが逢うてやらうと云はしやんす程に、怯めず臆せず恥らはず、急いでこれへ出やしやんせいなア。

兩人　委細畏まつて候ふ。

ト對面三重になり、向うより時宗、祐成、千鳥と蝶の長上下にて、破魔弓と羽子板を持ち、吉例の通り出で來り、兄弟、思ひ入れあつて、よき程にとまる。

祐經　待て／＼。いま傾城舞鶴が推擧にて、目通りを許されし兩人を見れば、庵に木瓜の紋どころを着ると云ひ、先な奴は見知らねど、次に扣へし童こそ、正しく曾我の箱王に、其まゝの面恰好。

祐重　その箱王は人殺しの罪に依つて、祐信の方にて討ち留めしと、鎌倉の訴へ。

祐經　その訴へは承知いたせど、一旦事を穩便に濟まし、騙し寄せて

ト祐經へ思ひ入れ。

景光　陰陽二つの二品とあるゆゑ、興ある品と思ひの外、破魔弓と羽子板、市の土産と云ふ心か。大たわけめ。

行光　全乘公の御前と云ひ、伊藤工藤の歷々の席へ、イケまざ／＼と、よく持つて失せたな。

祐政　但し祐經どのへ年玉の使ひ物か。
宗茂　貧乏らしいその二品。
祐高　子供騙しにする心か。
祐氏　どう云ふ心で
皆々　持つて來た、エヽ。
舞鶴　お二人さん、聞かしやんしたか。陰陽備はる二品は、子供騙しの年玉のと、不粹な物の云ひやうは、烏帽子の紐の結び目で、耳にはちつとかゝれども、その疑ひも有うちと、破魔弓濱矢羽子板の、謂れ云ひ立て何れもさんへ、云うて聞かせて下さんせいなア。
ト兩人これより破魔弓と羽子板のツラネあつて、ホヽ敬つて申すと納まる。
オヽ、出かしやんした〳〵。なんと皆さん、面白かつたでござんせうがや。申し祐經さま、只今の御褒美に、二人の者にお逢ひなされて、お詞を交されて下さんすまいか。
祐經　成る程、兩人が今の故實、聞き事であつた。左衞門、對面いたしてやらうわサ。
舞鶴　すりや、お逢ひなされて下さんすとや。エヽ、有り難うござんす。モシ〳〵、お二人とも、日頃逢ひたい見たいと思うて居やしやんす。工藤左衞門祐經さまが、逢うてやらうと仰しやる程に、モシ、大事の場ぢやと心得て、禮儀を亂さず、ナ、合點かえ。
ト岩戶になり、兩人、思ひ入れして、ヅカ〳〵と本舞臺へ來り、しやんと見得になる。
祐經さま。イザ、お詞を下さりませい。
祐經　ハテ、勇ましい二人の若者。先づ名を聞かう。名は何と云ふ。
祐成　お尋ねにあづかりまして、却つて當惑。かゝるお席に烏滸がましう、名乘るべき我れ〳〵ならず、只名も無き者と、御推察下さりませい。
祐經　見れば衣服の紋所は、庭に木瓜を付けたが、名は伊織とかな云ふ浪人者であらうな。身は宇佐美久須美、河津、三箇庄の領主、工藤一﨟藤原の祐經、近く寄つて顏を見覺えろ。
祐成　云ふにや及ぶ。
小藤　いづれも。三箇の庄の領主の前とも憚らず、後の童めが立ちはだかつて、ありやアマア、なんの態だな。
三郞　イカサマ、左衞門さまの御意下さるゝに、手の舞ひ足の踏むとも知らぬ、この場の無禮。

小藤　無禮どころか、祐經公の位に恐れて、ガタ〳〵慄へるやつサ。いづれも御覽下されい。

皆々　ハヽヽヽヽヽ。

時宗　なにを。

祐成　これサ〳〵、これはどうぢやぞいの。イカサマ、左樣でござりまする。誰れござらう、當代に於て、三箇の庄をぬく〳〵と、サア、三箇の庄の御主、祐經さまの御前へ出で、いつぞはお目見得が致したい〳〵、いつかいつかと待ちに待つたる今日只今、このお席へ出られ、有り難うて嬉しうて、思はず彼れめが失禮も、席を知らざる者どもと、只御高免の程を願ひ奉りまする。

時宗　兄者人、何を云ふのだ。何も無禮な事はない。いま聞けば、宇佐美久須美河津の領主と、ならべた物の云ひやうだが、その三箇の庄は、どうして工藤が手に入れたな。武士の家は、切尖にて、申し受くるが本領とも所領とも云ふべきに、いづれの武功を顯はした。三箇の庄の主と云うて、只褥の上にて身をふけらす左衛門こそは、失禮とも無禮とも云ふべきに、片腹痛い今の一言。すッ込んで居やアがれ。

上四　打捨て難き雜言。

下四　引ッ立てませうか。

八人　ドリヤ。

祐經　方々、扣へ召されい。

八人　でも。

祐經　ハテ、扣へ召されい。

八人　ハア。

祐經　未だ祐經、詞も發せざるその先に、逸り男の若殿原。但し、左衛門が詞を背き召さるゝか。

八人　それは。

祐經　マア〳〵、押包んでお居やれ。

八人　ハッ。

祐經　最前からためらふところに、次の若者が、兄者人と云ふからは、さては兄弟の者にてあるよな。見れば見る程、似たワ〳〵。

祐成　祐經さま、我れ〳〵は何者に似ましたな。

祐經　先年赤澤山狩倉の折柄、柏ケ峠にて、何者の爲にか横死を遂げし、河津の三郎祐安に。

兩人　なんと。

祐經　思ひ出せば一昔、河津が最期の物語り。イデその頃は安元二年神無月、十日餘り、奧野の狩の歸りがけ、い

つに變りし河津の三郎、目覺ましくこそ出立ちけり。
小藤　秋野の摺つたる狩衣に、まだらのむかはぎ裾たをやかに穿きなして、身寄りの羽にてはいたる素矢、筈高に負ひなし、栴檀籐の弓の眞中握り、萌黄の竹笠木祐しに吹きそらせたり。
三郎　村雨月毛と名けたる駿足に、小春と云へる鞍置いて絕所惡所の嫌ひなく、さしくれてこそ通りける。
祐經　折節乘かへ付けざるこそ、河津が運の盡き弓矢。待ち設けたる事なれば、椎の木三本やり過し。
小藤　一のまぶし。
三郎　二のまぶし。
小藤　キリ〳〵と引絞り、ひやうすつぱと放つ矢が、河津が乘つたる鞍の山形射削つて、むかばきの際を、前へすつぱと射通しける。
三郎　河津も聞ゆる弓取りなれば、矢續ぎ早に打ち番ひ、馬の鼻を引返し、四方八面目を配れど
祐經　只白雲の消え行くのみ、猶更に靜かなり。
小藤　智仁勇者の祐安も、大事の痛手なりければ
三郎　千々に心は逸れども、はや世を急ぎし馬上より
小藤　大地へ撞と

小三　をちこちの
祐經　赤澤山の露霜と、消えし河津が忘れ形見、二人の悴であらうがや。
舞鶴　御推量の上は包むに及ばず、如何にも河津が忘れ形見。
祐成　兒一萬、成長いたして、いま祐信の養子となり、曾我の十郎。
祐經　祐成なるか。
祐成　弟、箱王人となつて
時宗　曾我の五郎
祐經　時宗と見た。
兩人　祐經どの。
祐經　兄弟。
舞鶴　ハテ、珍らしい
四人　對面ぢやなア。
時宗　親の敵、祐經觀念。
祐經　ハテ心得ぬ。この祐經を親の敵とは、何を以て。まこと河津が敵と云ふは、赤澤山の相撲の遺恨に依つて、股野が討つたぞ。斯く云ふ左衞門祐經、河津を討つた覺えはない。

時宗　いんにや、卑怯だ。所領の遺恨に依つて、遠矢を以て、討落させたに違ひはない。尋常に河津が敵と、名乘れ名乘れ。

祐成　斯くあらんと思ふゆゑ、今日對面に用意せし、この矢の根こそ工藤の流儀と承はる。慥かな證據でござらうがな。

　ト平鏑の矢の根を出す。

祐經　いよ〳〵以て心得ぬ。兄弟は伊藤が孫、伊藤が家の矢の根の形。

祐成　伊藤は代々舌廣の鴈股こそ、家の流儀と仕る。

祐經　さればよ。伊藤工藤は一家にて、同じ流儀の矢の根を用ゆる。證據と云つて持參せしその矢の根は、流儀にあらざる平鏑。何を以て祐經を、敵と恨むるうろたへ者。工藤が流儀も舌廣の大鴈股、矢の根が違つた、流儀が違つた。それが證據になるものか。タヽヽたわけ者めが。

祐成　すりや、流儀違ひの矢の根ゆゑ、敵の證據にならぬとや、ヘイ。

　ト當惑の思ひ入れ。

時宗　例へ矢の根は證據にならずと、河津が敵は祐經と、世の人口は天の囀り。サア、立ち上がつて勝負々々。

祐經　ハテ、聞分けなき童が振舞ひ。命の親たる祐經を、敵なぞとは慮外な奴の。

祐成　ハテ、心得ぬ御一言、命の親とは何を以て

祐經　命の親とは先達て、勅使に立てられし辨の宰相常房卿を、箱根山にて討つたるは、曾我の箱王と鎌倉どのゝお疑ひかゝりしゆゑ、家臣鬼王新左衞門、箱王が死首を持つて、鎌倉への申し譯相濟んだではないか。その首になつた箱王が、よもやうろたへて爰へは來さうもないもの。それとも今にも祐成、時宗と名乘つて出れば天下の科人、引ツ括つて縛り首。祐成の時宗のと、いらざるお尋ね者の名を顯はし、今にも罪に行はれば、佞者の爲に空しくなり、どの命を蓄へて、父の河津が敵を討つか。それとも達て時宗と名乘れば、似せ首を以て鎌倉を欺きし、祐信は重罪だぞ。一人殘りし滿江まで、如何なる憂き目に遭ふまいものでもない。そこへ心が付かざるか。如何に若いと云うて、揃ひも揃うたたわけ者めが。

祐成　祐信さまの御難儀と云ひ

時宗　滿江さまのお身の上と聞いては

祐成　寶の山へ入りながら

時宗　手を空しく歸るか。

兩人　殘念な。
祐經　イヤ、手を空しくは歸すまい。初めての對面の印、杯してくれる。近江八幡、銚子土器持て。
小三　畏まつてござりまする。
ト三保神樂になり、小藤太、三方に土器。三郎、長柄を持つて來り
小藤　仰せに從ひお目通りへ
三郎　卽ち持參
祐三　仕つてござりまする。
祐經　先なる若者、祐經が杯くれう。これへ參れ。
祐成　祐經さまのお杯、有り難う頂戴いたすでござりませう。
ト祐成、祐經が側へ來る。土器を取上げ、つくづく見て
祐經　兄は兄とて見かけから、優にやさしき立振舞ひ。角の取れたる土器も、底の心は打曇り、碎けて云はゞ一家の端くれ。めでたう一つ請けてよからう。
ト三郎注ぐ。祐經呑んで祐成に獻す。
祐成　何がさて、待ちに待つたるこの年月、祐經さまのお杯、蓬萊山より須彌山の、高き恩義を思ふにつけ、世の盛衰とは云ひながら、見す〳〵敵の
皆々　敵とは。
祐成　堅き巖に苔蒸して、千代を壽ぐお杯。めでたく頂戴いたすでござりませう。
ト三郎注ぐ。呑んで祐經へ戻す。
祐成　とてもの事に、弟にも杯くれう。これへ參れ。
時宗　否だ。
皆々　なんと。
小藤　聞えた。祐經さまの御威光に恐れて、お膝元へは來にくいか。こりやアさうありさうなものサ。
時宗　廉士は盗泉の水を呑まず。人の所領に肥え太つた、穢らはしいその杯。汚ないむさい。おらア否だ。
祐經　穢らはしいとさみなす童め。われに呑ませる杯がある。伊藤貝を持てやい。
小藤　ハア。
ト三方に載せ持つて來る。
祐經　見たか。伊藤が秘藏の伊藤貝。いま祐經が所持なせば、名も改めて工藤貝。また或る時は伊藤貝。其方が爲には玉の杯。これでは呑ますばなるまいぞや。
時宗　聞き及びたる伊藤貝、名も面白きその杯。戴きませ

う。戴きますべい。

ト時宗、ツカ／＼と來る。祐經呑んで

祐經　イザ。

時宗　イザ。

兩人　イザ。

ト子から手へ受取る

小藤　小藤太が替つて酌をしてくれべい。

ト長柄を取つて突ッかける。時宗、受け持つ。

コレ／＼童め、箱根山の蔭で、賽錢箱の端下錢を盗み出して、甘酒を買つて喰ふとは違うて、忝なくも祐經さまのお流れだぞ。何も其やうに齒ぎしり噛んで、ブル／＼慄へやアがる事はない。新場の犬を見たやうに、なんぞ又欲しいものでもあらば、え丶折柄だ、お願ひ申せ。お肴に小藤太が申し受けてくれうワ。お召し古しのお小袖か、但しお目録か、少々の事は殿へお願ひ申すまでもない。四文錢の五本や十本は、小藤太もくれて遣るワ。但し、山寺育ちで、牛蒡や人參の精進物ばかり喰つて居たから、生臭いものが好ましいのか。生物が喰ひたいか。

時宗　傳へ聞く、大江山の童子は、肉を集めて食となす。この時宗もそれに習つて、箱根山の朝まだき、霞隠れの野の雉子、夏は海邊の友待つ鷺、秋は野原に啼く鶉、又は山々谷々の、雪踏み分けて猿猴も、引ッ裂き喰つたこの時宗。生臭物に望みはないぞ。

小藤　そんなら何が喰ひたい。

時宗　祐經どの丶肉が食ひたい。

皆々　イヤア。

小藤　祐經公の肉より、この小藤太が脛を喰へ。

ト時宗を踏みつける。立廻りに懷中より連判狀を落す。

祐經取上げ

祐經　この一卷は。

小藤　それを。

トかゝる。祐經、一卷を懷中して、側なる白鞘にて、小藤太が首を打ち落す。

皆々　これは。

ト管絃になり、祐經、切り首を摑んで

祐經　童、え丶。

時宗　なんだ。

祐經　三箇の庄の米を食めば、祐經が肉も同じ。望みの肴、見事喰へ。

時宗　おんでもない事。

ト詰め寄せ、祐經、切り首の髻を摑んで差出す。時宗、受け、持つたる貝へ受ける。血汐の滴る仕掛け。祐經、キッと見て

祐經　既に漢の武陽侯は、鴻門へ挑んで覇王に謁し、自ら肉を喰つて大杯を傾むく。その志し正に項羽が百斤の髀を摧かんとなす勇は、ハテ、勇ましき彼れら英雄。世になき父が見るならば、さぞ滿足に思はんに、親は無くとも子は育つ。親を討たれて無念なか。

時宗　さん候ふ〳〵。

祐經　親を討たれて口惜しいか。

時宗　云ふにや及ぶ。

祐經　無念骨髓に徹したる、一念一心天道ありても、微弱の手の內、心元ない。

時宗　伊藤が秘藏の伊藤貝も、いま祐經が所持となり、工藤貝と聞くからは、時の仇には、まツこの如く。

ト貝を握り潰す。血汐、以前の枕にかゝる。ドロ〳〵にて、切り穴より燒酎火燃えあがる。仝乘、苦しむ思ひ入れ。

皆々　これは。

祐經　ハテ、怪しやなア。君の土産たるこの枕に、小藤太が血汐を注げば、陰火炎々と燃えあがる。

時宗　陰鬼の法を籠めて、枕の主たる祐經どのを、孫子の如く恨むるにや。

祐經　それは弓箭。

時宗　これは枕。

祐經　それも血汐の穢れを忌む。

時宗　これも血汐の穢れを顯はす。

祐經　酒は陽なり。

時宗　血汐は陰なり。

祐經　酒に浸せば

時宗　陽中の陰。

祐經　陰陽順道なるべきに

時宗　却つて陰氣盛んたるは

祐經　物こそあらん枕の內。

時宗　主たるものゝ身の上なるか。

祐經　何にもせよ。

時宗　怪しきこの場の

祐經　有樣ぢやなア。

ト大ドロ〳〵にて仝乘苦しむ思ひ入れ。

祐成　仝乘公の

皆々　この體は。
全乘　この全乘も陰痿性の、悪い時分の起り覺め。
祐經　陰痿性なら祐經が、新身の業物荒療治。一討ち討つ
て、差上げませうか。
ト白鞘を拔いて差付ける。
全乘　サア、それは。
祐經　サア。
全乘　サア。
祐經　サア〳〵〳〵、なんと。
時宗　お望みならば時宗が、療治は元より足力按摩。
ト枕を踏み毀す。中より藁人形出る。祐經、取上げ
祐成　さてこそ、祐經どのを調伏の人形。
祐經　ドレ。
ト祐成、白鞘を持ち添へて
今こそ讀めたこの二品。痛み入つたる下され物。慥かに
受納いたしてござる。全乘公には一先づ別間へ。
兩人　祐經どの。
祐經　兄弟。
時宗　ムウ。
祐經　重ねて逢はう。さらばだ。

ト唄になり、祐經先に全乘、八人の一門、各々奥へ入
る。時宗、直ぐに奥へ駈け入らんとする。祐成、留め
て
祐成　時宗待て。
時宗　イヤ、放した〳〵。
祐成　氣色を變へて、何處へ行くぞ。
時宗　臆病未練な左衞門祐經、奥へ踏ん込み、素ッ首を引
ッ捉へて敵と名乘らせ、本意を遂げる。爰放した〳〵。
祐成　心の急くは尤もなれど、いま聞く通りこの場に於て、
祐成時宗と名乘り狼藉なさば、祐信さまを始め、满江さ
ままでの難儀なるぞや。
祐經　サ、それは。
祐成　その道理を辨まへず、逹て狼藉なすならば、この祐
成は……南無阿彌陀佛。
ト腹切らうとする。時宗、舞鶴縋つて
舞鶴　祐成さま、マア〳〵待つて下さんせ。
時宗　兄者人、氣が狂つたのか、狂氣したのか。何ゆゑ生
害しようとは仰しやるぞ。
祐成　何ゆゑとは聞えぬぞや。倶に天を戴かざるの仇たる
祐經、其方ばかり討たうと思うて、この祐成に討たさう

とは思はぬかいの。聞えぬぞや、時宗。達てこの場で本望遂げなば、世になき父への孝は立たうとも、この十八年がその間、養ひ親の祐信さまへの、孝道は立つまいがや。後の親を親とする本文を辨まへなくて、幾度制し止むれども、聞入れなきゆゑ祐成は、祐信さまへの申し譯に生害なす。爰放しや〳〵。

時宗　成る程、聞き分けました。あやまりました。もう短氣は出しませぬから、堪忍して下さりませ。大日本は廣けれど、なつた二人の兄弟ぢやもの。これが悲しくなつてどうするものか。兄者人、この手を合せまするわいの。拜みまするわいの。あやまりました。あやまつたわいあやまつたわい。

祐成　そんなら聞分けて、時節を待つ心か。

時宗　時節到來いたしたら

祐成　その時こそは父の仇、兄弟二人立並んで、一の太刀二の太刀と、名乘り合せて討つならば、冥途にまします父上も、さぞ御滿足に思はれん。先づそれまでは時節を待つが、この世の親への孝道義理。

時宗　婆婆と冥途の兩親へ、義理と孝との二道には、山を劈く時宗も、手ざす事も叶はぬかい。エヽ、いまいましい。

祐成　尤もぢや。尤もぢやが、血氣に逸るばかりを、よい侍ひとは云はぬぞや。待ちや〳〵。顏を直してやりませう。

　ト鼻紙を出して涙を拭いてやり、いろ〳〵介抱して

それでよい〳〵。時宗は英雄ぢやと、祐經どのにも褒められたに、泣き顏見せては濟みませぬ。今にも又ぞろ祐經どのに逢はうとも、必らず短氣を出すまいぞ。

時宗　合點だ〳〵。

三郎　鸞鳳は殼の內より、その聲諸鳥に勝れ、崑崙山の砂は悉く美玉なりと、孝心義心を磨く兄弟。その健氣さに引替へて、卑怯未練な左衞門祐經。

祐成　ハテ、心得ぬ八幡の一言。主人の祿を蒙むりながら、祐經どのをさみなす一言。

時宗　主を見習ふ扶持盜人、うぬも祐經が祿を食めば、謂はゞ敵の片割れ。その根性を時宗が、叩き直してくれべい。爰へ失せろ。

　ト八幡の三郎を引据ゑ

三箇の庄を押領なす、祐經こそ祿盜人。それをさみなす扶持盜人め。いま時宗が意見の笞、握り拳を喰やアがれ。

祐成　トいろ〳〵打擲する。三郎、懐中より風折烏帽子、舞
ひ扇を落す。祐成取上げ

祐成　この風折烏帽子、舞ひ扇は

時宗　ドレ。
ト扇を取つて置き
秋野の蒔きし扇こそ

舞鶴　時松虫の父戀しと、穂に顯はれしその素性。

三郎　父は元より白露と、消えて忘れし形見の扇。母風折
がその烏帽子の、名に殘りたるこの二品

祐成　常々母の物語りに、聞き及びたる我れ〳〵が

時宗　腹替りの一人の兄上。

三郎　京にて育ちし京の次郎祐俊。

兩人　すりや、兄者人であつたるか。

三郎　兄弟。

兩人　兄者人。

三郎　不思議に巡り

三人　逢うたなア。

三郎　父の敵は祐經と、風の便りに聞いたゆゑ、おのれや
れ本望をと、思ふに甲斐なき京鎌倉。人に面を見知られ
ぬこそ幸ひに、今參りの八幡となつて、現在敵の左衞門
に給仕なすも、曾我兄弟に巡り逢ひ、手引きをなして本
望を、達せん爲の一つの計略。

祐成　まこと血筋の兄とも知らず、心置きしは敵の館。斯
く巡り逢ふからは、力を添へて祐經に

時宗　父の敵と名乘らせて、本意を遂ぐるは案のうち。

三郎　急いては却つて事の破れ。

祐成　只何事も穩便に。

舞鶴　時節をお待ちなされませい。

時宗　その折を得るまでは。

三郎　初めて逢うたる兄弟へ、積る越し方行く末の

十郎　お物語りを承らん。

三郎　祐成、時宗。

兩人　兄者人。

三郎　マア、奥へ。
ト唄になり、三郎先に、祐成、時宗、奥へ入る。舞鶴、
名殘惜しさうに、奥を見て思ひ入れして居る。向うよ
り百足屋六兵衞、後より大松屋清九郎、呉服屋の手代
の形。大風呂敷を肩に掛け、兩人、ツカ〳〵と出て、
花道より舞鶴を見附け

六兵　オヽ、あそこに居るがさうだ〳〵。お手代どの、サ

ア、來さつしやい。
淸九　ハイ〳〵。
舞鶴　お前は六兵衞さんかいなア。
　ト顏を隱す。
六兵　六兵衞さんか。ハテおかつしやい。餘ッぽど顏に似合はない、厚い代物だわえ。云はないでも知れた出入りだが、あの吳服屋へ一部仔什云はにやア、おれが心が濟まない。コレ、今日のこの衣裳は、おれが呑み込んで、おれが誂らへて、半金は先に受取る約束で、今日の間に合はせたところが、づぶ三文も渡さず、我が物顏で、斯う着飾つて居ちやア、其方の都合はよからうが、此方が迷惑だ。一も二もない。今爰で金を渡すか。金がなけりやアこの代物を、すつぱりと返してもらはにやアならない。コレ、吳服屋の人、この通りの譯なれば、親方へ斷わつても、この代物を持つて歸つて下さい。近頃氣の毒だが、さうしてもらはずばなりますまい。
淸九　ハイ、こりやアマア、きつい迷惑なもんでござりますわい。それではとんと帳場の手前も濟みませず、代物を持つて歸りましたところが、ちよつとでも召しましては、値引け物になりまして、濟まぬもんでござりますわえ。
六兵　サア、その現窟は聞えてゐるが、所詮金がなければ、斯うして默つて着せちやア置かれない。マア、一旦其方へ渡して、金の出來次第、何時でも受取りに行く代物。何を云つても女郎の事なり、今にも金が降つて湧かうも知れない。滅多に損の行く出入りでもあるまい。大儀ながらさう思つて、持つて歸つて下さい〳〵。サア〳〵、脫いでもらはうぞ。
　ト六兵衞、裲襠を脫がす。舞鶴はヂッと俯向いて、恥かしきこなし。六兵衞、裲襠を淸九郞へ渡す。
淸九　ハイ〳〵。
それ〳〵、よく皺を伸して疊まつしやい。
　ト淸九郞、不承々々に風呂敷を擴げて、裲襠を疊み込む。
六兵　サア、これもみんな脫いで遣はされ、手を掛けますぞや。御免なされ。
　ト後より前帶を解きにかゝる。舞鶴、顏を振り袖にて隱し、しをれる思ひ入れ。
斯う本當に、帶を自由に解かせるものなら、堪えられますまい。

ト帯の端を持つて、くる／＼廻る。

清九　モシ／＼六兵衞さん、こりやアマア、申して見りやア、畢意お前さんのお顔で致した商ひでござりますが、どうぞならうならお前さんが、少々もお取替へなされたらよからうと、わたしや存じまするがなア。

六兵　ハテサテ、とんだ事を云つたもんだ。おらが取替へる位なら、高でおてまへを、爰まで引ッ張つて來るものかな。

清九　ハイ、そりやアマァ左樣ぢやが、全體この商ひはナ、わたしが方よりお前さんの方が、餘ッぽど理窟のえゝ事をしてお出でなさるさかいであらうか。とんと致し憎い商ひぢやわい。イヤ、ほんぢやわいな。

六兵　コレサ、そりやア又おれだといつて、ちつとはお庇がなくつて、色里の事が呑み込めるものか。知れたもんだわな。

清九　サイナ。そりやわたしも有うぢやと思うて居りますけれどな、今度のはお前、えらありぢやぞえ。

六兵　ナニ、とんだ事を云つたものだ。サア／＼、みんな取るぞえ。ちつとそこをお立ちな。

ト舞鶴を襦袢一つにする。舞鶴、恥かしきこなし、打伏してゐる。奥より梶原景季、着流しにて夜着蒲團を持つて出て、舞鶴を見て

景季　なんだ／＼、舞鶴。どうしてそんな形になつたのだ。

六兵　こりやア、梶原さまでござりますか。

景季　わりや百足屋六兵衞ではないか。

六兵　ハイ、お久しうござります。

景季　見りや舞鶴が着物を持つて居るが、なぜこんなにしたのだ。

六兵　これには段々樣子がござりまするが、短かく申せば、この舞鶴どのに、今日の衣裳を私しが請合うて、拵らへてやりましたところが、その金が濟みませぬに依つて、吳服屋の云ひ譯に、脫がして歸るのでござります。

景季　そりや途方もない事だ。なんぼさうだと云つても、可哀さうに、さう酷くする事もないヮ。おらが挨拶だ。料簡しろ／＼。

清九　それは途方もない事を仰しやつります。斯う云ふ物を只着られては、重ねてから癖になつて、損ばかりせにやアなりませぬ。但しお前のお馴染なら、この金をすつぱり拂つておやりなされませ。

景季　イヤサ、おらア馴染と云ふでもないが、今日馳走に出たこの舞鶴。所詮大磯では梶原を馬鹿にして、どの女郎でも思ふやうにならない。今日は幸ひ好い間を見合せて、コッソリ樂しむべいと、夜具までわざ〱工面して來たソ。先づこいつを爰へ斯う取つて置いて、コレ、舞鶴、風を引いちやアならない。爰へ來やれ。

六兵　さうかすりの方へ廻られちやア、これもゆかぬ相談だ。サア〱、よく疊んでしまはつしやい。

ト衣裳を淸九郎へ渡す。

淸九　そんなら、モウ、どうでも埒明かんかいなア。

六兵　不承ながら寢金にして置くのよ。

淸九　すりや、モウ、根ッから急體ぢや。

ト小袖を疊み、風呂敷へ包む。

六兵　モシ、梶原さま、伊豆の次郎さまが來てござるなら、どうぞ逢はせて下さりませぬか。

景季　オヽ、そりやおれが威光で、奥へ連れて行つて逢はせてやらうが、なんとその代りに、明日までおれに、その小袖を預けぬか。

六兵　ハテ、私しが物ぢやござりませぬ。あの呉服屋のでござりまする。

景季　そんなら、あの男は呉服屋か。

六兵　左樣でござりまする。

景季　ヤイ〱、呉服屋、近付きにならう。

淸九　ハイ、私しな。

景季　オヽサ、して、われが名は何と云ふぞ。

淸九　ハイ、私しは大松屋の手代、淸九郎と申しまする。

景季　淸九郎とは、かすつた名だな。

淸九　ハイ、滿れば缺くるの心でござりまする。

景季　なんと淸九郎、その小袖をこの梶原に、預けてくれまいか。

淸九　イエ、これはその百足屋六兵衞さまのお誂らへでござりますさかいで、あなたに御相談遊ばされませい。

景季　アレ〱、おのし次第だと云ふぞよ。

六兵　でも、お前、金を遣らないうちは、あつちの物だ。但し損料でもお出しなさいますか。

景季　そりやア今夜の舞鶴が勤め次第で、ハテ、さつぱりと拂つてやるわサ。

六兵　そいつは覺束ない。御免々々。

景季　なぜよ〱。

六兵　どうしても、振られ勝手な質サ。

景季　おきやアがれ。

ト内より梶原さま／＼と呼ぶ。

南無三方、もう膳が出るさうな。コレ、舞鶴、おのしやアモウ、座敷に用はないから、爰へ入つて寢て待つて居やれ。なんならおらが、麻の葉鹿の子の着替へでも着て待つて居やれ。行て來るぞよ。

六兵　わたしもお前と一緒に參りませう。

景季　うなア勝手にしやアがれ。

六兵　ハテ、意地の惡い。

ト合ひ方になり、景季、六兵衞、奥へ入る。舞鶴、清九郎殘り、互ひに顏見合せ、ヂツと俯向くこなしよろしくあつて

清九　なんぢややら、一向解らぬ筋ぢや。ドレ／＼、お暇申しませう。ハイ、こりやアいかい、おやかましうござりました。

ト風呂敷を擔げ、清九郎、花道へ行かうとする。

舞鶴　モシ／＼。

ト清九郎、立ちどまり

清九　ハイ、なんでござりますえ。

舞鶴　定めしわたしが今日の樣子を、憎い奴ぢやと下げすんでござんせうが、これにはモウ、云ふに云はれぬ恥かしい譯あつて、斯う云ふ面目ない事になりましてござんすが、みんなわたしが心がら。堪忍して下さりましえ。

清九　ア、なんのいな。勿體もない。わたしやそんな事には思はんが、お前さんの身になつて、ほんに／＼氣の毒なやら術ないやら、立つにも立たれず、大抵切ないこつちやござりましなんだ。イヤ又、あの六兵衞さんと云ふ者は、ほんに大抵の爪ぢやアないぞえ。殊にお前方の物と云ふと、えらう剝ぐぞえ。それこそモウ／＼、碑文谷の草鞋よりえらうござりますぞえ。その癖けちりんでも負けるこつちやアない。お前さん、附かけがあるさかいで、ちつとあの人が金立替へりやア、濟む事でござりますのに、コレ、此やうな手紙を、わしに寄越されました。

ト手紙を出し

「手紙を以て申し遣はし候ふ、今日舞鶴どの小袖の代金、相濟み申さず候はゞ、取返し申すべき積りに御座候ふ、右斷わりなしに、この小袖着申され候はゞ、何方にても引剝ぎ、其方へお渡し申すべく候ふ間、御苦勞ながらお立會ひ下さるべく候ふ、大松屋清九郎どの、百足屋六兵

衞」斯う云ふもんでござります。わたしやモウ、譯さへつきやア、待つて上げる氣ぢやけれど、あの人が兎角やかましいさかいで、わたしがさう云はれんぢやわいな。ほんにお前さん方の身の上は、大抵辛いもんぢやアない事を、わたしも推量して居るわいな。

ト清九郎羨ぐんで、そろ〳〵羽織を脱いで舞鶴へ着せる。舞鶴思ひ入れ。

舞鶴　ハイ、有り難うござんすが、わたしや寒うはござんせんわいなア。

清九　ハテ、春風は身に堪えますわいな。この羽織は綿をたんと入れて置いたさかいで、温かいぞえ。マア、それを着て居なされ。なんぞ細帶を。オヽ、この襟巻を一重帶に締めなされ。さうして、あそこへ入つて居たがようござります。わたしや又、これを内へ見せて、帳場へも呑み込まして、明日持つて參りませう。必らず案じなさんな。

舞鶴　段々の御深切、忘れは置きませぬ。嬉しうござります。

清九　アヽ、なんの禮どころかいな。左様なら、明日お目にかゝりませうえ。

舞鶴　そんなら、何事もよろしうえ。

清九　ハイ、呑み込みました。

舞鶴　ようお出でなされましたえ。

清九　風邪引きなさんな。

ト唄になり、清九郎、向うへ入り、直ぐに合ひ方。

舞鶴　ほんに女子の心ほど、未練なさもしいものはない。現在大磯の虎さんと云ふ、深いお方のあるを知りつゝ、どうぞと思ふ心から、今日このお館へ來て、八幡さんを頼み、祐經さへん御兄弟を逢はさうと、いろ〳〵心を砕き、虎さんへ文認め、やう〳〵手引きした甲斐あつて、御對面もさせまし、わたしもお顔を見たゆゑに、心の念は屆いたけれど、何やら足りない本意ない別れ。せめてま一度お顔を、ちよつと見たいと云うても、こんな形では、お目にかゝれまいし、アヽ、儘ならぬが浮世の義理とは、よう云うたものぢやなア。

ト祐成、奥より煙草盆を提げながら

祐成　ハテサテ面妖な。一遍奥を尋ねても知れんが。

ト云ひながら出て來る。舞鶴、恥かしきこなしにて、ちやつと立たんとして、羽織ゆゑ裾の見えるをいとひ、又しやんと坐り、ウヂ〳〵立つたり坐つたりして、裾

を隱して行儀になる。祐成見て
舞鶴どの、爰にかいの。道理こそ衣服を改め、最早御寐所へのお形ぢやな。エヽ、羨やましいな〳〵。
ト床の樣子を見て
客人の來ぬうちに、先づお禮を申さにやアならぬ。マアマア、これへお出で〳〵。さて今日は、そもじのお庇を以て、我れ〳〵兄弟が日頃願ひの、祐經に對面遂げ、斯やうに喜ばしい儀はござらぬ。一生恩に着ます。千萬忝ない〳〵。サア〳〵、マア、爰へ來て、ゆるりと話しも致さにやアならぬ。マア、寄りなさい。其やうに客人がましうては、此方却つて痛み入るぢや。サア〳〵、手を取らうか〳〵。

舞鶴　アイ〳〵。
トつかへて居る。祐成、立ちかゝり
祐成　ハテサテ、如何に馴染が遠ざかつたとて、さう又、お付合ひなさらぬとは、つれないと云ふものぢや。餘り其方は端近ぢや。サア〳〵、爰がよい〳〵。
ト舞鶴が手を取つて、無理に引ッ張つて來る。舞鶴、是非なく中腰になり、躙り入り、思ひ入れ。
ハテ、さう義理堅くては。
ト祐成、これを見て
ヤア、その形はなんだ。
ト舞鶴、又しやんと坐る。
襦袢の上に羽織か。ハテ、をかしな形で居るの。

舞鶴　イエ、こりやア、なんでござんすわいな。
祐成　なんでござんす。
舞鶴　なにサ、あのな。
祐成　ヤア。
舞鶴　ソレ、あの。
祐成　なんだ。
舞鶴　オヽ、願でござんす。
祐成　願とは。
舞鶴　ちつと叶はぬ大事の願があつて、それで先刻にから斯うしてチッと行儀にして居るのでござんす。
祐成　ハテ、それはむづかしい願だの。見たところが、意氣な男の羽織で、袖なりも野暮でなく、裏は通しなり、斯う云ふ物を着る者は、先づこの屋敷にはないが、なんでもこいつは、怪しい願と見えるわえ。
ト羽織の袂より清九郎が狀を出す。舞鶴これを知らず
舞鶴　なんの怪しいこつちやアござんせんわいな。この羽

織は、わたしがこの形を見て、寒からうと貸して下さんしたに依つて、そのお人の志しを無足にせまいと、せう事なしに着て居たのでござんす。なんの人にそんな心がござんせうぞ。わたしが此やうに願掛けをしたり、いろいろと心を凝らすも、深い願ひのある事ぢやけれども、その眞實も屆かず、誰れも可愛う思うてくれる者もなし、思へば緣と云ふものは、神佛のお力でも、自由にならぬものかして、とんと辛氣なものでござんすわいなア。

ト此せりふのうち祐成はソッと片手にて、この狀を開き、膝の脇にて讀み、舞鶴に隱して

祐成　ハテナウ、併し、願掛けと云ふものは、人の見得を繕ろふやうな心では、叶ひさうもないもの。心だに誠の道に叶ひなば、祈らずとても神や守らん。兎角誠の事を云へば、神でも佛でも心は屆くが、さう僞はり飾つては、どうも合點がゆかぬ。

舞鶴　イ、エイナア、わたしやこの願ひは、眞實本心でござんすぞえ。

祐成　それ／＼、さう眞顏で嘘を吐くのが惡い。

舞鶴　どうしてわたしが、嘘を吐くぞいなア。

祐成　そんなら嘘の正體を云はうか。

舞鶴　アイ、聞きやんせうかえ。

祐成　コレ、神は非禮を受け給はずと云ふに、上着から下着まで引ッ剝がれ、是非なう人への云ひ譯に、せう事なさの裸の願掛け。

舞鶴　エ、。

祐成　勤めに凝つて、女角力を取りに出るやうなものぢや。ハ、、、。なんと違ひはあるまいが。

舞鶴　そんならわたしがこの樣子を。

祐成　コレこの狀で、皆知れた。

ト狀を投げてやる。舞鶴、取つて

舞鶴　この狀は。

祐成　大松屋の淸九郎どのへ、百足屋六兵衞。

ト舞鶴、狀をちやつと顏へ當て

舞鶴　恥かしいわいなア。

ト俯向く。

祐成　なんの、それが恥かしい事がある。勤みの身にはある慣ひ、ちつとも恥にはならん。あの百足屋六兵衞と云ふ奴は、酢でも酒鹽でもいける奴ぢやアない。初手からさうと、おれに云うてくれぬが聞えぬわい。サア／＼、これでも着たがよい。肝心の所が冷えては一大事ぢや。

ト祐成、上着を脱ぎ、舞鶴へ着せて、祐成、下着になつて帶を締め

こいつは好い物があるわえ。

ト襟巻を取つて頰かむりにして

この羽織は、なか／＼よい羽織だ。こりや誰れがのだ。

舞鶴　そりや大松屋の人が笑止に思うて、わたしに着せてくれたわいなア。

祐成　ハテ、世界に鬼はないものだなア。

ト羽織を着る。

舞鶴　ほんにあの手代は、大抵深切な好い人ぢやわいなア。

祐成　呉服屋の者か。サア、深切に仕掛けるは下心だわえ。

舞鶴　なんのいなア。そんな氣遣ひのあるやうな男ぢやござんせんわいな。

祐成　でも大松屋の淸九郎と云ふ名からして、どうか色男でありさうだ。

舞鶴　イエ／＼、さう云はしやんすりや、あの顏をお前にちよつと、見せたいわいなア。

祐成　ハテ、どう云ふ男だな。

舞鶴　なんの事はない、德次に其まゝ。云ふに云はれぬ、をかしな顏でござんすわいなア。

祐成　ハア、そいつは見たいもんだなア。併し、あの呉服屋にも、慥か無沙汰のあるやうに思うたから、滅多に我れら顏出しはならんぞ。

ト煙草をのみ居る。舞鶴、祐成へ何やら云ひたさうにいろ／＼こなしあつて

舞鶴　モシ、祐さんえ。

祐成　ヤア。

舞鶴　わたしや、アノナ。どうやら寒うなつて來たやうなわいな。

祐成　今の願掛けを忘れて、モウ、瘧が付いたな。

舞鶴　何云はしやんすぞいなア。さうぢやないがな。わたしよりもお前が寒からうと思うて、いつそ案じらるゝわえ。

祐成　さう云やれば、成る程薄着の奇特か。有やうはヂワヂワ寒くなつたやうな。斯う云ふ時に、はつきりとした燗で、一つやつたらよからう。

舞鶴　そんなら、わたしが行て取つて來よう。

祐成　コレサ、そんな形で行きやつたら、岡焼どもが見付けて亂騷ぎ。よしにしやれ／＼。

舞鶴　それぢやと云うて、せめて炬燵でもあればよいにな

ア。

祐成　見廻したところが、火鉢が一つあらばこそ。

舞鶴　夜着や蒲團はあるけれど

祐成　病人のやうに、引被つても居られまい。

舞鶴　それでもわたしや、どうやら寒いに依つて、いつそ一人入つて、こちや寝るぞえ。

祐成　サア、段々起つて來た。ほんのこれが榮耀には、頭ではならて、十郎が皮までひん剝いて、存分であらうぞ。

舞鶴　サア、それでお前も寒いなら、爰へ入つて寝たがよいわいなア。

祐成　アノ、その中へ。

舞鶴　それでも寒いぢやないかなア。

祐成　そりやモウ、開いた口へ松茸ぢや。ドレ、そんならちつと、足先を溫めてもらひませうか。

ト祐成、夜着へ炬燵のやうに入りさうにする。此うち六兵衞ソッと出て、後より屛風の内を覗いて居る。兩人これを知らず

舞鶴　モシエ、此やうな所を、ひよつと虎さんが見やしやんしたら、大抵やかましい事ぢやあるまいぞえ。

祐成　どうしてあれが、爰へ來るものだ。

舞鶴　イ、エ、それでもコレ、ヂッと見てぢやぞえ。

ト六兵衞、顔を引ッ込める。

祐成　そりや、どこに〳〵。

舞鶴　コレ、爰に見て居やしやんすわいなア。

ト祐成が守り袋を敎へる。

祐成　ハ、ア、この守に虎が書いたものがあると云ふ推量か。きつい行き過ぎの。そんな野暮な物は持たんでえすが、御覽じろ、斯やうな大切な物が入れてある。

ト守を取つて見せる。舞鶴見て

舞鶴　こりや、最前の矢の根ぢやないかえ。

祐成　サア、この矢の根の、血に染まつたが、大切な父の形見。それで肌身離さず、斯うして守に掛けて居るのサ。

ト六兵衞これを、とつくと見て居る。

舞鶴　なんぼ大切な物でも、寝やしやんす時は危ない刃物。ちつとのうち斯うして爰へ置いたがよいわいなア。

ト鼻紙へ挾み、蒲團の間へ入れる。六兵衞、見て頷づく。

祐成　ハテ、こいつ氣の利いた用心だ。

舞鶴　ほんにわたしがこの守も、父さんのお形見。しかも奇瑞のござんす、あらたな彌陀の尊像とやら、勿體ない。

その屏風へ、憚りながら掛けて置いて下さんせ。

ト守を祐成受取り、これを見て

祐成　ハテ、結構な繪像。こりや慥か聞き及んだ朝日の彌陀。これを親の形見と、大事にしやる其方は。

舞鶴　ア丶モウ、そんな事はえ丶わいなア。父さんも母さんもないに依つて、便りにするその守。可愛いと思うて、便りになつて下さんせいなア。

ト舞鶴、祐成が膝を抱きしめる。この拍子に守り袋を取落す。

祐成　コレサ、勿體ないよ。

ト取つて屏風の隅へ掛ける。六兵衛、思ひ入れあるべし。

舞鶴　其やうにすると、風が來て寒いわいなア。

祐成　そんなら斯う。

ト守を見て

御免なされ〱。

ト屏風を引廻す。六兵衛、ソツと顏を出し、屏風の内を覗き、いろ〱をかしき顏の思ひ入れ。此うち始終合ひ方にて、向うより清九郎、以前の儘、風呂敷包みを抱へ、投げ首をして出て、本舞臺へ來かゝり、六兵衛がをかしき顏形を見て、不思議なる思ひ入れ。そろ〱側へ寄り、暫らく顏を眺めて

清九　モシ〱。

トこれにて六兵衛、悄りして奥へ駈けて入る。これにて清九郎も悄りして下に居る。この音にて祐成、屏風の内より清九郎を覗き、ちやつと影を隱す。兩人よろしくあつて、清九郎、屏風の側へ寄り、いろ〱思案して、屏風をとん〱と叩き

ハイ、ちつとお邪魔ながら、物がお尋ね申したうござります。

祐成　ト内より

誰れですな。

清九　ハイ、憚りながら、そこに舞鶴さんは居なさんすかいなア。

祐成　アイ、舞鶴はもう寢やしたが、こなさまは誰れだえ。

清九　イエ、私しは大松屋の清九郎でござります。

祐成　ハア、、ついに聞いた事のない人だが、なんの用でござつたえ。

清九　イエ、外の用ぢやないが、御門でえらう叱りくさつたわいな。この風呂敷包みを

祐成　預かつてくれろと云ふのか。
清九　アイ、左樣ぢや。
祐成　何が入れてある。
清九　舞鶴さんの衣裳でござります。
祐成　よし／＼。そんならドレ、そこへ行てお目にかゝらう。
清九　ハイ／＼、こりやモウ、いかいお邪魔を致しますなア。
ト祐成、以前の襟卷を頰かむりにして、羽織を着て、屛風を明けて出て來る。
祐成　なんの／＼。してお前は、大松屋の手代清九郎どのかな。
清九　ハイ、吳服屋でござります。
祐成　初めて逢ひましたなア。
ト祐成、仔細らしく下に居る。清九郎、襟卷や羽織をつくづく見て、思ひ入れよろしくあるべし。
清九　して、あなた樣は、どなた樣ぢやな。
祐成　手前はなにサ、鍼醫でえす。今まであれに療治をして居つたのサ。
清九　ヘエ、、わたしや又、惡う氣取つてから、お邪魔ぢやあらうと思つた。ハ、、、、。
祐成　時に、預けさつしやるその品を、よく改めて渡さつしやいよ。
清九　イヤ、こりや舞鶴さんが、御存じの小袖でござります。お世話ながら舞鶴さんの、お目が覺めたらお上げなされて下されませい。わしやモウ、とつと早う歸りたうてならぬのぢやわいな。
ト風呂敷を差出す。
祐成　承知々々。して、おてまへは、もう歸りしやるか。
清九　ハイ、わたしやちつと寄る所もあるさかいで、明日こなたの御門の明く時分に、早く上がりまするでござりませう。よろしうお賴み申しまする。
祐成　ハア、聞えた。さては今夜は約束があると見えるわえ。
清九　なんのお前さん。
祐成　隱すまい／＼。なんとおらも、幇間にお連れなさらぬか。
清九　ア、、何を云ひなさるやら、わつけもない。そんならモシ、キツと風呂敷包みを、お渡しなされて下さりませ。

祐成　そりや氣遣ひさつしやるな。慥かに渡すよ。
清九　ハイ、然らばもうお暇申しませう。
祐成　オヽ、歸らしやるか。よく來さしやつた。
清九　ハイ〱。
　ト立ちかゝり
　モシ、お羽織をちよつとお貸しなされぬか。
祐成　なんだ、羽織を貸せ。
清九　ハイ、その羽織はわたしのぢや。ハヽヽヽヽヽ。
祐成　ヤア。
清九　ハヽヽヽ。左樣ぢや。こりやお氣の毒ながら。ハハヽヽヽ。
祐成　ハア、左樣かな。不調法いたしたわえ。
　ト脱いで渡す。清九郎、直くに紐を結びながら
清九　アヽ、又お氣の毒ながら、その綿もわたしがのぢや。
祐成　これもかな。
　ト祐成脫ぐ。
清九　溫かい物でござりますなア。
祐成　とんとおらがのと、同じ事よ。
　ト渡す。清九郎、受取つて
清九　左樣でござりませう。ハヽヽヽヽヽ。

　ト云ひながら、清九郎向うへ入る。祐成、風呂敷包みを持つて屛風を開き
祐成　サア〱、舞鶴、喜びやれ。小袖が生れた。案じるものぢやないぞ。捨てる神あれば拾ふ神ぢや。氣遣ひなしに着衣始めだぞ。
　ト小袖を出して舞鶴に着せる。
舞鶴　それでもアノ。
祐成　ハテ、先刻の手紙で、六兵衞はもう濟んである。これはあの手代から受取つたからは、此方の相對。大きな顏で着やれ〱。
　ト舞鶴、小袖を着る。バタ〱にて奧より小林朝日丸出て、祐成を見付け、側へ寄つて手を取り
朝日　祐成も舞鶴も爰に居たか。奧を一遍尋ね歩いた。
祐成　尋ねたとは朝日丸、なんぞ用でもあつてか。
朝日　用と云ふは外でもない。八幡の三郎が教への通り、犬坊を騙くらかして、まんまと狩場の繪圖の出所を聞き嗅つて來た。喜ばつしやい〱。
祐成　して、その出所とは。
　ト朝日丸、舞臺へ書いて見せる。
　ムウ、そんなら伊豆の次郎と梶原が。

朝日　コレ……尻尾と云ふは。
　トあたりを見廻し、祐成を花道の角へ連れて來て
物臭い奴等が爰へ來て居る。後へ廻つて繪圖面の詮議、
爰で便々と居やうより、おれが手引きをしてやるから、
おれと一緒に、サア〳〵、早く〳〵。
祐成　ムウ、すりや何よりの首尾なれど、短氣者の時宗を、
打捨て行くも氣がゝり。
朝日　ハテ、八幡が居れば氣遣ひない。詮議の手がゝり、
少しも早く。
祐成　狩場の繪圖面、手に入る手段。
舞鶴　祐成さん。モシ、行かしやんすか。
　ト兩人こなし。
祐成　然らば小林、片時も早く。
朝日　おれと一緒に、サア、ござれ〳〵。
　ト朝日丸先に、祐成を引立て、向うへ駈けて入る。最
前より六兵衛、ソツと出て、屛風の内の床へ入り、矢
の根の守を出し、ソツと懷中する。舞鶴、二人の後を
見送り
舞鶴　どうぞ首尾よう、さしやんすりやよいが。あの小林
さんは曾我贔屓、殊にわしが爲には、腹が變れど眞實の
弟。互ひに知らぬ顏するも、木曾の餘類と云ふ事を、
覺られまい爲ばかり。ほんに、それにつけても大切なは、
あの守にある朝日の彌陀。父のお形見ぢやと思へばお懷
かしい。わしが願ひの叶うたも守のお庇。
　ト手水鉢にて手を洗ふ思ひ入れ。六兵衛、屛風へ掛け
た守り袋へ目を付け、取らうとするうち、舞鶴、手を
拭く心にて、床の内の鼻紙を取りに入る。六兵衛これ
にてソツと後より、屛風の外へ出る。舞鶴これを知ら
ず、蒲團の下の紙と守を尋ねる思ひ入れ。六兵衛は外
よりソツと、屛風に掛けたる守を外して取り、懷中す
る。舞鶴、不思議さうに、そこらを尋ねに出る。六兵
衛また後より屛風の内へ入る。この仕組み二三度よろ
しくあつて、トゞ六兵衛は梅の木へ登り、枝を捉へて
上に隱れて居る。舞鶴あちこち探し、合點のゆかぬ思
ひ入れ。入相の鐘鳴る。
舞鶴　ハテ面妖な。慥かに入れて置いた矢の根の袋。祐成
さんは、取りはしやせなんだか。わたしが守もこの屛風
に掛けて置いたのに、今のうちに見えぬのは、どうした
事ぢやぞ……ア、さては、道ならぬ事をした罰が中つ
て、それで不思議に見えぬのか。それでも矢の根はあり

さうなもの。此やうに尋ねても知れぬは、神隱しと云ふのかいなア。

ト謠らへの合ひ方になり、舞鶴、思案のうち、梅ケ枝へ鶯來つて囀ろ仕掛け。六兵衛はこれをソッと追ひ散らす思ひ入れ。鶯は枝をあちこち飛び廻つて花散る仕掛け。舞鶴フッと心付き

オ、、ありや鶯。最早入相。入り顏見えぬ黄昏時、鳥は梢に歸る頃、梅に來て啼く鶯の、一入聲も冴え渡り。

ト梅の木を見上げ

空は朧の春の夜に、合點の行かぬ鶯の聲。

ト朧にて六兵衛は見ぬ思ひ入れ。

ほんに、思ひ出した事がある。あの朝日の彌陀の奇瑞には、血汐の穢れに近付けば、おのれと光明輝きて、闇路を照らす朝日の奇特。もしや矢の根と一緒になり、失せたる方に光を放ち、陽氣を顯はす奇瑞にて、春待ち得たる鶯の、枝に經讀む鶯宿梅。それがあらぬか何にもせよ、いぶせき鳥の聲音ぢやなア。

ト梅をいろ／＼透かし見て、六兵衛を朧に見付け、手水鉢にて寫して見たり、鏡を取出し、とつくと見る。六兵衛は枝へ竦む思ひ入れ。

其處に居るのは人ぢやないか。オ、、六兵衛さんぢやないかいなう。

六兵　シイ／＼。

ト上にてあせる。

舞鶴　エ、、なんぢやぞいな。氣味の惡い。お前はマア、なぜそこへ上がらしやんした……ア、知れた／＼。守を取つたのはお前ぢやな。そこでそこへ隱れさんしたのぢや。ありや大事の守でござんす。大方二品ながら取らんしたのであらう。サア、此方へ返して下さんせ。エ、。

ト舞鶴、足拍子を踏んで云ふ。六兵衛、頭振る。

知らんと云はんすのか。そりや嘘ぢや／＼。サア、出さんせ。お前、出さんせんと、よい／＼、わしが思案がある。それ／＼。

トあたりを見廻し、最前の弓を取つて來て、鏡臺を出し、引出しより剃刀を出し、元結にて弓の鋒先に剃刀を結へ付け、鏡臺の上に乘つてこれを構へる。六兵衛、始終氣味惡きこなし、いろ／＼あるべし。

サア、その守を取らんしたか。取らんせんか。有やうに云はんせんと、これぢや／＼。

ト足や手を切らうとする。六兵衛、さま／＼身を踠く

思ひ入れ。
六兵　ア、コレ、危ない〳〵。サア〳〵、有やうに云ふよ
云ふよ。
舞鶴　サア、早う云はんせ〳〵。
六兵　サア、有やうに云ふ程に、滅多な事せまいぞ。
舞鶴　サア、早う云はんせ。お前、持つて居やんせうがの。
六兵　成る程、守は持つて居るが、外の物は知らん〳〵。
舞鶴　そんならマア、その守を爰へ出さんせ。出さぬと、
これぢやぞいな〳〵。
六兵　ア、、出すよ〳〵。ソレ出した。剃刀で何やら切つ
たやうに、思ひ切つてよく出したらうが。
ト矢の根を下へ落す。舞鶴、取つて見て
舞鶴　こりや矢の根の入つた守ぢやぞえ。
六兵　ヤア、南無三、取違へたわえ。
舞鶴　ソレ見やんせ。二つながら取らんしたのぢや。サア、
わしが守を出さんせんと、切るぞえ〳〵。
ト無性に方々を切らうとする。
六兵　ア、〳〵、あやまつた〳〵、出すよ〳〵。
舞鶴　サア、出さんせいなア。
六兵　ハテ忙しない。息する間もないわいの。

ト懐中より守を出し
エ、、おのれなア。性あるならばよく聞け。先へ出居れ
ばこの憂目はせぬのに、後先になつて、よくおれを苦し
め居つたなア。彌陀ではなうて、無駄ぢやぞよ。エ、、
いま〳〵しい。ソレ、返すワ。
ト下へ打ちつける。舞鶴、守を取上げ
舞鶴　これこそ、朝日の尊像、忝ない。
ト直ぐに首へ掛け、矢の根の守を取つて
定めて祐成さんが、これを尋ねて居やしやんせう。早う
後を追ひ駈けて。
ト身拵らへするせりふのうち六兵衞、梅の木より怖々
にやう〳〵下りて來て、舞鶴を捉へ
六兵　ドッコイ、さうはさせぬぞ。朝日の彌陀を持つから
は、うぬも合點の行かぬ女郎だな。詮議がある。うせう。
ト兩人立廻り。これより合ひ方をかり、兩人、暗がり
のタテ。剃刀の弓と屏風夜着蒲團にてよろしくあるべ
し。奥より八幡の三郎駈け出で、この體を透かし見る
より、六兵衞を見事に投げ
三郎　舞鶴どのか。
舞鶴　祐俊さんか。

六兵　その矢の根を。
ト六兵衞、舞鶴へかゝるを、三郎、引廻し、三人見得よく、チョン／＼にて、
ひやうし幕

一番目大詰　　祐經館の場

役名——岩倉大膳 實ハ伊勢三郎義盛。蒲冠者範頼 實ハ曾我の團三郎。宇佐美三郎祐持。久須美太郎祐政。久須美次郎祐高。狩野之助宗茂。神職、大藤内成景。奥女中、龜菊。同、初風。同、喜瀬川。同、手越。愛甲三郎。賤女、六浦のお弓。阿野法橋全乘。八幡三郎行氏 實ハ京の次郎祐俊。大磯の虎。宇佐美左衞門景光。狩野四郎行光。伊豆次郎祐兼。坂東八郎祐氏。工藤左衞門祐經。

本舞臺、三間の間、東西の見附け柱より三尺程出して、二重舞臺の御簾屋體。正面、金襖、出入りあり、爰に宇佐美の三郎祐持、久須美の太郎祐政、久須美の六郎祐高、狩野之助宗茂、素袍にて立ちかゝつて居る。管絃にて幕明く

祐持　忝なくも、鎌倉どのゝ、御威勢は虎の如くにして、御恩澤は春の如しと、今日これなる祐經の館へ、若君萬壽君の御入り。
祐政　頼朝公、御四十二の御二つ子に渡らせ給へば、其ままお育て申すに於ては
祐高　父君に祟ると申す下世話の譬へ。下々の申し慣はせながら、斯樣な行事を致す事も、神國の禰宜事。
宗茂　さるに依つて、祐經の館は、君の御所より、戌亥の方角に當り、よろしきとあつて、先達て範頼公にも御入り。
祐持　若君にも、最早お入りと存ぜられまする。
三人　いかさまな。
ト向うにて「若君の御入り」と呼ぶ。
四人　最早御入り。
ト四人出迎ふ。三味線入りの下がり葉になり、花道より大藤内、神主の形にて露を取り、御幣を持つて出で來る。後より龜菊、襠裲衣裳、錦を着たる抱き子を懷に抱き、笹龍膽の紋付きたる産衣を二つ重ねて、これを覆うて出る。初風奥女中にて、守り刀に守り袋を付

けて持つて出る。手越、喜瀬川、同じ形。愛甲三郎、麻上下、高股立ちにて付いて出る。侍ひ二人付いて出る。皆々舞臺へ來る。

祐高　若君を警衞の女中方。

宗茂　いづれも御苦勞

四人　千萬に存ずる。

龜菊　あなた方にも、御苦勞に存じまする。この若君は、頼朝公當年御前厄に、御誕生なされしゆゑ、父君樣へ祟ると云ふ、その凶事をお除きなされん爲、七夜のうち、勿體なくもこの若君を、大路へ棄て申し

初凪　上下の隔てなく、役に當る他の人に拾はせ、畏れ多くもその者を借り、親にして御養子分になし給ふが

手越　災ひ凶事を除法のお祈り、それゆゑに

喜瀬　今日このお館へ、若君さまのお入りと云ひ

大藤　何事もこの吉備津宮の大藤内が、祕道祕密の告文を獻げ、頼朝公の御所より戌亥に當るこの館。

愛甲　愛甲の三郎も、御大切なる若君樣を守護の役目。いづれものお迎ひ、御苦勞に存じまする。

祐高　御誕生の若君、七夜の御祝儀に取交ぜ、凶事除法の御祈念とあつて、忝なくも祐經が茅屋へ今日のお入り、一門の我れ〳〵まで、恐悦に存じまする。

宗茂　從ひまして、その災ひを除せられんには、產所より戌亥の方に、若君樣を捨て

祐持　若君の七つ目の干支に當る、水木相性の女に取上げさすれば

祐政　即ちその凶事を避くると、備前の大藤内が告文の訴へ。

大藤　殊さら上元の生れの女を、その役に用ゆるゆゑ、御所は勿論諸侯方へ、その命を下さるゝと雖も、その干支に當り、水木相性にして、上元の生れなきゆゑ。

愛甲　御威勢を以て津々浦々まで、御詮議ありしところに

宗茂　アイヤ〳〵、その七つ目の干支に當る、水木相性して上元に生れたる女子、やうやく金澤の邊、六浦と申す所にて聞き出し、直ぐに召連れ、お次に扣へ居りまする

龜菊　それは幸ひ、早くお呼び出しなされませいなア。

宗茂　ハア。

ト向う揚げ幕に向ひ

お次に扣へさせし賤の女、早くこれへ。

侍ひ　畏まつてござりまする。

ト侍ひ二人、四つ手駕籠にお弓を乘せ、本舞臺へ來り

仰せに隨ひ、賤の女、召連れましてござりまする。
大藤　早くこれへ出ませい。
　ト侍ひ二人にて引出す。お弓、ウロ／＼するこなし。
駕籠の者ども、次に立て。
駕舁　ハア。
　ト駕籠を擔いで、向う揚げ幕へ入る。
皆々　下に居らう。
ゆみ　ハイ。
　トお弓、恟りする。
龜菊　コリヤ／＼、何も其やうに驚ろく事はないわいなア。先達て我が君賴朝公、四十一の御前厄に付き、御誕生の若君の、災ひを除法するには、御所より戌亥に當つて、若君様をお捨て申し、それを若君の七つ目に當りたる、水木相性上元の生れの女子に拾はせ、それを勿體なくも假親と遊ばすとの事。何も怖い事はない。そのお役さへ勤めれば、早々お暇を下され、御褒美をたんと戴く事ぢやわいの。隨分有り難くお請け申しやいなう。
ゆみ　それで心が落ちつきました。私しはこの金澤の近邊六浦と申しまする所の賤の女の、お弓と申しまする者でござりまするが、何の御用がござりまするか、其方は上元の生れで、水木相性たる者と、庄屋が人別にて改めたるとて、無理に駕籠にお乘せなされて、爰までお連れ遊ばし、やう／＼あなたのお物語りで、私しも心が落ちつきましてござりまする。
　ト思ひ入れして
成る程、そのお役さへ相勤めまして、お暇を賜はり、その上、御褒美を下さるゝとの事なれば
龜菊　しかと賴まれてたもるかいの。
ゆみ　賴まれませいないで、なんと致しませう。その又御褒美も此方に少し、入用の事もござりますれば。
宗茂　なんと。
ゆみ　イエサ、御褒美を下されまするると申せば、有り難い事でござりまするると申したのサ。
龜菊　そんなら今日より名も改め、お弓の方と申し、その賤の女の形ではなるまい。それ／＼、申しつけた衣服を持ちやいなう。
手越　畏まりましてございますわいなア。
　ト管絃になり、廣蓋に衣裳を載せて、奥より持つて出で、お弓が前へ置く。
サア／＼、これを召替へなされませいなア。

ゆみ　ハイ〳〵、これは〳〵、御免なされて下さりませ。私しどものやうな賤の女が、此やうな物を着ましては、どうも身動きも致します事はなりますまいわいの。ほんに皆さんが、お笑ひなさりまするでござりませう。

龜菊　それぢやてゝ、その役目を勤むる其方。ハテサテ其方は果報者ぢや。苦しうない程に着やいの。なんの皆が笑ひませう。それ〳〵、とも〳〵手傳うて着せてたもいなう。

手喜　ハイ〳〵、畏まりましたわいなア。お女中さん。

ト手越、喜瀬川、手傳うて、お弓へしやんと襠褊まで着せる。

龜菊　オヽ、よう似合ひなされました。今日よりお弓の方と申しまするぞ。即ち若君様を、ハイ。

トお弓に抱子を渡す。

ゆみ　承知いたしてござりまする。して、御除法の刻限は。

大藤　子の上刻でござりまする。

ト向う揚げ幕にて「院使のお入り」と呼ぶ。

皆々　ナニ、院使のお入りとは。

龜菊　思ひかけない御院使のお入り。若君様はお弓の方へお預け申し、一先づ奥へお供せん。先づ〳〵奥へ。

初風　畏まりました。

大藤　成る程、若君様お入りの様子を、範頼公へも祐經さまへも、申し上げるでござらう。

四人　我れ〳〵は院使の出迎ひ。

ゆみ　左様なら、何れも様、これにお出で。皆さん奥へ。

四人　いづれも。

ト管絃になり、お弓、龜菊、初風、手越、喜瀬川、大藤内、愛甲の三郎、皆々付いて入る。祐高、宗茂、祐持、祐政殘る。又「院使のお入り」と呼ぶ。太鼓謠になり、花道より岩倉大膳、鉢鬘、長上下にて出て來る。小姓一人、大膳が刀を紫の袱紗に持ち添へる。皆々花道の角まで出迎ひ

祐持　遙々と院使の御下向。

祐政　我れ〳〵は祐經家門の者ども。

祐高　お迎ひに罷り出でましてござりまする。

宗茂　イザ先づ、あれへ

四人　お通り下されませう。

小姓　工藤の御一門方お出迎ひ。先づ〳〵、あれへお移りあられませう。

大膳　許し召されい。

卜謡、太鼓の切れにて、本舞臺へ來り、二重舞臺へ上がる。

祐持　院使下向。

四人　趣きは。

大膳　綸命具さに云ひ聞かせん。館の主左衞門祐經、これへお來やれ。

卜奥にて左衞門祐經

祐經　院使の趣き、左藤門祐經、それへ參つて、承知いたすでござらう。

卜管絃になり、奥より祐經、上下にて出て來る。上下侍ひ四人付いて出る。

院使御苦勞に存じまする。して御下向の趣きはな。

大膳　法皇の院勅。

祐經　ハア。

卜平伏する。

大膳　當今、後鳥羽の院御多病に渡らせ給ふゆゑ、爲仁親王君へ、御位讓りあらん結構。その儀に就きて、先達て平家追討の爲、賴朝へお預け下されし日月の錦の御旗、某へ受取り參れとの綸命。斯く申すは禁裡守護の侍ひ、岩倉大膳と申す者。院勅に隨ひ、左衞門祐經、速かに錦の御旗を渡し召されい。

祐經　院使の趣き、具さに承知仕つてござる。さりながら、法皇の綸命とござらば、武將賴朝が館へお越しあるべきところに、この祐經が茅屋へ御入來。憚りながら大膳どのには、御賢慮違ひかと存じまする。

大膳　流石は左衞門祐經程あつて、その不審は尤も至極。武將賴朝は三七日、前厄の愼しみとあつて、違勅も恐れぬ我まゝ無禮。三老たる和田秩父は、南都東大寺修造に立越え、北條時政は俄かの所勞。いま鎌倉に於て一﨟職を司り、旗大將の工藤祐經。さるに依つてこれへ罷り越した。急いで御旗を受取り申しませう。

祐經　院勅の趣き一々承知仕つてござる。左衞門祐經、改めて院使へお願ひ。

大膳　改めて願ひとは。

祐經　祐經お願ひと申し上げるその仔細は、先達て平家追討の砌り、賴朝へ預け賜はる日月打つたる錦の御旗が

大膳　なんと致した。

祐經　便なや、紛失仕つた。

皆々　ヤア。

大膳　ヤ、なんと。

四人　すりや、大切の錦の御旗が。
祐經　ヤレ音高し。いづれも、鎭まり召されい。
四人　ハッ。
　ト鎭まる。
大膳　して、その樣子は。
祐經　錦の御旗の儀は先つ頃、勅使辨の宰相常房公、箱根山に於て、右大將の綸旨を、仁田四郎へお渡し下さるゝ折柄、勅命に從ひ、錦の御旗を獻じ奉りしところ、夜陰の御神拜に及び、勅使を窺ふ曲者あつて、その盜賊の爲に、常房公は敢へなき御最期。その時御旗も紛失いたしてござる。
大膳　なんとお云やる、左衞門祐經。錦の御旗は右大將の綸旨と引替へに、勅使常房卿にお渡し申せしところ、夜陰の御神拜の時、曲者勅使を害せし折柄に、錦の御旗紛失とな。
祐經　如何にも左樣。右の趣きでござれば、正しく勅使を害し奉つた曲者は御旗の盜賊。草を分けて詮議なす折柄又もや今日院使のお入り。紛失なしては源家の瑕瑾、このところを御推察あつて、何卒盜賊を詮議し出すまで、五十日の日延べを、偏へに願ひ奉りまする。

大膳　工藤祐經。モシ、そりや一大事でござるぞよ。
祐經　申し譯なき鎌倉の誤まり。偏へに貴殿の御賢慮で
大膳　日延べの願ひをしてくれろか。
祐經　祐經始め一家の者ども
四人　よろしく願ひ奉りまする。
大膳　それで聞えた事がある、勅使辨の宰相、箱根山に於て不慮の落命。その折柄、庵に木瓜を彫りつけたる鏑矢二筋、落しあつたが證據となつて、曾我と工藤へ賴朝の疑ひかゝり、箱王とやらが業なりと、首討つたとは聞いたが、その時、旗の詮議はどう召された。彼れこれ以て怪しき祐經の心底。日延べは勿論、猶豫ならざるこの場の仕儀。左衞門祐經、御旗を渡した。
祐經　でも、紛失ゆゑに右のお願ひ。勅使を害し奉つた曲者を搦め取り、御旗の行くへ白狀させ、キッと差上げませう程に、今暫らく御容赦を。
大膳　すりや、なんとお云やる。盜賊が出ねば、この大膳に、錦の御旗渡されぬとな。
祐經　御推量の通り、その盜賊を搦め捕るまで、幾重にも院使のお情。
四人　願ひ上げ奉りまする。

全乘　ト奧にて阿野の全乘
　工藤祐經へ、阿野の全乘面談。
　ト管絃になり、奧より全乘出で來る。

祐經　これは阿野の法橋全乘公、祐經へ御面談とは。

全乘　今あれにて樣子を聞きしに、勅使宰相の御落命と云ひ、また思ひがけなく紛失なしたる錦の御旗を、受取りに勅使の入來。彼れと云ひこれと云ひ、心苦しき娑婆の有樣。この凶事も兄頼朝が不仁ゆゑ、三界無宿の全乘が見聞なすも後生の妨げ、今日より諸國行脚の志しと得道いたした。院使の御前、沙門の身と、御容赦下されませう。

大膳　さては聞き及んだ、阿野の全乘とは貴僧の事な。

全乘　なか〱左樣。

大膳　諸國行脚の志し、大膳殆んど殊勝に存ずる。

全乘　それにつき、一紙半錢の手の內を求むる。樹下石上の身ながらも、往來の切手なくては叶ふまじ。この儀祐經へ頼まんと存じて罷り越した。

祐經　そのお頼みの趣きは。

全乘　諸國往來切手が貰ひたい。

祐經　その切手とは。

全乘　日本國中を橫行するに遲滯なき、源家累代麒麟の印の印札が貰ひたい。

祐經　なんと。

全乘　往來切手に麒麟の印の印札が。

祐經　罷り成るまい。

全乘　そりやなぜ。

祐經　ハテ、その麒麟の印は、源家累代軍勢催促の御極印。大切の御判を、諸國修行の切手に欲しいとは、そんな甘い企みに、ふはと乘るやうな祐經だと思し召すか、ハ、ハ、、、。院使のお聞きに達するも氣の毒。先づ御思案をお替へなさるがよからうと存ずる。

全乘　そんならなんと云ふ。祐經、麒麟の印は、軍勢催促の極印なれば、往來切手に遣る事はならぬとは、この全乘が心底を怪しむのか。

祐經　あんまり怪しくないでもござらぬ。

全乘　いんにや、おれが心底より、怪しい左衞門祐經。勅使を殺した奴を詮議し出し、其奴に御旗の行くへを白狀させ、その上で差上げうとは、イケまだるい詮索だ。雲の裏まで詮議をしても、勅使を殺した曲者が、滅多にどうして捕まるものか。便々とした長詮議を、院使には御

得心かな。

大膳　會得いたさぬ。左衛門祐經、勅使を殺害なした盜賊の詮議、その手がゝりでもあるかな。

祐經　手がゝりもござりまする。

大膳　面白い。手がゝりあらば、その詮議の仕樣が見たい。

祐經　お目に掛けませう。大膳どの、いづれ勅使を害し奉つた盜賊めを引ッ捕へ、御旗の在所を白狀の上でなければ、渡し申されぬ今日の當惑。

大膳　すりや、勅使を殺した盜賊が出て、御旗の在所を白狀なさば

祐經　その時キッと差上げませう。

大膳　しかと左樣な。

祐經　刀にかけまして。

全乘　左衛門祐經、詮議の手がゝりが早く見たいワ。

祐經　八幡、參れ。

三郎　ハア。

ト奥より八幡の三郎出で來り

御用でござりまするか。

祐經　院使饗應に、お茶差上げい。

三郎　ハア。

祐經　お菓子持て。

三郎　畏まつてござりまする。

大膳　心遣ひ、無用々々。

ト合ひ方になり、八幡の三郎、奥より茶臺に、銀の茶碗を載せて持つて來り、大膳へ出し、また菓子を積んだる高坏を持つて來て、そこへ据ゑる。

全乘　詮議の手がゝりはどうだ。

祐經　全乘公、餘り性急に仰せらるゝな。最早長閑な春の麗か、祐經が手がゝりと申すも、華奢風流な春の一興。

大膳　大膳もこれで見物いたさう。

祐經　お慰みに御酒差上げませう。お肴には取敢へず、八幡、あの者をこれへと申せ。

三郎　ハア。

ト花道へ向ひ

侍ひども、お次に扣へさせた女を、これへ伴へ。

ト獨吟のめりやすになり、花道より大磯の虎、着流し拔帶にて出で來り、股立ちの侍ひ二人付いて出る。直ぐに本舞臺へ來る。下に居ろと云ふ。虎、こなしあつて下に居る。大膳、これを見て思ひ入れ、全乘、虎を見て

全乘　ヤア、わりやア大磯の虎。

虎　ほんにお前は、箱根で逢うた坊さんか。

全乘　破れ衣に引替へて

虎　そのマア、立派な形はいなう。

三郎　コリヤ〳〵、院使の御前、扣へて居らうぞ。

祐經　八幡、さう仰々しく申すな。大磯の虎、何も怖い事はない程に、祐經が目通りへ參れ。

虎　ハイ。

祐經　苦しうない、近う。

虎　ハイ。

ト躙り出る。

祐經　先日箱根山へ勅使お入りの砌り、饗應に召されたる大磯の虎、その夜陰、常房公の御落命。その死骸の傍らに落ち散つたる、庵に木瓜の鏑矢二筋と、コレこの短刀の鞘。

ト差出して

御亡骸を吟味の折柄、この白檀の鞘。この持ち主を詮議なしたるところに、其方が所持なしたる短刀の鞘と申せしゆゑ、いよ〳〵曾我へもお咎めかゝり、また庵に木瓜の鏑矢ゆゑ、この祐經へもお疑ひ。勅使を殺した曲者を、召捕らねば鎌倉の瑕瑾。さるに依つて大地を穿つても、その盜賊を引ッ捕へ、御旗の在所を詮議して、あれなる院使へお渡し申さねばならぬ。大切なる錦の御旗、勅使を害した曲者、盜み取つたに違ひはない。折惡う其方が所持なす短刀のこの鞘、落しあつたが身の不運。大磯の虎、この短刀の身は、なんと致した。

虎　サア、その短刀の身は。

全乘　落してしまつたであらう。可哀さうに、高が女のその虎を詮議の手がゝりとは、餘ッぽど甘口な侍ひだわえ。思はぬ難儀に捕はれて、心苦しき面やつれ。雨を帶びたる海棠の、眠れる如きその容貌。でも美しいものだなア。可愛らしいその虎が、ナニ、勅使の事を知るものだ。

虎　そりやモウ誓文かけ、お勅使さんの死なしやんした事を、なんのわたしが知らうぞいなア。申し、祐經さま、八幡さん、わしやその時、今樣にこそ召されたれ、なんの樣子も知らん程に、どうぞ堪忍して、お免しなされて下さんせいなア。

三郎　いま祐經さまの御意の通り、勅使常房公の御亡骸の傍らに、其方が短刀の鞘を落しあつたが御詮議の手がゝり。サア、有やうに云はねば、憂き目を見するが、尋常

に白狀せまいか。
祐經　イヤ、荒立てゝ問はずと、恐れて何事も云はぬであらう。氣遣ひするな、何も怖い事はないぞ。コリヤ、この短刀の身は何とした。
　ト全乘を見ながら、この鞘を虎へ投げて遣る。
虎　サア、この短刀の身は。
　ト思案する。
全乘　どこへ遣つたか、知らぬであらう。
虎　イエ〳〵、思ひ出したわいなア。ほんにわたしとした事が、先刻にから、怖うて〳〵ならぬゆゑ、肝心の事をとんと忘れて居た。この短刀は、それ〳〵、なんでござんす。
全乘　滅多な事を云ふな。憂き目を見るぞ。
虎　それでもアヽ、なんぢやわいなア。コレ、坊さん、お前も餘所々々しい。この短刀は、いつちお前が、よう知つてゞござんす筈ぢやわいなア。
全乘　そりや、なぜに。
虎　なぜとは云はれまいがな。その時、箱根でわたしが梶原さんに捉へられ、氣を失なうて居た所を、心を付けて下さんした坊さん。嬉しいと思ひの外、出家に似合はぬ、わしに惚れたのなんのと、嫌らしい事ばかり云はしやんして、逃げる時取落したこの短刀。抱かれて寐ねば返さぬと、戀を叶へぬ意趣に、無體に持つて行かしやんしたからは、この短刀の身は、坊さん、お前の方にあらうがな。
全乘　いんにや、おらァそんな事は知らないワ。
三郎　祐經さま、お聞きあられましたか。
祐經　勅使を殺した奴の緒口が、段々と知れて來るわえ。全乘公、あの虎の手から、無體にお取りなされた短刀の身は、どうなされたな。
全乘　サア、そりやア。
祐經　勅使を殺害召された其許樣が、錦の旗も御所持であらうな。
　ト大膳、全乘に目を付ける。
いんにや、申さにやならぬ。虎が手より奪ひ取つたる短刀を以て、勅使常房卿を殺害なし、錦の御旗は、こなたが取つたに違ひない。尋常に白狀して、御旗を祐經にお渡し召されい。あれなる院使へお渡し申さねば、賴朝公の瑕瑾となる。サア〳〵、速やかに旗を渡した。
　ト詰め寄る。

全乘　ア、コレ、錦の旗を取つた覺えはない。元より勅使を殺した事、この全乘は覺えはないぞ。
祐經　覺えないとは卑怯な一言。慥かな證據は虎が短刀。
全乘　あの短刀はこの全乘か、虎が手から取つたにもしろ。勅使を殺したと云ふ、その證據の短刀がどこにある。よもやどこにもあるまいが。その短刀の身が、勅使常房の死骸の傍らにでもあつたなら、是非もない身の災難と、勅使を殺した曲者になりもしやうが、詮議の種と思つた短刀の身は、あるまい〳〵。たわけた事を。
祐經　何がなんと。
ト この時大膳、煙草をのんで居て、こなしあつて
大膳　祐經どの、勅使宰相どのを殺し、錦の御旗を奪ひ取つた、盗賊が知れましたなら、早速大膳に御旗を渡し召さるであらうな。
祐經　御念にや及ぶべき。お聞きの通り、勅使を害し奉つた盗賊が、どうか知れかゝつて參つたれば、追ッつけ御旗をお渡し申さう。
全乘　なんぼ安請合ひに、錦の旗を渡さうと云つても、この全乘を勅使の殺し手にしたがつても、證據になるべき虎が短刀は
大膳　爰にある。
全乘　なんと。
ト大膳、紙に卷いたる短刀を出して
大膳　覺えがあるか。
ト全乘見て、恟りして
全乘　ヤア、それは。
ト寄らうとする。祐經隔てゝ、しやんと見得。
大膳　箱根山にて、辨の宰相横死の砌り、死骸の傍らにあつたるこの短刀。
三郎　覺えござらば全乘さま、勅使を殺害なされた事、剩さず洩さず尋常に、この場に於てお名乘りなされい。
祐經　もう身動きは、なるまいがな。
全乘　ムウ。
ト思ひ入れ。
大膳　來國久が打つたる短刀、女、其方がのであらうがな。
ト短刀の身を投げる。虎、取上げ
虎　オヽ、こりや私しが大事の守り刀。縁と頭は菊唐草、目貫は金のむら千鳥、身を離すなと父さんが下さんした、大事の〳〵のこの短刀。わたしが心に隨はぬと云うて、その坊さんが無體に取らしやんした時の情なさ。再び父

さんに別れた心地。どうしたら取返されうと、くよ〳〵思うて居りましたに、お前さん、よう持つて居て下さんしたなア。この虎が坊さんに奪はれました、短刀に違ひない。證據にはコレ。

ト短刀を鞘へ納めて

これ見て下さんせ。しつくりと合うたわいなア。

大膳　さうであらう。祐經どの、勅使を害した御旗の盜賊は知れましたぞ。

祐經　如何にも、證據の短刀出る上からは、遁がれぬ所だ全乘どの、勅使をこなたが手にかけたか。

全乘　サア、そりやア。

祐經　白狀せにやア、拷問しようか。

全乘　サア、そりやア。

皆々　サア〳〵〳〵。

祐經　サヽ、なんと。

ト全乘、思ひ入れあつて

全乘　ひよんな所へあの短刀、院使の手には、どうしてマア……忌々しい。

祐經　罪極まつた全乘どの、こなたの望まつしやる麒麟の印の印札を、渡して鎌倉を追放したら、其方の勝手にはよからうが、勅使殺害の申し譯に、切腹と存ずれども、賴朝公の御連枝だけ、お命は乞ひ請けて、伊豆の國に流し者。さう思つて居さつしやい。

全乘　なんだ。この全乘を流罪にする。

祐經　罪科に伏して島守りと、おなりなさるがお爲でござる。全乘さま。

全乘　否だ。現在武將の弟たるこの全乘を、勅使を殺したにもしろ、なぜ祐經が糺明するのだ。

祐經　鎌倉を襲はんとする叛逆人。

全乘　待て。この全乘を叛逆とは。

祐經　諸國修行の往來切手と云ひ立て、麒麟の印を以て、軍勢を催促して、賴朝公を討たん企て。小藤太と一味の連判狀。

ト連判狀を出して見せる。

全乘　ヤア、それは。

トしやんとかゝる。祐經隔てゝ

祐經　この連判狀が出るからは、もう息の音があがるまい殊更この祐經を調伏とは、甘い企みの全乘どの。

全乘　ムウ。

ト思ひ入れ。

祐經　ちよく／＼こなつてござりませサ。
虎　そんなら、あのお勅使樣は、あの坊さんが。でも、
怖いお方でござんすわいなア。
三郎　勅使殺害の罪。全乘公に極まれば、其方のお疑ひも
晴れて、さぞ滿足いたすであらう。
ト祐經に向ひ
祐經さま、この上、全乘公のお身の上は。
祐經　御連枝ながら伊豆の國へ遠流。久須美の六郎、狩野
之助、お來やれ。
兩人　ハツ。
祐經　暫らく全乘どのを、桐ケ谷の館まで警固をしやれ。
兩人　心得てござる。全乘公、イザ、お立ちなされい。
全乘　勅使をおッ殺した事も、十が九つ云ひ伏せたに、思
ひがけない短刀の出所。是非なく罪に伏すと雖も、漢の
高祖は沛邑に起つて、四百年の基を開きしと、正しく我
れは淸和の流れ。いま島守りの身となるも、再び蜂起の
時を待ち、鎌倉山を覆へして、どいつも此奴も、首を洗
つて待つてけつかれ。
兩人　お立ちなされい。
全乘　祐經さらば。供をしろ。

ト三重になり、全乘に祐高、宗茂付いて向うへ入る。
大膳、これを見送り
大膳　頼朝の連枝とは云ひながら、强惡不敵の阿野の全乘。
それは兎もあれ、祐經、もし勅使を殺した奴を詮議し出
さば、御旗の在所を白狀させ、この大膳に渡さうと云ふ
只今の契約、よもや相違はござるまい。某が所持した短
刀より事顯はれ、宰相どのを殺害の罪人、明白に知れる
上は、早速御旗を渡し召されい。受取り申さう。
祐經　その御旗の在所を詮議の爲、全乘を暫らく桐ケ谷の
館にて拷問のその間
大膳　また便々と待たせるのか。
祐經　イヽヤ、只今御旗の御返答を、院使たる岩倉どのへ
申し上げう。御旗もお渡し申さう、と云ひたいが、マア
ならぬ。
大膳　何がなんと。
祐經　玆な院使の似せ者め、三寸俎板見拔いて置いた。も
う、化けの皮を顯はせ、エヽ。
大膳　ハヽヽヽ、祐經、亂心召されたか。イヤサ、本性
なれば捨て置かれぬ。院使に向つて雜言緩怠、似せ者と
は何を以て。粗忽の一言、慮外であらうぞ。

祐經　いんにや、慮外でない。緩怠でない。似せ者と云ふ
その仔細は、院勅を蒙むりながら、當國へ初めて下向の
岩倉大膳、今日祐經が館へ院使に來ながら、いつの間に
箱根三界駈け歩き、勅使辨の宰相御落命の、その御亡骸
の傍らにあつた虎が短刀、羽根が生えて都の方へ飛んで
行つたか。但しは勅使を殺した時、お身樣も一口乘つて
居たか。あの短刀はどうしてお主が手に入れた。祐經が
御旗の返答より、岩倉大膳、サア、この返答がキツと聞
きたいわい。

大膳　サア、それは。

兩人　サア／＼／＼。

祐經　茲な大騙りの似せ者めが。

　ト大膳、こなしあつて

大膳　如何にも似せ者だ。大騙りだ。騙りも騙り、錦の旗
を騙りに來た。天晴れ祐經、きつい者だ。その眼力に見
出されて、目算の目が割れるからは、祐經、うぬを。

　ト手早く拔討ちに切つてかゝる。立廻りにて祐經、こ
の刀を打ち落し、直ぐに刀を取つて大膳が胸元へ突き
つける。

祐經　動き廻ると芋刺しだぞ。

大膳　コリヤ、逸まるな。

　ト思ひ入れ。

祐持　待つた、範賴公のお入りと云ひ

經政　萬壽君も御座あれば

兩人　祐經どの。

　ト立ちかゝつて云ふ

祐經　この場の刃傷、上への恐れ。正しくおのれはこの間
鎌倉に徘徊なすと聞き及ぶ、盜賊の張本、幸崎甚内であ
らうがな。尋常にその名を名乘れ。

　ト祐經、思ひ入れにて大膳を突き放す。大膳、思ひ入
れ。祐經、刀を投げ出す。祐持これを取つて鞘に納め

祐持　お尋ねの甚内。

祐政　尋常に

皆々　繩掛れ。

　ト侍ひ四人、大膳が前に棹に取卷く。

大膳　如何にも、盜賊の張本、幸崎甚内とは、おれが事だ
ワ。

皆々　さてこそな。

　ト大膳こなしあつて、上下衣裳脱ぎ捨て、二重舞臺よ
り下へ下り、取卷いて居る侍ひを蹴散らかし、ドツカ

りと眞中へ直る。

皆々　動くな。

大膳　ハテ、ザワ／＼と蠅虫どもが騷々しい。錦の旗を騙りに來たお泥坊樣だ。動けと云つても、もう一寸も動きやアしない。大勢寄つて繩を掛けろ。引ッ括れ。磔刑合點、獄門承知だ。高で命は野へ出した死人と、早く括し上げてもらひたいわえ。

祐政　慮外なる騙りめ。三寸繩に。

ト立ちかゝるを、祐經留めて

祐經　コリヤ／＼、それに及ばぬ。盜人猛々しいと、ハテなか／＼小氣味のよい騙りだわえ。搦め捕るに及ばぬ。矢張り其まゝ。日本六十餘州は頼朝公の掌の内、詮議があれば何時でも、引ッ括らずは易い事。五日や十日に唐天竺へ、飛び去りもせまいわサ。ハヽヽヽヽ。

大膳　いんにや、行かうと思へば三千世界、どこへ飛ぶも知れないぞ。九萬里に羽を搏ち須彌山に跨つて、四海を呑み干す大鵬同然。小雀の知らぬ事サ。

祐經　大事なはこの場の落着。八幡は虎を次へ伴へ。

三郎　畏まつてござりまする。

虎　そんならわたしに、御詮議はござりませぬか。それで胸が落つきましたわいなア。

三郎　なき名を取りしもお上へ忠義。

祐政　それに替りし大膳不敵。

祐持　汝に繩打ち拷問する。

大膳　蚊人形の齒ぶしに合ふ、おれ樣ぢやないぞ。

祐經　成る程、岩倉大膳と云ふ院使に化け、祐經が館へ來る横道者。なんぞ望みがなくて叶はぬ。

大膳　知れた事だ。命を的に來るからは

祐經　動かず去らず

大膳　望みの物を

祐經　見事汝が

大膳　おんでもない事。

祐經　その一品を。

大膳　追ッつけ手に入れ

祐經　爰を逃げ去る思案をしろ。

ト唄になり、祐經、大膳に思ひ入れあつて、大膳に目を付け奥へ入る。祐持、八幡の三郎、大磯の虎、侍ひ附いて入る。大膳殘り

何から何まで抜け目のない、祐經は甘い酢ぢやアいけない奴だ。こりやア、一思案せずばなるまいわえ。

ト煙草盆を提げて二重舞臺へ上がり、煙草をのみながら思案のこなし。

ムウ……ハテナア。

ト奥にて「祭の刻限」と呼ぶ。これにて大膳立ち上がり、振返つてキッと思ひ入れ。祝詞になり、この道具を此まゝ引いて取る。

向う一面打抜きの座敷、綺麗に仕立て、雪洞をつけたる燭臺を所々に据ゑ、矢張り祝詞にて道具とまる

ト奥より大藤内、出で來り、御幣にて座を淸め、藁の畚を眞中へ直して置く。龜菊、以前の子を抱き、手越、喜瀨川、初風、祐持、祐政付いて出る。

大藤　神道加持の祝詞を以て、不淨を拂つて、地上を淸めましてござりまする。若君樣をイザ。

祐持　除法の建禮。

祐政　今この時。

女皆　拾ふ役目は、六浦のお弓。

大藤　御祈念はこの大藤内成景。

龜菊　御親子さまの因みを斷つ。この藁畚へ。

ト抱子を畚へ入れる。泣き出す。大藤内、御幣を翳して祈念する思ひ入れ。この上大竹を三本結び合せ、もがりにして立て置く。

大藤　何れも暫らく。

皆々　如何にも、ござれ。

ト管絃になりこの人數殘らず奥へ入ると、柴垣を破り、大膳出で來り、あたりを見て、畚の中の子を抱き上げると、赤子泣く。九ツの時計を打つと、奥よりお弓出て來り、この體を見て恟りして

ゆみ　その若君樣を。

ト大膳にかゝる。引ッ摑んで投げる。起き上がると又かゝるを、お弓が顏をキッと見て

大膳　うぬア女房。

トお弓、恟りして、大膳が顏を見て

ゆみ　エヽ、こちの人、こなさんはマア、わしにも云はず家出して、長の月日も音づれなく、忘るゝ暇もなかつたに、ほんにお前はどうして爰へ。また盜みにござんした。

エヽ、こなさんは。

ト取りつくを大膳、刀を拔く。お弓、エヽと退くを、切り倒す。合ひ方かすめ、時の鐘。お弓、切られながら取りつき

エヽ、コレこなさん、わしを切らしやんしたな。なんの仕落ち、なんの科があつて、女房を手にかけるのぢやぞいなう。こなさんが六浦の羽生に居やしやんすうちも道ならぬ盜賊騙り。意見しても聞入れず、身に願ひがあつてするとの一言。くよ〳〵思うて居るうちに、フッと家出をさしやんしてより、所々方々尋ねても、行くへの知れぬは情ない。日頃の固ましい心ゆゑ、憂き目に遭うて、もしもの事があつたかと、コレ、出やしやんした日を命日にして、明けても暮れてもこなさんの位牌に、香華ばつかり手向けて居たわいなう。泣いてばつかり居るうちに、悲しいは母様の御病氣。人參の金に困つて、今日爰へ雇はれて來て、思はずも久し振りで逢うた女房に、情らしい詞もかけず、胴慾にも此やうに。

大膳　やかましい。

ト蹴返して突ッ込まんとする刀に縋り

ゆみ　コレ、手にかゝつて死ぬる命は惜しまねども、その無得心な心と云ひ、その子を連れて行かしやんすは、虜にしてお前の望みを叶へようと云ふ心でござんせうが、大勢に取卷かれて、繩目の恥にもなつたなら、なんとせうと思はんす。邪しま非道の心を止めて、本心になつて下さんせ。拜みます、こちの人、心を直して下さんせ。それが未來の迷ひぢやわいなア。

ト苦しみながら云ふ。

大膳　役にも立たぬ世迷ひ言。早く〳〵たばれ。

ゆみ　そんならどうでも直さぬ心か。こなさんは。

大膳　やかましい。とち女郎め。

ト仰向けに踏み倒し、咽喉笛へグッと刀を突ッ込んで抉り殺し、死骸をこなたへ蹴込んで、刀を拭ふ。赤子泣く。誰がよ〳〵と管絃になり、大膳、この子を搖ぶ搖ぶり、こなしあつて、揚げ幕へ入る。この道具替る。

向う一面に結構なる御簾屋體になる。東の舞臺先に柳、浪板、地の心にて、この中へ好みの石の寶塔なセリ上げる。この脇に竹の林、切る事あり。西の方に非筒、人の出入りあり。管絃にて下座の方より、坂東八郎祐氏、宇佐美の左衞門景光、伊豆の次郎祐兼、狩野の四郎行光、宇佐美の三郎祐持、久須美の六郎祐政。龜菊、手越、喜瀨川、初風、大藤内成景、八幡の三郎出で來り

三郎　お庭の隅々どのやうに探しても

女皆　若君樣のお行くへが
大藤　畚の中にもござらず、鳶が浚つたか。鼠が引いたか、一向に知れませぬ。
祐兼　何にもせよ、只ならぬ一大事。
景光　殘る方なくお尋ね申せど
祐持　お在所が知れぬと云ひ、六浦のお弓が行くへも知れず。
行光　變化の業か。
祐政　何にもせよ。
皆々　ハテ、心得ぬ。
ト皆々思ひ入れ。矢張り管絃にて、向うより、大膳、子を搖ぶり／＼出て來る。皆々これを見て、ギヨツと思ひ入れ。
ヤア、若君樣を。
ト大膳、ヂロリと見て
大膳　拾つたのだ。
皆々　ヤア、なんと。
大膳　騙りをやり損つた行きがけの駄賃、この餓鬼を拾つて歸る子盜人。大きな盜人をしたのおやアない。見遁がしてもらひませう。
ト皆々、左右を取卷き
皆々　コリヤ、どうするのだ。
大膳　野太い奴の。
女皆　若君樣を。
祐兼　身の程知らぬ慮外の匹夫め、そのお子をどなただと思ふ。
景光　忝なくも、武將頼朝公の御嫡男。
行光　萬壽君を恐れもなく
祐持　穢れ不淨の身を以て
祐政　抱き上げたる下郎の振舞ひ。
三郎　この場の慮外はお免しあらん。大切なる若君樣、疾く／＼返し
皆々　奉れ。
大膳　いんにや、奉るまい。この餓鬼は頼朝が、子倅なれば猶の事、拾つて歸るが此方の玉。邪魔せずと退いて通せ。
祐兼　不敵の一言。
皆々　若君樣を。
大膳　わいらが其やうに騷ぎ廻ると、若君と吐かすこの餓鬼を、たつた今捻り殺すぞ。

皆々　コリヤ。
大膳　默つて通せばその通り。頤骨立てると締め殺すぞ。
皆々　エヽ、うぬを。
　ト皆々、柄に手を掛けて思ひ入れ。
女皆　コレ。
　ト留める。
皆々　でも。
三郎　待つた、何れも樣。大膽不敵のこの曲者、劍戟を以て取返さんとなされても、若君樣のお身の上に、もし過まちあつては悔んで返らず、滅多に手出しはなりませぬぞ。
大膳　なか／＼分別のある男だ。蠅虫のやうなこの餓鬼でも、わいらが爲には大事な主人。ドタバタ騷ぐと命がないぞ。
女皆　アレ、若君樣が危いわいなア。
大膳　危ない段か、おれが斯う引ッ捕へたからは、鷲熊鷹が猿を掴んだより危ないものだ。ハヽヽヽヽ。
　ト思ひ入れ。
エヽ情ない、もう拔き居つた。
　トこなし。皆々この子を取りたき思ひ入れ。抱子を出して小便をやる。赤子泣く。この子を懷中に入れて、搖ぶり／＼花道へ行く。女形アブ／＼する。皆々柄に手をかけヂリ／＼と、この模樣にて大膳、花道の中程まで行くと、御簾上がると、蒲の冠者範賴出て
範賴　曲者待て。
　ト大膳、構はず行く。皆々思ひ入れ。
イヤサ、蒲の冠者範賴が留めた。マア／＼待て。
　ト大膳、振返つて範賴を見て
大膳　この餓鬼を拾つて歸るお泥坊樣に、なんぞ用でもあるか。
範賴　其方、未だ騙り殘したものがあらう。イヤサ、まだ望みの物があるであらうが。
大膳　如何にも、こんな事ぢやアない。未だ澤山にあるだて。
範賴　イヤサ、範賴が首でも、望みなら汝にくれう。
大膳　そりや又、相談が出來るわえ。どうで一度はどいつでも、どなたの首でも打ち落して、腰に付けたいおれが望み。とても事なら早いが勝手。
範賴　ムウ、尤も。先づこれへ。
術衆　範賴公の上意。

皆々　あれへ參れ。

ト大膳、頷づき立戻る。皆々、柄へ手をかけ、ヂリヂリと後戻りにて舞臺へ立戻る。よろしく入れ替つて納まる。

三郎　この上、範頼公の

皆々　御賢慮はな。

範頼　大切な若を虜とせられて、其方達もさぞ殘念であらう。尤も至極、さりながら、過ちあつては源家の瑕瑾。ナ、イヤサ、何事も範頼が、思ひ寄する仔細あれば、我れに任せて皆退散。

三郎　でも、大切な

皆々　若君樣を

女皆　あの盜賊に

皆々　渡して置いては。

範頼　サア、大切な若君ゆゑに、源家の瑕瑾とならぬやうにナ、仕樣もやうは、蒲の冠者がこの胸に。先づ〳〵この場は、先づ立ちやれサ。

皆々　ハッ。

ト云ひながら皆々窺うて居る。

三郎　何れも樣。

ト奥へ思ひ入れして見やる。

皆々　如何にも、イザ。

ト合ひ方になり、皆々思ひ入れあつて奥へ入る。赤子泣く。大膳、搖ぶり〳〵、範頼が側へ來る。範頼見て

範頼　ハテ、天晴れ豪傑大丈夫。替ゆべき物なき命を捨て、源家を恐れぬ魂ひ、驚き入つた。その性根ならでなくば、いま日本の武將たる、兄頼朝の嫡男、源家正統の若君を、虜にしたる大膽不敵。イヤモ、餘の者の及ばぬところ。その大丈夫なる魂ひを見込んで、この範頼が頼みたき仔細あり、なんと頼まれてはくれまいか。

大膳　大膽不敵とお見立てにあづかつた上、頼みたいと範頼の一言。殊に依つたら頼まれまいものでもないが、して、その仔細は。

範頼　範頼が味方に附け。

大膳　ヤ、なんと。

範頼　我れも清和の臺を出で、父の仇なる平家の一門、追討の代官を蒙むる折柄、範頼義經に日月打つたる錦の御旗、法皇より忝なくも我れ〳〵兄弟に預け賜はる。その御旗の威光を以て、平家の大敵を討ち亡ぼし、いま源氏一統の代となりたるも、矢張り兄頼朝の勳功であらうか。

大膳　先づその通り。
範頼　君命を請けしより、命を戰場の鏑にかけ、源氏の汚名を雪ぎしに、情なくも兄頼朝、兄弟の因みを斷ち、範頼ばかりか義經が、その戰功も空しくなり、讒者の爲に殘念や、敢へなく判官義經も、高館にて無念の最期。この範頼もその如く、生き甲斐もなき身の有樣、無念の腸止む時なく、兼ねて密かに綸旨を乞ひ請け、兄頼朝を討ち取つて、鬱憤を散ぜんと、寄り〳〵味方を招ぐ某。今その若を虜にする汝が所存、一方の役にも立つべき男子。速やかに味方なせ。
大膳　否だワ。
範頼　なんと。
大膳　幕下に附けば、百萬騎の味方と思へ。さりながら、人の味方に附くやうなおれぢやない。一本立ちで折よくば、日本國を攫むつもりだ。
範頼　すりや、範頼が叛逆に、一味なす所存ないか。
大膳　云ふにや及ぶ。
範頼　誠に豪傑の英雄士、さほどの勇悍にてその子倅一人、虜になさんとは氣が小さい。その若は此方へ返し與へよ。
大膳　そりやアなぜ。

範頼　兼ねて某、その若を虜となし、大義を思ひ立たん計略。
大膳　それ程まで、この子倅が欲しくば、返してやらう。その代りに範頼どの、こなたの所持召さる日月の御旗をおれに渡さつしやい。
範頼　その若を返す代りに、某が預かり奉る、日月の旗を渡せとは、世の常ならぬ烏滸の曲者。して、先づ汝が本名は。
大膳　この場で名乘る本名はないから、おらア只の盗人だ。騙りに來た日月の御旗さへ渡すものなら、この餓鬼は返してくれう。
範頼　イヽヤ、御旗は渡されぬ。
大膳　ハテサテ、それは悪い料簡、其方にあつて今は益なき錦の御旗。また此方にあつて何の役にも立たないこの子倅。戻してやらうか御旗を返すか、サア、どこへ隱して置いたのだ。その在所を云はつしやい。
範頼　無益の論談。御旗は戻さぬ。その若を此方へ。
大膳　欲しくば御旗をこの場で渡せ。サア、その在所は。
範頼　御旗の在所は。
大膳　云はぬか出さぬか。云はずばいつそこの子倅。

ト思ひ入れ。赤子泣く。
範頼　コリヤ、逸まるな。
大膳　オヽ、泣くな〳〵。誰がよ〳〵。くどく吠えると、つめ〳〵しようか。いつそ捻り殺さうか。御旗を渡すか。この返答は。
範頼　サア、それは。
大膳　範頼、なんと。
範頼　御旗を渡さう。
ト範頼、小さ刀を腹へ突ッ込む。大膳これを見て思ひ入れ。忍び三重になり
エヽ、口惜しい。日頃の欝憤散ぜんと、叛逆を企つる範頼が、虜となすべき屈竟のその悴、匹夫下郎に支へられそれのみならず、大丈夫なりと見損じて、大事を深く明かしたは残念至極。範頼が叛逆露顯なし、賴朝が爲に梟木にかけられん事、生涯の恥辱。この上の無念のあるべきかと、是非なく生害なす某。さるにても義經が、高館の落命以後、月光の御旗の行くへ知れず、何者の手に入りしと思ひしところ。今日院使と僞はり、日光の御旗を騙りに來る其方、月光の御旗は、慥かに汝が所持なすと見たは僻目か、よもや相違はあるまいが。

大膳　そりやなぜ。
範頼　云ふにや及ぶ。日月二つの錦の御旗、一つに寄せて義兵と號し、鎌倉を襲はんとする曲者。彼れを思ひ、これを察するに、正に汝は義經の近臣、伊勢の三郎義盛であらうがな。
大膳　ドリヤ。
ト範頼が疵口をとつくと改め
存命叶はぬ冠者範頼、今こそ名乘る、よつく聞け。我れこそ九郎判官伊豫守源義經が忠臣、伊勢の三郎義盛なるぞ。
範頼　さてこそな。
大膳　如何にも貴殿推察の通り、主君義經御落命の砌り、不思議に手に入るコレこの月光打つたる錦の御旗。冥途の土産に拜まれよ。
ト鼓の合ひ方になり、大膳、懐中より錦の旗を出し、植込みの竹を切り、葉を拂つて、これに旗を掛けて押立て、床几にかゝる。範頼これを見て思ひ入れ。
範頼　潔よき義盛のその有様、さほどの家臣を持ちながら口惜しき義經が高館の落命。この冠者範頼諸ともに、賴朝の代官を請けしより、直ちに木曾の強敵を打ち破り、

直さま平家の立籠る、須磨の内裏を瞬くうち、西海四海へぼッ下し、一門殘らず入水の滅亡。

大膳　平家の大敵なんの苦もなく、討ち亡したる勳功も、梶原父子が讒言にて

範頼　情なくも腰越より追ひ返され、無實の汚名に堀川の御所も退散、芳野も落ち延び

大膳　また奥州の秀衡親子、頼む木蔭に雨漏ると、次男泰衡逆心ゆゑ、鎌倉より討手の大軍。不意に押寄せ攻めかくれば

範頼　日頃の軍術智謀も盡き、遂に高館落城して

大膳　御生害ある義經公、思へば、ハ、、ヘエ、、殘念やなア。

範頼　莫大の勳功ある、義經さへもその通り、まして多病のこの範頼、愛憐もなき兄頼朝。今にも讒者の詞を用ひ失はんは案の内。戰場の越し方を思ひ出せば無念の腸。いま生害なす範頼と、義經が憤を散ぜん者、伊勢の三郎ならで外にない。速やかに大義を企て、我れ/\兄弟が修羅の妄執、晴らさせくれよ、三郎義盛。

大膳　おんでもない事。いま範頼の頼みと云ひ、思ひ出せば口惜しき、義經公の御落命。その無念骨髓に通つて忘れ難く、追ッつけ日月の御旗押し立て、義兵を擧げて主君の仇、頼朝が首取つて、奥州岩手に忍ばせ申す、義經公の御公達、經若君の御代となさんも案のうち。範頼義經御兩所の、鬱憤散ずる義盛が叛逆の門手、こなたの手にある日光のお旗、某に渡して潔よく、御最期を遂げられよ。して、御旗の在所は。

範頼　如何にも、兄頼朝を恨まんと、思ひ立つたる我が叛逆、兼ねて味方に頼まんと、大切なる錦の御旗は、一﨟職たる旗大將、工藤祐經に預け置く。彼れも名を得し烏滸の侍ひ、餘人の近付けを戒めんと、伊豆權現の影向石と名付け、大切なる錦の御旗は、あれなる池の中の寶塔、あの岩下に納め置いたり。

大膳　さてはこれなる池中の岩下に、錦の御旗納め置くとや。

ト寶塔をキッと見て、捨子の時のもがりの竹を取つて、思ひ入れにてこの寶塔を刎れ返すと、煙硝火パッと立ち登ると、これを見て、大膳キッと思ひ入れ。遠攻めの頭を打込む。大膳、四方を見やり思ひ入れあつて、花道まで行つて窺ふ。範頼、引廻し思ひ入れ。

ハテ怪しや。一陰納まり、草木も寢入る時なるに、思ひ

も依らぬあの遠攻め。凶事か吉事か何にもせよ。ハテ、
心得ぬ事ぢやよなア。
ト思ひ入れ。御簾屋體より左衞門祐經出る。八人の諸
士、これに八幡の三郎付いて出る。

祐經　汝を取巻く攻め太鼓。

大膳　何がなんと。

ト祐經、ツカ／＼と出て、錦の旗を取上げ

祐經　出かした曾我の團三郎、汝が一命捨てしゆゑ、搦め
難き叛逆人を、網裏の魚となしたわやい。

大膳　さては範頼と吐かしたは、曾我の團三郎であつたか。
ト思ひ入れ。

範頼　如何にも曾我の家臣、鬼王が弟團三郎。果報いみ
じき範頼公の御高顏に、この面の似たを幸ひ、まツ斯う
せよと祐經さまのお頼み。身にも願ひのあればこそ、勿
體ない陪臣下郎の團三めが、武將の御連枝のお小袖を身
に纏ひ、一命捨てたばかりゆゑ、錦の御旗は祐經さま、
まんまとお手に入りましたか。

祐經　云ふにや及ぶ祐經が、苦肉の計り事に落入つたる伊
勢の三郎。

三郎　鎌倉を傾けんとする叛逆人。

祐兼　とても遁がれぬ汝が一命。

大藤　網裏の魚、籠中の鳥。

宗茂　卑怯未練に爭はずと

祐持　速やかに罪科に服し

行光　繩にかゝればその通り。

祐政　手向ひなさば憂き目の端。

祐高　手を廻して尋常に、繩

皆々　かゝれ、エ、。

大膳　殘念や。計略の裏を掻かれ、苦肉の計り事に落入つ
たるか。口惜しや。智謀の網にかゝるとも、虜となした
るこの子悴、いま祐經が目の前で、頼朝が嫡男を、まツ
この通り。
ト抱子を締め殺して抛り出す。

皆々　ヤア、若を。
ト大きに騒ろく。

祐經　大事ない。鎌倉どのを狙ふ叛逆人めらを、釣寄せん
爲、兼ねて祐經が拵らへ置いたその子悴は、名も無き下
郎が孤子なるワ。源氏正統の御嫡男、大切な若君を、わ
いらが手に渡してたまるものか、遁がれぬ所だ、繩かゝ
れ。

大膳　さてはその子伜も、似せ物であつたか、殘念な。例へ十重二十重に取卷くとも、搦め捕らるゝ義盛ならず、ならば手柄に搦めて見よ。

三郎　小癪な一言、ソレ。

八人　義盛、捕つた。

ト大膳にかゝる。立廻りあつて、大膳、植込みの竹に手をかけ、しはめる。刎ね木の仕掛けにて、竹に縋つて奥へ飛び込む。

祐經　この前栽を傳ひて、奥庭を狩出せ〳〵。

八人　心得てござる。

ト皆々逸散に入る。

範頼　サア、祐經さま、兼ねて心を盡されたる、密事の御用を勤め、範頼公にこの面が似たを幸ひ、お頼みに依つて、一命捨てし下郎がお願ひ。健氣な奴とも御稱美あらば、河津が敵は祐經と、この場に於て左衛門さま、お名乘りなされて下さりませい。

祐經　天下の爲、主人の爲、一命捨てし汝が忠義。感じても猶餘りあり。曾我の家臣の團三郎、今こそ名乘る、よつく聞け。三箇の庄の遺恨に依つて、河津の三郎祐安を遠矢を以て射させたる、敵は左衛門祐經なるワ。

範頼　エヽ、忝ない。

ト御簾屋體より曾我の五郎飛んで出で

時宗　祐經、いけッ首渡せやい。

範頼　時宗さまか。

ト八幡の三郎、時宗を留めて

三郎　コレ、待つた時宗どの。一命捨てし今日只今、河津が敵は祐經さまと、慥かに知れたぢやござらぬか。必らずともに逸まるまいぞ。

時宗　出かした團三、よく死んでくれたなア。汝が命を捨てしゆゑ、今日と云ふ今日祐經が、河津の敵と名乘るからは。

範頼　御尤だ。この場に於て御本意を

祐經　遂げたいと思ふは尤も。さりながら、皐月下旬富士の御狩の惣奉行を、承はつたる左衛門祐經、この場の勝負は叶はぬわやい。

時宗　何がなんと。

三郎　コレ、聞きやつたか時宗どの、御狩の惣奉行たる祐經さまへ、この場に於て狼藉なさば、祐信さまや御老母の、お爲にならぬが、マア〳〵待つた。

祐經　ハテ、曾我贔屓な八幡の三郎、正しく汝も身が推量

に違ひなく、河津が落胤、京に育ちし京の次郎
三郎　祐俊と御覽あつたか、祐經さま。
祐經　疾よりそれと覺り知つた。
範頼　さてこそあなたが、京の次郎祐俊さま。御兄弟のよいお力。エヽ、潔よい頼もしい。この團三めは今くたばつて、敵討のお供はせずとも、冥途にござる親旦那へ、この通り申し上げるが未來の先驅け。
時宗　そんならこの場で、本望遂げる事は叶はぬか。
三郎　名乘り合うたを規模にして
時宗　立歸るとは殘念な。寶の山へ入りながら、とは云へ
祐經　空しく歸さぬ祐經が、敵と名乘つたその印は。
ト狩場の切手を二枚投げる。時宗取上げ
時宗　こりや、狩場の切手。
範頼　アノそれが。
ト嬉しきこなし。
祐經　曾我への土產、祐成へ。
時宗　團三がこの深手を見捨てゝは。
範頼　ヤア、この切腹は覺悟の前。御本望の便りを聞くが經陀羅尼。
祐經　團三が忠義に替へ、不忠者の八幡の三郎、暇をくれた。
三郎　アノ、拙者めに。
祐經　コリヤ、暇の印。
ト切手を投げて遣る。
三郎　エヽ、忝ない。曾我への土產。
範頼　今こそ冥途へ。
祐經　いそふれ時宗。
時宗　祐經、さらばだ。
トかけりになり、團三郎、キリ〳〵と引廻す。時宗これを見て思ひ入れ。氣を替へて切手を持ち、八幡の三郎先へ立ち、向うへ入る。團三郎バッタリ落命。祐經これを見て愁を含み、額へ扇を當てる。チョン〳〵
ひやうし幕
幕の内よりドン〳〵にて、この幕を引返すと、向う一面の高塀、爰に次郎祐兼、狩野之助宗茂、四郎行光、三郎祐持、太郎祐政、左衞門景光、六郎祐高、何れも凜々しき形にて、てんでに庵に木瓜の付いたる弓張り提灯を持ち、八人この見得にて
祐兼　叛逆の賊徒の張本、伊勢の三郎

祐氏　鎌倉を襲はんとする。

宗茂　希代の曲者。

祐持　例へ術を盡しても

行光　鐵桶に隱るゝとも

祐政　雲を破り、地を穿つて

景光　探し出してたつた今。

祐高　搦め捕らんは案のうち。

祐粂　何れも、お來やれ。

七人　イザ。

ト皆々下座へ入る。向うより愛甲の三郎、侍ひ多勢連れて出で來り

愛甲　叛逆の大罪ある、伊勢の三郎を搦め捕るうち、大切なるは範頼公守護が肝心、皆參れ。

侍ひ　ハア、。

ト矢張りドン／＼にて、三郎、侍ひを連れて下座へ入ると、この塀を引取る。

ト奥一面に腰瓦、屋根付きの高塀、これに庵に木瓜の高提灯を大分並べ、土手に仕立てたる二重舞臺に、大膳、大童にて凛々しき形にて、拔刀を持つて見得。

右の八人、十手を振つて大膳を取卷く。この見得にて始終遠攻め。

祐粂　叛逆人伊勢の三郎。

皆々　動くな。

大膳　小賢しき惡人ばら。汝等に搦め捕らるゝ義盛ならず。邪魔すると片ツ端から撫切り。そこ退いて通せ。

祐粂　いらざる廣言。

皆々　捕つた。

ト皆々かゝるを立廻りにて、どつこいととまる。これより鳴り物をかりて、立合ひあつて皆々を追ひ込み、大膳、天水桶へかゝつて刀を冷す。これより右の人數出で來り、一人づつしのきのタテあつて、皆々大膳を取卷き、どつこいと極まる。

祐經　義盛、見參々々。

トつゝかけになり、左衞門祐經出て來る。侍ひ大勢、高股立ちにて出る。大膳キッと見て

大膳　左衞門祐經、見參とは。

祐經　叛逆人を見出さん爲、皆祐經が計畧なるワ。討取らんは易けれども、あつたらしき武勇の武夫、頼朝公の御仁德に從ひ、降參なして君に仕へよ。

大膳　降參とは愚なり祐經、身はしゝびしほになるとも、亡君の修羅の妄執、晴らさんとする義盛が存念。二君に仕へる所存があらうか。

祐經　天晴れの勇將。義を見てせざるは勇なしと、鎌倉どのゝ仁政を以つて、一先づこの場は助け歸さん。それとても六浦のお弓が命乞ひ。この三略の一卷を捧げし不便さ。主人の形見汝に取らせん。

大膳　ナニ、主君の形見、三略の一卷とや。

祐經　立寄つて受取れ。義盛、イザ。

兩人　イザ〳〵〳〵。

ト大膳、一卷を受取る。

大膳　一先づこの場は立別れん。

祐經　また重ねての參會は

大膳　戰場で出ツくはさん。

祐經　先づそれまでは。

大膳　祐經。

祐經　義盛。

兩人　さらばだ。

ト三重になり、皆々見得よく引ッ張り、大膳、花道の中程まで行き、本舞臺をキッと見る。祐經、しやんとなつて

祐經　これより二番目始まり

ト打込みになり、大膳、三重にて向うへ入る。本舞臺は皆この見得にて

チョン〳〵と幕

二番目切幕　大礒屋の場

役名——鐵壁武兵衞實ハ大友常陸之助賴國。砂利場のおはぐろ溝アおかん。蝶々賣り、揚羽の長吉實ハ松原十太。夢の市郎兵衞實ハ山城太郎行長。若い者、庄兵衞。同、才助。造り手、お十。おいぶつの文七。うんざり喜太郎。いたちの眼八。えら骨の金兵衞。一子、岩松。傾城、初花。同、初菊。同、大卷。同、大島。化粧坂の少將實ハ池少納言息女歌綾姬。笠原新五左衞門。若葛屋おみな實ハ行長女房春の谷。植木屋彦六實ハ菊池次郎成氏。大礒屋大淀實ハ尾形三郎妹濡衣。荒五郎茂兵衞實ハ尾形三郎惟義。

本舞臺、三間の間、大磯屋の格子先。暖簾口、ぎふ臺の飾付け。東の方にたそや行燈、西の方に天水桶、長床几四脚、毛氈かけ並べ、上の方へ笠原新五左衞門、大小、羽織衣裳、置き手拭、腰をかけ居る。左右に初花、初菊、こなたの床几に大卷、大島、何れも裲襠衣裳、傾城の形。下の方に庄兵衞、若い者の形。いたちの眼八、えら骨の金兵衞、おいぶつの文七、うんざりの喜太郎四人、俠の形の上へ白張を引ッ掛け、粗烏帽子を冠り、てんでに日の丸に鳥を書いた御幣を持ち、鹿島踊を踊つて居る見得。後に竹村の蒸籠五荷積み上げ、これに「進上御若衆中さま、大磯屋内大淀」と書いたる札を張り、東西に九郎助稻荷と書いたる幟、提灯を立て、淸搔に鹿島踊の鳴り物をかむせて、賑やかに幕明く。

庄兵　ヤンヤ〳〵、こりやア田町山谷のお若い衆さま方、御苦勞でござりますな。お前方の鹿島踊は、きついものだぞ。なんと女郎樣方、面白い事ぢやござらぬか。

初花　ソレイナア、庄兵衞さんの云はんす通り、いつもの初午より、今年は賑やかな事ぢやわいなア。

初菊　秋の俄のやうに、皆さんいろ〳〵な趣向して、面白い事でござんす。

大卷　新五左衞門さん、見やんしたか。いつもの太神樂と違つて、鹿島踊とは好い思ひ付きでござんす。

大島　ほんに大淀さんが見やしやんしたら、大抵嬉しがりではあるまい。

初花　少將さんも早う仲の町から、歸つて見やしやんすればよいのになう。

庄兵　旦那、鹿島踊を肴に、一つ上がりませぬか。面白い事でござりますぞえ。

新五　呑まうとも〳〵。庄兵衞や、あの若い者どもは、なかなか器用な踊だ。爰はこの新五左衞門が、くわつと手を廣げて、お神酒を進上だ。一杯づゝ呑んで、また踊つて見せてくれろ。

眼八　心得ました。みんな聞いたか。おいらの鹿島踊が、大盡樣のお氣に入つたとよ。

金兵　そりやア、有り難山の宿山谷田町、今戸切つてもおいら位に、鹿島踊を踊る者があるものか。

文七　九郎助稻荷の初午にやア、いつでもなんぞ思ひ付きをして、やりかけるワ。

喜太　女郎さん方に、可愛がらりよと云ふ張り目に、旦那、

一杯下さりませうか。
新五　遠慮なしに、呑みやれ〳〵。
庄兵　そりやアお酌がこの庄兵衞だ。熱きりと行きなさい
行きなさい。
ト皆々へ注いでやる。四人、有り合せた茶碗杯にて
酒を呑むこなし。淸搔になり、花道より植木屋彥六、
植木の荷を擔いで出て來る。跡より夢の市郞兵衞付い
て出て來る。
市郞　コレ〳〵彥六、待ちやれな〳〵。
彥六　オヽ、これは夢の市郞兵衞さん。この彥六をお呼び
なされたは、鉢植でもお召しなされるのでござりますか。
市郞　知れた事サ。鉢植でも買ふと思はないで、お主を呼
びかけるものか。その大鉢に植ゑてある紅梅を、この市
郞兵衞がお求めなさるワ。いくらでもよい。そこへ出し
やれ〳〵。
彥六　この鉢植の紅梅でござりますか。
市郞　オヽ、それよ。
彥六　これはどうもお約束があつて、持つて參りましたゆ
ゑ、どうも上げ憎うござりますわえ。
市郞　なんだ、おれにやア賣られない。

彥六　サア、今も申す通り、お約束があつて持つて參りま
したれば、どうもこれは。
市郞　賣れないか。これサ、いくらでもいゝが、錢はいさ
くさがない。この鉢植はおれが、
ト鉢へ手をかける。
彥六　モシ〳〵、これは御免なされませ。
市郞　いんにや、おれが買つたよ。
彥六　イエ〳〵、御免なされまし。
ト淸搔にて兩人、本舞臺へ來る。
女皆　彥六さん、ござんしたか。
男皆　市郞兵衞さま、ござりましたか。
市郞　こりやア若い者ども、九郞助稻荷の初午に、鹿島踊
と突ん出たな。
女皆　彥六さん、爰へござんせいなア。
彥六　これは〳〵女郞樣方、いつも〳〵御全盛で、おめで
たうござりまする。庄兵衞どの、初午でお賑やかでござ
りませうな。
庄兵　今日は仕舞ひよりたんとあつたで、大抵忙がしい事
ぢやアござりませぬぞ。
新五　市郞兵衞か。おぬしや今來たか。

市郞　こりやア新五左衞門さま、お早うございましたな。わしもお前が、出町で云はしつた事が氣にかゝるゆゑ、この植木賣りの彥六を尋ね廻つたところが、やう〳〵伏見町の河岸で逢うたに依つて、この鉢植をな、わしが買はうと思うて。

新五　成る程〳〵、そりやアマア、よく氣付いた。コレ、エヽ、植木賣りの彥六とやら、あの市郞兵衞が買ひかゝつたその鉢植の紅梅、その買ひ主はこの新五左衞門だ。おれが首たけ惚れて居る少將が、病氣見舞ひにやるのだ。値段に構はず、そこへ出せ〳〵。

市郞　ほんにこりやア、植木賣りの果報者と云ふのだ。その紅梅を旦那に賣つて、いくらでも取りたい程取りやれ。ナ、旦那、左樣ではございませぬか。

新五　知れた事、そこは又笠原大藏だ。値段に構はず、なんでもその鉢植を、此方へ取りさへすりやア、ナ、市郞兵衞。

市郞　左樣サ。

彥六　イエモウ、それ程に私しが植木を御贔屓で、買ひ取つてやらうと仰つしやるものを、上げませぬとは不調法とも思し召しませうが、この紅梅は、この大磯屋の太夫さん、大淀さまにお約束でございます。

眼八　ハテ、この男は、馬鹿律儀な男でござるわい。その鉢植を新五左衞門さまに賣つて上げ

金兵　大淀が約束したら、また持つて來てやりやれな。

彥六　仰しやる通り、左樣いたせばようございますけれども、大淀さまも何かお願解きに、九郞助稻荷さまに、お上げなさると申しまして、堅くお約束ゆゑ、どうもこれは上げられませぬ。外のもございますれば、どれなりと外のを御覽じませ。

新五　イヤサ〳〵、外の鉢植は望みにない。その紅梅の鉢植を、なんであらうと、この新五左衞門が買ひ取つたぞ。

彥六　なんぼ其やうに仰しやりましても

市郞　コレエヽ、彥六、相手が違うてお武家樣だぞ。詞の甘いうち、早く賣つて上げろ。

彥六　ぢやと申しましても。

新五　ならぬと吐かすのか。この憎くい賣人めが。武士が買ひかけては、否でも應でも買はにやア置かぬ。

彥六　そりやお前樣、御無禮でございまする。

新五　無體でも非道でも

市郞　頓着なしにお買ひなされまし。

新五　合點だ。

ト鉢植へかゝろ。彦六支へるを、市郎兵衞、留める。ちよつと立廻り。女形皆々立寄り

女皆　そりや無粹ぢやぞえ、笠原さん。

庄兵　モシ〳〵大磯さん。女郎樣方があのやうに、仰しやる事なら、

初花　大淀さんが約束のその鉢植、無體に買ひやんすは譯が惡いぞえ。それ程欲しう思はんすなら、大淀さんに貰うたがよいわいなア。

市郎　こりやア、よい事を囀つたわえ。新五左衞門さま、大淀が約束の鉢植なら、矢張り大淀に買はせて、その上でお前の方に。

新五　成る程。大淀が手から買ふがよい。併し、大淀が否とも云はゞ、彼奴を揚げ詰めにして置いて、鐵壁武兵衞に云ひ込ませてもらふがよい。

彦六　左樣なされて下されば、この植木屋も立つと申すものでござります。

市郎　モシ、それがようござりまする。鐵壁武兵衞と噂を仰しやりやア、アレ〳〵向うへ。

女皆　少將さんと一緒に

新五　ドレ。

皆々　ほんになア。

ト鳴り物入りの出の唄になり、花道より若草屋おみな、茶屋の女房の形にて、扇蝶の紋付いたる大提灯を提げて出て來る。後より鐵壁武兵衞、頭巾羽織衣裳、一本差し、下駄かけ。男蝶、磯路、禿にて武兵衞が袖に取りつき、化粧坂の少將、裲襠衣裳、傾城の形、駒下駄にて出る。遣り手付く。後より蝶々賣り揚羽の長吉、淺黃の頭巾、染め物の木綿衣裳やつし、草鞋がけにて風呂敷を首より掛け、ひごに付けたる蝶々を大分持つて出て來る。皆々花道にとまる。

磯路　申し武兵衞さん、今日は九郎助さんの初午ぢやに依つて

男蝶　面白い鹿島踊が出たと云ふ事でござんす。早う行て

兩人　見ようぢやござんせぬかいなア。

武兵　オヽ、そりやよからう。鹿島踊とは珍らしい見物事だ。大方田町山谷の若い者どもが思ひ付きであらう。少將、その鹿島踊を見て、ちつと氣を浮き〳〵と持つたがよいぞや。でもマア、塞いだ顏つきぢやなア。

みな　成る程、武兵衞さんのおしやんす通り、思ひあり氣

な少將さんの顏持ち。この間は病氣と聞きやんしたが、今日はちつとお心がよいかして、仲の町よりお出で。その御病氣の元はと云へば、お前の可愛がりなんす時宗さんが

少將　アヽ、コレ〳〵、おみなさん、其やうな事云うて下さんすな。久しう見えぬ時宗さん。

長吉　その時宗さんの代りには、替へ紋にお付けなさるゝこの蝶々。每日廓へ參りまして、この揚羽の長吉が、一番の得意と云ふは少將さま、今日も又、お買ひ取りなされて下さりませい。

少將　買はいでわいなア。主の替へ紋のその蝶々、それでも見るが心の樂しみ。

武兵　イカサマ、さう思うてもらはねば、客の心も嬉しうないぢや。その心意氣でなければ、惚れて通はるゝものではない。ナウおみな。

みな　左樣でござりまするとも。お前も夜每お通ひなさんす大淀さゝ。今宵はしつぽり御見があるでござんせう。

武兵　サア、それを樂しみに、今宵も出かけた鐵壁武兵衞。

みな　ちつとも早う。

武兵　そんならあそこへ、少將。

少將　武兵衞さん。

武兵　みんな、おぢや。

男藝　アイ〳〵。

ト淸搔にて、皆々本舞臺へ來り、武兵衞、少將、床几にかゝる。

女皆　少將さん、今かいなア。

市郎　皆さん、早かつたなア。

四人　親分、ござりましたか。

市郎　新五左衞門さまも、先刻からお待ち兼ね。

庄兵　この頤も首も長くして待つて居りました。

武兵　こりやア新五左衞門さま。お早いお出でござるな。全盛の大夫達、まだ大淀は參らぬか。

女皆　まだぢやわいなア。

新五　その大淀を待つて居る所へ、鐵壁大盡が同道にておれが首だけの少將を、連れて來るとは有り難い。推して座敷を勤めてくれる、少將が病氣見舞ひに、この紅梅の鉢植を遣らうと買ひかゝれば、あの植木賣りが吐かすには、大淀に約束したれば賣れぬと云ふゆゑ、そんなら大淀に逢うて貰はうと思ふ所へ

市郎　先生のお出でだ。大淀とは馴染の鐵壁大盡、爰の所

をサッと捌いて、あの鉢植を笠原さまに
新五　否でも應でも所望する。
武兵　そりやお氣遣ひなされまするな。この武兵衞が馴染の大淀が、約束したその鉢植。わしが呑み込めば濟む事ぢや。新五左衞門さま、大淀へのお心遣ひなしに、御所望ならお求めなされませいサ。
彦六　イヤ〳〵、憚りながら武兵衞さまに申し上げます。この鉢植は、お願解きになされると申すお約束、今日ばかりは、これを上げまする事は、致し憎うございまするて。
武兵　わりや誰れだ。
彦六　私しは請地村の植木賣り、彦六と申す者でございます。御粹法の武兵衞さま、只今のところお聞分け下さりませうなら、有り難うございまする。
武兵　なんと云ふ。大淀が願解きにすると云ふか。
彦六　左樣でござりまする。
武兵　これも尤もだ。新五左衞門さま、外の鉢植になされてはナ。
市郎　コレサ親分、外の鉢植にはなされませぬワ。
武兵　そりやアなぜ。
市郎　サア、その譯は何サ、あの鉢植の中には
彦六　なんぞございますかえ。
市郎　何があるものだ。あの鉢植の中にやア、梅の木の根があるわサ。根があるに依つて、サア、根がある事だに依つて
武兵　どうしたと云ふのだ。
市郎　エ、コレ、自烈たい。新五左衞門さま、お前、樣子を仰しやりまし。
新五　サア、その譯と云ふは……何にもないが、只この鉢を少將に遣りたいが、武兵衞、大淀へよいやうに云うてくりやれ。これはおれが。
ト鉢植を取らうとする。彦六留めて
彦六　どうも上げられませぬ。
新五　しつこい野郎め。なんであらうと、この新五左衞門が買ふのだ。退きやアがれ。
ト彦六を突き飛ばして鉢植を取らうとする。おみな留めて
みな　マア〳〵、お待ちなさんせ、お前のが今聞いたところが御尤もでもござんせうが、彦六さんの云はしやんすも尤も。大淀さんに約束して、持つて來たと云はしやん

す物を、無理に買はうとおしやんすは、ちつと不通でござりますぞえ。

少將　笠原さん、わたしが病氣見舞ひに下さんすその鉢植、わたしや欲しうないぞえ。

新五　われが欲しくなくつても、おれが欲しい。あんまり見事な花だに依つて、なんでもおれが

彥六　イヤサ、なりませぬ。

ト支へる。

新五　商人に似合はぬ、賣りともながる怪しい野郎だ。支へ立てゝ面倒だ。若い者ども、取つて打ッちやれ。

眼八　合點でございます。彥六來い。

ト文八、眼八、彥六にかゝるを、長吉これを支へて立廻り。

皆々　此奴はなんだ。

長吉　わしやア、毎日廓へ入込む蝶々賣り、揚羽の長吉と云ふ者でごんす。商人は相身互ひ、無體な事をさつしやるゆゑ、ちつとお邪魔をしたものサ。

新五　小癪な餓鬼めだ。この刀が目に見えぬか。武士の前とも憚らず、びくしやくひろぐとぶつた切るぞ。

長吉　エヽ、そりやア怖い事でござりまする。そのぶつた切ると云はつしやる鼻の先へ、お杯を參りませう。

ト側にある大杯を取つて新五左衞門へ打ちつける

新五　慮外な餓鬼めが。ソレ、やるな。

皆々　合點だ。

長吉　そりやア御免だ。

ト駈けて揚げ幕へ入る。庄兵衞、文七、眼八、喜太郎、金兵衞、皆々長吉を追ひ駈けて揚げ幕の際まで行くと、幕を切つて、才助、若い者の形、三つ扇の付いたる大提灯を提げて出る。皆々これを見て

皆々　大淀さんか。

ト揚げ幕の內にて

大淀　わしぢやわいなア。

ト鳴り物入りの唄になり、花道より大淀、裲襠衣裳、傾城の形。若い者、長柄をさしかけ、女蝶、浪路、禿の形。お十、遣り手の形にて付いて出て來る。大淀、長吉を裲襠の下へ隱して出て來る。若い者五人、ヤリヤリと本舞臺へ立戻る。大淀、花道の中程にてとまる。

女蝶　アレ、浪路、見やつたか。太夫さんのござんすを見て、鹿島踊が皆逃げて行つたわいなア。

浪路　ほんになう、わしや又、たんと萬歲が來たかと思う

たわいなう。
兩人　オヽ笑止。
大淀　その萬歲の德若も、春告げ草の梅ヶ枝に、昔を問へば春の月、朧夜毎の浮き寐鳥、籠を離れぬ苦界の身すがら、いつを限りのこの勤め、思へばほんに苦の世界ぢやなア。
長吉　太夫さん、私しが事をお頼み申しまする。
大淀　氣遣ひしやんな。わしがよいやうにしてやらうわいなう。
才助　喋々賣りの長吉は仕合せ者。何を仕出かしたか、大きな目に遭ふ所を、太夫さんのお頼みで、痛い目をしないぞよ。
お十　太夫さんもあんまりお心好しだ。いたづらをする餓鬼なら、打ッちやつて締めさせるがようござんす。その長吉より、アレ〱、あそこに武兵衛さん、新五左衛門さんもお出でなさんす。早くあそこへ、大淀さん。
大淀　それ〱、少將さんに逢ひたい事もある。そんなら早う、子供、來や。
女浪　アイ〱〱。
　ト清掻になり、大淀、皆々舞臺へ來る。長吉、補襠の下へ隱れて居る。
女皆　大淀さん、ござんしたかいなア。
大淀　皆さん、お盛んでござんすなア。
　ト彥六、大淀を見て
彥六　こりや大淀さん……私しでござりまする。
大淀　彥さんかいなア。今日も能う商ひに出て來て下さんしたなア。
隈八　コレ〱大淀さん。補襠の下に隱れて居るは
金兵　喋々賣りの長吉め、爰に居やアがるわえ。
文七　新五左衛門さまに、杯を打ちつけた
喜太　いけッ太い餓鬼めでごんす。
庄兵　お客樣方に慮外をされちやア、若い者のおとがひ、庄兵衛が立ちませぬ。その餓鬼めをそこへお渡しなされませ。大淀さま。
大淀　なんと云やる、庄兵衛。わしが補襠に隱れて居る長吉を、爰へ出せと云やるか。そりやならぬわいなう。
新五　いんにや、ならないとは、この新五左衛門が云はせぬ。武士の某に慮外をひろいだ商人の素丁稚。身が眞ッ二つにせにやアならぬ。そこへ出せ。
大淀　新五左衛門さん、そりやマア、大抵な事ではござん

せぬが、其やうに腹を立てしやんす、その譯は。
市郎　その譯と云ふは大淀さん、その植木屋の彥六から起つた事サ。
大淀　なんぢや、アノ主から起つた事とはえ。
彥六　サア、お聞きなされて下さりまし。お前のお約束になつた紅梅の鉢植、今日、コレ此やうに、花の澤山あるのを、吟味して持つて參りましたを、この新五左衞門さまとやらが、なんでも買はねばならぬと仰しやりますゆゑ、これは大淀さまへお約束で、どうもあなたへ上げられぬと申したれば、無體な事をなさるゆゑ、商人同志の長吉が見兼ねて、つい、アノ、慮外したのを、御立腹でござりまする。そこをようお詫びなされて下さりませい。お賴み申しまする。
大淀　それで聞えたわいなア。こりや新五左衞門さんでもござんすまい。この大淀が約束して、取寄せたその紅梅の鉢植を、無體に買はうと云はしやんすは、惡いぞえ。それ程お前が、鉢植の梅が欲しいと云はしやんすなら、これに限つた事もござんすまい。外のを買うてやつたがよいわいなア。
新五　イヤ〳〵、外の鉢植は氣に入らない。なんでもその紅梅が、この笠原が望みだ。それだに依つて、ナア市郎兵衞。
市郎　さうでごんす。外のにすれば何も云ひ分はないが、新五左衞門さまが、その鉢植が欲しいと云はつしやるのは、その紅梅の鉢植の中に
大淀　なんぞあるかえ。

ト市郎兵衞、惘りして

市郎　鉢植の中に、梅の木が植ゑてあるから、欲しいと云はつしやるのだ。
新五　その妨げをひろぐ上に、慮外をひろいだ燕ツ啣りめ。その分ぢやア差措かぬ。大淀、そこへ出してもらはう。
大淀　ならぬわいなア。
新五　そりやア、なぜ。
大淀　ハテ、懷へ入る鳥は、心ない狩人も助けると云ふぢやアないか。ナア、まして人立ち多い廓の眞中、賴むと云ひかけられて大淀が、裲襠の下へ隱した蝶々賣りの長吉、爰へ出してお前方の、存分にしやんせと云うたらよからうが、それぢやアわたしが立たぬわいなア。
庄兵　成る程、そこもあるわえ。
市郎　蓋もあるわえ。

新五　默れ。それぢやア大淀が顔が立たうが、この新五左衞門が面が立たない。この譯を付けてもらひたい。

大淀　サア、其やうに思はんすなら、斯うぢやわいなア。この鉢植はお前に上げやんせうが……わたしも願解きに取寄せたこの紅梅、神さんへ上げて、キッとお前に上げる程に、引け四ッまで待つて下さんせ。それまでに願上げをして、お前に上げるわいなア。

新五　そんならなんと云ふのだ。引け四ッ過ぎにはこの鉢植を、この新五左衞門にくれると云ふのか。

大淀　サア、それぢやお前の顔も、立ちさうなものぢやあらう程に、この長吉は、もう堪忍してやらしやんせいなア。

新五　よいワ。その鉢植をさへおれが手に入れれば、餓鬼めが慮外も免してやるが、必らずともにその紅梅、こなたの座敷より外へ遣るまいぞ。

大淀　そりや合點ぢやわいなア。コレ長吉、氣遣ひない程に、爰へ出や〳〵。

ト長吉、裲襠の下より出で

長吉　太夫樣、お前のお願ひで、有り難うござりまする。

彥六　おれを贔屓にして、とんだ目に遭はうとした。此方へおぢや〳〵。

市郞　シタリ、可愛らしい口元で、今のせりふの云ひ廻しうまいものだ。それでこの場の譯は濟んだ。發明と云ひ器量と云ひ、親分の鐵壁どのが、首たけも尤もだ。大淀さん、イヤ、けうといものだ。

武兵　最前の取捌き、廓へ入込む商人までに、情をかけるれて、每夜さ通ふこの武兵衞。一通りの商人にさへあの大淀太夫、器量よければ心まで、情深いところにほださ情一座の座敷に連なつて、客になり色になり、馴染重ねて逢うたなら、どのやうな情にあづからうかと、思ひ廻せばこの鐵壁も、碎ける程登り詰めた武兵衞、その商人に肖かつて、おれも情にあづかりたいわえ。

新五　いんにや、その情はござるまい。廓中をブウ〳〵を云つて歩く、荒五郎茂兵衞と云ふ奴と、腐れ合つて居るとの噂。

市郞　そりやア、おいらも知つて居るだて。

彥六　エ、、そりやアとんだ事ぢやが、コリヤ大淀……さまが、よもやそんな事を。

新五　イ、ヤ、心中立てゝ腐れ合つて居るに違ひはない。

彥六　エ、。

ト恂りして市郎兵衞が方に轉ける。

市郎　何をしやアがる。この植木屋め。味な事を恂りする男だはえ。

武兵　例へ大淀が、その荒五郎とやらと、懇ろにして居ればとて、地色をするは女郎の常。間夫狂ひをせくなどとは粹のせぬ事。ナニサ、どのやうに狂うて居ればとて、この鐵壁武兵衞は大盡客、金に飽かしていつまでも揚詰め。大淀、これぢやア憎うはあるまいがな。

新五　鐵壁、そりやアあんまり蟲がよい。大淀が茂兵衞に腐れ付いて居る事は、この新五左衞門が、よく知つて居る。

彥六　よう嘘を云うたものぢや。どうしてマアあれが。

ト大淀が側へ來て

嘘ぢやあらうがな。嘘でなうてどうするものぢや。そんな事をして堪るものか。

ト大淀、知らぬ顏して居る。

皆々　堪るものとは。

彥六　堪るものとは、わしが借金の事サ。

市郎　おきやアがれ。そんならいよ〳〵淀先生は、あの茂兵衞に。

武兵　ハテサテ、間夫狂ひしても大事ない。この鐵壁は客で逢ふわサ。客で逢ふからは、金銀は愚、命づくの望みでも、云ひかけられたら否とは云はぬ。サア、そこが大通の武兵衞だ。これでは大淀、抱かれて寢ても大事ありさうもないものぢや。返事はどうだ。

ト大淀こなしあつて

大淀　武兵衞さん、其やうに事を分け、不束なわたしに、それ程までに云うて下さんすは、嬉しいと云はうか、忝ないと云はうか。そのお心にほだされて、抱かれて寢たい

ト彥六、大淀が顏を見る。

と云ひたいが、否でござんす。

武兵　なんと。

大淀　どうした事やら、茂兵衞さんが

武兵　可愛いと云ふのか。

大淀　因果なこつちやわいなア。

彥六　エヽ、そりやマア、ほんに。

ト大淀の方を見ながら、思はず市郎兵衞が胸倉を取る。

市郎　オヽ、痛い〳〵。無性におれを振り廻すが、この植木屋めは、梅の木を櫻だと云ふさうだ。

彥六　そりやア、なぜ。

市郎　ハテ、氣が違つたさうだ。

　ト突き放す。

皆々　何を云はつしやる。

武兵　コレサ大淀、お主が可愛いと思ふ茂兵衞を、間夫にして大事ない。地色をしても構はぬと、客で逢ひに來るこの武兵衞を、それ程までに嫌ふのか。

大淀　サア、爲になる客を袖にして、浮氣とも見えやんせうが、勤め離れた戀の意地づく。武兵衞さん、マア、思うて下さんせいなア。

武兵　よく／＼貧乏神がたかつて居るな。金銀を澤山に持つ、丸　者の鐵壁武兵衞、戀なればこそ此やうに、手を替へ品を替へて口說くのに、わりやアいつも武兵衞を嫌うて、荒五郎茂兵衞に心中立てるのか。

大淀　オヽ、くど。

武兵　ムウ。

　ト柄に手を掛けて思ひ入れ。おみな、新五左衞門、これを留めて

みな　モシ武兵衞さん、大淀さんのあのやうにおしやんすをお聞きなんしたら、お腹も立ちませうが、ハテ、戀は木折りに行かぬもの。

少將　氣を長う持たしやんしたら、大淀さんの心も解けて

みな　逢ふと云はしやんすまいものでもないわいなア。

大淀　否でござんす。深間と浮名を立てられた茂兵衞さんに、アイ、いつまでも心中立てゝ

彥六　そんならどうでも。

　ト思ひ入れ

大淀　コレ……ハテ、氣遣ひさしやんすな。コレ、こなさんの持つてござんした紅梅の鉢植は、この大淀が堅い約束。それぢやに依つて、これはわたしや買ふ程に、必らずとも氣遣ひせぬがよいわいなう。彥六さん。

彥六　成る程、さう仰しやればマア、心得ました。

大淀　この鉢植はわたしが座敷へ、子供、持つておぢや。

女浪　アイ／＼／＼。

　ト女蝶、浪路二人にて、この鉢植を取上げる。

武兵　大淀待て。

大淀　用があるかえ。

武兵　あの茂兵衞にいつまでも、心中立て通すか。

大淀　サア、わたしが心の色も香も、知る人ぞ知るこの梅の

武兵　落花狼藉今の間に
大淀　花を散らそとさんすのか。
武兵　その紅梅の血汐に染めて
大淀　意氣地を立てる茂兵衛さん。
武兵　貰ひかけても
大淀　未來まで
武兵　云ひ交したと誓文に
大淀　命にかけて茂兵衛さんに
武兵　あの茂兵衛めに
大淀　命にかけて
武兵　逢ひ通すか。
大淀　くどいわいなア。
武兵　エ、うぬ。
　ト思ひ入れ。
大淀　武兵衛さん、マア、さう思うて下さんせいなア。
　ト唄になり、大淀、思ひ入れあつて、暖簾口へ入る。
　女蝶、浪路、梅の鉢植を持つて入る。
みな　サア、少將さんも、奥へお出でなさんせ。
少將　そんならおみなさん、長吉もおぢや。
長吉　心得ました。いつものやうに、蝶々をお買ひなされて下さりますかえ。
みな　サア、お出でなさんせ。
　ト矢張り合ひ方になり、少將先に立ち、おみな、長吉付いて入る。武兵衛、大淀が後を見送つて思ひ入れ。彦六、思ひ入れあつて、奥へ行かうとするを、新五左衞門留めて
新五　待ちやアがれ。
彦六　なんぞ御用でもござりますか。
新五　ある段ぢやアない。武兵衛、先刻からこの二才めが素振りを見るに、どうも合點がゆかない野郎めだ。お主なんと思ふのだ。
武兵　イカサマ、只の者とも違ふ荒五郎茂兵衛。大淀が口先で云ひ廻すやうに、色に溺れる野郎とも見えぬ。彼れこれ思ひ廻せば、大淀が誠の間夫は、外にあると見えたわえ。
市郎　親分、そこらが感の付け所だ。
皆々　よい所へ氣が付きました。
新五　その糸道を分ける手がかりは、その青二才め、怪しい奴だ。わりやア大淀が間夫を知つて居るか。
彦六　イ、エ。

新五　知らぬとは云はせぬ。
彦六　モシ〳〵、滅多な事を仰しやりますな。
武兵　大淀が間夫を知らないものが、荒五郎茂兵衞と腐れ合つて居る事を聞く度に、なぜわりやアびくしやくした。
彦六　サア、それはナ。
新五　但し、うぬが大淀の
皆々　間夫か。
彦六　イヽエ、存じませぬ。
新五　そんなら、外の間夫を知つて居るか。
彦六　サア、それは。
皆々　サア〳〵〳〵。
新五　二才め。
皆々　どうだ。
彦六　ヘイ。
武兵　引ッ立てろ。
新五　野郎め。
皆々　うしやアがれ。エヽ。
ト向うにて
茂兵　待つたゝ
皆々　待てとは。

茂兵　男達の惣本地、荒五郎茂兵衞が留めました。おぢい達、一番待つてもらひませうぞ。
ト鳴り物入りの男達の出の唄になり、花道より荒五郎茂兵衞、着流し一本差し、下駄がけにて出て來る。新五左衞門、彦六を引立て、皆々花道へかゝるを、荒五郎茂兵衞、押し戻し、彦六を圍つて、しやんと見得。
皆々　どつこい、
女皆　茂兵衞さん、ござんしたかえ。
彦六　親方、ござりましたか。ヤレ、嬉しや〳〵。
茂兵　彦六か。おれが來たゝ荒五郎茂兵衞さまのお馬が出たぞ。モウ、落ちついて丸に井の字だ。
新五　待て〳〵、今この笠原新五左衞門が、鐵壁武兵衞に成り替つて、大淀が間夫の詮議をしようと、その二才を引立てる向う面に、待てと聲をかけて突ん出た野郎め、うなアなんと云ふ
皆々　地廻りだ。エヽ。
茂兵　ナニおれか。おらは荒五郎茂兵衞と云ふ、名も無い三下野郎だ。おぢい達、見知つて下さい。大門をズッと入つて見れば、大磯屋の格子先に、四貫九文のはした喧嘩、何事かと思へば、おれが目をかける植木賣りの彥六。

この男の生得として、人に慮外を云はず無禮をせず、ずんと內氣な若い者だが、お主達はこの彥六に、何が科があつて、盜人猫を見るやうに、首筋を持つて、なぜ捻くり廻した。その譯を聞くべいか。

新五　その譯と云ふは、爰に居る鐵壁武兵衞が、首たけ惚れて居る大淀が、間夫の詮議をしようと思つて

茂兵　それで今のやうに。

新五　知れた事だワ。

茂兵　そりやア違つた。

皆々　何が違つたと云ふのだ。

茂兵　間夫が違つた。大磯の大淀の間夫と云ふのは、忝なくもこの荒五郎茂兵衞だ。云ひ分があらばおれに云へ。

武兵　その云ひ分を云はうか。

茂兵　聞くべいか。

ト　こちらの床几に腰をかける。

武兵　世界の寶の最上たる、金銀を澤山出して、揚げ詰めにしてゐる傾城大淀、その傾城を盜みたがる、その盜人を詮議しようと、あの二才めを引立てるところに、大淀が間夫で候ふと、飛び出したる荒五郎茂兵衞、人の揚げて置く女郎を、盜んでも大事ないか。おらアやう〳〵去年御當地へ來て、吉原の勝手は不知案內だが、間夫とやら虻とやら名の付くが、廓ぢやア盜みをしても大事ないか。それぢやアどこがどこやら、方角も知れぬ暗闇同然。廓は愚か、世界の掟が立つまいぞよ。

茂兵　なんだ、どこがどこやら方角が知れない。此奴は江戶の方角を、まだ知らないさうだ。敎へてやらう。この吉原の大門通りとは譯が違ふワ。大門通りと云ふはナ、和泉町、長谷川町、田所町の軒續き、耳より入つたか聞えたか、聞えずば耳の穴を堀江町にして聽聞しろ。うそ默つて聞いて居れば、第一うぬが頤骨が高砂町で、別して舌が永富町、そばへもよい加減に白銀町、口に任せて云へば飯田町だと思つて、利の麴町は非の市兵衞町と得知れぬめどを佃島、アレあのやうに花町を飾つた、米澤町の中だに依つて、物和らかに柳原に、挨拶をして居れば、どこまで勝に乘物町、紺屋町の明後日とやらで、また碌に染めも出來ぬ野郎めだが、おれと喧嘩をして見るか。荒五郎と喧嘩をして見る氣なら、女房子に暇を鑓屋町にして、身代を疊町にしてかゝれ。われとおれとは鷹に雉子町、われ二十間飛べばおれは三十間堀富澤町、足元の赤坂なうち、手廻しをして早く宿屋町へ池の端。惡

く手間隙を鳥屋町にしたら、町人の子だに依つて、太刀弓町の働らきは、武士方への遠慮。なんの手もなく眞木町の、薪ざつぱでどう脊中をのめすか、さもなけりやアうぬが頭へ鹽町を付けて、ガリ／＼と鍛冶町だぞ。鵜の鳥が小鮒を啣へたやうにぶりしやりすると胴桐な目に遭ふな。茂兵衛が骨切丸、鞘町を離れると堪らぬぞ。引ッこ抜いて打ちつけると噓はない。本所の素天邊から臍際まで、眞二つに割下水だ。皆一遍回向院をしてやらつしやりませう。此やうな棒振り虫めが湧くと云ふも、イカサマ浮世小路ではある。サア、鐵壁でも鐵槌でも、それに頓着難波町、足掻くと微塵に駿河町、爰が生死の堺町、胸に手を置いてとつくりと思案橋をして、大坂町でも一杯引ッかけ、氣を江戸橋の葺屋町、荒五郎に向つて鐵壁で候ふとは、野郎、ア、、つがもない。

武兵　庄兵衛、一つ注げ。

ト庄兵衛酌をする。武兵衛、呑みながら

一杯呑まうとすれば、酒を好く蚊めが一疋飛び込んで来て、耳の端でブウ／＼とやかましい。併し何を云はうとも、蚊蜻蛉同然の奴を相手にもなるまい。蚊のまつ毛に巣を食ふ蟲めが、なんぞこの武兵衛に楯突かんとは、棒振り虫が龍と脊競べをするやうなものだ。ハ、、、、及ばぬ事だ。止せ。やめろ。目先に障つて見たうもない。市郎兵衛、あつちへ追つてやれ。ドリや、もう一つ呑まうか。

ト また酒を呑む。

新五　市郎兵衛、大淀が間夫と味噌を上げる奴を、武兵衛が前で手を切らせてしまへ。後詰めにはこの新五左衛門が居るワ。

市郎　合點でごんす。そこは又、瀨戸物町の兄いだ。荒五郎茂兵衛とやら、ちよつと出てもらはう。

茂兵　なんだ、ちよつと出ろ。此奴は身の程を知らないおつりきな奴だわえ。志しが不便だ。

ト そこへ出て

市郎　この夢の市郎兵衛が、荒五郎とやらに近付きになるべい。

茂兵　此奴はなか／＼、肝に毛の生えた奴だはえ。

市郎　それをいつ見た。

茂兵　近付きになるは、腕づくか力づくか、このだんびらで近付きになるか。

市郎　ハテ、男達の近付きになるは、むづかしいものだ。腕づくか力づくか。

茂兵　このだんびらか。

市郎　そんなら止さう。

茂兵　おきやアがれ。

新五　そんな事で埒が明くものか。否と云やア眞二つ、大淀と切れてしまへ。

皆々　荒五郎茂兵衞。

茂兵　否だワ。

皆々　なんと。

茂兵　金輪奈落、大淀と切れる事は否だ。間夫に違ひのないこの茂兵衞、おれに何つて切れろなぞとは、かざッぴいた奴等だわえ。

新五　茂兵衞、そんなたわ言を云つても、人の揚詰めの女郎を盗む、盗人の悪名、拔けまいが、そりやどうだ。

茂兵　ハテサテ、不通なおさふだわえ。廓の間夫が盗人の悪名を、受けると云ふ野暮りきぢやア、道理で女郎に振られる筈だ。

武兵　そんならわりやア、間夫を盗人ぢやないと云ふか。

茂兵　おんでもない事。

武兵　いんにや、この鐵壁武兵衞は、それぢやア濟まない。

茂兵　濟まないと云つて、どうしよふと思ふのだ。

武兵　若い者ども。疊め。

皆々　合點だ。

ト眼八、金兵衞、文七、喜太郎。茂兵衞にかゝるを、左右に投げ退ける。新五左衞門、柄に手をかけて立ちかゝるを、しやんと留める。茂兵衞、才助、立ちかゝつて思ひ入れ。

茂兵　こりやアおさぶ、どうするのだ。

新五　うぬを。

ト切つてかゝる。その拔身を引ッたくる。皆々かゝるを、新五左衞門ともに背打ちに打ち据ゑ、しやんと見得。武兵衞、これをヂッと見て居る。彦六、湯を酌んで來て茂兵衞に呑ませる。

茂兵　どいつも此奴も、動き廻ると膾にする。そこ退きやアがれ。

ト武兵衞が脇へ、茂兵衞、腰をかけて

サア、鐵壁とやら、武兵衞とやら、お主が子分子方のごくざいどもは、あの通りだ。定めてお身樣は、もう堪忍はなるまい。大淀が間夫の荒五郎茂兵衞だ。男達の達引

に默つちやア居られまい。抜いて切らないか。どうだよ
どうだよ。なぜ物を云はない。啞か聾か。ハヽア、聞え
た事がある。まだ初對面で近付きにならぬから、物を云
はぬのであらう。尤もな事だ。茂兵衞が近付きになる上
は杯をすべい。市郎兵衞、銚子を持つて來い。

市郎　おつとしよ。

ト銚子を持つて來る。茂兵衞、あたりを見て

茂兵　こんな小さな杯で、初對面の杯もなるまい。幸ひお
れが好い杯を持つて居る。しかも結構なお蔵の宰相、播
溜公より授かつた、面桶のこの杯。

ト懐中より面桶を出し、杯臺へ載せ、武兵衞が前へ出
す。合ひ方になり、武兵衞これを見て

武兵　ヤア、それは。

茂兵　なんと好い杯であんべいがな。一つ吞んでおれに獻
しやれ。乞食の酒を喰ふ面桶で、一つ吞んで、この荒五
郎に獻しやれサ……どうだ。こりやア、ハテ、よく合の
ない奴だ。猫に食はれた鼠のやうに、この面桶を見て、
チウの音も出さないな。可哀や此奴、死んださうな。よ
い〳〵、おれが引導を渡してやらう。

ト下駄を脱ぎ、武兵衞が頭巾の上へ載せる。ドロ〳〵
にて、武兵衞、思ひ入れにてスッと立ち上がり、頭の
下駄を取つて打ちつける。茂兵衞、キッと思ひ入れ。
皆々も思ひ入れ。

茂兵　ハテ心得ぬ。おれの下駄を武兵衞が頭へ載せるや否
や。思ひがけなきこの場の動搖。怪しい懐中。

ト武兵衞が懐中へかゝる。茂兵衞が手を突き退ける。

その懐中を。

武兵　何がなんと。

ト茂兵衞、武兵衞に立ちかゝる。中へ彦六入つて

彦六　爰は往還格子先。

茂兵　時節もあらば、その時に

武兵　男の魂ひ磨き上げ

茂兵　意氣地を立てゝ

武兵　性根を据ゑて

茂兵　鐵壁武兵衞。

武兵　荒五郎茂兵衞。

彦六　お二人樣。

ト茂兵衞、武兵衞、思ひ入れ。彦六、隔てる。

茂武　後に逢はう。

ト唄になり、茂兵衞、武兵衞、思ひ入れにて、暖簾口

へ武兵衛、市郎兵衛始め皆々付いて入る。

彦六　茂兵衛さま。

茂兵　彦六。

彦六　モシ、大丈夫なものでござりまするね。

茂兵　如何にもおのしの云ふ通り、餘程膽に堪えのある奴だ。兼ねて味な奴だと思つて居る矢先へ今日の出合ひ。頭へ下駄が上がつたら、今の騒擾。なんでも合點のゆかぬ奴だわえ。

彦六　成る程、左様でござりまする。

茂兵　今夜は爰にいしかつて、彼奴が腸を試すがよい。

彦六　そんなら奥へ、茂兵衛さま。

茂兵　彦六、來やれ。

ト騒ぎ唄になり、茂兵衛、彦六を連れて暖簾口へ入る。直ぐにてんつゝになり、花道より砂利場のおはぐろ婆ア、木綿やつしの形。彦六一子岩松、糸巻に凧を持ち、おはぐろ婆アお勘、この手を引いて出で來り、花道にて

岩松　婆様、草臥れたわいなう。

かん　この餓鬼めは御大層な。砂利場から請地に廻つて來たばかりだ。それに草臥れたも凄まじい。彦六めに逢ふまでは、どこまでもそびいて行く。さう思つて居ろ。

岩松　其やうに歩く事は、否ぢや／＼。

かん　エヽ、ふざけた餓鬼めでござるわえ。うぬが里扶持の事に歩くのだ。キリ／＼うしやアがれ。

ト矢張りてんつゝにて、しく／＼泣く岩松を引摺つて本舞臺へ來て、暖簾口へ來り

かん　ちいつと頼ん申しやせう／＼。

才助　オイ／＼。

ト才助出で來り、おはぐろ婆アを見て

こりやア砂利場のお婆アどん。今時分、何しにござつた。

かん　何しにどころぢやアない、才助さん。この内へ請地の植木賣りは來ちやア居りませないか。

才助　請地の彦六は、内證にまごついて居たと思つたが、よる夜中、あれを尋ねて何をさつしやる。

かん　里扶持の事でよ。こなさんも掛り合ひだ。聞いて下さい。ソレ、こなさんの云はつしやるには、おらが大淀さまの贔屓にさつしやる、請地の植木屋彦六が貰ひ子だが、男の手一つで困つて居る程に、どうぞ世話をして、里の口を聞出してくれ。里扶持はお定まりの一分二百だが、大淀さまの詞も添ふ事なり、先の世話次第で、いく

らにならうも知れないと云はしつたによ。
才助　サア、おれも大淀さまに頼まれたに依つて、さう云つたものよ。
かん　そんな巧い話しを聞いて、外へやるでもないと、わしが預かつたところが、里扶持の事はさて置き、ちよつとでも金を持つて來ぬあの彥六。請地へ行けば留守を使ふ。そこで今夜こなさまに逢うて、里扶持の勘定から、此奴が今日までの小遣ひ。大淀さまの前から取らにやアならない。こなさんも口を開いて下さい。
才助　そりやアとんだ事だ。そんならあの彥六が方から、里扶持の勘定はしましないか。
かん　年明けて、金を一遍も持つて來ましないよ。こんな餓鬼にかゝつて居ちやア、水も呑まれないから、ちつと金の蔓を引出しに來たゞて。これを見さつしやい。
ト懷中より姬の繪姿を出して見せる。
才助　そりやアなんだ。錦繪か。
かん　ナニサ、お尋ね者の人相書だ。その繪姿に似た女郎を、どこぞ見付けるが最後、お役人樣に申し上げて褒美の金、巧い仕事であらうがの。
才助　成る程、女澤山なこの廓で詮議したら、この繪姿に似た者があるまいものでもないよ。
かん　そこで、おれも持つて來たものよ。
ト新五左衛門、暖簾口より出かゝり居て、これを聞いて
新五　才助々々。
ト才助、新五左衛門を見て
才助　こりやア新五左衛門さま、御用でございますか。
新五　外の事でもないが、あの婆アは何者だ。
才助　これは砂利場のおはぐろ婆アと云つて、毎朝廓へ鐵漿を賣りに來る阿母でございます。
かん　ホヽヽヽ。旦那さん、お見知りなすつておくんなさいやし。
新五　なか〳〵氣さくな老女と見える。時に、お主が持つて居るは、そりやアなんだ。
かん　これかえ。こりやお尋ね者の人相書。
新五　ドレ。
ト取つて見て
池の少納言頼盛の娘、歌綾姬の人相書。ムウ……なんと老女、この繪姿を身共に賣つてくれまいか。
かん　なんの事かと思へば、この繪姿を賣つてくれろえ。

そりやアお前さんの事、品に依つたら貸つて上げまいものでもございませぬが、こりやア金の蔓でござりやすよ。

才助　そりやア新五左衞門さまも、御合點であらうわサ。

新五　如何にも才助が云ふ通り、當座の褒美。

ト紙入れより金貳兩出して遣る。取つて

かん　こりや有り難い。才助さん見なさい。これだから忘れられやせん。

才助　割戻しは合點だらうの。

かん　呑み込んで居るわな。

新五　才助、まだ外に用がある。座敷へ來やれ。

才助　畏まりました。

かん　ドリヤ、わつちもあの彥六めに……小僧來い。

才助　サア、お出でなされませ。

ト騷ぎ唄になり、新五左衞門、才助、おかん、岩吉が手を引いて皆々暖簾口へ入る。チヨン／＼のキツカケにて、椅子を下座へ引いて取る。

本舞臺、正面、大淀座敷のかゝり、扇蝶の金物打つた黑塗りの簞笥、違ひ棚、床の間に最前の鉢植の紅梅を直してある。暖簾、扇蝶の散らし染拔き。下座の上に二階、障子を閉てあり、下に手水鉢、すべて下座敷の體。綺麗に仕立てたる道具になる。

ト奧より化粧坂の少將、揚羽の長吉出來り

長吉　少將さま、これにお出でなされますか。

少將　長吉、わしも其方に逢ひたかつたわいなう。

長吉　イヤ、私しもお目にかゝりたいと存じて居りました。あの新五左衞門めが、お前を付けつ廻しつするゆゑ、よい間がなさに、廊下を彼方へ行つたり、此方へ行つたり、雇ひ禿のやうにまごついて居りました。時に御病氣は、ちつとはようござりますか。

少將　サイナア、あの新五左衞門の顏を見ると、直ぐに氣合ひが惡うなる。ほんに嫌なこつちやアないわいなう。

長吉　さうでござりまするとも。併し、お前のその氣合ひの惡いところを、忽ち癒す好い藥がござりまするが、上げませうか。

少將　イヤモウ、どんな藥を服んでも、あんな人の側に居ると、なんぼうでも癒るこつちやアないわいなう。

長吉　サア、そこを癒す奇妙な藥。マア、ちよつと用ひて御覽じませ。

ト懷中より文を出して、少將が前へ置く。

ソレ、薬。

ト少將、取つて

少將　ヤア、こりやア時宗さんの文。

長吉　なんと、好い薬でござりませうが。

少將　好い段かいなう。長吉、よう持つて來てたもつたなう。

長吉　先づ効能を讀んで御覧じませ。

少將　此やうな薬なら、わしやいつでも氣合ひが癒るわいなう。

長吉　しかも萬差合ひなし。早く封をお切りなさい。

ト少將、文の封を切る所へ、奥より彦六、初花、初菊、大巻、大島、出て來り

女皆　少將さん、爰にかえ。

ト少將、文を隠し

少將　皆さん、まだ酒ぢやな。

初花　イ、エイナア。わたしらも一つ食べようと思つて居る所へ、積木賣りの彦六さまが見えたに依つて

初菊　コレ、お前を若い者の才助が、險しう呼んで居たと云うたれば、きつう怖がつてぢやわいなア。

少將　そりやマア、味な事ぢやな。彦六さん、なぜにあの才助が怖いえ。

彦六　これは少將さんでござりまするか。才助どのが怖いと申すは、此やうな形で、あなた方のお座敷にまごついて居つたら、大きに叱られるでござりませう。才助どのに逢はぬ先、私しはちよつと行つて參りませう。

初花　イエ〱、お前には大淀さんが、何か用があると云はしやんした程に

初菊　彦六さん、去なしやんしては惡いわいなア。

大巻　それ〱、お前を去なしては

四人　大淀さんに叱られるわいなア。

彦六　ハテ、それは困つたものな。私しが爰に居らねば、お前方が惡いと仰しやるし、ひよつと若い衆の目にかゝると、私しが叱られるし、進退爰に谷まつたか。ハテ、なんとしたものであらうな。

ト思ひ入れ。

少將　彦六さん、座敷にござんしても、よい事があるわいなう。

彦六　少將さん、お前、智慧がござりまするかな。

少將　斯うしたがよいわいなア。

彦六　どう致しませうな。

少將　わたしが所に客衆から預かつた、羽織や小袖がある程に、あれを着て、頭巾で顏を隱し、客人になつて居やしやんせいなア。
彥六　そりやア、面白うございますわえ。
長吉　彥六さん、有卦に入つたやうなものだによ。
大島　こりやア少將さん、好い思ひ付きでござんす。そんならその小袖を出さうかいなア。
少將　さうして下さんせいなア。
大島　合點でござんす。
ト さらきの簞笥より、出す仕掛けにて、羽織小袖頭巾を持つて來る。
少將　サア〳〵彥六さん、才助が怖いなら、早うそれを着やしやんせいなア。
彥六　ハイ、これは有り難い。左樣ならこれを着ましても
少將　だんないわいなア。
女皆　早う着替へさんせ。
ト 皆々寄つて、彥六に羽織小袖を着替へさせる。
彥六　こりやどうも云へませぬ。これぢやア大淀さまのお客だと云つても、大事ございませぬわいの。
ト 頭巾を着る。

長吉　先生、咽喉が乾かうの。
彥六　御意の通りだ。
少將　皆さん、囃しやんせ。彥六さんのあの形は、下谷のみんてうさんに其まゝ。よう似たぢやないかいなア。
女皆　ほんに、其まゝのみんてうさんぢやわいなア。
彥六　なんぼ體はみんてうさんでも、前へ廻ると植木賣りのぢんてうき。花をやつたと、こんな形になつて居る所を見付けられたら、結句罪が重うございまする。とてものお世話次第に、私しが顏の工面はございますまいか。
緫菊　それにも好い事があるわいなア。わたしが指へ付ける治丹坊の膏藥。それ〳〵。
ト 紙に伸べたる膏藥を持つて來て
これを貼つて居やしやんせいなア。
彥六　成る程、お前達の智慧は格別なものぢや。これからなんでも長屋にむづかしが出來たら、御相談に參りませう。
ト 云ひながら、鼻へベタリと藥を貼り
これぢやアどうでございまする。
少將　ほんにそれぢやア、彥六さんとは見えぬ。
女皆　其まゝのみんてうさんぢやわいなア。

彦六　さらばこれより、みんてうでやりかけませう。
ト鼻聲で云ふ。
長吉　みんてう堀の向うぢやないかえ。
女皆　なにを。
ト奥より笠原新五左衞門、眼八、金兵衞、喜太郎、文七、てんでに雛の道具を持つて出る。庄兵衞、銚子杯を持つて出る。
新五　少將、おのしは爰に居たか。雛の道具を遣らうと取寄せて持たせて來た。
四人　コレ見なさい、簞笥長持、竈まであるよ。
庄兵　時に女郎さん方、大淀さんはどこにござります。鐵壁さまが、きついお待ち兼ねだ。
初菊　エヽ、なんぢやぞいなア。鐵壁さんばかりが、大淀さんの客人かえ。
初菊　あれ見やしやんせ。外にお客も來てぢやわいなア。
新五　フウ、主も大淀が客人か。
女皆　下谷のみんてうさんぢやわいなア。
庄兵　なんだ。下谷のみんてうさまだ。
ト愕りしたこなしにて
これは〳〵、いつの間にいらつしやりました。

彦六　ムウ、庄兵衞か、久しく逢はぬの。
新五　コレ〳〵、あの仁も大淀がお客さうな。御免にあづかりませうぞ。
彦六　これはお堅い御挨拶。拙者下谷のみんてうでござる。御遠慮なしに、お寛ろぎなされい〳〵。
新五　イカサマ、遊里の儀でござれば、堅身を止めまして御一座申すも御緣の端。一つ下されませうか。
庄兵　こりやようござりませう。よい取組みでござりますみんてうさんに新五左衞門さまの初の出合ひ。ちよつとお杯を改め……時にみんてうさま、お前、お鼻をどうなされました。
彦六　身共が鼻か。聞いてくりやれ。今朝、髮月代にかゝつたところが、近習めが洒落居つて、町方の髮結ひのやうに、逆剃刀に……とやり居つて、併し鼻は怪我をしてそこがみんてうでござる。
庄兵　ドリヤ、上げませうか。
ト庄兵衞始め、彦六へ獻す。彦六、新五左衞門へ獻す。新五左衞門、彦六へ戻す。此うちよろしく酒事の捨ぜりふあるべし。
庄兵　若い衆方、みんてうさんに、お近付きになりなさい

四人　アイ〳〵。

ト眼八、金兵衞、喜太郎、文七、そこへ出て

旦那、お頼ん申します。

彦六　拙者みんてうでござる。

新五　拙者は少將が深間、笠原新五左衞門と云ふ色客でござる。コレ少將、今宵はしつぽりと、思ひを晴らせるであらうな。

少將　知らぬわいなア。

新五　ハテ、さう云はずと、一つ呑みやれサ。

少將　否ぢやわいなア。

彦六　みんてう、お合ひ致さうか。

新五　よく、みんてうの面が出るわえ。

四人　何を云はつしやる。

トおはぐろ婆ア、岩吉を連れて奥より出で來り、皆の坐つて居る所を踏み跨げて下の方へ來り

かん　大淀さんは、爰にも居なさらぬの。

眼八　こりやア砂利場のお婆。

金兵　客人達のござる中へ

文七　蚤取り眼でこなさまは

喜太　何をまごつかしやる。

かん　こりやアお揃ひだの。質屋の惠比壽講に行つたやうだ。わしが爰へ來たのは外でもない。大淀さんにお目にかゝらうと思つて來たのよ。

庄兵　大淀さんに、なんぞ用でもごんすか。

かん　逢はにやアならぬ話しがあるのよ。この餓鬼が里扶持の事で。

トこれにて彦六、思ひ入れあつて

彦六　花を飾りし一座の眞中、殊に新五左先生と、初のお出合ひに、一つ呑まうと思ふ所へ、見苦しいあの老女。殊に子供まで引連れて、ずんと賤しい者さうな。あのやうな者を見ては、酒が呑めるものでない。みんてうが目障りになる。あつちへやつてやれ〳〵。

庄兵　ハア〳〵……コレ阿母さん、こなさんも氣轉の利かない。そんな形で、こんな座敷へ來る事もない。大淀さんは內證にでもござるであらう。あつちへ行かつしやい行かつしやい。

かん　庄兵衞さん、そんなに安く云ひなさるな。わつちも砂利場のおはぐろ婆アだ。さう大さうに取扱ふ事はないわいな。モシ、お座敷さん、左樣ぢやござりませぬか。あなたはよく御存じ。ナア、モシ。

新五　成る程〳〵。こりやア其方が云ふ事が尤もだ。庄兵衞、この新五左衞門も存じて居る者だ。大事ない。爰へ來て一杯呑めサ。
かん　ソレ、見さつしやいな。
　ト手酌で呑む。
彦六　それは新五左衞門さま、惡い物好きでござる。あのやうな汚ない者を見ては、どうも欝陶しうござる。
新五　イヤ、これがやうな者を、酒の相手に致すも一興でござる。婆ア、なんぞ隱し藝があるであらうな。
かん　オヤ、とんだ事を云ふお方だ。併し、わつちも二三年前までは、連れ立つ事に傭はれて、和讃や順禮唄をやつた事もござりやすよ。
庄兵　おらア又、葛西念佛が得手物だ。
新五　なんと云ふ。おぬしやア葛西念佛が得手物だ。
庄兵　左やうサ、餓の時分にやア、わたしも出かしたものでござりまする。
彦六　こりやアよからう、新五左先生のお肴に、庄兵衞、見たい〳〵。
皆々　庄兵衞、所望だ〳〵。
彦兵　ちよつとお聞かせ申さうか……奇妙長兵衞のお方樣

叩いて杵の數取りて。
　ト地へ取つて庄兵衞、こぢつけに踊る。
少將　新五左衞門さんも踊らしやんせ。
女皆　見たいわいなァ。
新五　なんだ。おれにも踊れ。君の仰せならば、一杯機嫌にコレ〳〵、みんてう先生も、お立ちなされ〳〵。
　ト嫌がる彦六が、手を取つて踊れといふ。庄兵衞、無性に踊る。新五左衞門は彦六を勸めて、嫌がるを無性に引立てる。立廻りにて鼻の膏藥を落す。おはぐろ婆ア、彦六を見て
かん　ヤア、彦六どんぢやアないか。
彦六　こりやア堪らぬワ。
　ト逃げようとするを、おかん、追ひ駈ける。これにて皆々大廻しにて入り亂れ。新五左衞門、幸ひに少將に抱きつくを突き退ける。ト、新五左衞門、彦六を捉へる。皆々彦六が顏を見て思ひ入れ。この時、長吉、女形皆々逃げて入る。
庄兵　ヤア、みんてうさまと云つたのは
皆々　植木賣りの彦六ぢやないか。
彦六　なめら三方。

かん　なんだ、なめら三方だ。こなたアおれが顏を見知つて居るか。砂利場のおはぐろ婆アだよ。小自烈たい男だ。のつぺりとした顏で、この男の厚かましさを聞いて下さりまし。去年の九月、爰の若い衆の口入れで、この餓鬼を連れて來て、世話をしてくれいと云ふから、わしも年寄りで面倒見るのも嫌だと、斷わりを云つた時、こなたはソレ、その面へ淚を溢して、一人思へば二人を助けると思つて、世話をして下さい。もう、乳も呑みませぬから賴みますと、いろ／＼と云つた事を忘れはしない。あのやうに云ふものを、不便でもあり、そんなら世話をしてやらうが、里扶持は高い、一月一兩二分と云つたれば金づらではない賴みます、外に小遣ひの二兩や三兩は、どうともしますと、巧い事ばかり云つて、滿足に寄越したは、預かつた月ばかり。大晦日になつても打ッちやり捨て、春になつて一度も面を持つて來ずに、それでも濟むか。サア、いま里扶持を勘定してもらふべい。

彥六　サア／＼、尤もぢや。これには段々。

かん　云ひ譯か、措かつしやい、もう氣がないよ。この餓鬼をあてがつて置いて、こなたアよい面の皮で、なんだか好いべんべらを引ッ張つて、工面がよくば、なぜ金を持つて來ない。

彥六　モシ、この中で外聞が

かん　外聞をかゝせるのだ。恥面を搔かせるのだよ。

新五　成る程、恥を搔かせてもいゝよ。みんてら／＼と、この新五左衞門まで一杯やつた橫道者。植木賣りがどうして、そんな褞袍を引ッ張つて居る。

少將　ありや、わたしが借りたのぢや。

庄兵　お前もとんだ物好きだね。

かん　誰れか褞袍でも大事ない。引ッ張つてゐるが因果、これをマア引剝いで

ト彥六が着物を脫がせて

こんな事ぢやア足らない。たつた今二十兩寄越せ。

彥六　エ、。

ト悔りする。

かん　悔りする事はない。

彥六　おやと云うても、どうしてマア。

かん　金は無いか。イケ業腹な。餓鬼に只食はれた腹癒せに、この野郎めを、若い衆、賴んます。

四人　合點だ。

ト立ちかゝる。

少將　ア、コレ。

ト寄らうとするを、新五左衞門、引留める。

かん　叩きのめして下さい。

四人　イケ泥坊め。

ト彦六を打ちにかゝる。後より大淀出て、四人を支へ、彦六を圍ふ。

彦兵　こりや大淀さま。

四人　なぜ邪魔をするのだ。

大淀　イヽエ、邪魔はしやんせんが、お前方は、この彦六さんを、なんとさしやんす。

かん　太い奴だから、ぶちのめすのサ。

大淀　そりやなぜにえ。

かん　里扶持の事サ。一文も寄越さないから、主達を頼んで、アイ、わつちがぶつてもらふのサ。お前も掛り合ひだよ。

大淀　エヽ、それで聞えたわいなア。この彦六さんが、あの子の里扶持をやらしやんせんに依つて、その腹立ちゆゑに、皆さんを頼んで

かん　ぶちのめしてもらふのサ。

大淀　そりや、なんぼ程の事ぢやえ、

かん　引ッ括めて二十兩サ。

彦六　とつけもない。

大淀　よいわいなア。これ持つて行かしやんせ。

ト櫛を拔いてやる。

かん　なんと云ひなさる。この櫛を持つて行けえ。オヤ、この櫛はほんにいゝ櫛だ。捨賣りにしても二十兩がものはござりやせう。田町の山崎屋へ行つても、十四五兩は貸しさうなものだ。ようございやす、呑み込みやした。その代り、この櫛の金になるまで、その子は大淀さん、お前に預けやすよ。

彦六　それではどうも。

大淀　ハテ、大事ござんせん。今宵中に金拵らへて渡すわいなア。

彦六　何事もよろしくお頼みぢや。

かん　皆樣、お世話にござりました。

四人　餘ッぽど面白くなつた所へ、とんだ騷動が起るものだ。爰ぢやアモゥ呑めないわえ。

新五　これから奧座敷へ行つて、酒にしよう。少將來い。

少將　そりや、どこへ行くのぢやえ。

新五　知れた事、抱いて寢に連れて行くのだ。

少將　否ぢやわいなア。

新五　そりやア、なぜ。

少將　ハテ、わたしや氣合ひが惡いに依つて、座敷ばかり勤める約束でござんすぞえ。ナウ、大淀さん。

大淀　それ／＼、座敷ばかりの約束を、抱いて寢ようとは新五左衞門さん、譯が違ふぞえ。

新五　いんにや、抱いて寢て、早く身請けをせにやアならぬ譯がある。

大淀　その譯はえ。

新五　これだて。

ト　おはぐろ婆アが所より取りし、最前の繪姿を出して見せる。

少將　アノそれは。

新五　池の少納言賴盛の娘、歌綾姫の人相書。

小大　エヽ。

ト思ひ入れ。

新五　なんと、見れば見る程、この繪姿に、よく似た化粧坂の少將。もし人違ひで鎌倉へ連れて行かれちやア、おれが思ひは水の泡。疑ひのかゝらぬうち、少將が身請けはおれがする。庄兵衞、親方へその通り云ひ聞かせろ。

庄兵　畏まりました。左樣ならば。

ト行かうとする。

大淀　庄兵衞待ちや。少將さんの得心もない事を、無理に身請けをさしやんしたら、新五左衞門さん、結句お前の顏の立たぬ事が、出來やうも知れぬぞえ。ハテ、身請けを否だと云はんしたら、その人相書とやらで、兎やかう云ふ心であらう。モシ、そりや不粹ぢやぞえ。木折りに行かぬが戀の道。わたしがどうなと取持つ程に、わたしに預けに置かしやんせいなア。

新五　預けろなら預けもしやうが、その代りにはあの鉢植。

トかゝらうとする。

大淀　サア、それも預けてしまうたら、上げるわいなア。わたしが少將さんの返事をするまで、庄兵衞どん、主に一つ上げ申して下さんせ。

庄兵　心得たぬきの腹鼓だ。新五左衞門さま、何事も花魁に任せて、妾らはズッと高見の見物。

新五　成る程、奥の座敷へ行かうか。そんなら返事を待つて居るぞよ。

大淀　合點ぢやわいなア。

新五　みんな來い。

皆々　マア／＼、お出でなされませ。

ト合ひ方になり、新五左衛門先に立ち、皆々付いて出る。少將、大淀、彦六殘る。

彦六　さて／＼、あの新五左衛門と云ふ奴も、無理口說きをするやつサ。

少將　嫌でならぬわいなア。

大淀　でも、今の繪姿では。

トあたりを見廻し、少將を上座へ直して

彦六　誰れあらう、平家の御一門、池の少納言頼盛公の御息女、歌綾姫さま、時世とは申しながら、御身の上を隱さん爲、浮川竹の賤しいお姿。御辛勞に思し召しませう。

大淀　兄尾形の三郎も、男達に身をやつし、廓を徘徊いたすも、あなたのお身を守る爲。荒五郎茂兵衛は大淀が、間夫ぢやの深間ぢやのと浮名を立て、身を忍ぶのも、殘黨詮議遁がれん手段。

彦六　某とても鎌倉に立越えて、汚名を雪がん時までは、浮世に蟄する植木賣り。姫君には西國より、小田巻の名鏡到來せば、それを御持參なされ、頼盛卿御懇意を、鎌倉どのへ申し立てなば、お命乞ひは目の當り、今暫らくの御辛抱、御肝要に存じまする。

少將　何につけても自らゆゑ、樣々の憂き苦勞。禮は詞に盡されぬ。さりながら、今の我が身を思ふにつけ、生中故郷へ歸り花、二世を誓ひし時宗さんに、添はれぬやうにならうかと。

彦六　ハテ、その事は大淀が、よいやうに致しませう。それにつけても小田巻の名鏡は

大淀　兄の鹽田の次官さまが、持つてお下りなさんす筈。とは云ふものゝそれまでも、淺ましい影のお住ひ。

彦六　我れ／＼とても古へを、思ひ廻せば果敢ない身の上。

少將　自らとても苦界の苦しみ。

彦六　世の盛衰とは云ひながら

大淀　是非もなき身の

三人　上ぢやなア。

ト思ひ入れ。

岩吉　父樣、眠たいわいなう。

彦六　ほんに可哀や先刻から、退屈したであらう。

ト抱き上げろ。奥よりお十出で來り

お十　少將さん、爰に居なんすか。

少將　お十どん、なんぢやぞいなア。

お十　親方さんが、お前に用があるとサ。ちよつとお出で

なんし。
少將　そりや身請けの事ぢやないかえ。それぢやモウ、アノ
大淀　ハテ、內證で何と云はしやんせうと、病氣を云ひ立てに、合點かえ。
少將　成る程、さうでござんす。さりながら、身請けの事ならお十どん。
お十　わつちやアなんだか知りやせん。マア〳〵、お出でなんし。
　ト合ひ方になり、お十、少將を連れて入る。
彥六　あのお十も、色氣のない大きな聲だ。
大淀　遣り手に色氣があつて、よいものかいなア。お前のやうに色氣があると、油斷も隙もなるこつちやないわいなア。
彥六　また始まつたよ。外の惡性をするやうな男と見たか。併しハヤ、廓へばかり入込んで居るゆゑ、つけては步かず、疑ひは尤もぢやが、よう思うても見やいなう。如何なる日も草鞋がけで、植木の荷を擔ぎ步き、南風が吹くとビタ付く布子では、なんぼ此方から思うても、中將茶を好くやうなもので、とんと相手がないぢやて。

大淀　イヽエイナア。好いた好かぬは、姿形には寄らぬもの。ひよつといとしいと思ひつくと、その見すぼらしい形が、結句可愛うなるものぢやわいなア。
彥六　捻るワ〳〵。なんと云はれても、妬かるゝ種があるなら云ひ譯もすれ、無い事までも云ひ立てられて、苦勞をさせると思へば、一言も云はれず、おれが埒明かぬを恨むばかりだ。
　ト岩吉を下へ寢かして置く。
大淀　そんならこの上、必らず惡性して下さんすなえ。
彥六　愚痴もよい加減がよいよ。
大淀　そんならこれも愚痴かいなア。
　ト抱きつく。
彥六　愚痴と無理とを積んだ、入り船がしたさうだ。
大淀　堪忍して下さんせ。
彥六　さう云はれると、凹みのお筋。
大淀　あたりに人目もないこそ幸ひ。
彥六　どうぞしたらよからうなア。
大淀　斯うぢやわいなア。
　ト抱きつく。
彥六　エイ、ヤツと一番請けた。

ト兩人思ひ入れ。奥より夢の市郎兵衛、おみな出で來り、市郎兵衛これを見て

市郎　こりやアきつい所へ聖天樣を祀つたの。

トこれにて彦六、大淀悧りして

彦六　こりやア市郎兵衛さまか。

市郎　市郎兵衛さますサ。

大淀　おみなさん、氣の毒しい。

ト恥かしき思ひ入れ。

みな　其やうにおしやんすと、結句わたしが困るわいな。

市郎　大淀さんは時々彦六には、旨くして食はせるの。

大淀　コレ、其やうな事云うて下さんすな。シタガ、もうお前方は、わたしら二人が內證知つての事。何も隱す事はござんせぬ。早う年が明けて、女夫になりたいが樂しみぢやわいなア。

彦六　それ〱、いつか二人が世帶を持つて、この坊主めに惡戯させ、嬶や、こちの人と、云はせて見たうござりまする。

大淀　ほんにお前も御亭なれ、わたしも前垂れ襷で居るならば、さぞ嬉しうござんせうわいなア。

市郎　シタガ、世帶を持たぬうちは、なんでも嬶を持つたら、大家樣へ斷わり云うて、晝も內から掛け金をかけて、思ひ入れ寐ようと思つても、あたり隣の思惑と云ひ、さう寐てばかりも居られないよ。

彦六　そんなら手前の世帶でも、氣儘に寐起きもなりませぬかの。

市郎　ハテ、長屋の前もあるものだわな。

彦六　ハテ、それではちつと思ひ入れが違ふわえ。

大淀　ほんに世帶と云ふものは、むづかしいものでござんすなア。

みな　さう案じる程にはないものでござんす。ツイ馴染が出來るとな、側でよう世話をして下さんす、お內儀さんもあるものでござんすわいなア。

市郎　それ〱、馴染が出來るもいゝ。お吉さん、水屋が來たら入れさせておくんなさいよ。干大根の値が出來たが買ひなさらぬかと、長屋附合ひ日和下駄で、ある事ない事云つて歩くやうになるにやア、餘ッぽど骨が折れるよ。

彦六　そりやアモウ、餘ッぽどむづかしいわえ。それぢやア世帶も一通りぢや持たれない。ちつと稽古せにやアならぬわえ。

大淀　どうぞお前方二人して、その長屋附合ひとやらを、教へて下さんせいなア。

市郎　合點だ〳〵。そんならおいら二人は、こなさん方の引越して來る隣の者よ。

みな　そんならわたしは、お前のお內儀さんかえ。

市郎　それ〳〵、斯う眞中を仕切つて

ト屛風を中へ立てる。

彥六　萬事よろしうお賴み申しまする。

市郎　先づ新世帶から、立派な事もいらないから、野郞疊の二三疊も敷いて置くがよい。

みな　大概な物は、わたしが內にある程に、遠慮なしに取りにお出でなさんせえ。

彥六　何もかも、お借り申さにやアなりませぬぞ。

市郎　時に、斯う疊を敷いて見れば、先立つ物は、竈ぢや。

彥六　その通りぢやが、先づ竈より先へ、斯う女房から据ゑらへるとは、當世でござりませう。ハ、、、、。

市郎　その櫛も爰にあるぞ。

ト雛の道具の竈を持つて來る。

彥六　こりやアどうも云へない。嚊ア、水屋を待つては居られまい。お主、一手桶汲んで來やれ。

大淀　アイ〳〵。

トうろ〳〵して居る。

みな　手桶が無くば、わたしらが所のを借して上げうわいなア。

ト箱提灯を手桶のやうにして、大淀へ渡す。

大淀　井戸はどこにあるか知らん。

みな　大家樣の脇にあるわいなア。

ト箱提灯を持つて、水を汲んで來る思ひ入れ。

市郎　これから家移りの、粥を炊かにやアならぬぞえ。

彥六　爰のお長屋は、茶振舞ひも粥でしまひますかえ。

みな　ソレイナア。

彥六　ハテ、そりやア世話がなくてようござりまするな。

市郎　嚊アや、爰のお內儀を、大家樣始め長屋へ、連れて行つて進ぜろ。

なみ　アイ〳〵。そんならお前、ちよつとわたしと一緖にござんせいなア。

大淀　その長屋廻りとやらに行つては、なんと云ふものぢやえ。

彥六　ほんに、なんと云つてよいか、市郎兵衞さん、わしも廻らずばなるまいの。

市郞　ハテ、困つた奴だ。そんならおれがこなさんになつて、長屋廻りをして見せるから、おれが云ふ通りにしたがよい。
彥六　アイ〳〵。お賴み申しまする。
ト市郞兵衞、隣の氣取りにて屛風の際へ來て、衣紋繕ろひ、咳拂ひして
市郞　お賴み申しまする。
ト戶を明ける思ひ入れ。
彥六　これはお出でなされましたか。
市郞　私しは今晩、お長屋へ引越して參りました者でござりますが、この以後お心安うお賴み申しまする。
彥六　これは御挨拶でござりまする。女房ども、お煙草盆を上げやれ。
大淀　アイ〳〵。
ト吸ひつけて出す。
市郞　コレサ、それが惡い。もう男に吸ひつけ煙草をすると、味に思ふわいの。
大淀　そんなら吸ひつけでは、惡うおざんすかえ。
市郞　そのおざんすも、惡いわいの。
大淀　ハテ、そりやアむづかしいものでおざんすな。
市郞　ハテ、まだかいの。
ト苦々しき思ひ入れ。
彥六　あれ程仰しやるに、氣を付けやれな。
大淀　それぢやと云うてな。
みな　ハテ、氣を付けたがよいわいなア。
大淀　無理ばかり云はしやんすわいなア。
彥六　何が無理ぢやよ。
市郞　イヤモ、どこも同じ事サ。兎角亭主を尻に敷いて云ふ事を聞かぬぢや。朝はいつまでも寐て居て、用を云ひつけると顏を膨らす。それでもめくりと云ふと、人一番に盆莫座へ直つて、大引きなら行きやせうと、點をかけてのたり出し、棒引きが來りや横桂馬だの、五ッ目だのと高慢な顏で、わしが元手を付け込んでしまひまするて。
彥六　お長屋廻りに行くと、其やうに女房の事を、惡う云はねばなりませぬか。
市郞　云はいぢや。モウ、あの引摺り女房には困り果てたものサ。
みな　モシ、引摺り女房とは誰れが事ぢやえ。
市郞　知れた事サ。うぬが事よ。
みな　こりやおかしいわいな。わしが引摺りより、働らき

のないこなさんの事云はうかいの。
市郎　なんぼ働らきが無うても、うぬをこれまで食はせて置いたワ。
ト疊を叩いて云ふ。大淀、彦六、膽を潰し、ウロ〱して居る。
みな　その過すにも過しやうがあるわいなア。
市郎　エヽ、おれが一言云やア、十言で返しやアがる。そのいけツ口を引ツ裂くぞよ。
みな　そりやどうして。
市郎　斯うして。
トこれより夫婦喧嘩になる。大淀、彦六、取支へる事いろ〱あつて
彦六　こりやア、ひよんな隣へ越して來た。
大淀　どうぞ仕様はないかいなア。
彦六　こりやアモウ、脇へ越すがよい。
ト煙管や煙草入れをしまひ、身繕ろひをする。兩人は矢張り捨ぜりふにて爭うて居る。
大淀　もう、越して行くのかいなア。
彦六　どうして、こんな所に居られるものか。サア、おちや。

ト彦六、大淀、暖簾口へ入る。おみな、市郎兵衛、後見送り
市み　ハヽヽヽヽ。
ト後見送り、あたりを見廻し
市郎　女房ども。
みな　こちの人。
市郎　姫君樣のお身の上、繪姿を以ての詮議。
みな　サア、それぢやに依つて、わたしが料簡はナ。
ト囁く。
市郎　成る程、そりや面白い。マア、それまでは。
みな　矢ツ張り夢の市郎兵衛さん。
市郎　若蔦屋のおみなさん。
みな　サア、ござんせ。
ト騒ぎになり、兩人、下座へ入る。新五左衛門、長吉を引立て、金財布を持つて出る。眼八、金兵衛、文七、喜太郎付いて出て來る。
長吉　モシ〱、御免なされませ〱。
新五　動きやアがるな、素丁稚め。奥座敷の違ひ棚に置いたこの金財布、ひん盗まうとは、いけツ太い餓鬼めだわえ。
眼八　新五左衛門さま、此奴は形よりも膽の太い奴でごん

す。毎日廓へ來るも、こんな仕事をすべい爲だな。
文七　格子先でもお前樣へ、杯を打ちつけた、蕪ッ噛りめ。
喜太　なんに付けても、ちよつかいの働らく餓鬼でごんすわえ。
新五　うなア誰れに頼まれて、こんな盗みをひろぐのだ。
長吉　イエ〳〵、誰れにも頼まれは致しませぬ。お前が少將さまを請け出さつしやると云ふ事を聞いて、少將さまが苦勞にしてござるゆゑ、わしが請け出さうと思つて、それゆゑの出來心。堪忍して下さりませい。
新五　ならない〳〵。こんな餓鬼めは若い者ども、土手へ連れて行つて打ち殺せ。
長吉　御免なされませ。
四人　動きやアがるな。
ト四人かゝる。後より少將出て、これを支へる。
新五　こりやア少將か。
少將　皆さん、待つて下さんせ。
四人　なぜ、邪魔をするのだ。
少將　イヤ、邪魔はしやせんが、その金を盗ませたは、この少將でござんす。
四人　イヤア。

長吉　ア、モシ、それでは。
少將　コレ、其方の志しは忘れはせぬ。なんぢやあらうとその金の盗人は、わたしでござんすわいなア。
新五　そんなら身請けをされるが嫌さに、この金は少將、われが盗ませたか。
少將　アイナア。
新五　返す〴〵もいけッつ太い。盗人なれば、二人とも引立てろ。
四人　合點だ。
ト少將と長吉を手籠めにする。荒五郎茂兵衛出て、四人を投げ退け、少將、長吉を圍つて、しやんと見得。
少將　茂兵衛さん、ござんしたか。
新五　こりや茂兵衛、盗人の
四人　肩を持つのか。
茂兵　いんにや、詮議が違つた。
皆々　詮議が違つたとは。
茂兵　その金の盗人は、長吉でも少將でもない。この荒五郎茂兵衛だ。
皆々　なんと。
少將　コレ、モシ。

茂兵　ハテ、盗人が盗人と名乘つて出るに、何も墨金の違ふ事はない。何にも云はずに居るものだよ。

新五　なんと云ふ茂兵衞、金盗人はわれだと云ふか。われなりや猶、その分ぢやア置かれない。盗人なれば、いけツ首の無い奴。動くな。

茂兵　成る程、金盗人はこの茂兵衞だが、新五左衞門どの盗まれた金が戻つたなら、何も云ひ分はあるまいがな。

茂五　いんにや、云ひ分がある。金が戻ればとて、盗人の惡名が消えるものか。若い者ども、茂兵衞を引立てろ。

眼八　盗人なれば遁がれはない。

皆々　茂兵衞、うせろ。

ト四人、茂兵衞へかゝる。立廻り、後へ鐵壁武兵衞、出かゝり居て

武兵　若い者ども、待て。

新五　こりや、鐵壁武兵衞。

四人　なぜ留めるのでごんす。

武兵　この武兵衞が留めたのは、わいらも平常この廓へ入込んで居ながら、この位な事に氣が付かぬか。茂兵衞は金盗人ぢやアない。

新五　でも、我れと我が手に、金盗人と名乘つて出たその茂兵衞。

四人　親分、盗人でないと云はつしやるは。

武兵　ハテサテ、物をよく積つて見ろ。廓は愚か、江戸八百八町で、男を賣る荒五郎茂兵衞、人立ち多いこの廓で盗人をしてよいものか。そりやアない事だ。

四人　でも、茂兵衞が口から。

武兵　イヤサ、どこまでもない事だよ。

茂兵　いんにや、ある事だ。あの金の盗人は、この茂兵衞に違ひない。

武兵　コリヤ茂兵衞。わりや男に似合はぬ、僞はりを云ふ者だの。

茂兵　待て武兵衞。荒五郎茂兵衞が、何を僞はりを云つた。

武兵　ハテ、知つてゐるわえ。これにござる新五左衞門さまの惚れてござる、あの少將が事と云ふと、何かに付けて世話燒く荒五郎茂兵衞。少將が盗みをした所へ出て、その盗人はおれだとて、その難儀を引請ける事はいくらもある型で、ソレ、芝居でもよくするワ。奥山なぞと云ふ役者が女形を捉へて、何か詮議する所へ、三升が出て難儀を救ひにかゝる事は、平常狂言でする事だ。男を立てる茂兵衞が、女郎屋の座敷で盗みをして堪るものだ。

盗人はわれぢやアあるまいがな。
茂兵　どこまでも茂兵衞だ。
武兵　ハテ、片意地な男ではある。この武兵衞が、盗人をする茂兵衞ではない。おのしは盗人でないと云ふに、どこまでも盗人になりたがるは、ハテ、變つた物好きもあるものだな。
少將　成る程、武兵衞さんのおしやんす通り、男を立てる茂兵衞さんが、なんの盗みをさしやんせうぞ。あの金盗んだは、この少將に違ひはござんせぬ。
武兵　コレ少將、われにやア盗人の詮議より外に、キッとした詮議がある。新五左衞門さま、最前奥で話し合つた通り、その少將を打ち据ゑて、平家の落人歌綾姫と名乘らせるがよい。
新五　成る程、繪姿に似た化粧坂の少將、歌綾姫と本名明かすまいか。
少將　イエ〳〵、そんな事は知らぬわいなア。
新五　知らぬとは云はさぬ。本名を名乘らせにやア
ト棕梠箒を持つて、少將を打ちかゝる。大淀出て、新五左衞門を支へろ。
武兵　こりやア大淀。

新五　なぜ邪魔をするのだ。
大淀　待たしやんせ。妹女郎を折檻するは、姉女郎のわたしが役。新五左衞門さん、わたしが折檻する程に、わたしに任せて下さんせいなア。
新五　面白い。大淀、其方が折檻して名乘らせるか。
大淀　如何にもわたしが折檻して
少將　イエ〳〵、金盗人と云ふより外、何も名乘る覺えはないわいなア。
茂兵　イヤサ、金盗人はこの茂兵衞さまだ。
武兵　また云ふか、しつこい男だ。ナニお主が盗みをするものだ。この金盗人は外にある。
茂兵　外にあるとは、そりや誰れだ。
武兵　植木賣りの彦六めだ。
大淀　エ、、なんとえ。
武兵　あの二才めも太い奴だ。大淀、其方が誠の間夫と云ふは、あの彦六であらうがな。
茂兵　大淀が間夫も、この茂兵衞だ。
武兵　その間夫も、もう取措け。何もかも知つて居る。大淀に心中見せうと、少將が身請けの金を、ひん盗んだは植木賣りの彦六。

大淀　どうしてマア、彦六さんが。
新五　コリヤ大淀、少將に歌綾姬と白狀させろ。
大淀　心得ました。
　ト掛け物竿を持つて立ちかゝり
少將さん、有やうに名乘らしやんせんか。
茂兵　こりや大淀、そんならわれが。
武兵　ハテサテ茂兵衞、お主が構ふ事ぢやアない。金盜人は彥六ぢや。お主ぢやアあるまいが。
茂兵　いんにや、おれだ。
大淀　アノお前が。
新五　打ち据ゑて白狀させろ。
大淀　サア。
武兵　盜人は茂兵衞であるまい。
茂兵　違ひない。この茂兵衞だ。
武兵　これ程までにこの武兵衞が、盜人はわれぢやアあるまいと云ふのに、金盜人になりたがる荒五郎茂兵衞、いよいよわれが盜人か。
茂兵　おんでもない事。盜人だと云ふからは、鐵壁武兵衞、少將に構はずと、存分にしやれよ。
　ト合ひ方になる。
新五　少將をぶて。
大淀　少將さん、有やうに云はしやんせ。よもや外に名乘る名はあるまいがな。
少將　アイ、ナア、名乘る名はござんせんわいなア。
武兵　茂兵衞、物を合點しろ。どこまでも盜人と意地張れば、その笠の臺が飛ぶぞよ。イヤサ、そのいけツ首が落ちるぞよ。無益な事に命を落すと、男達と褒めもせまい。それでも盜人になりたいか。
茂兵　恥を捨てゝ盜人をするからは、素ツ首の落ちるは覺悟の前。
武兵　ハテ、小氣味のよい男だ。その大丈夫を見るにつけ無き名を付けて殺すも惜しい。よいワ、不便な事だ。われが盜人の惡名は、この武兵衞が拔いてやらう。
茂兵　そりやアどうして。
武兵　盜人の惡名を拔いてやる證據。いま見せよう。
　ト硯箱引寄せ、紙を取つて一通を認める。
新五　歌綾姬と名乘らせろ。
大淀　歌綾姬と名乘らしやんせ。
武兵　サア茂兵衞、盜人の惡名拔いてやる代り、この誓紙に血判据ゑて、この鐵壁武兵衞に渡せ。

茂兵　そりやアなんの誓紙だ。
武兵　イヤ、むづかしい誓紙でもない。讀んで聞かせうから開け……起證文の事、一つ、貴殿のお情を以て、拙者盗人の悪名消え候ふ上は、貴殿の仰せの趣き、何事も相背き申すまじく候ふ事。一つ、相背くに於ては、諸神諸菩薩は云ふに及ばず、別して弓矢神の御罰を蒙むり、武運に盡き果て、のたれ死いたすべく候ふ、依つて起證文件の如し。
　ト これにて茂兵衞思ひ入れ。
サア、これにでつかりとわれが名を書いて、血判も据ゑて渡しやれ。盗人の悪名は、この武兵衞が拔いてやる。
サア〱、荒五郎茂兵衞、どうだ。
　ト 大淀もこれを聞いて思ひ入れ。
新五　手酷くぶて。
大淀　サア〱
　ト 思ひ入れ。
武兵　どうだ茂兵衞、誓紙に血判するか。矢ッ張り盗人になりたいか。
茂兵　百年目だと締らめて居るワ。
武兵　土性根を据ゑて出たな。われ盗人になれば、その首が落ちるぞよ。この誓紙に血判せず、いよ〱盗人に極まれば、この武兵衞が仕様がある。若い者ども、おれが下駄を持つて來い。
眼八　心得ました。
　ト 下座より、武兵衞が下駄を持つて來る。
親分、座敷でこの下駄を何にさつしやる。
武兵　盗人の責め道具だ。爰へ寄越せ。
　ト 下駄を取つて立ち上がり
荒五郎茂兵衞の大盗人め。
　ト 武兵衞、下駄にて茂兵衞をぶつ。掻い潜り、その手を取りてキツと思ひ入れ。大淀、少將もこれを見て思ひ入れ。
茂兵　こりやア鐵壁武兵衞、男を立てる茂兵衞がしやッ面を、なぜ泥下駄でわりやア、ぶゝぶつた。えゝ。
武兵　ぶつても大事ないワ。
茂兵　何がなんと。
武兵　わりやア武兵衞が金盗人だ。盗人を喰はせるに云ひ分があるか。
茂兵　サア、そりやア。
武兵　われが口からたつた今、盗人と名乘つて出たぞよ。

その盗人をぶちのめすに、口惜しくつても無念でも、云ひ分はない筈だ。おれが金を盗んだ大泥坊めは、カウカウ。

ト茂兵衞を散々にぶつ。茂兵衞ヂッと思ひ入れ。

斯う下駄で打たれても、云ひ分はあるまいが。それでもわりやア男達か、盗みをしても面が立つか。荒五郎茂兵衞なんぞと、人嚇しな名を付けて、五丁町を暴れ歩き、大盡客のこの武兵衞さまのお頭へ、われが下駄を上げたがよいか。今のやうに下駄でぶたれたがよいか。まだまだまだ、大盗人の極印に、われが頭へ鐵璧武兵衞が、泥下駄を斯う載せて置くワ。

ト下駄を淀兵衞が頭へ載せる。茂兵衞、手を組んでヂッと思ひ入れ。大淀これを見て

大淀　そりや又、あんまり。

武兵　何があんまりだ。

大淀　サア、あんまり氣強う叩いたら、少將さんが。

新五　名乘らせたら。

武兵　茂兵衞、口惜しいか。無念なか。われが下駄を我が頭へ載せられ、格子先の人中で、ヂッと無念を堪えて居たも、斯う云ふ時節を待つて居たのだ。若い者ども、見たか。

四人　よい態でごんす。

武兵　大淀に腐れ付いて居る、植木賣りの彦六めが、盗みひろいだ事まで、身に引請ける間夫の前立ち。それが男達の態か。ハヽヽヽヽ。イヤ、大盗人め……新五左衞門さま、少將は名乘りませぬか。

新五　死太い女郎め、疊みかけて大淀ぶて。

少將　金盗んだはこの身の科。

ト此せりふにて泣く。

茂兵　イヤサ、金盗人はこの茂兵衞、少將の彦六のと、弱い者をいぢめずと、武兵衞、お主が存分に、頭の下駄は愚かな事、武兵衞が腕の續くだけ、ぶて、叩け、ぶちのめせ。堪忍袋の緒を締めて、どつこいそつこい堪えて見せう。

武兵　出かした〳〵。なか〳〵よい辛抱だ、その辛抱のよい所を、まだこの上に

ト茂兵衞が頭の下駄を取つて、ぶちにかゝる。

大淀　待たしやんせ武兵衞さん。そりやお前、あんまりぢやぞえ。盗人と云うて出しやんした茂兵衞さん、どのやうにさしやんしても、ヂッと堪えて居やしやんす心の

内、わしや推量して身も世も……弱身へ付け込んで、格子先の意趣返し、存分になしやんして、お前の腹は癒えやうけれど、廓の所譯はさうでもないぞえ。人の情と云ふ字を武兵衞さん、ちつとは思うても見やしやんせいなア。

武兵　ムウ、この武兵衞に大淀が、情と云ふ字を思へとか。この鐵壁は思ひもしやうが、大淀、お主も情と云ふ字を思つてくれるか。

大淀　サア、それはナ。

武兵　情をかければ盗人の、その茂兵衞がんじ搦みに、三寸繩にて引ッ括るワ。

茂兵　この茂兵衞を引ッ括るとは、そりやアどうして。

武兵　この小田巻で。

　ト岩吉の持つて來た凧の糸巻を出す。

茂兵　なんと。

武兵　サア、この小田巻に針をつけ、裳にこれをさすと云ふ、彼の姥ケ嶽の故事も、身に繋がれし小田巻の、糸筋を繰り返して見つけたら、どこに絡まるそのもつれも、大方それと知れさうなものだ。名乗れ。

少將　サア、名乗る名は。

大淀　コレ。

新五　名乗らせろ。

大淀　名乗る名は覺えない。金盗人は

茂兵　この茂兵衞。

武兵　その盗人より本名を。

　ト小田巻を持つて立ちかゝるを、大淀支へて

大淀　コレイナア武兵衞さん、お前は盗人の折檻してぢやないかいなア。まだその上に、少將さんの事まで兎やかう云はしやんすは、ほんに粋のやうでもない。ちつとは情らしい事を、云うて見やしやんせいなア。

武兵　大淀、情と云ふ字を思うて居るか。ハヽヽヽ。ちつとはさうありさうなものだ。それに引替へ、何奴も此奴も、ぶたれても叩かれても、イケ死太い土根性。是非名乗らねば

新五　骨を拉いで

武兵　この武兵衞が。

　ト少將を引寄せ、小田巻にて打たんとする。茂兵衞、少將を退ける。武兵衞かゝるを大淀隔てゝ

大淀　武兵衞さん、少將さんはこの大淀に

武兵　預けろと云ふのか。

大淀　預けて下さんせ。
新五　謌綾姫と名乘らせろ。
武兵　茂兵衞はこの場の金盜人。下駄背打ちが口惜くば、その返しをしに來るとも、この小田卷を繰り返し、昔の身になりたくば、この武兵衞が取立てゝ、よい身の上にもしてくれう。
茂兵　身に誤まりのあればこそ、無念を堪えて蟄して居るは、潛龍の時の至るを待つて居るのだ。
大淀　それもこの、少將さんの身の上を、この大淀が預かるからは
武兵　この小田卷を繰りかけて
新五　座敷のもつれは何事も
大淀　その身を繋がば結ぼれた
武兵　心も解けて麻糸の
茂兵　淺い心もいつしかに
武兵　よれつ
大淀　もつれつ
茂兵　むづかしい
武兵　有無の二つは
大淀　わたしが胸に。

新五　帶紐解くか。
茂兵　意氣地を立てるか。
大淀　二筋寄せて
武兵　詮議の糸に
茂兵　あの少將は
武兵　大淀其方に
大淀　預けさしやんせ。
茂兵　見事お主が
武兵　彼奴が本名。
大淀　後とも云はず
新五　この場に於て
少將　覺えない事。
武兵　名乘らす仕樣は。
茂兵　云ふに云はれぬ
大淀　廓の諸譯。
武兵　手間にかゝつて
少將　夜明けの鐘を
新五　合圖に定め
武兵　茂兵衞、大淀。
茂兵　鐵壁武兵衞。

ト兩人、思ひ入れ。大淀隔てゝ

大淀　お二人さん。

武兵　奥で返事を、待つて居るぞよ。

ト唄になり、武兵衞、小田卷を打ちつける。茂兵衞、思ひ入れ。大淀隔てる。よろしくこなしあつて、武兵衞、奥へ入る。新五左衞門、皆々付いて入る。長吉そこへ出て

長吉　何れも樣、私しがひよんな事を仕出しまして、お氣の毒に存じまする。

大淀　なんの、其方の業でもない。皆少將さんを思うての事。モシ、コレ。

ト少將に囁く。

大淀　心得ました。

少將　長吉も行きや。

長吉　畏まりました。

ト少將に長吉付いて入ると、二階より彥六、下りて來て

彥六　茂兵衞さま、樣子は二階で聞いて居りました。堪え憎い所を、よう辛抱して下さりましたなア。

大淀　お姬樣のお身の上にかゝつた今の仕儀。お前が辛抱して下さんしたばつかりで、わたしに預けて行たわいなア。

茂兵　サア、この小田卷を持つて、我れ／＼を尾形と嗅ぎつけたあの武兵衞、彼奴も只の奴ぢやアない。これに付けても大淀、聞きやれ。昨日暮れ方、日本堤に、人手にかゝりし死骸、人殺しの詮議最中に、立寄りよく／＼見れば、兄者人鹽田の次官どの。

大淀　エヽ。

ト愕りする。

茂兵　世を忍ぶ身の悲しさは、その敵の詮議もならず、死骸の片付くを見て、餘所ながら御回向。思ひ廻せば兄者人の下向は、小田卷の鏡を持參し、我れ／＼を尋ねられしは必定。巡り逢はぬは互ひの不運。是非もなき身の死別れであつたわやい。

大淀　そりやマア、ほんの事でござんすかいなア。兄さん、おいとしい事を致しましたわいなア。

彥六　その人殺しの噂は、この彥六も知つて居るが、すりや大切なる小田卷の鏡は、盜賊の爲に奪ひ取られ召されたか。ヘイ、その名鏡なくては、姬君と云ひ我れ／＼が汚名を雪ぐ種を失なうたか。殘念な。

大淀　其やうな事につけても、合點のゆかぬはあの鉢植。新五左衞門があのやうに欲しがるのは、どうも合點がゆかぬわいなア。

彥六　この彥六も其やうに思うて居る。なんぞ仔細がなくては叶はぬ。

ト床の間の鉢植を取つて來て、よく／＼見て

おれが土をならして置いたと違つて、此やうに土の高低なは。

ト煙管にて土を掘る。中より狀箱を出して

コレ／＼大淀、此やうな狀箱が入れてあつたワ。

大淀　道理こそ、兄さん、早う見やしやんせ。

茂兵　ドレ／＼。

ト狀箱を取つて、中より一通を出し、大淀、行燈を持つて來る。

常陸之助賴國どのへ、阿野の全乘。

ト讀む。二階より障子を明け、武兵衞これを見下ろす。茂兵衞、一通を讀む。武兵衞、この狀を見たき心にて、いろ／＼見下ろし、懷中より鏡を出して、これへ寫して見る思ひ入れ。この鏡の影、下の手水鉢に寫り、ドロドロにて、手水鉢へ小蛇顯はれる。大淀、彥六、これを見て思ひ入れ。茂兵衞も心づき、これをキッと見て、狀を卷き込んで思ひ入れ。二階の武兵衞、この蛇の顯はれしを見て思ひ入れ。

茂兵　この小蛇の有樣は。

ト武兵衞、心付き、鏡を隱す。茂兵衞、彥六、大淀、手水鉢に立ちかゝり、人影を見て

三人　この影は。

ト上を見る。武兵衞、障子をさす。

茂兵　ハテナア。

ト思ひ入れ。

彥六、大淀、見やつたか。この手水鉢より逆卷き登る小蛇の有樣。忽ち影を失ひしは心得ぬ。此やうな事につけても、怪しいはあの武兵衞。只者ならぬあの骨柄。化けの皮を引剝ぐ仕樣は。

大淀　わたしに心をかけて居るこそ幸ひ、嘘で仕掛けて誠を糺す、仕樣もやうもござんせう。

彥六　コレ／＼、その嘘を仕掛けて誠を糺すは聞えたが、必らず嘘が誠にならぬやうに、合點かや。

大淀　そりや、氣遣ひさしやんすな。

茂兵　おれが居て、荒立てゝは事の破れ。何もかも其方に

任せて、仲の町に待ち合せ、七ツの鐘の合圖に來よう。
必らずともに今宵のうちに。
大淀　實否を糺すがわたしが役。
彦六　鐘を合圖に待つて居ますぞ。
茂兵　姫の御身に氣を付けやうぞ。
大淀　案じずとも、早うござんせ。
茂兵　彦六、妹。
彦六　ござりませ。
茂兵　ドリヤ、行つて來ようか。
ト皆々奥へ入ると、引違へてお十出て
お十　二階も下座敷も、みんな膳が下がる。初花さんの座敷で、一杯呑んで金を二分貰つたから、今夜は先づこれでよしと。ほんにマア此やうに、思ふ事僞になるこの世の中に、ほんにこのお十を誘ふ水も、ありさうなものぢやがなア。
ト思ひ入れして蒲團を敷き、屏風を立て、少し醉うたろこなしにて
きつう醉うたわいの。こちや大淀さんのござんすまでは、爰へ寢よう。
ト夜具に凭れて居る。奥より夢の市郎兵衛、出で來り

市郎　そこに居るはお十ぢやないか。
お十　市郎兵衛さんかえ。わつちや大分醉うたわいなア。
市郎　そしてマア、その居住ひは。ちつと膝を引ツかけやれな。
ト側へ寄り、前を直してやり
ほんにお十や、おぬしやア剛氣に醉つたの。
お十　アイ、醉うたわいなア。
ト市郎兵衛に凭れる。
市郎　エ、有り難いなア。お主とおれが斯うして居る所を、脇で見たなら味に思ふぞえ。
お十　ハテ、なんと思うても大事ないわいなア。
ト市郎兵衛を引寄せる。市郎兵衛、鼻を摘み思ひ入れ。
市郎　そりやアハヤ、どう思はれても、お主ゆゑなら大事もないが。
お十　さう思はんすなら、もちつと此方へ寄らしやんせいなア。
市郎　シタガ、斯う側へ寄つても、木綿物が手に觸つちやア氣がないわえ。
お十　そんなら裸にならうかえ。
ト帶を解く。市郎兵衛、鼻を摘み

市郎　アヽ、そりやア御免だ〳〵。

ト方々見廻し

オヽ、よい物がある。爰に少將の寢卷がある。これを着てくりや。

ト鹿の子の振り袖を出し、四つ目に彥六と大淀が着替へたやうに着替へる。

オヽ、それでよい〳〵。

お十　サア、そんなら早う寢やしやんせいなア。

市郎　寢るは寢やうが、それ程お主が、おれが事を思つてくれるなら、二世も三世も變るまいと云ふ、なんぞ心中を見せやれ。

お十　成る程。

ト思ひ入れあつて、髮を切らうとする。

市郎　アヽ、髮でもないよ。

お十　そんなら。

ト指を切らうとする。

市郎　それも古い。

お十　そんなら、どうしやうぞいなア。

市郎　サア、お主が心中には。

お十　なんぢやえ。

市郎　途方もない事を、三年絕つてくりやれ。

お十　そりやお前、途方もない事云はんすな。

市郎　ソレ、その途方もないを絕つてもらひたい。

お十　サア、これは絕ち惜い事なれど、お前ゆゑなら

市郎　絕つてくれるか。

お十　絕たいでわいなア。

市郎　それでこそ心中見えた。

お十　市郎兵衞さん。

市郎　お十。

お十　もつと此方へ寄らしやんせいなア。

ト引寄せる。

市郎　エヽ、酒臭い。

お十　お前、生醉の匂ひが嫌ひかえ。

市郎　サア、おらアきつい嫌ひよ。

お十　そりやア、困つたものぢやわいなア。

市郎　その仕樣はある。

お十　あるかえ。

市郎　オヽ、ある〳〵。

ト手拭を出し、お十へ猿轡をはめ、懷中より繩を出し、縛り上げる。お十、物の云はれぬこなし。

口を斯うして置くがよい。
ト市郎兵衞、お十へ手拭にて猿轡をかける。お十、物か云はれず、ウン／＼云つて居るを、無理に屏風の内へ入れて寢かす。奥にて眼八、文七が聲するゆゑ、市郎兵衞、行燈を吹き消す。奥より兩人出で來り

眼八　こりやア、とんだ暗い。市郎兵衞どのや。

文七　市郎兵衞どん／＼。

市郎　シイ／＼、やかましい／＼。

眼八　市郎兵衞どのか。少將は。

市郎　一杯吞まして寢かして置いた。歌綾姬に違ひはない。新五左衞門どのゝ所へ連れて行くとも、代官所へ素引いて行くとも、褒美の金は山割りだ。

文七　そりやア吞み込んで居る。

市郎　口もきかせないやうに、猿轡を嵌めて置いた。連れて行け。

兩人　合點だ。
ト兩人、屏風を引明け、寢て居るお十を探り寄つて引立てる。お十は眼八を市郎兵衞と思ひ引寄せる。

眼八　此奴は酒臭い。

文七　酒ばかりぢやアない。干鰯の匂ひがする。

市郎　やかましい。歌綾姬を連れて行け。

兩人　合點だ。
ト眼八、文七、お十が兩手を取つて引立て、花道へ連れて入る。市郎兵衞、後を見送りて

市郎　大べら坊め。
ト奥より長吉、行燈を提げ、少將、おみな付いて出て來る。

みな　市郎兵衞さん、爰に居やんしたか。

市郎　おみな、長吉、少將さんのお供したか。

長吉　左樣でござりまする。

みな　コレイナア、何に付けても心にかゝるは、新五左衞門が持つて居る繪姿でござんす。

市郎　それだに依つて、たつた今、新五左衞門が手下の奴等に、少將を連れて行けと、遣り手のお十を替へ玉にして遣つたが、もう、お姬樣を爰の内には置き憎い。お供をして立退かにやアならぬ。姬君樣、そのお心でお出でなされませ。

少將　待たしやんせ。おみなさんと云ひ、市郎兵衞さんまで、この少將を姬君とはえ。
ト後へ大淀出かゝり居て

大淀　お二人とも、お氣遣ひな者ではござりませぬ。

ト少將を上へ直し

御父少納言賴盛公の、御恩を受けられました、お人達でございますわいなア。

市郎　大淀さまの云はるゝ通り、拙者は賴盛公の御恩を請けし、平家の侍ひ、山城の太郎行長と申す者。夢の市郎兵衞と名を變へ、廓へ入込んで居るも、お前樣を守護いたさん爲。

みな　私しとても若蔦屋のおみなと申して、この廓に居りまするも、餘所ながらもあなたへ御奉公いたさん爲。私しはこれなる山城の太郎が妻、春の谷と申す者でござりますわいなア。

市郎　スワと云はゞ夫婦諸とも、隨德寺を喰はせる心でござりまする。

長吉　幸ひ曾我の時宗さまは、三原那須野へお出での留守。預り主はこの松原十太。直ぐにお供いたしませう。

大淀　そんならお前方を賴む程に、姬君樣のお供をして

市郎　惡者どもが目にかゝらぬうち

長吉　お供を致しませう。

大淀　其まゝでは大門がむづかしからう、オヽ、幸ひ〳〵爰にこの羽織、お裾を引上げ、客衆のやうにして、お羽織を。

ト彥六が脫いだ羽織を少將に着せ。裾を引上げてやる。

長吉　御慮外ながらこの編笠。

ト編笠を出して少將に着せる。

市郎　もう、引け四ツの宵歸り。

みな　初會の客の後朝を、送るはわたしがこの提灯。

ト提灯をともす。

大淀　大門からは三枚肩で

少將　又の御見は

市郎　お近いうちに。

長吉　めでたう御代に。

大淀　コレ……おみなさん、大手まで送つて上げておくれ。

みな　心得ました。

ト三重になり、おみな先に、少將、長吉付いて向うへ入る。兩人、後見送り

大淀　嬉しや、これで落ちつきましたわいなア。

市郎　これから新五左衞門が持つてけつかる、繪姿を引ツ奪りたいものだが。

大淀　そりやアお前の働らきで

市郎　合點でごんす。大淀さん、後にえ。
大淀　こざんせ。
ト合ひ方にて市郎兵衛、奥へ入る。下座の方よりおはぐろ婆アおかん、ツカ〳〵と出で來り、大淀を見て
かん　ホヽヽヽ、大淀さん、爰にお出でなさりやすか。お前を一遍お尋ね申しやした。
大淀　ほんに砂利場のおかんさんかいなア。わたしを尋ねたとは、なんぞ用でもあるかえ。
かん　アイサ、ちつとお目にかける物があつて、持つて參りやした。
大淀　わたしに見せる物とは、なんでござんすえ。
かん　外でもござりやせぬ。この守り袋。
ト懷中から出して
拂ひ物サ。ずんと廉い物だ。お買ひなさりやせぬか。
ト守り袋を持ちながら見せる。大淀見て
大淀　エヽ、その袋は岩松が、提げて居たのぢやござんせんかえ。
かん　あの子の提げて居た守り袋サ。
大淀　それをわたしに買へとはえ。
かん　サア、お前に買ひなさいと云ふは、この中に好いお守がござりやすよ。しかも歴とした筋目で、あの子の臍の緒の書付けに、菊地次郎成氏伜岩松と。
大淀　ア、コレ。
ト思ひ入れ。
かん　云つちやア悪いかえ。そんなら買つてくんなさい。廉くして上げるワ。
大淀　成る程〳〵、そりやわたしが買ひたいわいなア。
かん　買つてくんなさるか。廉い物だよ。たつた百兩サ。
大淀　エヽ。
ト悄りする。
かん　何も魂消る事はないよ。これをお前、代官所へ持つて行つて見なさい。百兩にならうか千兩にならうか知れない。なぜと云ひなさい……申し上げまする、このお守を提げて居る子伜が、親は植木賣りの彦六、大磯屋の大淀と申す傾城でござりまする。御吟味なされ御褒美を下さりませと云つて見なさい。直ぐに金だわな。その慾を離れて、お前へ賣つて上げる。お前も菊地の同類であらうの。
大淀　コレ、滅多な事を云はしやんすな。
かん　云はないから買つておくれ。

大淀　サア、買ふ程に、大きな聲して下さんすなえ。
かん　そんなら小さな聲で、サア、金をくんなさい。
大淀　金を上げるさかい、マア、その守を。
　ト取りにかゝる。
かん　これが欲しいか、金を寄越しなさい。
大淀　サア、今と云うて百兩と云ふ金は調はぬ程に、明日まで待つて下さんせ。明日はキッと上げる程に、その守り袋は、どうぞわたしに。
　ト無理に取りにかゝるを突き退け
かん　金も寄越さないで只取らうとか。いけッ太い女だわえ。年寄りをいかさまにかけようと、明日遣らうのなんのと、ナニ、出來るものだ。里扶持の代りに襁を寄越したぢやアないか。そんな氣の長い阿母さんだと思ふか。いま金にならにやア、代官所へ駈け出して、菊地次郎が餘類の者と訴人する。
大淀　エ、。
かん　しつかりとした事を見て置いた。金にせにやアならぬ。てまへ、金はあるまいな。無ければきく事がある。
　あの植木賣りの彦六が菊地次郎か。
大淀　イエ〳〵、そんな事は知らぬわいなア。

かん　なに知らない事があるものだ。云はせにやアならぬ。大淀さん、爰へ來なさい。
大淀　アイ。
　ト思ひ入れ。
かん　來なよ。
大淀　アイ。
かん　うしやアがれよ。
大淀　エ、。
　ト側へ來る。
かん　彦六は菊地次郎、お前は女房だの。
大淀　イエ〳〵。
かん　知つて居るワ。まざ〳〵しい顏をして白を切るやつさ。この大淀は、菊地の餘類者だよ。
　ト大きな聲をする。
大淀　ア、コレ、それを云うては。
かん　金を寄越すか。
大淀　サア、その金は。
かん　彦六は菊地次郎か。
大淀　サア、それは。
かん　訴人をしようか。金を渡すか。

大淀　サア、それは。
兩人　サア〳〵。
かん　どうだ。
大淀　サアコレ、何事も合點ぢや程に、明日まで待つて、その守は。
ト取りにかゝるを突き退け、棕梠箒にて大淀を散々に打ち据ゑる。
いけツ太いあまつちよだわえ。なんのかのと口を叩く拍子に、この守り袋を只取らうと思うて。斯うぶちのめした上で、彦六が事もうぬが事も、本名聞かにやアならぬ。吐かしやアがれ。
ト叩く。
大淀　イエ〳〵、どのやうに打擲されても、彦六さんの事は、わたしや知らぬ。わたしも只の傾城大淀太夫。外に云ふ事はないわいなう。
かん　よく噓を吐きやアがる。さう意地張れば、土性骨の折れる程ぶち据ゑて白狀させる。これでもか〳〵。
大淀　あんまりぢやわいな。胴慾ぢやわいなア。今宵と云うてもう僅か。明日まで待つて下さんすと、お前の存分にする程に、拜みます。どうぞ明日まで待つて下さんせいなア。
ト思ひ入れ。
かん　斯うなつちやア、明日までは待たない。白狀せにやア又よい責め道具があるよ。甘口ぢやアいけまいと、臺所であげて來たこの出刃庖丁。
ト出して見せる。大淀、悔りして逃げる。
この位な金の蔓を見付けて、只通すお婆さんぢやアない。有やうに吐かさにやア、むつゝりとした太股へ突き立てるよ。
大淀　エヽ。
ト慄へながら逃げるを付け廻す。大淀、思ひ切つて守を取りにかゝる。立廻りにてお勘を振り切ると、このはずみに出刃庖丁を持つてのめり、我が手に額へ疵を付け、流るゝ血汐を見て悔りし
かん　ヤア、こりやアおれが面へ疵を付けたな。
大淀　エヽ。
ト慄へる。
かん　こりや、おれを殺すか。大淀は菊地の餘類だ。大淀の人殺しめ。
ト怒鳴るゆゑ、大淀、口を塞ぎ、いろ〳〵留めても、

出刃庖丁を持つて、喚きながらよろぼひ歩くを、大淀、無理に出刃庖丁を取り、大聲を上げるゆゑ、是非なくおかんを切る。奥は獅子の騷ぎになり、大淀、おかん立廻りよろしくあつて、トヾおかんを殺す。此うち武兵衞出で來り、落ちてある守り袋を取つて懷中し、二重舞臺に見て居る。大淀、いろ／＼こなしあつておかんを仕留め、死骸へ蒲團を掛けて、思はず武兵衞と顔見合せ、惘りして出刃庖丁を後へ隱す。

武兵　大淀か。

大淀　武兵衞さんかえ。

武兵　お主は爰に何して居た。

大淀　アノ、わたしかえ。わたしやア先刻に、お前に別れてから、その時お前の云はしやんした、情と云ふ字が心にかゝつて、どうしたらよからうと、くよ／＼思ひながら、一つたべたと思はしやんせ。そしたら心がハツキリとなつたに依つて

武兵　そのピツカリか。

大淀　エ。

武兵　イヤサ、今お主が、後に隱したピツカリは。

大淀　ピツカリと云はしやんすわえ。

武兵　後に隱したその刃物。大淀、そりやアなんにするのだ。

大淀　エ、、サア、これはな。

武兵　なんにするのだ。

大淀　サア、こりやアお前に、指切つて上げうと思つて。

武兵　なんと云ふ。この武兵衞に指を切つてくれうと云ふのか。

大淀　今までの事を、お前が疑はしやんすであらうと、お前に

武兵　指を切つてくれる氣か。

大淀　情と云ふ字の返事に

武兵　おのしが指を

大淀　アイナア。

武兵　その切つてくれると云ふ、指も切らぬにこの血は。

大淀　エ、、この血は。

ト大淀、思ひ入れにて、出刃庖丁にて指を切らうとする。

武兵　心中見えた。

大淀　エ、。

ト思ひ入れ。

武兵　大淀、情と云ふ字の返事を聞き屆けた。もう指切るにも及ばぬわい。

大淀　そんならわたしが心の內を

武兵　知つてゐる。

大淀　嬉しうござんす。

武兵　情をかけて帶紐解いて、この武兵衞に逢うてくれる心なら。

大淀　わたしが身に、どのやうな事があらうとも、一生見捨てゝ下さんすなえ。

武兵　この世は愚か未來まで、見捨てる心は微塵もないがよもやおのしは、さうぢやあるまい。

大淀　疑ひ深い。指まで切らうと云ふ心中。

武兵　その心に違ひなくば、逢うてくれるか。

大淀　逢はいでわいなア。

武兵　この廓へ通ひ初めのその時より、大磯屋の大淀は。嬉しい可愛らしいぼつとりもの。靨魂から惚れ拔いて、一夜の情に逢うたらばと、揚詰めにして通つたも、荒五郎茂兵衞に妨げられ、ろくに座敷も勤めぬそもじ。今宵は如何なる吉日にて、今のやうな詞を聞いて、この武兵衞、惣身に通じて有り難い。そんならいよ〳〵。

大淀　お目にかけると云ふ證據は

武兵　その證據は

大淀　斯うぢやわいなア。

ト武兵衞へベツタリと抱きつく。

武兵　エヽ、有り難い……と云ひたいが、そりや噓だ。

ト大淀を取つて突き退ける。大淀こなしあつて

大淀　武兵衞さん、この大淀に、恥かしい事云はして置いて、噓とはえ。

武兵　爰な大淀の、人殺しめ。

大淀　エヽ。

ト思ひ入れ。

武兵　この蒲團の下はなんだ。砂利場から來るおはぐろ婆ア、その出刃庖丁で誰が殺した。

大淀　サア。

武兵　われが手にかけた事を、しつかりと見屆けたこの武兵衞。またあるワ。この守り袋。

ト出して見せる。大淀、恟りして

大淀　ヤア、それは。

武兵　なんと、この守り袋は覺えがあらうが。

大淀　サア、それはな。

武兵　彦六が子の岩松が、提げて居たこの守。中にある臍の緒の書付けに、菊地次郎が忰岩松とあるからは、あの植木賣りめは、贋ひもなき菊地次郎成氏。平家に荷擔し、鎌倉の不審を請けて居る餘類の奴等。搦めて出せば逆磔刑。木の空でピリ〳〵だ。なんと大淀、それでも其方の心一つで、おはぐろ婆アを殺した事も、この守り袋の書付けも、サラリと流すこの武兵衞。そこが一生見捨てぬところ。いよ〳〵抱かれて寢る心か。

大淀　サア。

　ト思ひ入れ。

武兵　否ならこれで訴人しようか。人殺しと聲立てうか。

大淀　サア、それは。

武兵　但し抱かれて寢てくれるか。

大淀　サア、それは。

兩人　サア〳〵〳〵。

武兵　大淀返事は、どうしてくれる。

　ト思ひ入れ。大淀、こなしあつて

大淀　エヽ、なんぢやいな武兵衞さん。抱かれて寢まいと云ふにこそ、帶紐解いて逢うたなら、お前、何にも云はしやんす事はあるまいがな。

武兵　抱かれて寢てさへくれるなら、見た事も聞いた事も知らぬ顏。いよ〳〵抱かれて寢る心か。

大淀　なんの僞はり云はうぞいなア。疑ひ深い。

武兵　眞實に。

大淀　心中は見たぢやないかえ。

武兵　まこと抱かれて寢る氣なら、あの彦六めと切れてしまへ。

大淀　エ。

武兵　否か、ならぬか、切られぬか。

　ト大淀ヂッと默つて俯向いて居る。武兵衞、思ひ入れして、花道の方へ行かうとする。大淀、駈け寄つて縋りつき留め

大淀　武兵衞さん、こりやお前どこへ行かしやんす。

武兵　訴人に行くのだ。

大淀　エヽ。

武兵　菊地が餘類を人殺しを、訴人に行くのだ。退け。

大淀　待つた。切れるわいなう。

武兵　なんと。

大淀　彦六さんとさつぱり切れて、お前と眞實逢はうわいなア。

武兵　ムウ、その心底が誠なら、おれが見る前で、あの彦六と、さつぱり緣を切つてしまへ。

大淀　サア、切れるわいなア。

武兵　しかとおれが目の前で。今でも爰へ彦六が來たらば、さつぱりと緣を切るか。

大淀　オヽ、くど。

武兵　それで心が落ちついたわい。

ト合ひ方になり、大淀、武兵衞に寄り添うて思ひ入れ。奧より才助、岩吉を引ッ抱へて出る。彦六、後より付いて出る。

彦六　コレ／＼才助どん、こなさんはマア、その子をなんとするのぢや。

才助　この餓鬼は、先刻武兵衞さまから預かつたが、何か詮議のある餓鬼だげな。それゆゑ武兵衞さまの所へ連れて行くのだ。

ト大淀、彦六を見て思ひ入れ。

彦六　イヤサ、何も詮議のあるやうな、その子ではござらぬ。此方へ渡してもらひませう。

才助　滅多に渡す事はならない。邪魔をするな。

彦六　邪魔をせぬが、その子は此方へ。

トかゝる。また立廻り。

才助　何をしやアがる。

武兵　コリヤ／＼、才助。

才助　こりやア、武兵衞さまでござりまするか。

武兵　その餓鬼めは、あの彦六が欲しがるなら、あれに遣つてしまへサ。

才助　でも、この餓鬼には、何か詮議が。

武兵　ハテ大事ない。おれが呑み込んで居る。わりやそんな事に構はずと、なんぞ呑める肴を、早う拵らへて持つて來いサ。

才助　ヘイ、左樣ならこの餓鬼めは、この植木屋に

武兵　渡してやれサ。

岩吉　母樣に逢ひたいわいなう。

彦六　ソレ、見たかの。

才助　どこへでも連れて行きやれ。

ト岩吉を下ろす。彦六、こなたへ連れて來る。

才助　武兵衞さまは、いつもと違つて大淀さまと、何かしつぽりとしたお座敷振り。こりやアなんぞ、お肴を拵らへて上げにやアなりませぬわえ。ドリヤ。

武兵　早うしろ／＼。

才助　畏まりました。ドリヤ、なんぞ思ひついて。

ト奥へ入る。彦六、岩吉が脊中を撫で

彦六　岩松よ。今のやうな目に遭うて、さぞ怖かつたであらうなア……武兵衞さま、只今は有り難うござりまする。これは大淀さまもこれにお出でぢや。見れば、いかう勝れぬお顏持ちぢやが、どうぞなされましたか。お氣合ひでも……惡うござりまするか。

ト案じ心に云ふ。

大淀　知らぬわいなア。

彦六　知らぬわいなと。

ト武兵衞を見て

これは御尤もぢや。私しが不通。お客樣のござる所へ浮か浮か來て、これは尤もぢや。岩松、此やうな所に居るものぢやアない。此方へおぢや〱。

ト岩吉を連れて行かうとする。

武兵　コレ〱、彦六、待ちやれ。

彦六　ハイ〱。

ト立つて居る。

武兵　大淀、おのしは彦六に、なんぞ用事はないか。

大淀　サア、なんにも。

武兵　イヤサ、用がありさうなものだが。睦まじい深い仲に、なんぞ用事がありさうなものだが。

彦六　左樣ならば武兵衞さまには、私しと大淀が事を。

武兵　知つて居る。茂兵衞は間夫の前立て。眞實これが間夫と云ふは、彦六、お主だな〱。

伴六　大淀さん、大淀、武兵衞さまはよく御存じぢやの。知つてゐると仰しやると、隱しまするも野暮らしい。私しと大淀が仲は、この里で馴れ馴染んだでもござりませぬ。生れ在所はズッと遠國。

大淀　あつちへ行かしやんせいなア。

彦六　ハテ、此やうな事を、お聞かせ申すもお慰みぢや。

武兵　それ〱、どのやうな深い仲であつたぞ。それが聞きたい。

彦六　サア、在所に居る時分は、彼奴もまた手入らずのぼつとり者。娘盛りの振り袖から、手を入れ初めたが縁の端。ある夜さ庄屋どのゝ大振舞ひに、茶の間の給仕を引ッ捉へ、あのゝものゝと云ふうちに、大事の茶碗を、ツイぼつさりと云はせましたて。

大淀　エヽ、なんぢやぞいな。

彦六　ハテ、其方の茶碗を、おれが割つたに違ひはないわ

サ、ハヽヽヽ。お恥かしながら、ツイこの子まで生ませましたぢや。退引きならぬ譯があつて、是非もならこの里の憂き勤め。一日も早く年を明けさせ、女夫になつてこの坊主めを、育てたうござりまするて。

大淀　人も知らぬ京物語りを、ほんまの事かなんぞのやうに、鬱陶らしい子を引連れて、アタ見たうもない阿房らしい。早うあつちへ行つて下さんせいなア。

彦六　サア〳〵、合點ぢやわいの。いま行くわいの。お客樣を大事にせねばならぬが勤め。ドリヤ、あつちへ參りませうか。

ト身繕ろひする。武兵衞、大淀が袖を引く。大淀、知らぬ顏して居る。

武兵　大淀。

大淀　エ。

ト武兵衞、蒲團を捲りかけ、守り袋をこちらへ出して、大淀へちよつと見せ

武兵　おれが行かうか……彦六に用がありさうなものぢやが。

ト彦六、行かうとする。大淀、思ひ入れ。

大淀　待たしやんせ。

彦六　御用でもござりまするか。

大淀　ある段ぢやアない。彦六さん、嫌ぢやぞえ。

彦六　エ。

大淀　戀と情を伊達にして、苦界するわしが身の上。子があるの幼な馴染のとは、そりや苦界勤めぬ前の事。引く手に靡く女郎の身は、可愛いと思うて下さんすお方には、浮世の義理に絡まれて、アイ、どこへ片付きやうも知れぬわたし。必らず女房ぢやと思うて下さんすな。彦六さん、儘にならぬが浮世ぢやわいなア。

彦六　なんぢや、女房ぢやと思ふな。そりやなんの事ぢや。何を云ふ大淀。女房ぢやと思ふなとは、そんなら年が明けても、おれと女夫になる事は

大淀　嫌でござんす。嫌ぢやに依つてこの後フツツリ、女房らしうしこなして下さんすな。こなさんと女夫になる事は、アイ、嫌ぢやぞえ。

ト彦六、大淀が側へ寄り

彦六　大淀、それぢやア其方。

ト大淀が顏を見る。

また焦らすよ。武兵衞さまの前だと云つて、おれを焦らすのか。お客は合點ぢや。何も其やうな事を云つて……

人の氣を採ませる事がきつい好きサ。ハヽヽヽ。よもや本氣で其やうな事を、云ひもしやるまいなう。

ト思ひ入れ。

大淀　本氣で云うたら、なんとするえ。

彦六　なんとするとは、そんならお主は誠におれを。

大淀　緣切る氣ぢやわいなア。

彦六　エヽ。

ト大きに恟りし、武兵衛が方を見たり、腕捲りして大淀が膝を突ッかけ

コリヤ、そんな根性を持つては濟むまいぞよ。大淀、コレ、この岩松は可愛うないか。

大淀　可愛うなうてなんとせう。女夫にならいで居られうか。子まで生したる二人が仲。

ト思はず云うて武兵衛を見る。武兵衛、蒲團を指さし、守り袋を出し

武兵　ピリ〳〵〳〵ぢや。

大淀　サア、合點ぢやに依つて緣は切る。アイ、さつぱりと緣切つたぞえ。

彦六　そんならどうでも、いよ〳〵おれと緣切る氣か。エエ、うぬはな……とサア、何もぎごはに云ふ事もない。お主もこの子が可愛からう。三人寄れば人の中、機嫌を直してやれよ。腹の立つ事があるなら、おれがあやまらうわサ。いつでも云はれる事ぢや。マア、機嫌直して、主樣のお氣に入つて。

大淀　知れた事いなア。氣に入つて請け出されて、主のお世話になる氣ぢやわいなア。

彦六　そんならどうでも緣切つて。

武兵　この武兵衛が世話になる氣か。嫌ならこれぢや。

ト蒲團へかゝる。

大淀　アヽコレ、アイぢやわいなア。

彦六　アノ、眞實に。

大淀　オヽ、しつこ。

ト彦六いろ〳〵と思ひ入れあつて

彦六　エヽ、われはな。コリヤ、いつの間に天魔が魅入つて、そんな根性になつたよ。斯うなつては、もう破れかぶれぢや。何も隱す事はない。われが兄の茂兵衛が、おれが事をいろ〳〵と世話焼いてくれるも、おれと女夫にしようと思うて事ぢやぞよ。それに今さら其やうな根性を持つて、便りないこの彦六を突き出すのか。そりやあんまり胴慾と云ふものぢや。この岩松が可愛うないか。

おれに腹立ちはあるとも、この岩松には腹の立つ事はあるまいがの。コレこの

ト岩松を大淀が前へ突き出す。

岩松　申し母さん、堪忍して下されいなう。

大淀　なんぢや、堪忍してくれい。今までツイに一度、腹立たしやんした事もないお前。云ふに云はれぬ事があればこそ、可愛やこの子を。

ト岩松を引寄せようとする。武兵衛、守り袋を見せる。大淀、氣を替へて

エヽ、知らぬわいなう。

ト彦六、急き込み

彦六　エヽ、うぬはな／＼。その子になんの科がある可哀さうにマア、どこも痛みはせぬか。この子まで憎いか、畜生ぢや、畜生の側へ寄るな。體が穢れるよ。ようマア酷い心になり居つたな。畜生め、なんぼおれがやうな、母の明かぬ者ぢやと云うて、さう酷くする事はないわい。大淀め、エヽ、うぬのやうな奴は、いつその事に。

トそこにある銚子を取り、大淀を打ちにかゝる。岩松、彦六に縋つて

岩松　コレ、父さまいなう。

トこれにて彦六、思ひ入れ。大淀チッと堪えろこなし

武兵　こりやア何をするのだ。おれが揚詰めの傾城大淀に、てんがうをひろいで、疵でも付けたら、どうしやうと思ふ。大馬鹿者め。われが其やうなたわけを盡すに依つて、大淀がわれに愛想を盡かして、コレ、この武兵衛に。

ト大淀に寄り添ひ

靡いてくれる心になつたものだが。

ト大淀、彦六、思ひ入れ。

彦六　オヽ、畜生めが心はさうであらう。襟元に付くが當世風。兄の茂兵衛が聞かれても、オヽ、喜びであらう。隨分その武兵衛さまを可愛がれよ。イケ畜生め。あんまりだぞえ。われにモウ突き出されるからは、モウ／＼モウ、彦六が身は生きても死んでもぢや。オヽ、生きても死んでもぢやわい／＼。

ト泣きながら云ふ。大淀、そこにある硯箱の蓋を取つて

大淀　コレ、其やうに急かずとも、この硯箱の蓋に書いてある、蒔繪の花は、こりやなんぢやえ。

ト彦六見て

彦六　そりや知れた、櫻の花。

武兵　その櫻の蒔繪が、何とぞしたか。
大淀　サア、櫻木を碎いて見れば花もなし、花をば春の空
に任せて。と云ふ歌の心。何事も空に任せて見やしやん
したら、また花咲く事もあらうぞいなア。
彦六　なんぢや、花咲く事もあらうとは。
武兵　この武兵衛を手管にかけるか。それぢやァ大淀。
　ト守を見せ
ピリ〱〱ぢや。
大淀　ア、コレ、なんぢやぞいなア。
　ト武兵衛にベッタリと寄り添ひ
疑ひ深い、憎てらしい。その廻り氣で眞實見えた。お前
の心に隨ふと云ふこの大淀。それにマア、なんぢややら、
植木屋の果敢ない身で、當座の事を誠と思うて、あのマ
アほんに、阿呆らしい顔わいなう。
彦六　モウ〱堪えられぬ。現在生んだ子の事まで、なん
とも思はぬ畜生め。うぬがやうな奴は。
　ト立ちかゝる。岩松縋る。
大淀　尤もぢや〱〱。コレ、此やうな苦しい術ない思
ひをするも、これには段々。
　ト思ひ入れする。

武兵　様子はこれぢや。
　ト蒲團へかける。大淀留める。立廻りあつて
大淀　コレイナア。
　ト彦六、口惜しきこなし。
岩松　母樣、爰に居て下されいなう。
大淀　母さんとアタしつこい。全盛するわしが身に、こん
な煩さい子があつてよいものか。武兵衛さん、見やしや
んせ。何が腹が立つやら、親も子も泣き顔して、わたし
が顔ばつかり見詰めて居るゆゑ、何やかやを思ひ廻して、
この胸がモウ。
　ト涙を呑み込み
さつぱりとせぬ程に、奥座敷へ行て一つ呑んで、しつぽ
りと寢ようわいなア。
武兵　そりやよからう。いま〱しい。彼奴等が吠え面を
見るも胸が悪い。玉子酒でも呑んで寢よう。奥へおぢや。
彦六　エヽ、うなァそんなら、アノ奥へ行てしつぽりと。
歩兵　抱いて寢るのだ。羨やましいか。腹が立つか。大〱
ら坊め。
　ト蹴る。彦六立ちにかゝる。大淀見て、
大淀　サア、行て寢よう。

岩松　コレ、母様いなう。
大淀　エヽしつこい。コレ、さつぱりと緣切るからは、男の子は男に附く。必らず短氣を、サア、短氣を押へるこの子藥。見るも煩さい。早う連れて行かしやんせ。
ト岩松を彦六が前へ突き飛ばす。彦六、思ひ入れ。
彦六　エヽ、うぬはな。
ト大淀へかゝるを、武兵衞突き退け
武兵　びくつくと、その餓鬼を捻り殺すぞ。
彦六　エヽ。
武兵　あの面はえ。ハヽヽヽヽ。
大淀　阿房らしい。
岩松　コレ、母様。
トこれにて大淀、思はず寄らうとする。武兵衞、大淀を引き廻し
武兵　大淀、おぢや。
ト唄になり、武兵衞、大淀を引立てる。大淀、彦六、思ひ入れよろしくこなしあつて、武兵衞、大淀を連れ、奥へ入る。彦六、後を見送り、いろ／＼口惜しき思ひ入れあつて、トヾ奥へ行かうとする。岩松縋つて
岩松　父様、どこへ行かつしやる。おりや母様の側へ、行きたいわいなう。
彦六　尤もぢや／＼。里へ遣つて置くうちも、これが顏を見たからうと、おはぐろ婆アにさう云うて、毎日一度づゝはこの岩松が、顏を見せに寄越したも、町と廓と離れて居るゆゑ、さぞ戀しう思ふであらうと、格子先まで寄越したりやこそ、よう顏も見知つて、ほんの母様と、子は此やうに慕ふものを、わりやこの子と緣切り、武兵衞と寢ようとは、酷い根性な畜生め。コリヤ、岩松、よう聞けよ。彼奴は其方の母様ではないによ。われには今日から母様……ない程にな、母を尋ねるなよ。今日からは親はこの父ばかり。よう温なしうして抱いて寢るが、この父は可愛いか。
岩松　アイ、父様も可愛い。母様も可愛いから、一緒に居たいわいなう。
彦六　アヽ、あのやうに胴慾な母めを、わりやア其やうに慕ふかいやい。可愛や／＼。畜生め。この子が此やう事を云ふのが聞えぬか。われを捨てる胴慾者ぢや程に、あのやうな奴に構はずと、おれに抱かれて寢てくれい。
ト抱き上げ
ねん／＼ころ／＼、ねんねが母はどこへ行た。

ト奥を見て思ひ入れ。
思へば〳〵、果報拙ないこの岩松。生れ落ちると里へ遣り、母めはつれなし、この親はあるに甲斐なき流浪の身の上。いつそ樂しむ婆婆世界。この彦六が身に、もしもの事があつたら、茂兵衞さまを頼んで育ててもらへ。大淀……大淀め。行つて來るぞよ。待つて居ろ……とは云ふものゝ、このマア可愛い寢顏を見ては……子は三界の首枷ぢやなア。
ト唄になり、彦六、岩松を抱き、こなしあつて花道へ入る。奥より新五左衞門、庄兵衞、金兵衞、喜太郎、出で來り
庄兵　モシ〳〵、新五左衞門さま、お前、鉢植の中を御覽じましたか。
新五　サア、おれも如才なく見ようと思へど、まだ願上げをせぬと、大淀めが吐かすゆゑ、今まで捨て置いたワ。
才助　そりや御油斷だ。今が丁度よい時分。早う御覽じませ。
新五　合點だ。喜太郎、鉢植を持つて來い。
喜太　心得ました。
金兵　早く土を掘つて見るがようござりまする。
ト新五左衞門、鉢植の土を掘つて悄り
新五　ヤア〳〵、ないワ〳〵。若い者ども、この中に狀箱がないワ。
皆々　そりや大事だ。
庄兵　なんぞお心當りはござりませぬか。
新五　待てよ。こりやア大方、夢の市郎兵衞か、若葛屋のおみなが、掘出したも知れないわえ。
庄兵　そんならこれから仲の町の若葛屋へ行つて、おみなを詮議するがようござりませう。
金兵　それよりはまだ、あの少將が身の上。彼奴は慥かに頼盛が娘。
新五　この繪姿に寸分違はぬ少將は、歌綾姫に相違ない。今宵中に引ッ括つて、褒美にするか、女房にするか、みんなぬかるな〳〵。
皆々　心得ました。
ト奥より夢の市郎兵衞出かゝり居て
市郎　その繪姿を。
ト新五左衞門が繪姿を引ッたくる。
新五　こりやア夢の市郎兵衞、なぜ繪姿を引ッ浚つた。
市郎　こりやマア、おれが貰つた。市郎兵衞にさつくれて

おさぶ、早く行かつしやい。
新五　おきやアがれ。大切な繪姿を返さにやア、生けちやア置かぬ。覺悟ひろげ。
才助　モシ〱、新五左衞門さま、爰はわしらに任せて、今の狀箱を。庄兵衞連れて、合點かな。
新五　如何にも、この笠原は、若蔦屋へ行つて、狀箱の詮議をする。庄兵衞、喜太郎、來い。
兩人　心得ました。
新五　市郎兵衞を踏み倒して、今の繪姿を取戻せ。
喜太　才助、金兵衞、合點か。
才金　市郎兵衞、動くな。
市郎　小癪な奴等だ。
新五　兩人來い。
庄喜　ござりませ。
ト新五左衞門、庄兵衞、喜太郎を連れて、逸散に向うへ入る。
才助　市郎兵衞、大切な繪姿を
金兵　おいらに渡せ。
市郎　風ツぴいた奴等だ。誰れだと思ふ。夢の市郎兵衞さまだ。おれが手に入つた物を取らうとは、猫の額にある物を、二十日鼠が念掛けるやうなものだ。二人とも失くなりやアがれ。
才助　片ツ腹の痛い事を云ふ奴だ。
金兵　ぶツちめる。覺悟をしろ。
市郎　邪魔をすれば、うぬらが息の根を留めるぞ。
兩人　繪姿を渡せ。
市郎　退きやアがれ。
兩人　渡せ。
トかゝる。立廻り。
三人　どつこい。
トこれより鳴り物になり、市郎兵衞、才助、金兵衞を相手によろしく立廻りあつて、トヾ、才助、金兵衞は叶はず向うへ逃げて入る。市郎兵衞、追ひ駈けて向うへ入ると、この道具をぶん廻す。
本舞臺、一面の障子屋體、欄間、蹴込み綺麗に仕立て、舞臺に屛風を立て廻し、これに武兵衞、大淀が帶掛けてあり。矢張り合ひ方、時の鐘にて道具とまる。
ト花道より彦六、頰冠り、一本差しにて出で來り

彦六　心の腐つたあの大淀、荒五郎茂兵衞が心を察して堪えて居たが、武兵衞めと寢さしては、どうもこの胸が堪らぬ。二人ともに今宵は過さぬ。叶はぬ時は切つて切り死。さうぢや。

ト身繕ろひし、目釘を濕して本舞臺へ來り、屏風に掛けてある帶を見て

こりやア大淀と武兵衞が帶。もう料簡が。

ト切り込まうとする。バタ／＼にて武兵衞、大淀、床の上に、錦の袋に入りし鏡を引き合ひ、この見得にて、ツカ／＼と舞臺先へ來て

大淀　これこそ尾形の家の重寶、小田卷の名鏡を持つてござんすからは、さてこそ日本堤にて、わたしが兄、鹽田の次官を手に掛けたはこなたぢやな。

武兵　如何にも。兼ねて心をかけし尾形の重寶、小田卷の名鏡、次官を殺して奪ひ取り、諸人を惑はし、味方に付ける我が大望の、助けとなさんこの名鏡。さては傾城大淀も、尾形に由縁の女だな。

彦六　云ふにや及ぶ。その鏡を。

ト後より取りにかゝる。武兵衞、彦六を見て

武兵　うなア植木賣りの彦六め。こりやア何をひろぐのだ。

彦六　愚かや。植木賣りの彦六とは、浮世に蟄する當座の假名、我れこそ九州の探題、菊地次郎成氏が身の果。

大淀　妾とても、尾形の三郎が妹濡衣。

彦六　汚名を淸めるこの名鏡。

大淀　尋常に渡しや。

武兵　小癪な事を。さては身が推量に違ひなく、菊地の次郎であつたよな。同心と見せて誓紙を書かせ、味方に付けんと思ひしに、誠に戀は曲者にて、廓に入込む始めより、心をかけし大淀が色香に迷ひ、帶紐解かばその時に、最前の密書を取返し、妻になさんと心を許して、この名鏡を見出されたが、殘念なア。

彦六　して又、汝が

兩人　本名は。

武兵　我れも西國の住人、平家沒落の砌り、九州を押領せんと旗を揚げしに、口惜しや源家の爲に亡ぼされ、逐電なして時節を窺ふ、大友常陸之助賴國とは、おれが事だ。

兩人　さてこそな。

武兵　或ひは非人、或ひは旅人と姿をやつし、軍用金を取り集め、この廓へ入込みしも、諸人の心を樣々見て、味方に付けん我が謀略。サア、菊地次郎、傾城大淀、われ

が兄の尾形諸とも、幕下に付かばその通り。否と吐かすと兩人ともに打ち放す。覺悟極めて返答なせ。

彦六　いらざる廣言。汝こそ鹽田の次官を討つたる曲者。

大淀　兄の敵。

彦六　小舅の仇。

大淀　遁がれぬ所ぢや。尋常に

彦六　鏡を渡して勝負なせ。

武兵　兄の敵、小舅の仇を討たんとは、二人ともに出かした。ちと氣があつて面白い。その孝道に免じて、討たれてやらうと云ひたいが、この賴國が身體は鐵石。鈍くら刃金が立つものか。敵討なぞとは片腹痛い。止めにしろ止めにしろ。

彦六　イ、ヤ、遁がさぬ次官が敵。

大淀　イザ、立ち上づつて

兩人　勝負々々。

武兵　ハテ、ザワ／＼とかしましい。うぬらが命は寢くさつたな。返り討になつてくたばりたいか。叶ひもせぬ事に、死急ぎをする奴等だ。それ程敵が討ちたくば、身拵らへしてそこへ出ろ。二人とも唐竹割りにしてくれうぞ。

ト合ひ方になり、彦六大淀、身拵らへして

彦六　小舅の仇。

大淀　兄の敵。

兩人　賴國、覺悟。

ト詰め寄る。

武兵　ハテ、やかましい奴等だ。二人ともに掛替へがないぞよ。云ひたい事があるなら、まけ出して死ね。覺悟はよいか。

兩人　イザ。

武兵　イザ。

三人　イザ／＼／＼。

ト三味線、大小の合ひ方になり、武兵衞、彦六、拔き合せ、大淀、懷劍にて突いてかゝる。三人よろしく立廻りあつて、トヾ、武兵衞、大淀に浴せる。彦六ハツと驚ろき駈け寄るを、後より切りつける。兩人苦しみ、手負ひの立廻り。武兵衞、あちこち切り倒す。これにて彦六、大淀、ウンと悶絶する。これを見て武兵衞、笑ひながら刀を納め、懷手にて悠々と花道へかゝり、揚げ幕際まで行く。花道より荒五郎茂兵衞、竹槍を持ち出る。武兵衞を見るより、すごきして、しやんと見得。

武兵　荒五郎茂兵衞か。
茂兵　鐵壁武兵衞か。ハテ、よい所で逢うたなア。
武兵　邪魔せずと退け。
茂兵　騒ぎ廻ると槍玉だぞ。
　ト突き出す。
武兵　小癪な事を。
　ト竹槍を引ッ提へ、兩人、本舞臺へ來て、ちよつと立廻り。茂兵衞、彥六大淀を見て
茂兵　ヤア、こりやア彥六と云ひ妹まで。
武兵　たつた今、殺らしてしまつた菊地次郎、われが妹。茂兵衞も本名名乘つてくたばれ。
茂兵　云ふにや及ぶ。尾形の三郎惟義と云ふ、西國の英雄士だ。我れ〳〵が本名知つたる曲者。生けちやア置かれぬ。覺悟をひろげ。
武兵　面倒な。退け。
　ト茂兵衞、突きかゝるを立廻りに武兵衞、鏡を落す。茂兵衞、これを取つて翳すと、ドロ〳〵にて、彥六、大淀心付き
大淀　ヤア、兄さん。
彥六　尾形どの。
武兵　こりやア、うぬらも蘇生つた。
彥六　武兵衞と云ふは常陸之助賴國、鹽田の次官の怨敵なるぞ。
茂兵　小田卷の名鏡を持つてけつかる賴國。
三人　覺悟。
武兵　面倒な世迷ひ言。尾形を始め、うぬらア眞二つぞ。
　ト切つてかゝる。
茂兵　小癪な奴だ。覺悟ひろげ。
　ト立廻りあつて、茂兵衞、武兵衞が腹へ竹槍を突ッ込む。
兄の敵、思ひ知つたか。
武兵　エヽ、殘念な。
茂兵　名鏡再び手に入る上は、姫のお行くへ。
彥六　氣遣ひなさるな。
茂兵　先づ、今日はこれぎり、
　ト打出し。

戀便假名書曾我（終り）

祐經初暦名開
祐成初髻鏡開

塗額の
父はなからや
雉の聲

花待得時致對面　ハテめづらしい　酒宴榮

しかも其頃の達引は
何れお江戸の花川戸

幡随長兵衛
梶野長兵衛

向う通ろと謳うたろその毬唄は八重梅を繼三味線の一節はよくも浮名を鳥眼の鬼王夜明の鐘も權八が虚無僧のとゝとしも同じ十右衛門たれ白柄と船越が意氣地も對の鞘當に近江八幡が目釘竹手の内さえて閑心は賽の河原の同心者似たか夜鷹の月小夜もひとつ流れの小紫派手な操は舞鶴がいでや狩場の紋づくしよせれば丁度仇討の三津組

比翼蝶春
曾我菊

長閑に閏十三幕
引返して奉入御覽候

曾我狂言百姿

「吉例曾我寶入船」より

（上）祐經妻梛の葉。百足屋金兵衞。
（下）曾我の團三郎。鬼王妹十六夜。

比翼蝶春曾我菊

一番目四建目

旅籠屋の場
長庵內の場

役名——白井權八。役人、鳥取郡治。長庵女房、おれい。同娘、かしく。旅籠屋、畑右衞門。坊主、西念。薪屋源八。米屋太郎兵衞。奴、黒平　判人、源六。泊め女、おもん。ぜげん、源六。松ヶ枝長兵衞。

本舞臺、三間の間、上の方、一間の襖、見附け大津壁、丸の內に箱根屋と書きたる書割り。眞中、暖簾口、軒に定宿、月參りなどの札掛けあり、下手、九尺の張り物、煽りにして竹格子三尺の戸、梶の長庵と書きたる表札。すべて、旅籠屋隣り同志の心。幕の內より、おもん、留め女にて、旅人を引ッ張り居る。在鄕唄にて、幕明く。

ト旅人大勢、思ひ〳〵の仕出し。東西へ入る。同じく旅人二人出る。源八、西念、太郎兵衞、出て、捨ぜりふ云ひ〳〵長庵の內へ入る。

もん　お泊りなさい。据ゑ風呂も出來て居ります。お泊りなさい〳〵。

ト引ッ張る。

旅一　まだおいらア、一里も行く氣だ。放さつしやい〳〵。

もん　ようござります。お泊りなされませ〳〵。

旅二　そんなら泊らうが、旅籠はいくらだ。

もん　ハイ、お定まり百五十文でござります。

旅一　それは高い。百三十文にさつしやい。

もん　ようござります。お泊りなされませ。

兩人　サア〳〵、値が出來た〳〵。

ト捨ぜりふにて、旅人、奧へ入ると向うより芥太夫、編笠をかむり、風呂敷包みを脊負ひ、門付けの太夫の拵らへにて出て來り

芥太　父母の惠みも深き粉川寺、巡禮に御報謝。

もん　今は取込んで居ります。通らつしやい〳〵。

芥太　國は阿波の德島、母さんの名はお弓。

もん　エヽヽしつッこい物乞ひぢや。

ト顔を見て

物乞ひぢやと思うたら、いつもの芥太夫さん、大分お早うござりましたなア。

芥太　また參りました。今晩もお賴み申します。

もん　お草臥れでござんせう。サア〳〵、奥へござんせいな。

芥太　ハイ〳〵、お世話樣でござります。

ト奥へ入ると、てんつゝにて、向うより源六、ぜげんの拵らへにて出て來り

源六　どうだ、お變りもないかの。

もん　これはお早うござりました。さぞお草臥れでござりませう。おゆるりとなされませ。

源六　時に、畑右衞門どのは内かな。

もん　アイ、内に居られます……モシ、旦那さん〳〵。

ト合ひ方になり

畑右　イヤア、西村の親方、ようござりました。お下りかな。

ト奥より、畑右衞門、亭主の拵らへにて出て來る。

源六　イヤモウ、上り下り、痰切り飴で餅食ふやうな巧い仕事はないかな。

畑右　あるとも〳〵。こなたの來るのを待つて居ました。

源六　それは耳寄り。して、その巧い仕事といふは。

畑右　外でもない。

トおもんを見て

コレ、おもん、奥の旅人衆に、茶でも上げぬか。

もん　アイ〳〵、畏まりました。

ト奥へ入る。

源六　時に畑右衞門さま、その巧い仕事と云ふは。

畑右　さればサ、隣のお娘の事よ。

源六　隣のお娘が勤めでもしたいと云ふのか。そりやハヤ、おれもぜげんの當り前。どうでも相談に乘る氣サ。

畑右　そこに一つ話しがあるて。恥かしい事だが、隣のお娘に、おれは首つ丈よ。

源六　また請けさせる話しか。

畑右　サア、請けさせるではない。あの娘におれが惚れて居るゆゑ、隣の親仁が死ぬ前から、ちよつと一兩、いま二兩と、證文なしの金が十兩ばかり貸しがあるが、今夜その金の催促に行くワ。ソレ、金はないと云ふワ。よしか。金がなくば、おれにくれろと云ふワ。よしか。嫌だ

と云ふワ。よしか。そんなら勤め奉公させると云ふワ。よしか。年一ぱい貴様の手へ賣るワ。よしか。ソレ、こなたも仕合せが直ると云ふもの。なんと、いゝ仕事であらうがな。

源六　イヤモウ、さう行けば、おれもぜげんの商賣づく。

畑右　貸した金を差引いて

源六　殘りの金は

畑右　こなたと

源六　こなたと

畑右　二つ山とは。

源六　巧い／＼。

ト矢張り、てんつゝにて、向うより、黒平、奴の旅形にて糸立に友切丸を包み、脊負つて、惡態を吐き／＼出て來り、花道にて後振り返り

黒平　うぬ、挨拶の仕様が惡いと、ぶッ放す奴なれど、あやまりを吐かすゆゑ、料簡したぞ。大べら坊め……助太夫さまから預かつた友切丸。仕様がなさに糸立へ包んで、脊負つたところは、奴の伊勢詣りといふ沙汰。併し、なんだかこの友切丸を預かると、無性に氣が強くなつて、ややともすれば切りたくなるは、不思議な事だ。お旦那助太夫さまは死ぬし、當時天竺浪人のこの黒平。隨分愼まにやアならない。それはさうと、爰は畑の宿。爰へ泊つて、それ／＼。

ト本舞臺へ來り

大分遲くなつたが、一人旅でも泊めるか。

畑右　ハイ／＼、一人でも半分でも、金さへ取りやア泊めます。

黒平　そりやア調法な旅籠屋だ。

ト内へ入る。

源六　ヤア、お前様は本庄さまの

黒平　アヽコレ、本陣へでも泊るのだが、それぢやア窮屈。それで爰へ。許しやれ。

畑右　イヤモゥ、お草臥れでござりませう……コレ、西村の親方、外に話しもあれば、緩りと……コリヤ、おもんお湯を取つて上げうぞ。

ト合ひ方になり、畑右衛門、奥へ入る。

源六　モシ、黒平さん、まだ小田原までも行けるに、この畑へ泊らつしやつたは。

黒平　さればサ、貴様も知つた、おらが旦那助太夫さま、この程箱根で、白井權八と云ふ者の手にかゝり、相果て

たなれど、元は祐兼さまと云ひ合せの惡事を、權八めに覺られたゆゑ、その權八めも人を殺して、逃げさうな所を、自身に名乘つて鎌倉へ引かるゝとの事。權八を鎌倉へやつては、此方の惡事口外されては、祐兼さまのお身の上。今夜慥かにこの宿屋へ、網乘り物が泊ると聞いたゆゑ、それで。

ト囁く。

源六　すりや、アノ權八めを人知れず

黑平　これサ、野暮に大きな聲だぞ。

源六　黑平どの。

黑平　源六。

源六　ござれ。

ト兩人、思ひ入れあつて奥へ入る。向うより、歩き一人出て來り

歩き　畑右衞門どのは内にか。畑右衞門どの〳〵。

ト奥より、畑右衞門、出て來り

畑右　オヽ、こりやァ歩きの萬三郎どの。なんの用だ。

歩き　外でもござらぬ。こなたの内が御定宿に當つて、爰に因幡どのゝお大切の囚人に、お役人が附いてござる。粗相のないやうにと、宿老の云ひつけでござる。

ト云ひ捨て、向うへ入る。

畑右　サア〳〵、忙しくなつて來た。

トあたりを片附ける。時の太鼓になり、向うより德松、人足にて、蓑を着て、篠竹を持つて

德松　片寄らつしやい〳〵。

ト後より、足輕二人、六尺棒を持ち、同じく人足、網乘り物を擔ぎ、郡治、役人の形。後より供侍ひ附いて出て來り、直ぐに舞臺へ來り、駕籠は二重の上へ舁き込む。

囚人どのがお出でなされた。大切にさつしやれ。

畑右　オイ〳〵。合點ぢや〳〵。

郡治　人足ども、大儀々々。休息いたせ。

德松　ハイ〳〵、左樣なら、この駕籠はお渡し申しました。サア、皆の衆、ござれ〳〵。

ト德松、人足は引返し入る。

畑右　これはお役人樣には、御苦勞千萬にござります。

郡治　其方は亭主か。今宵は世話であらう。

ト駕籠の内にて手を叩く。郡治、側へ行き

郡治　權八どの、何ぞ御用でござるか……ナニ、身では惡い。家來を寄越せと云ふか……ナニ、そのお心遣ひに及

び申さう。貴殿この度の儀は、餘人でもござらうなら、逃げ隱れも致さるゝところを、自身罪に服さるゝ上は、斯樣に網乘り物にて警固いたさいでもよけれど、そこが役目の表。何事に依らず用向きを仰せられい……然らばなんとお云ひやる。警固の小者、大儀に思はれて、所持の金子ござるにつき、皆の者へお酒を遣はされたいとな…………ムウ、成る程／＼、承知いたした……ハテサテ、惜しい若者を科人に致す事ぢや。

トこなたへ來り

コリヤ／＼亭主、囚人の賴み、酒肴を調へ、後程、警固の者へ呑ませておくりやれ。

畑右　畏まりました。して、囚人と仰しやるは、矢張り御家中でござりますか。

郡治　オヽ、因幡の領主大江廣元の家中、白井權八と申す者。

ト此うち黑平、上の方に窺ひ出で

黑平　その權八を。

郡治　ヤ。

ト見返る。黑平、襖をピッシャリ閉める。

郡治　亭主、心を附けい。

畑右　畏まりました。

ト時の太鼓になり、此まゝ道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、下手臺所、眞中暖簾口、この上に佛壇。この前に机を直し、上に戒名を貼つた位牌、樒、水向け茶碗、線香を立てあり、この上に誂らへの壁、上手九尺の張り物、板戸の書割り、三尺の所へ出入り、すべて、長庵表口の心よろしく、爰に、西念、同心者にて鉦を打ち音頭を取り、おれい、世話婆にて、源八、太郎兵衞、その外町人、二人、百萬遍を繰り居る。責め念佛にて道具とまる。

皆々　願爾以功平等生一切發菩提心。

れい　ヤレ／＼、どなたも御苦勞でござりました。

ト行燈をそこへ置く。

町一　なにサ／＼、わしどもは一つ長屋。誠に長庵どのは七日後に、箱根で不慮に死なつしやれて、氣の毒な事でござる。

町二　それ／＼、まだその殺した奴は知れませぬか。お代官どのへ願はつしやれ。

れい　御深切に、よう仰しやつて下さりまする。知る時分
には知れまするでござりませう。
町三　時に妙貞どの、わしどもはお暇申さうかい。
れい　ア、モシ、お茶も上げませぬに。
町二　イエ／＼、また内に行つて、嫁をいびらにやなりま
せぬ。
ト兩人、門口へ出る。
れい　左樣ならお二人樣、お歸りなされまするか……コリ
ヤコリヤ娘、後のお方へお茶でも上げぬか。
ト奥にて
かし　アイ／＼、合點でござんす。
ト合ひ方になり、爺と尼の町人は向うへ入る。暖簾口
より、かしく、土瓶と茶碗を載せて持つて來り
母さん、ツイ中の間の爐で煎じかゝつたゆゑ、遲うなり
ました。どなたもお茶をおあがりなされませ。
ト皆々へ出す。
西念　愚僧は百萬遍より前に、御報謝のお澁茶をたべると
覺めます。
源八　時に阿母や、今までは念佛講の同行。さてこれから
は借錢ぢやわい。

太郎　それ／＼、もう來る／＼と、お娘には口明けして置
いたが、返事はどうして下さるゝな。
かし　どうと云つて、わしぢやとて仕樣もやうも……母さ
ん、マア、どうしたらよからうぞいなア。
太郎　ア、、コレ／＼、阿母、無いものは無理に取らうと
は云はぬ。
源八　金がなくば貸して進ぜう。
れい　ナニ、掛取り衆が貸して下さるとは。
太郎　阿母、斯うでござるわいの。何を隱さう、恥かしい
事ぢやが、此方のお娘は器量よし。
源八　いつぞはと思うて居りましたが、今日掛取りやら百
萬遍に來て、お娘の顏を見たら堪えられぬ。掛けを取ら
ず、金を貸しませう程に、色好い返事して下され。
ト財布を出す。
太郎　わしもその通り、金を貸して進ぜうから、色好い返
事をして下され。
ト同じく金を出す。
かし　それぢやと云うて、ナア母さん。
れい　どうして、マア、あなた方へ。
太郎　金を貸します。遣はつしやい。

源八　サア、どうさつしやる〳〵。

ト　この時、西念、兩人を押し退け、前へ出て

西念　ちと御免下さりませ。さて阿母、娘御、ろく〳〵にまだお悔みも申さぬが、さぞ御愁傷でござらう。これは少しばかりでござるが、御佛前へお供へなされて下されい。

ト　紙に包みし物を出す。

れい　これは〳〵、お馴染とて西念さま、ようこそ。ソレ娘、お禮申しや。

かし　有り難うござります。

ト　おれい取つて見て

れい　コリヤ、同じぢやアござりませんかえ。

西念　左やう〳〵、これも脇で貰うたお布施なれど、これをお前に上げるから、私しにも色好い返事をして下されいなう。

かし　エ、、わツけもない。坊さんの癖に、何云はしやんすぞいなア。

西念　それは餘りお情ない。佛も元は凡夫なり。現に釋尊も華陽夫人と契りを籠め、安部の童子を產む。謂んや我れは只の坊主。お前に惚れた上からは、脇で貰うて來たお布施も遣る。どうぞ、返事をして下されいなう。

太郎　ア、、コレ〳〵、其方の錢より此方のを、早く遣はつしやれ。

源八　どう方が附きまするな。

かし　サア、それは、

三人　サア、どうさつしやる〳〵〳〵。

ト　借錢乞ひのやうに云ふ。合ひ方になり、上の隣より畑右衞門出て來り

畑右　ちと御免下され。

れい　オ、、これは畑右衞門どの、ようこそお出でなされました。ソレ娘、御挨拶申しや。

かし　畑右衞門さま、ようお出でなされました。今宵はお客でお忙しいやうに存じましたが、なんと思し召して

畑右　されば、わしが來たは外でもない。阿母、かしくどの、こなた衆も知つての通り、此方の親仁どのに金を貸した事、ありやマア、どうして下さる。

れい　成る程、御尤もでござります。久々御拜借にあづかりました金子、昨冬、暮れにも御返濟いたす筈なれども、彼れこれと世帶の廻りも惡く、それゆゑ思はず御無沙汰を致しました。ナウ、娘。

かし　母さんの云はしやんす通り、めでたき春には向へど

も、思ひも依らぬ父さんの御最期、殘るはか弱き女子の世帶。御推量なされて下さりませ。

畑右　サア、そこも知つて居ますゆゑ、無いものを取らうとはしませぬ。

かし　して、あなたのお出でなされたは。

畑右　サア、その貸した金をおれが取るか、お娘がおれに取らさぬか、いづれこの文へ、色好い返事を。

ト　かしくに文を突きつける。直ぐに投げ返して

かし　それおぢやと云うて、この返事

畑右　致さぬとなれば金を返すか。

かし　サア、わたしがどうして

畑右　あるまい／＼。やもめ暮らしのこなた衆二人、御尤も。これから貸した金は取りますまい。此方から金を貸して進ぜう。

かし　エヽ。

畑右　その代り、お娘をおれにくれまいか。

れい　思し召しは有り難う存じますが、不束なこの娘を。

かし　どうして、お前さんのやうなお方に。

畑右　女房になりやア、直ぐにお金を。

ト　財布のまゝ出し

エヽ、茲な命取りめが。

ト　抱きつくを、かしく、ツンとして

かし　エヽ、アタ嫌らしい。何しなさんすぞいなア。

ト　突きやる。

畑右　イヤア、馬の喧嘩でぴんしやんするな。おれが女房にならぬと云へば、金の代りに勤め奉公。

かし　エヽ。

畑右　それが嫌なら、この金遣うて女房になるか。

かし　サア。

西念　此方の方の返事は。

太郎　どう方を附けさつしやる。

畑右　サア、女房になるか。

かし　サア、それは。

畑右　勤めをさせうか。

れい　サア、それは。

皆々　サア／＼／＼。

畑右　面倒な。おれが内は旅人で混雜。幸ひぜげんも來て居れば、こなさん方の内へ引摺つて行く。

太源　私しも金を配分せう。

れい　おぢやと云うて、そりや又。

三人　ハテ、マア、來やれ。

ト　おれいを突き退け、三人、かしくを連れて花道へ行く。皆々捨ぜりふ。此うちてんつゝにて、向うより長兵衞、やつし羽織大小にて、人參、牛蒡、紙袋など、繩にて提げ出で來り、花道にて行き逢ひ

長兵　ヤア、長庵どのゝ後家、お娘御も、こりやア何事ぢや。

かし　お前は長兵衞さま、これはナ。

れい　この衆に拜借の金の事で、此やうにマア、面目ない次第も

長兵　ナニ、貸し借りは世間一統。大方、こりやアお定まりの、金の抵當にお娘御を。

畑右　成る程、こりやよう當つた。惚れて居て文までやつても

太郎　それ〳〵、おいらにも返事せぬゆゑ

畑右　大磯へ行つてから分け取り。そこ退いた。退かつしやれ。

長兵　イヽヤ、退かれぬ。出合ひ頭に長兵衞が、聞捨てにはならぬ。

三人　すりや、アノこなさんが。

長兵　マア〳〵、内へ戻らつしやい。

ト　矢張りてんつゝにて、長兵衞、皆々を押し戻し、本舞臺へ來り、よろしく住ふ。この時、畑右衞門が、かしくへ送りし文落ちてあるを、長兵衞、拾ひ取つて見て、ソツと懷中へ入れて

長兵　時に、今日は長庵どのゝ一七日となるゆゑ、心ばかりの精進物、御佛前へ供へて下され。

ト　持つて來た品をそこへ出す。

かし　母さん、此やうにマア、心をお附けなされて、お優しい。

れい　御深切、有り難うござります。

畑右　して、長兵衞どのとやら、わしが出入りを聞捨てられぬと、爰へ連れて來やしやつたが、してその

三人　挨拶はな。

長兵　サア、あれにて申されたが、爰の娘の申すには、いづれもお心ござつて、その返事を致さぬゆゑ、右の仕合せとござるが、娘一人に聟澤山。返事の出來ぬも尤も。

畑右　推量いたして御挨拶に及ぶからは、どの道

長兵　如何にも。

畑右　ハヽヽヽ、こりやおかしい。こなたはどこの分限長

者か知らないが、親仁の借金引受けて、お娘をしてやる
心だな。
長兵　御推量の通り、そこが思案の外でござる。
西念　ア、コレ、それでは此方の。
畑右　ハテ、ようござる。案じさつしやるな……コレ、わ
しが貸したは十兩でござるぞ。
長兵　承知いたした。して、各々方は。
源八　ハイ、私しがのは一兩三分。
太郎　この太郎兵衛は三兩一分。
畑右　そんなら凡そ、十五兩。
長兵　その金、拙者がお渡し申さう。
三人　イヤア。……
かし　モシ〳〵、待つて下さんせ。その御深切は嬉しいけ
れど
れい　どうしてお前に。
長兵　ハテ、拙者も武士でござる。一旦申し出した事は反
古には致さぬ。サア〳〵、各々、金子お受取りなされい。
ト懐中より財布を出す。
畑右　サア、その金を受取つては、どうも此方の。
長兵　でも、おてまへ方三人合せて、凡そ十五兩と申され
たではないか。
三人　サア、それは。
長兵　掛取りなら書出し持つて、お受取りなされ。
太郎　サア、薪屋どのは幾らござる。
源八　ハイ、私しは一兩三分。
長兵　ソレ、一兩三分。
ト金を出し
して、米屋どのは。
太郎　三兩一分。
長兵　ソレ、三兩一分。いづれも受取は。
太源　ハイ、お受取。
ト兩人、受取を出し、金を懐中へ入れる。
西念　モシ、私しもお布施が二百文。
長兵　ソリヤ、二百文。書出しは。
西念　お布施には書出しはござりませぬ。
長兵　これは尤も……サア、畑右衛門どの、おてまへの金
子十兩、お受取りなされ。
ト包み金を出す。畑右衛門、改め見て
畑右　切り屑なしに金子十兩、慥かに受取りました……ど
なたもこれで。

ト立たうとする。

長兵　ア、コレ〳〵、受取の書付けは。

畑右　これにはござらぬ。内へ歸つて認めて參らう。

長兵　金子を渡し其まゝでは歸さぬ。是非、受取を。

ト懷中より以前の文を出し

其許は、印形御持參か。

畑右　印形は所持いたして居ります。

畑兵　然らば、これに何やら、其許のお名のある物がござる。改めて受取には及ばねども、近しい仲にも垣と申せば、只お受取りなされたと云ふ印。直ぐにお名前に、ちよつと印形なされて下され。

畑右　成る程、お心安い仲。別に念にも及びますまい。左樣ならその私しの名前に、ちよつと印形を。

ト以前の文の名の所へ印形をして

これでよろしうござるか。

長兵　これでようござる。只お受取りなされたと申す印ばかりサ。

ト立ち上がり。

畑右衞門どの、金子は殘らず返濟いたしたが、不義の勘定は、如何召さる。

畑右　ナニ、おれを不義者とは。

長兵　ヤア、吐かすまい。親の許さぬ不義密通、誰れが許して致したのぢや。

畑右　ア、コレ、其やうな覺えは。

長兵　ないとは云はさぬ。この艶書に慥かな印形据ゑあつても、おてまへ不義とは申さぬか。

畑右　イヤア。

長兵　何ゆゑ艶書が落ちてあつた。

畑右　サア。

長兵　キツとこの事、吟味をせうか。

畑右　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

長兵　甘い口元。なんと云ひ譯あるまいが。

畑右　ア、コレ〳〵、お靜かに〳〵。家内は勿論、近所隣りへ外聞が惡い。内々で金子をそちらへお返し申さう。その文をお返しなされて下さりませ。

長兵　こりや、さうありさうなもの。御仁體と申し、お名の出る事。然らば金子代りに文は、其許へお返し申す。

畑右　エヽ、忌々しいこの文。

ト互ひに取替へ

長兵　イザ、文を。
畑右　長居をしたら、飛んだ目に遭ふも知れぬ。足元の明るいうち、私しはお暇申す。左様なら長兵衛どのとやら阿母、お娘。
太源　私しどもゝ歸りませう。
　ト三人、門口へ出ろ。畑右衛門、上の方へ行く。
かし　左様なら畑右衛門さま。
れい　もそつと、お話しなされませ。
籠右　イヤ〳〵、話しは日待の晩。
三人　何を云はつしやります。
　ト合ひ方になり、捨ぜりふにて、畑右衛門、元の前へ入る。西念、太郎兵衛、源八、向うへ入ろ。あと見送つて
れい　これは〳〵長兵衛どの、御深切の程、有り難う存じました。コレ娘、ちやつとお禮申しやいなう。
かし　何からお禮申さうやら、有り難う存じまする。お聞きなさるゝ通りの只今の仕儀。母さんも私しも、ほんに當惑いたしましたわいな。
長兵　これは〳〵御挨拶。當座の御難儀見るに忍びず、松葉に包む拙者が寸志。お禮で痛み入りまする。
れい　ナニ、長兵衛どの、それにつき、ちとお尋ね申すは夫長庵死去いたしたる翌日より、絶えずお出でなされ、朝夕の音信にも、これは佛前へ香奠、又ある時は國元の名物を裾分けと、身内も及ばぬお心遣ひ、その上、今の難儀までお救ひ下さるあなたの御深切。まだ昨今は長兵衛どの、不躾ながら、お身分と申し、數多の金子お貢ぎ下さるは……ア、聞えた。我れ〳〵親子に恩義を見せて、もしや敵の
長兵　ヤ。
れい　サア、堅い心のこの母は、どうも合點が
長兵　參りますまい。それもいつぞや、箱根の矢立の杉で思はずお目にかゝつたかしくどの、明けて云はれぬ
れい　仔細と云ふは、切なるこなたの心ゆゑ、云ひ出しかねてござらうが、こりやこなた、娘かしくに心あつての事かや。
かし　母さん、わッけもない。あのやうな殿御が、マア、どうして私しがやうな者に。
れい　イヤ〳〵、長兵衛どのも其方も、互ひに妻なし、夫なし、油斷のならぬ似合ひの妹脊。まだ昨今な長兵衛どの、常といひ、今といひ、深切見せてのその頼みとは、

母がよう見て置きました。わしぢやとてまんざらな野暮でもないわいなア……長兵衞どの、さうでござんせうがの。

長兵　ハヽア、天晴れお目高〲。斯くお見出しにあづかる上は、何を包みませう。惚れました。

かし　エヽ。

長兵　どうぞ固めの杯が致したい。

れい　それ見やしやんせ。わしが眼は違ふまいがの。如何にも杯させませう。

ト長兵衞、かしくへ思ひ入れ。

こなたを子に持つこの母は、日本一の果報者。坂東一の夫を持つ、娘は又あやかり者。嬉しいか〲。

かし　わたしがやうな不束者、身に取つては有り難いと云はうか、嬉しいと思はうか、詞には盡されませぬが、モシ、母さん、わたしや身に願ひが

れい　あると云やるか。そりや大方、云ひ交した男があるか。

かし　サア、どうもわたしや。

れい　杯しやるを嫌と云やるは、云ひ交した男へ義理が立たぬと云やるのか。わりや悪い。なぜと云や。思ひがけない父さんの横死、後に殘るは其方とわし。憂き艱難も知つて居やうに、それを知らぬ振りして居る男なら、其方が添ひたう思うても、この母が添はせぬ。慾深い婆と思やらうが、さうではない。深切にして下さる長兵衞どのへ、義理が立たぬわいなう。

かし　ぢやと云うて

れい　母が詞を背きやるか。

かし　サア、それは。

れい　但し、母が詞を背いても、添はねばならぬと云ふその人は。

かし　サア、そのお方は……モシ、母さん、必らず叱つて下さんすな。今までは包んで居りましたが、斯うなつては是非がない。有やうに申しませう。ソレ、お前と父さんがわたしを連れて、西の市に三島の旅籠屋で

れい　一夜泊りの氣散じ。見れば降り積る雪に思はぬ逗留。隣り座敷の相客を

かし　見ればくつきり色白な、いとしいお方と見合す顏。お寒からうと挨拶が、多少の緣と打解けて、雪に踏み込む痴話言は、親の目顏を忍び寢の

れい　すりや、その時の男と云ふは

かし　大江の御家中、助市さん。
長兵　すりや、本庄助市どの。ムウ。
　ト思ひ入れ。
かし　お前、あなたを御存じかえ。
長兵　イヽヤ、存じは致さねど、お名は兼ねて承つた。
れい　すりや、その助市どのと添ひたいが
かし　身の願ひでござんす。
れい　イヤ、ならぬ。助市どのは大江の御家中、誠に御大
　身のお方づれが、娘とは思ひも依らぬ不縁の元。
かし　そんなら、どうでも。
れい　達て嫌なれば、親子の縁もこれ限り。
かし　エヽ。
れい　そんなら杯してたもるか。
かし　サア、それはな。
れい　コレ娘、よう聞きや。常々其方に云ふ通り、父さん
　の事もあれば、幸ひな頼もしい長兵衞どの、杯済んだそ
　の上は。
長兵　アイヤ、その儀なら御容赦下されい。なか／＼拙者
　は。
れい　ハテ、斟酌も事に寄る。わたしが目鏡で勸める杯。
　それも長庵どのゝ敵が討ちたさ。ナウ娘。
長兵　エヽ。
　ト長兵衞、ギツクリ思ひ入れ。
れい　サ、助市どのゝ事思ひ切り、コレかしく、早う杯し
　てたもいなう。
かし　左様なら、母さん、お詞背かず、杯いたしませう。
れい　オヽ、出かしやつた／＼。孝行者と父さんも、さぞ草
　葉の蔭から喜んでぢやあらう。善は急げぢや。仲人いら
　ずの引越し女房。當世流行るさうぢやわいなう。ハヽヽ
　ハヽ、オヽ、幸ひ／＼。精進なれど酒肴もあり、それ／＼。
　トちやつと杯を取つて來る。此うち、長兵衞、當惑な
　思ひ入れ。
長兵衞どの、かしく、隨分これから孝行にして下さりま
せうぞや……神前杯は女子の方から。
　トかしく、おれい、杯事よろしくあつて、長兵衞へ獻
す。
サア、聟どの、望みの通り杯さつしやれ。
長兵　こりや杯が違ひました。
れい　ヤ。
長兵　拙者が致す杯は……外にござる。

かし　あなたが望みの
れい　杯は。
長兵　長庵どのゝ御内室、其許を母に思ふ、親子の杯が致したい。
れい　エヽ。
　ト思ひ入れ
かし　すりや、わたしが願ひある身と申したゆゑ、それがあなたのお心に
長兵　染まぬと云ふは戀ある口舌。なか〳〵以て左樣でない。存念一通り、お聞きなされて下さりませ。
　ト合ひ方になり、長兵衞、思ひ入れあつて
もと某の親どもは、長庵どのとは至極懇意。拙者いまだ若年の砌り、聊かの譯ござつて、命にも係はるべきを、長庵どのに助けられ、さすれば命の親なるゆゑ、成長の後いつかな恩に報いんと、思ふに任せぬ仕官の身の上。この程主用あつて箱根へ登山せしに、行きかふ人の噂に聞けば、長庵どのには不慮の横死。ハヽア死なしたり、殘念と、思へど返らぬ繰り言。我れより妻子は猶百倍。さぞや本意なく思ふらめ。爰ぞ御恩の報じどころと、及ばずながら拙者でも、時の用には立たうかと、御主人樣にそれとなく、お暇願うて今の身の上。今日よりこの家の養子となり、堀野の家名を相續せば、長庵どのには恩を謝し、又一つには御兩所を、はぐくみ返すがこれ詫び言。それゆゑ御挨拶のあまり、非番の節は手細工と、つましく溜めた金錢を、お貢ぎ申したその仔細、段々斯くの通りでござる。
かし　そのお心とは露知らず、お杯をなされぬは、わたしやどうかと思うて居りましたわいなア。
長兵　成る程、御不審御尤も。何を隱し申さう。某も身に願ひがござります。やがて心願成就せば、拙者が名乘るそれまでお待ちなされい……サ、お疑ひなされうな身の上ではござりませぬ。
れい　なんの疑ひませう。今こそ改めて親子の杯。
　トおれい取上げ、長兵衞へさす。
長兵　早速の御承知忝ない。然らば。
　ト長兵衞呑んで、おれい、呑まうとする。
アイヤ、母者人、暫らくお待ち下され。
　ト大小を取つて兩人が前へ一腰づゝ置く。
れい　この一腰は、
長兵　差し古びたれども拙者が魂ひ。養子が身の手土産、

御受納なされて下さりませ。
かし　有り難うござりますが、私しが持てない一腰。ナア母さん。
　ト兩人、顔見合せ、思ひ入れあつて
れい　其方の云やる通り、これは矢ツ張り其許へ。
長兵　なにサ／＼。丸腰になり、この家の養子になる上はお心遣ひ御無用。時に、見請け申せば、敵討たんといふ素振りも見えぬが、只今まで他人の拙者でござるゆゑ、御口外はなされぬな。
れい　サア、上から見えぬ人心。もしや敵の廻し者か、油斷のならぬこの時節。斯う親子となつた上は、包み隱さうやうもない。成る程、夫の敵が討ちたい。さりながら今に敵の手がゝりも
長兵　知れまい／＼。お心遣ひなされな。今に敵と知れたなら、見事討たれて進上しませう。
れか　エヽ。
長兵　見事討たせて進ぜませう。
かし　母さん、喜ばしやんせ。敵を討たせて下さんすといなア。
長兵　それ程までに、敵を討つが嬉しいか。
　ト ほろりと思ひ入れ。
かし　嬉しうなうて、なんとせう。ナア母さん。
れい　併し、長兵衞どの、大切な身を以て、その丸腰では
　オヽ、それ／＼。
　ト合ひ方になり、戸棚より小脇差を取つて來り
短刀なれども夫の形見。これを其方に
長兵　ハア、忝ない。養父の魂ひ所持する上は、今日より松ケ松長兵衞も、長庵どのゝ苗字を繼ぎ、畑の町人梶野長兵衞。
かし　そんなら、わたしも
長兵　おれが妹。
れい　兄の長兵衞。
長兵　お母さん。
れい　今から孝行にしてもらひませうぞや。
かし　モシ、母さん、例へどんな苦勞しても、お前に世話燒かせぬ程に、ナア兄さん。
長兵　それ／＼、氣遣ひしなさんな。カウ妹、お母さんに風邪を引かさぬやうに、行火でも入れて上げやれ。
かし　アイ／＼。モシ兄さん、お前も奥で寢酒を一つ。
長兵　よからう／＼。コレ見やれ、丸腰になつたら、おら

ア坊主になつた心持ちよ。氣が輕くなつた。明日から商人だ……カウ、白酒でも拵らへねえか。

れい　ハヽヽヽ。コレ〳〵長兵衞、例へ町人になつたりとも、世間廣い男の身の上。

かし　敷居の外には七人の、

長兵　敵はこの長兵衞が、浮世を捨てゝ大小を、捨てゝ差さいで小脇差、輕う暮らすが何より氣散じ。

かし　今から妹兄さんと

れい　親子三人睦まじう

長兵　他人交ぜずに三つ蒲團。

れい　頼む糸に縫ひ合す

長兵　そこは女の

れい　色紙の當てやう、

かし　そんなら兄さん。

長兵　母さんかしく。

れい　寢酒をつけて

かし　待つて居るぞえ。

ト唄になり、兩人思ひ入れあつて奧へ入る。長兵衞、後見送り、こなしあつて、

長兵　ハヽア、知らぬ事とは云ひながら、我れを養子に親兄弟、因みの緣は結べども、今はほどけて敵ぞと、名乘れもせぬ、その仔細は、思ひの重なる助太夫どの、心柄とは云ひながら、計らずも權八が手にかゝりて家の滅亡。何卒、助市どのに敵を討たせ、元の本地へ歸らせんと、この身の願ひあるゆゑに、卑怯には似たれども、包み隱すは暫時がうち。やがて心願成就せば、名乘つて討たれんそれまでは、敵と知らぬ母娘。現在おれに助太刀を、頼むと云つたその時は、血を吐く思ひの切なさ、辛さ。これを思へば尋常に、名乘つて親子に討たれてくれうか。イヤ〳〵、さすれば助太夫どのゝ義を忘れ、定めて我れを犬侍ひめと、助市どのゝ思惑、世の嘲り。この身一つに二つの義理。ハテ、心苦しい氣ぢやよなア。

ト思ひ入れ。唄になり、道具ぶん廻す。

本舞臺、元の旅籠屋の道具。眞中へ綱乘り物を据ゑ、この前に酒肴取散らし、行燈灯し、以前の足輕三人。おもん、三味線を彈き、黑平、甚句を踊り居る。右の三味線にて道具とまる。

黑平　醉うた〳〵、五勺の酒に。

足輕　ヤトセツセ。

もん　やん〳〵〳〵。
足輕　サア〳〵、これから大きな物で、始めよう〳〵。
もん　サア、わたしがお酌いたしませう、
足輕　面白い〳〵。
黑平　サア、また甚句だ〳〵。
足輕　面白い〳〵。
黑平　越後新潟八百八後家。
足輕　コリヤ來た、ソリヤ來た。
ト皆々無性に踊る。此うち黑平、醉うたる思ひ入れにて、そこへ寢る。足輕、捨ぜりふにて黑平を起しても起きぬゆゑ、いろ〳〵無性に踊りながら、おもん附き奧へ入る。黑平、起き上がり、とつくりあたりを見廻し、持つて出た糸立より、友切丸を出し、行燈を吹き消す。本釣り鐘鳴る。黑平、思ひ入れあつて。
黑平　警固のうちの知つた奴から取入つて、權八が買つた酒呑んだ上、皆の奴等は醉うて倒れたらこれ幸ひ、日頃手強い若衆めも、籠の鳥なら手間暇なし。銘作の友切丸で。さうだ。
ト友切丸にて、かゝらうとする所へ、郡治、窺ひ寄り
郡治　ヤア、大切なる囚人を、なんと致す。
黑平　それ見られたら。
ト立廻りのうち、網乘り物をミリ〳〵と踏み毀し、內より權八、好みの形にて出かゝりながら、黑平の持つて居る友切丸を引ッたくり、一肩浴せる。これにて郡治、逃げて奧へ入る。誂らへの合ひ方。權八、刀をキッと見る。凄き合ひ方になる。
權八　いま彼れが問はず語り、源家の重寶友切丸とな。深夜にそれと燒刃鐵色、さもあらん。この名劍が祐兼が手に入らば、工藤を調伏、曾我への恩義も捨てられず、我が手に助太夫を討つたれど、我れと繩目の罪に服し、主人廣元の御前に參らば、工藤大江の家を窺ふ、惡人が企み申し告げんと、網乘り物にて止宿の今宵。計らずも、友切丸、この權八が手に入れば、彼れらが惡事も止む道理。さすれば、やみ〳〵不忠を働らく、本庄づれが爲に死せんな、これ犬死も同然。一旦この場を逐電なし、父の御名を雪ぐ思案。ムウ、さうだ。
ト向うへ行かうとする。此うち黑平心附き、後より立廻る。權八、鞘を取上げる。黑平、又かゝる。立廻りに見事に黑平が首を打ち落す。仕掛けにて、黑平が首、行燈へ出る。權八、これを見て

ムウ。

トにつこり、行燈を見る。この見得、道具廻る。

本舞臺、元の世話場。上の方、旅籠屋の戸口。時の鐘。奥にてワヤ〳〵云ふ。道具とまる。

ト直ぐに旅籠屋の戸口により幕明きの仕出し、思ひ思ひの荷物を持ち逃げて出る。此うち一人、引はだを持つて出て、花道好き所へ置き逃げて入る。と後より門附けの芥太夫、編笠を持つて出て、これも花道誂らへの所へ編笠を落し入ろ。奥より長兵衛、蒲團を持ち出て來り

長兵　なんだ、隣は騒々しい。ハヽア、旅人衆の喧嘩か。

ト床を好き所へ敷き

兎角世間に事なかれ。果報は寢て待て。ドリヤ、夢でも見ようか。

ト夜着をかむり寢る。本釣り鐘、バタ〳〵になり、二重上手の壁を打ち破り、源六、ポンと反り出て行燈を打返す。これより忍び三重になる。長兵衛、恟りして窺ふ。破れより權八、刀を持つて出て鞘に納める。此うち源六、逃げて向うへ入る。權八、門口へ出ようとするを、長兵衛、捕へようとする。この立廻りに友切丸の鞘、長兵衛の手に殘る。權八は門口へ出て足に觸る引はだへ白刃を差す。此うち、かしく、奥より手燭を持つて出て來り、

かし　兄さん、騒々しい。なんでござんすえ。

トこの灯にて、長兵衛、鞘を見て

長兵　鞘は蒔繪の太刀作り。

かし　しかも時代の蔦かづら。

ト權八、これを聞いて、ツカ〳〵と内へ入り、いきなり鞘を取り、門口へ出ようとする。これにて三人、門口まで行き、長兵衛、權八を突き放す。權八、これなり花道好き所まで行く。長兵衛、門口より向うを見て

長兵　さては

トこれにて權八、礫を打つ。

かし　オヽ怖。

ト長兵衛に寄り添ふ。長兵衛、門口をピッシャリ。權八、編笠をかむる。この途端、木の頭。双方よろしく

ひやうし幕

ト幕の外、權八、思ひ入れ。時の鐘の送りにて、向うへ入る。知らせあつて後シャギリ。

一番目後の四建目

鬼王貧家の場
高臺寺墓所の場

役名――鬼王新左衛門。同女房。月小夜。同弟。團三郎。赤澤十内。稲毛三郎。岩淵平馬。曾我の母、満江尼。夜鷹、おかさ。同、おかね。同、おくろ。寺男、彌藏。同、九助。賽の河原の寺西閑心坊。

本舞臺三間の間、世話屋體。正面暖簾口、下手一間、二枚の貼交ぜ襖。此うち佛壇、いつもの所門口。上の方黒塀、下手生垣、誂らへの通り。幕の内よりおかさ、おかね、おくろ、夜鷹にて、喚いて居るを、團三郎、片肌脱ぎ、鉢巻にて、棕梠箒を振り上げ、立ちかゝり居る。通り神樂、てんつゝ、バタ〳〵にて、賑やかに幕明く。

三人　ヤア、こりやァ棕櫚箒を振り上げて、どうするのぢや。

團三　イヤ、どうもしないが、コレ、よく聞かつしやい。今年は兄の働らきで、大晦日に一文なしに拂ひをしてしまつた。それに春になつて、わつぱさつぱと、それゆゑ棕櫚箒の背打ちを喰はさうとしたが、團三が誤まりか。

かさ　ハヽア、そんならお前は、わたしらを掛取りと間違へたか。

團三　オヽサ、いつも鬼王が内と云へば、掛取りめらがうせるゆゑ。

かね　エヽモシ、その間違ひなら無理もないが、わつちらは掛取りぢやァござりやせん。

くろ　とりは鳥だが夜鷹サ。爰の月小夜さんに、ちつと云ひ分があつて來た程に

かね　どうぞ逢はして下さいよ。

團三　サ、その姉様は今、慥か疝氣が發つて、療治に行つて留守ぢや程に、一昨日でも來るがよい。

かさ　滅相な。何を云はんすやら。

かね　それ〳〵、留守ぢやと云はしやんすりや、いつまでも

くろ　爰の内にへばりついて居るよ。

團三　すりや、どうあつても。

かさ　お内儀に逢はにや歸らぬ。

三人　月小夜さんに、逢はうわいな〳〵。
　ト口々に喚く。奥にて
月小　なんぢや。きつう騷々しいが。
　ト合ひ方になり、煙草入れと煙管を持ち、月小夜、暖簾口より出て
三人　團三さん、なんぢやぞいなア。
團三　そりやこそ内に居たワ。
月小　ヤア、お前は。
　ト悔りする。
團三　エヽ、情ない。どうで碌な事ぢやあるまいと、留守を使うたに、爰へ出てござるとは、因果な事ぢや。
かさ　イヤ、其方は因果であらうが、こつちやアいゝ仕合せ。こんなに皆と連れ立つて來ては、お前も惡からうと、昨日ちよつと內話して置いたに、投げやり三方。
かれ　そこで今日押しかけて來やした。譯を附けて下さいやし。
月小　サア、そりやモウ、合點ぢやけれど、ツイ。
くろ　イヤ、ツイぢや濟みません。一體マア、お前
　ト云はうとするを
月小　アヽ、コレ〳〵、譯は云はいでも知れてある。爰でなんの彼のと云はしやんすと
　ト團三へ惡いと云ふこなしにて
マア〳〵、後にでも來て下さんせ。
かさ　イエ〳〵、爰で云ふが遠慮なら、どこへでも連れて行つて、聞ける所で
三人　云はうわいな〳〵。
團三　エヽ、女乞食を見たやうに、やかましいわえ。云ふとまた棕櫚箒だぞ。
　トまた振り上げる。
月小　エヽ、モシ、滅相な。
かさ　サア、どこでも一緒に行かう。
三人　ござんせ〳〵〳〵。
　トわや〳〵云うて、月小夜を連れ、門口へ出かゝる。通り神樂てんつゝにて、向うより十內、大福餅の荷を擔ぎ出て來り、直ぐに舞臺へ來て
十內　ヤア、こりや皆何を騷がつしやる。
月小　ヤア、お前は十內さん。
かさ　よい所へ來た。お前に譯を云つて、しらちつけてもらはう。
かれ　マア、あらう事かあるまい事か。

くろ　鬼王さんと云ふ侍ひの女房が
　ト云はんとする。十内、心附き
十内　ア、、コレ〳〵〳〵、エヘン〳〵〳〵。
　ト無性に咳をせく。
風でも引いたか、痰氣だの。
園三　コレ十内どの、きつう咳をせくが、風でも引いたか。
十内　イヤモウ痰で困る。園三どん、慮外ながら茶を一つ。
園三　イヤ、晝炊いたで、茶は水だ〳〵。
十内　コレ、水ならちよつと沸かして下さい。咳で堪らぬ
　エヘン〳〵。
園三　オイ〳〵。合點だ〳〵。
　ト奥へ入る。
十内　遲い程がよい〳〵……時に、こなさん達の來たのは。
かさ　外の事でもない。わつちらと一緒に、あの宿河原へ
　野稼ぎに出る月小夜さん、裏店小店のしみつたれと思ひ
　の外。
かれ　曾我の御家老鬼王どのゝ、奥さんと聞いて悔り。
くろ　お屋敷の奥樣まで、夜鷹を稼がれちやア商賣の衰微。
三人　分け前を貰はうと思つて。
十内　オッと皆まで云ふまい。譯は知れた。こりやア月小
　夜さん、ちつとは鼻藥を。
月小　サア、わたしもさうは思うたなれどな、園三さんは
　居さんす。少しの貯へも、お前に預けて置いた事ぢやに
　依つて。
十内　オッと、切れ放れを承知ならそれもよし。
　ト懷の財布より金を出し
　一人前一兩づゝ。なんと綺麗なお裁きであらう。
　ト三人へ遣る。
かさ　ホウ。イヤモウ、斯うさへして下されば、奥樣が夜
　鷹は愚か、弟御樣が蔭間に出やしやつても
三人　云ひ分はござんせぬ。
十内　そんなら口をきいたおれにも……と思つたところが
　錢も取られまい。
　ト餅を煽いで燒く。
三人　エ、、曖たかさうだ。一つおくれ。
　ト皆々取つて食ふ。
かさ　こりやア旨い。次手に土産に二つ三つ。
三人　わつちらにもおくれ。
十内　オイ〳〵。
　ト反古に包んで、三人にやる。

くろ　エヽ、吝い。破れた反古に包んで。
　ト十内、見て
十内　ヤイ〳〵、その反古は大事の反古。此方へ抛つてくんな。包みかへてやらう。
　ト外の紙へ包んで、右の反古を取る。
かさ　エヽ、さてはその反古は、色の文でゝもあるのかえ。
十内　なにサ、こりやアこの間、あの宿河原で、暗闇で拾つた反古。芝居でもこんな反古は、なんぞの役に立つものサ。
月小　ニヽ、そんならアノ先度の晩。
　ト思ひ入れ。
かさ　晩と云へば、もう追ッつけ泊り鷹の出る時分。
くろ　顔を塗つて場所へ行かう。月小夜さん、今夜は。
月小　わたしや天氣次第にしませう。マアお先へ。
三人　そんなら、さばえ。
　ト追分節になり、皆々向うへ入る。
十内　時に月小夜さん、お前の頼んだ事、彼の質屋へかけたところが、元金は二十五兩。尤も衣類や大小が入れてあつたところを、急に代物が入ると、鬼王さんの顔で入れ替へ物。流されると亂騷ぎ。有り難いと禮を云つたが

利は負けず、元利四十兩拂うてやつて來た。
　ト荷の間より包みを出す。月小夜、取つて
月小　イヤモウ、さうでござんせう。こりや、このお屋敷で大切な御先祖のお形見。いかいお世話でござんした。
十内　お前の所から五十兩預かつたうち、質屋へ四十兩。今の手合ひに三兩。殘りは七兩。
　トそこへ出す。
月小　モシ、十内さん、いま拾つたと云はしやんしたあの反古、わたしに賣つて下さんせぬか。
十内　エ、そんならアノ今の破れを……そりやこそ金になる。して、幾らに買ひなさる。
月小　お前にはわたしが内證で餘程の借り。マア、なんであらうと、誠の金を取つて置いて。
十内　勘定は後でもよい。マア、そんなら。
　ト右の書き物を渡す。月小夜、口の内にて讀む所へ、奥より團三出て來て
團三　ヤア、その金は。
十内　エヘン〳〵、ヤア、こりや團三どのを蒔かうとせいた咳が、本當になつた。ドレ、奥へ行つて、熱い茶を一杯飲んで來ようか。

ト唄になり、十内、奥へ入る。この唄をかり向うより
鬼王、誂らへの葛籠を脊負ひ、榊を持ち出て來り

鬼王　オヽ、月小夜、いま戻つたぞよ。

月小　オヽ、こちの人か。

鬼王　マア、ちよつと手をかけてくれろ。

團三　オッと合點だ。

ト手傳ひ、葛籠を下ろす。鬼王、内へ入る。

兄貴、合點のゆかぬ。この葛籠をどこから。

鬼王　サア。

ト門口を締め、あたりを見廻し

兼ねて其方達も知つた。箱王どのゝ今度の災難。あの箱根より下山の後、知るべの方へお預け申して置いたなれど、これも詮議嚴しいゆゑ、この葛籠へ入れ申して、鬼王が内へお連れ申したは、譬への燈臺元暗し。よもやと思はせ、暫しがうち、お匿まひ申さうと。

月小　すりや、アノ箱王どのは

團三　その葛籠に。

鬼王　今まで御窮屈な上に、また葛籠へ。暫しのうち出しまして、お氣晴らしを。

團三　合點でごんす。

ト團三、蓋を明けようとするを、奥にて

十内　團三さん／＼。

トこれにて團三、蓋をちやつとする所へ、十内、出て來り

團三さん、お前、茶を沸かして飲ませると云つて

團三　ほんに、爰に持つて來て置いた。

十内　オヽ、鬼王どの、この間はお目にかゝりませぬ。時に見れば、葛籠をひけらかして、今年は曾我も御富貴でござりまするな。

鬼王　なにサ／＼、ほんの夫婦が着替へ。弟めにばかりは新らしい物を。コレ／＼團三、われが大事の布子も入れてある。奥へ持つて行て風でも入れな。

團三　呑み込みました。

月小　ヤア、モシ、何やらきつう焦げる匂ひが。

十内　ヤア、ありやアわしが商ひ物サ。

トうろたへ、門口を出て、荷の側へ來り、餅を返す。

月小　エヽ、氣が附かなんだ。其やうに焦げても

十内　なにサ、わしが顏で賣れます。

團三　そんなら兄貴。

十内　また明日…大福餅温かい、漉し餡で旨い。

ト通り神樂にて、十内、荷を擔ぎ向うへ入る。團三は
葛籠を脊負ひ奥へ入る。あと合ひ方。

鬼王　コリヤ、月小夜、この榊と樒、神棚と佛前へ上げう
と買うて戻つた。そこへ置いてくりやれ。

ト渡す。

月小　ほんに佛前と云へば、河津どのゝ御年忌に、無くて
叶はぬ秋野の狩衣、取戻して置きましたぞえ。

ト風呂敷包みより出すを見て、

鬼王　こりや、先達て據なしに入れ替へにやつて、元利餘
程になつて居やうに、どうしてマア。

月小　サ、御一家伊東どので、内々金子をお借り申しまし
たが、利息にきつう取られました。ほんに質は置かれま
せぬわいなア。

鬼王　オヽ、そりやマア出かした。大事の品、佛前へ上げ
て置きや。

月小　アイ〳〵。

ト狩衣、榊と樒を神棚と佛前へ上げる。

鬼王　ア、コレ、箱王どのゝ御難儀も、紛失なした神妙劍
の一卷ゆゑ。せめて在所でも知れゝば、申し譯の一つに
もと、いろ〳〵と心を盡し、この間手に入つたるこの書
き物。

ト手紙の破れを出し

ナニ〳〵「先達てより箱根にて、我れら盗み取り所持い
たし候ふ……」コレ、慥かに密書と思へども、肝心の後
の文言、破れて讀めぬ殘念さ。

ト本釣り鐘になり、暮れ六ツを打つ。月小夜、此うち
今の鬼王が詞を聞き

月小　モシ〳〵、わたしもその事が苦勞になるゆゑ、もし
もやと取つて置いた、この書き物の破れ。

ト破れを出し

讀まうと思へど、假名ならよけれど、むづかしい字が書
いてあるゆゑ、とつとモウ、口惜しいものでござんす。

鬼王　ドレ〳〵、そりやマア耳寄り。爰へおこしや〳〵。

ト取つて密書の切れを繼ぎ合せ、讀まんにしても見え
ぬこなしにて、いろ〳〵思ひ入れ。

月小　モシ〳〵、お前はマア味な素振り。目が見えぬかい
なア。

鬼王　サア、わが身も案じやうと隱して居たが、御主人方
の事で苦勞する心氣の疲れか、二三日以前よりさのみで
もなかつたが、今日は皆暮れ。これがソノ鳥目とやらで

あらうかい。

月小　エヽ、ほんにマア、泣き面に蜂とやら。そりやマア、どうせうぞいなア。

鬼王　どうと云うて是非もない。癒る時分には癒るであらう。

月小　ほんにそれぢや、この手紙も讀めますまい。そんならこりやマア明日の事。

ト密書を取つて、一緒に懷へしまひ

それにしても、なんぞ早う癒る藥を、團三さんとも相談して……ほんに、苦勞が多けりや春の日も短かい。ドレ灯をつけて來ませうか。

ト唄になり、月小夜、奥へ入る。この唄をかりて向うより三郎、麻上下、股立ちの上に菖蒲革の羽織、提灯を持ち出て來る。後より滿江、乘り物にて陸尺舁き、中間つき出て來り、直ぐに舞臺へ來て

三郎　鬼王新左エ門どのゝ別宅はこれかな。

鬼王　ハイ／＼、此方でござりまするが、どちからお出でなされました。

三郎　曾我中村より滿江尼さまのお出で。

鬼王　ナニ、御老母樣が

トうろたへ、そこらを片附けようとしても、目が不自由なこなしにて

コレ／＼、月小夜、早うぢや／＼。

ト奥にて

月小　アイ／＼。

ト行燈を持ち出て來り

エヽ、忙しない。なんでござんすぞいなア。

鬼王　なんぢやどころか、曾我より御老母樣が入らせられた。

月小　エヽ、アノ滿江尼さまが。

鬼王　コリヤ／＼、おれが目の惡い事をお知らせ申すと、又お案じぢや程に、必らず云ふなよ。

月小　アイ／＼、合點ぢやわいな。

トそこを片附ける。

鬼王　早うこちらへお通し申せ。

月小　アイ／＼。

ト門口へ出て

これはマア、夜にかゝつて、なんと思し召して入らせられましたぞ。

ト駕籠の内にて

滿江　オヽ、月小夜か。それへ行て逢ひませう。
ト合ひ方になり、三郎、戸を明けると、滿江尼、出る。
月小　マア〱、あれへお通り下されませ。
三郎　お乘り物は暫らく裏手へ。
陸尺　ハアヽ。
ト乘り物、供は下の方へ入る。滿江尼、二重の上へ通る。
鬼王　これは〱、見苦しい所へ御老母樣には、ようこそ入らせられました。
ト門口の方を向いて辭儀する。
月小　アヽモシ、滿江尼さまには、疾に上へお通りなされてぢやわいな。
ト氣の毒なこなし。
鬼王　ホイ……イヤヽ、こりやヽお供の衆へ挨拶したのぢや。
月小　何を剽輕な。オホヽヽヽ。こちの人も、大分氣輕になられましてござりまする。
滿江　イヤそウ、それは何より。何かの事で苦勞しやるに依つて、病でも出やせぬかと案じて居たに、マアマア嬉しうござる。
鬼王　有り難うござります。曾我のお長屋が御普請前ゆゑ據なうこの平家の宿外れへ暫時の轉宅。假住居の儀でござれば、その身その儘。さぞむさうも思し召しませうが……して今日は、いつれへお出でのお立寄りでござりまするな。
滿江　サア、あるかなきかの曾我なれど、一門は皆歷々。方々から年頃のお禮を請けるに、浪人顏して捨ても置かれず
三郎　伊東どの、二の宮さま、その外の御一家へお禮し次手、何か御用ござるとの儀ゆゑ、わざ〱これへお供いたしてござる。
鬼王　ムウ。さう云ふ顏はお屋敷では聞き馴れぬ……イヤ見馴れぬ仁ぢやが其許は。
三郎　その筈。身共は曾我のお屋敷へ、新參に召抱へられた者でござる。
鬼王　ムウ。合點のゆかぬ。新參の御家來をお抱へ遊ばすなら、瘦せても曾我の束ねを致す、鬼王にお知らせないとは。
三郎　イヤ、そりや何でござる。お勝手向きも如何な曾我どのゆゑ、御扶持切り米は此方より差出し、御奉公に參つた拙者。

滿江　それ〳〵、さうとは知らず榮耀らしいと、其方達が思惑も氣の毒ゆゑ、隱して居ましたわいなう。

鬼王　イヤモウ、其やうな御家來なら、何百人でもお召し遊ばされませ。ハヽヽヽヽ。何は兎もあれ、あなたが今日入らせられましたは。

滿江　サア、その譯は、この程箱根山を箱王丸下山の折、紛失したる神妙劍の一卷、折が惡さに盜賊に陷り、御詮議最中。

鬼王　みす〳〵御存じない事ながら、無實の御名。是非なきお身。

月小　何國にお忍びましますやら。

滿江　幼ない時より短氣な虫。無實の科を憤る若者。事を糺さんと名乘り出れば、佞人や讒者の劍の舌先、忽ち命に。

ト三郎と顏見合せ、思ひ入れあつて

アイヤ、命惜しんで隱れて居たら、勘當ぢやぞ。必らず必らずサア、名乘つて出いと、とくと意見を賴まん爲。

月小　お心ありげなそのお詞。

鬼王　鬼王とくと承知いたしました。箱王どのにお目にかからば、短氣なお心出ませぬやう……名乘つてお出であるやうに。

滿江　この母に成り代り、よう意見を……イヤ、しつかりと云ひ付けてたも。

月小　ほんに、滿江さまのお出で。思ひ出したは先殿のお筐の狩衣とやら。

鬼王　ほんに、それ〳〵よい折柄、爰へ持つておぢや。

月小　アイ〳〵。

ト佛壇より取りて來り、そこへ出す。

鬼王　河津さまの御年忌に、無くて叶はぬお筐の品も、お預かり申してから、とんだ所へしまひ込み、やう〳〵と取り出しました。イザ、お受取り下されませう。

ト月小夜、取つて出すを、滿江尼、始終、思ひ入れあつて

滿江　それこそ河津どの、最期まで着せられし秋野の狩衣。何時知れぬ兄弟が、父の五十年忌百年忌も、これへ向つて母もろとも、佛事を營み、めでたう本意を遂げんには。

鬼王　エ。

滿江　イヤ、本來空の佛事のお筐。その袱紗へしまうてたも。

月小　畏まりました。

ト風呂敷へ狩衣を包んで居る。此うち通り神樂になり向うより平馬、捕り手二人連れ、後より閑心、夜鷹おかさ付いて出て、花道に彳き、皆々舞臺へ來り、おかさ、門口を明け

かさ　ハイ、モシ、ちと御免なされませ。

ト内へ入る。閑心、平馬、門口に窺ひ居る。

月小　ヤ、お前は最前ござんした

ト思ひ入れ。

かさ　ヤレ〳〵、お宿で嬉しい。わざ〳〵わつちが來た譯は、先刻の

月小　ア、モシ、今はちと取込んだ事がある程に、用なら明日でも。

かさ　モシ〳〵、そんな悠長なこッちやアござりやせん。とんだ事が起つたから、先刻お前から夜鷹仲間へ受取つた金、おくろやおかねがのも皆集めて、三兩返しに來たから、受取つておくれ。

ト以前の金を月小夜に渡し

月小夜さん、キッと渡しましたぞえ。

ト云ひ、門口へ出る。閑心、平馬、早く歸れと云ふ思ひ入れ。これにておかさ、向うへ入る。皆々合點のゆかぬこなし。月小夜、思ひ入れあつて

月小　ムウ、すりや戻すと云はしやんすりや、達てとも云はず、わたしが方へ

閑心　月小夜、慥かに受取つたか。

トずつと内へ入る。月小夜、見て悧り

月小　ヤア、お前は。

閑心　賽の河原の寺西閑心坊だ。先度の晩は宿河原で、婀娜な夜鷹と思ひの外、引ッ張り込まれた葭簾の蔭、怖い心の破れ莚、鬼王と云ふ武士の妻が、野稼ぎまで働らくな。

月小　サアそれは、

閑心　そりやア兎もあれこの金は、いよ〳〵われが手から出たか。

月小　サア……わたしが手から出れば又

ト平馬、ズッと内へ入り

平馬　搦め捕つて召連れる。者ども、ソリヤ。

捕手　ハッ。

ト内へ込み入り

動くな。

ト月小夜を取巻く。鬼王、悧り、探り寄つて月小夜を

囲ひ

鬼王　待つた〳〵。こりや何ゆゑに女房を、動くなやらぬと御意なさる。して其許様は。

平馬　梶原が家來、岩淵平馬と云ふ者。御主人この程箱根權現へ、皐月下旬狩場のお供、首尾よく相勤めん爲、御祈禱料として金五十兩、奉納のその場にて紛失。內々詮議いたせしところ、今日宿河原の辻君ども、其方が妻の月小夜とやらより、受取りしとあるその金、一兩々々極印金。さすれば金子の盜賊は其方の妻。夫の身にて存ぜぬとは云はれまい。兩人とも糺明なす。

捕手　腕廻せやい。

鬼王　アヽ、モシ〳〵、先づお待ち下さりませ。とんと合點のゆかぬ金の筋道……コレ〳〵月小夜、こりやアどう云ふ譯であらう。

月小　サア、あの金はナ。

ト閑心が顏を見る。閑心、顏を外ける。

鬼王　御一家伊東さまで、內々借り請けたと云やつたは。

月小　アイ、そりや僞はり。

閑心　箱根で盜んだ金であらうが。

月小　イヽエ、拾ひました。

閑心　なんと。

月小　この間宿河原で、しかも宵闇、思へば怖い夢見たやうに、拾うたあの金。

閑心　ハテ、顏より膽の太い女。流石のおれさへ呆れるわえ。

平馬　紛失の金子は五十兩。殘りの金子は、それにあるかえ。

月小　サア、それは。

ト風呂敷包みを見て、思ひ入れ。

閑心　殘金この場にないと云ひ

平馬　拾つたなどとはあざとい云ひ譯。夫婦ともに、腕廻せ。

鬼王　サ、それは。

平馬　サア〳〵、なんと。

トばた〳〵になり、向うより十內、走り出て來り、直ぐに內へ入り

十內　月小夜さん、とんだ事だ〳〵。先刻元利四十兩で、請けてやつた代金、金は質屋へお觸れのあつた、紛失の極印金だと亂騷ぎ。パッと沙汰のないうち、代金を元へ返し、金を持つて行つてくれろと質屋から、後に行つた

おれへの催促たら〳〵。サア、先刻の質草を、返して下さい〳〵。

月小　サア……ちやと云うて折角。

ト滿江尼へこなし。

十内　折角もせつかいもあるまい。持つて行かにやアおれがかゝり合ひ……この所にないならば、質草は慥かに奧に。

ト行かうとするを

鬼王　アヽコレ。

ト鬼王、探り留めるを

十内　面倒な。退かつせえ。

ト振り切り、暖簾口へ入る。直ぐに奧バタバタにて、十内、紅葉に鹿の袖出かゝり居る以前の葛籠を引摺り、出て來るを、團三郎、支へながら出て

團三　この葛籠を、なんとする。

十内　知れた事。この十内が奧へ行くと、うろたへて蓋をしたこの葛籠。てつきり中には先刻の質草。引摺り出して持つて行く。マア、この蓋を。

團三　イヤ、明けさせる事ならぬ。

ト立廻りのうち

鬼王　コリヤ〳〵團三、葛籠々々と云ふが、最前われに預けた葛籠か。

團三　サア、それぢやに依つて。

鬼王　そりや大變だ。

ト鬼王、探り寄つて葛籠を圍ひ

イヤ、この葛籠には、何もそんな品はない程に、こればつかりは。

ト此うち三郎、葛籠より出かゝりある袖を、キツと見て

三郎　ヤア、見れば葛籠より出かゝる袖、紅葉に鹿の染模樣は、聞き及ぶ箱王丸が目印。さては逐電なした箱王めを、この葛籠に隱し置いたな。

鬼王　アヽモシ、全く以て拙者めが、何しに箱王さまを。

三郎　吐かすな。曾我へ新參と云ひしは僞はり。誠は箱王を詮議の役人稻毛の三郎。仰せつかつて曾我への御教書。

ト出すを、月小夜、取つて見て恟り

鬼王　エヽ、其許は稻毛さまよな。どう云ふ事で滿江さまが。

滿江　お連れ申した譯は後で。マア、聞きたいは鬼王。そちや、いよ〳〵この葛籠の内に箱王を。

鬼王　イヤ、なんのお匿まひ申しませう。あの内には夫婦が着替への破れ衣裳、又は頂戴の御紋付、ちぎれ〳〵の色紙短册。天爾波の合はぬ品々を、お見せ申すが恥かしさ。この中ばかりは幾重にも。

三郎　ヤア、見せともながるが不審の一つ。さほどに隠す品ならば、蓋明けずとも箱王か、また箱王でないと云ふ潔白は葛籠の內。爰で芋刺し。ソレ、平馬どの、ともどもに。

平馬　心得申した。サア、そこ退いて證據を見せよ。

鬼王　イヤサ、それは、

三郎　葛籠の內は箱王か。

鬼王　サア。

三平　突き込まうか。

鬼王　サア。

三平　サア〳〵〳〵、面倒な。

ト兩人、葛籠へかゝるを立廻り。此うち月小夜、團三入る。よろしく鬼王、手探りに三郎を留める。五人の立廻りいろ〳〵。トゞ鬼王、兩人を突き退け、葛籠の上へ跨り

鬼王　待つた〳〵。早まるまい御兩所。遁がるゝだけはと陳じては見ましたが、退引きならぬ詞の鎹。是非に及ばず明かします。如何にも葛籠の內へ、箱王さまを匿まひました。

三平　さてこそなア。

滿江　ヤア、すりや鬼王、いよ〳〵其方が。

鬼王　サア、一巻の盜賊と、無實の罪も時の權威に、やみやみと科に陷り、御流浪を見るに忍びず、忍ばせ申せし葛籠の內。如何に御身を庇へばとて、御主人のお體の上、跨り返つて勿體ない。

ト葛籠を下り

御免なされて下さりませ。

ト葛籠を戴くこなし。

滿江　ア、如何なれば折も折とて、この所へ葛籠が出て、我が子の命の瀨戸となつたか。さうとは知らず箱王が代り、科人はこの母なりと名乘つて出で、成敗に遭ふ心で、コレ

ト裲襠を脱ぐ。兩手は羽搔締めになつて居る。

月小　ヤ、、こりやあなたは繩目の

團三　羽搔締め。

滿江　覺悟の繩目も鵙の嘴。

鬼王　ヤヽ、なんと。

トうろたへ、滿江尼の側へ行かうとして、葛籠が氣遣ひのこなし。

コリヤ／＼團三、葛籠を守護せい。

ト團三に押へさせ、慌てゝ探り寄り

ほんに、こりや、繩目に搦んでござりますな。

トこれにて、葛籠の內バタつく。

鬼王　ハテ、そりや惡い御合點。これへ出さつしやれたとて、その身の汚名が晴れると云ふ筋でもなし、却つて顏見りや、御老母樣のお嘆きを增す道理。必らず出まい。團三、必らず出し申すな。

滿江　コレ／＼鬼王、最前から心得ぬ其方の態度。さては其方は

鬼王　サア。

月小　二三日以前より鳥眼とやらで、今は皆暮れ。

滿江　アヽ、それも皆苦勞のおどもり。

鬼王　御老母樣がお覺悟の、見るもいぶせきその繩目も

月小　お子に迷ひの夜の鶴。

團三　これを思へば世の譬へ。

鬼王　四百四病に增すと云ふ

月小　貧の病は數ならず。

滿江　辛いは恩愛。

鬼王　忠義ほど

月小　切ないものは

四人　ないわいなう。

ト皆々こなし。

三郎　ヤア、くど／＼とナニ繰り言。イザ、箱王めを受取らうか。

鬼王　イヤ、お首にしてお渡し申さう。

三郎　なんと。

鬼王　サヽ、浪人なれど河津の血緣、名もなき土民なんぞのやうに御成敗あらば、刀差す身の同じ耻辱。見事に生害お勸め申し、お首にしてお渡し申す。暫時の御猶豫。偏へにお願ひ。

三郎　暫時とあらば、聞き屆けても得させん。首を見るまで、矢張り老母は箱王が人質。

團三　コレ、兄者人、よくお賴みなされました。一寸延びれば尋延びると、御猶豫の其うちには、また思案もさまざま。相好變る生死の願ひ……この團三を。

鬼王　コリヤ、つか／＼と口出す場所でない。控へて居れ。

ト この時閑心、前へ出て、煙管にて團三が眉間を打ち割る。血流れる。

團三　ヤ、、こりや何ゆゑにこの團三を。

閑心　しやッ額をぶち割つたは、それも矢ッ張り顔の目印。

團三　なんと。

閑心　身替りの手目はあがつたワ。

團三　チエ、。

ト口惜しき思ひ入れ。鬼王、月小夜こなし。

三郎　當意卽妙、出かした。そちや賽の河原の閑心坊とやら、箱根に居れば、箱王が面を知りつらん。

閑心　そりや一つ寺も同然な、東福寺と地藏堂。疵が顏の名所舊跡、よつく存じて居ります。

三郎　身は箱王が面體知らず、只今の機轉と云ひ、心を見拔いて檢使の役目。

閑心　仰しやりつくるとあるからは、引導役も頭役。併しお布施は御承知かえ。

十内　イヤ、お布施と云へば、ならう事なら金もお坊に。

閑心　頼むとありやア質草の、その入れ替へはこの月小夜。

ト月小夜が手を取り、連れて行かうとする。立廻りに包みを落す。内より狩衣出る。

十内　ヤア、こりやコレ先刻の代物。

月小　ア、コレ、それを。

ト寄らうとするを、十内、取つて

十内　これで質屋の四十兩、元へ戻せばおれが身拔け。

平馬　紛失金の五十兩、纏めて身共へ、其方頼むぞ。

十内　なんでも構はぬ、呑み込みました。

滿江　すりやその秋野の狩衣も

十内　質屋の藏へ、又も纏目の

團三　衣類にかゝるは是非なけれど、御老母樣の纏目ばかりは

鬼王　イヤ、そりや御窮屈でも矢張り其まゝ。

月小　エ、、そりや又なんで。

鬼王　ハテ、箱王どのゝお命も、羊の歩み隙行く駒、果敢ない浮世をお憐みあつて、もし御不料簡でも出やらかと、案じ過して其まゝにと、忠義に愚痴も起る鬼王。

滿江　なにを。その氣遣ひはなけれども、老い朽ちし我れは長らへて、由ある弟の箱王丸、例へ最期に及ぶとも

鬼王　ならう事ならお命を

閑心　助けようと思ふなら、鐘撞木の當りから。

月小　アノお檢使の閑心どの。

閑心　坊主の役目だ。衣をかけるワ。
ト月小夜にしなだれかゝろ、鬼王、探り、引分け
鬼王　イヤ、首打つてお渡し申す。
閑心　賣り詞なら買ひがゝり。身替り喰はぬ葛籠の張り番。
十内　も一つこじつけ、わしがしませう。
平馬　然らば金子は、十内しかと。
三郎　檢使の役は閑心坊。
滿江　名殘は盡きぬ。そんなら鬼王。
ト二重より下りる。
三郎　乘り物これへ。
ト下座にて
陸尺　ハツ。
ト以前の人數、乘り物を舁き出る。三郎、滿江を引立て、門口へ出る。
鬼王　團三、道までお見送り。
團三　でも箱王どのゝ。
月小　ハテ、虜の內に凶事あれば
鬼王　この鬼王が死物狂ひ。
閑心　すりやアノわれが。
ト此うち滿江、乘り物へ入る。團三、門口へ出る。

月小　手出しをさせぬ、御敎書の封印。
ト以前の書き物にて、葛籠の錠へ封をする。
鬼王　女房出かした。
月小　この御書が破れると、誰れ彼れも身の上ぢやぞえ。
閑心　して首渡す刻限は。
鬼王　鳥眼の癒る夜明け時。
月小　心の横雲告げ渡る
團三　夜明け烏の聲ならで
滿江　可愛々々も今日の今
閑心　別れの鳥と
十内　鳴る鐘も
鬼王　三つの巷へ
團三　行く空を
月小　とくと數へて
鬼王　十内。
閑心　鬼王。
鬼王　閑心どの。
十内　戒名つけて
閑心　待つて居るぞよ。
ト唄になり、滿江尼、乘り物の戶をピッシヤリ。皆々

思ひ入れ。駕籠に中間、捕り手、後より團三附き、向うへ入る。三郎、平馬、行く振りをして、花道にて囁き、取つて返し、下へ忍ぶ。十内、狩衣を持ち、葛籠を脊負ひ、閑心、付いて奥へ入る。鬼王、月小夜、殘り、こなし。月小夜、門口へ出て見送り、思ひ入れ。

鬼王　エ、、折惡いこの病。片目なりとも見ゆるなら、今の手詰めも心は鬼王。後は兎もあれこの場の始末、切つて切り拔け御主人方を、お救ひ申す法もあらうが、盲目探りのなまじいに、事を仕出して又の難儀と、やみ／＼虜に御主人方を、斯くも不覺な鳥眼の病。腰拔けとも不忠とも、なんたる因果な身の上と、思へば／＼口惜しい。

トぢつと思ひ入れ。

月小　尤もでござんす。道理でござんす。日頃の我慢も病の氣後れ。盲目探りにうろ／＼とぼ／＼、側で見て居るわたしが口惜しさ。推量して下さんせいなア。

ト取りつき泣く。

鬼王　女房、われが云ふは、そりや嘘ぢや。

ト突き退ける。

月小　エ、、そりや又なんで。

鬼王　サア、最前の金の出所。

月小　エ、。

鬼王　御一家方で借り請けたと、初めに云うて後では又、あの宿河原で拾うたと、二枚の舌は女の二道。わりや不義をしたな。

月小　エ、、滅相な。なんのわたしが。

鬼王　イヤ、せぬ者が先度の夜、ちよつと逢うたる宿河原。

月小　川風寒く友千鳥、人は知らじと思へども

鬼王　闇にも白き白粉の

月小　三十振り袖

鬼王　始終の樣子を

月小　すりや、その時に。

鬼王　わりや辻君を働らくな。

月小　エ。

ト鬼王、胸倉を取つて引寄せ

鬼王　エ、、おのれはなア。

トこれより變つた合ひ方。

コリヤヤイ、年々曾我の春と云へば、去年からの引き殘り、相も變らぬ借錢乞ひ、それが嫌さに今年ばかりは、この鬼王が儉約始末の心が屆き、掛乞ひと云ふは一人も來ぬぞよ。曾我で始めてのう／＼と、何が不足、何が苦

しくて辻君まで働らく……ムウ、こりやうぬ、榮燿がし足らいでの事だな。

月小　そシ、情ない。それと知つたら隱しはせぬ。あれも矢ッ張りお前の爲。

鬼王　ヤヽ、なんと。

月小　サア、いつぞや箱根山に籠めありし、神妙劍の一卷紛失。その夜御老母樣のお使ひに、わたしも一度行き合せ、箱王さまのお部屋に宿り、夜中に物音、一間へ出て見れば、怪しや箱王さまに曲者三人、やらじ遁がさじと捕へる盜賊。その者の二の腕へ、しつかり切り込む刀疵。それなりに取逃がせしが、その夜の事よりおいとしや、箱王どのゝお身の御難儀。お救ひ申すは一卷を、詮議し出すに如くなしと、思ふ證據は刀疵、その曲者を尋ねうにも、衣類纏うた人の肌、一々改め見られもせず、思ひ附いたる辻君に、馴れゝば馴れるじやれ詞。數多の客を引込んで、手管ごかしの草枕、肌を探るも盜賊の、詮議をしよう爲ばつかり。

鬼王　ムウ、譯はそれでも聞えたが、夜鷹買ふ程の者が、よもや寢ずには歸るまい。わりや夫ある身で肌許すな。

月小　ア、モシ、なんのマア、その疑ひがあらうと思うて、これまで隱して居ましたが、肌を穢さぬその代り、勤めの代を此方から、使つて云ひ譯しましたわいな。

鬼王　そりや又どうして。

月小　サ、斯うばかりでは合點がゆきますまい。心を鎭めてとつくりと、マア聞いて下さんせいなア。

トこれより變つた合ひ方になる。

人樣と云ふ者は、それは〲正直なものでござんす。來る度毎に肌身をば撫で擦つて、そでない時は、お客樣、わたしはこんなでも大磯の傾城、思ふ男に心中立て、客を振るゆゑ親方の折檻、懲らしめのこの辻君。客を取らねば親方へ濟まず、肌を許せば男へ立たず、どうぞ揚げ代此方から、取つて去んで下さんせと、誠らしう云ふ時は、どなたも同じ慾の世の中、三十五十の端のお錢、又は一筋二筋も、取つて行くのはよけれども、慾でかゝらぬ色氣で來る、武家方の家來衆には、義を立て通す忠義の話し、坊さん客には此方から、談義を說いて六字詰め、商人衆には算盤の、玉に逢ふ夜の水揚げの、けして云はれぬ口拍子。屋根屋大工の若衆には、心の內の淸鉋、かけて去なして又明日の夜は、百姓衆は律義な身の、そこへ付け込む年貢の未進、こんな形になりましたと、云へ

ば田もやろ畑もやろと、鍬をぬかして去なしやんす。神道者には正直な、目にもろ〳〵の不淨と僞はり、必らず心に恨みを含んで下さんすなと、宥めて去なすその後に又はお醫者や座頭さん、けんぴきすつて匕加減、嘘八百や一貫の、お錢は一夜二夜さに、消えて果敢ない月小夜が、胸の曇りも冴えやらぬ、假の枕に置く露の、泣いて明かしたその夜さは、幾度と云ふ事はなかつたわいなアなかつたわいなア。包み隱した疑ひで、いたづら者とのお腹立ちは、尤もではござんすが、痩せても枯れても曾我の御家來、お前の女房、顏の立たぬやうな事を、なんのなんの致しませうぞ。身はひしびしほの苦患しても、その盜賊の詮議仕出し、お前を忠義と譽められたさ。そればつかりがやまやまで、苦患するもの褒めもせず、いたづら者の不義者とは、あんまり酷い、胴慾ぢや〳〵〳〵わいなア。

ト縋り附き泣く。鬼王、思ひ入れあつて

鬼王　コリヤ月小夜、さう云ふ事とは露知らず、惡口云うたは堪忍してくれ。あやまつた〳〵。

月小　エヽ、滅相な。そのお前の愚痴な心の出ぬやうにと心一ぱい大事にしても、屆かぬ勝ちの足らはぬ女子。

鬼王　イヤモウ、今の詞で疑ひ晴れた。して、詮議の爲と云やるが、その盜賊の手がゝりでも。

月小　サア、しかとそれとは知らねども、最前來た閑心とやら、慥かに右の二の腕に。

鬼王　すりやアノ坊主めが。

月小　どうぞ騙して問ひ落し

鬼王　イヤ、それよりは箱王どのゝ

月小　お命を助けるお身替りを。

鬼王　ムウ。

ト合ひ方になり、鬼王、思ひ入れあつて

月小夜、最前の榊と樒を取つて來てたも。

月小　アイ〳〵。

ト榊と樒を取つて來り、渡す。月小夜、心得ぬこなし

鬼王　コレ月小夜、こりや最前佛前と神棚へ上げうと、買うて戾つた榊と樒。なんとよう似て居ると思ふゆゑ、おりやこの樒を榊の代り、神棚へ上げうと思ふが、どうあらうぞ。

月小　お前もマア滅相な。如何に目が惡いと云うて、榊はめでたい祝ひ物。樒は愁ひ。マア、忌はしい物を、どうして神棚へ。

鬼王　イヤ、惡を善に凶を吉に、祝ひ直すも、めん／＼の心次第。
月小　エ。
鬼王　サア、譬へて見ればこの樒、どうで死ぬ身の箱王どの。榊は丁度弟團三、お身替りと思ふ名も、閑心めが惡推に、延ばる命の榊葉も、佛へ供へ愁ひの樒を、神へ祝ふも、女房、其方が心にある事。
月小　ムウ、そりや又どうして。
鬼王　サア、わが身に心ありげな閑心。成り難い榊の團三を、香花の樒にして、樒を生ける榊にするも、檢使の役の……イヤサ、現世未來も坊主の役。煩惱菩提へ付け込んで。
月小　ムウ、すりやアノ閑心に、わたしが……イヤサ、團三さんを賴めとかえ。
鬼王　サ、否ぢやあらう、身も頷ふ程否であらうが、コリヤ、夫の忠義、お主の爲。
月小　ハア。
ト泣く。
鬼王　すりや、事を分けて賴んでも
月小　イヤ、お前の詞を立てまする。
鬼王　そんなら得心してたもるか。
月小　サア、大事のお前の、忠義になる事ゆゑ。
鬼王　エ、忝ない。よう聞分けてくれたなア。
ト探り寄り、月小夜が手を取つて嬉し泣き。月小夜もこなしあつて、側にある硯を取つて
月小　こちの人。ちよつと一筆書いて下さんせ。
鬼王　そりや何を。
月小　サア、どんな事があつても、肌は許しはせぬけれど、外に便りもないわたし、身貧なお前と侮つて、隱し男でもするやうに、團三さんや、また世間の口の端、わたしが心も濟みませぬ、一生見捨てぬと云ふ書付けを。
鬼王　ムウ。そりやモウ、わが身が見捨ていと云ふても捨てはせねど、氣が濟まずば、ドレ／＼
ト探りながら筆を取つて書かうとして
ハテ、口惜しいものぢや。眼が見えねば筆の立てども。
月小　成る程、そんなら前の文言は、團三さんにでも書いてもらふ程に、わたしが名と、お前の名ばかりは、直筆で書いて下さんせ。
鬼王　オヽ、その位の事は出來る。
ト白紙に二人の名ばかり書き

これでいゝか〳〵。
ト月小夜、取つて
月小　月小夜どのへ、新左衞門……ようござんすが、とて
もの事に、お前の名の所へ。
鬼王　イヤ、印判よりは、まだ慥かな。
ト脇差を拔きかけ、小指をちよつと切り、血を名の下
へ附ける。
月小　アヽ滅相な。そんな事せずとも。
ト取つて戴く。
鬼王　ハテ、若い時なら起證代り。
月小　夫婦の仲で、なんのいらざる書付けも
鬼王　云ふに云はれぬ頼みの筋。
月小　鬼王どの、必らず見捨てゝ下さんすなえ。
ト奧にて
閑心　鬼王や〳〵。月小夜はどこへ行つた。
月小　ヤ、あの聲は閑心どの。まだ話す事もあれば、奧の
間で。
鬼王　ムウ……手を引いてたも。
ト唄になり、月小夜、鬼王の手を引き、奧へ入る。あ
と時の鐘になり、下手より三郎、平馬、窺ひ出で、內

へ小石を打ちつける。暖簾口より閑心、後に十內、以
前の葛籠を引摺り、出で來り、閑心、門口を明け
閑心　今の礫は。
三郎　オヽ、身共だ。
十內　こりやア稻毛どの、岩淵さま。
ト兩人、內へ入り
平馬　先頃箱根へ奉納の五十兩、身共へ分けを寄越すと云
ふゆゑ、ソツと知らせて閑心坊、てまへに首尾よく盜ま
せたが
閑心　あの宿河原へ美しい、暗闇まぎれに失なつたは、て
つきり彼奴と探つたところ、案の通り月小夜め、そこで
夜鷹めらをせぐつた上、口割りの金から付け込んで、今
日の體裁。
十內　その金の行き場は、質に置いたこの狩衣。それで質
屋から尻が來たと、マア、この代金はふんだくつて置い
たゆゑ、金は此方にあるも同然。
三郎　この稻毛は箱王が詮議、老母が代りと吐かすゆゑ、
繩かけ召連れ來たところ、不思議に知れた箱王が在所、
檢使の役目を其方に、申しつけたも月小夜に、心のある
樣子ゆゑ、彼れを誘き出させやう爲。

閑心　イヤモウ、箱根山へござる度、惡い事の手先になるこの閑心、箱王を見知つたと、この役を振つて下さつたも年の功。これから葛籠を玉に使つて、月小夜を口說き落し、その後では首がバッタリ。
十内　五十兩の金を纒めて、これもお坊へ渡した上は
平馬　それも主人へだんまりで、この人數へ頭割り。
閑心　それぢやア愚僧の割が惡い。
三郎　ハテ、てまへにはあの月小夜。
閑心　マア、何にしろやりかけて見よう。
三郎　美事は首尾よく行つた上。
三人　何かは後で。
閑心　コレサ。
　ト思ひ入れ。奥にて
月小　アイ〳〵、ちよと行て來るわいなア。
　トこれにて皆々騒き、時の鐘にて、三郎は奥、平馬は門口の外へ忍ぶ。閑心、十内、殘る。合ひ方になり、奥より月小夜、銚子杯を持ち出て來り
オヽ、これはお二人さん、何をがな、よう話して居やしやんすぞいな。
十内　サア、こりやアナニ、こつちやア身にかゝらぬ事ゆゑ、踵の棘とも思はぬが、さぞこなさん方夫婦は
閑心　頭痛鉢巻で病んで居やうと。
月小　そりや何をえ。
閑心　ハテ、箱王が首を討つ事をよ。
月小　ホヽ、なんの我が命を討たれるぢやなし、人の事に構ふ事かいなア。
十内　でも、現在連れ添ふ鬼王が爲には、主人の箱王。
月小　なんの、それも合せ物は離れ物。別れてしまへば赤の他人。
閑心　ハテ、頼もしいお心意氣だの。
月小　イヤモウ、お主ぢやの夫ぢやのと、モウ〳〵、鬱陶しうてならぬに依つて、さつぱりとする心で……こりや酒でも呑んで、思案せにやならぬわいなア。
　ト酒を呑む。
十内　コレ〳〵、こなさんは、餘ッぽど下地があるに、其やうに。
月小　なんの五合や一升、夢のやうぢやわいな。
　ト又つぎ、一口呑んで
お前、ちよつと助けておくれ。
　ト閑心の膝へ凭れ、杯を出す。

閑心　ナニ、おれに助けてくれろか。
十内　坊さん、味だの〳〵。
月小　オヤ、女子は坊さんにさゝぬものかえ。
　トしなだれかゝるを、閑心、突き退け
閑心　エヽ、甘口な。その手ぢや行かねえ。
月小　エ。
閑心　黴の生えた色事仕掛けで、巧く乘つたところへ、鬼王がツイと出て、間男見附けた南無三方と、此方の仕事の手目を上げさせうとは、赤んべい。
月小　エヽ、惡推な事ばつかり。有やらは斯うぢやわいな。鬼王どのゝ女房になつて、間もないうちにお主の御難儀。長の年月苦勞のし通し、身貧な亭主が、嫌で〳〵ならぬところに、この間ちよつと逢うたその時から、どうやら面白さうなお前の氣心。
十内　牛に馬を乘り替へる氣か。
閑心　何を、口先ばかりで蕩したとても。
月小　まだかいなア。さう云はせまい爲、コレ、見やしやんせ。
　ト最前の名の書いた紙を出す。
閑心　なんだ、月小夜どのへ新左衞門。名の所へベッタリと、血の附いたこの紙は。
月小　最前騙してこちの人に、書かせて取つた自筆の名。
十内　ほんに、こりやア違ひない鬼王が手だ。
閑心　それがどうした。
月小　サア、この白紙の所へ、さら〳〵と三くだり半。この手に似たやうに、三くだり半書いて下さんせ。
十内　さうしてどうする。
月小　ハテ、名の所が自筆で、血判まで捺してあれば、退引きさせぬ離緣の證據。
閑心　成る程、さう云やアどうやら。
十内　一番智惠を振つたな。ドレ〳〵、おれがちよつと書いてやらう。
　トさら〳〵と書き、閑心に渡す。
閑心　なんだ……離緣狀の事、一つ、我れら勝手につき、其方離緣いたし候ふ上は、何方へ緣づくとも、我れら一言の申し分これなく候ふ、後日の爲依つて件の如し、月小夜どのへ新左工門。
月小　サア、それ取つて置いて、どうなとして下さんせ。
閑心　成る程、これぢやアおれも。
月小　疑ひ晴れたら、此方にも落ちつかさせて下さんせ。

ト　ぴつたりと寄り添ふ。
閑心　イヤ、まだ此方は落ちつかねえ。
月小　そりや又なぜにえ。
閑心　さうべつたりと濡れかけて、葛籠へ虜の箱王が身替りに、團三を立てゝくれろと云ふのか。
月小　エ、。
十内　底の底まで感がつくゆゑ
閑心　我れながら感ずる閑心坊。なんと黒星であらうが。
月小　エヽ、又かいなア。例へ鬼王どのと拵らへ事したところが、もう緣を切る氣になつて退いて見れば、曾我に由緣かゝりもないわたし。箱王どのゝ事は、どうなと勝手にしなさんせいな。
十内　エヽ、そんならアノ、ほんに箱王が事は。
月小　熨斗を附けて上げる程に、お前方の存分にしなさんせいなア。
閑心　さう云はれると張合ひ拔けがして、この葛籠の内の箱王も、殺し憎いといふところを
十内　いつそ爰でぶッ放し、鬼王めに鼻を明かせるがいゝ。
閑心　成る程、爰に出刃包丁でもねえか。
ト　立ち上がるを

月小　アヽ、モシ。
ト　兩人を門口へ連れて來り
滅多な事すると、蒲江さまが難儀。又その上に、御書の封印が破れると、曾我のお家へも祟りと、葛籠の内へも云ひ聞かせたゆゑ、ヂッと辛抱はして居れど、知つた通りの力强。
閑心　成る程、毛を吹いて疵を請けうより
月小　どこへなりと、連れて行て存分に。
閑心　そんなら、大事の箱王めに念も殘らず。
月小　エヽ、そウ、爰に置くからそんな事も聞く。十内さん早う葛籠を持つて行て下さんせ。
ト　月小夜、せり立てる。
十内　成る程、何がなしに、わしが稻毛どのゝ屋敷へ。
ト　十内、内へ入り、葛籠を重さうに脊負ひ、捨ぜりふにて門口へ出て
それぢやア本當に、あのお坊に。
月小　蓼喰ふ虫ぢやわいなア。
ト　門口をピッシャリ。
十内　イヤ、呆れたものだ。
ト　時の鐘にて、一散に向うへ入る。

閑心　月小夜、忝ない〳〵。おれも今ので心がさつぱり。
月小　疑ひ晴れたら、又これから。
閑心　マア、固めにちよつと。
　ト引寄せ、割り込まうとする所へ、鬼王、探り〳〵丁
　度眞中へ出て、引分ける。兩人恟りして
月小　ヤアお前は。
閑心　鬼王。
鬼王　ムウ。さう云ふ聲は閑心どの。月小夜、約束の事は
　どうぢや。お頼み申したか。
月小　約束の事を頼んだかとはえ。
鬼王　ハテ、あれ程最前云ひ合せて、ソレ、箱王どのゝお
　身の上の事。
月小　ハテナア、箱王どのゝ事とは、なんでござんしたか、
　とツとモウ、わしや物覺えが惡うて。
鬼王　コレ〳〵、そりや何云やる。忘れたと云うては濟ま
　ぬわい。
　ト考へて
　ハヽア、こりや何か。まだ折が惡さに、云ひ出さぬのか。
月小　なんのマア。折が惡いの善いのと、わたしやほんま
　に忘れて知らぬぞえ。
鬼王　コリヤヤイ、冗談も時に依るわい。おりやモウ、氣
　が氣ではないに、わりや又、酒を呑んで、しだらがない
　な。
月小　しだらがなけりや、どうするえ。
鬼王　わりやア、そりやほんまに云ふのぢやな。
　ト探り寄り、胸倉を取つて
　コレ、おりや氣が急いてイラ〳〵する。どう云ふ事で、
　サア、その譯を云へ〳〵。
　ト振り廻すを、閑心、中を押し分け
閑心　オツと、この女を、そんなにこづき廻してもらふま
　い。もう月小夜は、われが女房ぢやねえぞ。
鬼王　ナニ、月小夜を鬼王が女房でないとは。
閑心　オヽ、去つたと云ふ三くだり半。疾におれが手に入
　つて居るワ。
鬼王　ヤヽ、そりやいつ書いた。
月小　サア、最前見捨てぬと云ふ一札ぢやと、名ばかり書
　かせて取つた紙
閑心　去り狀の文言、しつかりと書き入れさせたりや、名
　書きは自筆、どこへ出しても。
　ト去り狀を鬼王の顏へヒラつかせる。

月小　お前の云ひ分は立たぬわいなア。
鬼王　ムウ。すりや鳥眼で書かぬを合點で、無理に名書きをさせたのも、身共と緣を切らう爲ぢやな。
月小　アイ、假名で云へば、お前が嫌で
閑心　和尙樣へ宗旨變へよ。
鬼王　ムウ。
ト思ひ入れ。
月小　また嫌ぢやと思へば、急に嫌になつたわいな。また嫌にもなりさうなもの。わたしも女子の端ぢやもの、明日をも知れぬが人の命。身貧な上に苦勞して、お主ぢやの忠義ぢやのと、アタ面倒な事だらけ。繋がつて居りや見捨てはならず、今までは辛抱もしましたが、モウ〳〵ふつ〳〵と嫌になりました。長い浮世に短い命。ちよつとは氣儘もせにやならぬわいなア。
鬼王　エヽ、おのれはなア……イヤ、云ふまい。愚痴も云はぬ。閑心どの、月小夜はこなたに遣ります程に、どうぞその代り、鬼王が一つの願ひ。箱王どのゝ今日の御難儀。烏を鷺、雪を墨も、面體知つた檢使の貴殿の、心一つでそれになる。何卒弟團三が首を身替りに立て、箱王どのをお助け申して下さい。この儀ばかりは折入つて。
閑心　エヽ、やかましいわえ。身替り立てるも立てないももう箱王めは爰には居ないワ。
鬼王　ヤヽ、なんと。
月小　そんな事が面倒さに、主とぐるの十內どの、葛籠ごと脊負つて
閑心　稻毛の屋敷へやつてしまつた。
月小　ヤア〳〵、そりや誠か定か。
ト愕り、そこら探り廻る。バタ〳〵にて向うより團三、走り出て來り、直ぐに內へ入り
團三　ヤヽ、こりや兄貴、何をうろたへて。
鬼王　何をどころか、大切な箱王さまを、稻毛の屋敷へやつたとあるが、誠か嘘か、葛籠の在所。
團三　ヤヽ、そりや大事ぢや。
ト暖簾口へ駈け込んだり、いろ〳〵尋ねて
虜にした箱王どの。閑心が側にある筈の、葛籠は內には見えませぬ。
鬼王　さてはいよ〳〵お身の上。後追ひかけて死物狂ひ。必らずともに、奪ひ返して。
團三　心得ました。
ト身拵らへする。

閑心　うぬをやつちやア。

ト留めようとする。立廻りに閑心、去り狀を落す。鬼王、こけながら探り取り

鬼王　コリヤ〳〵團三、こりや離緣狀か、讀んでくれ。

ト渡す。團三、見て

團三　如何にも去り狀。三くだり半。

鬼王　オヽ、それ聞いたらもうよい。早う行け。

團三　合點ぢや。

ト時の鐘にて、門口へ出る。下手より平馬、飛んで出で

平馬　團三、うぬを。

トかゝるを

團三　なにを。

ト立廻り、ちよつと當て、一散に向うへ入る。平馬、心附き、後追ひかけて向うへ入る。

鬼王　ムウ。

ト口惜しきこなしにて、去り狀を引裂く。

閑心　ヤア、大事の去り狀破つた鬼王、生けて置いちやア。

ト鬼王が差して居る刀を拔かうとするを、鬼王、その手を拂つて

鬼王　不義者めら、そこに居りや、此方から。

ト拔いて滅多切り振り廻す。閑心、月小夜、逃げ廻り、月小夜、行燈を吹き消す。これより忍び三重になり、危ふき立廻りあつて、閑心、月小夜、門口へ出て窺ひ居る。鬼王、そこら尋ね廻る。此うち奧より三郎、手燭と十手を持ち出て來る。鬼王は閑心と思ひ、切つてかゝり、手燭を打ち落す。

三郎　コリヤ鬼王、稻毛の三郎を何とする。

トこれにて鬼王、恟り下に居て

鬼王　すりや、二人の奴等は。

ト此うち閑心、頰かむりして、月小夜が手を取り

閑心　大べら坊め。

ト一散に向うへ入る。

鬼王　あの聲は。

ト行かうとする。三郎、十手を振り上げ

三郎　動くな。

ト鬼王、ヂツと思ひ入れ。木の頭。鬼王、三郎、こなしよろしく。

ト禪のツトメのツナギにて、直ぐに引返す。　拍子幕

本舞臺、三間の間、うしろ黑幕、前に玉椿の卒塔婆垣、所々に石塔、上の方、柳の立ち木、同じく吊り枝。上手に浪板、葭生ひ茂り、流れ灌頂、誂らへの卒塔婆、白張り提灯立て、下手に高臺寺墓所と書いたる榜示杭。誂らへの蓮臺など取散らし、爰に彌藏九助、寺の穴掘にて居る。木魚入りの合ひ方。時の鐘にて幕明く。

ト直ぐに舞臺端下手へ、穴を掘る事よろしくあつて

彌藏　なんと九助、夜の白明けに持つて來ると云つた佛、夜更けさふけに、とんだ目に遭ふやつサ。

九助　併し、あの施主めは、間に合せぬとやかましい。夜の口にやらかすべい。

彌藏　シタガ、おらが寺でも、爰へ埋められる佛は仕合せだ。晝は見晴らしで海も見える。

九助　水が欲しけりや、墓所へ汐のさし込む堀もあり

彌藏　江戸で云はうなら、深川の寺と云ふこんだ。

九助　さうサ、佛も肴が食へるなら、幽靈が出釣りをするだらう。

彌藏　おきやアがれ。

ト矢張り穴を掘つて居る所へ、バタ〳〵にて向うより閑心、頰かむり、月小夜も手拭かむり、手を引かれ、直ぐに本舞臺へ來る。兩人見附けて

九助　ヤア、この夜更けに女と男。

彌藏　こりやア墓所で心中だな。

閑心　ア、コレ、べら坊め、おれだワ。

ト兩人、透かし見て

彌藏　閑心坊ぢやねえか。

九助　どこからか巧いお布施をせしめて來たな。

閑心　オ、サ、九助、彌藏、てめえ達に頼みがある。コレ。

ト兩人へ囁く。

彌藏　すりやアノ。

閑心　コレサ、何も云はずに早く行きやれ。

彌藏　合點だ。九助。

九助　彌藏、來やれ。

ト始終、地の合ひ方にて、兩人向うへ走り入る。

閑心　ヤレ〳〵、鬼王めが腹立ちの滅多切り。とんだ目に遭はうとした。マア〳〵、これまで逃げて來りやア氣遣ひない。

月小　爰はマア、どこでござんすえ。

閑心　爰は高臺寺の海手の墓所。
月小　そりや氣味の惡い所でござんすなア。
閑心　ナニ、坊主に墓所は付き物だ。ドレ〳〵、マア、一服のんでから。
　ト倒れて居る石塔へ腰をかける。月小夜、側へ寄り
月小　ほんに、夜と云ひ海風で、きつう寒い事ではある。
閑心　爰は氣味を惡がつても、誰れも來る氣遣ひはない。今に湯灌場へでも引摺り込んで、肌と肌で暖めてやるワ。
月小　それまでも、コレ見やんせ。手先が金凍り。爰でちやつと暖めて。
　ト閑心が左の袖へ手を入れる。
閑心　エヽ、うまくするな。
月小　なにを。こんな事せう爲に、緣を切つて來たぢやないかいなア。
　トぐつと手を突ッ込む。
閑心　エヽ、こそぐつたいわい。
月小　こりやお前、わたしとこなさんの仲のやうな事ぢやわいな。
閑心　間男の子か。畜生め。
　ト月小夜、此うち閑心が二の腕を探り
月小　お前、この二の腕の疵は、どうした事で附けさんしたえ。
閑心　イヤサ、こりやア。
月小　これ程にするわたしに矢ッ張りなに隱すものか。心底見えた上は、云つて聞かせる
閑心　が、こりやアいつぞや箱根東福寺の客殿で、暗がりでぶッかけられた。
月小　ムウ。そんならお前、神妙劍の一卷を
閑心　成る程盜んで
　ト懷よりちよつと出し
　爰に持つて居るワ。
月小　わたしや、どうぞそれが
閑心　欲しくば遣りもしようが、マア、なんでもちよつと極めた上で
　ト引寄せる。
月小　ア、モシ、マアそれよりは。
　ト云ふを構はず引寄せるはずみに、月小夜が袖引き切る。閑心、袖の裏を見て
閑心　ヤヽ、何やら袖に。
月小　ア、コレ。

ト取らうとする。立廻りに月小夜をちよつと當て、月影に透かし見て

閑心　ナニ〳〵。妾こと神妙劍の盜賊

トこれにて月小夜を見て

そりやこそな……神妙劍の盜賊詮議の爲に、辻君とまで心を盡し候ふところ、今日計らずも箱王さまのお身の上團三どのをお身替りと、仰せられ候へども、身替り喰はぬと眉間の投げ打ち、神妙劍の一卷も、閑心坊が……そりやこそ〳〵……閑心坊が所爲と推し候ふまゝ、彼れが心に從ひ候ふやうに見せ、一卷も取戻したく、それまでこの事を明かし申さず候へば、お腹立たせお手にかゝり、團三どのゝ代り箱王どのゝお身替りと覺悟を極め候ふ。死後にお役に立てられ候ふやう願ひ上げ候ふ……鬼王どのへ月小夜……てつきりおれも、こんな事であらうと思つた。

ト此うち月小夜、心附き

月小　ヤア、それ見られたら、モウ。

ト隱し持ちたる懷劍にて、突いてかゝる。

閑心　何を小癪な。

ト懷劍を叩き落し、月小夜を引ッ捉へ

エヽ、うぬア和尚樣を、うま〳〵一杯やりやアがつたな。うぬ、どうしてくれべいか……よい〳〵、ふん縛つて置いて。

ト連臺に附いてある荒繩にて、ぐる〳〵卷きにする。

月小　ア、コレ、情ない。

閑心　やかましいわえ……口を叩かぬやうに

ト手拭にて轡を嵌め、繩の端を柳の立ち木へ括りつけ

サア、これから叩き殺すぞ

ト縫ひぐるみを振り上げ

イヤ、殺すまでも樂しんでから。

ト押しこかさうとする。禪のツトメになり、向うより彌藏、九助、兩人にて、鬼王を引ッ擔ぎ出て、花道に下ろし、ちよつと立廻つて

鬼王　コリヤ、其方ども、某を何とする。

彌藏　オヽ、何かにつけて邪魔な鬼王。

九助　閑心坊に賴まれて、うぬを海手へ連れて行き

彌藏　沈めにかける。覺悟なせ。

鬼王　その閑心坊に直に逢うて、聞かにやアならぬ事がある。どうぞお坊に逢はせてくれ。

兩人　それよりやア、マアうぬを。

ト三人、立廻りながら、舞臺へ來る。閑心坊、見て

閑心　ヤ、、わいらは其奴を連れて來たのか。

彌藏　海手へ行くにも手強い鬼王。

九助　思はず知らずツイ爰まで。

閑心　エ、、役に立たずめ。

鬼王　ヤ、、さう云ふ聲は閑心どのか。

閑心　惡い所へ新左衞門。

鬼王　ア、、コレ〳〵、最前は心得違ひで手向ひしたが、もう手向ひは仕りませぬ。こなたに逢うて、聞かにやアならぬ譯があるゆゑ。

閑心　聞く事があるなら、云つても聞かせうが、マア、われが女房を樂しんで。

ト月小夜へ割り込まうとする。彌藏、九助、月小夜が縛られたを見て

彌藏　ヤ、お坊はあの女を。

閑心　ア、コレ……彌藏、九助、わいら、方丈に酒があるだらう、取つて來てくれ。其うちおらア、月小夜を樂しむワ。

彌九　こいつは、氣が惡いぜ〳〵。

閑心　無駄を云はずと早く行きやれ。

彌藏　ナニ行け。

九助　とんだ和じるしだ。

ト兩人、下座へ入る。此うち始終一つ鉦。

鬼王　サ、、閑心どの、どうぞ其方に。

閑心　やかましいわえ……コレ、月小夜、嬉しがつて身悶えせずと、鬼王だが物を云はないか。物は云はれぬ……新左衞門、口惜しいか。

鬼王　イヤ〳〵、其やうな事に頓着はしませぬ。どうぞこなたに。

ト閑心、見て

閑心　ムウ、さうだつけ。わりやア鳥眼で目が無かつたけな。

鬼王　イヤモウ、これに困ります。

閑心　オ、、云ふ事があるなら聞いてやらうが、爰ぢやア差合ひだ。

ト下手へ來り

オイ〳〵、爰だ〳〵。

ト手を叩く。

鬼王　オイ〳〵。其方か……なんでもこなたに折入つて。

ト下の方へ行く。閑心、穴の向う上手へ廻り

閑心　オイ、其方ぢやアねえ。爰だ／＼。
ト手を叩く。
鬼王　ハテ、目の悪い者を焦らさずと
ト閑心の側へ行かうとして、以前の穴へポンと落ちる
ヤ、これは。
閑心　地獄落しにかけたものよ。
ト蓮臺を取つて來り、葬禮のやうにして、その上に塚石を乘せて置く。鬼王、片身出て居て
鬼王　どうする。なんとするのだ。
閑心　オヽ、そりやア死人を埋める穴だ。われを生きながら土葬にするのだ。併し、坊主の役だ。引導渡してやらう。
トそこらにある石ころを取つて來り
如是畜生發菩提心、往生安樂、南無妙法蓮陀佛。
ト鬼王の頭を石にて打ち割る。血流れる。閑心キツと見得。これより一つ鉦早める。鬼王、口惜しき思ひ入れにて
鬼王　エヽ、情ない閑心どの。手向ひはせぬと云うて置いたに、それもこれも取措いて、最前團三に逢うて様子を聞けば、稲毛どのゝお屋敷へは行かぬとの事ゆゑ、團三も外を尋ねて居る。この事を知つた者はこなたばかり。どうぞ箱王どのゝお行くへを。
ト此うち閑心、足にて鬼王に土をかける事などあつて柳の木の縄を解き、月小夜を前に連れて出る。月小夜、いろ／＼跪くを引据ゑ
閑心　べら坊め、そんな事にかゝつて居る隙にやア、われが女房を樂しむ。わりやア目が見えなんだな。そこで聲でも聞け。おらア箱王が行くへは知らねえワ。
鬼王　すりや、これ程に頼んでも。
閑心　おらア云ふ氣だが、月小夜が云ふなとよ。
ト月小夜、跪く。
鬼王　エヽ、おのれはなア。
閑心　なんだ、鬼王を打て。可哀さうに、意趣も遺恨もねえ者が、なに打たれるものか。アレ、手を引き添へて、よせよ。アレ／＼。
ト鬼王を縫ひぐるみにて打ち、月小夜と兩方を打つ。日覆より烏出て、所々にて鷄笛。閑心、構はず打ち据ゑる。これにて月小夜、縄解ける。
いつその事打ち殺して。
ト押しにした石を取る。月小夜、突きこかす。其まゝ

閑心、倒れる。月小夜、蓮臺を取りのけ、書置の袖を
持つて

月小　こちの人、これ見て下さんせ。

ト鬼王、月の見えるこなしにて

鬼王　わりやア女房。

ト穴より飛び上がり、月小夜に切つてかゝる。月小夜、
袖を口に咬へ立廻りに、上手の流れ灌頂の側へ逃げ
る。鬼王、及び腰に月小夜が首ポンと切る。袖を咬へ
たまゝ、流れ灌頂の内へツル／＼と落ちる。此うち月
小夜、懐の密書を落す。

閑心　ヤ、わりやア目が見えるな。

ト愕りする。

鬼王　ヤ。

ト鬼王、思ひ入れ。

閑心　目が見えたらば。

ト月小夜が落した懐劍にて打つてかゝる。閑心を見事
に投げ

鬼王　目が見えたらば百人力だ。

ト刀を啣へ、尻をからげる。知らせあつて、正面の黑
幕を切つて落す。向う打抜き一面の海の景色。中二階
へ朝日少しづゝ昇りかける。浪の音。

サア、閑心坊、箱王どのゝお行くへを、云はずば云はぬ
までの事。神妙劍の一巻は、われが所持して居やうがな

閑心　イヤ、知らねえ、覺えはねえ。

鬼王　なんと。

ト立廻りに、落しある密書を、鬼王拾ふ。閑心、それ
なとかゝるを、ちよつと當て

こりやコレ、月小夜めに渡し置きたる……ナニ／＼「先
達てより箱根山にて、我れら盜み出し肌身離さず所持せ
し神妙劍の一巻差上げ候ふ間、身分お取立て願ひ上げ候
ふ、祐経さまへ閑心。」

ト讀み、思ひ入れ。此うち閑心、起き上がり

閑心　それを。

ト取りにかゝる。此うち後へ彌藏九助、出て窺ひ居る。

鬼王　サア、斯う云ふ證據が出る上は、一巻渡して覺悟な
せ。

閑心　面倒な。ソレ。

彌九　合點だ。

ト繩のツトメになり、蓮臺にて、梯子取りのやうな仕
打ちにてかゝる。立廻りにて兩人は穴の中へポン／＼

と嵌まる。鬼王、閑心、立廻りあつてキツとなる。バタバタにて、十内、一通を持つて走り來り

十内　ヤ、鬼王どのか。

鬼王　十内、うぬも。

ト行かうとする。閑心、留める。立廻りいろ〳〵あつてとまる。十内、こなしあつて

十内　待つた。早まるまい。箱王どのは御無事でござるぞ。

鬼王　ヤ、、なんと。

十内　團三どのに途中で逢ひ、此方の心底明かした上、こなたの疑ひ晴らさん爲、箱王どのゝ自筆の狀。

ト鬼王、閑心、立廻つてとまる。十内、狀を廣げ見せる。

鬼王　誠に、箱王どのゝ直筆の御狀。

十内　秋野の摺つたる狩衣も、箱王どのへ。

鬼王　ムウ、合點のゆかぬ。斯程まで曾我へ心を運ぶ其許は。

十内　明かして見れば御家來。葛籠を持つて駈け出したも箱王どのを助けん爲。諸事に足らはぬ某は、赤澤十内でござるわい。

鬼王　すりや、十内どのにてありしよな。猶この上は箱王どのを

十内　祐兼さまの隱れ家へ

鬼王　團三を供に

十内　心得ました。

ト行かうとするを。

閑心　うぬをやつちやア。

トおこづくを、鬼王、押へ

鬼王　後構はずと、ちつとも早く。

十内　合點だ。

ト向うへ走り入る。此うち兩人、穴より上がる。

鬼王　サア、この上は一卷を、キリ〳〵此方へ渡せ。

閑心　何を小癪な。

トこれより彌藏、九助、鋤鍬にて打つてかゝる。誂らへのタテの鳴り物にて、閑心、當てられ、上手へ倒れる。これより鬼王、兩人を相手に、花々しく立廻り、十分あつて、閑心起き上がり、又かゝる。立廻りに一卷を懷より落す。鬼王、取つて

鬼王　こりやコレ、神妙劍の一卷。

閑心　それを。

トかゝる。また立廻り、兩人もヒヨロ〳〵しながら、

鬼王にかぢりつく。鬼王、閑心の腰へグッと突ッ込む。ドロ〱にて燒酎の火燃ゆる。卒塔婆、仕掛けにて前へこける。流れ灌頂の中より、月小夜が首、卒塔婆へ乘り、舞臺前へ出る。彌藏、九助、見て

彌九　ヤア、あの首は。

鬼王　四つ足同然。

トこれにて、兩人をポン〱と見事に切る。閑心に止めを刺す。木の頭。鬼王、閑心の上に乘りかゝり

畜生め。

ト止めを刺しながら、首を見て思ひ入れ。キザミにて

幕

一番目六建目　鴫立澤の場

役名――曾我の箱王丸。臼井權八。雲助、治藏。同、新。同、吉。同、孫。同。千。同、松。同、熊。同、虎。鳥取郡治。岩淵平馬。幡隨長兵衞。

本舞臺、向う一面の黒幕、松原。上の方、稻村、この道具よろしく、爰に新、吉、孫、千、松、治藏、雲助にて焚火にあたり、何個を摑んで居る。時の鐘、馬士唄にて幕明く。

治藏　どうだ〱。この小磯の化け治藏が手並を見たか。皆云ひ分はあるまいが。

ト皆々の錢を攫ひ取る。

松　いま〱しい。この並木の松をば眞裸にしをつた。

千　イヤ又、雲助の商賣ほど、有り難いものはない。內と錢がないばかり。

吉　それよ。どいつどなたに氣兼ねもせず、寒けりやア行く先で松葉の焚火。

孫　體は暖まつたが、治藏に取られたで、內證は冷たい一文無し。

千　どうぞ一つ剝いてやりたいものだ。

ト皆々焚火にあたつて居る。矢張り馬士唄にて、花道より熊、虎、雲助にて、四つ手駕籠を舁き、小田原宿と書いたる提灯をつけて出る。東の口より同じく駕籠一挺、平塚宿と書いたる宿提灯を灯し、雲助駕籠を舁き出る。双方の駕籠、本舞臺へ來り行き合ひ、一時に杖を立てる。治藏、前へ出て双方の駕籠を見て

治藏　こりやア平塚も小田原も大儀だな。

熊　オヽ、いま梶原どのゝ飛脚荷が來るわえ。

松　そりやアいゝわえ。平塚の方は何もないか。

雲一　秩父どのゝ女中の上りに逢うたが、大方川手前で泊るさうだ。

虎　さう云ふは平塚の權か。こりやア藤澤までござるお客だが、なんと替へぬか。

雲二　其方の客人は。

虎　マア、藤澤までだが、相談次第で後も出來やう。

熊　丁度いゝ替へものだが。

治藏　いゝワ、旦那方におれが口をきいてやるべい。だが、てまへのお客は。

虎　お若衆さんよ。

治藏　そして、てまへのは。

雲一　矢ツ張りお若衆さんよ。

治藏　ハテ、似た事があるものだ。お若衆さんなら話しがしよい。

ト上の駕籠の際へ來り

ハイ、御免なされませ。

ト駕籠の垂れを上げる。箱王、着流し、熨斗目を着、駕籠に乘つて居る。

モシ旦那、御面倒ではござりませうが、爰で駕籠を替へますと、わしらも大きに助かりまする。どうでお極めなされた所も丁度同じ所。双方ともによろしうござります。

トよろしく頼む。

箱王　ムウ、極め所へさへやれば苦しうない。替へてやらう。

ト駕籠の垂れを下ろす。

治藏　サア、此方は承知だが。

虎　兩方御得心の行くやうに、とてもの事に。

治藏　よい〳〵。おれに任せて置け〳〵。

ト捨ぜりふにて又、下の方の駕籠の際へ行き

旦那、モシ、ちつとお願ひがござりまする。

ト此うち下の方の駕籠の垂れを上げ、權八、黑の着付けにて皆々を見て

權八　駕籠をやらぬが、どう致すのぢや。

治藏　イヤ、丁度よい替へ駕籠がござりまする。どうぞお召替へなされて下さりませぬか。

權八　替へてやらう。早く致せ。履き物を早く。

ト垂れを下ろす。

治藏　ハイ〳〵……兩方ともに相談が出來た。こんな仕合

せな替へ物もないものだ。

ト此うち、皆々捨ぜりふにて、駕籠舁き兩人へ履き物を直すと、下の駕籠より權八、頬かむりをしながら、大小を差し、ズッと出て後向きに空を詠めて居る。上の駕籠より箱王丸、程よく下の方の駕籠の際へ行き

箱王　駕籠はどれに乘るのぢや。

熊　ハイ／＼、これでござりまする。

ト箱王、下の方の駕籠に乘り替へる。直ぐに垂れを下ろす。此うち權八も上の方の駕籠に乘り移る。直ぐに垂れを下ろす。權八、顔を出し

權八　早く行かぬか。

四人　ハイ／＼、畏まりました。ヤットナ。

ト一時に駕籠を舁き上げる。

千　みんな替へが出來たな。

松　しつかりと精を出せ。

四人　歸りに逢ふべい。

ト馬子唄にて、兩人の駕籠、元の方へ引返し入る。直ぐに花道より平馬、二幕目の侍ひにて、組子二人連れ出て來る。東の花道より鳥取郡治、序幕の侍ひにて、同じく組子二人連れ、双方とも直ぐに本舞臺へ來り

平馬　コリヤ／＼、雲助ども、只今この道へ、色白な武家の角前髪はうせなんだか。

皆々　成る程、そんな奴が參りました。

治藏　今爰で駕籠を乘り替へて行きましたが、二人ながら前髪。なんでも怪しい奴でござりました。

郡治　コリヤ／＼、その前髪の侍ひ、此方も詮議いたし居るが、そりや何方へ參つた。その道筋を早く申せ。

平馬　ア、コレ／＼、お侍ひ、その前髪を詮議いたす身共。それをまんがちにお云やる其許は。

郡治　身共ことは、因幡の領主鳳元の家來、鳥取郡治と申す者。即ち家中白井權八と申す者、この程箱根に於て、朋輩本庄助太夫を手にかけ、身は罪に服せしゆゑ、網乘り物にて本國へ召連れんと、畑野の泊りに一宿の夜、警固の武士を殺害なし、その夜逐電。さすれば遺恨と見えしも惡事の企み、捨て置かれず、召捕りに向ひましてござる。

平馬　すりや、貴公のお尋ねなさるゝは、因幡の陪臣白井權八とな。

郡治　如何にも。して、其許の御詮議なさるゝは。

平馬　箱根を下山なしたる曾我の箱王、兼ねて權現へ納め

ありしところの、神妙劍の一巻、先つ頃盗み取つて立去りし大罪。詮議いたせしところ、家來鬼王匿まひ置きしを見出し、退引きさせず、首討ち渡す契約のところ、又又出奔……コリヤ〳〵、雲助どもが手には合はねど、箱王を其方どもが、召捕つて差出さば、褒美は取らす。頼んだぞ。

皆々　すりや、曾我の箱王を御詮議のお方とな。

郡治　此方の權八事も、申さば廣元の家來、家中にかゝる邪まあるも主君の恥辱……コリヤ〳〵、其方ども、密かに搦め捕つてくれうならば、莫大の褒美をくれる。

松　ムウ。すりやその權八とやらを搦め出せば、大枚の御褒美。

千　箱王とやらめもふん縛れば、これも骨折り賃。

皆々　して、その目印は。

郡治　只今も申す眼中鋭き大前髮。

平馬　箱王とてもその通り、人目を忍べば同じ風體。

新　その二人の若衆めは、たつた今爰で、駕籠を乗り替へて行きました。

平馬　すりや、この所にて東西へ。

吉　一人は下り。一人は上りの上方筋。

孫　兩方ともに前髮だち。

郡治　どちらなりとも其方達、後追ひかけて

平馬　詮議を頼む。

千　二つ取りなら褒美の方。

松　そんならおいらは箱王とやらが

新　そんなら後を追ひかけて。

吉　して、お前方は。

平馬　一息ついて

郡治　後より直さま。

新　さう云ふ事ならちつとも早く。

吉　權八とやら

松　箱王めも

皆々　慥かにこの道。さうだ。

ト時の鐘にて、新、吉、孫は本花道。千、松、治藏は東の花道へ別れ、逸散に入る。郡治、平馬、捨ぜりふにて向うを見送る。時の鐘にて、よろしく道具ぶん廻す。

本舞臺、一面の淺黄幕、正面大稻村。上の方より舞臺前に浪打ち際。葭生ひ茂りし體。この道具誂らへ

の通り。下の方に鴫立澤といふ榜示杭。爰に以前の
駕籠、矢張り小田原提灯を提げ、熊、虎、雲助杖を
突いて居る。駕籠の垂れを上げて箱王、乘つて居る
靜かな禪のツトメにて道具とまる。

箱王　コレ／＼駕籠の者、ちつとも早くこの駕籠を、後へ
戻してくれ。

熊　モシ／＼、わしどもは小田原へ早く歸りたいから、
駕籠を替へて來たのだ。爰はもう鴫立澤の、仕置場でご
ざりやす。

虎　後に御用があるなら、今度の次になされませ。

箱王　イヤサ、大抵の儀ならば、戻つてくれと申さぬが、
平塚から乘つて參つた駕籠に、大切な品を入れ置いた程
に、どうぞ大儀ではあらうが、最前の駕籠に追ひつくや
うに。

熊　ヘイ、そんならなんと仰しやります。平塚の駕籠に
包みを忘れさつしやつたゆゑ

虎　歸つてくれろと云つたとて、夜更けさふけに途方も
ない。

箱王　イヤサ、骨は盜まぬ。賃錢は如何程なりとも遣はさ
う程に。

熊　イエ／＼、幾らになつても、夜の仕事は、否でござ
りまする。

箱王　ハテ、さう申さずと、右の仕儀ゆゑ。

虎　エヽ、しつこい。馬鹿な若衆だ。

箱王　なんと申す。
トむつとして又氣を替へ
然らばよい／＼。駕籠を下ろせ。
トこれにて兩人、駕籠を下ろす。
その履き物を。
ト兩人、履き物を直す。箱王、駕籠より出で
これまでの駕籠代は、以前の者へは遣はし置いたれば、
申し分はあるまい。

熊　さう云はつしやるは、私しどもが行かぬゆゑ。

箱王　オヽ、いつまで事を頼まんより、自身に參つて取戻
す……さらば。
ト花道の方へ行きかける。此うち後へ新、吉、孫、そ
の外雲助大勢出かゝり

皆々　やる事はならねえ／＼。
トやかましく云つて立ち塞がる。

箱王　なんと。

ト透かし見て

新　ムウ。わいらは後の松原にて、見請けたる雲助ども。身共をやる事ならぬとは。

吉　たつた今お役人様が、おいらに云ひつけ、ふん縛れと、手分けをしての詮議最中。

孫　オヽさうだ。因幡の家中で朋輩の、助太夫とやらを殺した上網乘り物を踏み破り、宿屋から逐電した、大罪人のお尋ね者。

新　その前髪を目印に

吉　何もかも聞いて來た。これがお尋ね者の

皆々　權八だ〳〵。

ト　わや〳〵云ふ。

箱王　待て〳〵……廣い世界に同じ風體、同じ前髪ありし者、數多しと知らぬうつけ者。身はその權八とやらではない程に、道を明けて通せ。

新　イヤならねえ。權八でなくば

皆々　但しは曾我の箱王か。

箱王　なんと。

ト　ぎつくり思ひ入れ。新、前へ出て

新　モシ〳〵、お若衆さんえ。さうどぎつく云ふものぢやねえ。箱根山に納まつた、神妙劒とやらを盜んで逃げたと鎌倉より

吉　嚴しいお觸れ。

孫　根掘り葉掘り聞いて來た。

新　どの道遁がれぬ二人の前髪。

吉　行く所まで、おいらと一緒に。

ト　兩方より箱王にかゝる。

箱王　すりや、どうあつても。

皆々　金儲けにするのだ。ぶツちめろ〳〵。

ト　禪のツトメになり、皆々思ひ〳〵の物を持ち、箱王に打つてかゝると、箱王、一腰を拔き、よろしく切り廻る。此うち向うより長兵衞、誂らへの半合羽、一本差し、旅の形、菅笠と小田原提灯を持ち出で來り、花道にてこの體を覗ひ、身構へして舞臺へ來る。此うち箱王、皆々を切り倒す。長兵衞、下に居てこれを留め心得、切つてかゝる。爰にて箱王、長兵衞を雲助と

長兵　ヤレ待たつせえ。わしやア通りかゝりの旅人だよ。

箱王　ヤア、闇に事よせ誑るとも、我れを害せん徒黨の曲者。

長兵　コレサ、意趣遺恨もねえ通りかゝりの者が、ナニこなさんに敵たふものか。出合ひ頭の難儀と見て、ちよつと聲をかけて進ぜたのだ。早まらつしやるな。マア〳〵待たしやい。

箱王　ムウ、誠に其許は往來の旅人。

トこの時、知らせあつて月出る。箱王、長兵衞を見て

長兵　見ますれば、未だ若輩なお若衆樣。

箱王　氣の急く儘に思はぬ麁相、免し召されい。

長兵　なにサ、闇に礫は逃げればよいに、怖いと知らぬ向う見ず。まだお若いにお手の内、誠に武士は違つたものだ……併し、もう爰には向ふ奴は、壹疋も居りませぬ。そのお刀は、マア、お納めなされませ。

ト箱王、思ひ入れあつて

箱王　ムウ、降りかゝつたる途中の難儀、止む事を得ずこの場の仕儀も、計り知られぬ人心。口外されては願ひの妨げ。

トきつとなる。

長兵　下郎は口のさがないと、町人だけにお疑ひなら、そりやアお氣遣ひなされまするな。云はぬといふ證據は。

ト長兵衞、脇差を引拔き、うごめいて居る雲助にグッと止めを止して、脇差を拭ひ

この事が知れたら、わしも同類人殺し。

箱王　ハテ、武士も及ばぬ、男氣もあるものぢやなア。

ト感心の思ひ入れにて、刀を納めると、浪の音、ドロドロになり、寢鳥、誂らへの合ひ方になり、葭原に燒酎火燃え、この間より月小夜が首、卒塔婆に乘り、舞臺前に流れて出る。兩人これを見て

長兵　ヤア、モシ〳〵、とんだ事だ。女の首が流れて來ました。

箱王　誠に、卒塔婆を浮木に生々しき首。

ト立寄り、刀の鞘にて搔き寄せ、首を取つて

ヤ、、こりやコレ家來鬼王が妻。如何いたして手にかゝりしか。

長兵　エ、、そんならその首はお知り人かえ……モシ、その上、何やら口に啣へて居りますぞえ。

箱王　如何にも。袖かあらぬか血汐の衣。仔細ぞあらん。

ト啣へて居る袖を取つて

誠にこりや女子の袖。その上何やら書き記せしは

ト見る。長兵衞思ひ入れ。

ナニ〳〵「妾こと神妙劍の盜賊詮議の爲に、辻君とまで

心を盡し候ふところ、今日計らずも箱王どのゝお身の上、團三どのをお身替りと思ひ立たれ候へども、身替り喰はぬと眉間の投打ち、神妙劍の一卷も、閑心坊が所爲と推し候ふまゝ、彼れが心に從ひ候ふやうに見せ、一卷も取戻したく、それまでこの事を明かし申さず候へば、お腹立たせお手にかゝり、團三どのに代り、箱王どのゝお身替りと覺悟を極め候ふも、死後にお役に立てられ候ふやう願ひ上げ參らせ候ふ、鬼王どのへ、月小夜。」

長兵　エヽ、そんなら御家來の女房が、箱王どのゝお身替りと、切られたこの首で、聞かずと知れたお前のお名。

箱王　箱王丸が汚名を雪ぐ。

　ト首を引寄せ、とくと見て

志しは過分なぞよ。この死首へ墨を入れ、箱王丸が首となさば、一旦遁がるゝこの度の恩。家來とは思はぬ、過分なぞよ。

長兵　ムウ。すりやその身替りで明るくなるお前の御身。一旦汚名を雪ぐ上は、最早咎むる者もなし。

箱王　さりながら、最前駕籠にて付け替りしその包み。身共と同じ前髮振りゆゑ、後追ひ駈けて元々へ。

長兵　アイヤ、來る道々で雲助めが、前髮の旅人を締めると騷いで居たからは、まだごたついて居るに違ひはねえ、行く道が違ふなら、此わしが取替へて進ぜませう。

箱王　それは近頃忝ない。然らばこれを元々へ。

　ト淺黄袱紗の包みを渡す。長兵衞取つて

長兵　これを戻して、お前の包みを取つて來るうち、ちつとの間待ち合してござりませ。

箱王　この身の曇りも晴れ行けば、月小夜が最期も無駄ならず

長兵　緣も由緣も心なき、身にも哀れは鴫立澤。

箱王　流れ寄つたるこの場の出合ひ。

長兵　孝と操に

箱王　天晴れ男氣

長兵　變つた出合ひに

箱王　變つた包みも

長兵　これより直ぐに。

　トこの時後、大バタ／＼にて

大勢　ぶツちめろ／＼。

　トわや／＼云ふ。

長兵　ヤア、あの人聲は。

箱王　身共を取卷く徒黨の大勢。

初演當時の錦絵

五世松本幸四郎の長兵衛　七世市川團十郎箱王

トつか／＼と廻り臺へ乘り、奥を見込む。

長兵　モシ。

ト押へる。この見得にて、道具廻る。

本舞臺、一面の藪疊。眞中、松の大木。同じく釣り枝、鬚題目の石塔。爰に箱王と早替り權八にて、血刀を提げ、これを三階惣出、殘らず雲助にて取卷いて居る。矢張り禪のツトメにて道具とまる。

ト權八、皆々を切り殺し、刀を持つてキツとなる。これより木魚と巾の入りし合ひ方、凄き鳴り物にて、十分面白きタテあつて刀を納め

權八　行く先々にこの身の難儀。とは云へ日影のこの權八、いづくへなりとも立寄る方を。

ト傍へにある紫袱紗の包みを取つて

最前駕籠にて付け替りしこの包み。樣子ありげなこの一品。何はともあれ、取つて返して。

ト花道へ行きかける。此うち長兵衛、上手より提灯をつけて出で

長兵　お若いの。待たつしやりませ。

權八　待てとお止め召さるのは、手前が事かは存ぜねども、心急きにござれば。

トまた行きかける。

長兵　ハテ、お前の心急きと云はつしやるは、この包みの事でごんせう。

ト長兵衛、提灯を持ち、包みを見せる。權八、透かし見て、ツカ／＼と本舞臺へ戻り

權八　如何にも左樣。して、御自分樣には、何ゆゑあつてこの包みを。

長兵　最前フト鴫立澤で、雲助めらが狼藉の、始末を見兼ねて飛び込んだが、包みが變つたとある事ゆゑ、取替へて進ぜうと、來かゝつて見りやア爰にもはつばさつぱ。お前の包みを改めて、お受取りなされませ。

ト出す。權八、改めて見て

權八　如何にも、拙者が包みに相違ござらぬ。然らばこの包みをお渡し申す。お改めなされい。

ト紫の包みを出す。長兵衛受取り

長兵　イヤ、わしが物でないから、改めるには及ばねえが……最前から見ましたところが、若いお方のお手の內、餘り見事と感心いたしました。

ト此うち兩人、包みを腰に脊負ひ

權八　拳もにぶき生兵法、お恥かしう存じまする。

長兵　不躾ながら見ますれば、まだ御前髪のお侍ひ。お一人旅でござりまするか。

權八　仰せの通り某は、仔細ござつて吾妻路へ、中國筋より遙々と、暮れに及んでこの海道、一人旅とか侮つて、無法過言の雲助ども。彼奴等は正しく追ひ落し、命を取るも殺生と、存じたなれど付けあがり、刀の穢れと存ずれど、往來の人の爲にもと、かゝる仕合せ。益ない殺生いたしました。

長兵　大丈夫。切られた奴等は五六人。あなた樣には只お一人。御若年のお手際には、憚りながら驚ろき入りました。往來端に犬の餌食。

ト死骸を片付け、手を拭きながら

口外は致しませぬ。御安心なされまし。して、中國と仰しやりまするが、御生國はいづれで、何御用ござつて江戸表へ。

權八　サア、別して用事もござらねど、繼しき母の讒により、心に思はぬ不孝の罪。故郷は卽ち因州生れ。父の勘氣に力なく、お江戸は繁華と承り、武家奉公を致さんと、仕官の望みに習はぬ旅。見ますれば其許には、江戸表のお方と見え、御深切のそのお尋ね。知るべ便りもござらぬ拙者。お詞に甘へお賴み申す。何卒お世話下さらば、忝なう存じまする。

長兵　成る程、御身分の一通り、承つてお世話いたしますまいものでもござりませぬが、無法者とは云ひながら、五六人殺したからは、もしも難儀がかゝつたら、その時はどこまでも、わしが云ひ拔けて進ぜませう。

權八　アヽ、流石は江戸氣の其お詞。爪づく石も緣の端。力と賴む其許の、御家名聞かぬ其うちに、名乘る拙者が姓名は、因州の産にして、當時浪人、白井權八と申す者。

長兵　成る程、噂に聞いた白井權八さま。日蔭のお身なら猶の事、わしが一番匿まつて進ぜませう。

權八　ムウ。すりや由緣なき權八を。

長兵　人の難儀も我が事と、無性に請け込むお先者。なんであらうと江戸へござつて。

權八　シタガ、只今も承れば、慥か住所は江戸とやら。もしや其許は、兼ね〴〵世上で噂ある、通り者とやら達衆とやら、流石吾妻の花川戸、幡隨の長兵衞どのとやらではござらぬか。

長兵　成る程、長兵衞は長兵衞だが、その名の賣れた長兵

衛はわしがお親仁サ。わしやアなんにもならねえ二代目の長兵衛サ。洒落と云つちやア一口もねえ只の俠。シタガ有り難い事にやア、何れも樣の御贔屓で、こんな出合ひも今度で度々。親仁の眞似を間に合ひの、砂利か鉛か銀流し、見かけはけちな野郎だが、水道の水を呑んだお庇にやア氣が強え。弱い奴なら除けて通し、強い奴なら向う面、韋駄天が革羽織で、鬼鹿毛に乘つて來ても、ビクともするのぢやアごんしねえ。屆かぬまでも根性は江戶、觀音堂と脊比べ、堀の蛙はぶら／＼仲間。鷺の森とは向う面。朝晩生きた富士筑波、これが馳走の花川戶、瓦燻りの煙つてえ、奴と世間で達樂の端くれ。阿波座烏は浪花潟、藪鶯は京育ち、江戶の男と立てられる、親の讓りの男一疋。ほんのこつたがこれ程も、不自由はさせませぬ。いつでも尋ねてごぜえまし。首を長くして待つて居ますよ。

權八　御深切なるそのお詞。それにて行く末一つの安堵。

長兵　わしが住居へ。

權八　尋ねてこれから。

長兵　必らずともに。

　ト此うち雲助一人起き上がり

雲助　權八、うぬを。

　トかゝるを、拔打ちにポンと切る。それなりに立ちすくみ居る。

長兵　天晴れ手の內。

權八　長兵衛どの。

長兵　權八どの。

權八　ゆるりと江戶で

　ト長兵衛、刀を拭ひ、雲助を見事に返す。權八、刀をシヤンと納める。長兵衛、合羽を肩へかける。木の頭

兩人　逢ひませう。

　ト兩人、思ひ入れよろしく。　　拍子幕

一番目大詰　　對面の場

役名――阿野法橋全成。北條時政。梶原景時。梶原景季。梶原景高。伊豆次郞祐兼。曾我の二の宮千葉之助常胤。平子右馬允。久須美六郞。愛甲三郞。和田の舞鶴。大藤內成景。宇佐美太郞祐政。宇佐美七郞祐吉。久須美七郞祐實。狩野之助宗茂

奥女中、六浦。同、籬。同、星の井。同、大町。
工藤犬坊丸祐友。近江小藤太成家。八幡三郎行氏
實ハ京の次郎祐俊。御所五郎丸重宗。曾我の團三郎
曾我十郎祐成。曾我五郎時致。工藤左衞門祐經。

本舞臺、三間の間、向う淺黄幕。眞中、枝折り門、東西、竹の生垣。誂らへの所に大木の梅の幹。この花道よろしく、爰に祐兼、黑の衣裳。忍び頭巾を着て、官符を咬へ居るを、二の宮、好みの形にて引き留めて居る見得。本神樂にて幕明く。

二宮　曲者待ちや。

トちよつと立廻りあつて、しやんととまり

祐兼　なんと。

二宮　はや東雲の明け烏、祐經さまのこの館、今日御一門の參會と、聞いて來かゝるその折から、眞黑出立ちの怪しき曲者。そこ一寸も動くまいぞ。

祐兼　黑白はそれと分らねど、腕もなまけた女の大膽。引ッ擔がれて憂い辛い、辛き目に遭はぬその身の用心。道おッ開いて通すまいか。

二宮　その口先に嚇されて、この身を庇ふ程なれば、初手から留めはせぬわいなア。

祐兼　ムヽヽ、ハヽヽ。そんならどうでも見事、うぬア。

二宮　おはもじながら、ちよつとその品。

祐兼　なにを。

ト早舞ひになり、官符を枷に立廻りあつて、祐兼、二の宮を當て、官符をしつかり懷中へ入れる。序の舞になり、向うより、白髮の梶原景時、續いて景季、景高、いづれも柿の素袍、後より常胤、右馬允、六郎、三郎、皆庵に木瓜の素袍、立烏帽子にて出て來る。後より奴四人附き出る。此うち祐兼、花道へかゝる。皆皆行きあひ、ヂリ／＼と本舞臺へ押し戻す。

皆々　曲者動くな。

ト此うち二の宮、心附き

二宮　これは／＼お歴々樣。その曲者は、何やら携へ立退きまするゆゑ、留めにかゝりし、この場の樣子、とくと御詮議下さりませう。

景時　出かした女。その曲者め。

奴四　腕廻せ。

ト祐兼、こなしあつて

祐兼　身共でござる。

ト皆々見て

皆々　ヤ、貴殿は祐兼。

祐兼　コリヤ。

景季　すりや、その品は

皆々　兼ねて望みの

祐兼　その一品。それはさうと館にて、ツイに見馴れぬその女。何者なればこの品に、うぬア心をかけるのだ。キッと詮議を遂げにやアならぬ。

景時　ヤイ、女、其方は祐兼どのを曲者と心得、この品を奪ひ争ふは、祐經の由縁かゝりのある奴か。

景季　但し、何者にか頼まれて

景時　この品を奪ひにうせたか。

右馬　包まず隠さず

皆々　吐かしやアがれ。

二宮　なんのマア、誰れに頼まれませうぞ。祐經さまへ由縁はなけれども、夜の明け方の黒仕立て。盗賊と心得、止めましてござります。

祐兼　壁塀を越えやうが、人を殺めて立去らうが、縁がなければ、見咎め立てはいらざる詮索。

右馬　人の疝氣を頭痛に病むと、縁があるにやア違えはねえ。

常胤　祐兼どのが見馴れぬと云はつしやるからは、いづれも此奴、察するところ

三郎　如何にも曾我へ由縁の奴等。錢金にでもなるものかと思つて

六郎　盗む積りでうせたであらうが、してマアうぬア

皆々　何者だ。

二宮　なんのマア、烏滸がましく名乘りますやうな者ではござりませぬ。祐兼さまとは存じませず、見咎めしがお心に障りましたら幾重にも、お免しなされて下さりませ。

祐兼　默れ女め。咎め立てひろいだ、人の詮議がうぬが身の上。

景時　達て名乘らぬに於ては、痛はしいが引立つて

景季　拷問なして白状させうか。

二宮　サア、それは。

景時　但し曾我に由縁の奴か。

二宮　サア、それは。

常胤　引立てゝ拷問せうか。

皆々　サア／＼／＼。

祐兼　何ゆゑあつてこの品に、うぬア心をかけたのだ。

ト官符を、二の宮にさしつける。

二宮　サア、その仔細は。

ト ちやつと取つて駈け出すを、景季、引ッ捕へ

景季　イケ圖太い女め。假へどのやうに思つても、我れ我れが居るからは、うぬに取られて堪るものか。サア、その品を此方へ渡せ。

ト二の宮、官符をしつかり持つて

二宮　イヤ、察するところこの品は、祐經さまへ賜はりし、一﨟職の官符、紛失させて祐經さまの越度になさん企みおやに依つて、この品やはか渡してならうかいなう。

祐兼　いつその事に、ぶッ放して。

ト立ちかゝるを景時留めて

景時　イヤ、こんな奴を生け置いて、責め折檻して見たら

常胤　どんな尻尾が出まいものでもござりませぬ。

祐兼　成る程。

景時　兎斯うするうち、どんな妨げがあらうも知れぬ。直ぐに屋敷へ引立てゝ

右馬　左やう〳〵、水喰はせて拷問おしやれ。

六郎　片時も早う、梶原どの。

ト二の宮、逃げようとするを、奴四人出て引ッ捕へる

景季　面倒な女め。

景時　おいらと一緒に。

皆々　うせやアがれ、エヽ。

トこの時、向う揚げ幕にて

舞鶴　待つた。

皆々　待てとは。

舞鶴　和田が三男小林が、一番留めた。皆さん待つておくれなさんせいなア。

〽かゝる所に向うより。

ト太鼓入り、派手なる鳴り物にて、向うより舞鶴、鶴の丸の素袍の上を引ッかけ、烏帽子、附け太刀、朝比奈の面をかむり、ツカ〳〵と出て來る。此うち本舞臺の奴四人、二の宮を引立て、花道へかゝる。後より景季附いて行くを、舞鶴、四人と入れ代り、景季をチッと押へ、二の宮を圍ひ、見得。鳴り物打ちあげる。

〽オヤてんこちもなみ並ぶ、中を臆せぬ振り袖の、年は二八か十七の。

ト皆々よろしく入れ違ふ。本舞臺の皆々見て

景時　待て〳〵、今この梶原親子三人が鼻棒で

景季　曾我へ由縁の科ある奴等、引立てんとする所へ

祐兼　待てと聲かけ出た奴を見りやア
景時　春狂言のお定まり。
常胤　和田の三男小林の
右馬　朝比奈と思ひの外
六郎　打つて替つて女の姿。
三郎　振り袖模様にそぐはぬ大紋。
景季　しつかい鵺とも化け物とも、極りのつかねえこの態は
皆々　鬼か。
〽いゝや。
人か。
〽むうえゝ。和田が三男小林が、面を借りての舞鶴が、翼の素袍美しき、姿も味な初夢の、重ね枕の堅いのも、寢返り打たぬ心とは、知れてあるではないかいな、譯もなまめく柳腰、風に揉まれて來りける。
トこれにて、皆々、本舞臺へ來り、よろしく居並ぶ。
〽それ初春の壽に、髮の若松、初子の日、引けやお家の中村は、同じ苗字を幸ひに、男仕立ての朝比丸、年玉物の手遊びを、ちよつとかり／＼炒る豆は、敵役の鬼やらひ、悪魔拂ひの荒事で、ありやまんざら厚皮な、出過ぎた奴と何れも樣、笑つておくれ納豆烏帽子、着衣始めの小林と、ホ、敬つて。
舞鶴　申すわいなア／＼。
〽面白かりける次第なり。
ト此うちよろしく振りあつて、どつこいとまる。
とサ、兄さんなら一番云ふでもあらうが、どうしてマア、あられもない、姫御前だてらと笑はれうかと、出兼ねて居たが、いま難儀の手詰めと見かけ、女は矢ッ張り女子同志。何れも樣のお許し受け、この舞鶴が挨拶を、聞いてもらはにやなりませんぞえ。
二宮　オヽ、好い所へ舞鶴さん。
舞鶴　ハテ、舞鶴が來たからは、大船に乘つたと思つて、落ちついて居なさんせ……ほんに梶原さん、ちと嗜なんだがようござんす。この女中さんを寄つてかゝつて大人氣ない。人が見ると笑ふぞえ。ちと、仁體に似合はぬぞえ。
二宮　申し舞鶴さん、この譯と云ふは。
舞鶴　ハテ、何もかもわしが合點ぢや。どう云ふ譯か知らねども、女中さんは舞鶴が貰ひましたぞえ。
景時　コレサ、舞鶴、兄が兄なら妹まで、持て餘したお轉

虚無僧姿の五郎時致

婆娘。大切な詮議のかゝつたその女、折角の無心だが、
こればかりは遣り憎い。
景季　必らず構うて
皆々　もらひますまい。
舞鶴　フウ、どんな詮議ぢや、それ聞きませうわいなア。
常胤　その仔細と云ふは、祐兼どのが持つてござつた一品、
引ツたくつた科に依つて、屋敷へ引立て詮議するのだ。
右馬　何もどうとも知らぬ事で、支へ立てをすりやア、舞
鶴お身も
皆々　同類だぞ。
舞鶴　イヤ、そりやアならぬ。この舞鶴が來ぬうちは兎も
あれ、もう聞捨てにはしませぬ。矢筈紋には差合ひの、
鶴の丸が目に見えぬのかえ。ほんに今日この館にて、狩
場の地馴らしがあるぢやアござんせんか。殊に滿座のそ
の中で、女を捉へワヤ／＼と、大概な事は捨て置いたが
よいわいなア。
景季　ところをおれが。
ト官符へかゝる。その手を取つて締め上げる。
アイタ、、、。
舞鶴　なんぢやぞえ。景季さん。噂に聞けばお前様は、神
崎の廓では、梅ケ枝とか鶯とか云ふ太夫さんに、きつい
惚れられてゞあつたげな。
景季　フウ。そんならおれが梅ケ枝に、無間の鐘まで撞か
せた事を、どうしてわりやア。
景時　コレ、お父さんの前だ。小聲で／＼。
景季　オツと承知。
舞鶴　坂東一の若武者と、箙の梅の色事師さん。ちつと鼻
毛が延び過ぎて候。
ト突き倒す。景時入れ替り
景時　某、佐々木に成り代り、一問答仕らん
ト又かゝる手を締め上げる。
アイタ／＼。
舞鶴　親に似ぬ子は鬼子とやら。平次づらの意地惡さん。
舞鶴さんが貰ひかゝつたこの女中。そんならよいわいと
引込みさうなものかいなア。
ト突き倒す。
景時　重ね／＼の舞鶴が我まゝ。
祐兼　もうこの上は。
常胤　ハテ、親讓りの舞鶴が力。
右馬　手を下ろさすとナ。

四人　とは云ふものゝ。
舞鶴　どうしたとえ。
景時　者ども、ソレ。
奴四　舞鶴、動くな。
景時　何れも、お來やれ。
景季　サア、お父さん、參りませう。
　ト管絃になり、皆々下座へ入る。舞鶴、二の宮、奴四人殘る。
二宮　危ふい所へ舞鶴さん、よう來て下さんした。その官符はお前にお願ひ申します程に、祐經さまへお上げなされて下さりませ。
舞鶴　わたしが手に入るからは金輪際、氣遣ひせずと、この場を早う。
二宮　そんなら何かと舞鶴さん。
舞鶴　二の宮さん。
奴四　うぬをやつちやア。
　トかゝろを留めて
舞鶴　爰構はずと。
二宮　おさらば。
　ト帯締め直す。早三重にて、二宮、向うへ走り入る。

　奴四人、舞鶴を取卷き
奴四　動くな。
舞鶴　ホヽヽヽ。朝比奈が妹のこの舞鶴の、鶴の丸のたつた一羽、みんな一緒に來やいなう。
　トこれより太鼓入りになり、四人詰めのタテあつて、ドツコイとゝまる。流しになり、舞鶴、皆々を追つて入る。鳴り物打ちあげる。
〽長閑さや、門行く梵論が影法師、二つ連れたるつばくらの、父戀しとや笛竹の、普化の流れや、うま聖。
　ト此うち向うより、祐成、後より吹替への時致、一對の虚無僧の形にて出で來り、よろしくあつて花道にとまり
祐成　一枝一尺は恨み堪へ難し。
時致　吹いて古歌、さいせうの吟に入る。
祐成　入るや入るさの法の月、廣く體して武藏野の、草葉の蔭の父の仇、俱に天蓋尺八の
時致　梵論の姿もいとふなよ、心は僧に荒梵字、思ふ敵と見るならば、心の竹の一節切り。
祐成　サヽ、それもその時、それまでは、あれ見や、梅咲かば

時致　まだき櫻も時ありて、おのづと花も咲くものを
祐成　只何事も折を待ち、ヂツと堪忍咸陽の
時致　二人は酒の南無阿彌豆腐。
祐成　そこが佛法。
時致　くらふが說法。
祐成　語れば
時致　ほんに
祐成　さうぢやなア。
〽門の外面に休らひぬ。
ト文句一ぱいに舞臺に來り、見得あつて
祐成　日頃の思ひ、何事もなう、爰まで來りしが
時致　いつか願ひを叶へで置かうか。
トこの時、奥にて
祐經さま御歸館。
祐成　ナニ、工藤左衞門
時致　祐經とや。
ト祐成、天蓋を脫ぎ、奥の方へ思ひ入れ。
ト時致、袈裟を引ッ切り、祐成と入れ替り、ツカ〳〵と門の前へ來り、門を打ち破る。仕掛けにて左の扉破れる。其まゝ足にて蹴る。右の扉開く。ツカ〳〵と時致、上の方へ行かうとする。祐成、肌を脫ぎながら後より抱き留め、タヂ〳〵と兩人、後へ下がり抱き留める。時致、奥の方を見やり、ムウと思ひ入れ。双方よろしく、早舞ひにて道具廻る。
本舞臺、三間の間、揚げ障子の高二重、唐紙、庵に木爪の紋散らし。すべて、結構に仕立て、舞臺前眞中に飛び石よろしく、管絃にて道具とまる。
ト直ぐ向うにて
呼び　時政どのお入り。
ト管絃にて、向うより時政、立烏帽子、かちやんに三つ鱗の素袍を着て出る。後より犬坊丸祐友、社衦にて出る。これに左門、右門、紫の袱紗にて、刀を持ち、附き添ひ出て來る。後より大藤内、木綿布子麻社衦の團三郎の襟髮取つて引立て來り、皆々花道にてとまり
時政　この程、祐經どのには、狩場の陣取り工夫の爲、大藤内が地祭り御祈念につき、出仕お斷わりにて、一七日の物忌みと聞きしが、只今承れば、何れへか御他行の御樣子。最早歸館召されしとな。
犬坊　如何にも、父祐經、物忌みの間、鶴ケ岡八幡へ日毎

の社參、名代として願ひ申す犬坊丸祐友。
右門　只今祐經、歸館と申せしは
左門　即ち、犬坊丸祐友の儀でござります。
時政　御若年の祐友どの、近頃以て。
　ト會釋する。
犬坊　ハッ。
　ト會釋あつて、大藤内の方へ向ひ
して、大藤内、その者を如何いたす。
大藤　此奴は、只今、御兩所様のお通りをも構はず、ツカツカと御門内へ入りましたゆゑ、引ッ捕へて、これまで召連れましてござります。野郎め、動きやアがるな。
團三　下拙めは、疑ひ請けるやうな者ではござりませぬ。御用とござらば、例へ手籠めになされずとも、逃げも隱れも仕らぬ。ヘイ／＼、幾重にも御容赦なされて下さりませ。
時政　何は兎もあれ、先づ／＼こなたへ。
　ト鳴り物切れにて、皆々本舞臺へ來り
見ればその者は、山形に木瓜の衣類を着し居れば、定めて今日入來の一門方の、供廻りと云ふやうな者であらうナ。
團三　仰せの通り、今日お館にて、狩場の地馴らしがござる由、八幡どのにお目にかゝり、それをも拜見仕りたく、參上いたせしところ、お止めにあづかり、恐れ入りましてござります。
大藤　此奴が態を見りやア、木綿布子に破れ上下、高天原といふ態は、察するところ一門の其うちで、貧乏神と云ひ囃す、曾我の身寄りか。日頃祐經どのに仇ありと云つて居るからは、今日參會のどさくさ紛れ、なんぞかぞのでしてやる積りで、うせやがつたに違ひはあるめえ。この大藤内が目にかゝつちやア、捨てちやア置かれぬ。キリキリ立つてうせ居らう。
團三　お詞ではござれども、行氏どのにお目にかゝりたき仔細ござれば、暫しが間御容赦の程。
大藤　イ、ヤ、祐經に仇を含む曾我殿原、行氏に用のあらう筈がない。サア、キリ／＼立たぬに於ては、この大藤内が引立てるワ。
　ト襟髮を取つて引立てる。
犬坊　大藤内扣へい。
大藤　犬坊丸どの、何ゆゑ留めさつしやる。
犬坊　例へ曾我殿原が仇あると申すにもせよ、行氏に用事

あつて參つたと申すその者、止めてよければ、この犬坊丸が打捨てやうか。

大藤　サア、そりやア。

犬坊　サア。

兩人　サア〳〵。

犬坊　其方が構ふ事ではない。扣へてお居やれ。

大藤　そんならようござる。

犬坊　その行氏に用事あらば、暫しが間、次へ扣へい。

閑三　有り難うござります。

犬坊　時政どのは、別間へお通りあつて、父祐經へ御面談。

時政　然らば御案内。

右門　イザ、お通りあられませう。

ト管絃になり、時政先に殘らず下座へ入る。大藤内、殘り

大藤　この度、範頼公の御企て、一味徒黨の御連判狀。まつた平家の重寶皐月の鏡、祐兼どのより預かり持つて居るものゝ、大勢入込む今日の參會。持つて居ては危ないもの。どこぞ、そこらへ。

トあたりを見廻し、飛び石を見附け、思ひ入れあつて右の二品を飛び石の下へ隱し

ムウ、よし〳〵。

トこの時、向うにて

呼び　阿野の法橋全成公お入り。

トこれにて、大藤内、こなしあつて下座へ入る。また向うにて

阿野の法橋全成公お入り。

ト三味線入りの鳴り物になり、向うより全成、惣髮衣裳、刺貫、小さ刀にて、庭下駄を穿き出る。續いて六浦、箙、星の井、大町、小結ひ烏帽子、桃の素袍の上をかけ、三方に紋盡しの杯を載せ、持つて出る。後より宇佐美太郎祐政、宇佐美七郎祐吉、久須美七郎祐實、狩野之助宗茂、庵に木瓜の素袍、立烏帽子にて、中啓を持ち、附き添ひ出て來る。下座より祐兼、犬坊丸出迎ふ。皆々花道にとまる。

祐兼　阿野の法橋全成公、不時のお入り。兄左衞門祐經、皐月下旬富士の御狩の惣奉行を承り、陣取り地祭りの間、大藤内が祈念につき、一七日の物忌み。

犬坊　取敢へず父の名代として、犬坊丸祐友。

祐兼　伊豆の次郎祐兼。

兩人　これまで罷り出でましてござります。

全成　我れ佛門に入りしも、父義朝教養の爲。然るにこの度冠者範頼、兄、頼朝の御不審を蒙むりしと聞き及び、見舞ひがてらのこの入來。方々、出迎ひ大儀にこそあれ。
六浦　全成公の仰せの通り、義經公の例もありと、それはそれは政子御前のお心遣ひ。
館　何卒御連枝の御仲、和順に入らせられますやう
星の　折惡しく祐經どの。物忌みと聞き給ひ、お見舞ひのこの品々。
大町　今日參會のその席へ、持つて參れとの御意。
祐吉　承つて恐れ入る、一家の棟梁左衞門祐經が身の面目。
祐政　今日この館にて、狩場の地馴らしあるにつき、參會なしたは、家門の上に立ちたる宇佐美の太郎祐政。
祐吉　同じく七郎祐吉も、めでたく榮ゆる祐經が家門、とかう申すも恐れあり。
祐實　一家の端と定紋も、全成公の道の警固、この身の大慶。
宗茂　何は兎もあれ、イザ先づあれへ
皆々　お通りあられませう。
ト右の鳴り物にて、皆々舞臺へ來る。下座より時政、景時、景季、景高、六郎、三郎、出て來る。全成、上へ通る。皆々よろしく並ぶ。
景時　これは、全成公、なんと思し召しての御入來。
景季　ようぞや、何れも。
景時　お來やつたな。
全成　すりや、梶原父子には最前より
祐政　我れ／＼が遲參。
皆々　待たつしやつたでござらうな。
犬坊　全成公お入りの趣き、父祐經へ申し聞かすでござりませう。
ト管絃になり、犬坊丸、奥へ入る。皆々思ひ入れあつて
祐政　左衞門祐經忌中でも、全成公お入りと聞かば、早速出迎ひ申す筈のところ
景時　まだこの所へ出合はぬは、一臈職の權威を鼻にかけるのか。
景季　イヤ、達て出まいと思ふなら
景高　我れ／＼直に踏ん込まうか。
ト薄ドロ／＼になり、揚げ障子の内より、白煙上ると空より卯の花バラ／＼と落ちる。飛び石の下より時鳥一羽飛び上がる。これと一時に時鳥の笛。揚げ障子の

内にて

祐經　郭公、忍ぶの里に住みなれよ

近江　また卯の花の

八幡　皐月待つ頃

皆々　あの聲は。

祐經　近江、八幡、障子を上げい。

近八　ハア、。

ト小太鼓の樂になり、障子上がる。内に祐經、羽織衣裳にて褥の上に乘り、前に小さき机を直し、この上に位牌を載せ、香爐香物を直し、手向けして居る見得。左右に八幡、近江、吉例の上下衣裳にて扣へ、この前に臺を直し、上に卷を杉形に積み、三組みの伊東貝直しあり。三人、時鳥を見て、キッと見得。

祐經　ハテ、心得ぬこの動搖。この度左衞門尉祐經、一臈別當の爵を賜はり、身の面目も全く先代、解脱院善靈梅幸無心信士、工藤武者祐次、この位牌の功しと、今日一門の嘉節の參會。位牌の面にくゆらするは、金石丸のその折に、小松どのより拜領せし、名木の香氣につれ、今啼きわたる一聲は

近江　鶯の蠶を出でゝ八千八聲、一名を蜀魂とも、又くきふとも呼ぶ時鳥。

八幡　殘んの雪には名鳥の、時を違へて聲聽くは

祐經　皐月下旬の吉端を、知らしめ給ふ告げなるか。

近江　奇異なる

八幡　鳥の

三人　風情ぢやなア。

ト薄ドロ／＼打ち上げる。

祐兼　只今全成公を始め、北條どの、梶原どの。

祐政　家門の面々打揃ひ

皆々　これまで參會。

祐兼　祐經どの、小藤太、八幡。

祐政　席改めて

皆々　出迎はれよ。

ト祐經こなしあつて

祐經　誠に全成公の御前。近江八幡、高座の恐れ。

ト三人下り立ち、こなしあつて

これは〳〵、全成公のお入り、恐れ入り奉つてござります。當皐月下旬、富士の御狩の御催ほし。その役割は惣奉行、工藤左衞門祐經と、思ひ寄らざる寢耳に水。身にも應ぜぬ大役を、勤めてよいやら惡いやら、何れも樣の

御免を請け、御覽を願ふ身の冥加。推して勤める陣取り工風。それゆゑ平時の略服、幾重にも御高免の程、一重に乞ひ願ひ奉りまする。

ト會釋する。

近江　我れ／＼は譜代の家來。

八幡　不時のお目見得。

近八　恐れ入り奉つてござりまする。

全成　すりや、聞き及びし、近江、八幡か。

近八　ハア、。

ト平伏する。

全成　承れば、今日家門の面々、嘉節の參會と聞き及び、その次手に兄範頼が、罪なき趣意を申し談じ、右幕下の御前、祐經へ賴まん爲、又二つには一﨟職の官符、見た事がなければ、それをも一覽いたしたく、推して入來の法橋全成。

時政　この時政へも一通り、仰せ聞けられしが、兎角當時出頭の祐經どの、お執成しの儀を兎も角も、賴みくれよとお誘ひにあづかり、お邪魔ながらの押しかけ客。

祐經　その儀は範頼公、徒黨の連判を拵らへ、隱謀の企みありと、賴朝公のお聞きに達せしとの取沙汰。さりながら、お覺えなき趣き、虛實さへ相解らば、外にお身に誤まりはござりますまい。

祐吉　して又、その連判は、誰れぞ又しつかりと

祐實　見極めた者でもござつての事かな。

宗茂　イヤ、とりとめた事もござらぬを、云ひ觸らすが世の慣ひ。

常風　その浮說を防がんとは

右馬　これぞ大海を手で防ぐ

景時　誠に以て小さな料簡。

皆々　ムヽヽ、ハヽヽヽ、。

祐經　各々のお詞ではござれど、範頼公この度の御企てには、これに御座ある全成公を始め、歷々の大小名、過半加はりあるとの風聞。

全成　ナニ、この全成までが加へてあるとな。

景季　して、その連判は

皆々　何れにござりまするな。

祐經　サア、その連判がござらいで仕合せ。もしひよつとそれが出ますやうならば、どこへどう、飛ばしりがかゝるまいものでもない。ハヽヽヽ、それは格別、幸ひ今日全成公へも、一獻進め奉らん。イザ、設けの席へ。

近八　お移りあられませう。

ト管絃になり、全成、二重舞臺の眞中へ上がる。時政、景時、景季、景高、上へ上がり、左右に竝ぶ。祐經、誂らへの二重臺へ上がる。女形、三方を持つて前に竝べる

六浦　以前は工藤の優男と、鎌倉中で噂のあつた祐經さまも

籬　この度一臈職に御登庸、遊ばされたるおめでたさ。

星井　取分け陣取り御工風の間、お氣晴らしにと政子さまの

大町　お心を籠められし、紋盡しのこのお杯。よしなにお請け

女皆　あられませう。

祐經　ハヽア、有り難き政子さまの御意。お請けの儀は又よろしう。

ト全成、白布を見て

全成　祐兼、白木の臺のこの品も、陣取り工風に用ゆる品か。

祐兼　イヤ、それこそは宇佐美、久須美、河津、三箇の庄の麻を以て、織り直せし幕地の細布でござります。

ト　ばた／＼になり、向うより大名二人、出て來て

大一　祐經どの、お聞きなされい。最前來りし二人の虛無僧、一人の奴は神妙に、梛の葉どのゝ目通りで、琴に合せる慰みと思ひますが

大二　今一人は荒梵字、祐經どのに逢ひたいと、暴れ込むその所を、御狩の稽古に入込み居る、御所の五郎丸が搦め捕つてござるゆゑ

兩人　これまで注進いたしてござる。

近江　捨て置き難き狼藉者、今一人のその虛無僧。

八幡　我れ／＼兩人罷り越し

近八　とくと、糺明。

大一　イヤ、その虛無僧は本田四郎が召連れ

大二　重忠どのゝ屋敷へ、罷り越してござります。

時政　然る上は五郎丸重宗が、生捕りしとあるその曲者、祐經どのに逢ひたいと申すなら、爰へ引き出し、詮議召さるも一興かと存ずる。

皆々　イカサマ、こりや好い慰みでござらう。

祐經　何れものお詞、委細承知いたしてござる。

祐政　イヤ、先づそれよりは全成公、御所望の官符。

皆々　苦しからずばこの所で。

祐經　如何にも承知いたしたが、先づ饗應の濟んだ後の事
サ。
祐政　イヤ、その饗應は家門の面々、我れ〳〵へはお構ひ
御無用。
景時　官符が拜見いたしたい。
祐經　ハテ、性急な。先づ御酒一獻。
祐吉　猶豫の體は祐經どの。
祐實　我れ〳〵に見せ召さるは
宗茂　不承知でござるかな。
祐經　なか〳〵以て。
祐政　但し、どうぞ仕りましたか。
皆々　祐經どの。
祐經　如何にも紛失仕つた。
皆々　ナニ、紛失とな。
ト祐兼、こなしあつて
祐兼　これサ、兄貴、イヤサ祐經どの、大名多きその中で
も、誰れ肩を並ぶる者なき一﨟職、大きな顏をさつしや
つても、官符がなけりやァ空寺同然。それぢやァこなた
濟みますまいが。
金成　如何にも……祐經、官符紛失とあれば、一﨟職は勤
まらぬ。
景時　疾々その座を
皆々　下がるまいか。
トこの時、下座にて
舞鶴　その官符は舞鶴が、取戻しましてござります。
ト管絃になり、下座より舞鶴、三方に官符を載せ、持
つて出る。皆々見て
皆々　ヤア、うぬは舞鶴。
ト顏を見合せ、皆々思ひ入れ。舞鶴こなしあつて
舞鶴　なんと、梶原どの、祐兼さま、斯う云ふ企みで祐經
さまの、御難儀になる事とは露知らねど、盜んで逃げよ
うとする所へ、私しが來合せたは、そこが天命、天道人
を殺さずとやら。ようしたからくりぢやないかいなァ。
敵役　ニヽ、忌々しい。
舞鶴　イザ、祐經どの、お受取りあられませう。
ト渡す。祐經取る。
金成　ナニ、祐經、範賴始めこの金成までも、謀叛の兆し
ありと、今の詞を聞く上は、時日移さず我が身の上の、
虛實を糺せ、左衞門祐經。
皆々　連判がござるかな。

舞鶴　何れもさん、あんまりぎみがま云はしやんすな。天道様が見通しぢやに依つて、どこぞから連判が、降つて湧くまいものでもござんせぬわいなア。

祐經　兄に劣らぬ舞鶴が明才。オヽ、天晴れ〳〵。

舞鶴　時に祐經さま、捨て置かれぬは最前の虚無僧。お前に逢ひたいと云うて、暴れ込んだその者を、其まゝに捨て置いては、掟が濟みますまい程に、爰へ引き出して、疾々樣子をお糺しなさんせいなア、

皆々　如何にも舞鶴、呼び出し召されい。

舞鶴　合點ぢやわいなア。

ト鼓の合ひ方になり、舞鶴、こなしあつて花道の方へ來り

いま五郎丸重宗さんが、生捕らしやんした狼藉者。日頃逢ひたい、見たいと、思ひ込んで居なさんす祐經どのゝお目通り、怯めず臆せずこの所へ……サヽ、繩附きを、引出さしやんせい。

ト向うにて

重宗　委細畏まつてござります。

ト時の太鼓の頭を、對面三重に打ち込んだる鳴り物にて、向うより時致、虚無僧にて、肌脱ぎの上に大繩をかけ、勢子の者大勢、繩の先を抑へ、後より五郎丸重宗、甲冑を着て、長刀を抱へ附き添ひ出て、花道よき所に住ふ。アリヤ〳〵の聲。

皆々　どつこい。

トとまる。

重宗　今日ぞ狩場の勢揃ひ、暴れに暴れ立つ荒梵字、一際目立つ大前髪、生捕りたるは重宗が、手柄始めのこの繩附き。これまで引据ゑましてござります。

景時　何れも、あれをお見やつたか。虚無僧と云ふものは、普化禪師の流れを汲む。

景季　法の姿に引かへて、狩場地馴らしのその場所へ

景時　入込むのみか剰さへ、祐經どのに逢ひたいと

祐政　館へ踏ん込む暴れ者。

祐實　忽ち天下の囚人と

祐吉　運の盡きたる縛り繩。

宗茂　質屋の藏ぢやアあるまいし。

常胤　がんじ鏡の二百ごみ。

六郎　安い彼奴がしやつ面は

三郎　どうやら箱根山中で

祐政　度々見かけた彼奴が素振り、ちよつと見るから曾我

曾我と
皆々　貧乏染みた態でござる。
　ト時致、思ひ入れあつて
時致　普天の下率土の濱、何れを鬼の住家とや。人の所領を我が物と、五つや三つの頃よりも、小耳に母の繰り言も、星霜積つて十八年、附け狙つたる父の仇。今日ぞ狩場の地馴らしと、聞いて入込む兄弟は、狼藉無禮も合點で、祐經どのゝ目通りへ、引かるゝ事の嬉しさに、恥も構はぬ馬聖、縁に繋がる縛めは、平賀の鷹にあらねども親の爲には鷲もとまる。
祐經　ハテ心得ぬ。いま舞鶴が捨て置かれまじと、呼び出せし狼藉者が詞。何とやらこの祐經に、仇あるとの一言ぢやが、祐經身に取つて、聊か人に仇を請ける覺えなけれど、縁に引かるゝとの詞のはし〴〵、聞き捨てならず。面體を覺ゆる爲ぢや。目通りへ、ズッと參れ。
時致　參りますべい〳〵。
　ト立ち上がる、
重宗　コレ、必らずともに、粗相があつちやア濟まぬぞ。
時致　合點だ。
　ト岩戸になり、時致、ツカ〳〵と出る。勢子、附いて出る。アリヤ〳〵の聲。
皆々　どつこえ。
　トとまる。
近江　エヽ、童め。爰をどこだと思ふ。阿野法橋全成公のお入りと云ひ、諸大名の列座の中をも憚らず、繩附きの分際で、立ちはだかつて無禮千萬。
八幡　コリヤ、お側に附き添ひ居らるゝを誰れぢやと思ふ。これに扣へらるゝは譜代の忠臣。
近江　近江の小藤太成家。
八幡　八幡の三郎行氏が附き添ひ居れば
近江　どつこい。
八幡　そつこい。
八近　やりやアしねえぞ。
時致　ムウ。
　ト思ひ入れ。舞鶴、こなしあつて
舞鶴　コリヤ、狼藉者。爰が大事な所ぢや程に、必らず短氣を出しやんすな。
祐經　幼少にて父に後れしとの詞、思ひ廻せば一家の内、河津の三郎祐安といひし者、横死を遂げたるその後に、忘れ形見の兄弟ありと、聞いたばかり、かゝる勇氣を見

るならば、草葉の蔭の亡き人も。
時致　ナニ、草葉の蔭とは。
祐經　サア、草葉の蔭とは、この位牌の工藤武者祐次。アア思ひ出せば、オ、それよ。
ト誂らへ横笛入りの合ひ方になり、皆々思ひ入れ。祐經、こなしあつて
まだその頃は祐經も、金石丸といひし昔、この位牌の祐次に後れ、三箇の莊は伯父祐親に押領せられ、年月の無念止む時なく、時に安元二年神無月、十日餘りの折なりしが、佐どのを慰めんと、伊豆相模の若殿原、奥野の狩の歸るさに
近江　待ち設けたる近江八幡、椎の木三本茂りたる、木の間隠れぞイザ究竟。
八幡　小楯に取つて待つぞとは、いざ白雲の椎ヶ峠。
祐兼　先づ一番に打たせしは
時致　名におふ波多野の右馬之允。
舞鶴　二番は聞ゆる驛路とぞ
重宗　即ち大場の三郎景親。
景時　さて、三番は
景季　海老名の源八。

八幡　遥か後陣に引下がり、河津がその日の出立ちは、秋野の摺つたる狩衣に、竹笠サッと木枯しに吹きそらし
時致　栴檀籐の弓携へ、村雨月毛に、ゆらりと跨がり、絶所惡所の嫌ひなく
祐經　駒を早めて歩ませたり、
祐兼　すは祐親ござんなれと
近江　一のまぶし。
八幡　二のまぶし。
近八　引き絞つたる十三束。
祐經　よつぴき、ひようと放つ矢が、河津が乘つたる駿足の、鞍の山形射削つて、むかばきの附け際より、前へすつぱと射通したり。
時致　萬夫無双の祐安も、大事の痛手に堪り得す
舞鶴　馬よりどうと
時致　遠近の
八幡　赤澤山の露霜と、消えし河津が二人の悴。
祐經　兄はそれより成長して
近江　祐信どのゝ養子となり。
時致　曾我の十郎祐成、
祐經　弟箱王人となり

舞鶴　あれにござんす北條の、時政さまの烏帽子子となり
時致　曾我の五郎時致。
祐經　この場の繩附き
時致　祐經どの。
祐經　ハテ、珍らしい
ト時致、大繩をツッツリ引ッ切り
祐時　對面ぢやなア。
ト兩人よろしく見得。
時致　親の敵、觀念。
ト祐經へ飛びかゝらんとする。下座より團三郎、ツカツカと出て、五郎丸兩人にて留める。
五郎　尤もだぞ。そこを一番おッ堪えろ。
祐政　ヤア、時致なれば先達て、箱根山に於て紛失なしたる神妙劍の一卷。
祐吉　その盜賊の汚名だけは、家臣鬼王新左衛門、箱王丸が首なりと
祐實　持參なしても肝心の、神妙劍の一卷出ぬ其うちは
宗茂　時致と名乘りなば、首になつた身替りは似せ物。
常胤　滅多にその名は
皆々　名乘れまい。

時致　すりや、神妙劍の出ぬうちは、時致と名乘る事はならねえか。エヽ、口惜しい。
重宗　ムウ、尤もだ／＼。この五郎丸なんぞが手に合ふやうな、時致ぢやアなけれども、祐經どのに逢ひたくば、斯う／＼しろと、舞鶴どのとの云ひ合せ。
舞鶴　折角、科人になり負ふせ、大繩かゝつて引き出されても、神妙劍の出ぬうちは、時致と名乘る事も叶はぬよな。
重宗　舞鶴どの。
舞鶴　重宗さん。
五郎　云ひ合せが
舞鶴　無になつたわいなア、
八幡　イヤ、神妙劍は先刻、これに居りまする團三郎、持參なして、某へ渡し置いたる一卷は、即ち、これに。
ト八幡、懷中より神妙劍を出し
時致の汚名雪げますやう、イザ舞鶴どの。
ト渡す。舞鶴取つて、思ひ入れあつて
舞鶴　祐經どの、紛失の神妙劍出まする上は、最早時致に盜賊の汚名はござんすまいなア。
時致　汚名は晴れた。喜べ／＼。

祐經　行氏、そちや何ゆゑ曾我の肩を持つ。
八幡　エヽ。
祐經　ハテ、忠心な家來ぢやなア。
近江　如何にも御意の通り、跡方もない事に、主人に對して敵呼はり、古參の某を差措き、新參の貴殿へ便り、團三郎が今の一卷、持參したとあるからは、常日頃から曾我殿原と、入魂に召さるゝな。
八幡　サア、それは。
近江　又しても親の敵と云ふには、これぞと云ふ慥かな證據があるか。
時致　サア、その證據は。
近江　證據も持たず敵呼はり。馬鹿々々しい。
　ト團三郎、懷中より矢の根の袱紗に包みしを出し
團三　ハヽ、憚りながら、かゝる事もござらんかと、持參いたせし工藤家にて、お用ひと承る、澤瀉形のこの矢の根。
祐經　ドレ。
　ト團三郎、持つて行かうとするを、近江、引ッたくり祐經に渡す。
如何にも用ふるこの矢の根。

時致　祐安が死骸に殘りあるからは、慥かな證據、親の敵と名乘れ、えゝ。それともに、この時致が怖いのか。
祐經　それが矢ッ張り粗忽の第一。工藤伊藤の一門は、何れも用ゆる澤瀉形。
近江　その紛らはしき矢の根が、なんの證據になるものか
時致　すりや、その矢の根も證據にやアならねえか。エヽ口惜しい。
團三　御尤もでございます。
重宗　そこを一番、おつ堪えろ〱。
八幡　イヤナニ小藤太、三箇の莊の遺恨に依つて、祐經さまに惡智惠を勸め込み、河津を討つたるその折から、遠矢に中つて討死せしは、先の八幡三郎。命冥加に御自分樣は、生き殘つたる忠臣顏。二代の八幡と名跡を、相續いたすからは、犬打つ童も存じの事。この行氏が知らいでならうか。斯くまで心を盡さるゝ、曾我殿原へ斯程まで、お包みなさるは卑怯とも、未練とも、人の譏りを辨まへられ、三箇の莊の遺恨にて、討たせし敵は我れなりと、お名乘りなされて遣はされませ。
祐經　八幡々々、
　ト此せりふの中程より、せりふに被せて

ト云ふに心附かず、八幡、ヂリ〳〵と詰め寄る。

コリヤ、八幡。

トこれにて心附き

八幡　ハツ〳〵。

ト平伏して思ひ入れ。

祐經　ハテ、其方は八幡の八幡知らずぢやな。鶯の蠶の中の時鳥。子が父に似て、父は吾妻に母は又

八幡　ナ、なんと御意なされまする。

祐經　都九條の白拍子、風折が腹に出生せし京の次郎祐俊と云ふ事を御存じあつて、召使はれた祐經さまを、見事、敵と附け狙ふか。

八幡　イヤ、全く以て。

近江　そんなら、なんで曾我贔屓だ。

八幡　サア。

近江　サア〳〵。

祐經　行氏、詞はあるまいがな。

トきつと云ふ。八幡、大小を取つて前へ出し遙かに下がり

八幡　お目立ちまする上からは、今は何をか包みませう、成る程、お目鏡の通り、祐安が別腹の惣領、京で育ちしゆゑ、京の次郎祐俊。一々膽に銘ずる今のお詞。斯く二腰を差出だせしは、これまでの恩義を謝する、祐俊が討死同然。以後お手向ひは仕らぬ、寸志に免ぜられ、何卒弟時致に、潔くお名乘りあるやう、この段一重に、お聞濟みなし下されませう。

近江　これサ、祐俊、そりやアお主の得手勝手と云ふものだ。二代の八幡と變名して、入込んだのが料簡違ひだ。今第一曾我の奴等が、祐經さまを敵と狙ふが大白痴だ。今まで肩肘を張つて、お出入りをせぬのが、痩我慢も貧からと、一家の端なら一家のやうに、お臺所の隅へ廻つて來りやア、犬坊丸さまのお召し古しや、鰯の頭位はくれてもやるワ。立寄らば大樹の蔭、長い物にやア巻かれろだ。

時致　ムウ。

ト思ひ入れ。

景時　何れも、彼奴が態を御覧なされい。證據の矢の根も役立たず、生中敵と云ひ出して、今では結句後へも先へも。

景季　何れも、あの顏を見て、大笑ひに笑はつしやい。

敵皆　ム、、ハ、、、。

時致　なにを。
重宗　やかましいわえ、鳶凧めら、悪く頤を鳴らすと、ふんざばいてくれるぞよ。
舞鶴　女でこそあれ、舞鶴も爰に居る。滅多な事を云はしやんすと、聞かぬぞえ、
團三　祐俊が今の節氣を辨まへられ、この場に於て潔く
時致　親の敵と名乘れ、えゝ。
祐經　默れ。一﨟職の身分にて、何を恐れて包み隱さんや河津を討つた覺えはないワ。茲な白痴者めが。
八幡　斯くまでお包みなさるゝは、定めて深き御所存あつての事。推して願ふは却つて無禮。
重宗　せめて今日對面したといふ印に
舞鶴　ソレイナア祐經さん。この舞鶴が願ひぢやが、時致さんへ一家のよしみ、杯をしては下さんすまいかいなア。
祐經　何がさて、舞鶴か願ひと云ひ、祐俊が詞に免じ、その意に任さん。この祐經も、以前は平家に仕へたる金石丸、今一﨟別當と、持囃さるゝ身の大慶。我が身にもあやかる爲、杯いたし遣はさん。成家、銚子杯を持て。
近江　畏まつてござります。

ト合ひ方になり、近江、伊東貝と長柄の銚子を持つて出る。祐經取つて
祐經　コレ、見られしか、祐俊、時致。この土器こそ聞きも及ばん、祖父祐親が秘藏ありし伊東貝。今は我が家の工藤貝と尊び、この度の祝儀に、二つ交へて作らせしが中の一つはその色も、貝の生れの小紫、末のとまりはかしくと名付けし、この春の三つ組杯。今日參會の面々へ、勸めんと思ひしが、方々の願ひに任せ、今改めて一家の因み。この位牌の祐次が前にて、河津が血汐の浸み込みし、澤瀉形の矢の根の血汐。
ト矢の根を銚子の中へ入れ
爰に兄祐成が、居合さぬこそ一つの殘念。五郎やい。
時致　なんだ。
祐經　杯くれう。ズッと參れ。
時致　頂きますべい／＼。
ト三保神樂になり、時致ズッと立つ。アリヤ／＼の聲どつこいととまる。
今日は如何なる吉日にて、日頃逢ひたい見たいと、神佛をせがんだ甲斐あつて、今逢ふは、優曇華の、花待ち得たるこの對面。三箇の莊の福は內、鬼も十八年來、附け

狙つたる天津風、杯頂戴いたすでござらう。

ト ちり〳〵と詰め寄る。伊東貝へなみ〳〵と受け、一口吞んで三方の上に置く。

祐經　地を走る獸、空を翔る翼まで。

ト 謠にて、ホロリと思ひ入れ。

時致　親子の哀れは知るものを、親を討たれて無念なるか。

時致　さん候ふ〳〵。

祐經　さもさうず、さもありなん。ア丶、親は無けれど子は育つと、時致が勇氣の程。コリヤ、無念に思はゞ時節を待て。

時致　ムウ。

祐經　コリヤヤイ、いま左衞門祐經は、鎌倉どのゝお覺えめでたく、官祿ともに誰れ肩を、並べる者もなき、三箇莊の大々名。連れたる時には、千騎二千騎、連れざる時にも百騎二百騎。それにわいらが態を見よ。素浪人同然な身を以て、親の敵とこの祐經を、附け狙ふとは片腹痛い。ほんのそれが猿猴が月、富士の山と脊較べするやうなもの。及ばぬ事ぢや、叶はぬ事だ。

時致　もう料簡が。

ト 祐經へ飛びかゝるを、八幡、重宗押し隔てゝ思ひ入れ。この時、今の血酒、前の飛び石へかゝる。ドロドロにて、以前の如く時鳥舞ひ上がり啼きつれる。皆々思ひ入れ。

八幡　ヤ、又も啼きつる時鳥。

近江　時ならざるに

舞鶴　この瑞は。

祐經　最前と云ひ、いま伊東貝に受けたる血酒、この飛び石にかゝるや否や、以前に等しき時鳥の、啼き渡るこの場の不思議。

ト 八幡、思ひ入れあつて、飛び石を跳ね返す。下より鏡と連判狀出る。取上げ見て

八幡　こりやコレ小松どのゝお形見と、傳へられたる皐月の鏡。まつた範賴公御謀叛の、一味徒黨の連判狀。

ト この時後へ、大藤内出かゝり居て

大藤　それを。

ト 拔いて、八幡に切つてかゝるを突き廻す。また祐經にかゝるを、その刀を取つて、ポンと切る。

祐經　その連判狀。

ト 立ちかゝる目先へ、白刃をしやんと突き出す。

ムウ。

ト立ちあがるを、祐政、景時、コレと留める。八幡、
　連判狀を祐經へ渡す。

祐經　如何に並み居る諸侯の方々。範頼公に御謀叛の、企みなしと申されしが、連判狀出る上は、姓名一々讀みあげうか。

敵皆　サア、そりやア。

祐經　謀叛の根ざしある族、枝葉を枯らさぬ其うちは、祐經がこの身體は、我が物にして我物ならず、鎌倉どのゝ御大事。この場で詮議と思へども、物忌みのうちなれば官符の返禮、舞鶴へ讓り申さん。父義盛へ申し聞け、この連判にてとくと詮議。

舞鶴　かゝる大切な御詮議を、父義盛へお讓りなさんすお心は。

祐經　いしくも尋ねられたり。最前より未練にも、曾我殿原へ包みしは、眼前鎌倉どのゝ御大事を抱へしゆゑ。いま祐俊が功に依つて、思はず連判出る上は、義盛へ詮議を讓れば、祐經この世に思ひ置く事更になし。今こそ名乘るよつく聞け。三箇の莊の遺恨に依つて、河津の三郎祐安を、討たさせし敵は、斯く云ふ左衞門祐經ぢやわやい。

八幡　さてこそなア。

時致　斯く名乘る上からは、親の敵の左衞門祐經。イザ立ち上がつて勝負なせ。

祐經　如何にも孝心に愛で、名乘り合ひは致せども、今は叶はぬ、時節を待て。

時致　そりやア又なぜに。

祐經　皐月下旬、富士の御狩の惣奉行、役目終らぬ其うちは、私しの仇討は叶はぬ。名乘り合ひしを規模にして兄祐成も居合さねば、一先づこの場を立歸り、時節を待つて、本意を遂げい。

八幡　すりや、皐月下旬の牧狩の、お役目濟まざる其うちは、敵討は叶ひませぬとな。

時致　ヱヽ、寶の山へ入りながら、手を空しく立歸るか。ヱヽ、忌々しい。

祐經　イヤ、手を空しうは歸すまい。貢ぎの品、これへ。

右左　ハア、。

　ト右門、左門、白木臺を持つて來り直す、祐經上の一
　卷を取つて

祐經　これこそ宇佐美、久須美、河津、三箇の莊より貢ぎの白布。祐俊へ相渡す。母滿江、兄祐成へ好き家土產。

八幡　ト八幡、受取り
お心ありげなこの賜物。忝なう受納いたしてござる。
ト祐經また鏡を取つて
祐經　時致へはこの一品……こりやコレ唐土、宋の大宗、古きを以て鏡となし、月に一面づゝ渡させしうちの皐月の鏡。育王山の普越禪師、小松どのへ送られしを、拜領せし品なれども、今日對面の印に遣はす。受取れよ、時致。
ト差出す。
時致　イザ〳〵。
ト時致取つて
すりや、これが皐月の鏡。
舞鶴　いま白毫の上なる布を取除くれば
重宗　自然と現はす富士の形。
近江　下に並びし杯は。
團三　取りも直さず狩場の陣取り。
ト八幡、布を擴げ見て
八幡　ヤ、こりやア白布と思ひの外、狩場の繪圖面。
時致　鏡の表には時鳥。
舞鶴　すりや、皐月下旬裾野にて
祐經　名乘つて通れ、時鳥。
時致　血を吐く思ひ、皐月闇。
重宗　忍ぶ日蔭は
團三　庵に木瓜。
八幡　歩みの板まで
時致　恨みの刃。
近江　立並んだる蝶千鳥。
祐經　祐俊、時致。
八時　祐經どの。
祐經　裾野で逢はう。
皆々　さらば。
ト吉例の通り皆々見得、よろしく
幕

二番目序幕

鈴ヶ森の場
小紫部屋の場

淨瑠璃「其小唄夢廓」清元連中

役名——白井權八。役人、鳥取都治。大工、かゞりの六三。三浦屋小紫。

本舞臺、三間の間、高輪大木戸の模樣。石垣、開帳の札。下手、葭簀の茶見世。上手、髪結ひ床の書割り、誂らへの通り飾りつけ、幕の内より仕出し四人、茶見世に腰をかけ、亭主、茶を酌み居る。通り神樂、てんつゝにて幕明く。

仕出　なんと、もう科人は來さうなものだが。

同　それよ。おらは牢屋敷を引出すと、直ぐに通り町へ駈けぬけ、ちよつと見たが、さてもよい若衆の引廻し。

同　慥か浪人にて、名が白井權八とやら。吉原の女郎に嵌つて、惡い事をいろ〳〵したとの噂。

同　兎角若い衆には、女郎は毒でござる。

亭主　サア、それも女に氣がなけりやよいけれど、氣があるから毒になりまする。

仕出　そこで氣の毒かな。

皆々　ハヽヽヽ。

ト下手より家主、踏込みの形にて、書付けを持ち出て來る。

家主　コレ〳〵、茶見世の親仁どの、大事のお觸れがござる。休んで居る衆も聞かつしやれ。

亭主　引廻しが來ると云ふに、大事のお觸れとは

皆々　なんでござりまする。

家主　その譯は讀んで聞かせませう。

ト書き物を開き

ヤア、こりやお觸れと思つたら、淨瑠璃の役觸れを、取違へて持つて來た。

亭主　とんだ粗相な大家さん。

仕出　ドレ、そんならおいらは横町へ行つて、酒でも呑まう。

皆々　サア〳〵ござれ〳〵。

ト皆々、下座へ入る。

家主　この役觸れを聞かずに行くとは、野暮な手合ひだ。ドレ〳〵、マア、なんと書いてある。

ト役觸れを開き、淨瑠璃名題、太夫の連名を讀み上げ

その爲口上。イヤ、おらア行司。斯うしちやゐられぬ。

トついと下座へ入る。後知らせあつて、髪結ひ床を打返す。水茶屋、大木戸の道具を上手へ引いて取る。清元連中居並び、直ぐに前彈きになる。

〽榮え行く、〳〵一盛り花一時、明日は白井が身の果も、思案の外の罪科に。

ト揚げ幕より捕り手、六尺棒を持ち、二行に並び、後より捨札を持ち、六尺棒の警固。後より荒菰を引いたる裸馬に、權八、科人にて乘り、六三、馬の口取り、誂らへの形。捕り手二人、後より警固の郡治、家來を連れて出て來り、靜かにゆらり／＼と歩み來る。此うち始終浪の音。

〽引かれ廓へ通ひ路の、派手な姿に引替へて、今日の哀れに散りかゝる、淺黄櫻と夕嵐、隙行く駒の道も早、かかる繩目に大木戸の、色ゆゑにこそ命さへ、逢ひた見たさは飛び立つばかり、籠の鳥かや恨めしや。

トこの舞臺、引き道具にて、高輪より段々鮫洲の道具になり、此うち揚げ幕より非人、藥茶碗を持つて權八に呑ませる。

〽これも由緣の紫と、二人が仲を世に唄ふ、色品川は變れども、今日ぞ鮫洲の無常音、駒を駐めて。

ト皆々花道に立ちとまり

權八　斯く數萬の御見物へ、今更云ふも我が身の懺悔。生れ故鄕は因幡の國、後先思はぬ若氣の短慮。義に依つて人を害し、遙々下るこの吾妻路。賴もしき人の下に忍ぶうち、ふと色里へ通ひ初め、繁々行けば浪人の、貯はへ盡きて遠ざかれど、互ひに思ふは同じ事、身を喞ちたる八重梅の、唄の唱歌も盡き果てゝ、その戯れが土手の喧嘩。色と慾とに目も眩み、中田甫の行き違ひに、多くの人の命を取り、盜み取つたる金の數。一度はまゝよ、二度は大事か三惡道。夢幻しの露の身と、悟り兼ねたる呵責の苦しみ。三尺高く鑓鎗に、胸を貫く心の思ひ。一遍の御回向なされ、この期に及び未練は申さぬ。念佛題目億萬劫と唱へるとも、浮ぶ瀨更にあるべきか。切腹いたす程の氣力なき、權八には非ざれども、自殺いたすその時は、この權八が手にかけし、二百六十の親族も、さぞや本意なく思ふらめ。且はあたら天下を輕しめるに當るゆゑ、斯くと名乘り出でました。若いお方は取分けて、見る程の事羨やましく、ツイ思ひつく不料簡。色と慾とに身を果す、諸人の見せしめ、業曝し。業の秤や淨玻璃の、鏡に映る我が身の罪科、今さら思ひ當りました。

〽我れと悔みの教訓も、心の駒に急がれて、爰ぞ名にふる鈴ケ森、最期場さして來る折しも。

ト此うち本舞臺、引き道具引いて、向う一面の黑幕、芦原、題目の石碑。上下、松の立ち木。浪打際の道具になると、皆々本舞臺へ來り、權八を馬より引下ろす。

バタ／＼になり、向うより小紫、駈落ちの形にて、友切丸を袖頭巾にくるみ、蛇の目の傘へ入れ、これを抱へ、走り出で來り、直ぐに舞臺へ來て

小紫　ヤア、權八さん、まだ死なずに居て下さんしたか。

權八　ヤア、そちや小紫。なんとして。

小紫　なんとしてとは今日この樣子を、風の便りに聞くと其まゝ、あるにもあられず、この世で一目逢ひたさに、わたしや廓を駈落ちして、暇乞ひに來たわいなア。

權八　その深切は嬉しけれど、見る目いぶせきこの姿。今際に見せるも面伏せ。

小紫　なんの恥かしい事がござんせう。其やうな形にしたも、皆わたしから起つた事。

權八　コリヤ小紫。この形を見てたも。

六三　愛想は盡きぬか。

ト前へ出る。

小紫　ヤア、お前は。

六三　オヽ、大工の六三。相應な職人であつたが、今は引廻しの馬の口取りとまで成り下がつた。爰で逢つたこそ幸ひ、今まで段々云つた事、小紫、なんと得心してはくれまいか。

小紫　エヽ、そんなどころぢやござんせぬわいなア。云うても下さんすな。

六三　イヤ、さう吐かしやア、ちつとでも爰へ置く事は、ならぬ／＼。モシ、お役人様。

郡治　オヽ、如何にも／＼。警固の者ども、引退けい。

皆々　ハツ。退きませい／＼。

ト棒にて小紫を引分ける。

小紫　アヽ、モシ／＼、折角これまで來たものを、暫時のうちもならぬとは、お情ない。モシ、どうぞこの世の思ひ出に。

權八　未練には似たれども、それゆゑに、かゝる罪科も仕出かせしこの權八。せめて別れの水杯。

小紫　最後の折は何事も、一つの願ひは叶ふとやら。どうぞ暫時のお許しを。

ト小紫、思ひ入れあつて、六三が側へ行き

モシ、六三さん、お前もどうぞ執成しを。

六三　おれに頼みやア又それだけ、地獄の沙汰も、兼ねての返事はどうだえ。

小紫　ハテマア、それは後の事。心急かるゝこの場の願ひ。

六三　さう云ふ事なら願つてやらう。

ト郡治の側へ行き、蹲ひ、辭儀をして

お願ひがござりまする。いま彼れが願ひを聞き屆け下さりまして、暫時この圍ひをお引き下されませうなら、有り難うござります。その代り私しが、キッと張り番いたして居りまする。

郡治　オヽ、諸事拔け目なき其方が願ひ、聞き屆けて我れ我れは、この所を立退き、遠巻きの警固いたさん。暇乞ひ相濟まば、早速知らせい。

六三　畏まりました。そこは手酷いかゝりの六三。お氣遣ひなされまするな。

郡治　然らば者ども、遠巻きに。

皆々　畏まりました。

郡治　六三、必らず油斷いたすな。

ト時の鐘、浪の音にて、郡治、捕り手、皆々後へ入る。

六三　サア、わいらが望みの暇乞ひ。

小紫　エヽ、嬉しうござんす。とは云ふものゝ今更に。

權八　思ひ出せば先つ頃、兄弟分の長兵衛どの、我れと大磯鴫立澤で、この身を頼み頼まれしが、緣にて江戸の假住居。その時逢ひしも、矢ッ張り仕置場。

小紫　これが別れと鈴ケ森、爰も變らぬ仕置場所。愁ひを見よとの約束か。

權八　今は別れの杯も

小紫　一日片時遅るゝとも、直ぐにわたしも冥土の道連れ。

權八　すりや、兼ねての誓ひに。

小紫　なんの違はう、權八さん。

權八　小紫。

六三　サア／＼、キリ／＼別れをしろ。

ト割り竹にて舞臺を叩く。小紫、恟り

〽嬉し涙に取縋り、手桶の水を汲み交す、柄杓の緣長かれと、あの世を頼む南無妙法蓮華經々々々々々々。

ト此うち六三、手桶と柄杓を持つて出る。小紫、權八に水を呑ませなど三人よろしく

〽妙法蓮華經けふの今、あの世の雲と紫が、縛め切れて劍の山、直ぐに白井が修羅道も、これなん南柯の一夢にて。

ト此うち小紫、草に隱せし刀を出し、繩を切る。權八は直ぐに刀を取つて、六三に切つてかゝる。これより浪の音、凄き合ひ方。

六三　ヤア、こりや逃げ支度か。ソレ、何れも。

ト下座より以前の人數殘らず出て來る。權八、皆々を

切り倒す。此うち小紫、いろ〳〵と思ひ入れ。權八、
六三に止め刺す。

小紫　アヽモシ。

ト權八に取縋る。

〽眠りの夢は覺めにけり〳〵。

トこれにて正面題目の石碑、前へ倒れると一間の屏風
になる。後は黑幕、芦原松原殘らず龕燈返しバツタリ
と變り、太夫座を消す仕掛けにて、道具殘らずよろし
く替る。

本舞臺、一面に小紫の座敷。眞中、暖簾口、床の間
東西障子屋體。簞笥長持、下手、衣桁、誂らへの通
り道具納まる。

ト直ぐに屏風を引退け、權八、下着のまゝ駈け出す。
後より小紫、襦袢衣裳にて駈け出す。

權八　小紫、この間に早う。

小紫　權八さん。

ト兩人よろしく、あたりを見て

權八　ヤヽ爰は矢ッ張り其方の座敷。

小紫　ほんになア。所はしかも鈴ケ森。

權八　この權八は科人にて

小紫　既に危ふいその場より

權八　二人連れ立ち逃げうとした

小紫　そんなら今のは

權八　夢であつたか。

小紫　權八さん。

權八　小紫。

小紫　オヽ怖。

ト兩人ゾッとして、小紫、權八に抱きつく。この時奧
にて

六三　オイ〳〵、その棚を吊る座敷は、爰だ〳〵。

小紫　あの聲は。

六三　オヽ、爰の座敷か。

ト會ひ方になり、暖簾口より六三、股引三尺帶の拵ら
へにて、櫻の小割と鋸を持ち出て來り、ゾッとする思
ひ入れにて

六三　とんだ夢もあるものだ。煙草休みにトロ〳〵とやつ
て居るうち、思ひ出してもゾッとする程、ビッショリ汗
をかくやつサ。

ト小紫、思ひ入れあつて

小紫　エヽ、お前は六三さん、そんならお前も。
六三　サア、聞きなせえ。鈴ケ森にて馬の口取り。
權八　ムウ。すりや、その夢を、アノこなたも。
　ト六三を見て愕り。
六三　その時の科人に、よく似た客人。
權八　なんと。
六三　廓の若へ名は深見と呼べど、慥かに權八。
　ト權八に寄らうとするを、小紫、莨盆にある紙包みの金三兩を打ちつける。
　アイタヽ。
　ト取つて
　こりや小判で三兩。
小紫　主から祝儀。
六三　ムウ。すりや、切られたと思つた夢も
小紫　エヽ。
六三　身に金が入つたわえ。
　ト金を懷中へ入れる。權八、ムウと寄るを、小紫、煙管にて六三の頭をはる。木の頭。それなりに六三、莨をのみ、手を上げて禮を云ふ思ひ入れ。權八、小紫の襠裲の内に隱れる。この途端、よろしく

幕

二番目二幕目

仲の町の場
三浦屋の場
日本堤の場

淨瑠璃——其小唄夢廓——清元連中

役名——白柄十右衞門實ハ幡野長兵衞。本庄助市。本田丈八。竹永勘六。絹屋彌市。仲居、おまき。福島屋清兵衞。子分、源右衞門。同、早介。同、五郎八。同、辰松。鶉の權兵衞。三浦屋初紫。藝者、かしく。長兵衞女房、おとせ。遣り手、お松。三浦屋小紫。大工、かざりの六三。深見十三實ハ白井權八。

本舞臺、三間の間、仲の町茶屋。正面、横繪の襖張り物。よき所に神棚、障子の衝立立て、軒に、福島屋と云ふ半暖簾。入り口に長暖簾、上げ縁、青簾。下座の口、木戸、誂らへの通り。幕の内より舞臺に床几三脚直し、丈八、勘六、中月代、大小、浪人の形。

彌市、羽織、町人にて、酒肴取散らし、唐拳をして居る。おまき、仲居、前垂れにて、酌をして居る。燭臺、行燈よろしく、禿童の切れにて幕明く。

三人　コイ〳〵。

トよろしくあつて

彌市　コリヤ〳〵婆アで、おれが勝だワ〳〵。

丈八　途方もない。どこにそんな婆アがあるものか。

勘六　こりやア彌市が、負けだワ〳〵。

彌市　負けとは、これがほんの婆アであらう。

丈八　イヤ、婆アと云へば、隣の内では、二丁皷で剛敵に騒ぎやアがる。コレおまき、此方もちつと三味線でもかおれ。

ト三味線を見せる。

まき　お前さんも滅相な。そりや内の稽古三味線。唄がお聞きなされたくば、誰れぞ藝者衆をお呼びなされませ。

勘六　べら坊め、此方が藝者だ。唄はござれ、聲色はござれ。

彌市　イヤ、聲色と云へば、堺町の櫓下の番附。

ト懐より出し

なんと役者揃ひぢやないか。

まき　彌市さん、御覧にお出でなら、どうぞお供いたしたうござります。

彌市　イヤ、女を連れにすると、また小紫が悋氣を燒くわい。

さき　仰しやるものぢやね。

彌市　と云うて逃げたものよ。

丈八　おきやアがれ。

ト矢張り禿童の切れにて、向うよりおとせ、世話女房にて、供に小提灯を持たせ、出て來り、花道にて男に用を云ひつけ、提灯を取る。男は向うへ入る。おとせ本舞臺へ來り

とせ　おまきどん、きつう賑やかぢやね。

まき　オヽ、これは花川戸のおとせさん、なんと思し召して。

とせ　サア、この間から爰の清兵衛さんに、お掛合ひ申した事で。

彌市　清兵衛に掛合つた事とは、小紫が身請けの事か。

とせ　オヽ、こりや彌市さん、きつうおさえ〳〵しいね。

彌市　さえるかさえぬか、おれもその身請けの事で、清兵衛に逢はうと來て居るが、おまき、亭主はどこへ行つた。

まき　ハイ、誰か藝者衆のかしくさんの事で、近所へ行かれましてござります。

とせ　丁の內なら、大方見番にでもござんせう。わたしが行て。

ト行かうとする。

彌市　ア、コレ／＼、呼んでもらふと云ふところを、行つて逢ふのは、身請けの事を內證で極められちやア、この彌市が濟まない。おれも一緒に行かう。

丈八　イヤ、彌市も行かうとあれば、爰に待つても居られまい。コレおまき、深見と云ふ若衆が來たら、待たせて置いてくりやれ。

まき　ハイ／＼、畏まりました。

とせ　彌市さん、味な事を。わたしやわたしが用で、福清さんに逢ふに、お前が一緒にござんせいでも。

彌市　イヤ／＼、小紫が事を、どんな相談されうも知れない。手を引かれて行くべい。

とせ　エ、、滅相な。さま／＼の事を。

勘六　そんなら丈八、江戸町の河岸へ行くべい。

彌市　サア／＼、おとせどの。

ト手を取る。

とせ　エヽ、見つともない。わたしや先へ行くわいなア。

ト摺り鉦入り、傾城の出の鳴り物になり、丈八勘六は下座へ入る。おとせは彌市の手を振り切り、花道へかかる。彌市、捨ぜりふにて、おとせの先へ行く。此うち向うより鶉の權兵衛、傳法の拵らへ、下駄がけにて出る。後より若い衆、初船の紋の附きたる大提灯を持ち、後より初船、傾城、禿二人、手箱、煙管を持ち出る。彌市、鶉の權兵衛に突き當る。

權兵　エ、、このひやうたくれめ、眼を明いて通りやアがれ。

彌市　なんぢや、ひやうたくれぢや。

權兵　又ひやうたくれであるまいか。仲の町の萬燈のやうな明りの中で、人に突き當ると云ふがあるものか。大べら坊め。

とせ　ア、コレ、こなたは鶉の權どのではないか。

權兵　オ、、こりや親分のおかみさん。

初船　ほんにおとせさん、近頃はすつきり、きついお見限りでござんすね。

とせ　ほんに花魁。いつも御盛んで、おめでたうござんすわいなア。

彌市　コレ花魁、絹屋の彌市ぢやが、お詞はたいかの。

初船　アイ、惡口云うたり、無洒落なお客は、見ても見ぬ振り。

彌市　ハテ、惡い請けの。

初船　きついは女郎の常と云ふ事、それも大方知らぬであらう。

彌市　忌々しい。サア、早う行かう。

初船　おとせさん、マア、福島屋で酒一つ。

とせ　イエ〳〵、ちつと急な用もあれば。

初船　そんならそれをしまうてから。

權兵　姐さん、行つて來な。

初船　子供來や。

禿　アイ……。

ト清搔になり、おとせ、彌市、皆々と入れ替り、花道へかゝる。皆々本舞臺へ來る。おまき、捨ぜりふにて床几へかけさす。此うち向うよりかしく、藝者の拵へ。清兵衞、茶屋の亭主、後に附いて出て來り、おとせ、彌市に行き合ひ

清兵　ヤ、こなさんは幡隨のお内儀。

とせ　サア、今お前を尋ねて。

彌市　おれも一緒に行くところ。して、この美しい者は。

清兵　この間から出る、かしくと云ふ藝者。

かし　どなたか存じませぬが、不調法者、よろしう。

清兵　ハテ、いづれ挨拶はあれへ行て、お二人の用も聞かう。マア〳〵一緒に。

ト始終清搔にて、皆々舞臺へ來る。

まき　ヤ、旦那さん、今お歸りなされましたか。おとせさんや彌市さんが、御用があると仰しやつたが、道でお逢ひなされましたか。

清兵　サア、おれも今日見番の、茶屋の取持ちに呼ばれて、それからこのかしくどのゝ事で、大きに手間を取つた。時に氣の附かぬ。花魁に御酒でも出さぬか。早う〳〵。

まき　ハイ、畏まりました。

トおまき、奥へ入る。

清兵　時に皆さんえ。ちよつと御披露申しますが、このかしくと申すは、今度上方より下りましたと申すは、お客樣方へ表向き。誠は箱根近所に居つたとやら申せば、マア、筋は上方。花魁も御贔屓を。

まき　そりやモウ、小紫さんの座敷へ、度々來なんすゆゑ外の藝者衆のやうにも思ひません。氣立てのよささうな

と、内中で褒めて居やんすわいなア。

かし　イヤモウ、不調法には念の入つた不束者。どうぞ長うこの里に居りまするやうに、御贔屓なされて下さりませ。

清兵　さて、これからはおとせさん、彌市さんの御用を聞くにやア及ばぬ。小紫さんの

とせ　サア、その身請けは五百兩とやら。手付けも半金あげねばならぬところを、こちの人の顔なり、福清さんの挨拶、二百兩で取極めてやらうとの、この間から相談。マア、やう／＼都合して來ましたゆゑ、受取つて下さんせ。

ト懷より金財布を出す。

彌市　コレサ、清兵衞、この彌市も先度からの掛合ひ。二百兩で濟めば今渡す。おれの方へ身請けの札を落してもらはう。

ト同じく懷より財布を出す。

清兵　さうされては、中に立つこの清兵衞が。

とせ　外へやつては濟まぬぞえ。

清兵　イヤサ、それでも。

彌市　迷惑ならば、この身請け、一旦延ばすか。

とせ　此方の顔を立てさんすか。

彌市　返事はどうして

とせ　下さんすぞいなア。

權兵　姐御、氣を使ふ事はない。あの野郎が邪魔をするなら、この鶉がぶッ挫いて。

ト雪駄にて彌市をぶつてかゝるを、かしく、中へ入り

かし　ア、モシ、差出がましいがお二人さん、わたしが思案に附いて見やしやんせぬかいなア。

とせ　ナニ思案。

ト合ひ方になる。

かし　サア、神の御籤に准へて、お二人さんのその金を、心の内で取り分けて、その數次第で吉凶の、吉は結ぶの深い緣、凶ならばどうで遂げぬと、思ひ切つたがよいぢやないかいなア。

清兵　成る程、こりやアいゝ。おれもこの身請けの事が氣にかゝり、借りて來た御籤物。

權兵　サア／＼、双方金を出して、それで極めるがいゝ思案。

彌市　イヤサ、それではちつと此方の。

トうろつく。おとせ、金を出して

とせ　サア、彌市さん、お前も一緒に。
彌市　イヤ、それは。
かし　出しては具合が惡いかえ。
彌市　サア。
かし　どうやら譯ある。
彌市　ヤ。
權兵　金ならおれが。
　ト無理に財布を引ッたくろ。內より瓦出る。
清兵　ヤア、それやア瓦。
權兵　ソリヤこそ、化けが顯はれた。イケ圖太い噓つきめ。
彌市　ア、コレ、あやまつた〳〵。身請けせうにも金はなし、あつちの手付けを延ばさうと、存じた事も藝者めに星をさゝれて瓦の見出し。かはら〳〵と笑ふであらう。
禿一　平常わたし等を苛めなんす
禿二　罰が當つてよい氣味なア。
初船　どうなるかと案じて居たに、出かしやんした、かしくさん。
とせ　もう斯うなつたら、どの道此方へ、清兵衞さん。
清兵　その相談もマア奥で、ちつとのうち、酒でも呑んで
とせ　待ちませうが、禮がてらかしくさんも、どうぞ一緒に。
かし　わたしや三升屋へ口がかゝつて居るけれど、そんならちよつとお付合ひ。
初船　とても事に、どうぞお前の唄の一節、爰で聞きたい。聞かせておくれ。
かし　お恥かしいが、そんなら奥で。
彌市　詰まらぬ者はこの彌市。揚屋町で酒でも呑みに。
權兵　ドリヤ、おれも素見して來よう。
とせ　花魁、清兵衞さん。
かし　ドリヤ、御一緒に參りませうか。
　ト清搔になり、鶉の權兵衞は向う、彌市は下座、おとせ、かしく、奥へ入る。
初船　ほんにお內儀さんも、長兵衞さんの內方ほどあつて取裁きがきついものぢやなア。
清兵　イヤ又、その上を越してきついは、あのかしくかいなう。
初船　ソレイナア、あの子の唄が、早う聞きたいものぢやなア。
　ト誂らへの江戸節がゝりの華やかな唄になり、向うより十右衞門、誂らへの投げ頭巾、羽織衣裳庭下駄、白

柄の大小。後より源右衞門、早助、五郎八、辰松、四人、皆々傳法の拵らへよろしく、錦の刀袋に鞘を入れたるを差し、鷹揚に出て、皆々花道にとまる。唄一くさり一杯に切れる。

十右　春もやゝ景色調ふ月と梅。それにもまさる里の春、色なる酒に雪の肌、酒池肉林も目のあたり。なんと浮き立つ景色ではないか。

源右　成る程、親分の云ふ通り、大門を入るや否や魂ひが水戸さぐりの火の見へ飛び

早介　見世淸搔に氣を引立て、心が有頂てんと堪らぬ。

五郎　一寸先は闇の夜も、吉原ばかり月の眞夜中。

辰松　人間僅か五十年と、悟らぬうちの面白味。

十右　遊んで暮らすが一生の、ドリヤ福淸へ。

四人　乘り込まうか。

ト矢張り右の唄にて、皆々本舞臺へ來る。唄切れる。

淸兵　ヤ、、これは兼ねて御沙汰のござりました、彼のお大家の。

源右　オ、サ、白柄細のお頭。町人のおいらでさへ、習ひ覺えて兵法柔術。いつもの地廻りだと思ふと當が違ふぞナア親分、町人土民の事、軍士の妻なき者を待つと、待たる身も苦しからざる吉原通ひ。その名を包む白柄組、遊び連れとも一座とも、唱へに依つて君達へ

淸兵　そりやモウ、お名はどうなりと、マア〱、あの床几へ。

十右　咲き揃うたる花の傍らへ、萩の投げ入れ、御免なされ。

ト初船の側へ腰をかける。

源右　親分、氣の弱い。御免もへちまもいるものか。新手を出して色にしなさい。

十右　して、この君は。

淸兵　三浦屋の初船さんと申します。

十右　ムウ、すりや身が戀人はまだ來ぬか。

淸兵　サ、初會馴染みのお客樣、疾に迎ひに上げましたれど

早介　小紫が來ないと云つて濟むものか。亭主、早く行つて連れて來い。

初船　アヽモシ、小紫さん程の太夫さんが、初會馴染みが嬉しいと、つい仲の町へはござんすまい。さう自由になる女郎さん方なら、吉原の外で貰はしやんせいなア。

五郎　ヤ、此奴は〱、おれ達を千住か板橋の客と云やア

がるか。

初船　ぢやと云うて嘘ぢやなし。

辰松　ヤイ〱、さうおいらを安く見やアがると

四人　ふんばりとは云はさぬぞ。

ト立ちかゝるを、清兵衞、留めて

清兵　ア、モシ〱、所を丸める茶屋の役。御機嫌直しに花魁のお迎ひに

ト向うを見て

ヤア、行くまでもなく、アレ〱向うへ、杏葉菊の提灯は。

初船　ほんに三浦屋の小紫さん。

ト向うにて

小紫　皆さん、それへ行て逢はうわいなア。

ト太鼓、摺り鉦入りの出の唄になり、向うより若い衆、大提灯を持ち出る。後より小紫、傾城。若芝、三崎、新造にて手を引き、禿二人、手箱に煙管を持ち、お松遣り手にて付き出で來り、花道にとまる。

清兵　ヤア、これは花魁。

初船　小紫さん、待つて居たわいなア。

小紫　待つ身になるなと譬への一節、思へば今宵もその人に、逢はぬ鳴戸の浪荒く、癇癪酒の二つ三つ、過して爰へ來るうちも、ちよつと付合ひお知るべと、無理に引かるゝ袖の褄、それも他生の茶屋の緣と、思へばこれも苦界かいなア。

ト醉うたるこなし。

若芝　ア、モシ、花魁、危ならござんすぞえ。

小紫　イヤ、わしや醉やせぬぞえ。アイ、この小紫は慮外ながら。

三崎　モシ、それでもいつそ。

トよろつくを介抱する。

十右　ハヽヽ、醉はぬと云ふのは酒の癖。まだも手並を三浦の太夫、亭主、早くこれへ〱。

清兵　畏まりました。モシ〱花魁、マアこれへ。

小紫　子供來や。

禿　アイ。

ト清掻になり、皆々舞臺へ來り、お松、小紫のよろつくを見て

まつ　ほんに、酒に醉ふは變つたもの。下戸が餅に醉ふなら、このお松なぞは、大福餅と窩ころで、他愛があるまい。モシ花魁、初會馴染みのお客さん、ソレ、よいやう

に合點かえ。
小紫　ホヽ、それ程有り難いお客なら、ドレお側へ……
…。
　ト十右衞門の側へトンと腰をかけ
これでよいかいなア。
源右　シタリ、イカサマ、金の威光は凄まじいもの。三浦
の太夫、小紫ともあらう者が
早介　まだ一度も寢ないその先から、親分の側へトンと寄
つて
五郎　重ね扇か抱き柏、聖天の奢こゞり同然。
辰松　こりやア親分、しつかりと
四人　奢らざアなりますまい。
十右　イカサマ、張りの強い吉原の內でも、また指折りの
小紫が、初對面からべつたりと、鳥刺しの黐へ溜め鳥、
見ると聞くとは違ふもの… 皆喜んでくれ。帶紐解いて
寢る氣と見えた。
小紫　イエ、それも寢てから心次第。
十右　ムウ、してその心は。
四人　否か應か。
小紫　マア、否の方が十分ぢやわいなア。
十右　なんと。
小紫　サア、女郎と云へば、どの客にも、帶紐解くと思ふ
は野暮。例へどんな好い男も、心の程の座敷の執成し、
否と思へば雨霰、振つて去なすも苦界の表。
初船　又は見にくい醜男でも、眞實見えた情には、ついほ
ださるゝ女郎の常。客と間夫との譯も知らずに、帶解き
詮索。
小紫　オヽ、をかし。
源右　イヤ、その解かぬ帶をも、解かせるも金づく。
早介　張りと意氣地は高尾時代。
初船　イエ、吉原は昔の通り、仇目に知れぬ花の雨。
小紫　ふる身ふられ身相手の心。
源右　親分、こりやアいつそ云つた通りに。
十右　如何にも氣強う吐かす。小紫、身請けして抱いて寢
るワ。
淸兵　そりやこそお定まりの茶屋の迷惑。
初船　古いせりふが出たわいなア。
小紫　ナンノイナ、身請けせうが、どうせうが、遣り手衆
の強意見、親方さんの小刀針でも、怖いと思うて勤めが
ならうかいなア。

源右　すりや、どんな事でも怖い事は知らぬか。
小紫　空吹く風と聞いて居るわいなア。
十右　面白い。見せしめの爲、若い者ども、白柄組の向う見ず、ぞめきの奴等を相手にして
四人　手並の程を見せませうか。
小紫　その手並より此方は手紙。ドレ、文でも書かう。たより、よすが、硯借りておぢや。
禿二　アイ。
初船　そんならわたしも、中の尾張屋まで行て來たいが、小紫さん、お松どのを貸して下さんせ。
小紫　アイ〳〵。どうなと。ソレ、お松どん。
まつ　行きは行かうが、わしが行つたら花が散らうぞえ。
十右　おきやアがれ。亭主、飲める肴を、ソレ早く。
清兵　畏まりました。ドレ奥で……思ひ出した。モシ、小紫さん、先刻から奥に花川戸の彼の
小紫　おとせさんなら、若芝さん、三崎さんが云うて置いた言傳も。
若三　アイ〳〵、合點でござんす。
小紫　初船さん。
初船　小紫さん。

小紫　後にえ。
初船　子供來や。
禿二　アイ。
ト初船、若い衆、お松を連れ、清搔にて下座へ入る。禿、若芝、三崎、清兵衞は奥へ入る。禿、硯を持ち來る。小紫、屋體へ上がり、囁く。禿、奥へ入る。衝立の蔭にて小紫、文を書く。
源右　ア、コレ、なんでも手に合ふやうな強いぞめきが、うしやアがりさうなものだが。
十右　オヽサ、誰れ彼れの容赦はない。白柄組の手並を見せ、怖いと云ふ事を見知らせろ。
ト矢張り清搔にて、下座より、侍ひ一人出て來り、直ぐに舞臺を通らうとする。
早介　ヤイ〳〵、待て〳〵。爰を通るなら、下座をして通れ。
侍ひ　下座をして通れとは、どう云ふもんでごぜえす。
ト嫌な手をする。
辰松　ハア、此奴、半可通だな。わりやア、白柄組を知らねえか。
侍ひ　イヤ、一向そんな名は白柄組。

ト行かうとするを、襟髮捉へ辭儀をさせるうち、五郎八、大小を引ッたくり、十右衞門にちよつと見せる。五十右衞門、頭を振る。源右衞門、侍ひを突き倒す。五郎八、大小を投げ出し

五郎　なんと、白柄組の手並を見たか。

侍ひ　イヤ、妙々。

ト大小を抱へ、向うへ入る。引き違へて、町人出て來る

源右　ヤイ〳〵、下座をして通れ。

町人　オヽ、聞き及んだしつかり組か。

源右　知れた事。譯を知つたら助六もどき、股を潛つて行きやアがれ。

町人　如何やうとも。冷え者でござい。田舍者でござい。

ト皆々の股を潛り、下座へ逃げて入る。直ぐに下座より、醫者一人出て來り、通りかゝる。

辰松　ヤイ〳〵、爰を通るなら下座をして通れ。

醫者　ムウ。下劑なら大黄巴豆を、十分に調合いたさう。

辰松　べら坊め、白柄組だ。下座をしろ。

醫者　ムウ。そんなら名うての暴れ者か。

ト逃げようとするを、皆々引ッ捉へて、辭儀させるうち、脇差を取つて見せる。十右衞門、以前の通り頭を振る。五郎八醫者の脇差を投げ出す。早介、醫者を突きやる。醫者、起き上がり

無作法千萬。

ト捨ぜりふよろしく、向うへ入る。と直ぐに向うよう權八、着流し、一本差し、編笠を被り出て來り、舞臺に來る。

源右　爰を通るなら下座をしろ。

權八　なんと。

四人　白柄組の御來臨だぞ。

權八　ナニ、白柄組とな。

トきつとなる。

四人　それだに依つて。

ト四人、權八の襟髮を取つて、以前の通りにせうとするを、權八、見事に四人をのめらせる。

源右　南無三、此方が下座をした。

四人　おのれモウ。

ト脇差に手をかける。權八、突き廻し、一腰をヒラリと拔く。小紫、見附け惘り、ツカ〳〵と寄つて

小紫　ヤア、お前は深見さん、こりや何事。

初演當時の錦絵

三世坂東三津五郎の十右衛門　七世市川團十郎の權八

權八　小紫、爰は往來、我まゝに無體を吐かす暴れ者。
小紫　おやと云うて刃物三昧。
權八　イヤ、白柄組だけ血を見ぬうちは。
　ト振り上げる。四人縮まる。
小紫　ア、コレ。
　ト振り上げる手をヂッと留める。
十右　納められずば、この白柄が納めてくれう。
權八　なんと。
　ト十右衞門、五郎八に持たせて來た鞘を取つて、拔き身へしつくり篏め
ヤ、この刃物にその鞘の
十右　しつくり合ふは。
兩人　ムウ。
　ト兩人ヂッと思ひ入れ、合ひ方になる。
十右　さてはいつぞや箱根の澤。
權八　畑の宿りのその夜半に
十右　地震にあらぬ物音は
權八　破れかぶれと切りかけた
十右　光りもそれと行燈の
權八　灯し火消えて闇の內。
十右　手に殘つたるこの鞘の
權八　蒔繪の模樣は蔦唐草。
十右　慥かにそれと刀の合ひ紋。
　トこれにてほぐれ、銘々刀と鞘を引き
權八　してその鞘は。
十右　拾つた。
權八　なんと。
十右　小紫が間夫の客、牡丹と變る名の深見草、深見やら深間やら、その前髮へこの鞘を、なんと賣つてやりたいが、望みはないか。
權八　此方も見たらまんざらに、欲しうないでもないその鞘、その賣ると云ふ金高は。
十右　小紫が身の代程。
小紫　すりやアノ、それでわたしが身を。
十右　それが否なら差して居る、刀のその身を。
權八　ヤ。
十右　女郎の身請けか刀の身か、品は變れど變らぬは、身と云ふ文字がおれが望みだ。實名人に知らさじと、深見と名乘るは慥かに白井。
權八　イヤ、そんな名に覺えはない。廓へ通へば實名を、

誰れしも包むは皆一體。

十右　でもこの鞘にしつくりと、合ひしその身を所持するからは。

權八　イヤ、拾うたとあれば、そりや出來合ひの後家鞘だ。

十右　ムウ、否だと云へば身にかゝる、地金曇りも刀の鞘。それも返事が今ならずば。ムウ、それ〳〵……。

ト變つた合ひ方になり、あたりを見廻し、有り合ふ三味線を取つて來り

唐人が琴を斷つ、琴の交りを譬へて云はゞ、其方達二人、この白柄組と三人は、三筋の糸も返事に依つて、まッこの如く

ト一腰を拔き、糸を切り

切ッつはッつの胡弓の糸筋。

權八　疵持つ足の胴を据ゑ

小紫　調べの風に

十右　音もそれと

權八　思案も深見。

十右　小紫。

小紫　白柄さん。

十右　調子直して、後に逢はう。

ト唄になり、三人思ひ入れ。十右衞門、鞘を持つて、四人附いて下座へ入る。あと合ひ方。

小紫　譯は知らねど、刀の事からこの身まで、いろ〳〵の無理難題。よう堪えて下さんしたなア。

權八　合點のゆかぬあの後家鞘。どうして白柄が所持してゐるか。おれが取落したは箱根の畑村……ムウ。

ト思案の思ひ入れ。

小紫　エヽ、モヽ、そんな思案は後での事。この間怖い夢のその夜、歸らしやんしてから二三日逢はねば、百年も遠ざかりしやうに、今日は一入案じて居たが、モシ、溜め溜めの話しを。

權八　ハテマア、それよりは、心にかゝる今の思案。どうしたらよからうなア。

ト清搔になり、下座より丈八、勘六、出で來り

丈八　オヽ、權八どの、爰に居たか。

權八　ア、コレ、その名を滅多に云ふまいぞ。

丈八　成る程、里の香へ名は牡丹とも深見とも。

勘六　それを忘れて隱す名までを。

小紫　エヽ、モシ、隱すの隱さぬのと、人が聞くわいなア。

丈八　イカサマ、實に惚れた日にやア、世間へそれと明か

されぬ、暗い體の男でも。
小紫　ア、コレ、又かいなア。
丈八　オッと誤まり。時に深見どの、花魁の前で、ちつと色氣がない話しだが、爰に居る勘六もおれも、この頃の間の惡さ。
勘六　それに、出ると取られる竹の子勝負。それゆゑ氣の毒ながら
權八　竹に譬へのそのせりふは、二人に借りた金の事か。
丈八　サア、催促ぢやアねえが、どうぞ今
勘六　返しちやア下さるまいか。
權八　そりやハヤ違ひない、借りた物ゆゑ返しは返すが、今と云つて
丈八　出來まいが。
權八　サア、藪から棒、轡に馬を乘りかけられて、早急には。
勘六　コレサ／＼、僅か二十か三十の金で、出來ないと云ふは小店の客か
丈八　又は西河岸の客の事。名におふ三浦屋の小紫とも云はれる、花魁の深間客なら、そんなしみッたれた事を云はずと
勘六　此方も面工が惡いゆゑ、下から出て譯を云ふのだ。
權八　サヽ、さうではあらうが今爰には。
丈八　ないと云ふか。ハヽア、こりやおいらが貸しを踏む氣だな。
權八　イヤサ、全く。
丈八　さうでなかア工面なし、七所拵らへでも濟まさにやアならぬ義理の金。
勘六　四の五の云ふなら、おいらと一緒に。
權八　ムウ、そりやどこへ。
丈八　知れた事。われが兄分、幡隨が内へ連れて行つて
勘六　明るさ晴さをつけさせるワ。
兩人　權八、來やれ。
ト立ちかゝる。
權八　爪先から頭まで、屬魂世話になる上に、この體裁まで長兵衛どのには。
丈八　知らされなければ今返すか。
權八　サア、それは。
勘六　サア／＼……面倒な。うしやアがれ。
ト引立てる。
小紫　コレ、待たしやんせ。

初演當時の錦繪　三世尾上菊五郎の小紫

ト引分ける。
丈八　留めるからは小紫。
小紫　ソレ、借りた金、返しなさんせ。
ト紙包みの金を抛る。權八、取つて
權八　ヤア、こりや三十兩。
小紫　それで形がつく事なら。
勘六　つかないでどうするものだ、おれがのは二十兩。
丈八　この丈八は僅か十兩。
權八　小紫、忝ない……ソレ、二人とも分け取りに。
ト金を抛る。丈八、取つて
丈八　貸したものなら當り前。併し、死んだと思つた十兩
に
勘六　二十兩も生き返つた。
ト分けて出る。
權八　それで云ひ分はあるまいがな。
丈八　サ、此方はないが其方から、無理催促の手籠めにし
た
勘六　その勘定は御免さうめん。
小紫　エ、、ほんにわたしが女でなくばなア。
ト清搔になり、下座より若芝、三崎、出て來り

若芝　モシ〳〵花魁、お喜びなさんせ。奧へおとせさんが
來てござんして、お前さんの身請けの手付けが濟んだと
の事。
小紫　エ、、すりやアノおとせさんが。權八さん、聞かし
やんしたか。
權八　ムウ。それも皆長兵衞どのゝ深切。
小紫　サア、わたしもお前に添はるゝ事。僅かなりとも手
助けと、拵らへた金も今。
權八　ハテ、それも又、其うちに。
三崎　なんの苦勞にさしやんせずと、喜び酒を、おとせさ
んも
若芝　上げうと待つてござんす程に、マア花魁、奧へちや
つと。
小紫　行きは行かうがあの中でも、義理あるものは可愛い
男。なぜに。
若芝　エ。
小紫　儘ならぬぞいなア。
ト唄になり、小紫、若芝に手を引かれ、三崎、禿、附
いて奧へ入る。
勘六　權八どの。

丈八　貸しもしねえ金を貸したと、云ひ合せの立て催促。
巧く出させた三十兩。
ト權八、あたりへこなしあつて
權八　二世とかけたる小紫に、拵らへ事して金取るも、深い仔細のこの權八。神ならぬ身は知るまいが、無體非道も免してくりやれ。
丈八　成る程、どんな惡事をして居ても、色にやア金をなくするものを、女からまでせびり取るとは
勘六　金ツぽど慾の深見とはよく付けた。併し、おいらが取つても頭の金。しこたま溜めて何にするのだ。
權八　ハテ、その譯は云うて益ない事……マア、それよりはその三十兩、此方へ出しやれ。
ト手を出す。
丈八　寄越せとは虫のいゝ。
勘六　こりやアおいらが金にするよ。
權八　ムウ、おれに渡す約束で、云ひ合せした事も、ハ、ア、コリヤ金を見て欲しくなつたな。
丈八　知れた事だ。これまで廓で追ひ落し、又ある時はバツサリと、云はせて取つた金の符牒が少なさ。
勘六　この金取るが不承知なら、破れかぶれの仲間割れだ。

權八　なんと。
丈八　向う面ならどう思つて、切り取りするとも取れねえぞ。
ト權八、思ひ入れあつて
權八　ムウ……よいワ、二人にその金遣らう。
丈八　すりや得心して。
勘六　サ、人に洩らさぬ身の惡事も、云ひ合せてする上からは、親兄弟より懇意な二人。心變らず
丈八　そんなら矢ッ張り魚と水。
勘六　事がばれたら
權八　死なば一緒に。
丈八　とんだ色事だ。
權八　そんなら兩人。
丈勘　權八どの。
權八　今夜は馴染みか。
勘六　イヤ、根岸にいゝのが出來たゆゑ。
權八　行きやるか。
丈勘　ドレ、行きやせう。
ト清掻にて、丈八、勘六、向うへ入る。權八、後見送り

權八　流石は匹夫。一旦誓ひし義を捨つる本目竹永。あの樣子では心變り、この身の上にかゝるは目前。それと悟れど心よく、金を持たせて歸したは、心ゆるさす獵師の餌。根岸へ行くとあるからは、通りは知れた大音寺前。後追ひかけて。

ト尻を凜とからげ、思ひ入れあつて、また尻を下ろし清搔にて向うへ入る。と直ぐに流行り唄になり、向うより鶉の權兵衞。以前の形にて出る。後より助市、浪人者の拵らへにて出て來り

助市　コレ〳〵、權どの。道々も話した通り、急にかしくに逢はねばならぬ用がござるが、なんと貴公の差金で、逢ふ事は出來まいか。

權兵　そりやア鶉の權でござりやす。藝者や女郎を小手招くは、地廻りの當り前。併し助市さん、お前はこの町へ、松花堂の手習ひ師匠、それで候べく候かしくさんと、色の手本のやり取りだね。

助市　ア、コレ、昔は兎もあれ、今は浪人の渡世、其やうな猥らな事で、物の師範がなりませうか。

權兵　師範か思案か知らねえが、見かけは堅い石川流も、內證は色に大橋流。女をかくるはお前の商賣。

助市　ハヽヽ、そんな惡口を云はずと、マア、早うかしくに。

權兵　慥かあの子は、先刻音羽屋へ出てゐたが、おれが呼ぶ振りで呼んで來よう。マア、此方へ來なせえ。

ト舞臺に來る。奧にて

かし　アイ〳〵、ちよつと行つて參じます。

ト清搔にて、かしく、出て來る。

權兵　ヤア、いま呼びに行くところ、丁度いゝ間にかしくさん、旨い物を振舞はうか。

かし　何を權さんのじやら〳〵と。

權兵　サア、そのじやら〳〵と嶋榮螺、爰な畜類め。

ト助市の側へ、かしくを突きやる。

かし　ヤア、お前は助市さん。

權兵　なんと旨い物であらうがな。

かし　眞に嬉しうござんす。

ト拜む。

權兵　そりやこそ化けが顯はれたワ。併し、町へ入る師匠樣と、藝者家の色事を、見番へ知れぬやうに、二人ながら。

兩人　エ。

權兵　ドリヤ、また素見して來ようか。

ト流行り唄にて、下座へ入る。

かし　ほんに粹な權さん。それはさうと、よう逢ひに來て下さんしたなア。

助市　イヤ、來た譯はよくないが、急に話さにやならぬ事で。

かし　そりや又案じる事ぢやないかえ。

助市　イヤ、餘り案じぬ用でもない。譯は先度其方に渡した三兩の小判、ありやどうしやつたぞいなう。

かし　サア、わたしも今はこんな身の上。たまに話しも裏茶屋へ、心付けにやつてくれと、渡しなさんしたあの金、祝儀にやらうと思ふうち、世話になる小紫さん、全盛な程内證の手づかへ。廓の常とツイちよつと、貸すともなく預けてある金。

助市　それで讀めた。道理こそ大工の六三が、小紫から受取つた、金の包みに助市と、わしが名が記してあるゆゑ、それを囮に世話になる、梶野長兵衛どのゝきつい難儀。

かし　ムウ。すりやあの金は、なんぞ譯ある

助市　サア、わしも知らぬが、大吉小判の大の字は、わしが古主の大江の家の、金ぢやとあつて。

かし　その金なれば、なんで又。

助市　サア、その金は、一朝一夕には云ひほどかれる筋でもないが、マア、何にせい、ひよんな事してこの當惑。

かし　わたしもそんな事になるとは知らず、只の金ぢやと思うて。

助市　小紫に貸したは、色でも世話してもらふ爲か。

かし　エヽ、滅相な。なんのマア。

ト寄るを突き退け

助市　云ふな。初めは梶野長庵と云ふ、醫者の娘も今日より藝者、油斷はならぬ。

かし　又かいな。箱根の畑に佗び住居の折柄、父さんと連れ立つて、フッとお前を三島市、その夜の泊りに約束もお前は洒落でもあつたであらうが、わたしやそれから忘られず、間もなう父さんも不慮の御最期。今の兄さん長兵衛さんと、兄弟の固め、親子三人この江戸へ來たも、お前に逢ひたさ、二つには父さんの敵も知りたさ。

助市　そりやこの助市も同じ事。父助太夫さまの敵は、それと知りながらも、望みの品が手に入らねば、晴れて討たれぬ心の苦しさ。

かし　如何なれば云ひ交す、二人が二人

助市　討たねばならぬ敵あるとは。
かし　よく似合うた
助市　互ひの身の上。
かし　どちらが先へ巡り逢ふとも
助市　互ひの助太刀。
かし　助けると云ふ字が
助市　おれが名頭。
かし　命をかけると云ふ心で、コレ。
ト袖を捲り、腕を見せる。
助市　ヤ、助市命の
かし　入れ黒子。
助市　すりや、この上は女房かしく。
かし　エ、嬉しうござんす。
トぴつたりと抱きつく。流行り唄にて、道具廻る。
本舞臺、向う黒幕、一面の藪疊、石地藏、時の鐘にて道具とまる。
ト直ぐに下座より勘六、以前の形にて、ヒヨロ／＼しながら出て來り
勘六　なんだか素敵に暗い晩だが、あの權八めに押打ちをかけ、踏んだくッた金の祝ひに、喰つた酒で丈八は、素敵に醉やアがつた。夜の明けるを待つて居やうより、構はずと先へ行くべい。
ト唄を唄ひながら、花道へかゝる。向うより權八、悠悠と出て來り、花道にて勘六と摺れ違ひ、顔見合せ
權八　わりやア勘六ぢやないか。
勘六　權八か。
ト逃げうとするを、權八、拔討ちに肩先を切る。矢張り勘六、歩きながら
あの權八めも、外の者ならバッサリと、やるであらうがおれだけに、ムウ。
ト勘六、袈裟がけになり、前にパッタリ割れて倒れる。權八、につこり、ツカ／＼寄つて懷の金を取り、懷中して、死骸を揚げ幕へ蹴込み、本舞臺へ來る。下座より
丈八　オヽイ／＼、勘六やい。
トこれにて權八、頷き、後へ寄つて居る。下座より丈八、同じく醉うて出て來り
べら坊に早い足だ。竹永ぢやアねえか。
ト行きかゝる。

權八　本目丈八、待て。

トずつと出るを、透かし見て

丈八　ヤア、わりやア權八か。

ト逃げうとするを、引留める。立廻りのうち、下座より町人、提灯を持つて、この立廻りの中へ入る。提灯を消す。これにて暗き立廻りにて、丈八、町人を權八の側へ突きやる。權八、町人を切る。丈八は身を遁がれ、腰の立たぬ思ひ入れにて、躄り轉んで向うへ逃げて入る。權八、町人の懷より金を取出し、合點のゆかぬ思ひ入れにて

權八　こりやコレ、金高百兩ばかり。

トこれにて死骸を探り見て

ヤア、こりやコレ町人體の男。すりや取違へて丈八を……無益の人を手にかけて、思ひ設けぬ百兩。何よりこれも望みの金に。

ト懷へ納める。

とは云へ本目を逃がしては、物のばれ口。この身の上もこれも時節か……ア、儘よ。

ト唄になり、こなしあつて、悠々と向うへ入る。あと合ひ方にて、道具ぶん廻す。

本舞臺、元の仲の町の茶屋に戻る。爰におとせ、行きかゝり居るを、彌市、引留め居る見得。騷ぎ唄にて道具とまる。

とせ　こりや、絹屋の彌市さん、なぜにわたしを其やうに。

彌市　留める譯は、先刻も云つて置いた、小紫にはこの彌市が、身上丸でぶち込んで、口說いても得心せぬゆゑ、いつそ身請けと思へども一文なし。ところに流石は亭主が幡隨だけ、こなたが今日來て

とせ　手付け金二百兩渡し、證文取引き、後金は出來次第と、爰の福淸さんが挨拶で、手を打つてしまつたりや、もう小紫さんは此方の物。この上は惚れて居る

彌市　權八に添はせる氣か。

とせ　エ。

彌市　深見と替へ名の色若衆、慥かに權八。

とせ　ア、コレ、なんの、そんなお人の所へやらう。あの小紫さんは、此方の長兵衞どのゝ、遁がれぬ筋目のお人ゆゑ。

彌市　いよ〳〵身請けの手付け證文、取つたが定なら、この彌市にちよつと。

とせ　イエ、見せる事はなりやせん。

彌市　そりやなぜ。
とせ　惚れ手の多い小紫さん、網目から手を出す程、身請けを競り合ふ折ぢやに依つて、手付け證文は迂濶に人に見せるなと、福清さんが
彌市　云ひつけたか。
とせ　それぢやに依つて。
彌市　イヤ、福清でも福助でも、云ひつけに頓着はない。是非その證文を。
とせ　達て見ようと云やしやんすりや、女でこそあれ幡隨が女房、彌市さんとは云はせませぬぞえ。
　トきつとなる。下座にて
源右　うしやアがれ〳〵。
　ト清搔になり、下座より源右衛門、清兵衛の襟首を取つて出て來る。後より十右衛門、悠々と出る。
清兵　これは御無體な。何をなされます。
源右　なんとするとは、親分の云ひつけを背きやア、どいつどなたの容赦はないワ。
清兵　ア、モシ、如何に白柄組ぢやとて、其やうな御無理ばかり。
十右　默れ。身共も心あればこそ、小紫が身請けの儀、最前申せど、三浦屋方へも申し入れず、それでも茶屋の役目が濟むか。
清兵　その段は御尤もでござりますが、疾にこちらへ先約がござりまして、最早手付けも相濟みました。
十右　して、先約束とは何者だ。
　ト男達の摺り鉦の合ひ方になり
とせ　ハイ〳〵、あなたはどなたか存じませぬが、即金渡して二百兩の手付け證文、受取りましたはわたしでござりまする。
十右　して、其方は何者だ。
彌市　この女は深見と云ふ若衆が身寄り。
とせ　ア、コレ、云うても云はいでもの事を……全盛の女郎、身請けなぞとは世間の聞え。
　ト云はうとする。
源右　名は云はれずば云はぬまで。誠先約なら、ナア親分。
十右　それ〳〵、手付け證文身に見せいサ。
とせ　イエ〳〵、これぱつかりは。
十右　ならぬと吐かすと、ぶッ放すぞ。
　ト柄へ手をかける。
とせ　仰山な。なんぼ女子でも、そんな横は聞いては居ま

せぬ。所はちつと場末なれど、住んで東の花川戸で、達衆と云はれる男の女房。滅多に見せてよいものかいなア。
十右 ムウ、すりや幡随長兵衞が
とせ アイ、女房のとせでござんすわいなア。
十右 女相手に大人氣ねえが、われが亭主が幡随だけ、見かけた證文見ずに置かうか。
とせ さう氣强う出さんすりや、此方も又どこまでも、見せる事はなりんせぬ。
十右 見事女の分際で
とせ 知れた事いなう。
十右 見るぞよ。
とせ 男なら見やしやんせ。
十右 なにを。
ト双方立ち上がりさうにする。清兵衞、中へ割つて入り
清兵 ア、モシ、お二人とも、爰で達衆の意地を立て抜いても、納まりの附けやうで、切ッつはッつになるまいものでもねえ。さうした時はわたしも掛り合ひ、茶屋の迷惑……ソシ、おとせさん、先刻誰れにも見せなさるなとこの福清が渡した證文なれど、理を非に曲げてわしに免じ
源右 おれがお頭十右衞門どのへ、御上覽に供へろえ。
とせ エヽ、やかましいわいなア。お前方には見せられねど、福清さんの迷惑さしやんすとある事ゆゑ、意氣張りづくを取措いて
十右 先約したに違ひないと云ふ證文。
源兵 早くお目にかけて下さい。
とせ さう云はしやんす事ならば。
ト懐より證文を出し渡す。十右衞門、披き讀んで
十右 成る程、手付け金二百兩、受取ると云ふ三浦屋四郎右衞門が證文。
トこの時向うにてバタ／＼。
清兵 ヤア、アレ／＼、七軒の方で大勢の聲。
トばた／＼にて、向うより早介、眉間を切られ、手拭にて巻き、走り出て來り
早介 ヤア、親分、源右衞門、とんだ事が出來た。
源右 早助、眉間を割られて、とんだ事とは、どうしたのだ。
早助 サア、五郎八と辰松の三人連れで、江戸町の角で、大工の六三と行き違ひの喧嘩。彼奴が手斧を振り廻すで

十右　すりやアノ、かゞりの六三とやらめが。
彌市　彼奴はおれも意趣のある奴。
　ト尻をからげ、力みかへる。此うち幕明きの辻番付を、
　十右衛門、證文と摺替へて
十右　子分の奴等は不時の口論。コレ女、證文返すぞ。
　ト辻番付を渡す。おとせ、それと知らず取る。この時
　またバタ〳〵。これにて十右衛門は屋體へ上がる。簾
　下りる。おとせ、清兵衛、慌てゝ下座へ入る。バタバ
　タにて向うより仕出し大勢出る。この中へ一人、大門
　會所と書いた臺提灯を持つて出て、舞臺眞中へ提灯を
　落し入る。この時向うより辰松、外に仕出し大勢、鉢
　卷、尻からげ、六尺棒、薪ざつぼなど持ち出る。後よ
　り六三、これも鉢卷、尻からげ、手斧を振り廻し、叩
　き合ひの立廻りしい〳〵出て來り、皆々を追ひ廻すと
　逃げて入る。彌市、出て、六三、叩き合ひ、あたりを
　見て
彌市　コレ、六三、皆うせ居つて爰には居ぬ。
六三　すりや、首尾よく行つたか。
彌市　仕事はうまいぞ。
六三　まだうまいはコレ
　ト懐より手紙を出し
　梶長めが所から來たこの手紙。おれが名の所を引ッ裂い
　て
　トそこにある提灯を見て
　大門會所と書いた提灯へ、斯う括し附けて置きやア、今
　日の仕事も表沙汰。ナ、これで幡随長兵衛と同士討ちさ
　せる工風。
　ト提灯へ手紙を附けて、目に立つ所へ置く。
彌市　大工とは、大きに上出來だ。
　トこの時奥にて
大勢　暴れ者はどこへ行つた。
六三　そりやこそ又も云ひ合せだ。
　ト手斧を振り廻す。
彌市　合點だ。
　トよろしく立廻り。
六三　べら坊め、本當に打ちやアがつた。
彌市　これは誤まり。
　ト會釋する
六三　何をおのれが。
　トこの仕組みよろしく、清搔にて道具鷹揚に廻る

本舞臺、三間の間、三浦屋の下座敷、尤も高二重にて、太夫座前、緣に伊豫簾一面にかゝりあり、梅の立ち木大分、駒鳥の合ひ方にて道具とまる。
ト下座より若芝、三崎、禿二人、出て來り
四人　手の鳴る方へ〳〵。
ト　お松、手拭にて目を隱し出て、皆々を追はへ
まつ　オッと、捕まへて酒吞ます。
トよすがを捉へ、手拭を取り
捕まへた〳〵。サア〳〵よすが、われにしたゝか吞ませるぞ。銚子を持つて來い。
若芝　ア、コレ、お松どん、皆のしめしをするお前が、子供を捉へて、措かしやんせいなア。
まつ　そりやこそ番新に叱られた。追ッつけお前も遣り手にならうが、さう小言ばかり云つたとて續くものか。さうして、あの深見さんはござつたかの。
三崎　アイ、花魁と今次の間で
まつ　また痴話か。久しいものだ。
禿一　オヤ、そんな事を云ふと、花魁に告げて
禿二　また叱れるぞえ。
まつ　女郎に叱られる遣り手があるものか。うぬ等をおれがまた叱るワ。
禿一　そりやこそ鬼婆アが、怒つた〳〵。
まつ　なんだ、鬼婆アだ。エ、、その口を。
ト立ちかゝる。
若芝　コレ、お松どん、子供でござんす。堪忍しなさんせ。
まつ　イヤ〳〵、癖になりやす。
三崎　それ〳〵、矢ッ張り鬼婆アぢや。
まつ　もう料簡が。
ト清掻になり、三人を追ひかけ奥へ入る。若芝、殘り
若芝　花魁の手付けが濟んで嬉しいけれど、戻つてござんしてから、權八さんの濟まぬ素振り。また小紫さんと口舌せにやよいが。ア、、座敷の世話も、氣の揉めたものぢやわいなア。
ト清掻、通り神樂にて、若芝、奥へ入る。と眞中の太夫座を、段々下へ引く。上より三間の高屋體、伊豫簾かゝりたるを引き出す。知らせあつて、下の太夫座の簾上がる。内に清元連中居並び、直ぐに前彈きにかゝる。梅に鶯鳴く。
〽間夫と云ふも廓の名、客と云ふも廓の名、嘘と眞の分

け隔て。
ト伊豫簾一面に上がる。向う金襖。上の方に小紫、琴を調べて居る。下の方に權八、炬燵に腰をかけ、尺八を吹き居ろ。
〽それも啼く音の鶯も、梅に三浦の小紫、粋な由縁と我れながら、我が爪音と掻き鳴らす、思ひ竹の尺八も、戀慕流しは權八が、一夜ぎりとは氣にかゝり、また黃鐘の調子とて、合せられても春の夜の、夢もさながら合の手に、すねて見せたるこぶ柳、煙る柳の黃盆、互ひに引き合ひ顏外け、身を外けたる月見草。
ト此うちよき程琴尺八入り、それより濡れ模樣よろしくあつて
小紫　權八さん、先刻にまでも今までも、機嫌ようして居ながら、なぜに急に其やうに。
權八　腹が立たいでならうか。コリヤ、最前の白柄とやらが相手になつたとの事。それ聞いたら、胸が燃えて身が裂ける。
小紫　アレマア、そんな廻り氣ばつかり。
權八　イヽヤ、吐かすな。エヽ、おのれはなア。
〽人の心と飛鳥川、今日の今まで其やうな、移り心のひも鏡、冷たい心はオ、それよ、女郎の誠と玉子の四角、泣いて騙してあやなして、噓つき初めを正月か、男をかける輪飾りは、慾德棚の惠方から、ちく大黑がござつた、踊りもつてござつた、口から出ほう大黑舞。天てれん女郎の能には、一にたわけの文枕、二に二世かけた張りもなく、三にさながら仇惚れの、慾大黑をむさいなへさう云はんすりや德若に、御全盛とてわしに逆らひましんます、客立歸る朝より、水も漏らさず相惚れは、誠の色にさむらひける〽それに其よな胴慾な、若水臭い拗ね詞、辛い勤めの其うちも、情は賣れど心まで、賣らぬわたしが苦界の誠、緣に引かれて破魔弓の、やがて廓の年明けて、名も呼び返す嬉しさを、樂しむ甲斐も七草と、疊に伏して泣く淚、目も春雨に染めぬらん。
ト口說き模樣よろしくあつて
權八　オヽ、恨みは理りながら、術ないこなしは緣に引かれて、共に憂き目を見せまい爲。
小紫　エヽ、なんとえ。
權八　サア、仔細あつて多くの金子、調達せねばならぬ權八。身を捨てゝこそ浮かむ瀬も、心に思はぬ案じのさまざま。同類の本目丈八めが心變り。もしも彼奴めに訴人

されては、この程見しは正夢にて、刑罪に遭ふは知れた事。
權八　ムウ、そりや先度の夢が正夢で。
小紫　愛想が盡きたか。小紫、さらば。
ト行かうとするを留めて
小紫　アヽモシ、なんの斯うなつたら、死ぬるも生きるも兼ねての約束。
權八　すりや、立退くなら一緒に行くか。
小紫　世話になつた親方さんへも、幡隨さんの深切にて、手付けが濟めばせめての云ひ譯。
權八　そんなら、いよ／＼今宵のうちに。
小紫　立退くまでもお前の前振り。人目に立てば、どうぞマア。
權八　イカサマ、姿まで變へ逃げ隱るゝと、世の嘲りも、望みの叶ふまでの辛抱。
小紫　すりや得心して下さんすか。
權八　如何にも。
小紫　嬉しうござんす。幸ひあそこに鏡臺もあり
ト、ぢつとこなしあつて
血筋と撫でし黒髪も
權八　剃らねばならぬ男なり
小紫　胸の鏡もかき曇る、涙に櫛笥取り添へて
權八　心の内の亂れ髮。
小紫　結ひ直してあげうわいなア。
〽散ればこそ、身に降り積る花吹雪、果敢なき緣の合せ砥に、かゝる思ひがあらうとは、神ならぬ身の權八が、祝うて落す前髮も、涙で揉んで剃り落す、向ふ鏡に小紫男なりせし俤を、見交す袖も比翼塚、後の浮名に殘るらん後の浮名に殘るらん。
ト此うち權八、元服、小紫、よろしくある。淨瑠璃切れると知らせあつて、太夫座を消す。合ひ方になり、奥よりおとせ、二重に出で來り
とせ　權八さん、めでたい元服。
小紫　似合うたかえ。
とせ　この祝ひには手付け證文。
ト遣るを、權八、開き見せ
權八　ヤヽ、こりやコレ、堺町の辻番付。
とせ　エヽ。すりや白柄とやらは、騙りであつたか。
ト皆々恟り。この時丈八、窺ひ出で
丈八　科人の權八。

トかゝるを、權八、丈八を投げ退ける。丈八、有り合ふ鏡を持つて打つてかゝる。おとせと立廻りに、權八鏡にて顏を見る。おとせ、見て

とせ　よう似合ひました。

トこれにてほつれる。おとせ、燭臺を消す。丈八、起き上がるを押へ、小紫、權八、ヒツタリ抱きつく。

ア、、烈しい風な。

ト双方こなしよろしく、簾下りる。この道具を上へ引いて取ると、太夫座を廻り臺へ戻す。道具廻る。

本舞臺、三間の間、板を打ちたる栗丸太の垣。この前、堀の心、塵芥捨つるべからずの高札。爰に十右衞門、以前の子分四人、立ちかゝり居る。時の鐘、どら打ちにて道具とまる。

トばた〳〵にて、向うより六三、彌市、安提灯を持ち直ぐに舞臺へ來り、皆々を見て

彌市　オヽ、皆爰に待つて居たか。

六三　して、約束の證文は。

十右　首尾よく爰に。

ト出して見せる。

四人　持つて來ました。

十右　コレサ……もうこの證文さへ取れば、白柄組を取措いて

四人　目立たぬやうに脫がつしやりませ。

ト十右衞門、羽織、頭巾、上着を取り、誂らへの形になる。四人は手傳ひ、脫いだ衣裳を風呂敷へ包み、大小を一本つゝ差す。十右衞門、一本差しを取つて差し。此うち捨ぜりふよろしく

彌市　さう化けの皮を顯はした所は、さもないが、先刻仲の町で、白柄十右衞門と、きつぱを廻した所は、きついものであつた。

源右　イヤモウ、あゝした所は、坂三津でも出來ますまい。

十右　イヤモウ、梶野長兵衞と云はれては、ちつとは男も立てる身で、こんな事を頼まれてするも、此方にちつと望みあるゆゑ。

早介　それサ、わしどもゝ長兵衞親方に頼まれたればこそ眉間へ鴨の血を塗つて切られた眞似。

五郎　腕も利かねえで、無性に氣取つたり、薪ざつぱの叩き合ひ。

辰松　よく怪我もしないもんでごんす。

彌市　時に六兄い、えて吉を早く。
六三　ほんに、それに長兵衞どの、そのマア摺替へた證文を此方へ。
十右　オイ〳〵。ソレ。
　ト渡すを、直ぐに彌市に遣り
六三　彌市どの、ソレ渡すよ。
彌市　忝ない〳〵。あの小紫に逆上せて、さま〴〵にやつて見たが、手に入らない上、內證は行きつく所へ預けて、身請けされた手付けを渡すと聞いて悔り。六三兄いに相談したところが
六三　そこがかゞりの名を取つたこの六三。小紫めを大仰に、口說いて見たがゆかねえゆゑ、又も工風で手付け證文、うま〳〵と捲上げてやつたからは、もう身請けしたも同然だ。
彌市　そこでこの名宛を、おれが名に書き替へ、此方の手付けにする工面。二百兩を生かす證文、十五兩で取るとは。
六三　安いと云ふなら、皆へも遣らにやアならねえ。早く寄越した。
彌市　合點〳〵。ソレ。
　ト渡すを六三、取つて
六三　こなさん達は、しみを云ふやうだが、一兩づゝに負けて下さい。
源右　ナニサ、わしどもは、長兵衞親分に賴まれた事。
三人　どうでもようごんず。
六三　さうしにやア、元締が割に合はない。ソレ。
　ト一兩づゝやる。
四人　そんならわしどもは、もう歸りませう。
十右　イヤモウ、大きに大儀だ。歸るなら次手に、この損料物を。
源右　わしが請合うて、富澤町から借りて來たから、直ぐに持つて行つて歸しませう。
彌市　歸すと云へばおれも又、この證文で用がある。一緒に行かう。シタガ長兵衞、お主は一人で暗いから、提灯を貸してやらう。
十右　そりやア忝ない。
　ト受取る。
四人　そんなら親分。
十右　急いで行きやれ。
　ト時の鐘にて、彌市、四人の子分、向うへ入る。

六三　ドレ、おれも行かうか。

ト行きかゝるを、十右衛門、留めて

十右　ア、コレ、六三どの、行くなら約束の。

六三　白柄組になつてくれろと、頼んだ雇ひ賃の三兩。ソレ。

ト金を三兩遣ろ。十右衛門、提灯にてよく／＼見て

十右　コレサ、おれが望む三兩は、この金ぢやアないわな。

六三　その金でないとは。

十右　ハテ、物覺えの悪い。あれ程約束した、ソレ、こなさんが、どう云ふ譯か大吉小判の三兩。

六三　ムウ、あれか……イヤ、ありやアならねえ。

十右　エ。

六三　ありやア内々詮議のある、大江家の紛失金。白井兵左衛門とやらが盗んだを、取られたとある二十兩のうちの金、包み紙に木庄助市とやら印あれば、こなたの世話にして居る、助市の事であらう。この書付けを持つて出りやア、差詰め助市は金の泥坊。

十右　サア、その金ゆゑに長兵衛が頼み。尤も助市どのも、屋敷を浪人する時分のその金ゆゑ、遣はれた事あれば、もしも親父助太夫どのが。

六三　親が泥坊なら子も同罪。これが知れりやア直ぐにこれこれ。

ト縛られる眞似をする。

その證據になる三兩が、どうして滅多に遣られるものか。矢ッ張り雇ひ賃はその三兩。

十右　ハテサテ、聞分けの悪い。只の小判を三兩ばかり欲しいとて、あんな事を頼まれる長兵衛ぢやねえが、人は寶と思はうが、助市どのゝ身の上に、思はぬ科の大吉小判。それ貰ひたいばつかりに、盗みに等しい術もする。爰の所を汲み分けて、どうぞその大吉小判を。

六三　男を立てるこなたが、其やうに云ふなら

十右　すりや聞分けて

六三　遣りもせうが、その代り又、貰ひたい物がある。

十右　イヤモウ、こなたの云ふ事なら。

六三　貴樣の妹の、あのかしくが貰ひたい。

十右　エ。

六三　小ッ恥かしいが、ほの字にれの字だ。

十右　成る程、餘儀ない事だが、ありやアちつと義理ある妹。おれが儘にも

六三　くれられないか。

十右　外の事なら何なりと。

六三　べら坊づらめ。外に望みがあるものか。馬鹿な野郎だ。

ト十右衞門キッとなる。

コレ〳〵、この六三を何とかすりやア、おれが持つてる大吉小判で

十右　ヤ。

六三　助市が直に、これ〳〵。

ト また縛られる眞似をする。

十右　ムウ……ハヽヽヽヽ、ナニ貴殿に向ひませう。さう云ふ事ならこの三兩も、貰はずに、ソレ返しますぞよ。

ト下に置く。

六三　入らねえとありやア、そんなら此方へ取つて置かう。

ト金を取りに屆む。十右衞門、提灯を吹き消し、脇差を拔きかける。六三、金を取りながら

なぜ明りを消した。

ト十右衞門、しやんとなり

十右　イヤ、躓いて提灯を消すやつサ。

六三　粗々ッかしい。

十右　そんなら今宵の事は

六三　互ひに沙汰なし。

十右　六三どん。

六三　靜かに行かつせえ。

ト時の鐘、合ひ方にて、眞の闇の思ひ入れにて、入れ代り、十右衞門は東の歩み、六三は本花道へかゝり、互ひに思ひ入れあつて

十右　性來よくないあの六三め、紛失金からおれへの押扶持。

六三　かしくめを貰ひかけても、一筋繩ではゆかぬ長兵衞。

十右　妹をやらねば助市どのへ、難儀を引き出す彼奴が素振り。

六三　いつそ後から殺らしたら、邪魔を拂つてかしくめを

十右　生け置いては何かの妨げ。取つて返して油斷を窺ひ

六三　長兵衞めを。

十右　あの六三めを。

兩人　ムウ、さうだ。

ト忍び三重になり、長兵衞、目釘をしめし、身拵らへする。六三、尻引ッからげて手斧を構へ、兩人、眞中へ取つて返し、突き當る。兩人愕りして、窺ひ〳〵思案する。双方摺れ違ひ、互ひに振り返り窺ふ思ひ入れ。

木の頭。兩人とも誰れだか解らぬ思ひ入れにて、双方よろしく、

ひやうし幕

二番目三幕目

花川戸の場

役名——梶野長兵衞。白井權八。長兵衞女房、おとせ。同妹、およね。子分、鶉の權兵衞。同、冥土の小八。子分、五郎八。絹屋彌市。本目丈八。白柄十右衞門。幡隨長兵衞。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、一間の押入れ。三尺二枚のまいり戸。上、結構なる佛壇。正面、暖簾口、この上神棚。下手、二重の前に四ッ花菱の腰障子。よき所に酒肴の進物札貼つてあり、表一間の物置、柳の立ち木、注連の張つた大井戸、好みの通り、上の方一間の障子屋體。爰に彌市、前幕の形にて女衒を一人連れ立ちかゝり居る。これをおとせ、世話女房の形にて留めて居る。下に丈八、前幕の形にて、捕り手を二人連れ、立ちかゝり居る。これを鶉の權兵衞、勇みの形。およね、世話娘の形にて、兩人して留めて居る。井戸端に小八、魚賣りにて、鯛蛸などを洗ひながら、内の樣子を見て居る。四ッ竹節の合ひ方にて幕明く。

權兵　こりやアみんな見知りのある、彌市どん、丈八どん。

よれ　大勢寄つて、なんでござんす、騷々しい。

とせ　理不盡な喧嘩を仕掛け、爰をどこぢやと思はしやんす。町人ながら、花川戸の、幡隨長兵衞が内ぢやわいなア。

彌市　オヽ、その幡隨長兵衞が内ぢやに依つて、今押しかけて詮議に來た。

丈八　留めだてすりやア爲にならない。ソレ、踏ん込め。

捕手　合點だ。

とせ　イヤ、そりやなりません。夫の留守に詮議々々と云うてぢやが、何も此方に詮議を受ける覺えはない。

權兵　門違ひだとあやまつて

よれ　とつとゝ去んでもらひませう。

彌市　イヤ、行くまい。詮議と云ふは、昨夜廓を駈落ちした小紫、二百兩の手付け金を渡しても、證文を騙られたら足なしの小紫。此方の内へ駈け込んだに違ひない。

女衒　それで詮議に來たのでごんす。
丈八　まだそればかりぢやアない。小紫が居るからは、權八も一緒に居るに違ひない。これまで方々の辻切り沙汰、兵法に達して居る權八と、感のついたその上に、昨夜竹永勘六を、バッサリやつた人殺しの、詮議をせん爲
捕手　代官所より捕り手の役人。
丈八　達て出さにやア
敵皆　家搜しだぞ。
　ト立ちかゝるを、おとせ二重の疊の上にとんとゝ行く。
とせ　イヤ、代官所を笠に着て、詮議と云はしやんしても留守を預かる女房の役。家搜しさす事ならぬわいなう。
權兵　女ばかりと思ふか。幡隨長兵衛が子分、痩せても鶉の權も爰に居る。
小八　さうだ〳〵。先刻から聞いて居るが、この冥土の小八も、四文と出かけて腰押しだ。
彌市　こま言云はずと、ソレ家搜し。
敵皆　合點だ。
とせ　イヤ、さうはならぬ。
　ト敵役皆々、奥へ踏ん込まうとする。おとせ初め皆々留める。立廻りに捕り手、奥の暖簾口へかゝると、奥より長兵衛、好みの形にて、煙草盆を提げて出て來り、捕り手を左右へ投げる。彌市、丈八、來るを見事に投げる。合ひ方になる。
とせ　ヤア、こちの人。
よれ　よい所へ兄さん。
權兵　親分、此奴等が來やアがつてな。
長兵　いゝワ、打ッちやつて置け……およね、茶を一つくれろ。
　ト云ひながら下に居る。およね、茶を酌んで來る。長兵衛、飲む。彌市、丈八、思ひ入れあつて
彌市　コレ、幡隨長兵衛、イヤ幡長。よう人を投げ居つたな。
丈八　斷わりなしに、ヒヨッと拋り出して、落ちつかうか落ちつかうか。
　ト長兵衛、思ひ入れあつて
長兵　見りやア絹屋の彌市に、本目丈八、まだ外にも二三人、この長兵衛が晝寢して居る所へ來て、何を騷ぐのだ。
彌市　人殺しの權八が
丈八　詮議に來たのだ。
長兵　ハア、その二人が見えぬと云つて、なんで長兵衛が

内を家捜しと吐かすのだ。
彌市　知れた事だ。日頃こなたが世話をする權八に、くツ付いて居る小紫、二人の者が見えねえ日にやア、爰の内へ祟りの來るは當然。
丈八　その上、家捜しせうと云へば、ならぬと云ふが猶疑がはしい。
權兵　オヽ、ならねえから、ならねえと云つたが、どうした。
長兵　エヽ、やかましい、默つて居ろ。
丈八　コレ長兵衞、おいらが料簡から出た事ぢやねえ。
捕手　代官所よりお指圖だ。
ト長兵衞、思ひ入れあつて
長兵　成る程、こいつはよく仕組んでうしやアがつたな。代官所のお役人より外に、この長兵衞を御存じないお方は一人もないワ。それになんだ見極めたでもなくつて、家捜しだの詮議だのと、ひよつと家捜しをした上、二人が居ずば、どうせうと云ふのだ。
彌市　オヽ、その時はおいら二人が首を
丈八　並べて見せるワ。
長兵　面白い。その詞を忘れるなよ。二階は云ふに及ばず、押入れ物置。マア、それよりやアこの疊の下から。
ト疊を上げようとするを。おとせ、慌て、長兵衞を突き退け、上にとんとゝ居て
とせ　滅相な。爰明けて堪るものかいなア。
長兵　ハテ、彼奴等へ面晴れ。おれが方から家捜しをして見せ、あいつ等が首を取るワ。
トおとせを引き退け、上げうとするを又留めて
とせ　お前もマア、上げては惡いわいなア。
彌市　それ〳〵、女房がさう云ふからは
丈八　疑はしい床下。
トかゝらうとするを、權兵衞、小八、兩方を隔てゝ
小八　手出しをすると叩き挫くぞ。
とせ　サア、例へなんであらうと、一旦わたしがならぬと云つた家捜し、それをお前が、なんぼう匿まうた覺えがないと云うて、留守を預かるわたしが、どのやうな事を、イヤサ、どのやうに云はしやんしたとて、爰を明けさせては、わたしが潰れる。サア、女房の顏が、モシ、潰れるわいなア。
ト此せりふを一々長兵衞に呑み込ませる思ひ入れ。長兵衞、思ひ入れあつて

長兵　成る程、こりやアお主の云ふが尤も。おれが留守に内を預かつて居る、女房のお主が、一旦ならぬと云つた家搜し。おれがする日にやア、成る程お主の顔が潰れる。爰は一番女房を立て……ならないぞ〳〵。サア、野郎達家搜しをして見やアがれ。息の音をぶッ留めるぞよ。

彌丈　サア、そりやア。

長兵　代官所のお指圖と、僞はりを吐かして來たうぬら。一々此方から訴へようか。

彌丈　サア、そりやア。

皆々　サア〳〵〳〵。

長兵　キリ〳〵出て行きやアがれ。長居をすりやア、ぶん毆るぞよ。

ト莨盆を取つて立ち上がる。皆々捨ぜりふにて逃げて向うへ入る。長兵衞、後追ひかけて門口まで出て

サアどうだ。家搜しをして見ないか。エヽ、尻腰のねえ奴等だ。

ト思ひ入れあつて元の所へ來る。權兵衞、小八、捨ぜりふにて無性に力む。

よね　ほんにマア、兄さんの晝寢して居やしやんすを、留守ぢやと云うたりや、そこへ付け込んで來た心意氣が憎いわいなア。

とせ　わたしやちつとのうち、大抵氣を痛めた事ぢやなかつたわいなア。

長兵　そりやアさうと、今日はお主の誕生日だが、なんぞ拵らへる積りか。

とせ　アイ、お前が常々誕生日を祀るは、親達へ孝行ぢやと云はしやんすに依つて、毎年忘れず產土神樣と一緒にあれ見やしやんせ、佛壇も掃除して、お位牌もちやんと飾つて置いたわいなア。

小八　おかみさんが、いつもの通り賴むと云ひなすつたから、今日は外の商ひはやめて、此方の誂らへ物ばかり買ふ積りで行つたが、不漁で困りました。

ト洗つた魚を平臺に乘せて

一枚の鯛は濱燒き。後の一枚は、平種と潮の積りサ。

長兵　そんなら今夜は、久し振りで小八が料理を食ふのだな。

權兵　すつぱりと、八百善でやつてくりや。

小八　そりやア百も承知よ。およねさん、白魚が來たら呼んでくんねえよ。

よね　今朝から幾人も來たに、早う云うて置かしやんすれ

ばよいに。

小八　全體一緒に買つて來る積りで忘れたのよ。

ト四つ竹節になり、向うより五郎八、白魚賣りにて出て來り

五郎　白魚〻〻。

ト呼びながら舞臺へ來る。

とせ　およねさん、ソレ、丁度白魚を賣つて來たによ。

よれ　噂を云へば影とやら……モシ、白魚屋さん、ちよつと寄らしやんせ。

五郎　アイ、もう仕舞ひだから、どうぞみんな買つてくんなんせ。

ト荷を下に置く。權兵衞、五郎八を見て、おとせの袖を引き

權兵　モシ〳〵、おかみさん、彼奴は慥かに昨日の、白柄組の手下でござります。

とせ　ほんに、それに違ひはないわいなア。

ト權兵衞、駈け寄つて

權兵　騙りの相摺り、いゝ所に來やアがつたな。

ト引ッ捕へにかゝるを、五郎八、振り切り逃げる。立廻り、曲撥になり、五郎八、逃げて向うへ入る。權兵衞、後を追ひかけ向うへ入る。

小八　白柄組が白魚賣りとは、とんだ取合せだ。

長兵　ひよつと人違ひぢやアねえかえ。

とせ　イエ〳〵、違ひないわいなア。

小八　そんならこれから、料理番と出かけよう。

よれ　ドリヤ、わたしも手傳ひませうか。

ト合ひ方になり、小八、盤臺を持ち、およれ付いて奥へ入る。權兵衞、思ひ入れ。

長兵　おとせ、そんならお主は昨夜から、二人の衆を。

とせ　長兵衞どの、免して下さんせ。ちよつとお前に話さうにも、昨夜から何やかやに取紛れ、話しをする間もござんせなんだが、吉原にも置かれぬ譯で、二人ながら。

長兵　すりや、二人ともに、この下家に。

とせ　イエ〳〵、ひよつと話し聲でもしては惡いに依つて、この下家には小紫さんばかり。權八さんは、あの物置に。

長兵　知らぬ事とて今の詮議。ハテ、危ない事であつたの。併し、物置はさうでもあるまいが、床下は濕氣で冷えやう。して、食べ物はどうした。

とせ　そりや今朝、飯が出來ると、よいやうにして置いたわいなア。

長兵　そんならこの火鉢でも。

ト兩人して、火鉢に火を入れ、疊を上げて床下へ入れろ。唄になり、向うより十右衞門、少し老けたる拵らへ、羽二重着付け羽織、茶の袴、大小にて、兩人の奴附き、前幕の提灯を風呂敷に包み、持ち出て來り

十右　案内いたせ。

奴一　ハツ。

ト兩人、先へ駈け拔けて

賴まう、幡隨長兵衞どのと申すは、これでござるか。

とせ　ハイ、長兵衞は手前でござりますが、どれからお出でなされました。

奴一　白柄十右衞門。

奴二　直々これへ

兩人　お出でゞござる。

長兵　ナニ、白柄十右衞門どのが。

ト長兵衞、おとせ、顏見合せ、思ひ入れ。此うち十右衞門、門口へ來り

十右　許し召されい。

ト内へ入り、ズツと上へ通る。奴二人も内へ入り、扣へる。

其方が長兵衞夫婦の者か。

長兵　御意にござります。お名前は兼ねて承り及びました白柄十右衞門どの。町人風情の私し宅へ、お出で下されましたには。

十右　不審は尤も。その品これへ。

奴一　畏まりました。

ト提灯を長兵衞が前へ直す。

十右　その品存じ居るか。

ト長兵衞、風呂敷を解き、よく〳〵見て

長兵　こりや吉原の會所の提灯。事々しく存じ居るかと、御意なされましたは。

十右　イヤサ、この提灯を見たらば、惘り仰天、其方の動きは取れまいが。

長兵　何か御樣子ありげなお詞にはござりますれど、只左樣にばかり仰しやつては、一向に解りませぬ。憚りながら町人の耳へも入りますやうな、假名で仰しやつて下さりませ。

十右　如何にも、仔細とくと聞かすであらう。存じの如く我れらは、鎌倉の渡邊鞍馬八流の兵術を傳へ、我が門弟は殘らず白糸卷の大小を帶せば、世擧つて白柄組と稱す

れど、大禄を賜はる身を、猥りに遊所へ入込んで、男達同然に徘徊は致さぬぞよ。然るに昨日、吉原仲の町に於て、白柄十右衛門と身が名を名乘り、傾城小紫と云ふ女が、手付け證文を騙りたる者ありと巷の風聞。捨て置き難く直さま立越え、詮議に及びしところ、その場に殘りしこの提灯へ、結びつけたる書付けありとの申し分。手がゝりにもならんと、持たせ參つたるこの書付け。とくと披見いたせ。

長兵　へイ。

　ト思ひ入れあつて、提灯に附けてある一通を取つて披き

ナニ／＼「兼ね／＼お頼みの通り、白柄組と僞はり、吉原へ入込み、手付け證文を騙り取り、首尾よく仕負ふせ候へば、望みの品お戻し下さるべく、この段委細承知仕り候ふ、以上月日、長兵衛。」

十右　宛名は切れて相知れねど、長兵衛とあるに紛れなし。何ゆゑに我が姓名を僞はりて、かゝる邪まを働らきしや。眞直ぐに白状いたせ。

奴一　達て陳ずるに於ては、正眞正銘白柄の手の內。

奴二　二尺八寸田樂刺し、長兵衛返事は

兩人　ド、どうだ。

　ト後に反りを打つ。長兵衛、思ひ入れ。

長兵　これはお歷々よりのお詞とも存じませぬ。この廣い世界に、長兵衛と名乘る者が幾人あるやら。それがどうして知れませう。また私しと名指して、御持參なされたには、なんぞ又しつかりと、お見極めなされた事でもござりませうか。

十右　コリヤヤイ、見極めた事があればナ、家來遣はし繩打つて引くわえ。例へ長兵衛と名乘る者、何萬人あるにもせよ、國々までも名の通つた長兵衛は、其方ばかりであらうがな。

長兵　その詞で、ちつと道行が分りました。モシ、旦那樣、そんなら長兵衛とあるこの書付けを持つて、あなたのお名を僞はり、手付け證文を騙りました、その長兵衛を、この長兵衛が尋ね出せと仰しやりますのでござりますか。

十右　如何にも。同じ名の不肖。さもなくば其方とても、明りは立つまい。

長兵　仰しやればそんなものサ。

　ト　おとせ、思ひ入れあつて

とせ　憚りながら、樣子を御存じなければ、左樣思し召し
ますは御尤も。女のいらざる差出た奴と、お蔑すみも
ござりませうが、お話し申しまするも面目ない昨日の證
裁。仲の町であなたのお名の、白柄組と名乘るその人に、
小紫さんの手付け證文を、騙り取られましたは、ハイ、
私しでござりますわいなア。
十右　ヤヽ、なんと申す。すりや昨日證文を、騙り取られ
し當人は、長兵衞が妻とな。
とせ　それゆゑに昨夜から詮議に、いろ／＼と心を痛めて
居りますわいな。
十右　すりや、この書付けの名の長兵衞と云ふ詮議は
長兵　この長兵衞がすつぱりと
十右　しぬいたその上へ
長兵　あなたのお名も
十右　晴らすぢやな。
長兵　おとせ、お出花でも拵らへやれ。
ト思ひ入れ。おとせ、七輪を煽ぐ。四つ竹節になり、
向うより八内、旅奴の形にて、スタ／＼と出て來り、
思ひ入れあつて、門口へ立寄り
八内　花川戸の幡隨長兵衞どのと申すは、こなたでござり
まするか。
とせ　左樣でござりまする。
八内　然らばこれに、梶野長兵衞と云ふ仁が、見えられた
でござらうな。
とせ　イエ／＼、そんな方は、此方ではござりませぬ。
八内　イヤ、只今梶野長兵衞どのゝ宅へ參りしところ、こ
の花川戸の長兵衞どのゝ宅へ參つたと申す事、しつかと
承つて後、罷り越してござる。苦しからぬ者、ちよつ
とお逢はせなされて下されい。
長兵　フウ、そんならなんと云はつしやる。梶野長兵衞と
云ふ者の所へ、尋ねて行かしやつたところが、この幡隨
が所と聞いて、又わしが所まで逢ひに來たと云はつしや
るのかな。
八内　左樣でござります。遠國より尋ねて來た者。是非今
日逢ひたうござります。
とせ　そりやモウ、折角お前が尋ねてお出でなさんしたな
れど、その梶野長兵衞さんと云ふお方は、ついに此方の
内へ來なさんした事がなければ、こりやてつきり、門違
ひでござんせうわいな。
八内　フウ、しかと花川戸の幡隨長兵衞どのと云ふ事を、聞き定

めて參つたれど、此方にて御存じないとあれば、もし聞き違ひでも致したか。何に致せ、ハテ、困つたものでござる。

十右　いま長兵衞の名の間違ひで、長兵衞と申す者を詮議なさんと思ふ所へ、表へ尋ねて來たのも梶野長兵衞。ハテ、同じ名もあればあるもの。

長兵　左やうサ。長兵衞々々が三人あるとは、こんな事を云うでがなござりませう。

八内　イヤ、どう考へて見ても、聞き違ひではござらぬ。此方の尋ねる長兵衞どのと申すは、秩父の國の者でござりますが、もしもその梶野長兵衞と申す者が見えてゞござらうなら、拙者は近所を行き廻つて參る程に、因幡の國から旅人が、尋ねて參つたとお傳へなされて下され。

　ト おとせ、こなしあつて

とせ　そんならお前は秩父の人を。

八内　ドリヤ、行つて參りませう。

　ト 矢張り四つ竹節にて、物置の下手へ入る。

長兵　ハテ、合點のゆかぬ。名は聞いちやア居るが、ついに逢つた事もない梶野長兵衞。今の奴の詞では、追ッつけ後で來るであらうが、何しに來るのか、とんと思ひ當らぬ。

とせ　どこの人か知らぬが、ひよつとお前、暮れから頼んで來てある、祭の喧嘩の仲直りの事か。但しは成田講の事でもあるまいかいなア。

長兵　ナニ、さうでもあるめえ……何に致せ、十右衞門どの。お聞きの通りの梶野長兵衞、爰へ來ると云うて、内を出たとあるからは、爰へ來るは必定。樣子に依つて、當つて見たなら、もしやこの

十右　書付けの長兵衞ならば、直ぐに捉へて事の實否を。

長兵　そりやお氣遣ひなされますな。ちつとでもキッカケがあれば、そこをせぐつてすつぱりと、事を分けるが達師の老舖。

十右　立派な男と聞き傳へ、今日わざ〲とこの所へ

とせ　お出でなされてお頼みの

十右　家名を僞はる

長兵　手紙の長兵衞。

十右　來る長兵衞は

長兵　白柄さま。

十右　奧で樣子を、相待ち申す。

　ト 唄になり、十右衞門、思ひ入れあつて、上の障子屋

體へ、奴二人、付いて入る。

とせ　およねさん、お茶莨盆上げておくれよ。

ト奥にて

よね　アイ〳〵、合點でござんす。

ト長兵衞、思ひ入れあつて

長兵　おとせや。權八どのゝ事は、どこまでも知らぬと云うて通しても濟まうが、小紫には二百兩と云ふ手付けの渡してある女なれば、さう〳〵知らぬとばかり云つても居られまい。とても の事に殘金の三百兩を都合して、吉原の方を濟ましてしまはざアなるめえ。

とせ　サア、それにつけても、田原町の旦那より、お借り申した二百兩、早速手付け證文を持つて行つて、お目にかける筈のところ、斯う云ふ譯になつたからは、ちよつと樣子を、お話し申して來ずばなりますまいわいなア。

長兵　こりやよく氣がついた。そんなら今のうち、行つて來てくりやれ。エヽ、權めが居ねえから、誰れぞ送つて。オヽ、小八ヤ〳〵。

小八　アイ〳〵。

ト奥より小八、出て來り

わしを呼ばしやつたは、なんでござります。

長兵　てめえ、大儀でも田原町まで、おとせを送つて行つてくりやれ。

小八　アイ、旦那の所へかえ。

トおとせ、押入れより山屋の卷樽を出し

とせ　モシ、昨日貰つたこのお酒、これをお土産に持つて行きませう。

長兵　オヽ、さうしやれ〳〵。

ト此うち捨ぜりふにて、おとせ、簞笥より着物を出し着替へる。

そして、殘金の事までも合點か。

とせ　そりやそこの都合次第。どうともなるところぢやに依つて、田原町の事は、わたしに任せて置かしやんせ。

長兵　そんなら早く歸つて來やれ。

とせ　つい行つて來るわいなア。

長兵　小八、頭の物を氣を附けろ。

ト四つ竹節になり、おとせ、先に小八、樽を提げ、向うへ入る。長兵衞、思ひ入れ。

どう考へて見ても、梶野長兵衞と云ふ奴が來ると云ふ噂、とんと合點がゆかない。そりやアさうと、奥に來てござる十右衞門どのに、御酒でも上げざアなるまいが、南無

三、小八をやつてしまつた。
ト爼板の上の鯛を提げて來り
ドリヤ、手料理と出かけようか。
ト合ひ方になり、長兵衛、鯛を提げて奥へ入る。と直ぐに曲撥になり、向うより五郎八、逃げて出るを、鶉の權兵衛、追ひかけて出て、花道にて捉へる。後より小八、走り出て來り、三人をかしみの立廻りにて、追ひかけ廻し、五郎八、思はず内へ入る。兩人追ひかけ捉へて

權兵　どんなに逃げたと云つて、おれが目にかゝつたが最後、金輪際逃がしはしねえ。

小八　おかみさんの供をして、出かけたところが、喧嘩の相手は權だと聞いて、取つて返したが、いよ〳〵其奴は昨日の騙りか。

五郎　騙りだの强請りだのと、そんな事はおらア知らねえ知らねえ。
ト駈け出さうとするを捉へ

權兵　なんぼうぬが逃げようと思やアがつても、うぬに違ひない、しつかりとした目印があるわえ。

五郎　何が目印だ。

權兵　うぬアあばたが目印だ。

五郎　べら坊め、爰を放しやアがれ。
ト振り切つて逃げる。立廻りに權兵衛、小八、天秤棒と縫ひぐるみにて打つ。五郎八、氣を失ふ。兩人見て

小八　權や、此奴はごねたさうだ。

權兵　くたばつたらふん縛つて、流しの角で水でも喰はすべい。

小八　それがいゝ〳〵。
ト兩人にて五郎八を引摺り、奥へ入る。と直ぐに唄になり、向うより梶野長兵衛、着流し、一本差し、白木の臺と進上札を提げ出て來り、門口へ來り

梶長　長兵衛どのはお宿かな。
ト門口を明ける。奥にて

よれ　アイ〳〵。
トおよれ、出て來り
お前はどなたでござります。

梶長　梶野長兵衛と云ふ者だが、幡隨どのに逢ひたいと云つて下せえ。
ト上に通る。

よれ　ハイ、左樣なら、お茛でも上がりませ。

ト莨盆を出し
兄さん〳〵。
ト呼びながら奥へ入る。梶野長兵衛、思ひ入れ。合ひ方彈き流しにて、奥より長兵衛、一本差し、莨盆を提げて出て來り
長兵　幡隨長兵衛に逢ひたいと云つてござつた、梶の長兵衛と云ふはお身樣か。
梶長　成る程、わしサ。そんならこなさんが、幡隨長兵衛どの。
長兵　これまで間違つて近付きでもねえお身樣が、なんと思うて此方の內へ。
梶長　サア、わしが今日來たは、馴れ〳〵しいやうだが、男と見かけて進ぜたい物があつて來ました。なんと貰つちやア下さるまいか。
長兵　何か知らねえが、男と見かけて云はつしやるを、否とも云はれまい。品に依つたら望んでなりとも。
梶長　面白い。
ト白木の臺へ書付け載せて出し
進ぜたいと云ふは、これでごんす。
長兵　フウ。

ト書付けを取つて、廣げて見て
熨斗進上男一本、幡隨長兵衛どのへ、梶野長兵衛。
梶長　わしが體へ熨斗を附け、こなさんへ進上。なんと貰つては下さるめえか。
長兵　ムウ、藪から棒に、お身樣の體へ熨斗を附け
梶長　進上と云ふは、これからこなたの子分になりたい、わしが望み。
長兵　イヤ、邪ま非道を働らく梶野長兵衛、此方に貰つて益ない體。書付け持つて、キリ〳〵歸りやれな。
ト臺を抛り出す。誂らへの合ひ方。梶野長兵衛、こなしあつて
梶長　こりや聞き所。この長兵衛が、邪ま非道を働らくとは。
長兵　知るまいと思ふか。昨日仲の町の福島屋で、白柄組と僞はり、この長兵衛の女房が前から、二百兩と云ふ小紫の手付け證文を、騙り取つたる騙り事。誠の白柄十右衛門どのゝ、お耳に入つて長兵衛の間違ひから、臺提灯に括りつけた、この書付けで、おれが所へ、疾にお祟りが來てあるのは、知らずに來たか、但し、お主は知つて來たか。

ト以前の書付けを廣げ見せろ。梶野長兵衞、これを取つて

梶長　ナニ〳〵「兼ね〳〵お頼みの通り、白柄組と僞はり吉原へ入込み、手付け證文を騙り、首尾よく仕負ふせ候はゞ、望みの品戻し下さるべく候ふ、この段委細承知いたし候ふ、月日、長兵衞」……フウ、例へ長兵衞とあるこの書付けがあるにもしろ、この廣い江戸だ。同じ名は幾らもあらア。現在こなさんも長兵衞。ナニおれが知るものか。

長兵　イヤ、さうは拔けさせねえ。蛇の道は蛇だ。昨日お身樣が手先に使つた、相揩りの野郎を一疋掴まへて、いま臺所へぶッ轉がして、何もかも聞いてしまつたからはその野郎を引摺り出して突き合せたら、お主も梶野長兵衞だ、面目を失はねえうち、キリ〳〵云つてしまやれな。

梶長　そりやアその野郎を突き合はせうがどうせうが、先づ第一、幡隨長兵衞が女房と、知つて騙つた手付け證文。その幡隨が内へ、わざ〳〵自分の體へ、熨斗を附けて來る程な性根だ。云ふまいと思やア、どこまでも知らないと、云ひ通す場所もあるが、相手がこなさんだけ、まんざらこけ未練に隱されもしめえ。成る程、その證文を騙つたに相違ねえが、この長兵衞を邪ま非道と云ふ幡隨どん、こなさんにも邪ま非道がねえでもねえのよ。

長兵　フウ、この長兵衞がナニ邪まだ。

梶長　オヽ、小紫が間夫の客、深見と云ふはお尋ね者、土手や田甫の辻切りも、樣子白井か知らぬ振り。しかも昨夜の人殺し、切られた奴は竹永勘六、命から〴〵逃げ歸つた丈八が身の懺悔で、詳しく知れた白井が行くへ。その權八を匿まやア、まんざら邪ま非道でねえとも云はれぬよ。

長兵　そんならお主が體へ熨斗を附け、おれが子分になりたいと云つて來たのは、權八が在所を、嗅ぎ出さう爲だな。

梶長　オヽ、いゝ推量だ。どう云ふ譯で權八が、世話を燒くかは知らねえが、この梶野長兵衞も、身に引請けて、お世話申さにやならぬ。助市どのゝ爲には、現在敵の白井權八、どうぞ討たせて進ぜたさ、搜し求むる白井が在所。

長兵　それ程親の敵と知れてありながら、なぜお上へ願つて搜さねえのだ。

梶長　オ、サ、それにも仔細ある事よ。先つ頃箱根山に、

奉納の友切丸、行くへ知れざるその砌り、畑の宿にて白井權八、網乘り物を打ち破り、拔け出でたるその折柄、友切丸を奪ひ立退きたる、その取沙汰分明ならざるところ

ト風呂敷に包みし、前幕の袋入りの刀の鞘を出し

こりやコレ畑の宿にて思はずも、我が手に入つたる友切丸の刀の鞘。昨日不思議に仲の町にて、しつくり合ひし業物の、その持ち主の顏は知らねど、白井權八、友切丸の一腰、在所知れざる其うちは、横死なしても助太夫どのゝ越度。その倅として助市どの、敵討の願ひ、立てる事の叶はぬ無念さ。それゆゑ權八を搜し出し、何卒友切丸を手に入れたい望み。男を立てる幡隨どの、その權八を匿まへば、盜賊夜盜の汚名は遁がれぬ。爰の所を聞分けて、尋常に權八を、この長兵衞に渡しておくりやれ。

長兵　イヽヤ、そりやアならねえ。例へ盜賊夜盜の汚名を請けやうが、一旦男が齒と齒を合せ、匿まつた權八だ。一生懸命の場所と知りつゝ、突き出すやうな男だと思ふかい。親の代から花川戸、障子に書いた四ツ花菱、生拔きの幡隨長兵衞だ。おぬしやア男を見損なつたか。

トきつと云ふ。

梶長　すりや、非道と知りつゝ權八を

長兵　どこまでも腰を押して見せるワ。

梶長　さう聞くからは此方も意地づく。先づ差當る押入れから。

ト立たうとする。

長兵　イヤ、家搜しさせちやア、猶々おれが男が立たねえ。

梶長　仕掛けた詮議を、引かぬも意地づく。

長兵　梶野長兵衞。

梶長　幡隨長兵衞。

長兵　男と

梶長　男の

長兵　この場の達引

梶長　刃鐵と

長兵　刃鐵の

梶長　命の切り賣り。

長兵　動かず

梶長　去らず

兩人　この所で。

ト梶野長兵衞、莨盆にて打つてかゝる。長兵衞、留めろ。キツと見得。これより三味線ばかりの派手な鳴り

物になり、兩人、脇差を拔き面白き立廻りある。よき程に向うよりおとせ、戻つて來り、門口を明け、この體を見て、慌てゝ中へ入り留める。立廻りにて白木の臺にて、兩方の白刃を押へ、その上にしやんと乘り

とせ　待つた／＼お二人さん、マア／＼待つて、下さんせいなア。

長兵　女房の留めるを幸ひに、とまつたと云はれちやア濟まねえ。

梶長　オヽ、この長兵衞も、體へ熨斗を附けて來てありやア、命は投げ出しものだ。

兩人　そこを退いた／＼。

とせ　イヽエ、退かれぬ／＼。サア、どう云ふ譯かは知らねども、大切な命を捨てようとする者が、廣い世界にあらうかいな。そりやモウ、兩方に堪忍のならぬ事があつてゞござんせうが、そこを宥むるが女房の役。この長兵衞と云はしやんすからは、最前の噂のあつた梶野長兵衞さんでござんせう。

ト梶長を見て

ヤア、お前は昨日に變るなり形。ヤア、その云ひ立ては後の事。お前さんにも、定めて親御さんや、お內儀さんがござんせうが、モウ／＼、男を立てる者の女房程、ほんに苦勞の絕える間とてはござんせぬわいなア。昨日はどこの喧嘩、今日は廓の意氣張りと、聞く度々にもしひよつと、ひよんな事でもあるまいかと、顏見ぬうちは夜と共に、ついに寢た夜はござんせぬ。取分け此方の長兵衞どの、日頃の云ひつけで、今日はわたしが誕生日ゆゑ、產土神樣と同じやうに、兩親へもお禮申せと、年々飾るあの佛壇。良山榮中信士、靑月榮常信女、この兩親のお位牌に免じ、どうぞ今日の出入りは、お二人さん、明日に延ばして下さんせいなア。

トこなし。此うち梶野長兵衞、合點のゆかぬ思ひ入れにて

梶長　フウ、良山榮中信士、靑月榮常信女。してその命日は。

とせ　十月四日と十月二十日。

梶長　フウ……戒名と云ひ命日まで、この長兵衞が兩親に少しも違はぬ。幼少にて別れし一人の妹、どこにどうして居るやらと思うたが、もしやこなたが。

とせ　ムウ、さう云はしやんす、してお前の御生國は。

梶長　秩父の藩中、親は松ケ枝軍次兵衞。

とせ　エヽ、そんならわたしが養ひ親の、話しに聞いた、
實の親仁どの軍次兵衞さま。
梶長　もしや幼名は、おまつとは云はぬか。
とせ　アイ、その幼名まで、よう知つてござんすからは、
そんならお前は
梶長　幼少にて別れたる、さては妹であつたか。
とせ　兄さんでござんしたか。
梶長　何國に居るとも死んだとも、今の今まで知らぬ身が
とせ　不思議と云はうか。
梶長　思へば思ひ廻す程
とせ　思ひがけなき
梶長　兄妹の
とせ　盡きせぬ縁で
兩人　あつたなア。
　ト よろしくこなし。長兵衞、思ひ入れあつて
長兵　とんだ事もあるものだ。命を投げ出して來た梶野長
兵衞が、女房の兄と聞いちやア、これまでに仕掛けた喧
嘩も拍子抜け。
梶長　此方も同じ相手の長兵衞。現在妹の亭主と聞いて
は、切るとも突くとも云はれぬ出入り。

とせ　サア、知らぬ昔は兎も角も、兄妹と知れるからは、
マア、その白刃を
長兵　成る程、身内なれば
梶長　この達引も
長兵　出入りもこれぎり。
とせ　危ない事で
三人　あつたなア。
　ト 三人よろしく、兩方刀を鞘へシャンと納める。
とせ　嬉しや／＼。斯う丸く納まるも、みんな父さん母さ
んのお引合せ。ほんの親の慈悲程、有り難いものはない
わいなア。
長兵　女房の兄と知れちやア猶の事、聞かねばならぬ仲の
町の體裁。どう云ふ譯で小紫が、手付け證文を取つたの
だ。
梶長　サア、その譯と云ふは外でもない。あの權八が帶す
る、友切丸を取り得んにも、小紫の身請けが濟めば、最
早權八も廓へは通ふまじ。さすれば自然權八が、行くへ
も知れぬ道理。小紫さへ廓を離れねば、權八は籠中の鳥
と、思ひ附いたる證文の騙り。シタガ、こなさんには權
八は格別、どう云ふ由緣で、小紫が世話をさつしやる。

長兵　あの小紫が事は、しがない者の娘。身を賣るや否や、
　兩親に別れた不便さ。便るところのない女ゆゑ、世話を
　燒いてやるのもほんの情サ。
とせ　サア、斯うなつて嬉しいうちにも、わたしが氣にか
　かるは、兄さんのお世話なさるゝ助市どのゝ爲には、權
　八どのは敵と聞けば、このマア納まりは、どうならうぞ
　いなア。
梶長　それもこれも、友切丸の刀を手に入れ、仇討の願ひ
　を立てたその上では、天下晴れての敵討。
長兵　その願ひの叶はぬうちは、この長兵衞が世話をする
　權八どのゝ詮議も又
とせ　斯う打解けて身内となれば
梶長　却つて此方が蔭となり
長兵　世間の噂も
とせ　聞き流し
梶長　そこが兄なり
長兵　妹だもの
とせ　これから仲よく
三人　暮らすのサ。
　ト此うち障子屋體の内より、十右衞門、窺ひゐて、こ
　の時奴二人を連れて前に出で
十右　緣者となつた二人の長兵衞。詮議が出來ずば權八を
　渡せ。この十右衞門が受取らう。
　ト合ひ方になり、前へ出る。下手より八内、出て、内
　の樣子を見て、表に扣へる。
長兵　これは白柄十右衞門どの、權八を渡せ受取らうと仰
　しやりまするは。
十右　仔細知らねば不審な尤も。今までは包み隱し、誰れ
　知る者もなけれども、我が父白柄十兵衞の弟子、本庄助
　太夫を、因幡之介廣元へ、推擧いたし遣はす砌り、四十
　二の二つ子は親に祟ると、藁の上から同家中、白井兵左
　衞門へ音信不通に、くれてやつたる權八は、身が爲には
　血を分けた弟ぢやわい。
皆々　ヤヽヽ。
　ト皆々恟り思ひ入れ。八内、門口にて
八内　その權八どのは、助太夫どのよりの恩義ある、十右
　衞門の弟御と聞く上は、この事を助市どのへ。さうだ。
　ト時の鐘にて、向うへ走り入る。皆々外へ思ひ入れ。
　梶野長兵衞、門口をしやんと締め
梶長　親軍次兵衞が大恩受けたる、助太夫どのゝ敵權八、

草を分けても友切丸を詮議し出し、助市どのに御本望を遂げさせ申さんと思ひし事も、今となつては助市どのゝお身の上。ハテナア。

ト手を組んで思ひ入れ。

十右　然るところ、非義非道を行ふ權八、外より弟と云ふ事相知れては家の瑕瑾。それゆゑ見當り次第討ち捨てんと思ふところ、江戸で一人の男達と呼ばれたる幡隨長兵衞、匿まひ置くと聞きたれども、容易には渡すまいと、よき折を待つところに、我が名を僞はりし證據の書付けに、長兵衞とあるを幸ひ、間違ひの體にもてなし、先刻より入込み、聞けば聞く程長兵衞が男氣、感ずるに餘りあり。さりながら、事の利害を聞分けて、權八を、この十右衞門に渡してくりやれ。

長兵　誠に、承つて驚ろき入つたる權八どのゝお身の上。御眞實の兄御樣と仰しやる、あなたのお詞ではござりますが、お氣の毒ながら、お渡し申す事はなりませぬ。

十右　だん／＼事を分けて申し聞かすに、聞分けなきその一言。何ゆゑ渡す事はならぬと申すぞ。

長兵　イヤ、憚りながら、お歷々樣の方では、斯う云ふ場所になつて、突き出す法もあるかは存じませぬが、まんざら侍ひたるものでさへ、鷺を烏と爭つて、助けてやる衞もある。權八は爰には居りませぬ。長兵衞が內へ匿まつた覺えはござりませぬ。十右衞門さま、お侍ひ、キリキリこの家を歸らつせえ。

十右　ヤア、武士に向つて慮外な一言。手は見せぬぞ。

奴一　幡隨長兵衞。

奴二　腕廻せ。

ト兩人、長兵衞へかゝる。立廻り。兩人を見事に投げる。

十右　ムウ。

ト拔きかける。留めて

長兵　無禮咎めも場所によるワ。騷がつしやるな白柄どの。

十右　イヤ、拔きかけた刀の手前。

長兵　濟まぬとあらば御存分。幸ひ有り合ふこの爼板。

ト爼板を取つて前へ直し、その上に乗り

サア、すつぱりと料らつせえ。

ト誂らへの合ひ方。長兵衞、しやんと見得。

十右　流石の長兵衞、いゝ覺悟だ。

ト刀をスラリと拔き、長兵衞が目先へ突き出す。兩人思ひ入れ。おとせ、こなしあつて

とせ　モシ、十右衞門どのとやら、夫長兵衞が無禮を、お腹立ちもござりませうが、元を糺して見ますれば、何も夫が仕出かした科と申すでもござりませぬに、お手討にまでなされまするは、そりやあんまりでござりますわいなア。
長兵　ヤア、又しても女の吠え面、見苦しい。そこ退け。
とせ　イエ〳〵、なんぼでも、退かぬ〳〵。
十右　ヤア、仕出かした事なきとは、仲の町にて白柄組と我が名を僞はりし事忘却いたしたか。
とせ　すりや、それゆゑに。
長兵　覺悟極めて爼板へ乘つた長兵衞。サア、すつぱりとやらつしやい。
ト梶野長兵衞、こなしあつて、ツカ〳〵と寄つて、おとせを突き退け
梶長　お名を僞はりし科に依つて、免さぬとあれば、そりや長兵衞が違ひました。
十右　ヤ、、なんと。
梶長　その爼板へ乘る長兵衞は、この長兵衞。
ト長兵衞を引下ろし、爼板へ乘り
サ、すつぱりとおやりなせえ。

ト長兵衞、また梶野長兵衞を下ろし
長兵　イヤ〳〵、これまで幡隨が內から、外の者へ兇狀附けて、出した覺えがねえ。長兵衞は矢ッ張りおれだ。サア白柄どの、大分料理に隙がいります。
ト爼板へ乘り、思ひ入れ。十右衞門、こなしあつて
十右　フウ、さすれば名を僞はりし科も、權八を匿まひし事も、その身一つに引請けて
長兵　一旦云ひ出した事變ぜぬ男だ。女房吠えるな。骨は兄貴に拾つてもらへ。旅と違つて江戸前だ。貧乏ゆるぎもしやアしねえ。
ト十右衞門、チッと思ひ入れあつて、刀をシャンと納め、長兵衞が手を取つて、爼板を下ろし
十右　天晴れ幡隨長兵衞どのと申す者、江戸で一人の男達と、聞きしに勝る大丈夫。なか〳〵武士も及ばぬ魂ひ。見拔きし上は改めて、其方へ申しつくるこの一品。
ト懷中より捕り繩を出し、長兵衞が前へ投げる。長兵衞、取上げ
長兵　この捕り繩は。
十右　町人ながら蔭になり、日向になりても助けんと、思ふ一人の弟を、召捕つて出さねば、先祖へ對して家の恥

辱。武士の義を思ひやり、何國に隱れ忍ぶとも、もし權八と見たならば、人手にかゝらぬ其うちに、ナ、潔よう搦めて出しやれ。
長兵　恩愛の義を辨まへて、お預けなされしこの捕り繩。
とせ　血筋にあらぬ一筋の
梶長　緣の糸綱しつかりと
十右　渡して歸るこの場の別れ。
長兵　この長兵衞が預かりました。併し、折角ござつた稀れのお客、拔いた刀に血も見せず、お歸し申すが一つの殘念。ハテ、何をがな。
ト奧より鶉の權兵衞、五郎八に繩をかけ、引立て出て來り
權兵　お名前を僞はつた騙りの相摺り、この繩付きを御成敗あらば、掟の表は相濟む道理。
十右　如何にもこの場で其奴が成敗。
五郎　そんならどうでも。
權兵　騙りめ。
奴兩　動くな。
ト突きやろ、十右衞門、刀をスラリと拔いて
十右　白柄組の刀の切れ味。
ト五郎八が繩を解く。
皆々　これは。
十右　成敗濟んだ。
とせ　お慈悲な裁きの
梶長　縛り繩。
十右　打つて見せたは弟が、血筋に絡む罪科もまツ、この……イヤサ、まツ此やうに切つてなりとも。
とせ　すりや御兄弟の
長兵　憐れみも
十右　情も白柄。
ト刀へ思ひ入れあつて
伊達には差さぬ……お世話になりました。
ト門口へ出てゝ。
ナニ、二人の長兵衞。
梶長　十右衞門さま。
十右　涙と共に權八が。
トほろりと思ひ入れ。
三人　エヽ。
十右　降らねばよいが。
ト唄になり、十右衞門、目禮して向うへ、奴兩人、付

いて入る。皆々思ひ入れ。
權兵　命冥加な野郎だ。どつちへなりともうしやアがれ。
ト五郎八を門口へ突き出す。
五郎　イヤ、まだ先刻の白魚の錢を取らにやア行かねえ。
ト內へ入る。暖簾口より小八、およれ、酒肴を持ち出て來り
よれ　今日は姉さんの誕生日に、幼ない時お別れなされた兄さんと、お名乘り合ひの濟んだ祝ひに、わざと杯事でもなされませいなア。ほんに、此やうなお嬉しい、おめでたい事はござんせぬ。
小八　サア、モシ、わたしが庖丁、一つ上がつて下さいませ。
とせ　ほんにこりや、よう氣が附いたわいなア。わしも先刻にさう思うて居たけれど、何やかやで取紛れて居た。サア旦那どの、兄さん、わざと杯の取交しをして下さんせ。
梶長　成る程、こりやアいつち肝心だ。サア、御亭主さん、お始めなされませ。
長兵　マア、兄貴から先へ始めさつしやりませ。
とせ　ハテ、さう云はずと、お前始めて、兄さんにさして下さんせいなア。
長兵　そんならさうか。
ト杯を取る。おとせ、つぐ。
お慮外申します。
ト梶長へさす。
梶長　誠に不思議な御緣でござります。
權兵　わしらはみんな子分子方。
小八　これからお賴み申します。
ト皆々思ひ入れ。四つ竹節になり、向うより彌市、丈八、酒を提げ、捨ぜりふにて出て來り、兩人頷き合ひ、門口を明け
彌市　ハイ、また參りました。
ト兩人、內へ入る。鶉の權兵衞、小八、見て
權兵　又うぬらア來やアがつたな。
小八　今度來ると叩き殺すぞ。
彌市　ア、コレ／＼、歸つて來たには、ちつと料簡が違つたから。
丈八　マア／＼、靜かにしてくれろ／＼。
五郎　大分棒組が殖えて來た。これでちつと人心になつて來た。

彌市　サア、先刻までは成る程、此方の親方長兵衞どのゝ、向う面へ廻つて居たが、どう考へて見ても、江戸で一人の男達、此方の親分の子分にならにやア、世間廣くは付合はれぬからと思つて、賴みに來ました。
丈八　そこでわざと提げて來たこの樽。どうぞ納めて下さい。
　ト樽をそこへ出す。
とせ　ほんに、こなさん達はぬらりくらりと、呆けて物が云はれぬわないア。
長兵　コレ、彌市も丈八も、お身達はこの長兵衞を、なんだと思ふよ。子供の喧嘩をしやアしめえし、いゝ加減に人を馬鹿にしろ。その樽は持つて歸れ。
權兵　カウ、二人ながら、キリ〳〵と出て行きやアがれ。
丈八　歸れと云ふなら歸る分の事だ。
　ト五郎八、梶野長兵衞を見て
五郎　カウ、見や。
　ト彌市、丈八が袖を引き、指さしをする。
丈八　ほんになア、梶野長兵衞が居るワ。
彌市　オ、さうだ。長兵衞に長兵衞、こいつアもう一番、物云ひが出來やうわえ。
丈八　何を云ふのだ。
彌市　コレ梶長、よくわりやア知らぬ振りして、物も云はねえな。
梶長　オ、この長兵衞は、今日から魂ひが入れ替つて、幡隨どのゝ子分になつたからは、うぬらが今までの惡面は知り拔いて居るから、尻の剝げるやうな企み事せずとキリ〳〵歸りやれな。
彌市　おいらが來たのが惡いか、われが子分になつたのが惡いか、秤にかけて見たいわえ。
梶長　なんだ。うぬアこの梶の長兵衞を、惡と吐かすのか。
丈八　オ、、惡い事をするから、惡と云つたがどうした。
梶長　此奴等ア、うぬ。
　ト立ちかゝる。五郎八、留めて
五郎　なんの事だい。おとなしくもねえ。
梶長　イヤ、おとなしくあらうがあるまいが、幡隨どのゝ前だ。彼奴等にあんな事を云はして、捨てゝ置いちやア以後世間へ面出しが出來ねえ。
　ト五郎八を突き退け、彌市の側へ行き
サア彌市、丈八、いま秤でかけると吐かしたが、いつ、どこでこの梶の長兵衞が、惡を働らいた。それを吐かせ。

彌市　オヽ、昨日仲の町で、騙りをしたのは何者だ。
梶長　ありやアうぬらと一つになつて、うぬらが惡を嗅ぎ出すのだ。
丈八　嗅ぎ出さうが掃き出さうが、騙りに違ひはないぞよ。
梶長　何を此奴が。
　ト丈八の頭を煙管にて打ち毀す。
五郎　此奴。うぬ。
　トかゝる五郎八をも、頭を打ち割る。
長兵　コレサ氣の短かい。兄貴、どうしたものだ。
とせ　ほんに、大概な事は、捨てゝ置かしやんせいなア。
梶長　打ッちやつて置くと癖になりやす……サア彌市、お主が子分も同然な、二人の奴等の眉間を、叩ッ毀したから、その分にしても置かれまい。梶長と仕合ひでも、喰ひ合ひでもして見ないか。
彌市　オヽ、相手にならうと云つたところで、所詮われにやア叶はぬに依つて、初手から負けて手出しはせぬから、どうぞ幡隨どのゝ子分にして下さるやうに、梶長、口を聞いてくりやれ。
梶長　そりやア事と術に依つたら、口を聞いてやるまいものでもねえ。

彌市　フウ、事と術に依つたらとは。
梶長　昨日おれが騙つてやつた、小紫が手付け證文を、此方へ寄越すか。
彌市　ヤア。
梶長　それが寄越されにやア、今まで云つた事は、みんな嘘であらうが。
彌市　サアそれは。
梶彌　サア〳〵〳〵。
梶長　そんな事にふうわりと乘る、長兵衞だと思ヤアがるか。
　ト煙管にて彌市が眉間を割る。アッと云つて頭を抱へ倒れる。
爰の内へ來てまで惡をするとは、成る程、目先の見えね え奴等でござる。
　ト三人の襟首を取つて、門口へ突き出し
キリ〳〵歸りやアがれ。爰でごたつくと、うぬらア一々叩ッ殺すぞ。
　ト門口をピッシャリ締める。三人、やう〳〵起き上がり、こなしあつて
彌市　例へ長兵衞であらうが、どいつであらうが、人の頭

を叩き割つて濟まうと思ふか。

丈八　オヽ、濟まない〳〵、この返報は、キツと持つて行くぞよ。

二人　覺えてうせう。

ト囁き合ひ、二人、拔き足にて下手へ入る。

權兵　成る程、太い奴等だ。モシ、飲み直してお出でなされまし。

長兵　燗を直してやつて歸らつせえ。

よれ　そんなら、わたしはお燗を直して。

小八　ドリヤ、お肴でも拵らへて來やうか。

ト鶉の權兵衞、およれ、小八、奧へ入る。

梶長　コレ〳〵、必らず構はつしやるな。モウ、さうしては居られない。

とせ　ハテマア、よいわいなア。幼ない時別れたお前、兄さんを一人拾うたと思や、こんな嬉しい事はないわいな定めてお內儀さんもござんせうが、よう云うて下さんせえ。

梶長　イヤ、ちと樣子あつて、まだ女房は持たず、義理のある阿母と、妹があるばつかり。

長兵　フウ、そんならまだ女房なしか。

梶長　イヤ、また一人も、なか〳〵小ざつぱりとして、惡くねえものだ。シタガ、兄弟の名乘りをして、嬉しいと思ふうちにも、その阿母や妹に、どうせ討たるゝこの體。思へば薄き兄弟の。

とせ　エヽ、兄さん、そりやなぜにえ。

梶長　イヤサ、そりやアなによ。オヽそれ〳〵、今日のやうに體へ熨斗を附けて、振り込んで來る氣性だに依つて、いつ何時と定まらぬおれが身の上。

長兵　この長兵衞とても男を立てる者は、いづれ誰れしも同じ事。

とせ　その二人を兄さんと、夫に持つたわたしが身の上。どのやうにあらうと思はしやんす。ちつとは汲み分けて下さんせいなア。

長兵　成る程、其方がさう思やるも無理ではない。

梶長　人の喧嘩の腰押して

長兵　人を投げたり抛つたり

梶長　揚句の果ては

とせ　切ツつはツつ。

長兵　それが老舗の

梶長　男達。

とせ　サア、その男達を横にして
長兵　斯うまた丸く納まれば
とせ　今日から比翼の
梶長　長兵衞。
長兵　長兵衞。
梶長　妹婿なり
長兵　小舅なり
とせ　緣を重ねて
梶長　祝ひに來よう。
ト唄になり、梶野長兵衞、向うへ入る。長兵衞、おとせ、思ひ入れあつて奥へ入る。と直ぐに時の鐘になり下手より彌市、出て來り、門口より内を窺ひ、思ひ入れあつて
彌市　最前見殘したこの物置。なんでも此うちに權八めが、居るに極まつたとは思へども、先刻のやうに又ひどい目に合はぬやう。マア、何にしろ氣を揉んだ所爲か、咽喉が乾く。水でも飲んで、ゆつくりとかゝらう。ア、敵役はひどいものだ。
ト此せりふのうち、下手の井戸へかゝり、水を汲み上げようとする。此うち權八、物置より出て、拔討ちに彌市の首を打ち落す。首は井戸の中へ落ちる。彌市、後へ倒れる。權八、刀を納め、彌市が懷中を搜し、紙入れを出し、思ひ入れあつて中を見て
權八　こりや小紫が手付け證文。懷中の重みも凡そ二三十兩。
ト懷中して、あたりを見廻し
身に願ひあつて集むる金高……思ひ廻せば小紫が貞節も、却つてこの身に報ふ惡緣。只忘れ難きは長兵衞どのの志し、一旦の契約を違へず、厚きお世話も宿世の緣。この上はこの家に足を止め、難儀をかけては義理立たず、だん〳〵詞に盡されぬ、禮は冥途より長兵衞どの、これが今生のお別れでござります。
ト門口より内を拜む。暖簾口より長兵衞、一本差し、莨盆を持ち出て來り
長兵　權八、捕つた。
ト莨盆を打ちつける。
權八　さう云ふ聲は長兵衞どの。
長兵　オヽ、數多の人を手にかけたる上、未練にも姿まで變へ、立退かんとする見下げ果てた權八。いま長兵衞が打つて捕る。覺悟しろ。

ト權八、こなしあつて

權八　これまでの深切に引きかへ、打つて變つたその一言。

ムウ。

ト內へ入り

定めて御所存あつての事。

長兵　身の業惡に引きかへて、見下げ果てた。觀念ひろげ。

ト拔いて切りつける。權八、かい潜り立廻りに、權八、拔き合せ、長兵衞に切りつける。白刃を下に居て、シヤンと留める。兩人こなし。

ムウ、友切丸の一腰に、自餘の劍を打ち合せば、微塵になると聞きしに違ふ汝が差し料。

權八　すりや我が差し料を、友切丸と悟り知り、劍を合せ試さんとの計らひなりしか。

長兵　如何にも。最前梶野長兵衞が、持參なしたる刀の鞘にて、初めて聞いたる其方の差し料。友切丸と思ひの外

權八　その御不審は御尤も。

ト兩人、刀を鞘に納め

某とても、不思議に手に入るこの一腰、友切丸と思ひしところ、これまで度々試し見るに、自餘の刀に凶事なけれど、燒刃鐵色常ならぬは、察するところ大江家の千壽院、助太夫が邪まにて、友切丸の一腰、もしや隱し置きしも計り難ければ、これより刀の實否の詮議。

長兵　イヤ、そりや門違ひだ。今その詮議にかゝりなば、却つてその身に禍ひあらん。一先づ何國へなりと身を忍び、時を延ばしたその上にて

權八　御尤ものそのお詞、目黑邊に知るべもござれば、それへ便りて折を見合せ、お目にかゝらん。イザおさらば。

ト立ち出るを

長兵　コリヤ待て。今この所を立退かば、思ひ合うたる着替への小袖。由緣の色の小紫。

ト疊を蹴れ上げんとする。

權八　イヤ待つた、長兵衞どの、未練にも姿を隱すと先刻のお詞。腹にこたへ恥かしうござれど、兼ねて御存じの望みを叶へん爲ばかり。女を連れては、なか〳〵以て

長兵　成る程、その詞を聞くからは、時節參つて巡り逢ふそれまでは、この小紫は長兵衞が、しつかりと預かつた。心を殘さず何國へなりと。

權八　返す〴〵も忘れ難きお志し。然らば此まゝこの所を。

ト權八、門の外へ出る。五郎八、奧より窺ひ出て

五郎　床の下のは小紫。此奴を引立て。

ト疊を跳ね上げんとする。長兵衛、引き廻し、立廻りあつて

長兵　これも次手だ。切つて行け。

ト外へ突き出す。立廻りて權八、五郎八をポンと切る。五郎八、見事に返る。木の頭。この首、板返しにて、舞臺先へ出る。長兵衛、門口を締める。權八、刀をシヤンと納め

權八　おさらば。

ト三重、時の鐘にて向うへ入る。長兵衛、門口を明け向うを見送る。この途端、よろしく　ひやうし幕

後シヤギリ。

比翼蝶春曾我菊（終り）

衢通武士鏡山　蝶者羽忠孝履打

一臈職の下知によつて早春開きし裾野の直道爰を歩行の遊君は海道一の虎が雨濡れ帷子の色模様早乙女唄の頃までも仕合せ吉のはだせ馬廻らば丁度三里當しかも奴のお侍ひが革文箱を明烏尾上の松に岩藤が雛の節句を端午なる男世界狩場の軒藥降る夜を掛烏帽子に受けて會盟の時本望の榮

初冠曾我
皐月富士根

御國入
後日　十番續

曾我狂言百姿

「吉例曾我寶入船」より

（上）鬼王女房月小夜。箱根の閉坊。
（下）久上の禪司坊。赤澤十內。

初冠曾我皐月富士根

序幕

鳴立澤庵室の場

役名――曾我十郎祐成。曾我五郎時致。母、滿江。大礒の虎御前。劍澤彈正左衞門。坊主、寒心。同、閉坊。鬼王新左衞門。若黨、友八。仲居、お高。同、お秀。幇間、鍔助。同、介八。遣り手、お爪。下部、伊太八。

本舞臺、正面、藁葺き二間の屋體、左右の庭先に卯の花の生垣、つくばいの手水鉢、、、鳴立澤と記したる石碑、いつもの所に枝折り戸、この外に虎ケ石あり、幕の内より寒心、頭巾、麻衣にて、旅僧の形。閉坊、所化の形にて門口に立ちかゝり、お高、赤前垂れ、仲居の拵らへにて、竹箒を持ち、庭の掃除をしてゐる。すべて東海道鳴立澤の體。雨車、雷の音にて幕明く。

三人　桑原〳〵。

ト雷に恐るゝ思ひ入れ。

寒心　雲雷鼓掣電降電澍大雨念彼觀音力。

閉坊　モシ、お師匠樣、また光りました。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

たか　この雷さんの鳴るのに、心ない物貰ひ。出たのが無い、通らつしやい〳〵。

寒心　イヤモウ、通りますとも〳〵。愚僧は通りたうてなりませぬ。この雷では一足も行かれぬ。コレ閉坊、爰の内を賴み、一宿いたさうではないか。

閉坊　それは何よりの思し召し、あの女中を賴み、一宿はどうでござりませう。

寒心　イカサマ、あの女中に一宿を賴んで見やれ。

閉坊　畏まりました。

ト思ひ入れあつて、狂言詞のやうになう〳〵、それなる女性。この所は何と申す里にて候ふ。

たか　爰は鳴立澤の庵でござんすが、仔細あつて祐成さんがお借りなされたゆゑ、虎さんと一緒に、今日爰へ餘所行きでござります。

寒心　さては音に聞えし鳴立澤。然らばこの所に、虎ケ石

といふ石あつて、女の愛に深き者は輕く上がり、また女に縁遠き者は、持ち上げる事ならぬと聞き及ぶ。

閑坊　そいつは奇妙。あの女中が承知して、宿を貸すか、貸さぬか。この石を持ち上げて、見得を見るでござりませう。

ト門口にある石に手をかけ、上がらぬ思ひ入れあつてなか〱私しには持ち上がりませぬ。

寒心　それは何とも惡い見得ぢやが、何にも致せ、一應申して見やれ。

閑坊　合點でござります。……コレ〱、お女中樣、我れらは旅の僧でござるが、この夕立に後へも先へも行き難し。願はくは一宿をお許し下さるまいか。

たか　お易い事ではござりますが、爰は宿屋ではござりませぬ。これより先に梅澤といふ立場がござんす。これをお頼みなされませ。

寒心　御尤もの事ながら、我れらは木の端か、炭の折れといふやうな坊主、色事の用心なら、氣遣ひはござりませぬ。

たか　イエ〱、今時の坊さんと夏の空は、油斷がならぬわいな。

兩人　すりや、どうあつても。

たか　脇をお頼みなされませ。

ト門口をヒッシャリ締める。

閑坊　「おいとしやと奥へ行く。」

ト淨瑠璃を語る。此うちお高、奥へ入る。

寒心　何を申す。

閑坊　とはいへ、つれない。

寒心　コレ、野に臥し、餓に勞れ、難行苦行は佛の行ひ。

閑坊　それは釋尊、これは又

寒心　さしかゝつたるこの難儀、推して頼まば佛意に叶はず。

閑坊　しつこい坊主に旦那がない。

寒心　緣なき衆生は度し難し。雨の晴れ間に

兩人　片時も早く。

ト兩人花道の方へ行きにかゝる。この時、屋體の内にて

鬼王　なう〱御出家、お宿いたさう。オ、イ〱。

兩人　ヤ、何と云はつしやります。

トつか〱と舞臺へ戻る。此うち簾卷きあげる。正面に打敷をかけ、一段高き上に逆澤瀉の鎧を飾り、二つ

の位牌に香華を手向け、長押に長刀掛けてあり、この前に鬼王新左衛門、木綿やつし、風呂敷を前垂れにし、木鉢重箱を取散らし、柏の葉に包みし團子を拵らへてゐる。兩人、この體を見て

寒心　おてまへは御庵主と見受けましたが、すりや、いよいよ我れ〳〵を。

兩人　お泊めなされて下さるか。

鬼王　なにサ、わしは爰の庵主ではない。以前は大名の家老であつたが、いろ〳〵の不仕合せゆゑ、身上をしまうて、主從一緒に、この鴫立澤に假住居。

寒心　佛前を見ますれば、二つの位牌に香華を手向けてござるが、御命日でござるか。

鬼王　左樣サ、あの位牌はわしが主人、今日が逮夜ゆゑ、團子を拵らへます。

寒心　イカサマ、よしある人の果と見えて、床に飾りし鎧一領。

鬼王　長押に掛けしは先祖の讓り、錆びたれども長刀一振り。

閉坊　どうやら佐野の船橋に、似た山坊主の我れ〳〵に

鬼王　馳走は粟の飯ならぬ、柏に包みしこの團子。

閉坊　一つ下さい、お供の愚僧に。

ト重箱へ手をかける。

鬼王　コレ、まだ佛樣へ上げませぬ。

閉坊　ところを一つ。

トまた取りにかゝる。この時、雷烈しく鳴る。鬼王、雷に恐れ、思はず重箱を取落す。閉坊、團子を取りにかゝる。鬼王、寒心、支へる立廻り。トヾ、鬼王、閉坊を蹴り倒す。寒心、鬼王、顏見合せ

兩人　ハ、、、、、。

ト思ひ入れ。

寒心　ドリヤ、御回向いたしませう。

ト雷の音になり、簾、バラ〳〵と下りて、この道具廻る。半分頃より百萬遍の鉦、越後甚句にて道具とまる。

本舞臺、三間の間、平舞臺、上の方、一間の障子屋體、下の方、竈、鍋釜、水瓶、その外勝手道具あり、椎の木の鉢植を三つ並べ、いつもの所に門口、よき所に封印したる大革文箱、酒肴を取散らし、爰にお高、お秀は仲居。お爪の遣り手。介八、鰐助、幇間にて、甚句を踊り、祐成、寢卷姿にて百萬遍の音頭

を取り、文字野、禿にて、皆々と百萬遍の珠數を繰つてゐる。虎御前、床着の形にて、祐成に寄り添うてゐる。甚句、雷の音、責め念佛にて道具とまる。

皆々　桑原だんぶつ〳〵。

介八　明日は庄屋さんの稲刈りだ。やらかせ〳〵。

つめ　ヤレ〳〵、ひどい雷樣。どうやらちつと靜かになつたやうぢやが。

ひで　虎さんは雷嫌ひゆゑ、百萬遍と甚句で、紛らして居りました。

たか　ひよつと太夫さんが、お積でも發つたら、どうせうとお案じ申しました。

鶴助　雷もやんだ樣子、百萬遍のハネをつけようではござりませぬか。

祐成　コレ〳〵、念佛の音頭は祐成ぢやが、百萬遍のハネをつけるとは、どう致すのぢや。

介八　ハテ知れた事、念佛のハネには、願以主功德がお定まり。

虎　その願以主功德とやらは、色事ならばトヾのしまひ祐成さんと譯ある仲には氣にかゝる。必らず其やうな事云うて下さんすな。

祐成　また愚痴な事を云やるか。其方とわしが仲は比翼連理、切つても切れぬ深い緣。鎌倉と違ひ、この所に假住居すれば、誰れに遠慮もない。いつまでもわしの側に。

虎　わたしもその事を聞いたゆゑ、親方さんに願うて、見舞ひがてらに今日の餘所行き。

祐成　今に始めぬ其方の深切、可愛の者や〳〵。

ト思ひ入れ。皆々見て

皆々　イヨお二人樣、出來ました〳〵。

祐成　サア〳〵、これからが、酒ぢや〳〵。

皆々　一つお上がりなされませ。

ト合ひ方になり、酒盛りになる。此うち奥より鬼王、團子の重箱を持ち、出て來り

鬼王　これは〳〵、祐成さま、これにござりまするか。虎さまを始め、いづれも御苦勞に存じまする。麁末な物ながら、お茶でも飮んで下さりませ。

ト重箱を出す。お爪見て

つめ　オヤ〳〵、わたしの好物なお萩かえ。モシ、鬼王さん、今日の法事はえ。

鬼王　これは、さる佛樣の逮夜、心ばかりを營みます。ゆるりと茶でもあがりませ。

鰐助　それにしても、人も知つたる曾我のお屋敷。どういふ事で、この鴫立澤におゐでゞござりまする。

祐成　成る程、其方衆には合點がゆくまい。曾我の十郎祐成とも云はるゝ者が、斯樣な所に假住居いたすも、親ども河津さま御最期の後は、兄弟二人、祐信さまの養子となつたれど、母滿江さま、祐信さまの心に叶はず、不縁になつたばつかりに、我れ〳〵兄弟、鬼王もともに、曾我の屋敷を梵天國、それゆゑこの所に借家住居。なんと洒落たものであらうがな。

虎　その噂も聞いたれど、かゝりや繋がるわたしが悲しさ。祐信さまも聞えませぬ。一度養子となされし御兄弟、何の譯かは知らねども、母樣もろとも御離縁され、腹變りの御兄弟、禪司坊さまとやら、御出家ありしを呼び戻し、尾上之助さまと名を改め、祐信さまのお跡目にて

鬼王　曾我のお家は立つたれども、岩藤どのゝ佞姦にて、尾上之助さまは果敢ない御最期。祐信さまもその事をお聞きなされ、お腹を召されたお家の騒動。御勘當は受けたれど、一度主人と頼みしゆゑ、七日の逮夜も心ばかりサ。

ひで　それで法事の譯は知れたれども

つめ　なんでお萩を柏の葉へ、包むのでござんすえ。

鬼王　ハテ、こなた衆も知つてゐる、祐成さまと虎さまの、仲へ出來た千壽丸さま、今年は初の節句ゆゑ、法事のお萩やお團子を、柏の葉へ包んだは、佛事で初の節句をする、なんと好い思ひつきであらうがな。

つめ　流石は曾我の御家老樣。

鰐助　イヤハヤ、感心いたしました。

虎　一兩日顏も見ませぬが、千壽はどれに居りまする。

鬼王　奧の別間で滿江さまと……イヤ、滿江さまではない、お乳の人が、お守り申して居りまする。

祐成　コレ〳〵鬼王、乳母は食物が大事と聞けば、入用に構はず、鯛をたんと取つて遣はせ。

鬼王　滅法界な事を。

祐成　必らず儉約いたすな。今日は若が初の節句。皆の者へ祝儀を取らせい。

鬼王　モシ〳〵、祝儀どころか、晩に炊く米がござりませぬ。

祐成　コレ、氣のきかぬ事を申すな。早く金奉行へ申しつけ、祝儀を取らせい。

鬼王　それぢやと申して。

祐成　コレ、あたりへ心を
ト思ひ入れ。
鬼王　畏まりました……ドリヤ、伊勢甚を呼びにやらうか。
ト雨車、遠雷の音、双盤の入つたる合ひ方になり、鬼王奥へ入る。皆々捨ぜりふにて酒盛りになる。此うち向うより伊太八、中間の形、赤合羽にて、竹笠をかむり、一升入りの油樽を持ち、思案の體にて出て來り、花道にて舞臺の様子を見て
伊太　大分内が賑やかだが、ハヽア、今日は御主人方のお逮夜ゆゑ、百萬遍か。南無阿彌陀佛。
ト門口へ來り、内を見て
なんの事だ。念佛と思ひの外、虎どのを始め廓の衆。ハテ、思ひがけない。
虎　お前は初平どの、お使ひに行かしやんしたかえ。
伊太　旦那様、只今戻りましてござりまする。
祐成　其方は大分遲く戻つたが、今まで何をして居つた。
伊太　油を買ひに參りましたが、久しくお拂ひをなされぬゆゑ、先で油を寄越しませぬ。
祐成　コレ、廓の者も聞いて居る。滅多な事を申すな。油の買ひがゝりは、金奉行へ申しつけ、殘らず拂つて遣はせ。
伊太　その金がある位なら、云ひ分はござりませぬ。まだ蚊帳の損料も
祐成　まだ吐かすか。主人の使ひに參り、何ゆゑ斯様に遲刻いたした。おのれ、どこへか穴入りして居つたな。
伊太　イエ〱、全く以て。
祐成　申すなおのれ、どこのたぼと、ちん〱鴨を致して居つた。
伊太　なか〱左様な事ではござりませぬが、遲刻と仰しやれば、申し譯もない仕合せ。御意に叶はぬ下郎なら、是非がござりませぬ、何時なりともお暇を下さりませ。
祐成　イヤ〱、その儀は罷りならぬ。使ひに出せば遲く歸り、嘘ばかりつく奉公人。其やうな勤め方では、いよいよ目をかけて使はねば相成らぬ。
伊太　それは迷惑な儀でござります。下郎めも、何かな不埒を致し、首尾よくお暇が出たなれば、古主の無念を散ぜんと……イヤサ、最前のお役、遲刻の段は、眞平御免下さりませう。
虎　あのやうに云はんすからは、もう堪忍してあげなさんせ。

祐成　外ならぬ虎が挨拶ゆゑ、今日のところは差ゆるす。以後をきつと嗜なみ居らう。

伊太　すりや、御堪忍下さりますか。ハテ、有り難迷惑な。

ト鉢植を見て

見ますれば、お物好きなるこの鉢植、曾我のお家にとりましては、見るもいぶせき椎の木三本、こりや何方よりの御到來でござりまする。

虎　輕少ながらその品は、わたしが手土産、佛前へ。

伊太　ハテ、心有り氣なこの鉢植……イヤモウ、種がはりのこのお持たせ、河津さまを初めとして、未來でさぞやお喜でござりませう。

虎　喜びといへば、お前は尾上之助さまの御家來であつたれど、何やら首尾がよろしうて、出世なさんしたと聞きましたが、それに引替へ、その姿は。

伊太　成る程、一度直參に取立てられ、旦那の家名を其ままに、尾上伊太八と改名いたし、大小差す身になつたれど、誠にそれも一夜檢校、尾上之助さまの事を思へば、どうして侍ひになつて居られませう。一つ間違へば命道具。ア、、恐ろしの侍ひ奉公。川だちは川とやらで、矢ツ張りもつさう飯が身に相應。それゆゑ、滿江さまや御兄弟方にお願ひ申し、元の杢阿彌、下郎の奉公。

つめ　そりやお前の好い思し召し。ハテ、なぜと云ひなさんせ、鎌倉第一のお羽利き、岩藤さまに楯をついたばつかりに、尾上之助さまは身の破滅。

たか　これはしたり、御兄弟の祐さんの前で、滅多な事を。

祐成　その心配は無用々々。成る程、其方が申す通り、腹替りの兄弟なれど、尾上之助は不料簡。侍ひの道を守り、思ひがけない身の破滅。それを思へば此やうに、虎が側に居て世を樂しむは、喜見城ではあるまいか。

伊太　ハテナ、同じ古主といふうちには、下郎が親は鶴賀甚內と申して、祐安さま御親子には、大恩を受けし者、その悴の私しゆゑ、何卒主人の妄執を、晴らさんにも蟷螂が斧。

祐成　そりや何を申す。母滿江を始め、曾我の屋敷を追ひ出され、赤の他人の祐信さま、今日の逮夜は營めども、ゆかり無ければこの通り、廓の者を呼び寄せて、佛前にて魚肉の酒もり。其方も一つ飲む氣はないか。どうぢやどうぢや。

伊太　イヤ〳〵、私しは酒は不調法でござります。まして

魚肉は古主の逮夜、七里けつぱい〳〵。
祐成　ハテ、武張つた事を申す奴。ところを我れら一向に構はぬ。子までなした虎を側に、一日の樂しみは百年の齡ひ。親子揃うてめでたい〳〵。コレ、千壽をこれへ、連れて參れ〳〵。
鬼王　ハイ〳〵、畏まりました。
ト合ひ方になり、奥より滿江、誂らへの形、抱子を懷へ入れ、鬼王閉坊附いて出て來り、赤子泣くを、鬼王見て
オヽ、おむづかるな。
閉坊　この子の泣くも、腹がへつたのでござらう。わしもどうやら腹の加減が
鬼王　モシ〳〵、若樣がおむづかりなら、お前のしなびを、しやぶらせてはどうでござります。
滿江　オヽ、いんの子〳〵。
ト思ひ入れあつて
世の盛衰は是非もない。河津どの御存生にてあるなれば、初孫の初節句、相應の飾りもあるべきに、甲斐なき婆が懷を、玉の臺に寢顏の和子。血筋とはいひながら、斯うまでよう似た

ト祐成を見て思ひ入れ。祐成、こなしあつて
祐成　サア〳〵、爰にも一人、石部屋のお金と申す、婆が一人、見えられた。
ひで　そんならお前は、千壽さまのお乳母どのかえ。
たか　モシ〳〵、お針さん、そのお子を爰へ連れて來て、お前も一つおあがりでないか。
伊太　コレ〳〵、滅多な事を云はつしやりますな。あなたは曾我さまの
滿江　アヽコレ、わしは滿江とやらではない。和子樣のお守り役、お針も兼ねる乳母でござるわいなう。
虎　そんならお前は……ハテナア。賤しからざるお年寄り、その面ざしも祐さんに……もしやあなたは
滿江　コレ〳〵嫁女……イヤサ、廓のお女中、わしは其やうな者ではござらぬ。滿江とやらなれば、なんで此やうな麁服を着て居りませう。矢ッ張り乳母でござるわいなう。
虎　ハテ、お人柄のお守り役、隨分千壽を、可愛がつて下さりませ……コレ、お爪どん、あの婆さんへ、お土產をあげて下さんせ。
つめ　ハイ〳〵、畏まりました。

ト巾着より金を一分出し、紙に包み

サア、婆アどん、太夫さんがお前へ御祝儀。

ト出す。滿江、件の金を取り、押戴き、思ひ入れあつて

滿江　これは〳〵、馴染でもないお女中樣、有り難う存じます。

ト思ひ入れ。伊太八、鬼王見て

伊太　モシ、あなたはそれを取らつしやりますか。

滿江　ハテ、人樣の志し、有り難う頂戴いたしますわいの。

伊太　移れば變る世の成行き、人知らぬこそ幸ひに

鬼王　それと云はれぬ身のほつれ、鴫立澤の夏ながら

虎　かをりゆかしく吹く風も、近き箱根の山おろし。

滿江　肌ばかりか心まで、寒さ身に浸む憂き世界。

祐成　これを思へば世の中に

鬼王　四百四病の病より

滿江　貧ほどつらい。

祐成　オツと待つたり、今時分其やうな事を申すは、夏過ぎの筍に食傷するやうなもの。何事も取措いて、わつさりと、酒にせい〳〵。

介八　それがよろしうございませう。併し、爰でありましては、氣が變りますまい。

鱗助　虎さんと御同道で、廓で飲み直しはどうでございませう。

祐成　太夫を連れて跡から行く。鬼王も先へ參り、いつもの藝子どもを、合點か。

鬼王　ハイ〳〵、畏まりました……旦那からの御祝儀は、この鬼王が呑みこみました。

閑坊　わしにもどうぞお夜食を。

鬼王　萬事は胸に

皆々　有り難うございます。

伊太　御養父の逮夜も構はず、あなたは矢ッ張り大磯へ

祐成　オヽ、行くとも〳〵。若いが二度は無いと申せば

滿江　人間不定芭蕉葉の、露と消えゆく赤澤を

鬼王　思ひ出せば、この椎の木、奧へ直して

虎　せめて佛間で

閑坊　愚僧が回向を

滿江　そんなら孃女。

虎　エ。

滿江　ドリヤ、看經しませうか。

ト唄になり、滿江は子を抱へ、跡より閑坊、椎の木を持つて奥へ入る。鬼王先に幇間仲居皆々向うへ入る。あと合ひ方になり、祐成、虎、伊太八殘る。

祐成　イヤモウ、大勢來をつたで、心遣ひの所爲かして、いから肩が凝つて來たワ。アイタ、、、、。

伊太　左樣なら私しが、無作法ながら捻つてあげませうか。

祐成　それはよからう。頼む／＼。

虎　其うちわたしや爪先へ、逆上を下げる傘灸。ほんに禿も行きやつた。わたしが手づから

ト艾を出して、ほごす。

伊太　祐成さまの脹りつめた、お肩をちよつと、ドリヤ、揉んであげませうか。

ト相の山になり、伊太八は祐成の肩を揉む。虎は手づから爪先へ灸をすゑる。この時向うより彈正、着流し、一本差し、一文字の編笠にて、胡弓を磨つて出て來り、門口に彳む。伊太八思ひ入れあつて

これは幸ひ、虎さまの灸すゑに、門口へ來た物貰ひは、祐成さまと花魁が、廓でしつぼり相の山、末はめでたう御夫婦に

虎　女夫になつたその當座は、定めし花見遊山には、度々行くでござんせうが、取分けわたしや其うちに、芝居見に行きたうござんす。

伊太　成る程、芝居見物はよろしうござります。その時は私しもお供いたして

ト云ひながら揉む。

祐成　ア、初平は、芝居が好きか。

伊太　イヤモウ、飯より好きでござりまする。歌舞伎芝居のうちでも、あの八百屋お七の狂言に、灸すゑの所へ、相の山が來まする。丁度此やうな仕組みでござりますが、まづ差づめ私しが、八百屋のお七、大和屋氣取りで此やうに……打てば打たるゝ櫓の太鼓。

ト聲色を使ふ思ひ入れ。

虎　ホ、、、、、こりや面白うござんすわいなア。

伊太　イヤ、お前の前では、ちと厚かましいやつサ。ハ、ハ、、、……イヤモシ祐成さま、世話狂言ではお七は貞女。御覽じませ、娘の身で櫓へ上り、太鼓を打ちましたが、打てば打たるゝ櫓の太鼓。虎さま、お前、打たつしやりますか。

虎　そりや打つわいな。親夫の爲ぢやもの。太鼓はおろ

か、何によらす打つわいなア。
ト思ひ入れ。
祐成　イヤ、そこを打たぬぢや。
虎　アノ、祐さんは。
祐成　決して打たぬ。そこを、打たぬが誠の貞女、なぜと云やれ。いたづらに我が戀を、叶へん爲に打ちたる太鼓、それゆゑにこそ捕へられ、親兄弟に嘆きをかけ、その身も遂に淺ましい。
ト思ひ入れあつて
それも娘の小心を、綴りし狂言。
伊太　イエ／＼、そりや思し召しが違ひます。道を道に立てまするその時は、お七が太鼓はおろかな事、親の敵も打たねばならぬ身を以て、色に耽つて延び／＼に。その年月も十八年、討たずにござるは武士でない。申さば御未練。
トこの時祐成振り返り、顏見合せ
祐成　ヤ。
伊太　これはしたり、話しにかゝつてウカ／＼と、お七に敵は無いもせぬものを。ハ、、、、、。
ト紛らす思ひ入れ。

祐成　然らば祐成、あの太鼓を
伊太　サ、父御へ大孝……イヤ、太鼓を打つべき祐成さまも
虎　打たぬはこれも
ト思ひ入れあり
わたしも灸の納まりは、山を見るとはいふものゝ、してマアどこの
祐成　山は富士ヶ根、裾野の露を
虎　エ。
祐成　消ゆる間近き
ト三人顏見合せ
ア、浮世ぢやなア。
ト思ひ入れ。爰にて唄切れる。
伊太　折も折とて門口へ、耳かしましき相の山。
祐成　遣つて去なしやれ。
伊太　左樣いたしませう。
トひねり錢を持ちゆき
袖乞ひどの、通つて下さい。
ト差出す。彈正取つて
彈正　これはお志し、有り難うございます。

ト内を窺ひ見て
して、この御別荘は、曾我の御老母満江さまの
伊太　さうサ。それがどうした。
彈正　母御がこれにござるなら、兄弟二人も
ト思ひ入れあつて窺ふ。虎、こなしあつて
虎　ヤ、お前は爰へ。
ト立上がる事。
祐成　オヽ、其方、近附きか。
虎　イヽエ、存ぜぬ相の山。
彈正　錢は一錢二世かけし、虎が深間の
伊太　ヤ。
彈正　ハイ、忝ならござります。
ト合ひ方、時の鐘になる。彈正、心を殘し、下手へ入る。跡に三人、各自思ひ入れあつて
祐成　イヤモウ、初平が按摩の所爲か、大きに肩が柔らいで來た。次手に久しぶりで
ト虎に戯むれる。
虎　これはしたり、また惡い事しなさんす。初平どのが見てぢやわいな。
祐成　アヽ、この者が居ては惡いか。然らば遠ざけませう。

コリヤ〳〵、初平、われはどこぞに、用事は無いか無いか。
伊太　イエ〳〵、爰もとには用事もござりまするが、外には決して用事はござりませぬ。
祐成　ハテサテ、それは困つたものぢやが、左樣なら祐成が、用事を拵らへてやらう。待ちやれ〳〵。
トよき所より大きなる文箱を出し
伊太　コレ〳〵、われはこれを持參して、ちよつと使ひに行て參れ。
祐成　ヘイ〳〵、畏まりました。この文箱を持ちましてか。
祐成　サア〳〵、早う行け〳〵。
ト文箱を持つたる伊太八を、無理に門口へ突き出す。
伊太八、外へ出て
伊太　ヘイ〳〵、參ります〳〵。參りは參りますが、して、御用先は、どちらでござります。
祐成　それを、わしが存じてよいものか。
伊太　イヤ、これは怪しからぬお使ひだ。
祐成　イカサマ、其方、先の當が欲しくば、アヽ、いつそてまへの、勝手のよい所へ持つて行てくれ。

伊太　モシ〳〵、左樣ではござりませうが、私しが勝手な所へのお使ひは、御免なされませ。參りませぬ〳〵。

ト歸つてくる。

祐成　コリヤ〳〵初平、わりや切腹した尾上之助が、存生で居つたなら、詞は返すまいが、こりや古主の祐成ゆゑ、阿房に致すのか〳〵。

伊太　イエ〳〵、左樣ではござりませぬが。

祐成　イヤ〳〵、わしが云ふ事を辨まへぬと、其方に暇をやらぬぞ。暇をやる事はならぬぞ〳〵。

伊太　左樣なら、參ります〳〵。

ト文箱を持ち、不請々々に門口へ出る。虎、送つて出て

虎　お前、先の知れぬお使ひに行きなさんすのかえ。

伊太　左樣サ、行かねば、わしの願ひが叶ひませぬから。

虎　いつそお前、持つて行きなさんす文の宛名を見さんしたら、先のお方の

伊太　サア、さうも思ひますが、封が附いてござるから、滅多に切つては

祐成　封印切つても大事ない。行く心なら、われには許す。宛名をしかと。

伊太　さう仰しやれば、お許しうけて。

ト封印を切り、蓋を明ける。中には件の草履の片足と、請け狀、外に祐成宛ての手紙出る。伊太八、取上げ見て

この書狀は親甚內、祐安さまへ有りつきし、奉公手形のその外に、祐成さまとばかりにて、送りし人の名も無き手紙、手蹟は正しく祐信さまの

ト云はんとする。

祐成　アイヤ、曾我どのとは緣なき兄弟、赤の他人の祐成へ、祐信どのより送りしは、草履に添へしその書狀、養子たる尾上之助の、無念を晴らしくれよとある、其方への賴み。

伊太　すりや、私しへ祐信さま、今端の際の送り狀。

祐成　添へたる手形は其方が親、悴を連れて我が父なる、祐安どのへ譜代の奉公。

伊太　請け人鬼王庄司左衞門、これを只今下されしは

祐成　河津の家の緣切つて、當時の主人へ忠義を立てい。

伊太　その御主人は尾上さま。

祐成　河津にあつては下郎の初平。

伊太　帶刀いたさば侍ひ分、また改めて尾上伊太八。

祐成　家名の尾上が存念を
伊太　晴らさせくれよと祐信さま
祐成　宛名も憚かる今際のお頼み、それゆゑ手形は
伊太　下し置かるゝ御恩のほど
祐成　緣は切れても一人の母親
伊太　すりや、御兄弟には
祐成　母に先立つ不孝の兄弟。
虎　その不孝には誰れがさす。みんなわたしの
　ト思ひ入れあり
側で見る目の
伊太　ア、モシ、合せ物なら
虎　離るゝ習ひ。離れ〴〵の
伊太　片足の草履、御無念晴らさす時節も近く
祐成　尾上之助の恨みは其方が
虎　殊には曾我にて失なふ二品。
伊太　所持する岩藤、館へ首尾よく忍び入り
祐成　二品首尾よう
伊太　取返したるその上にて、主人の恨み
　トきつとなる。
祐成　コリヤ……暇を遣はす。いづれへなりと。

伊太　すりや、お暇の出ました奴、お主が無ければ一本立ち、御恩のお暇、祐成さま。
祐成　初平。
伊太　おのれ岩藤。
　ト向うへキツと思ひ入れ。
虎　エ。
祐成　勝手に致せ。
　ト唄になり、伊太八思ひ入れあつて、件の品々を持ち、向うへ走り入る。
虎　何か仔細のありさうな、事とは見ても女子のわたし、殊に勤めのこの身の上。
祐成　身あがりしやつてわしへの心中、そこへ長居のあの初平、遠ざけた跡は其方と
　ト虎へしなだれ寄る。
虎　ぢやというて、今にも廓の迎ひの者が
祐成　見えぬ其うち
虎　ア、モシ、わたしや今宵は
祐成　ハテ、野暮を云はすと
　ト引寄せる。虎、振切つて逃げるとて、思はず髷落ちる。祐成見て

ヤヽヽ其方の髪は
虎　アヽこれは
トつかへる。祐成、髻を取上げ
祐成　人も知つたる祐成が、深間といふは虎御前、それに
女郎の附け髪を
虎　アイ、是非ならわたしや
祐成　ヤ。
虎　髪切つたのも有やうは
祐成　すりや祐成と深う見せ、外に語らふ
虎　お客へ餘儀なう
祐成　しァ、その客は
虎　サ、そればかりは
ト思ひ入れあり
云はれぬわいなア。
トこなし。暮れ六ツの鐘。向うバタ／＼になり、鬼王
引返し來り
鬼王　申し、祐成さま、只今この庵へ、大層な供廻り、合
點のゆかぬは廓の者も、打交つて參ります。アレ／＼向
うへ、あの提灯。
トいろ／＼向うを見るうち、時の太鼓になり、向うよ
り庵に木瓜の箱提灯二張り、中間先に、跡より鋲打ち
の女乘り物一挺吊らせ、友八、菖蒲革の侍ひにて、挾
み箱、長刀持ち、駕籠脇にはお高、お秀附添ひ、供廻
り大勢附き、足早に出て來り
友八　虎御前さま
皆々　お迎ひ。
ト扣へる。虎、思ひ入れ。祐成、こなしあつて
祐成　ヤヽ、打ち物とても持たせし同勢、見れば廓の女子
も交り
ひで　武家の迎ひの事ゆゑに、祐成さんの御不審も
たか　あらうと存じて廓のわたし等、その證人にこそ附添
ひ、此方の花魁、虎さまを
兩人　お渡しなされて下さりませ。
鬼王　イヤ／＼／＼、どうも合點がゆかねえ。これには、
定めし深い樣子が
ト急いで云ふ。虎、思ひ入れあつて
虎　用意の品は。
皆々　ハアヽ。
虎　早う持ちや。
ト合ひ方になり、挾み箱より友八、襠裲を出し、女形

兩人これを虎に着せる。祐成猶々心得ぬ思ひ入れにて、
フツと心附き、笑を含んで

祐成　コレ、虎御前、迎ひの者の提灯は、庵に木瓜。ア、、
こりやア聞えた。こりや祐成の紋どころ。美々しく見せ
しは太夫の趣向か。

鬼王　こりやア出來ました〳〵。

友八　ヤア、趣向なぞとは緩怠至極。迎ひの身共は工藤の
陪臣、御紋は即ち、祐經さまより迎ひの爲。

鬼王　ハテナ、祐經さまより虎さまを、迎ひといふには、
何ぞ仔細が

祐成　コレ〳〵、虎、其方は樣子を知つてゐやるか。

ト急いて云ふ。此うち柴垣の蔭にて

彈正　その仔細、拙者が詳しく云ひ聞かさう。

ト合ひ方になり、彈正、鉢かづら、上下大小に着替へ、
ツカ〳〵と出て、祐成を突きのけ、思ひ入れ。

祐成　心得ぬお侍ひ。して、其許は。

彈正　最前門へ袖乞ひの、襤褸に隱せし相の山、誠は虎が
實の兄、折よく妹は工藤の根引、その手蔓にて立身なし、
今日より左衞門祐經の、近習を勤むる劍澤彈正、虎を
伴ひ今日より、裾野の假屋へ誘ふ役目。祐成、膽が潰れ
たか。

祐成　ヤ、、、、さては疾より祐成に、愛想つかせし虎
御前。

鬼王　心變りもあるうちに、敵同士なる祐經に

祐成　根引さるゝを、ようマアこれまで

ト立ちかゝるを、彈正引附け

彈正　祐經さまのお部屋樣、虎に向つてその振舞ひ。指で
もさしたら、ぶッ放すぞ。

祐成　でも、これまでに誓ひし詞。

トきつとなる。虎、思ひ入れあつて

虎　それもお前の心がら。現在父御の仇敵、それさへ討
たぬ大腰拔け。よい客あらばと思ふうち、祐經さまが有
り難い、身請けなされて廓の苦界、殊に流浪の兄上まで、
お取立ての大恩に、ほだされしゆゑ身を任せ、お前と縁
を切りやんす、證據は先刻に渡した切り髮。マア、さう
思うて下さんせ。

祐成　すりやこれまでの誓ひも斷ち切り、この祐成を、工
藤に見替へて。

虎　アイ、見替へまする。たかゞお前は部屋住みの、敵
持つ身の素浪人、祐經さまは大々名、身請けさるればお

妾、お部屋。見らるゝ通り鋲乘り物、殿の格式あやかつて、連れる時には千騎二千騎、連れざる時も百騎二百騎。身貧なお方に心中立て、人に笑はれ暮らすより、出世するのがこりや當世。襟許女郎と云はれても、名も取る上に得もあり、それゆゑ虎は假屋へお伽。必らずこの上わたしが事、祐さん、構うておくれなえ。

ト嘲笑うて思ひ入れ。

祐成　エヽ、おのれはなア。

ト立ちかゝる。彈正隔て

彈正　これまで妹が勤めのうち、貧乏神のせぶり取り、紋日物日の身あがりまで、のめ〳〵とさせ居つたな。それゆゑ現在兄ながら、弁一本心よく、貸さぬもわれがあるゆゑだ。思へば〳〵

ト祐成を引附け、打擲して

イケ業晒しな十郎祐成。妹、わりやアこの體裁を見ても、悲しくは思はぬか。

虎　今まで深間の男でも、緣を切つたる證據には、主と二人がその仲に、出來たあの子は男ゆゑ、殘して行くが世の大法。お前の手しほで育てゝやらんせ。

鬼王　エヽ、鬼とも蛇とも、讐へやうなき道知らず……エヽ、お前樣はなア〳〵。

彈正　祐成、貴樣は口惜しくないか。

祐成　決して存ぜぬ。アヽ、心任せに。

彈正　エヽ、張合ひのない、腰拔けめ。

ト突き放す。

虎　今も云つたる千壽丸、お前育てゝ、のち〳〵樂しみ。

彈正　それも要らざる人の世話。其やうな事捨て置いて、彈正附添ひ富士ケ根へ、妹を同道。家來、乘り物。

皆々　ハツ。

ト友八、乘り物を開く。虎、悠々と乘り移る。

彈正　直さま、これより。

虎　そんならわたしや。

ト祐成の方へ思ひ入れあつて、彈正を見て

此まゝ爰を

ト乘り物舁きあげる。この時柴垣に窺ふ時致、編笠を脱ぎすて、ツカ〳〵と寄つて

時致　紋は庵に木瓜の……工藤の身寄りの

ト駕籠の棒をキツと留め、虎と顏見合せ

ヤ、駕籠の內には

虎　お前は弟御。

祐成　時致、來てか。
彈正　ヤ、ナニ時致が
時致　樣子はあれにて……憎くき虎が
ト寄るを、彈正はじめ皆々隔て、乘り物は花道の方へ行く。虎、顏を出し、思ひ入れあつて
虎　ア、思へば〳〵……有爲轉變の
祐成　定めぬ水の流れの習ひ。
虎　それもうつろふ飛鳥川、曇らぬ胸の鏡さへ
祐成　實に七人の子はなすとも
鬼王　飽くまで腐つた
祐成　ハテ、逢ふは別れの
虎　果敢ない縁。
ト皆々を見て
乘り物、やりや。
ト戸を閉す。
皆々　ハア、。
ト唄、時の鐘になり、皆々向うへ入る。三人殘る。
時致　心の腐つた虎御前、後追ツかけて
ト走り行かうとする。
祐成　ヤレ待て時致、いはゞ浮れ女、さもありなん。虎は今よりフツツリと
時致　思ひ切る氣か、兄者人。
祐成　仇なる戀は思ひ切り、たゞ忘れぬは父の仇。
ト思ひ入れ。
時致　さすればこれまで放埒の、色に恥つて現在の
祐成　父の仇には、共に天を戴かぬ道理。されども世上を憚つて
鬼王　柔弱非力とこの年月
祐成　多くの人にうとまれしも
時致　すりや弟のわしにまで、明かさで包む御胸中。
祐成　父の仇討なさんすと、千々に心を碎くわやい。
時致　さすれば近きに庵を立出で
祐成　それも母人、滿江さまに
時致　不興のお詫びを
ト思ひ入れ。この時奥にて幼な子の聲する。
鬼王　ありや千壽丸さま。
祐成　せわるも道理。母も見捨てゝ
時致　子を捨つる藪の虎御前。
祐成　ハテ、虎ぢやもの、いはゞ畜類。
時致　ヤ。

祐成　捨てゝ置きやいの。

ト思ひ入れ。唄、時の鐘にて道具鷹揚に廻る。

本舞臺、正面大和葺き、二間の屋體、此うち少し小高き所に逆澤瀉の鎧を飾り、二つの位牌に香華を手向け、長押に鞘を嵌めたる長刀を掛け、よき所に以前の椎の木、鉢植ゑ並べあり、庭先の左右、卯の花垣、つくばひの手水鉢、鴫立澤と記したる石の碑、いつもの所に枝折り戸、この外に虎ヶ石あり、すべて庭の體、時の鐘、合ひ方にて道具とまる。

ト以前の閉坊、木綿蒲團をかぶり、枕許の石火鉢へ蚊やりを仕掛け、あふりながら

閉坊　ヤレ／＼、素敵な蚊だ。燻しを仕掛けにやア、寢る事はならぬわえ。

ト小言云ひ／＼蚊遣りをあふりゐる。時の鐘、合ひ方。向うより寒心先に友八出で來り、門口を窺ひ、寒心、小石を取つて合圖する。閉坊聞きつけ、門口へ來り

合圖の礫は……友八さまか。

友八　寒心の案内で、裏口へ廻つたが、怪しき樣子もあるか。

閉坊　心得ませぬは二人の奴等。いよ／＼敵と左衞門さまを

友八　討つべき胸中相違ない。それゆゑ何か氣遣はしく、窺ひ來るこの友八。寒心、閉坊も樣子を窺ひ、二人の奴等をぶッ放し

閉坊　祐經さまの枕を高う

友八　閉坊とても油斷なく

寒心　懷劍用意し、人知れず

友八　油斷いたすな。

兩人　心得ました。

ト思ひ入れ。奥にて物音するゆゑ、友八と寒心は門口の柴垣へ、閉坊は蒲團をかむり、下の方へ隱れる。よき程に奥より時致走り出るを、滿江、撞木振りあげ追うて出る。跡より祐成支へ出てくる。屋體の内よき所に屏風を引廻し、幼な子を寢かしある體。

滿江　ヤア、母が詞を用ひぬおのれ、箱根を下山し、その上に男なりせし五郎時致、誰れが許して目通り近う……

母が答に

ト撞木振りあげる。祐成縋つて止める。

時致　箱王出家とげざる上は、勘當御免なされませぬか。

滿江　それもおのれが心に問へ。實の親たる祐安どの、義理ある養父の祐信どのは、寶の紛失、それゆゑ切腹。緣は切れても後の親、それにおのれは、出家いたさぬ不孝者。目通り叶はぬ。祐成、早う追ひ出しや／＼。

祐成　でも御勘氣をお詫びの時致。

時致　出家いたさぬ其うちは、母のお怒り中々に……然らば時致、この場に於て、出家堅固に勤むる證據。

ト刀を拔き、髻を拂ひ、目通りへ差置き

これにて何卒御勘當。

祐成　出かした弟、然らば兄もこの年月、虎に心を奪はれて、初めて女に誠なき、その心底を存じた祐成、弟と共に

ト同じく髮を切つて

よもや、これでは

ト髻をよき程切つて差出す。

滿江　こりや二人とも髻拂うて、二人が二人出家して

祐成　過ぎ去り給ふ河津さまへ、この祐成は仕へる心底。

時致　後の親ぞと賴みたる、祐信さまの菩提の爲

滿江　出かした兄弟、それでこそ母が子よ。今こそ勘當

兩人　お免しあるか、

滿江　よう息才でコレ箱王、成長してくれたなア。

ト替つた合ひ方、時致に縋つて思ひ入れ。

時致　そのお詞を聞く上は、片時も早うこの場より

祐成　兄弟揃うて

ト思ひ入れ。

滿江　して、二人は何れへ。

時致　養父の御墓、その上に、同じ血筋の尾上之助、廟所へ詣づる我れ／＼兩人。

滿江　優しき其方の志し、然らばこれにて出家せよ。母が手づから剃刀あて、位牌の前にて香剃りせん。

時致　すりや、この上に、この場にて

祐成　お心背かば、不孝の上塗り。

滿江　僞はりならぬ心もあらば、コレ

トあたりに飾りし二つの位牌を持り來り

幽岸院殿學樹無等大居士、俗名河津の三郎祐安。いま一つは

ト思ひ入れあり

壽光院殿本阿普門大居士、俗名曾我太郎祐信……二人の親の、菩提の爲。

時致　出家堅固のこの箱王、二つの位牌の御前に於て

祐成　母の手づから
滿江　我が子の剃髪……ア、これも浮世の
　ト思ひ入れあつて
　ドリヤ、香剃りを
ト獨吟になり、盥に水を汲み入れ、これを持ち來り、よき所へ差置く。滿江、剃刀と砥石を出し、手合せする。時致、手燭を取つて盥の側に置き、前髪をしめす。滿江、剃刀を持ち、立ちかゝつて、前髪を段々剃り落す思ひ入れ。時致の顏、盥の水にうつるを見て思ひ入れ。此うち唄一くさり切れる。滿江、こなしあつて
アレ〳〵、水に映りし面影は
兩人　親子三人あり〳〵と
滿江　いやとよ、映りし影は四人の水の面。
時致　してこの外に一人の、影は何人
祐成　何者の
　ト思ひ入れ。
滿江　水に映るは河津どの。いま時致の面影は、過ぎ去り給ふ祐安どのに、これ程までも
　ト涙ぐむ。
時致　すりや、時致が面差は、祐安さまに
ト盥に取りつき、よく〳〵見て
おなつかしうござりまする。
　ト思ひ入れ。
滿江　主は一人、影は二人の親と子が、それも今より佛の御弟子、卽身成佛。
ト又も剃刀をあてんとする。祐成、早手く盥を打返す。この水、手燭にかゝり、灯消える。
ヤヽ、まだ剃刀も
祐成　殘りしうちに思はざる、覆水盆に返らぬ繰り言。闇夜となれば母上に、祐成代つて剃刀を
滿江　然らば母はあたりなる、夫の恨み三本の、椎の木の枝切つて、蚊遣りとなして
時致　すりや、若葉なる三本の
滿江　その三本の三箇の莊、椎の茂みが我が夫の、御運の末の時雨月、それゆゑ爰で
兩人　切つて蚊遣りと
滿江　オヽ、さうぢや。
　トまた唄になり、滿江、肌脱ぎかけ、探り〳〵、掛けたる長刀を取つて目釘を拔き、白刃を取つて、寢入りゐる幼な子を抱きあげ、よき所へ來る。この時、閉坊

窺ひ寄つて、時致に切りつける。ちよつと立廻つて、刃物を奪ひ取り、見事に閉坊を切り倒す。「ウン」と倒れる。この途端に滿江、長刀にて、赤子の胸先を貫かんとする事よろしく、赤子の聲、兩人聞き耳立て、思ひ入れ。爰にて唄切れる。

祐成　今のは慥か幼な子の

滿江　蟲がおびやす泣き聲も……また物音も

ト怪しむ。

時致　アイヤ、別に仔細も

ト死骸を蹴飛ばし

泣き出す幼な子、慥かに蟲の

滿江　これが泣かずに

ト白刃にて幼な子を突く。一聲あげる。その口押へて

オヽ、いんの子〳〵。

ト泣き聲にていぶりつける。また唄になり、時致は閉坊の死骸へ蒲團をかけ、隱す思ひ入れ。祐成は時致に、爰を逃げてト仕方にて教へる。滿江、幼な子の血を、あたりなるひさくを取つて此うちに移す事。祐成時致は懷より書置を出し、二つの位牌の前に持ちゆき、椎の木の枝に兩人とも結びつけ、暗がりにて暇乞ひの思ひ入れ。よろしく唄切れる。

兩人　母上樣、最早お暇仕ります。

ト行かうとする。

滿江　もう行きやるか。せめてこれにて剃髮の、あの箱王が出家なり。

時致　サ、それは。

トつかへる。祐成、思ひ入れあつて、閉坊の死骸を捕へ

祐成　母者人、お手ざはりにて出家堅固の、弟が姿を

滿江　それが何より

ト祐成、閉坊の頭を滿江に探らせる。

ヤヽ、誠に出家のこの姿。これにて母も安堵しました。その出家せし兄弟へ

ト鎧櫃の中より蝶千鳥の直垂二つを取出し、こなしあつて

尼ともならばと、たしなむ三衣は二人へ形見……イヤ、肩にかけさす出家の門出。

兩人　然らばこれより御寺へ持參し

滿江　沙門の門出。

ト思ひ入れあつて

東南西北の敵をたやすく
ト謳ひながら、白刃にて乳の下を突き、こなしあつて
亡ぼせり、
ト此うち兩人聞き耳立て
時致 御經にあらぬ謠のお聲も
祐成 狂ふ調子は
ト立ちよるを
滿江 コレ。
ト側なる團扇にてあたりを打つ。この風あたつて蚊遣り火燃え立ち、三人顏見合せ
時致 ヤヽ、何ゆゑの御生害。
祐成 殊に幼な子、泣き聲とめしは
滿江 門出の血祭り。
兩人 ヤヽ、さては可哀や
滿江 健氣な二人へ送りし三衣は
祐成 千鳥小蝶を染めあげし
時致 物好きありしも、それと云はずに
祐成 狩場へ赴むく覺悟の書置・位牌の前へ殘し置き
滿江 二人の晴れ着を渡せしも
祐成 殊に千壽をお手討に、その上又も母上の
時致 自殺も正しく兄弟に、氣遣ひさせじと思し召す
祐成 母上のお心なるか。
滿江 さとくも察せし二人の者。母も孫めもあの世の旅路。
それも河津と曾我どのを、夫に持ちし武士の妻、云はゞ
二人へ引添うて、夫の敵と思へども、女子のこの身、老
の果て。孫と妾が血汐を灑え、二人が五臟に納めたなら、
四人連れ立ち敵討ち。コレ、助太刀させて、たもいなう。
時致 御尤もなるその御詞、これにて血汐を頂戴なし
祐成 同氣同性合體なさば、母の願ひも
いゝ
ト ひさくの血汐を呑んで差出す。時宗呑んで
時致 これにて親子四人の門出。
滿江 世に亡き二人の御位牌へ、回向なすべき滿江は、子
に引かされてこの自殺。祐安どのへは義理立てど、祐信
どのへ申し譯、お免しなされて下さりませ。
ト思ひ入れあつて
さるにても時致は、誰れにか劣らん大力無双。案じらる
るは非力の祐成。
祐成 イヤ、お氣遣ひ下さりますな。弟が大力その上に、
兄も力量勝れたる、噂あつては敵に聞え、油斷に心許す
まじと、柔弱非力と見せたれども

時致　兄者人には計略にて。
滿江　母も出家を望みしは、敵に油斷させんが爲、勇氣を隱せし
祐成　非力のこの身も、これより狩場へ
時致　兄弟揃うて敵討。
滿江　門出祝うて、とく／＼兩人。
時致　でも母上の御有樣、見捨てゝこれが
ト思ひ入れ。門口に窺ひゐたる寒心、友八、入り
兩人　さてこそ工藤を覘ふ兩人。
ト寒心は時致にかゝるを引敷く。友八は祐成にかゝるを、有あふ虎ヶ石を取つて頭を打つ。これにて友八、頭を五體に打ちこまるゝ仕掛け。
祐成　おのれ祐經。
滿江　天晴れ勇力。
時致　見事。
祐成　へゝ……心地よやなア。
ト友八を押へしまゝにて撻と座すを木の頭。滿江落ち入る。祐成見て、驅け寄らんとして、氣を替へ虎ヶ石をグッと踏む。これにて石は段々と大地に沈む體よろしく

ひやうし幕

大詰　夜討曾我本望の場

役名――曾我十郎祐成。曾我五郎時致。仁田四郎忠常。御所五郎丸重宗。加藤大部。尾上之助下郎、小源次。大磯の虎御前。

本舞臺、正面狩場の木戸口、左右柵矢來。突棒叉刺叉を立てかけ、篝を焚き、爰に三婦六、彌藏、野吉、胴丸の上へ袖の子持ち筋の袖無し羽織にて勢子の拵らへ、德利酒を呑みゐる。山颪し、捨て鐘にて幕明く。

彌藏　サア／＼、三婦六、ついでくれ／＼。
三婦　コレ／＼、彌藏、わればかり呑むが、ちつとは外へも、廻せ／＼。
野吉　さうだ／＼、ちつとはおいらにも呑ませろ。うぬばかりとち喰ふは
彌藏　コレ、うぬばかりとは何の事だ。喰ひたくば、ソレ喰へ。

ト茶碗を打ちつける。

野吉　この野郎め、なぜ投打ちをしやアがるのだ。

三婦　ハテ、あんな奴に構ふものではない。捨てゝ置け置け。

彌藏　イヤ、おとなしくしねえぞ。しなかつたら、どうする〳〵。

ト野吉へかゝる。三婦六押へる。三人よろしく捨ぜりふにて立廻り。時の太鼓になり、向うより勢子三人、提灯を持ち、出てくる。跡より大部、胴丸。むかはぎ、刺貫、附け太刀、重れ草鞋、大仰なる狩倉の形。陣笠の勢子三人、割り竹を持つて出て來り、この體を見て

大部　ヤイ〳〵、狩場口にて尾籠の爭ひ。靜まらぬか〳〵。

トこれにて三人は下に扣へ

彌藏　光員さまには狩場の見廻り

皆々　御苦勞に存じまする。

大部　分けて今宵は、雨を催すあの雲立ち、篝しめらば通路の妨げ。油斷いたさず出入りを改め、必らず番を怠るな。

皆々　心得ました。

大部　わいらは殘つて、代る〳〵に番いたせ。

勢子　ハッ。

大部　者ども、參れ。

ト時の太鼓になり、大部先に人數入る。三人の外に、勢子一人殘る。

三婦　サア〳〵、これから篝を焚きつけ

彌藏　木戸を固めて

ト篝を焚きつける。一人の勢子は木戸の方を窺ひ、彌藏が持つた拍子木を引ッたくる。これにて驚ろきヤ、われが代るか。

ト寄るを構はず、有りあふ番手桶にて水を焚火へ打ちかける。篝消える。

三人　ヤ、なんで篝を

ト寄るを、ちよつと當てる。この時、陣笠落ちる。この勢子は小源次にて、三人見事にかへる。小源次キッと思ひ入れ。雨車にて、この道具廻る。

本舞臺、正面、緣側附きの祐經狩屋、軒端には庵に木瓜の幕を張り、雨戸締め切り、上の方に誂らへの手水鉢、杉の大樹、好みの道具に納まる。

ト直ぐに唄淨瑠璃。

〽既に建久四つの年、空定めなき五月雨の、思ひの胸も晴れ間なき、その名雲井の時鳥。

ト切れる。直ぐに

〽名殘りおしかの狩衣〳〵。たつかや限りなるらん。

ト謠切れる。大小、早鼓、謠らへの鳴り物になり、向うより祐成、懸け烏帽子、素袍、好みの形、藁沓、竹笠、松明を持ち出て、直ぐに舞臺へ來る。早笛、謠らへの鳴り物になり、時致、好みの形、松明を持ち、一散に出て舞臺へ來り、キッとなる。誂の合ひ方になり

祐成　實にや三千年に一度花咲き實るなる、彼の西王母が園の桃。優雲華よりも珍らしや。

時致　その優雲華を拜みて手折れといふなれば、それに譬ふる敵左衛門、一二の太刀の拜み討、急がせ給へ十郎どの。

祐成　逸るは理り、さりながら、女數多あるべきぞ。太刀の振り廻しに心得候へ。後日の沙汰も憚りあり。

時致　云ふにや及び給ふべき。いざ諸ともに

ト祐成、時致の顏を見て

祐成　如何に時致、今宵最期と極めし上は、なか〳〵に心安けれど、年月離れぬ兄弟の、あかぬ顏見る事も、これがこの世の別れぞや。

ト時致もこなしあつて、松明をかゝげ、祐成の顏を見て

時致　敵に逢うては刹那の隙もあるまじければ、これこそ最期の見參よ。兄と見奉らんも今ばかりなる思ひなれ。我れも乙にて血のあまり、これ母方のいつくしみ。御身は正に嫡子にて、父の形見の御顏。

祐成　五つや三つの頃なれば、覺えぬながら子は親に、似るなるものを松山の

時致　はしをり鏡と聞くならは、在すが如き親の面影。

祐成　今見る心地、弟

時致　兄者人十郎どの。

ト兩人、手を取りかはし

兩人　おなつかしうござります。

ト祐成思ひ入れあつて

祐成　無用の涙に時移る。畠山が寸志の和歌、色づく山のもみぢ葉は、その夕暮れを待ちて見よかし、待ち設けたる今日今宵。

時致　十八年の天津風、いま吹き返す時を得て、御身も我れも母上より、下し賜はる蝶千鳥、この狩衣が彼の世へ

文時曾我の十郎（三世尾上菊五郎）

曠れ着。
祐成　末世に殘す名こそ惜しけれ。
時致　勇み進んで
兩人　今宵ぞ本望。
トきつとなる。この時、狩屋の上の方の雨戸、さつと明く。兩人驚き、持つたる松明を捨て、灯を踏み消し、下手に窺ふ。件の狩屋より虎、しごき帶、寢卷の形にて、手燭を持ち出てくる。此うち好みの合ひ方、時の鐘。件の松明、消え殘りし體にて、少し燃えてゐる。虎、手水鉢にて手を洗はんとして、消え殘りし松明に目を附け、思ひ入れ。
虎　篝火ならぬ二つの松の火……もしやお二人
トさてはと思ひ入れあつて
塒さまよふ浦千鳥、浪にゆらるゝ沖津船、しるべの山は此方ぞや。そことも知れぬ夜の浪、風を便りの湊入り、心附かずや闇の空。
トこの時、空にて時鳥の聲。
名乘りかけたる冥土の鳥。啼く音血を吐く
トこなしあつて鼻紙をくはへ、手燭を持ち、狩屋の内へ、案内の心にて、心を殘し、涙を隱し、狩屋の内へ入る。祐成時致囁き合ひ、窺ひ〱忍び込む。時の鐘になり、向うより軍兵頭に勢子二人附き、拍子木を持ち、出てくる。上手より同じく軍兵頭に勢子二人附添ひ、出て來り、兩方行きあひ
軍甲　これはお役目御苦勞に存じまする。
軍乙　最早深更に及びましたれば、猶更大切でござる。
軍甲　左やう〱、その上先刻も怪しき者ども、紛れ込みし樣子。
軍乙　御領の狩屋が大事でござるな。
軍甲　オヽ、狩屋と申せば、工藤どの、俄に今宵狩屋を取替へしは、何か仔細のござる儀と相見えまする。
軍乙　我れ〱も不審に存じます。
ト雨戸明きしを見附け
御覽なされ。雨戸が引明けてござるワ。
軍甲　イカサマ、慥かに大磯喜瀨川なぞの、遊君が仕業と相見えまする。引立てゝ置かつしやい。
勢子　心得ました。
ト雨戸を閉める。
軍乙　然らばこれにてお別れ申す。
軍甲　御大儀でござる。

ト双方目禮して兩方へ別れ入る。時の鐘、好みの合ひ方。好き程に太刀音して、狩屋の內、バタ／＼になり、これにて一時に正面兩戸を、バラ／＼と蹴放し、內より祐成、拔刀にて、書置を咬へし虎が首を持ち、時致、同じく拔刀にて、御教書を咬へし祐經が首を抱へ出て、舞臺へ下り、兩人思ひ入れあつて

祐成　時致なるか。

時致　十郎どの、多年の本望。されども祐經が口に咬へし、三箇の莊のこの御教書、兄弟二人に討たれし上、返し與へん健氣な覺悟。

祐成　殊に我れを騙かりし、憎くき女と思ひしも、敵へ手引きの苦肉の手段、女ながらも健氣な心底。虎は死して皮をとゞむと、死後の貞節。

時致　人は死して名を殘すと、これ我れ／＼が本懷にて、即ち取り得し御教書は、末の弟の尾上之助へ送りやらんも、先達て死したる上は、ハテ何者にか。

ト この時、小源次窺ひ出て

小源　それこそ幸ひ下郎めが、尾上の下郎初平方へ。

時致　汝は宇佐美が下郎の小源次。

祐成　然らば其方持參して、我れ／＼二人が本望を、達せし事を語り聞かせよ。

時致　彼れが手より、尾上の身寄りへ。

ト御教書を渡す。

小源　慥かに下郎が持參せん。

祐成　いそふれ小源次。

時致　はや行け。

小源　ハア、。

ト早めドン／＼にて、小源次、書き物を持ち、一散に向うへ入る。兩人見送り

時致　御教書渡し遣はす上は

祐成　この世に思ひ置く事なし。今ぞ最期の門出の杯。

時致　兄弟別れの

祐成　その杯は

ト思ひ入れ。篠入りの合ひ方になり、祐成、烏帽子を取つて、狩屋の軒より滴る雨雫を烏帽子に受け

せめて軒端の雨雫、受けて弟へ水杯。

ト一口飲んで差出す。時致取つて飲み

時致　如何に十郎どの、今こそ最期の際なれば、心靜かに互ひの念誦。

祐成　實に尤もなるその詞。御身はこれまで暫くも、箱根

にあつて諸經も覺え、その功力もあるべけれ。我れは殊更、未來の苦患も思はるゝ。いざ／＼これにて諸ともに

　ト兩人手を合はし、よろしくあつて

時致　臨終の佛たち、我れ／＼過去の宿縁にや、一念の心意に依り、敵味方と隔たるなり。

祐成　懺悔の力にもろ／＼の、罪障今や消滅し

時致　因果の輪廻を盡せし上は、一つ蓮の縁となし

祐成　父のましますその御國へ

時致　迎へ取らせてたび給へ。

兩人　南無阿彌陀佛。

　ト兩人合掌し、愁ひのこなし。この時狩屋の内より大藤内、丸裸の形、行燈を提げ、出て來り、兩人を見て、そろ／＼と下へ下り

大藤　ヤア、さてはわいらは曾我兄弟、祐經どのを討つたる様子。御領の狩屋へ。

　ト行きかゝるを、時致、手早く大藤内の首を捕へ

時致　あの世へ先がけ。

祐成　この世の暇。

　トよろしく時致、大藤内を見事に切り、こなしあつて

時致　「十づゝに、當の敵を討ちし跡、四十の男子四つになりけり」。

祐成　よくも仕つたり。今際の秀歌、時致集とも召されなん。

　ト兩人顏見合せ

兩人　ム、ハ、、、、。

時致　いでこの上は、思ひ置く事更に無し。兄弟名乘つて潔く

祐成　然らば名乘つて討たれんもの。

　ト狩屋へ向ひ

遠からん人は音にも聞け、近くば寄つて目にも見よ。伊豆の國の住人、伊東次郎祐親が孫、曾我の十郎祐成。

時致　同じく五郎時致が、君の狩屋の御前にて

祐成　一家の工藤左衞門の尉、祐經を討取つたり。

時致　我れと思はん人々は、討ちとめて高名せよや。

兩人　兄弟相手に、なり申さん。

　ト高聲に呼ばる。これにてドン／＼、早めになり、勢子大勢と、大部出て來り

大部　さてこそ兄弟これにあり。

皆々　討取れ／＼。

　ト一度に拔きつれて討つてかゝる。祐成、大部を相手

夜討曾我の五郎　(八世市川團十郎)

に立廻りながら下手へ入る。殘りの人數は時致にかゝり、よろしく誂らへの鳴り物になり、時致、皆々を相手に大立廻りよろしく、この人數を下座へ追ひ込む。この時、雨車、時の鐘にて、知らせあつて舞臺へ黑幕を振り落す。

直ぐに山颪し、時の鐘、ゴン〳〵になり、小源次は軍兵二人と立廻りながら出て來り、よろしくあつて

軍一　最前より窺ふところ、正しくおのれは尾上之助が小者。

軍二　今宵夜討ちの兄弟に、ゆかりの奴等であらうがな。

小源　オ、、推量の上は隱すに及ばぬ。尾上之助さまの家來小源次、大切の役目蒙むりし上は、妨げなさば容赦は無いぞ。

軍一　それなれば猶以て

軍二　見遁がしならねえ。

兩人　覺悟なせ。

小源　小穢な雜人、手には足らねど當の敵。

軍一　面倒な。ぬかり召さるな。

軍二　野郎め、觀念。

ト兩人打つてかゝる。いろ〳〵立廻りあつて、兩人をポン〳〵と切り

小源　片時も早く、初平どのへ。

ト一散に向うへ入る。この時、下座の方、物音して

○　ヤア〳〵何れも、狩場へ夜討の入つたるぞ。御油斷あるな。出合へ〳〵。

ト高聲に呼び立てる。直ぐに「アリヤ〳〵」の聲、早太皷、ドン〳〵にて、下座より、立烏帽子、手甲、いづれも裸身へ具足を附けし體、うろたへ立騷ぎながら、松明など振り立て出で來り

皆々　夜討が參つた〳〵。

同　御油斷なさるな。

同　夜討ぢや〳〵。

ト矢張りドン〳〵、「アリヤ〳〵」の聲、この人數入り亂れて上下へ入る。直ぐに黑幕切つて落す。

本舞臺、向う黑幕、よき所に狩屋の軒口を見せ、陣幕張つてあり、前通り誂らへの柴組み、右の道具に納まる。

ト矢張り右の鳴り物にて、下座より祐成、大童の體に

て出て、ホッと思ひ入れ。下座より三階惣出の人數、軍兵にて出て祐成にかゝろ。祐成、皆々を相手に立廻り、追ひ散らす。この時後より大部出かゝり、祐成と立廻りあつて、大部を見事に首討ち落す。

祐成　最期は兄弟諸ともにと、約せし上は、いで時致に

ト行かんとする。この時上手より仁田四郎忠常、凛々しき好みの形にて走り出て、祐成をキッと留めて

忠常　狩屋を騒がす曾我兄弟、いま某が討取りくれん。覺悟いたせよ、曾我祐成。

祐成　ヤア、烏滸がましきその一言。側杖させん。

ト切つてゆく。立廻りあつて祐成手を負ふ事。忠常キッと見て

忠常　深手なるぞ十郎祐成、とく／＼生害仕れ。

祐成　ナニ小ざかしや。して其方は何者なるぞ。

忠常　問はれて名乘る我が姓名相手に不足とも思ふらん、伊豆の國の住人、仁田の四郎忠常なるワ。

祐成　ヤ、、、、さては御身が忠常どの、望むところの相手なり。イテ立寄つて、首刎ねられよ。

忠常　すりや忠常に、討たれ召さるゝ心底よな。

祐成　首取らるゝは今際の本望、イザ／＼介錯頼み入る。

忠常　然らば鈍き手の内にて

祐成　苦痛を助けよ、忠常どの。

忠常　頼みに任せ、貴殿の介錯。

祐成　いで／＼頭を

忠常　ア、忠孝全き

ト思ひ入れ。

祐成　猶豫めさるは後れしか。

忠常　臨終稱念。

ト白刃を振り上げる。祐成は腹へ突き立て、首さしのべて思ひ入れ。忠常、切らんとせしが、氣後れしてホロリとする、この時下座にて「アリヤ／＼」の聲、ドンドン早目に打つ。忠常、氣を替へ、キッとなる。祐成、引廻す思ひ入れ。この見得、ドン／＼、「アリヤアリヤ」の聲にて道具廻る。

本舞臺、向う打抜き、狩屋の大遠見、篝火松明を照らし、よき所に緣側附きの狩屋。この上に時致、大童になり、松の小枝を咬へ、如何にも莫大なる大太刀を振りあげ、三階稻荷町殘らず、いづれも素肌武者、思ひ／＼の形にて、手負ひの見得。ドン／＼に

て道具納まる。

ト本雨降つてくる。皆々かゝるを、切り立て薙ぎ立て、キツとなる。この時下座にて

忠常　ヤア〳〵、狩場の面々承れ。曾我の十郎祐成を、仁田の四郎が討取つたり。各々御安堵候へ。

大勢　エイ〳〵オウ。

ト早太鼓打ち立てる。

時致　ヤ、、、、。さては祐成御最期とや。斯くなる上は時致一人、見ざすは祖父伊東の仇、御領の狩屋へ切り入つて、鎌倉どのゝ御首を賜はらん。オ、、さうぢや。

皆々　やらぬワ。

トかゝるを、切り立て〳〵向うへかゝる。揚げ幕より白絹かつぎし黒革の鎧、本行の五郎丸の形にてよろしく窺ひ〳〵出て來り、時致に向ふ。時致、女と心得、除けて行くを、立ちふさがつて思ひ入れ。此うちドンドン、鼓の合ひ方、よろしく立廻りあつて、時致、かき退けんとする。よきキツカケに時致を押し戻し來り、本舞臺にて立廻り、時致を支へ、キツとなる。この時初めて薄衣を脱ぎすて、赤塗りの五郎丸、顔を現はす。時致、緣先に片足踏みかけ、振り切つて

時致　ヤ、、女にあらぬ、さては汝は

ト白刃を振りあげる。五郎丸キツとなる。トヾ五郎丸、時致を組みとめたる畫面の見得にて木の頭。カケリ、早めドン〳〵「アリヤ〳〵」の聲にて、めでたく

幕

初冠曾我皐月富士根（終り）

御攝會我閏正月

『逼神廓睦言』常磐津連中

『根元草摺引』長唄囃子連中

曾我狂言百姿

「吉例曾我寳入船」より

（上）梶原平次景高。箱根の畑右衛門。
（下）舞鶴屋傳三。喜瀨川の龜菊。

御攝曾我閏正月

所作事

對面の場
草摺引の堰

役名――源の頼家公。曾我十郎祐成。曾我五郎時宗實ハ曾我の禪司坊。誠の五郎時宗。和田の舞鶴。大磯の虎。工藤犬坊丸祐友。鬼王新左衞門。伊豆次郎祐兼。梶原平三景時。梶原平次景高。竹の下孫八。新貝荒次郎。愛甲三郎。御所黑彌吾。小林の朝比奈。工藤左衞門祐經。

本舞臺、三間の間、一面の網代垣、大柱、梅の立ち木。日覆より吊り枝見事によろしく、下の方に太夫座、これを網代垣の張り物にて打返しの隱し。すべて工藤祐經の館の庭先の模樣。幕の内より舞臺先眞中に鬼王、麻上下、大小股立ちの形にて誂らへの鷹を手に据ゑ、これに景時、景高、出島鬘柿の素袍の形。下の方に祐兼、上下大小の形にて立ちかゝる。この見得よろしく、琴唄、時の太鼓にて幕明く。

鬼王　こりや何れも樣、鬼王めを、何ゆゑお止めなさるゝな。

祐兼　何ゆゑとは慮外者、今日は萬壽君頼家公、祐經の館へ御入りあれば、非常を糺す奥庭先。

景時　その上見れば一物こそは、若君の御秘藏なさるゝ、朝鮮渡りの名鳥。

祐兼　曾我の家臣の鬼王づれが、勿體ない。どうしてわれが据ゑてゐる。

景高　祐信へもお祟り、打捨て置かれぬ。

三人　鬼王、どうだ。

鬼王　どうだ斯うだもお庭先、參り合はせて逸れ鷹を、据ゑ戻したる拙者が働らき。出かしたとお褒美の、お詞なくて其お咎め。

景時　ヤイ〳〵、われには誰れが頼んで

景高　頼家公の御秘藏を

祐兼　私しの計らひは重罪人。

鬼王　イヤサ、その儀は。

三人　頼み手を吐かせ。
鬼王　サアそれは。
三人　サア、
鬼王　サア。
三人　サア〳〵〳〵。
祐兼　繩打つて引立てる。腕廻せ。
　ト立ちかゝる。向う揚げ幕にて
祐友　方々待つた。その一條、それへ參つて犬坊丸祐友、
　申し開かん。マア〳〵待つた。
　ト三味線入りの樂になり、花道より犬坊丸、長上下大
　小の拵らへにて、鷹の鞢を持ち出て來る。
犬坊　春日野の飛火の野守出で見れば、いつかはありて若
　菜摘みてん。初春のまだ若々しき庭先に、無益の爭ひ、
　扣へ召され。
　ト矢張り鳴り物にて、本舞臺へ來る。
祐兼　ヤア、小賢しき犬坊、頼家公の秘藏の鷹、
景時　穢せし鬼王。
景高　詮議の只中。
犬坊　イヤ、それゆゑにこそ止めし祐友、飛守の鏡、逸れ
　鷹を止めし、男の子は天晴れ貴殿。

三人　なんと。
犬坊　例へ麁忽があるにもせよ、お鷹預かる祐友が、詞を
　待たず非道の咎め。
三人　イヤサ。
犬坊　幼稚なれども一臈職、祐經が忰犬坊丸。
景時　成る程、左やう極められては
景高　流石梶原
祐兼　この祐兼も
景時　大人氣なくも
三人　そんならいゝわえ。
鬼王　へ、、ハ、、、、よき折からに犬坊どの、これで拙
　者が越度もさつぱり。
犬坊　何れも、御不審ござらずば、頼家公へのお執成し。
景時　そりやア合點。イザ祐兼。
祐兼　御兩所、お行きやれ。
兩人　犬坊、後刻。
　ト管絃になり、景時、景高、先に祐兼、これに附いて
　下座へ入る。
犬坊　曾我の家臣に兼ねて聞く、新左衞門とは其方よな。
鬼王　有り難きお詞。御秘藏のお鷹、いざ〳〵それへ。

ト渡す。犬坊、鷹を手に据ゑ、思ひ入れあつて、鷹の鞭にて、鬼王を、强かに打擲する。鬼王惘り、その手を止め。

鬼王　こりや何ゆゑの御折檻。

犬坊　ヤア、粗忽者。犬坊これへ參らずば、其方が越度は曾我兄弟。

鬼王　エ。

犬坊　イヤサ、仇ある仲の曾我工藤、重ねて愼しめ。

鬼王　ハ、、、御尤もなる御敎訓。

犬坊　一つは內證、新左衞門。

鬼王　犬坊どの。

犬坊　後より來やれ。

ト合ひ方になり、犬坊、鷹を手に据ゑ、心を殘し下座へ入る。鬼王、これを見送り

鬼王　栴檀は二葉よりと、敵ながらも、ア、發明な。これにつけても御兄弟、今日の幸ひ、後先を思ひ廻せば、兎にも角にも、苦勞の絕えぬ浮世ぢやなア。

ト思案の思ひ入れよろしく、管絃にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、高足の二重舞臺の上げ障子。向うの見附け金襖、破風に木瓜の紋ぢらし、吉例の通りよろしく、左右大柱、紅梅白梅の立ち樹、日覆より吊り枝、見事なる飾りつけ、すべて工藤祐經館のかゝり、下の方太夫座、これに常磐津連中居並び、管絃にて道具とまる。

ト頭取出て、淨瑠璃名題、役人觸れあつて、直ぐに前彈きにかゝり、謠ひ模樣にて

〽とう〳〵たらり、たらりら、たらりあがりらゝりたう。

〽所千代までおはしませ、我れらも、千秋さるにても、曾我の十郎祐成が、今日を晴れとの今樣姿。名に大磯の虎と見て、石より重き父の仇、ともに天下泰平の、勳しなれや舞鶴が、色の粧ひ萬代も、替らぬ契り睦言と、幸ひ心に任せたり。

ト置き鼓のやうの三味線入り、賑やかなる鳴り物にて舞臺先眞中に祐成、狩衣裳、小さ刀、翁の假烏帽子を捧げ、中啓を持ち立ち身、上の方に大磯の虎、襠補衣裳の上へ素袍の上ばかり引ッかけ、面箱を前へ置き、小結ひの烏帽子、中啓を持ちたる千歳の見得、下の方に舞鶴、振り袖、衣裳の上、若松の素袍の上を引ッか

け、劍立て烏帽子、中啓を持ちたる三番叟の見得よろしく、一緒にせり上がる。

〽ちりやたらりの音も清く、鳴るは瀧野屋瀧の水、絶えずたうたりとう〳〵の、日文附け文鳴るか鳴らぬか鈴の音羽屋に聞く、高師の濱の仇波を、濡れにぞ濡れて色に出し、和田が三男三獻も、よいとや申す春遊び、右の袂に三日三夜、左の袂に三日三夜、六日六夜の居續けは、無理が嵩じてよい仲の、口舌に一夜明がらす、可愛々々は笑うてなくか、いゝや餘所目に羨やましさの、岡やきもちならおも〳〵と、お直り候へ元の座に、梅の愛嬌色くらべ。

ト三人よろしくあつて

祐成　凡そ千年の鶴は、萬歲樂と謳うたり。

とら　また萬代の池の龜は

舞鶴　甲に三曲を備へたり。

祐成　渚の砂さく〳〵として、朝日の色朗かなり。

舞鶴　國土安穩天ケ下。

とら　納まる御代の民豐か。

祐成　これ今日の

三人　御祈禱なり。

〽在原や、なじよの翁とも、その在原の優男、かざすかざしの舞扇、開いて締めて閨の戸に、ゆかり留め木の移り香は、可愛らしうて床しうて、昔男に負きやせまい、坂東市村海道一、全盛たつて苦界の年の、十八年も天津風、五つや三つの禿立ち、門に遣り羽子一イ二ウ三イ、見渡し嫁御の吉原ばかり、月雪戀の袂からげて、手鞠の拍子百貸した、せんさう數の子寶、つらり〳〵とおつ取り並べて、なんとお告げ候ふぞ、おとよけさよ、辰松いる松だんだらいなごに引つくかいつく、とつぱ一夜が仇枕。神玉章に春の壽。

ト祐成、翁の模樣、千歲の虎を相手に、舞鶴、拍子事、三番叟の振りよろしくあつて

祐成　めでたい〳〵、今日の御祈禱、祐成も、あどの太夫どのに見參申さう。

とら　エヽ、じやら〳〵と、舞鶴さんに、油斷も透もならぬわいな。

祐成　イヤ又、其方も執念深い。一言云へばその嫉妬。

とら　やかいでわいなア。今日の今樣、大切なる願ひのある身を持ちながら

舞鶴　これはしたり、其やうに、よい仲のいさかひ。其や

うに競り合ふ事はないわいなア。
祐成　さうぢや〳〵、今日の手續きは舞鶴どの、首尾よう願ひの叶ふやうに、それでお禮を云ふのぢやわいの。
とら　アイ、お禮やらお願ひやら、餘所目に見ればどうやらしい。
舞鶴　呆れた、そんな疑ひ深い。
祐成　さりとは愚痴な。
とら　云はいでわいなア。
ト兩人を引分け、前へ出て
〽思ふ事云はで只さへ遣る瀨なき、廓の習ひ名に立つ仲は、派手や浮氣もあるやうに、內證の噂遣り手にせかれ、朋輩衆の譏り事、猶いやましに張り持つて、色ならなんぢや間夫ぢやもの、逢ひたうなうて二世かけて、殿御自慢も我がものと、思ふ心の誠から、愚痴も未練も穗に顯はれて、笑ふ禿も憎くからで、文の使ひの片便り、返事待つ夜の長煙管。自烈たいほど疳癪を、出して勤めの身ぢやとても、迷へば脆き女氣の、淚ふたつはないわいな風情をかしき折からに。
ト三人口說き模樣よろしく、出の合ひ方になり、誂らへの鳴り物になり、花道より時宗、角蔓、紫の頰冠り、紅絹の股引、手甲、袖なし羽織の形にて、誂らへの春駒を持ち出て來り
〽めでたや〳〵、春の初役、春駒なんぞ、夢に見てさへ仕合せよしのお取立、ます〳〵三升の細流れ、及ばぬ振りも三好屋と、お馴染御贔屓お呵りも、過ぎた重荷の花道を、歩みの板間どう〳〵〳〵、乘り込む勇は春駒の一念力、踏み鳴らしてぞ來たりける。
時宗　サア〳〵來たぞ押掛け客。なんぼ出來合ひ新參でも、もう呼び出すか〳〵と、どつきどきつく時宗も、待たば甘露の今日の幸ひ、お邪魔ではあらうが、何れも樣へのお執成し、兄貴を始め舞鶴さん、偏へにお前を賴みます。
祐成　コレ〳〵時宗、その重荷は其方ばかりではない。祐成も村千鳥ではない。烏やら鵜の眞似。
とら　サア、其やうに云ひなさんすと、わたしは猶更大磯の、なんにも知らぬ三味線の、かはいさうぢやと思し召し
舞鶴　わしはそんなら小林の、まつ先なりと云はうかえ。
時宗　それぢやアおれは何と云ふ。
祐成　お主は、それ〳〵。
時宗　それとは。

舞鶴　それ。
とら　それ。
四人　そつこでせい。
　ト　これより太鼓入り、賑やかなる手踊りになり
〽蝶の比翼と三升の、まして願ひもなんならず、此方は眞實さうぢやぞえ、思ひ逢ふ瀬の波枕、深い心のおゝさてほんに、ほんに誓文嬉しぞえ。
　ト　四人よろしく、上げ障子の内にて
祐經　伽頻の喜べる色は朱を欺むき、隨喜の喜べる聲、管絃を弄す。
時宗　ヤ、、あの聲は。
　ト　時宗、立ちかゝる。三人よろしく留める。
祐經　今様の役人、どれ／＼も大儀。
〽梅かをる、主床しき家の春、云うてとう／＼りん／＼と。
　ト　琴唄のかゝり、淨瑠璃にて上げ、障子上がる。眞中に祐經、羽織衣裳、小さ刀、褥の上に莨盆を扣へ、上の方に頼家、折り烏帽子、狩衣、二重舞臺の上に中啓を持ち、下の方に犬坊丸、長上下、大小にて扣へる。直ぐに淨瑠璃。

〽これぞ千秋萬歳の、喜び盡きぬ不老門、長生殿の壽を、奏づる袖も春豐か、松の常磐津ふし籠めて。
　ト　四人よろしく淨瑠璃にて居並び、下座より、景時、景高、竹の下孫八、新貝荒次郎、愛甲三郎、御所黒彌吾、後より祐兼出て來り
祐兼　頼家公の御前。
皆々　鼻籠の奴原皆下がれ。
時宗　なにを。
〽賑はふ御代こそめでたけれ。
　ト　淨瑠璃納まる、打返しにて太夫座を隱し、時宗、祐成、花道へ行く。吉例の通りよろしく住ふ。
皆々　どつこい。
舞鶴　なんと見なさんせ皆さん、今様を勤めた二人の若者、どれも立派な、大人しやかなものではござんせぬか。
犬坊　ハテ心得ぬ。今様勤めし者どもの、淑やかなるに無禮の一人。
祐經　犬坊扣へよ。祐經思ふに彼の者こそは、何か願ひのあるやらん。祐經を恐れぬ面魂ひ。
犬坊　仕細ぞあらん、
　ト　舞鶴、思ひ入れあつて、祐成に目配せして、時宗を

下の方へ突きやる。時宗、矢張り立ちかゝるを、虎、祐成、左右より留める。舞鶴こなしあつて前へ出て

舞鶴　サア、虎さんのお指圖で、賴家公へ御饗應。祐經さんのお館へ、手引きなしたる今様の役人。今日の褒美に祐經さま、お逢ひなされて下さんせうならば、兄朝比奈が名代の、かつちけないでござんすわいなア。

トこなし。

祐經　これは舞鶴、改めて珍らしき願ひ。餘人ならば否とも申さうが、和田どのゝ御秘藏、殊に朝比奈の名代。

舞鶴　そんなら逢うてやらしやんすか。

祐經　兎も角も、其方の指圖次第。

舞鶴　嬉しや、それでわたしも立つ。

祐經　とても の事に、それへ參つて兄弟に……イヤ、今様の役人、これへとお云やれ。

犬坊　さすれば父上。

祐經　犬坊、來やれ。

ト管絃になり、祐經、靜々下りて來て、舞臺先吉例の二疊臺の上に座す。この上に祐兼、下に犬坊よろしく引添うて座す。二重へ大名皆々よろしく住ふ。舞鶴、虎、會釋して立ち上がり、舞鶴恥かしき思ひ入れ。

舞鶴　申し、今様のお二人さん、あれ聞かしやんしたか祐經さま。

景時　度々見かけた素浪人。

景時　景高見たか。今様の役人、何者かと思へば、大磯で

景高　供の丁稚ぉどこでやら、見覺えのある迂散なしやツ面。

孫八　その筈でござる。お臺所へ折ふし參る樽拾ひ。

荒次　生れは上總か房州の、濱風に吹かれて水ツ洟。

三郎　青洟たらして御用は如何。

黑彌　內田でござる、四方でござる、したみ酒でも喰つたか。

孫八　顏眞赤いに見さつしやい。

荒次　ひだるいのか寒いのか、ヤレ〳〵可哀や。

三郎　身慄ひを見るやうに

黑彌　なんだかガタ〳〵慄へて居ります。

皆々　アハヽヽヽ。

舞鶴　祐經さんが逢うてやらうといやはる程に、久し振りでの一蹴職、勝手忘れてあなた方の、御機嫌背きはせまいかと、側でわたしやわく〳〵と、ひよんな役目に恥かしいもさ詞、必らず笑うて下さんすな。

祐成　心得てござる。イザ弟。
時宗　合點だ。
ト對面三重になり、祐成先に時宗、祐經に目を付けながら舞臺へ來る。虎、この後に付き添ひ、舞鶴、下の方に扣へる。皆々これを見て、よろしく笑ふ。
舞鶴　アレ見やしやんせ。春吉例と云ひながら、あのマア皆さんの顏わいなう。
とら　ても、はしやいだ搔餅さん、廓で雨の居續けに、振られた意趣の嫉妬なら、次手にやいとを据ゑるぞえ。
舞鶴　この上は祐經さん、二人の者に、詞を掛けてやらしやんせいなア。
祐經　ハテ、よく似たワ……思ひ出だせば、オ、それよ。安元二年神無月、赤澤山の麓にて、遠矢にかゝりし河津どの、祐安が面差し。さてはおことら兩人は。
祐成　お察しの上は包むに及ばず、河津の三郎祐安が、忘れ形見の二人の兄弟。
時宗　兄の一萬成長して
祐成　祐信どのゝ養子となり、曾我の十郎祐成。
祐經　弟は僅か箱王丸。
時宗　箱根山にて人となり、曾我の五郎時宗と名乘ります る。
祐經　さてこそ兄弟。
時祐　祐經どの。
祐經　ハテ珍らしい
三人　對面ぢやなア。
ト三人よろしく吉例の見得ありて
時宗　敵左衞門祐經、觀念いたせ。
ト飛びかゝらうとするを、鬼王、下座より走り出て、時宗を突き廻し、よろしく後より抱へ留め
鬼王　ヤレ逸まるまい、敵とも、まだ名乘らぬ祐經どの。
時宗　それだと云つて。
ト立廻りあつて
祐成　急くな弟。
鬼王　この場で手出しは叶ひませぬぞ。
ト左右より鎭める。
祐兼　犬坊見たか。兄祐經を敵などゝ、出放題なる無禮の童め。
犬坊　おとなしからぬ御兄弟。曾我と工藤は一家の因み、近江八幡は居合さねど
景時　立寄らば大木の蔭。

景高　長い物には卷かれろだ。
祐兼　慮外ひろがば次郎祐兼。
犬坊　犬坊祐友。
祐犬　手は見せぬぞ。
　トきつと云ふ。
祐經　兩人扣へい……例へ敵と覘はゞとて、手を束ねて討たるゝ左衞門ならず、當時鎌倉どのゝお覺えめでたく、一﨟職の惣代、富士の御狩の惣奉行、承はつたる祐經は、連るゝ時は千騎二千騎、連れざる時も百騎二百騎、其方達二人は鬼王、團三、どれが主やら家來やら、箱根に育つた井の中の蛙。イヤサ、河津が悴で候ふなぞと人もなげなる童が振舞ひ。兄の祐成を差措いて、敵なんどと、不敵の一言。さりながら、兄は兄だけ淑やかに、初見參の祐成に免じて、一家の因み、杯くれう。誰れかある銚子杯これへ持て。
とら　畏まりました。
　ト三保神樂になり、虎立つて長柄の銚子、三方、土器を持つて來り、祐經が前に据ゑる。祐經取つて
祐經　誠や諺にも親はなけれど、子は育つ。其方達が父河津とは、從弟同士なる左衞門祐經、一家の因み、初めての見參。兄なれば祐成へさし申さう。
　ト呑んで三方へ据ゑる。虎、直ぐに祐成が前へ持つて行く。祐成、祐經へ辭儀して靜かに取上げ
祐成　實に如何なる吉日やら、祐經どのゝお杯。
時宗　逢ひたい見たい日頃の願ひ。
祐成　有り難く頂戴仕る。
　ト呑んで戻す。また祐經取つて
祐經　童やい。イヤサ、五郎やい。
時宗　なんだ。
祐經　左衞門が杯望みか。
時宗　さん候ふ〳〵。
祐經　さもあらん。如何にもくれう。ズッと參れ。
　ト土器を二つに割り、三方へ載せる。虎、悄り、祐經が額を見ろ。祐經大事ないと、額で教へるゆゑ、是非なく虎、時宗が前へ持つて來る。時宗、祐經をキッと見て
時宗　頂きますべい〳〵。
　トぢり〳〵前へ出て三方へ手をかけ
ヤア、この杯は。
　ト祐經、ニッコリと笑ふ。

祐經　身の程知らぬ高あがり。

時宗　なんと。

祐經　イヤサ、急かずと承はれ。わりや箱王のその頃、以前箱根山に納めある、逆澤瀉の鎧を隱せし大罪人、すりや盗賊ぢや、盗人ぢや。大罪犯せし身を以て祐經が目通り、時宗で候ふの、河津が悴に候ふのと、一家一門の面よごし。萬夫不當と呼ばれたる、河津が面へ水かける、まじ〳〵としたそのしやツ面。追ッつけ獄屋の住居なす、穢れ不淨の身を以て、祐經が杯、何くれう。ハテ、うろたへた素丁稚め、館の穢れ、そこ立去れ。

ト きつと云ふ。時宗、無念のこなし、思ひ入れ、三方を毀し立ちかゝる。

時宗　ヤア、覺えなきその雜言、曾我を蔑みなす卑怯な祐經。チエ、いま〳〵しい。

祐經　肴くれう。

時宗　ナニ、肴とは。

祐經　その肴は、まッこの通り。

ト 時宗、飛びつく。祐經、突き廻はし、拔打ちに時宗が首を打ち落す。皆々愕り。

皆々　ヤ、、これは。

ト 仰天する。祐經、ニッコリと笑ふ。

祐經　さもあらん。方々の驚ろき。祐經を計り害するとも、何條欺むかれんや。彼奴こそは曾我の禪司坊。

ト 拔刀を犬坊丸、鼻紙を持ち添へ、押拭ふ。祐經、刀を納め

祐經　愚かや祐成、先つ頃、箱根山にて見參なし、赤木の短刀を讓り與へし箱王が面體、忘るべきや。イヤサ、箱王なれば鎧の盗賊。いま祐經が成敗なせば、曾我の五郎も、はや罪科はあるまい〳〵。

祐成　チエ、、すりや弟時宗が

鬼王　汚名を雪ぐお身替り。

祐經　君を恐れぬ粗忽の一言。

賴家　如何にも。これにて祐經が盗賊の成敗。賴家とくと見屆けた。

祐經　こは有り難き寛仁大度。

とら　サ、そりや本意なう祐成さん。

舞鶴　寶の山や

とら　死出の山。

鬼王　是非なき繰り言。

祐成　さはさりながら

祐經　イヤ、空しうは歸すまじ。一家の因み、何をがな。
ト あたりを見廻し
幸ひなる今樣に用ひし面箱。犬坊これへ。
ト 犬坊丸、面箱を持ち、祐成が前へ置く。
犬坊　祐成どのへ寸志の賜物。
祐成　すりや、この品を祐成へ。
祐經　時宗この場にあらねども、對面の印。
祐成　チエ、、忝ないお志し。
祐經　開く時節は五月雨に
舞鶴　色づく山の
とら　紅葉ばは
鬼王　この夕暮れを
祐經　待つて見よかし。
祐成　待ちに待つたる十八年。
祐經　兄弟揃つて本意を遂げよ。
祐成　その時名乘つて
四人　祐經どの。
祐經　裾野で逢はう。
ト きつと思ひ入れ、唄になり、上げ障子下がる。犬坊丸先に祐經、梶原、大名、何れもよろしく下座へ入る。

鬼王　四人殘つて
祐成　お心あり氣な祐經どの。對面の賜物。何にもせよ。
ト 面箱を開き見て
こりや狩場の切手。
舞鶴　二面の面に准らへて
とら　しかも二枚の御兄弟。
鬼王　この五月雨を待てよとは
祐成　情も深き詞の謎。
とら　富士の御狩も五月闇。
祐成　闇に後れて、時宗ともに
とら　名を滿天に揚げ羽の蝶。
舞鶴　年も似合ひの禪司さま。
鬼王　敢へなき最期も、兼ねての覺悟。
とら　賴家公の御前にて、狼藉あらば御老母樣、祐信さまのお身の上。
舞鶴　それを救ふはお身替り、父義盛の指圖にて
祐成　さては矢ッ張り身替りに
鬼王　立てる心のお計らひ。
祐成　さはさりながら

舞鶴　いとしや果敢なや禪司さま。
鬼王　イヽヤ、本意の先駈けして、兄御に優る義心の最期。
祐成　せめては曾我へ、この首持ち行き
　ト時宗が首を面箱へ納める。
舞鶴　形見の春駒見るにつけ
　ト虎、以前の春駒を取上げ
とら　形見送りの片手綱。
祐成　虎もろともに故郷へ。
舞鶴　イザ、お立ちあられませう。
　ト立ちかゝると、下座より祐兼出て
祐兼　兄左衞門を敵と覘ふ、うぬ等を其まゝ。
　ト抜打ちに寄るを、舞鶴ちよつと立廻つて留める。
舞鶴　心にもない兄思ひ。底意の知れた祐兼どの、爰構はずと、皆さん早う。
鬼王　然らば此まゝ。
舞鶴　祐成さん。
祐成　供せい鬼王。
舞鶴　早うござんせ。
　ト三重になり、祐成先に、虎、春駒を持ち、鬼王、面箱を引抱へ、よろしく花道へ入る。

祐兼　曾我の肩持つ舞鶴どの。者どもやるな。
　トこの時下座より奴二人、誂らへの華やかなる形にて來て、舞鶴を取卷き
奴一　女だてらの大膽な、祐兼どのに手向ひだて。
奴二　伊達で蓮葉でおちやつぴい。
奴一　ヒイとひしきの笛の音も
奴二　三番さう〳〵とつぱひやろ。
兩人　三拜なして、繩かゝれ。
　ト取卷く。舞鶴、ニツコリ思ひ入れあつて
舞鶴　こりやしをらしい今様を、見やう見眞似の片言交りやらぬ遁がさぬ置き續け、氣を揉みだしのいとしげに、誰れぢやと思ふ朝比奈が、妹の舞鶴舞うてをり添へ。必らず怪我して恨みさんすなえ。
奴一　さてこそしれ者。
奴二　オヽ、怖者。
奴一　油斷のならぬ
奴二　二人一緒に
兩人　やらぬワ。
　トこれより三味線入りの三番叟の鳴り物にて、角力の拍子にて、見事の立廻りよろしくあつて、トヾ祐兼、

舞鶴へ切つてかゝる。この見得よろしくあつて、道具廻る。

本舞臺、正面、誂らへの雛段、二重の飾りつけ。出囃子の人數居並び、賑やかなる鳴り物にて道具納まる。

〽それ磯山覆ふ雲霧の、只引幕の初霞、蹴破る勢は鳴瀧を、昇る鯉龍の如くにて、曾我の五郎時宗は。

ト寄せの合ひ方になり、知らせにつき雛段を引割り、時宗、角鬘、隈取、大半切れ、吉例三本太刀にて、逆澤瀉の鎧を提げ、下の方に朝比奈、素袍、猪隈にて、大太刀、時宗を留めたる見得にて押出す。

〽逆澤瀉の重鎧、輕げに引提げ駈け出すは、目覺ましくも又見えにけり。

ト立廻りあつて、とまり

朝比　兄イ待て、逆澤瀉を引提げて、にしやアどこへかん出すのだ。

時宗　愚かや小林、今日今樣の對面に、取殘されし時宗が、逆澤瀉の鎧引提げ、時こそ來れ十八年、天津神風葺屋町、正月双蝶々の、羽掻に取ツつく奴凧、惡く邪魔だてひろぎやアがると、うぬが素袍に引ツ包み、惠方の方へ抛り出すぞ。

朝比　おやつかな。にしやアおれを、成田山へ上げるお捻りだと思ふか。

時宗　ムウエ、。

朝比　コレ兄イ、強いばかりが時宗とは云はねえワ。われに我まゝさせてくれるなと、上方の高麗屋の兄貴から賴まれた。今からこれまでとは違うて、おれが勸めて居るうちは、お主に我まゝさせぬぞ。コレ、春だワ。屠蘇でも祝へ。屠蘇の機嫌の春霞、春は羽根つく手鞠唄、一イ二ウ三升四つ紅葉、われは鎌輪奴、おりや鎌井升、一番とまつてくんさるなら、忝け成田屋、瀧野屋だもさア。

時宗　いけ面倒な。そこ放せ。

朝比　留めた。

時宗　放せ。

朝比　留めた〳〵、おツ留めた。

〽髮にしつかり小林が、手をかけ烏帽子鶴の丸、左右の鬚に天津風、苦もなくやらじと力量に、引けども〳〵動かばこそ、時宗笑つて振り放し、いらぬ腕立てよしやその、力あるともそりや行かぬ、仁王立ちなる勢ひは、草

七世市川團十郎の時宗

初世市川男女藏の朝比奈

木もなびく鬼神や、鬼を欺く小林も、今は心を和らげて。
〽野暮な力は奥の間に、浮氣らしさのしんき節、女子の愚痴な眞實か、届かぬ事か待つ夜半も、蒲團重ねて敷妙の、枕の土俵化粧紙、間夫に逢ふ夜の力水、洩らさぬ仲の文ずまひ、人目を關の憂き思ひ、眞は憂さを忘れ草、煙くらん〳〵富士淺間、そつと覗いて。
朝比　オ、怖。
〽そのまア顔は憎らしやと、云うては又も取りついて、えいや〳〵と引けども押せども、こりやどうぢや。
時宗　朝比奈、力はそれぎりか。
朝比　ムウ、エ、。
〽髭がためしの力瘤、落しやせぬかと撫で廻し、引くにとまらば堪えて見よ。
モサ〳〵〳〵。
〽別足踏みしめ時宗は、時こそ來れ嬉しさよ、蛙の聲も身にぞ知る、今や遲しと夢も間も、忘れぬ父の仇敵、討たんずものと飛び上がり、走り行かんとする所を、又もやらじと引きとむる。
コレ待つた。
〽とめてとまらぬな無理酒に、氣強い朝のひぞり言、ええなんぢやいなおかしやんせ、肩に手拭、染めも鎌輪奴江戸自慢、鎌升、妙でんす、派手な所がわしや嬉し。
コレ。
〽とまらんせ〽勇ましや〽互ひに爭ふ勢ひは、前代未聞當世無双、後代無二の評判は、東に並ぶ二見潟、爰に寫して、神風や、惠みも深き若者と、貴賤上下おしなべて恐れぬ者こそなかりけれ。
トこの唄にて兩人、充分所作事あつて、よろしく打込み、吉例の通り。

幕

御攝曾我閏正月（終り）

解說

渥美清太郎

日本歴史に現はれた種々の事蹟は、殆んど芝居に脚色せられぬものはない位であるが、中にも曾我兄弟復讐の一件は、思ひ切つて可愛がられたもので、脚本の數は恐らく一千種にも近からう。全く他の事蹟と比べて桁違ひの豊富さである。淨瑠璃にも曾我物といふ系統があつて、近松はじめ多くの名作家が、數多く作つてゐる。京阪でも或る時期には盆替りは曾我狂言ときまつてゐたので、曾我の脚本も可成り澤山ある。江戸と來たら大變で、寶永以後、各座で上場する正月狂言は必らず曾我物で、しかも毎年それが新作であり、つい明治以前までその慣習が續いたのであるから、その數たるや夥しいものだ。どうして斯うも根よく同じやうな狂言を續けたものかと、驚ろくより外はないのである。元祿の昔、三座で曾我が大當りをしめて以來、慣習になつたのださうであるが、如何に傳統を尊んだ江戸の劇界でも觀客が承知しなかつたら、慣習も續く譯はないのだが、それが餘り不平も洩らされてゐない所を見ると、矢張り歡迎してゐたのだと見える。江戸の人は、餘程曾我兄弟が好きだつたのだ。復讐といふ根本の觀念が、國民性に合致したといふ原因は勿論あるであらうが、中古以後の曾我狂言といふものは、復讐なぞは二の次で、如何にして變つた形式を見せようかといふ事ばかりに苦心してゐたのだから、さうした根本的な原因は疾に無くなつてゐた筈なのだが、それでも飽きなかつたのは、どこかに江戸人を掴む魅力があつたものと見える。

本集には、この多くの曾我狂言の中から、代表的な物ばかりを集め、東西の相違や、內容の變遷をお目にかける事にしたのである。

念力箭立椙（ねんりきやたてのすぎ）

昔の江戸の曾我狂言は、一番目も二番目も曾我であつた。二番目は世話狂言でも、それは曾我に關係のある人々が、本名を包んでゐるといふ趣向が多かつた。歌舞伎十八番の助六なぞは、その二番目の一例である。が寛政頃から並木五瓶の英斷で、この慣習は破れてしまひ、二番目の世話物は全然曾我に緣がなくなつた。曾我は時代物の一番目に限られてしまつた。がさうなつた後の一番目は、毎年新作はされるにしても、大體の形式が一定されたのであつた。先づ序幕である三建目は、社か寺の前で大詰までの筋を賣る幕で、多く下廻りが活躍し、四建目は次幕の伏線で、

割合に簡單な小幕で濟ませ、五建目は鬼王の貧家で、鬼王や女房の苦心を見せる愁嘆場。大詰は必らず對面で、その前にキツと華やかな所作事を附ける、といふのが十中八九の形式であつた。本篇はこの形式を示したい爲に選んだので、文化三年正月中村座上演、作者は奈河七五三助であるが、南北も中へ大分手傳つてゐる筈だ。お讀み下されば、その形式がお解りにならう、これが先づ正系の曾我狂言の形だと思つて差支へない譯である。たゞ中に梛の葉狐といふ狐が現はれる。これは曾我狂言には珍らしい事で、狐は顔見世狂言にきまつてゐるのだが、何かの都合で春へ持越したものであらう。

役割は左の通りであつた。

近江の小藤太成家。鬼王新左衛門（大谷友右衛門）蒲冠者範頼（尾上雷助）和田平太胤長（市川辨藏）大藤内成景（坂東善次）梶原源太景季（坂東大吉）梶原平次景高（松本鶴藏）梶原平三景時（荻野半左衛門）二の宮妻永草（市川おの江）彌太夫女房岩瀨（桐島儀右衛門）百足屋金兵衛。工藤犬坊丸祐友（嵐龍藏）かしづき軒端（岩井梅藏）久上の禪司坊（森田勘彌）曾我の團三郎（尾上紋三郎）小林の朝比奈（嵐音八）曾我十郎祐成（市川八百藏）曾我の母滿江。八幡三郎行氏 實ハ京の次郎祐俊（中山文七）曾我五郎時宗。箱根の閉坊（市川男女藏）妹十六夜（五世岩井半四郎）梅澤屋小五郎兵衛 實ハ伊豆次郎祐兼。工藤左衛門祐經（荻野伊三郎）久須美彌太夫（市川の助）和田の舞鶴（中村七三郎）三浦の片貝。伊豆の梛の葉狐。鬼王女房月小夜（三世瀨川路考）

七種粧曾我（ななくさよそひそが）

天明二年正月、中村座所演のもので、作者は初代櫻田治助である。これは古い曾我の二番目物の俤を御覽に入れるつもりで、未完の二幕物ながら收錄したので、この頃の二番目は、必らずしも世話物といふ意味ばかりではなく、斯うした風變りの堅い物もあつたのである。曾我狂言は大抵正月の十五日頃に初日が明き、二月の初午頃になると二番目が出たもので、二番目になると、同じ世界といふだけで大分曾我の味は薄くなつてゐる。二番目には大抵惡七兵衛景清が活動するのが例になつてゐたが、これには出て來ない。たゞ、大姫の性格が面白く書けてゐるのと、松助が甚内で出て來て門口に立つたまゝで大姫に早替りをするといふのが觀客の目を驚ろかし、記錄物になつた因緣があるのとで、爰に挾んだのである。

役割は左の通り。

腰元伏屋（二世瀨川菊之丞）狩野之介姉常磐木（瀨川乙女）下部妻助（瀨川吉次）局若葉（市川綱藏）堀の藤太近

家（松本大七）江間の小四郎義時（尾上政藏）下部土手平（中村此藏）石田三郎爲久（松本小治郎）泥臑の八（坂東又太郎）頼朝息女大姫。高坂甚内 實ハ小山の判官（尾上松助）狩野之介宗茂（二世市川門之助）秩父庄司重忠（五世市川團十郎）

遇曾我中村（さひはひそがなかむら）

寛政五年三月、中村座に上演したものである。御覽の通り清玄櫻姫の狂言で、曾我には一向關係ないやうであるがこれは曾我狂言の三番目の見本として收めたのである。江戸芝居の番附を見ると、いつも「四番續」と書いてある。即ち一番目から四番目まで續くのが原則であつた。ズツとの昔はこの規則も行はれたが、寶曆頃からは名稱だけで事實は二番目までしか出す、春の曾我狂言に限つて、大入の時は三番目まで見せたものだ。三番目は大抵二月末、或ひは三月に入つてから出した。この時はもう一番目も大部分は削られて、櫻の咲く期節にふさはしい清玄櫻姫や鏡山の狂言が三番目として續演されるのであるが、それでも本筋の曾我とは、例へ微かにでも連絡はあつたのである。本篇にも、清玄櫻姫でありながら、大藤内成景だの梅澤の小五郎兵衞だのといふ役が出てくる。これはこの時の二番目なり一番目なりで相當活動をした役が、三番目まで殘してあるので曾我の名殘である事を説明してゐる。殊に、古いところの清玄櫻姫の狂言の代表とも見られるので、一見關係ないやうであるが、資料として錄する事にした。

この時は清玄が三世澤村宗十郎、櫻姫が下り山下民之助で大さう評判がよかつたものである。その他の役割は、番附が無いので不明である。

稻光田每月（いなびかりたごとのつき）

天明四年八月、大坂中の芝居に上演されたもので、作者は奈河七五三助である。これは京坂の曾我狂言の見本として收錄した。曾我狂言は江戸歌舞伎の特色を殊に深く持つてゐるが、京坂のは又一風變つて、江戸ほど呑氣で洒落たものでない代り、頗る常識的に出來てゐるところが面白い。その上、この狂言には別な特色がある。それは、同じ年の三月廿四日、江戸城御本丸桔梗の間で、旗本佐野善左衞門が、若年寄田沼山城守を刃傷に及んだ、あの有名な事件を當込んである事で、即ち篇中の曾我祐信は佐野善左衞門、犬坊丸祐友が山城守で、工藤祐經は即ち田沼意次に當る譯だ。仕出しの云ふ「世直し〳〵」といふセリフなぞ、田沼の虐政を怒つた江戸の民衆が、佐野に對して實際に呼ん

だ詞なので、淺草德本寺に葬むられた佐野の墓には「世直し大明神」と書いた幟が奉納された位であつた。佐野の刃傷を脚色したものには、淨瑠璃の「有職鎌倉山」が有名であるが、それは六年目の寛政元年に出來たものである。半年とも經たぬ事件を、しかも德川家に關係のある事件を、可成り露骨に脚色して、名題にまで田舍と暗示してゐるのに一向お差止もくはなかつたのは、流石に大坂だけの事はある。

初演の役割は左の通りであつた。

源賴家(中村吉三郎)賓來屋才右衛門(三保木吉三郎)傾城手越(嵐松次郎)三浦の片貝。傾城龜菊(中村福松)傾城喜瀨川。鬼王妹小糸(尾上丑之助)八幡三郎(淺尾正三)江間小四郎義時(嵐新平)政子御前。桂の前。邯鄲屋おつぎ(山下四郎五郎)梶原景時(中村喜知藏)曾我十郎祐成(染松七三郎)大磯の虎。巴御前(山下八百藏)工藤祐經(加賀屋歌七)工藤犬坊丸。鬼王新左衛門(淺尾爲十郎)近江小藤太。石田爲久(嵐三八)近江ト内(江戸坂正藏)化粧坂少將(嵐三右衛門)曾我五郎時宗。團三郎(中村京十郎)朝比奈三郎。御所五郎丸(三枡大五郎)京の小次郎(坂東岩五郎)曾我太郎祐信。曾我母萬戸。秩父庄司重忠(三保木儀左衛門)傾城絹琴(嵐他人)

戀便假名書曾我（こひのたよりかながきそが）

寛政元年正月市村座初演。作者は初世瀨川如皐。三建目だけは缺けてゐるが、一番目から二番目まで連續し、文化以前の稽古風な曾我の形式が覗へるので收錄したのである。鬼王貧家は身替りの筋だけで平凡だが、對面で終りにならず、大詰が大謀叛人の見出しで終つてゐる顏見世式のところが面白い、二番目は殊に特色がある。荒五郎茂兵衛と鐵壁武兵衛の達引から、曾我の世界の時代に戾るなぞ、まだ五瓶以前の舊慣が見えて懷かしい。尤もこの茂兵衛武兵衛の達引は、寶曆九年に四世團十郎初世歌右衛門で演じて大當りを取つた俤を寫したのださうだから、殊に古風さが濃いのであらう。

役割は左の通り。

小林の朝日丸。蝶々賣り揚羽の蝶吉 實ハ松原十太(市川海老藏)久上の禪司坊。大松屋清九郎。夢の市郎兵衛 實ハ山城太郎行長(大谷德次)梶原源太景季。遣り手お十(宮崎十四郎)梶原平次景高。えら骨の金兵衛(坂東熊藏)大藤內成景。坂東八郎祐氏。若い者庄兵衛(坂田時藏)伊豆次郎祐兼(松本鐵五郎)千葉之助常胤(市川升五郎)百足屋六兵衛。笠原新五左衛門(嵐龍藏)但馬屋小左衛門。久須美六郎祐高(坂東善次)夏目茯苓。狩

野四郎行光(市川和歌藏)久須美太郎祐政。いたちの眼八(岩井眼平)宇佐美左衞門景光(佐野川仲五郎)宇佐美六郎祐重。若い者才助(澤村宗太郎)鬼王新左衞門。岩倉大膳 實ハ伊勢三郎。鐵壁武兵衞 實ハ大友常陸之助賴國(淺尾爲十郎)曾我十郎祐成。蒲冠者範賴 實ハ曾我團三郎。植木屋彦六 實ハ菊池次郎成氏(三世澤村宗十郎)化粧坂少將 實ハ池少納言息女歌綾姫(岩井喜代太郎)奥女中初風(吾妻染之助)同龜菊(中村時三郎)同喜瀨川(瀨川增吉)大磯の虎(瀨川富三郎)六浦のお弓。若蔦屋おみな 實ハ山城太郎女房春の谷(吾妻藤藏)八幡三郎行氏 實ハ 京次郎祐俊(中村吉三郎)阿野法橋全乘(尾上松助)近江小藤太成家。おはぐろ婆ァおかん(大谷廣右衞門)曾我五郎時宗。鬼王娘お國。傾城大淀 實ハ尾形三郎妹濡衣(四世岩井半四郎)鬼王女房小夜。傾城舞鶴(三世瀨川菊之丞)工藤左衞門祐經。荒五郎茂兵衞 實ハ尾形三郎惟春(五世市川團十郎)

比翼蝶春曾我菊(ひよくのてふはるそがぎく)

文化十二年正月、中村座上演のもので、作者は本屋宗七と福森久助とである。化政度の、最も複雜な曾我狂言の見本として特に加へたのである。

曾我狂言も化政度に入つては、流石の觀客も年々歲々同じやうな脚色には飽きて來た。劇場側の方でもそれに氣は附いてゐたが、因習で固まつたこの國は、春芝居から曾我を撤回する程の勇氣はなく、只幾分なりとも單純さを破る爲に、曾我と他の世界とを混合して、一二番目を通す事を始めたのである。即ちこの狂言は、曾我へ「比翼塚」と「八重霞」の世界を加へたもので、一番目からして既に三つの世界が錯亂し、各世界の役々が互ひに入り亂れて交渉を持つやうにした爲、筋は非常に複雜となつたが、同時に餘りゴタ〳〵しすぎて、譯の解らぬやうになつてしまつた。この手法は南北あたりが殊に得意にしたもので、文化の終りから文政一ぱい流行つたが、天保になるとスツカリ廢れた脚本を讀んでさへ筋の複雜に苦しむ位なのであるから、觀客の頭はさぞ疲れた事だらう。文政だけの流行に止まつたのも無理はない。

この脚本には、一番目の三建目と大詰の缺けてゐるのが殘念である。三建目は箱根山の場で、ほんの筋を賣るだけの場であるが、底本として選んだ物の中に無かつたのである。大詰は最初から脚本が出來なかつた。即ち千秋樂まで長兵衞宅の場で打出してしまつたのだ。斯ういふ例は昔の芝居にはよくあつた。そこで筋の解決が附かずしまひになつてゐる。

二番目の淸元は、俗に「權上」「權下」と云つて、今でも流

行つてゐる。芝居でも時折出るが、その脚本は淸元だけを生かして、他は今の作者がいゝ加減に脚色したものなのである。

初演の役割は左の通りであつた。

鬼王新左衞門。梶野長兵衞。八幡三郎行氏 實ハ京の次郎祐俊（三世坂東三津五郎）工藤左衞門祐經。三浦屋小紫。白柄十右衞門（三世尾上菊五郎）妹かしく（中村のしほ）箱根屋畑右衞門。赤澤十內。梶原平三景時。（中村東藏）工藤犬坊丸祐友（尾上松助）母滿江（小佐川七藏）長庵女房おれい。曾我の團三郎（坂東又十郎）鬼王女房月小夜。和田の舞鶴。長兵衞女房おとせ（中村松江）鳥取郡治（市川米藏）岩淵平馬（市川團兵衞）曾我の二の宮。傾城初船（中山龜三郎）御所五郎丸重宗（坂東善助）阿野法橋全成。福島屋淸兵衞（中村七三郎）北條時政。絹屋彌市（市川友藏）稻毛三郎。宇佐美太郎（松本小次郎）大藤內成景（市川の助）箱根の寺西閑心坊。幡隨長兵衞。近江小藤太成家。大工かゞりの六三（五世松本幸四郎）白井權八。箱王丸 後ニ曾我五郎時宗。曾我十郎祐成（七世市川團十郎）伊豆次郎祐兼。鶉の權兵衞（中村傳九郎）

初冠曾我皐月富士根（けんぷくそがさつきのふじがね）

春芝居の曾我狂言は、終局が對面で、それ以上は決して進まなかつた。即ち小袖曾我とか夜討曾我とかは、春狂言には斷じて見られなかつた。それは時として五月狂言にのみ演じられたのであつた。爰へ出したのは即ち小袖曾我と夜討曾我の見本で、文政八年五月、中村座に上演されたもの。作者は大南北である。默阿彌の「夜討曾我狩場曙」が出るまでは、討入と云へばこの狂言にきまつてゐたもので、隨分數多く上演されてゐる。原作は勿論長い通し狂言で、曾我の外に「男鏡山」と「明烏」が混合されてゐるのだが、頁の都合で、二幕だけ收錄した。序幕へ出る伊太八といふ役は、本筋の男鏡山では、お初の穴をゆく初平として活躍するのである。

初演の役割は左の通り。

曾我十郎祐成（三世尾上菊五郎）仁田四郎忠常。曾我母滿江（三桝源之助）若黨小源次（尾上松助）鬼王新左衞門（坂東善次）加藤大部（市川染五郎）．劍澤彈正時連（尾上蟹十郎）大磯の虎（岩井粂三郎）御所五郎丸重宗（五世松本幸四郎）下部伊太八。曾我五郎時致（七世市川團十郎）

御攝會我閏正月（ごひゐきそがうるふしやうぐわつ）

文政五年正月、市村座に書き卸した二世瀨川如皐の作で一番目が曾我、二番目がめ組の喧嘩であつたが、その中から一番目の大詰、對面から草摺引の件だけを拔萃したものである。現今殘つてゐる曾我の對面には見られないが、昔は對面の前に必らず所作事を附けたものであつた。その形式が以上の曾我狂言の中に洩れたので、爰に見本を御覽に入れた次第である。

また、本曲には草摺引が附いてゐる。「正札附根元草摺」といふのが本當の名題で、文化十一年正月の森田座に、男女藏團十郎で踊つたのが初演。この時は二度目である。これは曲振ともに今に傳はつて、古風な型を見る事が出來る。この草摺引といふのも、初期の曾我狂言には寧ろ必須の形式だつたので、隨つてその種類も思ひ切つて澤山あるが、安永頃から漸次廢れて、稀にしか出なくなつた。この「正札附」なぞは最後の草摺引であつた。曾我狂言には大切な形式なので、殊に今まで殘つてゐるものなので、爰に收錄したのである。

役割を左に記す。

工藤左衞門祐經。小林朝比奈（市川男女藏）大磯の虎（岩井かほよ）曾我十郎祐成（坂東彥三郎）時宗　實ハ曾我禪司坊（市川茂々太郎）鬼王新左衞門（市川雷藏）伊豆次郎祐兼（中島勘左衞門）梶原平次景高（中村吉二郎）源頼家（市川鰕三郎）和田の舞鶴（市川門之助）曾我五郎時宗（七世市川團十郎）工藤犬坊丸祐友（市村羽左衞門）

例に依つて、考證カタリ役割插繪等に關し、山形の秋葉芳美氏から非常な御助力を得た事に謝意を表する。

編輯校訂責任
渥美淸太郎
鈴木侃

日本戲曲全集・第十四卷
曾我狂言篇・第十二回配本

編纂者檢印

昭和四年七月十二日印刷
昭和四年七月十五日發行
（非賣品）

編纂者　渥美清太郎
發行者　和田利彦
印刷者　高見靖雄
製本者　高崎鐵五郎

東京市日本橋區通三丁目八番地
發行所　春陽堂
電話日本橋五一・六四一
三七・八一
振替東京一六一八七八

製版所　新倉東文堂

（神田區松下町七番地・明治印刷株式會社）